KAIZO

改造

十月特輯

1929

改造社版
日本地理大系

傳統の美、鬱勃新興の生命！此二つを併せ把握して『新興の日本』は何れへか行く。人は云ふ世界の樂園は東に日本あり、西に瑞西ありと。彼はしかし國家としての權威、雄偉なる民族的使命を有しない。彼は麗しき山河を有するのみで數千年來連綿たる高貴の民族的血液を有しない。我はその全部を保有して民族的に雄飛しようとしてをる。否、學的に、文學的に、藝術的にあらゆる方面に進出してゐる。この國土、この民族。我々は何が故にかくも幸福の山河に抱擁せられてゐるか。我々は祖國の美と藝術と力とをぢつと凝視すべき時に際會してゐる。そして地理的に民族的使命を展開すべき時期に逢着してゐる。産業的に深く內省すべき時運の前に戰つてゐる。この時我國の地理教育の實際にあまりに缺陷が多く、そして藝術的美の前に殆んど無力であることに氣づくだらう。我々は新興日本を拓くの使命が完整せられたる地理大系を諸君の家庭に獻ずるの捷徑なるを思ふものである。世界より先づ我國を把握せよ。

編輯委員

京都帝大教授 文學博士	石橋五郎
東京文理科大學助教授	田中啓爾
東京女高師教授	飯本信之
奈良女高師教授	帷子二郎
廣島高師教授	下村彦一
學習院教授	遠藤金英
東北大學教授 理學博士	高橋純一

寫眞解說 總論 執筆者 全國官公立大學、專門學校教授百三十餘氏（姓名省略）

編輯顧問（いろは順）

京都帝大教授 文學博士	石橋五郎
東京女高師教授	飯本信之
京都帝大教授 文學博士	西田直二郎
東京帝大教授 林學博士	本多靜六
京都帝大教授 經濟學博士	本庄榮治郎
文學博士	鳥居龍藏
京都帝大教授	川村多實二
奈良女高師教授	帷子二郎
京都帝大講師 子爵	田中阿歌麿
東京高師教授 東京文理大助教授	田中啓爾
東北帝大教授 理學博士	高橋純一
廣島高師教授	高尾常磐
京都大學教授 理學博士	中村新太郎
九州帝大教授 文學博士	長沼賢海
廣島大學教授	栗田元治
陸軍中將	松井庫三郎
理學博士	藤原咲平
	小寺融吉
山岳會員	小島烏水
京都大學教授 文學博士	新村出
廣島高師教授	下村彦一
學習院教授	遠藤金英

航空寫眞班の特設

近代地理學の原理に則り全巻二千五百の航空寫眞を滿載す。陸海軍各新聞社航空班の援助は勿論だが、特に航空寫眞班を新設し、全領土を空中より撮影する我航空界の權威御國飛行學校長伊藤酉夫氏を班長に一等操縦士熊川良太郎氏を主任操縦士、二等操縦士藤田武明氏を豫備操縦士とし、三菱式R1—2型「改造」號を主機に、「アプロ式504K型二機を補助機とする改造社航空班は東京市外立川を根據地として活躍する。この國家的事業の爲め江湖の援助をお願ひする。

誇るべき寫眞班

本大系は主として寫眞を用ひ之を補ふに專門學者の通論と解說を以てする。學問藝術の兩面から新興日本を寫眞にするには在來の寫眞は殆んど役立たない、故に我社は巨万の費用を投じ特に撮影班を組織し全領土に亘つて獨特の撮影を敢行する。藝術的造詣と經驗に富む橋本基氏之を監督し、關東の大家山田應水、關西の權威黑川翠山氏其他全國一流の撮影技師を網羅し、全巻一万の寫眞悉くが科學的に貴重なる參考資料であると共に藝術的にも海外に誇り後世に殘るものとした。

寫眞班代表者

寫眞編輯主任　橋本基
航空寫眞班長　御國飛行學校長　伊藤酉夫
撮影技師　黑川翠山。山田應水　大塚稔。坂本萬七

全十五巻內容

豫約募集

一冊　貳圓八拾錢
一時拂（全十五巻）卅九圓
（申込金不要）

特典 會員には一人殘らず本社が斯界の權威に委囑し作製せる掛軸用新日本大地圖を贈呈

內容見本進呈

血管製劑 アニマザ

高き血壓を持續的に低下せんとするに臟器製劑が作用緩和にして無害、最も合理的なるは周知の事實なるが近時アニマザがこの目的に最も廣く賞用さる。

然もアニマザは單なる血壓低下劑にあらず、所謂早發性老衰と稱すべき四十―五十歳代に頻發する退行性現象に對し豫防並びに恢復劑として貴重なり。

乃ち精神的並びに肉體的活力の早期減退に原因する症狀、例へば頭重、倦怠、眩暈、胸部の苦悶、動悸、耳鳴、不眠等はその連用により極めて愉快に消失す。

アニマザが心臟の負擔を輕減し、血管を保護することにより血液の巡行を圓滑ならしむることは既に過去十年間獨逸及諸外國の學者により承認さるゝところ、特に所謂老衰の初期症狀に對しては最も良き豫防劑とせらる。

血管硬化の進行を阻止し所謂人生收獲季の健康を愉快に保持すべくアニマザは最も有用なる藥劑なり。

特に四十―五十歳代に多き

早老病（動脈硬化症 血壓昂進症）の豫防と治療に

（説明小冊子送呈）



三〇錠……二圓四十錢
一〇〇錠……六圓八十錢
各地著名藥店にあり

アニマザは幼若動物の血管内膜及び中膜のホルモンにして服用し易く且つ長く連用するも全く無害なり。

獨逸オスナブルク株式會社臟器治療藥會社

總代理店 株式會社 田邊元三郎商店

東京日本橋區本町

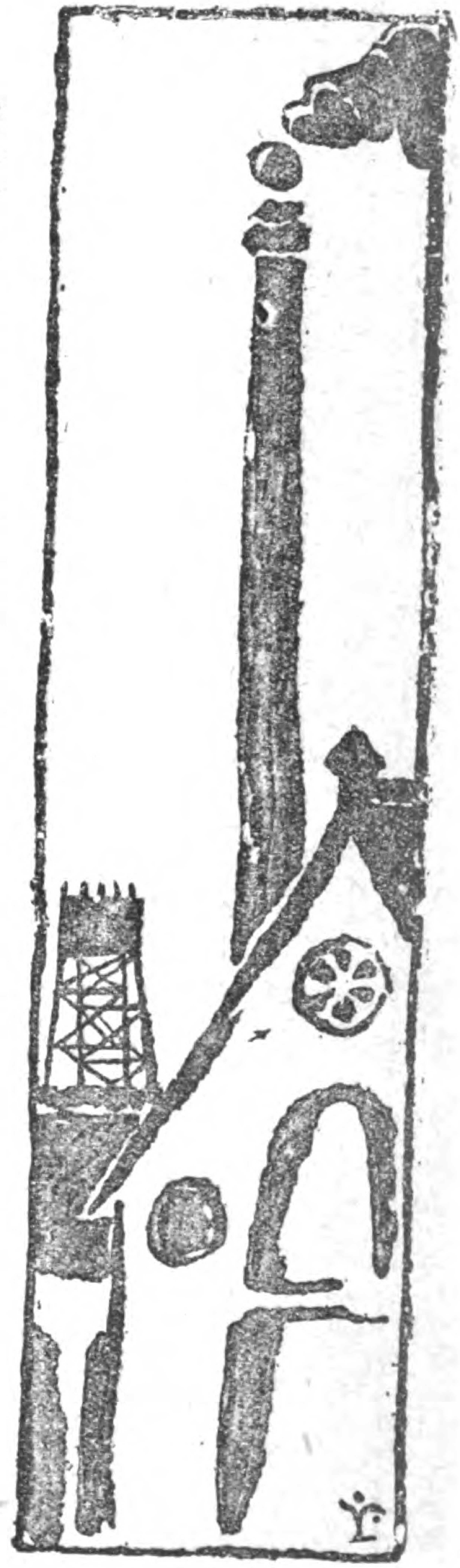


改造　十月號　目次



緊縮を徹底的に斷行すべし

濱口内閣に善惡の裁斷を下すは時機尚早だ。しかし金解禁に對する誠意ある決意と、對支貿易が漸く好轉の兆向を示せることだけは看取し得る。そして實行豫算に現れたる緊縮が未だ痛いところに觸れず、その削減額が豫期ほどではなかつたにもせよ、尚一億四千七百萬を節約又は繰延べたるは放漫政策の前途を憂心したるものに對しホツト一息吹き返したるの思ひをさせた。我々は濱口内閣を監視してます〳〵各方面に政費の大緊縮を斷行せしむべきだ。政友會が各方面に政費を濫費し、國民が塗炭の苦みにあえぎ悶へつつあるにかかはらずそれを他所事として黨略的事業のみに大事な國帑を傾け、全國民の怒りを買つたことは玆に申すまでもない。我國が五十八億の國債、十八億の地方債を脊負ひ、一年の利息だけでもザツト四億を支拂はなくてはならぬ窮境に立てるのにそれをも無視して放漫のかず限りをあのまゝ繼續されては我國は十年を出でずして破綻の運命に立ち至るは瞭然たる事實であつた。我々は今後も軍事費その他に向つて相當に研究し大斧鉞を加ふべきあらば斷乎として之を斷行すべきだと思ふ。濱口首相はこの點に深く思ひをいたし、一大英斷をなすべき秋である。左顧右眄して閣僚の顏を窺ひ、軍部の鼻息をのみ氣にするは多數國民に見離さるる所以である。一面之に伴つて減税を斷行するの覺悟が必要である。一般農村及び小商工業者に向つて特にその然るを認めるのだ。現時の農村は一日は一日と疲弊し、納税滯納、公務員俸給の支拂停止等々が頻出し、その歸趨をさへ豫斷の出來ぬ狀勢にある。この寒心すべき事實を根本的に芟除することは實に刻下の急務である。この急務に應ずるものは一に負擔輕減あるのみだ。農業組織の改革、家内副業の振興もさることながら今は當面卽急の策に出づべきである。政府者はここに留意し、民衆の生きるために、國民の伸びるために眼をつぶつて政費の一大削減を行ふべきである。たゞこのとき貿易、生産的方面に無暗に緊縮の斧を加へ、新興の我士氣を沮喪せしめるが如き政策をとつてはならない。



如何なる小作法を制定すべきか

末弘嚴太郎

一

農政の當局者が大正九年十一月第一次の小作制度調査委員會を設置して小作法の制定を企てゝより此方既に九年の歲月が過ぎ去つた。最後の小作調査會が大正十五年十月三十日の總會に於て「小作法制定上規定スベキ事項ニ關スル要綱」を決議した時から數へても最早略三年の歲月を經過して居る。其間農林當局者は昭和二年三月右要綱に基いて立案した「小作法草案」を世上に公表して頓て議會に提出せらるべき確定法案の準備を急いだけれども、不幸にして翌四月突如として行はれた政變は小作法制定の機運を頓挫せしめ、其後開會された小作調査會は一面政府當局者の希望を容れて自作農創設案を議定すると同時に之に附帶して小作法の制定を急ぐべき旨の希望決議を爲したけれども、抑も初めから小作法制定に熱意を有せざりし前內閣は在任中終に此問題解決の爲め一歩をも進むることを爲さなかつたのである。

かくして永い歳月が無爲の裡に過ごされてゐる間に農村の小作事情は色々に變化した。最近の事情を觀察すると小作爭議の總數は多少減少の趨勢を示してゐるけれども、同時にそれが全國的に蔓延しつゝある事實を看逃がし得ない。小作調停制度の運用は爭議の解決及び小作條件の改善に對して全國的に可成りの成績を擧げつゝあることは勿論之を否定し難い。けれども、大正八九年の頃初めて小作人の急激なる集團的攻擊に長夜の夢を破られて非常に周章狼狽した地主等も其後漸次に足元を踏み占めて組織的に防禦の策を講ずるに至り、終には或は團結の力により或は官憲の力を借り又或は現行法制の不備に乘じ反つて地主の側から攻擊的防禦の態度が示されるに至つた。かくして表面鎮定の道を辿りつゝあるが如くに見えてゐる小作爭議は事實に於て漸次深刻化の傾向を示しつゝある。成程農民運動は最近各種の事情に原因して一頓挫の情勢を示しつゝある。乍併之を以て直に農民解放運動の氣勢が最早下火の傾向に在りと考へるのは甚しく早計である。世人は此際よろしく爭議の内容に向つて實質的考察の眼を向くべきである。成程爭議の總數は減少した。けれども、それは初期的の戰鬪的爭議によつて小作人が一先づ一應の成果を收めたことの反影に外ならない。又成程爭議の總數は減少しつゝある。けれども、其裏面に於て小作爭議の中最も深刻なる土地返還の爭議は最近數年の間に非常な增加を示しつゝある。農政當局の作成した統計によると、此種爭議の增加趨勢は次の如く目醒ましいものである。

年次	土地返還に關する爭議數	爭議總件數に對する割合
大正十三年	二五件	一分六厘
大正十四年	一七二件	七分八厘
大正十五年	三一六件	一割二分
昭和二年	四三二件	二割一分
昭和三年	四六〇件	二割五分
昭和四年(自一月至六月)	三四三件	三割四分

土地返還の爭議は小作爭議の中最も深刻なるものである。何故なればそれは小作人生活の基礎たる耕作權を彼等の手中より奪ひ去らむとするものだからである。無論地主が小作地の返還を請求する原因には色々ある。或る場合には小作地を住宅地工業地等に變更する目的を以て返還請求の行はれることもあるけれども、多數の場合に於ては小作爭議に對する對策として、或は單に小作人を威嚇する手段として、或は在來の小作權を消滅せしめて新に地主の希望する條件を以て小作關係を開始せむが爲めに、又或は地主自ら自作農たらむとする目的の爲めに、小作地の返還が請求されるのである。此等の場合に於ては地主

としても最後の手段に訴へてまでも戰はむとする決心をもつて居り、小作人は又勿論其生活を守らむが爲めに死力を盡して戰ふが故に、爭議は多く極度まで惡化し調停も亦多く其目的を達し得ないのである。

尙土地返還の爭議に關聯して注目すべきは各地に於ける土地會社の成立其他之に類似する地主の爭議對抗策である。個々の地主が在來の小作關係を基礎として自ら直接小作人と折衝するときは、從來の關係上容易に我意を通し難いのみならず小作人の團結行動に對抗するに付いて困難を感ずることが少くない。此故に、地主は別に土地會社を設立して直接小作人と交涉すべき適任者を雇入れ、自己の所有地は或は其所有權を會社に讓渡し或は會社に永小作權を設定し與ふるが如き形式によつて之を會社に委付し、以て在來の小作人との關係をすべて會社に移し會社使用人をして直接小作人と折衝せしめ萬事を事務的に——從つて人情拔きに——解決せむとするが如き傾向が全國各地に現はれつゝある。而して此種の會社は今や全國を通じて六十有餘を算するの狀況なりと傳へられつゝある。

かくの如く爭議が深刻化すればする程調停は漸次困難とならねばならない。土地返還請求の如き最後的手段を圖つて事が爭はるゝ限り互讓の餘地は最早甚だ少いと言はねばならない。地主が土地會社の蔭に隱れて小作人に對抗する限り二者の關係は最早之を情誼的に調節し難い。小作人が、、術策乃至は法律上許さるゝあらゆる方策を以て地主と戰ふは勿論、地主も亦其事實力乃至は——現在極めて彼等に有利な——法律の力を借りて飽くまでも小作人を壓服せむとする。かくして調停の餘地なき深刻なる爭議は全國各地の農村に漸次其根を張りつゝある。

此故に、吾々は此際一日も速に小作法を制定する必要がある。小作人に地位の安定を與へて爭議の必要を少からしめる上から言ふても、地主が法律によつて許された力を濫用して爭議を惡化せしめ反つて自ら不知不識の裡に深淵に陷りゆく傾向をいましめる上から言ふても、乃至は又爭議當事者が互に爭議上漫に不當な術策を濫用して爭議の解決を困難ならしむることを防止する上から考へても、此際小作法を制定することは焦眉の急務であると言はねばならない。世上一方面の人々は小作法の制定は徒に地主の利益を犧牲にして小作人の保護に偏重するものなりと主張してゐる。けれども、地主をして今日社會的見地から見ると「濫用」とまでも思はれる程『所有權』の威力を主張し行使しなければ能く其地位を保持し得ないと考へらるゝが如き窮地に陷らしめたものは、實を言ふと小作法の制定を妨げて地主に所有權の無限の行使の餘地を殘し與へた人々であり又彼等に其行使方法を教へた人々でなければならない。若しも四五年の昔小作爭議が尙未だ初期的

色彩をもつてゐた當時に、適當なる小作法の制定によつて小作人の權利に適當なる保護を與へ、地主の所有權行使に對して適當なる節度を加へ、以て兩者の關係を圓滿に調節し得べき方途が講ぜられてゐたならば、恐らくは今日各地に於て見るが如き爭議の深刻化は之を防止し得たに違ひないのである。

此故に、私は今日既に時期遲しと雖も、尙現在の事情に即しつゝ適當なる小作法を制定することは、爭議を未然に防止する上から言ふても又爭議の調停を容易ならしむる上から言ふても、刻下の急務なりと考へ玆に小作法制定の緊急なる所以を絶叫する次第である。

然らば吾々は今日如何なる小作法を制定すべきであらうか?

二

如何なる小作法を制定すべきかに付いては二の相對立する考があり得る。其一は今日直に地主小作人間の關係一切を規律すべき法律を制定し之によつて彼等の立場を徹底的に安定せしむべしとする考であり其二は小作爭議の發生を以て現在の小作事情上必然已むを得ざる現象なりと認め唯出來得る限り其發生を防止し又發生したる爭議の惡化を防止すべき暫定的小作法を制定すべしとする考である。

前者は嘗て第一次の小作制度調査委員會の抱持した考であり、今でも世の中には此考を以て小作法の制定を主張してゐる人が少くない。しかしながら、吾國の小作事情は今尙過渡的狀態に在る。封建的小作關係の遺物と認むべき各種の不合理は今尙小作慣行として廣く各地に行はれて居る。成程社會事情の變遷と小作人の努力とは著しく封建的色彩を帶びた人的隸屬關係としての小作關係を漸次に近代的な財産的契約關係に變化せしめ、之に伴つて諸般の小作條件も漸次に合理化すべき趨勢を示してゐる。けれども、吾々の今日認め得るものは僅に變遷の曙光に過ぎない。凶作減免の如き、米納小作料の如き其他性質上近代的契約關係としての賃貸借と全く相容れない慣行は尙廣く全國各地に行はれて居り、從つて約定小作料額の如き今尙一般に異常な高率を示して居る。

加之現在政治的勢力の實情に於ては小作人が既に其實力によつて事實上獲得してゐるものすら之を政治的方法によつて法律の上に實現することは不可能である。此故に、今日第一の考に依る小作法の制定を假に可能なりとしても、依つて制定せらるゝ小作法は今日今後自ら擴大に變遷せむとしてゐる小作關係を不合理なる今日の狀態に停頓せしむべきものたるに過ぎない。かくの如き小作法は小作人の今後愈々前進すべき前途を阻止中斷すべき作用を爲すに過ぎない。從つて又小作關係を安定せしめて爭議の發生を豫防する效果をも充分に發揮し得な

いのである。

嘗て小作調停法が制定された當時世の中には調停の基礎たる實體法としての小作法を制定せずして調停法を制定するの不都合を難ずるものが少くなかつた。けれども、調停制度は社會事情變遷の結果從來の法律に依る裁判が事實上能く紛議を解決するに足らず、而かも政治の實情が新しい法律を制定するまでに熟してゐない場合に利用せらるべき過渡的の制度である。調停制度は主として當事者双方の和解に基礎を置きつゝ巧みに現行法の適用を避けて具體的に妥當な紛議の解決を求めむとする制度である。此故に、調停制度は性質上寧ろ新しき法律の前驅を爲すべきものであり、新しき法律の制定を準備すべきものである。小作法に先立つて小作調停法を制定する、それは寧ろ自然の順序であつて其所に何等の不自然もなかつたのである。

かくして小作調停法は豫期に反せざる否寧ろ豫期以上と認むべき成果を收めた今日に及んで居る。所が最近爭議事情の變遷は反つて地主の攻擊的態度を誘發するに至つた。地主は偶々彼等に有利なる——而かもそれは現行の小作慣行にすら合致してゐない程彼等に有利な——
…人と攻擊する。そうして彼等の主張が法律に
…して最近調停

つたのである。是れ今日吾々が調停法の外尙別に同法の圓滿なる運用を可能ならしむるに必要なる程度の法律を必要とするに至つた原因である。吾々は今日尙未だ第一の考に基く小作法を制定し得べき時期にあらずと考へる。けれども、少くとも調停法の圓滿なる運用を助ける意味に於て、進みては出來得る限り爭議の發生を豫防し其惡化を阻止するに必要なる程度の小作法を制定すべき時期が今正に到來したことを確信するものである。

三

右の見地より考ふるときは、吾々の今日制定すべき小作法は少くとも（一）耕作權の確立（二）小作關係修了の場合に於ける小作人の保護方法（三）小作料の減免及び小作條件の改定に關する合理的方法及び（四）爭議に付いて當事者の使用し得べき鬪爭手段の制限に關してそれぐ適當なる規定を設くることを最少限度の必要とする。

先づ第一に、耕作權の確立は如何なる見地から考へても絕對的に必要である。小作關係が人的隷屬の關係たる色彩を濃厚にして居る限り、地主小作人間の情誼は自ら耕作權の永續を保障すべき基礎となるが故に、特に法律を以て其永續を保障すべき方法を設くる必要を見な
…、現在の如く小作關係が物質的利益を唯一の目標とする財

產的關係に移り變つた以上耕作權の法律的確保は小作人保護の見地から考へても又公益的見地から考へても絕對に必要である。先づ第一に現在の小作人は一般に寸尺の土地をも惜まねばならない程狹少な耕作面積をもつてゐるに過ぎない。加之小作人は都會の勞働者の如く事實上轉業の自由を有せず、又必要の場合容易く別に耕地を手に入れる便宜をもつてゐない。從つて彼等が――多くは父祖以來――もつてゐる現在の耕地は實に他に掛け換へなき唯一の生活資源であつて、之を奪はるることは直に彼等及び其家族の生命に關する大問題でなければならない。此故に、耕作權を確立して彼等唯一の生活資源に法律的保護を與へることは彼等の生存權を確保する唯一の方法であつて、小作法の制定上吾々の最も留意すべき事柄でなければならない。加之耕作權の確立は農業の繁榮を企圖する公益的見地から考へても絕對的に必要である。蓋し短期小作の農政上好ましからざるは學者間の通說である。若しも小作人の權利が――現行民法によつて規定せられつゝあるが如く――明日も知らない程薄弱のものであるならば、そうして彼等の權利が事實此法律的弱點に乘じて無遠慮に地主の侵犯する所となるならば、如何に善良なる小作人と雖も到底土地に安住して之に永久的改善を加へる筈がない、彼等の耕作が一時的收穫を目的とする掠奪的農耕に陷るべきは極めて當然である。嘗て封建制度の沒落に際しては封建的諸負擔の排除によつて土地解放を斷行し、依つて以て農地私有權の確立を計ることが農政上絕對的に必要であつた。それと同じやうに農地の所有權が寧ろ農業の繁榮を妨ぐべき土地負擔の性質を有するに至つた今日に於ては、所有權を制限して事實耕作に從事する人々の權利に適當なる法律的保護を與ふることこそ農政上絕對的に必要であると言はねばならない。小作問題を單なる地主小作人間の私的事項と考ふることなく公益的見地より社會問題として之を考察する限り耕作權の確立は小作法の制定上最も重要な事柄であると言はねばならない。殊に現在の如く地主が動ともすれば小作權の法律的薄弱を利用して故なく之を犯す傾向がある以上、特に法律を以て充分此權利の確保を計るにあらざれば、吾國の農業は單に此一原因を以てするも漸次衰微に赴くの外ないやうに考へられるのである。

然らば、耕作權の確立上吾々の小作法は如何なる規定を必要とするであらうか？

（一）先づ第一に、吾々は耕作權の物權化を要求する。現行民法及び其解釋上の通說によると、永小作權以外の小作權はすべて債權の一種たる賃借權に過ぎないものと解されて居る。從つて例へば甲地主より田畑を借りて居る小作人は唯其權利を甲に對抗し得るに過ぎない。無論小作人が其權利を登錄すれば之を以て第三者に對抗し得る（へ

第六百五條)。けれども、地主は通常登記に同意を與へず、小作人は又法律上其同意を強要すべき權利を與へられてゐない。其結果地主變更するときは小作人は最早其權利を新地主に對抗し得ないのである。最近地主が動ともすれば攻撃的態度を示し法律上利用し得べきあらゆる手段の利用を辭せざる傾向があり、例へば上記土地會社の如き方法を以て小作人を強壓する以上、法律はよろしく速に小作權の物權化を計り、單なる地主の變更によつて小作權が根底より覆さるゝが如き不都合を除去すべきであつて、其必要は嘗て小作調査會が「小作契約ノ登記ナキモ新所有者ハ當然ニ從前ノ小作關係ヲ承繼スルモノトシ尚小作地ニ付テ地上權等ノ權利ヲ取得シタル者ニ對スル關係ニ於テモ小作地賃借權ハ其ノ効力ヲ害セラレザルモノトスルコトヲ要ス」と議決答申したる當時に比し尚一層緊要の度を加へて居るのである。

(二)　第二に、吾々は小作期間其他小作權の繼續に關聯して小作權の確保を考へる必要がある。現行法によると、約定小作期間の最短期に付いて法律上何等の制限なきのみならず期間滿了の際には地主に於て何等の理由を示さずして自由に契約の更新繼續を拒絶し得る。又實際上最も多數を占めて居る不定期小作は一年前の豫告を以て自由に之を終了せしめ得る、縱令其小作關係が事實上父祖以來長年に亘つて繼續し來たつたものであつても地主は何等の賠償を要せずして之を終了せし得べきものとするのが現在一般の解釋である。尚其他小作料の滯納其他小作人に契約上の義務不履行あるときは、地主は相當の期間を定めて履行を催告し、若し其期間内に履行なきときは直に解約し得べしとする民法の規定(第五百四十一條)は、例へば小作料の納付につき其數量若しくは納付時期について聊たりとも滯納の事實あるときは直に解約し得べしとする極めて不合理苛酷な結論を許し認めつゝある。而してかくの如きは從來全國に亘つて行はれつゝある小作慣行と較べて見ても甚だ苛酷であつて全然實情に適合しないのである。此故に、此等の諸規定に適當なる改正を加へて小作人をして故なく小作權を喪失せしめざらしむるは刻下の急務である。嘗て小作調査會が其要綱中「小作契約ノ繼續及消滅」の項中に答申してゐる所は、個々の點に付いて尚大に論議を容るべき餘地が少くないけれども、大體に於て上記の現行法上の不合理を除去若くは少くとも緩和する上に多大の効果あるものと考へられる。此故に、今後制定せらるべき小作法に於ても此問題に付いて充分の考慮を拂ひ、以て小作權の安定を計る必要あること勿論である。

(三)　第三に小作權の財産的價値を確保する爲めには出來得る限り其讓渡を自由にする必要がある。現行法によると、小作人は地主の承諾あるにあらざれば絶對に小作權を讓渡し得ない(民法第六百十二條)。

しかしながら、かくの如きは多數地方の慣行に反するのみならず、不當に小作權の財産的價値を毀傷するものと言はねばならない。よろしく特別の慣行ある地方に於ては慣行に從ひ、其他の地方に於ても正當の理由あるにあらざれば漫りに讓渡を禁止し得ざるものとすべきであつて、是れも亦耕作權の確立上極めて重要な事柄である。

（四）尙其他嘗て小作調査會が「地主が小作地ヲ賣却セムトスルトキハ成ル可ク其ノ小作地ノ小作人ニ之ガ買收ノ機會ヲ與フルヲ適當トス」と考へて案出した「小作地賣却ノ通知」に關する制度は、小作人に買收の資力を補給すべき適當の方策を考慮せざる限り結局有名無實に終はる虞があるけれども、ともかく全然小作人の知らざる間に地主が變更し終はるが如き不都合だけは之を防止し得べきが故に、耕作權の確保上尙相當の效果あるものと考へることが出來る。

四

第二は、小作關係終了の場合に於ける小作人保護の問題は耕作權の確立と並びて之と表裏を成しつゝ研究せらるべき重要事項である。以上の方法によつて出來得る限り耕作權の確立を計るとしても、之によつて小作人が其意に反して小作地を離れることを强制される場合を絕無ならしめることの不可能なるは勿論、社會諸般の情勢は寧ろかくの如き事例の益々增加すべきことを想像せしめる。而してかくの如き場合に小作人に適當なる賠償を與へることは、從來彼等の小作權が事實上一定の價値を有したるにも拘らず之を全然無償で消滅せしめるのは明に不公正であると言ふことから考へても、小作人に生活の保證を與へて轉業に便するの必要あることから考へても、又公正なる賠償制度の存在は自ら地主の理由なき返地請求を抑制する效果あるべきことから考へても、絕對的に必要であるにも拘らず、現行法は此點に付いて殆ど何事をも規定してゐない。其結果例へば返地請求の爭議を調停するに際し一方小作人をして返地を爲さしむると共に他方地主をして適當なる賠償を爲さしめさへすれば適當に和解を成立せしめ得べき見込みあるにも拘らず、地主は屢々法律に根據なきことを理由として賠償を拒絕し、爲めに調停の成立を妨げらるゝが如き場合が少くない。又假りに地主が賠償に應ずるとしても賠償の程度に付いて何等法律上の定めがない爲めに容易に紛議の落着を見得ない場合も少くないのである。

小作調査會の要綱は此點に鑑みて（一）小作契約終了の場合に現存する毛上の買取義務、（二）小作人が小作地の爲めに支出したる有益費の償還、（三）作株賣買の慣行ある土地に付いては其作株の價額を賠償せしむること、（四）其然らざる土地に付いても——通常「涙金」と稱

らるゝものに相當する——一定の賠償（作離料）を爲さしめること、（五）土地收用の場合には小作人にも直接補償を與ふること等各種の賠償を小作人に與ふべきことを提議して居る。其個々の點に對しては地主小作人双方の側より色々の批評があるけれども、新に制定せらるべき小作法がともかく此種の賠償規定を包含せざるべからざること特に多く言ふを須ひざる所であらう。

五

第三に、小作料の減免及び小作條件の改定に關する方法手續を合理化することは爭議防止の方策として最も重要である。

天災其他不可抗力に因る不作の場合に小作料を減額又は免除することは廣く吾國一般に行はれて居る小作慣行である。所が實際上減免の要否程度を決定する手續等に付いて何等一定の定めがない爲めに之に關する交渉に關聯して爭議の發生を見ること從來其例甚だ多く、小作年報の報ずる所によると此種の原因に因る爭議は爭議總件數中大正十五年に於ては七割三分一厘、昭和二年に於ては五割八分七厘七毛、昭和三年に於ては四割五分一厘四毛の多きを占めて居る。此種爭議の根本的原因は凶作減免の慣行に存すること勿論であるから、小作條件の徹底的改定によつて此種の慣行を廢止し進んでは現に歐米諸國に於て行はれつゝあるが如く小作料金納制を確立することが此種の爭議を絶滅せしめる最も有力な方策に違ひないけれども、凶作減免及び小作料現物納の慣行は吾國從來の小作制度の根本に觸れた古い因習であつて小作制度それ自身の根本的改革が行はれない限り到底一片の法令を以て之を如何ともすることが出來ないのである。此故に、吾々が今日實際上採用し得る方法としては、嘗て小作調査會が提議したると同じく減免要求は原則として之を刈取收穫前に爲さしめ、且當事者一方の要求あるときは相手方に於て檢見を拒絶し得ざることゝし、若し拒絶したるときは一定の公正なる方法により當事者一方のみにて檢見を爲し得るが如き制度を確立し、以て減免の要否及び程度を決定する資料を明確ならしめ爭議の紛糾を未然に防ぐの手段を講ずるの外なく、これによつて此種爭議の發生を豫防し若くは其解決を容易ならしめ得べき效果は相當顯著であらうと豫想されるのである。

次に小作料の永久的減額其他小作條件の改定要求に關聯して起る爭議は以前に比すれば多少減少の傾向があるけれども、之を以て小作爭議がともかく現行の條件を以て一先づ落付かむとしてゐるものと考へるのには甚しい早計である。元來吾國現在の小作關係は封建的小作制度の遺物であつて、小作其他小作條件は今尚小作人にとつて甚しく苛酷である。小作契約は其名契約にして其內容は今尚多く地主の一方的

に決定する所である。個々の小作人は小作條件の決定上殆ど何等契約の自由をもたないのである。此故に、小作人が團結の力によつて契約の自由を恢復し地主と對等の立場に立つて小作條件を協定せむとする傾向を示すに至るのは蓋し當然であつて、大正八九年の頃から全國に亘つて勃發蔓延した集團的小作爭議は實に此傾向の現はれに外ならないのである。從つて、小作人の小作條件改定要望に相當の根據あるとを承認した上其要望に對して合理的なる滿足を與ふるに足るべき合理的手段が確立されない限り、何等かの形式に於て今後尚長く爭議の發生を見るべきは當然である。此點に關して現在小作調停法の運用が相當有効な働きを爲して居り、之によつて小作條件が多少とも漸次改善せられつつある事實は之を認め得るけれども、公正なる調停の成立には飽くまでも當事者双方の間に對等なる實力關係の存在を必要條件とするが故に、調停制度の圓滿なる發達は小作組合の公認を條件としてのみ之を期待するとが出來る。調停の結果成立した和解契約が一種の協約的規範として——事實上有効に當事者双方を羈束し得べき權威をもち得るが爲めには、地主若くは地主團體と有力なる小作組合との間に於て公正なる妥協和解の成立したることを必要とし、且其事後に於ける實施が有力なる兩當事者によつて有効に監視せらるゝことを必要とする。從來調停法によつて成立した調停の條項中には屢々小作組合の解散を條件としてゐるものが少くないけれども、かくの如きは初期の小作爭議に付いては兎も角、今後發生すべき有力なる小作爭議を解決する方策として寧ろ甚しき拙策なりと言はねばならない。世の中には小作組合を以て徒に爭議の惹起を目的とするものであるやうに考へるものがあるけれども、それは初期の爭議を通して見た一面の觀察に過ぎない。有力なる小作組合が成立して地主も亦其權威を認むるに至れば敢て爭議を須ひずして紛爭を解決し得る場合も多かるべく、又地主と組合との間に締結された小作協約によつて平和の永續を保障することも出來得るのである。此故に、小作條件改定方法を合理化する出發點として絶對に必要なるものは小作組合の公認でなければならぬ。かくしてこそ小作紛爭の協約的解決を可能ならしめ得べく、調停制度の運用をも完全ならしめることが出來るのである。

此點に關して小作調査會は——「小作委員會」なる名の下に——專ら協調組合の公認奬勵を提唱して居る。曰く「現在各地ニ存スル小作條件決定ニ關スル自治的ノ委員會制度ハ相當効果ヲ收メツヽアルヲ以テ之ヲ公ニ認メ其ノ決定ニ對シ一定ノ効力ヲ附與スルニ最モ時宜ニ適スル方法ナリト認ム。依テ右ノ如キ委員會ガ公認ヲ得ル爲行政廳ニ屆出ヲ爲シタルトキハ行政廳ハ其ノ委員會ノ設立ガ區域内ノ地主及小作人多數ノ同意ヲ得タルヤ否ヤ、其ノ組織ガ公正ナリヤ否ヤ等ヲ確メテ之

ヲ受理スベキモノト爲スベク、而シテ委員會ガ地主及小作人ノ合意ノ申請ニ基キ小作料ノ額、支拂時期、一時的減額免除ノ標準其他小作條件ノ改定ニ關シ爲シタル決定ニ對シテハ地主及小作人間ノ契約ノ內容ヲ爲ス效力ヲ附與シ、且其ノ效力ハ其ノ小作關係ノ承繼アリタルトキト雖其ノ承繼人ニ及ブモノト爲スコトヲ要ス。然レドモ委員會ノ決定ヲ最終ノモノト爲ストキハ或ハ實情ニ適セザルコトアルヲ保シ難キヲ以テ、其ノ決定ガ著シク不公正ナルトキニ限リ裁判所ハ當事者ノ申立又ハ小作官ノ請求ニ因リ鑑定委員會ノ意見ヲ聽キテ其ノ決定ヲ變更シ得ルモノトスルヲ妥當トス云々」。此種の小作委員會は――農林當局の調査報告によると――多く小作爭議を動機として設立されたものであつて、小作爭議の既に發生したる地方に於ては爭議の結果小作條件に關し協定したる事項を兩當事者に於て遵守し將來再び爭議を起さしめざらむが爲めに、又爭議の未だ發生せざる地方に於ては地主小作人兩側の互讓に依り不合理なる小作關係を改善し爭議の發生を未然に防止せむが爲めに設立されたものである。而して其總數は昭和三年末に於て九百十五の多きに上つて居る。此種の委員會は其組織が公正でありさへすれば――現在諸外國に行はれつゝある最低賃金法の下に於ける賃金委員會と同じく――小作條件を公正ならしむるに付き多大の效果あるべきこと之を想像するに難くないけれども、坊間動ともすれば說を爲す者の主張するが如く、之を以て對立的小作組合の代物たらしめ之によつて小作組合を絕滅せしむる道具に使はむとするが如きは根本的に間違つた考である。小作委員會は性質上決して小作組合を排斥するものではない。小作組合の存在する場所に於ては組合を通して小作人側の利益を有力に代表し得べき者を委員中に加へてこそ初めて委員會の權威を增加し小作條件の公正を樹立し得るのである。此故に委員會の組織さへ公正であるならば其全國的普及によつて小作條件の公正なる改定を實現する可能性は大にあるものと考へられる。私は新に制定せらるべき小作法に於ても一面小作組合の働きを公認利用すると同時に此種委員會の作用を充分に利用せむことを希望してやまないものである。

六

終りに、小作爭議に於て當事者双方の使用する爭議手段を制限し爭議の惡化を防止することは目下制定すべき小作法の最も注意すべき要點である。何故なれば、現在過渡の情況に於ては小作法の制定により小作關係を實質的に安定せしめて爭議それ自身の絕滅を計ることは實際上不可能である。爭議それ自身は力の浪費であつて決して尊ぶべき現象ではないけれども、それは現在小作關係の實情から生まれて出

る必然の結果である。小作法の制定は或る程度まで其發生を防止し得るとしても、尙爭議の發生すべき餘地は大に殘つてゐるのである。此故に小作法はかくして發生すべき爭議に於て當事者双方をして鬪爭上フエヤ・プレーの原則を守らしめる必要がある、當事者双方をして勝利を急ぐの餘り不當の鬪爭手段を用ひしめざるやう、そうして爭議を惡化せしめて無限の紛糾に陷らしめないやう注意する必要があるのである。

抑も吾國小作爭議の惡化し來たつた經路を考へて見ると、初めに先づ小作人側の暴力使用あり、次いで其警察力に依る鎭壓と共に小作料不納同盟の戰術行はるゝに至り、之に對して地主の側より小作料請求若くは契約解除による返地請求の訴訟を以て對抗するや小作人は又之に答ふるに訴訟引延ばしの戰術を以てするに至り、地主又之に對抗して立毛の假差押乃至土地立入禁止の假處分の如き極度の强力手段を使用し以て終に小作人をして最早用ふべき何等の合法的對抗手段も殘されてゐない窮地にまで陷らしめたのである。此故に一面小作人に對して小作料不納同盟の戰術を無節制に行使することを禁止すると同時に他面地主に對しても立毛差押土地立入禁止處分の如き極度の强力手段を濫用することを戒しむることは爭議の惡化を防止し其解決を容易ならしむるに付き絕對的に必要である。是れ小作調査會の要綱が「小作料の供託及一部辨濟」の項目中に「供託ニ依ル立毛差押及立入禁止ノ制限」を提議し、小作人が小作料の一部又は相當の保證金を供託することを條件として立毛差押等の强制手續を停止又は取消す等各種の緩和手段を提議してゐる所以である。

其後爭議の實情を見ると、執行裁判所の理解により現行訴訟法の活用によつて小作調査會の提議した趣旨の一部は現在既に實現されてゐるやうであるけれども、萬全を期するが爲めには近く實現せらるべき强制執行法の改正と相俟つて小作法中に適當なる緩和手段を規定し以て極力爭議の惡化を防止する必要がある。

米國資本主義の暗影

──獨占資本の矛盾──

小島精一

此小論は、編輯の締切りまぎはに、そゝくさと書き流されたもので固より、組織的に此暗影の眞相を檢討する程の野望的企圖ではない。たゞ、最近の事實によつて、出來るだけ要約的に此眞相の一面を指摘しヨリ高き、組織的檢討に迄、眞摯な讀者の興味を促せればと思ひ立つただけである。

〔I〕 はしがき

米國資本主義の繁榮──その萬年景氣的繁榮に就ては、近來餘りに多くの──然して斷片的な、ゴシツプだが──が輸入されてゐる。例へば年々の莫大な生產増、大會社の莫大な利潤、取引所の沸騰景氣等々が、かの驚くべき機械化の發展──勞働者一人當りの生產増の向上と言つた風な數字と共に頻繁に各種の新刊文獻を飾り立てゝゐる。ともかく、米國の事情には旺盛な興味が注がれてゐるらしい。だが、勿論米國は天國ではない。その繁榮の光輝の裏面には執拗な暗影がある。開明的な全資本家の必死な、協働的努力にも拘らず、此暗影はとりのけられてゐない。それは謂はゞ光輝の分身であり、繁榮の必然的隨伴──その內的矛盾であるらしい。

〔II〕 國民所得の集中と分散

米國經濟の繁榮──その恰好な表徴として私は次の一表を引用しよう。

（註）"Recent Economic Changes" からの引用──以下特記しないが、數字的資料は槪ね、此の有名な半官的調査報告書による。

一九二五年ノ價値ニ換算ノ國民所得

生產指數（一九一三年基準）

一四年	五九・五	六〇一	九九
一九年	六四・二	六一一	一一四
二二年	六八・六	六二五	一一七
二三年	七五・七	六七九	一三二
二四年	七九・一	六九七	一二七
二五年	八一・九	七一二	一三七
二六年	八五・三	七三三	一四二

(註) 此表中には資本財の賣却利得、財產の評價利得、會社企業の剩餘の增減、家婦の收入等をすべて除外してある。

之は單に分配された現實の所得だけで企業の積立金等は除外してあるが、それでもさし當り、吾々は一九二二年の景氣恢復以來、持續的な繁榮を概觀することが出來る。此盛況はその後も繼續してゐること周知の通りである。

此繁榮の主因は言ふまでもなく技術的及び組織的な、エネルギイシュな、合理化的發展にある。が、その檢討は今は正面の題目ではない。

根本的に問題なのは此國民所得の分配狀態——殊にその少數大資本國への集中化である。

同じ報告によると國民所得は次の如く分配されてゐる。

	一九一三年	二五年
(1) 勞働者賃銀	三七%	三八%
(2) 俸給	一五	一八
(3) 地代、賃料等	一五	一三
(4) 利子、配當	一〇	一〇
(5) 企業者利潤	一二	二〇

(ソノ他略)

先づ豫め特に注目すべきは戰前も、合理化後の今日も各種所得の全體中の相對的割合は大體無變化——但し俸給所得は增加してゐるが——に近いと言ふことである。殊に大衆所得たる賃銀の割合は、かの飛躍的能率向上にも拘らず、僅に一%を加へたに止まつてゐる。それは二千六百萬人即ち全所得人口中の六三%を占め乍ら、所得額は三七—八%にしか當つてゐない。

企業者利潤の低下したのは一見不思議のやうだが、之は各個人的企業利得——現實に各個人の利得だけであつて、前述の如く擴大された會社企業の莫大な積立金を一切包含してゐないことを忘れてはならぬ。だが、名目上個人に分配されず、會社自體の所有として積立てられた資產も、實際は、少數大資本國の支配者に歸屬するのであるから、之を除外しては、眞相は決して把握されないのだ。それで、若し之をも考慮に含めると企業利潤の割合は恐らく著しく向上し、從て他の所得——賃銀等も、かなり低下することになるに違ひない。

だが、現實に配分された報酬だけでも企業者利潤は二十數%を占めてゐる。又利子生活者——謂ゆる寄生階級も二五%を占めてゐる。俸

給生活者中には大所得者をも含むから、その增加は決して準賃銀的所得の增加と見ることは出來ない。

一方に於て國民所得過半の高度の集中と同時に殘餘の多數低所得者への著しき分散——即ち極く少數の超大所得者と夥多の低所得者との對立狀態は、次の所得税用の官廳統計から、ヨリ端的に推察することが出來る。

一九二四年度全所得人口‥‥	四三、〇〇〇千人
賃勞働及び農業從業員‥‥‥	三三、五〇〇
非賃勞働者	
收入三千弗以下ノ者	六、八〇〇
三千弗乃至一萬弗ノ者	二、五〇〇
一萬弗以上ノ者	二六〇

即ち全所得人口中年收三千弗以下の低收入者は大略四千萬人‥‥頭數では全體の九三%を占めてゐるが、その收入は全體の約三五%である。之に反して一萬弗以上の者は頭數では僅に〇・六%にしか當らぬがその收入は六億八千萬弗にさへ上つてゐる。計算の基礎が違うために、之と對比は出來ないが、翌二五年度では百萬弗以上の年收者、僅に二百人で、四億二千萬弗を占めてさへゐる。ともかくも、之で所得の著しき集中と多數低所得者の對立的存在とは理解することが出來るだらう。

〔III〕所得の集中が決定する產業發展の特異な傾向

(1) 此の事實から抽出される重大な傾向の第一は、——直接消費の制約的傾向である。國民所得が、ヨリ均分的な狀態に比べて、大衆的日用品の購買力は強く制約されねばならない。

(2) 第二の傾向は富豪の奢侈的消費の增大である。

(3) 第三に、それにも增して、所得の資本化的要望の强化である。即ち富豪の大所得は日用品にも、奢侈品にも充分費消し盡くされず、從て、資本化による利殖の機會を強く要望する。

(4) 第四に、此資本化的傾向は、概して、特に生產手段の生產に向けられる。と言ふのは、前述の如く直接消費の購買力は制約されてゐるから、その量的增大の可能はなく、逆に生產手段の改善への要求は痛切であらうから。(販路の制限——競爭の激化‥‥)合理化運動はそれ自體如上の傾向の所產ではあるが、更に、それによつて此の生產手段改善の努力を一層強く刺戟するであらう。

と言つて、消費財の領域への新投資が全然停止すると考へることは誤りだ。なぜならば、例へば最近の自動車、人絹、ラヂオ等々で代表されるやうに大規模の新奇な消費財が案出され得るから。だが、此場合にも、新商品の生產に必隨的な生產手段の需要は著しく膨脹するであらう。

かくて、要するに、直接消費財の生產に對する生產手段生產の割合は概して著しく向上するであらう。

(5) 第五に、進んで海外進出の傾向が特に促進されるだらう。と言ふのは、(イ)右の消費財對生產財の特殊な偏寄的割合は、かのツガンバラノウスキーの主張の如くに無制限的發展が可能なものではなく、少くも技術的進歩の狀態によつて嚴密に制約されてゐる。然るに盛なる合理化運動は無政府的な現行秩序の下に於ては、獨占的統制にも拘らず、概して、此制約を無視して、生產力の過大的擴張を惹き起さしめ易い。(ロ)合理化は又同時に多數の失業者を發生せしめて、大衆品の購買力をそれだけ減殺せしめる。(ハ)合理化は又企業の集中・獨占化を促進して、所得の偏在的集中を高め、之によつても亦生產手段への過大的投資の傾向を强める。(ニ)のみならず、獨占體は內地市場への供給量だけを制限することによつて、その價格を釣り上げ、之によつても、內地市場の購買力を減殺する。等…

此の過大生產力化の傾向はその合理化されたる精銳の鬪爭力と相俟つて、强く海外進出を企圖せしめずにはゐない。

それと同時に內地市場への外敵の侵入は、必然的に防衞される。

(6) 然し、海外諸國でも亦同じ保護壁が築かれ、商品形體での進出が困難となるが故に、蓄積された資本は、最早、內地の產業には有利な投資機會を見出し難くなり、海外流出——資本輸出への旺盛な傾向が發展する。

×

かくの如きは謂ゆる帝國主義の定石的發展過程であるが、現下の米國產業界には、その最も鮮明な躍進的狀勢が見出される。私は進んで事實に就いて要約的に重點を指示して行かう。

〔IV〕 流行の激變・設備の頻繁な破壞

消費的購買力の規模こそは制約されてゐるが、その現實的の內容は急激に變遷して行く。自動車、人絹、ラヂオ、石油——ガス・ストーブ、家庭電化等々…の出現、流行品の急激な變化——だが、それは少からず大商店・生產者の巧緻な廣告の所產であり、そのために品質の改善と言ふよりは、單なる流行的目新らしさに止まる場合が少くない。例へば自動車でも、嘗ては數年に一度モデルを變更するだけだつたのに、市場が飽和するにつれて、年に、二度も三度も新型を賣出すやうになつた…一九二五年の統計でさへ既に人口五人半當り平均一臺の所有になつてゐたが、今では一家族二臺を目標として猛烈な新宣傳が行はれてゐる…少し富有な家庭では流行を追つて新型から新型へ取り替へることが風習となつてゐるさうだ。…之は、如何に生產者が、その厖大な生產力——合理化運動の必然の產物——の消化に苦惱してゐるかを推察せしめる。

興味あるのは全體的に見て生產的從業員が激減して、商業的從業員が激增してゐることだ。一九一九—二六年間に產業的從業員は約二

萬人も減少してゐるのに、商業では百萬人から増加してゐる。又全生産費中、製造費よりも販賣費の方が多額に上ることも注目されねばならない。

　自動車の例はこゝでも興味ある傾向を示してゐる……數年前までは人氣のある自動車生産者はその專屬取引店に向つて隨分勝手な、取引條件を強要することが出來たものだ。現金拂ひや先物拂ひなどさへ強要した程だ。處が、今では事情が逆になつて、生産者は取引店のために金融會社を設けてやらねばならないやうになつてしまつた……月賦制度等が米國で流行するのも行き詰つた販路の開拓のためであること言ふまでもない。

　之は消費財だけのことではない。消費財での競爭が激しければ、それだけ生産財の改善、設備の新陳代謝も、ヨリ一層激しい。最近の調査は次の如き驚くべき結果を報告してゐる。即ち調査した二百個の大工業會社中、約八十八個――全體の四三・六%の會社では、その生産設備を遲くも二ケ年以内に償却してしまう方針である。……約百三十個の會社が三ケ年以内の償却を方針としてゐる……四ケ年以内の會社は約百五十個――即ち全體の七七%に當る……全體の九七・四%が五ケ年以内の償却方針ださうである。

　從來の機械の償却と言へば大抵十年乃至早くて七年位に考へてゐたものだが、此報告によると――それが一般化され得るとすれば――米國では殆ど全設備が遲くも五ケ年内には更新され……全體の約半分が二年半位で全く新式化される譯なのである。成程、目ざましいと言へば、目ざましいが、寧ろ慘しい悲劇的破壞的な事實ではなからうか。……そして、その根底には所得の偏寄的集中から生ずる消費的需要の相對的過小が嚴在することを忘れてはならぬ。

〔V〕合理化的失業群―その固定化

　合理化は生産力を向上させるが、それに相應した市場が見出されぬために何處にも吸收されない固定的失業群が今以て四、五百萬人の多數に上つてゐる。然もそれは此萬年的景氣の、正に、その絶頂に於てである。

　ヴァルガの年報の推算によると――と言ふのは米國には失業の公的統計がない――生産指數と失業とは次の如き興味ある對照を示してゐる。

(1) 一九二三――二五年の三ケ年平均を基準とする生産指數は一九一九年度八三から二六年度一〇八へと激増してゐる。

(2) 同じ期間に産業從業員は約二百十三萬人だけ減小さへしてゐる。又一九――二五年間に就ては次表の如き一括的な數字が示される。

　一九二五年の生産能率指數(一九一九年＝一〇〇)

勞働者數	生産の量	勞働者一人當りの生産

農業…………九三	一〇八	一一八
製造工業……九一・五	一二八	一四〇
鑛業………一〇〇	一三三	一三三
運輸…………九一	一〇四・五	一一五
平均　九三	一二〇	一二九

本表によれば生產量は全產業に於て一二〇%に上つたが、一人當り能率が一二九%に上つたために、勞働者の數は反て九三%に低下さへしてゐる。

然るに一九―二六年間の勞働者人口の自然增加は約四百三十萬人に上るから、之と上記の二百十三萬人とを合計すると六百五十萬人が產業部門で失業してゐる譯である。處が、注目すべきことに、他方商業その他の諸部門で次の如く約四百六十萬人を吸收したと推算される。

商業………………	一、〇〇〇、〇〇〇
俸給生活者及び吏員（商業及び工業に仕へざる者）……	一、〇〇〇、〇〇〇
自由職業…………	六五〇、〇〇〇
自動車營業及び僕婢…………	七〇〇、〇〇〇
公共事業事務員…………	二五〇、〇〇〇
雜………………	三五〇、〇〇〇
建築………………	六五〇、〇〇〇
總計	四、六〇〇、〇〇〇

商業その他のこれらの寄生階級的膨脹が果して健全な發展傾向であるとは思はれぬが、そは姑く別として、これでも尙ほ最近數年間（一九二六年）だけで約二百萬人の組織的失業が新規に增發した譯である。之に從來からの固定的失業群を加算すると大體四百萬人を下らぬ失業群が――然も此の繁榮の、有頂天の頂際中に殘存してゐることになる。

米國の失業者數に就ては色々な推算があつて、或者は右の數字より著しく低い見積りを發表してゐる。だが本論冒頭に引用した報告表（ウォルマンの推算）によれば農業を除いても最低二百萬人內外に上つてゐる。そして農業以外の失業者だけで一九二〇―二七年間に最低六十五萬人以上は確に增加してゐると見られる。之が農業失業を除外してゐること、及び極度な最低限的推算であることを倂せ考へるとヴァルガの上揭數はかなり眞實に近いらしく思はれる。

ともかく、此合理化的失業群の尨大な固定化はそれが繁榮期的現象なだけに特に注目されねばならぬ。

〔VI〕勞働者階級の購買力

勞働者の一人當り年所得は絕對的には名目的にも、實質的（購買力的）にもかなり向上してゐることは確實だ。卽ち指數的に示すと……

	名目賃銀	實質賃銀
一九二一年	一〇〇	一〇〇
二三年	一〇六	一一〇

二五年	一〇八	一一〇
二七年	一〇八	一一二

但し一九二一年は恐慌年で、低賃銀の年ではあつた。

然し、それよりも、此間に一人當り生產力はヨリ遙に向上してゐるから、生產物の全價値中に含まれる賃銀の割前は次の如く低下してゐる。

一九二一年……	一〇〇
二三年	八〇
二五年	八〇
二七年	八八

少くも相對的には勞銀階級の購買力が減少して行くことを示してゐる。ミッチェルの報告によると最近には內地市場の擴大のために勞働者への賃銀引き上げを問題とする傾向が一部開明的企業家の間に擡頭して來た。と言つても、全體としては、それは尙ほ實現の政策となつてゐないさうである。又それが或程度に實行されても、その效果は大したものではないだらう。と言ふのは一人當り賃銀を、引き上げても就業人員を淘汰するであらうから、結局勞働者階級全體の所得は、どれ程擴大されるか疑問である。

〔VII〕獨占運動と所得の眞實の集中

前に掲げた國民所得の集中的數字は、あれだけでは到底、事實の眞相を把握せしめることは出來ない。國民所得の狀態から購買力の眞實の集中化を把握するためには、吾々は更に最近の獨占運動をも考慮に入れる必要がある。

周知の通り米國トラスト運動の最高潮は今から約四半世紀前—前世紀末から本世紀への轉換期であつた。そして、それは既にあらゆる產業部門を席捲して、一九〇四年頃に一段落を告げた。處が、大戰中から再び猛烈な結合運動が始まり、殊に、最近では實にすさまじき勢ひで各方面に普及してゐる。で、此最近の結合、獨占化に就て注目されるのは……

(1) 四半世紀前の運動が概して基礎的生產財の部門を中心としてゐたのに、最近のそれは更に一般消費財や商業部門に迄も旺盛に行はれてゐる。——それに又大銀行間の、すばらしき大結合運動。

(2) 戰前の運動は峻烈な反トラスト政策と戰はねばならなかつたが、最近では輿論も政府も寧ろ合理化の名によつて之を歡迎し、進んで援助さへしてゐる。

(3) 戰前の獨占はトラスト的合同の形態をとつたが、最近のそれは寧ろ大企業間のカルテル的協調—米國では、此種の協働組織を綜括的に Trade Associations と呼んでゐる——へ向つてゐる。之は一見組織の下級化のやうだが、實際は反て、その著しき普遍化—と獨占の巧緻な變裝とを語るに過ぎない。(詳しくは近刊、拙著「增補企業集中論」參照)

かくして、全産業界が最近に於て愈々高度の集中化を遂げたのだ、が、更に進んで、これらの各部門的トラストが實は極く少數の大金融資本團によつて綜括的に支配されてゐることを知らねばならぬ。例へば最大の覇王モルガン團の支配下には、

（イ）金融界――モルガン商會を始めとして、紐育第一國立、バンカース・トラスト、紐育ガランチー・トラスト等々……

（ロ）製鋼業――ユー・エス・鋼鐵トラスト

（ハ）石油業――シンクレーア・コンソリデーテッド

（ニ）銅及諸金屬工業――ガッゲンハイム

（ホ）海運業――インタナショナル・マーカンチル・マリン

（へ）化學工業――デュ・ポント

（ト）自動車製造業――ジエネラル・モータース

（チ）電力及電機工業――ゼネラル・エレクトリック、等々……

その他鐵道、航空機、ラヂオ等等。謂はゞ全部門的支配權が集中されてゐるのだ。モルガン程ではないが、キューン・ロエブー――ロックフエラー團も亦之と對立的な廣汎な支配權を把握してゐる。等々……

處で、此の集中・獨占化の事實こそ前述した國民所得の集中の傾向を更に遙に――否、本質的に殆ど別個の現象に迄突き進めるのである。と、言ふのは……

(1) 一旦分散的に配給された各人への所得も、事實は直に大金融機關・大投資機關・取引所等を通じて少數の獨占的大企業へ、かき集められる。米國では勞働者さへ大會社の株主となつてゐると言ふ眞實の意味は勞働者の貯金さへ大金融資本團の御用に役立たされてゐると言ふことに外ならないのだ。

(2) 一見、相互に獨立した企業の間にも實は緊密な財政的結合網が完成してゐるから、表面は、個別資本家への分散的な所得も、その資本化は老大なる一個の共通的計畫に從て實行される。

(3) 前述の如く、會社企業には分配されない莫大な積立金が蓄積されてゐる。

かくして、吾々は前述の所得統計から表見的に推察する場合に比べて、全く本質的に相違した處の高度の集中的現象を結論することが出來るのである。

例へば、次の驚くべき集積的數字は、既に大戰前に、一官設調査會（マネ・トラスト調査委員會）報告中に見出されるものである。

……モルガン商會・第一國立・ナショナルシチイ團の代表者は總計百十二會社に亘つて三百四十一個の重役席を持ち、その關係會社の資本は二百二十億弗を超えてゐる……だが、此の莫大な數字でさへ、全勢力の主幹的な部分だけを示すに止まつてゐる。

〔VIII〕獨占運動の矛盾

此の企業結合・獨占化は合理化運動の重要な一要件と考へられて

る。實際大結合化及び全部門の合理的統制が重要な技術的効果を伴うことは否定出來ない。だが、此技術的効果は、此組織が眞に社會的利益のために運用されて始めて期待されるものであつて、現實の如き營利的企圖の下に於ては反て、幾多の矛盾的現象を産み、決してその充分な作用を發揮することは出來ない。此事は周知の事實だから、私は單に問題の重點を列記するだけに止めておかふ。

(1) 價格の釣り上げのための生産力の計畫的制限。

(2) 競爭者の出現を阻止するための暴力的壓殺政策――例へば差別的價格、排地的拘束契約の强要、拂戻、原料その他の買占め、威嚇、交通機關、信用等の封鎖、その他無數の暴力的强壓方法……。

(3) 關税その他の保護政策の强要――之も幼稚産業の成育を助長するためではなくて、獨占化された内地市場を人爲的に擁するために外ならぬ。

(4) 政權の把握による、あらゆる利權の奪掠、起業機會の獨占化等……。

〔IX〕沒落し行く中、小資本階級

一連の獨占政策によつて獨占者以外の全階級は數重的に減殺される。……、小資本家

その例證……。

(1) ヴアルガの年報によれば……。

「利潤率が獨占にとつての高い率と無組織小企業にとつての非常に低い率とへ分裂する傾向は益々明かに現はれ、もはや資本家達によつても拒まれなくなつた。

『大企業の遞增收入及び利潤、小企業の列伍に於ける繼續的失敗は、…その國の經濟構成（business structure）が合理化の鋭き過程を通過することを示してゐる』

と有名なる『國家産業審議局』局長アレキサンダーは書いてゐる。（一九二八年第三期）

(2) タイムス紙の昨年末の報告によれば……

「二十四萬九千八百七十七の會社は一千三十億弗の總所得と八十億弗の純所得とを示し、

二十萬三千六の會社は二百四十三億弗の總所得と二十三億弗の損失とを示してゐる。

この數字は、如何に獨占資本が小資本企業を倒壞するかを極めて明白に示すものである。損失しつゝ營業してゐる企業は、總所得即ち賣上の數字の示すやうに、一年の平均賣上が、十二萬弗の小企業である利潤を得つゝある企業は年賣上約五十萬弗の大企業である。もし特別の大利潤を收める二三の企業例へばヂエネラル・モータス、デユ・ポン等を抜き出せば、様相は一層明白になるであらう。」（ヴア

ルガ年報二八年第四期の引用）

(3) 非組織的小資本家の沒落を最も端的に例證するものは農民階級の悲慘な沒落過程である。

彼等は最近數年間の一般的繁榮にも拘らず、一方には農産物價格の引き上げ難——商業資本の壓迫による利益の大部分の被搾取——と他方にはトラスト化された工業品の價格騰貴と銀行信用の高利息との三重の壓迫によつて沒落の途を追ひ立てられてゐる。最近多少の改善はあつたものゝ、それは謂はゞ恒久的苦境を脱してはゐない。農民の離村は引き續いて膨湃たる大勢を示してゐる。

大金融資本黨たる共和黨政府は幾度か農村救濟の政策を宣言してゐるにも拘らず、結局殆ど注目すべき何物をも實行しない。

すべての社會的利便が大金融資本團と緊密に結合する諸集團の私的目的にのみ濫用されてゐること——從て彼等と對立する全國民の利益が積極的にも消極的にも毀損されずにはすまぬと言ふことは、此上冗說するまでもない。

〔X〕 狂熱的な關税保護運動

國際經濟會議の決議等が如何に無力な空文に過ぎないかは最近米國の狂熱的な保護關税の一瞥でも立證される。

その根柢は謂ふまでもなく特占利益の確保以外の何者でもない。既に前述によつて吾々は獨占運動がその合理化的要求と矛盾して如何に必然に內地市場を狹化せねばならぬかを說明した。そこで、彼等は今や、寸尺の狹地をも外敵の侵略から防禦せんと熱狂してゐるのである。然り、彼等は、實に細心に、完全な防壁を築き上げんと狂奔してゐるのだ！

(1) 概括的の數字……一九一四年現在の關税保護率は總體平均で一七%だつたのに一九二五年には既に二六%に上昇し、更に最近に又倍率化された

(2) 主要商品の關税率……木綿工業品では最近にニュー・イングランドは南部新興地帶から猛烈に侵略されてゐる。彼等の窮狀を重加することを恐れて保護關税壁が要求され、極く最近に税率は三〇—四〇%から四一—四七へと引き上げられた。そのために外國品の侵入は阻止され、例へば英國品の如き戰前の半分しか輸入されなくなつた。佛國及びスウイス等の刺繡品は既に七五%の高率税で阻止されてゐるが、今や更に九〇%へと引き上げられ、事實上輸入禁止の狀態である。

羊毛工業品も税率引き上げによつて完全に英國の侵入から防禦された。

人絹工業では關税引き上げを見越して、既に有力の外國企業は米國へ工場進出を敢行してゐる程だ。……

(3) 金屬工業品——鐵鋼業、殊に銑鐵の如き高度發達を遂げてゐながら、今以て保護運動に狂奔してゐる。銑鐵關税は最近に七五仙から一一二仙に引き上げられ、それによつて獨逸は全く阻止された。

は更に低賃銀の後進國——印度銑鐵の侵入をも完全に阻止せんと企圖してゐるのだ。

加工的鐵鋼品でも概して著しき引き上げが行はれた。例へば鑄物及び管筒類は二〇%から三〇%へ……。

機械類は既に殆ど完全に外國品を驅逐してゐるのだが、尙ほ唯一の侵入品たる英國製織物機械に向つて最近三五%から四〇%への引き上げを斷行した。……

(4) 化學工業品——戰時中此領域に劃期的發展が行はれたが、今でも高率保護によつて獨逸品の侵入から防衞されてゐる。獨逸染料トラストは此防壁を乘り超へるために米國會社への投資的支配——工場進出を敢行してゐる。

(5) その他、アルミニユーム、靴、皮革等々……何れも內地大獨占體の位置は高率關税の擁護をうけてゐる。

かゝる狂熱的關税保護が國際經營の圓滑な自然的發展を如何に阻害するかは、も早、說明を要しない。問題はそれにも拘らず、世界資本主義の最も繁榮的な米國大資本でさへ、何故、かくも狂熱的に、自明な矛盾政策に依存せねばならぬからである。だが、之に對しては、表[illegible]由主義的抗論の如きは、勿論何等の效果を持ち得ず、全米勞働總同盟(A・F・L)の熱心な支持を克ち得てゐることを忘れてはならぬ。彼等は最近の大會に於て關税引き上げを公的に贊成する決議をなし、次の如く宣言してゐる。

「現在の關税率は吾が國が外國生産物の洪水となる可能性を與へ、且つ吾々の勞働者の多數の失業を來したのも一部分はその責任である。

吾々は關税率の即時改正を要求し、新大統領に對し新關税率制定のための臨時議會の召集を要求することを、吾々の指導者達に委任する。」……

だが、かくて內地物價は釣り上げられ、名目的賃銀の上昇は實質的には相殺されるのである。

〔XI〕 輸出促進・投資運動

他方に於て獨占資本は極力海外進出を企圖して居り、政府は勿論熱心に之を援助してゐる。そのために政府は輸出業だけには排トラスト法の適用を廢棄し、最も露骨に對外戰鬪的態度を表明した。(一九一八年ウエッブ・ポメリーン法)。かくて此輸出カルテル乃至トラストへの結成は逐年增加し、一九一九年の此輸出額七千五百萬弗から、二七年には三億弗にさへ上り、最近は一層急速な增加を見込まれてゐる。就[illegible]鐵鋼業、銅工業、石油業者等の大工業家的輸出團結が最近に出現

之と同時に今や、輸入商組合の許可も論議されてゐる。之は外國の巨大な輸出業者と充分對抗するだけの團結力を輸入商に附與せんとするものである。

かゝる熱烈な援助の下に米國の輸出貿易は年々增加してゐる――そこでは勿論大膽な投資の敢行も慣習的に行はれてゐる――が、それでも尙ほ過大生產力を充分運轉せしめるには市場が不足してゐる。例へば繁榮の最先端を行く自動車工業の如きでさへ全能力六百萬臺に對して二十六年は四百三十萬臺、二七年の如き三百四十萬臺しかなかつた程で。

だが、ともかく、彼等は、かくして强行的に失業の痛苦を海外諸國、殊に後進諸國に轉移せしめんと企圖してゐるのだ。(謂ゆる「失業の輸出」)。

×

進んで此際、吾々は米國の輸出が最近に强く對後進國化したことを時に注目せねばならぬ。即ちその對先進國輸出の割合は……

	全體中對獨輸出%	同對英	對佛	對先進國輸出合計
一九〇六―一〇年	一四・二	三一・五	六・二	五一・九
一九一三年	一三・五	二四・四	五・九	四三・八
一九二五年	九・六	二一・一	五・七	三六・四
二七年	九・九	一七・三	四・七	三一・九

かく著減してゐる。之れ、明白にアメリカ諸國、アジア諸國への著增的輸出を裏面から立證するものに外ならぬ。

而して之は米國の輸出政策が如何に未開國との利益多き搾取的取引の開拓に專念してゐるかを語る資料として甚だ珍重されるべきである。(詳しくは Fritz Sternberg, Krise u. Aussenlandel—Weltwirt. Archiv Ap. 1929 參照――そこでは、英、獨、佛等の諸先進國も皆樣に同一發展過程を辿つてゐることが美事に立證されてゐる)

〔XII〕 資本輸出・その帝國主義的統制

とりわけ獨占化によつて極度に集中された莫大な富は、上述の如きあらゆる必死的努力にも拘らず、も早、內地產業だけでは充分有利な再投資の機會を見出すことが出來ない。そこで工場進出、海外企業買收、海外證券參與、等々……諸種の形態で海外諸國に盛んに流出して行く。

戰前米國の海外投資額は約二十九億弗に過ぎず、且つその倍額の海外債務を負つてゐた然るに一九二六年には戰時貸付約百十億弗の外に尙ほ約百二十億弗に達する海外投資を持つに到つた。そして逆に海外債務は三十億弗に減じてしまつた。(商務省推算)此海外流出は內地產業の提供する條件よりも海外のそれの方が遙に有利なことが、その主因であるのは言ふまでもない。だが、之に隨伴して海外市場の開拓が企圖されてゐることも必然だ。前述せる後進國への輸出激增が如何に

此海外投資と緊密に結合せるかは推察するに困難でないだらう。即ち海外投資は米國大金融にとつて、直接に有利な取引であるばかりでなく、その大工業團にも、海外進出の用具化してゐるのだ。

のみならず、此海外投資こそ世界經濟の急速な復興を招來した、最も有力な援助であつたのだ。紐育のナショナル・シチイ・バンクの頭取ミッチエルは此見地を次の如く披瀝してゐる。

「ところでもし我々にして、我等の過剩資金を、それ程豐富に外國へ貸付けなかつたとするならば、我々の顧客のなし得べき途は二つしか殘らなかつたであらう。即ち、彼等は、我々からの買入れを全然止めないまでも著しく縮少するか、乃至は、我が國へ對して更に多額の金を輸送するか、何れかをなさねばならない。第一の遁げ路も、第二のそれと同じく、危險であつたらう。外國がアメリカで買入れることを制限するのは、我が國にとつては重要市場の喪失を意味し、それによつて多數失業の危險を生ぜしめたであらう。多量の正貨輸送は、他方に於て、金を輸出する國々に於ける通貨膨脹のお化けを呪び出し、經濟上及び社會上の凡ゆる危險を伴つたであらう。」（ヴァルガ年報、一九二七年第三期）

だが、こゝにも矛盾がある。と云ふのは、一方に於て、かく豐富な海外投資を許しながら、他方高率保護によつて外國品の輸……してゐることは、債務國……

ら。

然し、又此の海外投資は往々海外競爭國を不當に利益するものだと言ふ批難を生まないではない。例へば獨逸産業への投資は米國産業資本の强敵を武裝するものに外ならないから。或は又後進國への工場進出は内地工場への需要を減殺しないではおかぬから。等々……。資本輸出は終局的には概して債務國の産業勃興を促進し、謂はゞ外敵に武器を與へることになるのを避けられないだらう。

之こそ最大な矛盾ではあるが、それにも拘らず、國内市場の飽和と海外市場の强烈な牽引とは此の資本輸出を不可避的のものにするものである。

たゞ、その際可及的に大資本的利益を計畫的に促進するために、今や愼重なる統制運動が要望されてきた。そしてこゝでは勿論政府の深刻な協力が期待されてゐる。かくて政府、大金融團、大工業トラスト團は三位一體として、その帝國主義的進出計畫を樹立しつゝあるのである。

が、若し國富の資本化が私的利益に放任さ……ら統制され得る……

つて多數失業の危險を生ぜしめたで[illegible]に於て、金を輸出する國々に於ける通貨膨脹のお化けを呪ひ出し、經濟上及び社會上の凡ゆる危險を伴つたであらう。」(ヴァルガ年報、一九二七年第三期)

だが、こゝにも矛盾がある。と云ふのは、一方に於て、かく豐富な海外投資を許しながら、他方高率保護によつて外國品の輸入を防止してゐることは、[illegible]

[illegible]

圜は三[illegible]ある。

[illegible]か、若し內容の資本化が私的利益に放任されず、眞の社會的見地から統制され得るとしたならば、かゝる海外進出は[illegible]的需要の充足な[illegible]に[illegible]されるに[illegible]ひたい。

[illegible]

も早、貸定の紙面もつきたから、私はこゝで、未完の儘、一先づ、筆を擱かう。

以上の素描によつて、粗雜ながら、私は現代米國資本主義が、その極度の獨占的集中化の必然の結果として、如何に特異の海外進出政策に沒頭せねばならなかつたか――そして、そのために中、小資本家及び無產者階級が如何に悲慘な沒落過程に追ひやられねばならなかつたかを一應通說的に說明したつもりである。

私は、これらに關連して考察すべき、尙ほ巨多の重要問題を全く觸れずに殘してある。就中、

(1) 無產者階級が米國ではどんな特異な態度をとつてゐるか――そして、それは何故さうなのか……

(2) 米國の進出政策は國際經濟の發展にどんな役目を演じてゐるか――そして、之れに對應して海外諸國はどんな對抗的政策をとつてゐるか……

(3) 更に、これらの經濟的諸問題は國際政治にどんな反映をなしてゐるか、等々。

これらは別の機會に論及し度く考へてゐる。ここでは以上の論述によつて、萬年景氣的繁榮の眞相暴露に多少の眞摯な注意を喚起し得たらば……と言ふことを期待して筆を擱く。

此海外投資と緊密に結合せるかは推察するに困難でないだらう。即ち海外投資は米國大金融にとつて、直接に有利な取引であるばかりでなく、その大工業團にも、海外進出の用具化してゐるのだ。

のみならず、此海外投資こそ世界經濟の急速な復興を招來した、最も有力な援助であつたのだ。紐育のナショナル・シチイ・バンクの頭取ミッチエルは此見地を次の如く披瀝してゐる。

「ところでもし我々にして、我等の過剩資金を、それ程豐富に外國へ貸付けなかつたとするならば、我々の顧客のなし得べき途は二つしか殘らなかつたであらう、即ち、彼等は、我々からの買入れを全然止めないまでも著しく縮少するか、乃至は、我が國へ對して更に多額の金を輸送するか、何れかをなさねばならない。第一の逃げ路も、第二のそれと同じく、危險であつたらう。外國がアメリカで買入れることを制限するのは、我が國にとつては重要市場の喪失を意味し、それによつて多數失業の危險を生ぜしめたであらう。多量の正貨輸送は、他方に於て、金を輸出する國々に於ける通貨膨脹のお化けを呪ひ出し、經濟上及び社會上の凡ゆる危險を伴つたであらう。」（ヴァルガ年報、一九二七年第三期）

だが、こゝにも矛盾がある。と云ふのは、一方に於て、かく豐富な海外投資を許しながら、他方高率保護によつて外國品の[illegible]してゐることは、債務國[illegible]

ら。

然し、又此の海外投資は往々海外競爭國を不當に利益するものだと言ふ批難を生まないではない。例へば獨逸産業への投資は米國産業資本の强敵を武裝するものに外ならないから。或は又後進國への工場進出は内地工場への需要を減殺しないではおかぬから。等々……。資本輸出は終局的には概して債務國の産業勃興を促進し、謂はゞ外敵に武器を與へることになるのを避けられないだらう。

之こそ最大な矛盾ではあるが、それにも拘らず、國内市場の飽和と海外市場の强烈な牽引とは此の資本輸出を不可避的のものにするものである。

たゞ、その際可及的に大資本的利益を計畫的に促進するために、今や愼重なる統制運動が要望されてきた。そしてこゝでは勿論政府の深刻な協力が期待されてゐる。かくて政府、大金融團、大工業トラスト團は三位一體として、その帝國主義的進出計畫を樹立しつゝあるのである。

が、若し國富の資本化が私的利益に放任されず、國の[illegible]ら統制され得るとした[illegible]

つて多數失業の危險を生ぜしめたであらう。多量の正貨輸送は、他方に於て、金を輸出する國々に於ける通貨膨脹のお化けを呪ひ出し、經濟上及び社會上の凡ゆる危險を伴つたであらう。」（ヴアルガ年報、一九二七年第三期）

だが、こゝにも矛盾がある。と云ふのは、一方に於て、かく豐富な海外投資を許しながら、他方高率保護によつて外國品の輸入を防止してゐることは、[illegible]して、その[illegible]これによつて[illegible]

[illegible]

[illegible]國は三位一體として、その帝國主義的進出計畫を樹立しつゝあるのである。

が、若し國富の資本化が私的利益に放任されず、眞の社會的見地から統制され得るとしたならば、かゝる海外流出は強く阻止され、大衆的需要の充足が著しく[illegible]されるに違ひない。

[illegible]

も早、豫定の紙面もつきたから、私はこゝで、未完の儘、一先づ、筆を擱かう。

以上の素描によつて、粗雜ながら、私は現代米國資本主義が、その極度の獨占的集中化の必然の結果として、如何に特異の海外進出政策に沒頭せねばならなかつたか——そして、そのために中、小資本家及び無産者階級が如何に悲慘な沒落過程に追ひやられねばならなかつたかを一應實證的に説明したつもりである。

私は、これらに關連して考察すべき、尙ほ巨多の重要問題を全く觸れずに殘してある。就中、

(1) 無産者階級が米國でけどんな特異な態度をとつてゐるか——そして、それは何故さうなのか……

(2) 米國の進出政策は國際經濟の發展にどんな役目を演じてゐるか——そして、之れに對應して海外諸國はどんな對抗的政策をとつてゐるか……

(3) 更に、これらの經濟的諸問題は國際政治にどんな反映をなしてゐるか、等々。

これらは別の機會に論及し度く考へてゐる。ここでは以上の論述によつて、萬年景氣的繁榮の眞相暴露に多少の與論的注意を喚起し得たらば……と言ふことを期待して筆を擱く。

此海外投資と緊密に結合せるかは推察するに困難でないだらう。即ち海外投資は米國大金融にとつて、直接に有利な取引であるばかりでなく、その大工業國にも、海外進出の用具化してゐるのだ。

のみならず、此海外投資こそ世界經濟の急速な復興を招來した、最も有力な援助であつたのだ。紐育のナショナル・シチイ・バンクの頭取ミッチエルは此見地を次の如く披瀝してゐる。

「ところでもし我々にして、我等の過剩資金を、それ程豐富に外國へ貸付けなかつたとするならば、我々の顧客のなし得べき途は二つしか殘らなかつたであらう、即ち、彼等は、我々からの買入れを全然止めないまでも著しく縮少するか、乃至は、我が國へ對して更に多額の金を輸送するか、何れかをなさねばならない。第一の逃げ路も、第二のそれと同じく、危險であつたらう。外國がアメリカで買入れることを制限するのは、我が國にとつては重要市場の喪失を意味し、それによつて多數失業の危險を生ぜしめたであらう。多量の正貨輸送は、他方に於て、金を輸出する國々に於ける通貨膨脹のお化けを呪ひ出し、經濟上及び社會上の凡ゆる危險を伴つたであらう。」(ヴアルガ年報、一九二七年第三期)

……といふのは、一方に於て、かく豐富な

ら。

然し、又此の海外投資は往々海外競爭國を不當に利益するものだと言ふ批難を生まないではない。例へば獨逸産業への投資は米國産業資本の强敵を武裝するものに外ならないから。或は又後進國への工場進出は內地工場への需要を減殺しないではおかぬから。等々……。資本輸出は終局的には概して債務國の産業勃興を促進し、謂はゞ外敵に武器を與へることになるのを避けられないだらう。

之こそ最大な矛盾ではあるが、それにも拘らず、國內市場の飽和と海外市場の强烈な牽引とは此の資本輸出を不可避的のものにするものである。

たゞ、その際可及的に大資本的利益を計畫的に促進するために、今や愼重なる統制運動が要望されてきた。そしてこゝでは勿論政府の深刻な協力が期待されてゐる。かくて政府、大金融團、大工業トラスト團は三位一體として、その帝國主義的進出計畫を樹立しつゝあるのである。

が、若し國富の資本化が私的利益に放任されず、眞の社會的見地から統制され得るとしたならば、かゝる海外流出は强く阻止され、大衆

も早、豫定の紙面もつきたから、私はこゝで、未完の儘、一先づ、筆を擱かう。

以上の素描によつて、粗雜ながら、私は現代米國資本主義が、その極度の獨占的集中化の必然の結果として、如何に特異の海外進出政策に没頭せねばならなかつたか——そして、そのために中、小資本家及び無産者階級が如何に悲慘な没落過程に追ひやられねばならなかつたかを一應實證的に說明したつもりである。

私は、これらに關連して考察すべき、尙ほ巨多の重要問題を全く觸れずに殘してある。就中、

(1) 無産者階級が米國でけどんな特異な態度をとつてゐるか——そして、それは何故さうなのか……

(2) 米國の進出政策は國際經濟の發展にどんな役目を演じてゐるか——そして、之れに對應して海外諸國はどんな對抗的政策をとつてゐるか……

(3) 更に、これらの經濟的諸問題は國際政治にどんな反映をなしてゐるか、等々。

これらは別の機會に論及し度く考へてゐる。ここでは以上の論述によつて、萬年景氣的繁榮の眞相暴露に多少の眞摯な注意を喚起し得たらば……と言ふことを期待して筆を擱く。

(一九二九・九・六——二日間、そうそうの筆を走らせ、推稿の餘裕もなく、之を、編輯者へ發送する)。

啓蒙文學論

三木　清

一

舊き社會の、、、新しき社會の建設の過程に於ける最も一般的な現象のひとつは啓蒙運動であらう。ヨーロッパの歴史に於てひとは普通に啓蒙時代といはれるひとつの時代を區別する。それは産業ブルジョアジーが封建貴族並びに君主に對して次第に政治的に自己の地位を確立した時であつた。このときこの新興階級のイデオローグとしていはゆる啓蒙哲學者、啓蒙文學者の群が現はれ、啓蒙運動の潮が一般的に捲き起つた。それは當時の經濟的事情に相應して、イギリスを先頭とし、次いでフランス、後にはドイツへ擴つていつた。啓蒙思潮の代表者を文學に關係して擧げるならば、ヴオルテールやデイドウロなどがあるであらう。

何故に社會の、、・建設の時期にあたつて特に啓蒙的といはれる運動が起るのであらうか。そのとき新興階級は從來のイデオロギーに對して、自己の階級の要求に應ずるイデオロギーを急速に生産し、普及する必要に迫られる。この必要は何よりも第一に政治的のものである。この場合文學の如きものと雖も必然的に政治的な目的意識のもとに於て制作され、評價される。然しながら新興階級の終局的な、、は單なる、、、、のみによつて完成されない。それは固より先づ、、、、を通過しなければならないけれども、單に政治的、、を通過しただけで新興階級は完全に、、、、のでない。新興階級は更に文化的、、を經ることによつて初めて自己の解放を完全に成就し得るのである。しかるに社會の、、に於て解放さるべき被支配階級は支配階級に比してつねに大衆である。從つて、、、に於ける文化運動は必然的に大衆性を擔はねばならぬ。このことからしてそれは啓蒙運動として規定され、特色づけられるに到る。啓蒙的といふことは大衆的といふことと結びついてゐる。そしてこのとき啓蒙は何よりも第一に政治的啓蒙であるのがつねである。ところで、このやうな啓蒙運動はヨーロッパに於ける十七八世紀のかのいはゆる啓蒙時代に限られた現象ではない。プロレタリアの社會を實現しつつあるロシヤにあつて、それは今日極めて執拗に、情熱的に展開されてゐる。ヴオルテールとは違

つた意味で我々はプレハーノフやルナチヤルスキーを啓蒙主義者と呼ぶことが出來よう。啓蒙的な文學は、啓蒙的な文學思想と共に、今日多量に生産されつつある。日本のブルジョア革命の行はれた明治の初めに於ても啓蒙運動があつた。中江兆民、福澤諭吉などは啓蒙思想家であつて、彼等が輸入したのはブルジョア啓蒙時代のイギリス、フランスの思想である。「經國美談」等の啓蒙文學も現はれ、「小說神髓」の如きは啓蒙主義の文學論と見做されることが出來る。

啓蒙的は大衆的として啓蒙的である。このとき大衆的とは人道主義者の考へるやうに漠然と人類的といふことでなく、却つて少數者の階級たる支配階級に對して擡頭し、、、、、被支配階級が多數者の階級であることを意味する。啓蒙運動は社會の、、、建設期に於ける新興階級の發展に應じて發展する特殊なる階級的運動である。我々は啓蒙運動をその階級的意義に於て把握せねばならぬ。啓蒙運動は人道主義的運動ではない。既に一般的な啓蒙、讀み、書き、算數の如きに對する要求でさへも、大衆がその社會的隷屬の位置に滿足してゐる限り、啓蒙運動の規模に於て現はれ得ない。一般的な啓蒙が大衆的に要求されるといふことは大衆が階級的に目覺め始めつつあることであり、階級意識の自然生長の第一步である。啓蒙運動は大衆の自然生長的な階級意識の地盤に於て行はれる目的意識的な階級的運動である。或ひは我々はそれを大衆を階級にまで高める運動であるとも云ふことが出來よう。この場合大衆とは、マルクス的、辯證法的用語を用ゐるならば、「他に對しての階級」のことであり、そしてそれから區別された階級とは「自己自身にとつての階級」のことである。大衆は資本の支配によつて一の共同の狀態、共通の利害關係におかれ、かくて既に資本に對しては一の階級ではあるけれども、それだけではなほ未だ自己自身にとつての階級であるとは云へない。かくなるためには大衆は目的意識的とならなければならない。大衆は階級として自己の本質を自覺せねばならぬ。このやうに見るとき、今日のいはゆる大衆文學なるものが本質的には何等大衆文學でないといふことは明かであらう。ここに謂ふ大衆とはどこからともなく寄席に集つて來るが如き「群衆」のことであり、現象としての大衆である。大衆物とは通俗物の別名であつてはならぬ。人間は群衆として意識を低下し、そこでは個々の人格としてよりも低き思惟、感情等が作用する、といふかの群衆心理學に於て廣く承認されて來たところの一般命題は、フランス革命時代の群衆については妥當するとしても、今日ではもはや通用しない。今日大衆はもはや群衆でなく、却つて自覺的な自己自身にとつての階級にまで組織されつゝあるからである。群衆が階級に高まるにつれて、今日のいはゆる大衆文學は次第に異つた形態をとり、かくて全く新たなるものに轉化するに到るであらう。固より一般的な啓蒙は階級的な啓蒙の最初であるといふ意味に於て、いはゆる大衆文學も一般的な啓蒙に役立つ限り無價値であるのではない。しかし啓蒙の內容は原理的には階級的イデオロギーである。我々は啓蒙運動の本質規定を次のやうに

決めることが出來ようかと思ふ、卽ち啓蒙運動とは大衆の自然生長的な階級意識を取り上げて目的意識的にし、かかる目的意識を再び大衆に結合する運動である。

私は現在のプロレタリア文學を一般に啓蒙文學として規定することが出來はしないかと思ふ。この文學の原理として屢主張されるところのリアリズムが以前のリアリズムと異らねばならぬ理由も、プロレタリア文學が右に規定された意味で啓蒙的であるといふことから自然に理解することが出來る。大衆がプロレタリア文學に於て求めるものは單なる娯樂では固よりなく、また慰安といふが如きものでもなく、却つて啓蒙である。大衆の啓蒙の要求の發展につれて、プロレタリア文學の形態も發展してゆく。それはかの暴露文學の如きから組織問題を中心とする文學にまで伸びて來る。

二

啓蒙的といふことは世のいはゆる教養ある人、趣味ある人から最も輕侮蔑の眼をもつて視られるのがつねである。啓蒙的は教養と趣味との正反對のものであるとされる。彼等の見方が如何に主觀的であるかは、彼等が世界史的な事實を見ようと欲しないことによつて明かである。……七八世紀のブルジョア啓蒙運動の諸思潮は近代文化の出發點で……

も考へ得ない。カントのこの書物がその當時ポピュラリティを得ることの出來たひとつの大なる理由は、それが「理性」及び「批判」といふ時代の合言葉を題名に選んでもつてゐたといふところにあつた。カントは、ひとの知る通り、「啓蒙とは何か」といふ論文をも書いてゐる。

今日まさに世界史的な規模に於て進展しつつあるプロレタリア啓蒙運動は新しい社會への出發點であり、新しき文化の基石を置きつつあるものである。この意義を正確に把握するためには、我々は啓蒙といふことを單に量的にでなく、質的に理解せねばならぬ。それは永遠なものと考へられた一定の文化が、今の場合ではブルジョア文化が、廣い底の層にまでゆきわたることではなく、却つて新しい性質の文化が新興階級の間に生産され、普及されることであり、そしてこの階級が實に大衆の階級であることを意味する。かのブルジョア啓蒙時代にあつても、啓蒙運動は中世的封建的文化の普及化を目差したのでなく、反對に、新興ブルジョアの文化の生産と普及とを目的としたのである。

ブルジョア啓蒙時代に於て先驅をなしたのはイギリスであり、フランスであり、ドイツは遲れた。英佛の啓蒙思想が進歩的であつたに對して、ドイツのそれは經濟上政治上の特殊事情から却つて保守的でさへあつた。今の啓蒙運動の先頭に立つものは、固よりイギリスでなくフランスでもなく、ドイツでもなく、却つてロシヤである。我々は何……のことは、現在日本に於

情から考へて、特に云つておかれねばならぬと思ふ。かく語ることはもちろん我々がシラーやゲーテ、カントやヘーゲルの偉大なる業績を何人にも増して尊敬するといふことと矛盾しないのである。エンゲルスはドイツ古典哲學の終結を論じ、そして「ドイツ勞働者運動は實にドイツ古典哲學の繼承者である」と云つた。古典美學もまた啓蒙美學によつて代られねばならぬ。言ふまでもなく啓蒙美學、具體的にはマルクス主義の藝術論はなほ未だ完成されてゐない。しかしその故をもつてこれを非難したり、これに懷疑の眼を向けたりすることは許されない。むしろその故にこそ我々はマルクス主義の藝術論の竣工に向つてひたすらに努力すべきである。それがなほ不完全であるからといつて、我々はブルジョア美學の方へ後退したり、また何か完全なものが何處からか神來的にやつて來ると思つたりしてはならぬ。歴史は必然的な道を歩む。ブルジョア文化は次第に生産性を失つて來た。しかも新しいものは天降つて來るのでなく、プロレタリア解放運動の進展と共に一歩一歩と成就されるのである。この現實の運動の過程をおいて生産的な藝術及び藝術論の現はるべき如何なる地盤も存しないのである。眞理は仕上つた貨幣でない。それは我々がポケットに入れて持ち廻りそれですぐに支拂の出來る貨幣ではないのである。

わが國に於て上に規定された意味での啓蒙文學が問題になつたのは、かのいはゆる藝術大衆化の問題が議事日程にのぼるに到つてからのことであると見られ得る。この問題提出はプロレタリア文學論に於ける恐らく劃期的な出來事であつたであらう。それは、客觀的には、日本に於けるプロレタリアートの組織の仕事が飛躍的な發展を遂げ、その黨が大衆黨として出現し始めたところに、その根據を有する。藝術は大衆の中へ這入つてゆかねばならぬ。それが大衆の中へ這入つてゆき得るためには、藝術は大衆の意識を取り上げてこれを表現せねばならぬ。表現とは一般に自然生長的なものを目的意識的にすることでありそれが大衆的になり得るためには、大衆の意識の層に應じてかかる目的意識化にも層がなければならぬ。そこから農民の文學と本來のプロレタリアの文學との差異も考へられるであらう。大衆の意識に層があるといふのは絶對的に自然生長的な意識がないといふことである。それだから藝術運動に於けるいはゆる前衛性と大衆性とは抽象的にでなく、動的に把握さるべきであらう。藝術は大衆の中へ這入つてゆくことによつて大衆の鬪爭運動を強化、擴大する。それが大衆の意識の目的意識的な表現であるからである。しかるに大衆の強化、伸長はプロレタリア藝術の生産、向上、發展の前提となる。なぜなら、勝本清一郎氏の言葉をもつて云へば、「プロレタリア階級の中にこそ、將來に於ける新しい建設的な生活內容の萌芽があり、次代の新しい『藝術性』のための諸條件の準備がある筈だからである。その中へと擴入して行かなければ、それらを獲得することが出來ぬ。即ちプロレタリア藝術は、大衆化して行くことによつて、次第に藝術性を喪失してゆくどころか、却つて益新しい内容と、形式と、それを裏づけるべき新『藝術

性」の諸條件とを、みづからの血とも肉とも骨骼ともなして行くのである。」プロレタリア文學はプロレタリア大衆の文學として出現しなければならない。

さて啓蒙思潮の一般的な特徴は、第一に、それが唯物論的であるといふことである。一定の文化の成立期には唯物論が、そしてその圓熟期には觀念論が現はれる、と我々は概括的に云ふことが出來よう。ブルジョア啓蒙時代にも唯物論が勃興した。現代の唯物論はプロレタリア啓蒙期に相應する。しかもこれら二つの社會、、に於てその前提に著しい逕庭があるやうに、二つの唯物論の根本的な相違も明白である。前者は抽象的、機械的であり、後者は具體的、辯證法的である。第二に、啓蒙思潮は批判的であることを特徴とする。ブルジョア啓蒙時代にあつても批判といふことが流行した。そのとき批判の原理となつたのは理性であつた。理性とはいはゆる「自然的なもの」、非歴史的なものの謂であつた。レッシングの「偶然的な歴史眞理は必然的な理性眞理の證明とは決してなり得ない」といふ言葉は、ブルジョア啓蒙思想の精神に於て語られたものである。今の時代もまた批判的である。然しながらこのとき批判の原理は「自然的なもの」ではなく、却つて歴史である。それは抽象的な理性でなく、具體的な現實の歴史で
…性はまたプロレタリア文學

アリズムもまた單なるナチュラリズムであり得ない。しかもそこでは歴史が重要な意味をもつてゐることによつて、プロレタリア・リアリズムはなほ一層截然とナチュラリズムから區別される。そして唯物論はまさに辯證法的唯物論であるから、このリアリズムはいはゆる綜合リアリズムでなければならぬ。辯證法は普遍と特殊との具體的統一を說く。プロレタリア文學はプロレタリアの現實の孤立した、偶然的な場合を描くことをもつて滿足してはならない。それは凡ての挿話、凡ての偶然の中に全體としての現實との聯關、過去及び未來への歴史的過程との聯關を見なければならないのである。

かくて現代の啓蒙文學と過去の啓蒙文學との本質的な相違はおのづから明かであらう。もともと啓蒙といふ語は主知主義的な意味をもつてゐる。十七八世紀に於ける啓蒙思潮は主知主義であり、合理主義であつた。いま我々がこの語を用ゐるとき、我々は固よりそれをかくの如き傾向からどこまでも解放して用ゐなければならない。マルクスが感性をもつて實踐的、人間的・感性的活動として把握し、直觀的唯物論を實踐的唯物論に轉化したやうに、我々は現代の啓蒙運動を實踐的、鬪爭的本質に於て把握すべきである。ブルジョア啓蒙運動の基礎の上にブルジョア階級の文化は華を開いた。しかるにそれと同じ意味に於てプロレタリア啓蒙運動の基礎の上にプロレタリア階級の文化が實を
…プロレタリアートは階級的であると共に全人類的で

とマルクス主義は說く。從つてプロレタリア啓蒙運動が終局的に完成する時は階級文化が眞に人類的な文化に轉化する時である。しかしそれだからといつて、我々がプロレタリア文化をブルジョア文化に對立せしめることが出來ないのではない。プロレタリアートの、、、、、は明日來るのでもなく、明後日來るのでもないであらう。そして我々は歷史の發展の一々の段階をその獨自なる意義に於て把握し、評價せねばならぬ。またプロレタリアートの、、、、、のためにはその文化的勝利が要求されるのである。そのために生產され、普及されるプロレタリア文化は本質的な意味に於ける啓蒙文化である。我々は啓蒙を階級的なものとして規定して來た。「大衆」は「階級」とならねばならぬ、そして階級が「大衆」となるとき、大衆は眞の意味に於ける「人類」である。このやうにして現代の啓蒙運動はそれが最後の啓蒙運動であるとも云はれることが出來るであらう。

三

啓蒙文學はひとつの目的意識的な文學である。しかるにひとはそれが目的意識的であるといふ理由で、プロレタリア文學の藝術的價値を低きものとし、進んではそれに藝術性を拒まうとさへする。この場合ひとは、「哲學するあらゆる藝術は失はれてゐる」といふリツプスの語をモツトーとして掲げることが出來るであらう。然しながら單にいはゆる反省詩や敎訓詩ばかりが哲學するのでなく、却つて我々は勝れた藝術作品と呼ばれるものにして壓倒的に哲學的な藝術であつたことのあるを知つてゐる。多くの偉大なる文學は諸の出來事の中から生れて來る一般的な諸觀念を對話、獨白または合唱などのうちに於て結合し、人生についての一の聯關ある、普遍的な見解を表現した。シラーの「メツシナの花嫁」、ヘルダーリンの「エムペドクレス」はその例であらう。いまマルクス主義の文學がそのマルクス主義的世界觀をその作品に於て表現したからといつて、非難さるべきでなく、むしろそのことが要求されてゐるのである。もとより藝術家は彼の世界觀を反省詩や敎訓詩に於ける如く直接的に表白することを愼しまねばならぬ。このものは直接的な表白に於ては決して汲み盡して表現され得るものでなく、却つて多樣なる特殊の力強き結合を通じて、巧に分化された全體に於て、最も効果的に主張され得るからである。このことをまさにプロレタリア藝術に於ける綜合リアリズムの理論が敎へる。そして綜合リアリズムの綜合性は、マーツアも注意してゐるやうに、現象と思想との辯證法的、綜合的コンポジションにあるのである。私は先きに綜合リアリズムの理論をマルクス主義の辯證法的唯物論的世界觀と關係させて摘記した。ここでは一般に藝術形式と世界觀形式とが最も内面的な聯關にあることが特に高調しておかれねばならぬ(例へば、ヘルマン・ノール「型式と世界觀」(參照)。ゲーテの「ウイルヘルム・マイスター」に於ける獨自なる世界觀のみがこのロマンの比ひなき藝術型式を創造し得たであらう。デイルタイはレツシングからゲーテ、カントからヘーゲル及びシュライエルマツハーへの發展を一の全體的な

聯關に於て把握し、そして云つてゐる、「既にミラボウは我々の詩の出現を科學的反省の高き狀態とその歸結の眞中に於て見た。ドイツの詩は、と彼は云ふ、悟性が想像力に對して勝利を獲得した時代の性格をみづからに於て擔つてゐる、それだからそれは花よりもむしろ實をもたらさねばならなかつた。このやうにして我々の詩人達は單に彼等の詩的活動と並んで科學的思想家であるのではない、彼等の詩的發展はまさしく彼等の研究の進展によつて制約されてゐる。直接に彼等は巨大なる科學的運動を、研究の新しい方向を、實に新しい世界觀を作り出してゐる。」かくて例へば、ウイルヘルム・マイスターはひとつの時代を作つた。そしてまことにそれは完成された啓蒙文學であると見られ得る。我々はプロレタリア文學がやがてそれ自身のウイルヘルム・マイスターを、既にゴーリキイの「母」に於て一部分示されてゐるが如き、新しき人間の典型を生產するに到るであらうことを期待する。プロレタリア文學は廣き意味でいはゆる「調べた文學」である。

哲學と文學とは交互作用をする。嘗てシュレーゲルは、フイヒテの觀念論とゲーテの詩とはドイツの藝術及び教養の二つの中心である、と云つた。「人間の最高の力たる哲學と詩とは、アテンにあつてさへその各がその最盛時に於てなほそれぞれ孤立してはたらいただけであつたが、今や互に交渉し、永久の交互作用に於て相互に力を與へ合ひ、形造り合つてゐる。」ところで兩者は單純に交互作用をするのでなくて、特殊性を規定するもの、否、その根柢にあつてかくの如き交互作用を一般に可能ならしめるものは、現實の社會的存在である。そして啓蒙時代に於ける特殊性は、一般に哲學乃至世界觀がこの交互作用の關係にあつて優越な位置を占めるところにあると云はれ得るであらう。このやうにしてプロレタリア文學の內部に於ても無神論の文學、宗教批判の文學、個人主義や主觀主義の批判の文學などが作り出されるであらう。そのことはプロレタリアートが文化的勝利を獲得するために要求されてゐるのである。

然しながら、あらゆる他のイデオロギーとの關係に於て、啓蒙文學は特に政治と最も密接な關係に立たねばならぬ。このことが啓蒙文學の最も著しい特殊性を形成してゐる。言ふまでもなく藝術もまた何等かの意味に於て政治に作用する。しかし政治はこのとき壓倒的な仕方で藝術に對してはたらく。藝術運動はむしろ政治運動の一翼である。かくの如き關係は恰もプロレタリアートの全運動の現實の段階によつて規定されてゐる。しかるにこのことこそまさに、いはゆる趣味あり教養ある人には恐るべきこととして感ぜられ、藝術の名に於て排擊されるところのものである。よしそれが恐るべく、忌むべきことであるとしても、プロレタリアートのうちにしか新しい、未來ある藝術の生產さるべき現實の諸條件が橫はつてゐない限り、我々は他にとるべき途をもたないのである。よしそのために今は勝れた作品が出來ないに

の創造さるべき諸條件が存し得る限り、我々が輝しき將來のために現在を犠牲にし、藝術をプロレタリアートの政治的解放運動と結合させるに何の差支があらう。よしそこに生産されるものにして、かの人々が藝術として受取るに足らぬものであるとしても、それらのもののうちにこそまさに新しい藝術の萌芽はあるのである。批評家のなすべき仕事はこの前途ある萌芽を如何にして生長せしむべきかを教へるにある。しかるに人々は、恰も非難するが如き調子をもつて、それらのものは「政治的藝術」に過ぎないと云ふ。それが政治的藝術であるからといつて、それが偉大な藝術であり得ない筈はない。いかにも過去の偉大な藝術の或るものは政治的藝術ではなかつた。しかしそれらとても「純粋な」藝術ではなく、或ひは哲學的藝術であり、或ひは宗教的、或ひは科學的藝術であつた。そして如何なる藝術が作り出されるかは現實の社會の歴史的條件によつて異る。今の社會に於て、若し政治的藝術のための條件しか存しないとすれば、藝術家は他の種類の藝術を求むべきでなく、却つて「優秀なる」政治的藝術の制作に向つてこそ努力すべきである。政治が藝術を指導するといふことは、政治が藝術に對して一般に「藝術性」を放棄せよと命ずることでなく、却つてまさに政治と結合し得るが如き「新しき」藝術性を創造せよと命ずることである。(この聯關に於て論ぜらるべくしてここには省かれた若干の問題に關しては、「社會科學」九月號に於ける拙稿「文學理論のために——主として藝術的價値と政治的價値について」の中で取扱はれてゐる。)

いつたい變らぬ藝術性といふものがあるか否かが問題である。藝術とは感情を中心とした組織であると見做されてゐる。このことは單に從來の美學者達によつて承認されてゐるばかりでなく、マルクス主義的理論家藏原惟人氏の如きも、「藝術とは社會人のイデオロギーおよび心理(作品の思想的感情的内容)を人間の感情を通じて傳達する手段である」と云はれてゐる。それに固より間違はないであらう。しかしかくの如き定義をもつて我々は一歩も前進し得ない。我々は感情とは何かと問はねばならず、かくの如く問ふことによつて我々は感情の「歴史性」そのものに思ひ當るのである。感情はそれぞれの時代に於て歴史的に構造づけられてゐる。若しさうであるとするならば、我我が例へばギリシアの藝術を觀賞し享受することは不可能になるではないか、とひとは反問するかも知れない。否、恰も正反對である。分り易くするために他の領域から例をとらう。プラトンの哲學的對話篇をとり、しかもそのテキストが夙くから完成してゐたと假定し、從つて古くから完全なテキストが與へられてゐたとせよ。いまプラトン哲學の、しかもその客觀的な内容が問題となる場合、我々は古人がかかるものとして理解したところのものを決定的なものとしてそれに滿足することなく、我々みづからそれを問題としてそれの理解に努力するであらう。このことが可能であり、有意味であるのは、哲學的意識が歴史性を擔つてゐるためである。即ち我々は我々の歴史的に發展した哲學的意識によつて先人とは異る哲學的意味をプラトンに賦與し、そのテキストのうちに創造する。哲學的意識が歴史性を有するため、我々もまた我々自身の立場からプラトンを問題にし得るのであり、

してそれを問題とすることなくしてそれを理解することは不可能である。我々の側からの意味賦與の限界が我々の側からの理解の限界である。(私は前掲拙稿の中で「意味の歷史的　化の原則」を定め、それに意味賦與と意味游離との二つの方面のあることを示しておいた)。同じやうに、我々が過去の藝術作品を享受し觀賞し得るのは、我々の感情または藝術的意識が歷史性を具へてゐるがためである。そのためにこそ過去の作品は我々にとつて問題になり得る——理論的な意味に於てでなく、もとより感情にとつての意味に於て問題になり得るのであり、そしてそれを問題にすることによつてのみ我々がそれを觀賞し享受することは可能である。享受といひ、觀賞といふも決して單なる受動的態度ではないのである。感情の歷史性が觀賞の現實性の條件である。既に或る美學者は、眼が見るのでなく人間が見るのであり、耳が聞くのでなく人間が聞くのである、と云つた。感情が感ずるのでなく、人間が感ずるのである。しかるに人間とは現實にはブルジョアであり、プロレタリアである。それ故に趣味あり、教養ある批評家達がプロレタリア藝術に接したとき、彼等は彼等の優秀なる觀賞力に信賴してそれを批評し去ることなく、却つて、それが如何に優秀なるものであるにせよ、自己の觀賞力の歷史性を先づ彼等は批判すべきである。ところで若し感情が感ずるのでなく、人間が感ずるのであるとすれば、藝術に於てはたらくものは單なる感情でなく、人間の感覺、知力、意志等もまたそのもとで協働することは明かである。若しさうであれば、我々は藝術を感情の名に於て定義するよりも、むしろそれを、デイルタイと共に、ひとつの最も重要なる「生の理解の器官」として理解すべきであらう。かく見ることによつて藝術學は心理學であることを辭し、一層包括的な任務に就くこととなる。我々の生活、我々の思惟が最も困難なる問題に直面してゐる今日、「生の理解の器官」としての藝術の意義を明確な意識に持ち來すことは極めて大切である。過去の偉大なる藝術は實際かくの如きものであつた。文學にして現實の生活を、それの問題に從つて、造形しつつ解釋するものであり、解釋しつつ造形するものであるならば、文學論はこれらの問題についての科學であるべきであり、文學史は問題史以外の何物でもあるべきでない(ルードルフ・ウンゲル、「問題史としての文學史」參照)。個人心理的な自敍傳物、いはゆる心境小說、その他對象を分離的に捕へる文學の流行によつて忘れられてゐたところの、現實の生活の最も重要なる問題を造形しつつ解釋するといふ仕事を、プロレタリア文學は今や自覺して現はれたのである。プロレタリアートの世界史的な運動がこのことを要求し、また可能にした。それのみでない、マルクス主義の哲學が世界及び人生を單に解釋するにとどまらず、それみづから戰鬪的であるが如く、マルクス主義の文學もまた單に「生の理解の器官」でなく、同時に「生の變革の機關」でなければならぬ。プロレタリア文學は鬪爭的な文學である。蓋しプロレタリアートにとつて現實の生活の最も重大な問題は政治的鬪爭である。この問題は單なる感情によつて解けるものでなく、そのためには政治的イデオロギーが必要である。政治的イデオロギーを離れて、プロレタリア文學は生の理解の器官であることは出來ず、況んや生の變革の機關ではあり得ないのである。

——(一九二九・九)——

嫌惡すべき學界の一傾向

河合榮治郎

（一）

個人の集團のある所に、異る思想と異る性格との併立することは當然である。否當に當然であるのみならず、それは望ましいことである。若し一律の個人のみが集合するならば、社會存在の意義はないだらう。異る個性を各自が提げて互に奉仕することによつてのみ、各人の進歩はありうるからである。從つて近時の社會に異るイデオロギーが活潑に對立しつゝあることは、個性の分化の標象として、又個性の成長に貢獻するものとして、私の祝福を躊躇せざる所である。

　此のことは大學の如き最高智識の集團に於て特にさうである。個性の充全に成長した學徒の集まる所に、各種の思想と性格とがなければならない筈であり、之等の一切を包擁する所に、大學の誇りがあるべきである。一般社會に容れらざる思想も性格も、此には充分の寛容さを以て容れらるべきである。大學（ユニバーシティー）はその名の示すが如くに、一切の森羅萬象を包擁する大宇宙とならねばならない。此に單一の思想や性格のみを制限して、統一を誇るものがあるとすれば、それは死せる統一を喜ぶ淺薄者の態度である。大學は百花の咲き亂れることを喜ぶべきである。此に私共が自由主義を力說する論據がある。

（註）昨年六月號「改造」拙稿「大學々園に於ける自由主義の使命」參照

（二）

然し思想と性格と云ふことから去つて、社會の共同の事務の決定に移る時に、事情は少しく異る場面に入らざるをえない。何故なれば異る思想の持主が相集つて、一問題に關して何等かの決定を求めんとする時に、全員の一致は望みうべからざることだからである。各員がすべて自由を要求して制限を甘んじないならば、遂に滿場の一致を俟つの外はない。假すに時日の經過を以てするならば、滿場の一致も望みうるかも知れない。然し至急に決定を必要とする直前の事態は、かゝる時日の遷延を許さない。此に於てか各自の自由の牴觸をいかにすべきかの問題に逢着するのである。

　此の問題を處理する唯一の路は、多數の決定に服從することの外にありえない。「その限りに於て各自の自由は限定されねばならないので

ある。若し多數決の原理を拒否するならば、合議體は何事をも決定することなしに、漫然として時日を經過せしむるの外はない。之れ共同社會の破滅である。又少數者が多數決を否認するとしても、それは普遍的の原理たりえない。何故なれば特定の一問題に就て、少數者は多數決を拒否しつゝ、自己が多數たりうる他の問題に就ては、多數決の原理に依りつゝあるからである。又少數者が多數決の不當を鳴らす場合にも、外部の何らかの社會の多數に訴ふることを前提としつゝあるからである。多數決を否定するものは、多くの場合に自己矛盾を犯すものである。若し多數決の原理を飽く迄も拒否せんとするならば、共同社會を脫退するの外はない。此の原理を承認することは、集團生活の第一條件であるからである。

大學は一方に於て異る思想と性格とに自由を與ふべきである。異る思想と性格との持主の集團であるだけ、それだけ他方に於て大學には皮肉にも多數決使用の必要が多からざるをえないのである。

(二)

多數者は必ずしも正義を代表するものではない。多數の決定が必ず眞理に該當するとは、何人も保證しえない。自己が正しと信ずる意見が、多數決によつて葬り去られることは、決して愉快なことではない。殊に自己の利害の故に非ずして、社會の爲めに正義と信じてゐる場合に於て、それが多數によつて一蹴されることは、尚一層不快であらう。然し自己を正しと信ずるのは、少數者のみではない多數者に就ても亦同樣である。互に正しと信ずる此爭を解決する路が多數決である。若し多數を不正なりといふならば、少數を不正たらずと云ふ論據は尚更に薄弱である。客觀的に何が正しいかは、悠久の法廷の判決に俟つべきである。少くともその場合に關する限り、多數の裁決を以て事の正否を決定するの外はない。

然しかくの如きは、徒に少數者をして永久に浮む瀨なき弱者の宿命に終らしむるものでなからうか。之が次に吾々の考慮すべき第二の問題である。多數決の原理を是認しつゝ、少數者の運命を開拓するの路は果してないか否か。私は此に二つの路があると思ふ。その一つは、會議の席上に於て少數者をして論旨の委曲を盡さしむることである。自己の正しとする意見を充分に述べて、人を說破し改宗せしむる自由を認めることである。かくしてたとへ結局に於て敗るゝとも、存分の努力を果した滿足があり、更にその時に於て改宗の功を奏せずとも、遂に反省の刺戟を投じたことになり、他日の功果を期待しうる。此に少數者の權利があり、多數者は寬容にその言に傾聽するの義務がある。議事の進行を妨害せんとする少數者の卑怯なる狡計に陷らざる限りに於て、之が多數者の少數者に負ふ德義である。

第二の更に大なる少數者の權利は、その會議に於て敗れたることに毫も屈するなく、一般社會の批判の標準を高める爲めに、輿論の教育をなしうるの自由である。一般社會は多數に阿る迎合性があると共に、又少數者に同情して之に聽かんとする傾向がある。之に熱心に呼びか

けることにより、彼等を說破し改宗することにより、今日の少數者が化して明日の多數者となることを期待しうるのである。人は或はかくの如きは、百年河清を待つの悠長と嘆ずるかも知れない。然し幾多言論の壓迫ありたるに拘はらず、新思想が多數を支配するに至つた過去の歷史は、その決して空想でないことを證明するものである。正義は結局勝つと云ふ信賴を持つに非ざれば、凡そ一切の改革運動を斷念する悲觀說に陷るの外はない。此の權利は少數者の貴重なる權利である。而て多數者は此の權利を少數者に認めるの義務がある。私共が言論の自由主義を唱へて、言論に關する限りに於て自由を認めよといふのは少數者をして以上の如き輿論の敎育をなさしめんが爲でもある。自由主義は此の他の點に付ても合理性を持つ、然し少數者の運命に一路を開かしむるといふ點に付ても、その必要を感ずるのである。

（四）

かくして吾々社會の成員は、二面の權利と義務とを持つ。一は不平と異端を漏らすことなしに、男らしく多數の決定に服するの義務である。二は會議の席上に於て、又更に一般社會に對して、說破し改宗せしむるの自由を享有する權利である。ジェームス・ブライスは「アメリカ共和國」に於て、多數決原理の非なるは、多數に依る決定自體に非ずして、少數者の萎微沈滯に陷るに在ると云つた。一方に於て吾々は當面の必要よりして多數決の原理を採て少數者の服從を要求すると共に、他方に於て少數者は多數の決定に屈することなく、その信ずる所を保持することを要求する。此のことは矛盾なるが如くにして實は矛盾ではない。兩者が相伴ふことによつて始めて健全なる社會の進步がありうるのである。多數の決定は必ずしも神聖ではない。それに服從することは、その決定が正義なりと思ふが故ではない。それに服するに非ざれば、共同の生活が不可能に終るからである。多數決に神妙に服從することは、毫も少數者をしてその所信を拋棄せしむるの必要がないのである。少數者は他日の多數となるが爲に、活潑に輿論の喚發を圖るべきである。世に憂ふべきは多數の決定に敗れたるものが、自己の信念を弱めて萎縮して、無爲無能に終ることである。之れ少數者の權利を行使せざるものである。此の權利を少數者は忘れてはならない。之を行使することが少數者が社會に負ふ任務である。

我國の現狀に於て注意すべきことは、各種の團體に於て異るイデオロギーが深刻に對立し抗爭しつゝあることである。而もその抗爭が一方に於て多數決の原理に服せずして、無政府的の混亂を呈すると共に他方に於て銳意輿論の開拓に從つて、時代の水準を引上げて他日の多數とならんとする努力と耐忍とに乏しいことである。かくして集團に到る所に無統制を曝露し、輿論は少しも向上の跡を示してゐない。

大學に於て最近の注目すべき傾向は、かゝる一般社會の俗風が、急速に浸入しつゝあることである。夫々の機關の多數の決定に快活に服從するのでもなく、さらばとて會議の席上に於て敗るゝ迄も雄々しく戰ふのでもなく、起つて活潑なる輿論の喚發に從つて、希望を次の[illegible]

代に繼がんとするのでもない。唯自己の意見の認められざる愚痴と泣言とを到る所に撒布することである。その現はれの一は周圍に對して同僚の惡宣傳に耽ることである。竊に資料を與へて新聞雜誌に、同僚の人物評論をなさしむることである。名を論爭に假りて同僚の揚足をとり嫌がらせをいふことである。形を著述の紹介に托うて、同志を賞め合ひ反對者の罵言嘲弄を樂しむことである。一言に云へば、第三インターナショナルの戰術が、臆面もなく神聖なる學園に跳梁しつゝあることである。かゝる猥雜なる年中行事によつて、學園の輿論はいかほど向上せられたりや。學生の說得と改宗とに果して何の收穫ありたるか。殊に近時醜怪の堪ふべからざるものは、教授會の一員が會議の內容を新聞雜誌に漏洩することである。今までも新聞に逸早く教授會の議事が掲げられたことはないではないが、最近某雜誌の教授會の記事に至つては、その惡風の頂點に達したるの感がある。相互に秘密を守る申合せの下に議論された教授會の議事を、外間の雜誌に漏洩することは、許すべからざる背德である。更にその記事は虛僞の事實を含み、重要なる事實を省略し、更に筆者の推量と事實とを巧に交錯して讀者を錯覺に導かんとしてゐる。殊に許すべからざるは、明に一派の人を利し、一派の人を不信に陷れんとする筆者の意圖である。教授會の秘密を守らんとする同僚は、自己に對する虛僞を辯明する路を塞がと云ふべきである

かゝる人々の行爲は、學內に於ける新思想の爲に、いかほどの貢獻を奏したであらうか。若し學內に於ける思想の自由なきを嘆ずるならば、何が故に起つて學園の自由を高調せないのか。學問の自由に對する學園の態度は、未だ決して進歩的に改宗したとは云へない、此に無限の爲すべき領域がある。若し又マルクス主義の普及を意圖するならば、何が故にマルクス主義に關する輝かしき著作を次々に發表しないのか。マルクス主義の聲徒に高くして、業績の之に副ふべきもの、尠きは何故か。著作の刊行はいかに多くとも、學園はその多きに苦しまないのである。少數者の任務は、理論的に舊思想を克服するにある。かくして未來の勝利を期するにある。此の任務に忠實ならざるは少數者の義務に違反し權利を行使せざるものである。かくして人は彼等の共同社會に對する無節制を咎めうると共に、更に彼等が少數者としての懶惰と逸樂とを責むるの權利がある。

(五)

若し同僚に對する惡宣傳と、揚足取りの論爭と、不當なる人物評論と、教授會の曝露とが、之等のものこそが、即ち輿論の啓發なのだと云ふならば、此に至つて論者の眞實の意圖が初めて吾々に捕捉しえたこととなる。論者は反對者を社會の面前に拉し來て、之を誹毀するこ

ぶ小人の弱性に乘じて作られた輿論である。況んや自己に利する爲に虛實混合した宣傳に迷はさるゝが如き輿論は、いつにても變りうる淺薄な輿論である。かゝる輿論を作りたればとて、いかほどの强固な後援になりうるであらうか。若し社會改良のことがいかに難事であるかを悟つてゐるならば、靜に考へてかゝる輿論の何ら頼むに足らざることを見出すであらう。眞實に輿論を啓發しやうと思ふならば、輿論の批判の水準を引上げて、氣品ある鑑識を育成するを圖るべきである。かうした輿論を背景とした場合だけ、少數者は未來を待望するの强みを持つ。他人の欠點を開いて喜ぶ民衆の嫉妬心と、他人の不評を開いて現を拔かす民衆の殘忍性とに乘ずるは、輿論を墮落せしむることによつて、自己の勢力を張らんとするもので、進歩に生命を見出す新思想家の企つべきことではない。

若し現實を曝露することが論者の意圖だと云ふならば、現實曝露によつて現實に對する憤激と、、とを齎らした後に、何を新に求めんとするのであるか。眞に責任を知る眞劍の改革者ならば、單なる現實の曝露を以て滿足しないであらう。之と必然に伴うて、現實に代はるべきものに、輿論の注意を向けしめるであらう。單なる曝露政策は、無責任なものにのみ許さるゝ戰術である。

若し論者の意圖が、反對者を中傷することによつて、相手を脅迫して反對の鋒先を緩和させやうと云ふのであるならば、それは徒に論者の人間性に關する無智と、自身のさもしい心術とを曝露するに外ならない。社會の評價を低めることにより、皮肉の毒瓦斯を放ち、罵倒の爆彈を投ずることによつて、相手を畏怖せしめ脅威を感ぜしめて、變說改論をなさしめうると思ふのは、宛として反動團體の心理である。威壓と强制とによつて、人を動かしうると思ふファッシストの戰術である。それは徒に相手の憤激を强めて反對の氣勢を煽るに過ぎないだらう。之を解せざるは人間性の無知を告白するものである。更に又それは論者自らが威武に屈し富貴に淫するさもしい心術の持主なることを示すものである。自己を以て人を推すものでなくて、かゝる暴擧を敢て企てないであらう。

若し論者の意圖がかくの如き邊になくて、唯私憤を漏らす自暴自棄の擧に過ぎないと云ふならば、又何ものを云ふの必要がない。數百萬のプロレタリアが生活の困難に呻きつゝある時に於て、悠々として私憤の歡樂に耽りうる有閑階級の閑風月を唯羨望して止むのみである。

之を要するに學徒たるの特質は、言論に依り理性に訴へることにより、人を說破し改宗しうると信ずるにある。之のみが眞實の改宗であると信ずるにある。故に論者の態度は學徒の名に値せず、それは手品師の態度である。

(六)

私は心情に於て少數者に同情するものである。殊にマルクス主義者に對しては、醉生夢死の生活を送りつゝある周圍に比して、優ること數等であることを認めるものである。その立場の差違は別として彼等

が現存秩序の改革を志とする努力に於て、敬意を拂ふに躊躇しないものである。彼等とイデオロギーを異にしつつも、私と似たやうな同情を持つものは世に決して尠くはないと思ふ。それだけ私共にとつて彼等の行爲は大きな關心事でもあるのである。私は曾て「經濟往來」誌上に「一學徒の手記」と題する感想を寄せて、當時醜き論戰の最中に、論議に對する私の批判と、私の採りたき態度とに就て述べたことがあつた。今日に於ても再びそれと似たことを云はざるをえない。少數者は、なすべき積極的の任務を果してゐないと共に、なすべからざる所業によつて、却て自己の運命を不利に導きつゝある。マルクス主義者が社會運動に對して持つ役割は色々あらう。その中で靜に學窓に引籠つて、マルクス主義に關する貴重なる文獻を創作することは、東奔西走する勞働運動の指導者に決して劣らない重要の役割であると思ふ。結局に於て社會を支配するものは、優秀なる思想である。少くとも過去の日本の思想の持たないものを持つと云ふことが、此までマルクス主義を盛ならしめた所以である。若し學界に於て輝かしい業績を擧げて往けなければ、やがてマルクス主義は大衆の支持を失ふの外はあるまい。今日に於て既にその端緒が見えないではない。學徒であるマルクス主義者は、あらゆる餘業を拋つて、時の足らざるを惜んで、一筋にその路に邁進すべきである。之がマルクス學徒の社會改革に負ふ課題である。此の任務に忠ならずして餘技に汲々たることは、私の彼等に不滿を感ずる第一の點である。

更に彼等はその餘技に囚はれるのみでなく、その餘技が前に述べたやうな爲すべからざる所業であることに、私の第二の不滿がある。彼等の同僚に對する惡宣傳や、揚足取りの論戰や、醜い背德の曝露やは彼等の立場に同情を持つものをも、眉を顰めしめるのである。公正ではないと云ふ憤激を刺戟するのである。而して此の公正の感じが、彼等の社會改革運動に共鳴せしむる感じであるならば、此の人々より不公正だとの憤激を買ふことは、決して輕々しい事ではない。公正不公正と云ふが如きはブルジョアーの觀念だといふかも知れない。然し現實に之等の人々の勢力は無視出來ないならば、その憤激を買はざるも失ふ所なく、之を買ふは失ふ所多大であらう。かうした憤激が積り積つて、やがて彼等の前に思ひもかけぬ障害となるのである。少くとも正面よりマルクス主義を壓迫しえない保守派の人々に、壓迫をなしうる口實を與へるのである。必要あらば障害を厭はずに、人は戰を挑まねばならない。然し爲すも得るなく、爲さざるも害なき所業に耽つて、要らざる障害を釀成するは、賢明な改革者の態度ではない。社會改革を企つる少數者は、己を抑へ忍耐と自重とを旨として、最少抵抗線に沿うて進む必要がある。かゝる用意の缺けたるは、マルクス主義に對する忠實に悖るものである。之が私の彼等に對する不滿の第二である。

（七）

すべてのことが言はれた後に於て、人は反問するかも知れない。マルクス主義者のかゝる所業も、畢竟は學內に自由がないからである。

自由なしとの不満の溢れた結果がかうした所業に現はれるのだと。然し私は之に答へたい。たとへ自由がないとしても、かゝる所業は毫も自由を獲得する所以にはならない。寧ろ愈々それを失ふ課程たるに過ぎない。のみならず今日の學園に決して自由はなくはない。少くとも吾々の大學に關する限り、研究の自由と發表の自由とは、充分に確保されてゐる。今日失はれてゐるのは、學徒としての自由ではない、學徒にあるまじき行動の自由である。學徒の自由をば學園は擁護する必要こそあれ、學徒にあるまじき運動を擁護すべき理由はない。眞面目な學徒としての研究や發表が、少しも拘束を受けてはゐないのである。

又人は云ふかも知れない。たとへ今は大學の自由があるにしても、やがてそれは失はるべき運命で、之に對する一群の自由主義者の存在は龍車に向ふ蟷螂に過ぎないと。之に對して私は答へたい。或はさうかも知れない、將來の起りうべき結果に對して、私共は確言をする勇氣は持たない。私共の言ひうることと爲しうることは、唯現在の一事である。現在に即して充全の努力をするだけである。マルクス主義者は近時頻に大學の沒落頽落を云ふ。然し私は聞きたい。それは單に大學が沒落したと云ふ事實を云ふのか、又はだから大學をかくせよと云ふ政策を云ふのかと。若し單に事實をのみ云はんとするならば、事の當否は暫らく別として、かゝる言をマルクス主義者から今更ら聞くの必要はない。イデオロギーは社會關係によつて制約される。ブルジョアーのイデオロギーはブルジョアーの階級關係によつて制約される。故にブルジョアーの大學のイデオロギーはブルジョアー階級の利害を代表すと云ふのは、マルクス主義の公式から來る當然自明のことで、その人がマルクスの公式を信ずる限り、今更らしく事新に云ふの必要がない。之を最近に發見したとするならば、時の余りに遲かりしを嘆ずるのみである。マルクス主義者にとつてそれは言ふを要しない自明のことであり、マルクスの公式を是認しない私共は、その公式から來る結論を認めないだけのことである。若し論者が大學は沒落せるが故にかくなせよと云ふ政策を語つてゐるならば、その結論は私共にとつても興味がある。此の場合に、故に大學を拋棄せよと云ふならば問題はそれで片付いて了ふが、故に大學を再建せよと云ふならば、どうして再建するかと云ふことが問題である。それは自由主義の傾向を促進するの外に路はないであらう。その場合に自由主義者をして援助を躊躇せしめる失態を釀さないことが、マルクス主義者の義務である。若し今日まで自由主義をして、マルクス主義を擁護せしめないことがあつたとしたならば、その責任は私が前に述べたやうなマルクス主義者の所業である。そのことが自由主義者をして、力一杯に活動することを妨げたのである。自由主義者の蹉跌の石となつたのは、マルクス主義者の嫌惡すべき傾向である。

最後に、私共は思想に對しては自由主義を以て終始する積りである。それが眞劍な學徒たる限りに於て、それが思想言論に關する限りに於て、人は自由主義の擁護を受ける權利がある。自由主義は依然として立つべき所に立つてゐる。若し主義の操守に缺くる所があつたなら、私共は思想界の法廷に立つて、深くその判決を受けやうと思ふ。(四、九、四)

「ドイッチェ・イデオロギイ」とマルクス社會學

加田哲二

一

筆者は屢々カアル・マルクスを社會學建設者の一人として數へてゐる。乍併、このことに關しては多少の異論があることと思ふ。例へば、多くの社會學史家はその社會學史の中にマルクスの名を擧げることは事實であるが、その社會學者としての重要性については、多くを認めてゐないのを常としてゐる。殊に、社會學概論と名づけるやうな書物においては、マルクスの理論の價値批判は勿論、マルクスの名をすら擧げてゐないものが甚だ多い。これは勿論マルクス主義者の著述においてではない。マルクス主義者はまたマルクスの名以外の殆んどすべてのものに對して顧慮するところがない。これは兩者[illegible]るものでな[illegible]

した。故に筆者はマルクスを社會學建設者の一人に數へてゐるものである。然らば、何故にマルクスは社會學の建設者として認められないのであるか。その理由は二つある。第一は、マルクスの後期における經濟學の優越である。周知のやうに、マルクス學説の主要體系として考へられて來たものは、經濟學であつた。マルクス主義者もその批評家も共に、マルクスを經濟學者として見て來た。マルクスの社會學體系が闡明されたのは、――從來も唯物史觀として知られてゐたのであるが――殊にロシヤ共產主義者のマルクス主義の社會學に對する強調である。それ以前は、マルクス主義もその批評家もその重點を經濟學説に置いたのである。第二の[illegible]

ての社會科學の階級性を強調する。殊にその立場のプロレタリヤ階級にあることは、他の階級的立脚地にあるものをして、意識的にまたは無意識的に、マルクス看過もしくは無視せしめるのである。

乍併、マルクス社會學説を正當に認識するものは、彼に對して、社會學建設者の一人である地位を與へなければならぬ。普通社會學の建設者としては、オオギュスト・コントが擧げられてゐる。それは、コントが一八三九年刊行の「實證哲學講義」の一節で社會學（ソシオロヂイ）といふ言葉を作つたことによつてゐる。マルクスは勿論社會學なる名稱を作らなかつたが、社會を全體として、發展的に觀察したことにおいて、一の社會學を建設してゐるのである。彼の社會學は後に詳述するやうに、一八四〇年代において建設せられた。故に、時期においては、コントの社會學建設と同時と見て差支ない。

オッペンハイマアは、以上のやうな意味で、佛蘭西の社會學に對する獨逸社會學の建設者として二つの名を擧げてゐる。それはマルクスとシュタインである。彼等はその立場を異にしてゐるのであるが、ともに社會學、殊に獨逸社會學の建設者である。シュタインもマルクスもヘーゲルの影響の下に立つてゐる。然るにシュタインは終生ヘエゲルの觀念論的立場を堅守して、この立場から西歐の現實的、實證的社會觀を採り入れ、兩者の綜合を試みたのであつた。マルクスは、人も知るやうに、最初ヘエゲルの觀念論的立場に立つたが、漸次これから蟬脫して、唯物論的立場に至つた。マルクスは、辯證法的方法の下に、英佛における現實的、實證的社會觀の再綜合を試みることによつて、彼自らの社會學を建設したといつていゝのである。

二

獨逸社會學建設の素材となつた西歐、殊に佛蘭西の現實的、實證的社會觀とは何であつたか。マルクス、シュタインともに、その最初の研究の對象としたものは、佛蘭西における社會主義及び共産主義であつた。シュタインは既に一八三八年法制史研究のために巴里に留學し、主として同地における社會主義及び共産主義の運動及び理論を研究し、單にその運動が一の偶發的性質を有するものではなくして、一七八九年の、、、、、以來のプロレタリヤ階級の社會的重要性の、、、、、として、興隆して來た一の運動であることを認識し、この認識に基づいて、近代市民的社會の社會學を建設したことは、彼の著名なる著述「現時の佛蘭西における社會主義と共産主義」（一八四二年）を讀む者の何人も認めるところである。マルクスについていへば、彼が一八四二年から四三年の間ライン新聞の記者として、活動してゐた時代に、「所謂物質的利益」に關する論爭に參加したときから、更らに、「佛蘭西の社會主義及び共産主義の弱い哲學色を帶びた反響が『ライン新聞』に聞えるやうになつてきた」とき、彼はこれに反對したと同時に、ある論爭に參加して、この思潮に批判を加へるとき、彼自身の從來の研究がそのためには不充分であることを認識し、ライン新聞か

らの退社とともに巴里に赴いて、この研究に從事したのであつた。

　この二人の獨逸社會學の建設者の最初の研究の對象となつた佛蘭西社會主義及び共產主義とは何であつたか。殊にその理論的意義は何處にあつたか。これらの社會主義及び共產主義者は、何れも資本家的社會を、、として、これに代はるべき、、と、の原理の支配すべき社會を想像、案出し、これを、、しやうと努めたのである。彼等の中には、プロレタリヤの階級的立場を强調したものもあつたが、彼等の基本的思想は、、、と、の原則であり、從つて、彼等は全人類の立場にあつて、一の理想的社會、、の要求をしたものであつた。これらの社會主義者中、シュタイン及びマルクスに最も大なる影響を及ぼしたものはサン・シモンであつた。サン・シモンは、殊に、コントの青年時代の師として、彼に大なる影響と暗示とを與へてゐる點で、獨逸並に佛蘭西における社會學建設者の生みの親といつても過言ではないのである。だから「歷史哲學としての社會學」の著者バルトはその社會學史の最初にサン・シモンを論じてゐる。サン・シモンは從來の政治學が政治現象にのみその研究を向けたのに不滿であつた。彼によれば、政治は社會組織の基礎ではない。サン・シモンは經驗によつて、これを知つたのである。彼はその新政治學を樹立するために、佛蘭西の歷史的現實を凝視した。佛蘭西においては、一七八九年の革命から一八一五年のナポレオン沒落にいたるまでの間に制定せられた憲法は十の多きに達してゐる。然るにこの十の憲法は佛蘭西社會に對して、何等本質的な變化を與へてゐない。故に政治の形態と機能とを決定する法律は人間の社會生活に對して、非常な重大性を有するものではない。それは、財產並にその行使のやうに、人民の幸福に對して、重要なものではない。政治や法律は、生產並にこれに伴ふ財產を基礎として、その上に建設せらるゝものである。故に富がすべての政治の眞の而して、唯一の基礎である。サン・シモンはこのことを認識し、その上に彼の新政治學を建設しやうとしたのであつた。物理學及び他の實證科學の方法に從ふ政治學がこれである。故に、サン・シモンは生產並にこれに伴ふ財產の形態による社會觀を建設したのである。この場合、彼の史的素材となつたものは、佛蘭西史、殊にフランク民族のガリヤ征服以後の史實であつた。この史實において、彼の發見したことは、生產の變遷とこれに伴ふ有產並に無產階級の分化、並びにその對立であつた。こゝで彼は佛蘭西社會の歷史が一の階級鬪爭の歷史であることを發見したのである。かゝる階級鬪爭的史觀を發展せしめたサン・シモンは、これと並んで知識の發達と、これに伴ふ社會の發達階段を想定してゐる。それは、(一)神學的階段、(二)形而上學的階段、(三)實證主義的階段である。この知識の發達と社會發達の階段に關する理論は後にオオギュスト・コントによつて、大成せられて、彼の社會學的貢獻の最も重要なるものの一とせられてゐるのである。

　要するに、サン・シモンは歷史學を科學として確立したものの一人とせられてゐるのである。彼の思想を瞥見した吾々は、そのマルク

ス、またはシュタインとの思想的關係を直ちに首肯し得るものと思ふ。だから、後年エンゲルスが、その「空想から科學への社會主義の發展」の中でサン・シモンについて、次のやうにいつてゐることを見ても這般の關係は肯定し得るのである。「しかし、彼が佛蘭西革命を、、、、と認め、然もそれが單に貴族とブルジョアジイの鬪だけでなく、貴族とブルジョアジイと無産者の間における、、、、だと認めたことは、一八〇二年の當時として、最も天才的な發見であつた。一八一六年には、彼は政治を生産の科學と解釋し、政治が全く經濟の中に吸收さるべきことを豫言してゐる。經濟事情が政治組織の基礎だといふ思想は、こゝではまだほんの萌芽として現はれてゐるとしても、人に對する政治的支配が、物に對する管理、及び生産過程の經營に變ずるといふ思想、從つて又近來に至つて議論のやかましい「、、の廢止」といふ思想が既にこゝで明かに表白されてゐる。」

三

マルクスに對して、かくの如き重要性を有するサン・シモンも近世社會學史上から見れば、社會學發展の上における一の必然的な環に過ぎない。マルクス社會學の歷史的意義を解明する上においては、サン・シモン以前の社會學の發展を、換言すれば、近世社會學成立史上における基本的理論の發展の大様を述べて、マルクスへの發展の必然性を認識する必要がある。

筆者は社會思想史上における社會學的方法を社會現象の因果的、經驗的觀察方法であると解する。それは、神とか抽象的原理とかを介在して、社會現象を、その作用またはその意志の活動と解するのではなく、社會現象をたゞ人間行爲の所産として見、これを因果的經驗的に觀察することをいふのである。かくの如き社會學的方法は第十六世紀の社會變革の時代から、近世的市民社會の確立にいたるまでの時代に發達した一の特殊の社會觀であつて、近代的精神の特徴である唯物論的傾向を多分に持つてゐるものである。筆者はこれを環境學説といふ名目で一括する。人間的社會の發達または變化における自然的要素または社會自體における物質的要素の強調を意味するのである。この環境の意味に從つて、筆者は環境學説を二つに分つ。第一は自然的環境學説であり、第二は社會的環境學説である。第一の自然的環境學説は、人間社會の性質またはその變化を規定するものは、人間社會がその上に建設せらるゝ自然である。故に、人間社會の性質は、土地の性質、地位、氣候の如何によつて制約せらるゝ。この自然的環境學説は、人間社會の本質を現實的に考究しやうとした結果生れた學説であつて、古代からその片影を見得るのである。ギリシヤ古典時代においても、ヒツポタマスの如きに現はれてをり、中世末期においては、イブン・カルダンのやうなアラビヤ學者にこの學説の存在したことは、夙にルドウィヒ・グムプロウィナなどの論證したところである。乍併、近世における環境説の最初の主張者とせらるゝのは、ジヤン・ボオダ

ンである。これに續いて、伊太利のヴィコ及び佛蘭西のモンテスキュウを擧げることが出來る。故に、伊太利の學者はヴィコをもつて、社會學の建設者とし、あるものは、――特にギッディングス――モンテスキュウを社會學の建設者とする。吾々の耳に最もポピュラアな響を與へるものは、モンテスキュウであるが、彼はその「法の精神」において、ボオダン以來のラテン諸國における自然環境說を集成して、その見地から社會現象に對する因果的現實的觀察を行つてゐる。彼の最も重きを置いた自然的要素は氣候であるが、彼によれば、氣候の相異が人間の性情を制約し、從つてその構成する社會の本質を決定するといふ見地に立つてゐた。彼の社會學的見地は、人間社會の歷史的階段の相異に關する考察において缺くるところがあるが、後代の環境學說に對しては、最も重要なる影響を及ぼしたといつていゝ。彼の見地は、英國における第十八世紀末の「市民的社會の歷史」の著者アダム・ファグスンに影響するところがあつた。第十九世紀の中葉に至つて、自然環境說が「英國文明史」の著者トマス・バックルによつて、發展せられたことは周知の事實である。

第二の社會的環境論と名づけるものは、一口にいへば、社會における經濟的要素を重要視し、從つて、この經濟的要素を中心としての社會的集團の鬪爭にその社會觀の重點を置くものである。前者を經濟重要視說といへば、後者は階級鬪爭說と呼ばるべきものである。經濟重要視說は、近世經濟生活の發展とともに、發達し來つた學說であつて、所謂道德哲學の中に生れたものである。それは、自然法學說の第十八世紀における崩壞とともに始まつた現實的社會觀の主張者の一群において見出すことが出來る。吾々は、階級鬪爭說と經濟重視說の結合者として、ジョン・ミラアとアダム・ファグスンを擧げることが出來る。第十九世紀前半の英國社會主義者殊にリカルドオ派社會主義者と呼ばれる人々例へば、チャルズ・ホオル、トマス・ホヂスキンなどがすべての社會生活の基礎が經濟であると主張し、更らにその主張がチャアチズム運動に影響して、政治運動否定のサンヂカリスト的運動を生むに至つたことは、チャアチズム歷史家の既に記するところである。またこの學說は佛蘭西において、大なる發展を見た。前揭モンテスキュウの名はこゝにも列ねらるべきである。彼は、「法の精神」の商業、貨幣、人口、法律と社會的變化との關係を論じた諸篇、及び國民の所得と課稅とを論じた篇において、歷史における經濟的要素を重要視したのである。更らに、「法の精神」(一七四八年)の刊行後十年にして現はれた「法律、技術及び科學の起源とその古代民族における進步について」と題する匿名の著作――この書の著者はゴオゲエである――は、モンテスキュウに數步を拔きん出たものであつて、法律並に科學等の起源及び發達を經濟的に說明したのである。ゴオゲエの主張はその[illegible]的部分において、甚だ唯物史觀に近いものであつて、生活手段生產の方法がすべての文化現象の基礎だとした。古代においては農業生產がすべての社會現象の基礎であつた。故に「農業の發見」は全然新らたな

風習を導入した。この技術を導き入れた民族は一定の土地に、自らを定住することを必要とした。彼等は都市に結合したのである。」云々。また「土地の分配から法律と法律學が生れた」と。かくの如くゴオゲエは國家組織も法律も科學もすべては、その基礎として生産を有することを論證したのである。

階級闘爭說は第十八世紀末から、第十九世紀の前半において、佛蘭西において發達した。既に擧げたサン・シモンの時代においては、この學說が大なる發展をなした時代である。この學說は、最も明かな社會階級立場によつて主張せられた。その一は、ブルジョアジイの立場であり、一七八九年以來の、、、、を一の、、、、と見、ブルジョア階級の人類への歷史的貢獻と見た說であつた。既にゲオルヒ・プレハノフの擧げてゐるやうに、ギゾオ、チエリイ、ミニエなどの歷史家がこの立場に屬する。これに對して、佛蘭西革命をブルジョア階級の革命として、この革命に人類への、、を見出すことなく、反つて、人類への、、を認め、か丶る階級闘爭の終焉を希求したのは、前揭のサン・シモンのやうな社會主義者であつた。サン・シモン、並に彼の學徒、バザアル、フウリエ、並にその學徒、コンシデランなど、また彼等は影響を受けつ丶自說を構成したプルードン、ルイ・ブランなどは、近代大工業の結果である、ブルジョアジイとプロレタリヤの對立を認識し、その對立が、一般的不幸を招來するが故に、この對立を廢絕する理想社會を考案したのであつた。「彼等は何れも、空想的社會主義と呼ばれる範疇の中に入れらるべき社會思想家ではあつたが、その現實社會に對する觀察は、決して大綱を失してゐることなく、よく經濟的現象の社會生活の基礎たることを認識したのは、筆者がここに一々例證するまでもない。

以上がマルクスが佛蘭西社會主義の研究へ出發しやうとした時代までにおける西歐社會學的思想の大様である。

四

西歐の社會學的思想を觀察した筆者は更らに一八四〇年代までの獨逸におけるその發展を顧みることが必要である。第十九世紀初葉の獨逸は、その社會思想において、常に西歐の後塵を拜してゐた。政治的自由主義はラインの彼岸たる佛蘭西から、經濟的自由主義は英領ハノヴァのゲッチンゲン大學を通じて、獨逸に影響しつ丶あつたのであるが、獨逸固有の思想がなかつたのではない。獨逸固有の社會思想は、獨逸哲學の副産物として發生した觀がある。英佛のやうに、近世的資本家的生産方法の發展普及が行はれず、その生産形態が主として、貴族の土地所有による農工業的生産に限定せられ、僅かにライン地方の一部にのみブルジョアジイの勢力が存するのみであつた。獨逸當時の社會思想はこの社會狀態に照應するものであつた。從つて現實的實證的な考察は極めて少なく、思辨的觀念論的な議論が多く行はれてゐた。カント、フィヒテ、ヘエゲルの認識論及び歷史哲學がこれであるが、

これらの思辨哲學を基礎とする社會思想が行はれた。これらの社會的思辨はカントと初期のフィヒテが稍や個人主義的影響を受けた傾向はあるが、大體において、その社會觀は普遍主義(ウニヴアサリズムス)と呼ばれるものであつた。この傾向は古典哲學と同時代の産物であるアダム・ミュラアを主班とするロマンチカアの社會思想において、一層著しい。これらの諸思潮の特徴をなすものは、上述の社會觀における普遍主義がその第一であり、社會生活における發展の概念がその第二であり、國家と社會との概念的區別がその第三である。第一の普遍主義は西歐の社會觀の個人主義的であるのに對立するものであつて、モンペルトの如きは、この點に獨逸觀念論並にロマンチックの社會觀における貢獻を認めてゐるのである。第二の社會生活における發展の概念は、獨逸思想特有な形態において現はれてゐる。それは、精神の社會における發展を意味するのであつて、獨逸古典哲學一般を通じての、特にヘエゲルの哲學に現はれてゐる辯證法である。而して、第三の國家と社會の區別については、ロマンチックの思想についていへば、兩者は同一體を示すのであり、カントについても兩者の區別は左程明瞭ではない。フィヒテにおいては、國家は社會完成への一の手段であり、社會の窮極における完成は國家の、、を意味し、國家は社會の下位概念に立つものである。國家と社會の對立を最も明確にしたのはヘエゲルである。彼の哲學的國家理念によれば、國家は倫理的全體、倫理的觀念の實現、自由の實現であつた。然るに、社會は、個人の欲望充足のためにする勞働の組織である。而して、この社會は國家の完成とともに、その內に止揚せられるのである。

一八三〇――四〇年代の獨逸思想家は多くこのヘエゲルの影響を受けた。マルクスもその一人であることは、こゝに叙說するまでもない。乍併、筆者はマルクス以前においても、左翼ヘエゲル主義者の間に、この獨逸の觀念論的哲學と佛蘭西社會思想との結合を企圖した者のあることを指示したい。それは一般に眞正社會主義(ヂヤ・ワアレ・ゾチヤリズムス)の名をもつて呼ばれてゐる思想であり、その代表者と見るべきものは、モオゼス・ヘッスとカアル・グリュンである。ヘッスによれば、社會の理想は、、、自由の實現にある。然るに自由の觀念は從來佛蘭西においては、、、、、並に社會主義によつて、具體的物質的に、獨逸にあつては、理想主義哲學によつて、觀念的抽象的に、解されて來たのである。然るに眞正なる自由は、兩者の、卽ち佛蘭西、、、、と獨逸理想主義の綜合によつて實現し得る。從來兩者は一方的に、あるひは物質的に、あるひは抽象的にのみ考へられてゐたのである。、、の、、、、こそ、この兩者を辯證法的に綜合して、自由を實現する。これが、一八四三年にヘッスによつて執筆された「社會主義と、、、、」及び「行爲の哲學」と題する論文の眼目であつた。この立場は、所謂眞正社會主義者、自ら獨逸哲學から出發して、佛蘭西社會思想の批判的攝取を行つたと稱する眞正社會主義者の立場であつた。彼等は觀念論的立場から、物質的問題を取扱つたのである。

五

マルクスも、獨逸の思想家として、ヘエゲルから出發して、佛蘭西社會思想に向つた點において、眞正社會主義と同一の過程を迹つたものである。乍併、マルクスに對しては、、、、は一の抽象的理想と解されたのではない。それは、現實的諸條件を前提とする一現實的運動に過ぎないのである。マルクスが何時かくの如き理論を抱懐するに至つたかの問題に對しては、既に諸家の説明が存するが、先づ一八四五年と見て差支ないのである。一八四五年の春エンゲルスはブリュセルにマルクスを訪ふたとき、既に後年唯物史觀として知られてゐる形態の社會觀に到達してゐたと、、、、序文に述べてゐるが、近年リヤザノフによつて、發表せられたマルクス・エンゲルス共著の「ドイチッエ・イデオロギイ」はこれを證明する最も顯著な文獻である。

「ドイチッエ・イデオロギイ」は、、、、の、、、を論證しやうとしたものである。「、、、、は吾々に對しては、作り出されねばならぬ一の狀態ではない。それは現實が、これを標準としなければならぬ理想ではない。吾々は現在の狀態を止揚する現實的運動を、、、、といふのである。この運動の諸條件は現存の前提から生ずるのである。」このことを證明しやうとするのが、その目的である。マルクス・エンゲルスはこのことを論證するのに、社會現象の歷史性とその社會的關連とを明確にすることによつて、單に、、、、の、、、を立證したのみでなく、この社會學說系を樹立したものといへる。後に詳述するやうに、第一篇において、彼の歷史的方法並に、この歷史的方法による精神現象――意識――を説明した。而して意識の說明は、彼によれば必然的にその下部構造である現實の社會に遡らねばならぬ。而して、第二篇においては、經濟、社會、個人及びそれらの歷史の唯物的見解を發展せしめた。第三篇においては、第二篇の補論とも見るべき財産に對する國家及び法律の關係が述べられてゐる。マルクスの唯物的方法によつて、述べられたこれらの諸問題は社會現象の基本的問題であつて、その所說の間には右の方法による統一が存する。

勿論リヤザノフのマルクス・エンゲルス・アルヒフ第一卷で、發表した「ドイチッエ・イデオロギイ」はマルクス・エンゲルスの「ドイチッエ・イデオロギイ」の全部ではない。その外、ベルンシュタインによつて部分的に發表されたマックス・シュチルナア批判、同じくベルンシュタインによつて、「ノイエ・ツアイト」(一八九九――一九〇〇年)に發表された「グリュン著『佛蘭西及びベルギイにおける社會運動』に對する批判」もまたドイチッエ・イデオロギイの一部をなし、更らに今日は行方知れずになつたブルノオ・バウエルの批判の原稿もその一部である。乍併、ベルンシュタイン發表のシュチルナア及びグリュンの批判に關する部分は、リヤザノフ發表のフォイエルバッハ批判に關するものよりも原理的總括的論議に乏しい。リヤザノフ發表の部分も處々に斷片的記述等又は原稿の存在しない個處のために、その

純一が失はれてゐるところもあるが、この部分において、大體一八四七・八年において、定型を見出したと稱せらるゝマルクス學說、卽ち「哲學の貧困」「共產黨宣言」に現はれた思想は、その經濟學的部分を除いては、盡くこの「ドイチッエ・イデオロギイ」において見ることが出來る。而して、この書に現はれたところのマルクスの社會學說は恐らく後に發展整理せられたもの殆んどすべてをこの書の中に求めることが出來るのである。從來マルクス社會學の論述としては、「哲學の貧困」「經濟學批判」序文、「共產黨宣言」エンゲルスの「家族、私有財產及び國家の起源」を權威としてゐたのであるが、「ドイチッエ・イデオロギイ」はこれらの諸著述にも增して社會學的に見るとき興味あり、價値あるものである。筆者がこの書をマルクス社會學の經典と見る理由は、この書の社會學的見地が極めて包括的に、社會學體系を形成する形式において述べられてゐるからである。

六

既に述べたやうに、「ドイチッエ・イデオロギイ」は一の理論鬪爭である。故に先づ自分の態度を明かにしなければならぬ。「舊ヘエゲル……べてのものが、ヘエゲルの論理的範疇に還元せらるゝや、……宗教的表

なるものの支配を信ずる點において、舊ヘエゲル主義者と一致する。たゞ一はこの支配をもつて、僭奪なりとして鬪爭し、他はこれを正統なりとして祝福するのである。」而して、「これらの哲學者の誰れもが、獨逸哲學と獨逸の現實との關係について、彼等の批判とそれ自らの物質的環境との關係について、研究することを思ひ浮んだものはないのである。」青年ヘエゲル主義者は、人間の意識を現實から說明することなく、反つて人間の意識そのものから現實を說明し、現實に對する指導原理を導き出さうとしたのである。彼等の說くところは抽象的原理であり、愛の說法であつた。センチメンタリズムそのものであつた。マルクスはこの態度を痛擊した。マルクスは當時、フォルクス・トリブンの編輯者クリイゲのセンチメンタリズムを排した一節に次のやうな文章がある。「この愛は何等現實的な事實的な狀態をも克服し得ない感傷的なる文章の中に自己を喪失する。愛は溫い感傷によつて、人を柔弱にする。乍併、困難は人に力を與へる。自ら救はざるべからざるものは、また自らを救ふ。然るが故に、この世界の現實の狀態、卽ち產業的交易において、最も發展して現はれてゐる資本及び勞働、卽ちブルジョアジイとプロレタリヤの現今の社會における峻嚴なる對立は、社會主義的世界觀の、卽ち社會的改良の熱望の他の強く湧出する源泉である。この鐵の如き必然性は社會主義的努力を普及する……を造り出す。」この「鐵の如き必然性」を認

目的でもある。

マルクスは一の前提から出發する。それは恣意的な獨斷的な前提ではなくて、現實的前提であるとマルクスはいふ。「それは現實の個人と、その行動と傳來的並に自己の行動によつて作られた、その物質的生存條件である。從つてこの前提は、純粹な經驗的方法によつて、確認し得るのである。故にすべての人類史の第一前提は、勿論生ける個人の生存である。而して、最初に確認せらるべき部分は、この個人の身體組織とそれによつて與へられた他の自然に對する關係である。……すべての史的記述は、この自然的基礎及び、人間の行爲による歷史の經過中における、その變改から出發しなければならぬ。」而して、人間の生きるためには、就中食ひ、飲み、住ひ、着ることなどが第一の必要である、もしこのことをなし得ないとすれば、人間は何等の「歷史を作る」ことは出來ない。マルクスが人間の生活資料生產にその社會學の出發點を求めた所以である。人間の最初の行爲、而して、これによつて自らを動物と區別する行爲は、彼が思索することではなくして、その生活資料を生產し始めたことである。故に、「現實的事實のみに關する經驗的觀察は、すべての個々の場合において、生產と社會的並に政治組織を經驗的に、且つすべての神祕化と思辨となくして、指示し得るであらう。」この人間の活動的生活過程が把握せらるるや否や、歷史は死せる事實の蒐集たることを止める。「現實的生活において、思辨の止揚せらるるところに、現實的、實證的科學、即ち人間の實踐的行動並に、實際的發展過程の叙述が始まる。意識の章句が終熄して、現實的知識がそれに代らなければならぬ。獨立の哲學は、現實性の叙述とともに、その生存媒質を失ふのである。その代りに、高々、人類の史的發展の觀察から、抽象せられた最も普遍的な結論の概説が行はれることが出來るのである。現實の歷史から離されたこの抽象はそれ自體としては、全然無價値である。」かゝる見地に立つが故に、道德、宗教、形而上學及びその他のイデオロギイ、並にこれに照應してゐる意識形態はその獨立の外見を失ふのである。「意識は意識せられたる存在以外のものであり得ず、人間の存在はその現實的生活過程である。」「意識が生活を定めるのではなくして、生活が意識を定めるのである。」フォイエルバッハは唯物論的見地に立ちながら、人間を單に感性的對象と見て、感性的行動と解せず、從つて、現實的條件の下において、活動する人間に考察を加へず、たゞ抽象的意義における人間を論じたのみであつた。從つて彼の歷史觀は辨證法的意義を有せず、歷史において、唯物論者たることを止めてゐるのである。

現實的前提から出發したマルクスは、かくて次の如き歷史觀に到達した。「この史觀はその基礎を次のところに置く。即ち現實的生產過程を、而かも、直接生活の物質的生產から出發して、これを發展せしめ、而して、この生產方法と關連して、且つこれによつて作られた交易形態を、即ちその種々な階段における市民的社會を全歷史の基礎と解し、この市民的社會を國家としての行爲において叙述するとともに

に、種々の理論的産物、意識の諸形態、宗教、道德、哲學等等の全部をこれから説明し、これらのものから生ずるその成立過程を追究することに存する。勿論この場合、事象はその全體において（及び故にまたこの種々なる方面における相互に對する相互作用も）叙述せらるゝのである。この歴史觀はすべての時代において、觀念的史觀のやうに、一の範疇を求めることを必要とせず、常に現實の歴史的地盤の上に止まり、實践を理念から説明しないで、反つて、理念の形成を物質的實践から説明する。而して、これに應じて次の如き結論に到達する。意識のすべての諸形態及び産物は、精神的批評によつて、『自意識』への解消、『妖怪』『幽靈』『狂氣』などへの轉形によつてではなく、この觀念論的饒舌のそれから發生する現實の社會的關係の實践的、、によつて解消せられる。即ち歴史の、而して、また宗教、哲學、その他の理論の、推進力は批評ではなくして、、、である。」これが「ドイチッエ・イデオロギイ」における根本的立場である。

七

社會學的方法を確立したマルクスは、この方法に從つて、、、、、、、の必然性と、この、、を導くまでの社會的必然性を論ずることによつて、「全歴史の基礎としての市民的社會」とその內に現

スの社會學體系と見るべきものとしたのは、この理由によるのである。

人類史の始源において、生ける個人は、その生命を維持するために、生活手段を生産しなければならなかつた。これが人間の最初の行爲であつた。この個人的生存欲望の充足及びその結果としての新欲望の發生は、彼の既に獲得した生産手段による生産を增大せしめたのである。かゝる關係においては、人間は、自然との關係を有するに過ぎない。然るに、人間には性的區別が存してゐて、生命の發展とともに、自然との關係の外に、他の人間との關係を發生する。男女の關係がこれである。而して、この男女關係は、夫婦關係、親子關係即ち家族關係たるに至る。家族は、歴史の始源においては、唯一の社會關係であつた。（この點は後にエンゲルスによつて、資本論第二版における脚註並に「家族の起源」において、家族を最初の社會關係とすることが誤りであるとして訂正された。エンゲルスの訂正は正しい。）この家族は、欲望の增加が新らしい社會關係を、而して、人口の增加が新欲望を發生したところにおいては、社會關係としての重要性を喪失した。故に一般的にいへば、特定な生産方法または産業的階段は、特定な共同作用の方法または社會的階段と結びついてゐる。而して、この

人間の歴史が常に社會的なものとすれば、これによつて制約せられる人間の意識も常に社會的な性質を有するものでなければならぬ。而して人間の意識は、最初感性的環境に對すると共に、他人に對する感性的意識に過ぎないが、自然の威力に對する人間たる限りにおいては、自然の動物的意識となる。他方において、社會生活の必然性に關する意識は群意識を發生せしめる。この群意識または種族意識は、生産力の増加、欲望の増加及び兩者の根底に横たはる人口の増加によつて、發展せられる。それとともに分勞が發達する。分勞は第一には性的分勞であり、第二は、物質的並に精神的分勞である。この後者の分勞から「純粹理論」即ち神學、哲學、道徳の抽象的獨立的形態が現はれる。分勞の發達と共に、家族における分勞が起り、個々に對立した家族に社會を分立せしめる分勞が起る。同時に、質的にも量的にも不平等勞働並にその生産物の分配が行はれる。從つて、妻女とその子女とが男子の奴隷である。家族においては、財産は既にその萠芽、その最初の形態を有するのである。この家族における自由な、尙ほ素朴潜在的な奴隷が最初の財産である。即ち分勞と私有財産とは同義語である。尙ほ分勞とともに、各個の個人、または各個の家族、の利益と、すべての個人の共同的利益の間における矛盾が發生する。この共同的利益といふのは、「普遍的なるもの」として觀念の中に存するのではなくして、彼等の間に勞働の分割せらるゝ諸個人の相互依存としての現實に現はれるのである。

この特殊的並に共同的利益の矛盾から、共同的利益は、國家として、現實の個別的並に全體的利益から區別せられた獨立の形態を採ると同時に、幻想的共同性を取得するのであるが、その眞實の基礎は常に、活動しつゝある分勞の充分に行はれ、特殊利益を有する家族及び種族結合に、殊に、分勞によつて規定せられ、人間の大群を分割し、一が他を支配しつゝある階級に存するのである。故に國家内におけるすべての鬪爭、民主主義、貴族主義、王制主義間の鬪爭、選擧權鬪爭など、一般に普遍的なるものは、共同性の幻想的形態であつて、その内において、種々な階級の現實的鬪爭の行はれるところに過ぎないのである。この理は近代國家の場合においても適合する。私有財産――階級と國家の關係は、不離である。古代並に中世における財産の形態は種族財産である。乍併、本來の私有財産は古代においても近代においても、動産をもつて始まる。中世から始まつた諸民族においては、種族財産は種々な階段――封建的共有財産、組合的動産、手工工場、業資本――を經て、近代的な、大工業と自由競爭とによつて制約せられた資本、純粹な私有財産に到達した。この私有財産はすべての共同社會の外見を脱却し、財産の發展に對する國家のすべての干渉を排除した。近代國家はこの私有財産に、照應するものである。而して、それは、租税の支拂によつて、私有財産の所有者によつて買はれ、國債制度によつて、完全に彼等に歸屬し、その存在は國債の株式市場における騰落によつて、全然ブルジョアの國家に與へる商業的信用に依存す

るに至つた。「共同社會からの私有財產の解放によつて、國家は、市民的社會と並び、その外に立つ特殊な存在たるに至つた。國家は、ブルジョアが內外に對して、その財產と利益の相互的保證のために、必然的に與へた、組織形態に外ならぬものである。」

マルクス・エンゲルスは、倘ほ原始的社會狀態から、農業の發達、農業からの小工業の分離、これに伴ふ田舍と都會の分離を論じてゐる。都市の發達は勿論人口の增加とこれに伴ふ生產力の發展によるのであるが、都市の成立は、行政、警察、租税など、卽ち都市制度及びこれとともに政治一般を與へたのである。こゝにおいて、分勞と生產手段を基礎とする人々の二大階級への分裂が起つた。都市は既に、人口、生產手段、資本、享樂、欲望の集中の事實を示すとともに、田舍は、これと反對の事實、孤立化と、個別化の事實を示してゐる。都市と田舍の對立はたゞ私有財產の內部においてのみ可能である。而して、マルクスは、この都市における勞働の性質並に自然的資本の發生と、その內部における分勞の結果としての商人階級の成立、その結果としての、都市間における分勞の事實を指摘し、その地方的制限から徐々に、民族的範圍への擴大、その結果としてのマヌファクトウルの成立を論じてゐる。而して、マヌファクトウルの成立は近代的社會の曉鐘であつて、これによつて中世的社會は崩壞したものであるが、その過程と

止政策を採るに至り、商業は政治的意義を有するに至つた。これとともに變化したのは、企業家と勞働者の關係であつて、舊時の家長的關係は破れて、貨幣關係がこれに代つたのである。これは初期資本主義の社會的樣相であつて、資本家的生產の發展、卽ち大工業の成立は、工業都市を發生せしめ、保護政策から自由主義的政策が行はれるに至つた。これと伴つて、プロレタリヤの階級運動が興隆する。

マルクスは、このプロレタリヤの世界史的意識と運動との構成について、若干のマルクス的考察を與へて、國際的プロレタリヤ運動の構成と、その・・・・・・への必然性とを論證してゐるのであるが、それは通常マルクス主義として理解せられてゐるところと異るところがないのでこゝには省略する。

八

筆者は以上「ドイチッエ・イデオロギイ」の內容をその大略に渉つて、社會學的に見て重要と思はれる部分を紹介した。讀者諸君はこれによつて、「ドイチッエ・イデオロギイ」に現はれたマルクス社會學の大要とその重要性を認識せられたことと思ふ。

この書に現はれたマルクス社會學の特徵は何であつたか。その第一は、彼の社會學的出發點が

個人としての人間である。後にマルクスが「社會化された人間」と名づけたところの個人である。この點において、マルクス社會學の出發點は、社會契約論者のやうに、假定的孤立的個人でもなく、フォイエルバッハのやうに、抽象的な種としての人間でもなかつた。第二に、この現實の個人の根本的行動として、生活資料の生産を擧げた。人間の社會化は、生活のための生産である。後にマルクスが「人間は生産において、啻に自然に對してのみ、關係するのではない。彼等は一定の方法において、共同に働き、彼等の活動を相互に交換することによつてのみ、生産する。生産するがためには、彼等は互に一定の連絡及び關係に入り込み、且つ此等社會的の連絡及び關係においてのみ、自然に對する彼等の關係は成り立ち、生産が行はれる。」(賃勞働と資本)といつたのは、以上の第一及び第二の特徴をいつたものである、マルクスはこの生産資料の生産方法に、すべての他の社會現象を依存せしめた。この經濟的過程に對する他の社會現象の依存性は、兩者の同時的な存在における一方の他方に對する制約と考へられるのである。第三、この經濟的過程の制約は、經濟的過程における變化によつて、新たな制約を發生せしめる。經濟的過程は、その内に結合してゐる人間の經驗と作用とによつて、變轉する。而して外界の自然も、自らを變ずることによつて、これに依存してゐる人間の社會を變形する。要するに人間の社會化は單なる自然の受動的產物ではなく、自然對人間の作用は反作用の狀態において動くものである。第四、人間社會における變轉、即ち歷史的過程は、偶然的の繼起ではなく、それ自體において、特殊な法則を有する發展である。即ち、人間社會の基礎と、これによつて、制約せられてゐる上層との矛盾の發生、この矛盾の克服止揚によつて、上層社會に進むことによつて、發展する。辨證法的發展がこれである。第五に、これらの諸理論と、、、、、との關係である。マルクスは理論の、、、を主張することによつて、理論を、、、、、、のための一手段と考へた。所謂理論と實踐との辨證法的統一である。

　これらの特徴を有するマルクス社會學は現代の社會學に對して如何なる意義を有するか。既に記した社會學史的考察において、マルクスが社會學體系の一建設者であることは、明かであり、社會學的方法が第十八世紀のブルジョアジイの、封建的勢力に對する鬪爭過程において、一の「反對科學」として興隆したものとすれば、マルクスはブルジョアジイに對するプロレタリヤの鬪爭において、反對科學即ち第二の反對科學としての社會學を特徴づけたものであるといつて差支ない。かゝる意味において、マルクスの社會學史的研究を要することはこゝに論ずるまでもない。

　乍併、マルクスの社會學は現代の社會學に對してもまた重要な意義を有する。それは、現在多くのマルクス主義者が存在するといふこと以上に、マルクスの立場が社會學的研究に對して、重要な貢獻をなしてゐるからである。社會學が社會の根本的性質並に現象に對する因

法則の探究であるといふ點については、多くの社會學者の一致するところである。社會は如何なる本質を有するか、社會は如何にして、發展するかなどの問題は、社會學者の解決を要望する好個の對象である。而して、幾多の答案がこれに對して書かれたのである。社會有機體說、同類意識說、模倣說、強制說、精神的全體說、心的相互作用說などが、社會の本質を解明するものとして、提案せられた。これらの諸說については、その說明の一方的であるといふ點から、または、社會內においてのみ可能である現象を採り來ることによつて、社會の本質を說明しやうとする點で、不充分とせられてゐる。現在社會學者間の定說として、認められやうとしてゐるものは、心的相互作用說であらうが、この說もまだ心的相互作用の基礎となる筆者の所謂基本社會の本質を明かにしてゐない。マルクス學說の重要性の一は、この基本社會にまで、その社會學的解剖を深めて行き、この社會の基礎の上に行はれる相互作用の經濟的規制を研究することによつて、社會現象の統一的關連の課題を解決しやうとする。この點において、マルクスの立場は、是認せられねばならぬ。この點が正しいとすれば、社會の發展を生產力に依存せしめることも、正當な見解でなければならぬ。この二つの點において、マルクスは確實に、社會の生ける現實的要素を把握してゐる。

社會の發展を生產力の發展に歸したマルクスは、前述のやうに、存在が意識を決定するといふ立場に立つてゐるから、社會學的研究における現象とその法則性の歷史的意義を最もよく理解してゐた一人である。現在の社會學者は社會の變化發展を信じないものはない。然も原始的社會に關する考察を採つて、直ちに現代の社會を律するやうな社會學者に乏しくないのである。この點において、マルクスは吾々に敎へるところが極めて多い。彼の考察は主として近代的市民社會の現象であるが、この研究の場合彼はよく市民的社會の歷史性と從つて、その社會法則の歷史性を認識した。現代の社會學はこの歷史性の問題について、大なる考慮を費す必要はないか。殊に形式社會學者の論理的方法において、特に然るのではないか。

理論と實踐との關係については、マルクスの最も強調するところである。「從來哲學者は種々に世界を解釋して來た。乍併、重要なことは、これを、、することである。」といふ「フオイエルバツハに關するテエゼ」に現はれてゐる彼の思想は、彼の理論と實踐とに關する根本的立場である。この理論の實踐性については、社會生活が實踐性を有するといふ點、認識の實踐性、並に實踐による社會形態の推移といふ三點と見ることが出來る。社會生活の實踐的であることについては、議論の餘地はない。實踐的であるが故に、動的に觀察されねばならぬのである。認識の實踐性も認識主體が實在として實踐的であるといふ意味において然りである。たゞ理論の實踐化、即ち實踐による推移といふ點においては、かゝる主張が科學の範圍内で許し得るかといふ點については、問題である。社會學は一の法則樹立の學問であつ

て、實驗要素要求の學問ではない。筆者はこの問題に次の意味のことを書いたことがある。今これを引用して、結論とする。「筆者は社會學が現時の社會問題を解決する學問であることは考へない。この解決は、恐らく社會哲學とも名づけらるべき科學の任務とするところであらう。たゞ社會學は、共同生活關係といふ觀點から社會が如何にあるか、また如何にあつたかを觀察する學問であつて、社會學――少くとも理論社會學の範圍においては、社會が如何にあるべきかの理想または要求を研究する學問ではない。たゞ如何にあるかを觀察するのは如何なる目的であるかといへば、それは如何にあるべきかの問題を解決する一の手段であると答へるの外はないし、またかく答へることによつて、社會學の現代における意義と任務とを最も明確にすることが出來ると思ふ。この意味で、社會學は、他の社會科學を何の意味においても、排斥するものではない。殊に現在プロレタリヤの階級哲學として認められてゐるマルクシズムの學的貢獻はこれを認めるに、吝かならざるものである。」

第二貧乏物語

河上　肇

第六回

讀者の知られる通り、この物語の第四回の終りの部分は三頁だけ削除され、更にその第五回分に至つては、冒頭の十五字削除から始まつて、末尾の九十二字削除に至るまで、殆ど千字前後の削除を受けてゐる。こんな調子では、私の話は讀者に對し長距離電話よりももつと通じにくいものになつてゐるだらう。元來筆者は、自分の書いたものを活版に附する前に、多くの場合、二度も三度もそれを讀み返し、表現上の些細な點にまで注意を加へることを多年の習慣としてゐるので、すでに筆を擱き原稿を手離してからでも、力を用ひた要所々々の文句は、書くのあひだ自然に暗記してゐるほどであるが、それにも拘らず、それが印刷に附せられると、何をおいても先づ、活字によつて自分の原稿を再び讀んで見ねば、氣の濟まない質なのである。しかしこの物語の第五回分のみは、今に至るもこれを讀み返す氣になれない。原稿を手離してから後、あすこはあゝすればよかつたなど思ひ返してゐた個所は、すべて問題なく削除されてゐる。私はこれを一瞥しただけで、すでに苦痛を感じた。斯程までに満身に創痍を受けた文章が、翻譯以外に――世に公けにされたことが嘗てあつたであらうかと疑はれる。いま稿を續けんとするに際し、『筆重きこと錐の如し』といふ言葉が思ひ出される。

だが、マルクス主義者は自分の興味を満足さすためにものを書いてゐるのではない。エンゲルスの主要なる著書『反デューリング論』の

一八七八年度の序文を見ると『次ぎの著作は決して何等かの「内的衝動」の産物ではない、その反對である』といふ書き起しをもつて、それが『甚しく不愉快』な仕事であつたことが、述べられてある。またレーニンの『帝國主義』のロシア版への序文には、『この著作は、ツアー政府の檢閲を顧慮しつゝ書かれたものである』がために、そこでは『やむをえない僅かの政治的論及をも、極めて用心深く言ひ現はし、暗示的な言葉をもつて、いはゞ婉曲に……××しい言葉をもつて語ることを餘儀なくされてゐる。いま自由の日において、この小著の、ツァー政府の檢閲を顧慮したためにゆがめられ・不具にされ・曖昧にされてゐる個所を讀み返すことは、苦痛である。帝國主義が××××××の××を意味すること、社會主義的愛國主義（言葉では社會主義、行爲では愛國主義）とは社會主義に對する全き裏切り……と等しいものであること、勞働運動の内部におけるこの分裂は帝國主義の客觀的事情と關聯してゐること、等々、これらのことについて、私は「××の言葉」をもつて語らねばならなかつた』と書いてある。すなはちこの書のなかには、『暗示的な言葉』や『××しい言葉』や『××の言葉』やをもつて、やむをえず『ゆがめられ・不具にされ・曖昧にされてゐる個所』が、少からず存在するのである。それにも拘らず、著者は完全に言論の自由を得た後も、これを舊態のまゝに棄ておいた。フランス版およびドイツ版への序文を見ると、それについて次ぎの如く述べてある。

『この著作は、すでにロシア版への序文で述べたやうに一九一六年にツァー政府の檢閲を顧慮しつゝ書かれたものである。私にはいま全文を書きかへる見込みはないが、その上にまたかくすることは、おそらく無駄なことであらう。……このことは（書きかへないで元のまゝにしておくことは）、先進資本主義諸國の多くの××××たちにとつては、いくらか××でさへもあるであらう。といふわけは、檢閲の立場から合法な（著者傍點）本書の先例によつて、彼等は、殆ど總ての×××××の最近の逮捕後もなほ、例へば今日のアメリカまたはフランスの×××××に殘されてゐるところの、合法性の僅かな餘地でさへも之を利用して、「世界民主主義」に關する社會主義的平和主義者の見解と希望とが全く××なることを、證明することが可能であり――また必要である――といふことを、確信しうるからである』。（こゝに社會主義的平和主義者とは、言葉の上では社會主義者であるが、行爲ではブルヂョア的平和主義者にすぎざるものを指す、そしてブルヂョア的平和主義者とは、「資本の××と××との×××××して永遠の平和を夢みるもの」のことである。）

（右の引用はすべて長谷部文雄氏の譯文による。廣く流布してゐる同

氏の譯本には、前後を通じて一字の伏字も用ひてない。ツァー政府の檢閲をすら通過し來つたものであるから、これは當然のことであるが、しかしこゝでは、改造社の意見により進歩主義を標榜せる×××××××××××を顧慮して、私は特に若干の伏字を用ひた。）

（内閣更迭後、著作物の檢閲はむしろ苛酷さを増した觀があるが、これに對して效果的な抗議は今どこにも行はれてゐない。他方、一部の人々は、現在の狀勢下において合法的なものを書く人間はすべて社會民主主義者に限られるとの獨斷のもとに、×××××××のものを書いて、自分の小ブルヂョア式××的氣分を滿足せしめることに、關心を向けすぎてゐる傾向がある。（私はかく言つたからとて、××××を×××××されねばならぬ幾多の重要なる文書があることを、決して看過してゐるのではない）。そして正直にいへば、私自身も、ややともすれば、さういふ氣分に襲はれがちである。現にこの『物語』も、こうまで××の拘束が甚しくては、その續きを書く氣になれないし、書いても意味をなさない。さういふ風に幾度か思つた。だが、翻つて見ると、エンゲルスは『甚だしく不愉快』な仕事を――『マルクスおよび彼れによつて主張された辨證法的方法および×××的世界觀の、多かれ少かれ纏つた說明』を、デューリングが廣汎な範圍にわたる諸問題について蒔き散らした愚論との對立において、書き上げるといふ面倒な仕事を、――ドイツ社會民主黨の多數の代表者からは甚しき憤慨と殘酷なる攻擊を受けつゝ、現にその大會では之をその中央機關紙たる『前進』に連載することをすら禁止する旨の決議が殆ど通過せんばかりであつたために、遂にその附錄として採錄されるの外なきに至つたといふ不愉快な事情のもとで、（半世紀を距てた今日から見ると、後にあれほどの貢獻をしたエンゲルスの主要著作が、その發表の當時、味方の陣營において斯くまで殘酷な取扱を受けたことが、むしろ不思議である）、忍耐强く遂行したのであるが、しかもそのために、『資本論を除けば、一の特殊なる方法としての・および一の特殊なる體系としての・マルクス主義の傳播のために、これほどまでに貢獻したものは他にない』と稱されるところの、『マルクス主義の歷史における劃期的な著作』たる『反デューリング論』は出來上がつたのである。（引用符を附したる部分は、リヤザノフの言葉）。更にまたレーニンは、帝國主義××の×××の問題を――私はそれにちよつと觸れただけで、すぐに三頁分を削除されねばならぬやうな、下手な取扱ひ方をしたのであるが――その苛酷さにおいて當時恐らく世界××であつたツァー政府の檢閲のもとで、一字の削除すらもなく完全に合法的に書き上げてゐるのである。もちろん彼れはそのために、『××しい言葉』や『××の言葉』やにより、幾多の個所が『ゆがめられ、

不具にされ、蹂躪にされる』ことを忍ばねばならなかつたのであり、後に『自由の日において之を讀み返すことは苦痛である』と、彼れ自らが言つてゐるのであるが、しかも彼れは斯かる苦痛に耐えることを敢て必要としたのであり、そして今日となつては、當時已むをえずして歪められ不具にされたものを、そのまゝに保存しておくよが『むしろ××ですらある』と言つてゐるのである。今これらのことは、私にとつてこの際特に教訓的である。吾々は道樂に——それ自身を目的に——ものを書くのではない。必要に際しては、それが如何に不愉快な仕事であらうとも、またそれが如何に窮屈な拘束のもとに行はれねばならぬにしても、吾々にはそれを爲し遂げねばならぬ義務がある。私は敢て氣力を失ふことなく、何十萬の讀者を有するこの論壇を利用するために、できうべくんば完全な文章を、二重の難關を通して無事に讀者諸君に送り屆けるべく、一應の苦心を試みるであらう。——こゝに完全なる文章といふのは、檢閲的の意味で、伏字のない文章のことである。難關といふのも、やはり檢閲的の意味で、その一は雜誌の編輯局における私的檢閲の難關であり、その二は内務省の警保局における公的檢閲の難關である。(そこでは、謂はゆる思想取締りのために行はれた豫算増額の××××、×××××××××××××、『勸進帳』を聲高らかに讀み上げた位では、牛人の辨慶も通さぬことになつてゐる由)。かゝる諸條件のもとに如何なる文章が私にもなほ作製されうる餘地があるか、以下の續稿は厖大事實をもつてそれに答へるであらう。

九、唯物史觀(その3、——社會的存在と社會的意識)

どういふわけで・どういふところから・生まれるのか分からないが、ともかく人間の頭腦のなかに先づ何等かの概念(例へば地球)といふ概念)ができて、その概念から一定の外物(例へば地球)が生まれ出るのだ、といふ風に考へてゐるのは、觀念論の見地である。またそれとは逆に、人間の頭腦や意識やとは最初から獨立に地球なる外物が存在してをり、そしてその外物が人間の感覺器官(例へば眼、等々)を通して人間の頭腦に反映することにより、地球なる意識が生まれるのだ、といふ風に考へてゐるのは、唯物論の見地である。簡單にいへば、意識は一般に存在を反映する、——これが全唯物論の一般的テーゼである。今この見地を自然界にのみ局限することなく、徹底的にこれを社會の上に押しひろげるとき、吾々はそこに、社會的意識は社會的存在の反映であるといふ史的唯物論の根本的テーゼを得る。かくてエンゲルスの言葉によれば、『觀念論「すなはち觀念または意識をもつて

存在または物質よりも本源的なものとなす考」は、その最後の逃げ場たる史觀から追ひ出され、唯物史觀が提供され、そして、これまでのやうに人間の存在を彼等の意識からでなしに、彼等の意識を彼等の存在から說明する道が發見されたのである』。私は以下、この史的唯物論の根本的テーゼを、――社會的意識は社會的存在の反映であるといふことを、――唯物論一般との關聯において、しかもブルヂョア的哲學に迷はされてゐない人々には誰にでも理解されうる程度の平易さをもつて、やゝ詳細に說明するであらう。何故なれば、社會問題の根本的解決に對する吾々の態度――全被壓大衆のあらゆる搾取からの解放(かゝる社會的存在の××)は、決して書齋虫の單なる道德論など(一の社會的意識)によつて實現されうるものでなく、それは必然的にかく〳〵の道をとることを不可避的にされてゐる、となす吾々の見解――は、以下說明せんとする史的唯物論の根本的命題と、不可分離的な連絡を有するものであるから。

私はすでに、この物語の第一回の二、『辯證法的唯物論(總說)』の終りにおいて、この問題に關するレーニンの言葉を引用した。それはこの問題をば、簡單に、しかも異常な明白さをもつて、說明してゐると思はれるので、幾分の

『世界經濟の中における個々の各生產者は、生產技術の上にこれこれの變化をもたらしたことを意識してをり、各〻の商品所有者は、彼れがこれ〳〵の生產物を他と交換したことを意識してをるが、しかし生產者も商品所有者も、彼等がこれによつて社會的存在を變化することを、意識してゐない。資本主義的世界經濟の內部における斯かる諸變化の一切の總計をその一切の分岐にわたつて知りつくすことは、マルクスが七十人ゐてもなしえなかつたであらう。たかだか成し遂げられたところのものは、かゝる變動の諸法則が主要な根本的な筋道において發見され、かゝる變動の客觀的論理とその歷史的發展とが啓示されたことである。――こゝに客觀的といふは、意識體たる人間から成り立つてゐる社會が、意識體の存在とは無關係に存在し且つ發展しうるといふ意味においてではなく、社會的存在は人間の社會的意識から獨立してゐるといふ意味においてである。諸君が生活をなし經濟を營み、子を產み生產物を造り、またそれらの生產物を交換するといふ事實から、出來事の一の客觀的に必然的な連鎖、一の發展の連鎖が成り立つのであ

一六三頁。)

私はこれまで他の論文においても、すでに幾度かレーニンの以上の言葉を引用した、と記憶してゐる。だが今に至るもなほ、この言葉のうちに含まれてゐる意味の豐富さは、まだ一般的には知られてゐない。(現に私は、この雜誌と時を同じうして發行される他の雜誌において土田杏村氏の批評に答へるにあたり、重ねてこの問題に觸れることを餘儀なくされてゐる)。吾々は執拗にこれを擁護し××せねばならぬ。

吾々は決して、生産および交換に關する吾々の個人的活動が無意識的に行はれてゐると言ふのではない。例へば私が紡績業の一經營者として、新たに發明された或る機械を、他の同業者に卒先して利用することにしたとするならば、その場合私はもちろん無意識に行動してゐるのではなく、むしろこれによつて勞働の生産力はどれだけ増加するか、從つて生産物たる絲の生産費はどれだけ節減されうるか、等々、これによつて生ずべき生産技術上の一々の變化を意識してゐるのは無論のこと、これによつて差しあたり私自身の個人經濟の上に生ずべき利益等々をも、またあらかじめ私の意圖内におくのである。だが、私が新たなる機械を利用したといふことは、やがて他の同業者を刺激して同じやうなる機械の採用を餘儀なくせしめ、しかるかぎりにおいて絲價の低落を招き、資力の乏しきため同樣の機械を利用しえざる小企業者を倒産せしめ、かくて一方においては資本の集中を助長すると同時に、他方においては不變資本(原料機械等に放下された資本)と可變資本(勞賃の支拂に充てられた資本)との割合に關する社會的平均の上に變化を生ぜしめ、そのことはまた、一方においては勞働者の失業數を増加せしめ、社會的全生産物の配分を勞働者階級のため益々不利ならしめると同時に、他方においては平均利潤率の漸次的下落の傾向を生み、從つてまた小資本家の沒落を早める、等々、それからそれへと『出來事の一の客觀的に必然的な連鎖』を生むに至るのであり、そのことのために、小資本家と大資本家との社會的關係、資本家階級と勞働者階級との社會的關係、等々、一言にしていへば吾々相互の間に結ばれる社會的諸關聯——すなはち吾々の社會的存在——が、徐々に・しかし必然的に・一切の分岐にわたつて變化されることになるのであるが、總てそれらのことに至つては、最初意識的に機械を利用したものも、差しあたつては、意識せざるところのものであり、意識しえざるところのものである。

以上のことは、誰にとつても極めて理解し易いことであるが、それにも拘らず之に關していつまでも種々なる誤解が殘存するのは、社會を構成してゐる個々の個人が意識體たるがためである。これを前に

げた例について言へば、例へば私が紡績業者として或る新たなる機械を採用するとき、私はもちろん無意識に行動するのではない。既に述べたやうに、私はかゝる新たなる機械の應用によつて生ずべき生産技術上の一々の變化を意識してゐるのは勿論、これによつて差しあたり私自身の個人經濟の上に生ずべき利益等々をも、またあらかじめ私の意圖内におくのである。かくの如く意識的に活動するといふことは、人間の特徴である。そして社會はかゝる意識體たる人間から成り立つてゐる點において、地球が無機物から構成されてゐるのとは異なる。だから社會の運動は、地球の運動と異なり、かゝる意識體の意識的活動と無關係に行はれるのではない。このことから人々は、吾々の社會的存在までが吾々の意識的産物であるかに思ひ込むのであり、そのために史觀は『觀念論にとつての最後の逃げ場』となつてゐるのである。

だが、吾々はこれに對して、人間の社會的存在はその社會的意識から獨立してゐるといふのである。吾々の社會的存在はどうなつてゐるか、それが日々どう變化してゆくか、これらのことは、吾々が一々意識してゐるところでもなく、また意識されうるものでもない。これが吾々の主張である。

私はこの物語の第四回の七の終りの部分で、『資本主義が今日若々しい急速な前進をなしつゝある主なる領域は、トルコおよびアフガニスタンである。これらの兩國は、經濟的にも思想的にも、今や極めて急速に封建制から資本制へ推移しつゝある。同樣にまた、イギリスの諸領地および南アメリカの若干の國々においても、資本主義は急速に發展しつゝある。かくてこれを世界全體について見れば、一方においては、資本主義的經濟の體系一般の上に××××が益々著しく現はれて來てゐるとはいへ、他方において、資本主義的な生産樣式はなほ地理的に擴大され、資本主義的に生産される貨物の分量は次第に增加しつゝあるのである』と述べておいたが、現在における吾々の社會的存在に關する斯かる鳥瞰圖的な概觀ですらも、現に大多數の人々によつて少しも意識されてはゐない。況んや『資本主義的世界經濟の内部における諸變化の一切の總計をその一切の分岐にわたつて知りつくすことは、マルクスが百人ゐても成しえざるところである。』

アドラトスキーの『レーニン主義の理論と實踐』には、この點に關し次ぎの如く述べてある。『思惟は存在によつて決定される。……吾々は特に、現實の社會關係を、それについて人間が考へてゐるところのもの（すなはち人間の觀念）と混同することなく、眞實あるがまゝに究明しえねばならぬ。この二つの事柄が異なるものだといふことは、吾々が歷史の一歩々々に見るやうに、一定の社會關係が成熟し且つ實

在してゐても、それに對する意識はなほ缺けてをり、人々は未だ彼等自身がなすところのもの總てを明細に理解してゐないといふことによつても、明白になる。最初に關係が成熟し、然るのち意識が生じ、人人はそれを理解し始める。八十年代のロシアにおいては、資本主義はすでに疑ふべからざる事實であつたにも拘はらず、その頃において、ロシアの資本主義とは無意味なことだと論證した「學者」たちの著述が現はれた。更にまた九十年代においても、ロシアに資本主義ありや否やについての、ナロードニキとマルクス主義者との論爭が、續けられてゐたのである。』(前掲書、三頁)。

私はこゝまで書いて來て、いま我國の左翼陣營内に起つてゐる討論を聯想せずにはゐられない。吾々の偉大なる教師が言つてゐるやうに、『吾々の理論はドグマではなく、××の××××である』。意識によつて存在が規定されるのではないとの唯物論的見地は、吾々が吾々の鬪爭において客觀的存在を常にあるがまゝに認識すべきことを要求する。レーニンはその名著の一たる『小兒病』において、ドイツの×××××を批評して次ぎの如く言つてゐる。

『ドイツの「急進主義者」たちが、彼等の希望を(レーニン傍點)・この問題に關する彼等自身の觀念的および政治的態度を・客觀的な現實となしたことは、明かである。これは××にとつて最も危險な過誤である。特別に野蠻な殘忍なツァーリズムの羈軛が特別に長い期間にわたつて、種々なる方向の極めて多種多樣なタイプの×××を・驚異に値する獻身と熱意と剛勇と意志の力とを具へた×××を・造り出したロシアにおいて、吾々は×××の斯かる過誤をす間近で觀察し、特に注意深く研究して來たのであるから、吾々は特によくこれを知つてをり、從つて他國における斯かる過誤が特に明瞭に眼につく。』(ドイツ本、四七頁。和田氏譯本、七三頁。)

自分たちの希望を客觀的な現實とすりかへることは、取りも直さず唯物論の徹底的な放棄を意味するのであるから、それは實に『最も危險なる過誤』を齎らさざるをえないのである。私は今かゝる××××××××見てゐるかに感ずるが、しかしこゝでは、それについて最早やこれ以上立ち入るべきではあるまい。

吾々は當面の問題から離れよう。だが、アドラトスキーの擧げてゐる僅か一二のロシアにおける實例によつて見ても、社會的存在の變化は容易に吾々の意識に上ぼるものでない、といふことが分からう。『思惟は存在によつて決定される。だが意識がこの決定へ從ふことは、時として極めて緩漫である。』(アドラトスキー、前掲書、四頁)かくて『變化する現實と同行しえない意識は、「昨日」の現實を反映して、

るに』すぎない。（前掲書四頁に引用せるレーニンの言葉）。ところで、『吾々の政治的活動はネヴスキイ街の鋪石道（ペトログラードの眞直な大通りの・奇麗な・廣い・平坦な・鋪石道）ではない』。それはむしろ險難に充ち〳〵た前人未踏の山嶽を攀ち登るに等しい。しかるにもし吾々が、自己の希望といふが如き意識または『昨日』の現實を反映してゐるにすぎない意識を、客觀的に現存する『今日』の現實とすりかへつゝ、この險難を渡らうとするならば、それは眼を閉ぢて千仭の壑に臨むが如きものであり、そこでは最も危險なる過誤がたやすく犯される。だから、意識から存在が生まれるとなさず、逆に意識をもつてたゞ存在の反映にすぎないとなす唯物論者は、一切の活動の前提として先づできうるかぎり正確なる客觀的存在の認識を必要とする。このことを心得ないものは、マルクス主義のイロハを理解せざるものである。だから一般的な問題としては、マルクスは何よりも先づ資本主義社會の科學的分析に主力を費したのであり、レーニンもまた、『人類の最高課題は、一般的な根本の筋道における經濟的進化（社會的存在
論理を把握し、人類の社會的意識と總ての資本主義
るかぎり明白に

今かゝる吾々の社會的存在の基礎的構造をなすものは、經濟的諸關係（マルクスの謂ふところの生產諸關係）であつて、それは、すでに前回に述べたやうに、大まかに言へば、古代共產制から奴隷制へ、奴隷制から農奴制（すなはち封建制）へ、また農奴制から現在の賃勞働者制（すなはち資本家的社會）へと、轉形し來つたものである。なほこれらの社會諸形態は、自然發生的な原始共產制を外にしては、すべて搾取する階級（例へば奴隷の所有者、封建的領主、資本家、等々）と・搾取される階級（例へば奴隷、農奴、賃勞働者、等々）と・に分裂してゐるのであるから、それに應じてまた、搾取する階級が搾取される階級を××的に××するための××としての××××が、そこに共通に存在してゐる。それが經濟的基礎の上に生ゐ立つ上層建築としての、從つてまた經濟的基礎の特殊性に適應してそれ〳〵の特殊性を具備するところの、社會の×××××である。この×××構造が如何に××階級の×××階級に對する××を××ためのものに外ならぬかについては、すでに前回において極めて不充分ながら若干の暗示を試みておいた。今はそれ以上これに立ち入ることを控へる。
の如き社會の經濟的構造——それはそれに適應するところの
、すなはち社會の實在的

な・物質的な・土臺であり、それが取りも直さず吾々の社會的存在なるものである。そして吾々は今日まで、かゝる社會的存在の種々なる樣式を、少くともその成立の最初のうちは全く無意識的に、つぎ〳〵に維持し來つたのである。それに關する吾々の意識的作用は、いつでも、それがすでに出來上がつてから後の祭である、この點に關し、『資本論』第一卷の『商品の物神崇拜的性質とその秘密』と題する有名なる節のうちには、次ぎの如く述べてある。

『人間生活の諸形態に關する思索は、從つてまたそれらの科學的分析は、一般に、現實の發展と反對の道行をする。それは post festum 〔後になつて〕、そしてそれゆゑに發展過程の 出來上がつた諸結果をもつて、始まる』。（カウツキー版、三九一頁）

この一句は、數年前福本和夫氏が力強く引用されてからこのかた、我國のマルクス主義文獻に通ずる人々にとつては周知の句となつてゐるが、少くとも私は今日までこの句の意味を正確には理解してゐなかつたと考へる。（拙著『資本論入門』、合本版、四一二頁參照）。マルクスはこゝで特に post festum といふラテン語を使つてゐるが、もし私が誤解してゐるのでなかつたら、これは『祭の後』といふ意味であつて、あたかも日本語で『後の祭』といふのと、言葉の感じは同じものなのであらう。かくてマルクスの言ふところは、これを別の言葉で言ひ現はせば、次ぎの如くなるであらう。『人間生活の諸形態（言ひ換へれば、人間の社會的存在の諸形態）に關する思索は、從つてまたその科學的分析は、いつでも後の祭であり、すでに發展の結果として一定の形態が出來上がつてしまつた後に、それについて始めて行はれるものである。』考へて見ると、これは當然のことでもある。何故なれば、社會的意識は社會的存在の反映に外ならぬのであるから、社會的存在の一定の形態が先づ出來上がつてしまはねば、それについての一定の意識が確立され、それに關する思索が行はれ始めるといふことは、ありえないからである。

これによつて見れば、人間の歴史を『社會的意識すなはち種々なる哲學的の・宗教的の・政治的の・學說および見解』から說明しようとすることが、如何に本末顚倒であるかが分からう。社會的存在に關する思索——かゝる觀念的なもの——は、すべて事後に行はれる『後の祭』である。それはそれに先だつて行はれた本當の祭を反映してゐるにすぎない。反映してゐるものから反映されてゐるものが說明さるべきではなく、逆に反映されてゐるものからその反映が說明されねばならぬ。譬へば、私の寫眞から私が生まれるのではなく、たゞ私の現實的な存在が寫眞に映されたにすぎないのだから、そこに寫つてゐる姿が何故これ〳〵の形をしてゐるかは、實物の私がかく〳〵の姿をして

るといふことからのみ、說明されねばならぬ。マルクスが『政治經濟學批判』の序言中における有名なる唯物史觀の公式において、『社會の××を觀察するにあたつては、吾々は常に、經濟上の生產諸條件のうちに起れる物質的の・自然科學的に忠實に確證されうる・××〔すなはち社會的存在の××〕と、人間がそのうちで斯かる衝突〔生產諸力と生產諸關係との衝突〕を意識せしめられ且つこれを克服するに至るところの、法律的の・政治的の・宗教的の・藝術的の・ないし哲學的の・簡單にいへば觀念的の・諸形態〔すなはち社會的意識の諸形態〕とを、區別しなければならぬ』と言ひ、且つ『かゝる××時代をばその時代の意識から判斷することは、たゞに不可能であるばかりでなく、むしろこの意識なるものが、物質的生活〔すなはち社會的存在〕の矛盾から・社會的生產諸力と生產諸關係との間に現存する衝突から・說明されねばならぬのである』と言つてゐるのは、そのためである。

安部磯雄氏の『社會民衆黨綱領解說』なるものを見ると、そこには『要するに危險思想は多くは生活難から生ずるものであるから、直接に危險思想を取締るよりも先づ生活難の解決に努力する方が賢明な途ではないかと思ふ』といふ言葉があるが、私から見ると、これは少し滑稽に聞える。何故なれば、氏が『努力』しようとしてゐられる『生活難の解決』なるものは、すべて資本主義の埒内において行はれることを條件としてゐるのであり、結局のところそれは資本主義の永久的維持のための『努力』を意味するに外ならぬが、もしさうだとすれば、それは同時に、資本主義的な社會的存在の思想的反射たる××××××を××せしめ××せしめるための『努力』にすぎぬこととなるから。もしまた、氏の謂はゆる『生活難の解決』なるものが、眞に徹底的な解決を意味するのであれば、それはそれ自身がブルヂョアジーから見ての謂はゆる×××に外ならぬであらう。被壓迫大衆の生活難を×××××に解決せんとするマルクス主義は、マルクスの言葉によれば、『人間がそのうちで生產諸力と生產諸關係との衝突を意識せしめられ且つこれを克服するに至るところの・一の觀念形態』である。更にエンゲルスの言葉によれば、『生產諸力と生產方法との間における斯かる衝突は、例へば人間の原罪と神の公平との衝突などのやうに、人間の頭のなかで生じたものではなくて、それは客觀的な・吾々の外部にある・それを齎らした當の人間の意志または行動そのものからは獨立の・諸事實から成り立つてゐる』のであり、そしてブルヂョアジーまたはその辯護者たちの謂はゆる×××は、『かゝる事實上の衝突の思想的反射であり、直接この衝突のもとに苦しむ階級たる勞働者階級の頭の中に先づそれが觀念的に反映したものに外ならぬのである。』(『反デューリング論』、ドイツ本、二八七頁)。すでに生產諸力の發展

に對する桎梏に轉化した資本主義が吾々の社會的存在を規制する客觀的事實として存續するかぎり、近代社會主義は――マルクス主義は――××にも××にも『×××』ことのできるものではない。それは『文字通り全的生活の一切の部門から「發生」する、その××は絶對的にいたるところに存する、その「××」は（ブルジョアジーおよびブルジョアの××が×××用ひる表現と、彼等に×××××の比喩とを用ひれば）、極めて力強くからだのなかへ侵入してをり、からだの全體に浸潤してゐる。特別な注意をもつて一つの出口を塞ぐならば、「××」は他の・全く×××・××××××。……あらゆる場合に、あらゆる國々において、それは××なり、××する。それは極めて×××を据えてゐるために、××はこれを弱めることも衰へさすこともできず、×××××××つつある』。それは資本主義的な吾々の社會的存在が、吾々の頭腦に反映することによつて生じた社會的意識であるから、吾々の資本主義的な社會的存在に含まれてゐる××が××すればするほど、それは××××××××。

十、唯物史観（その4.――プロレタリアートの認識の武器――必然の王國から自由の王國への跳躍）

これを要するに、一定の經濟組織（一定の生産諸關係の總和）は、そのもとにおける生産諸力の發展が一定の段階以上に達した結果、生産諸力のそれ以上の發展に對する桎梏となることにより、破棄され止揚されて、新たなる・より高度の・經濟組織にその席を讓る。かくて古代共産制は奴隷制へ、奴隷制は農奴制へ、農奴制は賃勞働者制（資本家的生産制）へ轉化する。これが社會の經濟的基礎構造の變革として第一段に理解さるべきことである。なほ從來の階級社會にあつては、かゝる基礎の上に、常に一定の政治的上層建築が生ゐ立つてゐる。これはもちろん基礎構造の××につれて××する。これが第二段に理解さるべきことである。最後に社會的認識は社會的存在の反映に外ならざるがゆゑに、かゝる社會的意識（種々なる哲學的の・宗教的の・政治的の・學説および見解）から成る觀念的上層建築もまた、經濟的基礎の變動につれて變動する。これが第三段に理解さるべきことである。

かくて最も肝要なことは、吾々が何等かの社會現象について語るとき、吾々は常にその現象の地盤たる經濟上の基礎事實――なかんづく××の××――に着眼せねばならぬといふことである。レーニンはいふ、「奴隷制の原始形態から封建制度への・そして遂には資本主義・

社會の推移の基礎的事實に、諸君は常に着眼しなければならぬ。何故なれば、吾々がこの基本的な枠のうちに總ての政治學說をあてはめる時にのみ、〔これは××についての講演の一節であるから、こゝでは特に政治學說について述べてあるが、それはもちろん總ての諸思想に妥當する〕、吾々はこれらの學說を正當に評價し、それらが何に關係してゐるかを理解しうるからである。けだし人類の歷史のこれらの大なる時期——奴隷制度、封建制度、および資本主義の時期——は、いづれも各〻數千年、數萬年を包括してをり、多くの政治形態・多種多様な政治學說・諸種の思想・諸種の××・を呈示してゐるが——しかもブルヂョア學者や政治家たちの政治的・哲學的・およびその他の・諸學說と特に結びついてゐるこれらの異常な複雜さと甚だしき多樣性との中にあつて、吾々がその途を誤らざることは、たゞ社會のこの階級の分裂の主要規準としての階級支配の形態變化を手がかりとし、この觀點からすべての社會諸問題——經濟的・政治的・精神的・宗教的・その他の・諸問題——を研究する場合にのみ、可能だからである。』（『國家について』、『社會問題研究』第九十三冊、一〇頁）。

まことにマルクスの言ふ如く、『經濟的基礎の變動につれて、巨大な……のすべては、あるひは徐々に・あるひは急速に・××す……、かゝる××によつて描かれてゆくの

である。（××なきところ歷史なし。もし人が現存の諸制度をもつて永久的なものとなすならば、その人は、『嘗ては歷史なるものが存在したが、今日はもはや歷史が存在しなくなつた』と主張するものである）。そして斯かる××を以上の如き見地に立つて把握するかぎり、唯物論は歷史の領域にまで徹底せしめられ、かの意識または精神をもつて本源的なものとなす觀念論は、『その最後の逃げ場たる史觀から追ひ出される』。かくて唯物史觀は提供された。

しかも唯物史觀が提供されたといふことは、人間の歷史の必然的な動きが始めて科學的に理解されたといふことであり、そしてそのことは同時に、人間が盲目的に歷史の自己運動のなかに卷き込まれることを已め、意識的に自分自身の歷史を〔言ひ換へれば、意識的に自分自身の社會的存在を〕形成しゆく可能性を具ふるに至つたといふことを、意味するのである。かくて人間の歷史は、斯かる認識の確立と共に、その本質を一變せねばならぬ。何故なれば、必然の認識によつて人はこゝに新たなる自由を得るから。

古代共產制、奴隷制、農奴制、および現存の資本家的制度と、これまでの社會形態はみな無意識的に形成されたものであり、かゝる社會形態のもとに描かれ來つた今日までの歷史は、社會的統制から逸脫してゐる生產諸力の絕えざる發展のために、それらの生產諸力と生產諸

觀點からすべての社會諸問題——經濟的・政治的・精神的・宗教的・その他の・諸問題——を研究する場合にのみ、可能だからである。」（『國家について』、『社會問題研究』第九十三冊、一〇頁）。

まことにマルクスの言ふ如く、『經濟的基礎の變動につれて、巨大なる上層建築のすべては、あるひは徐々に・あるひは急速に・××する』[illegible]

に、その本質を一變せねばならぬ。何故なれば、必然の認識によつて人はこゝに新たなる自由を得るから。

古代共産制、奴隷制、農奴制、および現存の資本家的制度と、これまでの社會形態はみな無意識的に形成されたものであり、かゝる社會形態のもとに描かれ來つた今日までの歴史は、社會的存在から發生し[illegible]

關係との間に必然的に生じる矛盾が、一の『自己運動』として盲目的に繼起せしめた自然史的過程の連鎖に外ならぬ。それはまことにマルクスのいふ如く、『人類社會の前史』(die Vorgeschichte der menschlichen Gesellschaft) たるにすぎない。しかるに今やこの前史は次第にその最後の頁に近づきつゝある。それはすでに『社會的生産過程の最後の×××形態』たる資本主義にまで發展し、そしてその資本主義は更にその最後の階段たる帝國主義の時代にまで押し進んでをり、そのために、この資本主義の體系内に含まれる××は、今まさに未曾有の××を呈してゐる。『しかし資本家的社會の胎内で發展した生産諸力は、〔それがこの社會内における階級的××を××せしめる主要動因であるにも拘はらず〕、この××の〔個々人の社會的生活諸條件から生ずる×××關係の、窮極的な徹底的な〕解決のための物質的諸條件を造り出した。』今や生産手段を社會の×××のもとに移し、社會的生産を××××統制し、生産諸力と生産諸關係とを××××調整しゆくことが、××となりまた××となつた。しかし生産手段を社會の××××のもとに移せば、×××××××××存在しえなくなり、從つて他人により×××××××も存在しなくなり、階級と階級との××一般が廢除される。なほ生産諸力と生産諸關係とが××××調和されることになれば、兩者の矛盾撞著によつて惹き起される『自己運動』としての自然史的過程もまた止揚される。一言にして蔽へば、すべて從來の歴史においてその動力となつてゐた生産諸力と生産諸關係との間における矛盾、その人的表現としての搾取階級と被搾取階級との間における××、これらのものがみなその跡を絶つ。『かくて人類社會の前史は、資本家的社會形態をもつて、その×××××。』吾々は今、人類の××歴史——前史に對していへば本史——の第一頁がまさに描き初められんとする・その×××××してゐるのである。そして唯物史觀なるものは、人類の歴史における斯かる××××××××の時機にあたり、人類がそれ自身の社會的存在の××過程に對して有するに到りし自覺の産物として、かゝる×××××× ××××××××××××——『あれやこれやの或る特殊なる階級組織の××またはあれやこれやの或る轉換なる階級的××の××ではなく、實に階級一般を××せんとするの要求を、歴史上はじめて提起しうる×××、さうだ、この要求を實現しなければ支那の苦力(クーリー)の境遇に沒落するの外なき状態のもとにおかれた×××』——のために提供された『偉大なる認識の××』である。

これによつて××××が——從來吾々の生活を拘束し支配し來れる盲目的な自然法則が——認識される。この認識によつて、吾々は始めて、吾々自身の生産物によつて支配されることから免れうるの可能

性を得る。『自由は、自然法則からの夢想的な獨立のうちに橫たはるのでなく、この法則の認識のうちに・且つその認識によつて與へられたところの、その法則を××に一定の××のため働かしめることの可能性のうちに・橫たはるものである。』(エンゲルス『反デューリング論』、ドイツ本、一一二頁)。『社會的に作用する諸々の力は、吾々がこれを認識せず、またこれを考慮に入れざるかぎり、自然の諸力と同じやうに、盲目的に・無理やりに・破壞的に・作用する。だが吾々が一たびこれを認識し、その活動・その方向・その作用・を把握するならば、それをば益々吾々の意思に從はしめ且つ之によつて吾々の×××××ることは、全く吾々の勝手になる。このことは特に今日の強大なる生產諸力にあてはまる。吾々がこの生產諸力の性質と特性とを理解することを執拗に拒んでゐるかぎり、――資本家的な生產の仕方とその辯護者たちは斯かる理解を受けつけないでゐるのだが、――しかるかぎりにおいて、これらの生產諸力は、吾々に係はりなく、吾々に反抗して作用し、吾々を支配する。だが一たびその性質が理解されたなら、生產者たちの掌中において、×××な×××から溫順……その落雷中の電氣の相違の如きものである。遂に認識されるに至つたその性質に從つて今日の生產力を取扱ふことにより、社會的生產の××××の代りに、全體ならびに各個人の××に×じてなされる社會的な××××な生產の規律が行はれることになる』。かくて資本主義的生產は××××××××××××、吾々の社會的存在の形態はこゝに××××を閲するに至るのである。『資本家的な生產の仕方は、人口中の大多數のものを益々多くプロレタリアに轉化することにより、かゝる×××××××××完成せざるをえない力を作り出す』。(以上、『反デューリング論』、ドイツ本、三〇〇―三〇一頁)。このプロレタリア階級こそは、遂に一切の××××××はされることなく、『彼等の頭のなかに抵抗しがたき必然性をもつて多かれ少かれ明かな姿で迫りくる明白な物的事實』のために、乘りかゝつたこの舟を――この舟全體を――沒落の難所から救ひいだす唯一の可能な道を發見する。辯證法的唯物論――唯物史觀は、プロレタリアートが斯かる道程を進軍するに際し、あるときは突貫し、あるときは廻り路をなし、あるときは後に戻り、最初の出發點から別の方向へ出直す等々、あらゆる複雜な××をとることを餘儀なくされつゝ、しかも最も確實に且つ最も迅速に××××に到達せんた……動の指導原理』となるものである。

ところで斯かる目標が遂に××されえたならば、吾々は、物質的生活の社會的生産の領域において、可能なかぎりの自由を獲得する。もちろんマルクスの言へる如く、眞の意味における『××の××は、必要および外的目的性によつて規定されてゐる××が廢止されるところで、事實上はじめて始まる。それは事物の性質上、本來の物的生産の領域のかなたに横たはる。野蠻人が彼れの欲望を滿足するために、彼れの生活を維持し再生産するために、自然と鬪はねばならぬと同じやうに、文明人もまた同じことをせねばならず、且つ彼れはそれを如何なる社會形態のもとでも、またあらゆる可能な生産の仕方のもとで、さうせねばならぬのである。この領域〔物質的生活の領域〕における自由は、社會化されたる人類——協同せる生産者たちが、自然と彼等との物質交換において一の盲目的な力により支配されることの代りに、これを合理的に統制し、彼等の××××のもとに持ちきたし、それをば最小の勞費をもつて・且つ彼等の人間的性質に最もふさはしく最も適當な諸條件のもとで・成就しうることのうちにのみ、存立しうる。しかしそれが依然として必然の領域たることに變りはない。この必然の領域のかなたに、自己目的として値する人間的な力の發展、眞の××の××は始まる。だがそれは、その土臺としての必然の領域の上にのみ開花しうる』。(『資本論』、第三卷、ドイツ本、第二分冊、三五五頁)。だが、かゝる眞の××の××のこなたなる謂はゆる必然の領域においても、將に來らんとする社會においては、吾々と自然との間に行はれる物質交換(社會的生産)が、『合理的に統制』され、吾々の『××××のもとに持ちきたされ』、それは『一の盲目的な力として吾々を支配することを已める』のであるから、その意味において、吾々は『必然』を『自由』に轉化するのである。エンゲルスの言葉によれば、『こゝに始めて人間は、ある意味において、決定的に動物界から訣れ、動物的生存條件から脱して眞に人間的なる生存條件に入る。……今までは歴史を支配してゐたところの・客觀的にして外部的なる諸力は、今や人間自身の統制のもとに服する。この時よりして始めて、人間は完全なる意識をもつて彼等の××を自ら作るであらう。……これ必然の××から××の××への人類の跳躍である』。(『反デューリング論』、ドイツ本、三〇五—三〇六頁。こゝの引用文は、河野・林兩氏の譯文による。)

かくて××の××は全くその××を一變する。唯物史觀は、將來における歴史の斯かる跳躍的變化を自ら意識してゐるのであり、その點において、現在吾々の有するが如き形態における唯物史觀は、從來の歴史にのみ妥當するものとして、——すなはちそのまゝの形態では將來の歴史に妥當しえざるものとして、——それ自身の限界を自覺して

りにおいて、これらの生産諸力は、吾々に係はりなく、吾々に反抗して作用し、吾々を支配する。だが一たびその性質が理解されたなら、それは協同せる生産者たちの掌中において、×××な×××から還順な××に轉化される。それは恰も、暴風雨に際しての落雷中の電氣の破壞力と・電信機や電弧やの手馴づけられた電氣・との差異の如きものであり、また火事を起してゐる火と・人間の役に立つてゐる火と・

は、プロレタリアートが斯かる過程を進軍するに際し、あるときは突……し、あるときは廻り路をなし、あるときは後に戻り、最初の出發點から別の方向へ出直す等々、あらゆる複雜な××をとることを餘儀なくされつゝ、しかも最も確實に且つ最も迅速に×××××に到達せんための『行動の指導原理』となるものである。

ゐるものである。生產諸力と生產諸關係との矛盾、この矛盾より生まれる『自己の運動』としての盲目的な歴史――その經濟的基礎には階級の對立に基づく一の階級の他の階級に對する搾取關係を含み、その政治的上層建築としては一の階級が他の階級を××するための××裝置たる××を有する社會の歴史――は、プロレタリア××の××と共にその××××××。かくてプロレタリア××のための認識の××は、その××の××の後に再び新たなる鑄型によつて鍛錬し直ほされるであらう。まことに辯證法の前には、永遠的なものは何一つとして存在しえないのである。

＊　＊　＊　＊

私はこの物語の『七、唯物史觀、その１』の冒頭にレーニンの言葉を引用し、私の仕事としてはたゞその解說が殘されてゐるだけである、といふことを述べたが、以上をもつて私はこの豫告した仕事をほゞなしおへた。レーニンは言つてゐる、『今日まで歴史および政治に對する見解の上に支配してゐた混亂と獨斷とは、一の社會的生活の組……、如何に他のより高級な組織へ發……的理論はまた言つてゐる、『政治的機構は、經濟的基礎の上に立つ上層建築である。例へば、吾々は、近代ヨーロッパ諸國の各種の政治的形態が、如何にプロレタリアートに對するブルヂョアジーの支配を強めることに役立つてゐるかを、見るのである』と。（同上、同頁）。この物語においては、政治上の問題に論及することが極めて困難である。だから私はこの問題のために特別の節を設けることを斷念した。だが、若干の個所において、少くとも暗示的に、私はこの問題にも若干觸れえたと考へる。レーニンは更に言つてゐる、『人間の社會的意識（すなはち種々なる哲學的の・宗教的の・政治的の・學說および見解）は、社會の經濟的組織を反映してゐる。』（同上、同頁。但しそこでは『意識』が『認識』に誤られてゐた）。このことは、私がこの物語の九においてやゝ詳細に述べたところである。レーニンは最後に言つてゐる、『マルクスの哲學は、完成されたる哲學的唯物論である。それは人類に――殊に勞働者階級に――偉大なる武器を與へた』。（同上、同頁、下段。）このことも、私が今この物語の十において、すでに述べおへたところである。

かくて私はエンゲルスがマルクスの『二つの偉大なる發見』の一つ……見の何物たるやを、大略述べおへたことになる。

ゝなしおへた。レーニンは言つてゐる、『今日まで歴史および政治に對する見解の上に支配してゐた混亂と獨斷とは、一つの社會的生活の組織が、生産諸力の發展の結果として、如何に他のより高級な組織へ發展するかを示すところの、驚くべく完全な・整然とした・科學的理論によつて、置き換へられた』と。（本誌六月號、五一頁上段）。私はこのことを、この物語の七および八の兩節において説明した。レーニン

——殊に勞働者階級に——偉大なる武器を與へた』。（同上、同頁、下段。）このことも、私が今この物語の十において、すでに述べおへたところである。

かくて私はエンゲルスがマルクスの『二つの偉大なる發見』の一つとなした唯物史觀の何物たるやを、大略述べおへたことになる。

提案書に現はれた『新勞農黨』の本質

山川均

（一）

勞働者と農民の合法的な政黨を、理論的原則的に無用とし、合法政黨たることが必然的に社會民主主義の黨、ブルジョア第三黨たることを意味するといふ理論の上に立ち、合法政黨の組織をもつて、支配階級への降伏、裏切り、陰謀、卑怯者、恥知らず等々であると主張し來つた大山郁夫氏らが、『稍々唐突』（提案書の言葉を借れば）にも、合法政黨樹立の提案を發表せられたことは、大山氏らの属する分派そのものゝ間には、異常の衝動を起したものゝ如くである。たしかにこの提案は、大山氏らの言葉で云へば、大山氏らと『がつしりと腕を組んで』ゐた人々をこそ愕然たらしめるに充分なものではあるが、大山氏らと如何なる場合にも『幻想』を共にしてゐなかつた冷靜な觀察者を驚かしめるには足りないものである。なぜならば、わが國のあらゆる條件の下においては、合法的な、大衆的な、無産政黨の必要缺くべからざることは、これこそ數年前において、既に『討論終結になつてゐること』であつて、若し大山氏らが、少數の熱情家を大衆に見立てつゝ、その喝采の前に英雄的な身振りを演ずることを以つて滿足せられるものでない限り、若し大山氏らが、わが國の勞働者と農民とその他の一切の被壓迫階級の間に蓄へられてゐる、帝國主義ブルジアジーに對する一つの現勢力に結成することを望まれる限り——言葉を換へて云へば、大山氏らが、眞實に大衆と共に——幻想の上の大衆ではなくて冷やかな現實の大衆と共に、『强力に、現實的に、効果的に』鬪はれんとするものである限り——そして鬪はれんとする瞬間において——必然に、不可避的に、前述の必要の承認を餘儀なくせしめられるといふことは、當然自明のことだつたからである。

大山氏らの名をもつて發表せられた合法政黨樹立の提案書は、滔々數萬言、美辭麗句をもつて織り成されて居り、河上肇氏の禮讃の辭を借りて云へば、何等かの意味において『我國においては稀に見るとこ

ろの』宣言である。この宣言のうちには、多くの驚くべきことが言はれてゐる。ことにその各々の部分は、互いに駁撃し、互いに誹謗し、互いに嘲り合つてゐる。從つてこの宣言を詳細に分析し、解剖し、批判することは、たゞに興味の問題であるばかりでなくて、無産者運動の全體に取つて必要なことであるが、こゝにはその餘白がない。またこの宣言が、數萬言の努力によつて試みてゐることは、要するに昨日まで絶對に有害無用であつた合法政黨が、今日何故に絶對の必要となつたかを說明することである。この宣言の稀有性もまた、この說明に懸つてゐる。しかしこの重要な點についても、こゝには詳論することができないから、唯だ次の事柄を指摘するに止どめておく。即ちこの宣言が、かゝる變化を正當化するために數萬言を費やしてゐる吾が國の形勢についての記述は、形勢の記述そのものとしては大體において正しいとしても、それは合法政黨が夙に必要であつたといふことを立證してゐるものであつて、階級的裏切だつたところの合法政黨の樹立を、今日突如として『寸刻も躊躇することの許されない』必要たらしめた理由を說明するものでは斷じてないといふことである。

この點について、私がこのところに詳論しないのは、與へられてゐる紙數が極めて少ないからであつて、この點に含まれてゐる理論上の[illegible]るからではない。或人は云ふだ

は慥かに美しい態度である。けれども新興階級の解放運動の上には、おのづから異つた道德が支配しなければならぬ。苟も重要な根本問題について、無原則、日和見主義、理論上の無節操が許される間は、眞實に有力な鬪爭の展開を考へることはできぬ。一切の罪障を憐むべきいけにへの小羊に負はしめるように、謂ゆる『客觀的情勢の變化』に一切の責任を負はしめる理論上の無節操と日和見主義が、「わが國の無産者運動に現はれた最近兩三年來の著しい風潮であることは、爭ふことができぬ。そしてこの風潮を造り出した責任を負ふべきものが何者であつたかは、周知の事柄である。わが國の無産者運動は、もし、、、、、、への一歩を踏み出そうとするならば、先づこの無原則と日和見主義の淸算から始めなければならぬ。

(二)

この重要な問題については、以上に言及したことを以つて滿足し、直ちに、本文の目的とする今一つの問題に移らねばならぬ。今一つの問題とは、この提案書の提案する政黨は、どのような性質の政黨であるか？　といふ問題である。この政黨が、實際には如何なる政黨として成立し、また如何なる性質に向つて發達するかは、固より別個の事柄であるが、假りにこの提案書の根本理論に一致した政黨が組織せられ[illegible]したらどのような本質を備へた政黨となるかといふことは、[illegible]則[illegible]いふ理

階級的裏切だつたところの合法政黨の樹立を、今日突如として『寸刻も躊躇することの許されない』必要たらしめた理由を説明するものでは斷じてないといふことである。

この點について、私がこのところに詳論しないのは、與へられてゐる紙數が極めて少ないからであつて、この點に含まれてゐる理論上の問題、ないしは節操上の問題を輕視するからではない。或人は云ふだらう。兎も角も、結果においては、合法政黨の承認ではないか、嚴密な批判の必要はないではないかと。封建武士の道德から見たゞに、これ

（二）

この重要な問題については、以上に言及したことを以つて滿足し直ちに、本文の目的とする今一つの問題に移らねばならぬ。今一つの問題とは、この提案書の提案する政黨は、どのような性質の政黨であるか? といふ問題である。この政黨が、實際には如何なる政黨として成立し、また如何なる性質に向つて發達するかは、固より別個の事柄であるが、假りにこの提案書の根本理論に一致した政黨が組織せられるなら、それはどのような本質を備へた政黨となるかといふこと、この提案の根本理論（ないしは根本的無理論）に對する若干の理

論上の問題としても、またこの提議に應じて新政黨の樹立に參加する人々が、この新政黨を正しい方向に導くといふ實踐上の見地からも、先きの問題に劣らぬほど、重要な問題だと思ふ。

提案者は、どのような政黨を樹立しようとしてゐるか? 提案者は、これに對する答――『新勞農黨』の性質、任務、組織形態――を六つの項目に分つて規定し（提案書、第三三頁）。これを『合法的左翼政黨』と名づけてゐる。けれどもこの六つの項目中の第三項を除くの外は、大體において、無産政黨が無産大衆の政治鬪爭の組織である限り、寧ろ當然自明とするところのものであつて、この提案せられた政黨を、何ら特異な政黨たらしめるものではない。この六つの項目の關する限りでは、提案者の謂ゆる『合法的左翼政黨』なるものは、たゞ單なる大衆的協同戰線黨にほかならぬ。

然るに提案者は、第三項において、この新政黨を、たゞの大衆的協同戰線黨とは原理的に異つたものとする。即ち、『戰鬪的戰線統一』の主張がそれである。（註）

（註）『戰鬪的戰線統一』なるものは、曾て×××××によつて雜誌『マルクス主義』の誌上に唱導され、從つて、『獨自の指導部』を持つが如く持たざるが如くであつた當時の舊勞農黨の方針となつたものであるが、それは次の一事に歸着する。即ち、勞農黨は、他の無産政黨とは、指導原理を異にする、從つて無條件的な合同はあり得ない、他の無産政黨に對しては、『これを潰してその大衆を取る』こと、即ち戰鬪的戰線統一あるのみである。戰鬪的戰線統一の意義については、私は曾て雜誌『勞農』の創刊號に詳論したから、こゝには再說せぬ。

從つて、新政黨の特徵的な性質、提案者がたゞの『合法政黨』と云ふことに滿足しないで特に『左翼政黨』と名づけることによつて、その政黨に特異な性質を與へようとしてゐる點は、前述の六つの項目に求むべきものではなくて、第三項に求めなければならぬ。

尤も第三項は、提案者の新政黨が、大衆的協同戰線黨と原理的に性質を異にすることを示してゐるだけであつて、この性質の何たるかは明かにしてゐない。けれども提案者の謂ゆる『左翼政黨』なるものが、一般に理解せられてゐる大衆的協同戰線黨と如何に異つたものであるかは、提案者が合法政黨の必要といふことを如何に理解してゐるかのうちに、明白に現はれてゐる。

（三）

提案者が、絶對無用から絶對必要を認めた『合法的左翼政黨』の本質を如何に理解してゐるかは、私の檢討を待つよりも、提案者の屬する分派の内部において、この提案をめぐつて起つた論爭によつて、一そう明白にせられてゐる。

提案書は、絶對無用であつた合法政黨が『寸刻の躊躇を許さぬ』絶對の必要となつた理由を、客觀的情勢の變化と、主體的條件の變化とによつて説明する。けれども一年前と今日と何ら根本的變化のない客觀的情勢の描寫が、何らこの理由を説明せぬことは先きにも言及した通りであつて、若し何らかの變化によつて説明しなければならぬとす

れば、それは唯だ、提案書の謂ゆる『主體的條件』の變化によつてでなければならぬ。そして、提案者の屬する分派における論爭の核心となつてゐるものは、まさにこの『主體的條件』の變化についてゞある。

この提案が一度び現はれるや、その分派の間からは、猛然として反對の叫が揚がり種々なる團體の名によつて『反對』『排撃』の決議と宣言とが公けにされた。しかるにこれらの反對論の焦點は、次の一點に歸着する。

『勞働者農民の××を代表し、最後まで闘ひ抜き得る×××××が厳存し、しかも次々に日常闘爭のカンパアを組織し行きつゝある今日、吾々は絶對的に、もう一つの政黨を必要としない……かゝる具體的事實を否定してまでプロレタリアの政黨の原則である一階級一政黨の適用をまで歪める時、其處に吾々は一階級一政黨の外に、即ち×××の外に、歪められたる社會民主主義政黨の出現を見ねばならぬ……』（八月十四日、『無産者新聞。』）

これに反して、提案書は主張する——プロレタリアートの黨は唯だ一つしか有り得ない。これは原則的には正しい。プロレタリアの全政……主體の具はつてゐる場合には、他の

つ無産大衆黨、勞農大衆黨等々を組織したことは、階級的裏切りであつた!!』。

しかるに四・一六事件により、かゝる主體的條件は『殆んど』潰滅に歸した。從つてまた、勞農同盟の活動もまた、不可能となつた。

かような具體的な情勢の下においては、プロレタリアートの黨は唯だ一つしか有り得ないといふ抽象的な原則は、そのまゝ適用することはできぬ。主體的條件が『殆んど』潰滅し、主體が、よし存在はするにしても、實際の指導力が失はれた以上、獨自の指導部を有する合法的政黨は、寸刻の躊躇をも許さぬ絶對の必要である、等々……。

相闘つてゐるこの二つの見解は、或る意味では正反對に立つてゐるが、或る意味においては、完全な一致の上に立つてゐる。そして完全な一致を示してゐる點こそ、根本的な點であり、出發點となるものである。

前衛黨が厳として存すると云ひ『殆んど』潰滅したと云ふことは、一具體的な事實の觀察においてこそ、まさに正反對ではあるが、この事實の觀察が爭點の中心となつてゐるといふそのことは、そも〳〵何を意味するだらうか。云ふまでもなく、提案者も反對者も、合法政黨の必要と不要とを、擧げてこの事實の如何に照らしめてゐるからに外ならぬ。即ち前衛黨の存在と潰滅とによつて、合法的政黨の是認と否認即ち、プロレタリアートには唯だ一

……的事實を否定してまでプロレタリアの政黨の原則である一階級一政黨の適用をまで歪める時、其處に吾々は一階級一政黨の外に、即ち××× の外に、歪められたる社會民主主義政黨の出現を見ねばならぬ……』（八月十四日、『無産者新聞。』）

これに反して、提案書は主張する――プロレタリアートの黨は唯だ一つしか有り得ない。これは原則的には正しい。プロレタリアの全政治闘爭を指導すべき任務を負ふた主體の具はつてゐる場合には、他の無産政黨を組織することは、階級的裏切りである。曾てはこの主體的條件が備はつてゐた。それ故に、獨自の指導部を有しない勞農同盟が正しいものであつた。（それ故にまた、この時期に、獨自の指導部を持

な一致を示してゐる點こそ、根本的な點であり、出發點となるものである。

前衞黨が嚴として存すると云ひ『殆んど』潰滅したと云ふことは、具體的な事實の觀察においてこそ、まさに正反對ではあるが、この事實の觀察が爭點の中心となつてゐるといふそのことは、そもそも何を意味するだらうか。云ふまでもなく、提案者も反對者も、合法政黨の必要と不要とを、擧げてこの事實の如何に懸らしめてゐるからに外ならぬ。即ち前衞黨の存在と潰滅とによつて、合法的政黨の是認と否とを決定してゐる點において――即ち、プロレタリアートには唯だ一つの黨しか有り得ないといふ原則の適用を決定してゐる點において

「この二つの見解は、完全に、精密に、同一原則の上に立つてゐる。かゝる根本見解から出發する當然不可避の結論は、一般的な意味での無産政黨と前衞黨とを、互ひに代用し得られるものとする思想である。少くとも、無産政黨に、前衞黨の代用物たる性質を賦與することである。

（四）

から云つたなら、諸君は喚めき立てるだらう――君は前衞黨とその他の無産政黨とを同列に置く、前衞黨に對する許すべからざる冒瀆だ！と。たしかに冒瀆である。けれども若し冒瀆した者があるならば、それは私ではなくて、まさしく諸君以外の何者でも有り得ないといふことを知らなければならぬ。

吾々の理解する協同戰線黨としての、大衆的黨としての、無産政黨、

しようとも、一方を以つて、多かれ少かれ（即ち、充分にか不充分にか他方に代用し得られる性質を持つものだと理解することを意味して居り、またかゝる性質を有するものとしてのみ、提案書の見地からは、合法政黨を是認することに意義がある。

わが國において（恐らくは全世界においても）稀に見るところのこの驚くべき『政治宣言』に含まれてゐるこの驚くべき概念の混亂ないしは錯覺は、わが國の實踐においても、必ずしも稀れに見るものではない。いな反對に、前衞黨と大衆的協同戰線黨としての無産政黨との混同と錯覺とは、無産政黨組織の運動が始まつて以來、常に根強く附き纏うてゐた。この時期における左翼分子の行動に見出される誤謬の大部分は、多かれ少かれこの混亂に累ひされたものだと云つても過言でない。そして或る時期における舊勞農黨は、最も顯著に、この混亂と錯覺とによつて指導せられてゐた。いま大山氏らの提案は、舊勞

勞農大衆黨以下の地方政黨（例へば岩手無產黨、千葉勞農黨、奈良統一無產黨、中國無產黨、等々の如き）が、その『性質』において、完全なブルジョア第三黨とこれに近い日本大衆黨との中間にあることを正式に宣言することによつて、その政黨を、これらすべての無產政黨から原理的に分つてゐる。大衆的協同戰線黨とは原理的に區別せられるところのかような特異な性質をもつた政黨――提案者はこれを名づけて『左翼政黨』と云ふのである。

大衆的協同戰線黨もまた、『勞働者、農民、無產市民その他一切の被壓迫民衆の利害を不斷に、强力に、現實的に、効果的に擁護伸張するために、大衆的日常鬪爭主義を全活動の基礎とする』。協同戰線黨は、たゞにこれを全活動の基礎とするばかりでなく、この鬪爭そのものを以つて、勞働者、農民、無產市民等々のような異つた社會層が一つの政治勢力に結合する、結合の基礎とするものである。かように協同戰線黨は、階級的には、そのうちに反ブルジョア的エネルギーを有する限りにおいての、種々なる社會層の協同戰線であると同時に、意識的には、種々なる意識水準にある異つた要素が、その『利害を不斷に、强力に、現實的に、効果的に、擁護伸長するために』鬪爭するといふ、この鬪爭そのものを唯一の條件とするところの協同戰線を意味してゐる。

…な本質をもつた協同戰線黨としての無產政黨と無產…唯一の基礎とし、

かような協同戰線黨の内部においても、右翼と左翼との傾向のあることは自明である。けれども、右翼的傾向が指導するか左翼的傾向が指導するかは、この二つの傾向の相對的な影響力によつて決定せられるものであつて、右翼的傾向が優勢を占めることの有り得るように、左翼的傾向が優勢を占めることをも妨げない。左翼的傾向が優勢を占めてゐるといふ意味では、この協同戰線黨は、左翼『的』政黨であると云ふことができる。

前衛黨の不存在（或は殆んど不存在）によつて初めて存在の理由を承認せられるが如き本質をもつた無產政黨、從つて前衛黨の任務を充分にか不充分にか代行するが如き性質を賦與せられた特異な無產政黨の、その他の協同戰線黨的無產政黨に對する關係は、これとは全く異つてゐる。その關係は、合同が可能であり必要である關係ではなくて、たゞ征服と被征服とがあるのみである。即ち對立政黨を潰してその大衆を取ること、――戰鬪的戰線統一――以外には、戰線統一の可能がないばかりでなく、その必要がない。いなその『輝ける』（ないしは曇つた）指導精神による征服による以外の一切の統一は、原理的に排擊せらるべきものである。

大衆の現實な鬪爭ではなくて、かような輝やける指導精神、または曇つた指導精神を結合の基礎とする無產政黨は、當然にも、協同戰線黨的無產政黨と自黨とを、永久に並行線を歩んでゐるものとして認識す…ることこの種の政黨は、たゞに左翼『的』政黨たることをもつて滿…らを峻別するものである。

限りにおいての、種々なる社會層の協同戰線であると同時に、[illegible]は、種々なる意識水準にある異つた要素が、その『利害を不斷に、强力に、現實的に、効果的に、擁護伸長するために』鬪爭するといふ、この鬪爭そのものを唯一の條件とするところの協同戰線を意味してゐる。

從つて、かような本質をもつた協同戰線黨としての無產政黨と無產政黨とは、その本質上、かゝる共通の鬪爭の遂行を唯一の基礎とし、條件として、そして指導原理に關する限りにおいては無條件的に[illegible]、同する可能ができる。もしこの可能を不可能たらしめるものがあるとせば、それは少數指導者の宗派心と繩張主義にほかならぬ。

つた）指導精神による[illegible]せらるべきものである。

大衆の現實な鬪爭ではなくて、かような輝やける指導精神、または曇つた指導精神を結合の基礎とする無產政黨は、當然にも、協同戰線黨的無產政黨と自黨とを、永久に並行線を歩んでゐるものとして認識する。從つてこの種の政黨は、たゞに左翼『的』政黨たることをもつて滿足しないで、『左翼政黨』として、恒久的に自らを峻別するものである。

（五）

しかしながら、かような見地に立つものは、無產政黨に前衞黨の代用品たる性質を賦與しようとする指導者のみではない。無產政黨に、ブルジョア政黨の代用物たる性質を押し附けようとする指導者は、精密にこれと同じ見解の上に立つてゐる。この二つの力は、反對の出發點から發足しつゝ、しかも同一方向への影響を、無產政黨運動の上に與へるものである。即ち、無產者政治勢力の分割とその統一の抑制である。この點においては、この二つの勢力は、無意識的な協同戰線の上に立つてゐる。

× × ×

大山氏らの『新勞農黨樹立の提案』は、理上においても實踐上の問題においても、嚴密な批判を受くべき點に滿ちてゐる。私はこゝには、そのうちから、唯だ一つの問題を取り出して批判した。それさへも、既に與へられた紙數を超過してゐるので、唯だ一つの視點から批判したに止どまつてゐる。

それと同時に、私が本文の主題とした問題と、この問題を取扱つた視點とは、實踐の上にも、根本的な重要性をもつてゐる。提案者は、その提案が、決して新たに樹立せられんとする政黨についての、最後の言葉でないことを繰返へし、『黨內デモクラシー』の實現を力說する（曾てはこの黨內デモクラシーを主張して、諸君のために舊勞農黨を逐はれた人のあることは皮肉であるが）。私は新勞農黨に對する提案者の理解が、提案者の言葉の如く、實際においても最後の言葉とならぬこと、言葉を換へて云へば、新勞農黨が、これに參加する一般黨員によつて、舊勞農黨の一切の誤謬を誠實に清算した（詐欺破產的な清算ではなくて）新しい協同戰線黨として更生することを、衷心から希望するものである。

× × ×

提案者諸君に對しては、私は理論の誠實な、そして大膽な、何ものにも顧慮することのない追求を希望せざるを得ぬ。たとへば、一方においては、合法政黨絕對無用から合法政黨絕對必要への態度の變化を正當化するために、數萬言を費やしつゝ、他方においては、『一年前に』そのことを主張した人々と同一結論に到着したといふ事實を、あへてゝ無花果の葉をもつて蔽ひ隱そうとする努力の如きは、恐らくは無用の努力である。諸君は主張する――吾々は最後まで鬪ひ拔き、そしてその鬪爭が『はたと行き詰り』（提案書の言葉）、その鬪爭組織が全く無効を立證し、左翼戰線の完全な潰滅狀態にまで導びいた上、然る後に初めて合法政黨を『進出の方策として主張してゐる』と。左翼戰線を潰滅せしめるまで鬪ひ拔くことゝ、この潰滅を避けるために鬪ひ拔くことゝは、たしかに、異つてゐる。けれども異つてゐることが、どれだけ誇るに足ることであるかは、別問題である。吾々は盲滅法に步るき拔き、いま肥溜めに落ちたから初めて正しい道を取らうとする、然るに何ぞや、諸君は肥溜めに落ちるのを待たないで正しい道を發見した、それ故に諸君は階級的裏切りだといふ推論は、恐らく常識ある人々を承服せしめぬであらう。

（九月六日）

最近勞働運動の大勢

赤松克麿

一

我國の勞働組合戰線が左右兩翼に分裂したその最初の發足は、大正十四年五月に行はれた勞働總同盟の第一次分裂であつた。その左翼は日本勞働組合評議會を組織し、鮮明なる、、、、、、を經濟戰線の一角に樹立したのであつた。このとき以來、總同盟の社會民主主義と評議會の共產主義とが、我國經濟戰線上に確然と對立することになつたのである。

分裂するときには、その後の分裂にもさうであるやうに、最劣なる幹部攻擊の爆彈がうるさく飛ばされたが、これを運動理論の點から見るならば、我國の勞働運動を社會民主主義的に指導すべきか、または共產主義的に指導すべきかの指導理論の分裂であつた。しからばその兩者の指導理論の相異點はどこにあつたかといふに、

（一）、總同盟は民主主義の價値を承認し、これが活用により、勞働大衆の組織化に向つて進まんとした。民主

二つに別れ

的民主主義の獲得に進出すると共に、他方國際勞働機關を活用して、勞働立法の促進を圖り、以つて產業民主主義の發達に資しやうとした。

（二）、總同盟は經濟的鬪爭方針を現實化し、從來のやうに勞働爭議を指導するに鬪爭意識の深刻化のみを主眼とするやうな觀念主義を改めて、勞働大衆の現實の生活意識を主眼として指導するやうになつた。從つて勞働組合を單純な鬪爭團體とすることをやめて、恒久的な基礎を持つ經濟團體として發達を期するやうに努力し、その具體方法として組合基金の充實を圖るやうになつた。

（三）、總同盟は共產主義者の考へるやうに資本主義が急激なる、、、、、、、、、、、をたどりつゝあるとは考へず、そして、、、、、、、、、、、、、、及び、、、き起して行けば、資本主義が容易に、、るものとも考へ

ろ共產主義的な公式鬪爭

分裂するときには、その後の分裂にもさうであるやうに、愚劣なる幹部攻撃の爆弾がうるさく飛ばされたが、これを運動理論の點から見るならば、我國の勞働運動を社會民主主義的に指導すべきか、または共産主義的に指導すべきかの指導理論の分裂であつた。しからばその兩者の指導理論の相異點はどこにあつたかといふに、

（一）、總同盟は民主主義の價値を承認し、これが活用により、勞働大衆の組織化に向つて進まんとした。民主主義は政治的と産業的との二つに別れるが、總同盟は一方議會政策を採用することに[illegible]、政治

基礎を持つ經濟團體として發達を期するやうに努力し、その具體方法として組合基金の充實を圖るやうになつた。

（三）、總同盟は共産主義者の考へるやうに資本主義が急激なる、、をたどりつゝあるとは考へず、そして、、、、、、、、、、をひき起して行けば、資本主義が容易に、、るものとも考へないで、むしろ共産主義的な公式闘爭を續けて行けば、あべこべに資本の强烈なる攻撃に逆襲されて、勞働組合が破壞され、勞働運動は行きつまると考へた。故に勞働組合の生存を確保し、勞働大衆の生活利益を擁護しつゝ、勞働運動の發展を圖つて行くがためには、それに適合する[illegible]

最も現實的な戦術を選み、漸進的に、確實に、合理的に、無産政黨と協力しつゝ資本主義の産業機構に、、して行く方針を取つた。

二

共産主義に立つ評議會は、總同盟の指導理論に反對した。

（一）、評議會は民主主義の價値を否定した。普通選擧や國際勞働機關といふものは、支配階級が資本主義の行き詰りから脱出するために無産階級を、、し又は、、する手段であると考へた。故にそんなものに價値を認め、それを積極的に活用しやうとする總同盟の方針は、その指導者が階級闘爭の立場を棄てゝ、資本家階級と妥協し、資本主義の利益の分け前にあづからうとする取引に過ぎないと考へた。

（二）、評議會は個々の勞働爭議に於ける闘爭方針を、、、、に結びつけて、勞働大衆の現實の生活利益を擁護するといふよりは、出來るだけ闘爭を、、し、産業に、、を起し、以つて、、の起るに適するやうな社會狀勢を展開することに努めた。從つて彼等の勞働組合は、勞働組合としての本來の性質を備へないで、政治闘爭の一翼化する傾向が濃厚であつた。

（三）、評議會は資本主義の慌しい、、を信じた。故に直線的な公式的な闘爭を連續して行けば、大衆闘爭が、、し、そして資本主義は容易に、、するものと考へた。彼等の運動が忽ち鐵壁に打ち當つて、その陣營を粉碎されるであらうとは夢想だにしなかつた。

三

その後に於ける總同盟と評議會の實踐的戦績は、いづれが現下の社會狀勢に適合して居るかを實證したか。總同盟の運動方針が着々効を奏し、その陣營が大衆化する傾向をたどりつゝあるのに反して、評議會の闘爭方針は全く行き詰りを生じ、その陣營も縮小される傾向にあつたのであるが、遂に昨年三月、、、、、、、の飛沫を蒙つて、勞働農民黨と共に、解散の鐵槌を下されるに至つた。、、、、、は評議會の破滅を以て、、、、、、、、、、、に責任を歸するのであるが、あの實力の伴はない、そして客觀狀態を無視したところの、公式的な、、戦術が、資本主義を、、するどころか、あべこべに致命的逆襲を誘致する口實を支配階級に與へたことは、何人も否定することは出來ない。

評議會が消滅して、その後身として日本勞働組合協議會が生れた。しかしこれは往年の評議會の面影はなく、經濟戦線に於ける存在は微々たるものである。また昨年の七月、共産陣營が合法派と非合法派に分裂し、合法派に屬する勞働者は全産業勞働組合を組織したが、これも强力なる組織をつくるまでには至らない。

社會民主主義の勞働組合と共産主義の勞働組合との中間に、混血兒的勞働組合が介在して居る。その中堅は日本勞働組合同盟であるが、これは大正十五年十二月、社會民衆黨が結成されるとき、これに反對して總同盟より分裂した麻生久君一派の日本勞農黨（今日の日本大衆黨）の系統に屬する勞働組合である。この組合は社會民主主義に徹

底せず、さりとて、、、、にも徹底せず、從つて勞働大衆に映ずる印象が稀薄であつて、將來の發達を約束されて居ない。

私は今ま我國勞働運動の實勢力を左に示すであらう。但し、、、の實勢力は、、、、、、、、とともに詳かにするを得ない、この數字は本年の第十三回國際勞働總會の勞働代表選出に於ける各組合の投票數に依るものである

右翼派

日本勞働總同盟	三二、〇〇〇
日本海員組合	八二、〇〇〇
日本海員協會	一一、〇〇〇
海軍勞働組合聯盟	四三、〇〇〇
官業勞働總同盟	一五、〇〇〇
武相勞働聯盟	一〇、〇〇〇
勞働組合共同研究會	六、〇〇〇
足尾鑛職夫組合	三、〇〇〇
ダンロップ護謨工組合	一、〇〇〇
横濱港仲仕共濟會	一、〇〇〇
合計	二〇三、〇〇〇

中間派

日本勞働組合同盟	九、〇〇〇
日本勞働組合總聯合	七、〇〇〇
純向上會	四、〇〇〇
日本司厨同盟	四、〇〇〇
東京瓦斯工組合	三、〇〇〇
横濱市從業員組合	一、〇〇〇
日本美術友禪工組合	一、〇〇〇
神戸市電從業員組合	一、〇〇〇
合計	二九、〇〇〇

四

政治戰線に於てもそうであるやうに、經濟戰線に於いても、社會民主主義派の勢力は壓倒的である。今後といへども、この傾向は益々強くなるであらう。最近、、、、、ではあ

の發展と同

これに大なる期待を持つことが出來ない。若し我國現下の社會狀勢に於いて、勞働運動の大衆的發達を遂げやうとするならば、それは必然的に社會民主主義の方針下に立たざるを得ないからである。それは既に試驗濟みの課題である。

社會民主主義の勞働組合では、一方に無産政黨が出現し發展しつゝあるので、益々勞働組合獨自の立場に歸つて、その面目を發揮するやうになつた。その最も顯著なる現はれは、團體協約權の獲得運動である。團體協約權の確立は、勞働組合の生存權確保を意味するのみならず、產業民主主義の基礎條件をなすものである。民主主義の精神は階級的立場を沒却するものではない。階級的立場を出來る限り合理的に發展せしめやうとするのが民主主義である。だから團體權は罷業權放棄ではない。それは昨年六月に於ける日本海員組合の敢行した海上の大罷業によつて立證されて居る。しかし議會主義が暴力主義を避けるやうに、產業民主主義は出來るだけ不必要なる紛爭を避け、產業的犧牲を最小化しつゝ勞働階級の生活向上、勞働組合の發達を圖らうとするものである。

最近總同盟大阪聯合會の內紛問題から、社會民主主義の勞動陣營に一大動搖が生じたかの如く、

政局展望台

馬場恒吾

キャステング・ヴォート

民政黨内閣は大ぎの議會を解散せんと固く決心してゐる。少々の無理をしても解散迄持つて行かなければならぬと思つてゐる。これは民政黨上下を擧げて一致したる意見である。だから總選擧は來年早々必ず來るものと見なければならぬ。そして總選擧の結果は民政黨二二〇、政友會一九〇、無産黨一五、殘り四十一名が中立と小會派、これが玄人筋が一々の選擧區と地盤に當つて勘定した豫想である。此豫想が外れたならば、日本の政界は玄人の知らざる發展をなしつゝある事を示すもので、それは寧ろ喜ぶべき事だ。

若し此の玄人筋の豫想が中るならば、茲に無産黨に採つて危險なる試錬時代が來る。無産黨の陣營の中には或はそれを以て、無産黨がキヤステング・ヴオートを握るものだと云つて喜ぶものがあるかもしれない。然し政黨の誘惑の中でこれほど呪はしき誘惑はない。勿論無産黨は從來の政治家が誘惑されるやうな手段方法では絕對に誘惑されない。併し僅かに十名若しくは十五名の議員で、議會の形勢を左右する或は政府に對して生殺與奪の權を有つと云ふ事、即ち黨の小なる割合に其勢力の絕大なる事が、キヤステング・ヴオートの誘惑である。金錢と地位に誘惑されない人でも、自分が絕大な勢力を振ひうると云ふ快感には誘惑されることがある。昨年の特別議會では三、四名の小會派ですらがキヤステング・ヴオートを握つた。それが既成小會派を墮落せしめ、或は新規小會派を發生せしめた事は人の知る通りだ。併しさうしたキヤステング・ヴオートの誘惑に打ち勝てなかつた小會派の末路は何れも香ばしくない。それは三、四名の少數で、四六六名の議會を支配せんと心掛けるのが一種の僥倖を狙ふ心であるからだ。僥倖で成功せんと欲して成功した例が少なく、假令又成功しても、それを吾々は尊敬する氣になれない。曾つて英國の勞働黨は議會の絕對多數を得る迄は、政權を取るを欲しないと云つた事がある。其態度の方がキヤステング・ヴオートを僥倖する心に比較して、如何に堂々として眞實に吾々の尊敬に値するか判らない。

總選擧の結果が、無產黨にキヤステング・ヴオートを與へるとき、無產黨は如何にそれを使用するか。其使用の樣式に依つて、それが日本の小會派の運命を辿るか、或は英國の勞働黨のやうになるかゞ決定される。それは無產黨に採つては大切な試錬時代と云ふべきものだ。

政友會に鬪志ありや

愈々總選擧にならば、民政黨内閣を一蹴して見せると、政友會は景氣のいゝ事を云つて居る。然るに心の底の何處かに、潜在意識的に、此一選擧は負けた方が政友會將來の爲めによいと云ふ氣分がありはしないか。口では勝ちたいと云つても、實際は負ける方向に行動を採つてゐるかの如く見える。

地方の政友會員は、中央から來る黨の幹部に向つて、選擧に勝つたら、次ぎの總理大臣は田中さんですかと聞く。それは無論さうさと答へる。地方黨員は默つてゐるが何んだか腑に落ちないと云ふ顔をする。中央から行つた幹部も之れには考へさせられると、歸つて來てからの述懐である。

政友會が勝てば、此前の田中内閣が復活する。少しの顔振れは違つても、矢張大體に於ておらが内閣の再出現である。そして其だらしない失敗と醜怪事の連續である。道樂息子が家の主人に復活した如く、政友會の家臺を潰さずには置かない。それが眞に政友會信者になり切つた所の、地方黨員に憂鬱な顔をなさしめる。彼等は新興氣分の充實した所の、眞正の政友會の復興を希望してゐる。それが故に、彼等は口にも出さず、意識にも上さないが、寧ろ政友會が一度負けて、そして健全に起き上る機會を得る事を希望する。

然らば政友會は何故に、今の中に黨首を取り換へて、内部整理の途に付かないかと云へば、それは總選擧が目の前に迫つて居る爲めである。政友會には總裁候補者として自から任じ、或は人の噂に上るものとして床次、鈴木、小川、中橋、久原などを數へる。然るに彼等は總選擧を前にして總選擧の費用を負擔する總裁の地位に付き度くない。其費用が今次きには莫大な額に上る。田中が政友會總裁になり、久原を連れて來て以來、政友會の費用は殆んど全部總裁が出すと云ふ習慣が作られた。其前は皆んな持ち寄りの會計と云ふ工合であつたが、田中時代には、なあに久原と云ふ弗箱が付いてゐるのだから、金は其所から取つて來いと云ふ風に、誰れも持ち寄りをしなくなつた。それでなくてさへ政黨總裁は金が要るのであつたが、此習慣が作られた後には、其金は並大抵の額では濟まぬ。それ故に政友會總裁にならんと志してゐるものも、先づ此選擧は田中にやらして、政友會の改革は選擧後にする。即ち金は田中に出さす、負けたら其時に田中を引退せしめると云ふ腹になる。其所に打算的な、成り行き主義が含まれてゐる。野球でバッターがストライキを見送る心理狀態である。鬪志滿腹とは云へない。彼等に採つては政友會が負ける事が、田中を淸算する事になり、田中を淸算する事が、政友會更生の道になると云ふ

へる…歸つて來てか
る。中央から行つた幹部も之れには考へさせられると、
らの述懐である。

政友會が勝てば、此前の田中内閣が復活する。少しの顔振れは違つても、矢張大體に於ておらが内閣の再出現である。そして其だらしない失敗と醜怪事の連續である。道樂息子が家の主人に復活した如く、政友會の家臺を潰さずには置かない。それが眞に政友會信者になり切つた所の、地方黨員に憂鬱な顔をなさしめる。彼等は新興氣分の充實

……してゐるものも、先づ此選擧は田中にやらして、政友會の改革は選擧後にする。即ち金は田中に出さす、負けたら其時に田中を引退せしめると云ふ腹になる。其所に打算的な、成り行き主義が含まれてゐる。野球でバッターがストライキを見送る心理狀態である。鬪志滿腹とは云へない。彼等に採つては政友會が負ける事が、田中を淸算する事になり、田中を淸算する事が、政友會更生の道になると云ふ動靜が目に

見える。尤も總裁候補全部がさうではなく、各人各種の心持ちでゐることは勿論であるが、總選擧を前にして政友會全體の氣持ちにちぐはぐの點があるのは其爲めだ。

田中が内閣を投げ出した事情には氣の毒な點もあつた。彼れは恰も天譴を蒙つた形ちで辭職した。併しそれも正に天譴を蒙るべき價値があつたから蒙つたのである。相撲取りが土俵の上で相撲に負ける。そして其相撲取りが己れは負けはしないのだと力きんで、四股を踏んでゐるときは、誰れか往てそれを土俵に連れて來るより外はない。田中は此相撲に負けても力きむ相撲であつた。

田中が後に追ひ出されると知らずして、總選擧の費用を負擔するとせば、彼れは天下の同情に値する。吾々も同情する。だがしかしそれは只彼れに對する同情であつて、彼れの率ゆる政黨に投票すると云ふ意味ではない。それは全く別問題である。

かうして同情すべき立場に居る田中總裁に向つて誰れも事實を正直に進言するものがない。恰も首相としての彼れに、誰れも退くべき適當な時機を敎へてやらず、遂に未曾有の失態で退却の已むを得ざるに至らしめたと同樣である。今のやうに、總裁を犠牲球的に取扱ふ心掛けで選擧に臨んでは、其結果が思ひ遣られる。

第三黨と解散回避論

政友會を脱黨したる小泉策太郎が中心になつて、解散回避の第三黨を組織する計畫があると、時々新聞に出た。事實を探つて見ると小泉は何にもして居らぬ。それに、彼れは民政黨内閣成立以來の二ケ月を伊豆の片田舍の郷里に引籠つてゐて、政界に顔を出さなかつた。

だから第三黨組織の實際運動はして居らぬが、解散回避の理論には彼れは贊成してゐる。今頃解散回避の說を唱へる如きは如何にも時代に超越してゐるが、彼れの說には徹底してゐる。

曰く、議會政治は人民の意志を尊重すると云ふ事を第一義とする。衆議院は何んと云つても人民の意志の現はれだ。それを政府の都合が惡るければ何日でも解散すると云ふのは、人民よりは政府が貴いと云ふ官僚思想の現はれだ。殊に何んのかんのと云つても、代議士は多大の犠牲を拂つて出て來てゐる。官僚や貴族が、自分には何等の犠牲を拂はずして國家の事を彼れこれ云ふのとは違ふ。代議士こそ眞の愛國者だ。日本を背負つて立つ中堅だ。それが總選擧になると三分一は落選する。愛國者をさう容易に失脚せしめるのは國の損だ。だから解散は避けられる丈け避けるがよいと。

濱口内閣が成立した後に安達内務大臣は小泉を訪ねて第三黨を組織して呉れ、だが政府は必ず次ぎの議會を解散する。解散後の議會で小泉が第三黨を率いて、政府を援助して呉れゝば政府は安泰であると云ふのであつた。

小泉は此註文に應じかねてゐる。政友會内に解散を嫌がる連中を集めればこそ第三黨が出來るのだ。解散を眞中から振り翳して、それで

ンである。これに續いて、伊太利のヴィコ及び佛蘭西のモンテスキュウを擧げることが出來る。故に、伊太利の學者はヴィコをもつて、社會學の建設者とし、あるものは、——特にギッディングス——モンテスキュウを社會學の建設者とする。吾々の耳に最もポピュラアな書を與へるものは、モンテスキュウであるが、彼はその「法の精神」において、ボオダン以來のラテン諸國における自然環境說を集成して、その見地から社會現象に對する因果的現實的觀察を行つてゐる。彼の最も重きを置いた自然的要素は氣候であるが、彼によれば、氣候の相異が人間の性情を制約し、從つてその構成する社會の本質を決定するといふ見地に立つてゐた。彼の社會學的見地は、人間社會の歷史的階段の相異に關する考察において缺くるところがあるが、後代の環境學說に對しては、最も重要なる影響を及ぼしたといつていゝ。彼の見地は、英國における第十八世紀末の「市民的社會の歷史」の著者アダム・ファグスンに影響するところがあつた。第十九世紀の中葉に至つて、自然環境說が「英國文明史」の著者トマス・バックルによつて、發展せられたことは周知の事實である。

第二の社會的環境論と名づけるものは、一口にいへば、社會における經濟的要素を重要視し、從つて、この經濟的要素を中心としての社會的集團の鬪爭にその社會觀の重點を置くものである。前者を經濟重要視說といへば、後者は階級鬪爭說と呼ばるべき

て、所謂道德哲學の中に生れたものである。それは、自然法學說の第十八世紀における崩壞とともに始まつた現實的社會觀の主張者の一群において見出すことが出來る。吾々は、階級鬪爭說と經濟重視說の結合者として、ジョン・ミラアとアダム・ファグスンを擧げることが出來る。第十九世紀前半の英國社會主義者殊にリカルドオ派社會主義者と呼ばれる人々例へば、チャルズ・ホオル、トマス・ホヂスキンなどがすべての社會生活の基礎が經濟であると主張し、更らにその主張がチャアチズム運動に影響して、政治運動否定のサンヂカリスト的運動を生むに至つたことは、チャアチズム歷史家の既に記するところである。またこの學說は佛蘭西において、大なる發展を見た。前揭モンテスキュウの名はこゝにも列ねらるべきである。彼は、「法の精神」の商業、貨幣、人口、法律と社會的變化との關係を論じた諸篇、及び國民の所得と課税とを論じた篇において、歷史における經濟的要素を重要視したのである。更らに、「法の精神」（一七四八年）の刊行後十年にして現はれた「法律、技術及び科學の起源とその古代民族における進歩について」と題する匿名の著作——この書の著者はゴオゲエである——はモンテスキュウに數歩を拔きん出たものであつて、法律並に科學等の起源及び發達を經濟的に說明したのである。ゴオゲエの主張はその

的部分において、甚だ

風習を導入した。この技術を導き入れた民族は一定の土地に、自らを定住することを必要とした。彼等は都市に結合したのである。」云々。また「土地の分配から法律と法律學が生れた」と。かくの如くゴオゲエは國家組織も法律も科學もすべては、その基礎として生産を有することを論證したのである。

階級鬪爭説は第十八世紀末から、第十九世紀の前半において、佛蘭西において發達した。既に擧げたサン・シモンの時代においては、この學説が大なる發展をなした時代である。この學説は、最も明かな社會階級立場によつて主張せられた。その一は、ブルジョアジイの立場であり、一七八九年以來の、、、、を一の、、、、と見、ブルジョア階級の人類への歷史的貢獻と見た説であつた。既にゲオルヒ・プレハノフの擧げてゐるやうに、ギゾオ、チェリイ、ミニエなどの歷史家がこの立場に屬する。これに對して、佛蘭西革命をブルジョア階級の革命として、この革命に人類への、、を見出すことなく、反つて、人類への、、を認め、かゝる階級鬪爭の終焉を希求したのは、前掲のサン・シモンのやうな社會主義者であつた。サン・シモン、並に彼の學徒、バザアル、フウリエ、並にその學徒、コンシデランなど、また彼等は影響を受けつゝ自説を構成したプルードン、ルイ・ブランなどは、近代大工業の結果である、ブルジョアジイとプロレタリヤの對立を認識し、その對立が、一般的不幸を招來するが故に、この對立を廢絶する理想社會を考案したのであつた。「彼等は何れも、空想的社會主義と呼ばれる範疇の中に入れらるべき社會思想家であつたが、その現實社會に對する觀察は、決して大綱を失してゐることなく、よく經濟的現象の社會生活の基礎たることを認識したのは、筆者がここに一々例證するまでもない。

以上がマルクスが佛蘭西社會主義の研究へ出發しやうとした時代までにおける西歐社會學的思想の大樣である。

四

西歐の社會學的思想を觀察した筆者は更らに一八四〇年代までの獨逸におけるその發展を顧みることが必要である。第十九世紀初葉の獨逸は、その社會思想において、常に西歐の後塵を拜してゐた。政治的自由主義はラインの彼岸たる佛蘭西から、經濟的自由主義は英領ハノヴァのゲッチンゲン大學を通じて、獨逸に影響しつゝあつたのであるが、獨逸固有の思想がなかつたのではない。獨逸固有の社會思想は、獨逸哲學の副産物として發生した觀がある。英佛のやうに、近世的資本家的生産方法の發展普及が行はれず、その生産形態が主として、封建の土地所有による農工業的生産に限定せられ、僅かにライン地方の一部にのみブルジョアジイの勢力が存するのみであつた。獨逸當時の社會思想はこの社會狀態に照應するものであつた。從つて現實的實證的な考察は極めて少なく、思辨的觀念論的な議論が多く行はれてゐた。カント、フィヒテ、ヘエゲルの認識論及び歷史哲學がこれであるが、

これらの思辨哲學を基礎とする社會思想が行はれた。これらの社會的思辨はカントと初期のフィヒテが稍や個人主義的影響を受けた傾向はあるが、大體において、その社會觀は普遍主義（ウニヴァサリズムス）と呼ばれるものであつた。この傾向は古典哲學と同時代の産物であるアダム・ミュラアを主班とするロマンチカアの社會思想において、一層著しい。これらの諸思潮の特徴をなすものは、上述の社會觀における普遍主義がその第一であり、社會生活における發展の概念がその第二であり、國家と社會との概念的區別がその第三である。第一の普遍主義は西歐の社會觀の個人主義的であるのに對立するものであつて、モンペルトの如きは、この點に獨逸觀念論並にロマンチックの社會觀における貢獻を認めてゐるのである。第二の社會生活における發展の概念は、獨逸思想特有な形態において現はれてゐる。それは、精神の社會における發展を意味するのであつて、獨逸古典哲學一般を通じての、特にヘエゲルの哲學に現はれてゐる辯證法である。而して、第三の國家と社會の區別については、ロマンチックの思想についていへば、兩者は同一體を示すのであり、カントについても兩者の區別は左程明瞭ではない。フィヒテにおいては、國家は社會完成への一の手段であり、社會の窮極における完成は國家の、、を意味し、國家は社會の下位概念に立つものである。國家と社會の對立を最も明確にしたのはヘエゲルである。彼の哲學的國家理念によれば、國家は倫理的全體、倫理的
の實現であ
の組織である。而して、この社會は國家の完成とともに、その内に止揚せられるのである。

一八三〇——四〇年代の獨逸思想家は多くこのヘエゲルの影響を受けた。マルクスもその一人であることは、こゝに敍説するまでもない。乍併、筆者はマルクス以前においても、左翼ヘエゲル主義者の間に、この獨逸の觀念論的哲學と佛蘭西社會思想との結合を企圖した者のあることを指示したい。それは一般に眞正社會主義（ヂャ・ワアレ・ソチャリズムス）の名をもつて呼ばれてゐる思想であり、その代表者と見るべきものは、モオゼス・ヘッスとカアル・グリユンである。ヘッスによれば、社會の理想は、自由の實現にある。然るに自由の觀念は從來佛蘭西においては、、、、、並に社會主義によつて、具體的物質的に、獨逸にあつては、理想主義哲學によつて、觀念的抽象的に、解されて來たのである。然るに眞正なる自由は、兩者の、即ち佛蘭西、、、、と獨逸理想主義の綜合によつて實現し得る。從來兩者は一方的に、あるひは物質的に、あるひは抽象的にのみ考へられてゐたのである。、、の、、、こそ、この兩者を辯證法的に綜合して、自由を實現する。これが、一八四三年にヘッスによつて執筆された「社會主義と、、、」及び「行爲の哲學」と題する論文の眼目であつた。この立場は、所謂眞正社
者、自ら獨逸哲理、

五

マルクスも、獨逸の思想家として、ヘエゲルから出發して、佛蘭西社會思想に向つた點において、眞正社會主義と同一の過程を辿つたものである。乍併、マルクスに對しては、、、、は一の抽象的理想と解されたのではない。それは、現實的諸條件を前提とする一現實的運動に過ぎないのである。マルクスが何時かくの如き理論を抱懷するに至つたかの問題に對しては、既に諸家の說明が存するが、先づ一八四五年と見て差支ないのである。一八四五年の春エンゲルスはブリュセルにマルクスを訪ふたとき、既に後年唯物史觀として知られてゐる形態の社會觀に到達してゐたと、、、、序文に述べてゐるが、近年リヤザノフによつて、發表せられたマルクス・エンゲルス共著の「ドイチッェ・イデオロギイ」はこれを證明する最も顯著な文獻である。

「ドイチッェ・イデオロギイ」は、、、の、、を論證しやうとしたものである。「、、、は吾々に對しては、作り出されねばならぬ一の狀態ではない。それは現實が、これを標準としなければならぬ理想ではない。吾々は現在の狀態を止揚する現實的運動を、、、といふのである。この運動の諸條件は現存の前提から生ずるのである。」このことを證明しやうとするのが、その目的である。マルクス・エンゲルスはこのことを論證するのに、社會現象の歷史性とその社會的關連とを明確にすることによつて、單に、、、の、、を立證したのみでなく、この社會學體系を樹立したものといへる。後に詳述するやうに、第一篇において、彼の歷史的方法並に、この歷史的方法による精神現象——意識——を說明した。而して意識の說明は、彼によれば必然的にその下部構造である現實の社會に遡らねばならぬ。而して、第二篇においては、經濟、社會、個人及びそれらの歷史の唯物的見解を發展せしめた。第三篇においては、第二篇の補論とも見るべき財產に對する國家及び法律の關係が述べられてゐる。マルクスの唯物的方法によつて、述べられたこれらの諸問題は社會現象の基本的問題であつて、その所說の間には右の方法による統一が存する。

勿論リヤザノフのマルクス・エンゲルス・アルヒフ第一卷で、發表した「ドイチッェ・イデオロギイ」はマルクス・エンゲルスの「ドイチッェ・イデオロギイ」の全部ではない。その外、ベルンシュタインによつて部分的に發表されたマックス・シュチルナア批判、同じくベルンシュタインによつて、「ノイエ・ツアイト」(一八九九——一九〇〇年)に發表された「グリュン著『佛蘭西及びベルギイにおける社會運動』に對する批判」もまたドイチッェ・イデオロギイの一部をなし、更らに今日は行方知れずになつたブルノオ・バウエルの批判の原稿もその一部である。乍併、ベルンシュタイン發表のシュチルナア及びグリュンの批判に關する部分は、リヤザノフ發表のフォイエルバッハ批判に關するものよりも原理的總括的論議に乏しい。リヤザノフ發表の部分も處々に斷片的記述等又は原稿の存在しない個處のために、その

純一が失はれてゐるところもあるが、この部分において、大體一八四七・八年において、定型を見出したと稱せらるゝマルクス學說、即ち「哲學の貧困」「共產黨宣言」に現はれた思想は、その經濟學的部分を除いては、盡くこの「ドイチッエ・イデオロギイ」において見ることが出來る。而して、この書に現はれたところのマルクスの社會學說は恐らく後に發展整理せられたもの殆んどすべてをこの書の中に求めることが出來るのである。從來マルクス社會學の論述としては、「哲學の貧困」「經濟學批判」序文、「共產黨宣言」エンゲルスの「家族、私有財產及び國家の起源」を權威としてゐたのであるが、「ドイチッエ・イデオロギイ」はこれらの諸著述にも增して社會學的に見るとき興味あり、價値あるものである。筆者がこの書をマルクス社會學の經典と見る理由は、この書の社會學的見地が極めて包括的に、社會學體系を形成する形式において述べられてゐるからである。

六

既に述べたやうに、「ドイチッエ・イデオロギイ」は一の理論闘爭である。故に先づ自分の態度を明かにしなければならぬ。「舊ヘエゲル主義者はすべてのものが、ヘエゲルの論理的範疇に還元せらるゝや、直ちに、これを理解した。青年ヘエゲル主義者は、すべてを宗教的表象にすり換へ、それを神學的と宣言する

なるものの支配を信ずる點において、舊ヘエゲル主義者と一致する。たゞ一はこの支配をもつて、僭奪なりとして闘爭し、他はこれを正統なりとして祝福するのである。」而して、「これらの哲學者の誰れもが、獨逸哲學と獨逸の現實との關係について、彼等の批判とそれ自らの物質的環境との關係について、研究することを思ひ浮んだものはないのである。」青年ヘエゲル主義者は、人間の意識を現實から說明することなく、反つて人間の意識そのものから現實を說明し、現實に對する指導原理を導き出さうとしたのである。彼等の說くところは抽象的原理であり、愛の說法であつた。マルクスはこの態度を痛擊した。センチメンタリズムそのものであつた。マルクスは當時、フォルクス・トリブンの編輯者クリイゲのセンチメンタリズムを排した一節に次のやうな文章がある。「この愛は何等現實的な事實的な狀態をも克服し得ない感傷的なる文章の中に自己を喪失する。愛は溫い感傷によつて、人を柔弱にする。乍併、困難は人に力を與へる。自ら救はざるべからざるものは、また自らを救ふ。然るが故に、この世界の現實の狀態、即ち產業的交易において、最も發展して現はれてゐる資本及び勞働、即ちブルジョアジイとプロレタリヤの現今の社會における峻嚴なる對立は、社會主義的世界觀の、即ち社會的改良の熱望の[illegible]出する[illegible]

目的でもある。

　マルクスは一の前提から出發する。それは恣意的な獨斷的な前提ではなくて、現實的前提であるとマルクスはいふ。「それは現實の個人と、その行動と傳來的並に自己の行動によつて作られた、その物質的生存條件である。從つてこの前提は、純粹な經驗的方法によつて、確認し得るのである。故にすべての人類史の第一前提は、勿論生ける個人の生存である。而して、最初に確認せらるべき部分は、この個人の身體組織とそれによつて與へられた他の自然に對する關係である。：：すべての史的記述は、この自然的基礎及び、人間の行爲による歴史の經過中における、その變改から出發しなければならぬ。」而して、人間の生きるためには、就中食ひ、飲み、住ひ、着ることなどが第一の必要である、もしこのことをなし得ないとすれば、人間は何等の「歴史を作る」ことは出來ない。マルクスが人間の生活資料生產にその社會學の出發點を求めた所以である。人間の最初の行爲、而して、これによつて自らを動物と區別する行爲は、彼が思索することではなくして、その生活資料を生產し始めたことである。「故に、「現實的事實のみに關する經驗的觀察は、すべての個々の場合において、生產と社會的並に政治組織を經驗的に、且つすべての神祕化と思辨となくして、指示し得るであらう。」この人間の活動的生活過程が把握せらるるや否や、歴史は死せる事實の蒐集たることを止める。「現實的生活において、思辨の止揚せらるるところに、現實的、實證的科學、即ち人間の實踐的行動並に、實際的發展過程の叙述が始まる。意識の章句は終熄して、現實的知識がそれに代らなければならぬ。獨立の哲學は、現實性の叙述とともに、その生存媒質を失ふのである。その代りに、高々、人類の史的發展の觀察から、抽象せられた最も普遍的な結論の概說が行はれることが出來るのである。現實の歴史から離されたこの抽象はそれ自體としては、全然無價値である。」かゝる見地に立つが故に、道德、宗敎、形而上學及びその他のイデオロギイ、並にこれに照應してゐる意識形態はその獨立の外見を失ふのである。「意識は意識せられたる存在以外のものであり得ず、人間の存在はその現實的生活過程である。」「意識が生活を定めるのではなくして、生活が意識を定めるのである。」フオイエルバッハは唯物論的見地に立ちながら、人間を單に感性的對象と見て、感性的行動と解せず、從つて、現實的條件の下において、活動する人間に考察を加へず、たゞ抽象的意義における人間を論じたのみであつた。從つて彼の歴史觀は辨證法的意義を有せず、歴史において、唯物論者たることを止めてゐるのである。

　現實的前提から出發したマルクスは、かくて次の如き歴史觀に到達した。「この史觀はその基礎を次のところに置く。即ち現實的生產過程を、而かも、直接生活の物質的生產から出發して、これを發展せしめ、而して、この生產方法と關連して、且つこれによつて作られた交易形態を、即ちその種々な階段における市民的社會を全歴史の基礎と解し、この市民的社會を國家としての行爲において叙述するととも

に、種々の理論的產物、意識の諸形態、宗教、道德、哲學等等の全部をこれから說明し、これらのものから生ずるその成立過程を追究することに存する。勿論この場合、事象はその全體において（及び故にまたこの種々なる方面における相互に對する相互作用も）叙述せらるゝのである。この歷史觀はすべての時代において、觀念的史觀のやうに、一の範疇を求めることを必要とせず、常に現實の歷史的地盤の上に止まり、實踐を理念から說明しないで、反つて、理念の形成を物質的實踐から說明する。而して、これに應じて次の如き結論に到達する。意識のすべての諸形態及び產物は、精神的批評によつて、『自意識』への解消、『妖怪』『幽靈』『狂氣』などへの轉形によつてではなく、この觀念論的饒舌のそれから發生する現實の社會的關係の實踐的、、によつて解消せられる。即ち歷史の、而して、また宗教、哲學、その他の理論の、推進力は批評ではなくして、、、である。」これが「ドイチッエ・イデオロギイ」における根本的立場である。

七

社會學的方法を確立したマルクスは、この方法に從つて、、、、、、、の必然性と、この、、を導くまでの社會的必然性を論ずることによつて、「全歷史の基礎としての市民的社會」とその內に見はれ

スの社會學體系と見るべきものとしたのは、この理由によるのである。

人類史の始源において、生ける個人は、その生命を維持するために、生活手段を生產しなければならなかつた。これが人間の最初の行爲であつた。この個人的生存欲望の充足及びその結果としての新欲望の發生は、彼の既に獲得した生產手段による生產を增大せしめたのである。かゝる關係においては、人間は、自然との關係を有するに過ぎない。然るに、人間には性的區別が存してゐて、生命の發展とともに、自然との關係の外に、他の人間との關係を發生する。男女の關係がこれである。而して、この男女關係は、夫婦關係、親子關係即ち家族關係たるに至る。家族は、歷史の始源においては、唯一の社會關係であつた。（この點は後にエンゲルスによつて、資本論第二版における脚註並に「家族の起源」において、家族を最初の社會關係とすることが誤りであるとして訂正された。エンゲルスの訂正は正しい。）の家族は、欲望の增加が新らしい社會關係を、而して、人口の增加が新欲望を發生したところにおいては、社會關係としての重要性を喪失した。故に一般的にいへば、特定な生產方法または產業的階段は、特定な共同作用の方法または社會的階段と結びついてゐる。而して、この

人間の歷史が常に社會的なものとすれば、これによつて制約せられる人間の意識も常に社會的な性質を有するものでなければならぬ。而して人間の意識は、最初感性的環境に對すると共に、他人に對する感性的意識に過ぎないが、自然の威力に對する人間たる限りにおいては、自然の動物的意識となる。他方において、社會生活の必然性に關する意識は群意識を發生せしめる。この群意識または種族意識は、生産力の增加、欲望の增加及び兩者の根底に横たはる人口の增加によつて、發展せられる。それとともに分勞が發達する。分勞は第一には性的分勞であり、第二は、物質的並に精神的分勞である。この後者の分勞から「純粹理論」即ち神學、哲學、道德の抽象的獨立的形態が現はれる。分勞の發達と共に、家族における分勞が起り、個々に對立した家族に社會を分立せしめる分勞が起る。同時に、質的にも量的にも不平等勞働並にその生産物の分配が行はれる。從つて、妻女とその子女とが男子の奴隷である。家族においては、財産は既にその萠芽、その最初の形態を有するのである。この家族における自由な、尙ほ素朴潛在的な奴隷が最初の財産である。即ち分勞と私有財産とは同義語である。尙ほ分勞とともに、各個の個人、または各個の家族、の利益と、すべての個人の共同的利益の間における矛盾が發生する、この共同的利益といふのは、「普遍的なるもの」として觀念の中に存するのではなくして、彼等の間に勞働の分割せらるゝ諸個人の相互依存としての現實に現はれるのである。

この特殊的並に共同的利益の矛盾から、共同的利益は、國家として、現實の個別的並に全體的利益から區別せられた獨立の形態を採ると同時に、幻想的共同性を取得するのであるが、その眞實の基礎は常に、活動しつゝある分勞の充分に行はれ、特殊利益を有する家族及び種族結合に、殊に、分勞によつて規定せられ、人間の大群を分割し、一が他を支配しつゝある階級に存するのである。故に國家内におけるすべての鬪爭、民主主義、貴族主義、王制主義間の鬪爭、選擧權鬪爭など、一般に普遍的なるものは、共同性の幻想的形態であつて、その内において、種々な階級の現實的鬪爭の行はれるところに過ぎないのである。この理は近代國家の場合においても適合する。私有財産――階級と國家の關係は、不離である。古代並に中世における財産の形態は種族財産である。乍併、本來の私有財産は古代においても近代においても、動産をもつて始まる。中世から始まつた諸民族においては、種族財産は種々な階段――封建的共有財産、組合的動産、手工工場、企業資本――を經て、近代的な、大工業と自由競爭とによつて制約せられた資本、純粹な私有財産に到達した。この私有財産はすべての共同社會の外見を脫却し、財産の發展に對する國家のすべての干渉を排除した。近代國家はこの私有財産に、照應するものである。而して、それは、租稅の支拂によつて、私有財産の所有者によつて買はれ、國債制度によつて、完全に彼等に歸屬し、その存在は國債の株式市場における騰落によつて、全然ブルジョアの國家に與へる商業的信用に依存す

るに至つた。「共同社會からの私有財產の解放によつて、國家は、市民的社會と並び、その外に立つ特殊な存在たるに至つた。國家は、ブルジョアが內外に對して、その財產と利益の相互的保證のために、必然的に與へた、組織形態に外ならぬものである。」

マルクス・エンゲルスは、尙ほ原始的社會狀態から、農業の發達、農業からの小工業の分離、これに伴ふ田舍と都會の分離を論じてゐる。都市の發達は勿論人口の增加とこれに伴ふ生產力の發展によるのであるが、都市の成立は、行政、警察、租稅など、卽ち都市制度及びこれとともに政治一般を與へたのである。こゝにおいて、分勞と生產手段を基礎とする人々の二大階級への分裂が起つた。都市は既に、人口、生產手段、資本、享樂、欲望の集中の事實を示すとともに、田舍は、これと反對の事實、孤立化と、個別化の事實を示してゐる。都市と田舍の對立はたゞ私有財產の內部においてのみ可能である。而して、マルクスは、この都市における勞働の性質並に自然的資本の發生と、その內部における分勞の結果としての商人階級の成立、その結果としての、都市間における分勞の事實を指摘し、その地方的制限から徐々に、民族的範圍への擴大、その結果としてのマヌファクトウルの成立を論じてゐる。而して、マヌファクトウルの成立は近代的社會の曉鐘であつて、これによつて中世的社會は崩壞したものであるが、その過程を簡單に示して……止政策を採るに至り、商業は政治的意義を有するに至つた。これとともに變化したのは、企業家と勞働者の關係であつて、當時の家長的關係は破れて、貨幣關係がこれに代つたのである。これは初期資本主義の社會的樣相であつて、資本家的生產の發展、卽ち大工業の成立は、工業都市を發生せしめ、保護政策から自由主義的政策が行はれるに至つた。これと伴つて、プロレタリヤの階級運動が興隆する。

マルクスは、このプロレタリヤの世界史的意識と運動との構成について、若干のマルクス的考察を與へて、國際的プロレタリヤ運動の構成と、その・・・・・・への必然性とを論證してゐるのであるが、それは通常マルクス主義として理解せられてゐるところと異るところがないのでこゝには省略する。

八

筆者は以上「ドイチッエ・イデオロギイ」の內容をその大略に就つて、社會學的に見て重要と思はれる部分を紹介した。讀者諸君はこれによつて、「ドイチッエ・イデオロギイ」に現はれたマルクス社會學の大要とその重要性を認識せられたことと思ふ。

この書に現はれたマルクス社會學の

個人としての人間である。後にマルクスが「社會化された人間」と名づけたところの個人である。この點において、マルクス社會學の出發點は、社會契約論者のやうに、假定的孤立的個人でもなく、フォイエルバッハのやうに、抽象的な種としての人間でもなかつた。第二に、この現實の個人の根本的行動として、生活資料の生産を擧げた。人間の社會化は、生活のための生産である。後にマルクスが「人間は生産において、啻に自然に對してのみ、關係するのではない。彼等は一定の方法において、共同に働き、彼等の活動を相互に交換することによつてのみ、生産する。生産するがためには、彼等は互に一定の連絡及び關係に入り込み、且つ此等社會的の連絡及び關係においてのみ、自然に對する彼等の關係は成り立ち、生産が行はれる。」(賃勞働と資本)といつたのは、以上の第一及び第二の特徴をいつたものである、マルクスはこの生産資料の生産方法に、すべての他の社會現象を依存せしめた。この經濟的過程に對する他の社會現象の依存性は、兩者の同時的な存在における一方の他方に對する制約と考へられるのである。第三、この經濟的過程の制約は、經濟的過程における變化によつて、新たな制約を發生せしめる。經濟的過程は、その內に結合してゐる人間の經驗と作用とによつて、變轉する。而して外界の自然も、自らを變ずることによつて、これに依存してゐる人間の社會を變形する。要するに人間の社會化は單なる自然の受動的產物ではなく、自然對人間の作用は反作用の狀態において動くものである。第四、人間社會における變轉、即ち歷史的過程は、偶然的の繼起ではなく、それ自體において、特殊な法則を有する發展である。即ち、人間社會の基礎と、これによつて、制約せられてゐる上層との矛盾の發生、この矛盾の克服止揚によつて、上層社會に進むことによつて、發展する。辨證法的發展がこれである。第五に、これらの諸理論と、、、、、との關係である。マルクスは理論の、、、を主張することによつて、理論を、、、、、、のための一手段と考へた。所謂理論と實踐との辨證法的統一である。

これらの特徴を有するマルクス社會學は現代の社會學に對して如何なる意義を有するか。既に記した社會學史的考察において、マルクスが社會學體系の一建設者であることは、明かであり、社會學的方法が第十八世紀のブルジョアジイの、封建的勢力に對する鬪爭過程において、一の「反對科學」として興隆したものとすれば、マルクスはブルジョアジイに對するプロレタリヤの鬪爭において、反對科學即ち第二の反對科學としての社會學を特徴づけたものであるといつて差支ない。かゝる意味において、マルクスの社會學史的研究を要することはこゝに論ずるまでもない。

乍併、マルクスの社會學は現代の社會學に對してもまた重要な意義を有する。それは、現在多くのマルクス主義者が存在するといふこと以上に、マルクスの立場が社會學的研究に對して、重要な貢獻をなしてゐるからである。社會學が社會の根本的性質並に現象に對する因果

法則の探究であるといふ點については、多くの社會學者の一致するところである。社會は如何なる本質を有するか、社會は如何にして、發展するかなどの問題は、社會學者の解決を野望する好個の對象である。而して、幾多の答案がこれに對して書かれたのである。社會有機體說、同類意識說、模倣說、强制說、精神的全體說、心的相互作用說などが、社會の本質を解明するものとして、提案せられた。これらの諸說については、その說明の一方的であるといふ點から、または、社會內においてのみ可能である現象を採り來ることによつて、社會の本質を說明しやうとする點で、不充分とせられてゐる。現在社會學者間の定說として、認められやうとしてゐるものは、心的相互作用說であらうが、この說もまだ心的相互作用の基礎となる筆者の所謂基本社會の本質を明かにしてゐない。マルクス學說の重要性の一は、この基本社會にまで、その社會學的解剖を深めて行き、この社會の基礎の上に行はれる相互作用の經濟的規制を研究することによつて、社會現象の統一的關連の課題を解決しやうとする。この點において、マルクスの立場は、是認せられねばならぬ。この點が正しいとすれば、社會の發展を生產力に依存せしめることも、正當な見解でなければならぬ。この二つの點において、マルクスは確實に、社會の生ける現實的要素を把握してゐる。

社會の發展を生產力の發

ける現象とその法則性の歷史的意義を最もよく理解してゐた一人である。現在の社會學者は社會の變化發展を信じないものはない。然も原始的社會に關する考察を採つて、直ちに現代の社會を律するやうな社會學者に乏しくないのである。この點において、マルクスは吾々に教へるところが極めて多い。彼の考察は主として近代的市民社會の現象であるが、この研究の場合彼はよく市民的社會の歷史性と從つて、その社會法則の歷史性を認識した。現代の社會學はこの歷史性の問題について、大なる考慮を費す必要はないか。殊に形式社會學者の論理的方法において、特に然るのではないか。

理論と實踐との關係については、マルクスの最も强調するところである。「從來哲學者は種々に世界を解釋して來た。乍併、重要なことは、これを、、することである。」といふ「フォイエルバッハに關するテエゼ」に現はれてゐる彼の思想は、彼の理論と實踐とに關する根本的立場である。この理論の實踐性については、社會生活が實踐性を有するといふ點、認識の實踐性、並に實踐による社會形態の推移といふ三點と見ることが出來る。社會生活の實踐的であることについては、議論の餘地はない。實踐的であるが故に、動的

らぬのである。認識の

て、實験要素要求の學問ではない。筆者はこの問題に次の意味のことを書いたことがある。今これを引用して、結論とする。「筆者は社會學が現時の社會問題を解決する學問であることは考へない。この解決は、恐らく社會哲學とも名づけらるべき科學の任務とするところであらう。たゞ社會學は、共同生活關係といふ觀點から社會が如何にあるか、また如何にあつたかを觀察する學問であつて、社會學――少くとも理論社會學の範圍においては、社會が如何にあるべきかの理想または要求を研究する學問ではない。たゞ如何にあるかを觀察するのは如何なる目的であるかといへば、それは如何にあるべきかの問題を解決する一の手段であると答へるの外はないし、またかく答へることによつて、社會學の現代における意義と任務とを最も明確にすることが出來ると思ふ。この意味で、社會學は、他の社會科學を何の意味においても、排斥するものではない。殊に現在プロレタリヤの階級哲學として認められてゐるマルクシズムの學的貢献はこれを認めるに、吝かならざるものである。」

第二貧乏物語

河上肇

第六回

讀者の知られる通り、この物語の第四回の終りの部分は三頁だけ削除され、更にその第五回分に至つては、冒頭の十五字削除から始まつて、末尾の九十二字削除に至るまで、殆ど千字前後の削除を受けてゐる。こんな調子では、私の話は讀者に對し長距離電話よりももつと通じにくいものになつてゐるだらう。元來筆者は、自分の書いたものを活版に附する前に、多くの場合、二度も三度もそれを讀み返し、表現上の些細な點にまで注意を加へることを多年の習慣としてゐるので、すでに筆を擱き

ず、それが印刷に附せられると、何をおいても先づ、活字によつて自分の原稿を再び讀んで見ねば、氣の濟まない質なのである。しかしこの物語の第五回分のみは、今に至るもこれを讀み返す氣になれない。原稿を手離してから後、あすこはあゝすればよかつたなど思ひ返してゐた個所は、すべて問題なく削除されてゐる。私はこれを一瞥しただけで、すでに苦痛を感じた。斯程までに滿身に創痍を受けた文章が――飜譯以外に――世に公けにされたことが嘗てあつたであらうかと疑はれる。いま稿を續けんとするに際し、『

一八七八年度の序文を見ると『次ぎの著作は決して何等かの「内的衝動」の産物ではない、その反對である』といふ書き起しをもつて、それが『甚しく不愉快』な仕事であつたことが、述べられてある。またレーニンの『帝國主義』のロシア版への序文には、『この著作は、ツアー政府の檢閲を顧慮しつゝ書かれたものである』がために、そこでは『やむをえない僅かの政治的論及をも、極めて用心深く言ひ現はし、暗示的な言葉をもつて、いはゞ婉曲に……××しい言葉をもつて語ることを餘儀なくされてゐる。いま自由の日において、この小著の、ツァー政府の檢閲を顧慮したためにゆがめられ・不具にされ・曖昧にされてゐる個所を讀み返すことは、苦痛である。帝國主義が××××××の××を意味すること、社會主義的愛國主義(言葉では社會主義、行爲では愛國主義)とは社會主義に對する全き裏切り……と等しいものであること、勞働運動の內部におけるこの分裂は帝國主義の客觀的事情と關聯してゐること、等々、これらのことについて、私は「××の言葉」をもつて語らねばならなかつた』と書いてある。すなはちこの書のなかには、『暗示的な言葉』や『××しい言葉』や『××の言葉』やをもつて、やむをえず『ゆがめられ・不具にされ・曖昧にされてゐる個所』が、少からず存在するのである。それにも拘らず、著者は完全に言論の自由を得た後も、これを舊態のまゝに棄ておいた。フランス版およびドイツ版への序文を見ると、それについて次ぎの如く述べてある。

『この著作は、すでにロシア版への序文で述べたやうに、一九一六年にツァー政府の檢閲を顧慮しつゝ書かれたものである。私にはいま全文を書きかへる見込みはないが、その上にまたかくすることは、おそらく無駄なことであらう。……このことは(書きかへないで元のまゝにしておくことは)、先進資本主義諸國の多くの××××たちにとつては、いくらか××でさへもあるであらう。といふわけは、檢閲の立場から合法な(著者傍點)本書の先例によつて、彼等は、殆ど總ての×××××の最近の逮捕後もなほ、例へば今日のアメリカまたはフランスの×××××に殘されてゐるところの、合法性の僅かな餘地でさへも之を利用して、「世界民主主義」に關する社會主義的平和主義者の見解と希望とが全く××なることを、證明することが可能であり――また必要である――といふことを、確信しうるからである』。(こゝに社會主義的平和主義者とは、言葉の上では社會主義者であるが、行爲ではブルヂョア的平和主義者にすぎざるものを指す、そしてブルヂョア的平和主義者とは、「資本の××と××との×××××して永遠の平和を夢みるもの」のことである。)

(右の引用はすべて長谷部文雄氏の譯文による。廣く流布してゐる同

第二貧乏物語

河上肇

第六回

讀者の知られる通り、この物語の第四回の終りの部分は三頁だけ削除され、更にその第五回分に至つては、冒頭の十五字削除から始まつて、末尾の九十二字削除に至るまで、殆ど千字前後の削除を受けてゐる。こんな調子では、私の話は讀者に對し長距離電話よりももつと通じにくいものになつてゐるだらう。元來筆者は、自分の書いたものを活版に附する前に、多くの場合、二度も三度もそれを讀み返し、表現上の些細な點にまで注意を加へることを多年の習慣としてゐるのだ、すでに筆を擱き原稿[illegible]ず、それが印刷に附せられると、何をおいても先づ、活字によつて自分の原稿を再び讀んで見ねば、氣の濟まない質なのである。しかしこの物語の第五回分のみは、今に至るもこれを讀み返す氣になれない。原稿を手離してから後、あすこはあゝすればよかつたなど思ひ返してゐた個所は、すべて問題なく削除されてゐる。私はこれを一瞥しただけで、すでに苦痛を感じた。斯程までに滿身に創痍を受けた文章が——翻譯以外に——世に公けにされたことが嘗てあつたであらうかと疑はれる。いま稿を續けんとするに際し、『第二貧

『一八七八年度の序文を見ると『次ぎの著作は決して何等かの「內的衝動」の産物ではない、その反對である』といふ書き起しをもつて、それが『甚しく不愉快』な仕事であつたことが、述べられてある。またレーニンの『帝國主義』のロシア版への序文には、『この著作は、ツアー政府の檢閲を顧慮しつゝ書かれたものである』がために、そこでは『やむをえない僅かの政治的論及をも、極めて用心深く言ひ現はし、暗示的な言葉をもつて、いはゞ婉曲に……××しい言葉をもつて語ることを餘儀なくされてゐる。いま自由の日において、この小著の、ツァー政府の檢閲を顧慮したためにゆがめられ・不具にされ・曖昧にされてゐる個所を讀み返すことは、苦痛である。帝國主義が××××××の××を意味すること、社會主義的愛國主義(言葉では社會主義、行爲では愛國主義)とは社會主義に對する全き裏切り……と等しいものであること、勞働運動の內部におけるこの分裂は帝國主義の客觀的事情と關聯してゐること、等々、これらのことについて、私は「××の言葉」をもつて語らねばならなかつた』と書いてある。すなはちこの書のなかには、『暗示的な言葉』や『××しい言葉』や『××の言葉』やをもつて、やむをえず『ゆがめられ・不具にされ・曖昧にされてゐる個所』が、少からず存在するのである。それにも拘らず、著者は完全に言論の自由を得た後も、これを舊態のまゝに棄てておいた。フランス版およびドイツ版への序文を見ると、それについて次ぎの如く述べてある。

『この著作は、すでにロシア版への序文で述べたやうに、一九一六年にツァー政府の檢閲を顧慮しつゝ書かれたものである。私にはいま全文を書きかへる見込みはないが、その上にまたかくすることは、おそらく無駄なことであらう。……このことは(書きかへないで元のまゝにしておくことは)、先進資本主義諸國の多くの××××たちにとつては、いくらか××でさへもあるであらう。といふわけは、檢閲の立場から合法な(著者傍點)本書の先例によつて、彼等は、殆ど總ての×××××の最近の逮捕後もなほ、例へば今日のアメリカまたはフランスの×××××に殘されてゐるところの、合法性の僅かな餘地でさへも之を利用して、「世界民主主義」に關する社會主義的平和主義者の見解と希望とが全く××なることを、證明することが可能であり——また必要である——といふことを、確信しうるからである』。(こゝに社會主義的平和主義者とは、言葉の上では社會主義者であるが、行爲ではブルヂョア的平和主義者にすぎざるものを指す、そしてブルヂョア的平和主義者とは、「資本の××と××との×××××して永遠の平和を夢みるもの」のことである。)

(右の引用はすべて長谷部文雄氏の譯文による。廣く流布してゐる同

氏の譯本には、前後を通じて一字の伏字も用ひてない。ファー政府の檢閲をすら通過し來つたものであるから、これは當然のことであるが、しかしこゝでは、改造社の意見により進歩主義を標榜せる×××××××××××を顧慮して、私は特に若干の伏字を用ひた。)

內閣更迭後、書作物の檢閲はむしろ苛酷さを增した觀があるが、これに對して效果的な抗議は今どこにも行はれてゐない。他方、一部の人々は、現在の狀勢下において合法的なものを書く人間はすべて社會民主主義者に限られるとの獨斷のもとに、××××××のものを書いて、自分の小ブルヂョア式××的氣分を滿足せしめることに、關心を向けすぎてゐる傾向がある。(私はかく言つたからとて、×××を×××××されねばならぬ幾多の重要なる文書があることを、決して看過してゐるのではない)。そして正直にいへば、私自身も、ややともすれば、さういふ氣分に襲はれがちである。現にこの『貧乏物語』も、こうまで××の拘束が甚しくては、その續きを書く氣になれないし、書いても意味をなさない。さういふ風に幾度か思つた。だが、翻つて見ると、エンゲルスは『甚だしく不愉快』な仕事を――『マルクスおよび彼れによつて主張された辯證法的方法および××××的

げるといふ面倒な仕事を、――ドイツ社會民主黨の多數の代表者からは甚しき憤慨と殘酷なる攻撃を受けつゝ、現にその大會では之をその中央機關紙たる『前進』に連載することをすら禁止する旨の決議が殆ど通過せんばかりであつたために、遂にその附錄として採錄されるの外なきに至つたといふ不愉快な事情のもとで、(半世紀を距てた今日から見ると、後にあれほどの貢獻をしたエンゲルスの主要著作が、その發表の當時、味方の陣營において斯くまで殘酷な取扱を受けたことが、むしろ不思議である)、忍耐強く遂行したのであるが、しかもそのために、『資本論を除けば、一の特殊なる方法としての・および一の特殊なる體系としての・マルクス主義の傳播のために、これほどまでに貢獻したものは他にない』と稱されるところの、『マルクス主義の歷史における劃期的な著作』たる『反デューリング論』は出來上がつたのである。(引用符を附したる部分は、リャザノフの言葉)。更にまたレーニンは、帝國主義××の×××の問題を――私はそれにちよつと觸れただけで、すぐに三頁分を削除されねばならぬやうな、下手な取扱ひ方をしたのであるが――その苛酷さにおいて當時恐らく世界く

不具にされ、曖昧にされる』ことを忍ばねばならなかつたのであり、後に『自由の日において之を讀み返すことは苦痛である』と、彼れ自らが言つてゐるのであるが、しかも彼れは斯かる苦痛に耐えることを敢て必要としたのであり、そして今日となつては、當時已むをえずして歪められ不具にされたものを、そのまゝに保存しておくよか『むしろ××ですらある』と言つてゐるのである。今これらのことは、私にとつてこの際特に教訓的である。吾々は道樂に――それ自身を目的に――ものを書くのではない。必要に際しては、それが如何に不愉快な仕事であらうとも、またそれが如何に窮屈な拘束のもとに行はれねばならぬにしても、吾々にはそれを爲し遂げねばならぬ義務がある。私は敢て氣力を失ふことなく、何十萬の讀者を有するこの論壇を利用するために、できうべくんば完全な文章を、二重の難關を通して無事に讀者諸君に送り届けるべく、一應の苦心を試みるであらう。――こゝに完全なる文章といふのは、檢閲的の意味で、伏字のない文章のことである。難關といふのも、やはり檢閲的の意味で、その一は雜誌の編輯局における私的檢閲の難關であり、その二は内務省の警保局における公的檢閲の難關である。（そこでは、謂はゆる思想取締りのために行はれた豫算増額の××××、××××××××××××、『勸進帳』を聲高らかに讀み上げた位では、牛人の辨慶も通さぬことになつてゐる由）。かゝる諸條件のもとに如何なる文章が私にもなほ作製されうる餘地があるか、以下の數稿は嚴たる事實をもつてそれに答へるであらう。

九、唯物史觀（その3、――社會的存在と社會的意識）

どういふわけで・どういふところから・生まれるのか分からないが、ともかく人間の頭腦のなかに先づ何等かの概念（例へば地球）といふ概念）ができて、その概念から一定の外物（例へば地球）が生まれ出るのだ、といふ風に考へてゐるのは、觀念論の見地である。またそれとは逆に、人間の頭腦や意識やとは最初から獨立に地球なる外物が存在してをり、そしてその外物が人間の感覺器官（例へば眼、等々）を通して人間の頭腦に反映することにより、地球なる意識が生まれるのだ、といふ風に考へてゐるのは、唯物論の見地である。簡單にいへば、意識は一般に存在を反映する、――これが全唯物論の一般的テーゼである。今この見地を自然界にのみ局限することなく、徹底的にこれを社會の上に押しひろげるとき、吾々はそこに、社會的意識は社會的存在の反映であるといふ史的唯物論の根本的テーゼを得る。かくてエンゲルスの言葉によれば、『觀念論「すなはち觀念または意識をもつて

存在または物質より本源的なものとなす考」は、その最後の逃げ場たる史觀から追ひ出され、唯物史觀が提供され、そして、これまでのやうに人間の存在を彼等の意識からでなしに、彼等の意識を彼等の存在から説明する道が發見されたのである』。私は以下、この史的唯物論の根本的テーゼを、――社會的意識は社會的存在の反映であるといふことを、――唯物論一般との關聯において、しかもブルヂョア的哲學に迷はされてゐない人々には誰にでも理解されうる程度の平易さをもつて、やゝ詳細に説明するであらう。何故なれば、社會問題の根本的解決に對する吾々の態度――全被壓大衆のあらゆる搾取からの解放（かゝる社會的存在の××）は、決して書齋虫の單なる道德論など（一の社會的意識）によつて實現されうるものでなく、それは必然的にかく〳〵の道をとることを不可避的にされてゐる、となす吾々の見解――は、以下説明せんとする史的唯物論の根本的命題と、不可分離的な連絡を有するものであるから。

私はすでに、この物語の第一回の二、『辯證法的唯物論（總説）』の終りにおいて、この問題に關するレーニンの言葉を引用した。それはこの問題をば、簡單に、しかも

『世界經濟の中における個々の各生産者は、生産技術の上にこれこれの變化をもたらしたことを意識してをり、各〻の商品所有者は、彼れがこれ〳〵の生産物を他と交換したことを意識してをるが、しかし生産者も商品所有者も、彼等がこれによつて社會的存在を變化することを、意識してゐない。資本主義的世界經濟の內部における斯かる諸變化の一切の總計をその一切の分岐にわたつて知りつくすことは、マルクスが七十人ゐてもなしえなかつたであらう。たかだか成し遂げられたところのものは、かゝる變動の諸法則が主要な根本的な筋道において發見され、かゝる變動の客觀的論理とその歷史的發展とが啓示されたことである。――こゝに客觀的といふは、意識體たる人間から成り立つてゐる社會が、意識體の存在とは無關係に存在し且つ發展しうるといふ意味においてではなく、社會的存在は人間の社會的意識から獨立してゐるといふ意味においてである。諸君が生活をなし經濟を營み、子を産み生産物を造り、またそれらの生産物を交換するといふ事實から、出來事の一の客觀的に必然的な連鎖、一の發展の連鎖が成り立つのであるが、それは諸君の社會

一六三頁。）

私はこれまで他の論文においても、すでに幾度かレーニンの以上の言葉を引用した、と記憶してゐる。だが今に至るもなほ、この言葉のうちに含まれてゐる意味の豐富さは、まだ一般的には知られてゐない。（現に私は、この雜誌と時を同じうして發行される他の雜誌において土田杏村氏の批評に答へるにあたり、重ねてこの問題に觸れることを餘儀なくされてゐる）。吾々は執拗にこれを擁護し××せねばならぬ。

吾々は決して、生産および交換に關する吾々の個人的活動が無意識的に行はれてゐると言ふのではない。例へば私が紡績業の一經營者として、新たに發明された或る機械を、他の同業者に卒先して利用することにしたとするならば、その場合私はもちろん無意識に行動してゐるのではなく、むしろこれによつて勞働の生産力はどれだけ增加するか、從つて生産物たる絲の生産費はどれだけ節減されうるか、等々、これによつて生ずべき生産技術上の一々の變化を意識してゐるのは無論のこと、これによつて差しあたり私自身の個人經濟の上に生ずべき利益等々をも、またあらかじめ私の意圖内におくのである。だが、私が新たなる機械を利用したといふことは、やがて他の同業者を刺激して同じやうなる機械の採用を餘儀なくせしめ、しかるかぎりにおいて絲價の低落を招き、資力の乏しきため同樣の機械を利用しえざる小企業者を倒産せしめ、かくて一方においては資本の集中を助長すると同時に、他方においては不變資本（原料機械等に放下された資本）と可變資本（勞賃の支拂に充てられた資本）との割合に關する社會的平均の上に變化を生ぜしめ、そのことはまた、一方においては勞働者の失業數を增加せしめ、社會的全生産物の配分を勞働者階級のため益々不利ならしめると同時に、他方においては平均利潤率の漸次的下落の傾向を生み、從つてまた小資本家の沒落を早める、等々、これからそれへと『出來事の一の客觀的に必然的な連鎖』を生むに至るのであり、そのことのために、小資本家と大資本家との社會的關係、資本家階級と勞働者階級との社會的關係、等々、一言にしていへば吾々相互の間に結ばれる社會的諸關聯——すなはち吾々の社會的存在——が、徐々に・しかし必然的に・一切の分岐にわたつて變化されることになるのであるが、總てそれらのことに至つては、最初意識的に機械を利用したものも、差しあたつては、意識せざるところのものであり、意識しえざるところのものである。

以上のことは、誰にとつても極めて理解し易いことであるが、それにも拘らず之に關していつまでも種々なる誤解が殘存するのは、社會を構成してゐる個々の個人が意識體たるがためである。これを前に擧

存在または物質よりも本源的なものとなす考」は、その最後の逃げ場たる史觀から追ひ出され、唯物史觀が提供され、そして、これまでのやうに人間の存在を彼等の意識からでなしに、彼等の意識を彼等の存在から說明する道が發見されたのである』。私は以下、この史的唯物論の根本的テーゼを、——社會的意識は社會的存在の反映であるといふことを、——唯物論一般との關聯において、しかもブルヂョア的哲學に迷はされてゐない人々には誰にでも理解されうる程度の平易さをもつて、やゝ詳細に說明するであらう。何故なれば、社會問題の根本的解決に對する吾々の態度——全被壓大衆のあらゆる搾取からの解放（かゝる社會的存在の××）は、決して書齋虫の單なる道德論など（一の社會的意識）によつて實現されうるものでなく、それは必然的にかく／＼の道をとることを不可避的にされてゐる、となす吾々の見解——は、以下說明せんとする史的唯物論の根本的命題と、不可分離的な連絡を有するものであるから。

私はすでに、この物語の第一回の二、『辯證法的唯物論（總說）』の終りにおいて、この問題に關するレーニンの言葉を引用した。それはこの問題をば、簡單に、しかも異常な明白さをもつて、說明してゐると想はしるの

『世界經濟の中における個々の各生産者は、生産技術の上にこれこれの變化をもたらしたことを意識してをり、各々の商品所有者は、彼れがこれ／＼の生産物を他と交換したことを意識してをるが、しかし生産者も商品所有者も、彼等がこれによつて社會的存在を變化することを、意識してゐない。資本主義的世界經濟の內部における斯かる諸變化の一切の總計をその一切の分岐にわたつて知りつくすことは、マルクスが七十人ゐてもなしえなかつたであらう。たかだか成し遂げられたところのものは、かゝる變動の諸法則が主要な根本的な筋道において發見され、かゝる變動の客觀的論理とその歷史的發展とが啓示されたことである。——こゝに客觀的といふは、意識體たる人間から成り立つてゐる社會が、意識體の存在とは無關係に存在し且つ發展しうるといふ意味においてではなく、社會的存在は人間の社會的意識から獨立してゐるといふ意味においてである。諸君が生活をなし經濟を營み、子を産み生産物を造り、またそれらの生産物を交換するといふ事實から、出來事の一の客觀的に必然的な連鎖、一の發展の連鎖が成り立つのであるが、それは諸君の社會的意識、

—六三頁。)

私はこれまで他の論文においても、すでに幾度かレーニンの以上の言葉を引用した、と記憶してゐる。だが今に至るもなほ、この言葉のうちに含まれてゐる意味の豐富さは、まだ一般的には知られてゐない。(現に私は、この雜誌と時を同じうして發行される他の雜誌において土田杏村氏の批評に答へるにあたり、重ねてこの問題に觸れることを餘儀なくされてゐる)。吾々は執拗にこれを擁護し××せねばならぬ。

吾々は決して、生産および交換に關する吾々の個人的活動が無意識的に行はれてゐると言ふのではない。例へば私が紡績業の一經營者として、新たに發明された或る機械を、他の同業者に卒先して利用することにしたとするならば、その場合私はもちろん無意識に行動してゐるのではなく、むしろこれによつて勞働の生産力はどれだけ增加するか、從つて生産物たる絲の生産費はどれだけ節減されうるか、等々、これによつて生ずべき生産技術上の一々の變化を意識してゐるのは無論のこと、これによつて差しあたり私自身の個人經濟の上に生ずべき利益等々をも、またあらかじめ私の意圖内におくのである。だが、私が新たなる機械を利用したといふことは、やがて他の同業者を刺激して同じやうなる機械の採用を餘儀なくせしめ、しかるかぎりにおいて絲價の低落を招き、資力の乏しきため同樣の機械を利用しえざる小企業者を倒産せしめ、かくて一方においては資本の集中を助長すると同時に、他方においては不變資本(原料機械等に放下された資本)と可變資本(勞賃の支拂に充てられた資本)との割合に關する社會的平均の上に變化を生ぜしめ、そのことはまた、一方においては勞働者の失業數を增加せしめ、社會的全生産物の配分を勞働者階級の爲め益々不利ならしめると同時に、他方においては平均利潤率の漸次的下落の傾向を生み、從つてまた小資本家の沒落を早める、等々、それからそれへと『出來事の一の客觀的に必然的な連鎖』を生むに至るのであり、そのことのために、小資本家と大資本家との社會的關係、資本家階級と勞働者階級との社會的關係、等々、一言にしていへば吾々相互の間に結ばれる社會的諸關聯——すなはち吾々の社會的存在——が、徐々に・しかし必然的に・一切の分岐にわたつて變化されることになるのであるが、總てそれらのことに至つては、最初意識的に機械を利用したものも、差しあたつては、意識せざるところのものであり、意識しえざるところのものである。

以上のことは、誰にとつても極めて理解し易いことであるが、それにも拘らず之に關していつまでも種々なる誤解が殘存するのは、社會を構成してゐる個々の個人が意識體たるがためである。これを前に掲

存在または物質よりぬ本源的なものとなす考」は、その最後の逃げ場たる史觀から追ひ出され、唯物史觀が提供され、そして、これまでのやうに人間の存在を彼等の意識からでなしに、彼等の意識を彼等の存在から說明する道が發見されたのである』。私は以下、この史的唯物論の根本的テーゼを、——社會的意識は社會的存在の反映であるといふことを、——唯物論一般との關聯において、しかもブルヂョア的哲學に迷はされてゐない人々には誰にでも理解されうる程度の平易さをもつて、やゝ詳細に說明するであらう。何故なれば、社會問題の根本的解決に對する吾々の態度——全被壓大衆のあらゆる搾取からの解放（かゝる社會的存在の××）は、決して書齋虫の單なる道德論など（一の社會的意識）によつて實現されうるものでなく、それは必然的にかく〳〵の道をとることを不可避的にされてゐる、となす吾々の見解——は、以下說明せんとする史的唯物論の根本的命題と、不可分離的な連絡を有するものであるから。

　私はすでに、この物語の第一回の二、『辯證法的唯物論（總說）』の終りにおいて、この問題に關するレーニンの言葉を引用した。それはこの問題をば、簡單に、しかも

『世界經濟の中における個々の各生産者は、生産技術の上にこれ〳〵れの變化をもたらしたことを意識してをり、各々の商品所有者は、彼れがこれ〳〵の生産物を他と交換したことを意識してをるが、しかし生産者も商品所有者も、彼等がこれによつて社會的存在を變化することを、意識してゐない。資本主義的世界經濟の內部における斯かる諸變化の一切の總計をその一切の分岐にわたつて知りつくすことは、マルクスが七十人ゐてもなしえなかつたであらう。たかだか成し遂げられたところのものは、かゝる變動の諸法則が主要な根本的な筋道において發見され、かゝる變動の客觀的論理とその歷史的發展とが啓示されたことである。——こゝに客觀的といふは、意識體たる人間から成り立つてゐる社會が、意識體の存在とは無關係に存在し且つ發展しうるといふ意味においてではなく、社會的存在は人間の社會的意識から獨立してゐるといふ意味においてである。諸君が生活をなし經濟を營み、子を產み生產物を造り、またそれらの生產物を交換するといふ事實から、出來事の一の客觀的に必然的な連鎖、一の發展の連鎖が成り立つのであるが、それは諸君の社會的意識、

一六三頁。)

私はこれまで他の論文においても、すでに幾度かレーニンの以上の言葉を引用した、と記憶してゐる。だが今に至るもなほ、この言葉のうちに含まれてゐる意味の豐富さは、まだ一般的には知られてゐない。(現に私は、この雜誌と時を同じうして發行される他の雜誌において土田杏村氏の批評に答へるにあたり、重ねてこの問題に觸れることを餘儀なくされてゐる)。吾々は執拗にこれを擁護し××せねばならぬ。

吾々は決して、生產および交換に關する吾々の個人的活動が無意識的に行はれてゐると言ふのではない。例へば私が紡績業の一經營者として、新たに發明された或る機械を、他の同業者に率先して利用することにしたとするならば、その場合私はもちろん無意識に行動してゐるのではなく、むしろこれによつて勞働の生產力はどれだけ增加するか、從つて生產物たる絲の生產費はどれだけ節減されうるか、等々、これによつて生ずべき生產技術上の一々の變化を意識してゐるのは無論のこと、これによつて差しあたり私自身の個人經濟の上に生ずべき利益等々をも、またあらかじめ私の意圖内におくのである。だが、私が新たなる機械を利用したといふことは、やがて他の同業者を刺激して同じやうなる機械の採用を餘儀なくせしめ、しかるかぎりにおいて絲價の低落を招き、資力の乏しきため同樣の機械を利用しえざる小企業者を倒產せしめ、かくて一方においては資本の集中を助長すると同時に、他方においては不變資本(原料機械等に放下された資本)と可變資本(勞賃の支拂に充てられた資本)との割合に關する社會的平均の上に變化を生ぜしめ、そのことはまた、一方においては勞働者の失業數を增加せしめ、社會的全生產物の配分を勞働者階級のため益々不利ならしめると同時に、他方においては平均利潤率の漸次的下落の傾向を生み、從つてまた小資本家の沒落を早める、等々、それからそれへと『出來事の一の客觀的に必然的な連鎖』を生むに至るのであり、そのことのために、小資本家と大資本家との社會的關係、資本家階級と勞働者階級との社會的關係、等々、一言にしていへば吾々相互の間に結ばれる社會的諸關聯——すなはち吾々の社會的存在——が、徐々に・しかし必然的に・一切の分岐にわたつて變化されることになるのであるが、總てそれらのことに至つては、最初意識的に機械を利用したものも、差しあたつては、意識せざるところのものであり、意識しえざるところのものである。

以上のことは、誰にとつても極めて理解し易いことであるが、それにも拘らず之に關していつまでも種々なる誤解が殘存するのは、社會を構成してゐる個々の個人が意識體たるがためである。これを前に掲

存在または物質より本源的なものとなす考」は、その最後の逃げ場たる史觀から追ひ出され、唯物史觀が提供され、そして、これまでのやうに人間の存在を彼等の意識からでなしに、彼等の意識を彼等の存在から說明する道が發見されたのである』。私は以下、この史的唯物論の根本的テーゼを、——社會的意識は社會的存在の反映であるといふことを、——唯物論一般との關聯において、しかもブルヂョア的哲學に迷はされてゐない人々には誰にでも理解されうる程度の平易さをもつて、やゝ詳細に說明するであらう。何故なれば、社會問題の根本的解決に對する吾々の態度——全被壓大衆のあらゆる搾取からの解放（かゝる社會的存在の××）は、決して書齋虫の單なる道德論など（一の社會的意識）によつて實現されうるものでなく、それは必然的にかく／＼の道をとることを不可避的にされてゐる、となす吾々の見解——は、以下說明せんとする史的唯物論の根本的命題と、不可分離的な連絡を有するものであるから。

　私はすでに、この物語の第一回の二、『辯證法的唯物論（總說）』の終りにおいて、この問題に關するレーニンの言葉を引用した。それはこの問題をば、簡單に、しかも異常な明白さをもつて、說明してゐると思はれるので、幾分の

『世界經濟の中における個々の各生產者は、生產技術の上にこれこれの變化をもたらしたことを意識してをり、各〻の商品所有者は、彼れがこれ／＼の生產物を他と交換したことを意識してをるが、しかし生產者も商品所有者も、彼等がこれによつて社會的存在を變化することを、意識してゐない。資本主義的世界經濟の內部における斯かる諸變化の一切の總計をその一切の分岐にわたつて知りつくすことは、マルクスが七十人ゐてもなしえなかつたであらう。たかだか成し遂げられたところのものは、かゝる變動の諸法則が主要な根本的な筋道において發見され、かゝる變動の客觀的論理とその歷史的發展とが啓示されたことである。——こゝに客觀的といふは、意識體たる人間から成り立つてゐる社會が、意識體の存在とは無關係に存在し且つ發展しうるといふ意味においてではなく、社會的存在は人間の社會的意識から獨立してゐるといふ意味においてである。諸君が生活をなし經濟を營み、子を產み生產物を造り、またそれらの生產物を交換するといふ事實から、出來事の一の客觀的に必然的な連鎖、一の發展の連鎖が成り立つのであるが、それは諸君の社會的意識か

一六三頁。)

私はこれまで他の論文においても、すでに幾度かレーニンの以上の言葉を引用した、と記憶してゐる。だが今に至るもなほ、この言葉のうちに含まれてゐる意味の豐富さは、まだ一般的には知られてゐない。(現に私は、この雜誌と時を同じうして發行される他の雜誌において土田杏村氏の批評に答へるにあたり、重ねてこの問題に觸れることを餘儀なくされてゐる)。吾々は執拗にこれを擁護し××せねばならぬ。

吾々は決して、生産および交換に關する吾々の個人的活動が無意識的に行はれてゐると言ふのではない。例へば私が紡績業の一經營者として、新たに發明された或る機械を、他の同業者に卒先して利用することにしたとするならば、その場合私はもちろん無意識に行動してゐるのではなく、むしろこれによつて勞働の生産力はどれだけ増加するか、從つて生産物たる絲の生産費はどれだけ節減されうるか、等々、これによつて生ずべき生産技術上の一々の變化を意識してゐるのは無論のこと、これによつて差しあたり私自身の個人經濟の上に生ずべき利益等々をも、またあらかじめ私の意圖内におくのである。だが、私が新たなる機械を利用したといふことは、やがて他の同業者を刺激して同じやうなる機械の採用を餘儀なくせしめ、しかるかぎりにおいて絲價の低落を招き、資力の乏しきため同樣の機械を利用しえざる小企業者を倒產せしめ、かくて一方においては資本の集中を助長すると同時に、他方においては不變資本(原料機械等に放下された資本)と可變資本(勞賃の支拂に充てられた資本)との割合に關する社會的平均の上に變化を生ぜしめ、そのことはまた、一方においては勞働者の失業數を增加せしめ、社會的全生産物の配分を勞働者階級のため益々不利ならしめると同時に、他方においては平均利潤率の漸次的下落の傾向を生み、從つてまた小資本家の沒落を早める、等々、これからそれへと「出來事の一の客觀的に必然的な連鎖」を生むに至るのであり、そのことのために、小資本家と大資本家との社會的關係、資本家階級と勞働者階級との社會的關係、等々、一言にしていへば吾々相互の間に結ばれる社會的諸關聯――すなはち吾々の社會的存在――が、徐々に・しかし必然的に・一切の分岐にわたつて變化されることになるのであるが、總てそれらのことに至つては、最初意識的に機械を利用したものも、差しあたつては、意識せざるところのものであり、意識しえざるところのものである。

以上のことは、誰にとつても極めて理解し易いことであるが、それにも拘らず之に關していつまでも種々なる誤解が殘存するのは、社會を構成してゐる個々の個人が意識體たるがために、これを前に指

げた例について言へば、例へば私が紡績業者として或る新たなる機械を採用するとき、私はもちろん無意識に行動するのではない。既に述べたやうに、私はかゝる新たなる機械の應用によつて生ずべき生產技術上の一々の變化を意識してゐるのは勿論、これによつて差しあたり私自身の個人經濟の上に生ずべき利益等々をも、またあらかじめ私の意圖內におくのである。かくの如く意識的に活動するといふことは、人間の特徵である。そして社會はかゝる意識體たる人間から成り立つてゐる點において、地球が無機物から構成されてゐるのとは異なる。だから社會の運動は、地球の運動と異なり、かゝる意識體の意識的活動と無關係に行はれるのではない。このことから人々は、吾々の社會的存在までが吾々の意識的產物であるかに思ひ込むのであり、そのために史觀は『觀念論にとつての最後の逃げ場』となつてゐるのである。

だが、吾々はこれに對して、人間の社會的存在はその社會的意識から獨立してゐるといふのである。吾々の社會的存在はどうなつてゐるか、それが日々どう變化してゆくか、これらのことは、吾々が一々意識してゐるところでもなく、また意識されうるものでもない。これが

しい急速な前進をなしつゝある主なる領域は、トルコおよびアフガニスタンである。これらの兩國は、經濟的にも思想的にも、今や極めて急速に封建制から資本制へ推移しつゝある。同樣にまた、イギリスの諸領地および南アメリカの若干の國々においても、資本主義は急速に發展しつゝある。かくてこれを世界全體について見れば、一方においては、資本主義的經濟の體系一般の上に××××が益々著しく現はれて來てゐるとはいへ、他方において、資本主義的な生產樣式はなほ地理的に擴大され、資本主義的に生產される貨物の分量は次第に增加しつゝあるのである』と述べておいたが、現在における吾々の社會的存在に關する斯かる鳥瞰圖的な概觀ですらも、現に大多數の人々によつて少しも意識されてはゐない。況んや『資本主義的世界經濟の內部における諸變化の一切の總計をその一切の分岐にわたつて知りつくすことは、マルクスが百人ゐても成しえざるところである。』

アドラトスキーの『レーニン主義の理論と實践』には、この點に關し次ぎの如く述べてある。『思惟は存在によつて決定される。……吾々は特に、現實の社會關係を、それについて人間が考へてゐるところのもの（すなはち人間の觀念）と混同することなく、眞實あるがまゝに

在してゐても、それに對する意識はなほ缺けてをり、人々は未だ彼等自身がなすところのもの總てを明細に理解してゐないといふことによつても、明白になる。最初に關係が成熟し、然るのち意識が生じ、人人はそれを理解し始める。八十年代のロシアにおいては、資本主義はすでに疑ふべからざる事實であつたにも拘はらず、その頃において、ロシアの資本主義とは無意味なことだと論證した「學者」たちの著述が現はれた。更にまた九十年代においても、ロシアに資本主義ありや否やについての、ナロードニキとマルクス主義者との論爭が、續けられてゐたのである。』(前揭書、三頁)。

私はこゝまで書いて來て、いま我國の左翼陣營内に起つてゐる討論を聯想せずにはゐられない。吾々の偉大なる教師が言つてゐるやうに、『吾々の理論はドグマではなく、××の×××である』。意識によつて存在が規定されるのではないとの唯物論的見地は、吾々が吾々の鬪爭において客觀的存在を常にあるがまゝに認識すべきことを要求する。レーニンはその名著の一たる『小兒病』において、ドイツの×××××を批評して次ぎの如く言つてゐる。

『ドイツの「急進主義者」たちが、彼等の希望を(レーニン傍點)・この問題に關する彼等自身の觀念的および政治的態度を・客觀的な現實となしたことは、明かである。これは×××にとつて最も危險な過誤である。特別に野蠻な殘忍なツァーリズムの羈軛が特別に長い期間にわたつて、種々なる方向の極めて多種多樣なタイプの×××を・驚異に値する獻身と熱意と剛勇と意志の力とを具へた×××を・造り出したロシアにおいて、吾々は×××の斯かる過誤をすぐ間近で觀察し、特に注意深く研究して來たのであるから、吾々は特によくこれを知つてをり、從つて他國における斯かる過誤が特に明瞭に眼につく。』(ドイツ本、四七頁。和田氏譯本、七三頁。)

自分たちの希望を客觀的な現實とすりかへることは、取りも直さず唯物論の徹底的な放棄を意味するのであるから、それは實に『最も危險なる過誤』を齎らさざるをえないのである。私は今かゝる××××××××見てゐるかに感ずるが、しかしこゝでは、それについて最早やこれ以上立ち入るべきではあるまい。

吾々は當面の問題から離れよう。だが、アドラトスキーの擧げてゐる僅か一二のロシアにおける實例によつて見ても、社會的存在の變化は容易に吾々の意識に上ぼるものでない、といふことが分からう。「思惟は存在によつて決定される。だが意識がこの決定へ從ふことは、時として極めて緩漫である。』(アドラトスキー、前揭書、四頁)かくて『變化する現實と同行しえない意識は、「昨日」の現實を反映してゐる

るに』すぎない。(前掲書四頁に引用せるレーニンの言葉)。ところで、『吾々の政治的活動はネヴスキイ街の鋪石道(ペトログラードの眞直な大通りの・奇麗な・廣い・平坦な・鋪石道)ではない』。それはむしろ險難に充ち〴〵た前人未踏の山嶽を攀ぢ登るに等しい。しかるにもし吾々が、自己の希望といふが如き意識または『昨日』の現實を反映してゐるにすぎない意識を、客觀的に現存する『今日』の現實とすりかへつゝ、この險難を渡らうとするならば、それは眼を閉ぢて千仭の壑に臨むが如きものであり、そこでは最も危險なる過誤がたやすく犯される。だから、意識から存在が生まれるとなさず、逆に意識をもつてたゞ存在の反映にすぎないとなす唯物論者は、一切の活動の前提として先づできうるかぎり正確なる客觀的存在の認識を必要とする。このことを心得ないものは、マルクス主義のイロハを理解せざるものである。だから一般的な問題としては、マルクスは何よりも先づ資本主義社會の科學的分析に主力を費したのであり、レーニンもまた、『人類の最高課題は、一般的な根本の筋道における經濟的進化(社會的存在の進化)の客觀的論理を把握し、人類の社會的意識と總ての資本主義國の進歩せる諸階級の意識とを、それに對して出來うるかぎり明白に

今かゝる吾々の社會的存在の基礎的構造をなすものは、經濟的諸關係(マルクスの謂ふところの生産諸關係)であつて、それは、すでに前回に述べたやうに、大まかに言へば、古代共産制から奴隷制へ、奴隷制から農奴制(すなはち封建制)へ、また農奴制から現在の賃勞働者制(すなはち資本家的社會)へと、轉形し來つたものである。なほこれらの社會諸形態は、自然發生的な原始共産制を外にしては、すべて搾取する階級(例へば奴隷の所有者、封建的領主、資本家、等々)と・搾取される階級(例へば奴隷、農奴、賃勞働者、等々)と・に分裂してゐるのであるから、それに應じてまた、搾取する階級が搾取される階級を××的に××するための××としての××××が、そこに共通に存在してゐる。それが經濟的基礎の上に生ゐ立つ上層建築としての、從つてまた經濟的基礎の特殊性に適應してそれ〴〵の特殊性を具備するところの、社會の×××××である。この×××構造が如何に××階級の×××階級に對する××を×××ためのものに外ならぬかについては、すでに前回において極めて不充分ながら若干の暗示を試みておいた。今はそれ以上これに立ち入ることを控へる。

な・物質的な・土台であり、それが取りも直さず吾々の社會的存在なるものである。そして吾々は今日まで、かゝる社會的存在の種々なる様式を、少くともその成立の最初のうちは全く無意識的に、つぎ〲に維持し來つたのである。それに關する吾々の意識的作用は、いつでも、それがすでに出來上がつてから後の祭である、この點に關し、『資本論』第一卷の『商品の物神崇拜的性質とその秘密』と題する有名なる節のうちには、次ぎの如く述べてある。

『人間生活の諸形態に關する思索は、從つてまたそれらの科學的分析は、一般に、現實の發展と反對の道行をする。それは post festum（後になつて）、そしてそれゆゑに發展過程の出來上がつた諸結果をもつて、始まる』。（カウツキー版、三九一頁）

この一句は、數年前福本和夫氏が力強く引用されてからこのかた、我國のマルクス主義文獻に通ずる人々にとつては周知の句となつてゐるが、少くとも私は今日までこの句の意味を正確には理解してゐなかつたと考へる。（拙著『資本論入門』、合本版、四一二頁參照）。マルクスはこゝで特に post festum といふラテン語を使つてゐるが、もし私が誤解してゐるのでなかつたら、これは『祭の後』といふ意味であつて、あたかも日本語で『後の祭』といふのと、言葉の感じは同じものなのであらう。かくてマルクスの言ふところは、これを別の言葉で言ひ現はせば、次ぎの如くなるであらう。『人間生活の諸形態（言ひ換へれば、人間の社會的存在の諸形態）に關する思索は、從つてまたその科學的分析は、いつでも後の祭であり、すでに發展の結果として一定の形態が出來上がつてしまつた後に、それについて始めて行はれるものである。』考へて見ると、これは當然のことでもある。何故なれば、社會的意識は社會的存在の反映に外ならぬのであるから、社會的存在の一定の形態が先づ出來上がつてしまはねば、それについての一定の意識が確立され、それに關する思索が行はれ始めるといふことは、ありえないからである。

これによつて見れば、人間の歷史を『社會的意識すなはち種々なる哲學的の・宗教的の・政治的の・學說および見解』から說明しようとすることが、如何に本末顚倒であるかが分からう。社會的存在に關する思索——かゝる觀念的なもの——は、すべて事後に行はれる『後の祭』である。それはそれに先だつて行はれた本當の祭を反映してゐるにすぎない。反映してゐるものから反映されてゐるものが說明さるべきではなく、逆に反映されてゐるものからその反映が說明されねばならぬ。譬へば、私の寫眞から私が生まれるのではなく、たゞ私の現實的な存在が寫眞に映されたにすぎないのだから、そこに寫つてゐる姿が何故これ〲の形をしてゐるかは、實物の私がかく〲の姿をしてゐ

るといふことからのみ、說明されねばならぬ。マルクスが『政治經濟學批判』の序言中における有名なる唯物史觀の公式において、『社會の××を觀察するにあたつては、吾々は常に、經濟上の生產諸條件のうちに起れる物質的の・自然科學的に忠實に確證されうる・××〔すなはち社會的存在の××〕と、人間がそのうちで斯かる衝突〔生產諸力と生產諸關係との衝突〕を意識せしめられ且つこれを克服するに至るところの、法律的の・政治的の・宗教的の・藝術的の・ないし哲學的の・簡單にいへば觀念的の・諸形態〔すなはち社會的意識の諸形態〕とを、區別しなければならぬ』と言ひ、且つ『かゝる××時代をばその時代の意識から判斷することは、たゞに不可能であるばかりでなく、むしろこの意識なるものが、物質的生活〔すなはち社會的存在〕の矛盾から・社會的生產諸力と生產諸關係との間に現存する衝突から・說明されねばならぬのである』と言つてゐるのは、そのためである。

安部磯雄氏の『社會民衆黨綱領解說』なるものを見ると、そこには『要するに危險思想は多くは生活難から生ずるものであるから、直接に危險思想を取締るよりも先づ生活難の解決に努力する方が賢明な途ではないかと思ふ』といふ言葉があるが、私から見ると、これは少し滑稽

條件としてゐるのであり、結局のところそれは資本主義の永久的維持のための『努力』を意味するに外ならぬが、もしさうだとすれば、それは同時に、資本主義的な社會的存在の思想的反射たる××××××を××せしめ××せしめるための『努力』にすぎぬこととなるから。もしまた、氏の謂はゆる『生活難の解決』なるものが、眞に徹底的な解決を意味するのであれば、それはそれ自身がブルヂョアジーから見ての謂はゆる××××に外ならぬであらう。被壓迫大衆の生活難を×××××に解決せんとするマルクス主義は、マルクスの言葉によれば、『人間がそのうちで生產諸力と生產諸關係との衝突を意識せしめられ且つこれを克服するに至るところの・一の觀念形態』である。更にエンゲルスの言葉によれば、『生產諸力と生產方法との間における斯かる衝突は、例へば人間の原罪と神の公平との衝突などのやうに、人間の頭のなかで生じたものではなくて、それは客觀的な・吾々の外部にある・それを齎らした當の人間の意志または行動そのものからは獨立の・諸事實から成り立つてゐる』のであり、そしてブルヂョアジーまたはその辯護者たちの謂はゆる××××は、『かゝる事實上の衝突の思想的反射であり、直接この衝突のもとに苦しむ階級たる勞働者階

に對する桎梏に轉化した資本主義が吾々の社會的存在を規制する客觀的事實として存續するかぎり、近代社會主義は――マルクス主義は――××にも××にも『×××』ことのできるものではない。それは『文字通り全的生活の一切の部門から「發生」する、その××は絶對的にいたるところに存する、その「××」は（ブルジョアジーおよびブルジョアの××が×××用ひる表現と、彼等に×××××の比喩とを用ひれば）、極めて力強くからだのなかへ侵入してをり、からだの全體に浸潤してゐる。特別な注意をもつて一つの出口を塞ぐならば、「××」は他の・全く×××・××××××。……あらゆる場合に、あらゆる國々において、それは××なり、××する。それは極めて×××を摑えてゐるために、××はこれを弱めることも衰へさすこともできず、×××××××つつある』。それは資本主義的な吾々の社會的存在が、吾々の頭腦に反映することによつて生じた社會的意識であるから、吾々の資本主義的な社會的存在に含まれてゐる××が××すればするほど、それは××××××××。

十、唯物史觀（その4.――プロレタリアートの認識の武器――必然の王國から自由の王國への跳躍）

これを要するに、一定の經濟組織（一定の生產諸關係の總和）は、そのもとにおける生產諸力の發展が一定の段階以上に達した結果、生產諸力のそれ以上の發展に對する桎梏となることにより、破棄され止揚されて、新たなる・より高度の・經濟組織にその席を譲る。かくて古代共產制は奴隷制へ、奴隷制は農奴制へ、農奴制は賃勞働制（資本家的生產制）へ轉化する。これが社會の經濟的基礎構造の變遷として第一段に理解さるべきことである。なほ從來の階級社會にあつては、かゝる基礎の上に、それぞれ一定の政治的上層建築が生ひ立つてゐる。これはもちろん基礎構造の××につれて××する。これが第二段に理解さるべきことである。最後に社會的認識は社會的存在の反映に外ならざるがゆゑに、かゝる社會的意識（種々なる哲學的の・宗教的の・政治的の・學說および見解）から成る觀念的上層建築もまた、經濟的基礎の變動につれて變動する。これが第三段に理解さるべきことである。

かくて最も肝要なことは、吾々が何等かの社會現象について語るとき、吾々は常にその現象の地盤たる經濟上の基礎事實――なかんづく××の××――に着眼せねばならぬといふことである。レーニンはいふ、『奴隷制の原始形態から封建制度への・そして遂には資本主義への

社會の推移の基礎的事實に、諸君は常に着眼しなければならぬ。何故なれば、吾々がこの基本的な枠のうちに總ての政治學說をあてはめる時にのみ、「これは××についての講演の一節であるから、こゝでは特に政治學說について述べてあるが、それはもちろん總ての諸思想に妥當する」、吾々はこれらの學說を正當に評價し、それらが何に關係してゐるかを理解しうるからである。けだし人類の歷史のこれらの大なる時期――奴隷制度、封建制度、および資本主義の時期――は、いづれも各ゝ數千年、數萬年を包括してをり、多くの政治形態・多種多樣な政治學說・諸種の思想・諸種の××・を提示してゐるが――しかもブルヂョア學者や政治家たちの政治的・哲學的・およびその他の・諸學說と特に結びついてゐるこれらの異常な複雜さと甚だしき多樣性との中にあつて、吾々がその途を誤らざることは、たゞ社會のこの階級の分裂の主要規準としての階級支配の形態變化を手がかりとし、この觀點からすべての社會諸問題――經濟的・政治的・精神的・宗教的・その他の・諸問題――を研究する場合にのみ、可能だからである。』(『國家について』、『社會問題研究』第九十三冊、一〇頁)。

まことにマルクスの言ふ如く、「經濟的基礎の變動につ

である。(××なきところ歷史なし。もし人が現存の諸制度をもつて永久的なものとなすならば、その人は、「嘗ては歷史なるものが存在したが、今日はもはや歷史が存在しなくなつた」と主張するものである)。そして斯かる××を以上の如き見地に立つて把握するかぎり、唯物論は歷史の領域にまで徹底せしめられ、かの意識または精神をもつて本源的なものとなす觀念論は、『その最後の逃げ場たる史觀から追ひ出される』。かくて唯物史觀は提供された。

しかも唯物史觀が提供されたといふことは、人間の歷史の必然的な動きが始めて科學的に理解されたといふことであり、そしてそのことは同時に、人間が盲目的に歷史の自己運動のなかに卷き込まれることを已め、意識的に自分自身の歷史を「言ひ換へれば、意識的に自分自身の社會的存在を」形成しゆく可能性を具ふるに至つたといふことを、意味するのである。かくて人間の歷史は、斯かる認識の確立と共に、その本質を一變せねばならぬ。何故なれば、必然の認識によつて人はこゝに新たなる自由を得るから。

古代共產制、奴隷制、農奴制、および現存の資本家的制度と、これ

關係との間に必然的に生じる矛盾が、一の『自己運動』として盲目的に繼起せしめた自然史的過程の連鎖に外ならぬ。それはまことにマルクスのいふ如く、『人類社會の前史』(die Vorgeschichte der menschlichen Gesellschaft)たるにすぎない。しかるに今やこの前史は次第にその最後の頁に近づきつゝある。それはすでに『社會的生產過程の最後の×××形態』たる資本主義にまで發展し、そしてその資本主義は更にその最後の階段たる帝國主義の時代にまで押し進んでをり、そのために、この資本主義の體系內に含まれる××は、今まさに未曾有の××を呈してゐる。『しかし資本家的社會の胎內で發展した生產諸力は、〔それがこの社會內における階級的××を××せしめる主要動因であるにも拘はらず〕、この××の〔個々人の社會的生活諸條件から生ずる×××關係の、窮極的な徹底的な〕解決のための物質的諸條件を造り出した。』今や生產手段を社會の×××のもとに移し、社會的生產を××××統制し、生產諸力と生產諸關係とを××××調整しゆくことが、××となりまた××となつた。しかし生產手段を社會の××××のもとに移せば、××××××××存在しえなくなり、從つて他人により××××××も存在しなくなり、階級と階級との××一般が廢除される。なほ生產諸力と生產諸關係とが××××調和されることになれば、兩者の矛盾撞著によつて惹き起される『自己運動』としての自然史的過程もまた止揚される。一言にして蔽へば、すべて從來の歷史においてその動力となつてゐた生產諸力と生產諸關係との間における矛盾、その人的表現としての搾取階級と被搾取階級との間における××、これらのものがみなその跡を絕つ。『かくて人類社會の前史は、資本家的社會形態をもつて、その×××××。』吾々は今、人類の××歷史——前史に對していへば本史——の第一頁がまさに描き初められんとする・その×××××してゐるのである。そして唯物史觀なるものは、人類の歷史における斯かる×××××××の時機にあたり、人類がそれ自身の社會的存在の××過程に對して有するに至りし自覺の產物として、かゝる×××××××××××××××××××××——『あれやこれやの或る特殊なる階級組織の××またはあれやこれやの或る轉換なる階級的××の××ではなく、實に階級一般を××せんとするの要求を、歷史上はじめて提起しうる×××、さうだ、この要求を實現しなければ支那の苦力(クーリー)の境遇に沒落するの外な狀態のもとにおかれた×××』——のために提供された『偉大なる認識の××』である。

これによつて××××が——從來吾々の生活を拘束し支配し來れる盲目的な自然法則が——認識される。この認識によつて、吾々は始めて、吾々自身の生產物によつて支配されることから免れうるの可

性を得る。『自由は、自然法則からの夢想的な獨立のうちに橫たはるのでなく、この法則の認識のうちに・且つその認識によつて與へられたところの、その法則を××に一定の××のため働かしめることの可能性のうちに・橫たはるものである。』（エンゲルス『反デューリング論』、ドイツ本、一一二頁）。『社會的に作用する諸ゝの力は、吾々がこれを認識せず、またこれを考慮に入れざるかぎり、自然の諸力と同じやうに、盲目的に・無理やりに・破壞的に・作用する。だが吾々が一たびこれを認識し、その活動・その方向・その作用・を把握するならば、それをば益ゝ吾々の意思に從はしめ且つ之によつて吾々の××××ることは、全く吾々の勝手になる。このことは特に今日の强大なる生產諸力にあてはまる。吾々がこの生產諸力の性質と特性とを理解することを執拗に拒んでゐるかぎり、——資本家的な生產の仕方とその辯護者たちは斯かる理解を受けつけないでゐるのだが、——しかるかぎりにおいて、これらの生產諸力は、吾々に係はりなく、吾々に反抗して作用し、吾々を支配する。だが一たびその性質が理解されたなら、それは協同せる生產者たちの掌中において、×××な×××から溫順な××に轉化される。それは恰も、暴風雨に際しての落雷中の電氣の破壞力と・電信機や電弧やの手馴づけられた電氣・との差異の如きものであり、また火事を起してゐる火と・人間の役に立つてゐる火と・の相違の如きものである。遂に認識されるに至つたその性質に從つて今日の生產力を取扱ふことにより、社會的生產の××××の代りに、全體ならびに各個人の××に×じてなされる社會的な×××な生產の規律が行はれることになる』。かくて資本主義的生產は×××××××××××××、吾々の社會的存在の形態はこゝに××××を閉するに至るのである。『資本家的な生產の仕方は、人口中の大多數のものを益ゝ多くプロレタリアに轉化することにより、かゝる×××××××完成せざるをえない力を作り出す』。（以上、『反デューリング論』、ドイツ本、三〇〇—三〇一頁）。このプロレタリア階級こそは、遂に一切の××××××はされることなく、『彼等の頭のなかに抵抗しがたき必然性をもつて多かれ少かれ明かな姿で迫りくる明白な物的事實』のために、乘りかゝつたこの舟を——この舟全體を——沒落の難所から救ひいだす唯一の可能な道を發見する。辯證法的唯物論——唯物史觀は、プロレタリアートが斯かる道程を進軍するに際し、あるときは突貫し、あるときは廻り路をなし、あるときは後に戻り、最初の出發點から別の方向へ出直す等々、あらゆる複雜な××をとることを餘儀なくされつゝ、しかも最も確實に且つ最も迅速に××××に到達せんための『行動の指導原理』となるものである。

ところで斯かる目標が遂に××されえたならば、吾々は、物質的生活の社會的生産の領域において、可能なかぎりの自由を獲得する。もちろんマルクスの言へる如く、眞の意味における『××の××は、必要および外的目的性によつて規定されてゐる××が廢止されるところで、事實上はじめて始まる。それは事物の性質上、本來の物的生産の領域のかなたに横たはる。野蠻人が彼れの欲望を滿足するために、彼れの生活を維持し再生産するために、自然と鬪はねばならぬと同じやうに、文明人もまた同じことをせねばならず、且つ彼れはそれを如何なる社會形態のもとでも、またあらゆる可能な生産の仕方のもとで、さうせねばならぬのである。この領域〔物質的生活の領域〕における自由は、社會化されたる人類——協同せる生産者たちが、自然と彼等との物質交換において一の盲目的な力により支配されることの代りに、これを合理的に統制し、彼等の××××のもとに持ちきたし、それをば最小の勞費をもつて・且つ彼等の人間的性質に最もふさはしく最も適當な諸條件のもとで・成就しうることのうちにのみ、存立しうる。しかしそれが依然として必然の領域たることに變りはない。この必然の領域のかなたに、自己目的として値する人間的な力の發展、眞の××の××は始まる。だがそれは、その土臺としての必然の領域の上にのみ開花しうる』。(『資本論』、第三卷、ドイツ本、第二分册、三五五頁)。だが、かゝる眞の××の××のこなたなる謂はゆる必然の領域においても、將に來らんとする社會においては、吾々と自然との間に行はれる物質交換(社會的生産)が、『合理的に統制』され、吾々の『××××のもとに持ちきたされ』、それは『一の盲目的な力として吾々を支配することを已める』のであるから、その意味において、吾々は『必然』を『自由』に轉化するのである。エンゲルスの言葉によれば、『こゝに始めて人間は、ある意味において、決定的に動物界から訣れ、動物的生存條件から脫して眞に人間的なる生存條件に入る。……今までは歷史を支配してゐたところの・客觀的にして外部的なる諸の力は、今や人間自身の統制のもとに服する。この時よりして始めて、人間は完全なる意識をもつて彼等の××を自ら作るであらう。……これ必然の××から××の××への人類の跳躍である』。(『反デューリング論』、ドイツ本、三〇五—三〇六頁。こゝの引用文は、河野・林兩氏の譯文による。)

かくて××の××は全くその××を一變する。唯物史觀は、將來における歷史の斯かる跳躍的變化を自ら意識してゐるのであり、その跳において、現在吾々の有するが如き形態における唯物史觀は、從來の歷史にのみ妥當するものとして、——すなはちそのまゝの形態では將來の歷史に妥當しえざるものとして、——それ自身の限界を自覺して

ゐるものである。生産諸力と生産諸關係との矛盾、この矛盾より生まれる『自己の運動』としての盲目的な歴史——その經濟的基礎には階級の對立に基づく一の階級の他の階級に對する搾取關係を含み、その政治的上層建築としては一の階級が他の階級を××するための××裝置たる××を有する社會の歴史——は、プロレタリア××の××と共にその××××××。かくてプロレタリア××のための認識の××は、その××の××の後に再び新たなる鑄型によつて鍛錬し直ほされるであらう。まことに辯證法の前には、永遠的なものは何一つとして存在しえないのである。

＊　＊　＊　＊

私はこの物語の『七、唯物史觀、その1』の冒頭にレーニンの言葉を引用し、私の仕事としてはたゞその解說が殘されてゐるだけである、といふことを述べたが、以上をもつて私はこの豫告した仕事をほゞなしおへた。レーニンは言つてゐる、『今日まで歴史および政治に對する見解の上に支配してゐた混亂と獨斷とは、一の社會的生活の組織が、生產諸力の發展の結果として、如何に他のより高級な組織へ發展するかを示すところの、驚くべく完全な・整然とした・科學的理論はまた言つてゐる、『政治的機構は、經濟的基礎の上に立つ上層建築である。例へば、吾々は、近代ヨーロッパ諸國の各種の政治的形態が、如何にプロレタリアートに對するブルヂョアジーの支配を强めることに役立つてゐるかを、見るのである』と。（同上、同頁）。この物語においては、政治上の問題に論及することが極めて困難である。だから私はこの問題のために特別の節を設けることを斷念した。だが、若干の個所において、少くとも暗示的に、私はこの問題にも若干觸れえたと考へる。レーニンは更に言つてゐる、『人間の社會的意識（すなはち種々なる哲學的の・宗教的の・政治的の・學說および見解）は、社會の經濟的組織を反映してゐる。』（同上、同頁。但しそこでは『意識』が『認識』に譯られてゐた）。このことは、私がこの物語の九においてやゝ詳細に述べえたところである。レーニンは最後に言つてゐる、『マルクスの哲學は、完成されたる哲學的唯物論である。それは人類に——殊に勞働者階級に——偉大なる武器を與へた』。（同上、同頁、下段。）このことも、私が今この物語の十において、すでに述べおへたところである。

かくて私はエンゲルスがマルクスの『二つの偉大なる發見』の一つ

提案書に現はれた『新勞農黨』の本質

山川均

（一）

勞働者と農民の合法的な政黨を、理論的原則的に無用とし、合法政黨たることが必然的に社會民主主義の黨、ブルジョア第三黨たることを意味するといふ理論の上に立ち、合法政黨の組織をもつて、支配階級への降伏、裏切り、陰謀、卑怯者、恥知らず等々であると主張し來つた大山郁夫氏らが、『稍々唐突』（提案書の言葉を借れば）にも、合法政黨樹立の提案を發表せられたことは、大山氏らの屬する分派そのもの丶間には、異常の衝動を起したもの丶如くである。たしかにこの提案は、大山氏らの言葉で云へば、大山氏らと『がつしりと腕を組んで』ゐた人々をこそ愕然たらしめるに充分なものではあるが、大山氏らと如何なる場合にも『幻想』を共にしてゐなかつた冷靜な觀察者を驚かしめるには足りないものである。なぜならば、わが國のあらゆる條件の下においては、合法的な、大衆的な、無産政黨の必要缺くべからざることは、これこそ數年前において、既に『討論終結になつてゐること』であつて、若し大山氏らが、少數の熱情家を大衆に見立てつ丶、その喝采の前に英雄的な身振りを演ずることを以つて滿足せられるものでない限り、若し大山氏らが、わが國の勞働者と農民とその他の一切の被壓迫階級の間に蓄へられてゐる、、、、、、、、、、、、帝國主義ブルジアジーに對する一つの現勢力に結成することを望まれる限り――言葉を換へて云へば、大山氏らが、眞實に大衆と共に――幻想の上の大家ではなくて冷やかな現實の大衆と共に、『強力に、現實的に、効果的に』闘はれんとするものである限り――そして闘はれんとする瞬間において――必然に、不可避的に、前述の必要の承認を餘儀なくせしめられるといふことは、當然自明のことだつたからである。

大山氏らの名をもつて發表せられた合法政黨樹立の提案書は、洒々數萬言、美辭麗句をもつて織り成されて居り、河上肇氏の稱讃の辭を借りて云へば、何等かの意味において『我國においては稀に見るとこ

ろの』宣言である。この宣言のうちには、多くの驚くべきことが言はれてゐる。ことにその各々の部分は、互いに駁撃し、互いに誹謗し、互いに嘲り合つてゐる。從つてこの宣言を詳細に分析し、解剖し、批判することは、たゞに興味の問題であるばかりでなくて、無産者運動の全體に取つて必要なことであるが、こゝにはその餘白がない。またこの宣言が、數萬言の努力によつて試みてゐることは、要するに昨日まで絶對に有害無用であつた合法政黨が、今日何故に絶對の必要となつたかを説明することである。この宣言の稀有性もまた、この説明に懸つてゐる。しかしこの重要な點についても、こゝには詳論することができないから、唯だ次の事柄を指摘するに止どめておく。即ちこの宣言が、かゝる變化を正當化するために數萬言を費やしてゐる吾が國の形勢についての記述は、形勢の記述そのものとしては大體において正しいとしても、それは合法政黨が夙に必要であつたといふことを立證してゐるものであつて、階級的裏切だつたところの合法政黨の樹立を、今日突如として『寸刻も躊躇することの許されない』必要たらしめた理由を説明するものでは斷じてないといふことである。

　この點について、私がこのところに詳論しないのは、與へられてゐる紙數が極めて少ないからであつて、この點に含まれてゐる理論上の

は慥かに美しい態度である。けれども新興階級の解放運動の上には、おのづから異つた道德が支配しなければならぬ。苟も重要な根本問題について、無原則、日和見主義、理論上の無節操が許される間は、眞實に有力な鬪爭の展開を考へることはできぬ。一切の罪障を憐むべきいけにへの小羊に負はしめるように、謂ゆる『客觀的情勢の變化』に一切の責任を負はしめる理論上の無節操と日和見主義が、「わが國の無産者運動に現はれた最近兩三年來の著しい風潮であることは、爭ふことができぬ。そしてこの風潮を造り出した責任を負ふべきものが何者であつたかは、周知の事柄である。わが國の無産者運動は、もし、、、、、、への一歩を踏み出そうとするならば、先づこの無原則と日和見主義の清算から始めなければならぬ。

（二）

　この重要な問題については、以上に言及したことを以つて滿足し、直ちに、本文の目的とする今一つの問題に移らねばならぬ。今一つの問題とは、この提案書の提案する政黨は、どのような性質の政黨であるか？　といふ問題である。この政黨が、實際には如何なる政黨として成立し、また如何なる性質に向つて發達するかは、固より別個の事柄であるが、假りにこの提案書の根本理論に一致した政黨が組織せられ

論上の問題としても、またこの提議に應じて新政黨の樹立に參加する人々が、この新政黨を正しい方向に導くといふ實踐上の見地からも、先きの問題に劣らぬほど、重要な問題だと思ふ。

提案者は、どのような政黨を樹立しようとしてゐるか？ 提案者は、これに對する答——『新勞農黨』の性質、任務、組織形態——を六つの項目に分つて規定し（提案書、第三三頁）。これを『合法的左翼政黨』と名づけてゐる。けれどもこの六つの項目中の第三項を除くの外は、大體において、無產政黨が無產大衆の政治鬪爭の組織である限り、寧ろ當然自明とするところのものであつて、この提案せられた政黨を、何ら特異な政黨たらしめるものではない。この六つの項目の關する限りでは、提案者の謂ゆる『合法的左翼政黨』なるものは、たゞ單なる大衆的協同戰線黨にほかならぬ。

然るに提案者は、第三項において、この新政黨を、たゞの大衆的協同戰線黨とは原理的に異つたものとする。即ち、『戰鬪的戰線統一』の主張がそれである。（註）

（註）『戰鬪的戰線統一』なるものは、曾て××××によつて雜誌『マルクス主義』の誌上に唱導され、從つて『獨自の指導部』を持つが如く持たざるが如くであつた當時の舊勞農黨の方針となつたものであるが、それは次の一事に歸着する。即ち、勞農黨は、他の無產政黨とは、指導原理を異にする、從つて無條件的な合同はあり得ない、他の無產政黨に對しては、『これを潰してその大衆を取る』こと、即ち戰鬪的戰線統一あるのみである。戰鬪的戰線統一の意義については、私は曾て雜誌『勞農』の創刊號に評論したから、こゝには再說せぬ。

從つて、新政黨の特徵的な性質、提案者がたゞの『合法政黨』と云ふことに滿足しないで特に『左翼政黨』と名づけることによつて、その政黨に特異な性質を與へようとしてゐる點は、前述の六つの項目に求むべきものではなくて、第三項に求めなければならぬ。

尤も第三項は、提案者の新政黨が、大衆的協同戰線黨と原理的に性質を異にすることを示してゐるだけであつて、この性質の何たるかは明かにしてゐない。けれども提案者の謂ゆる『左翼政黨』なるものが、一般に理解せられてゐる大衆的協同戰線黨と如何に異つたものであるかは、提案者が合法政黨の必要といふことを如何に理解してゐるかのうちに、明白に現はれてゐる。

（三）

提案者が、絕對無用から絕對必要を認めた『合法的左翼政黨』の本質を如何に理解してゐるかは、私の檢討を待つよりも、提案者の屬する分派の內部において、この提案をめぐつて起つた論爭によつて、一そう明白にせられてゐる。

提案書は、絕對無用であつた合法政黨が『寸刻の躊躇を許さぬ』絕對の必要となつた理由を、客觀的情勢の變化と、主體的條件の變化とによつて說明する。けれども一年前と今日と何ら根本的變化のない客觀的情勢の描寫が、何らこの理由を說明せぬことは先きにも言及した通りであつて、若し何らかの變化によつて說明しなければならぬとす

れば、それは唯だ、提案書の謂ゆる『主體的條件』の變化によつてでなければならぬ。そして、提案者の屬する分派における論爭の核心となつてゐるものは、まさにこの『主體的條件』の變化についてゞある。

この提案が一度び現はれるや、その分派の間からは、猛然として反對の叫が揚がり種々なる團體の名によつて、『反對』『排撃』の決議と宣言とが公けにされた。しかるにこれらの反對論の焦點は、次の一點に歸着する。

『勞働者農民の××を代表し、最後まで闘ひ抜き得る×××××が嚴存し、しかも次々に日常闘爭のカンパアを組織し行きつゝある今日、吾々は絶對的に、もう一つの政黨を必要としない……かゝる具體的事實を否定してまでプロレタリアの政黨の原則である一階級一政黨の適用をまで歪める時、其處に吾々は一階級一政黨の外に、即ち×××の外に、歪められたる社會民主主義政黨の出現を見ねばならぬ……』(八月十四日、『無産者新聞。』)

これに反して、提案書は主張する――プロレタリアートの黨は唯だ一つしか有り得ない。これは原則的には正しい。プロレタリアの全政治闘爭を指導すべき任務を負ふた主體の具はつてゐる場合には、他の無産政黨を組織することは、階級的裏切りである。

つ無産大衆黨、勞農大衆黨等々を組織したことは、階級的裏切りであつた!!)。

しかるに四・一六事件により、かゝる主體的條件は『殆んど』潰滅に歸した。從つてまた、勞農同盟の活動もまた、不可能となつた。かような具體的な情勢の下においては、プロレタリアートの黨は唯だ一つしか有り得ないといふ抽象的な原則は、そのまゝ適用することはできぬ。主體的條件が『殆んど』潰滅し、主體が、よし存在はするにしても、實際の指導力が失はれた以上、獨自の指導部を有する合法的政黨は、寸刻の躊躇をも許さぬ絶對の必要である、等々……。

相闘つてゐるこの二つの見解は、或る意味では正反對に立つてゐるが、或る意味においては、完全な一致の上に立つてゐる。そして完全な一致を示してゐる點こそ、根本的な點であり、出發點となるものである。

前衛黨が嚴として存すると云ひ『殆んど』潰滅したと云ふことは、具體的な事實の觀察においてこそ、まさに正反對ではあるが、この事實の觀察が爭點の中心となつてゐるといふそのことは、そも〱何を意味するだらうか。云ふまでもなく、提案者も反對者も、合法政黨の必要と不要とを、擧げてこの事實の如何に懸らしめてゐるからに外ならぬ。

「この二つの見解は、完全に、精密に、同一原則の上に立つてゐる。

かゝる根本見解から出發する當然不可避の結論は、一般的な意味での無産政黨と前衞黨とを、互ひに代用し得られるものとする思想である。少くとも、無産政黨に、前衞黨の代用物たる性質を賦與することである。

（四）

かう云つたなら、諸君は喚めき立てるだらう――君は前衞黨とその他の無産政黨とを同列に置く、前衞黨に對する許すべからざる冒瀆だ！と。たしかに冒瀆である。けれども若し冒瀆した者があるならば、それは私ではなくて、まさしく諸君以外の何者でも有り得ないといふことを知らなければならぬ。

吾々の理解する協同戰線黨としての、大衆的黨としての、無産政黨、は、前衞黨とは歴史的任務を異にするところの、本質的に異つたものである。從つて一定の政治的形勢の下においては、それは前衞黨の存在と不存在とに拘らず必要缺くべからざるものであつて、前衞黨の存在といふことが、直ちにその不必要を意味するものでもなければ、またその存在が、何ら前衞黨の必要と不必要とを決定するものでもない。

これに反して、四・一六事件によつて一定の主體的條件が潰滅したことを以つて、合法政黨の絶對無用と階級的裏切りから絶對必要と階級的任務への突變を說明することは、如何なる強辯をもつてこれを否認しようとも、一方を以つて、多かれ少かれ（即ち、充分にか不充分にか他方に代用し得られる性質を持つものだと理解することを意味して居り、またかゝる性質を有するものとしてのみ、提案書の見地からは、合法政黨を是認することに意義がある。

わが國において（恐らくは全世界においても）稀に見るところの、この驚くべき『政治宣言』に含まれてゐるこの驚くべき概念の混亂ないしは錯覺は、わが國の實踐においても、必ずしも稀れに見るものではない。いな反對に、前衞黨と大衆的協同戰線黨としての無産政黨との混同と錯覺とは、無産政黨組織の運動が始まつて以來、常に根強く附き纏うてゐた。この時期における左翼分子の行動に見出される誤謬の大部分は、多かれ少かれこの混亂に累ひされたものだと云つても過言でない。そして或る時期における舊勞農黨は、最も顯著に、この混亂と錯覺とによつて指導せられてゐた。いま大山氏らの提案は、舊勞農黨を復興しようとする。たゞに舊勞農黨を復興するばかりでなく、それはこの混亂と錯覺をも復興しようとするものである。

かような性質を賦與せられた政黨は、均しく合法的無産政黨といふ名稱を取るにもせよ、大衆的協同戰線黨としての無産政黨とは、原理的、本質的に異つた政黨となることは明かである。そして提案者自らまた、前掲の第三項によつて、その政黨を大衆的協同戰線黨から原理的に分つてゐる。現に提案書は社會民衆黨が完全なブルジア第三黨であること、日本大衆黨がほゞこれと同一なものに近づいでゐること、

勞農大衆黨以下の地方政黨（例へば岩手無産黨、千葉勞農黨、奈良統一無産黨、中國無産黨、等々の如き）が、その『性質』において、完全なブルジョア第三黨とこれに近い日本大衆黨との中間にあることを正式に宣言することによつて、その政黨を、これらすべての無産政黨から原理的に分つてゐる。大衆的協同戰線黨とは原理的に區別せられるところのかような特異な性質をもつた政黨――提案者はこれを名づけて『左翼政黨』と云ふのである。

大衆的協同戰線黨もまた、『勞働者、農民、無産市民その他一切の被壓迫民衆の利害を不斷に、強力に、現實的に、効果的に擁護伸張するために、大衆的日常鬪爭主義を全活動の基礎とする』協同戰線黨は、たゞにこれを全活動の基礎とするばかりでなく、この鬪爭そのものを以つて、勞働者、農民、無産市民等々のような異つた社會層が一つの政治勢力に結合する、結合の基礎とするものである。かように協同戰線黨は、階級的には、そのうちに反ブルジョア的エネルギーを有する限りにおいての、種々なる社會層の協同戰線であると同時に、意識的には、種々なる意識水準にある異つた要素が、その『利害を不斷に、強力に、現實的に、効果的に、擁護伸長するために』鬪爭するといふ、この鬪爭そのものを唯一の條件とするところの協同戰線を意味してゐる。

從つて、かような本質をもつた協同戰線黨としての無産政黨と無産政黨とは、その本質上、かゝる共通の鬪爭の遂行を唯一の基礎とし、條件として、そして指導原理に關する限りにおいては無條件的に合同する可能ができる。もしこの可能を不可能たらしめるものがあるとせば、それは少數指導者の宗派心と繩張主義にほかならぬ。

かような協同戰線黨の内部においても、右翼と左翼との傾向のあることは自明である。けれども、右翼的傾向が指導するか左翼的傾向が指導するかは、この二つの傾向の相對的な影響力によつて決定せられるものであつて、右翼的傾向が優勢を占めることもあり得るように、左翼的傾向が優勢を占めることをも妨げない。左翼的傾向が優勢を占めてゐるといふ意味では、この協同戰線黨は、左翼『的』政黨であると云ふことができる。

前衛黨の不存在（或は殆んど不存在）によつて初めて存在の理由を承認せられるが如き本質をもつた無産政黨、從つて前衛黨の任務を不分にか不充分にか代行するが如き性質を賦與せられた特異な無産政黨の、その他の協同戰線黨的無産政黨に對する關係は、これとは全く異つてゐる。その關係は、合同が可能であり必要である關係ではなくて、たゞ征服と被征服とがあるのみである。即ち對立政黨を潰してその大衆を取ること、――戰鬪的戰線統一――以外には、戰線統一の可能がないばかりでなく、その必要がない。いなその『輝ける』（ないしは曇つた）指導精神による征服による以外の一切の統一は、原理的に排せらるべきものである。

大衆の現實な鬪爭ではなくて、かような輝ける指導精神、または曇つた指導精神を結合の基礎とする無産政黨は、當然にも、協同戰線黨的無産政黨と自黨とを、永久に並行線を歩んでゐるものとして認識する。從つてこの種の政黨は、たゞに左翼『的』政黨たることをもつて滿足しないで、『左翼政黨』として、恆久的に自らを峻別するものである。

（五）

しかしながら、かような見地に立つものは、無産政黨に前衞黨の代用品たる性質を賦與しようとする指導者のみではない。無産政黨に、ブルジョア政黨の代用物たる性質を押し附けようとする指導者は、精密にこれと同じ見解の上に立つてゐる。この二つの力は、反對の出發點から發足しつゝ、しかも同一方向への影響を、無産政黨運動の上に與へるものである。卽ち、無産者政治勢力の分割とその統一の抑制である。この點においては、この二つの勢力は、無意識的な協同戰線の上に立つてゐる。

× × ×

大山氏らの『新勞農黨樹立の提案』は、理上においても實踐上の問題においても、嚴密な批判を受くべき點に滿ちてゐる。私はこゝには、そのうちから、唯だ一つの問題を取り出して批判した。それさへも、既に與へられた紙數を超過してゐるので、唯だ一つの視點から批判したに止どまつてゐる。

それと同時に、私が本文の主題とした問題と、この問題を取扱つた視點とは、實踐の上にも、根本的な重要性をもつてゐる。提案者は、その提案が、決して新たに樹立せられんとする政黨についての、最後の言葉でないことを繰返へし、『黨内デモクラシー』の實現を力說する（曾てはこの黨内デモクラシーを主張して、諸君のために舊勞農黨を逐はれた人のあることは皮肉であるが）。私は新勞農黨に對する提案者の理解が、提案者の言葉の如く、實際においても最後の言葉とならぬこと、言葉を換へて云へば、新勞農黨が、これに參加する一般黨員によつて、舊勞農黨の一切の誤謬を誠實に淸算した（詐欺破産的な淸算ではなくて）新しい協同戰線黨として更生することを、衷心から希望するものである。

× × ×

提案者諸君に對しては、私は理論の誠實な、そして大膽な、何ものにも顧慮することのない追求を希望せざるを得ぬ。たとへば、一方においては、合法政黨絶對無用から合法政黨絶對必要への態度の變化を正當化するために、數萬言を費やしつゝ、他方においては、一年前にそのことを主張した人々と同一結論に到着したといふ事實を、あわてゝ無花果の葉をもつて蔽ひ隱そうとする努力の如きは、恐らくは無用の努力である。諸君は主張する――吾々は最後まで闘ひ拔き、そしてその闘爭が『はたと行き詰り』（提案書の言葉）、その闘爭組織が全く無効を立證し、左翼戰線の完全な潰滅狀態にまで導びいた上、然る後に初めて合法政黨を「進出の方策として主張してゐる點において、彼らとは決定的に異つてゐる」と。左翼戰線を潰滅せしめるまで闘ひ拔くことゝ、この潰滅を避けるために闘ひ拔くことゝは、たしかに、異つてゐる。けれども異つてゐることが、どれだけ誇るに足ることであるかは、別問題である。吾々は自滅法に步るき拔き、いま肥溜めに落ちたから初めて正しい道を取らうとする、然るに何ぞや、諸君は肥溜めに落ちるのを待たないで正しい道を發見した、それ故に諸君は階級的裏切りだといふ推論は、恐らく常識ある人々を承服せしめぬであらう。

（九月六日）

最近勞働運動の大勢

赤松克麿

一

我國の勞働組合戰線が左右兩翼に分裂したその最初の發足は、大正十四年五月に行はれた勞働總同盟の第一次分裂であつた。その左翼は日本勞働組合評議會を組織し、鮮明なる、、、、、を經濟戰線の一角に樹立したのであつた。このとき以來、總同盟の社會民主主義と評議會の共産主義とが、我國經濟戰線上に確然と對立することになつたのである。

分裂するときには、その後の分裂にもさうであるやうに、最劣なる幹部攻撃の爆彈がうるさく飛ばされたが、これを運動理論の點から見るならば、我國の勞働運動を社會民主主義的に指導すべきか、または共産主義的に指導すべきかの指導理論の分裂であつた。しからばその兩者の指導理論の相異點はどこにあつたかといふに、

(一)、總同盟は民主主義の價値を承認し、これが活用により、勞働大衆の組織化に向つて進まんとした。民主主義は政治的と産業的との二つに別れるが、總同盟は一方議會政策を採用することにより、政治的民主主義の獲得に進出すると共に、他方國際勞働機關を活用して勞働立法の促進を圖り、以つて産業民主主義の發達に貢しやうとした。

(二)、總同盟は經濟的闘爭方針を現實化し、從來のやうに勞働爭議を指導するに闘爭意識の深刻化のみを主眼とするやうな觀念主義を改めて、勞働大衆の現實の生活意識を主眼として指導するやうになつた。從つて勞働組合を單純な闘爭團體とすることをやめて、恆久的な基礎を持つ經濟團體として發達を期するやうに努力し、その具體方法として組合基金の充實を圖るやうになつた。

(三)、總同盟は共産主義者の考へるやうに資本主義が急激なる、をたどりつゝあるとは考へず、そして、、、、、、、、、、、をひき起して行けば、資本主義が容易に、、るものとも考へないで、むしろ共産主義的な公式闘爭を續けて行けば、あべこべに資本の強烈なる攻撃に逆襲されて、勞働組合が破壞され、勞働運動は行きつまると考へた。故に勞働組合の生存を確保しつゝ、勞働運動の發展を圖つて行くがためには、それに適合するやうな

最も現實的な戰術を選み、漸進的に、確實に、合理的に、無産政黨と協力しつゝ資本主義の産業機構に、、して行く方針を取つた。

二

共産主義に立つ評議會は、總同盟の指導理論に反對した。

(一)、評議會は民主主義の價値を否定した。普通選擧や國際勞働機關といふものは、支配階級が資本主義の行き詰りから脱出するために無産階級を、、し又は、、する手段であると考へた。故にそんなものに價値を認め、それを積極的に活用しやうとする總同盟の方針は、その指導者が階級鬪爭の立場を棄てゝ、資本家階級と妥協し、資本主義の利益の分け前にあづからうとする取引に過ぎないと考へた。

(二)、評議會は個々の勞働爭議に於ける鬪爭方針を、、、、に結びつけて、勞働大衆の現實の生活利益を擁護するといふよりは、出來るだけ鬪爭を、、し、産業に、、を起し、以つて、、の起るに適するやうな社會狀勢を展開することに努めた。從つて彼等の勞働組合は、勞働組合としての本來の性質を備へないで、政治鬪爭の一翼化する傾向が濃厚であつた。

(三)、評議會は資本主義の慌しい、、を信じた。故に直線的な公式的な鬪爭を連續して行けば、大衆鬪爭が、、し、そして資本主義は容易に、、するものと考へた。彼等の運動が忽ち鐵壁に打ち當つて、その陣營を粉碎されるであらうとは夢想だにしなかつた。

三

その後に於ける總同盟と評議會の實踐的戰績は、いづれが現下の社會狀勢に適合して居るかを實證したか。總同盟の運動方針が着々効を奏し、その陣營が大衆化する傾向をたどりつゝあるのに反して、評議會の鬪爭方針は全く行き詰りを生じ、その陣營も縮小される傾向にあつたのであるが、遂に昨年三月、、、、、、、の飛沫を蒙つて、勞働農民黨と共に、解散の鐵槌を下されるに至つた。、、、、は評議會の破滅を以て、、、、、、、、、、に責任を歸するのであるが、あの實力の伴はない、そして客觀狀態を無視したところの、公式的な、、戰術が、資本主義を、、するどころか、あべこべに致命的逆襲を誘致する口實を支配階級に與へたことは、何人も否定することは出來ない。

評議會が消滅して、その後身として日本勞働組合協議會が生れた。しかしこれは往年の評議會の面影はなく、經濟戰線に於ける存在は微々たるものである。また昨年の七月、共産陣營が合法派と非合法派に分裂し、合法派に屬する勞働者は全産業勞働組合を組織したが、これも强力なる組織をつくるまでには至らない。

社會民主主義の勞働組合と共産主義の勞働組合との中間に、混血兒的勞働組合が介在して居る。その中堅は日本勞働組合同盟であるが、これは大正十五年十二月、社會民衆黨が結成されるとき、これに反對して總同盟より分裂した麻生久君一派の日本勞農黨（今日の日本大衆黨）の系統に屬する勞働組合である。この組合は社會民主主義に[illegible]徹

底せず、さりとて、、、、にも徹底せず、從つて勞働大衆に映ずる印象が稀薄であつて、將來の發達を約束されて居ない。

私は今ま我國勞働運動の實勢力を左に示すであらう。但し、、、の實勢力は、、、、、、、、、ともに詳かにするを得ない、この數字は本年の第十三回國際勞働總會の勞働代表選出に於ける各組合の投票數に依るものである

右翼派

日本勞働總同盟	三二、〇〇〇
日本海員組合	八二、〇〇〇
日本海員協會	一一、〇〇〇
海軍勞働組合聯盟	四三、〇〇〇
官業勞働總同盟	一五、〇〇〇
武相勞働聯盟	一〇、〇〇〇
勞働組合共同研究會	六、〇〇〇
足尾鑛職夫組合	三、〇〇〇
ダンロップ護謨工組合	一、〇〇〇
横濱港仲仕共濟會	一、〇〇〇
合計	二〇三、〇〇〇

中間派

日本勞働組合同盟	九、〇〇〇
日本勞働組合總聯合	七、〇〇〇
純向上會	四、〇〇〇
日本司厨同盟	四、〇〇〇
東京瓦斯工組合	三、〇〇〇
横濱市從業員組合	一、〇〇〇
日本美術友禪工組合	一、〇〇〇
神戸市電從業員組合	一、〇〇〇
合計	二九、〇〇〇

四

政治戰線に於てもさうであるやうに、經濟戰線に於いても、社會民主主義派の勢力は壓倒的である。今後といへども、この傾向は益々强くなるであらう。最近、、、、、では勞働組合の陣營を再建し、今後の發展を圖らうとする氣運が動きつゝあるとのことであるが、我々はこれに大なる期待を持つことが出來ない。若し我國現下の社會狀勢に於いて、勞働運動の大衆的發達を遂げやうとするならば、それは必然的に社會民主主義の方針下に立たざるを得ないからである。それは既に試驗濟みの課題である。

社會民主主義の勞働組合では、一方に無産政黨が出現し發展しつゝあるので、益々勞働組合獨自の立場に歸つて、その面目を發揮するやうになつた。その最も顯著なる現はれは、團體協約權の獲得運動である。團體協約權の確立は、勞働組合の生存權確保を意味するのみならず、産業民主主義の基礎條件をなすものである。民主主義の精神は階級的立場を沒却するものではない。階級的立場を出來る限り合理的に發展せしめやうとするのが民主主義である。だから團體權は罷業權放棄ではない。それは昨年六月に於ける日本海員組合の敢行した海上の大罷業によつて立證されて居る。しかし議會主義が暴力主義を避けるやうに、産業民主主義は出來るだけ不必要なる紛爭を避け、産業的犧牲を最小化しつゝ勞働階級の生活向上、勞働組合の發達を圖らうとするものである。

最近總同盟大阪聯合會の內紛問題から、社會民主主義の勞働陣營に一大動搖が生じたかの如く、またかく希望する人もあるやうだが、共産主義の運動方針が既に完全なる破綻を示して居る以上、時に社會民主主義の陣營に多少の內紛を生じた所がそれを以て、、、、が社會民主主義に對して勢力を盛り返しつゝあるといふ何の證據にもならぬ。

政局展望台

馬場恒吾

キヤステング・ヴオート

民政黨內閣は大ぎの議會を解散せんと固く決心してゐる。少々の無理をしても解散迄持つて行かなければならぬと思つてゐる。これは民政黨上下を擧げて一致したる意見である。だから總選擧は來年早々必ず來るものと見なければならぬ。そして總選擧の結果は民政黨二二○、政友會一九○、無產黨一五、殘り四十一名が中立と小會派、これが玄人筋が一々の選擧區と地盤に當つて勘定した豫想である。此豫想が外れたならば、日本の政界は玄人の知らざる發展をなしつゝある事を示すもので、それは寧ろ喜ぶべき事だ。

若し此の玄人筋の豫想が中るならば、玆に無產黨に採つて危險なる試錬時代が來る。無產黨の陣營の中には或はそれを以て、無產黨がキヤステング・ヴオートを握るものだと云つて喜ぶものがあるかもしれない。然し政黨の誘惑の中でこれほど呪はしき誘惑はない。勿論無產黨は從來の政治家が誘惑されるやうな手段方法では絕對に誘惑されない。併し僅かに十名若しくは十五名の議員で、議會の形勢を左右する或は政府に對して生殺與奪の權を有つと云ふ事、即ち黨の小なる割合に其勢力の絕大なる事が、キヤステング・ヴオートの誘惑である。金錢と地位に誘惑されない人でも、自分が絕大な勢力を振ひうると云ふ快感には誘惑されることがある。昨年の特別議會では三、四名の小會派ですらがキヤステング・ヴオートを握つた。それが既成小會派を墮落せしめ、或は新規小會派を發生せしめた事は人の知る通りだ。併しさうしたキヤステング・ヴオートの誘惑に打ち勝てなかつた小會派の末路は何れも香ばしくない。それは三、四名の少數で、四六六名の議員を支配せんと心掛けるのが一種の僥倖を狙ふ心であるからだ。僥倖で成功せんと欲して成功した例が少なく、假令又成功しても、それを吾々は尊敬する氣になれない。曾つて英國の勞働黨は議會の絕對多數を得る迄は、政權を取るを欲しないと云つた事がある。其態度の方がキヤステング・ヴオートを僥倖する心に比較して、如何に堂々として眞實に吾々の尊敬に値するか判らない。

總選擧の結果が、無産黨にキャステング・ヴォートを與へるとき、無産黨は如何にそれを使用するか。其使用の樣式に依つて、それが日本の小會派の運命を辿るか、或は英國の勞働黨のやうになるかゞ決定される。それは無産黨に採つては大切な試錬時代と云ふべきものだ。

政友會に闘志ありや

愈々總選擧にならば、民政黨内閣を一蹴して見せると、政友會は景氣のいゝ事を云つて居る。然るに心の底の何處かに、潜在意識的に、此一選擧は負けた方が政友會將來の爲めによいと云ふ氣分がありはしないか。口では勝ちたいと云つても、實際は負ける方向に行動を採つてゐるかの如く見える。

地方の政友會員は、中央から來る黨の幹部に向つて、選擧に勝つたら、次ぎの總理大臣は田中さんですかと聞く。それは無論さうさと答へる。地方黨員は默つてゐるが何んだか腑に落ちないと云ふ顏をする。中央から行つた幹部も之れには考へさせられると、歸つて來てからの述懷である。

政友會が勝てば、此前の田中内閣が復活する。少しの顏振れは違つても、矢張大體に於ておらが内閣の再出現である。そして其だらしない失敗と醜怪事の連續である。道樂息子が家の主人に復活した如く、政友會の家臺を潰さずには置かない。それが眞に政友會信者になり切つた所の、地方黨員に憂鬱な顏をなさしめる。彼等は新興氣分の充實した所の、眞正の政友會の復興を希望してゐる。それが故に、彼等は口にも出さず、意識にも上さないが、寧ろ政友會が一度負けて、そして健全に起き上る機會を得る事を希望する。

然らば政友會は何故に、今の中に黨首を取り換へて、内部整理の途に付かないかと云へば、それは總選擧が目の前に迫つて居る爲めである。政友會には總裁候補者として自から任じ、或は人の噂に上るものとして床次、鈴木、小川、中橋、久原などを數へる。然るに彼等は總選擧を前にして總選擧の費用を負擔する總裁の地位に付き度くない。其費用が今次きには莫大な額に上る。田中が政友會總裁になり、久原を連れて來て以來、政友會の費用は殆んど全部總裁が出すと云ふ習慣が作られた。其前は皆んな持ち寄りの會計と云ふ工合であつたが、田中時代には、なあに久原と云ふ弗箱が付いてゐるのだから、金は其所から取つて來いと云ふ風に、誰れも持ち寄りをしなくなつた。それでなくてさへ政黨總裁は金が要るのであつたが、此習慣が作られた後には、其金は並大抵の額では濟まぬ。それ故に政友會總裁にならんと志してゐるものも、先づ此選擧は田中にやらして、政友會の改革は選擧後にする。即ち金は田中に出さす、負けたら其時に田中を引退せしめると云ふ腹になる。其所に打算的な、成り行き主義が含まれてゐる。野球でバッターがストライキを見送る心理狀態である。闘志滿腹とは云へない。彼等に採つては政友會が負ける事が、田中を清算する事になり、田中を清算する事が、政友會更生の道になると云ふ筋書が目に

見える。尤も總裁候補全部がさうではなく、各人各種の心持ちでゐることは勿論であるが、總選擧を前にして政友會全體の氣持ちにちぐはぐの點があるのは其爲めだ。

田中が内閣を投げ出した事情には氣の毒な點もあつた。彼れは恰も天譴を蒙つた形ちで辭職した。併しそれも正に天譴を蒙るべき價値があつたから蒙つたのである。相撲取りが土俵の上で相撲に負ける。そして其相撲取りが已れは負けはしないのだと力きんで、四股を踏んでゐるときは、誰れか往てそれを土俵に連れて來るより外はない。田中は此相撲に負けても力きむ相撲であつた。

田中が後に追ひ出されると知らずして、總選擧の費用を負擔するとせば、彼れは天下の同情に値する。吾々も同情する。だがしかしそれは只彼れに對する同情であつて、彼れの率ゆる政黨に投票すると云ふ意味ではない。それは全く別問題である。

かうして同情すべき立場に居る田中總裁に向つて誰れも事實を正直に進言するものがない。恰も首相としての彼れに、誰れも退くべき適當な時機を敎へてやらず、遂に未曾有の失態で退却の已むを得ざるに至らしめたと同樣である。今のやうに、總裁を犧牲球的に取扱ふ心掛けで選擧に臨んでは、其結果が思ひ遣られる。

第三黨と解散回避論

政友會を脫黨したる小泉策太郎が中心になつて、解散回避の第三黨を組織する計畫があると、時々新聞に出た。事實を探つて見ると小泉は何にもして居らぬ。それに、彼れは民政黨内閣成立以來の二ヶ月を伊豆の片田舍の郷里に引籠つてゐて、政界に顏を出さなかつた。

だから第三黨組織の實際運動はして居らぬが、解散回避の理論には彼れは贊成してゐる。今頃解散回避の說を唱へる如きは如何にも時代に超越してゐるが、彼れの說には徹底してゐる。

曰く、議會政治は人民の意志を尊重すると云ふ事を第一義とする。衆議院は何んと云つても人民の意志の現はれだ。それを政府の都合が悪るければ何日でも解散すると云ふのは、人民よりは政府が貴いと云ふ官僚思想の現はれだ。殊に何んのかんのと云つても、代議士は多大の犧牲を拂つて出て來てゐる。官僚や貴族が、自分には何等の犧牲を拂はずして國家の事を彼れこれ云ふのとは違ふ。代議士こそ眞の愛國者だ。日本を背負つて立つ中堅だ。それが總選擧になると三分一は落選する。愛國者をさう容易に失脚せしめるのは國の損だ。だから解散は避けられる丈け避けるがよいと。

濱口内閣が成立した後に安達内務大臣は小泉を訪ねて第三黨を組織して吳れ、だが政府は必ず次ぎの議會を解散する。解散後の議會で小泉が第三黨を率いて、政府を援助して吳れゝば政府は安泰であると云ふのであつた。

小泉は此註文に應じかねてゐる。政友會内に解散を嫌がる連中を集めればこそ第三黨が出來るのだ。解散を眞中から振り翳して、それ

第三黨を作れと云つても、それは無理だと云ふ。小泉が第三黨組織に働かないのは其爲めである。

議會を度々解散せよ、さうすれば議會が改善されるテンポが早められると云ふのが現代的な議論である。それが新聞の輿論となつてゐる。だから解散回避説は時代逆行として見られる。

併し吾々は實際の事實を直視せねばならぬ。選擧には益々金が掛るやうになつた。今年各地に行はれた町村會議員の選擧が劃時代的に其傾向を甚だしくした。村會議員になるにすら五拾圓費ふ。少しく町がかつた所では二千圓から費ふ。村會議員の選擧でさへ金になるのに、代議士の時に只と云ふ事はないと云ふ農民もあらう。かうした選擧でも、度々行ふ方が政府を改革する所以だと云ふ理論は成立たない。女が節操を賣る。其度數が重なるほど其の品行がよくなると云ふ議論が成立たないと同じ事だ。

民政黨としては解散に向つて驀進するより外にあるまい。併し民政黨の基礎を固める爲めの解散を、政策實行の必要條件としての解散と混同してはならない。又解散の爲めに解散を歡迎する必要もない。

民衆の進歩は遲々たるものだ。遺憾ながら吾々は此現實に直面してゐる。……と此現實と飛躍する事に、議會主義を認めるものには、明

賣勳其他の疑獄

或日の新聞に、裁判所は勳三等以下の受勳者の名簿を調べてブラック・リストを作るとあつた。勳章の賣買が疑獄となつた當然の結果ではあるが、かうなつては名譽の表章が、不名譽の表章になると思はれた。

誰れがさうした大それた計畫をしたか。又誰れが賣つたか、誰れが買つたか判らぬ。併し何故にかゝる計畫が立てられ、何故に賣られ、何故に買はれたかは大抵想像は付く。賣る方はそれに依つて金を儲けんが爲めだ。買ふ方は、買つた勳章は名譽でない事位は承知してゐるだらうけれども、實業家として勳章を授けられる事は、それが實業上の信用を增す事になり今迄銀行で、拒絕される約束手形が通用する事になり、從つて、、、、、、になる。だから、、、位ならば買ふと云ふのである。

勳章のみならず、他の方面でも大なる政治的の疑獄が起つてゐる。それが公判に付せられるときは既成政黨的の腐敗が骨の髓の髓迄喰ひ込んでゐる事が曝露される。それは既成政黨の崩壞を來たすところのものであるとして、無產黨は痛快がつてゐる。併しこれは只痛快がつ

其中の一二萬圓は黨より補助されるとして、自分で才覺すべき金が五萬圓になる。三回も選擧を爭ふとすれば十五萬圓が殘りとなる。それを穴埋めすべく、彼等は秘密の金に手を觸るべき餘儀なき運命に置かれてゐる。と云つて、其行爲を辯護すべき理由は絶對に存在せぬ。只事實がさうであると云ふのみだ。

それならば、金を費はなければよいと云へる。併し既成政黨に屬する代議士の目には金を遣はずしては選擧に勝てないと云ふ事が餘りに明白に判つてゐる。金を費はないで落選する位ならば、初めから候補として出ない方がよい。苟くも出る以上は、金を費はぬなどゝ云ふ贅澤は云つて居られぬ。如何なる手段に訴へても當選せねばならぬと云ふ氣になる。

私は代議士の話を聞いた。彼れは初め二回五萬圓宛費つて二回共落選した。三回目に十二萬五千圓費つて當選した。それ以來彼れは解散を恐るゝ事虎の如く、解散回避の爲めには如何なる屈辱をも忍ぶ。

かうした選擧の行はれる間は、犯罪が、、、の一部分になつてゐる。犯罪を根絶する事は元よりなさなければならぬ。只犯罪を根絶した後に、、、、の幾分が生き殘り得るかゞ疑問である。

五十年前には日本の政治家は國事犯にて投獄される事を免かれ難き運命とした。そしてそれをたいして恥辱とは思はなかつた。今の疑獄は國事犯よりは非常に醜い事件だ。だが當人は國事犯の積りでゐるかもしれない。

無産黨自重すべき秋

濱口内閣は消費節約財政緊縮を標榜してゐる。それを標榜しない前から、民政黨が一體に金遣ひの細かい事に關して種々の笑話を聞かされた。畢竟するに民政黨の連中は政友會ほど豪奢でない。金を儲けることに大膽露骨でないから豪奢であり得ないのである。政治家としては其方が安全で、寧ろ賞讃に値する。

だが選擧になると、民政黨だつて金を遣ふ。黨本部から出る金は政友會ほど豐富でないやうだけれども、所屬黨員は政友會と對抗の必要上矢張數萬に上る金を拵しらへなければならぬ。それは相當に資本を有するものから借り若しくは貰ふ以外に方法がない。故に、民政黨も亦有産家政黨たる特性を帶びる。

目前に展開されたる疑獄事件は政友會内閣時代に起つた事柄である。だからそれには民政黨は關係ない。だが併し、かうした疑獄の起つた原因が選擧に幾萬圓かを遣つた穴埋め、若しくは選擧に政黨領袖として大金を振蒔かんとする準備行動である事を見るとき、そして其又奥の原因が選擧に金がかゝると云ふ事にある事を見るとき、民政黨と雖も、同じ誘惑に直面してゐる事は否定出來ない。現在の民政黨幹部は比較的正直で、其方面では臆病過ぎると批評される程であるが故に、其誘惑に打ち勝つであらうが、それに打ち勝てない黨員が現在又は將來に出て來ないと云ふ事を、誰れが保證出來ようぞ。

吾々は今迄の政治家を一掃しなければ、日本の政治は改まらないと確信してゐる。それは政黨の指導原理や、主義主張の問題でなく、只人の問題である。如何なる主義主張を掲げてゐても、それを擔當するものが、多額の選擧費を費つて出て來た代議士であつては、何日かはそして何處にか黄金の臭氣に感染すると云ふ危險がある。清淨な金にせよ、不淨な金にせよ、選擧に金を費ふ所に、已に政治の腐敗が匂はされてゐる。

だから新たな政治は選擧に金を遣はない事を以て始まる。明治初期の自由黨改進黨時代には、所謂天下の志士と云つた者はなけなしの財布を持寄つて政黨を作つた。草鞋掛け、腰辨當で天下を遊說した。其人達が新らしき政治を建設した。現在の政治は今のブルジョア政治家を、金なしの金を費はざる新らしき群れに依つて置き換へる事に依つて初めて改まる。

これは吾々の確信であるのみならず、日本の一般民衆の確信になりつゝある。彼等が漠然として既成政黨は駄目だと、叫ぶ中に、彼等は金の力で政治を行はんとする政治家が、遂に何事もなし得ざる事を洞察してゐる。そして彼等の期待は期せずして、金に縁故のない無產黨に向けられる。

けとか、或はキャステング・ヴォートを握つて漁夫の利を占めよとか云ふが如き、そんな小さな期待でない。堂々として天下を取つて、日本の政治を一手で改革して見せろと云ふ期待である。無產黨は國民の此期待を自覺して行動すべきである。

無產黨の中で、議會主義を否認するものは別として、苟くも議會を通して行動せんとするものは、國家を背負つて立つ抱負を有つてよい。從つて其言論も奇を立てる事を目標とするのでなく、寧ろ自分が天下を取つたとき如何にするかを規準として立論すべきだ。さうしなければ民衆の信頼を裏切る事になる。民衆は無產黨に向つて天下を取れと云つて居る。無產黨は天下を取る事に比較して、より小なる抱負野心に道草を喰つてはいけないのである。

社會科學

九月號內容

論文

資料

社會科學文獻批

東京芝區愛宕下町　改造社發行　(振替東京八四

改造社版
經濟學全集（第十二回配本）

第十二卷

財政學（上）

東京・芝・愛宕下町
改造社
振替東京八四〇二番

財政學の原理的研究に於て斯學の世界的水準を高めたる學者として令名ある阿部博士の「財政學史」「財政政策論」圓熟の境に入れる小林博士の「財政史」加ふるに地方財政の研究に於ては本邦唯一の權威者田中氏の「地方財政論」等、現下最も重要視されつゝある我國「財政」の諸問題をめぐつて本卷こそは正しく幾多の示唆と暗示にとめる一大指標書である。

内容

財政學史……阿部賢一
財政史……小林丑三郎
財政政策論……阿部賢一
地方財政論……田中廣太郎

第一回 經濟學原理
第二回 經濟學大綱
第三回 日本社會經濟史
第四回 唯物史觀經濟史
第五回 各國經濟史
第六回 經營經濟學
第七回 經濟學前史
第八回 マルクス經濟學說の發展（上）
第九回 商業學（上）
第十回 租稅論
第十一回 現代日本經濟の研究（上）

フリードリヒ・アルバアト・ランゲ原著
慶大教授 文學博士 川合貞一譯補

唯物論史

上之巻 既刊
中之巻 新刊
下之巻 嗣出

巻之上 菊判 四五〇頁 定價 四圓

巻之中 菊判 六二九頁 定價 五圓卅錢

送料各廿七錢

唯物論の意義の批判

ランゲの唯物論史はクラシックと謂はれて居るが、然し唯物論の歴史としてこれ程纏つたものはマダ他に現はれて居ない。出版後半世紀を經て居るのに尙この事實あるは、その眞價の如何なるものかを裏書するものではないか。之は單なる唯物思想の歴史的羅列ではない。彼はこの著に於て人類文化の歴史に於ける唯物論の位置を批判的態度を以て突き留めやうとしたのであつて、現代に於てもその意義を愈々發揮する。上巻は古代及び十七世紀、カント以前の唯物論を盡してホッブスに及び、中巻に於ては譯筆さらに暢意濶達、夫れ以後の唯物論及カントの唯物論を主調とする。「カントの世界觀の使途」ランゲは玆に完き姿を提示してをる。書中しばしば簡淨適切の補註があるから、讀者は一層の利益を享ける。蓋し現代に於ける唯物論の意義の批判は斯の如き名譯に俟つ可きではないだらうか。

東京日本橋通
丸善株式會社
大阪 神戸 京都 名古屋 横濱 福岡 仙臺 札幌
東京＝神田・三田・早稻田・丸ビル

政・民何れが勝つか

兩派伯仲か

清瀨　一郎

御說の通り、來る五十七議會は解散になると思ひます。又日本人は事大思想に滿ちて居りますから、政友・民政の兩黨は當分多くの投票をかち得ること〻存じます。恐らく前回の選擧同樣兩派とも二百二十名位で伯仲の間柄となるものかと思はれます。然し之は想像だけで、又どんな番狂せがあるかもわかりません。我革新黨はやはり十名前後の候補は立てますが、大した議員を當選せしめる事は豫想されません。たゞ微力ながら當分現狀態を維持し不偏不黨の正論を以て、國のために貢獻したいと思つて居ります。

無產派も相當の所まで投票を取る有力候補者を多數擧げることは出來ませうが、眞實當選する議員は比較的少なからうと存じます。大體現勢力の持續といふことになりませう。以上のことが望ましいことであるや否やは、申すまでもなく別問題であります。

政民所を換へん

緒方　竹虎

早かれ晚かれ議會の解散は旣定の事實であり、解散による選擧の結果も政友會が敗けて民政黨が勝つことだけは豫斷して憚らない。田中內閣の下で行つた昨年の總選擧においてすら、その結果は政友會二一九名に對し民政黨は二一七名でその差は僅々二名に過ぎなかつた。その後床次一派の脫黨で民政黨は著減し、その反對に政友會がふくれて政友會二四四名民政一七二名となり、その差は七十名以上であるがこれは全く不自然の多數である。從つて次の選擧において政友會がこの數字を維持し得ぬことは明白であるが、然らば政民兩派の數がどれ位ゐになるかといへば解散の時機によつて相當重大な影響があると思ふ。政府は戰備が十分整つた上で一擧に勝敗を決せんとするらしいが、民心を失つた政友會と戰ふには一日早ければ早いだけ民政黨に有利である。然し假令選擧が來春早々に延びても政府の緊縮政策が破綻せぬ限り、政友會の不人氣が頓に回復するとは思はれぬから、政民兩黨はその地位を顚倒して定員四百六十六名中民政黨は恐らく二百五十名內外を得るに反し、政友會が百五十名以上を得る事はなかく容易でなく、殘餘の五十名內外を無產黨を初め中立で爭ひ合ふのではないかと思ふ。

民政黨に勝目

山川　均

民政黨ではなるべく金解禁をして置て選擧に臨む腹だらうと察せられますが、急激に不景氣が增大せぬ限り勝ち目があるよう

過半數まで漕ぎつけるかは疑問でありますがこれも相當望みがあるらしく思はれます。

民政黨多數を得ん

吉野作造

此の問題を考ふるに際して、先づ次の諸點が念頭に浮ぶ。

一、政友會は去年春の總選擧よりも有利なることは絕對に有り得ない。否、田中內閣時代の不評判と、現に在野黨であると云ふことは、著るしく其の境遇を不利にする。

二、民政黨は大體に於て評判がいゝ。緊縮政策に因る都鄙、殊に田舍の酷しい不景氣は、机の上で考へる程選擧の結果には影響を與へまい。不幸にして一般選擧民は自己の利害に關しそれ程にまだ敏感ではない。

三、よし敏感の分子が殖えつゝあるとしても、それは恐らく濱口內閣から來る痛苦と

四、故に單に兩政黨の比較から云へば、何と謂つても、民政黨の勝利を許さねばならない。

五、併し乍ら我國の選擧界には、政黨の對立を超越した個人的地盤と云ふものが相當に多い。普選の實施に依て之が可なり毀されかけ（又毀さなければならぬものだが）ては居るが、もう暫くの間は、無論双方にあるが、幾分政友會の方に多いのではあるまいか。

六、無產黨の割り込む餘地は殘念ながら、未ださう澤山はない。併し著しき增大を見るべきは略ぼ期待され得る。

斯くして私の結論は斯うだ。民政黨は單獨で過半數を制し得ぬまでも、政友會に比し可なりの開きある多數を得べきは疑ひないと。

（八月二十八日）

附いてゐたならば卽ち現在政友に走つたものが政友に居たとして、政友二四〇、民政二〇〇位であつたであらう。政黨の優劣を度外にして、政府黨と反對黨の當選比率は政府黨七野黨五と評價される。だから昭和二年のとき民政が與黨、政友が野黨であつたならば、民政は二〇〇の五分の七、卽ち二八〇、政友は二四〇の七分の五卽ち一七〇であつたであらう。今は此情勢で選擧に臨むのだから、民政二八〇、政友一七〇と迄はならないであらうが、民政が勝つ事丈けは確かであらう。尤も選擧迄に政府が何か大失策をやれば、この豫想は外れること勿論だ。

民政黨の勝利は確實

河野密

一、恐らく民政黨が第一黨

へられます。

二、政友會が二百名以下に減ずるであらうこともこれまた殆んど確定的と言へるでせう。

三、それで、第五十五議會の時ほどでなくとも、總選擧後の議會では與黨野黨の數的勢力が微妙な關係を呈するであらうと思ひます。その時、これまた確實に倍加するであらう無産黨の發言がかなり重要になつて來ると思ひます。

與黨の政策如何による

松木幹一郎

普選過去の經驗によれば民衆の政治的自覺が眞に澎湃たる有様はまだ認められませぬ。乍遺憾利害や情實が依然として選擧に纏綿して居ます、けれども與黨の選擧上の優越的位置はそれが必ずしも干渉と名づけられないまでも幾多の便宜と利分があります。選擧の結果は無論與黨の數が相當大きくなるのは想像に難くはありませんが、それも內閣の政策が民衆に與ふるところの感激と其實現性の尺度とが大變に影響するものと思ひます、民衆と及其指導階級とは來るべき總選擧までの政府の施設と經綸とを刮目直視して居ます、一波萬波はそれから如何様にも起ることでせう、が結論に於ては絶對多數は必ずしも望めまいと大勢的に推斷されます、矢張りある少數黨かキヤスチングボートを振廻はすといふ餘り好ましくない事態を現出するのではないでせうか、政黨の經綸及無實行が眞に民衆の琴線に觸れない間、選擧が因縁や性質から離れ得ない間は誠に是非もないことゝ辛抱する外はありますまい。

引續き政局不安定

赤松克麿

來るべき總選擧戰に於いては、民政黨と政友會との當選數は大差なきものと考へる。國民は次第に兩黨ともに大した變りはないもののやうに考へてくる傾向があるのではあるまいか。その結果として、今後の選擧には、一方が大勝して他方が慘敗するといふことは少ないやうに思はれる。しかし今度の總選擧で政民いづれが絶對數に於いて勝を制するかといへば、それは民政黨であらう。政友會內閣時代の積惡的印象は、尚ほ國民の腦裏に薄らいで居ないから、近く再び政友會に政權の移動することを國民は好まないであらう。しかし民政黨內閣の金融資本家本位の財政方針も可成り國民の反感を買ひつゝあるから、民政黨といへども決して絶對過半數の大勝を占めることは困難に相違ない。要するに民政黨が第一黨にはなるが、政局の安定は望み難いと思はれる。

兩派とも大差なし

山根眞治郎

政民兩派とも大差なく、中間の小會派が頭數を得て議政を左右するやうになり、憲政の最醜落期がもう一度來ると考へます。飽きられた政友會の不利は云ふまでもありませんが、いつも政府黨が勝つとのみ考へて居たら、それこそ大間違です。時勢は變つ

ゐる。

時期も決められない、金解禁の掛聲は一種の財界攪亂です。見當もつかない遠吠に國民は飽き〳〵してゐる。甲の×が乙の×に代つただけでは承知出來ません。

不景氣と失業禍、選擧のある頃日本の舞臺は半廻りするでせう。

政、民何れも勝たぬ

武藤　山治

立憲治下に於ける選擧の勝敗が過半數を得るにありとすれば、來る總選擧に於て政民何れも勝たぬと答へる外ない、代議士總數四百六十六の過半數を得ることは二百三十三以上當選者を得ることで恐らく双方共虚勢は張つて居つても何れもかゝる意味の勝利はあきらめて居るだらふ。そうすれば政民何れが勝つ

の選擧當時の情勢と比較すると、政友會に不利なる點は野黨であることであり、民政黨に不利なることは床次氏一派を失つたことである、これを逆に見れば政友會に有利な點は床次氏一派を加へたことであり民政黨に有利な點は政府黨として戰ふことである。そこで、有利、不利の兩點の見樣次第で政民何れが第一黨になるかを想像することが出來る。第一に政友會に有利な點を考へて床次氏一派が何人當選するであらうか、小生には判斷が付かぬが、どうなつたとしても床次氏一派が少なくとも十五、六名位は當選するであらふ。そうすると、今日の政友會の總數より十名位減ずることゝなる、更に政友會それ自身の當選者の數がどう變化するだらふかそれも見樣次第で大に減るとも見へるが、そう減らぬとも見へる、假りに十名位減るものとみると、床次氏一派の減る數と併せて二十名を失ひ二百二十名乃至二百二十五名のところに落付きは

少ないと見ねばならぬ。次に民政黨の有利な點たる政府黨たるの利益を考へて見る、先日の知事、警察部長に對する內務大臣の訓示を其表面通り解すれば政府黨たるの利益は全然無いとも言へるが、世間は反對に想像して居る、今度は政友會內閣の干涉のような反對黨を利するような下手な干涉はやらないだらふが、辛辣なる干涉手段を採るものと一般に見られて居る。今日之を豫想することは出來ぬが民政黨の此有利な點は可なり大きく勘定に入れてよからふと思ふ、そこで此政府黨たる有利な點を假りに大きく見て五十名を加へると見ると今日の百七十名は二百二十名となるから、政、民第一黨の爭ひは何れに軍配があがるか見當が付かない。どちらが勝つにしても僅少の差であらふ。

以上の如く考へると今度の選擧も結局少數派がキヤスチング、ヴオートを握り其態度如何で政局を左右することゝなるのではなから

緊縮・解禁政策の勞働階級に及す影響

高橋龜吉

世人の等しく認めてゐる如く、濱口内閣は金解禁の斷行をその使命として出現した。金解禁の斷行とは、これ迄、我が爲替相場の下落、動搖に象徴せられた日本資本主義の不安定を、安定化す具體政策の別名に外ならない。ところで、濱口内閣の方策に從ふと、その日本資本主義再安定化のため、勞働階級に如何なる犠牲を荷はすことになるかと云ふに、その重なるものは、實に左の諸點である。

(1) 解禁準備としての緊縮政策に基く犠牲

（イ）中央及地方財政に於ける事業中止乃至繰延に基く直接的影響としての失業。

（ロ）緊縮政策に基く不景氣事業不振の結果、其の犠牲の勞働者への轉嫁。

(2) 平價金解禁に基く犠牲

（イ）物價下落の結果、事業界整理時代の再來、而して、その整理的犠牲の勞働階級への轉嫁、即ち、人員整理（失業）賃銀引下等。

一、金解禁及緊縮政策の勞働階級に及す影響

濱口内閣の信ずるところに由れば、日本現在の「經濟國難」を打開し、「國民經濟を立て直す」方策としては、現に濱口内閣の採りつゝあるが如き「緊縮政策」と「平價金解禁」とを斷行する外にない。而して、このため、國民は多少（？）の苦痛を嘗るであらうが、我が經濟の立直しのためには之を忍ばねばならないと云ふ。筆者は先づ此の根本點に於て濱口内閣と見解を異にする。が、こゝには、專ら、濱口内閣の緊縮政策及平價金解禁が、我が勞働階級に如何なる影響を與へるかを見るであらう。

(ロ) 不景氣、賣行不振に基く犧牲の勞働階級への轉嫁、即ち、失業及び賃銀引下等。

以上の諸點については、しかし、複雜せる多くの問題が絡んでゐて、簡單に右の如く之を列擧した丈けでは、問題の眞相に觸れるわけには行かない。例へば、公式的に考へれば、此際に於ける平價金解禁は、物價を一割半から二割方下落せしめることになるから、それだけ、勞働者の實質賃銀（一定の勞銀で以て物資を購ひ得る力）は增大したことになるのではないか。即ち、平價解禁は汝の言ふが如く勞働階級に不利益などころか、反對に有利ではないか、と云ふが如き抗議が直ぐと提出せられ得る。現に、さうした意見も相當にあるのである。その他にも、尙ほ、平價解禁と勞働階級との關係には複雜した問題が介在してゐる。そんなわけで、本問題の眞相に觸れるためには、更に、突込んだ考察を必要とする。以下にその大畧を開陳するであらう。

二、平價金解禁と勞働賃銀との關係

平價金解禁が、勞働階級に及す影響は、直接的部分と、間接的部分との二つから成り立つ。しかし、その最も大なる影響は勞働階級に及

禁の直接的影響について見る。

此際に於ける平價金解禁は、大體に約一割四分內外の物價を下落せしめる。此の一般的公式に從へば、而して平價解禁の曉に於ても勞働賃銀は依然のまゝを維持するものと假定せば、勞働者は從來の賃銀を以て、これ迄に比し、一割五分だけ、ヨリ多く物資を購買する力を持つことになる。即ち、それだけは、勞働賃銀が實質的に騰貴したことを意味する。だから、此の公式的な假定に由る限り、平價金解禁は勞働階級に約一割五分の實質賃銀の增加を齎らす、有利な政策だ、と云ふことになる。

しかし乍ら、右は机上の理論である。實際には、第一に、斯かる場合には産業資本家は自己の損失を轉嫁するため、必ずや、失業者を出し、賃銀を引下げざれば止まない。資本主義の仕組に於ては、それは必然の流れなのである。しかも、物價が一割五分下落したから、賃銀を一割五分低下さすに止るかと云ふに、決してさうではなく、それ以上の賃銀を引下げざれば止まないのである。此の點については、しかし、次項以下に改めて詳叙するから、玆には右の點を指摘するに止めるであらう。

第二に、此際に於ける平價金解禁は物價を一割五分內外下落さすと

我が產業の多くは輸出入關係のもので、從つて、賃銀下落を强要する力は直ちに作用する。之に反し、勞働階級の生活費に關係ある家賃、電燈料、電車賃、味噌、醬油、その他の日用品、米等は、その下落が少からず後れて來る。就中、家賃その他に於てはその下落が著しく後れる。此の結果、假りに、輸出入關係產業の物價下落率（大體に一割五分）だけ賃銀を引下げられても、勞働階級の實質賃銀は少からず減少せられたことになるのであるが、實際は、それ以上の賃銀引下げと失業とに脅かされるものなること已述及後述の如くである。斯樣なわけで、平價金解禁は結局、勞働階級に多大の犧牲を荷はすことになるのである。以下、更に、そのわけを詳叙するであらう。

三、緊縮及金解禁の產業界に與へる打擊と其轉嫁

資本主義經濟の仕組に於ては、資本家に利潤が約束せられざる限り、產業の運轉は行はれぬ。從つて何かの理由で、產業が一般的に損失を蒙るか、乃至利益が減滅した場合にはあらゆる努力に由つて、利益の再獲出が圖られるが、その最大有力の方法は、人員整理（勞働者の失業）、賃銀引下げ、勞働時間及一定時間内に於ける勞働量の加重其他に由つて、その犧牲を、勞働階級に轉嫁することである。資本主義の仕組に由る限り、かゝる犧牲の勞働階級に轉嫁せられることは、到底之を避けることは出來ないのである。斯樣なわけで、濱口内閣の緊縮政策及金解禁の勞働階級に及す影響を考察するためには、先づ、それが如何なる影響を產業界に與へるかを一瞥せねばならない。ところで、濱口内閣の平價金解禁及緊縮政策は、我が產業に對し、實に、左の如き一大打擊を與へるものである。

(1) 平價金解禁のため、その製品價格が約一割半から二割下落するために蒙る打擊。こゝに物價下落と云ふも、すべての物價が一律に下落すると云ふわけではなく、先づ輸出入關係品が最も敏感にその影響を受け純國内的需要品のそれは、その下落が比較的に緩漫である。然るに、我が大規模產業の大部分は已述の如く輸出入關係品の製造に從事するものなるが故に、斯種產業製品の蒙る打擊はそれ丈け大である。併し乍ら、この製品市價の下落は、出來るだけ早く、勞働階級農民その他に轉嫁せられる。

(2) 工場設備及び手持品等の値下り損。平價解禁に由る物價下落は啻に、叙上の如き製品市價の下落のみでなく、工場設備及び手持品の値下りを來たす。尤も、その大部分が手持商品其他の流動資產であれば、平價解禁準備中に或は之を他に轉嫁し、或はその損失を小化することが出來る。然るに、實際に於ては、固定資產が多く、又等しく流動資產にしても、事業の運轉上、商人の如く自由にストックを增減さすことの出來ぬ分子が多大である。試に東洋經濟新報社が重なる產業會社百三十二社について調査せるところに由ると、我が產業の固定資產及流動資產の高、及びその割合は次表の如くなつてゐる。

（一） 我が産業の固定及流動資産と平價解禁損

	總括（一三二社）	重なる内譯摘出 製紙（三社）	電燈電力（九社）	鐵道業（一五社）	造船及機械工作（九社）
株主資本計	四、〇一九、七七九	一九一、六六四	一、〇二五、〇一五	三五〇、一七三	一八〇、四二九
内拂込資本	三、一八二、〇二八	一五三、九五九	九六〇、〇〇〇	三〇七、九五九	一四〇、一一四
固定資産	四、六八〇、四三〇	二六四、七七六	一、六四三、三九〇	四九四、二八〇	二〇五、一一三
A 同上一五%の損	七〇二、〇六五	三九、六一六	二四六、五〇九	七四、一四二	三〇、七六七
流動資産	二、四一〇、二〇九	一三三、七六〇	四二八、〇二四	一〇七、〇三二	二一九、五七二
B 同上七%五の損	一八〇、七六六	一〇、一八二	三二、一〇二	八〇、二七四	一六、四七八
A B 合計	八八二、八三一	四九、七九八	二七八、六一一	一五四、四一六	四七、二四五
同上拂込資本率	二七%七四	三二%三四	二九%〇二	五〇%一四	三三%七二
當期利益	二三二、九一六	一三、九九八	六九、六三八	二一、七七三	損一六、一五八
同上株主配當	一五五、〇八〇	九、五〇二	四四、四六四	一七、三三二	一、七七〇
同上配當年率	九%七	一三%五	九%三	一一%二	四%〇

いま、固定資産に於ては一割五分の値下りを受け、流動資産に於てはその半分の七分五厘の値下りを受けると假定すれば、その額は百三

之等を除いた重なる事業について見れば、固定資産及流動資産の値下り損は、製紙會社は拂込資本の三二%三四、電燈電力は二九%〇二、鐵道業は五〇%一四、造船及機械工作業は三三%七二の多額である。何れも、株主配當の三ヶ年乃至八九年分が吹つ飛んで了ふわけである。

尤も、實際に於ては、固定資産の値下り損は、外國の競爭あるか、又は内地に於て他に新設備事業の競爭なき限り、直ちに、それが事業會社の損失としては現はれて來ない。しかし、何れに致せ、それだけ、會社事業の基礎が薄弱になることに變りはないのである。このことは、反對に爲替相場が下落して、産業基礎が鞏固になつた事實と對照すれば更にハッキリする。即ち、明治二十年前後の企業勃興期から日清戰爭前後に新設せられた我が産業は、當初非常に經營難に陥つたが、當時に於ける銀塊相場の暴落（當時日本は實質上銀貨國であつたから銀塊相場の下落は爲替の下落を意味した）のため、何れも資産の値上りを受け、その基礎を鞏固にしたのであつた。

(3) 借入金元利負擔の増大。平價解禁は更に又、物價の下落の結果、産業の借入金元利の負擔を増大する。例へば等しく壹百萬圓の借

[illegible]

金に依頼してゐることだ。例へば、東洋經濟新報社が我が重なる產業會社百三十二社について調查せるところに由れば、各種株主資本（拂込資本、積立金等）合計約四十億二千萬圓に對し、借入金は總計約二十四億圓の巨額に達する。即ち、各種株主資本の約六割近くである。然るに、實際に於ては、大觀して株主勘定の少からぬものは腐れてゐるのが常であるから、實際の株主資產の七八割に當る巨額が借入金その他を使用してゐるわけだ。詳しくは次の第二表を參照せられよ。

（二）我が國產業と借入金表

	總括（一三三社）	重なる內譯摘出 製紙業（三社）	電燈電力（九社）	鐵道業（一五社）	造船及機械工作（九社）
株主資本計	千円 四、〇一九、七七九	千円 一九一、六六四	千円 一、〇三五、〇二五	千円 三五〇、一七二	千円 一八〇、四二九
內譯 平均拂込資本	三、一八二、〇二八	一五三、九五九	九六〇、〇〇〇	三〇七、九五九	一四〇、一一四
內譯 積立金	六四一、三八二	三一、一三三	四八、九〇六	三三、五九〇	三三、〇五六
內譯 其他	一九六、三六九	六、五七二	一六、一〇九	八、六二三	七、二七九
a 社債	一、五七八、八九八	一三一、〇〇四	七七四、九二四	一五八、八一八	七六、九三〇
b 借入金及割引手形	三三七、〇六九	九、六三三	八〇、二〇六	三八、九〇一	三六、七九六
c 支拂手形及未拂金	四九一、四八二	二七、九一〇	四〇、二五一	二一、九二一	六八、四二九
a b 小計	一、九〇五、九六七	一四〇、六三七	八五五、一三〇	一八七、七一九	一一三、七二六
同上一割五分損	二八五、八九五	二一、〇九六	一二八、二七〇	二八、一五八	一七、〇五九
同上の拂込資本に對する率	八%九八	一三%七〇	一三%三六	九%一四	一二%一八
當期利益	三三二、九一六	一三、九九八	六九、六三八	二一、七七三	損一六、一五八
株主配當金	一五五、〇〇〇	九、三〇三	四、四六〇	一七、三三一	一、七七〇
同上年率	九%〇七	一二%〇五	九%〇三	一一%〇三	四%〇〇

尤も、別表のabcの諸借入金其他の中には、商取引用のそれを含んでゐるが、それは他方に於て貸金と大體に相殺せられる。又、短期の債務は平價解禁のため蒙る負擔增大の率は極めて輕微で濟む。そんなわけで、いま、別表中のcを除外し、abだけが、平價解禁のため一割五分の負擔の增大を强ひられるものとすると、その損失は百三十二社合計で二億八千六百萬圓を算し、拂込資本金の八%九八に當る。大體に一ヶ年分の株主配當金だけが、吹き飛ぶわけである。右は借入金の少き會社を平均してのことであるが、いま借入金の比較的多き事業について見るに、その損失は拂込資本金に對し製紙業は一三%七〇、電燈電力業は一三%三六、造船及機械工作業は一二%一八となる。その打擊の鮮少ならざることを窺ひ得るであらう。

(4) 不景氣化の結果賣行減少に基く損失。不景氣化は、平價金解禁（準備及斷行の結果）と濱口內閣の緊縮政策との兩方面から深刻になつて行く。この結果、賣行不振、利益減、事業縮小等の結果を起す。

(5) 金融難に基く損失。以上(1)より(4)に至る打擊は、事業の信用を少なからず低下し、且つ、將來の物價下落、株價下落を慮つて、銀行は事業資金貸出を極度に警戒するに至る。ために、事業會社は少から

ぬ金融難に陥り、各種の打擊と損失とを蒙る。

以上が、濱口内閣の緊縮及平價金解禁政策の我が事業會社に及す打擊の大略である。然るに、井上藏相は、それ等の打擊や損失で事業界が惱むのは一時的であつて、その結果間もなく、好景氣に見舞はれるから、一寸の間だ、辛棒せよ、と云ふ。その意味するところは、次いで財界の一大事業整理の敢行に由つて、それ等の打擊を他に轉嫁することを期待してゐるものと考へる外ないのである。然らば、事業整理は如何にして行はれるか。

四、事業の再整理と其の犧牲の勞働階級への轉嫁

濱口内閣の緊縮及平價金解禁は、以上第三項に詳叙せし如き莫大なる打擊を産業界に與へる。かくて、産業界は、次の二點につき、その善後策を講ぜざるを得ない。即ち所謂、事業整理の敢行が次の二點を中心にして必要になつて來るわけである。

(1) 損失金の善後處分。

(2) 物價下落に對應する生産費の低下。

右の中(1)の損失はその第一段に於て は産業資本家の負擔の形で現はれる。しかし乍ら、それ等の負擔に耐え得ざる事業家は、破産の最後さりながら、多くの事業は、以上(1)及(2)に對應するため、所謂事業の整理を敢行して、再び、利益を捻出することに成功する。例へば、(1)に對してはその或部分は之を株主に負擔せしめて減配又は減資を敢行せしむるも、しかし、その中の出來るだけ多くの部分を勞働階級に轉嫁することに努力する。又、(2)に對しても、一時は、産業資本家がその一部分を配當減の形で負擔するも、しかし、全力を擧げて、その損失の負擔の全部を勞働階級農民階級その他に轉嫁せんとする。かくて一方には事業の縮少、人員の整理、操業短縮等、犧牲を失業者に轉嫁する方法の盛行せられると共に、一方には賃銀の引下げが旺んに敢行せられる。斯様にして、産業資本家の打擊は、多數失業者の續出と、賃銀引下げとの形に於て、その大部分が勞働階級に轉嫁せられる。故に濱口内閣が「緊縮」の必要を大呼し、平價解禁に由る「我が經濟の立て直し」を絶叫せる裏面の眞意は、その緊縮及平價金解禁政策の大潮流に乘じて、勞働者及び其の賃銀の一大整理引下げを、事業界に、、してゐるものに外ならないのである。

なる程、勞働階級は、右の如き犧牲の轉嫁に唯々として從ふものではない。極力、之に、、するに違ひない。又、、、すべきである。しかし乍ら、産業資本家が事業整理上損失に當つた場合に於て、その損

の炭坑夫組合すら、無慘な敗戰をせざるを得なかつたのである。況んや、日本今日の勞働階級の團結力を以てして、之を阻止し得る見込は殆んどないのである。加之、「日本經濟の立て直し」のため、緊縮政策と金解禁との遂行に全力を擧げてゐる濱口内閣の政策下に於ては、資本家は、、、、の下に、大びらに、大擧して、勞働者の解雇と賃銀引下げとを行ひ得る理論的根據と實踐力とを、、せられてゐるのである。

扨て然らば、緊縮及平價金解禁のため、勞働階級は幾何の失業者と幾千の賃銀引下げとの犧牲を轉嫁せられるであらうか。失業についてはしかし、その數の鮮少ならざることを想像する以外に、之を彷彿せしめる資料に缺けてゐる。しかも、今度の失業は、從來已に多數の失業者が存在せる上に累加せられるのであるから、その慘害は更に著しいものがある。

次に賃銀の引下げであるが、製品賣價が一割五分下落せば、賃銀も亦最高一割五分下落させられるに過ぎぬと考へるは大きな間違ひである。蓋し、製品賣價が一割五分下落せば、生産費も亦一割五分を低下せしめねば從前の利益率は維持せられない。ところでその生産費の中には、先づ原料費と工費とがある。うち、原料費は大體に製品價の下落だけ容易に低下せしめ得るとしても（事實は容易に低下せしめ難いものがあるが）工費の中には平價金解禁を斷行しても容易にその價格を低下せしめ難いもの、多くを含んでゐる。試に紡績の工費内譯を見れば實に左の如き項目から成立つてゐるのである。

生産工費内譯表（平均十四番手七五の一梱について大正八年十月現在日本の一紡績工場調）

	金額	同上百分率
總計	四九、八七五円	一〇〇・〇%
勞銀	二〇、〇九一	四〇・三
内 直接勞銀	一三、六五一	二七・四
内 其他同	七、四四〇	一四・九
内 其他同 内 寄宿費補助及賞與	五、三八四	一〇・八
内 其他同 内 女工募集費	一、〇〇三	二・〇
内 其他同 内 役員給	一、〇五三	二・一
總掛費	二九、七八二	五九・七
内 工場費用	一九、一六四	三八・四
内 工場費用 内 燃料費＊	六、五九一	一三・二
内 工場費用 内 油及機械費	一、五九六	三・二
内 工場費用 内 修繕費	二、二三七	四・四
内 工場費用 内 運搬費＊	一、五二八	三・一
内 工場費用 内 荷造費	六、八二三	一三・七
内 工場費用 内 雜費	三八九	〇・八
内 固定費經營費	一〇、六一八	二一・三
内 固定費經營費 内 租税＊	六、四〇七	一二・八
内 固定費經營費 内 利子＊	六	〇・一
内 固定費經營費 内 月給＊	一八六	〇・四
内 固定費經營費 内 仲買人手數料	一、八五九	三・七
内 固定費經營費 内 火災保險料	三一五	[illegible]

倉庫料*	一七・六	三・五
雜貨	九・四	〇・二

即ち、紡績生産工費の如く、比較的勞働賃銀の多い事業に於ても、その生産工費中、勞働賃銀の占むる割合は四割三厘に過ぎず、ヨリ多く機械を利用する事業に於ては、更にその割合は少いであらう。然るに、勞銀以外の總掛費中には、平價金解禁後もその費用の容易に低下する見込なきもの、乃至はその困難なるもの多くの費目を含んでゐる。別表中星印を附したるものがそれであつて、例へば、燃料費（今日多くは電力を使ふが電力料は容易に下げぬ）、運搬賃（汽車汽船賃も容易に下げぬ）、租稅、利子、月給、倉庫料の如きである。これ等は、別表に由れば全工費の三三％一の多きを占める。しかも、右は大正八年の紡績全盛期のそれであつて、利子負擔の如き極度に少き場合に於てさうである。借入金多き事業に於ては、その割合は更に大となるであらう。即ち、大體に全工費の四割内外は、生産費引下げの對照とならない性質のものであることが分る。從つて、それだけは、結局、勞働階級に轉嫁すべく努力せられるに違ひない。果して然らば、製品市價一割五分に對應する工費引下げを斷行するためには、勞働賃銀が全工

は出來難い。勢ひ、かゝる際には間接方法が盛んに用ひられる。即ち輸入保護關税の引上げ、勞働時間の實質的延長、昇給の停止等々がその一法である。又産業合理化に由り經費を低下（ために失業と勞働壓力の增大が勞働階級に轉嫁せられる）するのが他の一法である。

尤も、産業資本家に負擔能力あり、その餘裕ある場合に於ては、右の中の或る部分は産業資本家に負擔せられる。然るに、此の場合には産業資本家は、已述の如き打擊のために、已に多大の損害を受け、その負擔の一部分をも出來るだけ勞働階級に轉嫁せんとしてゐるのであるから、製品市價下落に伴ふ工費の引下げに於て、その負擔の少からぬ部分を産業資本家に荷はし得る見込は、少からず低減されてゐるものと見込まねばならない。

五、緊縮金解禁と勞働階級の立場

濱口内閣の緊縮及び金解禁政策は、何故に、以上の如き大犠牲を勞働階級に荷はすに至るか、理由は簡單である。これ迄彌縫し來つた日本資本主義經濟の混亂を再安定せしむるに當り、その安定の犠牲を、極力、、、、、、、、、、、、、出來るだけ之を勞働者及農民に荷はす方針を採れるからである。なる程、平價解禁の結果、産業資本家は

更にその第二因として大資本閥の間に於ては、平價金解禁の財界に及す衝撃に乘じて、弱小事業を、或は捨値で併合し、或は之を殲滅せしめて益々その獨占力を強大にせん意圖を潜めてゐるからである。大資本閥にとつては、その方が差引ヨリ有利であるからだ。

扨て然らば、濱口内閣の緊縮及平價金解禁政策が、日本資本主義經濟再安定の犧牲を、、、、、、、、、、、せしめると云ふ具體的事實如何。第一に、一體、日本財界を今日の如き破滅狀態（爲替下落及不安に象徴せられた）に陷らしめた根因は何かと云ふに、それは、會社銀行の多くが利益なきにも拘らず、帳簿をゴマ化して蛸配當と蛸賞與とを取り、且つ、かくして會社銀行の破綻に瀕するや、國民の負擔に於て各種の救濟、保護、補助を貪り、以て、國全體として生產以上の消費を大規模に行つたからである。之れ卽ち、首相及藏相等が盛に云ふ、「日本は大正九年以來收入以上の消費を續けて破產的狀態にある」と云ふことの眞相である。從つて、日本今日の破滅的經濟狀態を立て直すためには、右の如き生產以上の消費力を與へる根因を撤去せねばならない。然り、若し之を斷行せば、事業の基礎は強固となり、生產費は低下して、それだけ產業の對外競爭力を大にし、失業ところか、却つて多大の勞働者を新に吸收し得ることになる。しかし、それを此際斷行するとせば、銀行會社の株主收入は激減するに至る。そこで、それはソツト放つておいて、その代りに、多大の失業と不景氣とを伴ふ中央及地方財政の事業中止、又は繰延を斷行し、且つ、一般國民大衆に節約宣傳を行はんとしてゐるのである。

第二に、平價金解禁は、此際、金融業者、貨幣資本家、債權者等に爲替相場の値上りで一割五分、及び利子の騰貴で少からぬ利益を約束するが、それだけ、勞働者、農民、產業資本家は打擊を受ける。しかし、產業資本家はその打擊を、間もなく、勞働者及農民に出來るだけ轉嫁すること已述の如くであるから、結局、一番多きな負擔を最後まで荷はされるものは勞働者と農民と云ふことになる。

第三に、以上第一及第二の政策は、その過程に於て、財界に少からぬ摩擦を起し、ために、所謂不景氣を累加する。その最大の負擔も亦結局勞働者及農民に轉嫁せられる。

斯樣なわけで、いま、濱口内閣の採りつゝある緊縮及金解禁政策は要するに、日本現下の破滅的經濟狀態を再安定せしめんとする努力に外ならないが、その日本資本主義再安定に不可避の犧牲は、その大部分を勞働階級（及び農民）の負擔に於て之を斷行せんとするものである。尤も、政府は勞働階級の犧牲を緩和するの名に於て、失業救濟策を講じつゝある。しかし、その失業對策は、要するに千人の失業者を放り出しながら、精々その中の四五十人に、不慣れにして過勞な仕事を與へんとする、、のもの以上に出でない。

之に對し、勞働階級は、如何にせば、斯かる、、、なる犧牲の負擔を拒否し得べきか。解雇反對、賃銀引下反對、十分なる失業救濟の要求等々の要求を眞正面から押して行くのも一法である。しかし、資本

主義經濟の仕組を更改し得ざる限り、事業利益の喪失せる場合に、斯かる要求は到底貫徹すべき性質のものでない。思ふに、此際勞働階級が、以上の如き犧牲の負擔を免かれ得る唯一の効果的方法は、金解禁問題に對しては、ブルジョアー政黨の主張するが如き平價金解禁に反對し、農民大衆と共同して、平價切下げ金解禁を主張すべく、生産以上の消費を根絶するためには、濱口內閣の緊縮政策に反對して、銀行會社の蛸配當嚴禁、及び瀕死の銀行會社に對する政府の救濟、補助保護の撤廢を絶叫すべきである。若し、此の二大主張にして貫徹せば勞働階級に轉嫁せられる、叙上の如き理不盡なる犧牲の負擔は、その大部分を拒否し得ることになるのであらう。しかも、來る總選擧に於ては、此の二大スローガンに由つて、無産政黨がキャスチング・ボートを握り得る。希望は豐かに在るのである。(尙ほ、此際平價切下げ金解禁が如何なることを意味するかを略記すべきであるが、已に與へられた紙數を超過してゐるので、此の點については筆者の已に他の個所に於て詳叙せるものを參照してもらうことにして擱筆する。)

一般會計歲出を十億四千萬圓に減ずる具體案

石橋湛山

一

問題は我中央財政の歲出を三割減ずるには如何にしたらば良いかと云ふのである。私は先づ其削減の對照となる歲出を一般會計の歲出、そして其金額を昭和四年度豫算、即ち濱口內閣の新たに作つた實行豫算ではなく、今春議會を通過した豫算の約十七億七千萬圓とする。基本の歲出を斯うきめたのには、唯だ話しの便宜と云ふばかりでなく、理由がある。併しそれは、此短文には、大して必要もないことだから畧して置かう。

二

そこで十七億七千萬圓の一般會計歲出を三割引く、それは可能であらうか、何うか。十七億七千萬圓の三割は五億三千一百萬圓である。残りは僅かに十二億四千萬圓となる。多くの人は笑つて、それは大に希望はするが實行不可能だと云ふかも知れぬ。併し私は決して然う思はない。國民が其心持ちにさへなれば頗る易々たる事柄だと確信する。

三

而かも私は、其實行に、えらくむづかしい行政組織の改革だの、俸給法の改正だのを伴はせない。と云ふのは其等の改革改正を不必要とするからではない。私は其等の改革改正を多年切望し、常に自分でも考へ、他の意見も機會ある每に尋ねてゐるのであるが、未だに之ならと云ふ自信ある案を得ない。改革のプリンシプルだけは立つてゐるのだが、其プリンシプルを具體化する方法が見出せぬのである。故に私は之を玆に要求しない。自分に具體案のなきものを、抽象的に他に

求するは、私の道義心の許さぬ所だからである。

四

又私は、先頃濱口內閣が昭和四年度實行豫算の編成で示した如く、事業の單なる繰延べと、目先きの歳出の數字を減じ、以て整理緊縮成れりと誇示するような胡麻化しもしない。事業そのものを整理せず、唯だ其實行期を一年二年延期したからが何にもならぬ。從來我國で財政整理と呼ばれたのは、多くは之であつたから、直ぐ元に戻つてしまつたのである。

五

又私は中央政府の歳出減少の爲め、失業者を生ぜしむる如き馬鹿な案も立てない。それ所か、私の案に依れば、事業は大に興り、經濟界は好景氣に見舞はれ、失業者は減ずるであらう。

六

大體以上の如き方針で、十七億七千萬圓の一般會計歳出から五億三千萬圓乃至それ以上を減少しようとする。そして私は次ぎの案を得るのである。

陸海軍費の減少…………一〇、〇〇〇、〇〇〇圓
補助費獎勵費及之に類する支出の減少…………二〇〇、〇〇〇、〇〇〇
大學圖書館學校費の減少…………三二、〇〇〇、〇〇〇
帝都復興及震災復舊費の自然消滅…一二〇、〇〇〇、〇〇〇
郵便電信電話事業の特別會計移轉…二〇七、〇〇〇、〇〇〇
森林事業の特別會計移轉…………二四、〇〇〇、〇〇〇
合計…………七三三、〇〇〇、〇〇〇

即ち之に依ると一般會計歳出は五億三千萬圓どころか、七億三千百萬圓を減じて、十億四千萬圓に下るのである。以下各項目に就て、簡單に説明しよう。

七

陸海軍費は、昭和四年度豫算に依れば五億四百萬圓である。總歳出の約二八%半に當る。私は此三割の一億五千萬圓を減じようと云ふのである。之は我國內外の事情を正視すれば、勿論不當の要求でなく、不可能の事ではない。先日獨逸からグラーフ・ツェッペリン號が飛んで來て、我國人は皆かの國民の戰後の科學的産業的復興の目覺しさに驚嘆した。其獨逸の陸海軍費は、戰前には當時の安い物價で尙ほ年々五億圓を要した。然るに今はヴェルサイユ條約のお蔭で、それが三億五千萬圓に減つた。(我陸海軍費も三割減すると恰度三億五千萬圓になる。)獨逸が戰後の非常な難局に當つて、尙ほ善く科學的産業的發展に世界を驚嘆せしめつゝある原因の一に是に在る。我國民の深く味ふべ

き教訓であらう。

八

問題の普通教育費國庫負擔七千五百萬圓をはじめとして、治水の、港灣の、道路の、拓植の、何の彼のと、中央財政から地方に支給せらるゝ補助費、奬勵費、乃至之に類する經費は著しい額に上る。昭和四年度豫算で、ざつと計算して見ても、帝都復興費を除いて二億六千三百萬圓に達する。私は、之は我地方自治體に乞食根性を養成し、中央地方の政治を腐敗せしめ、不急の事業に浪費を奬勵する大禍因だと考へる。故に原則は其全部を削除したいのであるが、併し中には、例へば府縣廳費の一部の如き、實は中央政府の出張所費に外ならぬものもあり、或は全く必要有効の補助奬勵費も多少はあり得るものと認めて六千三百萬圓だけを殘し、他の二億圓を削つたのである。

或は斯くしたらば、地方は早速小學校費の支辨に苦み、乃至治水も港灣修築も、上水下水の改良も出來ず、困りはせぬかとの疑問が起らうが、左樣な事は斷じて無い。後に示す如く私は、中央の歳出を斯く減じて得たる其財源を以て、地租を市町村に委讓し、營業税乃至砂糖織物等の消費税を廢止し、公債券入金及剩餘金繰入を全然不必要ならしむる。故に地方は、委讓せられたる地租を適當に處理することに依つて、先づ十分教育費等を支辨し得る。

又港灣、上水の如き收入ある事業に就ては、詳細は茲に述ぶる餘裕をもたぬが、私は現在の窮屈にして官僚式なる公營事業の制度を改め民間事業と等しく、資本を廣く集めてビズネスライクに經營する仕組みを作りたいと思つてゐる。而して其資本は、中央政府の減税、公債の廢止等に依つて民間に浮いてゐる筈である。各地方選出の代議士の袖にすがり、中央政府の御機嫌を取り取り、補助金を引張り出さねば仕事の出來ぬ馬鹿々々しき現況に比し、地方は遙かに容易に事業を起し得ること、私の責任を以て保證する所である。

九

官立大學學校圖書館等に支出する金額は、昭和四年度豫算に依ると四千二百萬圓以上に達する。既に私立學校が相當の經營をなし得るに至つた今日、私は官立學校の必要はないと信ずる。が唯だ理工醫等の特別の研究設備は、我國の位地として、此上とも大に完備せしめたいと思ふから、其費用として一千萬圓を保留し（之を何う使用するかに就ては、考案あれども茲に述ぶる餘裕がない）他の三千二百萬圓を削除する。そして官立學校は全廢する。現在の官立學校の設備は、一部は右理工醫等の特別の研究機關に改め、大部分は然るべき經營者に讓與し又は賣却する。

一〇

帝都復興費及震災復舊費は、申すまでもなく關東大震災の爲めの

時的費用である。而して其大部分に昭和四年度限り支出濟みになる筈である。震災復舊費（主とし諸官廳、官立學校等の復舊費）の方は五年度以後にも若干繼續するが、之も陸海軍費を三割減じ、官立學校を廢止する等に伴つて、大分整理せらるゝであらう。若し殘つた所が、極く僅かの金額で宜しい。

二

我國の官營事業は、鐵道をはじめ、殆ど總てが特別會計になつてゐるが、不思議と郵便電話事業と、森林事業だけは一般會計中に殘つてゐる。此爲め電話の如き、馬鹿々々しい不便を國民に與へ、財政上にも、いろ／＼の障碍を持ち來す。故に私は、此二つの事業を、一般會計から除いて、獨立の特別會計に移す。そしてビズネスライクに此兩事業を經營せしめたいと思ふ。然らば一般會計は玆に亦二億三千一百萬圓の歳出を減少する。但し此減少は、同時に此金額に相應する兩事業からの歳入をも一般會計から除かねばならぬから、歳出だけの純粹の削減とは異ることは申すまでもない。

三

以上に依り一般會計歳出は七億三千三百萬圓を減ずる。此中、郵便電信電話事業及森林事業に關する分は除いて、歳……
五億二百萬圓で……

次ぎの如く使用する。數字は何れも昭和四年度豫算を基としたものである。

公債募集の廢止	九一、〇〇〇、〇〇〇
前年度剩餘金繰入の廢止	七六、六五二、〇〇〇
地租の市町村委讓	六三、六二〇、〇〇〇
營業收益税の廢止	五三、七八六、〇〇〇
淸涼飮料税の廢止	四、〇〇八、〇〇〇
砂糖消費税の廢止	八二、七九七、〇〇〇
織物消費税の廢止	三九、八七九、〇〇〇
合計	四一一、七四二、〇〇〇

之で健全なる財政の第一の原則たる借金（公債募集）と前年度剩餘金繰入の全廢が行はれ而して中央政府の租税は所得税、資本利子、相續税（以上所得及資産に關する税）、鑛業税、兌換銀行券發行税、取引所税（以上特權に關する税）酒税、煙草專賣局益金（つまり煙草の消費税）、關税、噸税、印紙收入を殘すのみに整理せらるゝ。之だけの事が出來たら、先づ／＼差當つて滿足すべきであらう。

三

併し以上では……

資金があり過ぎて困る恰好である。併し第一の九千餘萬圓の中には電は、郵便電信電話事業の利益四千二百萬圓、森林事業の利益二千二百萬圓が含まれてをるのであるから、其郵便電信電話の四千二百萬圓は同特別會計（私の案に依り新たに設けられる所の）に戻すことにしよう。然れば同特別會計は現に昭和四年度豫算に掲げられてある金類と合せ年々約一億圓の改良擴張乃至從業員優遇財源を得、電話不足の如きは、數年ならずして昔の夢物語とならう。がそれでも尙ほ九千萬圓に對して四千八百萬圓剩る。私は、それは、關稅の輕減、就中食料品及日常必要品の輸入稅の撤廢に用ゐたい。又剩餘金繰入の廢止で浮く七千六百餘萬圓は、一年度限りの財源であるから、直ちに之を公債償還に充てる。

一四

斯くの如く大整理を行つても、尙ほ我中央財政の歳入は、年々二三千萬圓の自然增收を見込むことが出來よう。之は將來の新規事業の財源に充てられる。軍備は出來るだけ縮少し、學校は私營に委し、補助費獎勵費を原則として絕對に出さぬ、斯う云ふ方針で財政が處理せらるゝ限り、中央政府の新規事業なるものは、年々二、三千萬圓もあつたら十分である。

其他地租の市町村委讓に就きても、述べたき事は澤山あるが、既に與へられたる頁も盡きた樣子だから、一先づ之で止めて置かう。

緊縮節約額の用途と其の是非

——政府の惱む現下の三大問題——

前田繁一

一 不可能な聲明から自縄自縛の惱み

財政の緊縮と金解禁をモットーとして奮鬪努力しつゝある現內閣が最近三つの大きな惱みに逢着して居る。其の何れもが徹底的緊縮を遂行せんが爲の惱みである。其の一つは財政の整理緊縮と財界整理に伴つて續出すべき失業の對策であり、一つは多年民政黨が主張し來つた義務教育費國庫負擔增額であり、今一つは減稅の問題である。明年度豫算は更に一層の緊縮を行ふ旨を約し、新規事業は一切之れを計上しないと聲明した現內閣が、新規事業の一切中止に何時の間に除外例を設けたのやら、失業の防止と救濟の爲には新規事業も之れを行ふとも何とも云はずに、着々社會政策審議會をして失業對策の起業やら起設を要する事は先刻承知の筈であり、如何に消費節約が必要だからと云つて、生產的消費まで抑制すれば國內產業を萎縮減退せしめ、供給減退から物價の低落を阻害し、國際貸借の上にも惡影響の生來すべきは百も承知の筈である。之れをしも知らざるかの如くに「新規事業は一切計上せず」と聲明した所謂のものは、要するに放漫無謀な政友會內閣とは全然反對であると云ふ事を、國民の頭にハッキリゑがいて緊縮政策の遂行を容易ならしめんが爲の聲明であり、此の聲明を爲せるが爲に起つた矛盾であり惱みである。然し兎も角も失業對策の必要を認めて着々立案しつゝある以上、之れは此所に問題外として詳かに今後の經過を待つべきであろう。然らば殘る問題は義務教育費の問題と減稅の問題である。

債やらの計畫を樹てさせて居る。

千七百萬圓の節約を行つた。更に明年度豫算は一層の節約を爲す筈である。然して此の節約に依つて得た餘裕を以つて、本年度の公債發行額を減じ、明年度は一般會計に於て（發行豫定額は九千餘萬圓）全然公債を發行しない。借金しなくてもやつて行ける樣にする。特別會計に於ては豫定額の半分に減らし、一般會計と各特別會計を合して二億圓を豫定されて居る明年度の公債發行を、四分の一に減らして五千五六百萬圓に止める。さうすれば一方に於て八千五六百萬圓の減債資金に依つて國債が償還され行くのであるから、少く共明年度には三千萬圓の國債が減る。濱口内閣が續く限り、忠實に此の約束は實行して行くと現内閣は聲明して居る。而して本年度は既に實行したのである。

此の本年度の公債發行額の減少に對して、一部に於ては『國債を多額に背負い込んで居る銀行の救濟だ。金融業者ばかり救濟するのは怪しからぬ。宜しく減稅に振り向けろ』と云ふ議論も起つた。然し此の議論は明年度の節約額に對してなれば兎も角、本年度に實行せよと云ふのは無理な注文である。何となれば年度半ばにして思ひ切つた整理が出來ず、財政を緊縮したからと云つて唯借金する額を減らし得るだけで、手元には一文の金も浮いて來ないからである。若し強いて論者の云ふ如く減稅し得るとしても、結局借金して減稅に充當すると云ふ結果になる。

今更說くまでもなく我が國の財政は、歐洲戰後財界不況が續くにつれて歲入が年々著るしく減少するばかり、大正十一年に二十億八千萬圓もあつた歲入が今日では國債を除いては十六億八千萬圓よりないと云ふ有樣、にも拘らず歲出は年に激增する一方、二十億八千萬圓も收入のあつた大正十一年すら歲出を十四億圓に止めたものを、十六億八千萬圓より收入のない今日に、借金してまでも十七億七千萬圓を使ふと云ふ有樣である。從つて國の借金は年一年激增し、大正十一年に四十億圓だつた國債が今日では約六十億圓に達せんとする有樣であつて利拂のみに一ヶ年約三億圓の金を要するのである。殊に所謂新規公債の發行を一億五千萬圓にしたとか二億圓で止めたとか云ひながら、現に昨年の如きは僅か一ヶ年の間に約四億圓も國債が殖へたのである。之れは所謂新規發行額と稱するもの以外に、それ銀行の救濟だ、やれ鐵道の買收だと云つて、政黨其の他の關係で公債證書を交付するからである。斯くの如く國にしろ地方にしろ歲入が激減して居るのであるから、之れに伴つて經費を整理減少するのが當然であり、借金せずにやつて行ける樣にする必要のある事は云ふまでもない、更に進んでは現在の借金をも漸次償還し、減少して行かねばならないのである。さうして現在眞に利拂ひに使用しつゝある三億圓の金を、生產的方面に使用し得る樣にせねばならない。政府が國債の減少に努むる所以である。

三　國民負擔の現狀と減稅論

所が玆に明年度の豫算編成に際して、『財政の緊縮節約、國債の整理

減少又結構、然し多年國民に公約し來つた事も此の際是非やらねばならぬ』と云ふ議論が內輪の民政黨から起つて來た。即ち義務教育費の國庫負擔增額論がそれであり、營業收益稅、織物消費稅その他の整理輕減論がそれである。然うして一般國民に於ても又減稅要望の聲が漸次高まりつゝある。財源はなし、公約した新規公債發行の減廢だけのためにも本年度以上に緊縮を要する矢先、斯うした注文が飛び出したのだから政府が惱む譯だ。然し政府は多年國民をして負擔の重加に苦るしめ來つた事を顧みて、明年度豫算の編成に際しては是非共減稅せねばならぬ義務があると云ふものだ。何となれば前述の樣に二十億八千萬圓も收入のあつた時ですら十四億二千萬圓に支出を止めたものを其の後收入が激減し來つたに拘らず逆に支出を年々增加し來り、國債を增發して其の不足を補ふのみならず國民の負擔を年々重加し、國民をして負擔の重加に苦るしませつゝも財政の整理節約を意圖する所がなかつたからである。即ち國民一人當りの稅金額を見るに、財界が好況の絕頂で國民の收入が多かつた大正八年でさへ國稅が十一圓餘であり地方が六圓餘であつたのに、其の後不景氣で國民の所得が年に減つて行くのに逆行して稅金の額を年々重加するばかり、不景氣のドン底として苦るしみ拔く今日は國稅が十五圓三四十錢、地方稅が十一圓三十錢、即ち大正八年に比して國稅が四圓、地方稅が五圓も加重されて居るのである。斯くの如く政府の

と同時に、減稅を斷行して國民の負擔を輕減し、以つて多年放漫にやり來つた罪を謝すべきであらう。此の減稅を行ふが爲には軍備も徹底的に整理すべきであり、不急の事業は廢すべきである。明年度豫算は本年度豫算と違つて新に編成するのであるから、志此所に在れは必ず行ひ得るのである。

四　義務教育費國庫負擔增額の是非

然らば殘る義務教育費國庫負擔增額の問題はどうであるか、增額論者は之れも國民の負擔輕減になるんだと云ふ。即ち國庫負擔を增額すればそれだけ地方財政に餘裕が出來る。其の餘裕を以て地方稅の輕減に充てさせると云ふのである。然し事實はさう行かぬ事が多い。よし其の增額しただけ地方稅の輕減に充當させるとして、地方に於て其の增額だけに甘んじて教育費の膨張を抑制し得るものでなく、何等か別の形式で教育費を益々膨張せしめて行く事は從來の歷史が最も雄辯に之れを語つてゐる。

元來義務教育費を國庫で負擔するやうになつたのは大正七年からである（尤も義務教育の本質から國庫が全部又は一部を負擔すべきであるとの論は早くから行はれ、明治六年から小學補助金と稱して年々二十萬圓乃至七十萬圓を補助し、

補助する計畫を樹てたが財政の都合で成らず、一千萬圓だけ國庫が負擔すると云ふ事になつたのである。それを大正十三年に四千萬圓に增額されたのである。然るに其後義務教育の普及に伴つて教育費は益々增加するし、地方の財政は益々苦るしくなつたので市町村や教育會で盛に國庫負擔額の增加を運動して政黨を動かし、爲に此の問題が漸次政治問題化し、大正十四年には政友會は地租委讓によつて地方財政の苦境を救ひ、それに依つて生ずる餘裕を以て地方に應じた教育施設を爲さしめんとし、憲政會は義務教育費の國庫負擔增額と地租一分減を提唱し、政友本黨は義務教育費の國庫負擔增額一本槍で進むと云ふ樣に、各政黨が競つて教育改革新案なるものを發表したのである。さうして大正十五年度に若槻內閣が地租の一分減と義務教育費國庫負擔二千萬圓增額の案を議會に提出したに對して、政友會は地租委讓案を主張して讓らず、政友本黨は四千萬圓の國庫負擔增額を以て進み、結局政府と政友本黨が妥協して地租一分減を中止し、義務教育費國庫負擔額を三千萬圓增加したのである。

斯くして義務教育費國庫負擔額が增加された事に因つてそれだけ地方財政が樂になつたか、地方民の負擔がそれだけ輕減されたかと云ふと、一向負擔は輕減せられないのみか地方の教育費は益々增大して地方財政はより一層苦るしさを增して居るのである。卽ち國庫負擔額を少しも增加しなかつた大正十四年度に於ては、教育費に使ふ爲に發行した地方債が八百萬圓ですんだのに、三千萬圓も國庫負擔を增額した翌十五年度には三千二百萬圓も教育費の爲の地方債を發行して居り、其の又翌年の昭和二年度には更に三千五百萬圓も借金して教育費に充當して居るのである。斯くの如く國庫の負擔が殖へても少しも國民の負擔を減じやうとはせず、自己の財政狀態を忘れて分不相應な校舍を建てたり、增改築をしたりして益々借金を多くし、地方財政をして益々苦境に陷いれ、國民の負擔をして益々重からしむると云ふのが今日の地方財政の狀態である。從つて國庫負擔を增額すればする程地方の教育費が膨張し、地方財政狀態が苦るしくなつて行くと云ふ結果を來たして居るのである。斯くの如き狀態である以上、如何に義務教育費國庫負擔を增加したからと云つて、決して國民の負擔が輕減されるものでもなく、地方財政が樂になるものでもない。故に國に於ても地方に於ても、徹底的に財政を緊縮せねばならない。今日、何も苦るしんで義務教育費の國庫負擔を增加する必要はあるまい。若し國の財政を整理緊縮した結果、少しでも餘裕を生ずるに至つたならば、何を措いても國債整理減少と相並んで減稅すべきである。然して國民の負擔を減ずべきである。若し百歩讓つて假りに義務教育費の國庫負擔額を增加する必要があるとしても、先づ地方各當局者として各自の財政を徹底的に整理緊縮せしめ、健全なる財政計畫も樹ち健全なる方針の下に教育その他の施設を行ふと云ふ實績を見た上で、始めて增額すると云ふのが至當であらう。

最新刊

經濟小言

武藤山治著

政界に實業界に快腕を揮ひつゝある武藤山治氏が、其の主張する立場に立つて、婦女子にも解かるやうに、經濟に關する必要な知識を平易に通俗に解説したもので、國民必讀の經濟讀本である。

【内容】（一）經濟とはどう言ふものであるか。（二）贅澤は善いことか、惡いことか。（三）儉約に就てはどう考へて良いか。（四）富とはどう解してよいか。（五）資本とはどう解してよいか。（六）資本主義制度と社會主義制度とどちらがよいか。（七）金解禁とはどう言ふことであるか。（八）社會問題を解決するものは經濟學ではなく人間の心の改造である。（以上）

菊判
定價八拾錢
送料十四錢

市町村法律必携

奈良正路著

三六判
定價参圓
送料廿二錢

最

現行法令に對し無産者は如何なる態度を採るべきか？著者奈良氏は

發行所 東京芝區愛宕下町 改造社

マルクス・エンゲルス全集

第十一回配本
十月初旬

第十三卷＝主なる内容

サボア・ニースとライン（**エンゲルス**）戰役雜記（**エンゲルス**）新ドイツ國家建設の際に於ける强力と經濟（**エンゲルス**）ドイツ社會民主黨綱領草案批判（**エンゲルス**）ロシア帝政下の外交政策（**エンゲルス**）マルクス對プレンタノ（**エンゲルス**）ドイツに

既刊配本濟

第一回	第一卷	學位論文以下二十數篇
第二回	第十二卷	反デューリング論以下二十篇
第三回	第四卷	ドイツに於ける共産黨の諸要求以下卅篇
第四回	第五卷	革命反革命以下四篇
第五回	第六卷	東方問題以下六篇
第六回	第二卷	經濟學批判大綱以下四十篇
第七回	第七卷	經濟學批判以下十篇

東京芝區愛宕下町 改造社

世界大衆文學全集

第二十回配本（十月）二册

ヤン・ヘイ著◆櫻井忠溫譯（各册五拾錢）

前線十萬

歐洲大戰後絶對的名聲を贏得した「前線十萬」は、キッチナア第一軍の赤裸々な従軍記である。毒瓦斯とタンクの壯烈慘憺な大戰線を背景に、蘇國から狩り集めたゴロツキ連中を僅日で軍人に担ち上げる苦心や、キングも國も頭にない勞働者が祖國の爲に立派な愛國者となる徑路や、塹壕戰と其生活等が、躍如として宛も戰線にあるが如く描出され、學出のハニカミ屋の少尉が威嚴を損じまいとする將校振りや、煙術に悩つたやうな老將校と無邪氣な若い少尉達の日常生活等が經となり緯となつて特異なユーモアを織出してゐる。これ程面白い激情的な文學は又と他にあらう筈がない。殊に吾陸戰文學の泰斗櫻井忠溫氏の精到、敏感、勇勁な筆力が限りない光彩を與へてゐる無二の靈篇である。

ベルネエ、ド、ブノア著◆高橋邦太郎譯

海の義賊 ケエニクスマルク

海の義賊――時は千八百年代、サンマローを根城に出沒する海のパルチザンとも云ふべき私掠艦があつた。本篇は仁義の爲には身も戀も捨てて死地に雄飛する俠雄私掠艦長の數奇な運命的物語に終始してゐる。配するに豐艶なる女性、老猾な政治家、刺客、萬死恐れぬ海賊等を以てし、波瀾曲折多彩絢爛なる一大ロマンスが展開される。**ケエニクスマルク**――歐洲大戰の和媾ぜられし日、或勇士の墓前に額づいて、花を獻げ冥福を祈り、綿々たる戀慕の至情に泣く麗艶な佳人があつた。此勇士こそありし日はラウテンブルグ公國の宮廷に史學顧問として招聘された佛國青年である。渾身仁俠豪膽の彼は一度は内亂の公國を累卵より救つたが、歐洲大戰には祖國の爲に花々しく僵れたのである。ケエニクスマルクの祕密は如何に、佳人は何人なるか。高橋氏の麗筆はいやが上にも讀者を魅了してやまない。

發行所 東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

醫談女談

小酒井不木著

醫　談

◇「西洋醫談」は肩のこらない立派な英國醫學史である。「史」といふものもこんな風に書いたら甚だ面白くて爲になる。門外漢でも。

◇「趣味の醫學」、目次を見ると、ふざけてゐるやうであるが、紙面の底に博士の鋭い烱眼が、らんらんと光つてゐる。

不木全集第七卷
（第五回配本）

女　談

◇「女性の異常心理」これはまた甚だ辛辣だ。女の腦と心臟とが、八ツ裂きになつて俎上にのぼつてゐる。美女・醜女・獨身女・令夫人・伯爵夫人……なんとその心臟の色のとりどりよ！

◇「日常生活と變態心理」他人ごとと思つてはいけない。各自の持つてゐる心の解剖だ。讀後再考すれば込み上げて來る微苦笑、イヤ大苦笑だ。

四六版總布裝
五百餘頁
卷頭口繪添付
目下配本中

目次（一部）

發行所　東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二

予約募集

ゴーリキイ全集



本全集の特長

原本 は露國國立出版所刊行の全集だ。權威者による嚴正な増補校訂を經たもので、帝政時代の出版とは内容が大いに違ふ。（坊間行はるる舊版英獨譯よりの重譯などとは勿論雲泥の差）

譯者 は何れも斯界の權威揃ひ。而かも長篇短篇戯曲隨筆、年代の新舊によりて夫々適任者に依囑し各其得意の譯筆を揮ふ。譯文の正確明快流麗なる言を俟たない。

内容 は原稿用紙九百枚乃至千二百枚を一冊とし、新造八ポイント活字二段組で、他の類本の殆んど二倍を收錄す。ゴーリキイの全作を網羅せるは本全集のみ。

裝幀 は高雅、印刷は鮮明、製本は堅牢、永く書齋の飾とするに足る。

第一回配本 開始

長岡義夫譯（長篇）

母

大好評裡に目下配本中

ゴーリキイ全集飜譯擔當

巻	内容	譯者
1	短篇集	中村白葉
2	短篇集	袋一平
3	短篇集	岡澤秀虎
4	長篇	昇曙夢
5	長篇	原久一郎
6	長篇	山内封介
7	長篇	長岡義夫
8	長篇 戯曲	河村雅 昇曙夢
9	長篇	黒田辰男
10	長篇 戯曲	村田春海
11	長篇 隨筆	湯淺芳子
12	長篇	高野孤[illegible]
13	短篇集	金田常三郎
14	短篇集	高橋晩成
15	戯曲集	熊澤復六
16	戯曲集	八住利雄
17	短篇 回想錄	藏原惟人
18	短篇集	外村史郎
19	長篇	米川正夫
20	短篇 回想 隨筆	石田喜與司
21,22	長篇	黒田乙吉
23	長篇	井田孝平
24	[illegible]	[illegible]

第二回配本（目下印刷中）

第十九巻

アルタモーノフ一家

（米川正夫譯）

（附）ゴーリキイ評傳（昇曙夢）

革命後はじめて翁が大作家として全力量を示した長篇で、發賣と同時に忽ち五萬部を賣り盡した傑作である。農民より出て大工場主となつたアルタモーノフ一家の、祖父より孫に到る三代の歷史を經とし、農奴解放より最近の大革命に跨る五十年間のロシヤ社會の變遷動搖を緯とした雄大な構想、晩年に至つて更に洗錬された簡潔な表現――數多き翁の長篇中最も優れた藝術品である。附錄の評傳は昇曙夢氏の筆になりゴーリキイの全生涯と全作品と[illegible]

全二十四巻

一冊壹圓廿錢

〆切十月五日

内容見本進呈

改造社



犯罪小說

殺された天一坊

濱尾四郎

一

あれ程迄世間を騷がせた天一坊も、とうとうお處刑となつて、獄門に梟けられてしまひました。あの男の髏は亡びてもあの惡名はいつ迄もいつ迄も永く傳へられる事でございませう。世にも稀な大惡人、天下を騙し取らうとした大かたり、こんな恐ろしい名が、きつとあの男に永く永くつき纒ふに違ひございませぬ。

私のやうなふつゝか者が廻らぬ筆をとりましたのもその事を考へましたからでございます。私からはつきりと申しますれば、あの男こそ世にも愚かな若人なのでございます。けれども決して大惡人ではございませんでした。

あゝした不思議な運命に生みつけられた人間はおとなしく此の有難い御治世の、どこかの片隅にちッと暮して行けばよかつたのでございませう。

天一坊は此の世の中といふものゝほんとうの恐ろしさを知らなかつたのでございます。眞實の事實を有りの儘に申す事、もつとむづかしく申せば眞實と信じた事をはつきりと申すことが、此の世の中でどんなに恐ろしい結果を招くかといふ事をあの男は存じませんでした。だからあの男は愚者でございます。世にも稀な馬鹿者でございます。

それに、自分の正しく希望してよい事を、はつきりと希望した、といふのもあの男の考へが至らぬ所でございました。此の世の中は法といふものばかりでは治められぬ、いゝえ、時によつては法といふものさへも噓をつくといふ事を知らなかつたのでございませう。

あの男は氣の毒な愚かな、しかし美しい若人でございました。

でも、奉行樣が、あの御奉行樣でなかつたなら、天一坊の運命は他の道を辿つたかも知れないのでございます。あの男があの御奉行樣に裁かれなければならなかつたのは、取り返しのつかない悲しい事だつ

たに相異ございませぬ。

から申したからと云つて、私は決して御奉行樣のことを惡く申上げるのではございませぬ。御奉行樣は御奉行樣としてほんとに云ひ知れぬ程の御苦勞をなさつたのでございます。永く御奉行樣を存じ上げて居ります私は、御奉行樣がほんとうに御自分の御役目の大切な所をはつきり攫まうとなさつたのは、實に天一坊の御裁きの時だつた、とさへ信じたいのでございます。それ程迄に御苦勞なさいましたのでございますもの、御奉行樣の事を惡く考へられやう筈はございませぬ。

私は、御奉行樣が天一坊を御調べになつていらつしやいました頃、はじめて奉行といふ御役目がどんなに大切なものかをはつきり知つたのでございます。と同時に奉行といふ御役目の爲に、どんな悲しい事をも冒さなければならないか、といふ事を知つたわけなのでございました。

御奉行樣はあの一件の爲にどれ程お窶れなさつた事でございませう。皆之天下の御爲なのでございます。今思ひましても難有い極みでございます。

一體、御奉行樣と申す御方は、御聰明な、果斷な、さうして自分を信じる事の大變に御强い御方なのでございます。此の御明智や御偉さは、私が御奉行樣を存じ上げました頃から今に至るまで少しも御變りにはなりませぬ。

けれども、奉行といふ御役目で御出會ひになるいろいろの事件の爲に、その御考へのもち方は、今まで可なり御變りになつたやうに存ぜられるのでございます。

二

初め私が御奉行樣を存じ上げました頃は、只今も申上げました通りほんとうに御利發で御聰明である上に、御自分といふものを御信じになることが大層御强くいらつしやいました。

あの頃の御奉行樣の御裁きと申すものは、どれもがほんとうにてきぱきとして、胸のすくやうなもの許りでございました。さうして、御奉行樣の御名は日に日に、旭のやうに上り、それと並んでずんずんと御出世もなされたのでございました。

「自分のする事は間違ひはないのだ。自分のする事は凡て正しいのだ」

斯ういふ心持が常に働いて居たため、あゝした華やかな御裁きがお出來になつたのだと存じます。

貴方樣方も御承知の事でございませうが、一人の子供を二人の母親がお爭ひました時に、御奉行樣が御執りになつた御裁きなどは誰もが皆感心致したものでございました。

「眞實の母親なればこそ、子供が泣いた時に手を放したのだ。それもかまはず引ずるのは眞の母ではない。僞者めが」

斯う仰言つて、さつと御座をお立ち遊ばした時のあの御姿の神々しさ、私などはほんとうに難有涙にくれたものでございました。多く

の方々もあつと云つて感服致したものでございます。たゞ私はあの時、敗けて偽者めと仰言られた女が、大勢の人々に罵られながら立つて行く有様を見て何となく氣の毒に思つた事でございました。

御承知でもございませうが、日本橋邊の或る大きな質屋が、自分の地内に大きな藏を建てまして隣家の小さな家に全く日の光が當らないやうに致しました時、隣家から訴へ出ました際のあの名高い御立派な御裁き振もやはりあの頃の事でございました。

神田お玉が池の古金買八郎兵衞の家の糠味噌桶の中から、五十兩の金子を盗み出しました男を、その振舞から即座に御見出しになりました時などは、ほんとうに江戸中の大評判となりましたものでございます。

失禮な申上げ方でございますが、御奉行樣にとりましては、全くあの頃が一番御幸福だつたのではなかつたかと存ぜられます。勿論あれから後益々御奉行樣は御出世遊ばし、その御名は日に日に高くはなつて參りましたけれども、私考へますには何と申しても、あの頃が、御奉行樣にとつては一番おしあはせな時代だつたのでございます。何故ならば先程も申上げました通り、御奉行樣はどんな事に臨んでも少しも御困りになる事なく御立派に裁きを遊ばし、又その御自分のなさつた御裁きを後から御考へになる事をも喜んでおいでになつたやうでございましたから。

毎日のやうに行はれる名裁判を毎日江戸の人々が囃し立てるのでございます。御奉行樣の御耳にも其の評判がはいらぬわけはございませぬ。はいれば御奉行樣だとて惡い氣もちはなさらなかつたに相違ございませぬ。思ひ出しますのは、あの頃の御奉行樣の明るい愉快さうなお顔でございます。

けれども斯うした時代はいつの間にか次の時代に移つてまゐつたのでございます。私の申しますのは御奉行樣の御名聲の事ではございませぬ。御名聲はさき程も申上げました通り旭のやうにます／＼上る一方でございました。

三

私がはじめて御奉行樣の晴やかな御顔に、暗い影を見出しましたのは或る春の夕暮でございました。御役目が濟みましてから御邸にお歸りになりました時、いつになく暗い御顔をなされ御機嫌もよろしくございませぬ。餘りに公事が多すぎる爲の御疲れかと存じて居りましたのですが、其の夜はおそくまで御寢になりませんで御一人で何か御考へになつておいで遊ばしたのでございます。

その翌日も同じやうに御出ましにはなりましたけれども御歸りの時には矢張り御氣分が御すぐれになりませぬ。其の夜私は或る人から妙なお話を承りましたのでございました。

何でも二三日前に深川邊の或る川へ女が身投を致してその水死體がどこかの橋の下に流れついたのださうでございます。御役向の方々がお調べになりますと、懷にぬれぬやうにしつかと包んだ物がある、

出して見ますと之がつまり其の女の遺書なのでございます。遺書には次のやうな氣持が書かれてあつたさうでございます。

「私は橋本さきと申す、誰もかまひつけてくれない哀れな女でございます。昨年の春、自分の腹を痛めた、愛しい／＼子を取り返したい爲に御奉行様の前に出ました女でございます。あの時、我子を無理に引張つて勝つたゝめ僞り者めかたり奴と御奉行様に罵られて御返し申す言葉もなく歸りました女でございます。私が何故あの時まで自分の子を手許におかなかつたかと申す事はあの節申上げました通りでございますから今更申述べません。たゞ何故私が死ぬ覺悟を致しましたかを申上げます。あの時の公事は私がほんとの母であつたにも不拘、私の負となりました。私はその愚痴は申しませぬ。たゞあれから後の事を申上げたいのでございます。私はたゞ我子を取り戻せなかつたゞけの筈でございます。御奉行様はきつとさう御考へになつておいでゝございませう。けれども世の中といふ所はほんとうに恐ろしい所でございます。私は我子を取り戻す望みを失ふと同時に江戸中の人々から言葉もかけられぬ身の上とならなければなりませんでした。あの公事に敗れた私は、あの子の母親だと人々に信じられなかつたのみか、お上を騙る大嘘つきといふ事に極められてしまひました。今迄私の味方になつて居てくれた親類の者共が交き合を斷つてしまひます。家主は私を追ひ出します。私は此の世の中にたつた一人になつて、而も惡名を背負つてさまよひ歩かなければならなくなりました。何處に參りましても使つて呉れる人もございませぬ。仕事を與へて呉れる人は更にございませぬ。斯うやつて恥かしい乞食のやうな思ひをして私は一年の間江戸中を野良犬のやうに歩き廻りました。今から思へばあの時お白洲で「僞者め、騙りめ」と仰言つた御奉行様のあのお聲が江戸中の人々の口からこだまして響いて來るのでございます。私はもう野良犬の様な生き方さへも出來なくなりました。雨露を凌ぐ軒の端からさへも追ひ拂はれます。どうして生きて居られませう。私は死にます。死んで此の苦しみから逃れます。唯、死ぬ前にたつた一言、

「私は騙りではない、眞實の母だ。騙りと云はれたのは奉行様なのだ」と申しておきたいのでございます。私が敗公事になりました事に就いては愚痴を申しますまい。けれど御奉行様に一ことお恨みを申上げておきます。あの時、御奉行様は何と仰言いましたか「斯くなる上は其の方達兩名で中の子を引張るより外裁きのつけ方はあるまい。首尾よく引き勝つた者に其の子を渡すぞ」と仰せられたではございませんか。私は唯あの御一言を信じたのでございます。お上に僞りは有る筈のものではない。此處で此の子を放したが最後、もう決して此の子は自分の手に戻つては來ないのだ。斯う堅く信じた私は石に嚙りついても子を引張らねばならぬと思つたのでございます。あの子が痛みに堪え難て泣き出した時私ももとより泣きたかつたのでございます。けれども一時の痛みが何でございま

せう、私が手を放せばあの子は未來永劫私の許には參らないのでございます。御奉行樣は御自分で御命じになつた言葉が一人の母親にどれだけの決心をさせたか御承知がないのでございます。之だけが申上げたかつたのでございます。僞つたのは私ではございませぬ。御奉行樣でございます。天下の御法でございます」

大膽不敵の樣なものでございましたらう。私も始めて御奉行樣の御顔色の並ならぬ理由を存じたやうに思ひました。

けれども御奉行樣がずつと陰氣におなり遊ばすやうになりましたのは、未だ此の事のあつた頃ではございませんでした。その年の冬からでございます。あなた樣方も御承知の通り村井堪作といふ極惡人がお處刑になつた事がございます。あの村井といふ罪人は隨分色々な惡事を働いた者ださうでございますが御奉行樣御自身でお調べ中、飛んでもない罪を白狀致したのでございました。

あれは何年頃でございましたでせうか、四谷邊で或る後家が殺された事がございます。お上で色々とお調べの末色戀の果の出來事と申す事になり、後家が生前懇ろにして居たらしい男をお搜しになつた事がございました。その時の御奉行樣の御明智には一同皆恐れ入りましたものでございます。あの時、疑ひのかゝつた男數人（其の中に只今申した村井堪作も居りましたのでございますが）をお白洲にお呼び出しになり、一方御奉行樣は殺された後家の處に永く飼はれて居りました猫を人に持たせて御出になりました。役人が猫を放しますと猫はするすると煙草屋彦兵衞といふ者の所にまゐり直ぐその膝の上にのつてしまひました。恐れ入つたものでございます。後家の家に飼はれて居りました猫は平生しげ〳〵出入をする男だけを見おぼえて居りまして無心に罪人を指してしまつたのでございました。

之をぢつと御覽になつて居られた御奉行樣は直に彦兵衞をお捕へさせになり種々とお糾しになりましたが、彦兵衞は後家の家に今迄一歩も入つた事がないと申して中々白狀致さないのでございます。平生から生き者がすきで彦兵衞方にも猫が居ると申し、丁度近頃その遊び相手の猫がちよい〳〵來るのを後家の猫とは聊かも知らず、よく食べ物などをやつて可愛がつて居たとかう申し開きを致しましたので、「それでは其の方の猫をここに連れ參れ」と御奉行樣が仰言いました。すると彦兵衞は十日程以前よりその猫が行方知れずになつたと云ふやうな御答へを致したのでございました。此の男は獨身者で、誰も彦兵衞が猫を飼つて居たと申して出る者もございません。其の中、いろ〳〵責められて包み切れず、とうとう後家殺しの一部始終を白狀してしまひました。あなた樣方も御存知の通り申すまでもなく彦兵衞は直にお處刑になつてしまひました。

所が、先程申し上げました村井堪作といふ罪人が、四谷の後家殺しを御奉行樣の前で、突然白狀致したのでございます。初めは御奉行樣もお取り上げにならず「何をたはけた事を申す」と仰言つていらしつたさうでございますが、一方段々役目の方々が訊して參りますとそれ

がすつかりあの時の事情と符合を致すのでございます。そして、平生から猫が大嫌ひであつたので、後家の所に通つて居りました頃も、其處の猫を見つけるといきなり足蹴に致したり打つたり致しますので猫も村井の館を見る度に恐れて逃げ廻つて居たのだと申しましたのでございます。眞實猫が嫌ひだつたのか、例令猫にもせよ、秘事を外の目に見られるのを恐れてわざと猫を追ひました事やらよくは判りませぬが、左樣申上げたのでございました。何でも之をお聽きになつた時の御奉行樣の御顏色は土のやうだつたと御役目の方から承りました。御奉行樣はたゞ「たわけ者」と一言仰せられた切りすつとその場を立つておしまひなされたさうでございます。

御奉行樣の明るいお顏が全く暗く陰氣になりましたのはたしか其の日からでございました。其の日御歸りになりましても一言も口をお開きになりません。其の夜はとうとう御褥の上にも御乘りにならなかつたやうでございました。其の翌日はお上へは所勞と申上げられてとうとうお邸に引籠つておいでになりました。さうしてお邸の中でも一室に閉ぢ籠つたきり、まるで物も仰言らないのでございます。

私は自分の淺智慧から、御奉行樣はあの煙草屋彥兵衞の爲に一室にこもつて供養をなさつていらつしやるのだ位にしか考へませんでし行樣はつまり御自身の御智惠を御疑りはじめになつたのでございます。御自身の御裁きを御疑りになり始めたのでございます。一言で申せば、自信を御失ひになつたのでございます。

今迄は御自分の御考へは何時も正しい、自分の才智は常に正しく働く、と御考へになつて居たのに、今度はその土臺がぐらぐらとしてまゐつたのでございます。

斯うして御奉行樣は毎日々々陰氣にお暮しになるやうになりました。出過ぎた事を申上げるやうでございますが、あの頃からの御裁きにはもうあの昔の才智の流れ出るやうな御裁斷が見えませぬ。一步步、それも辿るやうな足取りで御裁きをなすつていらつしやつたのではないかと存ぜられるのでございます。

斯樣な有樣で此の先いつまでも參るのかと私は存じて居りました。而も一方世間は御奉行樣の御心の中などは少しも知らず（知らないのは尤もでございますが）御奉行樣をもてはやし、御奉行樣の御名聲は益々上るばかりなのでございました。

四

所が、斯ういふ暗い陰氣な御顏色が、或る時期から急に再び明るく輝き出すやうになッて參りました。それはいつ頃でございましたか、

彦兵衛といふ男の名が出ましたと見え、御奉行様は御一人におなり遊ばしてから、頻りと其の名を繰り返しておいでになりましたが、急に晴やかな御顔色におなり遊ばして、お側の者をお召しになり不意に「世間は余を名奉行だと申して居るか。」とおたづねになつたのでございます。御側の者がその旨申上げますと、晴やかな御顔色で更に「悪人だから處刑になるのか、處刑になるから悪人なのだか、判るか」と笑ひながら仰せられたのでございました。

そして其の日から再び御奉行様はもとのやうに大層明るく、御機嫌もよくおなり遊ばしましたのでございます。たゞ、何と申しましても以前のやうなあの明るさ、華やかさは最早見られませんでしたけれども。さうして矢張り折々は何となく暗い顔をなさるのでございました。

何故斯う又お變り遊ばしたのでございませうか。

私、今となッて考へまするに、御奉行様は御自身の御裁きに疑ひを御懐きになるやうになり、自信を御失ひ遊ばしましてから、きッと、長い間、苦しみと惱みの中を御迷ひになッたに相異ございませぬ。あれ程迄に御信じになり御頼りになッておいでになッた御自身でございます、これが思ひがけない事實によッて裏切られましたのでございますもの。若し、あの儘に續いたなら御奉行様はやがてその御役目をお退き遊ばしたに違ひないのでございます。御奉行様が御役目をお退きにならず、而も晴やかに再び活き／＼とお勤め始めになりましたのは何故でございましたでせう。

淺墓な私の一存と致しましては斯う考へたいのでございます。御奉行様は一時大變に信頼遊ばしていらしッた自分の御智慧に對して自信を御失ひになッた。けれども何か之に代るべき何物かをはッきりとお掴みになッたのでございます。それは力と申すものでございます。と申しましてもそれは奉行様といふ御役目の力ではございませぬ、御奉行様の御裁きが、天下の人々に與へます一ッの信仰、御奉行様に對する天下の盲目的な信仰といふ一ッの力をはッきりと御知りになッたのでございます。

何故と申せ、御奉行様を御惱ませ申した事件は一方の方では御奉行様の御智慧を裏切ッて居るやうではございますが一面では必ず御奉行様の御力をはッきりと示して居るではございませんか。

橋本さきは何故死なければならなかッたか。御奉行様が御負かしになッたからでございます。御奉行様が「僞り者め」と一言御仰有ッたからでございます。「さき」が眞の母親であッたか如何かはどうでもよい事なのでございます。天下の人々は御奉行様が御負かしになつたから「さき」が嘘の母親だと信じるのでございます。御奉行様が「僞り者め」と仰言るから天下の人人は僞り者と思ふのでございます。質屋彦兵衛に致しましても左様ではございませんでせうか。彦兵衛が罪人だから御處刑になッたのだと申しますよりは、御奉行様が御處刑になさッたから悪人でもあり罪人でもある、と多くの人々は考へるのでございます。

之は並々の奉行の出來る事ではございませぬ。あの御奉行樣なればこそでございます。天下の人達が、神樣のやうに尊敬致し、名奉行、名裁判と申上げて居るからこそ斯樣なことになるのでございます。考へるのも恐ろしい事でございますが「橋本さき」「煙草屋彦兵衛」の外の、數多い事件に致しましても、幸か不幸か後に色々な事實が現れませぬからその儘になつて居りますやうなもの丶、凡てが天下の人人が信じて居ります通りの事實であつたのだと、誰か申すことが出來るでございませう。

所詮は神樣でない限り、人が人を裁く限り、いくら御奉行樣でも御間違ひがないとは申せますまい。出來ない事を執拗に探るよりは、天下の御法といふもの丶難有さをはつきり知らせる方が世の爲なのではございませんでせうか。

御奉行樣に對する天下の信仰はそれで立派な一つの御治世の道具になるのでございます。

なまじ事實を一つでも探り出して今更其の信仰を動かすよりは、いつその事ますく其の信仰を強くしてそれを以て世を治めて行かうと御考へ遊ばしたのではございませんでせうか。長いく暗闇を御通りぬけになつた御奉行樣は、斯うやつてやうやく明るみに御出ましになつたのだと、憚り乍ら私は考へますのでございます。

つまり、御奉行樣は智慧に就いての御自信を御失ひになつた代りに新に、御自分の力に就いてはつきりと御自信をお摑みになつたのでございます。斯う考へますせいか、初めはたゞ御自分の御名聲がもて囃されるのをたゞ笑つて聞いていらしつた御奉行樣も、其後は、大層眞面目に世評に氣をくばつていらしつたやうに存ぜられるのでございます。

さて、斯うやつて折角安住の地を御見出しになりました御奉行樣は間もなく又も御惱みにならなければならなくなつたのでございます。御奉行樣の御智慧でも、御力でも如何ともする事の出來ないやうな一件が持ち上つたのでございました。それは申すまでもなくあの天一坊の一件でございます。

五

天一坊が如何いふ男で、如何いふ事を申し出したか、といふやうな事に就きましては私は今更事新しく申上げますまい。あなた樣方もよく御存じの事と存じますから。

私はたゞあの頃の御奉行樣の御有樣を申上げますでございませう。

天一坊といふ名を御奉行樣が御耳に御入れになりましたのは、まだあの男が江戸表に參りませず上方に居た頃だつたと存じます。

恐れ多くも公方樣の御落胤といふ天一坊が數人の主だつた者と共に江戸表に參らうといふ噂が早くも聞えたのでございました。

此の報知を耳になさつた時御奉行樣は、いつになく暗い顏をなされ、それからは偉い方々と頻りに行き來をなさつたやうにおぼえます。中にも伊豆守樣御邸には屢々御出入遊ばし御密談がございましたが、いづれも天一坊の御話だつたに違ひございませぬ。

天一坊が愈々江戸に參りました時、御奉行樣も伊豆守樣其の外の方方と一所に御對面遊ばしました。其の時は伊豆守樣自ら御調べになつたと申す事でございますけれども、御奉行樣も亦はじめて此の時天一坊を御覽になつたのでございました。

私は其の夜の御奉行樣の御樣子を今はつきりと思ひ浮べる事が出來るのでございます。伊豆守樣、讃岐守樣、山城守樣などと共に天一坊にお會ひになりました御奉行樣は、其の夜蒼い御顏を遊ばして御歸りになつたのでございます。私はあの時程、恐ろしい、嚴しい御樣子を拜見致した事はございませぬ。それは決して今迄に時々ございましたあの暗い御顏ではないのでございます。たゞ御心に御惱みをもつておいでの時の御樣子ではないのでございます。それは何かたゞならぬ御決心を遊ばしておいでのやうに見えたのでございました。

之は私、御奉行樣を存じ上げまして以來、はじめての出來事なのでございます。未だはつきりお調べもないうち、たつた一度御會ひになつたゞけで御決心をなさるなどといふ事はそれ迄決してなかつた事でございます。

假りにも名奉行と世に謳はれる御奉行樣の事でございます。その人の顏や樣子の美醜に依つて豫め之は斯うと御定めになるやうな事は決してございませんでした。それどころではございませぬ。「裁きの以前に豫め斯うだらうと思つてはならない。それは正しい裁きと云ふものではない。相手の顏の美醜に動かされてはならない。それでは正しい裁きが出來ぬものだ」と平生から御役向の御家來達にくれ〲も御諭しになつて居られるのでございます。

此の日伊豆守樣が主に天一坊と御物語りになつたさうでございます。さうして天一坊の側からは御落胤といふ證據と致して公方樣御墨附、並びに御短刀を示し、その時居られました方々にも、皆々樣之を拜見なされ、正物にまぎれもなき物と定つたさうでございます。御奉行樣も其の場に居られてその御樣子をすつかり御見屆け遊ばされたわけなのでございます。

御役目柄、御奉行樣は平常でも對坐なさりますれば必ず相手の人物を御見拔き遊ばす方でございます。それに致しましても天一坊が公方樣の御胤であるかどうかと申す事までは御判りにはなりますまい。假令、天一坊といふ男の性質がよろしくないと御見拔き遊ばしたにもせよ、御胤でないとは申せないわけでございます。まして持參の御證據の品々は紛れもなく正しい物と定まつて居りますのでございます。

それだのに御奉行樣の御決意は何を表して居るのでございませう。申す迄もなく私などには初めは頓と合點が參りませんでございました。

公方樣の御落胤が江戸に御出になつた、と云ふ事で江戸中は大騷ぎでございます。公方樣に於かせられましても御おぼえある事と見えまして近く御對面相成るやにも承るやうになつて參りました。

其の間御奉行樣は毎日のやうに御登城を遊ばし、その度に暗い〲

顔色をして御戻りになります。高貴の御方々も度々御奉行様に御會ひになります御様子、その中、私にも何となく御奉行様の御決心の程も御察しがつかぬ事もなくなつて參つたのでございます。

淺慮の私からはつきりと申しますれば、御奉行様は始めて天一坊に御對面になりましてから以來、何故か天一坊が公方様の御落胤であるといふ事實を、信じまい信じまいとなさつて居られたのでございます。奉行といふ重い御役目から、大事には大事をとつて、と仰せられながら御家來の衆を遙々紀州へおつかはしになりました時など、事の眞相を糺すといふよりも、あれは噓だ、と申す證據を掴みたがつて居られるやうにさへ感ぜられましたのでございました。どうかして天一坊を僞者だといふ證據を得たい、どうかしてあれが御落胤でないといふ事を確信したい、斯ういふのが御奉行様の御心持であつたに相違ございませぬ。

何故と申すに、紀州に使はされました方々が、天一坊が僞者であるといふ證據を得られずに、却つて眞ものであるといふ證據を傳へて參りました時の御奉行様の御失望、御苦惱を、私ははつきりと思ひ出す事が出來るからでございます。今までの御裁きの場合には、黑白何れか一方の證據を御掴みになりますと、御奉行様は世にも幸福な御様子をなさるのでございました。ところが今度に限つてさうでないのでございます。之は如何いふわけなのでございませう。

信じまい、信じまい、といふ時は過ぎ去りました。最早信じまいといふ事實を信じなければならぬ時が參つたのでございます。

私が初めに、眞に御奉行様が御役目の大切な所を御掴みにならうと御苦しみ遊ばしたと申上げました時は實に此時なのでございました。でも何故あゝ迄、天一坊を僞者とお信じになりたかつたのでございませうか。

之は色々に考へられますのでございますが、私が今思ひますには全く「天下の御爲」といふ事からではなかつたのではございませんでせうか。

つまり、御奉行様は天一坊の性質をお危ぶみになつたのでございます。私には詳しい事は判り難ねますけれども、若し天一坊を公方様の御胤と認める時は、必ず天一坊は相當の高い位につかれるに相違ございませんのです。只今の世は太平とは申せ、位に似つかはしくない人間を、或る力のある位置におく事がどんなに恐ろしいものであるかといふ事を御奉行様は御考へになつたのでございます。今まで全く微だつた人間に、不意に高い位置と大きな權力とを與へる事は假令それが當然の筋合であらうとも、その人間の性質によつてはどんなに危なものであるかを御考へ遊ばしたのではございませんでせうか。俗に氏より育ちと申すことがございます、假令公方様の御胤にもせよ紀州に生れて九州に流れ野に伏し山に育つて來た天一坊が、公方様にも次ぐ位に似つかはしい筈はございませぬ。さすれば一人を或る高い位置におく事は天下に禍ひを生む事になるのではございますまいか。

「正」と申して天下の名奉行とも云はれる御奉行様が、ほんとうの事實を曲げてもよろしいのでございませうか。成程一人の命を奪つて天下を救ふ事は正しいやうに考へられます。けれども今の御治世に御法に依らないで其の一人の生命を奪ふ事が出來るものでございませうか。而も事實はその一人は、生命を奪はれるどころか、榮貴を望む事の出來る立場に居るものでございます。御奉行様の御苦心は此處にあつたのではなかつたかと、私は恐れ乍ら御察し致して居るものなのでございます。

六

事實が判りました時はあれ程御失望なさつたらしい御奉行様は其の翌日から再び嚴粛な面持で御勤めに御出かけになりました。其の頃、御役目向の方々の外に、伊豆守様はじめ高位の方々も頻りと御奉行様と行來をなさつて居られましたのでございます。

或る日、夜更けて漸く御歸り遊ばしましたが其の日は晝からずつとあの學者として名高い荻生様の御邸に參られ永く〵御物語り遊ばしたと申す事でございます。其の夜から御奉行様の御居間には和漢の御書がたくさんに開かれましたが、皆「正」とか「義」とか申すむづかしい事に就いての御本だつたやうに存ぜられます。

愈々最後に、明日は御自身で天一坊を御調べ遊ばし、それによつて御奉行様が何れとも御定めにならなければならぬと定りました其の前夜、御奉行様の御邸には荻生様伊藤様の兩先生が見えておそく迄お物語り遊ばしましたのでございます。

天一坊御調べの節の有様はあなた様方もよく御存じの事と存じますが、御奉行様はいつもに似ず、御低聲で、御訊ねも主に外形にばかり注がれて居たと申す事でございます。天一坊の乘輿に就いての御訊ね、御紋についての御調べ、之皆外形の事柄でございます。肝心の御落胤か否かと申すことに就きましては、どうしてあの御墨附と御短刀だけで天一坊が其の本人だと云ふ事が出來るかといふやうな事を御聞かせられただけだと申すことでございます。御言葉が激して來て天一坊に御迫りになつた時あの美しい俯形の若人は世にも悲しげな顔をして斯う申したといふ事でございます。

「世にまことの親をほんとに知る事の出來る人間が居りませうか。誰しも生れた時の記憶が有るものではありません。親なる者が、自分がお前の親だといふのをたゞ信じて居るに過ぎないのです。私のやうに生れた時から私がお前の父だ、私がお前の母だと云つてくれる者がなかつた人間は、不幸にも、たゞたゞ周圍の者の云ふ事を信ずるより外道がないのです。私が物心ついても誰もお前の父だ、お前の母だと云つて出て來てくれる者はありませんでした。私が初めて父母の名と、其の行方を知つたのは、私を育てゝくれた祖母が亡くなつた時です。母はもはや世に居りませんでした。私を生んでくれた時に死んだのです。父の名を聞いた時、私は心から驚きました。と同時にどうかして一度は會ひたいと心から願ひました。あな

たは、親と云つてくれる者を一人ももたずに育つて來た人間の淋しさを御存じですか。あなたは何と考へていらつしやるかも知れませぬが、私はたゞ眞實の父に會ひたいばかりなのです。外に何も望んで居るわけではありませぬ。それだのに不幸に生み付けられた私は何といふ更に大きな不幸に出會はなければならないのでせう。私は寧ろ名もなき人の子として生れたかつたのです。さすれば父は喜んで私に會つてくれたでせう。斯樣に奉行を間に入れて、罪人のやうに我が生みの子を取扱はないでも濟んだ筈です。思へば私の父も不幸な人間です。その生みの子に直ぐ會ふわけにも行かないのですから。けれど、若し父にほんとうにおぼえがあれば必ず會ひたがつて居るに違ひありませぬ」

此の愚かな、けれど眞直な天一坊の答へはあの男の爲には運命を一時に決してしまつたのでございました。あの男は不幸に生れ付きながら更に一番不幸な最期を、此の言葉が生み出す事を知らぬ程若かつたのでございます。あの男はたゞ父親に會ひたかつたと申して居ります。それはさらに間違ひございますまい。けれど御奉行樣に致しますれば、それはたゞそれだけの意味にはならないのでございます。御奉行樣は世の爲に此の哀れな人の子を其の親に會はしてやる事はお出來にならなかつたのでござい

で、天一坊は全く僞者なる事に定りましたのでございます。

「天下を欺す大かたりめ」之が御奉行樣が最後に天一坊に仰言つたお言葉でございますが、いつもに似ず御聲に慄えを帶びておいでになつたさうでございます。

御邸にお歸り遊ばし、落葉散り敷く秋の御庭に御下り立ち遊ばした時の御奉行樣の御顏色は全く死人の色のやうでございました。

お處刑の濟んだ事をお聞きになりました時たゞ一言「さうか」と仰せられまして淋しく御家來の顏をお眺めになりましたが御傳へに上つた御家來は其の時御奉行樣にぢつと見つめられて、總身に水を浴びせられたやうに、ぞつと致したと申す事でございます。

其の時以來、再びあの暗い陰氣な御方におなり遊ばしたのでございますが、何故か私には、最早昔の晴れやかな愉快な御顏色は、永く永く御奉行樣から去つてしまつたやうに考へられてなりませぬ。

私は御奉行樣の此の御裁きが、正しいか正しくないか、全く存じませぬ。いゝえ、ほんとうを申せば、何故天一坊が御處刑にならなければならなかつたか、といふ事さへほんとうには解らないのでございます。私はたゞ私が考へ



キエフ大劇場の暗殺

林　房　雄

一

一九一一年九月。――九月に入れば、ロシアは深い秋である。街と公園の落葉を黒々と濡らして、重く冷い霧が降る……

ある朝、その朝霧の冷い中を、不吉な影繪のやうに一台の馬車が、騎馬の警官隊に厳重に警護されて、キエフの市の大通を眞直に西へ、威嚇するやうな車輪の音も高々と驅け通つて行つた。

馬車を見送りながら、市民達は囁き合つた。それは希望と不安とを同時にこめた囁きであつた。――ペルゴロドに於ける聖ヨセフのミイラ開帳式に皇帝代理として臨席した首相ロペルヒンが、その歸途を、檢察的任務をも兼ねて、この町を訪問する。その時日が三日の後にせまつてゐる。商業クラブに於ける市民代表の大歡迎會、キエフ大劇場に於ける首相主催の招待會、等、全市的祝宴の準備は着々備へられつつあるのだが、その一方、××××黨の、、、、、鬪爭團長サルチコフの指導する有力な、、、團が、その計畫をこのキエフの街で遂行するといふ噂がどこからともなく傳つてゐる。だから、今、蹄鐵と長劍に物々しく護衛された、特別仕立の馬車を眺めて、市民達の胸が、祝祭の期待と、兇事の豫想にあやしく緊張するのも無理からぬことであつた。

馬車は、やがて離宮からほど遠くない中央ホテルの大玄關にぴたりと止つた。中から出て來たのは、首相ロペルヒンの片腕として、その敏腕をうたはれてゐる内務次官のカロロフであつた。丸々と營養のいい赫ら顔、その輪廓の圓滿さを裏切つてけい然と輝く、細く深い兩眼。――すでに、、、、、の爆撃を二度まで受けながら、平然として××派の彈壓の手をゆるめようとしないその剛愎さは、彼の眉宇の間に現れて、一種殘酷な調子をさへ、その默々とした表情の中に加へてゐた。

支配人以下のホテルの使用人に、ぎようぎようしく出迎へられて、

二階の特別室に入る。――と、それを追ひかけるやうにして、一人の警部が部屋の扉を叩いた。

「閣下、キエフ保安部長、リヤブコフ大佐が至急御面談したいと申してをります。」

「よろしい。應接間にお待ち下さい、と傳へろ。」

「はつ。――リヤブコフ大佐は出來るならば、私室で、とのおらせであります。非常に重大な御用談らしく察せられました。」

「お通ししろ。」

警部がひきさがる。入れ代りに、リヤブコフ大佐がはいつて來た。大佐は瘦せ型の神經質な、どちらかといへば軍人らしくない風貌をもつた紳士であつた。小心さうな圓い眼を大きく輝かせながら、はいつて來るとすぐ、やゝ昂憤した調子で話しだした。

「お疲れでございませうが、閣下……」

「そんなに急な事件なのかね。」

小銃彈の飾のある葉卷切の中に、エジプト葉卷をさしこみながら、むつつりとして内務次官は訊ねた。

「はつ。非常に急な、非常に重大な――そして非常に確實な陰謀が發見されたのであります。」

「暗殺の陰謀か？」

内務次官は、葉卷を切るのをやめて、立ちあがつた。そして、自分で入口の扉に鍵をかけると、靜かにもとの席に歸り、相手の瞳を見つめるやうにしていつた。

「話したまへ。發見者は誰だ？」

「ペレツキイ！――閣下は、この男を御記憶でございませうか？」

「ペレツキイ？――知らぬ！」

きつぱりと内務次官は答へた。

「×××黨員で、二年ほど前にキエフ保安部の密偵をつとめてゐた男であります。屢々非常に有力な情報を提供して吾々を助けた男です。それが、今朝早く、突如、私のところにやつて來まして、新しい陰謀計畫を通告してくれたのであります。首相並びに内務次官閣下御自身に對する、、、、です。」

「むう。――内容は？」

「それは、當人から直接にお聞きになつたらどうでございませう。私は今、下に、その男も同道してまいつてゐるのでございますが。」

「何ツ！」次官は椅子から立ちあがるやうにした。その語氣があまりに鋭かつたので、大佐も危く腰を浮かすところだつた。が、しかし、次官は靜かに座りなほすと、皮肉な調子でいつた。「大佐、君は正氣だらうね。保安部の密偵で、エス・エル黨員である男を僕に合はせやうといふ。君は、密偵を信じすぎることがどんな恐しい結果をひき起すかといふことを御存知だらうね。アゼフの事件がさうだし、ニーロフ將軍暗殺事件がさうだし……うかつに密偵などに直接面會して、その場でズドンと射られるといふやうな事態には、僕としてもあまり興味が

もてないからね。」
「ご尤もです、閣下。」大佐はしかし、笑ひながら答へた。「その點は、不肖リヤプコフ、幾重にも考慮に入れてをるつもりです。――閣下は、今度の首相國内巡視について、特に任命された警衞委員長です。しかも、かのサルチコフがひきゐる、、、、、團の當面の對象の一人であります。であるからこそ、私は密偵ペレツキイを敢て同道してまいつたのです。私は、彼の報告をうけると、直ちに部下を派して彼の報告が確實であるかどうかを調べさせました。それに、今度の敵はご存知の通り甚だ強力です。測りがたく精密な、、組織をもつてをります。いはば、この國内巡視を機とする暗殺計畫は、エス・エル黨の全國的總動員ともいふべきものです。この動員に對して吾々は如何に戰ふか？――第一の機關はいふまでもなく私の下にあるキエフの保安部です。しかし、正直に告白して、この部は、この地方の××團體、及び×××團體を取締るだけで手一杯です。第二の機關は憲兵隊です。しかし、これは縣内の××團體を外部から監視し得るだけで、その實力に至つては取るに足りないほど貧弱です。第三の方法として、他の都市からの援助を求める。しかし、、、、の計畫は、各都市で幾段にも行はれてゐるのだから、他を援助するために力をさくことは絶對に不可能です。だから……」
「よろしい。だから、比較的少數の警察機關の力で彼等に對抗するには、密偵の力を借りて、内部から彼等の計畫の裏をかくよりほかはないといふのだね。それで、安全な確實な密偵としてペレツキイをつれて來た。よろしい。君の心づかひに感謝する。僕は、さつきの意見をひるがへすことにしよう。すぐにその男を呼んでくれたまへ。」
滿足した保安部長は、うやうやしく敬禮して部屋を出て行つたが、やがて髮の毛の赤い、四角な顎の、釣り上つた眉に特徴のある中背の男を伴つてはいつて來た。
「君かね、ペレツキイといふのは。」さつきの葉卷に火をつけながら、内務次官は、とぼけた調子で口を切つた。「リヤプコフの話では、何か僕に直接話したいことをもつてゐるさうだが、何んだね？　まあ、そこに坐りたまへ。葉卷はどうだ。一服やりながら、ゆつくり聞かうよ。」
ペレツキイは坐つた。しかし、葉卷には手を出さなかつた。そばから、保安部長がとりなすやうにいつた。
「さあ君、今朝の話を、もう一度次官閣下の前でくりかへしてくれ給へ。閣下は君の口から直接に聞きたいとおつしやるのだから。」

二

ペレツキイは話し出した。――
昨日の夕方のことである。
食後の散歩に出ようとして、彼が自宅の門を出かゝつた時、街路樹のかげから突然よびかけられた。

「よう、アンドレイ。僕は君が出て來るのを、こゝでもう一時間も待つてゐたんだ。」

見ると、それは髪の毛の赤い、額の廣い、鼻下に大きな髭を蓄へた眼の鋭い男であつた。服裝は西歐風のりゆうとしたスマートさで、藍色のあざやかなネクタイをつけ、茶色の大きな眼鏡をかけてゐた。アンドレイ・ペレツキイは、それが誰であるかちよつと思ひ出せなかつた。

「どうした。忘れたのか。僕だよ。ニコライだよ。」

「おゝ！」

見知らぬ男は、もう三年あまりも消息を絶つてゐる從弟のニコライ・トレポフであつた。

「なんだ、君だつたのか。」

と、平氣を裝つて、ペレツキイは答へたが、しかし、内心非常に驚いた。驚いたばかりでなく、脊筋を走る惡寒に似た恐怖をさへ感じた。

ニコライ・トレポフは、古くからの××××黨員であつた。、、、、、闘爭團の一員として、團長サルチコフの片腕とよばれてゐる。かつて、學生時代のペレツキイに影響を與へて、エス・エル黨にひき入れたのも彼であつた。

ペレツキイは、かつて持ち前の放蕩癖から金の必要にせまられて、同志を賣つた。保安部の[illegible]

つてゐる。――この種の裏切者に對するエス・エル黨の刑罰は死だ。當然の同志、トレポフが彼の前に突如として現れたのを見て、ペレツキイが激しい恐怖と混亂に捕へられたのは無理もなかつた。

しかしペレツキーの恐怖にも拘らず、トレポフの態度は軟らかであつた。親しげに、彼の腕をとりながら、

「實はね、折入つて君にお願ひがあつて來たのだ。そこまで一しよに歩いてくれないか。君の家には入ると昔の知り合ひが多いのでね、だからこゝで一時間も待つたのだぜ……」

「おや、親父の別宅の方に行かう。河岸にあるあれだ。あそこは今完全にあいてゐるからね。」

やつと安心してペレツキイが答へた。

二人は馬車を呼んで、ドニエプル河の岸にある別宅に行つた。トレポフはそこで、エス・エル黨が、首相のキエフ滯在の最後の日に、警衞の警官隊が疲勞したところを見はからつて、、、を遂行する手筈になつてゐるといふことを彼にあかした。そしてつけ加へた。

「そのために、是非、君の援助がほしいのだ。昔の黨員で、たよりになるものは、この町で君一人しかないのだから。」

「しかし、僕は今黨員ではない。[illegible]

の黨員に安全な隱れ家を提供してくれること、それから、快速なモーター・ボートを一隻用意してくれること。これは、仕事の秘密を保つために、三人以外の同志は皆ドニエプル河を遡つて、ひとまづ川上の町にひきあげ、實行の期日がせまつてからキエフにひきかへして來る手筈になつてゐる、そのことのために是非ボートが必要なのだ。――相當の資金を要する仕事なので、君以外にそれをやつてくれる人はない。どうだ、やつてくれないか。昔の同志として、また親愛なる從弟として、たのむ。」

しばらく考へるやうなふりをした後に、ペレッキイは答へた。

「よろしい。僕とても、心の底からの卑怯者ではありたくない。出來るだけのことをやつて見よう。」

「おゝ、ひきうけてくれるか！」

「うん、やらう。隱れ家としては、とりあへず、この別宅を提供しよう。いけなかつたらほかに安全な場所をさがす。モーター・ボートの方は、すぐとはいかないが、これもどうにかして見よう。」

「ありがたう、同志アンドレイ。おや、今晩にも、僕は三人の同志と一しよにこの家にひきこして來よう。今ゐるホテルは實に危險で夜もおちおち眠れないんだ。」

ペレッキイの手を握りながら、トレポフは心から嬉しさうにいつた。――

三

「なるほど。」ペレッキイの話が終ると、次官はうなづいた。「で、その晩、君はすぐ、保安部長に會つて、そのことを報告したのだな。エス・エル黨員として復活するよりも、保安部の部員として復活することを試みたのだね。――そして、リヤブコフ大佐、君はすぐに部下を遣つて、ペレッキイ君の別宅を偵察させた、といふわけなのかね。」

「は、そのとほりです、そして、部下の刑事はたしかに、右の三名が別宅にゐることを報告して來ました。しかもその中の一人は、明かにニコライ・トレポフです。」

「むう。」內務次官は、もう一度大さくうなづいて顏をあげると、そのけいけいたる眼でペレッキイをギロリと睨むやうにしていつた。「アンドレイ・ペレッキイ君。そこで君。そこで君はいくらの報酬をこの事件に對して要求する？」

「三萬留！」

言下にペレッキイは答へた。保安部長は、思はず兩手をあげて、あきれたといふ表情をした。しかし、次官は顏色を變へなかつた。

「三萬留！――今次の巡察警衞費の總額は三十萬留にすぎない。その中の三萬留。……ペレッキイ君、今一度聞くが、君の報告は、この法外な要求に確實に値ひする報告だらうね。」

「むうん！――でなかつたら、私は、金貨の代りに死を閣下から戴く

ことと覺悟してゐます。」

「むろん、金貨の代りに死だっ」と、斷言的に次官はいつた。「で、今日は、いくら君が必要とするのか？」

「宿舍借入れと、モーター・ボート購入、その他の費用として、二千留だけ。」

「よろしい、直ちに手交しよう。」椅子から立ちあがつて、「貴重品」とはり札された大鞄の方に近づきながら、次官はいつた。「但し、僕の方にも條件がある。――先づ、借入れる隱れ家には、保安部の密偵を必ず一人以上住みこませること、第二に、モーターボートは、買入れるやうに見せかけて、決して最後の日まで買入れないこと。第三に、新しい黨員が到着した度に、即刻保安部にその氏名を通知すること。……これだけ。よろしいか！」

「承知しました。」

と、ペレツキイは答へた。次官は、大鞄の中から紙幣をとり出して、手づからペレツキイに渡した。そしていつた。

「ぢや、すぐに歸つて仕事をすゝめ給へ。――だが君は、このホテルに來る時、保安部長と一しよに來るやうなへまはやらなかつたらうね。」

「いや、一しよに來ました。……但し、部長の馬車の座席の下にかくれて。」

「よろしい。歸りもさうし給へ。、、、、、鬪爭團の連絡網は、內務省の網よりこまやかなのだからね。このホテルなんかも、もう、とつくに彼等の網の中にあるにちがひないよ、君、ハツハツハ。」

しかし、保安部長につれられて、ペレツキイの姿が廊下に消えると、同時に、內務次官の笑顏は、假面をぬいだ俳優のそれのやうにさつと變つた。唇をかみしめた緊張した表情で、隣の部屋から、警部をよびこむと、重々しく命令した。

「私服の刑事に、今の二人の馬車を尾行させろ。そして、あのペレツキイといふ男が、リヤブコフの家からどこに行くかをつきとめさせろ！」

四

廊下に出ると、ペレツキイは、胸ポケットから大型の黑眼鏡を出して、假面のやうにすぽりとかけ、綿の切を二つ出して、兩方の頰にふくませた。角ばつた頰がまるくふくれ、彼の人相は瞬間に變つた。

「さすがは首相の片腕ですね。あの隙間なく氣のとゞくところはどうです。」

と、ペレツキイは保安部長の方に感心していつた。

「內務次官も凄いが、君の方も大したものだ。昔とつた杵づかとはよくいつてある。」

と、皮肉に保安部長は答へた。

「おや、あれは、チヤイコフスキイの（三頭立の橇）ぢやありません

か。」殿下が、大玄關に近い音樂室にさしかゝつた時、中からもれて來るピアノの旋律がひゞいて來た。それを聞きつけて、ペレツキイは話の緒をそらすやうにさういつた。「誰がひいてゐるのでせうね。若い令孃のやうぢやありませんか。あの曲をこれだけひきこなせるとは、まるで黒人だ。」

「君の專門はなかなか廣いね。音樂の方までやつてゐるのかい。」さういひながら、保安部長も興味をひかれたらしく、開かれた扉から音樂室の中の彈き手を通りすがりにちよつとのぞくやうにした。「あゝ、あの令孃なら、知つてゐる。式部官カロメツエフ伯爵の次女だ。二週間ほど前からこのホテルに來てゐる。」

「美人ですね。」

談笑しながら大玄關の車寄せから二人が馬車にのりこむ。そのあとを追つて、內務次官に命令された私服刑事の馬車が走つて行つた。

二台の馬車が、門の外に消えると、「三頭立ての橇」の曲はぴたりと止んだ。そして卓上電話のベルが激しくなつて、やがて令孃の高らかな話し聲が廊下に聞えて來た。

「モシ〳〵マヌーヒン男爵？……えゝ、あたし、ソフイヤ。あの今日、午餐を御一緒にお願ひ出來ないかしら。……さう、ありがと。おやあたしすぐに出かけますわ。えゝ、十二時に例の特別室で。さう、わかつてよ。お土産は……何時もの煙草。……えゝ、今とゝのへて來たばかりの。……」

それから二時間の後、キエフ大寺院の鐘が正午をつげ始めた時、令孃ソフイヤの姿は、停車場裏の大通にある有名なレストラン「南方の樂園」に現れた。フランス風の外出著を華かにまとつて、ラファエル前派の畫家達が好んで描いた櫻桃の實のやうにふくよかな丸顏に、薄つすらと上品な化粧のあと……それは午餐に集つた客達をふりかへらせずにはおかぬ楚々とあでやかな姿であつた。

彼女の姿を見つけると、白い制服の給仕の一人がいそいで飛んで行つて、奧まつた特別室の一つに案內した。部屋の中には、如何にも貴族の放蕩兒らしく、派手な西歐風の服をつけ、片眼鏡をかけたハイカラな青年が待つてゐた。

「お待たせしたか知ら。」

「いや、今來たばかり。」

二人は戀人らしく手をとり合つて、給仕の前をもはゞからずに抱擁し合つた。

苦笑ひしながら、給仕が去ると、しかし、二人の態度はがらりと變つた。さつと身を引いて椅子につき、聲を落して囁くやうに、男が聞いた。

「どうだつた。內務次官閣下はペレツキイを引見したか？」

「えゝ、約三十分ばかりも。」

「では、ペレツキイの賣込みを買ひあげたと想像してもかまはないね。」

「え〻、おそらく。……けれども、次官はよほど警戒してゐるやうです。保安部長とベレッキイの馬車のあとを、すぐに次官のスパイの馬車が追つかけましたからね。」

「ふん。──牛蝨の尻つぽにまた牛蝨か！」吐き出すやうに男はいつた。「しかし次官カロロフとしては、その位ゐの注意は當然のことだ。よろしい、第一段の仕事はこれですんだ。すぐに歸つてベレッキイに逢ふことにしよう。」

「歸る？」眼を見はつてソフイヤは叫ぶやうにいつた。「あのスパイにとりかこまれてゐる川岸の別莊へ！」

「しつ！」

手をあげて男は制した。扉が鳴つて給仕が料理をはこんで來た。給仕が去ると、男はいつた。

「あ〻、あの家のまわりはスパイで一ぱいだ。しかし、その方がかへつていゝ、カロロフのやうな古狸野郎を相手にする場合には、その位ゐの危險を冒さない限り勝ち目はない。……あのベルゴロドのミイラ開張式での周密な警戒振りはどうだつた。停車場から寺院まで、完全に騎馬と銃劍の壁だ。まるで警官と群集との間に戰爭でも起つたやうな騒ぎだつた。（以下四十六字削除）

「でも、

心細さうにソフイヤはいつた。

「エス・エル黨員の誇を忘れないでせうね、ソフイヤ。」靜かに微笑しながら男がいつた。「目的の秤の一方の皿に、吾々は吾々の命を載せる。……だが、ソフイヤ、安心しなさい。吾々の命は、カロロフの警戒にも拘らず、目的達成の日までは無事でせう。何故なら彼は古狸だ。豐富な經驗を胸に積みかさねてゐる。彼はおそらくアレクサンドル二世、內相プレエヴエ等の暗殺事件に於ける彼等の失敗の原因を知つてゐる。あの時は、密偵の報告があると同時に、彼等は、、團員の一部を逮捕した。しかも暗殺は完全に遂行された。即ち、吾々のやうな完全な、、組織をもつてゐる團體の計畫を防止するためには、決してその成員の一部を逮捕することだけでは役に立たない、といふことを──計畫そのものの裏をかゝない限り、狙はれた人物を暗殺からまもることは不可能であるといふことを、彼は聰明にも知つてゐる。」

「でも、サルチ……マヌーヒン男爵……あなたは間違つてゐる。吾々の組織は、今度の場合ベレッキイの家にゐる三人にあたしを加へて四人ではありませんか。その中の三人が逮捕されたら……」

「ソフイヤ、君はまだ貴族

故に、おそらく最後まで吾々を逮捕し得ないにちがひない！」

「…………」

「同志ソフイヤ！」男はうなだれた女の前で優しく聲をやわらげていつた。「あなたは默つてゐる。あなたは僕のいふことがわかつたのだ。……あなたは、あなたに與へられた任務を忘れないでせうね。ニコライ・トレポフをのぞいて、あの會場にはいり得るものは、あなただけだ。」

「ニコライ・トレポフをのぞいて！……おゝ、サルチコフ！」ソフイヤは、椅子から立ちあがつて兩手を前に出して、よろよろとした。

「しッ！」男は、顏色をかへて、唇に手をあてた。サルチコフ！——、、、、、戰闘團長サルチコフ！ 全ロシアの支配階級とその友人達を、蘆の葉のやうに日夜おびえさせてゐるその名前は、この青年に與へられた名前であつたのか！「つゝしみなさい、ソフイヤ。そんな不吉な名前で、僕を呼ぶことを！……しかし、僕もわるかつた。今度の計畫で、最も確實に命を秤にのせなければならない役を、ニコライがひきうけてゐることを、あなたにまだ知らせてないといふことを忘れてゐた。……ソフイヤ。トレポフは、あなたの雄々しい戀人だ。僕もそれを知つてゐる。しかし黨の目的のために、ニコライ自身、自ら進んで、今度の役をひきうけた。否、この計畫の提案者が彼自身なのだ。目的の達成と同時に彼の命はなくなる。出來れば、僕自身がそれに代りたい、しかし……」

「あたしが……あたしがトレポフに代ります。」あへぐやうにソフイヤがいつた。「あの劇場に最も確實に入場出來るのはあたしだけです。」

「そのことも、僕達の間で考慮に入れました。しかし、あなたを今失ふことは、より重大な次の計畫のために絶對に不利だ。あなたと、そして僕も、その計畫のために、今しばらく生きながらへなければならぬ。……さようなら、ソフイヤ。トレポフの勇敢な自己犧牲に對して、黨員として僕の愛人としての誇をお持ちなさい。」

「さようなら、サルチ……マヌーヒン男爵。……ニコライにお傳へ下さい。ソフイヤは、最後までよき同志であり、愛人であつたといふことを！」

透明な眞珠が、——涙が、ソフイヤの頬を眞直に傳つて落ちた。……

五

首相ロペルヒンは無事にキエフの町に入つた。

市民の熱狂。——一九〇五年の××の第一波の直後をうけて、來らんとする第二波からロシアを護る「健全なる國民」の唯一の希望の星、勞働者と農民の代表者が思ひのほか勢力をしめた第二次國會から、五十五名の左翼派議員の除名を計畫し、國會がそれを否決するや、即日これを解散して、社會民主勞働黨議員を反逆罪の名で處刑した「鐵腕首相」。彼を歡迎するキエフ市民の「健全なる部分」の狂氣的なお祭騒ぎの中で、滯在豫定の一週間は二日三日とすぎて行つた。…

遜に、案ぜられたエス・エル黨員の、、、は、まるでそのけはひさへ見せずに、いよいよ、キエフ大劇場に於ける首相の招待會の前夜が來た。「健全な市民達」は、漸く安心し始めた。もう、××黨の無能が、クラブの客間での笑ひ話の種にまでなつてゐた。

しかし、警備委員長のカロロフだけは、氣をゆるめるどころではなかつた。——明日だ。いよいよ明日の招待會だ。

夜の十二時すぎ、市の商業クラブで催された市民代表の歡迎會に、首相代理で出席したカロロフは、綿のやうに疲れてホテルに歸つて來た。ベットに飛びこむこと、たゞそれだけを樂しみに、今にも倒れさうな足を危くふみしめて、部屋にはいると、部屋の中には、——惡魔よ去へ！——緊張した顔つきをした保安部長のリヤブコフが待つてゐた。

「閣下、いよいよ、明日です。ペレツキイがたつた今、新しい報告をもつて來ました。」

「聞かう、話したまへ。」——賴む、寢せてくれ！　といひたいのをやつとカロロフはこらへた。

「サルチコフ一派は、いよいよ劇場襲撃を計畫しました。ドニエプルの上流にゐた黨員が新しく街に潜入して來ました。、、、、、、と、、とが多量に用意されてあるさうです。」

「君は、彼等の潜入を防止出來なかつたのか！　潜入者は何名だ！」

「約十名だとペレツキイはいつてゐます。」

「彼等はどこにとまつてゐる？」

「それはペレツキイにもわからないさうです。彼のうちにゐる三名の黨員の一人がさう話したといふことです。」

「それは信用ならぬ。……もし事實だとしてもおそるゝにたらぬ。」不眠と過勞にいらいらしながら、カロロフは怒鳴つた。「十名位ゐの武裝の襲撃は、びくともしないだけの用意がある。首相には暗殺の陰謀を傳へてある。劇場の警備については遺漏はない。切符は特別委員會の手で限られた人々にだけくばられた。劇場内には十五人の熟練した憲兵將校と、九十二人の密偵が配置してある。如何に、、、、、だつて、東洋の妖術でも用ひない限り、内部への潜入は絶對に不可能だ。」

「しかし、××黨員は、蚤のやうに强盛な繁殖力をもつてゐます。吾吾の知らぬ新しい黨員が……」

「もうよろしい。」こらへきれなくなつてカロロフはいつた。「僕を信用し給へ。……だから、僕はいつておいたぢやないか。それにはペレツキイを使つて——即ち彼に入場券を與へて、劇場の入口と廊下を見はらせうと……それで澤山ぢやないか、あとは神樣にでもまかせておけ、え！」

「では、黨員の逮捕は？」

「明日の仕事だ。まかせろ、僕に！」

「……で、最後に閣下、ペレツキイが、私の馬車の座席の下に待つてゐますが……」

「甘いぞ、君は！」きつ糸に怒つて次官はいつた。「敵を裏切る奴は味方をも裏切る。スパイを使用することに限度をおけ！……ペレツキイといふ牛蒡野郎をすぐに追ひかへせ！ そして、彼の住居の周圍に十名の探偵をおいて、秘密に見張らせろ、そして明朝早く奴等の動靜を僕のところに知らせろ！」

「はつ！……では、閣下！」

「おやすみ、保安部長。……少々言葉を荒くしたのは、ゆるしてくれ。では明日！」

カロロフは、ベツトの中に、朽ちた壁土のやうに崩れこんだ。

二十分の後、保安部長の馬車を出たペレツキイは、例の川岸の家に歸つて來た。

窓にはあかあかと灯の色が燃えて、トレポフを始め三人の同志達はまだ起きてゐた。

「アンドレイ、どうだつた、ボートの都合は出來たか？」

彼の姿を見ると、椅子から立ちあがつて、トレポフが訊ねた。――ペレツキイが保安部長や内務次官に會ひに行くときは、何時も資金を都合するといふ口實で出かける。トレポフはそれを訊ねたのだ。

「いや、駄目だ！」頭に手をやり絶望の表情をしてペレツキイは答へた。「どうしても都合つかぬ。ボートの用意はとうとう出來なかつた。僕の無能を許してくれたまへ。」

「さうか。……仕方がないな。しかしもう明日だ。いや今日だ。ボートなしでも決行出來るさ。……いや、アンドレイ、色々ありがたう。君のおかげでどうやら吾々は目的の一歩手前まで漕ぎつけることが出來たからね。」

「なあにこの位のことは……」

「いや、アンドレイ君。」と、彼の言葉をさへぎつて、こゝではサルデインの名前で通つてゐる、サルチコフが立ちあがつていつた。「君は、實によくつとめてくれた。僕等の眼に見えない努力をまで君は使つてくれたのだからね！ 僕達は感謝するよ、黨の感謝を今夜こそ君にお傳へしなければならぬと思ふのだ。」

さういひながら、サルチコフは扉の方に行つて、カチリと鍵をかけた。彼の態度と顏の色は、次第に冷然と鐵のやうな威嚴を帶びて來た。

「アンドレイ・ペレツキイ！ 聞きたまへ！ ――黨は、君の功勞に酬いるために、キエフ大劇場に於ける首相暗殺の任務遂行者としての名譽を君に與へる！」

「えツ！」

「驚くな、ペレツキイ。あの嚴重な警戒網を突破し得るものは、君一人しかない。」

「ほ……ぼくには出來ぬ。ぼくは、と……黨員でもない。」

「さう。君は黨員ではない。しかし、君は、あの中央ホテルの門を幾度も通過したではないか、劇場にはいれぬ筈はない。」

「おゝ！」ペレッキイは唸つた。死人のやうに蒼ざめて、彼はきれぎれな聲を出した。「きゝきみは……サルーデイン、きみはだれだ！」
「・・・、戰闘團のレオン・サルチコフ！」
ペレッキイはもう聲も出せなかつた。
「スパイ、ペレッキイ！」かくしの中からピストルをとり出しながら、ニコライ・トレポフがいつた。「同志を賣つたものに對する黨の刑罰が何んであつたか、貴樣はおぼえてゐるか！」
「俺は、ス、スパイではない。」
「默れ！」トレポフは怒鳴つた。「君がスパイである證據は、すでに二年前にあがつてゐる。……保安部官吏ペレッキイ——吾々は君の命を一年間のばしてやつた。今夜はそのつぐなひの夜だ！」
「うゝ……ま、まつてくれ、僕はその役をひきうける。」
「馬鹿！」トレポフは嘲つた。「その役といふのは首相をやつつけることか。その役目なら僕のものだ。今こそいつてやる。君は實にいゝ仕事をしてくれた。僕達の同志は、こゝにゐる三人きりだ。ほかのことは皆うそだ。ボートなんか一隻だつていらぬ。官吏ペレッキイ、貴樣と僕とは從兄弟といふ不幸な血縁をもつてゐたね。二人は、髪の毛の色、

「不可能か可能か。——やつて見ねばわからぬ。馬鹿野郎！」
誇と確信に滿ちた笑を、ニコライ・トレポフは高々と笑つた。

六

翌日の午後の六時。——キエフ大劇場は、もう滿員であつた。首相によつて招待された名譽ある市民、淑女と紳士達が、芳香と色彩と囁きと歡談の波を、座席と大廊下のカーペットの上から、ロココ風に飾りつけられた圓天井の高さにまで打ちあげ、湧きかへらしてゐた。開幕までにあと十分！
嵐のやうな拍手が起つた。——内務大官カロロフに先導されて、首相ロベルヒンが舞臺から第五列目の設けの席に着席したのだ。白皙な廣い額の下に、鷲のやうに鋭く威厳に滿ちた眼をもつた、鐵腕の首相！「全ロシアの希望」！
カロロフは、首相に一禮すると、人波をわけて、入口に近い警衞委員室にかへり、保安部長のリヤブコフを呼んだ。
「どうだ、この調子では、異變が起るらしくもないぢやないか。」
窓の外には、劇場をめぐつて、

開幕を知らせるベルの音が花やかに廊下に鳴りひゞいた。

「さあ、開幕た。これで入口をしめきれ。誰が来ても入れてはならぬ。それからペレッキイも追ひ出してしまへ、あいつには、少くとも首相の招待をうける資格がない。あいつには三萬留だけで澤山だ。」

「承知しました。」

客達は皆着席を終つた。廊下の人波はひき去つて、ひとしきりの静寂が大劇場の中を支配した。――が、その時！ カロロフの卓の上の電話が激しく鳴つた。

カロロフはびくりとして、襲はれたやうに受話器をとりあげた。電話の聲は、聞きとれないほどの早口でいつた。

「憲兵大尉ミハエル・プーニンです。御命令によつて、ペレッキイの別宅を襲撃しましたところ……」

「え、どうした、はつきりいへ、聞えぬ！」

「例の三名のものは、すでに昨夜中に逃亡したらしく姿を見せません。川に近い方の土塀の下に、抜け穴が掘られてゐました。……」

「畜生！」

「そして奇怪なことにはペレッキイが……」

「ペレッキイがどうした。……あいつは今この劇場にゐる。」

「そのペレッキイが……三時間ほど前に、たしかに彼がこの家の門を出て劇場へ行くのをたしかに私も見ました、がそのペレッキイが……死骸になつて、二階の一室に轉つてゐるのです！」

「うつ！」

喉をしめられるやうな唸聲を出して、受話器をほうり出すと、カロロフは、轉ぶやうに廊下にとび出した。

「保安部長！ リヤブコフ大佐！……ゐないかッ！ おう、そこにゐたな。――君、ペレッキイはどうした、あいつは……あいつは偽物だ！……え、もう追跡した。――有難い助かつた！」

あつけにとられてゐる保安部長の前で、カロロフは、兩手を握り合せて祈るやうな恰好をした。――禍根は絶たれた！

しかし、その時、突如として鋭い銃聲が劇場の中にひゞきわたつた。――觀客席から物凄い叫喚が起つた。

「しまつた！」

半ば夢中でカロロフは騒ぎのおこつた觀客席にかけこんで行つた。行きちがひに一人の士官が、抜劍のまゝ走りながら叫んだ。

「首相が――ロベルヒンが殺られた！」

座席の間はあう沸くやうに混亂してゐた。カロロフは、人に押されて、容易に現場に近づけなかつた。豪奢な椅子の上に折れ崩れてゐる首相の姿を僅かに望み得たばかりであつた。

その間に、もう一度激しい銃聲がした。憲兵が犯人に向つて發射したらしい。

再度の銃聲にさつと開いた通路をくゞつて、カロロフは漸く首相の死骸に近づくことが出来た。首相のそばには、ペレッキイの服裝をし

た一人の青年が胸板と頬に彈をうけて倒れてゐた。二つの死骸のそばで、リヤプコフ大佐が蒼くなつてふるへてゐた。

「閣下、下手人はペレツキイです。一度追歸へしたのがまた歸つて來たらしいのです。……私は自殺するよりほかはありません！」

「馬鹿！　自殺なんか何時でも出來る。――探せ、、、、、、はまだ劇場にゐるにちがひない。」

「、、、、、はこゝにゐる！」

それに答へるやうに、若い透きとほつた女の聲が、カロロフの耳朶にはねかへつた。彼は、死骸をとりまく人の輪の中に、大輪の花が――花のやうに美しい一人の少女が飛び出して來たのを見た。それと、自分の胸板に少女の彈をうけたのが同時であつた。……崩れるやうに膝をついた内務次官の身體をリヤプコフが危くさゝへた時、第二の銃聲がした。少女が、われとわがこめかみに彈を射こんだのだ。

彼女の身體は、倒れてゐる青年の死骸の上に、花瓣のやうに崩れた。

「愛するニコライ。――サルチコフの禁令を破つて……あたしは……來ました！」

それが最後の――ソフイヤ、カロメツエヴナの最後の言葉であつた。（終）



寄木細工の家

横溝正史

一

これから私がお話しようとする此の奇妙な物語は、一體何處から何處までが眞實で、何處から何處までが私の悪夢であるか、斯くいふ私自身にもよく分らないのです。何しろこの物語に關係してゐる三人が三人とも、不慮の死を遂げてゐるので、彼等の口から事實の眞相を聞くわけには參りません。勢ひ後になつて發見された、彼等の最期の場面から推して、かういふ事もあつたらうかと揣摩憶測するより他に仕方がないのです。それ等の憶測のうち、最も正しいと思はれる部分を綴つて、私は玆に一篇の物語を組立てゝ見る氣になつたのですが、それにしてもこの事件の起つたのはもう半年も以前の事です。それを今頃になつてどうして物語にして發表する氣になつたかと言へば他でもありません。最近になつて意外な方面に於て、この物語の説明に對して一縷の光明を投げかけるやうな事件が起つたのです。といふよりは、最近起つたこの事件のために、數ケ月以前の、あの奇妙な事件の説明がついたといふわけです。

さて、物語の都合上、最近に起つた事件といふのからお話しませう。諸君も御承知の××撮影所——これはあの撮影所の中で起つた事件なのです。

監督の葉山順三郎と言へば、諸君も既に御存知の通り、××撮影所ばかりではなく、日本でも有數の監督として知られて居りますが、その葉山監督が、ある夜晩くまでかゝつて、當時彼の作りかけてゐた『都會の歌』といふ映畫の完成に急いで居りました。一體この映畫は秋のシーズンのトップを切るために作られてゐた映畫で、九月一日から全國の常設館に於て一齊に封切される事になつてゐました。ところが種々な思はぬ故障の爲に、その九月一日もあと一週間に迫つてゐる

といふのに、撮影はまだ七分通りしか進行してゐない、事務所からはせつかれるし、營業部の方からは矢鱈に催促を食ふ、葉山監督はそれで躍起になつてゐました。

その晩撮影してゐたのは此の映畫の主人公に當る、さる富豪の令孃の寢室の場面で、グラス・スタヂオの中に組立てられた洋風のセットの中央には、一台の贅澤な寢台が置いてありました。その寢台の上に主人公の令孃が横になつてゐる。其處へ彼女に裏切られた昔の戀人が復讐のために忍び込んで來る。それを又主人公が彼女一流のコケティッシュな手管で散々翻弄するといふ筋で、この映畫としては一番のやま場なのです。主人公には言ふまでもなく此の撮影所第一の人氣女優美波綾子が扮する事になつてゐるのです。

葉山監督は彼一流の凝性から、この場面に使ふ寢台などもわざ／＼横濱まで出向いて、ある古家具屋の店先から見つけて來たくらゐでした。從つて筋から言へば至つて簡單な場面ですが、それが仲々思ふやうに捗りません。幾度も幾度も光線の具合やカメラの位置が置換られ、何度かの撮り直しがあつた後、愈々これが最後といふ撮影が始まつたのです。

時間はもう二時を過ぎてゐましたらうか。深夜の撮影所といふものは一種妖異な感じがするものです。スタヂオの中には、晝間作られた樣々なセットが、そのまゝ彼方にも此方にも奇怪な形をして暗闇の中に取殘されてゐます。豪奢な別莊風のセットがあるかと思ふと、その隣には貧民窟の裏町がある。さうかと思ふと直ぐその背後には竹藪があり古井戸があり、安達ヶ原の一つ家のやうな破れ家があります。それが皆深い暗闇の中に沈んでゐて、今にも其の中から諸々の魑魅魍魎が飛出して來さうに思はれるのです。晝間の喧騒が酷いだけ、一層無氣味で物凄い感じがするのでした。

さうした中にたつた一ヶ所、葉山監督が撮影を續けてゐる一劃だけが浮出したやうに明るい、それが丁度、深い海底の中へ灯をさし込んだやうな光景にも見えるのでした。撮影が進行して來ると、カメラを廻すクランクの音と折々怒鳴りつける監督の聲が、天井へピン／＼響くばかりで、セットを取卷いてゐる他の連中と言へば、皆啞のやうに默りこくつてゐます。誰も彼もが激しい勞働と、スタヂオの中の溫氣とにくつたりとして、半ば知覺を失つた態です。

かうした人々の心の間隙を掴んで、突然變な事件が持上つたのです。この事件を終始目擊してゐた一人の女優の話によると、それはまるで惡夢のやうな光景だつたと言ひます。誰も彼もがそれに氣がついてゐながら唯呆然として手をつかねて眺めてゐるばかりでした。尤もそれは、詳しい筋を知らない彼女達にとつては、當然さういふ風に場面が進行して行くものと思つてゐたせいもあるかも知れません。然し尠くとも總ての筋をよく嚥込んでゐた筈の葉山監督なり、主役の美波綾子なりまでが、それに對して何等抵抗を試みなかつたといふのは、まことに不思議と言はねばなりません。抵抗どころか、二人ともまる

で何者かに取纒かれたやうな恰好で、呆然と身を竦めてゐるばかりだつたといふ事です。

その變な事件といふのはかうです。

監督の合圖によつて先づ美波綾子が寢臺の上に横はりました。彼女は其處で種んな職人たちから來た手紙を一つ一つ叮嚀に讀んでは破り捨てるといふ簡單なお芝居をするだけなのですが、それでも凝性の監督は五六度撮り直しをしなければ承知出來ませんでした。さうしてゐる時です。ふいに彼女が横になつてゐる寢臺の天蓋が少しづつ、少しづつ下りかけて來たのです。それはあまり靜かな、あまり徐々な運動だつたので、初めの間は誰一人氣のつく者はありませんでした。然し、さすがに五寸となり、七寸となるに及んでは誰の目にもつかずには置きません。先づ第一にカメラマンが氣附きました。ついで監督の葉山順三郎の目にも映りました。當の本人美波綾子も一番最後に氣がつきました。それでゐて彼等は自分の目を信じる事が出來なかつたのです。そんな筈がない、そんな馬鹿々々しい事が――彼等はさう思ひながら構はず撮影を續けてゐました。それ程、それは遲々たる、そして靜かな運動だつたのです。然し、間違ひもなく寢臺の天蓋は、少しづつ、少しづつ、徐々に、正確なる速度を以つて四隅の柱を滑り落ちてゐるのです。何の物音も立てず、少しの亂りもなく、徐ろに美波綾子の體の上に押しかぶさつて來るのでした。

後になつて、そのセットを取卷いて、出を待つてゐた俳優が取調べられた時、彼はこんな事を陳述してゐました。

「實際それは惡夢のやうな光景でした。初めの間は私ども、わざとかういふ仕掛けがしてあるのだ、これがこの映畫の筋なのだ。さう思つて感心して見てゐたのです。然し、間もなくさうでない事が分りました。ところが不思議な事にはさうでないと分つてからといふものは、私どもは一層身動きが出來なくなつたのです。何んと言ひませうか、不動の金縛りにでもかゝつたとでも言ひませうか。唯固唾を呑んで立竦んでゐるより他に、どうする事も出來なかつたのです。」

さうです。此の陳述にある通り、誰も彼もがこれを目撃しながら、默つて立竦んでゐるばかりでした。先刻から見ると天蓋はもう一尺以上も下つてゐる。美波綾子の體を嚥込んで了ふのも間もなくの事だ、監督はこの得體の知れぬ光景に不思議な焦燥に驅られました。カメラマンは自暴自棄になつてクランクを廻してゐます。寢臺の上にゐる當の本人美波綾子は、もうまるで芝居をする事も打忘れて、呆然と天井を見詰めてゐるばかりでした。

突然激しい恐怖の色が彼女の顏に浮びました。何かしらわけの分らぬ啜泣きの聲が彼女の咽喉をついて迸りました。これ等の模樣は總てその時のカメラの中におさめられたので、後になつて再び見る事が出來たのですが、その時の彼女の恐怖の表情は、見る者をしてぞつとさせるやうなものでした。

彼女は激しく身悶えをし、そして周章て寢臺から外へ飛出さうとし

たのです。然しその時には既に遲く、寢臺と天蓋との間隙は、辛うじて彼女の片脚をはみ出させる程の廣さしかありませんでした。何かしら激しく彼女は叫びました。その聲によつて初めて不動の金縛りを解かれた連中は、周章てゝ寢臺の周圍に馳集りました。然し、これは一體どんな仕掛けがしてあるのでせう、大の男が數人よつてこの天蓋を持上げようとしたのですが、少しでも上に上る事か、反對に、徐々に、正確なる速度を以つて、寢臺の外にはみ出した美波綾子の片脚に食ひ込んで行くのでした。

まるで虫とり菫に掴つた哀れな蠅のやうに、彼女は激しく身悶えをしました。激しい苦痛の呻きと、救ひを求める聲が寢臺の中から洩れて來ます。人々はすつかり度を失ひ、わけの分らぬ事を口走りながら、唯々その周圍を右往左往するばかりでした。監督もカメラマンも助手も役者も、各々にこの厚い樫の蓋を打破らうと拳を固めて叩き、蹴るのでしたが、それはピクともする事ではありません。刻一刻とこの恐ろしい天蓋は、はみ出した脚に食ひ込んで行くのでした。そしてやがて、一種異様な、無氣味な物音が何處からともなく聞えて來ました。それこそ美波綾子の脚の骨が碎ける音だつたに違ひないのです。

「あゝ、あゝ、あゝ、」

と呻きとも啜り泣きともつかぬ聲が寢臺の中から洩れて來ます。そして、バリ／＼と樫の蓋を内側から掻きむしる爪の音が聞えました。然し、それと殆んど同時に、この恐ろしい虫とり菫は、美しい犠牲者を完全に嚥込んだまゝ、ピッタリとその口を閉ぢて了つたのでした。

それからの騒ぎは今更こゝに述べる迄もありますまい。種々な器具がこの厚い樫の天蓋を打破るために取寄せられました。幸か不幸か美波綾子は脚の骨を碎かれた刹那氣絶したと見えて、寢臺の中からは最早何んの物音も聞えませんでした。然し、あらゆる努力も、遂にこの無氣味な樫の蓋を打破る事は出來なかつたのです。凡そ半時間も、さうした冗な努力を續けてゐた事でせうか。――すると何んといふ皮肉か、人々の暴力に對しては頑として抵抗してゐたこの寢臺の天蓋が、ふいに、又もや徐々に、正確なる速度を以つて上り始めたのです。人々は恐怖と驚愕の色を以つてこの寢臺を見つめてゐました。それは丁度、獲物を完全に消化した虫とり菫が、再びその魔手を開くやうに、靜かに、音もなく口を開いて行つたのです。

そして人々は、その中に、氣絶したまゝ窒息した美波綾子の果敢ない屍を發見しなければなりませんでした。

それから後の事は管々しく述べますまい。唯これだけの事を言つて置きませう。この恐ろしい寢臺について、葉山監督は種々とその出所を調査したところが、意外にもそれが數ヶ月以前、あの不思議な死に態を遂げた洋畫家香取道之助の家にあつたものだといふ事が分りました。それが廻り廻つて××撮影所へ賣込まれ、そして茲に初めて恐ろしい秘密を曝かれる事になつたのです。

では、愈々數ヶ月を遡つて、この物語の本題に入りませうか。

二

香取道之助がどんな奇妙な性癖の持主であつたか、それを私は管々しく述べる事を避けようと思ひます。何故ならば、この物語を進めて行く間に、讀者諸君にも自ら、彼の世の常ならぬ性質がお分りになる事と思ふからです。

彼の兩親は彼がまだ五つか六つの時分に相繼いで亡くなつたといふ事です。然し幸ひな事には、彼には生涯相當の贅澤をして行けるぐらゐの財產と、兩親にも優る程の忠實な一人の乳母が遺されてゐました。ですから香取道之助は何不自由なく、中學を出ると（この中學時代に彼が得た唯一人の友人がかく言ふ私だつたのです）好きな繪を勉強したり、音樂に凝つて見たり、然し、そのどれもが長くは續かないで、結局は何もしないで遊んで暮してゐました。さういふ男の常として、彼も亦生活に對しては全く無氣力で、内部では酷く我儘な癖に、外へ出るとまるで意氣地がなく、從つて友達といふものを全く持つ事が出來ないのでした。始終書齋に閉籠つては、洞な空想の世界に自分自身を見出しては娯しんでゐるといふ風で、しかもその空想といふのが、世の常とは全くかけはなれた、妙に歪んだ荒唐無稽なものばかりでした。

それでも、流石に乳母の生きてゐる間は、彼のこの奇妙な空想も、單に空想に止つてゐるのみで、至極平穩無事だつたのですが、この乳母が亡くなつて、誰一人彼を制肘する者がゐなくなつたとなると、猛然として彼の荒唐無稽な空想は實際にまで移されて來たのです。私が初めてこれを知つたのは昨年の秋の事だつたと思ひます。

かなり長い間彼と交際を斷つてゐた私は、ある日思ひがけなくも彼からの手紙に接したのです。それによると彼は今小石川の久世山に新しい家を建てたから、是非一度遊びに來てくれといふのでした。彼が久世山に新しい家を建築中である事は、私もほのかに聞知つてゐました。然しそれが何時竣工したのやら、何時彼が其處に移り住んだ事やら、私は少しも知らなかつたのです。思ふに私自身も、この呪はれた男になるべく近寄らぬやうに警戒してゐたと見えます。然し、今かうして彼の手紙を見ると、急に又彼が不憫に思はれて、他に友達とてはない男の事だから、どんなに淋しがつてゐる事だらうと、私もつい出向いて行く氣になつたのです。

然し、あゝ、香取道之助のあの新しい家、それは何んといふ奇妙な建物だつたでせうか。それは丁度早稻田から牛込界隈を一目で瞰下ろす事の出來る高臺の突端に、一軒だけぽつねんと離れて建つてゐるのですが、遠くから見てもそれが仲々世の常ならぬ建物である事が頷けました。まるで眞四角な木の箱を置いたやうな建物で、奇妙な事には窓といふものが何處にも見當らないのです。

江戸川から小日向臺町の方へ登つて行くあの坂を登り切つたところに、かなり大きな石の門があつて、其處に香取道之助といふ表札、

えました。私はそれを入ると、建物の方へ歩いて行つたのですが、ところが不思議は窓がないといふだけに止らず、第一何處にも玄關らしい入口がないのです。私は二三度この四角な建物の周圍を歩いて廻つたのですが、遂に入口らしいものを發見する事が出來ませんでした。四方とも壁一面が、丁度つゞれの錦のやうに、大小樣々な木材を以つて縱横無盡につらねてあつて、その何處にも一分の隙も見出す事が出來ないのでした。私は途方に暮れながら、もう一度表の方へ廻りました。するとその時ふと眼についたのですが、表門から入つて來て、普通ならば玄關に當るところに、大きな銅鑼が一つ懸つてゐます。成程、これを叩けといふのだな――私は相變らずの香取道之助らしい趣味に苦笑しながらその銅鑼を叩きました。と、その音が通じたものか、奥の方から床を踏むスリッパの音が聞えて來ましたが、間もなくそれが私の直ぐ眼の前で止りました。疑ひもなく内部から私のために入口を開いて呉れようとしてゐるのに違ひないのです。それにしても、この奇妙な、まるで箱のやうな建物の何處が開くのか、私は多大の好奇心を以つて眼の前の壁を見守つてゐました。すると丁度鳩時計の車を捲くやうな音がキリ〳〵と内部から聞えて來ましたが、やがて

へば、これは子供たちがよく弄んでゐる箱根細工、あれを開くやうな仕掛けがこの建物に施してあると思はれるのです。私は暫く呆れ返へつて、この氣紛れな仕掛けを眺めてゐました。すると其の時、扉の中から『いらつしやいまし』といふ聲が聞えました。その聲に驚いて見ると、其處に二十二三の美しい女が立つてゐるのです。

『阪部さんでゐらつしやいませう。』

女は私が名前を言はない前に、さも人懷しさうな調子で會釋しました。

『あゝ、僕、阪部です。香取君はゐますか。』

『はい、先程からお待ちしてゐます。さあ、どうぞお入り下さいまし。』

さう言はれて私は腰を屈めるやうにして中へ入りました。ところが内部へ入つて見ると、外部から想像したとは打つて變つて、其處には普通の玄關があり、その奥には長い廊下が見えました。それに窓といふものが一つもないにも拘らず、内部は不思議な程明るいのです。唯變つてゐるのは、部屋と部屋とを隔てゝゐる壁ですが、これが例によつて悉く箱根細工式の寄木細工で拵へてあるのでした。そして此處にも扉といふものが何處にも見出す事が出來ないのです。

[illegible]部屋の前へ立止ると、輕く壁の上を叩きました。

するとそこで又しても先程のやうな不思議な仕掛けを以つて、私たちの眼の前にポッカリと洞穴のやうな扉が開いたのです。

『どうぞ。』

案内をして來た女は艶やかな眼で、意味ありげに私の顔を見上げると、そのまゝばたばたと廊下を向うの方へ去つて行きます。その後を見送つて置いて私は香取道之助の部屋といふのへ入つて行つたのです。

それはまあ何んといふ奇妙な部屋だつたでせうか。廣さにして丁度疊二十疊敷きくらゐの部屋なのですが、天井と言はず床と言はず、四方の壁に到るまで、その總てが悉く寄木細工で出來てゐるのです。其處には窓といふものが一つもなく、おまけに私が入つて了ふと、又してもキリ〳〵と時計の鎖を捲くやうな音を立てゝ、背後の扉がピッタリと締つて了つたのです。そして私たちは最早完全に、一つの箱の中に閉ぢ籠められたのです。

『よく來たね。』

香取道之助は呆氣にとられてゐる私の顔を見ながら、むつつりとさう言ひました。

『どうも大變な家だね。』

『ウム。』

私はがらんとした部屋の中を見廻はしました。見ると部屋の一隅に、は、この部屋にしてもまだ大きすぎる位の寢臺が一つ据ゑてあります。それは中世期の宮殿などでよく用ひられた、あの馬鹿々々しい程の立派やかな寢臺で、複雑な彫刻をした樫の天蓋からは、厚い緋色のカーテンがすつぼりと掛つてゐました。

『どうだね、この寢臺は？』

香取道之助は私の呆れ返へつた顔を見ながら、何故かにやりと笑ひながらさう言ふのです。然し、その時私は、この寢臺よりも、もう一つ奇妙なものをこの部屋の中に見附けてゐたのです。といふのは、寢臺を置いてある壁とは反對の側の壁に、何んと形容していゝか、大小無數の、様々な面が一杯に懸けつらねてあるのでした。香取道之助が何時から面などに興味を持ち出したのか私にもよく分りませんが、其處には世界中のありとあらゆる面が集めてあるのです。お能の様々な面を初めとして、張子のおかめ、ひよつとこ、般若、さうかと思ふとピエロだの、朝鮮の道祖神に似た物凄い面もあります。それが様々な隈取りの中に様々な表情をして、この奇妙な部屋の中を覗いてゐるのです。場所が場所だけに一種異様な凄さを私は感じました。一寸目を反らした瞬間など、無數の首が部屋の中を覗込んでゐるやうな錯覺に襲はれます。面だけが離れて壁に懸つてゐるのではなく、その背後には各々完全な體が續いてゐるのではないかとも思はれるのでした。私は何んとはなしに一種の鬼氣を感じ、それと同時に、名狀し難い焦燥に捉はれたものです。

『君は相變らず變な事ばかり娯しんでゐるんだね。』

やがて私たちが向ひ合つて腰を下ろした時、私は相手の顔をまじま

じと見守りながらさう口を切りました。

『變な事？　この面の事かい？』

『面といひ、この家といひ、それにこの鍵盤にしても餘程妙なものぢやないか。』

『さう、君にはさう思はれるかね。』

　さう言ひながら香取道之助は凝つと私の眼の中を覗き込んでゐましたが、何を思つたものかつと立上りました。

『成程、君には妙に見えるかも知れないね。然しこの建物はとも角、お面と鍵盤とはさう出鱈目な僕の趣味ぢやないのだよ。出鱈目の影に隱れて、僕はある目的のためにこれを集めたのだ。』

　彼はさう言ひながら、部屋の中を歩廻つてゐましたが、突然つと立止ると、ハッとした樣子で凝つと利耳を立てゝゐました。

『目的？　ほう、ぢやこれ等の變てこなものに何か意味があるといふのかね。』

『あるとも。』

　彼は再び歩き始めましたが、

『君はさつきの女を見たかい？』

と突然別の事を訊ねました。

　私は何故か、ふいに胸を鋭いもので抉られたやうな氣がしました。香取道之助は立止つて、凝つと刺すやうに私の顏を眺めました。が、やがて頰の筋肉をピク／＼と痙攣させると、突然咽喉の奥の方で低い笑ひ聲を擧げました。

『何も心配する事はないよ。僕は別に氣が違つてゐるぢやないのだから。』

　私はそれに一言も答へずに、相變らず彼の落着のない樣子を見守つてゐました。氣が違つてゐないといふ彼の言葉をそのまゝ信用する事が出來るであらうか。いや、／＼、それは自分は今氣が違ひかけてゐるといふ別の言ひ方ではなからうか。

『今僕は何んと言つたけな、女房を殺すつもりだと言つたな。君はそれを信じない、いや、或ひは僕を氣違ひだと思つてゐる。然し、僕が氣違ひでもなければ、出鱈目を言つてゐるのでもない證據を君に見せてやらうか。何故僕が女房を殺す氣になつたか、何故殺さなければならないか、その證據をね。』

　香取道之助は洞な聲音でさう言ふと、ふいに先程彼が腰を下ろしてゐた椅子を取上げました。私はそれを見て危く聲を立てやうとしたと

然し、幸ひさうした亂暴をするでもなく、彼は椅子を、僕の面の懸けつらねてある壁の側まで持つて行くと、その上に上つて無數の面の中からピエロの面を一つ取外しました。見るとその面の背後の壁には、精圓形の小さい孔が開いてゐるのです。

『君、この孔が何を意味するか知つてゐるかね。僕はね、向う側の部屋から、この孔に顔を出して毎晩毎晩この部屋の中を覗き込んでゐるのだ。分るかね、此處にかゝつてゐる無數の面は、つまりその僕の顔を隱すためのカモフラーヂみたいなもんのだ。彼奴は日頃見慣れた面の中から、唯一つ、眞物の俺の顔が覗いてゐるとは知らないで、夜毎種んな、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、のだよ。俺はもう三月に亘つてあの女の、、、、、、、、を、餘すところなくこの孔から見てゐた。見てやつた。亭主の鼻の下で、あの女は思ふ限りの、、、、、、、見せてくれたのだ。ね、ね、分つたかね。だから俺はあの女を殺さなければゐられないのだ。』

さう言つて香取道之助は、今や疑ひもなく氣違ひの笑ひを以つて高らかに笑つたのでした。

三

香取道之助の妻か、彼が言つたやうに果してさうした不貞な女であつたかどうか、私にはどうも疑はしいやうに思はれます。それは彼一流の妄想が、何時の間にやらさうした小説の筋を頭の中ではつきり作り上げてみたのではありますまいか。あの面の中から首だけ出して、妻の寢室を覗いてゐるといふ事からして、言はうやうなき淺間しい、そして氣違ひじみた所業ではありますまいか。

然し妄想患者の常として、一旦さう信じ込んだが最後、最早それは一つの明瞭なる事實となつて了ふのです。それは如何なる事實よりも却つて彼には强く、そして動かし難いものなのです。

彼は遂に哀れな妻を殺害する事に決心したのです。そして豫め用意してゐたあの恐ろしい死の裝置に、その夜初めて妻を殺害すべきからくりを仕掛けて了ひました。

『俺は一寸外出して來るよ。今夜は多分歸らないかも知れない。』

香取道之助はさう言ひ殘して、久世山の寄木細工の家を出て行きました。然し、決して本當に出て行つたのではなく、何時も妻を欺いてあの淺間しい覗きの所業をする時と同じやうに家の附近に隱れてゐたのです。そして程よい折を見計つて、裏口の、誰も知らない入口からこつそりと妻の寢室の隣へ忍び込みました。後になつて分つた事ですが、この奇妙な建物は、一見何處にも入口がないかの如く見えて、事實は到るところが出入口になつてゐたのです。成程、さう言へば泥棒に對してこれ位安全な建物はないと言つても差支へないでせう。この樣々な木材のうち、どれを最初に動かすべきか、それを知らないでは、どんな人間にもこの家へ入る事は出來ないのです。それと反對に、その鍵を知つてゐる人間なら、家の周圍の到る所が出入口ともな

るわけでした。

さて妻の寢室の隣へ忍込んだ香取道之助は、例の面の背後へ廻ると、そつと椅子を引きよせてその上に這上りました。そしてあのピエロの面の背後に開いてゐる小さい孔から手を差出すと、そつと面を取外し、そしてその面の代りに自分の顔を突出しました。それは小さい孔で、辛うじて首だけが入るぐらゐなのです。彼は椅子の上に爪立つて、凝つと妻の寢臺を見下ろしてゐました。部屋の中は仄暗で、向ふの方にある寢臺が唯朧ろ氣に見えるばかりです。

さうして、どの位待つてゐたでせうか。やがて扉を開いて女が一人部屋の中へ入つて來ました。彼女は寢臺の枕下にある電燈の灯をつけ、それから部屋の中を暫く片附けてゐましたが、ふと枕下にある洋酒の瓶を見附けると、急に氣がついたやうにそれをコップに注いで一口にぐつと呷りました。寢につく前に一杯の葡萄酒を呷る事が彼の妻の毎晩の習慣になつてゐるのでした。それを知つてゐる香取道之助は、ですから、今彼女がそれを飲干したところを見ると、思はず咽喉の奥の方でかすかな、低い聲を擧げました。今や彼女は完全に、彼の仕かけたあの恐ろしい虫とり菫の餌食にならうとしてゐるのです。葡萄酒の中には強い麻痺藥が仕掛けてある。そしてあの寢臺は人間一人の重量がかゝれば、何分かの後に自然と恐るべき作用をするやうに仕掛けられてゐるのです。

果して葡萄酒を飲干した彼女は、二三歩よろ〳〵とよろめきました。そして驚いたやうな樣子できよろ〳〵と部屋の中を見廻はしてゐましたが、やがて耐え難くなつたものでせうか、バッタリと寢臺の中へ轉ぶやうにして打伏したのです。

これを見てゐる香取道之助の形相は、最早悪魔の他の何者でもありませんでした。彼は咽喉を鳴らし、椅子を蹴つて歡喜に身を打慄はせてゐました。總てが計畫通りです。今あの恐ろしい寢臺の天蓋は、徐々に、正確なる速度を以つて下りつゝあるのではありませんか。そして妻は何事も知らずに打伏してゐる。この恐ろしい虫とり菫は、喰込んだ餌食が完全に窒息して了ふ迄、決して口を開かうとはしないのです。そして、適當な時間の經過の後、再び徐々に元へ返つて行く。何處にも證據といふものは殘らない。――

やがて厚い樫の天蓋はすつぽりと寢臺を包んで了ひました。そして間もなく、中から激しく寢返へりを打つ音と、バリ〳〵と天蓋の内部を掻きむしる音とが聞えて來ました。これを聞くと香取道之助は耐へがたい喜びのために、大聲を擧げて笑ひました。

「やつたぞ、やつたぞ、やつつけたぞ!」

彼はさう叫びながらバタ〳〵と兩手で壁を叩き、足を踏鳴らしました。さうする事が、今に自分を恐ろしい死地へ陷入れる事など、少しも彼は氣がついてゐないのでした。

總てが呆氣ない程簡單に片附きました。斷末魔の呻きとも思はれる、啜泣くやうな聲が一息長く續いたかと思ふと、彼はもう死の靜け

さでした。そして萬事の使命を果した天盜は、再び音もなく、四隅の柱を傳つて規則正しく上つて行くのです。

『やつたぞ、やつたぞ、やつつけたぞ！』

香取道之助は其處に現はれた妻の亂れた屍を見ると、思はず齒を嚙みならし、激しく兩手を振りながら叫びました。

然し、その時の事です。突然其處に、世にも奇妙な現象が起りました。といふのは他でもありません。先刻の妻が入つて來た入口から、又しても彼の妻が入つて來たではありませんか。あゝ、これは何んといふ事でせう。夢ではなからうか、氣が狂つたのではなからうか、然し、それは間違ひもなく彼の妻なのです。では、あの寢臺の上に橫になつてゐるのは――其の時彼の妻は何か口の中でぶつ〳〵言ひながら室内の電氣を點けました。それで初めて分りました。寢臺の上にゐるのは妻ではなく、女中でした！

言ひやうのない驚愕と憤怒と失望との叫びが、ごつちやになつて彼の口をついて出ました。彼は足を踏鳴らし、椅子を蹴つて、あらゆる呪咀の言葉を妻に向つて投げかけました。若しも其處に壁がなかつたら、彼は必ず妻に向つて摑みかゝり、改めて彼女を絞り殺したに違ひないのです。然し、運命は何んと云ふ皮肉でせう。彼が地團太を踏んで口惜しがつたはずみに、彼の體を支へてゐた椅子は後へ跳ねとばされて了ひました。そしてあの小さい孔から首だけ出してゐた香取道之助は、妻を絞り殺す代りに、妻に向つて激しい呪咀を口穢く投げつけながら、この孔のために絞り殺されて了つたのでした。

この奇妙な物語はこれで終るのです。

然し最後に一言附加へさせて戴きませう。あの××撮影所で非業な死を遂げた美波綾子、彼女こそ香取道之助のかつての妻だつたのです。これを思へば因緣の恐ろしさに身慄ひを禁ずる事が出來ません。彼女は良人があの無氣味な最後を遂げた當時、警察で嚴しい取調べを受けた時、飽迄も知らないと言張つた通り、この恐ろしい寢臺の秘密については、少しも知るところがなかつたものと見えます。

『私が部屋へ入つて行きますと、私の寢臺に女中が寢てゐるのです。それを起さうとしますと、突然、部屋の向ふの方から良人の聲が聞えて來ました。最初のうちそれが何處から聞えて來るのか、私には少しも見當が附きませんでした。そしてやつと氣が附いた時にはもう遲かつたのです。良人はあの孔の中から首だけ出して――』

然し讀者諸君よ。その時彼女は良人を救はうとして壁の背後へ廻りはしなかつたでせうか。そして、いざとなつて、急に氣が變つたのではありますまいか。悧巧な彼女は、良人のその場の樣子から、彼の秘密の一端を覺つたに違ひありません。女らしい憤怒と復讐――それに良人の足の下へ椅子を持つて行かなくても、誰に分るといふ氣遣ひはないのです。どうして彼女が斷末魔の苦しみに喘いでゐる良人の足を引張らなかつたと言へませう。

東京帝國大學論

青野季吉

I

東京帝國大學といふ存在と、すぐ結びつけられて想出されるのはあの封建風な赤門と、少し舊式だがとにかく近代風な石造の正門である。あの時代的に對立した二つの門の中に、春は洗つたやうな緑にかこまれ、秋は並木の紅葉を浴びて、わが國の『最高學府』『最高知識の綜合殿堂』が聳え立つてゐるのである。

まことにこの學問の殿堂こそは知識の光りを憧憬する青年學徒にとつて、その甘美な、或は崇高な夢を實現させてくれる天國である！學問の市場價値がどんなに下落しやうと、この天國で立派に洗禮をうけたものが、地上に下つていかに失業者の大群のなかに蠢いてゐやうと、そんなことにはおかまひなく、この殿堂の扉をめがけて、、まる

た條件の餘りにも乏しかつたがために、この殿堂の扉が彼にとつて永久に閉された扉であることを知つて、いかに寂寞と憂鬱とを感じたことか。

それが果して、謂ゆる最高學府であるか、文字通りに最高知識の綜合殿堂であるか、それともまた、學問の荒涼たる墓場に過ぎないか、それはあとで觀るとして、東京帝國大學が、わが新興日本の文化に與へた貢獻は、眞に絶大なものがあると言つてよい。

東京帝國大學は、資本主義日本の建設にあたつて、その前衛指導者を養成するために、明治の初年に國家によつて建てられたものである。彼女はこの使命を見事に果した。政治社會は言ふに及ばす、實業社會、學術社會の尖端を切つてゐる分子が、殆んど彼女の胎内から生したものであること、及びその尖端を支持する、、、綜合生活者、頭

[illegible]
に貢獻したといふ文化史的意義は滅却するものでない。

　それはそれでいいとして、この社會は刻々に流動して止まない。東京帝國大學といふ學問の殿堂を築き上げた資本主義日本、その意識的指導者たる國家も、最早、昨日のそれと同じものではない。と同樣に東京帝國大學といふ存在も、その赤門は舊態依然として居り、構内の並木の綠に隱見するいらかに變りはなくとも、刻々に變らざるを得ない。これは分り切つた話である。

　だが、問題はその變り方である。

　東京帝國大學もそれによつて規定される大學令には、『、、の須要に應ずる學術技藝を教授』するといふ目的と、『その——學術技藝のこと——蘊奧を攻究』するといふ目的とが、いかにも樂天的に、上下に並べ記されてある。これは何と言つても、矛盾し對立する目的である。ここにある『、、』といふ文字をどう解するか、と言つた詮議は、餘計な暇つぶしである。、、、な、、、な、、、などといふものの、十索であり得ないことは、誰にも分つてゐる。、、、、、、、の意味した、、が、、、、、、であり、大學の實踐的指導者の受取つた、、が、これと寸分違つたものでないことは、詮議の餘地のないことである。そこでその、、の須要に應ずることと、學問の蘊奧を究めることとは最初から對立した二つの目的である。この對立から來る闘爭が、わが學問の平和な殿堂に、惱ましい陰影を投ずるのは止むを得ない。

[illegible]
記したには理由がある。と言ふのは當時にあつては、この二つの目的の喰ひちがひが、表面に表はれて來ない社會的理由があつたからである。言ひ換へると、ブルジョアジーの學問に對立するプロレタリヤの學問が生れる可き、社會的成熟がなかつたからである。、、、、、、が、爾く樂天的だつたのも尤である。お蔭で、、、の重要な地位をねらう青雲の志ある青年と、科學の蘊奧を究めやうとする清教徒的な青年とが、仲よく肩幅をならべて、赤門を入つて行くことが出來たのである。

　だが、それは一定の時期までである。、、須要と、學問の蘊奧といふ、双頭を與へられて產み落された怪物は、その双頭の噛み合ひによつて苦悶せざるを得ない。この數年來東京帝國大學の內部から發して社會に震幅を與へてゐる問題は、この苦悶の發現に外ならないのである。

　この苦悶に堪え兼ねて、厄介至極な片方の首を切つて落そうとするのが、東京帝國大學——獨り東大のみでないが——のとつてゐる解決法である。この解決法が止むを得ないものかどうかは別問題として、これでは、尠くとも『最高學府』が『最高學府』でなくなることは明らかであり、大學の文化史的意義の消滅、大學の轉落の叫ばれるのも、止むを得ぬことである。

II

東京帝國大學の苦悶、自己分裂は、數ある學部のうちで、經濟學部において最も早く起つた。これは意義のある現象である。

卓拔、眞摯な學者高野岩三郎博士、マルクス經濟學研究の權威櫛田民藏氏、人間的に多少のロマンチックな色彩を帶びた、眞面目なマルクス主義研究家森戸辰男氏らが、東大を去つて大原研究所にその共同研究の城廓をめぐらすに到つた事情の仔細は、私の詳に知るところでない。また知る必要もない。だが、若し博士らにして、東大の學問の殿堂の内部において、その研究に外的・内的の何の、、を感じなかつたら、その机を箱根を越えた彼方の大原研究所に移す必要はなかつたであらうことは、想像するに難くない。眞率な研究家・敢爲なマルクシスト大森義太郎氏らが、『、、教授』といふチヤーナリスチックなレツテルを附されて、東大經濟學部の、、、、と、その背後にひかへた『、、、る手』の、、によつて締め出されたことは、まだ私だちの記憶に新らしい。社會科學の共同研究をやつたと言ふ理由で、東大の『、、ある』學生名簿から除かれた學生が、主として經濟學部のそれであつたことも、同じくつい昨日の事實である。

東大に數ある學部のうちで、それならば、何故經濟部が、最も早く自己分裂を開始したのか？　この學部だけが、特に自治的訓練が薄弱だつた——或る論者の言ふやうに——のであらうか？　そんな筈はない。そんな理窟が立つならば、資本主義社會で一番組織の薄弱なのは、經濟組織だと言へやう。何となれば一番最初に摩擦の起つたのはそこだから。他の何れの學部でもなく、正に經濟學部に最も早く、最も顯然と、且つ最も激烈に摩擦の起つたのは、學問の蘊奥の攻究と、、の須要にたいする適應とが、こゝで最も早く、最も顯然と、且つ最も激烈に衝突すべき社會的理由があつたからに外ならない。

プロレタリヤの科學的達成が、最も前進してゐるのは、誰も知つてゐる通り、經濟學においてである。マルクス主義經濟學は、ブルジョアジーの經濟學にたいして、立派にその科學性を確立してゐる。否、マルクス主義經濟學は今日在り得る、、、、としての經濟學である。『經濟學はブルジョア的である限り、すなはち、資本制的秩序を歷史的に過渡的な發展段階としてでなく、逆にこれを社會的生產の絕對的な且つ終局的な姿として、理解してゐる限り、それはたゞ、、、、が、、狀態に止まつてゐるか、あるひはたゞ孤立した現象となつて顯はれてゐる間だけ、科學として止まり得るにすぎない』（マルクス）からである。こゝまでの認識に立たなくとも、マルクス主義經濟學が、十分にその科學性を確立してゐることは、保守主義のオックスフォード大學が、二年に亘つて、リシゼーにマルクス研究を講ぜさせた事實や、ベルリン大學が、いや〱乍らにせよ、クノーに唯物史觀の講義をさせてゐる事實で見ても、明白である。東大の教授、學生ともにその屬する學部が何であらうとも、今日の社會的現實から意識的・無意識的にう

ける刺戟に變りはないであらう。だが、それが學問研究に關聯して、最も早く、最も顯然と、且つ最も激烈に、經濟學部において現はれたのは、これがためである。こゝでは、マルクス主義經濟學の研究を措いて、否尠くとも、その研究を交へることなしには、『學問の蘊奥の攻究』は空虛に終るからである。たとへ彼がマルクス主義者でなくとも多少とも『學問の獨立・自由』を眞面目に欲求してゐる正眞正銘の自由主義的教授・學生であれば、それだけで、經濟學部では既に、『、、の須要……』の目的と衝突する目己を見出さなければならないのである。

法學部や文學部は、經濟學部のやうに、今日まだ顯然と自己分裂を起してゐない。尤もそれに屬する學生には既に若干の批判的分子を出してゐるが。だが、法學部や文學部が、經濟學部と同樣に顯然たる摩擦を起すのは、、、、、、、、、、。尠くともそこに、、、、、、、、、が殘つて居ればである。手近いところで文學にしてからが、プロレタリヤ文學理論、プロレタリヤ美學が、世界的共働のもとに形成されつゝあることは、眼前の拒む可からざる事實である。

それが十分な科學性を獲得して來る時、學問としての文學の蘊奥を究む可き大學文學部が、それを無視することは、その科學的精神が到底許さないであらう。だが、その時こそ、文學部の科學的實踐と、大學の、、、、、とが衝突する時である。

工學その他の技術部門や、理學部の如きは、そうした摩擦から最も遠い範圍と見做され得るであらう。それは極めて自然である。だが、社會科學に關して起つたことが、例へば自然科學に關して、、、、、、、、、、、、、、、、、。

わが東京帝國大學には、例へば長岡半太郎博士のやうな世界的な物理學者がゐる。われ〳〵はまだ博士から、その物理理論の哲學的基礎づけについて何等聽くところはないが、若し博士にして觀念論的方向でなくて、唯物論的方向を鮮明にして來るやうなことがあり、それが他と鋭どく對立するやうな場合に立到つたら、どうであらう。そしてそれが大學を、、する外部の、、によつて、その、、の觀念的基礎を、、するものと觀られたら、どうであらう。その時は、經濟學部門におけるとは陰影を異にし、發現の姿は異にしても、やはり同質の摩擦がそこに起らねばならぬことは、言ふまでもない。しかも『近代物理學は、いま産褥に横はつてゐる。それは辨證法的唯物論を産まんがため』（レーニン）なのである。その、、、、、ことは、、、、、、言つてよいであらう。

いづれにしても、謂ゆる『最高學府』が、本統の意味の最高の學府でなく、、、、、、、、科學だけの最高學府と化し、謂ゆる最高學術の綜合殿堂に、、、、、、、の入つて來ること、現にそれが進行しつゝあることは、、、、、事實である。

III

東大の經濟學部が、最も早く自己分裂を見せた學部であることは、いま述べた通りだが、その分裂の最後の場面で、どういふ、、、が演ぜられたか？　これは私たち外側者にとつて、興味ある挿話であり、『最高學府』『學問の自由』の現實内容を知る上に、貴重な資料たるを失はない。

私は、この資料を雜誌『文藝春秋』(九月號――當世學者氣質――)に見出した。いまそこに、多少興趣的要素を交へて敍せられてゐる事實を摘證すると、かうである。

――大正十四年の春、クリスチヤンで眞面目な學者の×××教授が、ドイツ語經濟學の教科書にだしぬけにマルクスの『資本論』を選んだ。教授會議がビツクリしたのも無理はない。×××××教授や、××教授や、少し若いところで××鐵藏教授が、この選定に激しい抗議を挾んだ。これにたいして××××教授や、×××××教授は、科學の名においてその選定を支持した。教授會議では反對側が絕對多數であつた。が議長××博士は裁決をしなかつた。『資本論』を否決したとあつては、最高學府の面目が立たぬと言ふのである。そして×××教授の泣落しにかゝつた。温厚なクリスチヤンの教授は、仕方なく『資

に煮くり返つた。當の××助教授を最も熱烈に支持したのは×××××助教授であつた。×××××教授も、平生の自由主義の手前、それを支持し、××××授授もそれを支持した。三年前の『資本論』の支持者××、××の兩教授が依然その態度をつゞけたのは言ふまでもない。それに對して××、××、××の諸博士は、頑強に反對した。或は懇談的にその取下げを哀願した。ために自由主義者××教授などは、歎論に傾いたほどであつた。この度では三年前と異つて、『資本論』支持者が多數を占めた。そこで前とは異つた意味で決定が延期された。その間に泣落しや、懇談が行はれたことは言ふまでもない。だが問題は學問の自由といふ、非人情的な問題である。そんなことで圓滿解決するはずがない。一週間後の教授會では、いよ〳〵採決することになつた。反對派は無記名投票といふ戰術に出やうとしたが、××助教授は擧手によつて堂々と贊否を決しやうと提案した。反對派には前記の老教授の外に、××××教授や、若い××、××、××の三助教授があつた。そして支持派と同數だつたのだが、日頃自由主義者をもつて任ずる×××教授が、反對派に一票を投じたので、『資本論』支持派は、奮鬪効なく破れてしまつた。――

[illegible]の[illegible]がどこまで貫徹か、私はこれを知らない。だが、これがほ

學問の自由などは惡魔に賣渡して仕舞つて、ひたすら大學、、の、、、、に、、やうとする保守的官僚的な老教授だちと、それを支持してひたすら學界の地位を求める若い助教だちとが在る。その對極には、學問の自由と科學の神聖の名において、その、、、への、、を飽まで拒否する眞摯な學者及びマルクシストが在る。そしてその中間には浮動し旋回する自由主義教授が在る。これこそ獨り經濟學部の現實であるばかりでなく、今日の社會の現實の縮寫ではないか。そしてまたこの東大經濟學部の現實こそ、『最高學府』『學問の殿堂』にたいする、有力な偶像破壞者ではないか。

　これと關聯して想ひ出されるのはその後キレイサツパリと大學と手を切つて一介の在野學徒となつた×××××氏と××××教授との間に行はれた押問答である。いま正確には記憶しないが、××教授の論點は、一、大學の自治を求めるならば、その自治を可能にする條件の有無を考慮せねばならぬ、二、大學の自治を求める以上、この自治體の構成員は、この自治體に共通の構成意志を持たねばならぬ、等々にあつたやうである。これにたいして×××××氏は、『條件の有無』を考慮した結果、××教授はいまその條件がなく、現在大學の內部には分裂的傾向があると言つて居り、その傾向を導いたものがマルクシストであるとしてゐるのは、道理がわからないと反駁した。實際、例へば×博士が、信徒的學生の一隊を率いて、××××を唱へて都大路を練り歩いても、××教授の謂ゆる『大學のディスシプリン』を亂したことにならず、『分裂的傾向』を導いたことにならぬのに、マルクス學者が教壇でマルクス研究の結果を講じ、その學說に興味と同感とを持つ學生を率ひて、共同研究に從ふことが、何故、『大學のディスシプリン』を亂し、『分裂的傾向』を導くことになるのか？　それが問題である。それに××教授の謂ゆる大學の『共通の構成意志』とは、他の何ものでもなく、學問の自由討究といふ意志でなければならぬと、私だちには速斷されるのである。

　それはとにかくとして、進步的な學者として世に知られてゐる××教授までが、マルクシストの××××××××××られるやうでは、他は推して知る可しである。

　森戶辰男氏の『大學の顚落』は、遺憾ながら眞實である。

IV

　東大は、早稻田や慶應にくらべると、たしかに優れてゐる。分科の多いこと、設備のいいこと、そういふ點で優れてゐるのは、言ふまでもなくそれが國家の大學だからである。早稻田や慶應が物質的に東大に劣るのは、どうにも仕方のない話である。だが、東大はそういふ物質力の働く方面でばかりでなく、他の半面でも確かに優れてゐる。否尠くとも過去には優れてゐた。

　それは卽ち、『學門の蘊奥の攻究』といふ半面である。國家や社會に謂ゆる實用的に必要な學藝と言ふ方面では、早稻田や慶應は、その

する學部の範圍で、必ずしも東大に劣りはしない。寧ろその範圍では、東大に優つてゐるといふ見方が成立さへするかも知れない。しかし學藝の蘊奥を攻究するといふ方面では、何と言つても私立の諸大學は東大の敵ではないのである。

ところでこれまで論述して來たやうに、東大は、事實上、學問攻究の自由を失つて來てゐる。尠くとも失ひつゝある。自然科學の範圍では、今日のところまだそれは、殆んど表面に表はれてゐないが、廣い意味の社會科學の範圍では、それがハッキリと表面に出てゐる。

事態がかうなつて來ると、私立諸大學にたいする東大の優越は、甚しく失はれて來ることになる。實際、その半は、現に失はれてゐると言つてよい。だが、一般の意識は必らずしも直ちに事實を反映しないのが常で、一般にはいまでも迷信的に、東大にこの優越が存するものと思はれてゐる。學藝の最高・最深の堂奥は、あの赤門と並木のうしろに、おごそかに存するものと思はれてゐるのである。一般がさう迷信するのは仕方がないとして、東大のいらかを望んで集つて來る學生までが、、、、、、、、、、、、。すくなくとも、その大部分は、さう、、、、胸をときめかせてゐるのである。大學の當事者はまた、自らの尊嚴の故に、及び自らを、、する必要のために、その、、を累積させやうとつとめてゐる。これはまこ

藝の蘊奥』は、今日及びこれからは、何處に求められるのであるか？それが東大を去つて私立の諸大學に赴くと思つたら大間違ひである。私立の諸大學は、ますます學問上のアメリカニズムを發揮させて行くといふのが、與へられた運命である。東大及び官立大學が、ますます、、──全體としてのブルジョアジーの機關──からの拘束を強くされて行つて、學問の自由の度合を狹めて行くと同樣に、私立諸大學は直接に個人乃至グルウプ的の金融資本家の拘束を強くされて行つて、大學の社會的使命──學問の自由討究──をますます失はざるを得ないからである。といふのは、私立諸大學も亦、今の社會では一個の營利的企業であつて、資本の君臨を仰がなければ立つて行かないからである。日本の私立諸大學が、シンクレーの『ダース・ステップ』に描かれてゐるやうに、頗く露骨に、頗く高度に、金融資本家のものとなり切ることは、決して遠いことではないと思はれる。こゝに學問の自由や、學問の蘊奥の求められる害がない。

そこで當然に考へられるのは、學問の一分科を限つての研究所である。尠くとも廣い意味の社會科學の諸分科の關する範圍では、學問の自由保持、學問の蘊奥攻究において、研究所が、今後ま

強めて行

てでなければ、研究の自由などのあり得やう筈がないのである。東大の一『權威』たる小野塚博士の國家學ならば差支へない。言ひ換へると、、、な、、、、、、、、ならば、もう一度言ひ換へると、、、、、、、、、、、、、、、、、、、國家學ならば差支へがない。だが、それと對立し、唯一の乃至はヨリ多くの、、、を持つ、、、な、、、な國家學は、言ひ換へれば、、、、、の『、、、、、のうちに、同時にまた、、、、、、その、、、、の、理解を含め』(マルクス)た國家學の前には、官設大學の扉は永久に閉されてゐるのである。

少し枝論的になるが、わが國に研究所、インスティチュートが發達する可能があるかどうか、これは別問題である。インスティチュートは眞摯・正直な學者があつたとしても、それだけでは建設され得ない。相當な財力が準備されなければならぬ。が、財力を左右し得る人間で、學問の自由討究のために貢献しやうとする、徹底した自由主義的心情の持主が、果していまの日本に求められるか否かは非常に疑問である、かういふ點でも、かつて自由主義の徹底したことのない日本の事情は外國とは大いに異るのである。

V

自然科學的の方面は措いて、社會科學や文學の方面で、東大は、その胎内から生れた卓拔な學者を多く失つてゐる。誰も知つてゐる最も目についた例をあげると、河上肇博士、高野岩三郎博士、吉野作造博士、それから方面が變つて、坪内逍遙博士、夏目漱石等である。かういふ卓拔な學者が、東大を去つたについてはその人によつて理由が各々異つてゐる。私の記憶に間違ひがなければ、むかし河上博士が東大の助教授をやめたのは、宗教的生活に入るためであつた。吉野博士は恐ろしく反社會的な理由から、博士の意志に反して東大を去つたのだと聞いてゐる。

この卓拔な學者だちが東大を去つたについては、かく個人的に事情と理由とを異にしてはゐるが、たゞ一點で一致してゐる。それは外でもない。東大にゐては『仕事』が出來ないか、乃至は存分にさせて貰へないからである。しかもその『仕事』がいつの場合でも――河上博士の場合は一寸ちがふが――その人々の學問研究を中心としたものなのである。

それほど東大は、その立場の如何に拘らず、、、、な學者だちにとつては、居りづらいところと見える。この居りづらさは、いままで論評して來た東大にたいする、、、、、、以外に、他のさま〴〵な内在的な拘束の存在を思はせる。例へば最もハッキリした例で見て坪内博士がシェクスピーアを文献的に研究し講述してゐるのはよい。だが、それから一歩積極的に、シェクスピーア劇を實際に脚光の上に照し出すべく、生きた劇場人を指導することは東大にとつてはイケないのである。シェクスピーア學の攻究が、文献的研究と實演的研究

の綜合によつて始めて全ふされることは、醫學の攻究が理論的研究と臨床的實踐との綜合によつて始めて全ふされるのと同じことであるのだが、敎授坪內博士——博士は東大の敎授にはならなかつたが——が劇場人を指導することは、東大敎授の『品位』にとつて『面白からぬ』ことなのである。夏目漱石の場合も同じである。これも內在的拘束の一つである。

、、、から、、、の拘束、それに加ふるに、かういふ內在的な拘束——最高學府としての東大は、眞に、、、てゐると言つてよいであらう。これはひとり東大に限つての話ではないが、最高學府として大學に、、をかけるものには、そのほかにその敎授團の大多數者の學的、、がある。ほとんどそこに記されてある文字も消えんばかりの古ノートを、年々にかすれて行く聲で繰返すに過ぎない講義——この悲喜劇は今日では誰にも知られてゐる大學挿話である。この學的、、は、十八世紀の昔アダム・スミスがむきになつて論じたやうに、大學敎授らがその學的能率とに無關係に一定の、、を、、されてゐるところから來るものだ。その定給制を廢して、講義の實質にたいする生徒だちの自發的な報謝をもつてすれば、自然に除かれるものかどうかは俄かに斷じ難いが、とにかく學的、、は事實であり、その原因の一として彼

東大はかく內的、外的の壓力のために、たしかに轉落しつゝある。だがなほ、東大が『最高學府』たることにおいては、變りはない。たゞしそれは『、、の須要に應ずる學術技藝』の範圍においてである。然り、、、、——である。平面的にも立體的にも、この朱線を引かれた世界內である。かくて赤門の彼方を憧憬してつどふ若き生命は意識すると否とに拘らず、この朱線內の、或は、、の、、、たるべき運命をもつてゐる。（九・六）



九州炭坑街放浪記

林　芙美子

母は、九州桜島の温泉宿の娘である。母が他國者と一緒になつたと云ふので、母は鹿兒島を追放されて父と落ち着いたところは、馬關の下關であつた。私が始めて空氣を吸つたのは、その下關である。

兩方の故郷に入れられない、兩親を持つ私は、したがつて旅が古里であつた。それ故、渡り者である私は、この戀ひしや古里の歌を佗しい氣持ちで習つた。

八つの時、私の可憐な人生にも、暴風を孕むやうになつた。若松で、太物の糶賣りをして、かなり財産をつくつてゐた父は、長崎の沖の、天草から逃げて來た、濱と云ふ藝者と一緒になると、雪の降る舊正月を最後として、母は私を連れて家を出てしまつた。若松と云ふところは、渡し船に乘らなければ、行けないところだと覺えてゐる。

今の父は複數である。

これは岡山の人間で、實直過ぎる程の小心さと、アブノオーマルな山ッ氣とで、人生の半分は苦勞で埋れてゐた。

私は連れ子になつて、此父と一緒になると、ほとんど住家と云ふものを持たないで來た。どこへ行つても木賃宿である。

——お父つあんは、家が好かんとぢや、道具が好かんとぢや……。

一

北九州の或る小學校で、私はこんな歌を習つた事があつた。

更けゆく秋の夜　旅の空の
佗しき思ひに　一人なやむ
戀ひしや古里　なつかし父母

私は宿命的に放浪者である。

私は古里を持たない。

私は雜種でチャボである。

父は四國の伊豫の人間で、太物の行商人であつた。

母は私にこう教へてくれた。

そこで、人生いたるところ木賃宿ばかりの思ひ出を持つて、私は美しい山河も知らないで、義父と母に連れられて、九州一圓を轉々行商してまわつた。

私が小學校と云ふ、結構な遊び場を持つたのは長崎である。ざつこく屋と云ふ木賃宿から、その頃流行の改良服と云ふのをきせられて、南京町近くの小學校へ通つた。それを振り出しに、佐世保、久留米、下關、門司、戸畑、折尾と言つた順に、四年の間に、七度きりきり舞ひさせられて、私には親しい友達が一人も出來ない。

―お父つあん、俺アもう、學校さ行きとうなかバイ……。

せつぱつまつた思ひで、斷然私は小學校を蹴とばしてしまつた。

それは丁度、直方の炭坑町にうつり住んだ私の十二の時であつた。

―ふうちやんにも、何か賣らせませうたいなあ……。

遊ばせてはモッタイナイ年頃である。

二

直方の町は明けても暮れても、どす黑い空であつた。

砂で漉した鐵分の多い水で、舌がよれるやうであつた。

大正町の馬屋と云ふ木賃宿に落ちついたのが七月。父達は相變らず、私を宿に置きつぱなしにすると、荷車を借りて、メリヤス類、足袋、新モス、腹卷、そういつた物を行李のまゝのせて、母が後押しで炭坑や、陶器製造所へ行商に行つてゐた。

始めての見知らぬ土地である。

私は三錢の小遣を兵古帶に卷いて、町に出た。

門司のやうに活氣のある街でもない。長崎のやうに美しい街でもない。佐世保のやうに女が美しくもない。

骸炭のザクザクした道をはさんで、煤けた軒が不透明なあくびをしてゐる。

駄菓子屋、うどんや、屑屋、貸蒲團屋、居酒屋、まるで荷物列車だ。その店先きには、町を歩いてゐる女と正反對の、これは又不健康な女達が、尖つた目をしてゐた。

七月の暑い陽ざしの下を通る女は、汚れた腰卷きと、袖のない襦袢きりである。

夕方になると、シャベルを持つた女や、空のモッコをぶらさげた女の群が、三々五々哄笑して行く。

おいとこそうだよの唄にも花が咲く。

私の三錢の小遣は双兒美人の豆本と、氷饅頭二つで消えてしまつた。

間もなく、私は小學校へ行くかわりに、須崎町の粟おこし工場に、日給貳拾參錢で通よつた、その頃、笊をさげて買ひに行つてゐた米が、たしか拾八錢だつたと覺えてゐる。

夜は近所の貸本屋から、腕の喜三郎や、横紙破りの福島正則、不如

臣、なさぬ仲、渦巻などを借りて讀んだ。

そうした物語りの中から、何をひらつたか？　メデタシ　メデタシの好きな、虫のいゝ空想と、ヒロイズムとセンチメントが、海綿のやうな頭をひたしてしまつた。

私の周圍は朝から晩まで金の話である。

私の唯一の理想は、女成金になりたい事だつた。

雨が何日も降り續いて、父の借りた荷車が雨にさらされると、朝も晩も、かぼちや飯で、茶碗を持つのが淋しくなつた。

私の務めてゐる、粟おこし工場は、個人經營なので、非常に時間が不規則であつた。

五時の引けでも、一時間位は手傳はされるのだつた。

仲々めんどくさい世渡りだと、私は七人の女工達へうつたへたが一笑に附されてしまつた事がある。

三

此木賃宿には、通稱シンケイ（神經）と呼んでゐる、坑夫上りの狂人が居て、ダイナマイトで飛ばされて馬鹿になつた人だと宿の人が云つてゐた。

毎朝早く、町の女達と一緒にトロッコ押しに出かけて行く、氣立の優さしい狂人である。

私は此シンケイによく虱を取つてもらつた。

彼は後で支柱夫に出世した。

外に、島根の方から流れて來てゐる、祭文語りの義眼の男や、夫婦者の坑夫が二組、まむしの酒を賣るテキヤ、親指のない淫賣婦、サーカスよりも面白い集團である。

——トロッコで壓されて指取つた、云ひよるけんど、嘘ばんた、誰ぞに切られたつとぢやろ……。

馬屋のお上さんが、片目でニヤリと笑ひながら母にこう云つてゐた。

或る日、此指のない淫賣婦と、風呂に行つた、

ドロドロの苔むした暗い風呂場である。

腹をぐるりと、一巻きして、臍のところに朱い舌を出した蛇のいれずみをした女、私は九州で始めてこんな凄い女を見た。

私は子供故、しみじみ正視して薄青い蛇のいれずみを見た。

木賃宿の夫婦者は、たいてい自炊で、自炊でない者達も、米を買つて來て焚いてもらつてゐた。

八月である。

ほうろくのやうに暑い直方の町角に、カチウシヤの繪看板が立つやうになつた。

異人娘が、頭から毛布をかぶつて、雪の降つてゐる停車場で、汽車の窓を叩いてゐる圖である。

すると間もなく、頭の眞ん中を二つに分けたカチウシヤの髪が流行つて來た。

　カチウシヤ可愛いや　別れの辛さ
　せめて淡雪　とけぬ間に
　神に願ひを　ラ、かけませうか

なつかしい唄である。好ましい唄である。
此炭坑街に、また〻く間にカチウシヤの唄は滲透してしまつた。
ロシヤ女の純情な戀愛、私は活動を見て來ると、非常にロマンチックになつてしまつた。浮かれ節（浪花節）より外芝居小屋に連れて行つてもらへなかつた私が、たつた一人で隠れて、カチウシヤの活動を見に行つたのである。
　當分は、カチウシヤで夢見心地であつた。
　石油を買ひに行く道の、白い夾竹桃の咲く廣場で、町の子供達と、カチウシヤごつこや、炭坑ごつこをして遊んだ。
　炭坑ごつこの遊びは、女の子はトロッコを押す眞似をしたり、男の子は炭坑節を唄ひながら土をほじくつて行くのである。

四

　私はヘラヘラとしてゐた。
　一ヶ月ばかり努めてゐた。粟おこし工場の廿三錢也にもさよならをすると、私は父が仕入れて來た、ヒネ物の扇子を鼠色の風呂敷に脊負つて、遠賀川を渡り隧道を越して、炭坑の社宅や、坑夫小屋に行商して歩いた。
　炭坑には、色々な行商人が這入り込んでゐた。
　――暑うしてたまらんなア。
　私には、こうして親しく言葉をかける相棒が二人あつた。
　松ちやん、これは香月から歩いて來る駄菓子屋で、可愛い十五の少女であつたが、間もなく、青島へ賣られて行つてしまつた。
　ひろちやん、干物屋の賣り子で、十三の少年だが、彼の理想は、一人前の坑夫になりたい事だつた。
　酒が吞めて、ツルハシを一寸高く振りかざせば人が驚くし、町の遊戯は見られるし、月の出た、遠賀河のほとりを、私はこのひろちやんの話を聞きながら歸つた。
　その頃均一と云ふ言葉が流行つた。私の扇子も均一で拾錢、鯉の繪や、七福神、富士山、皆はがんじような奴が七本ばかりついてゐる。毎日平均二十本位は片づけていつた。鼠色のペンキのはげた社宅の妻君よりも、坑夫長屋をまわつた方がはるかに扇子はさばけて行つた。
　外に、ラッパ長屋と云つて、一棟に十家族も住んでゐる鮮人長屋があつた。
　アンペラの壁の上には、玉蜀黍をむいたやうな子供達が、裸で重なりあつて遊んでゐた。

烈々とした空の下には、掘りかへつた土が口を開けて、ゴロゴロ……雷のやうに遠くではトロッコの流れる音が聞える。

晝食時になると、蟻の塔のやうに材木を組みわたした、坑道口から、泡のやうに湧いて出る坑夫達を待つて、扇子を賣りに歩いた。坑夫達の汗はリンリンとした、水ではなく、黒い飴である、今、自分達が掘りかへした石炭土の上に、ゴロリと横になると、パクパクまるで金魚のやうに空を食つた。

ゴリラの群である。

美しく光つてゐるものは、ツルハシの尖光だ、只動いてゐるものは、峰を流れて行く横風なモツコである。

晝食が終るとあつちからも、こつちからもカチウシャの唄が流れて來る。

やがて夕顔の花のやうなカンテラの灯が、パアパアと地を這うと、ブウ……警笛の音だ、

國を出るとき玉の肌……

何でもない唄聲であるが、もうもうとした石炭土の山を見てゐると眞實切ないものがある。

扇子が賣れなくなると、私は一つ壹錢のアンパンを賣り歩くやうになつた。炭坑まで小一里の道程を、よく休み休みアンパンをつまみ食ひした。

父はその頃、商賣上の事から、坑夫と喧嘩して頭をグルグル手拭で卷いて宿にくすぼつてゐた。

母は多賀神社のそばでバナ、の露店を開いた。

無數に驛からなだれて來る者は、坑夫の群である。

一山いくらのバナ、は割合によく賣れて行つた。

アンパンを賣りさばいて、母のそばへ籠を置くと、多賀神社へ遊びに行つた。そして大勢の女や男達と一緒に、私も馬の銅像に祈願をこめた。いゝ事がありますやうに――。

多賀さんの祭りには、きまつて雨が降る、多くの露店商人達は、驛のひさしや、多賀さんの境内を行つたり來たりして空を見た。

十月、炭坑にストライキがあつた。

街中は、ジンと鼻をつまんだやうに靜かになると炭坑から來る坑夫達だけが殺氣だつて活氣があつた。

ストライキ、さりとは辛いね

私はこんな唄も覺えた。

炭坑のストライキは、始終で、坑夫達はさつさと他の炭坑へ流れて行く。そのたびに、町の商人とのカケは抹殺されてしまふので、めつたに坑夫達には、貸して歸へれなかつた。

だが坑夫相手の商賣は、てつとり早くて、ユカイだと商人達は云ふ

てゐた。

五

―あんたも、卅過ぎとんなはつとぢやけん、少しは身を入れてくれんな、仕用がないかもんなた……。

私は豆ランプの火かげで、一生懸命ジゴマを讀んでゐた、裾にさしあつて寢てゐる母が父にかうつぶやいてゐた。

外は雨である。

―一軒、家ちゆうもん、定めんとあんた、こぎやん時困るけんな。

―ほんにヤカマシかな！

父が小聲で怒鳴ると、あとは又雨の音だ。

指の無い淫賣婦だけは、いつも元氣で酒を呑んでゐた。

―戰爭でも始まるとよかな。

此淫賣婦の持論は、いつも戰爭の話だつた。

人がどんどん死ぬのが氣味がいゝと云つた、此世の中が、煮えくり返へるやうになるといゝと云つた、炭坑にうんと金が流れて來るといいと云つた。

てゐた。

廿五だと云つてゐたが、勞働者上りらしいプチプチした若さを持つてゐた。

十一月の聲のかゝる時であつた。

黑崎からの歸へり道、父と母と私は、大聲で話しながら、輕い荷車を引いて、暗い遠賀川の堤防を歩いてゐた。

―お母さんも、お前も車へ乘れや、歩くのあしんどいぞ……。

母と私は、荷車の上に乘つかると、父は元氣のいゝ聲で唄ひながら、私達を引いた。

秋になると、星が幾つも流れて行く。

もうぢき、街の入口である。

後の方から「おつさんよつ！」と呼ぶ聲がする、渡り歩るきの坑夫らしい、父は荷車を止めて、「何ぞッ！」と呼應した。

二人の坑夫が這ひながらついて來た、二日も食はないのだと云ふ、逃げて來たのかと父が聞いてゐた。

が光つて、妙にガクガク私は震へたが、二人共壹圓もらふと、私達の車の後を押して、長い事沈默つてついて來た。

父は祖父が死んで、岡山へ田地を賣りに歸へつて行つた。

少し資本をこしらへて來て、唐津物を糶賣りしてみたい、これが唯一の目的であつた。

何によらず、炭坑街で、てつとり早く賣れるものは、食物である。

母のバナ、と、私のアンパンは、雨が降りさへしなければ、二人の食べる位は上つて行つた。馬屋の拂ひは月貳圓貳拾錢で、今は母も家を一軒借りるより此方が樂だと云つてゐた。

だが、どこまで行つてもみじめすぎる私達であつた。秋になると、神經痛で母は何日も商賣を休むし、父は田地を賣つてたつた四拾圓の金しか持つて來なかつた。

父はその金で、唐津燒を仕入れると、佐世保へ一人で働きに行つてしまつた。

――ちき二人ば呼ぶけんのう……。

父は陽に燒けた厚司一枚で汽車に乘つて行つた。

私は一日も休めないアンパンの行商である。雨が降ると、直方の街中を軒並にアンパンを賣つて歩いた。

私には、商賣は一寸も苦痛でなかつた、一軒一軒歩いて行くと、五錢、貳錢、參錢と云ふ風に、私の帆布でこしらへた財布にお金がたまつて行く。そして私がどんなに商賣上手であるかを、母に賞めてもらふのが樂しみであつた。

私は貳ケ月もアンパンを賣つて母と暮した。

或る日、街から歸ると、美しいいゝ色の兵兒帶を母が縫つてゐた。

――どぎやんしたと……。

私は驚異の眼をみはつた。四國のお父さんから送つて來たのだと云つた。私はなぜか胸がときめいた。

間もなく、呼びに歸へつた義父と一緒に、私達三人は、折尾行きの汽車に乘つた。

毎日あの道を歩いたのだ、遠賀川の鐵橋を越すと、堤にそつた白い路が暮れそめて、私の目にうつゝてゐた。白帆が一ツ川上へ登つてゐる、なつかしい風景である。

汽車の中では、金鎖や、指輪や、風船繪本などを賣る商人が、長い事しやべつてゐた。

父は赤い玉のはいつた指輪を買つてくれたりした。

あれから拾何年、今だに私は人生の放浪者である、不惑をすぎた義父は、相變らず轉々關西の田舍を母を連れて放浪してゐる、女成金になりたい直方時代の理想は、今では一寸話である。

黒人の藝術

＝原始への思慕＝

天宮聖之介



Kamerun Maske.

黒人假面起源考

二つの物語りがある。

――サンバ・ミケツプが、カシヤシと結婚してから間もなく一人の子供が生れた。或日のこと、母親のカシヤシが、いつものやうに村から少し離れた川まで、水を汲みに出かけると、子供が一緒に連れて行つてくれといつてきかなかつた。

「水を汲んだら、すぐ歸つて來るから、お父さんと、おとなしく待つてゐなさい」といつても、そんなことで子供は、仲々承知しなかつた。

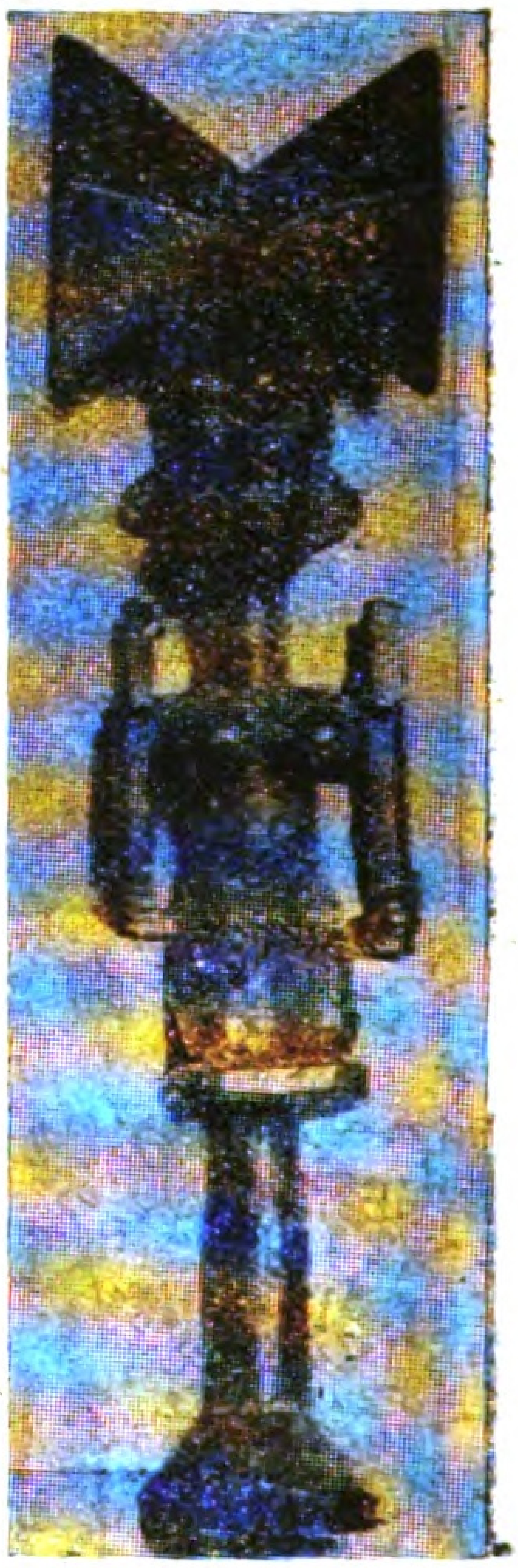
仕方なしに、カシヤシはその日、子供を連れて水を汲みに行つたが、餘り子供に氣をとられてゐたゝめに、せつかく

なかつた。子供は今度もまたついて行くといつてきかなかつた。父親と母親とが、どんなに打つても怒鳴りつけても、子供はワン／＼泣くばかりで、いつかなきゝさうになかつた。

その晩のこと、聰明で怜悧な母親のカシヤシは夜通し考へた擧句、さて一つのこれはまた素晴しい名案に逢着した。

といふのは、先づ瓢簞を二つに割つてその表面に世にも恐ろしい顔を描いたのだつた。

あくる日――子供は前日と同じやうに、母親の後をしたつた。母親は默つて少し先に歩いて行くと、假面をかぶつて、いきなりヒラリと子供の方へ振り向いた。ワツと



雷神

も一つ。

何れもサンクルーの傳説である。(張默同前記)

――昔、それはムカシ、一人の魔神があつた。名をマシヤムボアといつて、ゴチといふ病氣をはやらせ人々を苦しめたといふ。

一度此のゴチといふ病にかゝつたものは、先づ眼が見えなくなり、ついで泥醉漢のやうにフラリ〳〵と地上に倒れてしまふ。それでオシマヒ。死んでしまふのである。

時の王様をボ・コナといひ側に一人の賢臣があつた。ボコボコといふのが、それである。命じて魔神マシヤムボアの正體を詳さに物語れといふのである。賢臣ボコボコは閉口し、そして答へる。「王様よ。マシヤムボアの怪異なる風貌は、到底口筆を以て盡すことは出來ませぬ。希くは小生に時間と材料とも惠與せられよ。さすれば魔神の肖像を製作し、御覧に入れませう。」

それから間もなくのことであつた。村を遠く離れた草原の中に一軒のアトリエが建てられたのは。

それが、ボコボコのアトリエであつたことはいふまでもない。

ボコボコはその中で製作に從事した。人骨と鳥の毛と大蝙蝠の皮とを材料として製作に從事した。二つの異つた木材を組合せることによつて、強い黒と黄の色を出し、その上に土を塗りつけ、世にも恐ろしい魔神の像は完成した。衣服は黒と白の三角形の布を組合せて作られたのである。

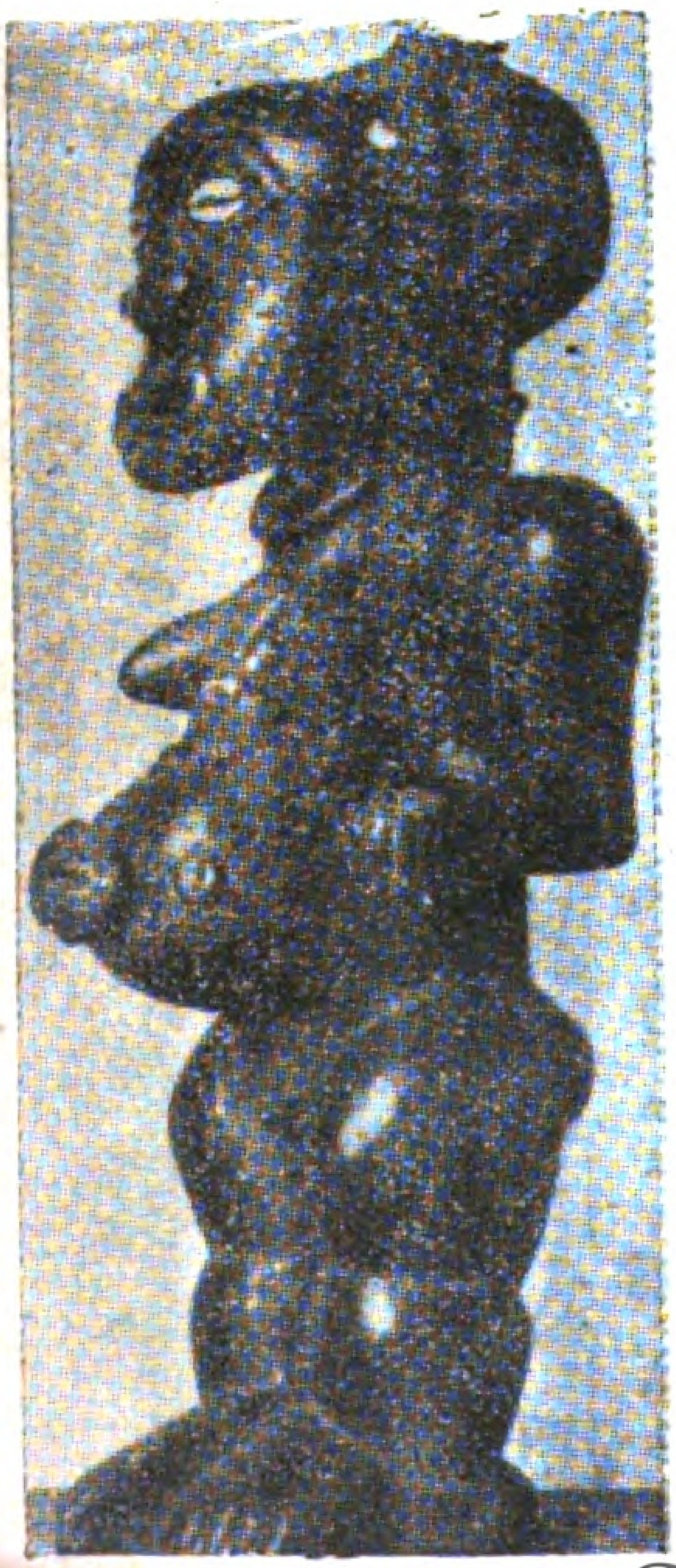
王様は、此の肖像を一目見ると、膝を打つて嬉んだ。「これこそ余の望むもの！」

それから、四五日を經て村に一つの大事件が起つた。王様の滅形！　王様が煙の如く消え失せたのである。

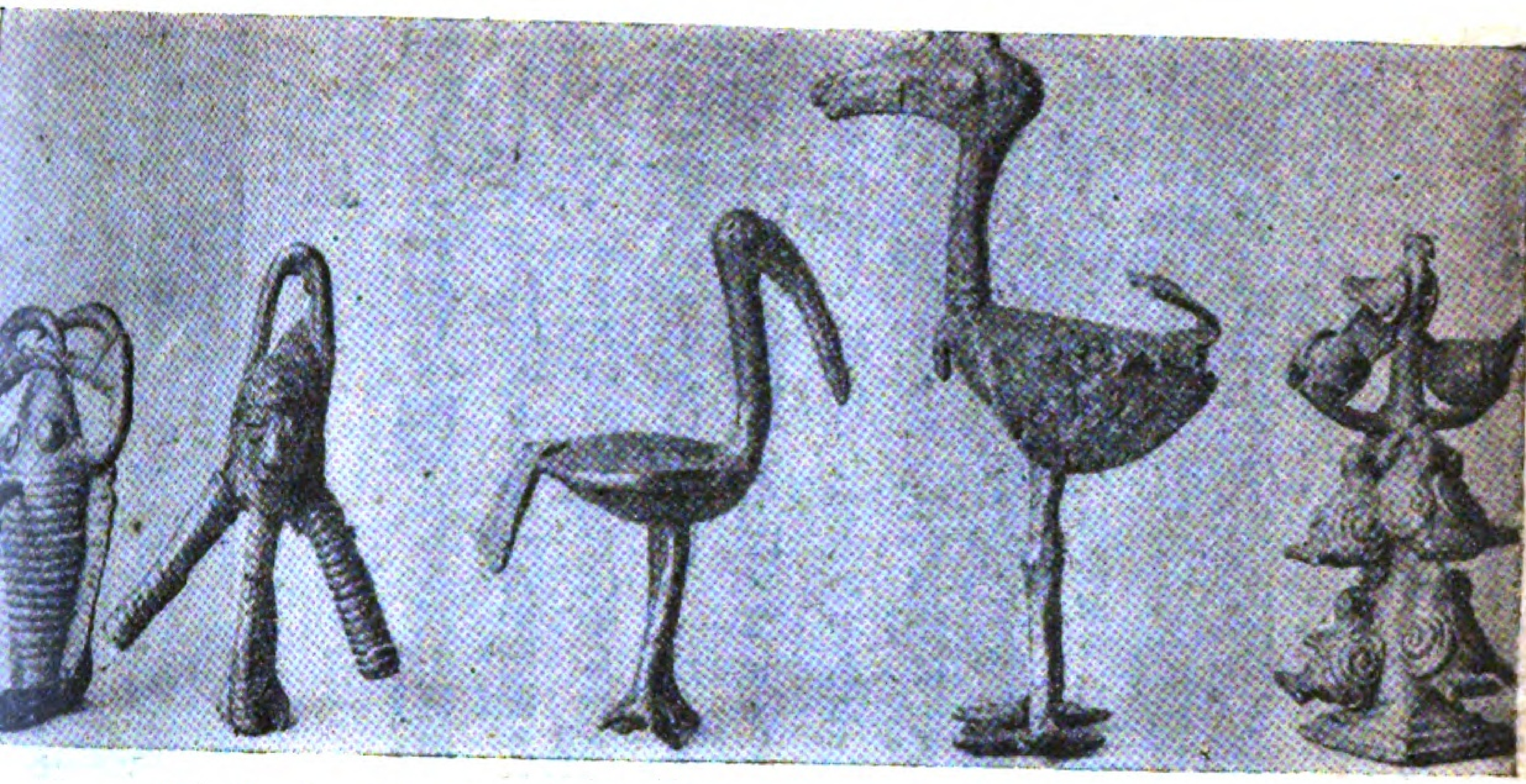
臣下も女房達も等しく死を想つた。そして悲嘆號泣にその日も暮れたのである。

その夜。――

遠い暗黒から一人のエトランジエが村に現れた。誰も知るものは



女の像



種々の動物を模して造つた分銅

なかつた。そればかりか。その風貌は二度と見られぬ妖魔の相である。それが魔神マシャムボアに扮した王様だつたことは、既に讀者の推察する通りである。愚蒙の臣は、それに氣がつかなかつた。

王は、恐ろしげな身振りをして、女や子供の間を踊り廻るのである。一人として顔を上げ得るものもない。數刻の後魔神の姿は、また遠い暗黒に消えた。

黎明が來た。常の王服をまとうて悠々と村に現れた。

王の再來はキリストの再臨である。村の者は雙手を擧げて歡び迎へた。

先づ第一に話題に上つたのは、昨晩の出來事である。王だけが知つてゐて、他の誰もが知らない昨晩の出來事である。

驚く女子供達を見廻してからサテ王様がいふには、「余は知つてゐる。あれが皆の恐れる魔神マシャムボアだ。ゴヂの病をもたらすマシャムボアだ。心の邪まな女や子供を求めて村に姿を現したのだ。若し發見したら直ちにゴヂの病を傳へて殺してしまふところだつたのだ」

で、女も子供も從順になつたといふ。善良になつたといふ。

彼等の宗教と生活と

ところで讀者よ。

僕は諸君を子供と思つて、この怪しげに馬鹿々々しい二つの物語りを進呈したのではない。

たゞ黒人の作品が、常に何等かの宗教的色彩を帶びてゐることを云へば足りるのである。

それについて面白い話——

本家のアフリカからは、一寸はなれたマレー諸島のニコバレス島では、世の中が凡て善玉と惡玉とで充滿してゐるものと考へてゐる。信じてゐる。そして、人間の生活は悉くこの二つのエスプリに支配されてゐるものと信じてゐる。

此の單純にして明快な宇宙觀が、やがて彼等の生活目的を擧げて、善玉に感謝し、惡玉を一掃するといふ一點に歸着するのである。

だから、彼等の作る假面にしても、偶像にしても、悉く惡魔を拂ふべく、いとも恐るべき容貌をそなへてゐる。

その像が、屢々一軒の家の門口に立てられてゐるのも面白い。日本の疫ばらひである。（挿圖參照）

さて、黒人の本家アフリカへ歸ると、そこで發見される木彫の大部分が、矢張り此の怪奇な假面であることを知る。

記錄に殘つてゐる一番古い假面——



ニコバレス島の除魔神

てれは一三五二年アラビアのシンドバッドことイブン・バテユタ先生が、南部スーダンに上陸して、そこで初めて怪げな假面に對面したとある。

船乘りバテユタは、忽ち此の偉大なニグロ藝術の美に打たれて、（?）椰子酒の醉ひを買ひ且つ語り且つ踊つたとあるから、その假面は恐らく舞踊面であつたらう。

アフリカの人種

さて、此所で一寸ばかり人種學的ペダントリーを發揮する。といつてもタネは、ブリチッシユ・ミユゼアム調査報告に據つたのである。

現在アフリカには、五つの人種が存在する。リビアンと、ハマイトと、ヒミアライトと、ニグロと、ブッシユマンがそれである。勿論此の他にも、インデイアンや支那人や歐洲人があるが、それは最近の移住と見ていゝから此所では無視する。

そこで、最初に並べた三つの人種即ちリビアンと、ハマイトと、ヒミアライトとは、言語學上から見て同系の人種と想像される。そして

ニグロとブッシュマンから見れば、遥かに後の移住民と見られてゐる。

ニグロを更に分けて、本來のニグロとバンテユ族とにされる。ニグロとブッシュマンとは同一祖先から出たものである。

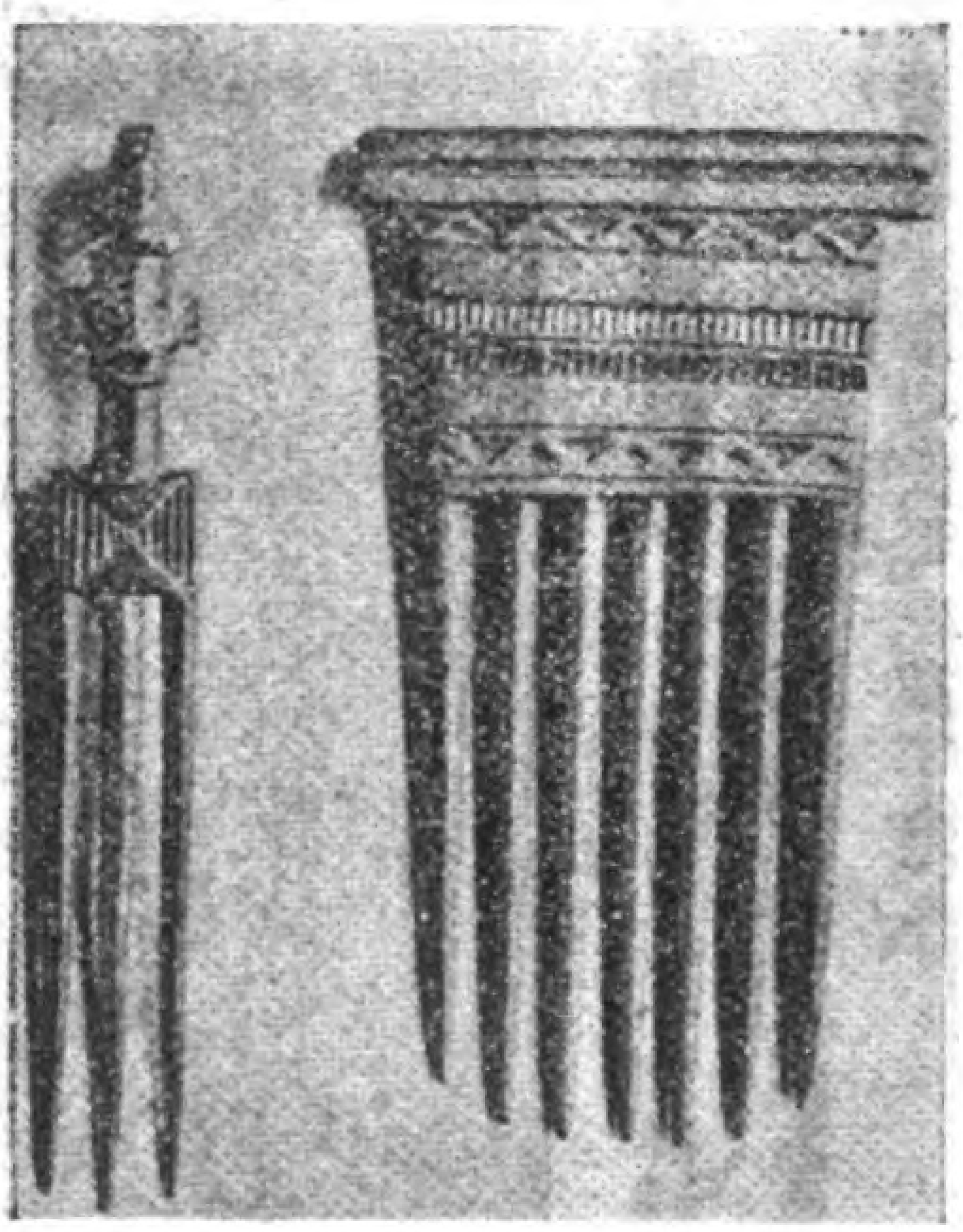
次に人類史的に觀る。

アフリカが石器を使用してゐたといふ證據は極めて薄弱である。理由は、此の地方が頗る金屬殊に鐵に惠まれてゐるために、石器を使用する必要が殆どなかつたのである。

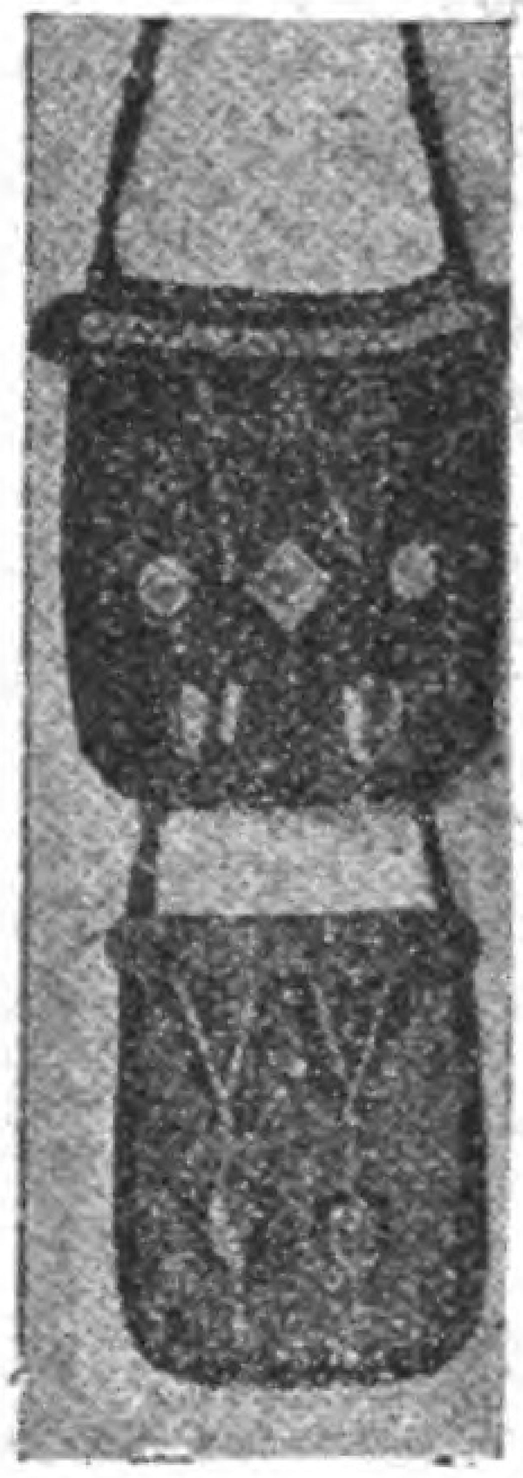
從つてアフリカに於ける人類史は、銅器時代、ブロンズ時代を飛び越して、石器時代から直ちに鐵器時代へ入つたものと見られてゐる。

宗教は？

勿論各地方に依つて多少の相違はあるが、全體に行はれてゐるのは、いふまでもなくアニミ



髪飾り



袋



壺

常に小さく分けられてゐるために、多少薄弱である様に見られる。

今では既にクラシックとなつてゐるアンケルマンの「アフリカに於ける靈魂の信仰と祖先崇拜」Seelenglaube und Ahnenkult bei afrikanischen Völkern : Ankermann といふ書冊を見ると、興味ある記錄に逢着する。

「君の肉體が落す影は、君の靈魂ではないかね」と、傳導師のカラウエーが、ズルー人にきいた。すると、「いやそれは、祖先の靈魂である」と、答へたさうである。

人間の形樣に關する不思議な考へ方と、祖先と自分とのつながり、トッテムと自分とのつながり、此等のものを、非常にむづかしく考へてゐる結果、往々にして、ニグロ藝術は、半ば、宗教的、半ば幻想的な、産物として、現はれるのである。

たとへば、現在生きてゐる酋長の肖像を、製

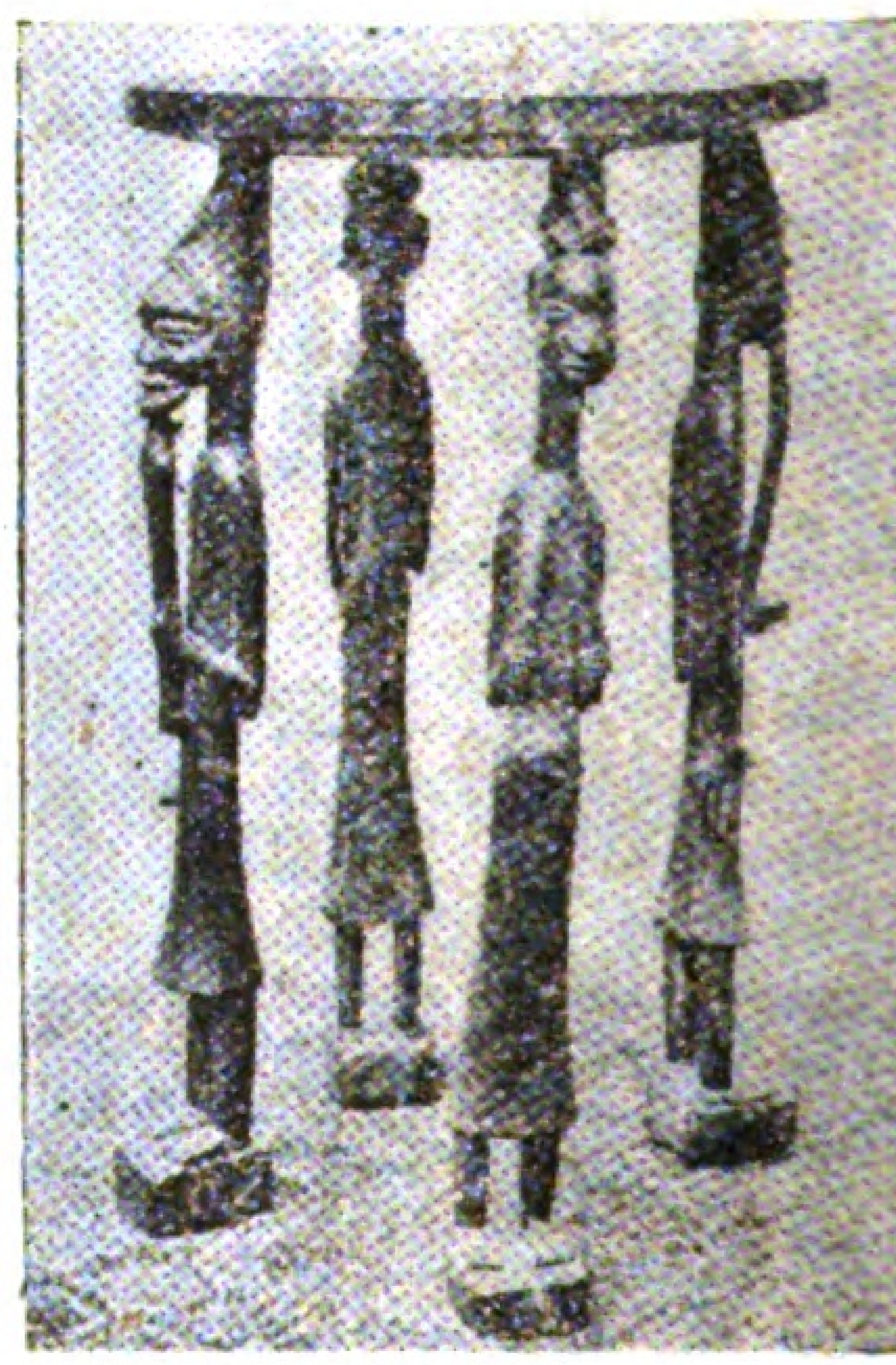
さうして、祖先のすがたを、すこぶるサンボリックに、表現するために、その形相が、屢々、トッテムの動物と混同される様な結果を來すのである。

それは丁度、エヂプトの繪畫に見るものと、同一である。誇張して云へば、死者の思出を再現したものとさへも、云ふ事が出來る。ニグロが、祖先の記憶をたどる時は、頗る嚴肅な氣持になり、畏るべき靈感を感じ、あの魔術的作品となつて現はれるのである。それは丁度、今日の交靈術に見る様に、死者が、心の中に、復活するものとしか思はれない。

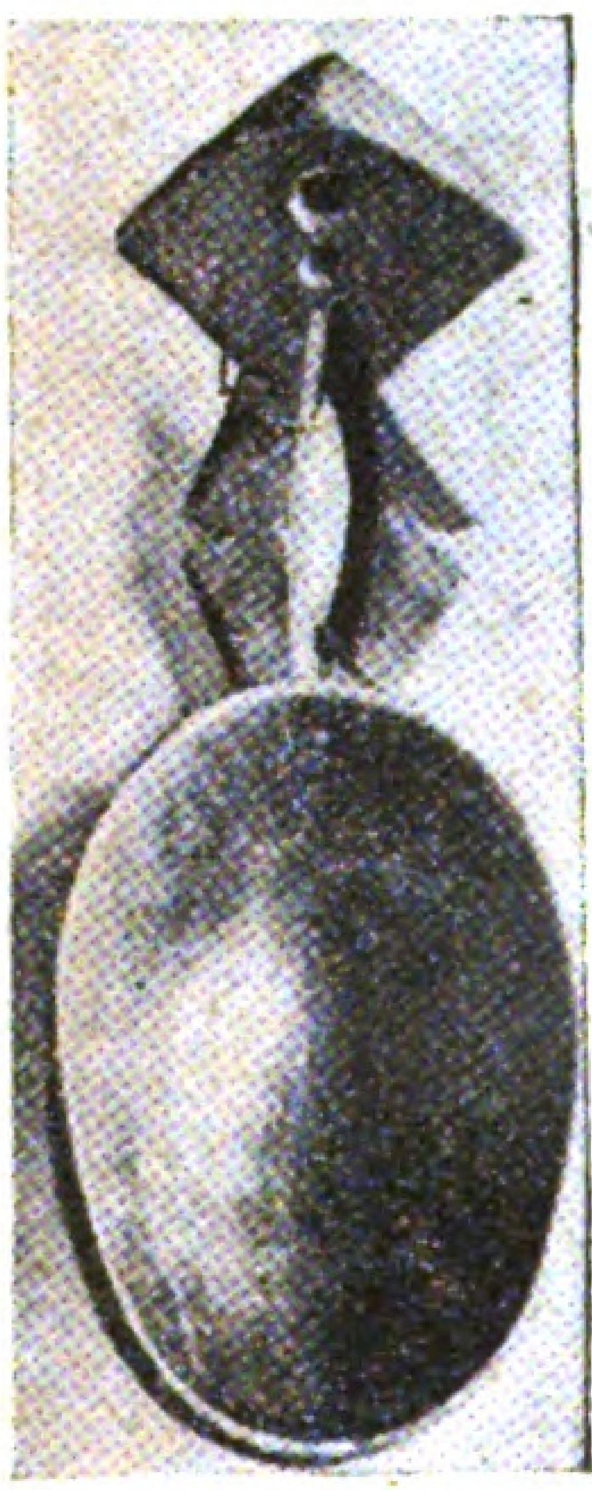
これこそは、宗教的情熱が、藝術的情熱に轉化した、いちぢるしい例である。そして、魔術のみが、説明し得る所の、不思議なる藝術と云はなければならない。

黒人の宗教として、最も、系統的なものは、ポリネシヤである。

彼等は、アニミズムと、祖先崇拜とを土台として、その上に、彼ら獨得の宗教を築いてゐる。


テーブル


樂器


匙

一番エライ神様は、タンゴラ又はタアロアとノタン又はカンと云ふ。其の下にロンゴ又はロロと云ふ神様がゐる。之等の神様と關連して、生れたのが、僧職で、彼らは、神様の次位に、位するものと考へてゐる。、この外に、造船神とか、漁業の神とか云ふ様に、各種の產業を司つてゐる部落の神及び家族の神がある。そして、之等の一段と底い神様に仕へる僧侶は、丁度、醫者とか藥屋とか云ふ様な役を務めてゐる。

ポリネシヤ人の考へた神様は、皆人間の形をしてゐるが、土人達は、決して、それを、人間の形だとは考へてゐない。

神々は、大きな寺の奥に安置され、その寺の近くに、僧侶の住んでゐる事は、日本と同様である。

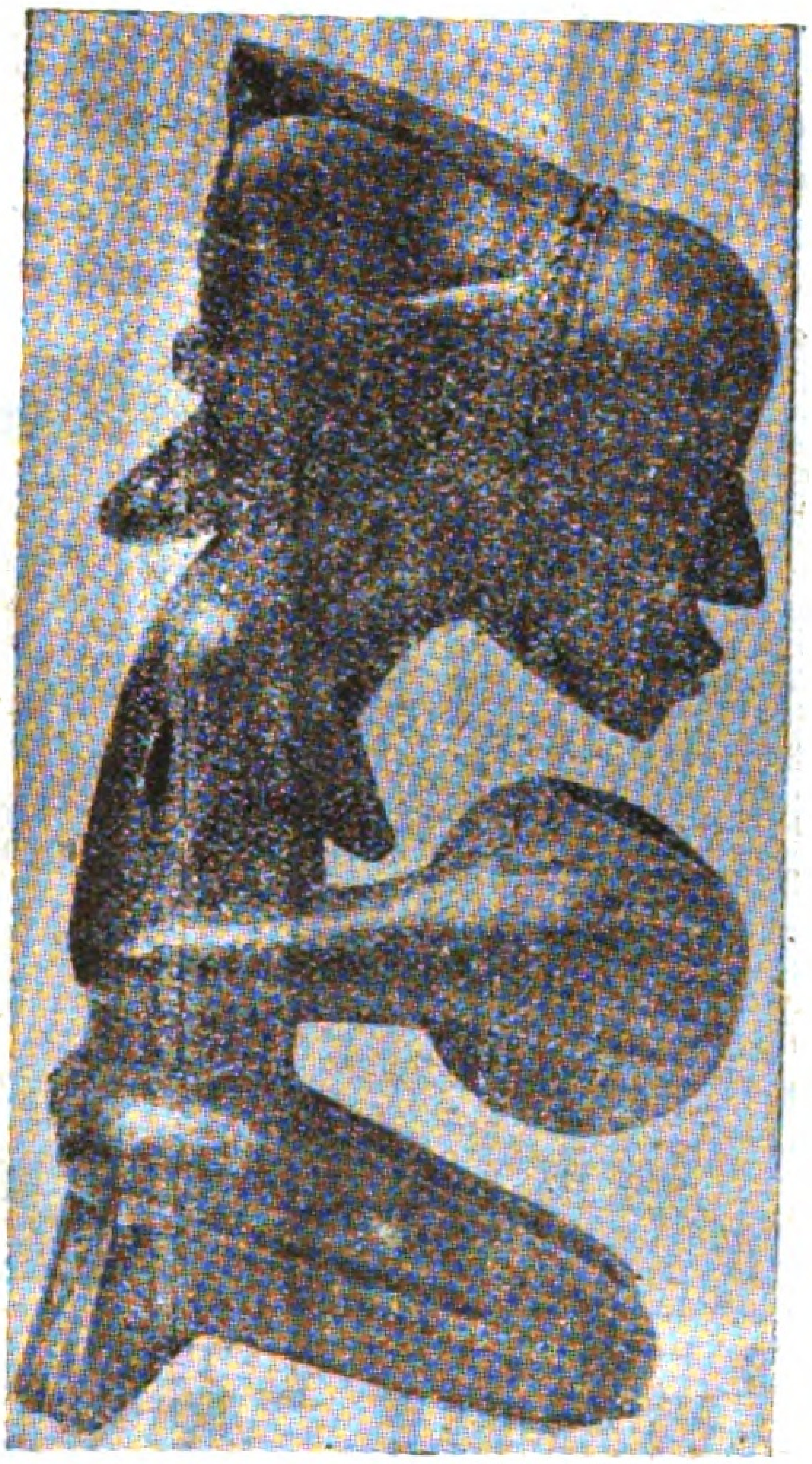
從つて、ポリネシヤでは、僧侶を中心とした階級制度が、厳然と確立され、普通の人間は、特權階級の人々の、身體は勿論、衣服にも、道具にさへも、手をふれる事を許されない。

萬一、高僧や首領の頭にでも、手をふれる様な事があれば、

殺されてしまふ。又、幸にして、逃げおほせたとしても、神罰のために、やがて、死ぬものと考へられてゐる。

この地方では、世の中のものはすべて、モアとノアの二つに分けられてゐる。モアは、神様と特權貴族と僧侶のためにのみ存在するもので、普通の人間が、自由にすることはできない。多くの食物は、モアに屬してゐて、女や子供は、食べる事を許されない。

面白いのは、王様の理髪屋で、彼の手は、王様の神聖な頭にふれたと云ふ理由で、物を食べる時にも、手で食べる事が、出來ないと云ふ事である。ゴーガンの繪で有名なタヒチ島では、若し、特權階級の人間が、病氣になると、その地方一帶では、火を燃す事も料理をする事も許されないのである。



壺を持てる女

然し、死者の靈魂は、容易に、未來の國へ行かれずに、暫らくは、自分の家のまわりをウロ〳〵とさまようてゐるさうである。葬儀も、貴族達になると、肉の流れおちるのを待つて、骨をたばね、寺院とか、其の他の安全な場所に保存する事になつてゐる。

アンダマン諸島では、死者を箱に入れて、木の葉をつめると、三ケ月程も、其のまゝにしておく。そして、肉がすつかり落ちてしまふと、骨を海で洗ひ、首環を作る習慣がある。この首環は、親族や友人が、死者の記念として、思ひ出草に使ひ、又、痛みや病氣を治す効力があると、信ぜられてゐる。從つて、齒の痛い者が、顔中に、骨の首環をまきつけてゐると云ふ様な、愉快な場面もしば〳〵見うけられると云ふ。

最後の言葉

之等の宗教と傳說とお伽話との上に咲いた怪しくも魅力ある黒人の藝術が、近年歐洲で盛んに研究され出したといふことは、如何に我々の文明が行きつまつてゐるかといふ事實を物語ると同時に、それの逃げ道として、原始生活に眼を向けてゐる證據である。

頭ばかり大きくなつた不健康な近代人が、何よりも先づ單純にして、健康な原始時代にあこがれを持つことは、自然の勢と見なければならない。

刺戟の強い原始的な美は、我々にとつて、大きな魅力である。ジャヅといふ黒人の音樂が流行し、チャールストンといふ黒人の舞踊が流行するのも、この傾向の一端を物語るものであらう。

併し、悲しむべきことには、世界の潮流は、之等の蠻地さへも包まずにはおかなかつた。植民が行はれ、人種の混淆となり、アフリカでさへも、今日純粹のニグロ藝術を發見することは不可能となつた。

從つて、我々は今日僅かに博物館に依つて彼等ニグロの藝術を窺識するより他に途がないのである。それも、ロンドンと、パリと、ベルリンを除く都市では、その多くを望むことは出來ない。

なほ進んで、ニグロの作品をしらべて見やうといふ特志家に、僕は次の一冊を薦めしたい。人種的、地理的な報告書は無限にあるが、ニグロ藝術を單獨な主題として書かれた書册としては、之など要領を得たものと思ふ。"L'ART NEGRE L'art animiste des noirs d'Afrique. par Georges Hardy" (Henri Laurens, éditeur, Paris 1927)



アンダマン諸島のカスル・マスク

勞農ロシアの軍隊

田口運藏

勞農共和國聯邦の國家は他のブルジョア列強と異なる國家制度から成つてゐるので、その軍隊もブルジョア國家のそれと組織の點ばかりでなく、構成分子は本質的に異つた意義をもつてゐる。

いづれの國の軍隊もその、、、、の、、、、のための武裝的集團ではあるが、勞農共和國の、、、、は勞働者と農民とであるから軍隊は、、、、の子弟からのみ成つてゐると云ふことも出來る。そして、構成分子の精神は、、、、である。將校としても一兵卒としても、軍籍に身を置くものは同樣な宣誓式を行つてゐる。

私─勞働者農民の子弟、U・S・S・Rの市民たる私は、勞働者農民の軍隊の一員として茲にその任務に就く。と云ふ最初嚴肅な宣誓の第一條から始つて、良心的に戰爭の方法及び軍事的、國民共有財產の保護に當り、何等の疑問なしに、、、統制に服し、勞働者農民の政府に依つて權力を與へられたる將官の命令に服し、更に反動革命運動の彈壓と、、、、、、、、、、、のための忠實なる一兵卒なることを誓つた上に、よしこれらの任務を拋棄した場合は一般平民の輕蔑を甘じて受けると共にきびしい革命裁判のもとに立つであろうことを誓ふのである。

この軍隊が赤衞軍と呼ばるゝのである。赤衞軍がトロツキーに依つて組織せられたのは一九一八年であつた。ロシア國內の反動革命運動と列強の軍事的經濟的封鎖の最もはげしかつた一九一九年と一九二〇年にはその數が最も多かつた。それを維持するためにも戰時共產主義を强いて採用しなければならなかつたのであつた。公報に依れば一九二〇年の終りには五百三十萬、一九二一年の九月一日には百八十萬となつた。そして此年に於いて戰時共產主義は拋棄されて新經濟政策が樹立された。一九二四年七月には五十六萬二千九百六十七人にまで減員されて現狀に到つてゐる。この數字には勿論、陸、海、空の總ての軍隊が包括せられてゐる。が、この常備軍の外に在鄕軍人團とも云ふべき「航空艦隊の友」及び「共和國化學防備軍」(ドブロクヒム)の數百萬がある。

レニングラードの衞戍軍を主隊として、英國に對して北海を守り、近東はタシケント、サマルカント、バクーを中心にし、極東はチタ、ハバロスクを根據地としてブルジョア列强に備へてゐる。

トロツキーが失脚した後釜としてフルンゼン將軍が陸海軍々事人民委員長となつたが、フルンゼン將軍の病沒後は、ウオロシーロフがその局に當つてゐる　ウオロシーロフはエカテリノスラフ縣の貧農の子として生れ六歲にして坑山勞働者として働き、小學校敎育はほとんど受けなかつた。一八九六年レニングラードの工場勞働者となつて一九〇〇年のストライキに組して工場を逐れ、革命運動に投じ、一九〇四年ボオルシエウキキの地方幹部の職に就いて捕はれて投獄され、爾來革命運動のために投獄さるゝこと數回、一九一七年の十月革命には偉大な働きをして黨の中央委員となり、フルンゼン將軍の死によつて現位置を占めたのである。斯かる經歷の人物が總帥である勞農ロシアの軍隊は、、、であるのも必然であらう。(一九二九・九・五)

文明の祟りと自然の皮肉

石川光春

一、文明の祟り

イ、不斷の性慾

茲に生物學的考察と云ふ事がある。

自分を中心本位とし禽獸を無下に劣等な者として暫く彼方に預けて置き、あとは何か其れから其れへと考察を廻らす事も必要であり且一種の考へ方であるが、又禽獸に伍して己を考へ退いて自分を省る事も必要であり且一種の考へ方である。生物學的考察と云ふのは即ち後者に屬する。其の際經濟上、思想上より其の他種々の見地より望むと、各其處に特殊な世界が展開する。

生物學的に自分等の性的方面の一角を望んで見度い。扨て生物の仔を生まんとするや多數の動物では雌雄先づ相接近して交接を行ふ——交接を行ふと云ふと如何にも猥ヶ間敷聞えるがこは古來の習慣に囚れたる考への祟りで、少しく考へれば食事、睡眠等と同格な行爲であつて何れも生物に特有な天與の身の始末のつけ方に過ぎない。尤も社會の秩序と云ふ事の爲に此處に理性を加味して此の言葉を使ふ可きであり、我々は常に其の考へで之れを取扱つて居る。——交接の時期を交接期と稱し動物に依つて一定の場合も不定の場合もある。其の開催せられるのは大抵餘程温度に關係がある。一定の場合でも温度次第で遲速が生ずる。今之れが一定せる哺乳類の場合の回數を記せば單孔類、鹿、羚羊、獅子、蝙蝠、土龍等は毎年一回と定まり、鼠其の他の齧齒類や猿の類は若干の回數に上り、逆に河象、野生の象は數ヶ年に一回犀も同樣であるらしい。なほ回數の多い鼠や猿の類は若し姙娠が無ければ有る迄當分の間連續する。即ち鼠は九ヶ月、猿は周年止まぬと云ふ。其の他の者は姙娠の有無に關せず次回の交接期迄は靜穩である。

此處に特異な現象は飼養せられた動物は通常交接期の回數を増加する一事である。例へば羊類は野生の狀態にある時或は斯る狀態に置かれた時、即ち野放にして養れた時には飢餓に瀕し風雨霜雪或は外敵

完全に避ける事も出來ない狀態の下では年に一回であるが、十分食を給し舍を與へて畜養すると回數は增加する。獅子の如きも元來は一回だが動物園に來ると二三回にもなる。象も養ふと年に若干の回數に上る。英國產の野兎は野生の狀態では交接期は唯二三月の頃であるが、飼養して安靜を與へ榮養狀態を良好にすると周年行はれると云ふ。又姙娠無き時交接期の連續起來する期間も延長し羊は約三ヶ月、兎は五六ヶ月、馬は八ヶ月に亘るのである。蓋し食餌が十分で氣象の變化に直接露されないのと恐怖無き安靜が、生理狀態に變化を生ぜしめ、此の結果を生むのである。其の詳細なる理由は未だ明では無いが兎に角或る種類では生殖狀態に變化が起るのである。多くの植物では餘り榮養を十分にすると花を生ぜしむる事が出來無くなり、場合に依ては榮養を不良にした方が寧ろ花を持たせる事が出來るのと正反對である。

處で人類を顧ると所謂文明の狀態にある者は矢張り其れが周年絕える事が無い。姙娠が無ければ其の起來する期間も全く無限である。從て情事に多忙にして四時何處かしら出產の聲を聞く。然し多くの未開の人種では小供は多く一定の時期に生れる事から推すと、交接期が大凡限られて居る事が想像せられる。彼の北緯七十六度乃至七十九度の地に住居するエスキモー人は日光無き冬期の間は[illegible]生活法を捨てゝ子孫繁榮の策を講ずるのである。其の他半開、未開の土人間に行はれる春秋の祝祭にはよく性的行事を伴ふものがあり、文明人の祝祭も源を斯る處に發して居る場合は幾らもある。種々な文獻に徵すると少くとも歐人は文明の低くかつた古昔は交接期が略一定して居、回數も極めて少なかつた樣に見えると云はれる。

今此の事實を好く玩味すれば自問自答直に胸に浮ぶのは所謂文明生活と交接期起來との關係である。恐らく原人的生活時代には屢飢餓に陷り絕えず何等か外來の不安に脅かされて居たであらう。それが文明の起るにつれ一般に調理を施して天然の味を轉補し、以て榮養價値ある物質を消化吸收せられ易き食物として常に十分に攝取するを得、家屋を建て戸牖を設け衣帶を調へて雨露を避け、外界の溫度を調節し心地よき安靜、睡眠を得る樣になり、更に文化の進むに從ひ總て衣食住に必要以上の趣味享樂を求める程度に向上して了つた。蓋し發達せる頭腦の力に任せ不斷の飽食と實境の苦を脫したる安靜の居住、之れが直接間接に一種の刺戟となつて不斷の交接欲即ち性慾の往來を惹起し、依て性的生活が多忙になる樣になつたのに相違ない。

今參考のため若干の哺乳動物の平均姙娠期間を列擧すると家鼠は十

人類は二百八十日である。而して何れの動物も次期の交尾期迄性慾が起來しないから勿論妊娠期間は交接を行は無いが、獨り人類のみ殊に文明人は二百八十日の妊娠中と雖も性慾不斷に湧起するので其の始末に苦勞する程度である。

其の上單なる本能の滿足のみに飽いて此處に趣味を求め所謂性の享樂を欲する樣になり了つて居る。元來性慾は生産に及ぶ前段の行爲であるのに生産を離れて單に趣味に耽る人間も多數に出來て來て居る。斯くて文明が生める不斷の性慾、而して複雜な社會組織に起因せる經濟狀態及び過勞狀態の間を縫うて之れが始末の方法に就き又惱んで居るのが現狀である。依つて人は社會の秩序を保ち下手な行爲を戒める爲に之に關して種々法律やら不文の規定を設け色々の習慣を殘してあるが、之を遵守する事は相應困難と見えて其の行動中大きな餘迸が屢法網に觸れる。聖者は適りに道德を解き或は方便を用ひて自制の法を教へる。尤も場合に依つては精神的訓練と生理的調節とにより原的の狀態に返へし、或は日常生活に都合の良い程度に制限し或は性的衝動の起來を止めて了ふ事さへも出來る。蓋し道者の教ふる精進の道には一面性慾の少なき原始的生活の心を得しむる法である。殊更平素と異る實境を設け克己飢寒に直面し性的衝動の起らない樣な狀態を得しむる法であると觀測する事が出來る。

要するに結果は隨分面倒で其れを御する色々の教へ杯があるが中々徹底し得るもので無く、習慣に引づられて辛くも無事で居る狀態、然し日常慣れて居る事とて夫れ程にも思はれてない。蓋し分化と云ふ特殊な實境に對する反應として現れ出た難有くない性質である。詰り適應的の性質では無い。と云つて猥りに除き得べきものでも無い。而して一歩此の性質の向け處を誤れば文明社會を破壞する一因子となる事に、虚心世相を顧み歷史を稽ふれば、自ら思ひ當る處であらう。我々は下手な授かり物を抱へて危ケ敷い道を歩いて居る。これは天賦の特質、頭の働く結果である。安寧を得んとして頭を働かせたのは好し、其の結果の中に不利益な性質が自然現れて迷惑して居るのである。

尙ほ假に他の動物と同じ樣に其の時期が一度或は二度と限られて居たとすると、其の際人間の行動や社會の狀態は如何なるかを考へると面白い問題である。

ロ、文明人の衰滅

人間は進化の結果大腦が非常に發達し頭が好く働く處から自分が生物としての特性を十分發展させる樣にと工夫に工夫を重ね趣向を凝した結果、衣食住が以前と著しく變化して來、自然の狀態と段々遠かる樣になつて來た。詰り文明と云ふ特殊の實境を拵へて了つた。而して種々分業が進み社會の爲め自分の爲めの仕事が繁多になり、仕事をする爲めに生きる樣な狀態になつた。尙ほ頭は適當に用ゐる分には幾ら働かしても差支なし只管能率增進とあつて小供の時から鍛へに鍛へ且複雜な社會に處する上で非常に心神を使ふので腦神經は一種疲勞狀態

になつて居るし、職業の方面によつては特に地面を踏み一定の運動をしなければならぬ程度になつて來て居る。文明の進まぬ間は衣食住に携はつて居れば自ら身の運動がついて居たのであつた。斯くて運動不足による生理的障害に苦しんで居る。其の他年中飽食して居る。飽食と云つてもこは比較的の話で、他動物はじめ原始的生活をして居る間は時には飽食する事もあるが隨分飢餓の狀態にある場合が多い。斯くて飽食其の他の實境に伴ひ既記の如く不斷の性惱の往來に苦しんで居るし、特殊な生理的變化卽ち疾病の煩がある。又自然に遠ざかつた生活から外況の變化に對する身體の抵抗力殊に細菌の寄生被害に對して抵抗が著しく弱く、其の他出產の苦痛が文化と共に向上する。都會人よりも田園の人、田園の人よりも原始的生活者程生產の苦痛が少く體の抵抗力が強い。斯くて女子は文化と共に生產を厭ひ育兒の苦を特に思ふ樣になつた。元來出產は生物の常道である。然るに出產に多大の苦痛が伴ひ遂に之を嫌厭するは不自然である。苦痛を厭ふは人情であるが苦痛が生ずる事が實境の生める自然に順應せざる性質である。又出產と共に乳の分泌あるは哺乳動物として最も特殊な微妙な適應した性質であるが、之れが不可能なる樣な結果を生めるは不自然の生活の結果である。尙ほ或る場合與へ得べき乳汁を有しながら本能に背き自己

其の他數へ來れば分明に適應せざる形質は樣ょあるが然し一方頭の働く處から出來得る限り人爲的に其の苦を脫れんと腐心して居る。恰も攻擊機關と防禦機關との關係の如くに。然し惰性は止まず年と共に益ゝ原始の狀態を遠かり不自然が甚しくなる一方、人智の限りを盡して對策を講じ屋上屋を架して之に備へんとして居る。然し彌縫策は大勢に抗し得ない。次第に文明人の影は淡くなつて永年月の間には何かの機會に滅亡する。而して交通が自由な處から文明人によく接して居る器用な未開人が前代の文明を習得して特殊な文明を構成し、其の行詰れる處、前轍を踏んで倒れて了ひ、順次同じ事が繰り返される。

要するに人類は頭が發達した爲め一時は其の力で繁殖したが軈て、工夫に任せて文明を進めて行くので、自然に不適應の狀態に導かれ滅亡して行くのである。所謂力負けである。總て生物は餘りに或る形質が一方に發達して行くと、其の形質の持主は若し之に依つて好都合、所謂適應する事を得て大に繁殖するであらうが、自ら其處に峠が出來或る程度以上の發達が反つて邪魔になつて繁殖を妨げ其れより漸次下り坂になり軈ては衰滅を來す事は、地質各時代に特に跋扈せる動植物の形質と運命を見れば自ら首肯する事が出來やう。たいして特殊な形質は無くとも頑丈な實境に順應して行ける生物はたとへ著しく繁殖は

目的にそぐはない狀態になつて居ても、性質次第で之れを切拔ける工夫があれば、其んな生物は隨分苦心も仕やうが餘ては滑稽ける處迄乘出して目的を達する事が出來る。側面から窺ふと其處に皮肉を感じる。其れは卵と精蟲の持主が別々になつて居る場合である。

凡そ生物は必ず生殖を行ふが、生殖の中でも有性生殖とて卵と精蟲を生じ其の合體した物から小供を生ずるのが大多數の生物に通有な性質である。處が多くの動物では卵と精蟲は雌雄別々な體中に出來るので、先づ雌雄接近し後卵と精蟲が相見えて合體が行はれる手數がある。本來なら一緒になる可き物なら始めから一つ體中に卵と精蟲が共に出來、其の場で合體するのが一番早手廻しであるが自然はさう誂向な趣向に出ない。故に雌雄は相近づかんとし精卵は合一せんと努力苦心する處に自然の皮肉が窺はれるのである。其の雌雄接近と云つても海膽や水母の如く雌雄銘々敢て體を接するのでは無く、相等の距離に居て勝手に卵や精蟲を煙草もどきに口から吹き出し、親は知らん顏をして居るが、後は精蟲が懸命の働き大車輪で水中を游ぎ廻りおとなしくして居る卵を見付けて合體する。精蟲の苦勞や思ふ可く、意地の惡い自然はまごついて居る精蟲を見てかすかに笑つて居るかも知れない。

然し多數の動物は雌雄體を接して交接を行ひ特殊な器官を介して雄は精蟲を雌體に送り込むので、精卵の合體は海膽や水母に比べると先づ百發百中、精蟲がぼんやりして居ても目的が達せられる。が扨て困るのは雌雄自身である。體が別々である上に互に相當我儘が有るのと常に柳の下に泥鰌と云ふ譯には行かず、行きさへすれば會へるとに限らない。其處で自然は巧に雌雄接近す可き目標を與へて居る。殊更目標でも無いぢやないか、雌雄をくつ附けて拵へて置いたら好ささうに思はれるが、此れは自然の皮肉の戯れである。卽ち一方に或は互に特殊な形狀、香味、色彩、音響を供へて置いて相手の辿る可き目標にして置く。而して異性は此の目標の存在を體驗すると無暗に其處に行きたくなつて仕方が無い。雌雄焦れつつ相愛すると云ふのが其の邊の消息を述べた言葉である。他の動物の行動は短刀直入頗る簡單に行くが、さう簡單に行かぬのが吾々人類の面倒な處である。社會を組織して居る以上秩序を亂す可からずとの注文とお互に我があるので事面倒である。追ふ者や逃る者、得意な者、失意な者、ムラ〳〵とする者等、其の邊の消息は小說二三篇に悉されて居る。斯る喜悲劇の起るのを矢張り意地の惡い自然は見て口を曲げて微に笑つて居るであらう。

尤も動物中には一體にして雌雄の道具を有し兩性を兼ねて居る蛭、蚯蚓、蝸牛の如きがあるが、其れもいざと云ふ場合は自給自足と云ふ譯で無く態々二疋相接し、相互に雌に成つたり雄になつたりして居る。詰り精蟲の交換をするので矢張り皮肉なる自然の手に弄れて居る形である。但斯る雌雄同體者の中でなめくぢの一種や、ものあらがひの一種杯は重寶な者で二蟲交接の出來ない曉には自給自足卽ち自體内に出來た精蟲を卵に配して仔を拵へる。然るにふぢつぼの一種や線蟲類、プラナリヤ類、吸蟲類の若干種其の他動物に寄生する絛虫類の若干は全く自給自足、自然の皮肉を裏切つて常にひとり超然と仔を拵へて居る。恐らく自然は甘酸い顏をして彼等を眺めて居る事であらう。

勞働組合運動の再建と展開

總同盟の紛爭から受ける示唆

加藤勘十

一

わが勞働組合運動の分野に大右翼結成を企劃し、私かに其の主盟たらん野心を藏しつゝあつた勞働總同盟に第三次の分裂的一大分爭

吾々は近時の勞働組合運動の主體的狀勢を語る場合の解説として上記總同盟大阪聯合會の紛爭を擧げることができる。

わが勞働組合運動數年間——勞働總同盟の

の形態であり、一つは少數指導者の功利的錯覺の故に、勞働階級の自然成長性を抑壓し、勞働階級をして資本階級の隷屬的地位に硬着せしめんとする背理的形態である。今回の總同盟大阪聯合會の分裂的紛爭は、この第二の背理的形態に對する第一の正常的形態の抗爭の具體化したものである。それ故にこそ、將來に對する大なる示唆を意味してゐる。

勞働總同盟は急角度の方向轉換による右翼戰術の採用によつて第一次分裂を買ひ、プロレタリアの本質を滅却したプチ・ブル黨の提唱によつて第二次の分裂を買ひ、斯くして多

れた小數の意識的分子は、健氣にも、右翼指導部の協調的傾向と烈しく抗爭を續けて來た。例へば、國際勞働會議に對する態度、全國總聯合結成の問題、無產政黨合同に關する所見、資本家の產業合理化運動に對する見解等々、苟しくも實踐を通じて勞働階級の階級性の昂揚に關する問題に就いては全勢力が拂はれて來た。にも拘らず、其の度毎に右翼指導部の一層の强化を促がし、總同盟全體の上に覆ひかぶさる妥協的黃色的傾向を如何ともすることができないで今日に至つた。

されど、勞働者の階級的成長性は資本主義制下に於ては不可避である。殊に資本家階級の、、、、が苛酷を恣にしてゐる今日に於て勞働者の階級的成長は急速に擴大する。右翼指導者が功利的打算に因る勞働階級の隷屬化を强制しても、よりよき一人の指導者を得ることによつて勞働者の自然成長性は容易にそれを拒否する。協調的黃色的氣分の横溢せる總同盟内に、この勞働者の自然成長性が右翼指導者の意圖を裏切つて階級的正常的進出を遂げ得たことは、小數意識的分子の階級的純正と苦闘に負ふ處尠なからざるものであると同時に、勞働者の階級的成長性は決して右翼指導者の功利的謬想の限界に止まるものでないこと、而してこの勞働者の階級的成長は資本家階級の、、、、——客觀性——の變化に伴つて起る反射的作用であることを示敎してゐる。

これ、今回の勞働總同盟の分裂的紛爭の將來の勞働組合運動に對し、現實的分岐點となり、且つ今後の組合運動の、、、に主要なる示唆を與ふる所以である。

二

田中政友會内閣二ケ年の存在は、金融資本の、、化、大資本の制把による中小資本の沒落、產業合理化の尖鋭化に偉大なる貢獻を遂げた。彼の資本家への貢獻は同時に勞働階級への極度の彈壓である。田中内閣のために直接の犧牲として祭壇に供せられたるものは××××であつた。×××は總同盟とは鋭どく對立せる左翼的存在であつた。吾々は×××指導者の把握せる客觀的認識——從つて戰術的にも——に對して異見を有つてゐた。然し彼等の抽象的階級的純一性に對しては敬意をすら寄せてゐた。がともかく、戰術的に若干の誤謬を冐してゐたにしろ、左翼的存在として運動全體に拍車の役を演じてゐた×××に對する彈壓は、獨り×××を形式的に壞滅せしめたのみならず、全戰線に内的混亂を卷き起さした。總同盟は田中内閣の反動的彈壓下に於て右翼的戰術を露骨にした。この總同盟右翼指導者の態度は、勞働運動を決定的に支配せんとせる資本家階級の、、の强化と反比例するものであつた。このことは總同盟内部に矛盾を成長せしめ、遂に今回の分裂的爆發にまで發展せしめる素因でもあつた。

日本の勞働運動の一半を風靡した協調的哀願的戰術の採用にも拘らず、、、、、を尖兵とせる、、、、は勞働者の隷屬、窮乏の恆久化のための猛襲を逞ふした。全戰線——總同盟の一部も包含さる——を通じての勞働者

の悲壯なる抗爭的ストライキの頻發を見よ。其處には如實なる日本の資本主義相とありのまゝなる勞働階級の姿とを見出すであらう。この現實相こそ、われ等の運動の基本的條件である。

金融資本、、、への一役割――無類なる勞働運動の彈壓――を果した田中政友會內閣は、金融資本を中心とした合理化强化のために其の地位を濱口政黨內閣に讓つた。

今や濱口內閣は自由主義的？、、、、、、、、、、、、、として吾等の前に現はれた。濱口內閣は政治的には自由主義的片鱗を見せた懷柔的態度を採らんとするも、其の經濟的政策に於ては一〇〇パーセントは、、、、、、、、である。從つて彼等が勞働組合法、小作法等に抽象的進步的傾向を現はすと雖も、彼等の具體的政策の與へる影響は、勞働階級の極度の窮乏化と隷屬化である。其の、、に

のために、勞働階級に對してあらゆる、、を要求してゐる。この、、の要求こそ、田中反動內閣の、、にも優して勞働組合運動の上に、、、、、を與ふるものである。この影響と鬪ふことこそ、勞働組合運動當面の全使命でなければならぬ。而してこの鬪爭によく戰ふものは、階級的純情に燃ゆる意識的指導者の下にある大衆のみである。勞働者の自然成長性を自己の野心の故に抑壓せんとするが如きは明かに勞働者に對する反逆者である。總同盟右翼指導者が如何なる意圖の下に右翼戰術を採れるやは知る限りでないが、今日の吾等の當面せる客觀的事象は斷じて吾等に總同盟右翼幹部が抱懷せるが如き右翼戰術の採用を許容せない。卽ち今後の運動の展望に於て右翼的分野の成長の可能性は殆んど絕無と謂ふべきである。然るに客觀的條件の伴はない右翼勢力が現實に尙若干の勢力を有し、且つ今

其處には彼等の存在を條件づける特殊的客觀性の存することを見ねばならぬ。只、それは何處までも特殊性であつて一般性ではない。彼等が特殊的條件を强調することによつて恰も一般的なるが如き錯覺を勞働大衆に懷かしめるが如きに對しては斷じて戰はねばならぬ。

之を要するに、今、わが勞働組合運動は對外的にも對內的にも苦難な鬪爭の十字路に立たせられてゐる。路は只一途である。鬪つて攫む處なくんば、、、、、、、、されてゐる。總同盟の分裂的紛爭こそ、その、、、、への一步である。（九・二）

産業別的闘爭の展開

奥村甚之助

勞働組合運動を如何にして進出的に再建するか？　又現下の諸傾向の勞働組合を如何にして打つて一丸とするか？　これが本紙編輯者の私に與へた課題である。これに對する私の回答は、個人として最も自由なる立場からなされる。

一、今日我國勞働階級は如何なる地位に居るか――一言にして云へば、、、　のためになされる凡ゆる政策――産業の合理化、金解禁と國債整理の爲めになされる緊縮政策、、、、、、、、、、、等々――のために全く瀕死線上をこづき廻されてゐる。生活に於ける此の狀勢は、組織と未組織、右翼と左翼とを問はず、總べての勞働者大衆を、、、、の、、、へ驅り立てゝゐる。勞働者大衆の闘爭欲求が今日ほど全線的に、、なつた事は曾つてない。右翼社會民主々義者が『産業に於ける平和主義』から如何に爭議を、、、、、、さうと、左翼社會民主々義者が如何に闘爭を限定しやうと、この根本的な事實は斷じて打消すことが出來ない。此の事は、今日我々左翼勞働組合の組合員が組織的積極的に勞働大衆に働きかけさへすれば、總べての勞働大衆を一大統一的大衆的闘爭に動員出來るものであることを示す。

二、組織と闘爭との關係について――總べて闘爭團體の組織は、闘爭を通じて建設されるものであるし、又さうでなければならない。大正七八年頃、まだ勞働組合の勢力が云ふに足らぬ微力なものであつたにも拘らず大衆は自然發生的にストライキを起し、其中から組合を建設した。しかし闘爭を通じて組織を建設する場合に我々の忘れてならぬ事が二つある。一つは、、、、、、、、の間に於て、工場内大衆の中に組織の核心を形成して行くことだ。そしてこの核心的組織を通じて、闘爭の全過程に於て部分的工場的要求から闘爭に乗り出した大衆に、、、、、、、教育と訓練――左翼勞働組合員としての教育と訓練――を與へる事だ。それは又右の核心的組織の擴張强化のためにも役立つであらう。これあつて始めて闘爭は、たとへ未組織勞働者のそれであつても統一ある闘爭團の闘爭となり得るし、又闘爭の中から、闘爭團それ自身を永續的な組織にまで發展せしめることが出來る。第二に、、、、、、せしめる事だ。餘程長年月の闘爭と訓練を經て來た組織ある工場でない限り、經濟闘爭の敗北は後に組織を殘さない。

三、如何にすれば勝つ事が出來るか？――今一切の詳細な戰術上の問題を抜きに云へば

の悲壯なる抗爭的ストライキの頻發を見よ。其處には如實なる日本の資本主義相とありのまゝなる勞働階級の姿とを見出すであらう。この現實相こそ、われ等の運動の基本的條件である。

金融資本、、、への一役割——無類なる勞働運動の彈壓——を果した田中政友會內閣は、金融資本を中心とした合理化强化のために其の地位を濱口政黨內閣に讓つた。

今や濱口內閣は自由主義的？、、、、、、、、、、、、、として吾等の前に現はれた。濱口內閣は政治的には自由主義的片鱗を見せた懷柔的態度を採らんとするも、其の經濟的政策に於ては一〇〇パーセントは、、、、、、、、である。從つて彼等が勞働組合法、小作法等に抽象的進歩的傾向を現はすと雖も、彼等の具體的政策の與へる影響は、勞働階級の極度の窮乏化と隷屬化である。其の、、に

のために、勞働階級に對してあらゆる、、を要求してゐる。この、、の要求こそ、田中反動內閣の、、にも優して勞働組合運動の上に、、、、、を與ふるものである。この影響と鬪ふことこそ、勞働組合運動當面の全使命でなければならぬ。而してこの鬪爭によく戰ふものは、階級的純情に燃ゆる意識的指導者の下にある大衆のみである。勞働者の自然成長性を自己の野心の故に抑壓せんとするが如きは明かに勞働者に對する反逆者である。總同盟右翼指導者が如何なる意圖の下に右翼戰術を採れるやは知る限りでないが、今日の吾等の當面せる客觀的事象は斷じて吾等に總同盟右翼幹部が抱懷せるが如き右翼戰術の採用を許容せない。即ち今後の運動の展望に於て右翼的分野の成長の可能性は殆んど絕無と謂ふべきである。然るに客觀的條件の伴はない右翼勢力が現實に尙若干の勢力を有し、且つ今其處には彼等の存在を條件づける特殊的客觀性の存することを見ねばならぬ。只、それは何處までも特殊性であつて一般性ではない。彼等が特殊的條件を强調することによつて恰も一般的なるが如き錯覺を勞働大衆に懷かしめるが如きに對しては斷じて戰はねばならぬ。

之を要するに、今、わが勞働組合運動は對外的にも對內的にも苦難な鬪爭の十字路に立たせられてゐる。路は只一途である。鬪つて攫む處なくんば、、、、、、、、、、されてゐる。總同盟の分裂的紛爭こそ、その、、、、、への一歩である。（九・二）

産業別的闘爭の展開

奥村甚之助

労働組合運動を如何にして進出的に再建するか？　又現下の諸傾向の労働組合を如何にして打つて一丸とするか？　これが本紙編輯者の私に與へた課題である。これに對する私の回答は、個人として最も自由なる立場からなされる。

一、今日我國労働階級は如何なる地位に居るか——一言にして云へば、、、　のためになされる凡ゆる政策——産業の合理化、金解禁と國債整理の爲めになされる緊縮政策、、、、、、、、、、等々——のために全く饑死線上をこづき廻されてゐる。生活に於ける此の状勢は、組織と未組織、右翼と左翼とを問はず、總べての労働者大衆を、、、、の、、へ驅り立てゝゐる。労働者大衆の闘爭欲求が今日ほど全線的に、、なつた事は曾つてない。右翼社會民主々義者が『産業に於ける平和主義』から如何に爭議を、、、、、、、さうしやうと、この根本的な事實は斷じて打消すことが出來ない。此の事は、今日我々左翼労働組合の組合員が組織的積極的に労働大衆に働きかけさへすれば、總べての労働大衆を一大統一的大衆的闘爭に動員出來るものであることを示す。

二、組織と闘爭との關係について——總べて闘爭團體の組織は、闘爭を通じて建設されるものであるし、又さうでなければならない。大正七八年頃、まだ労働組合の勢力が云ふに足らぬ微力なものであつたにも拘らず大衆は自然發生的にストライキを起し、其中から組合を建設した。しかし闘爭を通じて組織を建設する場合に我々の忘れてならぬ事が二つある。一つは、、、、、、、、の問題に於て、工場内大衆の中に組織の核心を形成して行くことだ。そしてこの核心的組織を通じて、闘爭の全過程に於て部分的工場的要求から闘爭に乘り出した大衆に、、、、、、、教育と訓練——左翼労働組合員としての教育と訓練——を與へる事だ。それは又右の核心的組織の擴張強化のためにも役立つであらう。これあつて始めて闘爭は、たとへ未組織労働者のそれであつても統一ある闘爭團の闘爭となり得るし、又闘爭の中から、闘爭團それ自身を永續的な組織にまで發展せしめることが出來る。第二に、、、、、、せしめる事だ。餘程長年月の闘爭と訓練を經て來た組織ある工場でない限り、經濟闘爭の敗北は後に組織を殘さない。

三、如何にすれば勝つ事が出來るか？——今一切の詳細な戰術上の問題を抜きに云へば

それは産業別的統一的闘爭、(其の最高形態は産業別的、、、、、、、、、、、、)によつて、と答へ得る。

資本は今や彼等のカルテル、トラスト等の組織を以つて、單に生産上の協定、統一の機關としてゐるのみではない。それは今や實に勞働軍に對する統一ある、集中的な攻撃の武器として最大限度に利用されてゐる。今日の瞬間に於て一つの工場に爭議が起きた場合、その資本家を勝たすための資本家團の、、、、、、、、、、積極的乘り出しのない場合があるか? 斯る強力な資本家團に、、してその要求を貫かんとする場合、、、が工場個々の闘爭、組織を以つて臨む事は、恰もグラーフ、ツエッペリンの氣嚢の一畫を突くやうなもので何等の効もないのだ。勞働者の團結とは、今や單に個々の工場内の勞働者群のそれを指すのみではなく、産業別の全工場の團結

も勝つ事が出來なかつた。××運輸勞働者の、、、、、、、、、、、、、、は、、、、、、、の援助に結びついた小樽の資本家團の一致力を見事に屈伏せしめたではないか。

四、左翼組合のみが、、の、、だ――勞働者大衆は素晴しく闘爭的になつてゐる。そして彼等は斷乎として、、、を要求してゐる。ところで右翼はそれを――勞働者の闘爭欲求を――抑壓し、左翼社會民主主義者はそれを一定限度に止めやうとしてゐる。彼等はいづれも、、、、、、、、、、、、、、の戰術を初めから觸るゝべからざるものとしてゐる。しかも勝つためには、、、、、の、、が絕對に必要なのだ。が、、、、、、、その戰術を持ち、實踐に於て成功した經驗と傳統とを持つ。從つて、我々のみが眞に現下の大衆の要求を代表し、その闘爭を正しく指導し得

いのではなくして、數回に――と云ふよりものべつ幕なしに――亘つた、、、のため人間的、組織的に幾多の損害を受けて來、その傷手のために充分に活動出來得なかつたからである。しかし今や我々の力は相當回復して來た。我々の責任は重い。我々はこの力を最大限度に活用しなければならない。

五、組合戰線の統一について――組合の統一は指導者間の『諒解』によつては斷じて達しられない。この理論は今日終局的に決定してゐる。それは大衆の中から、大衆の闘爭を通じて、建設しなければならない。從つて大衆の要求を代表し大衆の闘爭を、、、、、、、、、、、、を有する我々のみが、我々の闘爭のみが、これをよく成し遂げ得られるのだ。、、、、の戰術をもち、大衆の要求と闘爭力を餘すところなく活かして、右翼、中

予經驗はある。

統一問題について、右翼幹部は公然と左右二分說を主張してゐる。だから彼等はその支配下の左翼分子放逐の方策を强化してゐる。最近の總同盟大阪聯合會の內紛を見よ! 中央派、殊に左翼社會民主々義者は、耳のためにのみ快い左翼的言辭を弄して統一運動を云々するが、實際には左翼的戰鬪的勞働者排斥と云ふ最も陰險な分裂政策を遂行してゐる。彼等の今日有する若干の組合は、この分裂政策によつて『戰ひ取つた』組織である。だから統一の眞實の達成は、鬪爭の間に於て、彼等日和見主義的指導者の指導を、決定的に大衆から浮上らさなければなし得られない。殊に左翼社會民主々義者の左翼的言辭に騙されて、彼等が統一問題に忠實な氣持と力とを持つてゐると信ずる事は特に危險である。

六、左翼組合の進出的再建について——答へはもう出來てゐる。左翼組合は以上の如き鬪爭を最も效果的に、精力的に展開する事だ。そして、未組織勞働者を、壓倒的に左翼組合の陣列に獲得し、更に左右中の日和見的組合の大衆の中に、左翼の影響を浸透擴張し、更にそれを組織的な形態にまで强化する事だ。總べて鬪爭せる大衆の中に、その鬪爭を通じて前に述べた如き左翼の核心的組織を意識的に形成して行くと云ふ事は、絕對に必要である。左翼組合の鬪爭の影響は、左翼組合が正しい戰ひをやつてゐる限り、間違ひなく考へる事が出來る。しかしそれだけでは左翼組合の下に組織化したとは云へない。我々は我々の鬪爭の影響の浸透につれて、これを組織的形態に於て確保しなければならない。この方面の行動こそ、今日まで我々の側に於て充分行はれなかつたところだ。一九二七年の金融恐慌に於て、左翼組合が工代運動で素晴しい成功を見てゐながら、その組織上の强化擴大の方面では充分な結果を見なかつたのは、將にこの方面の意識的行動が不充分であつたからだ。

七、産業別オルガナイザー編成に就て——我國左翼勞働組合の全國的聯絡機關、勞働組合協議會は、現在數種の産業別委員會を持つて産業別的な組織と鬪爭とを全國化するために戰つてゐる。この運動は全國の戰鬪的勞働者の全幅的參加によつて强化されねばならぬ。さしづめ、各地の左翼組合は、その指導下の戰鬪的勞働者及び各傾向の組合員大衆の參加によつて、右の協議會の産業別委員會の下に産業別に配置された地方オルガナイザー團の、、、、をなすべきだ。そしてこのオルガナイザー團は全國的な聯絡を保ちつゝ、その地方の、、、、、へ、産業別に統一した猛烈なる働きかけをなすべきだ。この場合その、、の組織未組織は敢て問ふべきではない。

尙、現に鬪爭しつゝある左翼以外の組合、、、、、、、、左翼は猛烈に働きかけねばならない。その場合、左翼以外の指導者は、決定的な瞬間に於て必ず、、をするものであると云ふ事を、幾多の實例をもつて大衆に示さねばならない。

八、工場へ働きかける手段について——、、は、左翼勞働組合の運動のみならず、右翼

それは産業別的統一的闘爭、(其の最高形態は産業別的、、、、、、、、、、)によつて、と答へ得る。

資本は今や彼等のカルテル、トラスト等の組織を以つて、單に生産上の協定、統一の機關としてゐるのみではない。それは今や實に勞働軍に對する統一ある、集中的な攻撃の武器として最大限度に利用されてゐる。今日の瞬間に於て一つの工場に爭議が起きた場合、その資本家を勝たすための資本家團の、、、、、、、、、、積極的乘り出しのない場合があるか? 斯る強力な資本家團に、、してその要求を貫かんとする場合、、、が工場個々の闘爭、組織を以つて臨む事は、恰もグラーフ、ツエッペリンの氣嚢の一畫を突くやうなもので何等の効もないのだ。勞働者の團結とは、今や單に個々の工場内の勞働者群のそれを指すのみではなく、産業別の全工場の團結

も勝つ事が出來なかつた。××運輸勞働者の、、、、、、、、、、、、は、、、、、、、の援助に結びついた小樽の資本家團の一致力を見事に屈伏せしめたではないか。

四、左翼組合のみが、、の、、だ——勞働者大衆は素晴しく闘爭的になつてゐる。そして彼等は斷乎として、、、を要求してゐる。ところで右翼はそれを——勞働者の闘爭欲求を——抑壓し、左翼社會民主主義者はそれを一定限度に止めやうとしてゐる。彼等はいづれも、、、、、、、、、、、、、の戰術を初めから觸るゝべからざるものとしてゐる。しかも勝つためには、、、、、、の、、が絶對に必要なのだ。が、、、、、、、その戰術を持ち、實踐に於て成功した經驗と傳統とを持つ。從つて、我々のみが眞に現下の大衆の要求を代表し、その闘爭を正しく指導し得る資格を持つてゐるのだ。成る程、今日我々

いのではなくして、數回に——と云ふよりものべつ幕なしに——亘つた、、のため人間的、組織的に幾多の損害を受けて來、その傷手のために充分に活動出來得なかつたからである。しかし今や我々の力は相當回復して來た。我々の責任は重い。我々はこの力を最大限度に活用しなければならない。

五、組合戰線の統一について——組合の統一は指導者間の『諒解』によつては斷じて達しられない。この理論は今日終局的に決定してゐる。それは大衆の中から、大衆の闘爭を通じて、建設しなければならない。從つて大衆の要求を代表し大衆の闘爭を、、、、、、、、、、を有する我々のみが、我々の闘爭のみが、これをよく成し遂げ得られるのだ。、、、、、の戰術をもち、大衆の要求と闘爭力を餘すところなく活かして、右翼、中間、組織未組織を問はず總べて直接工場の中

干經驗はある。

統一問題について、右翼幹部は公然と左右二分說を主張してゐる。だから彼等はその支配下の左翼分子放逐の方策を强化してゐる。最近の總同盟大阪聯合會の內紛を見よ！　中央派、殊に左翼社會民主々義者は、耳のためにのみ快い左翼的言辭を弄して統一運動を云々するが、實際には左翼的戰鬪的勞働者排斥と云ふ最も陰險な分裂政策を遂行してゐる。彼等の今日有する若干の組合は、この分裂政策によつて『戰ひ取つた』組織である。だから統一の眞實の達成は、鬪爭の間に於て、彼等日和見主義的指導者の指導を、決定的に大衆から浮上らさなければなし得られない。殊に左翼社會民主々義者の左翼的言辭に騙されて、彼等が統一問題に忠實な氣持と力とを持つてゐると信ずる事は特に危險である。

六、左翼組合の進出的再建について――答へはもう出來てゐる。左翼組合は以上の如き鬪爭を最も效果的に、精力的に展開する事だ。そして、未組織勞働者を、壓倒的に左翼組合の陣列に獲得し、更に左右中の日和見的組合の大衆の中に、左翼の影響を浸透擴張し、更にそれを組織的な形態にまで强化する事だ。總べて鬪爭せる大衆の中に、その鬪爭を通じて前に述べた如き左翼の核心的組織を意識的に形成して行くと云ふ事は、絕對に必要である。左翼組合の鬪爭の影響は、左翼組合が正しい戰ひをやつてゐる限り、間違ひなく考へる事が出來る。しかしそれだけでは左翼組合の下に組織化したとは云へない。我々は我々の鬪爭の影響の浸透につれて、これを組織的形態に於て確保しなければならない。この方面の行動こそ、今日まで我々の側に於て充分行はれなかつたところだ。一九二七年の金融恐慌に於て、左翼組合が工代運動で素晴しい成功を見てゐながら、その組織上の强化擴大の方面では充分な結果を見なかつたのは、將にこの方面の意識的行動が不充分であつたからだ。

七、産業別オルガナイザー編成に就て――我國左翼勞働組合の全國的聯絡機關、勞働組合協議會は、現在數種の産業別委員會を持つて産業別的な組織と鬪爭とを全國化するために戰つてゐる。この運動は全國の戰鬪的勞働者の全幅的參加によつて强化されねばならぬ。さしづめ、各地の左翼組合は、その指導下の戰鬪的勞働者及び各傾向の組合員大衆の參加によつて、右の協議會の産業別委員會の下に産業別に配置された地方オルガナイザー團の、、、、をなすべきだ。そしてこのオルガナイザー團は全國的な聯絡を保ちつゝ、その地方の、、、、、へ、産業別に統一した猛烈なる働きかけをなすべきだ。この場合その、、の組織未組織は敢て問ふべきではない。尙、現に鬪爭しつゝある左翼以外の組合、、、、、、、左翼に猛烈に働きかけねばならない。その場合、左翼以外の指導者に決定的な瞬間に於て必ず、、をするものであると云ふ事を、幾多の實例をもつて大衆に示さねばならない。

八、工場へ働きかける手段について――、、は、左翼勞働組合の運動のみならず、右翼

それは産業別的統一的鬪爭、（其の最高形態は産業別的、、、、、、、、、、）によつて、と答へ得る。

資本は今や彼等のカルテル、トラスト等の組織を以つて、單に生産上の協定、統一の機關としてゐるのみではない。それは今や實に勞働軍に對する統一ある、集中的な攻擊の武器として最大限度に利用されてゐる。今日の瞬間に於て一つの工場に爭議が起きた場合、その資本家を勝たすための資本家團の、、、、、、、、、積極的乘り出しのない場合があるか？　斯る強力な資本家團に、、してその要求を貫かんとする場合、、、が工場個々の鬪爭、組織を以つて臨む事は、恰もグラーフ、ツエツペリンの氣嚢の一畫を突くやうなもので何等の効もないのだ。勞働者の團結とは、今や單に個々の工場内の勞働者群のそれを指すのみではなく、産業別の全工場の團結

も勝つ事が出來なかつた。××運輸勞働者の、、、、、、、、、、、は、、、、、、の援助に結びついた小樽の資本家團の一致力を見事に屈伏せしめたではないか。

四、左翼組合のみが、、の、、だ――勞働者大衆は素晴しく鬪爭的になつてゐる。そして彼等は斷乎として、、、を要求してゐる。ところで右翼はそれを――勞働者の鬪爭欲求を――抑壓し、左翼社會民主主義者はそれを一定限度に止めやうとしてゐる。彼等はいづれも、、、、、、、、、、、、、の戰術を初めから觸るゝべからざるものとしてゐる。しかも勝つためには、、、、、の、、が絕對に必要なのだ。が、、、、、、、その戰術を持ち、實踐に於て成功した經驗と傳統とを持つ。從つて、我々のみが眞に現下の大衆の要求を代表し、その鬪爭を正しく指導し得る資格を持つ一つのものだ。

いのではなくして、數回に――と云ふよりものべつ幕なしに――亘つた、、、のため人間的、組織的に幾多の損害を受けて來、その傷手のために充分に活動出來得なかつたからである。しかし今や我々の力は相當回復して來た。我々の責任は重い。我々はこの力を最大限度に活用しなければならない。

五、組合戰線の統一について――組合の統一は指導者間の『諒解』によつては斷じて達しられない。この理論は今日終局的に決定してゐる。それは大衆の中から、大衆の鬪爭を通じて、建設しなければならない。從つて大衆の要求を代表し大衆の鬪爭を、、、、、、、、、、、、を有する我々のみが、我々の鬪爭のみが、これをよく成し遂げ得られるのだ。、、、、、の戰術をもち、大衆の要求と鬪爭力を餘すところなく活かして、右翼、中間、組織未組織を問はず總べて直接工場の中

干經驗はある。

統一問題について、右翼幹部は公然と左右二分說を主張してゐる。だから彼等はその支配下の左翼分子放逐の方策を強化してゐる。最近の總同盟大阪聯合會の內紛を見よ！　中央派、殊に左翼社會民主々義者は、耳のためにのみ快い左翼的言辭を弄して統一運動を云々するが、實際には左翼的戰鬪的勞働者排斥と云ふ最も陰險な分裂政策を遂行してゐる。彼等の今日有する若干の組合は、この分裂政策によつて『戰ひ取つた』組織である。だから統一の眞實の達成は、鬪爭の間に於て、彼等日和見主義的指導者の指導を、決定的に大衆から浮上らさなければなし得られない。殊に左翼社會民主々義者の左翼的言辭に騙されて、彼等が統一問題に忠實な氣持と力とを持つてゐると信ずる事は特に危險である。

六、左翼組合の進出的再建について——答へはもう出來てゐる。左翼組合は以上の如き鬪爭を最も效果的に、精力的に展開する事だ。そして、未組織勞働者を、壓倒的に左翼組合の陣列に獲得し、更に左右中の日和見的組合の大衆の中に、左翼の影響を浸透擴張し、更にそれを組織的な形態にまで強化する事だ。總べて鬪爭せる大衆の中に、その鬪爭を通じて前に述べた如き左翼の核心的組織を意識的に形成して行くと云ふ事は、絕對に必要である。左翼組合の鬪爭の影響は、左翼組合が正しい戰ひをやつてゐる限り、間違ひなく滲へる事が出來る。しかしそれだけでは左翼組合の下に組織化したとは云へない。我々は我々の鬪爭の影響の浸透につれて、これを組織的形態に於て確保しなければならない。この方面の行動こそ、今日まで我々の側に於て充分行はれなかつたところだ。一九二七年の金融恐慌に於て、左翼組合が工代運動で素晴しい成功を見てゐながら、その組織上の强化擴大の方面では充分な結果を見なかつたのは、將にこの方面の意識的行動が不充分であつたからだ。

七、產業別オルガナイザー編成に就て——我國左翼勞働組合の全國的聯絡機關、勞働組合協議會は、現在數種の產業別委員會を持つて產業別的な組織と鬪爭とを全國化するために戰つてゐる。この運動は全國の戰鬪的勞働者の全幅的參加によつて強化されねばならぬ。さしづめ、各地の左翼組合は、その指導下の戰鬪的勞働者及び各傾向の組合員大衆の參加によつて、右の協議會の產業別委員會の下に產業別に配置された地方オルガナイザー團の、、、、をなすべきだ。そしてこのオルガナイザー團は全國的な聯絡を保ちつゝ、その地方の、、、、、、へ、產業別に統一した猛烈なる働きかけをなすべきだ。この場合その、、の組織未組織は敢て問ふべきではない。尙、現に鬪爭しつゝある左翼以外の傘下、、、、、、、、、左翼は猛烈に働きかけねばならない。その場合、左翼以外の指導者は、決定的な瞬間に於て必ず、、をするものであると云ふ事を、幾多の實例をもつて大衆に示さねばならない。

八、工場へ働きかける手段について——、、は、左翼勞働組合の運動のみならず、右翼

組合の大衆の闘爭に對してすら無茶苦茶な、、を加へてゐる。――、、、、よ！　合法闘爭を彈壓しないと云ふ、、、、、、、を表せ！――だから我々はこの、、、、、、、、から大衆の闘爭を防衛するための充分な準備を整へて置かなければならない。特に、、の、、期間に於ては一層細心の注意が必要である。しかしこれに就ての戰術も又、我々の經驗のあるところだ。

過去に於ける他の一つの經驗は、大衆の闘爭を誘發し、統一的に發展せしめる有効な手段として、定期的に發行される、、、の、、の有効性を示してゐる。これは最大限度に應用されねばならない。、、が大衆の手に渡る時は、我々が口を以つて云はんとしても云ひ得ない、、、、、、を大衆が目を通じて知つてくれる時だ。それは我々と大衆との代等の、、、、、、、、の戰術が活用されなければならぬ事は云ふまでもない。

――何だか仲間内の論議のやうなものになつたが、改造は多くの勞働者を讀者に持つと聞くから、その人々に理解して貰へば筆者の目的は達する。書き足らぬところが多いが、これでも豫定の紙數をはるかに越へた。（一九二九・八・二七）

左翼勞働組合是非

荒畑寒村

一

勞働總同盟大阪聯合會の紛爭は、勞働組合運動に於ける左右兩派の對立闘爭、左翼の食ひ下り戰術、及び左翼組合建設の可否等を、再び當面の重要問題たらしめてゐる。

總同盟幹部が意識的に協調主義を取り、組合員大衆の爭議を裏切り、資本家の、、するして看過し得やう。然し、勝つも負くるも必ず解雇者を出すのを爭議解決の條件とし、勝つた爭議（！）に際しては、解決條件の覺書を作製せず、そして幹部が常に、、、、と、、になつて、獨斷的に資本家と爭議の解決條件を取定めるのが、近時大阪に於ける總同盟の方針を作せる、顯著な一特色だと言ふに至

かゝる事情は、獨り總同盟内のみに止まらず、一般に勞働運動内の左翼分子をして、此の文字通りのダラ幹が指導する右翼團體との提携合同に、絶望せしむるに充分である。彼等はこう斷定する。かくの如き團體は既に自ら勞働組合の本質的機能を拋棄し、最早や勞働者の初發的な要求をすら代表し得ず、從つて之と協同提携すべき理由も價値もない。次にはダラ幹の勢力が相當に鞏固で、容易にこれを覆へし得ないから、これを協同するのは徒らに彼等の位地を强めるに過ぎぬ。そして最後に、左翼派は少數の場合でも自ら分裂を欲しないが、右翼派は概むね多數を制してゐるにも拘はらず、常に分裂を賭して左翼排除に狂奔してゐる云々。

そして以上の諸理由が、獨立の運動中心たる左翼勞働組合の結成に對し、强い刺戟誘因を與ふべきは、因より甚だ見易い所である。

二

若し此の左翼勞働組合が、恒久的な獨立せる運動の主體を意味するならば、それは總同盟其他の右翼的及び改良主義的な勞働團體の大衆が意識的に社會民主々義的首領の統制に甘んじ、その組織、その思想、その運動は、到底急進化する可能性を有しない。換言すれば、それは最早や勞働組合としては、既に破産してゐるとの假定に立たなければならぬ。だが、現在の右翼的勞働團體に對する、かくの如き認識は、果して正鵠を得たものであるか、否か。

歐米の保守的な勞働組合運動、及びこれが社會民主々義的首領の牢乎たる勢力は、彼等が久しい資本主義の發展段階の間に占め來れる職業上の性質、階級内の位地、及び彼等に特殊なる利害に應じた組織形態等の如き、社會的事實に基づいてゐる。米國勞働聯合會(A・F・L)は何故、最も典型的な保守的組合であるか。それはゴムパアスやグリーンが、、、某や、、某に輪をかけたダラ幹であるよりも、寧ろA・F・Lの性質と組織とが勞働階級の利害を代表せずして單に勞働貴族の利害を代表するに過ぎざる職業組合だからである。そして社會民主々義に、最党かゝる勞働貴族の利害と一致せる、勞働運動の哲學であつたに外ならない。

國際勞働會議の出張を單生の目的とし、久原遞相の祝賀會にブルジョアと伍して、殘肴冷酒に兇尾をふる、、、の幹部が、意識的に組合運動を右翼化さんとするは、因より爭ひ難き事實である。然しそれだからとて、、、、内の右翼的傾向をたゞちに固定的な、永久的なものと見るのは早計である。

、、、(のみに限らず一般に)の組織が職業單位でない事が一。右翼幹部の協調政策にも拘はらず、多くの組合の間に爭議の勃發してゐる事が二。幹部獨裁の基礎條件たる、官工統制が組織的に樹立されてゐない事が三。××の組合全滅に見らるゝ如く、攻勢的資本に對して幹部の欲する如き協調の存し得ない事が四。そして××聯合會の例で云へば、組合員の四分の三が左翼派を支持してゐる事が五。以上の事實は、右翼幹部の統制が大衆の間に徹底してゐず、組合大衆の經濟的に

は幹部の意圖にも拘はらず自然發生的に爽發してゐると共に、右翼幹部をして歐米のそれの如き、勞働貴族の一階級（ケースト）たらしむべき條件の寧ろ甚だ少ない事を示すものではないか。勞働團體の性質、傾向等を、幹部の現有勢力に依て判斷せずして、その組合員大衆の（たとへ初發的なものにせよ）一般的傾向、及び大衆の鬪爭意欲を發展させ若しは阻止すべき組織形態に依て、認識することが重要なのである。

三

或は問ふであらう、それなら何故、總同盟の綱領に則つてゐる左翼派が除名せられんとするのか。何故、この右翼幹部に對する反抗が所在に、大衆的に勃發しないのであらうか。之れ豈、總同盟が既に意識的に右翼化してゐる證據ではないかと。

今日、左翼派の勢力が一般に微弱である事は爭へないが、然しこれは日本の勞働階級が一般的に、守勢退嬰の位地に置かれてゐて、全線的な攻勢に出づるの狀態にないと云ふ事情が、甚大な動因を作してゐる事實を忘れてはならぬ。左翼にとつて今は悪い潮時であり、左翼がその形勢に乘じ、その自然發生的な鬪爭を激成指導し、以てその勢力を堅むべき基礎條件たる、未組織勞働者の組合流入が殆んど存せず、大產業に於ける勞働者の組織は崩壞のまゝに殘つてゐる。

世界大戰の末期に於ける組合運動の勃興、戰鬪的精神の横溢、未組織大衆の組合流入、歐洲の、、、風潮の影響等は、日本の勞働運動に突如として高潮期を劃した。然るに、其後の慢性的な不景氣は、殆んど組合運動の精力を涸渇し盡して、今日では僅かに殘存せる組織勞働者がその既得の陣地を、猛烈なる資本の攻勢に抗して辛ふじて維持せるに過ぎない。組合員の心理は必然的に保守退嬰に傾むかざるを得ずして、そこが亦た右翼幹部のつけ目でもある。要するに、一切の情勢が組合運動の反動期を示して居り、右翼が潮時に乘つてゐるのである。

かゝる事情にも拘はらず、猶且つ大衆の間に隱然たる、、、、、、、、せるを見れば、總同盟及び其他の右翼團體を以て、意識化せる社會民主々義的組合、或は組合の機能を失へる團體となし、獨立の左翼組合運動の主體を作るべしとなすは、到底與する能はざる所である。

左翼組合にもいろ〳〵變種が出來て、右翼と對立抗爭する恒久的な組織には反對だが、右翼や中間派と合同すべき實際的、具體的な條件を作り出すために、一と先づ左翼主體を作るべしと云ふ、謂はゞ過渡的な左翼組合の結成論もある。今日、組合運動の戰線統一に對する條件の缺如し、これが實現の困難なるは事實であるが、然しその具體的條件を左翼組合の結成に求めんとするのは、勞働組合の職能を閑却した議論と云はざるを得ぬ。

たとへば、組合が發達するに從つて、工場に於ける二派（或は數派）組合の限界は狹くなり、或は全く接觸してしまふ、その結果は、平時に於ては職業統轄權の紛爭を誘起し、爭議に際しては右翼派のスキャブとなり、對立

抗争の溝は益々深められて、指導者の善良な意圖にも拘はらず、必然に二重組合主義の弊に陥らざるを得ぬ。組合運動の勃興當時を顧みれば、かゝる危險の胞芽が到る所に現はれてゐた事實を惹起するに難くない。

四

少なくとも現在の情勢に在ては、吾々は左翼組合の結成に反對せざるを得ぬ。却つて左翼的な組合は、他の全國的な勞働團體に加盟し、運動中心を減少する上に、最善の努力を傾倒せねばならぬと信ずる。若し左翼的な組合が、一の團體から分裂するのを止むなきに至つた場合、吾々はその勢力の分散を防ぐために、之を結成するの無條件的に正しいと信ずるが、然しそれは飽までもその糾合結束せる努力を以て、原團體との再合同に努力をするためなるを要する。

勿論、これ等の事、一として多大の困難を件はざるはない。組合運動に於ける左翼分子は、此間に處して如何に行動すべきか。

第一に、組合の合同の實際的、且つ積極的な條件は、之をその組織形態の變更に對する努力に求むべきである。左翼派はあらゆる團體の内部に在て、常に組合の『産業的合同』をスローガンとし、これが實現に努力せねばならぬ。日本に在ては職業組合の實際的組織と、その因襲的な傳統とは存しないから、之が實現上の困難と障碍とは、歐米のそれに比すれば殆んど絶無に等しい。茲にこそ左翼派が他日、牢乎たる位地を築くべき基礎はあるのだが、然しこの點に關する重大な努力は、未だ殆んど試みられなかつたと云つていゝ。

第二に、各派組合の地方評議會設置に對する努力である。全國總聯合は再三企てられたが、組合の協同、合同、統一等の礎石となり、中心となるべき地方評議會の設置に對しては、深甚な考慮と旺盛な努力とが拂はれてゐなかつた。現在の資本攻勢に對して、大衆を動員すべき機會は、それ自身を左翼派に提供してゐるのである。

第三に、左翼派は未組織大衆の獲得に向つて、右翼派との協同戰線を張るを必要とする。即ちこれが有効可能な方法(たとへば一工場、一地區に對し、一定期間の集約的な、、、の如きを提案組織し、此の運動に左右一切のオルガナイザアを動員しなければならぬ。

第四に、右翼幹部の醜行曝露は、その效果の多少、問題の性質、勢力の關係等を顧慮して、最も戰術的に取扱はれねばならぬ問題である。

第五に、左翼分子はこれ等の運動の過程に於て、堅忍努力してあらゆる組合の進歩的要素と相結び、横斷的な組織を築き上げねばならぬ。これは困難な多年の經營に俟たねばならぬが、然も此の組織のみが組合運動を左翼化すべき鍵鑰である。

五

吾々は吾々の動員がきく、エヘンと云へば左吹と云つたやうな、左翼組合を持つた方が遙かに便利である。だが、問題は一黨一派の動員のためではなくして、勞働階級百年の計にある。種々なる困難、障碍を算へ立てたら、孰れの側にもあらう。けれ共、階級的な立場から思ひを將來に沈潜せる左翼分子は、玩具のやうな左翼組合で左翼ゴッコをしてゐるよりも、必ずや經營慘憺たる多年の努力に遙かによき働らき甲斐を見出すであらう。

第十二回國際勞働總會

松岡駒吉

總會開かる

第十二回國際勞働總會は、本年五月三十日から六月廿一日迄、例年の通り瑞西ジュネーブ市に於いて開かれ、五十ケ國を代表する人人が出席したのである。

國際勞働總會は、國際聯盟中の一機關たる國際勞働機關の總會であつて、一九一九年ワシントンに於いて第一回總會が開かれて以來滿十ケ年になるのである。普通、毎年一回であるが、年に依ると二回開催される。本年も十月に第十三回總會が開かれることになつて居るのである。

る場合もあつて、本年はそれが十三ケ國あつた。これを不完全代表と稱して居る。

毎年總會に代表者を送らない國は、主なるものとしてはアメリカとロシアである。本年は第一回國際勞働總會以來始めて、支那とブラジルが完全代表を送つて、一般的に歡迎された。かくて、第十二回總會は、百六十一名の代表と、二百三十五名の顧問に依つて構成されたのである。

議長は獨逸政府代表ハインリッヒ・ブラウンス氏で、各種委員會中、日本代表顧問の參加したものは、提議選擇委員會、第四百八條

ことは殆んど毎年の事であるが、本年は、在歐國民黨同盟執行委員會の名を以つて、支那勞働者代表馬氏に、エストニア工業者聯合會の名で、同國資本家代表プーク氏に、勞働組合國際聯合の名を以つて伊太利勞働者代表ラッツァ氏に對して、夫々抗議が提出されたが、何れも資格を承認された。

伊太利の勞働代表に對する抗議は、ファシストの專政後毎年繰り返される事である。同國の勞働組合は、ファシストの暴壓に依つて破壞され、現存するものは、ファシスト政府の御用組合で全く自主權を失つて居るから、その代表者を勞働代表と認め難いと云ふのが抗議の理由である。この抗議は、各國勞働側が一致して支持し、各國政府及資本家側が一致して反對するのが例であるが、今回は英國及獨逸の政府側代表が、その票決に加はらな

勸告案は左の四案である

一、船舶の荷役に傭使せらるる勞働者の災害保護に關する條約案

二、船舶の輸送重量、荷物の重量標示に關する條約案

三、產業災害豫防に關する勸告案

四、動力使用の機械の保護裝置に對する責任に關する勸告案

條約案と云ふのは、各國に於いて之を批准し、その國の法律となることを目的として採擇されるもので、各國が批准をすれば直ちに國際條約としての拘束力が生ずるのである。

勸告案と云ふのは、文字通り、勞働總會が各國に向つてこれが實施を勸告するに止まるのである。

條約案の批准は、各國は概ね立法議會であるが、我國に於いては樞密院になつて居る。この點に就いて私は今回の總會に「勞働條約案批准手續に關する決議案」を提出したが、日本政府代表及佛國政府代表等の猛烈なる反對があり、結局多少修正されて可決された。これに依つて國際勞働理事會に、批准手續に關する調査報告書を總會に提出することになつた。

尙、第十一回總會に至る迄に、商業、農業工業、運輸業等各種產業に亘り、勞働時間勞働賃銀、失業問題、婦人及幼年勞働者の保護、社會保險の各項目に及んで二十六箇の條約案及三十個の勸告案が採擇されたが、我國で批准した條約案は九箇に過ぎない。批准されたる條約案は、工業勞働者最低年齡法、職業紹介法令等々の法律となつて現れたが、改正工場法制定による婦人幼年勞働者の深夜業禁止、健康保險法等も、國際勞働總會の影響であつた。

勸告、條約案の內容

產業災害豫防勸告案と云ふのは、文字に示す通りのものである。私はこの「災害」を單に負傷のみに止めず疾病をも包含すべきであることを勞働者側代表の豫備會議で主張したところ、幸ひ滿場一致の贊成を得たのであるが、委員會に於いては遺憾乍ら否決せられた。この勸告案に災害豫防に關する硏究、設備及監督機關、法律上の義務、保險等の原則を定めたのであるが、殊に私共が注目すべきものと信ずる點は、右の事項を行ふに當つて、勞働組合との協力が高調された點であつた。公の監督機關內の地位に勞働者を任命することや、安全委員會に勞働者の代表を參加せしむるが如きは卽ちその一例である。この意味に於いて、我國の如き勞働組合が絕えずその生存を否認されて居る國に對しては、良い影響が與へられるものと信ぜらるゝものである。

動力使用機械の保護裝置に對する責任に關する勸告案も、前項勸告案と同性質のものである。

船舶の荷役に傭使せらるゝ勞働者の災害に對する保護に關する條約案は、仲仕、艀人足等、從來法律上の保護を受けて居なかつた勞働者に對す保護を規定したもので、廿四ケ條より成るものである。これに附隨して、船舶の荷役に傭使せらるゝ勞働者の災害に對する保護の相互的適用に關する勸告と、保護規

則制定に際して勞働者並に雇傭主の團體に協議することに關する勸告を行ふことになつた。

船舶輸送荷物重量標示條約案は、荷物の重量を一見明かなる様に標示すべしと云ふのであつて、前項の災害保護條約案と同一性質のものである。

强制勞働問題

第十二回國際勞働總會は、來る第十四回總會の議題となすべき事は、百一票對十五票で決定せられた。國際勞働總會の議事方法は、大正十五年以來二重討議制に改められて、同一議題に於いて二回の審議を行ふ事になつて居るのである。

强制勞働問題と云ふのは、主として南阿を始め有色人種の植民地に現存するものであつて、法制に依つて强制的に土人を勞働せしめて居る問題である。强制勞働に在つては、代償の[illegible]

ある。

第八回總會（大正十五年）には、私は顧問として出席したのであるが、その際、印度勞働代表ライ氏は「土人及有色人種勞働者の生活及勞働狀況調査に關する決議」を提出したのであつた。これは、主として所謂强制勞働に關するものであつたが、この決議に對して示したる白人諸國の勞働代表の態度は、私共の著しく不滿とするところであつた。

然るに、今回「强制勞働問題」が討議によることゝなるや、私共が勞働豫備會議に於いて「强制勞働全廢」を主張したところ、各國勞働代表は悉く之に贊成された。之に對しては我國政府代表も贊成したのであるが、植民地を有する各國は猛烈に反對したのであつた。

これが爲め勞働局提出の原案に近く、即ち「全廢」でなく「制限」程度に修正されたのは頗る遺憾であつた。勞働[illegible]

會の權威の爲めにも採らざるところである。

尚この問題は、東洋勞働組合會議が成立して、近き將來に南阿其他の諸國が之に參加する様になつたならば、益々熾烈なる反對運動が行はるるに相違ないと信ずる。

俸給被傭者の勞働時間

俸給勞働者の勞働時間問題は、今回は第一次の討議であつて、「强制勞働」と同様再び第十四回總會の議題たらしむることとなつた。

俸給被傭者とは、既に第十回總會に於いて決議されて居る如く、主として商業使用人を含むものであつて、我國には可成重大なる影響を與ふるものである。既に我國資本家團體は、この案に對して反對の意志を表明して居たのであつた。總會に於いては、各國資本家代表團はデンマークの資本家代表のオーステッド氏を推して反對をなさしめた。然も委員會は、[illegible]

政府側としては、英國、瑞典等が反對し、獨逸代表は賛意を表した。當時獨逸は社會民主黨の内閣であつたが、英國は尚保守黨の政府であつたことを思ひ合すと面白い。

資本家代表の反對する理由は、商業使用人の勞働時間は、各國各樣であつて、之を國際的に一定した規準を與ふることは困難な現狀であるから、時期尚早であると云ふに在る。

第十四回に於ける最終討議の規準となるべき勞働局提出の質問書は、結局採擇されることになつたが廿一日の一般討論に際して、岩崎資本家代表は、我國商業が家族制度であると云ふ特殊事情を力說して反對した。三越の勞働爭議に就いても見る事が出來る樣に、我國の商業が、大規模なものは勿論、小規模なものに於いても、實質的に「家族制度」たる性質を失つて居ることは事實である。然るに我國の資本家が依然としてこの「家族制度」を振り廻して居るのは、全くの時代錯誤であつて、かゝる理由の反對は、資本家團の中に於いても顧られなかつた。第十四回の總會は、この問題に如何なる最終結定を與へるかは知らないが、少くとも、商業使用人も亦勞働者と同樣の立場に於いて、種々な勞働立法を制定せねばならぬとの觀念は、、、、、、の所謂「、、、」に、、、、ふものであると云はねばならぬ。

地下勞働禁止に關する決議

婦人及少年勞働者が、我國に於いて今尚坑内勞働に從事して居る、昭和三年十月現在で、五十人以上を使用する鑛山の婦人坑夫は、約三萬七千人である。これに少年坑夫を加へれば四萬以上に上ると見なければならぬ。鑛夫勞役扶助規則の改正に依り、昭和八年九月一日より婦人の坑内作業は禁止されることになつて居るが、今後尚四年の時日があるのみならず、資本家團體に依つて更に之が實施再延期運動の起るも又保し難いところである。これを世界各國に就いて見れば、文明國では概ね禁止されて居るけれとも、印度其他明かに現存する國もあるので私はこれに關する決議案を提出した。多少の修正を受けて左の如きものとなつて採擇された。

「國際勞働總會に代表者を派遣せる政府も重要なる國々に於いて、女子及年少者の地下勞働が、今尚現に行はれつゝある遺憾なる事實に鑑み、總會は女子及び年少者の地下勞働の問題を近き將來の總會の議題となす事を考慮する樣國際勞働理事會に要求する」

これが近く總會の議案となるべきを私は確信して居るのである。

局長報告を繞る討論

局長アルベール・トーマ氏の報告書は、每年總會の討議に上るのであるが、六月七日午前より、六月十四日午前に至る七回の本會議に大部分之に當てられた。討論參加者は六十人に上り、三十有餘國に亘り八ケ國の國語が使用された。最後にトーマ局長が、二時間を費して之が答辯を行つたのである。

トーマ氏は、昨年日本を訪問されたので、報告書中には極東に關するものも多かつたのであるが、私は、こゝで主として團結權に關する日本の各代表の討論を紹介しよう。

私は、日本に於ける政府及資本家の團結權、、の事實を、野田勞働爭議及岡野の勞働爭議に就いて述べ「治安警察法第十七條は先年削除されたけれども、この法律中他の條項並に他の行政命令は、屢々結社團結權と罷業權とに干渉する爲めに援用せられる。一九二八年中に、日本では七千人以上の勞働者が、勞働爭議に參加したる故を以つて解雇された。私の關係する勞働總同盟も百五十の爭議に關係したが、中三十の爭議は單に勞働者が勞働組合員であるとの理由のみに依つて解雇せられたのに原因して居る」と說き、最後に「我々は一つの質問に對して答へなければならぬ地位に置かれて居る。今後世界を風靡するものは正義なりや。將又、、なりやの質問卽ちそれである」と述べた。

之に對して吉坂政府代表は

「松岡氏の陳述の或物は不正確であり、且つ著しく誇張せられて居る。日本では結社團結の自由は、憲法に依つて保證せられて居る。勞働者の組織を制限する爲めの何等の特別な法令も制定せられた事に無い、けれども政府は時々暴行を防止し、必要ある場合人々に保護を與ふるために、相當の措置をとることを餘儀なくせられると云ふことゝだけは、此處で是非とも言つて置く必要がある。加之玆に注意すべきことは、最後の產業不景氣時代を通じて、日本に於いては勞働運動が續々その力を加へて居ると言ふ事實である」「正にこの七年間に三倍の增加を示して居る」「かかる發展の事實こそ日本の勞働者が充分結社團結の自由を享有して居る雄辯な證據であると云ふことが出來るであらう」と述べた。

次に岩崎資本家代表は、

「松岡勞働代表が偶々野田岡谷の勞働爭議に言及して、雄辯に勞働者側の見地を示した」然し「若しこの總會が上訴裁判所であつたとしたならば、日本に於ける關係諸會社の重役等は、松岡氏の陳述したる議論に反抗して、同樣に、或はもつと合理的な事實の陳述を、彼等の立場から提供するために、充分準備して居たであらうと思ふ」云々と述べた。

英國勞働黨勝利の影響

最後に、私共の最も愉快であつたことは、英國勞働代表プールトン氏が、六月十一日にその政府代表ウオルフ氏に向つて、ワシントン八時間條約の批准に關して質問したるところ、保守黨政府の任命したる同代表は、勞働黨の指令に基き昨日迄の反對論を全然飜し、「私は英國政府が遠からず同條約を批准する手續を採るべき旨を聲明せよとの訓令を受取つた」と述べ、滿堂破るゝ如き拍手の中に下壇したことである。政府、資本家代表の顏色は、心持ち打ち沈んで見えた。英國勞働黨政府の出現は、國際勞働問題に重大なる一石を投ずるものである。

國際勞働總會は一世界的な一種の國際交涉である。これを勞働階級に有利ならしむるは、その實力の發達にまたねばならぬ。英國勞働階級の勝利の影響を見ても直ちに分かるところである。

「反動の波は退きつゝある」

丸ビル附近

村山知義

デモだ。

大きなデモだ。

何千といふ人間がヒタ押しに押して來る。

何が始まつたのだらう。

近づくのを見ると、ロボットのデモだ。一人として首を擧げてゐるものがない。背廣背廣、カバン、カバン、そして無言のデモだ。

丸ビルから東京驛へ。

私はこのデモに抗して東京驛から丸ビルへと進む。私は今、院展、二科、構造社と一とめぐりして、大分頭が時代遲れになり、愚鈍になつてゐるので、このデモには度膽を拔かれたが、近づいて見ると溫柔なること羊の如きサラリーメン諸君が郊外のささやかなそれぞれの家庭に歸るためのラッシュ・アワーに過ぎぬといふことを知つたので、平氣でその眞中を割つて行くのである。

米國の建築技師といふものは、狹い地面にとてつもなく高い建物を建てろとか、出來るだけ經濟的で能力的な工場を作れとかいふ註文を出さない限り、ろくな建築は出來ないのだ。前者はその高さの故に、その危い重さの感じの故に、後者はその無愛想な機械性の故に溌溂たる感じを與へるのだ。所がこの丸ビルはただだつ廣い場所にペチヤンコに立てろといふ註文で、その上、ただ部屋が澤山あればいいといふのだから、ろくなものが出來る筈がないのだ。あれだけの建物の中で眼につくものと云へば、陸軍色に塗つて赤で「防火扉」と書いたナマナマしい感じの鐵扉と、八階から地下室まで續いてゐる硝子の郵便筒きりである。折角の化粧煉瓦は大震災でふるひ落されてしまつて、コンクリートの地肌はかりとなつたが、却つてこの方がいい位ゐのものだ。夏になつて西側の窓が、苦しまぎれに、一齊に、日よけを取りつけると、やつとこのぶざまな大きな顏が建物らしくなる。雨の日、雪の日などの蕭條たる樣は、まことに首になるといふのに、ただひとり心の中で心配するほかないサラリーメンの心境にさも似てゐる。

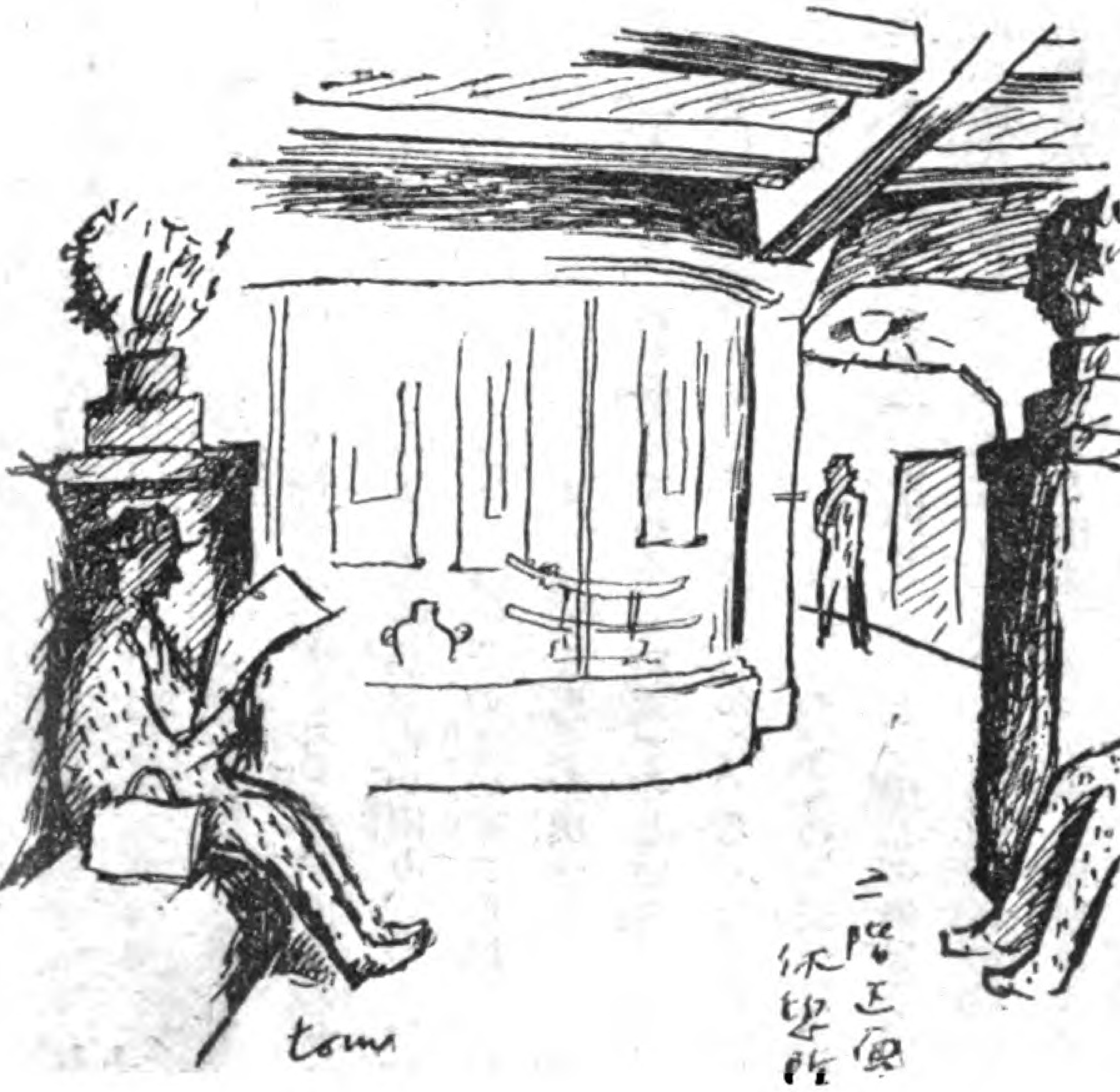
ラッシュ・アワーが濟むと、血をしぼり出してしまつた丸ビルは、壞れた飛行船みたいにいたましい姿となる。

四階に上つて見る。

狹い廊下を、黑い仕事着を着たお婆さんが、掃除してゐる。給仕諸君が二三人、手を洗つてゐる。ひ弱さうな若い女事務員が一人遲れて歸つて行く。大きな聲を出したら廊下全體が泣き出すかも知れない。

階段を下りて二階へ行く。

正面、東京驛に面した窓の所に、休憩所がある。丸ビルの住人ではない通りがかりの人が四五人呆然として腰かけてゐる。のぞくと下から、ラッシュ・アワーのなごりが、それでも相當流れ出し續けてゐる。窓から外を覗いての



ある。右手は西洋家具や望遠鏡や最新式電池不用式二二六式ラヂオ附屬具一式附三十九圓やウビガンの香水やを並べてゐる。

私は骨董品それ自身を決してつまらないものだとは思はない。それ所かすぐれた藝術品や記念品は立派な價値を持つてゐると思つてゐる。だがさういふものは當然、美術館なり博物館なりに保存展觀さるべきもので、個人が所有したがるといふ氣持ち、所有して自分の富を誇示し、他人から隔絶したいといふ氣持ちが、たうとう骨董品それ自身をまで、下らぬものと思はせるやうにしてしまつたのだ。私の知つてゐる或る古本屋に骨董品の賣立のときの「もくろく」を澤山持つてゐる人があつて見せて貰つたことがあるが、立派な藝術品の寫眞が滿載してあつて非常に面白かつたが、そのうち、商賣人の筆と思しく、一つ一つにやれ百五十圓のやれ千二百

きさうもないから腰を上げて下に降りた。

今和次郎、吉田謙吉兩君設立する所のそこはかとなくこまかいものの蒐集統計を旨とする會の仕事の一つだつたかと思ふが、私もそれを眞似て、一つ尾行をやつて見ようと思つた。所が殘念ながら既に人影甚だまばらで尾行慾をそそるやうな存在に出遇はない。困つてゐるうちに裏口から外へ出てしまつた。

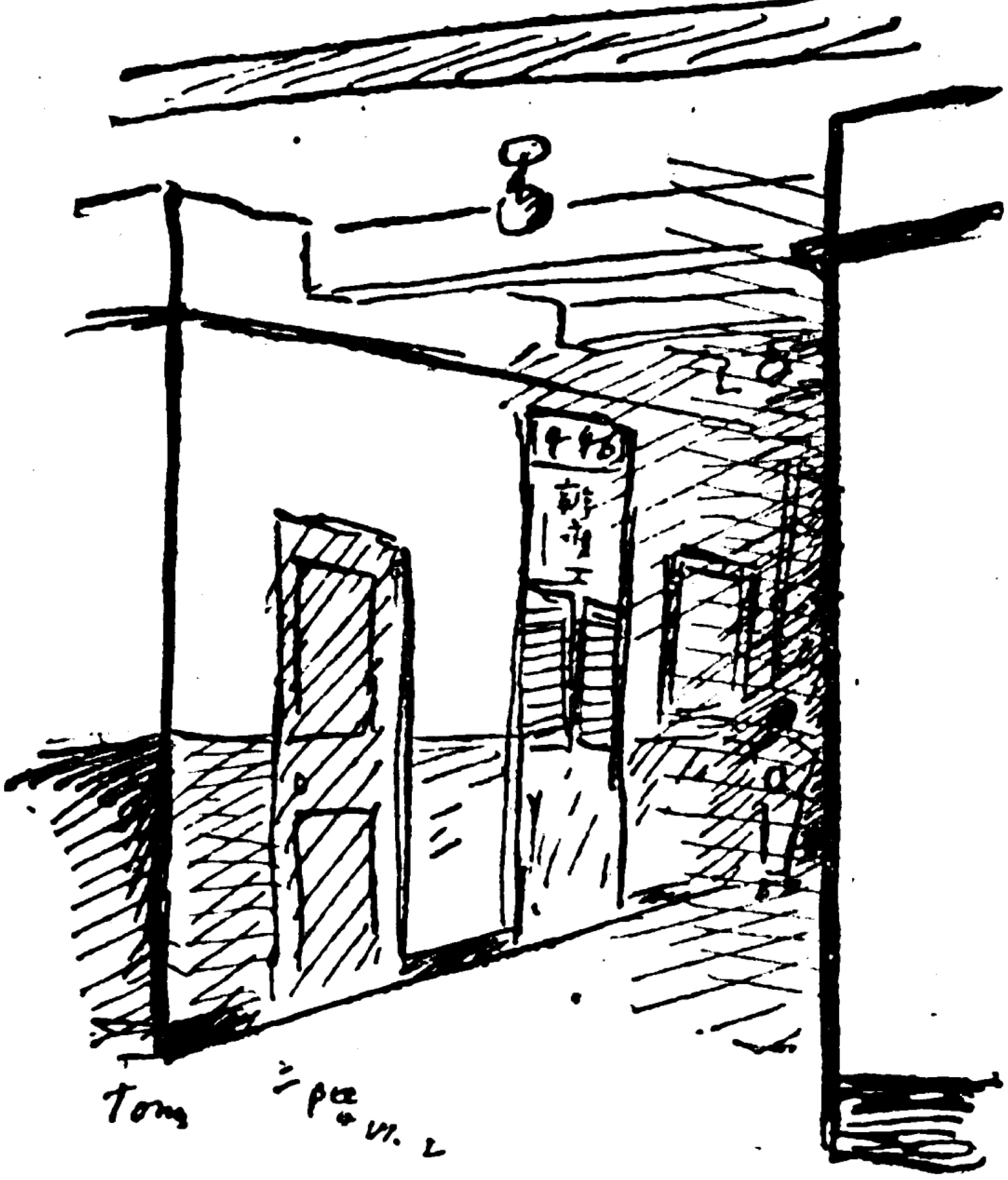
その時、紺に白い水玉を飛ばしたワンピースを着た外國婦人の後姿がショウウヰンドーを覗いてゐる姿を見えた。取が敢へずそちらへ二三歩近づいて行くと彼女は既にそこを離れかかる。あはててそのショーウヰンドーを持つた店を見ると如何なこと茶舗「まつへい」である。だがそのショーウヰンドーにはどうした譯か「四人の惡魔」のスチルが飾つてある。成程これを一瞥してゐたのだな、だが、茶舗と映畫とどういふ關係があるのか知らなどと考へる暇もなく、彼女の姿は丸ビルの中へ踏み込んで行く。チラリと横顔を見ると既に相當ヒス張つた三十からみの年增なので、脚の美しいにも拘らず尾行慾を失つたが、乘りかけた舟だと追つかけて行くと裏口から這入り、十字路を右に折れ、左手の高尙堂のショーウヰンドーの通俗的な額椽入風景三色版に足をとどめて、非常な速力で一瞥するや否や再び足をもとに返して、同じ裏口から外へ出た。右を折れ、さつきの「まつへい」の前を通り過ごし、少し行つたと思ふと足並をゆるめ、ヒラリと後戻りしてミツホ食堂の陳列台と定價を見極めてから中へ這入つた。——

そこで私は甚だ下らんことをしたと思つた。何故と云へば彼女は最初からミツホ食堂に這入つてハンバークステーキとライスカレーでも食べて「簡單に」晩飯をすます意圖だつたが、ちよつとテレかくしに藝術を鑑賞して見たに過ぎぬ。テレかくしを尾行するなんてこんな下らないことがあるものか。そこで私もミツホ食堂へ這入つて彼女が何を食べるかをたしかめやうかと思つたが斷然やめて地下室の花月食堂へ行つた。カイトーメン五十錢、生ビール二十錢。すぐ向ひを見るとお父さんらしいのが、息子らしい霜降り詰襟の制服を着た立派な體格の中學五年生を、夏休みも濟んで田舍へ歸るのだらう、それを送るために最後の晩餐會を開いてゐる。天丼一つづつだ。息子は田舍中學生だが、仲々どうして、ゲーリー・クーパーのやうな顏をしてゐる。お父さんはウヰスキーを一杯ついで、いやだと云ふのに無理に飮ませてゐる。靜かな、言葉少なの、快い風景である。

給仕の少女達は極めて東洋的な服裝をしてゐる。朝鮮服のやうたものを着てゐるのである。洋服のつもりかも知れないが、洋服よりはむしろ朝鮮服に近い。これが或ひは改良服と云ふのかも知れない。

さてここを出て、次の鳥をさがしてゐると、白いスパッツをつけた男が現はれた。手袋を穿めてゐないのが物足りなかつたが、[illegible]云つてゐる時ではない。彼は忙しげに、相當なテムポで歩いてゐるのだ。正面入口から這入り、黑カバンを揺り上げつつ、菊屋の寶石に這入り、鑵詰類を一瞥したのち、通り拔けて、今度は階段を踏んで二

にあがる。丸菱マーケットの「二十錢三十錢大會」の入口の扉が三分の二迄しまつてゐる所に立つて、二分たつぷり躊躇したのち、遂に意を決して、周圍を見廻したのち、中に這入つたが、更に三分ののち決局何も買はずに出て來て、そのまま便所の中に消えた。



待つてゐようかと思つたが、馬鹿馬鹿しくなつてやめてしまつた。

これにつけても、、、といふのは厭な商賣だ。人のあとを一々くつつけ廻して歩くだけでも見つともいいことではないのに、しかもそれを、、、のために、僅かのお金と引き換えにやると云ふのだから呆れたものだ。太陽の照つてゐる世界ではコソコソして便所の番までしなくちやならないので、一たん、、といふ、、、地帶に引き上げるや否や、つたり、、つたりふざけたり、したりしなくてはゐられないといふことになるのだ。

それはそれとして、私はもう此の建物を出ようと思ふ。段々薄暗くなつて、建物全體から血の氣が益々失せてくるからだ。

それに――

成程この建物の中に巣を喰つてゐる百八十八種の店や事務所の中にも、大阪壽司屋だとか、ソーダ・ファンテンだとか、概して無邪氣な連中がゐないではないが、三階以上のオフイスではあのさつきデモをしたサラリーメンの大群が、日々机にかぢりつき、一つも自分のためにも又自分の仲間のためにもならぬ仕事を繰り返し、愛宕山のサイレンを聞いてカイトーメンを食ひ、やがて水洗式便所で何百尺の鐵管を通して排泄してゐるのである。

そしてその諸君を、、してゐる會社どもは例の×××株式會社を筆頭として、すべてこれ、、、、の集まりだと云つて過言ではない。

北海の、、、、の、、、つて金を儲けてゐる××××が、同じ穴の狸に足元をすくはれたからと云つて、相手をやれ非國民の、やれ××主義の味方のと罵り、例の如く「、、、」をダシに使つて、、、、、、、でさそはうとした事件は諸君の夙に御承知のことだ。

この建物の罪は、、、、、を十や二十喰つたつてなかなか淨まりさうでない。

さう思ふと私は益々氣持が惡くなつて、この魔窟を飛び出した。

アスファルトの道の土を、武裝解除されたタンクのやうなローラーが、大きな音を立て、少し吹き出して來た風にキャンバスをバタバタと煽られながら轉がつて行く。風がヒイヤリする。もう秋だな、と思ふ。あの不便のシムボル見たいな東京驛から電車に乘るのかと思ふと、何となく氣が進まない。するとフイと思ひ出した。さうだ、今日は昭和ビルの××商會で、ロシアの名監督プドフキンが俳優になつて獨逸のスタヂオで撮した「生ける屍」の試寫があつた筈だ。これに行くに限る。そこで私はアスファルトの道を一と跨ぎして、昭和ビルの裏口から階段を昇つて行つた。途中迄昇ると、もう映寫機の廻轉してゐる音が聞える。私は急いで、既に汗をかいて、狹い試寫室に這入つた。

スクリーンには、革命前のロシアの中產階級の男が、愛する自分の妻を幸福にするためには、宗敎と人道主義の敎へる所に依れば、自殺以外にはないといふことになつて、自殺してしまふ迄の物語が、巧みな手法と、立派な演技とを通して、繰り擴げられてゐる。

このトルストイの物語は昔讀んだ時のやうな自己犧牲に對する崇拜を惹き起こしはせず、從つてそれに伴ふ甘美な陶醉的な感傷主義を今の自分には最早や塵程も感じさせてくれない。もう一度原作を讀み返して見なければ判らないが、恐らく「母」の監督者であるプドフキンその他の人々の意識的な努力が與つて力があるのではあるまいか。

私はこの映畫から、たゞ、宗敎と人道主義が如何に一人の男を苦しめ、さいなみ、無力にし、そしておしまひに、してしまふかを、そのいらだゝしく悲慘な道程を見たのみだ。

だが、私はすぐれた技法と演技とから、物語の陰鬱さにも拘らず、大きなよろこびを得た。

そしていつの間にか丸ビルの横を過ぎ、東京驛を通過して、窓からヒヤヒヤと風の吹き込む省線電車を驅つて走つてゐた。

—二九、九—

大東京の浮浪者

草間八十雄

年々増加の傾向を見る浮浪者

颯々たる朔風は木々の梢を動かし寒さは往き來の人の肌を劈く冬の夜に、或は蚊や虫が襲ひくる酷夏の夜に、此處彼處の人家の軒下、又は公園の四阿屋に身を寄せ、或は神社寺院などの床下にもぐり込み、菰一枚を褥に果敢ない眠りについている浮浪者達の痛ましい姿を眺めては、誰れでも憐れな想ひを懐かずには居られまい。かゝる悲しい境涯にある人々こそ世に謂ふ「どん底」の其又「どん底」の淵に漂ふ人々であつて、今日此頃ではかうした浮浪者の數は七百人に上る。然らば五年又は十年前の頃にはどの位の數であつたか。大正十一年二月二十五日の眞夜中に、東京市社會局では六百名の調査員を用ゐて、市内全體に渉り漏なく野宿者を調べたが、當夜は南風強雨であつたのに、昭和三年六月中旬に當る梅雨の夜に、淺草公園と此界隈、上野公園と其の附近、芝公園から虎の門、日比谷公園にかけ、尚ほ細民地帶であつて木賃宿のある深川區富川町と、四谷區旭町に就て調べると、四百七十二人の野宿者がゐた。此の時の調査は言ふまでもなく、浮浪者の集團せる場所に限つて調べたのであるから、一人二人と散り散りに野宿してゐる場所までも探したならば、少くしても七百人位の野宿者を見出したらうと思はれる。かくの如く野宿をするまでに落ちぶれるものが年々と其數を増してきた。畢竟するに都鄙を通じて貧しいものが多くなり、人口亦増加し段々と國内人口が都市に集中するからで、此人々の中には所謂生存競爭の戰に打ち破れ、遂には浮浪の淵に落ち込んだまま、犬猫に等しい悲惨な生活で、辛らくも其日を過ごしているのであ

の浮浪者につき、浮浪となれる原因を觀ると次の如くである。

（一）個人的關係によるもの、（二）職業上の關係によるもの、（三）家族的關係によるもの、（四）社會的關係によるもの、（五）自然的關係によるもの、（六）如上以外の關係によるもの。

かく關係を六つに大別して、さて其の數を見ると、原因として最も多い關係は、疾病、不具、老衰、精神異狀者など、即ち個人的關係に由るもので、其中の生理的缺陷と云ふべきものである。此れによるものは百六十二人。次は飮酒に耽りたるため、不正を働らき解雇されたるため、怠惰又は放蕩のため、意志薄弱自暴自棄に陷りたるため、刑餘者となつたため、此れが九十五人に上つて居る。即ち此れは個人的關係中の精神的缺陷に由るものである。

要するに生理的缺陷に由るものと、精神的缺陷に由るものを合せると、個人的關係に原因するものが二百五十七人となる。故に總數四百七十三人の上から見ると、半數を超えている。之れによつて觀るも、疾病、不具、老衰、精神異狀者などで、錢一文の餘裕はなく、さりとて身を寄せる相手はなく、詮方つきて西に東に流轉するやうになる。其れが前述の如く精神的缺陷、即ち自からが心に締りがなく、飮酒に耽ける、惡事を働らく等が原因で浮浪者となつたものでも、現在の悲慘な境涯に對しては、人道的感激の上から同情せずには居られない。次に數の多いのは社會的關係に由るもので、雇主に虐待されたるため、此れは雇主に無暗矢鱈に酷使されて居たゝまらないで主家を逃出せる丁稚徒弟の成れの果てゞある。身元保證人がないので就職が出來ないため、幾ら働らいても賃銀が安いので木賃宿にさへ泊られないから野宿をすると云ふもの、失業以來就職の機會を得ざるため、子持のために働らくことが出來ないため、以上の如き社會的關係による原因で、浮浪する者は其數百三十八人である。此れなどは何れも悲しむべく又頗る哀れな原因と言はねばならぬ。次は家族的關係によるもので、父母の行方が不明であつたり、又は死別せるため、繼父母に虐待されて家出せるため、家庭不和のため、夫が病氣のため、かゝる原因によるものは十八人である。尚ほ次は職業上の關係によるもので即ち商業又は事業に失敗せるため、作業中に負傷したが誰れも助けてくれないと云ふもの、此職業上の關係で浮浪者となつたものは十九人ある。又如上以外の關係によるものでは、誘拐されて家出せるため、素々浮浪者ではないが泥醉の餘り一時野宿をしたと云ふもの、此二つを合せ十四人であり、其れから自然的關係によるもの、此れは震災の生み出せる悲劇の一つで、即ち產を失ひ職に離れたもので其人數は十人である。又原因が何であるかを尋ねても隱張りわけの判らぬことを申告せるもの、原因不詳のものが十五人であつた。兎にかく原因の一部少數のものを除き、此以外の多數な者の浮浪となれる原因と事情を繹ぬれば、孰れも淚の種ならざるはなく、而して厚い同情の想ひを注がねばならぬ。

如何なる方法と資料に依つて生き居るか

扨て上來述ぶるが如き原因で、浮浪の境涯に這入り、社會の最下層を流るゝどん底の淵に漂ふ身空らとなつても、生きやうとすれば生活の資料を得なければならない。卽ち生存をする上には日常の食物から離れることは出來ない。故に最少限度であつても、日々の生活資料を收めねばならぬ。その方法を說いて見やう。

（一）他から金品の惠與を俟つもの。

（二）勞務的方法に依つて資料を收めるもの。

其處で(一)の部類に屬するものを俗に貰ひと云ふ。此貰ひを更に二つに分くるのである。(イ)絕對的惠與に俟つもの、(ロ)强請的惠與によるものである。而して(イ)は何處までも人の情けに縋り恩惠に依つて生きやうとするもので、此れを俗に「ツケ」「ダイガラ」などゝ唱へ、料理店、飮食店、又は妓樓、待合、カフエーなどから客の喰ひ殘せる餘りものを貰ふのである。つまり物を貰ひの目的物とするもので、此外に現金を貰ひの目的とするものに、「ケンタ」と「ツプ」とがある。此れは神社佛閣であるとか、或は諸方の祭禮緣日など
け

物品販賣を口實に金錢を貰ふもので、然も金を貰へば物品は槪ね其ま持ち歸るのである。(ニ)のタカリは淺草上野邊りで往き來の人から金を貰つている「ケンタ」の輩らから刎錢を取つたり、又は「ケンタ」の擁護者となつて、其れ警官が來たから氣をつけろ、やれ怪しい奴が見えたから逃げ出せとか、恁うして乞食の用心棒となり、いく分の報酬を收むるのである。其れから前に說くことを落したから此處に附け加へて述べて置くが、現金を貰ひの目的とするものに「ケンタ」と「ツプ」の二種があることで、「ケンタ」と言ふのは人通りの多い場所とか、緣日祭禮などに出て、或一定の場所に居据り、其處で哀れぽい聲を出し投げ錢を貰ふ乞食のことである。「ツプ」と謂ふのは一定の處に居据らずに諸々方々を步き廻り、門づけもすれば往來を流しながらも貰ふと云ふ、動的行爲による乞食のことである。以上は他人から金品の惠與を俟つもので、其れを以て生活の方法となすものを述べたのであるが、此度は勞務的方法によつて、生活の資料を收むるものを說こう。

（二）勞務的方法に依つて生活の資料

呼ばれるヨボヨボくものが多い。何故なら壮健ならば浮浪者にはならないからである。さて勞務的方法で生きるにも二通りある。

（イ）有價物の拾得を目的とするもの、（ロ）勞働と雇傭によるもの此れである。（イ）のうちに（一）バタヤと云ふものがある。これは俗に謂ふ屑拾ひである。（二）拾ひ屋、此れも屑拾ひである。然しバタヤは公認の屑拾ひで雜業（紙屑買ひとは別もの）と稱し、其筋から鑑札を與へられているが、屑の拾ひ屋は同じ物拾ひでも非公認で言はゞモグリである。（三）ジミ、此れは特殊な拾ひ屋で他とは趣きが違ひ、人出の少ない早朝が彼等の活動時間で、此時分に其處彼處の道路を歩き廻り一生懸命に地面を眺めて歩く。廣い東京のことであるから、何にか値のある品物が落ちている。其れを拾ふのが卽ちジミである。（四）河原廻り、此れはゴミ溜めだの物棄場を探し歩き、炭俵の棄てたのを拾ひ燒芋屋へ持つて行き一個八厘位ひで買つてもらうのである。（五）ヨナゲ、此れは溝だの流れ川に這入り笊のやうなもので泥土をさらい金物、硝子、古ゴム、古皮などを拾ふのである。（六）ホリヤ、大震災の生むだ新起の拾ひ屋で、一時は諸方の燒跡を掘り返へして、釘だの金物を拾つたのであるが、此頃ではバラックを取毀し本普請にかゝる處を覗ひ、其處から金物を掘出すのである。然し此ホリヤは近く復興が出來上ると自然と他の拾ひ屋に轉ずるやうになる。

（ロ）の勞働と雇傭によるものは、要するに他に傭はれて働らき賃錢を收めるもので、（一）追かけ、（二）ナガシ、（三）轄子、である。此等は何れも拾ひ仕事を嫌ふもので、追かけの如きは橋の際たの坂路に突立つて、荷車の後押しをする。又は引越屋に傭はれ手傳ひをするのであつて、何れも短かい時間に限り傭はれるのである。（二）ナガシは活動寫眞の廣告行燈を背中にブラ〳〵歩き廻るもの、或は廣告のビラを撒くときがある。轄子は青物市場のやうな處で、運搬に傭はれるもの、世間では追かけ、ナガシ、其何れも此れを立ちん坊と云つている。

浮浪の境涯に落ち込み野宿をなすまでに酷く落ち果てたものは、假令勞働に就ても人並の勞働能力がないので、從つて就業の場合でも賃錢は安値である。然も不就業の日には泊らうとしても一泊二十五錢から三拾錢の木賃宿にさへ宿ることが出來ないので野宿をするのである。又飢は「づけ」で凌ぎをつけるので、畢竟するに斯る氣の毒な人々は苦しい生活に迫ると、昨日までは追かけ流しの勞働で生活資料を得たものが、今日は「づけ」で飢を凌ぐのであるから、的確に生活方法を斷定することは出來ない。唯々かくまで落魄しても、心の底から惠與物貰ひで生きやうとするものと、又心の中では其れを好まないので、努めて働きにより生活の資料を得やうとするものがある。茲に四百七十三人の調査當時に於ける生活の方法を擧げて見やう。

行爲と職業の狀態

卽ち四百七十三人が生きやうとして日々なせる生活の方法は種々であるが、纏つたものでは女浮浪者二十人の中で、十一人までは下等賣

笑婦で、俗に謂ふ夜鷹白首の類ひであつた。此中で最も年少な女は、千葉生れの十四歳の小娘で、継母に虐待され家出の揚句かくなつたのである。年長のものでは、五十五歳と五十二歳の二人があり、年頃の女は拾八が二人ゐた。此拾八の女は二人とも孤兒、殊に其一人は富山生れで幼ないとき母を失ない、父は支那婦人を後妻に迎へたが間もなく父も冥途に行つて終つた。其うすると継母は支那人を夫にもつたので、可愛想にも異國人の継父母に育てられ、虐待裡に生ひ立つうち家を飛出し、漂泊の身空らとなつたもので、私が調べた當時は、既に悪化しきつていた。残り六人の女は二拾一歳から五十歳までの賣笑婦である。此中二拾二の女は六七年前まで芝浦邊りで仕込をうけた不見轉藝妓の成れの果てゞある。四十二の女は吉原の小格子で娼妓を勤めたもの。五拾二の女も同様吉原で曲輪勤めをし、諸々方々と流轉の末は淺草に流れ込み綽名をおいらんと言つている。四拾二の女は賣淫で前科七犯、五拾二のおいらんは前科二十余犯の強かもので、淺草の歡樂境も裏を覗けば方さに百鬼百行の思ひがする。次に乞食が三十人であり、又乞食と「づけ」とを併せ行つている者が拾二人で、此れなどは飯も貰へば喰物も貰ふと云ふ輩らである。

へ銀座のカフエーからは、芳醇の餘りさへ流れ出るので、夜になると虎の門附近に巣をつくる浮浪の一團は、飲む喰ふの亂知氣騒ぎで浮れ出し、此處だけは頗る暢氣らしい。扨て四百七十三人の中で前述の如く二百五十五人のものは「づけ」で生きている。三十人は乞食で其日を過ごしている。十一人の女は春を鬻いでいる。さて残りの百七十七人の生活方法であるが、此れは人の情に縋るのでなく、又怪しい行動に出るのではなく、畢竟は勞働其他稼ぎの途で辛うじて生きている輩らと見るのが妥當らしい。其處で此輩らのなす仕事を見ると、立ちん坊、轢子、日傭ひが百〇二人、ゴム靴直し、廣告人夫、下等遊藝人、煙突掃除、辻卜うり、マッチ賣り、飴賣り、赤本賣り、帽子洗濯、こりや、バタヤ、拾ひ屋、ジミ、河原廻り、ヨナゲ、等々で七十五人に上つているが、言ふまでもなく野宿をするやうな手合であるから、何れも一日平均五十錢止りの收入である。

浮浪者の健康狀態

浮浪者の中には

ある。

然し入浴は絶對に出來ない。寢るには夜となく晝となくゴロゴロ野宿をする。剩さへ「つけ」と言つても必ずキチン〳〵と買へるもので はなく、雨天のときなど客商賣は暇であるから殘食物の出が少ない。又人出の多い日でも出の少ない場合があつて、其供給は不定量である から、時によると腹一杯は扨て措き、わづかに空腹を押さへる量だけ しか有りつけない。況んや雨天の日など絶食の苦しさを嘗めねばならぬ。彼等社會では絶食のことを「キンチヤブ」と云ふ。即ち金魚のやうに水ばかり呑むからである。斯の如き日常生活を繰返へすのである から、健康に異常を來すのは必然である。故に四百七十三人の中で健康者は二百四十一人に過ぎない。總數の五割一分は健康者で、此以外の二百三拾二人は不健康者である。尤も前述の如く、此人々の中には不具者が割合に多い。然しながら二百三十二人の不健康者の中で、現に疾病にかゝつているものは百六十六人の多きを見る、此以外の六十六人は不具と精神異常者である。之れによつて觀るも浮浪生活をするうちに病にかゝるものゝ少なくないことが分る。

浮浪者は幾才位ゐのものが最も多い乎

四百七十三人の年齡を見るに、野宿をするまでに落ちぶれる輩らには拾才以下の幼年は一人もない。玆に年齡別を擧ぐれば、所謂不良少年浮浪兒童と見做すべき拾八才以下のもの、男三十五人、女三人合せて三十八人である。拾九才から三十才までのものは男女合せて百二十一人、三十一才から四拾才までの働き盛りの男女は百〇一人、四拾一才から五十才までの分別盛りの男女八十五人、五拾一才から六拾才のもの男女合計七十九人、更に老齡の域に達した六十一才から七拾才のもの男女三十八人である。既に老い込むで終つた七拾一才以上のものは男女で二十三人を見る。此中には八十一才の高齡者が一人ゐた。かくも七拾の老い坂を越え、今尚ほ寄邊なく夜毎に人家の軒下だの、酷いのは共同便所に眠り、又は大きなゴミ溜めにもぐり込み、其處で男女老若雜然として寢込む痛々しい態を見ては、此老いたる人々の人生がいかに果敢ないかゞ分る。斯うして淺草公園だけで一ヶ年平均二十人の行倒れが、其儘永眠するのであるから、斯く老いたる人々のうちには何時かは同じ運命に會ひ、雜司ヶ谷の共同墓地に葬り去られるであらう。

教育程度は槪ね低い

四百七十三人の教育程度を見るに、悲しいかな無學者が少なくない。全體の約二割は無學である。其れから尋常未了のものが約四割、又尋常卒業のもの實數九十九人、割合二割一分に當る。高等小學未了二十八人同卒業三十八人、それから中等程度のものでは中等未了十三人、中等を卒業してから專門程度若くは大學に這入つたもの三人であつて、此三人は一人は外語であり、一人は宗教大學豫科であり、一人

は某大學政治經濟中途退學のもので、此男の履歷を訊すと、官吏もすれば、會社員も勤め、記者にもなれば、自立して雜誌を刊行し、更に商業を營んだこともあるが、柳暗花明の色里で身を持ち崩し、遂に人夫から浮浪の境涯に落ち込むだものである。如上の四百七十三人の全體を通じて觀ると、教育程度が低く、從つて漸く社會の平線に於て活動する實力を具備するものが少ないやうである。

配偶關係に現はれる薄倖者

前に四百七十三人の年齡別を說き、働らき盛り、分別盛りが比較的多いことも說いた。然らば斯うした人々の配偶關係はどうであつたかを述べねばならぬ。

配偶關係を見るに、(一)未婚者總數二百三十八人、內譯すれば三拾才以下で未婚のもの百四十二人普通今日三拾才前で妻を迎へるのは容易でないから、此年齡のものが未婚者であつても別に問題ではない。次に三拾一才から四拾才の未婚者四十六人、四拾一才から五拾才の未婚者二十一人、五拾一才から以上のもので二十一人を見る、此中には女が一人ある。此年頃になつて然も浮浪の境涯に漂つていては一生を通じて異性と交ることの出來な

扶養せぬので、妻は生家に戾り居るもの、又は夫と別に他で働らいているもの、兎にかく形式だけの夫婦である。(三)離別、夫婦別れの悲しい落目に遭つたものは百〇一人ある。然も離別の回數を見ると一回のもの八十三人、二回のもの十三人、三回のもの三人、四回以上のもの二人で、此四回以上のうちには女で七回夫を持ち變へたものさへある。其れは前に述べた娼妓勤めをした四拾二の女である。斯の如く離婚の狀態を觀ると、生活難から世帶が崩れ、夫婦別れをなせるものと、心が合ずに無暗矢鱈と相手を取かへたものゝ成れの果てゞある。(四)死別、夫に死別せるもの、妻に死に別れたものは百人に上つている。是又死別一回のもの九十五人、二回のもの四人、三回のもの一人で、此等は夫婦共々細い煙りを立てゝ居ればまさか浮浪にも陷らなかつたもので、其れが一方の支柱を失なつたので、生活が崩壞せるものらしい。(五)死別と離別を累ねたものは十三人を見る。此死別と離別に出合つた人々は實に薄倖なもので、惠まれざること甚しいものである。

吾兒の行方と生育狀態

ているもの、地方へ出稼に行つていると云ふもの十三人、此等は其兒が成育すれば親を扶けるものと見ねばならぬ。然るに吾兒が行方不明となり、取りつく術のないものが十三人、死別したもの十二人で、此等は扶養の綱が斷絶せる極めて哀れなものである。尚ほ娘を苦海に沈めてあるものが四人ある。

扶養能力ある親族の有無

野宿をするまでに酷い落ちぶれの身空となつても、全然、此れを扶養してくれる親族がないものか？　扶養能力ある親族の有無を探ると、かくなつた自分を尊親者で扶けてくれる見込のあると云ふもの百七十四人、卑親者で扶けてくれる見込のあるもの二十八人、合せて二百〇二人のものは何人かが仲に這入り交渉を進めれば、かゝる苦境から脱け出られるやうである。然し精神的缺陷が原因で浮浪に落込める奴らには、順境時代に酒は飲む、女は買ふ、賭博はすると云ふ疵だらけの行爲行動のあつた人物が少なくないやうであるから、鳥渡やそこらの交渉では工合よく話が纏まるまい。其れから扶養者が行方不明であるもの、死別せるもの、扶養の義務があつても引取つて養ふ資力のないもの、即ち絶望的のものが二百六拾五人の多きを見る。比例から見ると總數の五割七分が其れであつて、此等は全く捨小舟同樣浮浪の潮を西に東に漂よいながら一生を終るものと見ねばならぬ。

既往に於て救護されたる乎

社會の平線から失脚して、「どん底」の其又「どん底」に落ち入つた四百七十三人のものは、世間からも社會保護機關からも見離され、今日まで救ひの手にかゝらなかつたものであらう乎、否、或者は屢々救護をうけたことがある。然も院内救助と云つて養育院にも收容されたことがあり、施療病院にも這入つたのである。けれども、浮浪が習慣となると節制ある生活を嫌らい、氣隨氣儘に放縱生活をしたいので、收容所を逃亡すると云ふ不埒を敢てするものが少なくない。洵に習性ほど恐るべきものはない。茲に彼等が院内に收容され救助を受けたることの有無を說く前に、先以て彼等の浮浪期間を述べることにする。(一)浮浪期間一ヶ年未滿のもの二百六十人、(二)三年未滿のもの百〇二人、(三)五年未滿のもの六十四人、(四)拾年未滿のもの六十人、(五)拾五年未滿のもの五人、(六)二拾年未滿のもの六人、(七)三拾年未滿のもの一人、(八)期間不詳のもの十三人。驚くべし、拾年又は二拾年、最も長きは三拾年から定居常家なく野宿をしてゐる有樣である。其處で、暫定的の救護でなく院内救助を受けたものは七十五人に上つている。斯うして院内救助一回のもの六十一人、二回のもの十二人、三回のもの一人、四回のもの一人で、最も多く收容せる處は東京市養育院で、此處へは四十八人這入つたことがある。然し長期のものでは八年間同院に這入つていたものがあり、或

者は孤兒院に二十年間養育されたものさへある。尙ほ不良少女の小菅家庭學園に救はれながら逃亡三回を累ね、斯うして淺草で春を鬻くものがあり、要するに習性は人間の性格を一變させ始末のつかぬ人間にして終ふ。院內救助四回のものは、淺草を彷徨する通稱「カジヤ」と云ふ親爺で浮浪二十年に及ぶものである。又四百七十三人の中で警察官憲の手で、曾て處分されたものは八十七人に上るのであるが、此中で拘留二拾回以上のものは、前に述べたおいらんと、此外に賣笑婦のお淸であり、今は故人となつたが上手のお金の如き賣笑の廉で拘留七十餘犯を累ねた女がある。

趣味嗜好に現はれる性慾

いかに浮浪生活に落ちていても、人には趣味嗜好がなくてはなるまい。彼等の趣味嗜好の有無を調べると、何の趣味も嗜好もないと云ふ、全く氣のぬけたやうな哀れなものが百十人であつた。不詳のもの八人、此以外のものは各々好む事柄を告げたのである。其れによると、(一)酒を好むもの百三十八人、(二)酒と賭三十九人、(三)酒と女五人、(四)酒と演藝四人、(五)酒に女に賭と云ふ三つ揃つたものが五人、(六)酒と活動三人、(七)賭だけのもの五十人、[illegible]七人に上る。此賭博はハナでもなくチボイチでもなく、浮浪者仲間に賴りに行はれる、俗にナミガタと稱する賭博である。要するに高尙なものでは讀書の六人、賭と圍碁の一人だけで、他は酒を好むもの、活動を望むもの、賭を欲しがるものが多い。

其處で面白いことには彼のやうなボロを纏ひ、垢面蓬頭、そばに近寄るも氣味の惡い姿をしてゐながら女を好むものがある。酒と女、酒女賭、女と賭、此れを合せると十三人に上り、いかに野宿はしても性的慾望とその途の享樂に憧憬れていることが分る。

希望と思想の傾向に表はれる悲哀

浮浪者の希望と思想の傾向、此問題は小さくない。流轉をつゞけ漂泊を累ね、浮世のどん底にもがく彼等でも、何等かの希望と時代の潮流にふれた、思想に動きがあるであらう。四百七拾三人につき其れを確かめる。

(一)何とかして助けてくれ八十七人、(二)適當なる職業に就かせてくれ八十二人、(三)病氣を直して早く職業に就きた、廿人、(四)[illegible]の職業[illegible]

い七人、(一二)兒の成長を只管俟つている六人、(一三)養育院へ入れてもらいたい二人、(一四)もうやぶれかぶれだ行く處まで行こう四十三人、(一五)按摩の免許を受けたい一人、(一六)佛門に這入りたい一人、(一七)馬鹿にするな俺れは此れから社會の一線に立つて働くぞ一人、(一八)苦學をして成功したい二人、(一九)藝人になりたい二人、(二〇)こんな浮世で苦勞するより死で終いたい二人、(二一)巡禮に出たい二人、(二二)お嫁に行きたい三人、(二三)此れでも金儲けしたいのだ五人、(二四)何等の希望も考へもない九十一人、(二五)不詳七人。

以上の如く希望と思想の傾向を訊して見ると、第一に職業云々によるもの多く、次は何等の希望も考へもない恰も蝉のぬけがら同樣なものが多く、次は救濟を望むもので無理ならざる希望である。其れから行く處まで行くと云ふ自暴自棄のものも少なくない。此等の中には時代想を懷くものも居らう。衒氣なことを言つても實行の出來ないものもあらう。此處に氣を配る一つの事柄は、浮世で苦勞をするよりも死にたいと言ふもの、厭世と言へばそうも考へられるが、然し住むに家なく飢には襲はれる、どん底からは浮ばれないとならば、死を望む心も起きるであらう。此死にたいと言つた人物は五十台の男一人と同じ年頃の女一人であつた。

出生地別と上京の目的

東京の巷を流れ歩く浮浪者は、東京生れのものが多いか、それとも田舎ものが多いか、彼等の出生地を見るに東京生れのものは百十六人で、總數の二割四分五厘に當る。此以外の三百五十七人は何れも田舎出のものである。此のうち千葉三十七人、埼玉三十三人、新潟三十一人、茨城二十二人、神奈川十七人、栃木十七人、北海道七人、群馬十四人で、長野も同數である。秋田、兵庫は各十一人、宮城十人、此外の地方は孰れも十人以下で、一人も出ない地方は奈良、島根、和歌山の三地方であつた。其れで之れを更に市、町、村に分けて見ると市で生れたもの百六十七人、町で生れたもの百十一人、村生れの者百九十二人、不詳四人で、村で生れたものが多い。此れは何事を物語るものであらう。年々人口は增加する、生産には限りがある。農村は日一日と疲弊すると云ふ事實は、かゝる浮浪者問題の上にも大きく現はれている。斯うして地方出の三百五十七人は、郷關を出る時、概ねは都で生活の安定を計らうとして上京せるものである、彼等の上京の目的を擧げると、

(一)求職のために三百〇一人、(二)雇傭契約が成立したので上京せるもの四十三人、(三)地方で働いて居たが仕事の都合で上京せるもの即ち勞働現場轉換のため二十人、(四)東京で商業を營もうとして五人、(五)公務員に採用されたので二人、(六)父母と共に上京した十四人、(七)苦學したいため九人、(八)他人に誘拐されて五人、(九)東京には良い醫者が居るから病氣を直そうと思つて上京した四人、(一〇)乞食をするには東京は貰ひが多いから十六人、(一一)何の目的なく漫然と上京せるもの十一人、(一二)婚姻

姻のために二人、不詳七人で、要するに上京の主なる目的は生活問題で、殊に東京で職に就こうとして上京せるものが八割五分の多きを占めてゐる。

惡境と浮浪を脫せざる事由

前述のやうに拾年又は二拾年の永き浮浪生活を續けているものがある。假令、短い間でも野宿浮浪をするが如きは忌むべきことである。四百七十三人のものはどうしても浮浪の境涯を脫することが出來ないであらう。茲に浮浪を脫し得ざる事由を見るに大概は自動的に脫却の出來ない氣の毒な人々である。其は(一)疾病傷害のために働きがとれぬ百〇二人、(二)不具のため三十六人、(三)老衰のため十九人、(四)虛弱のため九人、(五)精神異常のため六人、(六)適當なる職業がないため百二十三人、(七)現在の職業による收入では少なく從つて向上が出來ない二十二人、(八)何處にも身を寄せる處がないため十九人、(九)酒を多く飲むため六十一人、(一〇)無能で相手にされないため十人、(一一)浮浪癖、放縱、怠惰、不良性のため四十人、(一二)自暴自棄のため三人、(一三)繼母の虐待を恐れて家に歸りにくいため二人、(一四)不詳二十一人。以上の如き事由で浮浪をつゞけている。恁うした事由を觀ると、保護をするものがあり、世話をするものがあれば、斯る淵から浮き出るものもある。然し全體から觀ると、浮浪期間の長いものは鳥渡やそこらでは脫しにくい。其れは前言したやうに習性が强く、寧ろ浮浪をよいことにしている。

現に淺草公園にさまよふ彼等の中には篤志家が親切に世話したものがあり、又女浮浪者を連れて行き妻にしたものがある。けれどもその女は二月とは人妻としての辛棒が出來なかつた。尙ほ此外にいくらも救け損じの實例はある。然し、疾病、不具、老衰のもの、此等は親切に保護をする途を立て、彼の蒼顏枯衰の姿で市井を踉蹌徘徊させたくない。私は終りに於て不定居的細民の種類を說き、野宿ものゝ外にどのやうな不定居的細民のあるかを述べておかう。其は(一)部屋、(二)どや、(三)さぶり、(四)おかん、の四つである(一)の部屋と云ふのは人夫部屋のことで、東京に於ける土工人夫の部屋數は約四百ケ所、此處に雨露を凌ぐもの約四千人。(二)どや、此れは(イ)木賃宿、(ロ)簡易宿泊所のことで、木賃宿は約四百軒此處に泊るものが八千五百人位、簡易宿泊所は公私設を合せ三十二ケ所、此處に約二千五百人が泊つている。(三)さぶり、此れは市外池上、荒川、野方、其他數ケ所に蒲鉾小屋を建て、其處を住ひとするもの、人數は比較的少く百五十人位ゐ、(四)おかん、此れは此記事に關係のある野宿もので、其數は前に言つたやうに約六百人に上つている。

改造社航空寫眞班の活躍

はしがき

我社は、今回「日本地理大系」を刊行するに當り、特に大英斷を以て改造社航空寫眞班を設け、御國飛行學校長伊藤酉夫氏を聘して班長とし、撮影用飛行機として三菱式R壹貳型三〇〇馬力「改造」號を專屬に、アブロ式五〇四K型貳機を豫備機に備へ、一等飛行機操縱士航空士として名聲嘖々たる熊川良太郎氏を主任操縱士に囑託、寫眞技師新井康弘氏が專ら航空寫眞撮影に當ることとなつた。今日以後の地理學に於て最も價値あり興味あるものに航空寫眞のあることを否むことは出來ぬ。在來の航空が、平和時に於ける利用の凡そ大半を航空輸送、即ち旅客、貨物並に郵便の輸送に全機能を發揮しつゝあつた際、航空測量、航空寫眞撮影が漸く其の有利なことを認められ玆に新文化機能を示さんとするに至つたことは特筆に値する。此の秋に當つて我社航空寫眞班の目醒しい活躍振りの一端を記して以上兩機の興味と刺激とを味ひ度い。

一、東海道を雲の間に

八月二日。此の日天氣晴朗なれども風稍あり。我社「日本地理大系」の航空寫眞班は、寫眞編輯主任橋本基氏の空中からの指揮を得て、愈々第一回の撮影を開始することになる。東京飛行場長石田航空官臨席の下に、改造社山本支配人外多數の社員と乾杯を擧げて一行は勇ましい爆音をあとに關西方面撮影の途に上る。時正に午前八時三十九分。

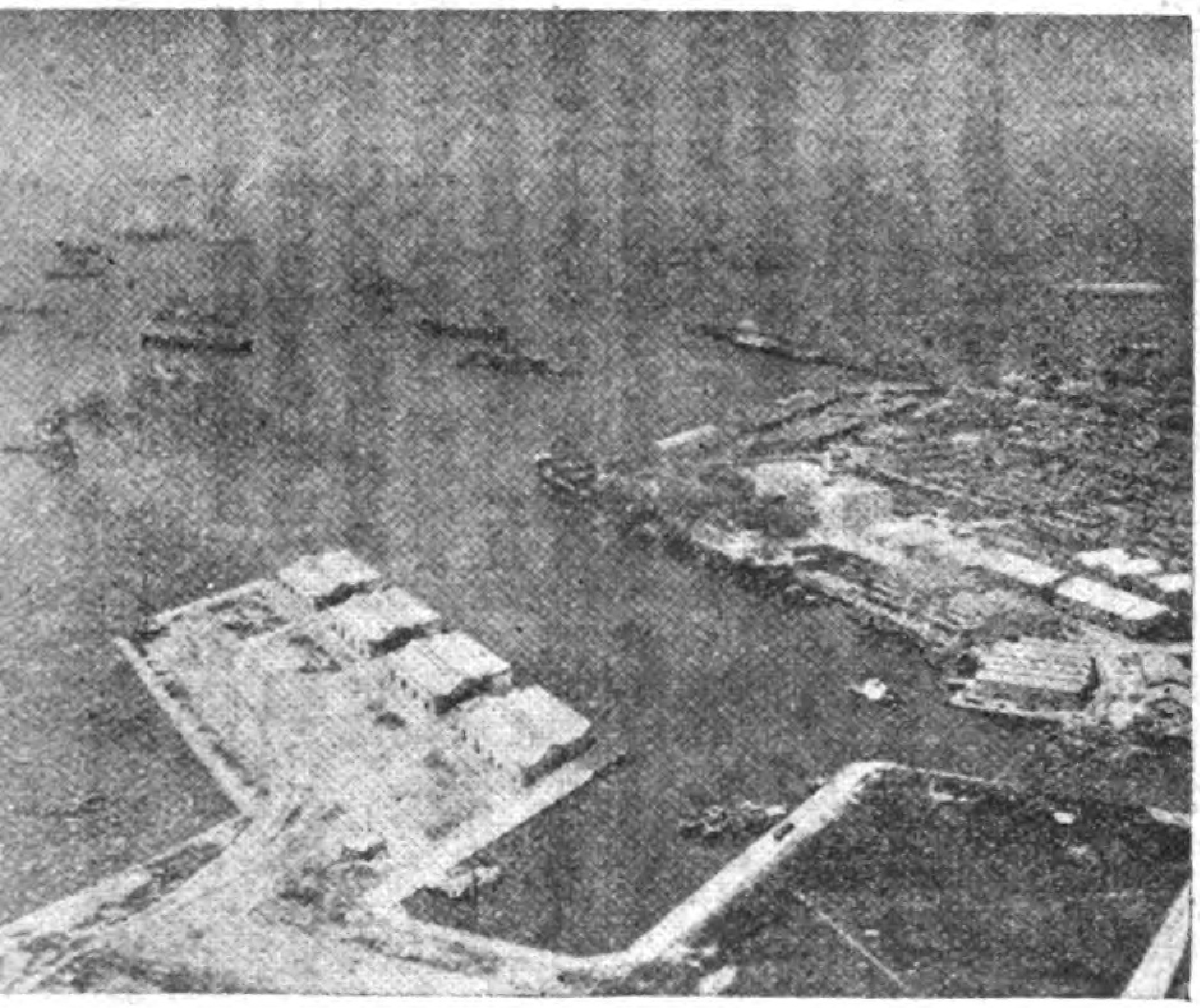
折柄武相の平野には靄が一面に地上を這つてゐたが、天氣は飽くまでも快晴である。氣流は快く機體を撫で、エンヂンは素晴しく調子が好い。

大山を右に見て早や箱根にかかる。あたりは一面雲低く垂れ下つてゐる。山北、御殿場孰れも雲だ。一杯の雲だ。惜しや、富士も箱根も連嶺もつひにカメラに收めることが出來ぬ。雲の中を高度四百米で、愛鷹山の山腹にすれすれに飛ぶ。もう高い山の心配は一きりだ。安心して高度を下げる。ざつと三百米乃至二百米で、海岸傳ひに興津から清水へと運ぶ。この邊も靄の爲に仲々苦心する。久能山の上空では二回も旋回して撮つたが、折角の苦心も水泡に歸した。尤も、此の邊は孰れ歸りにまた撮影が出來る場所だからサッサとあきらめて先を急ぐ。

絶えず三百米から二百米の高空を、靜岡、燒津、島田と飛び續ける。軈て大井川の鐵橋にさしかゝる。此處は河口を撮す時には丁度雲に挾まれ、非常に苦心した。展望は全く惡い。ややもすれば電車の軌道と東海道本線とを誤るほど油斷もすきもない。

低空を這ひ續けて、天龍川の鐵橋、河口をパチリとやる。右手に鐵橋の赭い姿、左手に河口の三角洲一帶の眺望。轡を並べてあらはれる兩佳景に技師の胸は躍る。右に又左に、レンズを向けるのが忙しい。

濱松から、濱名湖、辨天島あたりは頗る雲に撮影を妨げられる。斷雲が煙のやうに脚下を流れると、一面紗を通して見る風景となる。いつかな寫眞技師の心を滿させそうにもない。



大阪港　煙が多いので航空寫眞も撮るのに苦心した、中央
く見えるは埋立地、左右の上部にうすく見える黑線が防
である。

降りの洗禮を受ける。撮影を諦めた一行は携へたバナナを喰べ始める。當分一切がバナナ、といふ觀念で頭の中が一杯だ。名古屋へ向つた時、熊川飛行士から地圖の請求に、新井技師心得たりとバナナを出した珍談を生んだのはこの時だ。

右手、名古屋方面は雲切れはあつたが、一面の靄だつた。左手は名にし負ふ鈴鹿山脈一帶漠々たる雲に蔽はれてゐる。左せんか右せんか？先づ吾等は千六百米の高度に上げ舵をとり、雲の鈴鹿を越さん試みる。果然、いくら高度をとつてもとつても雲だ雲だ。安全第一！下げ舵をとつて雲の下を桑名から海岸線に沿ふて飛ぶ。軈て見る密雲の中、ちらつと一ところの切れ間を見せて吳れ

かな我が進路には一片の影だにない。

再び撮影を開始し、伊賀上野から奈良へ、そうして生駒を越えれば、眼下は既に大阪木津川の國際飛行場だ。煤煙の中をつつがなく夏草茂る大阪飛行場に着陸する。時に十二時三分。東京を出てから三時間二十四分である。撮影の指揮に當つた橋本基氏と三人は早くも浪花料理の晝飯に舌皷を打つ。

二、大和の國

八月三日。午前十時四十五分「改造號」は大阪飛行場出發。天氣は快晴だが、昨日と同じく靄の爲に遠望は利かぬ。

大和國は國土統一の聖地だ。奈良の都、歌の名所、南朝の史蹟が、山、谷、平野を縫ひ廻つてゐる。民族の懷郷病は大和國から起る。今日はその大和の國の上空を縦横に馳驅しようと言ふのである。



京都盆地　改造號の翼の下に見える山が石清水の八幡、河原の白く廣いは木津川で幻の如く架るは京街道の御幸橋、中央は宇治川で手前の鐵橋が京阪電車、遠くは大淀橋、向つて左の砂洲を抱くは桂川、この三つの大川が上流から盛に土砂を流して、古への湖水を埋めてできたのが京都盆地である。今もなほ湖の痕跡として殘るのが右手、飛行機の支柱の上部に僅かに見える巨椋池で、地圖には湖となつてゐる。大淀橋の左上部に競馬場、遙かに伏見桃山も霞んでゐる。

先づ平野町、柏原町の撮影にかゝる。高度を八百米にとつて、金剛山（一、一〇二米）と三石山の間を橋本町へ向ふ。金剛山の近くでどかつと飛行機は一時に落される。エーア・ポケットにはいつたのだつた。アッ！エンヂン・カバアの留めピンが外れて、持ち上つて來た。さあ大變？眼下は山又山の金剛山脈だ。峰々の頂が剌立たしく眼に映る。不時着陸したらたゞでは濟まぬ。さあとだ！だが待てよ、よく見るとカバーはこれ以上剝がれる心配は絶對にないのだ。安心だ。行かう。斯くと決心するや再び機首をとり直し、山脈を越える、紀ノ川の清流を見乍ら橋本町の上空にかゝる。

五條町から下市町へ、次いで、櫻井町、今井町と順次にカメラを

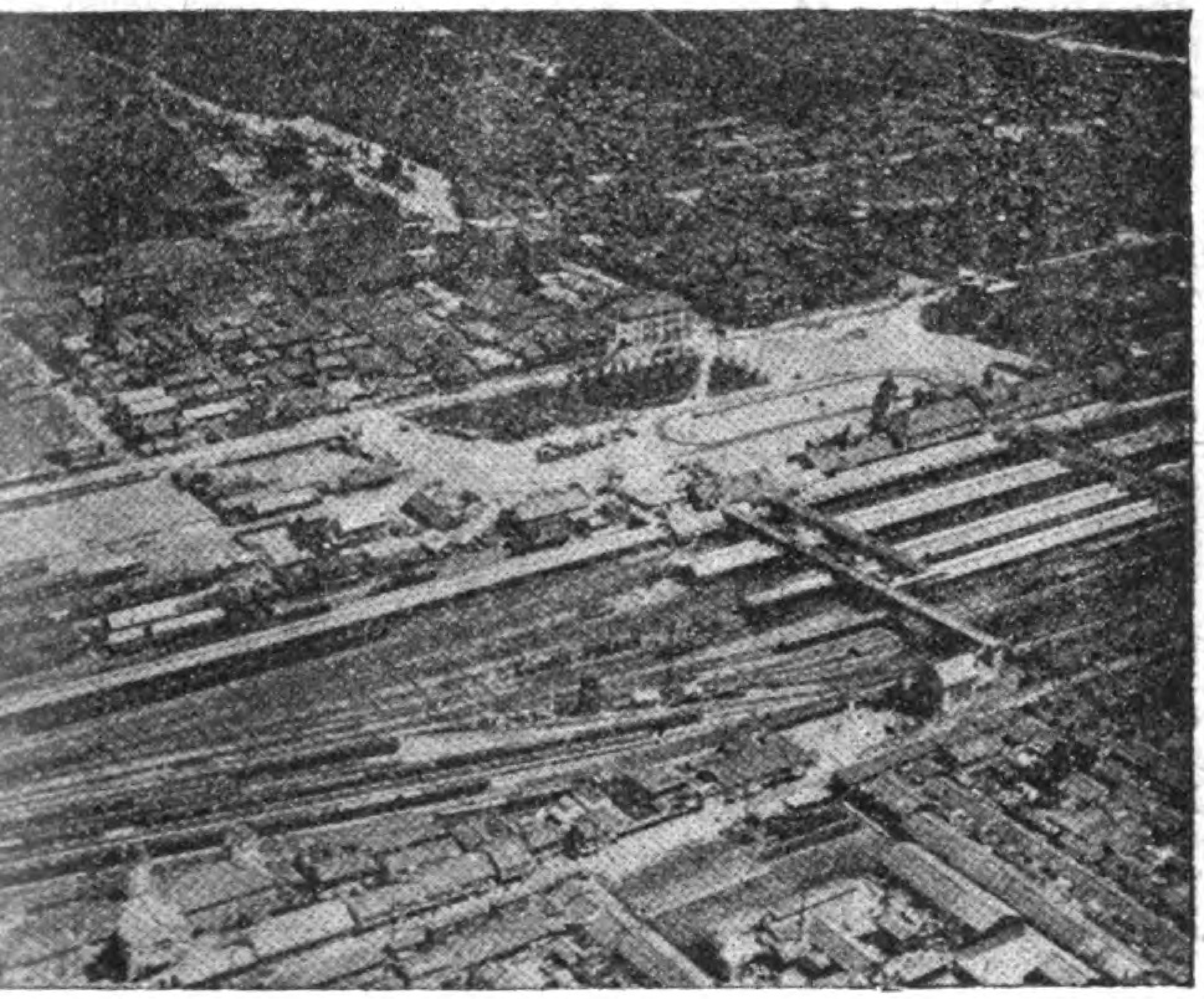
めて行く。遙かに畝傍御陵を拜しつゝ飛ぶ。

丹波市町には天理教の總本山が、大伽藍を擁して盛觀を極める。餘りの壯觀に數葉のフイルムに收める。

地獄谷は三笠山を背にした幽邃の地、飛行には仲々苦心を要する處である。

奈良市は夫自身既に名所舊蹟の一大博物館の如き觀がある。大佛殿の甍が輝き、興福寺の塔が天を指さしてゐる。念を入れて、あらゆる方面から撮影する。平城京趾を訪ふ。古の都趾は、空から見ると濃淡陰影がはつきりせず、平板なため、そこに古の都跡を偲ばせるには、並々ならぬ努力を拂はねばならなかつた。

生駒の町は山に添ふて細長く、眞夏の陽の下に、靜に、しかし



京都驛構内のプラットホームや列車の配列に注意され驛前の廣場にトラックのやうな黒い線は自動車の辷つた場に接した中央が七條郵便局で烏丸通はここから始まるの大建築が東本願寺で相對して人家の中央に黒く見へる主の住む枳殻邸である。右上部に一端を現はすのが鴨川橋附近で、此の圖では京都の碁盤のやうな市街は一寸ない。

を寫す。カアは恰も、夜店の豆自動車のやう。

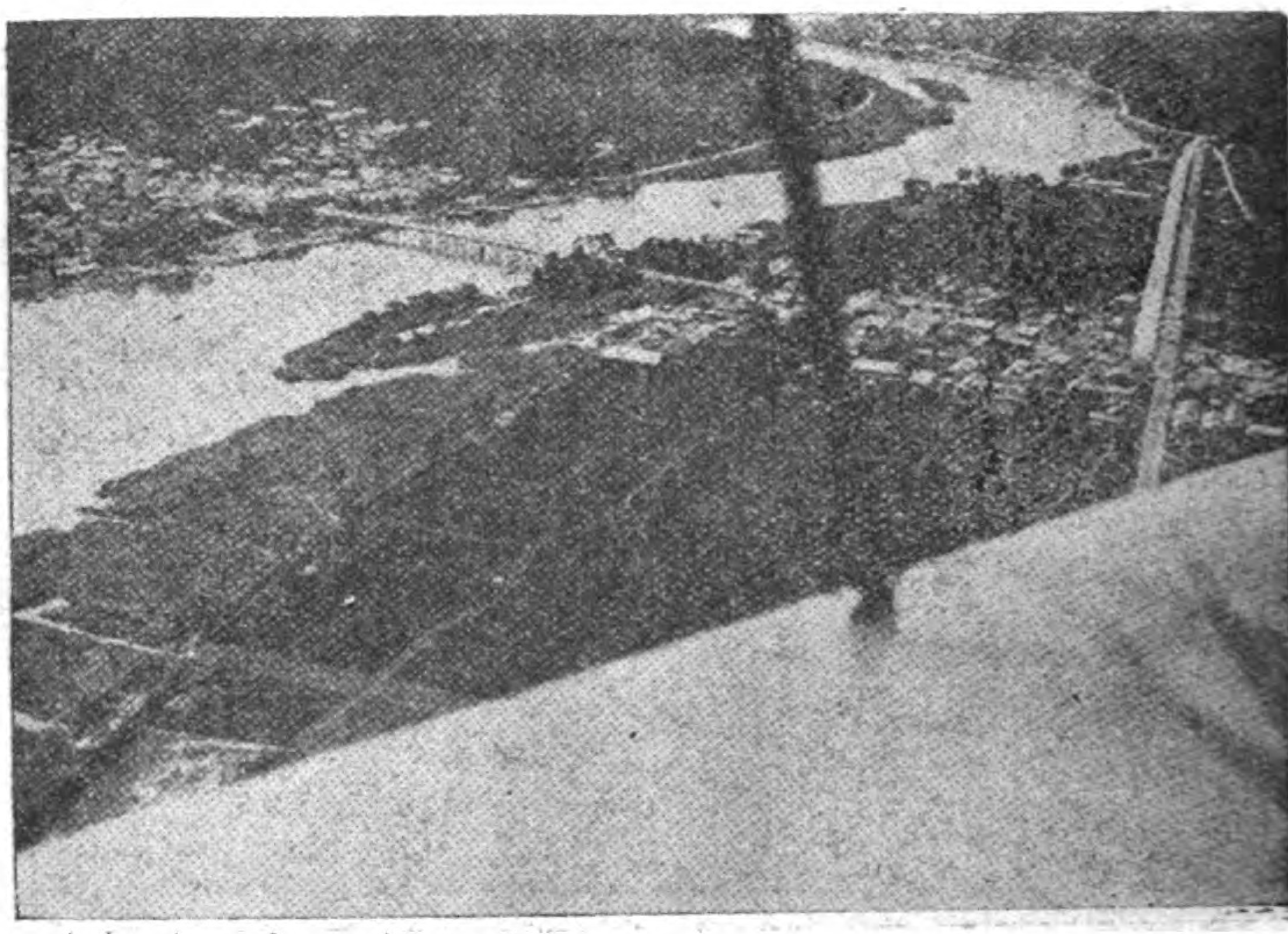
さあ是でザット今日の仕事を終へた。大阪に歸還したのが零時二十分。

三、京都・琵琶湖・大阪

八月四日。午前九時二十五分「改造號」は轟々の爆音をあとに大阪出發。快晴。風速北東十二米。

豫定コース……四條畷―木津町―田原盆地―瀨田川―大津―野洲川―比叡山―丹波山地―京都――大阪。

意を用ふる點である。複雑な水勢と地勢との交錯は興趣をそそると夥しい。古戰場天王山をカメラに収めて機は京都市に入る。
京都附近には御陵、御所、離宮など撮影にも飛行にも遠慮する區域が非常に多い。その間を縫つて飛行しながら、殘る隈なく、神社と佛閣、山のたたずまゐ、水の姿を撮影するにはなみ大抵の苦心ではない。高度は二百米から百五十米で終始する。
比叡山の撮影に向つた時は風が強かつた。七百米の高度をとりつつ恰も撮影準備をはじめた時、凄い上昇氣流にぶつかつたと思ふ瞬間、機體は丁度壁に乘り上げたかのやうに垂直近くなつた。しまつたツ！ ハンドルをとり直らうした時、機は二百米も打ち落された。丁度地震の陷沒のやうに、魔の淵へ引き摺り込まうとするやうだ。同乘者が「單獨墜落」の憂目に會ふのもこんな時である。勇氣をとり直した我が「改造」號は再び上昇し乍ら、比叡の山、八瀬の谷と良く撮影することが出來た。が、思へば實に心膽を寒からしめた出來事であつた。



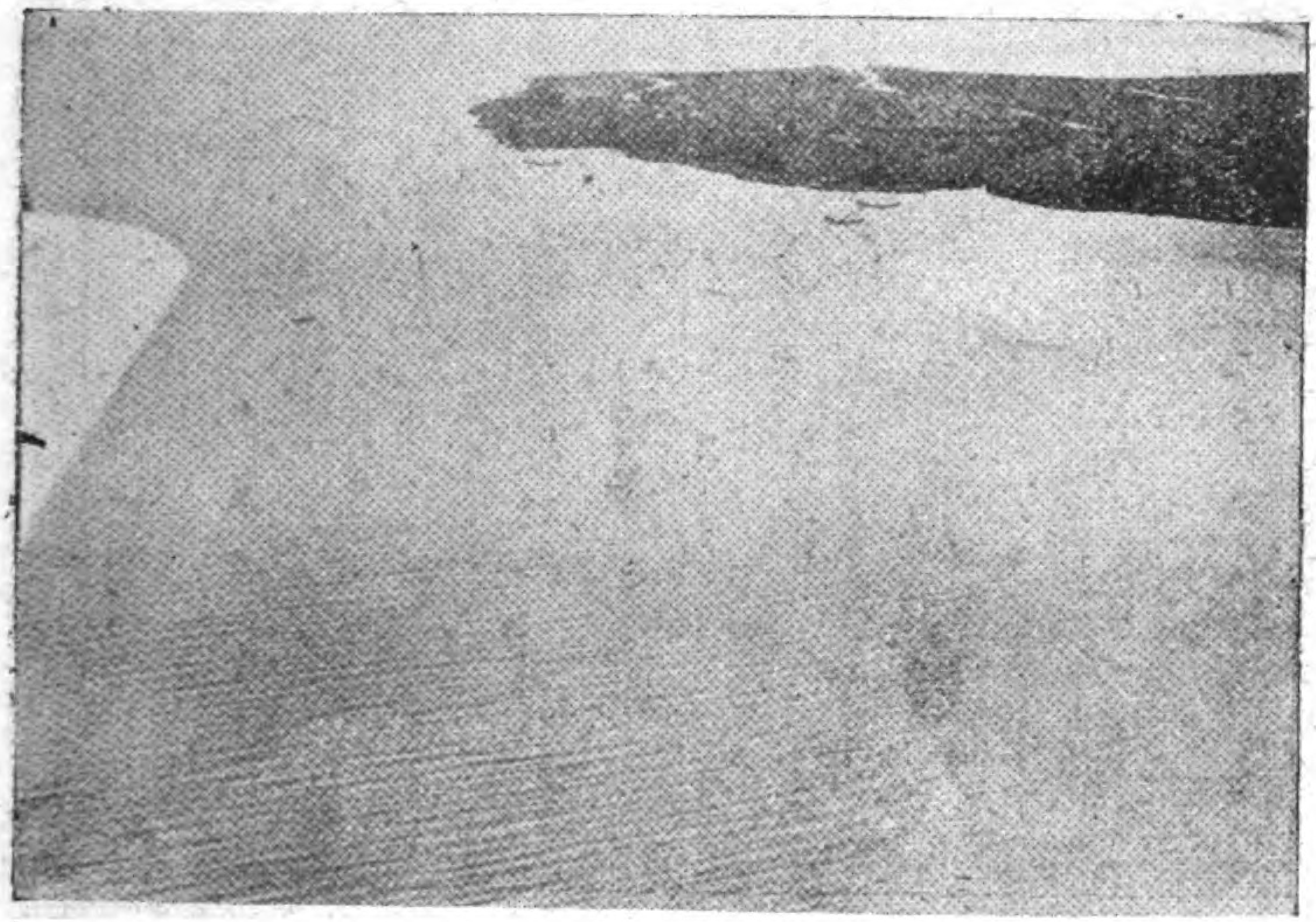
瀬田　琵琶湖は南に流れて瀬田川となる。この圖は瀬田川の上流と唐橋を北方二百米の低空から撮したもので、橋を中心に左手の瀬田村、右手の鳥居川村が明瞭に撮つた珍らしい寫眞だ。右の方、翼の下の直線が石山電車、並行するのが湖畔のドライヴロード、上部の人家が石山で、ボートレースで有名な瀬田川のコースは橋下に始まり此の圖の上端に終る。ボートメンにとつては思出多い寫眞でもあらう。

本社京都支局濱本氏の子息が、叡山でキャンプ生活中の一日。プロペラの音に見ると、一台の飛行機が驀進に下降して來る。オヤ此の山に着陸するのか知らと、不審に思つて見れば、「改造」號だ。日本地理大系の文字がアリアリと見える。さては航空寫眞の撮影だなと思つてゐる間に、見る見る上昇を續けた。――これは後に聞いた話である。
丹波の山々には雲が垂れてゐた。
琵琶湖上へ出で、湖岸傳ひに近江八景を撮る。大津の市街も。ここで最も特筆すべきことは、瀬田唐橋の撮影である。あの中の島を挾んで瀬田川に架つた二つの橋

を、一度にカメラに収めることは、地上の寫眞では絕對に不可能である。獨り航空寫眞のみが易々と爲し得る特長を持つ。此の邊一帶風景は絕佳である。野洲川の野趣も忘れることが出來ない。川口の三角洲の兩側に張つた巾着網まで、美しく機上のカメラに吸ひ取られた。

石山から淀川の屈曲點、田原盆地などの撮影にかゝつて居る間に、往きの雨と雲とはすつかり通り過ぎて、透明な空氣の下に木津町を寫し、生駒山を越えて大阪に向ふ。

いよいよ大阪市の撮影だ。同市の航空撮影は正に難事中の難事とされてゐる。それは、撮影を妨げる靄が、大阪灣から市上に常に吹き上げられて來るのと、林立する工場の煙突から吐き出される煤煙が空を覆ふためである。然るにこの日はコンデイションが非常に惠まれてゐた。折から第一日曜に當つて工場では、休みの煙突が多い爲め煤煙が少く、且つ其の上、常には海から吹き上げて來る靄も、この日に限つて逆に海の方へ吹き拂はれ、大阪城を中心とする大阪全市の撮影は非常な成功を以て了ることが出來た。こんなに良いコンデイションに惠まれることは、一年に數へる程しかないさうである。おゝ惠まれし我が「改造」號よ！



野洲川口　琵琶湖の首につなた野洲川口の三角洲で、左手が本流、右手が支流、何れも上流から花崗岩質の砂を押し流しては漸次に湖を埋めて居る。水田が整然と見られるのは耕地整理の結果で中央が灌漑池、かくして生れた村ゆゑ此の三角洲は新田村と呼ばれてゐる。沿岸の湖面に蜻蛉のやうに見えるのは蒼水した水上飛行機ではなく、琵琶湖特有の漁法エリで、名物のハスヤヒガイのやうな小魚は此のエリで獲るのである。

四、瀬戸内海の撮影　その一

八月六日。堺市大濱の日本航空輸送研究所で、所長井上長一氏の好意によつて、最も新しい三菱ユンカース式水上機（六人乘）の提供を受け、四國、中國、九州方面の撮影に向ふ。

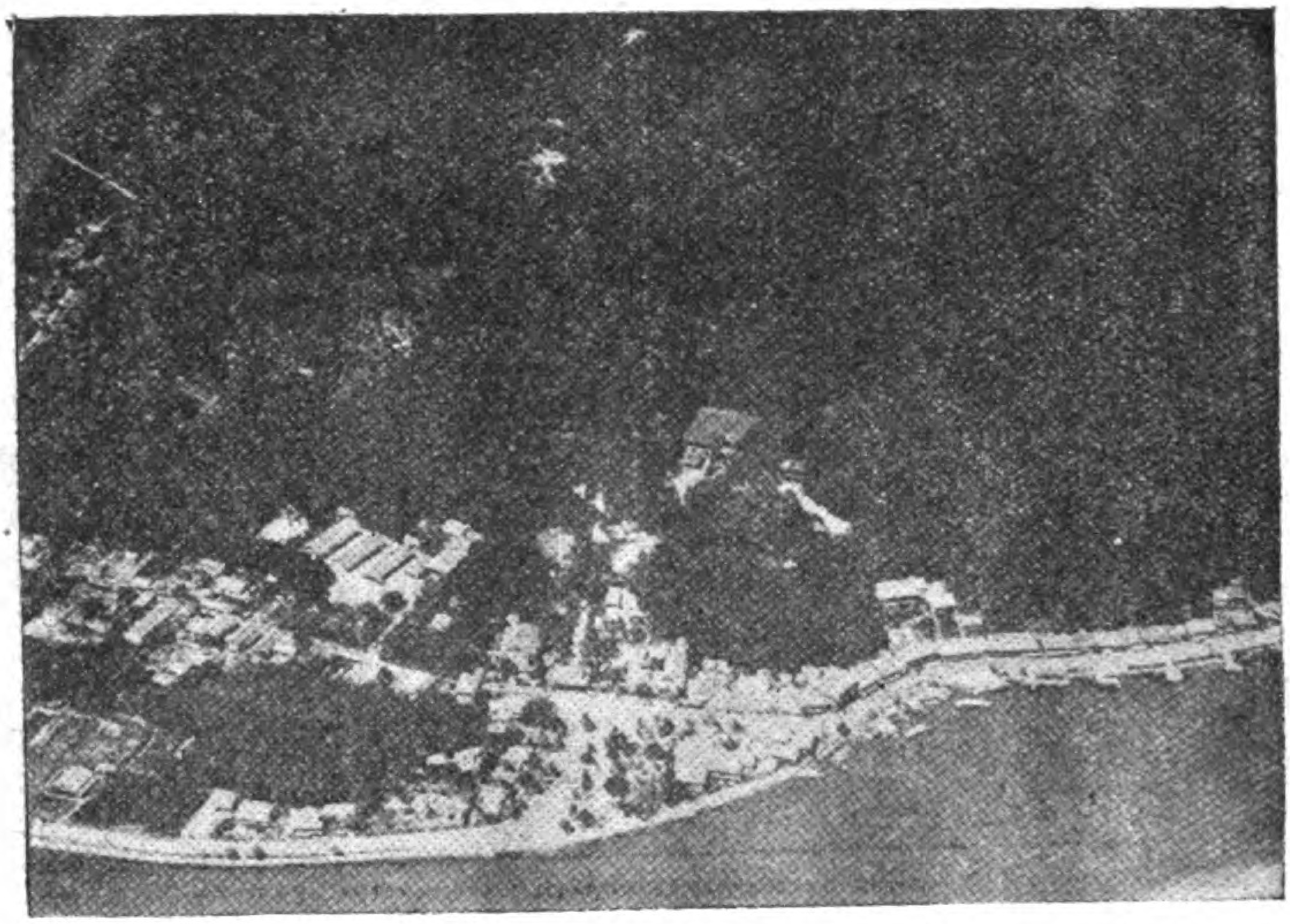
水上飛行機はその性質上、低空を飛べるので、瀬戸内海のやうに低空の方が景色の面白いところ

では、航空撮影はもつてこいである。なほ、九州、中國、四國方面の航空は主に海岸で、要塞があるため、安全地帶を縫つて飛ぶのにも最も好都合であつた。

一等飛行士張德昌氏操縦の下に、班長伊藤西夫氏親ら搭乘指揮の下に、我が社航空寫眞班藤田飛行士、新井寫眞技師同乘午後一時八分大濱飛行場を出發。

先づ飛行場から堺市の全景をカメラに收め、神戸に向ふ。晴天ではあるが、六甲の連山は霞んで撮影には適せぬ。大大阪を右に見乍ら大阪灣を越え、神戸上空に入る。港や和田岬を撮りつゝ明石海峽に向ふ途端、脚下に貨物船が船火事を起してゐるのが見えた。炎々たる焔の中で火災船を挾んで二艘の消火船が、ホースで水をかけ、極力消火につとめてゐた。

須磨、垂水方面の山々、舞子、淡路島の遠望、明石沖など、美景が踵を接して次々に展開して行つた。明石は人丸神社、明石城などを撮した。



石山寺　近江八景の一つ、月で名高い石山寺を南東三百米の上空から撮した寫眞で湖岸の家並は旅館や料亭である。流石の名所も科學的に撮影すると趣を異にする。

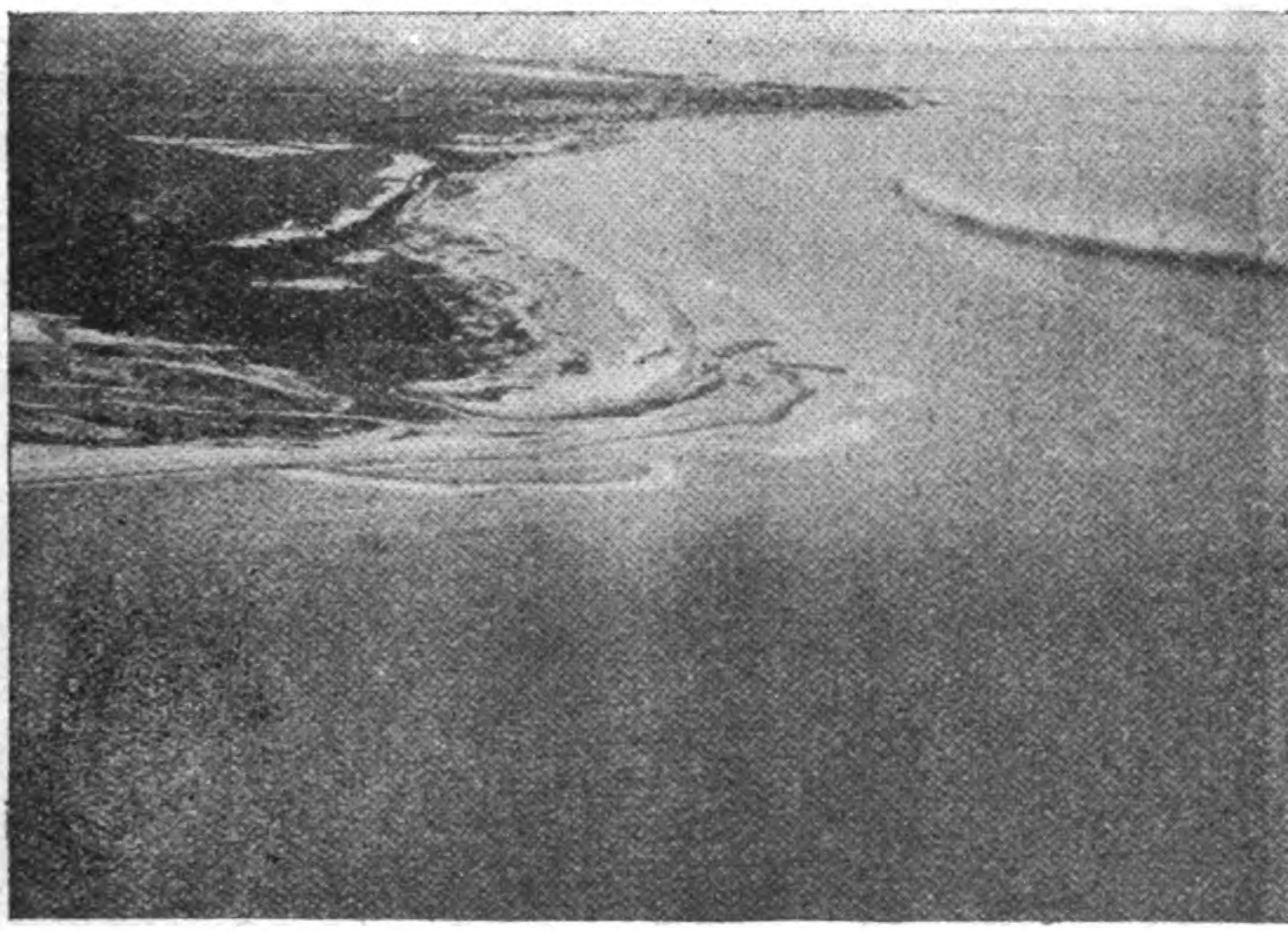
それから、明石海峽を西南に飛んで、播磨灘を小豆島に向つた。時に一時三十分。內海航路の紫丸が、碧海に白波を蹴立てゝ進んでゐるのを見た。男鹿島、西島などを飛石傳ひに、小豆島にかゝつた。島の北側から草壁の山々を左に見ながら、風景のいゝ所を二三撮り、長濱近く來ると、岡の上に「小ドシマ」と書いた標識がふつくらと浮上つてゐるのが見えた。この內海の亘島が首を伸して空に呼びかけてゐるやうに思はれた。土ノ庄町を寫し、悠々四國に向つた。

屋島をはるかに望みながら、男木島、女木島を右に見、高松の上空を掠めた。ここは大阪松山間航空路の途中着陸地である。

高松からは、大槌小槌の二つの島の間、土ノ戸瀬戸を通過し、四國

製鹽の中心地坂出、宇多津の鹽田を撮影し、丸龜の上空にも出た。それから燧灘にかかるまで、多度津、高見島、粟島の上を通り、七寶山の半島を後にした。豫定では、觀音寺町を寫し、海岸を飛行するはずだつたが、氣流が惡く、機體が動搖し、しばしば三十度に傾斜することがあつたので、安全なコースをとり一氣に今治に向つた。四阪島は小さい島だが、製煉所の煙突が並び立ち、非常に景色が好い。機上から見ると、海の中へポツカリと置かれた、近代工業都市の置物と言つた感じ。感心して撮影しようとすると、シャッターに故障が出來た。氣は焦るが仕方がない。あはや島の上を通過せんとした時、故障が直り、大急ぎで寫した。

今治に來たが、山地を越すことが出來ないので北へ迂廻して、波止濱の勝景を把へた。大角の鼻から南下して、海岸傳ひに、北條の町から興居島に向つた。途中森の上に松山の城を望む頃には氣流が甚だ惡く、高濱から三津濱の上で旋回した時は危險に瀕し、同乘者は皆醉つた。勇敢な新井技師だけが盛に活躍してゐた。それから無事、梅津寺濱の飛行場に着いた。時に午後三時三十分。堺から二時間二十分かかつてゐた。



鈴鹿川口　伊勢の鈴鹿川口、鈴鹿山脈の分解した石英粒の岩屑を流下するので海岸は見る如く白砂の美しい洲となつてゐる。川岸と海岸には護岸工事が完成してゐて防砂用の松並木が青々と續いてゐる。右方海中に突出せるは四日市港の防波堤、寫眞版ではわかりにくいが港には數艘の汽船が碇舶してゐる。四日市は名古屋の外港で日本では第六位の良港である。鈴鹿川口は手前の砂洲で中央松並木のあるのは内部川である。

これまで、風光明媚を以て鳴つてゐた内海航路の景色が、空中より俯瞰することによつて、全然その面目を一新した感じがする。陸上から眼を放つて絶佳と稱してゐたところが、空中から見下すと箱庭のやうに何の奇もない、かと思ふと、實に思ひがけないところに、驚くべき絶景が展開されたりする。内海は機上から見ることによつて、一段と生彩を増した。

五、瀨戸内海の撮影　その二

八月七日。八時過ぎ梅津寺濱飛行場出發。ハンザ式單葉機で、馬場一等飛行士操縦。

伊豫の海岸を南に下り、長濱港から機首を伊豫灘に轉じ、九州に向つた。この廣い灘の上を横斷するのには三十分かかつた。

大分市を一旋回して、山と入海の美しい湯の都別府の上空に出た。それから海岸を杵築へ出、國東半島を横ぎつて宇佐へ行く豫定を變へて、半島を周廻しながら行くことにした。この茫然たる半島の沿岸には穩やかに波が打ち寄せてゐたが、尖端の香々地附近では心をひかれた。それから愈々宇佐に來て、古歷史に彩られた八幡宮を撮影した。

これから周防灘を一直線に長門の宇部市に向ふのであつた。關門海峽をはいつて來た二本マストの巨船が、その時脚下を東に向つて進んでゐるのが見えた。今日のコースの中で、後になつて再び此の汽船を追越すことになつたのは面白かつた。海と空と、何のゆかりもない飛行機が汽船に出會つて、別れて、數時間の後また追ひ越すなんて考へると、これは飛行機の上だけで味はへるスピードの感傷だ。

宇部市ではガソリンを補給するので、豫定のところへ着水しようとしたが波高く、止むを得ず、港内の風の當らぬところへ着水した。そこで中食を食ひ、ガソリンの補給をした。その間二時間かかつてゐた。午すぎ宇部を出發し、秋穗半島を寫しながら三田尻に向つた。それから海岸を德山に出、室積より、柳井津に向ふ。氣流がかなり惡かつた。岩國では名橋錦帶橋を寫した。ここは兩方に山があるので、カメラを向ける位置に苦心し、一旋回の後撮影した。錦帶橋の錦帶橋たるゆゑんは、あの反り橋の並んで架つてゐる壯觀である。それが眞上から見ると、その反つたところも平板に見え、一本の帶のやうである。何の變哲もないことになるから、それに立體的な偉觀を見せるためには、撮影の角度と位置に苦心しなくてはならぬ。この苦心は一通りではなかつた。

嚴島附近は氣流が非常に惡かつた。要塞地帶であるから、たゞ神社だけを寫すことが出來た。

それから一路梅津寺濱飛行場に歸つた。その途中、前述の大きな汽船が備後に向つて進んでゐるのを追ひ越した。

この日の航空時間は四時間餘り。撮影飛行中一番長かつた。

六、瀨戸内海の撮影　その三

八月八日。馬場飛行士ハンザ機を操縦して、八時過ぎ梅津寺濱を出發した。内海を寫しながら大阪へ歸るのである。

伊豫の海岸より尾の道に向つた。島と港と波と岬と――内海の景色は美しいところばかりだ。尾の道から鞆、福山、笠岡を經て、岡山に向つた。迎接に遑のない風景の饗應である。

岡山では後樂園を主題として寫し、それから綺麗な風光を持つた日

比叡へ行つた。技師はいくら風景の變態に與つても飽滿することを知らず、貪慾にカメラの中へ收めて行く。

日比から再び四國の高松へ向つた。そこで一旦着水して休息した。

高松からまた備前牛窓にかへり、海岸を赤穗へ出た。海岸から大分陸深く入つては、姫路の白鷺城を狙つた。雲の影が地上に落ちて、あの端麗な城を寫すのにも努力した。

高砂町、明石、須磨、神戸を經て、大阪木津川飛行場へ歸つた。瀬戸内海撮影飛行も無事に終つた。

七、歸還飛行

八月十日。朝、航空輸送會社の天候通報は、龜山、濱松、靜岡、箱根等の天候のいいことを知らせた。

午前八時三十六分「改造」號は木津川飛行場を出發して、歸還飛行の途に上つた。

生駒山附近は雲に隱れてゐたが、切れ間を衝いて飛び、郡山町から地獄谷の方へ出たが、三笠山は無慘にも雲をかぶつてゐた。

木津から伊賀上野へ、高度八百米、拭ふたやうに雲はない。機は續々として進んでゐる。鈴鹿山脈を越えてから、關、龜山を寫すために高度を四百米位に下げた。

鈴鹿川に沿ひ、伊勢灣頭に出た時は高度千米。ああ、この時の遠望の素晴しかつたこと！ 日はキラキラと輝き、知多半島は全部、遠くは伊良子岬、鳥羽の港まで眺められた。更には向うに、遥かに、富士の靈容が浮んでゐた。その富士と並んで、積亂雲が仁王のやうに立つてゐるのが見えた。

常滑、大濱、蒲郡などいい景色を追ひながら、豊橋では高度八百米、全景がきれいに見えた。濱名湖では高度百米に下つた。大氣は上層ほど涼しく、下層ほど熱い。だから上空から急に下降して來ると、瞬間のうちに激しい氣温の變化を受け、飛行機が火事を起したのではないかと思はれるほど空氣が熱い。空氣が澄んでゐて、よく撮れる。

濱松、天龍川を過ぎ、南アルプスを遠望しながら、小夜の中山附近を寫した。これから氣流が次第に惡くなつて來た。高度四百米で島田町、阿部川口、久能山などに再び見參した。

清水からは霧が段々深くなつて來た。それから富士山の撮影に向ひ、千米の高度で雲を拔いた。山は積亂雲に圍まれてゐるので、更にその雲を拔いて山に近寄らねばならなかつた。高度を千九百米まで上げたが、雲は中々厚かつた。この邊氣温は五十度に下つてゐた。

箱根連山も雲に被はれ、温度は下つてゐるので、千百米のあたりを飛んで、雲間を裂いて熱海に出で、眞鶴岬、小田原の上に出た。もう既に身は關東平野にあるのであつた。大山から厚木を經て、大成功裡に立川に歸つた。時に十一時十分。旅囊には收穫が充ち滿ちてゐた。

（カットの寫眞說明は都合に依り「改造」編輯部で試みたもの故、學術的ではない。この點、專門家を煩はす「日本地理大系」の寫眞解說と混同せられないやう御諒承を乞ふ。）

次期總選擧に誰を推すか

○　堺　利　彦

荒畑勝三君（寒村）
加藤勘十君
淺原健三君
鈴木茂三郎君
猪俣津南雄君
安部磯雄君
馬嶋　僴君
細迫兼光君
小岩井淨君
大山郁夫君

○　菊　池　寛

小生が先年立候補したる東京市第一區より馬場恒吾氏を推薦し、應援したいと思つてゐます。

○　山　川　均

私は（黨員ではないが）日本大衆黨の候補者に投票します。立候補がなければその他の無産政黨の候補者に。この前は社會民衆黨候補者に投票しました如く。即ち候補者の人物によつてゞなく、黨によつて決定します。しかし興味の上からは、議會に送つてみたいと思ふ人が無いではありませぬ。これは無産政黨關係以外の方面にもあります。

知友の間では堺利彦、荒畑勝三の兩氏など是非議會に送つてみたいと思ひます。

方面の違つた處では、××××氏の如き人に、圓本式の潑溂たる才能を縱横に振つて貰つたら、定めし見ものであらうと思ひます。

それから近々出來るといふ大山黨からは、是非大山、河上肇兩氏の當選を望みます。これは後擧のために、如何なる議會行動を取られるかを見せて頂くといふ意味で。

○　××　××

（一）河上肇君
（二）大山郁夫君
（三）麻生久君
（四）賀川豐彦君
（五）松岡駒吉君
（六）武藤山治君
（七）志立鐵次郎君
（八）髙橋龜吉君
（九）藤森成吉君
（十）吉野作造君

ざつとコンナもの。

○　細　迫　兼　光

大山郁夫氏

現在日本に於て×××××脅威の下にあつて文字通り無産階級の爲、、、してゐることを實踐に於て示してゐる者として誰しも

氏を眞先に推す事に躊躇しないでせう。

○　奥　むめお

布施辰治氏
安部磯雄氏
大山郁夫氏
堺利彥氏
下中彌三郎氏
岡本利吉氏
賀川豐彥氏
杉山元治郎氏
廣田金一氏

その他、勞働者、農民出の方をぜひ多數送り出したし。

○　河上丈太郎

私は左記の方々を送りたいと存じます。

麻生久
杉山元治郎
賀川豐彥
棚橋小虎

○　中村武羅夫

放漫に膨脹せる財政を緊縮し、金解禁を決行することは刻下の急務だと存じます。だから私は、當然民政黨を大多數にしなければなりません。が、この政策を離れて、單に人物なり見識なりを本位の上から言へば、菊池寛氏とか、馬場恒吾氏など、代議士として議會に送りたいと思ひます。コレは別のことですが、新潮社の社長佐藤義亮氏など貴族院議員として立派な人物だと思ひます。

○　麻　生　久

こゝに人物の誰々とあげる譯にも行きませんが、代議士（無產黨）の候補者たる人はただ代議士たらんがために無產黨に入黨して選

永好君、栃木の石山寅吉君、長崎の今村等君
兵庫の藤岡文六君の如き人々。

○　永井柳太郎

次の選擧には濱口内閣を支持する候補者を當選せしめたいと思ひます。

○　小泉　信三

大山郁夫、河上肇二氏の當選を望む。議院生活は二氏の爲に有益なる見學となるであらう。

○　神近　市子

比較的に實現性があつてしかも合法政黨の主張者の中からは、大山郁夫、河上肇、小岩井淨、細迫兼光等の『新勞農黨』の人々。もしそれ政獲同盟の中からといふなら、澤山あります。

○　河　上　肇



島津日向守

東秀雄

一

「無上甚深微妙法。百千萬劫難遭遇。
我今見聞得受持。願解如來眞實義」

「開經偈」の朗らかな梵音が、內陣にズラリおし列んだ衆僧の唇から、朧やかな御堂の內を緩やかに渦卷流れし、波うちかへしてゐた。木魚の音。太鼓の音。鈴聲。けだるく單調な雜多な音階が互に唸りかけ、叫びかけ、吼えかけ、囁きかけ、絡み合ひ、縺れ合ひ、糾ひ合ひ、そしてはやがて嗚々たる餘韻と成つて、やるせなく久遠の靈魂に呼びかけ、呼び覺し、呼戻してゐるのである。

莊重極りなき佛壇。燦爛眼も眩むばかりの黃金の燭台には、小倉のやうに首を伸縮めする燭焰が愍れみ深く二つの眞新らしい白木の位牌を和やかに吻接け照して、悲しい歡びに泣濡れた釋名が裊々たる香煙に咽んでゐた。五色の花の精を集めたやうな色衣。錦襴の袈裟。起ち又坐する僧達の物靜かにも敬虔な作法。すべては閻浮檀金の淨土の夢かとのみ疑はれるのである。

所は薩州七十五萬石、島津家代々の菩提所玉龍山福昌寺の本堂。時は天保十四年冬の半。當主日向守齊茂の蕾のまゝに散りうせた一子月

若。その妹菊姫の菩提供養であることは、言ふまでもなかつた。

御簾を垂れた特別席の遺族二人。それが大守齊茂同夫人犀月である。常安颪の北風が空から吹落して來るたびに、ピッシャリ〆切つた太骨の障子がガタピシ搖れ軋んで、庭面を驅けずり廻る落葉のサザめきが、天地の間に滿ちてゐる。うす暗く翳つた障子の面に時折パッと日の光が射して、それが又何時しか汒乎うすれゆく具合が、何だか雪もよひの日のそれらしい、落著なさだつた。

「いざ、ゴ燒香遊ばしませ！」

大導師無願和尙が御簾の內へ聲かけると、そこから肅然と立現はれたのは、齊茂だつた。寬額、豐頰、直眉、鳳眼、隆鼻、薄唇。うち見るからに恩威兼備はる巍々たるその高風は、たゞもう四邊を掃ふばかりだつた。年の頃は三十內外！

お齋の室は新築の百疊敷である。爽やかに靑み渡つた備後表が、所々に金襖の反射を明るく滲ましてゐた。千年樟の天井板の香が仄々と漂よひめぐつてゐる。雲に天人の彫物をした欄間に、歷代の大守の眞蹟を扁額にしてかけた所など、用意の程を思はせて餘りあつた。一門の人々と共にお齋の供養を受けた齊茂、ツト立上るとツカ〳〵と床の前に寄りついて行つた。

彼は又しても、掛軸の上に眼をすゑてゐる。軸面の文字は亡父茂久の絶筆で、それは

乾坤無地卓孤筇。且喜人空法亦空。
珍重大元三尺劍。電光影裏斬春風

と言ふ、かの有名な友梅禪師の偈であつたが、ふとしたことから悲慘な橫死を遂げた、寂しい父の一生が、否、その父自身の全靈が齊茂にはどう言ふものか、今ではソツクリこの偈の上に、乘移つてしまつてゐるやうにのみ思はれて、仕方がなかつた。

入りくんだ家庭の事情から、人生の中でも最も懷かしい幼年時代を、父に愛された記憶の持合せすらない彼ではあつたが、なぜかそれでゐて、チツとも疎々しく思へない不思議な父だつた。それが、段々年を重ねて世路の經驗を積むにつれ、世に知己のない寂しさの、如何に切ないものかゞ解つてみると、動ともすれば彼の心は、不幸なこの父の爲めに泣けて來るのを、ドウすることも出來なかつた。

溜息と共に軸の面から眼を外らすと、臘梅と水仙を池之坊流に挿らつた苗代川燒の大花瓶に、ジッと一瞥をくれてから、ズイと橫手の違ひ棚の方へと寄つてゆく。彼の心を捉へたのは、ツイ今まで氣づかずにゐた短册の文字だつた。それは島津日新齋の「いろは歌」の一首だつたが、書はタシカに祖父茂固にちがひないのである。

「これは？」

彼は怪しむやうに振返つた。

「案の定！」

無願和尙は、滿足げに笑みこぼれながら、

「やつと、お氣附き遊ばされましたか！」

「ウン！ して——？」

「それがでござります。昨夜突然お紙帳の底から、飛出しましたやうな次第にござりましてな。先づ因縁の不思議とでも申すもので、ござりませう！」

「いかさまな！」

文政の終りに疸を病んで失せたのだつたが、如何に公平な眼で見た所で、祖父はタシカに一世の豪雄には相違なかつた。暴風前期の近世日本のあの恟々たる人心を餘所に、毎日御殿山別館裡の謠曲三昧に、胸中の閑日月を悠々と娛しんだ怪傑！ それ一つ思つてみたゞけで（不肖如きが、學んで至り得る境地では、ないのだ！）早や齊茂の胸には畏敬の心が滿ちみつのであつた。

不幸な誤解と一徹の短慮から、一子豐後守茂久を殺めてしまつた時、茂因はスンでに割腹する所だつたが、それは仕合せと愛孫齊茂の爲めに阻まれて、果し得なかつた。その時茂因は齊茂を捉へて、脅しつすかしつ、父の敵だ討取つてくれと、理不盡な事ばかり強要みつゞけたのであつたが、齊茂の情理兼備はる說得の前には、流石に茂因の我無者羅も節を折らずに居れなかつた。その時彼は老眼に涙を湛へて嘗め廻すやうに、齊茂の面をうち戍つてゐたが、その感動と愛撫に滿ちた瞳の幻は、それ以來常に齊茂の心に生きてゐた。異母弟の庶子松千代（三郎齊久の幼名）ばかりに父茂久の心が溺れてゐたセイもあるであらうが、それにしても祖父茂因の齊茂に對する愛は、殆んど盲愛に近いほどだつた。齊茂は「秀丸」の乳臭き赤ン坊時代から、本當乳母よりもコノ祖父の懷ろの中で育つたと言つた方が、適當かも知れない。そうした慈愛の日の回顧を辿つて、自分の眼の中へ入れて慈くしみ愛しつゞけた祖父茂因の温顏を、アリ〱と思ひ描く齊茂の心の中は、そのまゝ底知れぬ感涙の海だつた。

障子の面に滲んでゐた日影が、スーツと翳つて、豆まくやうな霰の音が四邊の靜寂をおし包んだ時、齊茂は初めて我に返つたやうだつた。

「齊久殿も病氣とあれば、如何であらう。貴女だけは一足先きに、立歸ることに爲されては？」

番茶の席で互ひに寬ろぎ合つた時、齊茂はお由井に向つて優しく勸めたが、彼女は素直にそれを受けいれて、寂やかに座を立つのであつた。

それから話題は幾變りして、只今は住職無願和尚の晉山式の日の、思出話に花が咲きかけてゐるのである。

「あの時ばかりは、余もホト〱弱つた。何さま藩中の者どもが、異口同音に傳統を楯に取り、武家出身でなくては菩提寺の住職まかりならぬと騷ぐのだらう。和尚は生憎と、お百姓育ちだつたからな。アツハツハ！」

齊茂は大きく肩を搖つた。

「しかし、流石に老衲も、殿の公案ばかりには、危ふく參る所でござりました」

「あんな事を申す！」
「イヤ、眞もつて嘘僞りはござりません」
「そりや又、何故であらうな」
「如何か是れ百姓の三四郎では、三國切つての珍無類な公案で、ござりますわい。アハハ」
「だが、泥中の蓮とは、流石この余も、スッカリ随喜させられたものだつたぞ」
「恐入りまする」
「イヤ、まつたくの話なのだ。あれで藩中忽ち、沸り鍋に水だつたぢや、ないか。余のメガネに皆も初めて、敬服したと見えるのぢや。ハハ」
「ははは。だが、スペテはもはや、一場の夢になり申した！」
老僧の述懷は、何處か調子が潤んでゐた。

二

大孔雀の形をした一人の悪魔が、ものすごい火焔を鮮血のやうに噴きなびけて、可愛いざかりの二人の子供を、あちこちと逐ひまはしてゐる。四邊は混沌とした世界だつた。
「ヤッ！」
お助け申したさの一念で、駈け出さうとしたが、足が一寸も動かせない。ウン〱唸つてゐる所へ、だしぬけな嘲りの笑聲が、不氣味に耳を打つて來た。
ヒョイと振返つた眼の前には、大入道の龍眼法印が、皮肉な笑顔を近々と寄せ附けてゐる。彼は當惑する外なかつたが、法印は傍若無人に、頭から彼を呑んでゐた。
「殿！　それ、その氣まぐれが、一等悪い殿のお病ぢや」
「――――！」
將監はたゞわけもなく、うち顫へた。全身是れ膽と謳はれる彼であるが、なぜかこの法印の前でだけは、碌々口さへ利けぬのが、我ながら不思議だつた。
「だが、今さら煎豆に花は咲きませぬぞ。殿の菩提心を殊勝でないとは申さぬが、餘りにそれは遲蒔きぢや。アッハッハ」
「――――！」
「イヤ、それよりも、佛殺して念佛では、聊か平仄が合はぬ筈。焚付けたり揉み消したりするくらゐなら、愚衲とて初めから、ナマジ賴まれを聽くのではなかつた。ご自分から、遮二無二人を魔道に誘ひ入れながら、今さらゼウダンにも人間心を持出すなんぞ、悪黨らしくもな

暫くして彼は伏せてゐた面をあげて、チラリ法印を見やつたが、何時の間に立ち去つたのか、そこにはモハヤ影も姿もないのだつた。

「ハテナ！」

将監はやがて腕こまぬいて、眼をとぢた。冥々たる忘却の海面に、一つ一つと姿を取つて次々に現はれて來る物がある。宗家に對する彼の陰謀の種々相だつた。自ら光榮ある島津の一門に列なりながら、義理からも情合からも、あり得ることでなく思へて來る。不斷には、いくらも逃げ道があつた筈なのに、今日に限つてスツカリそれが、塞がれてしまつた心もちだつた。

「どうも變だな？」

呟やきながらスタコラ歩きだした時、土の底からでも迷ひ出て來るやうな、一種陰慘な、物音が襲つて來た。

「――――？」

彼は立ちどまつて、そゝくさそこらを見まはして見た。眼に附いたのは一宇の庵である。水墨のやうな松林に取りかこまれてゐるが、梢の風音すらも死んでゐて、寂々たる混沌の天地に滿ちみつものは、唯妖々たる呪文の聲ばかりである。

「あッ！　やつぱり孔雀明王符らしい。法印殿にちがいない！」

サツと顔色が變つて、激しい戰慄が彼を捉へた。恐怖その物のやうな表情姿態で、コソ〳〵と逃げ支度にかゝつた時、どちらが引くのか、引かれるのか、庵と彼との間隔が恐ろしい速度で、ハヤ手の屆くほどにおし縮められてしまつてゐた。

庵の窓々は悉く締め切られて、隙間もる護摩の煙は、濛々と四邊一面をとざしてゐる。天もない。地もない。あるものは唯茫々たる混沌の凄ましい靜けさのみ。墨繪そのまゝのさつきの松林も、今は何處へケシ飛んでしまつたのやら、そこらに影もないのである。スベテが唯魔法のやうだつた。と、不可抗な引力が、どこからともなく將監の心に働いて來て、彼は唯無意識にズル〳〵と、庵の壁へ吸付けられてゆくのである。彼の面が今にも、その壁とブツ突かりさうに成つた時、だしぬけな衝動が彼の體を、一つの節穴へおし附けた。

「あッ！」

内部の光景を一目見るなり、彼は反けぞるほど驚いてしまつた。墨をぬりつぶしたやうな眞暗闇の底に、二人の小さな髑髏の爲めに、喉笛を喰破られて、のたうちまはる法印のその、言ふにいはれぬ物すごくも陰慘な相好！　それが血汐のやうな眞赤な地獄火の、陰々たる焔にうすボンヤリと照されてゐるので、一しほと人の魂を慄え戰かすのであつた。

「モシ！　モシ貴郎」

「アッ！　おう！　ウ、ン！」

「たいそう、うなされてお出で遊ばしましたのよ。ホホホ―

將監は溜息を深々と吐いて、枕元なる妻を見た。

「厭な夢だつた！　ハハ」

「どんなお夢?」
「地獄の夢だつたかも、知れない!」
「まあ!」
女は美くしい二皮目を圓らにした。丹花の唇から、おはぐろ染の正しい齒列が、蠱惑的にのぞいてゐる。この中高の瓜ザネこそ、「東富辨天」の綽名附きの國色、實枝子なのである。
「もウ大分遲いな」
「七ッ前では、ございませんか知ら」
「して、まだ誰も?」
「見えないやうで、ございます」
「さうか」
枕たばこを一服やりながら、彼は悵然と煙の渦を眺めてゐる。
「魔物のやうだな!」
「えッ?」
「いやなに」
「存じてをりますわ! 覺えてお出で遊ばせよ」
「何を申す」
「魔物なんぞと、仰せ遊ばしたでは、ございませんか」
「なあんだ、馬鹿々々しい。あれはお前、煙の形を言つたのだ」
「オヤ……さやうでございますか。では、ごめん遊ばしませね。ホホホ」
「イヤ、うい奴!」
手を捉へて引寄せようとすると、彼女は急いで、それを振拂ふ。
「ハッハッハッハ!」
そゝくさ立去りゆく、彼女の後姿を見送りながら、彼は高らかにうち笑つた。
忽焉として頭の中に浮んだものがある。自分の只今の位置である。島津の門葉の一人として、其宗家に不軌を抱きつゝある自分の、恐ろしい位置である。
「ハハ! こりや變だ。これしきのことに氣を腐すなんて、俺もそろそろ燒きが廻つたのかな! 冒險は初めから解つてゐる。問題は一身上の安危ではない筈。それに宗家に對して不軌を抱くと申した所で、右手を左手に取替へるだけのこと。日向殿の身代りに三郎殿を擁立したればとて、元々、正義の要求に立脚する國策遂行の一端でこそあれ、つゆ將監の私からではないのぢや!」
その强調された獨語は、恰かも自分自身に言ひ聞かせてゐるやうだつた。佐幕主義の彼である。勤王系の當主齊彬を廢して、佐幕系の舍弟齊久擁立を畫したからとて、チッとも無理はないのであるが、唯問題は彼のこの陰謀の動機に、果して彼の考へてゐるやうに、一片の私心が介入してゐないか否の點である。彼が今俄かに默然と眼を閉ぢてしまつたのは、この一事の反省に心を向けたのに、ちがひなかつた。

「フーン！」

暗い嘆息には、良心に逐詰められた者の、重苦しい悩みが、ドコとなく籠つてゐた。

夜陰の戻り籠で何物にか惨殺された法印。彼に頼んで呪殺せしめた月若君兄妹。この惨絶なる悲劇の中に置かれしながら、一見悠々と何等痛痒の色をすら示さぬ大守齊茂。それらの人々の面かげが、幻みたやうな鮮かさで、一つ／＼と眼の前を通りすぎるのを、彼は懼然としてうち眺めるのだつた。

（何も、罪のない月若君兄妹まで、殺めるほどのことも無かつたのぢや！ 枝葉の末をも枯らさうといふ、ソノ残忍な心の裏にこそ、俺の私が、巧みに潜み匿れてゐたのでは、ないのか！）

小半刻の後には、彼は美しい妻實枝子と差對ひに、ユツタリ食膳に寛ろいでゐた。晴々と開放された窓口には、遠州流の庭園が、自慢の霧島つゝじを紅に燃立たして、枝垂れ柳のかげの泉水の渚には、杜若の紫が、時折空たかく跳ね躍る緋鯉の作る波紋の爲めに、そよいでゐる。浩蕩たる錦江灣の煙波を踏んで、ニツコリほゝ笑み立つ櫻島山の面輪をあいたいたる霞のベール透しに近々仰ぎ見る時こそ、夫婦の心に春の歡びが、油のやうにはびこりゆく筈だつた。何考へてゐたのか

「仕方はない！ 乘りかけた船だツ！」

だしぬけな將監の獨語である。實枝子はハツとして、こッそりソノ面色を、ぬすみ見るのだつた。

三

こゝは鶴江崎の大砲鑄造所である。反射爐には赤い焔が燃えたぎれて、夕闇の底に立ち罩めく、骨ッ節逞しい職工たちの顔から背を、地獄繪のやうな物すごさで染め出してゐる。鑄かけの材料に各地の寺々から寄せ集めた梵鐘が、イルカの群みたやうに轉がり合つた土間の一隅に、牀几に腰を下ろしながら相對してゐるのは、大守齊茂と國老伊集院左衞門である。

「さいぜんの話の、續きだが」

齊茂は句切りを附けて、ジッと相手の顔色に眼を附けた。

「ハッ！」

左衞門は、ゴクリと空唾を呑んだやうである。多賀山蔵が、ガタピシと扉を鳴らして、戸外の黄昏をドヨもし行くと、近くの松林から松籟の音が濤聲のやうに傳はる。

「折角こゝまでやり附けたものを、たとひ何でも、今さら中止するワケには行くまいと、思ふのだが！」

「恐れながら、左衞門奴とても、殿のご胸中は聊か拜察致さぬでもござりませぬ。だが、併し、黄金百萬兩と申しまするも、容易ならざる費えかと相心得まする。その莫大な資本でさへ、なか／＼以て、引合知れぬご事業でござりますれば、この際尚もその上、唯むやみと關

を注ぎ込みまする儀は、大きに考へ物かと心得まするが！」

「ウン！」

「如何なものでござりませう！　一層これは、一まづこゝらあたりで、アッサリお打切り遊ばして、又候機會を見た上で、今度こそ十二分におやり遂げ遊ばすやう、御努力なされましては？」

「さあ！――それがぢや！」

「ハ！」

左衛門は、俯向いたまゝである。

「もちろん、天保の傷痕とてもまだ生々しい砌ではあり、そちが士民の休戚を思ふ心に、無理は聊かないのだがね。併し、國防のない產業は、結局防風林のない果樹園と、一つことだと思ふのだが！」

「ハ！」

「六十餘州と申せば、そちも知る通り、古來威武を以て世に知られた、お國柄だ筈である。ところが、今日では三百諸侯の國軍を束ねてすら、タカだか數隻の火輪船の前にさへ、手も足も出なんだこと、そちとてトクに承知であらう。な！　時勢はモハヤすつかり變りはてゝしまつたのだ。今後の國防は何と言つても、大砲より外ないのだが、蝦夷千島から琉球までの沿岸は長い。で、如何ほど造つても造つて

だ。同文同族の流れは古い。唇齒輔車の親善を緊にする外には、白皙の長策は全然なからう。之からはモウ國と國との關係よりも、人種と人種との相尅に移るにチガヒない。白晳に面して同族の運命を保全するため、余は帝國が東洋民族の盟主として、奮起すべき責任と將來とを期したいのだ。そちは、余のこの考へを、正しくないと言ふだらうか？」

「何條、さやうなことが、ござりませう！」

「では、たのむ！　モウ一遍とくと考へ直してみてくれ。それは、余の事業には齟齬もある。破綻もある。だが、一つ鍋島の事業にも比べて見るのだな！　彼れは今ではドウやら、成功の域に達したと申す噂だが、それまでの失策が、前後十八回にも及んでゐる。余の失敗は今回やうやく、四度目ではないか！」

「御意にござりまする」

「鍋ケ浦の造船所だけは、ドウか斯うか、目鼻が附きかけて來たやうだから、先づうれしい。江戸灣廻航を申しつけた胡蝶丸に大玄丸は二隻が二隻とも、スバらしい成功だつたではないか」

「何事も、殿の御神德ゆゑで、ござりまする！」

左衛門の聲は怪しく顫えた。天下に先立つて君國を憂へんとの赤心

るのだつた。齊茂は莞爾した。
「その御神徳が、大砲を渇要するのだが、なア！」
「ぶッ！」
左衛門うつかり噴出してしまつて、ハッと驚いたが、モウ間には合はなかつた。羞恥と恐懼の色が、滿面の皺にたゝまれて、幽かにふるえた。
「今のは、ゼウタンだがな！」
齊茂は、が、そんなことなど、氣にも留めないで、すら〳〵コダハりない、口の利きやうだつた。
「ところで、それ、かの余の考案に成る『日の丸』の旗印ぢや。江戸灣の空に檣頭たかくひるがへつたのが、人々の興味を痛く唆つたと相見え、阿部殿ゴ斡旋の下に、之は亦意外、とう〳〵御國のみ旗印に、決められるらしいぞ」
「ソ、ソ、それはアノまことで、ござりますか」
「安心いたせ。君子のゼウダンは、事に依るのだ」
「ははッ！　それは又祝着至極。左衛門改めて、お慶び申上げまする！」
「ハツハツハ！」
左衛門の老眼に涙を感じたらしい。齊茂の肩は又しても、いつもの通り、大きく揺れてゐる。
歸館に際し、齊茂が乗物を斷つた時、左衛門は驚いたやうに齊茂の面を、ジッと見た。
「春宵の詩趣を拾ふには、膝栗毛に限るてな！」
「それに致しましても」
と、左衛門は一寸語を途切つて
「ナニ、長くは手間はかゝりませぬ。恐れ入りまするが、暫らくお待ち遊ばしませ」
「伴まはりの世話であらう」
「は！」
「靜馬がゐるわ。心配いたすな」
「それも、さやうでござりますが、晝とはちがひ、夜陰のゴ道中でござります！」
「ハッハッハ！　年を取ると、色々苦勞の多いことぢや、のう！」
「イエ！　强がち、年のセイではござりませぬ。昔から、蟷螂轍に當れば明君之を避くるの譬へ。若君ゴ兄妹の怪しいゴ病狀にも、まんざら思ひ當ることが、ないではござりませぬ！」
「そんなことは迷信ぢや。口さがない世間の噂話を一々眞に受けては、不覺であらう。子は怪力亂神を語らずと、申すではないか」
「併し、火のない所に煙は立ちませぬ。又理外の理といふことも、ござりまする。孔子も、知らざるを知らずとせよと、申されたやうに憶えまする。それはともかく、近頃獅子身中の虫どもが跋扈するのモハヤ爭ふ餘地のない歴然たる事實では、ござりませぬか！」

「何事も、余の不德ゆゑぢや！」
「恐れながら、その殿のゴ寛仁ですら、なか〳〵眼ざめにくい奴原で、ござりまする。ゴ油斷の爲めに笑ひを後世に殘したら、何と遊ばします？」
「そちの好意は、余も忝けなく思ふ。だが、齊茂不敏ながら、尙且つ薩隅日三州の大守ではないか。自らの藩籬をそゞろ歩くにさへ、人を恐れねばならぬとは、餘りに情ない話だと思ふが、如何であらうな？」
「ハーハッ！　ではこの上、モハヤ左衞門奴、何事も申上げぬで、ござりませう！」
齊茂は左衞門と分れて外に出た。まん圓い江月の周りに、怪しげな黑雲がわだかまつてゐる。風もパッタリ吹止んで、松の間すかしに白々と輝く海の面が、砥のやうだつた。
「ドウぢや？　この情景は」
齊茂は、ふり返つて靜かに言ふ。
「まことにはや詞もござりませぬ」
靜馬の答も、シンみりとしてゐる。二人とも宗十郎頭巾に、面體を隱してゐるのである。
「海の眺めもよいが、山もよいな。多賀山などは、まるで、探幽の墨畫みたやうぢや、ないか」
「御意。それに、この銀鼠の朧ろは、如何でござります！」
「惡くないな。何か、よい香が、するではないか」
「どうやら、パラらしうござります」
稻荷川のせゝらぎに、三味の音を流す柳町遊廓のサンザめきが、手に取るやうに聞える。
「あそこも祖父上の置土産だが、扨て靜かに考へてみると、あれでなかなか、色んな事に心を配つてゐられたらしいのだね」
「それはもう、大殿樣の多方面なゴ才覺と來たら、幕府の老中方すら、流石に舌を卷いてゐたらしいので、ござりますから」
柳町の本通りに出ると、左側には堀割の水が鈍く淀んで、土堤の柳の並木の梢々は、綠の糸をよりかけてゐる。
「ところで、左衞門には、ホト〳〵弱り切つたね。かうと覺悟を決めたら最後、テコでも動く奴ではないわ。ハッハ」
「まことに誠忠無比の良臣。古への管仲樂毅を、まのあたり見るやうな氣が、致します」
「其奴又、弱つたぞ！」
「え？」
「實、俺はな、そちの助力で左衞門奴を、說得させようと思つてゐたのだ。ハハ」
「恐れながら、その事なれば――」
「ダメか？　ごめん蒙ると申すか」
「滅相もない！　何とて某に異議ござりませう。イヤ、支出の責任

から申しましても、この事業だけは、やはか途中で、止められた義理ではござりませぬものを！」

瀧川靜馬は勘定方の、筆頭だつたのであるから、無理ないことだつた。

「シカとだな？」

「は！」

「まちがひ、あるまいな？」

「刀にかけまして、僞りはござりませぬ」

「では、たのむ。よいか？　其方に賴んだぞ！」

「は！　シカと心得まして、ござります！」

ポツリ――と、雨粒が落ちて來た。

「あッ！」

「とう〳〵降り居つたぞ」

「お乘物の用意を――」

「アイヤ、それには及ぶまい」

「ぢやと、申して――」

「この空もやうぢや。たいしたことはないさ。なに、しかと自信がある」

主從が高野山の前通りから、舘之馬場へさしかゝつた時である。ムンとした殺氣に二人の第六感が、ハッとした瞬間

「エイッ！」

激發の氣合もろ共、颯と兇刄の太刀風が、紫電の如く齊茂の肩先に迫つた。

「ヤッ！」

と應へた齊茂。石火の早業にて振向きざま、左手には早や、「主水正正清」の鯉口を摑んで、ガツキと鍔に受ける。パラッと火花が青白く流れた。

「シ、失敗つた！」

低く呟やいたのは、覆面の曲者である。

「不禮者奴が……人違いたすと、たゞは差赦さぬぞッ！」

靜馬は柄まへに手をかけながら、大喝した。ヂロリ見まはした所、總勢七八人らしい。そろひの覆面黑裝束に身を固めて、遠卷きにジリ〳〵と迫つて來る。

(はゝア！　之れはやつぱり、重富家の廻し者だな！)

いで、その儀なればと――肚をきめた。

「我が君様！」

靜馬は、ワザと聲だかに呼はつて

「取るにも足りぬ、鼠賊の奴原。何卒それがし一手に、お任せくださりませ」

「ウン！　だが、拔かるなよ」

この應酬でさへ、逃げ失せぬ所を見ると、推測はモハヤ圖星だと、靜馬は思つた。

四

南國特有の獰猛な五月雨も、スッカリ霽れた。連山の峯から、屯してゐた雲幕が、氣前よく立退いてしまふと、洗ひ立ての鮮やかな夏空が藍を湛えて、山肌をカッキリとそこに浮立たせた。

木立繁き鹿兒島城下の新綠に、櫻島沖の入道雲が、ヘラヘラ笑ひかける。遠近の屋根むね高く尾鰭を振ふ、五月幟の薰風の匂やかさにも、夏の深さが思はれた。五大石橋の橋底を、渾々たる濁流に浸してゐた甲突川の水嵩も、モウめつきり退いてしまつて、水腐れの見える川岸の楷栒の藪かげに、「曾我の傘燒」の名殘らしい破傘の燃さしの、引かゝつたまゝでゐるのも、波うち際の捨篝以上の、詩趣である。

「オ！　これはこれは、杜鵑が啼いてゐる！」

庭下駄を突つかけて、庭木の蜘蛛の巣を掃つてゐた主膳は、屋後の城山をふり仰いで、ニッコリした。江戸家老時代の若さも意氣も亡び去つてはゐるものゝ、胡麻鹽がかつた天神ひげの優しさに比べて、皺んだ瞼裏の眼光には、どこかにまだ人を刺すやうな、鋭い物が殘されてゐた。

噴水の清水で汗を拭きとつてしまつて、座敷へ引揚げると、

うす茶の碗をさゝげてゐた。

主膳は、鷹揚にうけ取つた。

「近ごろなかなか、手に入つたのう」

「さやうで、ございますか知ら」

女はよほど、うれしさうだつた。

「それは？」

「明石屋の練羊羹でございますが、あの、カステラにいたしませうか」

「まあよいわ。明石屋なれば、練羊羹も惡くないね」

「一つ如何で、ございます」

「ウン」

無造作に箸の先から摘みとつて、口へ入れた。

「けつかう！　どうだ。遠慮には及ばぬ。お前も摘んでみては？　ナニ？　あ、さやうか。では後でユックリ喰べたらいゝ。イヤ、別に用はない」

女は一禮して、もの靜かに立去つた。

うす茶の碗を兩手にのせて、ウッとりと自らの氣樂さに思ひ浸る心の周りには、家と取りかこんで、

は、沁々切なく思はれたが、それも、美婦お小夜を、手生の花に眺めくらす今の主膳には、ハヤ縁遠い昔の悪夢でほか、無いのである。

「俺は仕合せ者だな！」

　シンみりした調子だつた。

緋牡丹のやうな、濃艶なお小夜の幻を見つめながら、年甲斐もない自らの愛慾の、浅ましい日夜を思ひうかべる頭の奥には、フト故君茂久の神々しい面かげが、ニツコリと覗いてゐるのである。

（殿はあの頃、お由井の方に夢中だつた。忠義だてらに、決死の苦諫をしたのはよいが、それにしても、俺の仕打はどちかといへば、餘りにアクどすぎた。それに、アノ聖者氣取りの人倫論などの、惨めな浅薄さはどうだ！　アツハツハ！）

　彼の背中は慚愧の爲めの冷汗で、ビツショリだつた。

「なるほど、人生は聖典よりも、モツト〱廣大だつたのだ！　頭で觸れる世界は淺い。深い世界を解するのは、胸でそれに觸れてゆく人人だけなのだ。扨ては、指ざされた月をはえ見ないで、徒らに指先だけに囚はれる者の愚かさで、俺は月の姿を殿と論つらつて、ゐたのだな！テツ！　何たる烏滸の沙汰をしたものであらう」

　沈痛なひゞきの籠つた聲だつた。

「ゴ前様！　お客様がお見えで、ございますよ」

　お小夜である。

「誰方ぢや」

「あてゝごらん遊ばせ。ホホ」

「生憎と、天眼通の持合せがないのだ。だから、早く申さぬと、困るぢやないか」

「一ばんお好きな方で、ございますよ」

「一ばん好きなのは、お前ではないか」

「巧いことばツかり、仰せ遊ばすこと！」

「それよりも誰方なのぢや。早う申せと言ふに」

　稍氣色ばんだ語氣が、嫉妬を抱く女の尖つた神經に、ピリ、とこたへた。

「モシ、ゴ前様！」

「――――？」

　主膳は無言のまゝ、冷然と彼女を見る。

「あなた様はなぜ、あの方の影さへ射したら、生れ變りでも遊ばしたやうに、ソンなに邪慳にお成り遊ばすので、ございませうねえ！」

「ナニ！　あの方？　では、もしや館様では、あるまいな」

「ホホホホ！　とつくにゴ存じのくせに」

　恨みを籠めた眼が、髪剃刀みたやうに、主膳の胸をザクリと抉ぐつた。

「馬鹿を申すでない！　それよりも一刻も早く、ゴ案内申してくれねば困る」

「畏まりましたツ！」

反感タップリな捨白である。

満腔の不平を足に言はせて、荒々しく立ち去りゆくお小夜の後姿を、主膳の心は愁然と逐うてゐた。

（女子と小人とは養ひがたしとは、よくぞ申したものだ！）

その考への裏を掻いて、蔭日向なく淑やかに故君茂久に奉じた頃の、お由井の方の優い面かげが、白百合のやうに匂ひ浮ぶのである。

「さうだ。あの淑やかさゆえの、俺の迷ひ込みだつたのぢや！」

うつかり獨りごちてゐる所へ、「ごめん遊ばせ」と言つて、は入つて來たのは、やはりマチガヒもなく、お由井の方であつた。

「之れはまたお珍しう。イザ先づこれへ」

「さやうなれば」

やがて、煮花に寛ろぎ合つた二人の物語は、何時しか江戸勤番時代の思出に、立返つてゐた。

青ざをと爽やかな座敷を掠めて、窓からの木下風が、アチコチの伊豫簾を搖ぶりながら、水のやうに流れまはる。杜鵑の啼く聲が、紛れこんで來た。お由井はウス目を閉ぢてゐたが、俄かに眼を見ひらきつつ、

「何もかも、何もかも、モウはや夢に、なりましたわいな」

と、如何にもやるせなげな、思ひせまつた述懐ぶりだつた。

「さうお言ひやれば、お前も近頃、メッキリ白絲が殖えましたぞえ」

「イヤモウ、月日ほど皮肉なものは、ござりませぬ。此奴の手にかかりましては、鶯啼かした百花の魁でさへ、見るかげもない梅干こそが、成れのはて！　そこへ行きますると、人間ドンな奴でも月日ほど、冷酷ではござりませぬ」

「強がち、さやうにも、申されまいぞえ！」

「ところが、人間は月日や鏡ほど正直者では、ござりませぬ。タカが、言葉などに衣着せてもらつたゞけで、ホク〳〵ものを決めこむなども、深く考へますれば、随分おめでたい話には、ちがひござりませぬが、ソコに又人間の他愛なさもあらうと言ふもの。今さら嘘へつい[illegible]いひの功徳といふものに、目が開きましたも、年の中とでも申すのでござりませう。餘人ならぬ館様ゆゑ、モハヤ何もかもぶちまけまするが、どうしたものか、私、この頃中一ばん懐かしく思はれますのは、やはり巧言令色の輩ばかりで、ござりますわい。ハハハ！」

「ホホホホ！」

お由井の美しい笑にも、同感の調べがないことはなかつた。

「でも、あの頃のお前は、うちあけた話、随分野暮な男と見てゐたら、移れば變るものぢやわいな！」

「井戸の底の蛙は、大海を知らぬ世の諺。先哲の訓へ外には、マコ

は、私一期の失策！ 今さらお合せする顔も、ござりませぬ」
「改まつて、詫言を言はれてみると、何だか妾とても、氣の毒に思へて來ます。だけど、あからさまに、その頃の女心を語るなれば、妾とて少々お前には、恨みつらみのないことは、なかつたぞえ！ ホホホ」
「申譯、ござりませぬ！」
急に風が止まつたやうである。熱くるしい沈默の中には、煎りつけるやうな油蟬の合奏が、滿ちみちた。お由井は金張りの豆煙管を取上げて、器用に國分刻みをつめてゐる。五十に間ちかい年をしながら、白髮一すぢ見出さぬウラ若い彼女の、昔さながらの艶々しく美くしい不思議な面色を、團扇片手に見つめながら、主膳の胸は我にもあらず、トキめいた。
いかに側室とは言ひ條、亡君茂久が一命を賭け物にして、溺愛してゐた女である。それだけではない。裏から言へば茂久の在世中、彼に逆つて、彼女を遠ざけしめようとのみ、努めつゞけた主膳であつた。ドンなにまちがつたところで、二人の間に戀やヘツタクレのありさうなことでは、ないのであるが、思案の外の道の不思議が、ソコにもあつた。
切髮姿の未亡人のみの持つ、あの一種神秘な魅力！ ソノ魅力に捉はれたまゝ、袋猫みたやうに吐け口のない激しい惱みに、我と我が心の中でノタうちまはつたソノ頃の月日が、主膳の悲しげな思出に甦へる。渾身の死力を揮つてこそ、幾十年の長い間を、愛にすら現はさずに自分獨りの胸底ぶかく、秘しかくして來た切ない片戀ではあつたが、運命は不思議とだしぬけに彼の前にほゝ笑みかけ、彼女との心の隔たりとて、すんでにモウうす紙一枚の今である。この恵まれた機會を逸すれば、この戀はモハヤ盡未來、明るみへ取出される折はないのだと思ふと、流石に彼も異常な焦燥に捉はれぬ譯に、ゆかぬのだつた。
「ヤ、ヤ、御前様！」
「えツ！」
どもり顫える、急きこんだ男の聲に、稍上釣りわなゝいた女聲だつた。
突嗟にぶツかり合つた四つの瞳は、ドギマギしつゝ、卒然と互ひに飛離れ、飛びのき、そして後、どちらも惱ましい溜息だつた。
「ヤツパリ彼女も、俺の惱みはうすうす、感づいてゐたのだな！ ソウだ。やはり打明けずに、よかつたのだ！」
お由井を送り出して、一人に成つてから、主膳の唇を漏れたのは、この低い、だが重々しい獨白だつた。

五

食後の番茶を啜り終ると、主膳はツト席を立上つて、緣側へ出て行つた。柱に隠れかゝるやうにして房楊子を使ひながら、ジツとそこい

らを見まはしてみる。夕闇はヒソ〳〵と庭面をたゝんで、掃立ての正しい箒目も、ボンヤリと覺束なげだつた。

そこへお小夜がやつて來て、岐阜提灯に灯を入れて行つた。

「おう！」

主膳は、よろこびの聲をあげて、眼を見はるのだつた。仄々としたこの不思議な灯かげに、俄かに生々と甦つた四邊の情景を、つねにもなくうち驚いたサマである。籬のかげで焚くらしい木戸の蚊やりの煙が、まぐれ風の具合で白々と庭へ流れて來た。打水をした木々の葉ゃがピラ〳〵とうちそよいで、七色の珠玉をサン〳〵と、梢から庭面へ雨降らすのである。パッと幽かな音がして、仄かな香がプンと迫つた。靜かに見やる籬には、眞白に夕顏が開いてゐる。

「ウン！」

主膳が庭下駄に足をのせかけた時、子供つぽい小間使がやつて來て、來客を知らした。

「誰方ぢや」

「重富屋敷の、あのお殿樣でございます」

「ホホウ！　して又、お小夜は！」

「只今、行水をお使ひ中で、いらつしやいます」

「さうか。ではお前、スグとゴ案内申してくれ。ナニ、こゝでいゝ」

女が立去ると、主膳も部屋へ取つて返した。何時の間にか、丸行燈

客はヤッパリ、島津將監であつた。

「これは又意外な！」

「急に懷かしく成つたものだからな」

それから暫らくは、團扇の音ばかりが、ハタ〳〵と冴えるのだつた。

「殿！」

「えッ？」

「ドウやら、館の馬場の暗討も、大失策のやうで、ございますな！」

「叱ッ！」

「大丈夫！」

「イヤ、併し――？」

將監は油斷なく、心を八方に配りながら、言ふ。主膳は稍皮肉に、

「憚りながら、手前の屋敷には、之れでも褌がシッカリ締めこんで、ございますわい！ハハハ」

「だが、モウ少しお手柔かに、願ひたいものぢやな。ハハ」

「お詞ではござるが、あんまりダラシが無さすぎる！　聞けば皆がみな、蜂を食つてヘタばり居つたげに、ございますが、よもや嘘ではござりますまい？」

「何しろ、相手が少々手強すぎたのでな！」

「タカが一人に、八人がゝりでもで、ございますか！」

「ところが、それがツモ〳〵の見當ちがひ」

「何と！」

「深川の奴め、あひにくと、お伴をしてゐたと、申すのぢや」

「ホホウ！」

主膳は嘴を圓く尖らして、嘆息した。

「ソンなら、責むるのがチト無理だ。殿、彼奴は、鞍馬揚心流の達人で、ござるぞッ！」

「ソウらしいな！」

「モハヤ、遠々しい昔話ではござるが、先君豐後守の小姓時代、たしか江戸の札の辻かと覺え居りますが、手練れの曲者を五人までも、瞬く間に斬伏せましたのも、彼奴でござりました」

「ふふうん！　だが、何しに又、札の辻などで——」

「戀ゆえでござる！」

「何に、戀！　然らば彼奴が——」

「ママ、早まり召されな！」

主膳は相手の急込むのを、かるく手で制しながら、

「戀は戀でも、それは先殿の戀路で、ござりますわい」

「スリヤ、やはり豐州公も——」

「神でも佛でもおはさねば、あの男つ振りで戀を遊ばさぬこそ、却つて不思議！　先殿様はソノ頃、深川大工町、大工國松の小町娘に、なかくのゴ執心！　忍びの逢瀬を毎夜のやうに、樂しんでおはしたので、ござります」

「なるほど！　それは初耳であつた。ではヤハリ館は！　ウーン」

「だから、世間の噂話といふ奴も、なかく馬鹿には成らぬもの！　併し、『人家一様楊柳樹、種入宮牆便不同』と、古詩にもござりまする通り、何もそれとて、今さら氏素性の詮議立てでも、ござりますまい」

「それも、そうぢやな」

將監そこで、フト瞳を庭面に移したが、俄かに眼を輝やかして、ニヤリと笑ふ。お小夜の湯上り姿を、見とめたのであつた。

「新納氏、お羨ましうござるわい。ハハ」

「えッ？」

主膳はドギマギしながら、キッと相手の眼を見たが、視線の向うに何があるかを突止めた時、だしぬけに大きな聲を取出して、カラくとうち笑つた。

お小夜は、團扇片手に光虫を逐ひまはしてゐたのであるが、このだしぬけな部屋の内の笑聲に、如何なる意味がこもるかくらゐは、スグわかつた。女心の、流石に恥かしくも面はゆかつたと見え、浴衣の袂に面を掩ひながら、そゝくさ走り去つたが、まだそこらに漂よひ殘るお白粉の名殘香に、サリげなくはうち笑ひつゝも、好色の胸を將監は、ヒソかにときめかすことを、忘れはしなかつた。

「だが、巧く手に入れたものだな！」

「痩せても枯れても、武士は武士。昔取つた杵柄の冴えは、先づコレ

なものでございますわさ。ハッハッハ」

主膳の頭の中を、この時亡妻の四十九日の夜の淺ましい出來事が、幻のやうに掠め過ぎた。小間使のお小夜が、完全に彼の所有に歸したのは、その夜からのことである。

ヒソ／＼話が、それから半刻くらゐも、續いたであらう。だしぬけに

「お暇いたす」

將監はポッンと言つて、側の大刀を取上げた。

「途中、お氣を附けられますやう！」

主膳は後について、玄關口まで見送つて行つたが、將監は最後の會釋を交しとると、取出した覆面にハヤすつぽりと、面體を包んでしまつてゐる。

部屋へ立戻つた主膳は、ユッタリと胡坐をかくのだつた。なぜか、心の中が妙に重苦しいのが、彼の瞳をソゾロにした。

溜息を一つして、銀張りの長煙管を取上げる。指頭刻みを詰める指先が、心もち小きざみに顫えて見えた。

「エイッ！」

門前に當つて、だしぬけに激發した一喝の氣合！　覺えず主膳もハッとしたが、ニヤリ笑つたかと思ふと、不敵にも悠々と煙を輪に吹いてゐる。殺刄の渡り合ふ氣が、闃たる二十日闇を通して、陰々と傳はつて來た。やがて鋭い氣合と共に、タッといふ、水を打つやうな異様な物音！

「おッ！」

主膳が顏色を引きしめた時、そこから

「ム、無念！」

といふ、絶叫が聞えて來た。

チャリン！　鍔鳴りのしたのは、刀身を鞘に納めたシャウコである。

「へへへ！　重冨家も相變らず、血の氣が多すぎて困る！　殺めないで濟むことなれば、蚊の脛一本とて、折らぬに越すことは、ないのぢや」

幽かな悔の思ひが、なぜかこの時、油然と心に湧いて來た。

（ハテ！　何しに將監輩に與し、何しに太守のゴ一門に弓引く心には、成り居つたのだらう？）

考へても／＼、到底それは解けにくい謎だつた。

「惡魔に魅られたのぢやな！　イヤ、やはり生れぬ前からのお積りなのぢや！」

この考へ方が、いくらか彼の心の重荷を、かろめてくれるのは、事實であつた。だが、タカ／＼、それだけの事である。

茂久横死後の齊茂の心が、段々主膳から遠のいて行つたのが、主從の間に隔てが出來たソモ／＼の發端であつた。主膳は自ら、堅くさうとのみ信じてゐたが、只今心靜かに過去の生活を反省してみると、ソレもどうやら、まちがひのやうな氣がして來る。遠のいて行つたのは幼君ではなく、寧ろ自分自身の心のやうに思はれて來る。

「イヤ、まつたくそれにちがひない！　己れこそ僞もつ[illegible]の心痛さから、知らず〳〵幼君に隔てを置いてしまつたのぢや！」

彼の記憶の中に、自分の邪戀ゆゑに、齊茂の慧眼を憚たがりつゞけた、幾年の間の淺ましい月日が、まざ〳〵と甦つて來た。

「ウーン！」

と、彼は唸いた。自分のことは棚にあげて、大守の仕打を依怙呼はりし、左衛門觀にすら妬心を抱いて來たことの、淺ましさ、心はづかしさが、群蜂のやうに騷然と、彼の心を襲ひ刺すのである。ソレに、外ならぬお由井の心をまで、大守に叛かしたのも、責の一半は自分にあつた。若君兄妹の呪殺とても、ヨク〳〵考へ至れば、係り合ひなしとのみは、言へない義理である。

「どうしよう！　イヤ、すべてはモウ後の祭なんだ！——せめて、この皺腹を——フン、今さらそれが、何の役に立たう！　ウーン！」

新照院の九ツが、陰にこもつて、響いて來た。

六

「コレ、誰ぞ居らぬか」

秋草もやうを染出した涼しい絽蚊帳の中から、將監が呼んでゐる。寢ざめらしい。別府下屋敷の一間だ。

「お召しでございますか」

蚊帳の外に兩手を淑やかについた、高儲の美形は、將監の思ひ者藤枝である。

「藤枝ではないか」

「はい」

「入江は居るだらうな」

「はい」

「飯はもう濟んだらうな」

「はい」

「では、スグこゝへ來るやう、申してくれ」

「かしこまりました」

女は楚々として立去りかける。

「チョと待て」

「え？」

女は歩みを止めて振返つた。歌麿物の姿態である。將監は蚊帳の中に寢ころびながら、彼女の軀中の好もしい一つ〳〵の曲線の上に、昨夜の歡樂を恍惚と反芻しつゞけて、ニヤリとする。

「あのゴ用で、ございますか」

話がないので、伺つてみた。

「序でに、香を焚いてもらひたいな。それと、煙草火だ。オランダ火打がよいぞ」

「畏こまりました」

藤枝は襖を靜かに開けて、そこから何か取出してから女に淑やかに

つた。間もなく引返した彼女の手には、焚立ての香爐が青白い煙を渦まいてゐる。金蒔繪の香爐盤に載せて枕許ちかくに置くと、蚊帳の裾から頭を差入れて、オランダ火打を將監に渡してゐる。

「アレマ、厭でございますよ、ゴ前樣！　だつて――」

「叱ッ！」

「お止し遊ばしませつたら！　ホラ、入江樣が見えたぢやありませんか」

將監はその一語で、ウッかり女を放したらしい。スパしこく蚊帳の裾からぬけ出た藤枝は、オホホと可笑しそうに笑つた。

「きさま、だまし居つたな！」

「だつて、お殿樣が、ゴぜうだんばつかり、遊ばすんだもの！」

「ハッハッハッ！」

彼には彼女の、その子供々々した初々しさが、たまらなくいぢらしいのである。彼女は走り去つた。

彼女と殆んど入替りに、入江がは入つて來た。但し閾際から先きへは、進まない。

「だが、そこでは一寸具合が、惡いな！　ズイと近う參れ」

「ハッ！」

入江は蚊帳の裾ちかく、にじり寄る。うち見は、二十位の精悍な狀貌をした一野人。見所ありとあつて、領內の或藩士の三男を貰ひ受け、手塩にかけて來たのであるが、今では將監の股肱中唯一の賴もしい律義者であつた。

「よい體になつた！　立木打ちは毎朝缺かさず、續けあらうな」

「ハイ」

「氣合が大分、鋭く成つて來居つたぞ」

「恐れ入りまする」

「今朝のは後の方が、チト弛んだやうぢやな！」

「以後、シカと氣を附けますで、ござりませう！」

「そうしてくれ。シッカリ練つてくれ。だが、示現流くらゐ、積極的な刀法は、まづ無いね！」

「御意！」

用事も何も忘れて、[illegible]、將監は長々と[illegible]

「あのイ・奥醫の、良伯様お館で、ござりますか」

「さやう」

「は！」

「この手紙を、持ち參るのだがな！」

ソウ言つて、何時の間に認めてゐたのか、將監は 枕許から一通の手紙を取上げた。

「小机の上を見てくれ。狀箱がある筈ぢや」

「はッ！」

入江が恐るく、蚊帳の裾からソレを差入れると、將監はソレに手紙を入れて、型のやうに紐をかけた。

「ソレ！」

入江は 恭しく受取つて、次の語を待ちかまへる。

「取次の 者にはな！ 二之丸館からと、さやう申すのだぞ。よいか？」

「心得まして、ござりまする」

「ソレからな、町駕籠でよい。一挺雇つて持ち參るのだ」

「お語では、ござりますが――」

「館から町駕籠は、怪しいと申すか」

「ソレもでござりますが、乘物なれば先方にも、ソレぐ用意がござりませう！」

「それでは、此方が困るのだ！」

「――――？」

入江の惧れもそこにある。何の爲めのトリックか、よくはわからぬが、單に傷療治を受ける爲めなれば、外に屋敷附の醫師も居る。ワザワザ平素から虫の好かぬ良伯を、面倒な芝居まで打つて誘拐しようとするに就ては、ソコに何か、深い事情がなければならなかつた。解きかたい謎をでも、探るやうな眼で、彼がおづく額ごしに主人の面色を、盗んだ時、だしぬけに、カンラ、カラ、將監はうち笑ふのであつた。

「イヤ、心配は無用に致すがよい！ だから、ソノ爲めの今のその手紙ぢや」

將監は急に顏色を引きしめて

「その代りな、駕籠屋には豫め、シカと申聞けおくのだぞ！ 行先は下富屋敷とな。よいか？ 萬事によく氣を附けて、ぬかつては相成らぬぞ！」

「委細心得まして、ござりまする！」

ソレから彼れ此れ半刻ばかりたつと、良伯の姿は手もなく、將監の前に置かれてゐた。

「失禮の段々、將監より改めて深くお詫を致す。仔細は後に御意得たいが、差しづめ先づ、この傷のお手當、願ひたいのだ！」

白布で堅く縛つた右手を出して、將監は不敵にニッと笑ふ。新陰の家の門を出て、スグだつたが、片腹いたくも「上意」呼はりで、初太刀を斬付けた昨夜の曲者を思ひうかべると、愚かしい强り氣とは知る

ものゝ、太守齊彬への反感に、自然と尖り行く心を、ドウすることも出來なかつた。

「承知いたしました！」

最前からの不機嫌な面もちにも似ず、案外アッサリした良白の答へに、將監は

「ありがたい！」

と、氣がるに禮を述べる。

布をほどいて手當を施しながら、良白は潜かに目を輝やかしてゐた。

刀傷だな！　とは、一目でそれと分明したが、扨て、聞いてみたものか、默過したものかと、やゝこしい心の十字路に成つて來た。

「如何、爲されましたので？」

手當が濟んでしまつてから、良白が改まつて聞いてゐる。

「痴漢にやられたのぢや！　その代り左袈裟には、かけておいた！」

「えッ！」

良白はギヨッとして、相手を見た。

「外ではない！　齊彬殿を亡き者にして、もらひたいのぢや！」

「ヒエッ？」

「それがぢや。譬ひ島津の一門には列なるとは申せ、名分の上では臣下に當る將監である。弑逆の罪は重い！　だがのう良白、それぢやとて、某が私を計らうと申す譯では、ユメないのぢや」

良白は無言。唯ワナ〳〵と、激しい恐怖にうち顫えてゐるばかりだつた。

「こゝの道理を、トクと聞分けて貰はねば、相成らぬ。ソレは斯うい
ふ譯なのだ。今お國の大勢は、勤王佐幕の二派に分れてゐる。我等の藩中にもソレがある。大義名分は勤王派の標語だが、我等佐幕派に言はせれば、それこそ畢竟虫のよい口實なのぢや。昔周の文王は殷の社稷を亡ぼしながら、匹夫の紂を屠るのだと申せし由。疵もつ脛に膏薬が入るのは、今に始まつたことではない！　譜代の恩義を振捨てゝ名利に就くが大義名分なれば、世の中にこれほど容易い道はない、筈ぢ

すもの。ドウじや、少しは解つてくれたらうな？」

「は！」

良白はウカ〳〵と、口を滑らす外なかつた。

「王政復古など〻、御親政を强調する者もゐる。だが、古來天子の政を行はすは唯御垂拱ましませば足り、神聖な意味では只今とても、立派な御親政と言へる譯。執政に過失があれば、幕府に責を引かするまでのこと、何も一々異國の例に傚ふの要は、ない筈ぢや」

懸河の辯は滔々として盡きない。良白は時々自分の考へを述べて、反噬し、なか〳〵容易に甲を脫がなかつたが、最後にはトヾやり込められて、行詰つた。

「――――！」

「モハヤ、こゝらでよいだらう。早速返事を聞くことに致すから、シカと覺悟を決めてくれ！」

將監の一語は、迅雷的だつた。

「――――？」

「如何ぢや。應と申すか？　ソレとも、どこ〳〵までも、否と言ふ氣か？」

「――――？」

「だが、將監とても武人の禮は、聊か辨へある。强つてとは固より申さぬ。そちにはそちの自由か、ある筈だからな！　その代り前以て、コレだけはシカと申しておく。一旦大事をうち明けた上からは、否とあれば氣の毒ながら、ソノ場は立たせぬ所存なのだ！」

「――――！」

覺悟の前の事ではあるが、良白の顏は紙になつた。彼は顫えてゐるのである

「ワッハッハー！」

「イ、イ、致し方ござりませぬ！」

「忝けない！」

將監は奥に向つて、手を叩いた。

「酒肴の用意は、よいだらうな？」

膝枝が下手に畏まると、將監の語はソレだつた。（つゞく）

貞操問題

米田庄太郎

(一)現代文明國民に於ける貞操問題の眞相

近來男女道德の頽廢する傾向、益々顯著になりつゝあることは、歐米諸國に於ても一般に認められ、道德家や宗教家は切りに慨嘆して居るが、我國に於ても同樣な傾向は近來殊に著しく現はれて來たと云はれ、日々其の事實が新聞紙上に報道され、雜誌上に論議されて居る。そうして夫れが爲めに現代文明を詛ふ人々さへある。併し此處に注意す可きは、此の際特に非難されて居るのは、女性であることである。此の傾向は殊に我國に於て著しいと思はれる。今日我國に於ける男女道德の頽廢に就て、或は貞操の頽廢に就て、特に非難されて居るのは、主として或は全く女性であつて、男性は殆んど非難されて居ない。そうして又貞操と云へば、夫れは只女性の守る可き性的義務、或は只女性のみの修むべき特別な德であると、一般に[illegible]係に觸れる[illegible]

くに見做され、けば〱しき服裝をなし、ことさらに化粧を施す女給は切りに非難され、警察の取締りをさへ受けて居るが、併し妾を置くこと或は妾宅を持つことや、特別關係を有する藝者のあることは、實業家の間では一種の驕りとされて居ると云はれ、又カフエに出入して女給に接し、女給と特別關係を結ぶことは、決して道德的には非難されて居ない樣である。近頃我國の有力なる實業家の一部で、カフエーの取締りを大に强調する人々があるが、其の眞實なる動機として傳へられる處によれば、夫れは主として店員や會社員が、カフエーに出入して仕事を怠り、更に店や會社の金を使ひ込む危險を豫防する爲めであるとの事である。それは果して事實であるや否やは、私の敢て斷言し得ない事であるが、若し事實であるとすれば、[illegible]れるから、今日[illegible]

とか、貞操の觀念とか稱せられて居ることは、實際に於ては主として或は全く女性に就て云はれて居るので、男性に就て云はれて居るのではない。そうして此の事は男性の性的生活或は性的行動を、土俗學的或は民族學的並に歷史的に考察し、又傳來の貞操觀念の由來を考察すれば、明かに了解し得られる。

（二）男性の性的生活の民族學的及び歷史的考察

男性の性的生活或は性的行動の民族學的及び歷史的考察を、此處に事實に就て論述する暇はないから、只私が夫れによりて到着せる結論の一般を、極簡單に述ぶるに止めるが、今原始野蠻の時代から今日に至るまでの男性の性的生活を通觀すると、夫れは社會制度、宗教、倫理等によりて種々に制限され、少なくも形式上では決して自由に放任されて居ない。原始亂婚說は嘗て民族學者や社會學者の間に、汎く承認されて居たが、今日では之を承認する其等の學者の數は、大に減少したと思ふ。之れに反して原始時代に於ても、男女關係に就て何等かの一定の規制が存在せることを、認める學者は增加して居る。私も其の一人である。そうして文化の發達するにつれて、一般に性的純潔を固持する男性の數が、增大して居ると思ふ。併しかゝる男性は、生理的理由を除けは、特に倫理的又は宗教的修養に勉めて、性慾の發動を適當に抑制し得る境地に到達せる人々であつて、然らざる人々の性的生活は、一般に放縱であると思ふ。殊に貴族や富裕者の性的生活は、何れの文化國民に就て觀察するも、一般に放縱であることが發見される。そうして其の放縱が度を過ぐれば世人の非難を受けるが、或程度內に止まる以上は、別に非難が加へられない。更に中產階級の人々の間にありても同樣な傾向が認められ、又勞働者階級間にありてもやはり同樣な傾向が認められる。要するに古今東西を問はず、又文化發達の階級の高下を問はず、或は文化の差異如何を問はず、一般に男性の性的生活は大なり小なり放縱であつて、そうして夫れが一定の度を越えない以上は、一般に寬恕され、敢て非難が加へられて居ない。尙は此の傾向は種々なる形式の下で、一夫多妻制度が實際上認められて居る文明國に於ては云ふまでもなく、一夫一婦制の嚴守を強制する歐米諸國に於ても、同樣に存在するのである。

早く一夫一婦制度を確立し、且つ男女の性的純潔を大に強調する、歐米の基督教的諸國に於ても、男性の性的生活が、一般に實際上如何程まで放縱であつたかは、歷史によりて殊に風俗史や淫賣の歷史によりて、更に世態人情を深刻に描寫せる文藝作品によりて、明かに學ぶことが出來る。例へば改造社出版の世界大衆文學全集中の「椿姬」や、其の他の作品に就てその中に描寫されて居る事から推察すれば、歐米に於ける男性の性的生活が、一般的に如何に放縱であつたかは明かに覺られる。男性の性的生活が、比較的に純潔であるが如くに云はれて居る英國民に關しても、オスカー・ワイルドの作品などを見れば、一夫一婦を嚴守し、貞操を尊重することが、上流社會の靑年間に於ては、中等

等社會の凡俗道德として蔑視されて居ることが擧ばれる。そうして世界大戰爭後の今日の歐米諸國の男女道德が、如何なる狀態にあるかは、其の地に遊べる我國の人々の熟知する處であり、又我國の新聞や雜誌に於て、時々報道されてゐることによりて推察される。

私が二十七八年前佛國パリの下宿屋で、かなり親しく交はつて居た隣室の大學院學生に對して、或日現國民の性的道德の一般的頹廢を云々した時、「夫れは君は頹廢の概念の意味をよく理解しないからである。總て頹廢とはより善き狀態からより惡い狀態にに移ることを云ふのである。されば今日の佛國民の性的道德が頹廢して居ると云ふことは、つまり今日以前には佛國民の性的道德が、より善き狀態に在つたことを前提して、始めて意味を有するのである、併し君はかゝる前提が眞實であることを佛國の歷史によりて果して證明し得るか、佛國民の性的道德が、一般的に今日よりも、より善き狀態にあつた時代は、果して存在するか」と、皮肉に論じまくられて、大笑したことがある。

要するに、形式的には、貞操は男性に對しても要求される、性的道德上の義務であるが、併し

居る。然らば此の如く貞操を守らぬ女性は不倫者として指彈され、共に齒することを快としないものとしてまで擯斥されて居るに反して、貞操を守らぬ男性は別段に非難されず、時には發展家として賞められ、道學者も快しとして喜んで共に齒するのみならず、若しかゝる男性が政界又は財界に於ける有力者である場合には、嚴しき道學者が其の人に接するを譽とし驕りとし、更に其の人の德を賞揚する傳記までも書くと云ふが如き貞操觀念は、如何にして發達したか。

（三）傳來の貞操觀念の由來

傳來の貞操觀念の始源を、民族學的に深く研究して行くと、結局男性が女性を、即ち夫が妻を、財產として所有すると云ふことに、歸着すると思はれる。殊に妻を娶る爲めには、比較的に多大な勤勞又は財物を、妻となる女性の親に呈供せねばならない風習が行はれるに至つて、妻を財產視する思想は、益々强まつたと思はれる。かゝる風習の行はれる社會にありては、妻を娶ると云ふことは、つまり女性を購入することを意味するので、かくて夫は妻を財產視し、他の財產に對する

くしては他人は之を使用するを得ないと云ふ意味にて、先づ妻たる女性の守る可き、又强制される義務として、貞操の觀念は發生したものと思はれる。然るに父系族譜法が發達し、家督及び財産は總て父系の子孫に傳へられると云ふ風習、及び血統を尊重する風習が發達するにつれて、妻が貞操を守ること、卽ち夫以外の男性と通じないと云ふことは、社會的に甚だ重要視されるに至り、妻の守る可き最も重大なる一の義務として貞操の觀念は、事實上益々確立されて來たのである。尙ほ同一の思想は妻となる以前の女性の性的狀態にまで適用され、未婚女性の性的純潔が尊重され、又强制されるに至つた。かくて貞操觀念の範圍が擴張され、夫れは啻に妻たる女性が、夫以外の男性と通じないことを意味するのみならず、更に未婚時代に於ても、全く男性と通じないで、性的純潔を守ることをも、意味するに至つたのである。

然るに文化の發達するにつれて、女性の貞操に對して、宗教的又倫理的に重大なる精神的意義が認められ、且つ其の精神的意義が益々强調されて來た。そして貞操は女性の最とも重要なる精神的德として、最とも根本的な婦德として、幼時より深く女性に敎へ込まる可きものと考へられ、貞操を守る女性は大に讃賞され、殊に身を殺しても貞操を守るが如き女性は、婦人の鑑として欽崇されるに至つた。

併し貞操は女性に於て、さほど重大なる精神的意義を有するものならば、同じく人間たる男性に於ても、同樣に重大なる精神的意義を有す可きである。しかも前節に於て述べし處によりて察知される如く、今日文化の最とも進步せる國民間にありても、男性に於ては貞操は實際上さほど重要視されて居ない。貞操を守らない女性が不倫者として指彈される如くに、貞操を守らない男性は非難されず、貞操を守らない娼妓や女給が擯斥される如くに、彼等と戯れて自己の性的純潔を汚す男性は、敢て擯斥されて居ない。されば貞操は如何に精神化され理想化されて、人生に於ける重大なる倫理的德として崇められるとも、夫れは只女性に限りて要求され、强制されるものである以上は、結局貞操は男性が女性を支配し、之を束縛する、一種の巧妙精微なる手段に外ならぬと解し得られる。かくて婦人解放論者中、傳來の貞操觀念を男性が女性に加へる束縛として、排斥せんとするもののあるは、敢て怪むに足らない。

(四) 女性解放と傳來の貞操觀念

却說傳來の貞操觀念の眞相は、以上述べしが如きものであるとすれば、現代文明國に於て見るが如くに、女性が敎育され、自覺し、解放され、社會生活のあらゆる方面に於て、自由を獲得するに至つては、男性から如何に賞揚されるとも、かゝる貞操を嚴守するを好まない傾向の現はれてくるのは、敢て怪むに足らないかと思はれる。此の際傳來の貞操を守らない女性が多少現はれてくるも、夫れは寧ろ文化發達の過渡期的一現象、避け得られぬ必然的一災厄、進步の爲めに拂ふ可き一の代價であるとして諦め、そうして一日も早く眞實なる貞操觀念を

發達させ、又實現させる爲めに、專ら力を注ぐのには、眞の識者の任務ではあるまいか。今日我國に於ても傳來の貞操を守らない女性が多少現はれたとて、大に慨嘆し、之を不倫者として指彈しても何んの益もないことである。如何に舊式の道學者が慨嘆し、指彈したればとて、今日の解放されつゝある我國の新しき女性に傳來の貞操觀念を甘んじて遵奉させると云ふことは、甚だ困難であると思はれる。かゝる道學者が新しき女性を指彈する以上に、新しき女性はかゝる道學者を指彈して居る。

今日歐米諸國に於て、傳來の貞操を守らない女性が續々現はれ、貞操は大に頽廢して居ると云はれて居るが、併し實際に於ては、尙ほ多數の女性は甘んじて傳來の貞操を嚴守して居るのである。況んや我國に於ては、尙ほ大多數の女性は舊式の女性道德を守る人々であり、又新しき女性にありても、敢て傳來の貞操を破らんとする人々は、比較的に小數である。只其の小數者の行動が、新聞雜誌に盛んに書き立てられるが爲めに、大に世人の注意を惹き、そうしてかゝる女性が、非常に增加しつゝあるが如き印象を世人に與へるに過ぎないと思はれる。

尙ほ特に今日の我國の貞操問題を論究するに當つて、吾人の注意せねばならぬものがある。それは我國の結婚法である。私は大正十二年に公にせる拙著「戀愛と人間愛」中に述べし如く、[illegible]

を刪除して[illegible]

は認めないが、しかも最とも重要なる條件と認め、只戀愛のみによりて又只戀愛を滿足させることのみを目的として、結婚するは、危險であると考へると同時に、戀愛なしに結婚することも、亦危險であると考へる。蓋し只戀愛のみによりて、又戀愛を滿足させることのみを目的として結婚するは、危險であると云ふは、婚姻生活、夫婦生活は只戀愛を滿足させるが爲めにのみ存立し、存續するものでなく、夫れ以上の文化的人類的任務を盡くす爲めに存立し、存續するものであるからである。かくて夫婦生活にありては、戀愛は夫れ以上の文化的任務によりて、化成されねばならぬ。そうして私は其の儘の戀愛でなく、右の如くに化成されたる愛を夫婦愛と云ふので、此の夫婦愛が發達しない以上は、夫婦生活は到底滿足に營まれるものでないと考へる。かくて只戀愛を滿足させることのみを目的として結婚する人々にありては、「結婚は戀愛の墓場となる」のである。されば只戀愛を享樂することのみを目的とする人々は、決して結婚す可きでないと思ふ。しかも夫婦愛は右に述べし如く、戀愛以上の文化的人類的任務によりて化成されたる後であるので、其の儘の戀愛ではないが、併し戀愛なくして成立し得るものでない。かくて戀愛なくして結婚することは、夫婦愛の發達す可き基礎を缺いて居るので、圓滿なる夫婦生活を營む爲めには危險である。但し戀愛なくして結婚するが、[illegible]

危險であるとは云ひ得られない。しかも戀愛なくして成立せる結婚が、圓滿なる夫婦生活を發達させ得ない危險を、多分に含んで居ることは、爭はれないと思ふ。

然るに今日に於ても、尚ほ一般に我國で行はれて居る結婚法にありては、當人の戀愛感情よりは、夫れ以外の種々なる社會的事項が一層重要視され、そうして父兄によりて勸められ、更に强要される場合が多い。尚ほかゝる場合は殊に女性に對して多いと思はれる。併しかゝる結婚法には、夫婦愛の發達し得ない恐れが、多分に含まれて居るので、私は危險な結婚法であると思ふ。しかも今日でも、我國の結婚は實際上一般にかゝる方法によりて成立して居るとすると、かゝる方法によりて結婚せる新しき女性即ち新しき教育を受けて自覺せる女性にありては、現在の結婚生活を苦痛として、新しき結婚生活を求める傾向は起り易い。併しさきに述べし如く、結婚したる後に戀愛するに至る場合もあれば、又子の愛の爲めには戀愛を犧牲にすることを、敢て苦痛としない女性もあり、更に子の愛を通じて夫を愛するに至る女性もある。尚ほ全く諦めて仕舞ふ女性も多い。かくて一見して恐れられるが如く、實際上婚姻生活の破壞は起らないのである。併し種々の事情によりて、到底現在の婚姻生活の苦痛に堪へ得ない女性もあり得る。そうしてかゝる女性が、眞の愛人を見出すに至らば、敢て傳來の貞操觀念を破つて、新しき婚姻生活を求めるに至るかも知れない。隨つて今日では、かゝる女性はまだ稀れであるとしても、今日の一般の結婚法が尚ほ持續されるに於ては、將來かゝる女性は續々現はれる恐れが多い。されば今日我國の女性の貞操問題を考究する人々の先づ注目す可きは、結婚法の改良である。併し又タトヒ結婚法が改良されても、貞操は只女性にのみ强制さる可き性的道徳であると見る、傳來の貞操觀念が固持される以上は、今日歐米諸國に於て見るが如く、貞操を破る女性の續々現はれてくることは、自然の傾向であると思はれる。かくて貞操問題の最根本問題は、つまり新しき女性をして能働的に守らさせるが如き貞操觀念、即ち新しき女性が充分に是認して、自から進んで守るが如き貞操觀念を、確立することであらねばならぬ。然らばかゝる貞操觀念は、如何にして確立さる可きか。

(五) 眞實なる貞操觀念と性的道徳一元主義

私は上に述べし處によりて察知される如く、傳來の貞操觀念を排斥するものである。併し決して貞操其物を排斥するのではない。否な貞操を以て性的道徳の理想或は規範と見るものである。そうして私が性的道徳の理想或は規範と見る貞操觀念も、實質的には傳來の貞操觀念と毫も異ならないものである。即ち夫れはヤハリ結婚前の性的純潔、及び結婚後の夫婦外性的關係の絶無を意味するものである。併し私は傳來の貞操觀念の如く、貞操は只女性のみの守る可き性的道徳の原理と見るのでなく、男女共に嚴守す可き性的道徳の理想或は規範と見るのである。要するに私は私が嘗て歐米諸國に遊學して居た當時十九世紀の末

り頃、當時婦人解放論者の一部分で、盛んに主張されて居た性的道德一元主義を是認し、性的道德は決して二元的なものでなく、卽ち男性の守る性的道德と、女性の守る性的道德とは相異なる可きものでなく、一元的なものである可きである、男女共に同一の性的道德を守る可きであると、考へるのである。

傳來の貞操觀念の如く、貞操は只女性のみの嚴守す可きものと見るに於ては、貞操觀念其物が如何に高尙な精神的なものであつても、實際上では結局男性が女性を壓迫し、女性を束縛する一手段、男性が女性を專制的に支配する一手段となつて仕舞ふ。かくて自覺せる新しき女性、男性の支配を脫して同權を要求する新しき女性が、貞操觀念をも排斥せんとするに至るは、當然であるとも云ひ得られる。併し貞操は決して只女性のみの嚴守す可き性的道德の原則ではなく男女共に嚴守す可き性的道德の理想或は規範であると解するに於ては、貞操は全人類的全人間的文化理想となるので、女性が之を排斥する理由は毫も存しない。若しかゝる貞操觀念をも排斥する女性があるとすれば、かゝる女性こそ眞に墮落せる女性である、否な墮落せる人間である、不倫者である。

今日女性の貞操の頽廢

辯護するに於ては、男性が之を非難する理由は甚だ薄弱である。そして女性の貞操の頽廢に對しては、男性は大に其の責を負はねばならぬ。要するに新しき女性の貞操の頽廢を防ぎ、新しき女性をして貞操を嚴守させる最根本的方法は、性的道德一元主義を確立し、貞操は男女共に嚴守す可き、高等なる全人類的全人間的文化理想であると見る、新しき貞操觀念を發達させ、男性が女性と共に貞操を嚴守す可く努力し、精進することに外ならぬ。女性の貞操の頽廢を非難し、慨嘆する前に、男性自から大に反省す可きである。

（六）男性の貞操嚴守の困難＝性的好新性

併し性的道德一元主義の實行、新貞操觀念の實現に就ては、重大なる問題がある。夫れは男性は果して貞操を嚴守し得るかと云ふ問題である。さきに述べし如く男性の性的生活は、民族學的に見るも乃歷史的に見るも、殊に歷史的に見れば、一般的に常に大なり小なり放縱であつた。そうして今日に於ても大體上同様である。或は全體から見れば、より多く惡化して居る、

あると論じて居る。兩說は只言葉が異なつて居るだけで、實質的には同じ意味を有するものである。そうして私は性的行動に於て新しき對象を求める傾向を、假りに性的好新性と稱して居る。

性的好新性の生理的基礎に就ては、私自身は研究して居ない、又夫れに關する詳しき生理學的研究も見當らない。そうして私は其の生理的基礎の存在を敢て疑はないが、併し性的好新性其物は、純粹なる生理的なものでなく、主として生理的心理的なものであり、且つ其の强さや發動の頻度は、物質的及び社會的圍境、殊に社會的圍境の影響によりて決定されること、大なるものと思ふ。併し私は此處で性的好新性に關する科學的研究を述べる暇はなく、又其のつもりもないから、只歷史上に於ける又今日の男性の性的生活が、一般的に見れば、大なり小なり放縱的である事實を說明する、一の作業假說として、性的好新性を擧げるだけに止める。但し私は性的好新性は男性特有の性向であるとは認めない。是れ歷史上に於ても亦今日に於ても、淫婦なるものの存在することによりて察知される。そうして性的好新性の强さ及び發動の頻度は、男女を問はず最とも多く社會的圍境の影響によりて、決定されるものと見る。又同一の理由によりて、歷史上又今日に於ても、男性の性的好新性が一般に强く、且つ其の頻度の大なる所以が、了解されると思ふ。

今男性の性的好新性の强いこと、及び其の頻度の大なることは、タトヒ本來男性の具有する特性ではないとしても、とにかく長い年月を通じて歷史的に養成され、固められたる深奧な傾向であるから、今日に於ては殆んど一種の本能の如きものとなつて居ると思はれる。かくて今日男性をして、一般的に其の性的好新性を全然抑壓させ、貞操を嚴守させると云ふことは非常に困難である。併し宗教的又は倫理的教養、汎く云へば文化的教養によりて、其の事を實行せる男性が、歷史上少なくなく、又今日の文化國に於ては、絕對數から見れば一層多く存して居ると思はれるから、困難は困難であつても、決して不可能なものではないと、私は確信して居る。そうして男性が一般に性的好新性を全然抑壓し、貞操を嚴守するに至らば、今日世界的に益々重大視されて來た公娼私娼問題も、亦我國で新たに起り來れるカフエー女給問題も、全く消滅して仕舞ふか、又は大した問題ではなくなると思はれる。

公娼を設けなければ、私娼が大に跋扈することは、英米等の實例によりて明白であるが、併し公娼を設けたればとて、私娼はなくなるものでないことも、佛獨等の實例によりて明白である。そうして淫蕩の弊害は、公娼制度を行なふか私娼制度を行なふかに拘らず、同等に大なるものであることは、英米と佛獨とを比較して見れば明白である。されば公娼を廢したればとて淫蕩は消滅するものでない。そうして淫蕩を消滅させる根本手段は新貞操觀念を確立して、男性をして貞操を嚴守させることより外にない。女給問題に就ても同樣である。

以上述べし處によりて考ふれば、男性が貞操を嚴守するや否やに

ふことは、人類文化の將來の盛衰に關して、如何に重大なる意義を有するかは、明かに了解されると思ふ。新しき女性がよく貞操を守るや否やと云ふことは、人類文化の將來に對して、直接及び間接に如何に重大なる意義を有するかを考へ見よ。又其の名稱は如何にあらうとも、とにかく淫賣婦の存在することは、ヤハリ直接及び間接に、現在の文化に對して、更に將來の文化に對して、如何に深大なる影響を及ぼすかを考へ見よ。そうして新しき女性が貞操を守るや否やは、主として男性も貞操を守るや否やによりて決定され、又あらゆる種類の淫賣婦は、つまり男性が貞操を守らないが爲めに起り、又存續するものなるを考ふれば、男性が性的好新性を抑壓し、貞操を守ると云ふことは、實に人類文化の將來に對して、甚深甚大なる意義を有することは明白である。

(七) 理想としての貞操觀念

男性が貞操を守ると云ふことが、人類文化の發達に對して、如何に甚深甚大な意義を有するかは、上に述べし處によりて察知されると思ふが、又長い年月を經て歴史的に固まれる、現在の男性の性的生活から考へて、男性が一般的に貞操を

出産制限問題が起つてくる。併し私は此處に此等の問題を論ずる暇はないから、又私自身はかゝる純生理學的問題を、自信を以て論ずるだけの生理學的知識を有しないから、敢て之れに觸れずに置く。そうして男女共に貞操を嚴守すると云ふことが、今後性的道德の理想として確立さる可きものであると見る私の見解の意味を、尙ほ少しく辯明して以て本論文を完結したいと思ふ。

眞實な意味にて理想と云ふは、全然實現し得られない思想を意味するのでない。かゝる思想は空想或は妄想にして理想でない。されば て完全に實現されて居る思想も理想でない。更に直ちに完全に實現し得られる思想も理想でない。尙ほ他日完全に實現され得ると考へられる思想も、ヤハリ理想でない。眞實なる意味にて云ふ理想とは、つまり吾人の奮勵努力によつて漸次に實現され行き、吾人は其の完全なる實現に近づき行くが、しかも完全には實現され得ない思想、約言すれば吾人が完全に實現し得ないが、しかも其の完全なる實現に、無限に近づき得る思想である。要するに高等數學に於て、極限と稱せられるが如きものである。そうして私は理想と、
貞操

ふことは、決して理想としての理想の價値を傷けるものでない。否な完全には實現され得ないが、しかも吾人は無限に其の完全なる實現に近づき得ると云ふ點に、理想としての理想の眞義が認められるのである。要するに男性が貞操を守ると云ふことは、如何に困難であらうとも、比較的には小數であるが既に之を實現して居る男性があり、又文化的教養を高め强めることによつて、益々かゝる男性が增加し行くことが考へ得られる。かくて吾人は社會全體を通じて、男女共に貞操を守ると云ふ社會に、無限に近づき得るのである。私が貞操は男女共に嚴守す可き、性的道德の理想として、確立さる可きものであると云ふのは、以上述べしが如き意味に於てゞある。

私は七八年前から健康の爲め、又社會學體系の建設及び社會學史の著述に、專ら力を注がんが爲め、新聞や一般雜誌の寄稿の依頼を一切斷つて居るのであるが、然るに過日或大新聞の週刊に、貞操問題に關する私の「談」として掲載されて居たものは、實際に私が同問題に就て考へて居ることと、餘程異なれるの如き印象を、讀者に與へる恐れがあると思ふが、私はかゝる實際的な問題に關して、私の意見が世間に誤傳されるのを好まないから、改めて同問題に關する私の意見の大要を、通俗的に論述する一文を草し、本雜誌の一隅をかりて、之を發表することとしたのである。（昭和四、八、二二）

超現實主義の詩論

春山行夫

我々は今日酋長等と猪狩りに行き、洞窟で篝を焚いて獲物を祝福しない。我々の詩が自然發生の歌謠に袂別する理由である。自然發生の詩は歴史の中にあるにすぎない。

歌謠と分離した詩は一方意味の發達に從つて、文字に固定する文學性を確立し、他方韻文法則の發達に從つて、言語の音樂性を確立した。發達といふのは、藝術的、或ひは技術的な知性の發達を指す。

歌謠は即ちそれを構成する二つの部面の發達に從つて、各々その特徴に立つ二つの藝術に分離した。一つは韻文藝術であり、一つは散文藝術である。この二つの藝術

想像の才能による創造力の自由な作爲を目的とするものであり、自然主義は「一つの事物を一つの言葉」(フロオベル)に局限する現實の再現であり、滲透であるところの人生の把握を目的とする。この目的的に背馳した二つの藝術が、性質的に呼ばれると、一、自然主義或ひは現實主義であり、二、超自然主義或ひは超現實主義である。

*

すぐれた象徴主義の詩は從つて何等直接の意味によらないでレアリテ(現實)を創造する。象徴主義とは、「呪禁の如き」(ア

超現實主義はポエジイの問題に屬するメタフイジックな精神活動である。

*

超現實主義の詩は、純粹の現實、或ひは絶對の現實を發見するポエジイの二三の應用にすぎない。その傾向は大體次の如くである。

1　秩序ある世界はより高い、より廣い現實の世界である。純粹なる象徴主義の如し。

2　精神に關係のない世界は永遠の現實の世界である。物理的メカニズムの如し。

3　理性並びに現實の制限する現實は絶對の現實に非ず。從つて現實の破壞は超現實主義的精神に一致す。、、、、、、、、、し。

(1)は現實に關係し、(2)(3)は(1)に反對し、更に精神を用ひると否とに於て、

名投手列傳

春日俊吉

乍憚一寸口上

あまり遠くない過去、それから現在、そしてこれは洋々として盡きる所のない未來、を通じ、わが日本の野球界から十人の名投手をピック・アップして來て、その銘々傳を書いて見ろ、と云ふ課題は、甚だしく近頃の私の頭を惱ました。私の眼の前には、とても十名どころの小人數ではない。二倍、いや、少くともその三倍位ゐは、右利き、左利き、長身、短軀、緩球、強肩、上手投げ、下手投げ、色さまざまな名投手達の、鮮やかなプレート捌きがチラついてならぬ。

辛うじて、或る場合は心を鬼にして、漸く選び終つたのが以下の十名投手であるが、これも、彼がいつどの試合に、何個の三振を取つて、何對〇で勝つたとか、彼の武器がカーブか、コントロールか、などゝ、一々コマかく書いた所で、それが大した智慧のある仕事とも思へない。私はその『名投手』の内容に、素質、技能、頭腦は勿論のこと、その人の持つてゐる大衆價値、つまり一般の人氣をも加へて採點した。それからもう一つは、投手としての『神經』を、格別に重要視した事である。その選手が投手として成功するか、しないかは、技術や熟練よりも、私は寧ろその人の『神經の作用如何』にあると思ふ。

小野三千麿君

珍らしや、神奈川縣立師範學校、つまり鎌倉師範の出身で、夙に大器を内外に認められ、横濱の平沼代議士あたりが奔走して、師範から三田へ引拔かれた人物。師範學校へ入學したのも、お父さんが鎌倉を中心に、引續き最近まで小學校の校長先生であつたからに外ならない。アメリカ流に呼んでミッチー・オノ。その長男であつて、明治三十年の生れだから、とつて三十三歳。干支はひのと酉。九星は四緑。山下火とおいでになる。

最近の球界に、とにかくこの人ほど大衆の人氣もあり、技も冴え、神經系統も投手にふさはしく出來あがつてゐた選手はちよつとない。早慶戰の中絶で、永く後世に傳へられる大試合の好記録も殘さなかつたが、全盛時のこの人と來たら、大下、河合あたりの名門大打者が、大方三球、乃至は四球を出でずして、アッサリと料理されてゐた。カーブによく、あの堂々たる體格だから充分の球速は有り、その上絶倫のコントロールを持つてゐた。今だつて三日位ゐ、ブッ續けにビールを

飲んだ不眠の後でも、プレートへ立つて球を握らせたら、駈け出しの一流投手など遠く及ぶまい。

岩瀬五郎君

舊姓谷口、釜山商業の出身、いまは大連の岩瀬家の秘藏婿。キリ、と引しまつた顏の、旗本の三男と云つた風貌もあるが、神經の線は極めて太く、鋭く、いさゝか峻烈にも近い。外見とは正反對な、無類の負けず嫌ひであつて、試合中にも神經が昂ぶつて來ると、顏色やゝ蒼白となり、唇などピリピリと痙攣する。比較しては可笑しからうが、先年明治の中津川投手が思はぬ好投をして、早稲田を大敗させたとき、同君は戰友に擁されて嬉しさに號泣した。が、わが谷口君はその昔、無名の一田舍投手から、一躍早稲田の救ひ神となつて明治を零敗させたとき、冷然として

か大陸的な、陽性な一面に對して、多少陰性投手の氣味もあるが、陰性もこの位ゐ徹底すれば却つて痛快味が増す。ちよつと見ると華車な體格の様だが、裸體になつた姿は實によく均勢の取れた、充分男性的な筋骨を有つてゐる。それでなくては、内外角を突く得意の速球と、殆んど變らぬスピードを有する彼のインドロが、今もつて昔の精彩を失はぬ筈がない。

竹内愛一君

小野、谷口の頃の時代を承はる名投手には、まだ君のほかに明治の湯淺、少し下つて慶應の永井、濱崎、人氣の點では以上三君の上位にあつた帝大の東など、誠に忘れ得ぬ顏ぶれもあるが、私が特に愛一、竹内君をこゝに拉し來つて理由は、君の持つ不思議な存在

き神經」があつた。君はその神經で、人を喰つた度胸一つで、群小一流投手を後へに從へ、早慶復活戰の連勝投手となつた。

京都一商の産。大正十年の鳴尾の大會には、高木、田島時代の慶普を負かし、藤本、森時代の松山商業をも破り、大連商業に十四對四で大勝し乍ら、足を傷けて優勝戰には出場出來ず、北島、井口時代の和中に大敗した。招かれて早稲田に入り、名手谷口卒業の後を引受け、あの呑氣屋が暫らくカンカンになつて猛練習をした。其うちに持前の糞度胸は益々圖太くなり、相手が强打者だらうが、へボだらうが更に頓着はなく、こいつ打たないなと覺つたら本壘のまん中へ投り込み、打ち氣な打者には決してストライクを投げず、遂に大早稲田を一時盤石の上に置いて終つ

閲歴の投手である。竹内君も、不幸にして晩節を全ふせず、早稲田を去つたが、彼は彼一流の朗らかな性格から、あはゝと笑つて濟ませられた。然しわが中村君の場合は、そうは行かない。いまのまゝ、彼が明治のマウンドを去るとすれば、甚だ濁つた印象があとへ殘る。中村君には愛嬌はないが、直情、徑行がある。山口縣德山中學の産。相當富める商家の出。兄弟もたしか男一人で姉妹が二人。甘やかされて生長したせいか、まだ他の選手ほど人間としての苦勞が足りない。

だが、野球では人一倍、激しい苦勞を味はつてゐる。中學三年のとき、山口の高等學校との試合に、九回のゲームで十九の三振を取つた、と云ふ華やかなスタートはきつたが、大豪湯淺君無きあとの明治を、殆んど一人で脊負つて立たせられて、涙の滲む猛練習に身を細らせた。おそらくこの二三年の明治が、リーグであれだけの名聲を馳せたのは、全く君の右腕一本の爲であつたと云つていゝ。神經の線も、少し荒いが細くはない。五尺八寸の巨軀で繰り出す速球と、駿河のようなアウドロにかゝつて、切歯扼腕しない打者は、最近のリーグに一人もゐなかつた。とかくの非難はあつても、現在の六大學リーグでは、不動の實力を持つ第一人者と云はねばならぬ。

宮武三郎君

快男兒である。『塾の宮武』ばかりでなく、わが球界を通じての人氣者である。性格が明るくて、朗らかで、屈托がない。五尺九寸二分、二十貫二百匁、第一、人間を見てゐてさへ氣持がいゝ。神經は、身體の割には少々弱そうな點も見えるが、それはあの豐富な天分が充分これを補ふだらう。おそらく投手として、この人ほど怖るべき打撃力を持つた選手は、開闢以來ないかも知れぬ。いつかなど、この人の打つたゴロが、遊撃の正面へ轉んで行つたのに、餘りの速力でさすが明治の林君でさへ捕りきれず、グラブをハジいて左翼の邪線外に飛び出して、そのまゝ内野ゴロの二壘打となつた例さへある。

元は高松工業の一生徒で、しかも閲歴投手と鋼彈の中學記錄を持つてゐた。それが商業に懇望されて轉學し、忽ち野球部の投手となり、甲子園の大會に優勝した。慶應へは入るとすぐ、投手でも一壘手で、五番以下の打順に置かれたためしはない。が、まだまだピッチングは未製品、余程苦勞をしなくては、先人小野の名は壓せない。とつて二十二。二黒のさる年。さりとはデカイお猿さんである。

小川正太郎君

三田の宮武、早稲田の小川と對比されて、全國ファンの血を沸かせる大立物。若いだけに人氣の點では小川君が一寸うは手らしい。宮武君の陽性に對して、再び小野、谷口の昔と等しく、小川君はいさゝか陰性にも見える。が、これは性格、境遇いろんな點の表はれだから仕方がない。身長に變りはないが、體重には三貫目以上の開きがある。しかし、投手としての修業年間、つまり年期の入れ方では小川君の方がずつと長い。少年野球時代

から勘定をすれば、小川君の投手生活は、ほぼ十年にも近からう。

神經は、これは、宮武君にも一籌を輸すかも知れぬ。甚だ氣の弱い若者である。しかし天分は、素質は、おそらく現在の若い投手團中、順當に行けばこれだけの人は居なくはないか。伊丹君でも卒業されるとちよつと困るが、そこは豐富な天分と、長い經驗とで、うまく帳尻を合せるだらう。氣障はれるのは、たゞこの人の健康のみ。

水原茂君

若冠二十一歳にして、昔の竹内投手にも劣らぬ、人を喰つた大膽無双の一投手が、持駒揃へな三田の臺所に現はれた。水原君である。ピンチに襲はれようが、老巧打者に面接しようが、悠々として眉毛一つ動かさない。カーンと一つ打たれても、ほ、打ちやがつたな、位ゐの氣持で、微笑と共に次打者の討取り策にとりかゝる。頭から茶化してゐるような好球を、プレートのまん中へ投げ込む。少し腹を立てゝ、打ち氣にでも出ようものなら、どつこい、金輪際打ちいゝ球は投げて來ない。

怖るべき不敵の若者である。慶應はこの前もそのまた前も、表看板の宮武君が打たれて、ゲームをイビツにしてから、水原君が代つてちよこちよこと誤魔化した。正に、神經では滿點の年少投手である。あまり賞めちぎると、プレートの上でニヤニヤ笑ふ惡癖でも連發しては困るから、一本クサビを打つて置くが、あれで若し、引續き早明の名打者達を、鼻の先であしらふ藝當が出來たら、日本の野球史には、またこゝに不思議な一存在を殘すことになるだらう。

碣石俊夫君

六づかしい名前だが、たゞ、い

雖の後を追つて、三田の陣營に巨軀を出現させるだらう。中學生でも、巨軀と呼ぶに差支へはない。五尺八寸、十九貫五百目。投げるのは右だが、打つには左り。その打力も、までに超中學級と云はれること二年。三田はまたこゝに、物凄いスラッガーを迎へる事になる。腰本君萬歳である。

水原、井川君時代に、高松が再度甲子園で覇業を成したとき、碣石君は一塁手として、七番を打つてゐた。その二投手が拔けたあと、すぐプレートを襲つて、一人よく打つたが松山に破れ、一度甲子園を休場した。この夏は思はぬ内外野の凡失で、充分の技倆を示しつつも海草に惜敗したが、大投手の風格は前后三回の試合で立派に、識者の腦裡へ印象づけた。態度もいゝ。スピードもある。制球力にも事缺かぬ。

京谷榮治君

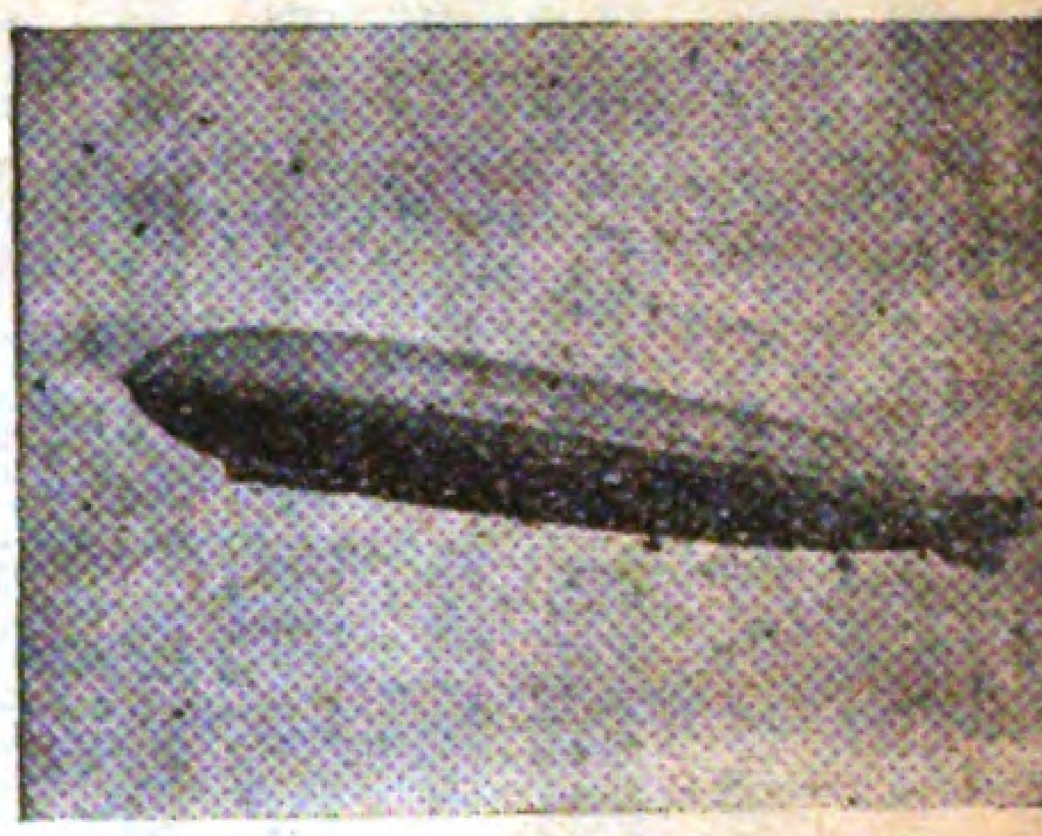
贔屓目に見れば、『俊秀雲の如し』とも云へるし、高飛車に酷評すれば、『團栗の背比べ』とも云へる、いまの中學野球界から、三人の良投手をピック・アップする事は、とにかく普通の神經を有つ者にとつては全く、無謀に近い。辛うじて、高松の砥石君を一人とつた。おあとの二人は、殆んど評者の『好み』にも陥ちようが、まづ小型乍ら非常にうまみのある投手を一人。それから未製品ながら、豐富な素質に惠まれてゐそうな投手を一人、心を鬼にして選拔する外はあるまいと思ふ。

この小型投手のうちには、過去の濱崎、水原君の樣な投手が、當然豫想されねばならぬ。そこで、私の面前に起つ一少年。京谷榮治君。山陰鳥取一中の齒。まだ紅顏、十八才の少年である。小島（現同志社）宮脇（現早大）バッテリーなきあと、彼は三壘からプレートを受次いだ。去年はよく投げ乍ら、梶原、高橋時代の高松中學に破れたが、今年は大風後の惡コンディションにあり乍ら、絕妙に近い制球力を以つて、秋田師範を二安打で零敗、敦賀に四安打で一點、市岡を四安打で零敗させ、廣商には六安打、五點を許して敗退した。一軍中での秀才で、神經もまた優等。廣商との準決勝戰に、味方の失策から一擧四點を與へても、なほ莞爾として、興奮する戰士たちを慰めてゐた。

山下好一君

甲子園の大會に、第一回以來オール出場の記錄を持つてゐた和中が、今年始めてそのパアフェクト・レコードを傷つけた。小川正太郎君卒業のあとに、和中のプレートを襲つたのが、三年坊主、十七歳の山下好一君である。三年生、十七歳と云つても、身體を見ては輕蔑出來ない。山下君はすでに五尺八寸、十九貫二百。小川君などより、遙かに內容豐富な巨軀を持つてゐる。打力もまた猛烈を極め、小川、土井君時代にも堂々たる五番打者、マトモに當つたら途方もない大物打ちだつた。

巨軀から投げをろすアウドロは大きく、懸命に投げたら捕手が辟易する程の強球を持つてもゐるが、惜むらくはまだプレートに馴れず、コントロールに乏しい。その爲に四球を連發して、豫選には和商に負けた。所がつひ最近の關西發表組大會に、和歌山球場で四國の俊豪、松山商業と決勝戰を爭ひ、一回兩軍とも一點づつを入れ、一對一のまゝ九回は勿論、二倍の十八回に到るもまだ得點せず、つひに二十一回迄の延長レコードを作つて、二對一で和中を快勝させた。相手の松山はたとへ死鬪組とは云へ、高松商業、中學、廣商、廣陵が、常に苦戰してゐるチームである。山下君が、果して同商院の出羽ケ嶽で終るか否か、問題は全く『明日』にかゝつてゐるが、大衆の支持する人氣に於て、現在の彼は、すでに甲子園野球スター投手たる素質に、カケ値はあるまいと思ふ。



フリードリヒスハーフエンより東京へ

北野吉内

『戀の銀座は——』調髮と顔面の手入れが至極入念な異人の大陸に來ても相變らず頭を刈るのと髭を剃るのが御當人には堪らなく面倒臭く、いつもマダムの御小言を頂戴してゐる快適なA・GOOD・MIXER、そして驚くほど屈托のないDR.MASAO KUMEが洋服だけはカッテングの見事なロンドン仕立を着込み、彼一流の蠻聲をよほどレギュレイトしてモダン日本のモダン曲なるものを僕のために唄つてきかせた。ところはツエペリンの町南獨フリードリヒスハーフエン、大飛行船が霞ケ浦さして萬里征空の壯途につく前夜。スウヰスの翠微を湖面に映す大湖ボーデンゼーに日が暮れて、ツエペリン旅客の宿クールガルテン・ホテルに調子外れのチャズ樂が湧…ゴツタ返す

斷髮のストリート・ガールさへ出現したんだから——』さう言つて急激な故國のモダン化の手近いサンプルに銀座行進曲なるものをDR・KUME——斷つてをくが僕はホテルの支配人、出張中のアメリカ新聞記者團ETCに彼を紹介する時はいつもドクタア・クメと勿體つけてやつた。彼も赤門を出た立派な學士様なんだからあらゆる種類の肩書尊重、位階崇拜病を脱しきれないドイツ共和國では、持つてゐるだけの肩書を振廻してよいのだ。わが留學生諸君が名刺にDr.だのProf.だのを麗々しく刷込んで一向あがらぬ風采の
な敬意と子

歌に響いたが、急速なテンポで變つていつたといふ四年ぶりの故國に大きな驚異が僕を待つてゐるやうにも思はれて、數時間後にはZEPと一緒に大空に飛上る僕の心は早くも日本の空に飛んだ。

Dr. u. Frau Kumeはツエペリン見物と僕の見送りを兼ねベルリンから態々身錢を切つて南獨の片田舍までその旅程を延長した奇特な又私達を感激させた同胞約二十名中の一組だつた。三人の日本人が魁偉なグラーフ・ツエペリンで日本へ飛んで行くのを我事のやうに喜んで、色々な同胞がどこからともなくフリードリヒスハーフエンに現はれてきた、ベルリンから五百キロ、急行列車で十四時間の國境の町だ。尤も金廻りのいゝ人は餘り居なかつた。片道約五十圓の汽車賃をやつと工面する程度の同胞だつた。

『武林無想庵の家内で御座います』大事な旅券を忘れてパリを飛出し國境で二時間抑留の浮目を見たといふ至極手數の掛つた旅に疲れて、その日の夕方ツエッペリン町に驅けつけた斷髪姿のマダム武林がホテルで初對面の誰彼にから挨拶した。ベルリン留學中の聲樂家武岡鶴代さんも乏しい財布の底を叩いて――と正直な物の言ひ方をやつても濃厚な女史の激怒は買ふまい。大陸ではプーア・プロフエッサと憐れまれるところの文部省留學生諸君の金廻りのいゝのを羨[illegible]するほど左樣に女史の金廻りはよくなかつたやうだつた――見送りに來て下さつた、大阪高工教授の井上博士夫妻、ピアニストの土川君、資源局の小林參事、萬國郵便會議へ代表として參加した臺灣總督府の戸水參事なども前後して驅けつけてツエペリン旅客の宿クールガルデン・ホテルは滿員客止。その夜は金髪美[illegible]へ大膽にダンスを申込む位に對紅[illegible]社交術を納得した殊勝すぎなドクタア・クメがホテル中を泳ぎ廻つて三人――藤吉海軍少佐、大毎の團地君と僕――の出發を見送る盛大なフエアウエル・デナー・プログラムをでつち上げたのだつた。ホテルの大食堂の一隅には二十名の同胞が陣どつてライン・ワインの盃をあげ



ツエ伯號が最初アメリカよりフリードリヒスハウフエンに歸來の日
久米正雄氏夫人(右)、藤吉少佐、北村兼子女史等が見物に行き偶然同
地寫眞屋に寫されたる繪ハガキ。(久米氏より本社宛郵送されたもの)

たのだから、片田舍フリードリヒスハーフェンでは前代未聞の出來事だつたし、ホテルにその艶姿を現はして以來絶えず旅客の好奇心とゴシツプを刺戟して來たパリ美人、フランス新聞記者のスーザン孃もドクタア・クメの動員令に大乘氣で盛宴に參加し、キモノ姿の無想庵夫人フラウ・ドクタア・クメと並んで滿堂の視線を獨占したほかに、故國に歸省中だといふ朝鮮仁川のドイツ豪商パウル・シールバウム老までが日本人の奧さんと一緒にこの別宴に參加し堂に入つた日本語で『ダイニツポンのためカンパイしませう』など、日本贔屓を發揮するのだから當夜の別宴は全く國際的に擴大して了つた。ドルニエ飛行機製作場勤務としてフリードリヒスハーフエンに定住する唯二人の日本人川崎造船の山崎鈴木兩君が、自腹を切つて特別注文した日獨國旗二十數本を抱へて乘込み皆に配る。出發の時はこいつを打振つて三人の同胞を聲援し大いに日本の爲め一宣傳やらうといふ思ひつき。『南獨フリードリヒスハーフエン、八月十五日』と冒頭して持運ばれた國旗にみんな紀念の署名をする頃、こそ〳〵準備してゐたツエペリン便乘をその日の夕方急に取消されてスツカリ悲觀してゐた未來の女辯護士志願者

テーブル・マスタの貫錄を發揮する。食堂からボーデンゼーの湖面を見晴す庭園へ、みんなが國旗を手に持つて席を移すと給仕長が大きな卓子を樹蔭に持出してリキユールとモカが運ばれる

『一つ景氣よくやりますかな』當夜第一の酒豪藤吉少佐が周圍とは全くハーモナイズせぬ蠻聲を張りあげて『デンカンシヨ』と『箱根の山』を唸り出したので第二次會となる。武岡女史はコーラス團長として一座中の美音家をひつこ拔きドイツ國歌の下稽古にとりかゝる。この歌で景氣よく私達を見送らうといふのだから烏合の衆の俄稽古は大骨が折れるが、ズバ拔けた女史の美音に庭園のあちこちから拍手の湧く『汽笛一聲』を新橋から靜岡あたり迄歌ひ續けてタネ切れになつたドクタア・クメがこゝで日本モダン歌銀座行進曲を僕に披露に及んだのだつた。

『時に御守りは持つてますか』『何も持ちません、要りますかナ』僕の冷かな無關心はみんなを多少驚かしたやうだつた。

『そいつはイケない』見かけによらず信心深いらしいドクタア・クメ

には何の不安も屈托もなかつたのだ。ロンドンで再會した正宗白鳥夫人は『隨分思ひ切つた事をなさるのね』と僕がさも生命知らずの foolhardy な男でもあるやう心配してくれたが、僕は一向平氣だつた。飛行船に乘つて大きなタネを取りに行く、これも一つのビズネスだと考へてゐたし、それにニユーヨークで大西洋を横斷して來たあの雄大な銀鳥―GRAF・ZEP―を仰ぎ見てその偉力にホトヽ感服して了つたからとつくにその安全性を絶對信頼して少しも不安なんかは感じてゐなかつた。ところへ急に誰彼から御守を頂戴すると一種の心理的リアクションが急にどこからか湧いて來て、萬に一つといふ危險の可能性が俄かに誇張された大きさで僕の心に擴がつてきた。僕は俄かにホテルの二階の部屋に驅け上つてアメリカから持參して飛行船で一緒に持つてゆく氣でゐた生命保險證書と二三の重要書類をあたふたと社友の佐藤君に托したのだつた。

靜かな湖畔に不夜城のやうに輝いてゐたホテルのオーケストラはAL・JOLSONの當り歌『サンニー・ボーイ』のあとへ、これも全歐を風靡しつゝあるところのヂヤズ式タンゴ I Kiss Your hand, Madame の曲を奏し、數時間後には飛行船で空に舞ひ上る人達が何の屈托もなさそうに踊り狂つてゐる。厚化粧のドラモンド・ヘイ女史の腕をとつて緩かなタンゴのステップを踏んでるのは圖々しさが百パーセント、典型的アメリカ新聞記者のニツカアボツカア君だつたが、何だ詰らないといつた退屈な顏でこの光景を食堂の片隅から眺めてゐたのは有名な北極探險家、陽氣者のサア・ハバアト・ウイルキンス大尉だつた。どうせ今夜はどこもこゝも徹夜だ。今度許りは警察も十一時半の消燈令を臨時に取消したので音樂とダンスは夜通し。自分達が銘々少し許りの臍くりを投げ出して出來上つたLZ127號が、萬里征空の素晴しい壯途につく夜だから、ツエペリンの町中が寢られぬ程嬉しい夜だつた。ボーデンゼーの空に三日月が出て來て靜かな大湖の波の動きが銀鱗のやうに燦めいた。ツエペリン旅客の宿クールガルテン・ホテルの底抜けの喧騷が益々高まつてオーケストラとダンスのステップと、シヤンパンの心地よい陶醉から生れる陽氣なさんざめきと、出入けたゝましい自動車のサイレンとがいつまでも湖面に消えていつた。温く風もない。數時間に迫つたグラーフ・ツエペリンの晴れの出發に惠まれた快晴の日の夜明けが近づく

『Best Wishes for your successful journalistic airadventure』ニユーヨークのF夫妻からの飛電だ。

『Wish you best of luck on perilous journey affectionate regards』

僕の『冒險』飛行を心配するアメリカの友達ベツテイから打つて來た電報だ。夏の眞中にロンドン仕立、一張羅の冬服を詰込み商賣道具のタイプライターをブラ下げていよいよホテルを飛出す時に、番頭君から手渡されたこの二通の電報に、僕はやつと旅に出る氣持になつた。

◇

北獨に較べては夜明けの近い南獨の空はマダ薄暗かつた。たゞ太鉛

電燈に照らされた大格納庫だけが黎明の水平線上に浮城のやうにくつきり浮び出てゐた。八月十五日午前四時卅五分、私達を乘せたグラーフ・ツェペリンは夜氣にぬれたフリードリヒスハーフェンの緑草の上を簡單に離れて銀色の船首を霞ヶ浦の空におけた。これ程の壯擧にふさはしい御祭騷ぎ的なセレモニーは一切無しで、見送りの軍樂隊さへゐなかつたアッサリ加減は送迎に伴ふ馬鹿騷ぎに慣れてゐる我々日本人には頗る意外だつたが、格納庫から廣場の中央に押出されたグラーフ・ツェペリンのあの大きな船體に響くベルの音を合圖に、巨船の横腹に吊下がつてゐるマイバア發動機の五つのプロペラが廻り出したと思ふ刹那、大飛行船がフハリッと百二十五メートルの高空まで直線的に舞上つたのには驚かされた。それにゴンドラの下部に錨の代りにブラ下つてゐた數百名の工場員が一齊にその手を離した瞬間だつた。アッといふ間に地上の見送り人との距離が無限大にまで擴がつて、地上の群衆は丸で蟻大に縮小した。一瞬前まで私を見送りに來てくれた約二十名の同胞は船室の外に立つて日獨の小旗を打振つてゐた。武林女史が音頭をとつてみんながドイチランド・ユーバア・アレスの國歌を元氣よく歌つてゐた。送別宴で貰つた日の丸の小旗を片手に僕はサロンの窓から半身を乘出し、上と下、互の距離が少し遠く握手が出來ぬので旗竿の兩端を握り合つて『では御大事に――』へ『どうも有難う』を機械的に繰返してゐたのだつた。ツェペリンの出發ほど見送る人見送られる人に呆氣ないものはない。涙にぬれたハンカチーフを振つた處で船上の人には見えもせず、大聲で怒鳴つたところで通じはせぬ。あつと言ふ間の離陸、一切が瞬間に處理されるツェペリンの出發は極めて思ひ切りがよく男性的だ。

百二十五米の空へ一氣に浮揚したグラーフ・ツェペリンは薄暗い夜明けの空をついて北へ動き出した。眼下にほのかに見えるフリードリヒスハーフェンの町が段々小さくなる。

『ツェペリンにこれまで乘つたことがありますか』窓から懸命に下界を見詰めてゐた僕へ話掛ける人があるので振り向くと、寶館で見覺えのあるアメリカ千萬長者ウイリアム・リーヅ君だ。リプトン茶の經營王LORD・LIPTONのやうに輕快なヨット帽を被り顏面に元氣が充滿してゐる。當年二十六才の若さでいくら使つても使へ切れない程御金があり奧さんは前ロシア皇族クセニア姫。同君のことはこの三年間幾度となくアメリカの新聞で讀まされて來てゐる。

『今度が生れて始めてですよ――こんな愉快なものはない。ワンダフルだ！ 決して心配しなさんな』と僕を安心させる。成程動き出してから船體の動搖を少しも感じない、頗るいゝ氣持なのでリーズ君の一言を信用する。東天がやつと薄紅に彩どられてきて朝霧の晴れ間から南獨の緑の野と森と町が繪のやうに浮び出す、二十人の乘客は殘らずサロンの窓際に釘付狀態で伸び上りながら走り行く地上の大パノラマに見惚れる。と船首の操縦室からサロンへ出て來た好男子の第三船長フォン・シラーが

『皆さん、いよ／＼出ました。次のストップは東京です』と大聲で車掌のやうにアナウンスするので、なんだか急に世界が狹くなつたやうな氣がしてみんなが微苦笑する。がフォン・シラー君のいふ通り今動いてゐる飛行船の發動機は東京の空につく迄廻り通しなんだと考へると、一風變つたモダンな旅、一萬一千キロ無着陸の大飛行に乘出したことをハッキリ意識して來る。いよ／＼大飛行のスタートを切つたのだ！　そして次の瞬間には相手方の圓地大毎特派員との空中通信競爭が始まつたのだ！　と考へるといつまで安閑と自然美を眺めてはゐられない。でそろ／＼仕事に取掛らうと廊下に出て圓地君との相部屋キャビンNO・Iに歸ると、圓地君が早くもテーブルを占領してタイプライターに向つて、パチ／＼何か書出してゐる早業に面喰つた。彼と僕、二大競爭紙の代表として乘込んだ二人は同じキャビンに起居して紳士的に振舞つては來たものゝ、隙があつたら拔駈けの功名をやらうと互に腹の探合ひで四六時中油斷が出來ない。彼がタイプライターで何か書出すと僕の神經が苛立つし、僕の指がタイプライターのキーの上を走ると彼の目が光る、二人の苦しい緊張と警戒がこの時から霞ケ浦の空まで連續して了つたんだから、二人にとつてはたしかに思ひ出にならう。

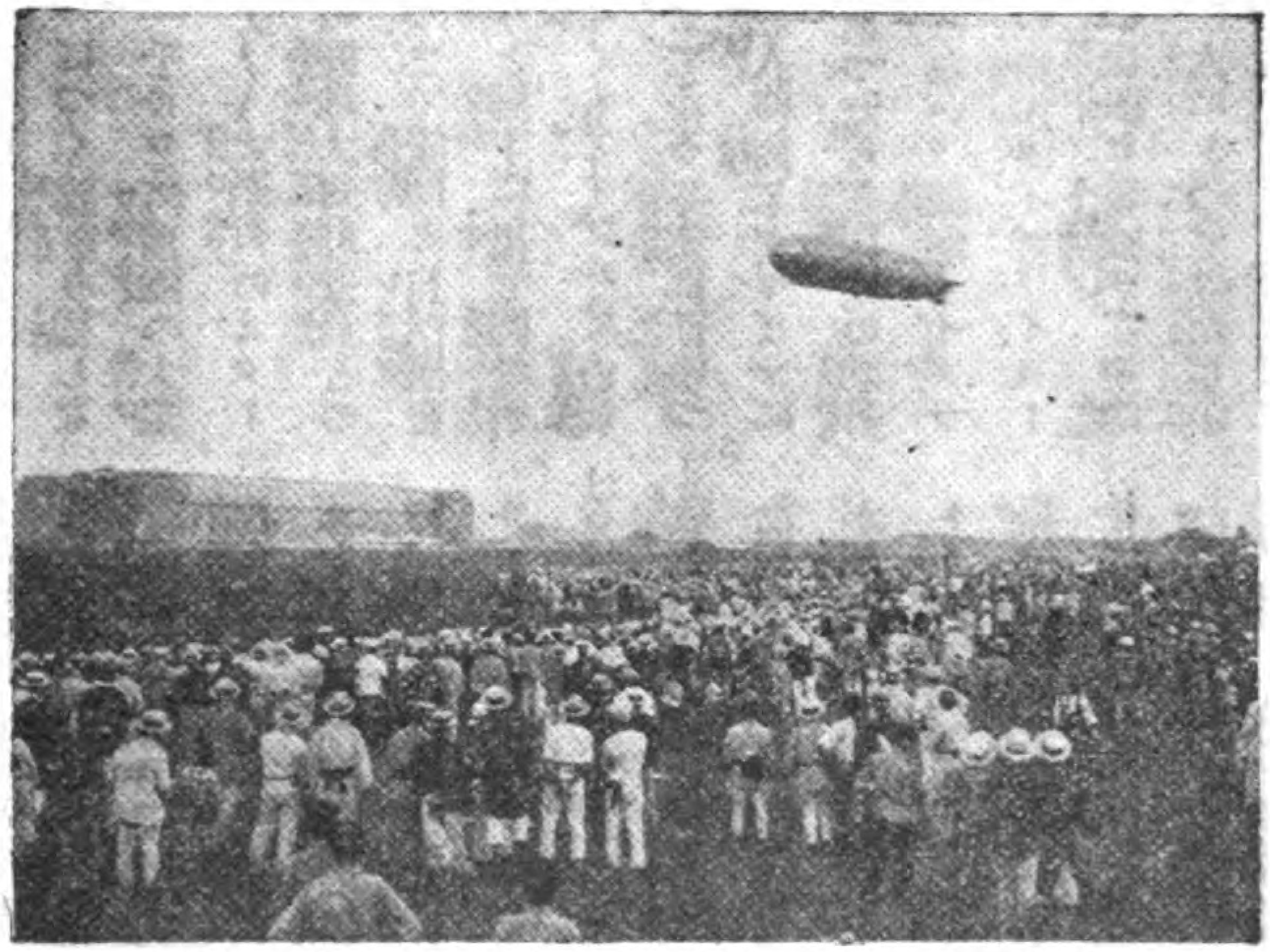
◇

食堂兼社交室の左右の窓側は船客が頰杖ついて景色を眺められるやう奧行一尺ほど出張つてゐて、そこへ船客は携帶の地圖と望遠鏡と寫眞器を、新聞記者は商賣道具のタイプライターを置き放しにする。椅子を引きよせると臨時のテーブルにもなつて便利だつたが、この窓側に本が三冊のつてゐた。そいつを給仕長ヘンリーが見つけて持主を探し廻つたが見ると僕の所有物だつたのは意外な喜びだつた――。

乘客の携帶手荷物は二十キロといふ嚴重な制限にホト／＼閉口した。出發前日の僕の周章狼狽は滑稽に近かつた。ツェペリンが豫定のコスを少し變へ北極圏に路をとつてシベリア横斷をやると聞かされたので、着のみ着のまゝ外套一枚持たない僕が慌てゝホテルを飛出してフリードリヒスハーフェンの田舍商店を驅けめぐり防寒着を探し求める。といつても目方の重いやつは一切禁物だから極く温くて極く輕い物といふ六かしい註文、結局一九二〇年頃の流行だつたらしい變テコなジャンパー一枚を卅マークで買つたのはよいが、それだけ鞄の重量が超過したから最後の手段としてアメリカから提げて來たグラッドストーンを捨てゝ代りに輕いドイツ製の安物を買ふことにきめ又町へ出掛け鞄屋に飛込んで一番輕い品物を探出し、賣子の美人を呆氣にとらせて店の奧から秤を持出させ正味二キロ半と目方を確めて漸く得心したのも鞄屋にとつて珍らしい事件だつたらうが、こいつをブラ下げて宿へ歸つた僕が早速荷物の詰替へにひと汗かき、そいつを昇降機ボーイに擔がせて地下室の台所へ出張、牛の股や馬鈴薯の大袋をかける料理場の計量器を拜借して又ぞろ目方を確めたのもホテルにとつて珍妙な客だつたらう。その日は前後二回地下室の台所に鞄をさげて降り總

重量を二十キロに減らすのに一苦勞した。大西洋を超えてさげて來たゴルフ・バックはとうに見限つて了つた。ニューヨークの松山金嶺夫妻が餞別にくれたブランスウイック手持蓄音器とブロードウエー最新のチャズ・レコードには却々未練があつたけれど、これも結局ハミ出して見送りの友人に處分を賴んだ。ハミ出した物は全部處分し思切れる物は殘らず思切つた揚句、どうしても思切れないのがシンクレア・ルイスの近作DODSWORTHと外二册の愛讀書だつた。これだけの本は是非ツエペリンで體と一緖に日本まで持つて行きたい。そこで窮した揚句ドクタア・クメに一相談持ちかけたのだつたが『そんなら僕がこの三册を格納庫まで持つてつてやる。そして君が飛行船の中へ這入つて了つた後で、これは友人一同からの餞別だから屆けて貰いたいのだとかナンとか、そこは尤もらしい口實で乘組員に押しつけるさ、そしたら案外旨くスマッグル・インが出來て君の手に屆くかも知れない』

なるほど妙案だ、で三册の書籍はドクタア・クメに預けたのだが出發のドサクサに紛れてスッカリ失念してゐたのを意外にも側窓の上に發見したのだから嬉しかつた。ドクタア・クメの計略が見事圖に當つたのだ。グラーフ・ツエペリンには今度に限り密航者がゐなかつた。こつそり飛行船へ乘込んだのは僕の三册の本だけだつたかも知れない。



霞浦に着いたツエッペリン伯號(東京朝日新聞寫眞班撮影)

◇

早い出發で徹夜した船客一同が腹を空かして最初の空中朝飯を待焦れた『どだね、一つ音樂でペップをつけよう』といふ人が出てサロンの蓄音器から陽氣な威勢のいゝチャズのリズムが躍り出し二百米の上空で早朝のコンサート、思はず皆が浮れ出して空腹と疲勞を一寸忘れてゐると御待兼ねの朝飯になつた。エッケナア總司令も食卓につき丸パン、バタ、ジャム、腸詰、茹卵子それに素的な味のよいコーヒーは幾杯でも飲み放題といふドイツ式フリューシテックがライプチヒ近くで終り、滿腹と疲勞で少しねむくなつた頃ツエペリンは美しいポツダムの空にさしかゝつたので一同が騷ぎ出す。と十時四十分にはベルリンの上空、空から眺めるこの首都の美しさ、整理した市街と油繪的なその色彩美に見とれた。午後十

二時五分バルチック海に臨む北獨ステッチンを通過してから御馳走たっぷりな午餐となる。食堂に備附された四個のテーブルに各自の席が指定され『一九二九年世界一周、グラーフ・ツエペリン』と書いて地球をめぐる飛行船の圖まで印刷されたメニューが出る。平げた獻立はコンソメ、ツエペリン式調理ライン河鮭、牝鹿の肉（野菜つき）キャラメル・プッデイング、果物といふ一流ホテルの御馳走、酒は御好み次第何でも飲めるが先づワイン一本四ドルから五ドル見當ですべて米貨値段になつてゐる。これだけ手數の掛る料理を無電局と向ひあつた小臺所の電氣ストーヴで拵へ上げるのだから器用なものだ。空模様も依然具合よく銀色の大飛鳥は快速のスピードで矢の如く飛んでゆくが巨大な船體は少し位の風には一向不氣で殆ど動揺を感じないから樂なものだ。キャビンの窓外には素晴しい大自然のパノラマが百色眼鏡的速さで間斷なく展開する。午餐に滿腹した閑暇な乘客は心地よい天空の午睡を貪り始める。九名の新聞記者だけが落つく暇もなく忙がしさうにタイプライタを叩き合ふ。活動寫眞屋とカメラマンが互にわめき合つて絶好の撮影材料を追及する。その夜七時四十五分までに一五六六キロを飛んで船上の第一日は勞農ロシア國境に暮れたが、考へてみると朝飯はライプチヒ附近、午餐はダンチッヒ自由市邊で終り、午後の御茶は哲人カントを生んだケイニヒスベルヒ上空、晩餐はロシアの空で味はつて、國々次、世界が脚下に走つてゆき古今の歴史のページが同時に眼下に繰りひろげられてゆく大飛行船、一日の旅はたゞかく〳〵にファンタスティックだ。

◇

『萬事好調子、速力は約百キロ、昨夜は時に百廿キロ出ました。モウすぐウラルです』世界大戰中はツエペリンを操縱して暗夜のロンドンに前後廿二回の爆撃を敢行したといふ剛の者、倭小果敢な第一船橋レーマンがサロンに顔を出して飛行の順調を報告する。ツエペリンの飛行は事實上この人が何から何までやつてゐると言はれるが、見たところ小粒ながら精悍の氣が溢れしかも禮儀を失はない。僕は始めからキヤピテン・レーマンが好きだつた。英語きり喋れない僕は稍無愛想で英語の拙いエッケナー博士よりは驚くほど英語が達者で愛想のよい人間的なレーマン船長に近づいたのも當然だつた。僕の好きな同船の客は千萬長者のリーズ君と米國飛行船ロスアンゼルス號前船長のローゼンダアル中佐だつた。中佐は一九二六年米國飛行船シエナンドア號爆破の大椿事に不思議に助かつた唯一の生存者だが軍人に似合はず物腰が柔で、僕が電報でも書いてゐると『お早う、又御仕事ですか』などと肩越しに愛想よく挨拶する。アメリカ人だけに新聞記者の職務をよく理解し尊敬してゐた『飛行船に乘るといつも忙がしい僕が今度は存分だから久しぶり本がゆつくり讀めて有難い』と言つて熱心に讀書に耽つてゐたが、ある日讀んでゐた本を覗くとそれが僕の好きなシンクレア・ルイスの近作だつた。

青木少佐はＮ３號爆破の生存者、僕はシエナンドア號爆破の生存者

者、命拾ひの飛行船乘が日米から一人づゝ乘合せたのが不思議です」

中佐はこんな事をいつて藤吉少佐が日本式英語でポツリ／＼語り出すN號遭難の顚末に熱心に耳を聳て、あゝいふ突差の場合一人の死者も出さなかつた藤吉さんはエライと少佐を賞め上げた。關羽鬚の南極探險家、あの有名なウイルキンス大尉と同船の誼を得たのも豫期せぬ喜びだつた。大尉は船客の誰よりも一番口數が尠く物靜かな人だが、判らない山や河の名前は大尉に聞けば判るとキメて皆が難問を持ち寄る。それに答へるウイルキンス大尉の聲はひどく低音で落ついてゐた。何しろ南極から北極の端まで足跡普き世界的探險家だから喋らせたら馬鹿に話題が多い。南極探險飛行は又續行しますかと尋ねると

『このツエペリン世界一週飛行から歸つたら匆々支度を整へ十月の十五日頃までに第二次南極探險飛行に出掛けます。クリスマスには南極地方の僕の根據地からバード中佐一行の根據地へ飛んでゆき一緒に七面鳥のクリスマス・デナーを食べる目論見だが――』

と奇拔な計畫を洩らす、新聞のニユーズには至極誂向きな計畫だといふとフフーンと肯づく。いつもプラス・フオアーズの輕裝でいつも望遠鏡を片手に、いつも同じ窓側に立つて注意深く觀望を怠らない。恐ろしい早起きで毎朝四時半にはサロンに現はれ他人の寢てゐる間にタイプライタを叩くのが大尉だつた。ドラモンド・ヘイ女史は何といつても船客の花、彼女の微笑は極めて魅惑的だつた。一人で一室を獨占しエツケナー老司令も却々女史を大事にした。中年の皺をかくす厚化粧は僕の趣味に頗る合致しなかつたけれど、女史と話してゐると齒切のいゝロンドン英語は氣持がよかつた。フリードリヒスハーフエンで落合つて米國新聞記者Wは『君、ヘイ女史はあれで却々國粹肌なんだからね。アメリカ人ですかと聞かれるのが彼女には堪らないインサルトだつてさ。其癖ハーストに雇はれてドルを貰つてるくせに』と言つてゐたが僕達には却々愛想がよく新聞記者として立派な手腕を持つてゐた。毎朝コーヒーの後何處から手に入れたのか緑茶の小罐を持出し日本茶が一番ですと甘さうに飲んでゐた。冒險のために冒險を愛する、いつも世界の四隅に新らしいスリルを求めて止まないのが若きアメリカの千萬長者リーズ君だつた。オイスタア・ベーのお城のやうな大邸宅、ロシアのクセニア姫との彼のロマンス、次から次への彼の冒險は甚だ有名だがアメリカ式にすぐ友達つき合ひの出來る大富豪だつた。シベリアの大凍土、北極圏近くの大曠野に美しい黎明を眺めた時彼は極度に興奮して、この次には大飛行船を賃借して友人にこの無人の境へ猛獸狩に來る計畫を夢見た。そして僕が何をするでもなくポツネンとサロンに坐つてでもゐると『君のライヴアルは先刻から一生懸命に何か書いてるぜ、君も何か書かんでいゝのか』と心配してくれる位の新聞常識さへ持ち合せてゐた。

◇

アレキサンダー大帝の昔から旅は快適で大きな教育だと言はれて來たが、南獨から霞ヶ浦へ、一萬一千キロを翔破したグラーフ・ツエペ

リン四日の旅は全く壯快の極みで、船内のライフは日まぐるしいスリルの連續だつた。大西洋を航海する善美を盡した五萬噸級巨船の上の生活も、これに較べては平凡極まる刺戟のないものだ。

心地よかつたのは、ほかで味はへぬ驚くほど安らかな船上の眠り、旨かつたのは禿頭を純白の長帽で包みあく迄もシェフらしい服裝で濟まし返つてるオット・マンツ君が船內の小料理所で拵へた朝夕の御馳走とコーヒーの味。

弱つたのは船內五日間の絶對禁煙、この間から急にニコチン氣が拔けると短い電文一通書く氣力さへない程弱り出したのも不思議で、食事後には無性に一服喫みたくて悲鳴をあげた。水の大節約、それが傷め水で洗ひ流さないWCに段々臭氣が充滿してきたにも弱らされた。

うるさかつたのは達磨のやうな顔付の活動寫眞屋ハートマンと、いつも靴下なしで毛むくちやらの太脛を丸出しに割れ鐘のやうな聲を出す寫眞技師のフオン・ベルケハンマー老の二人が、朝ぱらから他の迷惑などに頓着なくカメラを擔いで船內をハシヤギ廻つたこと。

面白かつたのは見渡す限りの下界を一面白い煙で蔽ふた程猛烈なウラルの山火事見物。いつ迄も消えぬ印象は北極圈近くと見とれたオーロラ映ゆる黎明の美觀とオホツク海へ出る時の恐ろしい山陰越え。期待が外れたのは船內無電力の送信能力の不足、それに祟られて滿足に電報の打てなかつた僕の恨みは盡きない。

嬉しかつたのは十八日日本無電圈內に入つて故國からの第一電がシベリアの空の上の僕の手に屆いた時と、その翌朝深い霧がスーッと晴れた中から美しい北海道の山、白波の踊る美しい海岸線、懐かしい日本の姿が夢のやうに眼界に入つてきた時の

歐亞の空を僅か九十時間四十分で、見事にダ・ヴインチの空想を實現した偉大なグラーフ・ツエペリン！ それは全く夢のやうな旅だつた。十九日の夕方東京の空に現はれた私達は大空に出現した白銀色の大怪物を仰ぐ滿都の限りない熱狂を下瞰して、夕暗の迫る霞ケ浦についた。疲れた飛鳥のやうに降りたツエペリンの船室を僕は名殘惜しげに辭去したが、去るに臨んでエツケナー博士に別れの挨拶をすると『まあよかつた。實は安全にあんたを日本へ屆けるとが出來るかどうか、わしも少し心配だつたのだが――』と老司令は心の底に秘めてゐた大飛行の勞苦の一端を始めて洩したのだつた。五日ぶりに懐かしい大地に降り立つた僕の足は流石にランド・シツクネスのために少しよろめいたが、しつかりと踏みこたへ、ある堅實なマザア・アースに復歸した子供らしい喜悅が譯もなくコミあげて來た。そして出迎への社友が氣を利かして早速差出した專賣局の安卷煙草をいやといふ程喫ひ續けたのも意地汚なかつた。その夜の霞ケ浦一帶の賑ひ、丸で緣日のやうな騷ぎの土浦の雜踏に目をむき、上野までの汽車中で口汚くいつ迄も罵り合ふ乘客同志の喧嘩に膽を潰し、四年ぶりに歸つてきた東京の街路に、フオード化しゆくこの世界の必需品――シヤツ一枚の運轉手を乘せた圓タク――が亂暴に走つてゐたのは目新しかつたが、大通はどこも物淋しい程燈火が薄暗く、舊態依然の東京には、五日前、フリードリヒスハーフエンの宿でドクタア・クメの話に釣込まれて期待して來たモダン日本の驚異を發見するに苦しんだ。僕はベルリンのドクタ・クメに安着を報ずると同時に東京は相變らずだ、何んの新しいた

ツェッペリンを見る

兼常清佐

○

ツェッペリンを見る。——雑誌『改造』のこの課題の文字通りに、私共は正にツェッペリンを見た。

あの日の午後、サイレンが鳴り出すや否や、私共はそれとばかりに屋根によぢ登つた。ツェッペリンは木の間がくれに遙にその姿を現はした。私共は初めはたゞ默つて銀色に輝いた船體が空中を辷つて行くのを見まもつた。全く何を言つていゝのかわからなかつた。言ふべき言葉を知らなかつた。しばらくして全心の昂奮は靜まりかけた。そして私共は初めて話しあつた『あれこそ正にドイツの科學の一大結晶體である。誠に壯觀である。偉觀である。——私共も切にあれに乘つて見たい。もし私共もあれに乘せてもらへるものならば、これからの行く先きが、人間に飲み物の自由さへもない樣な國でも我慢する。』

私共がそんな話もしてしまはないうちに、ツェッペリンの姿はすでに眼界から去つた。後にはかすかな發動機の響が何物も見えない空中に淋しく殘つてゐただけである。

ツェッペリンを見る。——もちろん見るには見たが、たゞそれだけである。あとで私共が新聞の寫眞で見た方が、實はさらに詳しくツェッペリンを見た事になる。そして新聞の寫眞の上に、いつも自分はこの實物を見たといふ一種の感情の滿足が付き纏つてゐる。

ツェッペリンは東京地方の人々に實際非常に大きな感動を與へた。まづ一二の東京の大新聞は、その計畫の成功を祝つたであらう。紙面を埋め盡したツェッペリンの記事が充分に世に反響をもたらした有樣を見て、恐らく自分の新聞の勢力の大きな事に滿悅したであらう。ツェッペリンの來航は、もちろんドイツ科學の大示威運動であると共に、また一二の東京の大新聞社にも絶好の示威運動の機會を與へた。しかし、よし新聞のあれほど大げさな記事がなかつたとしても、やはりツェッペリンの來航は相當に私共の感情を昂奮させるに足る事實であつた。それは私共のこの退屈な生活の中に、一味のロマンティシュなものを與へたからである。

私共の心の底には、まだ何と言つても世の常ならぬものを好む氣持が抜けきつて居らぬ。科學がこの世界から不思議といふものを追放してゆけばゆくほど私共の心は何となくその追放されたものを求めて見たくなる。ツェッペリンは、確かに或る意味で、私共のさうした要求を工合よく科學的に滿足させてくれた。

空を飛ぶといふことが、まづ何となくロマンテイシュである。甚だお伽噺めいてゐる。今日では空を飛ぶといふことは必ずしも珍らしいとはいはれない。しかし人が土地の上を歩くほど平凡なことではない。たしかにまだ世の常ならぬことの一つである。そして私共は飛行機は見なれてゐるが、飛行船は今度見たのが始めてである。私共の好奇心を充分に嗾るに足るものである。

そしてそれは世界一周と云ふ甚だ冒險的な、ロマンテイシュな目的を持つてゐる。それははたして出來るか出來ないか、誰にも豫測を許さないものである。私共は出來ればいゝと思ひながらもまた何處かに不安な心地もしない事はない。フイルムの上で美人と惡漢との追かけの場面をはら〳〵しながら樂しんでゐるやうなものである。

それにこの飛行船は形が思ひ切つて大きい。私共が平生見てゐる飛行機の大きさに比べると、人間と大入道とのやうな違ひである。この形の尨大なといふことが世の常ならぬものを好む人の心を甚だ喜ばせる。またその上にこの飛行船は非常な速さを持つてゐる。南ドイツから日本まで僅かに三日で飛んで來た。このすばらしい速さも、すばらしい大きさと共にこの飛行船を一層ロマンテイシュなものにした。そしてその飛行船の通つて來るシベリアの荒野や、北極近い山河といふこともまた私共の好奇心を甚だ喜ばした。

ツェッペリンはまた形が美しい。普通の飛行機が大部分直線で出來てゐるのに對して、ツェッペリンはなだらかな丸みを持つた曲線がその形の基礎になつてゐる。そして全體の形としては、調和もあればまた變化もある。そしてその全體が私共が普通見られない銀灰色に塗つてゐる。見た眼は甚だ美術的である。好ましい形である。手でなでゝ見たい樣な形である。手でなでゝそして掌の柔かなすべ〳〵した觸覺を樂しみたい樣な形である。一體が科學的なものゝ中には、一種獨特の美しさがあるものである。數學の式の形に或る整つた美しさのあることは誰も知つてゐる。カテナリーを現はす式は、カテナリーの曲線の美しいやうにまた美しい。ツェッペリンの形もそれは科學的に考へ出された形であらう。しかしそれを美術的に見れば、それはたしかに或る一種の美しさを持つ形である。この形の美しさといふことが識らず知らず私共の心をツェッペリンの嘆美者にした。

ツェッペリンは甚だ理屈に適つた怪物である。私共が安心して見ることの出來る怪物である。そしてまた現代的な美しさを持つた怪物である。浦賀に來た黒船も恐らくそんなものであつたらうが、それには多少の政治上の脅威が伴つてゐた。今日のツェッペリンは私共は全く現實の政治の問題を離れて、ただのんきに眺めてゐる事が出來る。そして

例へば青い花を見るやうなロマンテイシャな氣持を存分に滿足させる事が出來る。またこの空の青い花を遙かにドイツから日本に運んで來たエッケネル博士の名に、ほのかな英雄崇拜の氣持を味ふことも出來る。ツェッペリンはこのやうにして私共がすでに忘れかけた文學的なロマンテイツシュな感情を、それとなく心の表面によびかへしてくれた。

ツェッペリンを見る。――誠に私共は心を躍らせてツェッペリンを見た。そして私共はしばらく生活の退屈さを忘れた。

○

ツェッペリンを見る。――それは私共には、まづ空中の青い花の様に見えた。そしていろ／＼な意味で私共の心を喜ばせた。しかしツェッペリンの印象は決してたゞそれだけではなかつた。私共はも少し多く雜誌『改造』の課題に答へなければならぬ。それは科學の前にも、なほ人間の心は一つの神秘であるといふ事である。

ツェッペリンは、言ふまでもなく、ドイツの科學の一大結晶體である。ドイツ人の應用科學にかけての能力をまざ／＼と全世界の人に見せつける一大標本である。今までは、日本には、ドイツ製の大仕掛な機械の能力はあまり認められてゐなかつたさうである。イギリスやアメリカで金力にまかせて作り上げた機械の方が多く用ゐられてゐたさうである。また一般にドイツといふ國の事が、さほど深く日本人には理解されてゐたかつたとも言はれてゐる。なるほど東京の大新聞の一つが、エッケネル博士の『さようなら』といふ簡單なドイツ語さへも正しく聞き取つてゐなかつた處などを見ると、さう言はれるのは或は本當かも知れない。しかし今度のツエッペリンの來航で、ドイツの科學と機械工業の力は恐らく充分に認められた事であらう。東京の多くの新聞は、ほとんど筆を揃へて、日本人もそれに負けてはならぬといふことを力說した。ツェッペリンの來航の當時は、そのことがほとんど日本の輿論のやうにも見えた。もちろんそれは日本としては誠に尤千萬な事である。しかし今私はこゝでその樣な事を考へやうとは思はない。私は今殊更にドイツだとか、日本だとかいふ國の差別に多くの興味をもたない。そんな事はどうでもいゝ。私は今は科學上の創作といふ事と、人間の心の不思議さといふ事について考へてゐる。

ツェッペリンは明らかに一大創作である。まづ智識の上での一大創作である。そしてそれは天分の豐かな人々だけに許されることである。藝術の天才が藝術品を創作することゝ甚だよく似てゐる。ツェッペリン伯やエッケネルも博士等がこの航空船を創作した事を考へるのは、つまりベートーヴェンがそのジュフォニーを創作した事を考へるのとほとんど同じものである。

ツェッペリンの製造は、一つの大目的を持つてゐる。航空といふことである。製作者はその目的に役立つやうなあらゆる科學上の原理を集めた。科學上の原理そのものは、別に何の目的を持つてゐるわけの

ものでない。たゞ物の性質を誤りなく記述したものである。或る直徑の鐵の棒に或る量の力をどういふふうに加へたら、どういふ風に折れるか、水素瓦斯は空氣よりどのくらゐ輕いか、といふやうなことを誤謬なく記述すれば、それは學問上の原理とよばれる。そのやうな多くの原理を矛盾なく或る目的のために必要なだけ集めたものがつまりツェッペリン第一二七號である。ツェッペリンの二三〇メートルの長さの船體の最後の一ミリまで、みなそれ〲の目的の下に澤山の科學の原理を集めあげたものである。つまりツェッペリンは航空といふ目的の下に、集められるだけの科學の原理を集めた總計のやうなものである。そしてその澤山の原理がいかによくその目的のために使ひ盡されてゐるか、今度の世界一周の大飛行で明かに證明された。

科學の原理は普遍的なものである。誰にでも、いつでも、どこでもあてはまるものである。水素が空氣より輕いといふことが科學の原理であるならば、或る必要なだけの水素を使へば、飛行船はボーデン湖の上空にでも浮けば、同じやうに霞が浦の上空にでも浮く。それはエッケネル博士が使つても、日本の海軍が使つても全く同じ結果になる。たゞそのやうな種類の科學の原則をなるべく多く知り、そしてそれを航空といふ一つの目的のために矛盾なく集め上げるのは、それは特別の人の心にだけ出來得るものである。決して誰にでも出來るものではない。そしてその樣な心の働きは一體どんなものであるか、どうして習得出來るか、或は全然天賦のものであるか、まだ誰も見定めた人はない。そのやうな心の働きを持つてゐない人から見れば、それはたゞ一つの不思議といふより外はない。この不思議な心の力を持つてゐるからこそ、ツェッペリン伯も、エッケネル博士も、應用科學上の天才、或は英雄として私共から稱讚される。

ツェッペリンを見た諸君が、もしベートーヴェンのジムフォニーを聞くならば、それはやはり音のツェッペリンだと考へてもいゝ。ベートーヴェンはやはり一つの目的を持つてゐた。それは美しい曲を作るといふ事である。その目的に合ふやうに、彼はいろ〲さま〲な音を集めた。そしてその音は、科學の原理と同じ樣に、誰でも、何時でも、何處でも使つていゝものである。一曲のジムフォニーはそのやうな目的のために集められた音の總計である。エッケネル博士もツェッペリン伯も、航空の目的に適ふやうな科學の原理を作り出したわけではない。たゞ今まで知られてゐた科學の原理を秩序よく集めたゞけである。ベートーヴェンもそれと同じことである。彼は美しい曲を書くために決して音の一つをも作り出したわけではない。今まで知られてゐる音を秩序よく集めたといふだけである。ただその集めあげられたものを全體として見る時は、ツェッペリンの場合でも、ベートーヴェンの場合でも、そこに渾然とした一つの新しいものが出來上つてゐるといふだけである。

エッケネル博士やツェッペリン伯が航空の目的のために集めた科學の原理と、ベートーヴェンがジムフォニーの目的のために集めた音と

は、その性質が非常に違ふ樣に見える。水素ガスが空氣より輕いといふ事と、Vの上の7の和絃をIの上の3の和絃に解決する事とは、ほとんど似ても似つかない事の樣に見える。しかし、音も水素ガスも、それはいづれも人間の智識の中にある事である。水素ガスの性質もVの上の7の音の性質も、みな一つの觀念である。また音はその結果として人の感情に訴へる。それも水素ガスとは甚だ違ふ樣には見える。が、エッケネル博士が水素ガスの物理上の性質を學んだ樣に、ベートーヴエンはVの上の7の和絃の音響學や或は作曲法の上の性質を學んだ。エッケネル博士が水素ガスの物理學上の性質から推して、その取扱ひ方を充分に研究した樣に、ベートーヴエンはVの上の7の和絃の作曲法の上の性質から推して充分にその取扱ひ方を研究した。ツエッペリンもジムフオニーも、とにかく、目的こそ違ふが、この樣なみな智識的な仕事の結果である。ベートーヴエンに、もし音の性質についての深い智識がなかつたならば、彼の心の中に大きな感激があつたとしても、それを音で言ひ現はすことは出來なかつたはづである。ちやうどそれはエッケネル博士が水素ガスの物理學上の性質を知らなかつたならば、いかに空を飛びたいと思つても飛ぶことが出來ないのと全く同じことである。

　このやうな點で、しかもこのやうな根本的な一つの點で、ツエッペリンもジムフオニーも同じやうな出來方で出來上つたものだと言はれよう。もちろん、いかに澤山に物を知つたからといつても、たゞそれを無秩序に集めただけでは、今までになかつた新しいものを作り出すことは決して出來ない。創造の力は、知るといふ力とはまた別ものゝやうに見える。そしてその方が知るといふことよりもなほ一層高級な、神秘な力の樣にも見える。そしてその樣な力を持たない私共凡人から見れば、實に驚くべき心の働である。實際的にはいろ〳〵違つてゐるが、しかしその點から見れば、ツエッペリンもジムフオニーも、人間の心のこの二つの大きな能力――知る事と、それを集め上げる事――の現はれであるといふことが出來る。私共は、ツエッペリンを空を飛んで世界を一周するジムフオニーとよんでも、恐らく非常な間違ひではあるまい。

○

ツエッペリンは空を走る。しかも非常な速力で暴風にさからひ、雷雨を衝いて空を走る。それはたゞ物靜かに格納庫の中につながれてゐるのではない。ツエッペリンといふ以上は、その中には必ず航空の技術といふことも含まれてゐる。ツエッペリンの創造は、その形と共に、その航空の技術といふ事も考へなくてはならぬ。

　その點でツエッペリンは益々ジムフオニーと似て來る。ジムフオニーもそれを作つて、たゞ譜に書いておいたゞけでは、ほとんど音樂としての意味をなさない。それは必ず演奏されなければならない。ジムフオニーを演奏することは、つまりツエッペリンを走らせることである。私はツエッペリンを作ることについて、ジムフオニーと同じやうに、音

術の驚くべき働きを見た。それを空に走らせ、世界を一周することについて、まづ私共の驚嘆させることは、人間の廣い意味での感覺の力である。

　科學はいろ／＼なもの丶性質を誤りなく記述した。そして出來るだけそれを數で計算した。數で計算した以上は、その數通りにすれば誰がしても、何處でしても、何時しても、必ずそのことだけは出來るはづである。科學の記述はだん／＼と人間の個性を認めない樣にする。そして誰でも出來るやうなものをこしらへる。ツェッペリンはさうした科學上の機械の一大標本であらう。ツェッペリンの操縦室にはおそらく幾十となく計器が取りつけられてゐるであらう。計器には悉く精密な度盛がしてあるであらう。その計器の上で、航空の方法が教へ、たやうに機械を操縦すれば、誰でも、何處でも、何時でも同じやうに操縦することが出來なくてはならないはづである。そしてそれが科學の原理を實際の機械の上に應用することの主眼であるべきはづである。

　しかし實際には恐らく機械はまだそのやうに作られてはゐないと思はれる。そこに人間の感覺の不思議さを示す餘地がまだ澤山に殘されてゐる。例へばレンズを完全に作ることは、機械工學の上から考へると非常に困難なことである。レンズの表面の曲り方は、數學の式で書けば相當にむづかしい、長い式になる。その式に完全に相當するやうなものはまだ實際に機械では出來ない。機械はまだそれほど巧妙な域に進んでゐない。その機械で出來ないことを、更に補ふことの出來るものは、熟練した職工の指の觸覺であると言はれてゐる。レンズを作つてその表面を最後にはその職工の指で磨く。指の觸覺は極めて微妙にレンズの曲り方の度を感じて、それを機械では出來きれない程度の完全なものにする。人間の感覺がよく訓練されると非常に細かく、正しくものを感ずることが出來るといふことは、それは昔から人間の不思議の一つだといはれて來たものである。そして近代の科學の進歩を以つてしても、必ずしも機械の力がこの人間の感覺の精密さを悉く征服し盡したとはいはれない。

　私共はツェッペリンの操縦の實際を見たことはない。しかし私共が藤吉少佐のやうに、その操縦室でツェッペリンの航空の實際を見ることが出來たならば、その航空の技術の中には、必ず人間の感覺といふものが非常に重大な役割を演じてゐる事を發見するに違ひない。たゞ計器の數字にだけによらない腕や指先の冴えがあるであらう。ちようど熟練した職工の指先きが機械の精巧さを越えて正しいレンズを磨くやうな感覺の働が是非必要であらう。假に私共がフォードを借りて、それを自分で操つて一〇キロ走るとしたら、私共はそのことの中にでも、なほ非常に澤山の感覺の精密さが要求されてゐるといふことを知つて來る。そしてツェッペリンは到底、フォードどころの騒ぎではあるまい。

　感覺が機械も及ばない正確さを持つてゐるといふことは、言ふまでもなく、誰にも許されたものではない。そのために特に惠まれた人だ

けに出來ることである。多くの科學の原理を集めて、ツェッペリンを作り上げるといふことは、特種な人にだけ惠まれた力であるやうに、機械の正確さを越えて正確な感覺を持つといふ事も、やはり特種の人にだけ出來ることである。ツェッペリンの製造にも、またその特に航空の技術にも、このやうな人間の心の一方面が、深く喰ひ入つてゐるといふ事を決して見のがしてはならない。

感覺の精密さの不思議といふことには、よく考へて見ると、それには智識の判斷の勝れたことももちろん混ざつてゐる。私共が一〇キロの間フォードを操縱してみても、その一〇キロの間には、道に凸凹があるし、人には會ふし、自轉車には横ぎられるし、またガソリンの出は惡くなるし、いろ〳〵めんどうな事件が次ぎから次ぎへと起つて來る。その一つ〳〵の場合にどうしたらいゝかといふことは、操縱術が明瞭に、一義的に敎へてくれる事である。たゞ實際に當つて、數多くこぐらがつて現はれる事件に對して、適確な操縱の判斷を早く下すといふことは、それはたゞ判斷の問題とも見られる。そして特別な職工の指先の感覺の力とは多少趣きを異にしてゐるとも言はれよう。しかしそのやうな鋭い判斷の力といふことも、またツェッペリンの活動を創造する一つの大きな因子である。

すべてこのやうな種類の心の働きは、例へばベートーヴェンのジムフォニーを實際に演奏する時にもそれは必ず無くてはならぬものである。ベートーヴェンはそのジムフォニーの符を書き殘してゐる。それは正に一つのツェッペリンの樣なものである。それを格納庫から引き出して、實際に空中を走らせるには、やはり非常にすぐれた感覺の力がなくてはならぬ。それはまづ第一に時間を區切ることにあらはれる。つまり音符の一つ〳〵の長さの上にあらはれる。樂譜では一小節の長さはみな同じに書いてある。從つて、例へばこの一小節の中にある四分音符の長さは、前の一小節の中にある四分音符の長さと譜の上では全く同じことである。しかし指揮者はこの譜をよく研究して、その譜の中から或る美しい音樂を想像する。その想像の中にある理想的なジムフォニーは、決してこの小節の中にある四分音符の長さが、前の小節の中にある四分音符の長さとは完全に同じものではない。その間に極めて微妙な變化がある。この微妙な變化が次から次へと發展してゆくところに、ジムフォニーの指揮の生命がある。譜の上では、例へば一〇は必ず五と五の和である。しかし實際の生きた演奏では、一〇は必ずしもさうとは限らない。或る場合には一と九の和である。或る場合では三と七の和である。私共は變らない一〇といふ事も意識する。また刻々變つて行く一と九の和、三と七の和といふやうなことも同時に意識するそこに私共はオイレンブルグの譜で讀んだベートーヴェンのジムフォニーと、ウインガルトネルの指揮で聞いたベートーヴェンのジムフォニーとの大きな違ひがある。ベートーヴェンもそのジムフォニーを作つた時には、もちろん一と九の和の一〇や、三と七の和の一〇や、その他あらゆる種類の一〇を考へたであらう。しかし今の譜の方法で

はそのやうな細かいものを動きあらはす術はない。それはベートーヴェン自身が指揮棒を執つた演奏が終ると同時に終つたものである。今私共が聞くベートーヴェンのジムフォニーは、ベートーヴェンの死と共に終つたその微妙な部分を、新たにワインガルトネルなり、メンゲルベルクなりシュトラウスなりに補つてもらつたものである。その補ひ方は、いふまでもなく補ふ人々の自由である。しかしともかくこの補はれたものなしにはベートーヴェンのジムフォニーはほとんど死物である。

例へばワインガルトネルは、どうしてこの補はなければならないものを補つてゆくであらうか。それはたゞ彼の感覺によるより外道はない。刻々發展してゆく音樂の形に對して、彼の指揮棒の動きは、正確に一と九の和、三と七の和、五と五の和といふやうな微妙な違ひを描き出す。また管絃樂團の指や呼吸は、その指揮棒の通りに音を作り出す。このやうな微妙な感覺の働きが多くなればなるほど、その演奏は生きて來る。

これだけの事を、如何に言葉の意味を廣く取つても、たゞ感覺だけの働きに歸するのは、それは必ずしも事實の眞相を捕へたものとは言へないかも知れない。その中には、感覺より外のいろ〳〵の方面の心の活動がその中に含まれてゐる。しかしそのやうなものを總括して事實の表面に現はすものは、やはり感覺である。そしてそれは職工の指の先きの細かい感覺が、あらゆる他の心の働きを代表して、レンズの曲面を精巧に磨き上げる事と非常によく似てゐはしないであらうか。或はツエツペリンの操縦者の腕や指の感覺が、いろ〳〵の器械の數字を越えて巧妙にツエツペリンを動かす事と、なほ一層よく似てゐはしないであらうか。

たゞジムフォニーの指揮だけについて考へてもまづかうである。その指揮のうちでも音の長さ短さだけについて考へても、まづかうである。しかし音樂はその組織が誠に複雜を極めてゐる。音の長さ短さ、強さ弱さ、速さ遲さ、いろ〳〵の音の平均の工合など、このあらゆる實質の上に、また指揮者と樂人との感覺の精巧さ、微妙さが現はれるわけである。またもしそれが獨奏の場合であるならば、たとへばダルベールがベートーヴェンのゾナーテを獨奏するといふ様な場合であるならば、この感覺の微妙さはさらに遺憾なく現はれる。自分自身の思ふままを、何にもさへぎられず、完全に表現する事が出來る。その樣な時には、私共は紙に印刷された樂譜と、それを大家の心を通じて生きた音樂として表現されたのとの相違を充分に了解する事が出來る。それこそ正に格納庫の中に靜かに眠つてゐるツエツペリンと、それが風雨を物ともせず大平洋の空を走つてゐることとの相違でなくて何であらう。

世にも不思議なものは人の心である。人はその不思議な心を不思議でない様にするために自然科學を作つた。そして自然科學はなるべく心の不思議を平易にし、一般化し、普遍化さうとした。しかし人の心の秘密はそれでも悉く消えなかつた。その科學は例へばツエツペリン

を作つた。そしてそのツェッペリンの中には、到底科學だけでは用が足りないものを澤山に含ませた。創造の力や感覺の微妙さである。人の心の不思議は、わざ〳〵科學を利用して、ます〳〵その不思議を示す機會を作つた様なものである。そして特にこの様な不思議な心の働を惠まれた人々は、誠に私共凡人からは、天才とも英雄とも謳はれていゝものであらう。

昔から音樂は天才だけに許された仕事だと考へられてゐた。しかし科學の機械の創造も音樂の創造も、結局同じ様な事に歸着する。たゞ人の心の不思議さを二つの違つた方面からのぞいただけの事である。

ツェッペリンを見る。――私共はツェッペリンを見た。三〇〇メートルの銀灰色の船體をもつて、地球の空を走る一曲のジンフォニーとしてそれを見た。

霞が浦の月

――ツエッペリン伯號を見る――

荻原井泉水

果もない月夜となつてゐる格納庫
或は湖へ、探照燈のずつと草原
空へ見送りの　月夜の團扇を持つ
GRAF、明かに月夜の双眼鏡を合せる
月へ飛翔するものの、扉を開く
砂嚢もおろして、月が澄むばかり
遠く軍樂が流れてくる月夜の草の葉
奏樂はやんだ月夜の爆音を待つてゐる

秋



獨房からの訪問客

明石鉄也

――同志A。君に別れてからもう七ヶ月になるね。僕が此處に移されてからでも旣に五ヶ月だ。急に同志の少なくなつた後をうけて、而も愈々激化してゆく鬪爭の中で、殆ど休む暇もなく活動してゐる君にとつては、時の過ぎ去るのは譬のやうに速いことだらう。だが僕にとつては、特に此處に移されてからと云ふものは、時間の經過はまるで高速度の映畫を見せられてゐる時のやうだ。ぢつとして居られない焦慮にかられる。

――同志A。無爲に慣れるための努力は愚劣だ、そして悲慘だ。僕のインテリ的な物の言ひ方を許してくれ。告白するが、此處の僅か四ヶ月の生活（？）が無殘にも僕の地金をさらけ出した。僕の鍛冶はまだ火が眞底にまで透つてゐなかつたらしい。はち切れる程の鬪志に燃えてはゐるが、肉體の衰弱は一朝毎に目立つてくる。暗い獨房の中で僕はおゝ哲學的な端坐を續けてゐるのだ。同志A、この哀れな僕のポーズを想ひ描いて笑つてくれ。僕は、牢獄の中で研究や著述の自由を確保してゐたロシアの同志たちを羨ましく思ふ。僕たちは、たゞ寢言みたいな宗教の書籍やブルジョア作家の小說の類しか讀むことができない。だが、此處では單に字を讀むといふことだけでも一種の娛樂となるので、僕は鐵窓から流れ落ちる秋の光線の下に、同志の指紋でも懷かしみ求めるやうに差入れの本の頁をめくつてゐるのだ。……

この感傷的なKの手紙をそこまで讀んできて、Aはふと「秋」といふ言葉にぶッつかつて吃驚した。

――秋か！……なるほどね。おい君、今は秋なんだぜ！

Aは、その手紙をまた彼の假寓に屆けてくれた傍のR子に向かつて秋を告げた。

――さうよ、もう十月よ。

R子は、覗きこんでゐたKの手紙から眼を放して笑つた。

――さうだ、十月だね。……だが、十月と聞いても、俺達には「秋」よりも直ぐに「、、」が聯想される。、、、の十月、、さ。蟲の聲ではなくて、、、の、、だ。……プロレタリアには「秋」はない。强いて言ふなら、鬪爭の秋！か。

Aは K に教育された勞働者あがりの鬪士だ。暫く失業してゐたが、二十日ほど以前に或る鐵工場にもぐりこんだばかりだつた。從業員は千二百名も居て、ヽヽヽ重要な産業部門だつた。今度は、彼は隱忍自重して、ひたすら工場内の調査に精力を集中してゐた。

彼は若い旋盤工だつた。朝の五時半に跳び起きて、向かひの飯屋に馳けこむ。金十錢也の朝食を胃袋に叩きこんで工場へ走る。既に六時半には、彼は完全に機械の附屬品になつてゐなければならない。ヽヽヽヽ、ヽの、ヽヽを前にして、○○○からは×××の註文が絶え間なく殺到する。そこで、毎晩九時までの強制殘業がつゞけられる。十時、彼が擂潰みたいになつた肉體を曳きづつて歸ると、彼の三疊の部屋には必ず厳然と黨の仕事が待ち構へてゐる。だが、ヽヽヽこの勞働階級ヽヽヽのためヽヽの仕事は、彼の先刻までの疲勞を一氣に蹴とばしてくれる。そして、この仕事を終へると、彼はそのまゝ、眠つたのか死んだのか解らなくなつてしまふ。――これがAの一日だ。「秋」の忍び込む隙もない。

だが、Kの手紙はまだつゞく。

――同志A。秋の夜の獨房はまるで海の底だ。これに青白い月光でも射しこめば、全く哲學詩人にでもなりそうだよ。呵々。閑な時間を持て餘して、色々なくだらぬことが次から次へと思ひ出される、どうせくだらぬことしか書くことを許されぬのだし、それに僕は今一字でも多く文字を書きたいのだ、君こそいゝ迷惑だらうが、我慢してくれ。

――同志A。運動をしてゐる者には季節は無い。このことは、僕よりも君の方が良く解つてゐるだらう。ヽヽヽヽヽヽヽヽヽヽ、ヽヽプロレタリアは何時も幾多の嵐の下にさらされてゐる。僕は此處に來て、やつと何年ぶりかに季節といふものを感じた。そして今は秋といふ季節が持つ自然の特殊な影響をうけて、ずゐぶん古い昔のことまで追憶の中に蘇つてくるのだ。

――同志A。たしかに去年の秋だつたかと思ふ。君と二人で、城西方面のある研究會に出かけたことがあつた。その途中、僕は妙に懷かしい情景をみて心うたれたことがある。ある空地の草原の中で子供たちがお月見をしてゐたんだ。草の上に莚を敷いて、薄の穗や女郎花なぞを飾つて、十二三の娘や四ッ五ッの男の子などが五六人、よく澄んだまんまるい月に向かつて童謠を合唱してゐたつけ。小さい方の子供たちは、まだよくもとらぬヽヽヽ口で皆について歌つてゐた。僕は思はず立ち止まつたが、急に眼がしらの熱くなるのを覺えた。何故と理屈をいふ程のことでもない。僕は急に恥かしくなつて、君にもたゞ默つたままで行き過ぎたが、から言へば、君もあの時のことを思ひ出してくれるかも知れない。勿論、こんな甘い感傷は鬪爭の妨害になる不要の贅物だ。惡だ。僕は以前から考へてゐたんだが、唯物的といふ點では、一般的にみても、勞働者よりもむしろインテリゲンチアの方が徹底してゐるやうだ。だが、インテリの唯物的な感性の底からは、ちよいち

よいこんな感傷が覗いてみせる。或はこれは、唯物的とまではまだ行かないで、非感情的と言葉をかへた方がより適切かも知れない。ところが、勞働者は非常に感情的なんだ。そして多分に感傷的でもある。むしろその日常は、インテリよりも感傷的だと言へるとおもふ。ところが、それが、、、に、、する場合になると、例へば、、、、、、だとか、、だとかの場合、この個人的な感傷なり感情なりは物凄い集團性を帶びてくる。それは、單に群集心理などとあつさり片附けられる性質のものではなく、そこには、勞働階級の特殊性が強烈に反映されてくるんだ。この何物をも燒きつくす、、性の感情はインテリには全く緣遠いものだと思ふ。むろんこれは原則的な意味なので、例へインテリでも、彼が集團的な階級鬪爭の中で徹底的に鍛へられてゆくと、久しい年月の後には戰鬪的な勞働者と同質の感情・感覺を持つやうになるのだが。その場合、彼はインテリと呼ばれるよりも、むしろプロレタリアと呼ばれる方がふさはしいのだ。だが、こんなインテリは百人に一人も難かしい。特に比較的に若い日本のプロレタリア陣營には、まだこんな男は居ないらしい。その點、僕なぞは哀れなインテリの典型だ。此處に來て、一層その感を深くした。と言つても、誤解しないでくれ。僕は決してプロレタリアの、、、、、ものではない。解放運動に對する僕の信念と鬪志とは、熔鑛爐の鐵のやうに燃えさかり沸きたぎつてゐる！（手紙はこゝから以下五行半ばかり、黑々と抹殺されて、、、、、の跡を示してゐた。）さうした奴等の、、、と、、して無念にも慘敗したあの工場に、僕が入り込んでまだ間もなくのことだつた。だから、ちようど一昨年の今頃だつたかと思ふ。例の通り毎晩殘業が十時までつゞいてゐた頃だつた。ある晩、夜業も終つて、道具の手入をすまして風呂場の方へ行かうとした時だ。機械の騷音の消えた工場の隅で、僕はふと蟲の聲を聞きつけたんだ。で、その薄暗い片隅を幾分茶目氣分も手傳つてバタ／＼足踏みをやつてみると、蟋蟀が一匹跳び出したんだ。引ッ捕へようとして二三度掌を伏せたが、そいつは身輕く跳ねて萬力の蔭の所で見えなくなつてしまつた。風呂の中につかつてから、僕は鐵製の大きな機械ばかりの工場の中で鳴いてゐた蟋蟀の奴が可笑しくつて仕樣がなかつた。近代資本主義の生産點に迷ひ込んだ一匹の秋の虫！　こいつアどうも、僕に對する素晴らしい皮肉みたいで、とても辛辣な諷刺だと感心したね。僕は工場からの歸るさ、どうにも抑へきれなくて何度となく苦笑をもらしたものだつた。この皮肉な小事件は、この獨房の中に移されてからでも、それを思ひ出す毎に僕を失笑させてくれる。

——同志A。面白くもねえことばかり讀ませやがる。と氣の短かい君はもう怒り出してるかも知れない。だが、こんなことを書いたり話したりするのも、此處では一つの安全瓣になるのだ。

——同志A。本當に書きたいこと話したいことは、うんとあるんだ。しかし今は、同志Aよ健鬪を祈る！　としか書けない。

——職場の感激は愉快だわね。

讀み終つたR子は、だが別に愉快さうな表情もしないで、低く呟いた。Aも沈痛な面持で默りこくつてしまつた。

Aは熱烈な同志愛をこめてKのことを追想した。——Kは生一本な男だつた。彼は、インテリによくあるやうな殊更めいた勞働者風の言葉や服裝をつくろひはしなかつたが、その癖、彼の研究會での說明は非常に具體的で綿密で勞働者にはよく解つた。彼の話には、その言葉の素直さのうちに烈しい熱情が迸つてゐた。彼は單なる講師ではなく、立派な、、、であり、、、であつた。そして、一昨年の冬の△△の爭議の時には、彼は立派なストライキ・マンだつた。彼の豹のやうな精悍さには指導者達も驚嘆してゐた。勞働者達も彼をインテリとしてゞはなく、全く生れながらの同じ仲間として心から信賴してゐた。そのKがこんな手紙を送つてきたのだ。この輕々と如何にもおどけて書き流した言葉の底に、Kの苛借なき自己批判の鋭さを見出して、Aは頭の下がるのを覺えた。三・一五で囚へられ、、、、、、、、、、、、、、、、、、、Kは彼一流のメスで自己の弱點を餘すところなく批判したに違ひない。彼ほどの鬪士にしてなほ清算し盡されずにゐたインテリの贅物を笑つてゐるのだ。彼が言ふ如く、よし若干の殘滓を殘してゐるとしても、誰が彼の精進を笑ひ得よう。同志Kよ、健在なれ！

AはR子にレポを渡して、同時にKへの傳言を賴んだ。だが、Kの手紙のやうにおどけて……

——今度、Kに面會にゆく人にから傳へて貰つて下さい。(以下二十六字削除)とね。それから、Kの言葉の通りに、俺達には「秋」はない。たゞ、今夜、「秋」は獨房からの珍らしい訪問客だつた、とね。

——これは二八年の秋の話——

とぎれとぎれの溶影

高橋丈雄

I

線路は、石塊を赤く、枕木を赤く、水氣に伸びきつた雜草も、冷く並んだ屋根瓦も、すべて一色の茶褐色に焦しつくして走つた。

貨物自動車をのせ、運送車をのせ、自轉車をのせ、農夫をのせ、小學生をのせ、牝牛をのせ、黑犬をのせ、埃りつぽく白ら白らと道は走つてゐた。

定時刻には運轉手台に黑鞄が乘つた。

どの停留所にも赤い函が一つづつあつた。

停車らぬうちにピョイと飛んで、斜に走つて、鞄を穴に突込むと、

手紙、新聞の白い堆積がなだれて……、赤い函が閉まり、黒い鞄が閉まり、出入口が閉まり、——かうして停留所、停留所に地下足袋が、それぞれ違つた角度の斜線を一本一本描いて走り去つた。

たつた一つ赤函を持たぬ停留所があつた。それほどその停留所は小つぽけで、附近の人家も疎らだつた。

赤い屋根が五つ並んで、前にコスモスが咲き並んで、眼の置きどころによつては池がそれを映してみせた。まんなかの家の貸家札がはがされた。

停留所と家とをつなぐ道の兩側には坦々と小松が茂つてゐた。

初秋の空のもと、道を一人、僕が貸家探しに疲れた足をとぼとぼ運ばしてゐた……。

2

妹には悲しいことが多かつた。階段を駈け上つて來ては僕の胸に斷髮を伏せて髮を震はせた。

——こんな家にもう一生ゐないわ！

——お豆腐の水かへとかないなんて、そんなこと氣がつきやしないわ！

わがまゝな聲をあげて泣いてゐると、姉が階段をあがつて來ては兄妹のまへに坐つた。

死を戀ひながら、僕はたゞ無暗矢鱈に歩いた。死んだ弟の看護疲れに身體をすつかりこわしてしまひ、兩親の亡い後の世事のうるさゝには精神も全く疲れ切つていつた。

大阪の夕の空にははたはたと蝙蝠が飛んだ。北へ北へ無數飛んでいつた。

——蝙蝠來い……

——行燈にかくれて拿きて來い！……

見あげて唄ふ子供たちの顔を淵のいろをした薄闇が濡していつた。

——郊外の自炊生活なんかうまくいくもんか。

——二人ともほんとに我儘なんですわ。おとつつあんや、おつかさんが甘やかして育てすぎたからよ。

——あんなに可愛いがつて、しまいに、、、、、、、ゐるやうなことになるぜ。

義兄は分別臭い笑ひを洩しながら、酒に濁つた眼を姉に向けた。

3

いゝチヤチな洋室はガランとして壁ばかりいたづらに白く、額、カーテン、テーブル、椅子のたぐひはなに一つなく、床は板の間に花莚が敷いてあるつきりで、この洋室はなにをする時に使つたらいゝか判らなかつた。

せゝつこましい四疊半の方は、疊はぶかぶかで、敷居と鴨居の隙がひどいとこになると一寸ちかくもあいてるし、押入の唐紙はすつかり破れ汚れ、庭に面した硝子戸は無理にあけたこすると硝子板が飛んで出

さうだつた。

4

安値い石油焜爐はお汁を零すたびに縮んで來た。急に臭い石油のにほひが鼻を衝くので見ると火が消えてゐた。穴に塵埃が塞つたのかと針でつゝついて見たがなかなか出なかつた。いらいらして針を一本曲げてしまつた。御飯が半煮えなのでなほ周章てた。――石油が切れてると知るまでにいゝ加減、時間を費してしまつた。壜にも石油が無くなつてゐるので揮發の僅かあまつたので間に合はしたが、すぐそれも消えてしまつた。苛立つて聲が尖つて來た。妹は七輪に炭をついだ。家中が煙で一ぱいになつてやつと火がおこつた。

生のまゝ水を吸ひ盡してるお米へ水を加してかけたが、うはつらの生のうちに下が焦げついて來た。水を増してお粥にしようとしたがゴリゴリでシンばかりの御飯が出來あがつてしまつた。次の鍋をかける氣力も無く、部屋一ぱい散らかしたなかに二人は茫然してしまつた。鍋のなかには玉葱、馬鈴薯、大根、糸蒟蒻、燒豆腐のたぐひが冷たい膚を見せてゐた。

――兄さんはなんでもあたしの セイにする！

――だつておまいが石油のなくなりかけてんの知つて取りにゆかなかつたんぢやないか！

ヒステリツクな聲を立てゝ爭ひあつた。

妹はうどんをいひに台所の下駄をつゝかけた。

僕は食べさうにもないそのお米を新聞紙に包んだ。近所に見つともないゆゑ、こつそりそいつを池の叢に捨てに出かけた。

5

赤茶けた、まだ仔のやうな牝犬はいろんな媚態をしめしながら搦みついてゐた。

足が三本しかない、ひどく汚い牡犬は、眼をしよぼしよぼさせてうるささうに、それでゐて、いつまでも凝つと動かずにゐた。

硝子戸の内部から顔が覗いてゐた。

額をピツタリ、ガラスに張りつけて犬から眼を離さなかつた。

孤獨を狙つて、悄然がのたうつ晝午だつた。

泥のやうな午睡のあとの重い頭に、英語をつめこまうと膝のうへに本を持つて來たまゝ、いつまでも二匹のいきもののヘンに荒蕩とした淫なすがたを凝視してゐた。

6

鉛色に池の面を沈めてゐた娉形の灯影がいつか消えていつた。たゞ一條、僕の家だけが頑強にいつまでも光線の縞を流しつゞけてゐた。

餌のない臺所を、しばらく鼠はがたこといはせてゐた。

油揚が一片、ぐつたり睡つた妹の髮の影からはみ出て轉つてゐた。

こつそり閉ぢた僕の眼は決して眠つてゐなかつた。いへば昨日、一昨日、大根や馬鈴薯や部屋においた油揚まで嘲られた悲しみと怒りに

大人氣なく昂奮してゐた……。

部屋と臺所を仕切る障子の紙が破けて穴が出來てゐた。

妹の頭の位置が動いたので、油揚は光りの外へ放り出された。

一穴から漏れた鬚を二度、三四度覗かして窺つてゐるらしかつた。

するつと尻尾が這ひ下りた。

斜に疊を行つて、戻つて、行つて、ぢき赤く濕つた鼻先が油揚の端にとまつた。

ひつこめて、またあてがつて、狡つからしい眼を忙しく働かしてゐた。

突如僕が跳ね起きた。

瞬間、狼狽した鼠の行方は僕の二本の足で遮られた。——足はぢりぢりと追ひつめて來た。

しばらくあせつてゐたが、追ひつめられると、不意に首の方向をかへて、暗く口を開けた隣りの洋室の闇に、小さい身體を轉ずやうにして遁れていつた。——つゞいて僕の身もその闇へ吸ひ込まれた。

境の扉をピシンと閉めた。空間を模索つてゐた手が電燈の蓋にぶつかつた。電燈がついた。四方の白い壁から撥ね返される光りのなかに、小さい生物の身を潜める隈さへ見出せなかつた。そつと近づくと、壁にそつてひよろひよろ走り出した。しつこく追ひまはす緊張した面白味が病的に僕を夢中にさせた。深夜の部屋を二十分ばかしも、あるひは靜かに窺ひよつたり、あるひは座蒲團を投げつけたりした……。

金盥のまるい水陽炎が壁に搖れてゐた。

寢不足の慥い手で、水の溢れぬやうにもちやげて、したの座蒲團を取つた。

死骸はひらべつたくなつて、ちらつと黑血が見えたやうな氣がした。いそいで新聞紙に摘んで池の縁まで持つていつた。

腐つた御飯のそばにぽいと投げて、ゆつくりと戻つて來た……。

7

さびしさにぢつとしてゐられない日暮なんぞは、どんなつまんないのでもいゝから映畫が見たくなるのだつた。

小皺に黴臭い外套を行李の底からひつぱり出してひつ掛け、妹を連れて新世界あたりまで出かけた。

くだらない寫眞に幽鬱にされては館を吐き出された。

二十錢均一の洋食屋に妹は肩掛を忘れたり、お汁粉屋に五十錢貨と十錢銀貨をまちがへて拂つて來たりした。

いつも陰鬱に默りこんでしまふので歩みも疲れた……。

8

枯れたコスモスの枝に蜘の羽根がひつかゝつて慄へてゐた。

縁に出て、斷髮をジヤキジヤキ刈つてやつた。

鏡に映る僕の白眼は蒼く濁つてみえた。

……不圖、鋏を止めて眼を凝した。大急ぎで僕は庭に下りた。嬉しさうに拾つて持つて來てそつと妹に見せた。——隣家の鷄が產み落していつた玉子だ。

——いつも庭を荒されてるんだから貰ふもんか！

小兒のやうによろこんで鋏の先でコツコツ穴をあけた。仰向いた。生溫いドロンとした液體が喉をダクダク落ちていつた——。

9

……はじめ電柱がぶつ倒れて來た。ハツと立ち停つた瞬間、すばやくそいつはもと通りに突立つた。一足踏み出すと、また倒れて來さうな氣勢を示した。歩き出すと左右から家々が壓ひかゝつて來た。看板がおそつて來た。屋根がおそつて來た。樹々がおそつて來た。戶が。瓦が。幹が。

——こいつは氣が狂ふんだ！……背筋を冷い線が熱く走つた。ちよつとでもぢつとしてたらやられるぞ！——走るんだ！　走るんだ！

無我無中で駈け出してみた。方々から追つかけるやうに殺到してくる直線はそれぞれ月の光りをヒラメかしてゐた。

人家が途絕えると今度は距離の遠さによる凄さで、森や田畠の黑い線がおつ覆さつて來た。

神經衰弱なんだ。——心はわらはふとあせつたが恐怖は去らなかつた。いつもと違つた停留場から下りたことを後悔した。

井戸に飛びこんだ祖父の姿が道のうへを過つた。束髮の叔母の後姿が浮んだ。腕をガクガク噛んでる父の姿があらはれた。狂氣の毒血がたうとう俺の腦をめぐりはじめたんだな。ざまア見やがれ。——わるく心は、そんなとこで落付いてしまつたが足は正確に宙を飛んでゐた。

晩秋の空氣は冷え冷えと澄んで呼吸苦しいのが快かつた。

蒼い道はまつしぐらにつゞいてゐた。

電線が頭腦のうへをすばやく流れつゞけた。

走つて、走つて、走り拔いた。

瓦斯タンクが背後へゆるゆると動いて行つた……。

（1929・8）

二組の登場人物

中村正常

1

病院の部屋のこと

男　（ベッドに仰臥してゐる）おい。

女　（窓ぎはの椅子に背伸をみせてかけてゐる）

男　こつちへこい。
女　ところが、いやなの、正直に云へば。
男　來てくれ。
女　仕方がなければ、行くわ。――はい。
男　僕はやつぱし、死ぬんだらうな。
女　はい。
男　助かる見込はないんだらうな。
女　はい。
男　さうなのか。
女　はい。
男　はい、つていふ他に口をきかないことにきめたのか。
女　はい。
男　そのほかの返事はしてくれないのか。
女　はい。
男　ほかのこと、いつてくれ。
女　いや。
男　はい、つていふ以外には、いや、つていふのか。
女　はい。
男　こつちを向いてくれ。
女　いや。
男　返事はその二種類にきめたのか。
女　はい。
男　代りばんつにいふのか。
女　さう。
男　返事は三つだな。
女　うん。
男　四つか。
女　さう――。
男　死ぬ前に、僕からなんかきいておきたいことはないのか。
女　ない。
男　死ぬ前に、僕になんか云つておきたいことはないのか。
女　ない。
男　向うに行け。
女　はい（向うに行く）
男　勝手にしろ。
女　はい。（窓ぎはの椅子に背仲をむけてかける）。
男　そこでなにをしてるんだ。
女　泣いてなんかゐない。
男　なにをしてるんだ。
女　外をみてるの、地面の上をみてるの。

男　もうおこつてはゐないのか。

女　いゝえ。

男　仲なほりをしようよ。

女　いゝえ。

男　おこつた顔でもいゝ、みせてくれ。

女　にらむからいや。

男　みたいんだ。

女（ベッドの方にゆく）見納めにするつもりなの。

男　——死ぬとはまだきまつてやしない。（女の袂をつかんでしまふ）

女　——それはなんのまね。

男　はなすもんか。

女　持たしておいてあげるだけ。

男　一生懸命みてるんだ。

女　ねえ、私の顔にまだ可愛いゝところが、のこつてると思つてる。

男　可愛いゝとも。

女　うそ、口惜しいくせに。

男　さうだ、涙がこんなに流れる位ゐだからな。

女　（男の手をふり放さうとする）手を放していたゞけない。——無理にすりや、ことはらずにふりはなすことだつて出来るけど。

男　きかせたいことがある——墓の下に入つてしまはないうちにな。

女　（あとじさりしながら）あんまり立派なお墓作つて貰つと思つたら間違よ。

男　どうだつていゝ、墓なんか。

女　えゝ、考へてるの、秋の末に小つちやい棒杭を立てようと思ふの。

男　墓なんかいらない。

女　だつて、あつた方がいゝわ、遠慮しないで。

男　いらない。

女　さう、ぢあ。

男　そのかはり、——

女　いやなの、あんまり面倒なことは。

男　（枕の下から保険證書を出す）これは保険證書だ。

女　（遠くの方で）まあ、うれしい。

男　死ねば、生命保険の金が貰へるんだ。

女　死んだ人にはいらないわね。

男　破らうか、——笑つてみせてくれ。

女　はい。（笑ふ）

男　うれしいときには、そんなふうに笑ふのか。

女　ほんとうにうれしいから。

男　うれしいのか。

女　うれしいの、うれしいの…………窓からみてたの、地面の上にだつて、うれしいことはさつきまでは、なささうだつたのよ。

2

地面の上のこと。

青年　さつきも云つた通り、なんだかこの頃僕へんなんだ。だけども、途中でその話はつまんないつて云つて貰ひたくはない、からなんだ、多分、あんたはまだ氣がつくまいが、なんだかこの頃僕へんなんだ。

少女　なアにイ、それ。諾重一噸、幾キログラム位ゐおありになつて。

青年　折角だから僕返事する。今のところ、——でも、明日になりあ、もつとへるんだ。昨日は今日より大分目方重かつたんだ。そのわけは、おしまひさできいとくれよね、どうも、段々目方がへつてつちまふんだ、それはなぜかつていふと、昔からもいふ通り——

少女　身長の方は、どんな具合イ。

青年　そつちの方は、さう目立つてちぢみやしない。

少女　手品みたいねえ。

青年　あ、わかつた。僕はづゐ分わかりがいゝ證據に云ふんですが、なあんだ、あれなんですね、あんたさつきつから手の中で、その手巾、丸めたりひろげたりしてゐるの、それ——この手巾、左樣然らば、あら不思議や、手の平の中へと消え去せてごらんにいイれます、つてあの手品の稽古してるんでせう。

少女　さういはれると、さうなのよ。だけど、この手巾消えてかないゐ方がいゝの、だつてエ、もし消えてかれちやつたら、手のやり場ずゐ分具合がわるいわと思ふわ。もちもち、自然しちやふでせう。

青年　僕ハやり場に困るのは、實け目の方でねえ。下むくと脚がめえちやふし、上向くと目がみえちやふし、横向いてちやつまんないし、——どこ向いてたらいゝでせう。

少女　私には、返事をしたりしなかつたりする癖があるのよ。

青年　で、僕、はづみをつけて、勇氣出して云ふ——さ、そんな手品もうやめて、こつち向きなさい。

少女　やアよう、——ほオら、丸めたでしよ、しはくちやに丸めたでしよ、こんどはひろげたでしよ、はぢつこ引つぱつたでしよ、まだ仲々消えてきさうにもないわよ、この手巾。

青年　おぼえておく、大丈夫だ。

少女　ぢあ、こんどはなんの話しませう。

青年　僕の話きいて下さい、少おし。

少女　私を感動させないでね。お願ひよう。

青年　頭がいたくなるのか。

少女　んゝ、おうちにかへつて、母樣つかまへてきかしてやりたくなりさうなの。さうすると、母樣、こはい顔してよ、感動するような話を、めつたに青年からなんぞきいてくるもんぢあないんですつて。

青年　そりあさうだけどね。

少女　日記にそおつとかいておいても、やつぱし駄目なのよ、うちの母樣つて探すのんまいの、いくら上手にかくしといても、私のものなら、なんでもありかしつてるの、この前なんか、私の靴下留め片一方どこにある、つてきいたら、まあおどろいたわ、お机の上の讃美歌の本の間に挾つてますゥ、つてかういふ具合なの。そいで行つてみるとちやんとそこにあつたわよ。私がね、靴下ぬぎながら唱つて、しほりの代りに、挾んどいて、失禮だけどつい忘れちやつたらしいのよ。

青年　いまはもう秋だからいゝけれど、――

少女　なアにイ、急に。

青年　夏だつたら目まいがしちやふよ、きつと。

少女　わかんないわ。

青年　地面の上の出來がさ、やだ、やだ。

少女　そんなにいやなの。

青年　告白するとね、夏中僕戀してたんだ。

少女　まア、おどろいた。

青年　だけど、秋になつちやつたから、もうやめちやあ。おどろくのおよしよ。

少女　まア、おどろいた。

青年　どして、そんなにおどろくんだ。

少女　感動つていふの、こんなのかしら。――別にわるくはなささうねえ。

高千穗の歌

與謝野寛

わが車雲より出でて高千穗の青きをひと目みる溪間かな

高千穗の燒石を錬り丹を塗りし鈴に先づ聽く高千穗の音

高千穗の膝のあたりのむら山の一つに寢ねて凉し我が夢

熱き湯を榮の尾の溪に朝浴びぬ高千穗に行く淸まりのため

高千穗を空に望めば心さへほのぼのとして明りゆくかな

都にてうなだれてのみ在りしひと高千穗に來て長き杖振る

高千穂はふもとの山も大空を行くことのごと雲分けて行く

世の常の圓さにあらず高千穂は翡翠の箜篌を中空に立つ

高千穂の路にて赤き蛇を打つかかる事して善きや悪しきや

高千穂は中空に在り我が行くは虹のいろする西の切匪

踏むたびに高千穂の砂くづれきぬ我を拒むや我を試めすや

高千穂のけはしき坂を行く我れの荒き汗ちる焼石の上

高千穂の焼石を攀ぢおもへらく虹にあらずば天の浮橋

高千穂の雲間を分くる路長し馬の背ならず龍の背ならん

高千穂の一つの峰は迦具土の飛び去りしまま有るは洞のみ

高千穂の朱とむらさきの切厓よ天のこころもの襞と云はまし

フラスコを肩より下ろし高千穂の頂に飲む薯の焼酎

一杯は先づ高千穂の神にとて噴火の穴にそそぐ焼酎

高千穂の雲に坐りて唐藷の焼酎を飲み物を歎かす

高千穂の頂にして見上ぐれば霧にまじりて白し天つ日

思ふこと高千穂に來てすがすがし心に近く天の門見ゆ

こころをば高千穂に來て我れ放つ行け青雲の天の通ひ路

いただきに天の八重雲降りに降る猶高千穂は神の代ならん

高千穂の高きに立てば天つ風われをも秋の雲として吹く

ここに我れ神代の巻を読むならでみづから分けつ高千穂の雲

高千穂の焼石にゐて紅き實を舞ひ鶴草の著くる心よ

高千穂に在りて歌へば我が聲を風吹きちぎり中空に置く

たそがれて猶青めるは高千穂と韓國が嶽その外は雲

高千穂も榛の大樹も湯の瀧も兵兒の心を現はせるかな

高千穂の高きを踏める喜びもほのかに寂しせんすべも無し

ふことは、人類文化の將來の盛衰に關して、如何に重大なる意義を有するかは、明かに了解されると思ふ。新しき女性がよく貞操を守るや否やと云ふことは、人類文化の將來に對して、直接及び間接に如何に重大なる意義を有するかを考へ見よ。又其の名稱は如何にあらうとも、とにかく淫賣婦の存在することは、ヤハリ直接及び間接に、現在の文化に對して、更に將來の文化に對して、如何に深大なる影響を及ぼすかを考へ見よ。そうして新しき女性が貞操を守るや否やは、主として男性も貞操を守るや否やによりて決定され、又あらゆる種類の淫賣婦は、つまり男性が貞操を守らないが爲めに起り、又存續するものなるを考ふれば、男性が性的好新性を抑壓し、貞操を守ると云ふことは、實に人類文化の將來に對して、甚深甚大なる意義を有することは明白である。

（七）　理想としての貞操觀念

男性が貞操を守ると云ふことが、人類文化の發達に對して、如何に甚深甚大な意義を有するかは、上に述べし處によりて察知されると思ふが、又長い年月を經て歷史的に固まれる、現在の男性の性的生活から考へて、男性が一般的に貞操を守ると云ふことが、如何に困難であるかも、ヤハリ上に述べし處によりて察知されると思ふ。尙ほ男性が貞操を嚴守するとすれば、妻たる女性の健康が、果してよく維持されるや否やを問題とする學者がある。そうして此の問題に結び附いて、出產制限問題が起つてくる。併し私は此處に此等の問題を論ずる暇はないから、又私自身はかゝる純生理學的問題を、自信を以て論ずるだけの生理學的知識を有しないから、敢て之れに觸れずに置く。そうして男女共に貞操を嚴守すると云ふことが、今後性的道德の理想として確立さる可きものであると見る私の見解の意味を、尙ほ少しく辯明して以て本論文を完結したいと思ふ。

眞實な意味にて理想と云ふは、全然實現し得られない思想を意味するのでない。かゝる思想は空想或は妄想にして理想でない。さればて完全に實現されて居る思想も理想でない。更に直ちに完全に實現し得られる思想も理想でない。尙ほ他日完全に實現され得ると考へられる思想も、ヤハリ理想でない。眞實なる意味にて云ふ理想とは、つまり吾人の奮勵努力によつて漸次に實現され行き、吾人は其の完全なる實現に近づき行くが、しかも完全には實現され得ない思想、約言すれば吾人が完全に實現し得ないが、しかも其の完全なる實現に、無限に近づき得る思想である。要するに高等數學に於て、極限と稱せられるが如きものである。そうして私は理想をかゝる意味に解して、男女共に貞操を嚴守することが、性的道德の理想として確立さる可きものと見るのである。されば社會全體を通じて、男女が悉く貞操を嚴守すると云ふが如き社會は、如何に遠い將來に於ても恐らくは實現されまい。が、しかも吾人は奮勵努力して、以てかゝる社會に無限に近づき行く可きである。將來に於ても、完全に實現される見込みがないと云

ふことは、決して理想としての理想の價値を傷けるものでない。否な完全には實現され得ないが、しかも吾人は無限に其の完全なる實現に近づき得ると云ふ點に、理想としての理想の眞義が認められるのである。要するに男性が貞操を守ると云ふことは、如何に困難であらうとも、比較的には小數であるが既に之を實現して居る男性があり、又文化的敎養を高め强めることによつて、益々かゝる男性が增加し行くことが考へ得られる。かくて吾人は社會全體を通じて、男女共に貞操を守ると云ふ社會に、無限に近づき得るのである。私が貞操は男女共に嚴守す可き、性的道德の理想として、確立さる可きものであると云ふのは、以上述べしが如き意味に於てゞある。

私は七八年前から健康の爲め、又社會學體系の建設及び社會學史の著述に、專ら力を注がんが爲め、新聞や一般雜誌の寄稿の依賴を一切斷つて居るのであるが、然るに過日或大新聞の週刊に、貞操問題に關する私の「談」として掲載されて居たものは、實際に私が同問題に就て考へて居ることと、餘程異なれるの如き印象を、讀者に與へる恐れがあると思ふが、私はかゝる實際的な問題に關して、私の意見が世間に誤傳されるのを好まないから、改めて同問題に關する私の意見の大要を、通俗的に論述する一文を草し、本雜誌の一隅をかりて、之を發表することとしたのである。(昭和四、八、二二)

超現實主義の詩論

春山行夫

我々は今日酋長等と猪狩りに行き、洞窟で篝を焚いて獲物を祝福しない。我々の詩が自然發生の歌謠に袂別する理由である。自然發生の詩は歴史の中にあるにすぎない。

歌謠と分離した詩は一方意味の發達に從つて、文字に固定する文學性を確立し、他方韻文法則の發達に從つて、言語の音樂性を確立した。發達といふのは、藝術的、或ひは技術的な知覺の發達を指す。

歌謠は卽ちそれを構成する二つの部面の發達に從つて、各々その特徵に立つ二つの藝術に分離した。一つは韻文藝術であり、一つは散文藝術である。この二つの藝術は、不思議に各々の機能だけを本質と考へて、韻文に於ては象徵主義へ、さうして散文に於ては自然主義に行きついたのである。

象徵主義とは「事物を明瞭に示すことは詩興の四分の三を失ふ」（マラルメ）ところの、想像の才能による創造力の自由な作用を目的とするものであり、自然主義は「一つの事物を一つの言葉」（フロオベル）に局限する現實の再現であり、簿記であるところの人生の把握を目的とする。この目的的に背馳した二つの藝術が、性質的に呼ばれると、一、自然主義或ひは現實主義であり、二、超自然主義或ひは超現實主義である。

＊

すぐれた象徵主義の詩は從つて何等直接の意味によらないでレアリテ（現實）を創造する。象徵主義とは、「呪禁の如き」（プレモン）漠然たる世界の暗示そのものが目的でなく、さういふ暗示をアナロギイ（類推）とする。意識の形式化の可能をバランス（對等）とするオルドル（秩序）の知覺に本質があらねばならない。かういふ意識的な形式活動をポエジイと呼ぶ。

超現實主義はポエジイの問題に關するメタフイジックな精神活動である。

＊

超現實主義の詩は、純粹の現實、或ひは絶對の現實を發見するポエジイの二三の應用にすぎない。その傾向は大體次の如くである。

1　秩序ある世界はより高い、より廣い現實の世界である。純粹なる象徵主義の如し。

2　精神に關係のない世界は永遠の現實の世界である。物理的メカニズムの如し。

3　理性並びに現實の制限する現實は絶對の現實に非ず。從つて現實の破壞は超現實主義的精神に一致す。、、、、、、、、、、し。

（1）は現實に關係し、（2）（3）は（1）に反對し、更に精神を用ひると否とに於て相反する。

＊

フランスの純粹詩、アメリカのフオルマリズム、イギリスのインテレクチュアリズムもポエジイを規定する點に於て超現實的であることは注意に價する。

名投手列傳

春日俊吉

乍憚一寸口上

あまり遠くない過去、それから現在、そしてこれは洋々として盡きる所のない未來、を通じ、わが日本の野球界から十人の名投手をピック・アップして來て、その銘々傳を書いて見ろ、と云ふ課題は、甚だしく近頃の私の頭を悩ました。私の眼の前には、とても十名どころの小人數ではない。二倍、いや、少くともその三倍位ゐは、右利き、左利き、長身、短軀、緩球、強肩、上手投げ、下手投げ、色さまざまな名投手達の、鮮やかなプレート捌きがチラついてならぬ。

辛うじて、或る場合は心を鬼にして、漸く選び終つたのが以下の十名投手であるが、これも、彼がいつどの試合に、何個の三振を取つて、何對〇で勝つたとか、彼の武器がカーブか、コントロールか、など丶、一々コマかく書いた所で、それが大した智慧のある仕事とも思へない。私はその『名投手』の內容に、素質、技能、頭腦は勿論のこと、その人の持つてゐる大衆價値、つまり一般の『人氣』をも加へて採點した。それからもう一つは、投手としての『神經』を、格別に重要視した事である。その選手が投手として成功するか、しないかは、技術や熟練よりも、私は寧ろその人の『神經の作用如何』にあると思ふ。

小野三千麿君

珍らしや、神奈川縣立師範學校、つまり鎌倉師範の出身で、夙に大器を內外に認められ、横濱の平沼代議士あたりが奔走して、師範から三田へ引拔かれた人物。師範學校へ入學したのも、お父さんが鎌倉を中心に、引續き最近まで小學校の校長先生であつたからに外ならない。アメリカ流に呼んでミッチー・オノ。その長男であつて、明治三十年の生れだから、とつて三十三歳。干支はひのと酉。九星は四緑。山下火とおいでになる。

最近の球界に、とにかくこの人ほど大衆の人氣もあり、技も冴え、神經系統も投手にふさはしく出來あがつてゐた選手はちよつとない。早慶戰の中絶で、永く後世に傳へられる大試合の好記錄も殘さなかつたが、全盛時代のこの人と來たら、大下、河合君あたりの稻門大打者が、大方三球、乃至は四球を出でずして、アッサリと料理されてゐた。カーブによく、あの堂々たる體格たから充分の球速は有り、その上絶倫のコントロールを持つてゐた。今だつて三日位ゐ、ブッ續けにビールを

飲んだ不眠の後でも、プレートへ立つて球を握らせたら、駈け出しの一流投手など遠く及ぶまい。

岩瀬五郎君

舊姓谷口、釜山商業の出身、いまは大連の岩瀬家の秘藏婿。キリヽと引しまつた顔の、旗本の三男と云つた風貌もあるが、神經の線は極めて太く、鋭く、いさゝか峻烈にも近い。外見とは正反對な、無類の負けず嫌ひであつて、試合中にも神經が昂ぶつて來ると、顔色やゝ蒼白となり、脣などピリピリと痙攣する。比較しては可笑しからうが、先年明治の中津川投手が思はぬ好投をして、早稻田を大敗させたとき、同君は戰友に擁されて嬉しさに號泣した。が、わが谷口君はその昔、無名の一田舍投手から、一躍早稻田の救ひ神となつて明治を零敗させたとき、冷然として友の賞讚に耳を傾むけてゐた。

日本野球史を通じても、最大なる左腕投手の一人と云つてもいゝだらう。小野君のどこか大陸的な、陽性な一面に對して、多少陰性投手の氣味もあるが、陰性もこの位ゐ徹底すれば却つて痛快味が増す。ちよつと見ると華車な體格の様だが、裸體になつた姿は實によく均勢の取れた、充分男性的な筋骨を有つてゐる。それでなくては、内外角を突く得意の速球と、殆んど變らぬスピードを有する彼のインドロが、今もつて昔の精彩を失はぬ筈がない。

竹内愛一君

小野、谷口の頃の時代を承はる名投手には、まだ君のほかに明治の湯淺、少し下つて慶應の永井、濱崎、人氣の點では以上三君の上位にあつた帝大の東など、誠に忘れ得ぬ顔ぶれもあるが、私が特に愛一、竹内君をこゝに拉し來つた理由は、君の持つ不思議な存在理由に外ならぬ。技、素質、頭腦の點、或ひは以上の誰よりも、君はこれに惠まれて居なかつたかも知れない。しかし、君には古往今來、或ひは唯一無二と云へる程度の、「神經」があつた。君はその神經で、人を喰つた度胸一つで、群小一流投手を後へに從へ、早慶復活戰の連勝投手となつた。

京都一商の産。大正十年の鳴尾の大會には、高木、田島時代の慶普を負かし、藤本森時代の松山商業をも破り、大連商業に四對四で大勝し乍ら、足を傷けて優勝戰に出場出來ず、北島、井口時代の和中に大敗した。招かれて早稻田に入り、名手谷口卒業後を引受け、あの呑氣屋が暫らくカンカンになつて猛練習をした。其うちに持前の糞度胸は益々圖太くなり、相手が强打者だらうが、へボだらうが更に頓着はなく、こいつ打たないなと覺つたら本壘のまん中へ投り込み、打ち氣な打者には決してストライクを投げず、遂に大早稻田を一時盤石の上に置いて終た。當年とつて三十一歳。この春新婚を迎ふ。京は六條のほとりの、佛具屋はんの若旦那である。

中村峰雄君

閥閲の投手である。竹内君も、不幸にして晩節を全ふせず、早稲田を去つたが、彼は彼一流の朗らかな性格から、あはゝと笑つて濟ませられた。然しわが中村君の場合は、さうは行かない。いまのまゝ、彼が明治のマウンドを去るとすれば、甚だ濁つた印象があとへ殘る。中村君には愛嬌はないが、直情、徑行がある。山口縣德山中學の産。相當富める商家の出。兄弟もたしか男一人で姉妹が二人。甘やかされて生長したせいか、まだ他の選手ほど人間としての苦勞が足りない。

だが、野球では人一倍、激しい苦勞を味はつてゐる。中學三年のとき、山口の高等學校との試合に、九回のゲームで十九の三振を取つた、と云ふ華やかなスタートはきつたが、大豪湯淺君無きあとの明治を、殆んど一人で脊負つて立たせられて、涙の滲む猛練習に身を細らせた。おそらくこの二三年の明治が、リーグであれだけの名聲を馳せたのは、全く君の右腕一本の爲であつたと云つていゝ。神經の線も、少し荒いが細くはない。五尺八寸の巨軀で繰り出す速球と、懸河のようたアウトロにかゝつて、切齒扼腕しない打者は、最近のリーグに一人もゐなかつた。とかくの非難はあつても、現在の六大學リーグでは、不動の實力を持つ第一人者と云はねばならぬ。

宮武三郎君

快男兒である。『塾の宮武』ばかりでなく、わが球界を通じての人氣者である。性格が明るくて、朗らかで、屈托がない。五尺九寸二分、二十貫二百匁、第一、人間を見てゐてさへ氣持がいゝ。神經は、身體の割には少々弱さうな點も見えるが、それはあの豐富な天分が充分これを補ふだらう。おそらく投手として、この人ほど怖るべき打撃力を持つた選手は、開闢以來ないかも知れぬ。いつかなど、この人の打つたゴロが、遊撃の正面へ轉んで行つたのに、餘りの速力でさすが明治の林君でさへ捕りきれず、グラブをハジいて左翼の邪線外に飛び出して、そのまゝ内野ゴロの二壘打となつた例さへある。

元は高松工業の一生徒で、しかも[illegible]投と豪彈の中學記錄を持つてゐた。それが商業に懇請されて轉學し、忽ち野球部の投手となり、甲子園の大會に優勝した。慶應へは入るとすぐ、投手でも一壘手で、五番以下の打順に置かれたためしはない。が、まだまだピッチングは未製品、余程苦勞をしなくては、先人小野の名は壓せない。とつて二十二。二黒のさる年。さりとはデカイお猿さんである。

小川正太郎君

三田の宮武、早稲田の小川と對比されて、全國ファンの血を湧かせる大立物。若いだけに人氣の點では小川君が一寸うは手らしい。宮武君の陽性に對して、再び小野、谷口の諸君と等しく、小川君はいさゝか陰性にも見える。が、これは性格、境遇いろんな點の表はれだから仕方がない。身長に變りはないが、體重には三貫目以上の開きがある。しかし、投手としての修業年限、つまり年期の入れ方では小川君の方がずつと長い。少年野球時代

から勘定をすれば、小川君の投手生活は、ほぼ十年にも近からう。

神經は、これは、宮武君にも一籌を輸すかも知れぬ。甚だ氣の弱い若者である。しかし天分は、素質は、おそらく現在の若い投手團中、順當に行けばこれだけの人は居なくはないか。伊井君でも卒業されるとちよつと困るが、そこは豐富な天分と、長い經驗とで、うまく帳尻を合せるだらう。氣障はれるのは、たゞこの人の健康のみ。

水原茂君

弱冠二十一歳にして、昔の竹内投手にも劣らぬ、人を喰つた大膽無双の一投手が、持駒揃へた三田の陣所に現はれた。水原君である。ピンチに襲はれようが、老巧打者に面接しようが、悠々として眉毛一つ動かさない。カーンと一つ打たれても、ほ、打ちやがつたな、位ゐの氣持で、微笑と共に次打者の討取り策にとりかゝる。記者席で見てゐて、アッと思はず奇聲を放ちたくなるような、打者を頭から茶化してゐるような好球を、プレートのまん中へ投げ込む。少し腹を立てゝ、打ち氣にでも出ようものなら、どっこい、金輪際打ちいゝ球は投げて來ない。

怖るべき不敵の若者である。慶應はこの前もそのまた前も、表看板の宮武君が打たれて、ゲームをイビツにしてから、水原君が代つてちよこちよこと誤魔化した。正に、神經では滿點の年少投手である。あまり賞めちぎると、プレートの上でニヤニヤ笑ふ惡癖でも連發しては困るから、一本クサビを打つて置くが、あれで若し、引續き早明の名打者達を、鼻の先であしらふ藝當が出來たら、日本の野球史には、またこゝに不思議な一存在を殘すことになるだらう。

碣石俊夫君

六づかしい名前だが、たていしと讀む。いま高松商業の五年生。宮武、水原、井川君のあとを引受けて、輿望天下に高い四國球界の寵兒。おそらく來年は、それ等名聲ある先輩の後を追つて、三田の陣營に巨姿を出現させるだらう。中學生でも、巨軀と呼ぶに差支へはない。五尺八寸、十九貫五百目。投げるのは右だが、打つには左り。その打力も、すでに超中學級と云はれること二年。三田はまたこゝに、物凄いスラッガーを迎へる事になる。勝本君と同歳である。

水原、井川君時代に、高松が再度甲子園の覇業を成したとき、碣石君は一壘手として、七番を打つてゐた。その二投手が投げたあと、すぐプレートを襲つて、一人よく打つたが松山に破れ、一度甲子園を休場した。この夏は思はぬ内外野の凡失で、充分の技倆を示しつゝも海草に惜敗したが、大投手の風格は前后二回の試合で立派に、識者の腦裡へ印象づけた。態度もいゝ。スピードもある。制球力にも事缺かぬ。高松の牧野君に聞くと、神經もまた九十點は大丈夫と云ふ。中學時代の宮武、井川君あたりに比べて、とにかく毫も遜色のない投手ぶりであつた。

京谷榮治君

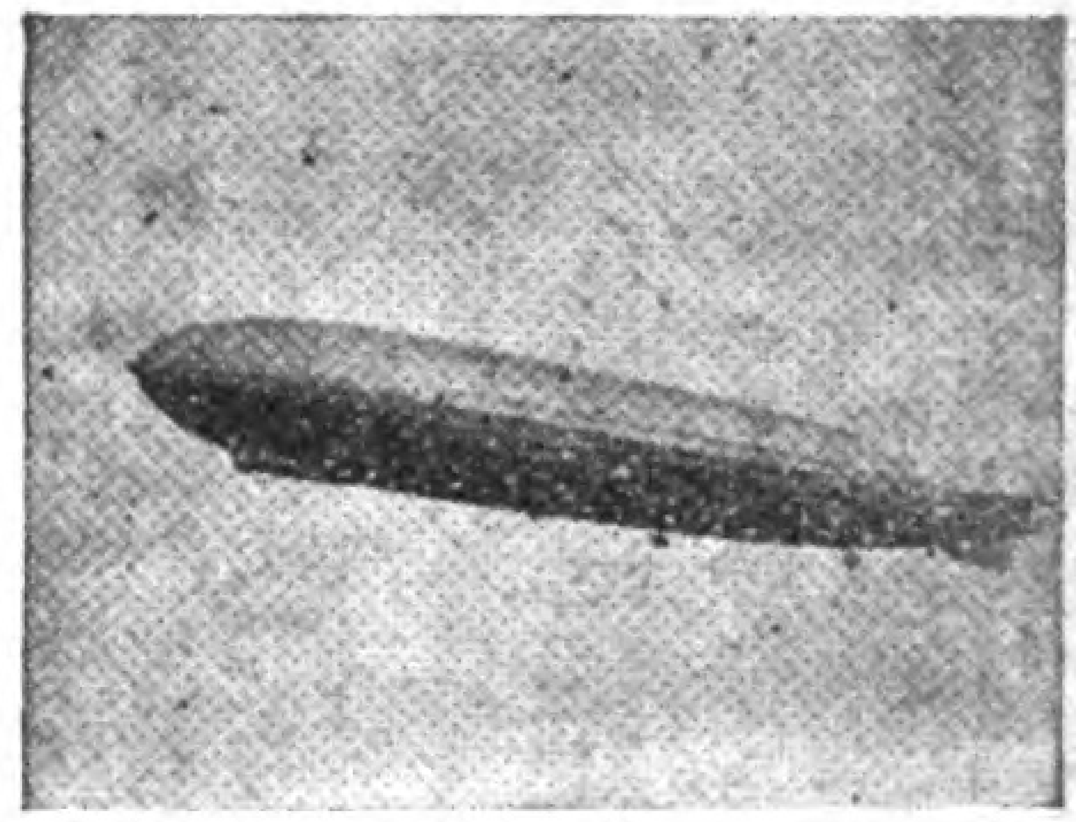
最屓めに見れば『俊秀雲の如し』とも云へるし、高飛車に酷評すれば『團栗の背比べ』とも云へる、いまの中學野球界から、三人の良投手をピック・アップする事は、とにかく普通の神經を有つ者にとつては全く、無謀に近い。辛うじて、高松の磯石君を一人とつた。おあとの二人は、殆んど評者の『好み』にも陷ちようが、まづ小柄な年ら非常にうまみのある投手を一人。それから未製品ながら、豐富な素質に惠まれてゐそうな投手を一人、心を鬼にして選拔する外はあるまいと思ふ。

この小型投手のうちには、過去の濱崎、水原君の樣な投手が、當然豫想されねばならぬ。そこで、私の面前に起つ一少年。京谷榮治君。山陰鳥取一中の產。まだ紅顏、十八才の少年である。小島（現同志社）宮脇（現早大）バツテリーなきあと、彼は三壘からプレートを受次いだ。去年はよく投げ乍ら、梶原、高橋時代の高松中學に破れたが、今年は大患後の惡コンディションにあり乍ら、絶妙に近い制球力を以つて、秋田師範を二安打で零敗、敦賀に四安打で一點、市岡を四安打で零敗させ、鹿商には六安打、五點を許して敗退した。一軍中での秀才で、神經もまた優等。鹿商との準決勝戰に、味方の失策から一擧四點を與へても、なほ莞爾として、興奮する戰士たちを慰めてゐた。

山下好一君

甲子園の大會に、第一回以來オール出場の記錄を持つてゐた和中が、今年始めてそのパアフェクト・レコードを傷つけた。小川正太郎君卒業のあとに、和中のプレートを襲つたのが、三年坊主、十七歲の山下好一君である。三年生、十七歲と云つても、身體を見ては輕蔑出來ない。山下君はすでに五尺八寸、十九貫二百。小川君などより、遙かに內容豐富な巨軀を持つてゐる。打力もまた猛烈を極め、小川、土井君時代にも堂々たる五番打者、マトモに當つたら途方もない大物打ちだつた。

巨軀から投げをろすアウドロは大きく、懸命に投げたら捕手が辭職する程の强球を持つてもゐるが、惜むらくはまだプレートに馴れず、コントロールに乏しい。その爲に四球を連發して、豫選には和商に負けた。所がつひ最近の關西殘黨組大會に、秋非寺球場で四國の俊豪、松山商業と決勝戰を爭ひ、一回兩軍とも一點づつを入れ、一對一のまゝ九回は勿論、二倍の十八回に到るもまだ得點せず、つひに二十一回迄の延長レコードを作つて、二對一で和中を優勝させた。相手の松山はたとへ殘黨組とは云へ、高松商業、中學、廣商、廣陵が、常に苦戰してゐるチームである。山下君が、果して回向院の出羽ケ嶽で終るか否か、問題は全く「明日」にかゝつてゐるが、大衆の支持する人氣に於て、現在の君は、すでに甲子園野球スター投手たる若林に、カケ値はあるまいと思ふ。



フリードリヒスハーフェンより東京へ

北野吉内

『戀の銀座は――』毛髪と顔面の手入れが至極入念な異人の大陸に來ても相變らず頭を刈るのと髭を剃るのが御當人には堪らなく面倒臭く、いつもマダムの御小言を頂戴してゐる快適なA・GOOD・MIXER、そして驚くほど屈托のないDR.MASAO KUMEが洋服だけはカッテングの見事なロンドン仕立を着込み、彼一流の蠻聲をよほどレギユレイトしてモダン日本のモダン曲なるものを僕のために唄つてきかせた。ところはツエペリンの町南獨フリードリヒスハーフエン、大飛行船が霞ケ浦さして萬里征空の壯途につく前夜。スウヰスの翠微を湖面に映す大湖ボーデンゼーに日が暮れて、ツエペリン旅客の宿クールガルテン・ホテルに調子外れのヂャズ樂が湧き、底拔けの喧騷とゴツタ返す混雜が始まつた頃だつた。

『迚も日本は變つてる。四年ぶりに歸つたら屹度驚くよ。ステッキ・ガールといふ新しい存在が出來たし銀座界隈はバーで一杯だし、洋裝斷髪のストリート・ガールさへ出現したんだから――』

さう言つて急激な故國のモダン化の手近いサンプルに銀座行進曲なるものをDR・KUME――斷つてをくが僕はホテルの支配人、出張中のアメリカ新聞記者團ETCに彼を紹介する時はいつもドクタア・クメと勿體つけてやつた。彼も赤門を出た立派な學士様なんだからあらゆる種類の肩書尊重、位階崇拜病を脱しきれないドイツ共和國では、持つてゐるだけの肩書を振廻してよいのだ。わが留學生諸君が名刺に[illegible]だのProf.だのを麗々しく刷込んで一向あがらぬ風采の割りには相當な敬意と好遇をホテルの番頭、下宿のお神等々から受けてゐる骨を知らずに、彼がこの肩書を振廻すのを忘れ赤門教育の有難さを今にし[illegible]體驗せずにゐたのが抑も迂濶だつた――が口ずさんだのだつたが、彼が歌ひ出した銀座行進曲にFrau Dr Kumeもついて來た。米國ヂャズを聽き慣れた耳にはそれがお經のやうに間の延びたひどくPEPのない

歌に響いたか、急速なテンポで鳴つていつたといふ四年ぶりの故國に大きな驚異が僕を待つてゐるやうにも思はれて、數時間後にはZEPと一緒に大空に飛上る僕の心は早くも日本の空に飛んだ。

Dr. u. Frau Kumeはツエペリン見物と僕の見送りを兼ねベルリンから態々身錢を切つて南獨の片田舍までその旅程を延長した奇特な又私達を感激させた同胞約二十名中の一組だつた。三人の日本人が魁偉なグラーフ・ツエペリンで日本へ飛んで行くのを我事のやうに喜んで、色々な同胞がどこからともなくフリードリヒスハーフエンに現はれてきた、ベルリンから五百キロ、急行列車で十四時間の國境の町だ。尤も金廻りのいゝ人は餘り居なかつた。片道約五十圓の汽車賃をやつと工面する程度の同胞だつた。

『武林無想庵の家内で御座います』大事な旅券を忘れてパリを飛出し國境で二時間抑留の浮目を見たといふ至極手數の掛つた旅に疲れて、その日の夕方ツエペリン町に驅けつけた斷髪姿のマダム武林がホテルで初對面の誰彼



ツエ伯號が最初アメリカよりフリードリヒスハウフエンに歸來の日
久米正雄氏夫人(右)、藤吉少佐、北村兼子女史等が見物に行き偶然同
地寫眞屋に寫された繪ハガキ。(久米氏より本社宛郵送されたもの)

にから挨拶した。ベルリン留學中の聲樂家武岡鶴代さんも乏しい財布の底を叩いて——と正直な物の言ひ方をやつても濃厚な女史の激怒は買ふまい。大陸ではプーア・プロフエッサと憐れまれるところの文部省留學生諸君の金廻りのいゝのを羨望するほど左樣に女史の金廻りはよくなかつたやうだつた——見送りに來て下さつた、大阪高工教授の井上博士夫妻、ピアニストの土川君、資源局の小林參事、萬國郵便會議へ代表として參加した臺灣總督府の戸水參事なども前後して驅けつけてツエペリン旅客の宿クールガルテン・ホテルは滿員客止。その夜は金髪美人へ大膽にダンスを申込む位に對話社交術を納得した殊勝なドクタア・クメがホテル中を泳ぎ廻つて四人——藤吉海軍少佐、大毎の圓地君と僕——の出發を見送る盛大なフエアウエル・デナー・プログラムをでつち上げたのだつた。ホテルの大食堂の一隅には二十名の同胞が陣どつてライン・ワインの盃をあ

たのだから、片田舎フリードリヒスハーフェンでは前代未聞の出來事だつたし、ホテルにその艶姿を現はして以來絶えず旅客の好奇心とゴシツプを刺戟して來たパリ美人、フランス新聞記者のスーザン嬢もドクタア・クメの動員令に大乘氣で盛宴に參加し、キモノ姿の無想庵夫人フラウ・ドクタア・クメと並んで滿堂の視線を獨占したほかに、故國に歸省中だといふ朝鮮仁川のドイツ雜貨商パウル・シール　パウム老までが日本人の奥さんと一緒にこの別宴に參加し堂に入つた日本語で『ダイニツポンのためカンパイしませう』などゝ日本贔屓を發揮するのだから當夜の別宴は全く國際的に擴大して了つた。ドルニエ飛行機製作場勤務としてフリードリヒスハーフェンに定住する唯一人の日本人川崎造船の山崎鈴木兩君が、自腹を切つて特別注文した日獨國旗二十數本を抱へて乘込み皆に配る。出發の時はこいつを打振つて三人の同胞を聲援し大いに日本の爲め一宣傳やらうといふ思ひつき。『南獨フリードリヒスハーフェン、八月十五日』と冒頭して持運ばれた國旗にみんな紀念の署名をする頃、こそ／＼準備してゐたツェペリン便乘をその日の夕方急に取消されてスッカリ悲觀してゐた未來の女辯護士志願者K君まで遲ればせにやつて來て『抱負萬腔何處去、遼東灣外一身輕、可期神州男兒績……』と三人をヒーロー扱ひにする七言絶句を讀んで、昔教つた中華民國文學をスッカリ忘れて了つてゐる一座の面々を困らす。ライン・ワインがいゝ加減廻つたドクタア・クメは流石に一高でいぢめられただけにドイツ語の單語をユックリ並べて給仕を指揮しテーブル・マスタの眞骨頂を發揮する。食堂からボーデンゼーの湖面を見晴す庭園へ、みんなが國旗を手に持つて席を移すと給仕長が大きな卓子を樹蔭に持出してリキュールとモカが運ばれる

『一つ景氣よくやりますかな』當夜第一の泥醉者藤吉少佐が國際とは全くハーモナイズせぬ蠻聲を張りあげて『デンカンショ』と『箱根の山』を唸り出したので第二次會となる。武岡女史はコーラス團長として一座中の美音家をひつこ抜きドイツ國歌の下稽古にとりかゝるこの歌で景氣よく私達を見送らうといふのだから烏合の衆の俄稽古に大骨が折れるが、ズバ抜けた女史の美音に庭園のあちこちから拍手が湧く。『浪花節一席』を新橋から靜岡あたり迄唸り續けてタネ切れになつたドクタア・クメがこゝで日本モダン歌銀座行進曲を僕に披露に及んだのだつた。

『時に御守りは持つてますか』『何も持ちません、要りますかナ』僕の冷かな無關心はみんなを多少驚かしたやうだつた。

『そいつはイケない』見かけによらず信心深いらしいドクタア・クメがそこで皺苦茶な財布を取出し仕舞込んである『鶴岡八幡宮開運の御守』を割愛してくれると、アサヒグラフ派遣の社友佐藤信順君も秘藏の御守札を一枚分與する、フラウ・ドクタア・クメが運が強いやうにと麻雀の計算棒を紙に包んでくれる。から御守が殺到してくると今迄少しも念頭にかけてゐなかつたツェペリンの旅の不安が急に心中に一寸頭をもたげてきた。ツェペリンで日本まで飛んでゆくといつても僕

には何の不安も屈托もなかつたのだ。ロンドンで再會した正宗白鳥夫人は『隨分思ひ切つた事をなさるのね』と僕がさも生命知らずの fool hardy な男でもあるやう心配してくれたが、僕は一向平氣だつた。飛行船に乘つて大きなタネを取りに行く、これも一つのビズネスだと考へてゐたし、それにニューヨークで大西洋を横斷して來たあの雄大な銀鳥―GRAF・ZEP―を仰ぎ見てその偉力にホト〲感服して了つたからとつくにその安全性を絶對信頼して少しも不安なんかは感じてゐなかつた。ところへ急に誰彼から御守を頂戴すると一種の心理的リアクションが急にどこからか湧いて來て、萬に一つといふ危險の可能性が俄かに誇張された大きさで僕の心に擴がつてきた。僕は俄かにホテルの二階の部屋に驅け上つてアメリカから持參して飛行船で一緒に持つてゆく氣でゐた生命保險證書と二三の重要書類をあたふたと社友の佐藤君に托したのだつた。

靜かな湖畔に不夜城のやうに輝いてゐたホテルのオーケストラはAL・JOLSONの當り唄『サンニー・ボーイ』のあとへ、これも全歐を風靡しつゝあるところのヂヤズ式タンゴ I Kiss Your hand, Madame の曲を奏し、數時間後には飛行船で空に舞ひ上る人達が何の屈托もなさそうに踊り狂つてゐる。厚化粧のドラモンド・ヘイ女史の腕をとつて緩かなタンゴのステップを踏んでるのは鬩々しさが百パーセント、典型的アメリカ新聞記者のニッカアボッカア君だつたが、何だ詰らないといつた退屈な顏でこの光景を食堂の片隅から眺めてゐたのは有名な北極探險家、勳功爵のサア・ハバアト・ウイルキンス大尉だつた。どうせ今夜はどこもこゝも徹夜だ。今度許りは供給も十一時半の消燈令を臨時に取消したので音樂とダンスは夜通し。自分達が銘々少し許りの臍くりを投げ出して出來上つたLZ127號が、萬里征空の素晴しい壯途につく夜だからツエペリンの町中が凝られぬ程嬉しい夜だつた。ボーデンゼーの空に三日月が出て來て靜かな大湖の波の動きが銀鱗のやうに燦めいた。ツエペリン旅客の宿クールガルテン・ホテルの底抜けの喧騷が益々高まつてオーケストラとダンスのステップと、シヤンパンの心地よい陶醉から生れる陽氣なさんざめきと、出入けたゝましい自動車のサイレンとがいつまでも湖面に消えていつた。温く風もない。數時間に迫つたグラーフ・ツエペリンの晴れの出發に惠まれた快晴の日の夜明けが近づく

『Best Wi hes for your successful journalistic airadventure』ニユーヨークのF夫妻からの飛電だ。

『Wish you best of luck on perilous journey affectionate regards』僕の『冒險』飛行を心配するアメリカの友達ベツテイから打つて來た電報だ。夏の眞中にロンドン仕立、一張羅の冬服を着込み商賣道具のタイプライターをブラ下げていよいよホテルを飛出す時に、齋藤君から手渡されたこの二通の電報に、僕はやつと旅に出る氣持になつた。

◇

北獨に較べては夜明けの遲い南獨の空はマダ薄暗かつた。たゞ水銀

電燈に照らされた大格納庫だけが黎明の水平線上に浮城のやうにくつきり浮び出てゐた。八月十五日午前四時卅五分、私達を乗せたグラーフ・ツエペリンは夜氣にぬれたフリードリヒスハーフエンの緑草の上を簡單に離れて銀色の船首を霞ヶ浦の空にむけた。これ程の壯擧にふさはしい御祭騷ぎ的なセレモニーは一切無しで、見送りの軍樂隊さへゐなかつたアッサリ加減は送迎に伴ふ馬鹿騷ぎに慣れてゐる我々日本人には頗る意外だつたが、格納庫から廣場の中央に押出されたグラーフ・ツエペリンのあの大きな船體に響くベルの音を合圖に、巨船の横腹に吊下がつてゐるマイバア發動機の五つのプロペラが廻り出したと思ふ刹那、大飛行船がフハリッと百二十五メートルの高空まで直線的に舞上つたのには驚かされた。それにゴンドラの下部に錘の代りにブラ下つてゐた數百名の工場員が一齊にその手を離した瞬間だつた。アッといふ間に地上の見送り人との距離が無限大にまで擴がつて、地上の群衆は丸で蟻大に縮小した。一瞬前まで私を見送りに來てくれた約二十名の同胞は船室の外に立つて日獨の小旗を打振つてゐた。武林女史が音頭をとつてみんながドイチランド・ユーバア・アレスの國歌を元氣よく歌つてゐた。送別宴で貰つた日の丸の小旗を片手に僕はサロンの窓から半身を乗出し、上と下、互の距離が少し遠く握手が出來ぬので旗竿の兩端を握り合つて『では御大事に――』へ『どうも有難う』を機械的に繰返してゐたのだつた。ツエペリンの出發ほど見送る人見送られる人に呆氣ないものはない。涙にぬれたハンカチーフを振つた處で船上の人には見えもせず、大聲で呶鳴つたところで通じはせぬ。あつと言ふ間の離陸、一切が瞬間に處理されるツエペリンの出發は極めて思ひ切りがよく男性的だ。

百二十五米の空へ一氣に浮揚したグラーフ・ツエペリンは薄暗い夜明けの空をついて北へ動き出した。眼下にほのかに見えるフリードリヒスハーフエンの町が段々小さくなる。

『ツエペリンにこれまで乗つたことがありますか』窓から懸命に下界を見詰めてゐた僕へ話掛ける人があるので振り向くと、寛顏で見覺えのあるアメリカ千萬長者ウイリアム・リーヅ君だ。リプトン茶の親玉LORD・LIPTONのやうに輕快なヨット帽を被り童顏に元氣が充滿してゐる。當年二十六才の若さでいくら使つても使へ切れない程御金があり奥さんは前ロシア貴族クセニア姫、同君のことはこの三年間幾度となくアメリカの新聞で讀まされて來てゐる。

『今度が生れて始めてですよ』『こんな愉快なものはない。ワンダフルだ！　決して心配しなさんな』と僕を安心させる。成程動き出してから船體の動揺を少しも感じない、頗るいゝ氣持なのでリーズ君の一言を信用する。東天がやつと薄紅に彩どられてきて朝霧の晴れ間から南獨の緑の野と森と町が繪のやうに浮び出す、二十人の乗客は殘らず―サロンの窓側に釘付狀態で伸び上りながら走り行く地上の大パノラマに見惚れる。と船首の操縦室からサロンへ出て來た好男子の第三船長フオン・シラーが

「皆さん、いよ〳〵出ました。次のストップは東京です」と大聲で車掌のやうにアナウンスするので、なんだか急に世界が狹くなつたやうな氣がしてみんなが微苦笑する。がフオン・シラー君のいふ通り今動いてゐる飛行船の發動機は東京の空につく迄廻り通しなんだと考へると、一風違つたモダンな旅、一萬一千キロ無着陸の大飛行に乘出したことをハッキリ意識して來る。いよ〳〵大飛行のスタートを切つたのだ！　そして次の瞬間には相手方の圓地大每特派員との空中通信競爭が始まつたのだ！　と考へるといつまで安閑と自然美を眺めてはゐられない。でそろ〳〵仕事に取掛らうと廊下に出て圓地君との相部屋キヤビンNO・Iに歸ると、圓地君が早くもテーブルを占領しタイプライターに向つて、パチ〳〵何か書出してゐる早業に面喰つた。彼と僕、二大競爭紙の代表として乘込んだ二人は同じキヤビンに起居して紳士的に振舞つては來たものゝ、隙があつたら拔駈けの功名をやらうと互に腹の探合ひで四六時中油斷が出來ない。彼がタイプライターで何か書出すと僕の神經が苛立つし、僕の指がタイプライターのキーの上を走ると彼の目が光る、二人の苦しい緊張と警戒がこの時から霞ケ浦の空まで連續して了つたんだから、二人にとつてはたしかに思ひ出にならう。

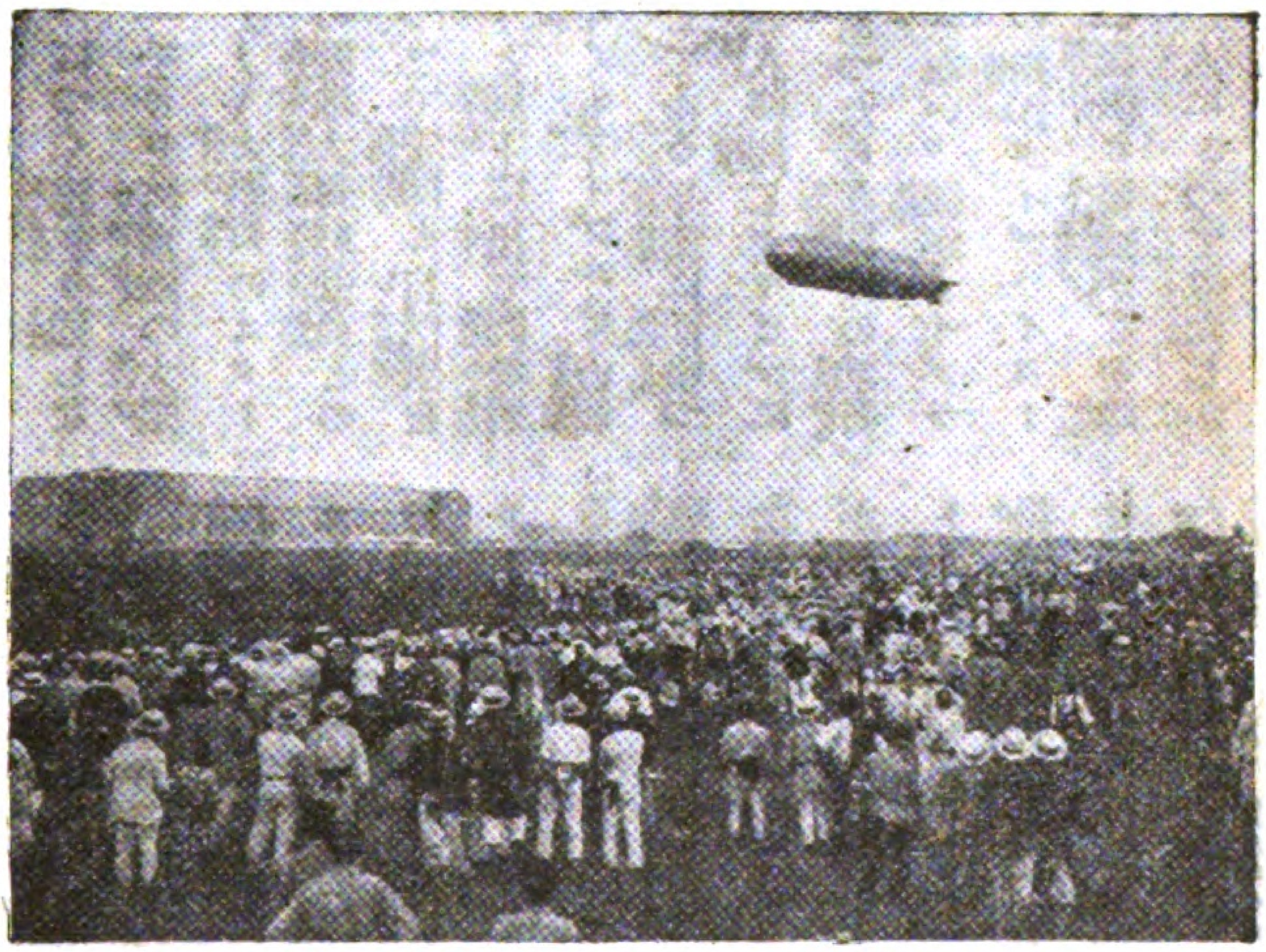
◇

食堂兼社交室の左右の窓側は船客が頰杖ついて景色を眺められるやう奥行一尺ほど出張つてゐて、そこへ船客は携帶の地圖と望遠鏡と寫眞器を、新聞記者は商賣道具のタイプライターを置き放しにする。椅子を引きよせると臨時のテーブルにもなつて便利だつたが、この窓側に本が三冊のつてゐた。そいつを給仕長ヘンリーが見つけて持主を探し廻つたが見ると僕の所有物だつたのは意外な喜びだつた——。

乘客の携帶手荷物は二十キロといふ嚴重な制限にホト〳〵閉口した出發前日の僕の周章狼狽は滑稽に近かつた。ツエペリンが豫定のコスを少し變へ北極圏に路をとつてシベリア横斷をやると聞かされたので、着のみ着のまゝ外套一枚持たない僕が慌てゝホテルを飛出してフリードリヒスハーフエンの田舍商店を駈けめぐり防寒着を探し求める。といつても目方の重いやつは一切禁物だから極く温くて極く輕い物といふ六かしい註文、結局一九二〇年頃の流行だつたらしい變テコなジヤンパー一枚を卅マークで買つたのはよいが、それだけ鞄の重量が超過したから最後の手段としてアメリカから提げて來たグラッドストーンを捨てゝ代りに輕いドイツ製の安物を買ふことにきめ又町へ出掛け鞄屋に飛込んで一番輕い品物を探出し、賣子の美人を呆氣にとらせて店の奥から秤を持出させ重量二キロ半と目方を確めて漸く得心したのも鞄屋にとつて珍らしい事件だつたらうが、こいつをブラ下げて宿へ歸つた僕が早速荷物の詰替へにひと汗かき、そいつを昇降機ボーイに擔がせて地下室の台所へ出張、牛の股や馬鈴薯の大袋をかける料理場の計量器を拜借して又そろ目方を確めたのもホテルにとつて珍妙な劇だつたらう。その日は前後二回地下室の台所に鞄をさげて降り擔

重量を二十キロに減らすのに一苦勞した。大西洋を超えてさげて來たゴルフ・バックはとうに見限つて了つた。ニユーヨークの松山金嶺夫妻が餞別にくれたブランスウイック手持蓄音器とブロードウエー最新のヂャズ・レコードには却々未練があつたけれど、これも結局ハミ出して見送りの友人に處分を賴んだ。ハミ出した物は全部處分し思切れる物は殘らず思切つた揚句、どうしても思切れないのがシンクレア・ルイスの近作DODSWORTHと外二册の愛讀書だつた。これだけの本は是非ツエペリンで體と一緒に日本まで持つて行きたい。そこで窮した揚句ドクタア・クメに一相談持ちかけたのだつたが『そんなら僕がこの三册を格納庫まで持つてつてやる。そして君が飛行船の中へ這入つて了つた後で、これは友人一同からの餞別だから屆けて貰いたいのだとかナンとか、そこは尤もらしい口實で乘組員に押しつけるさ、そしたら案外旨くスマッグル・インが出來て君の手に屆くかも知れない』

なるほど妙案だ、で三册の書籍はドクタア・クメに預けたのだが出發のドサクサに紛れてスッカリ失念してゐたのを意外にも側窓の上に發見したのだから嬉しかつた。ドクタア・クメの計略が見事圖に當つたのだ。グラーフ・ツエペリンには今度に限り密航者がゐなかつた。こつそり飛行船へ乘込んだのは僕の三册の本だけだつたかも知れない。



霞浦に着いたツエッ伯號(東京朝日新聞寫眞班撮影)

◇

早い出發で徹夜した船客一同が腹をすかして最初の空中朝飯を待焦れた『どうだね、一つ音樂でペップをつけよう』といふ人が出てサロンの蓄音器から陽氣で威勢のいゝヂャズのリズムが躍り出し二百米の上空で早朝のコンサート、思はず皆が浮れ出して空腹と疲勞を一寸忘れてゐると御待兼ねの朝飯になつた。エッケナア總司令も食卓につき丸パン、バタ、ジャム、腸詰、茹卵子それに素的に味のよいコーヒーは幾杯でも飲み放題といふドイツ式フリユーシテックがライチヒ近くで終り、滿腹と疲勞で少しねむくなつた頃ツエペリンは美しいポツダムの空にさしかゝつたので一同が騒ぎ出す。と十時四十分にはベルリンの上空、空から眺めるこの首都の美しさ、整理した市街と油繪的なその色彩美に見とれた。午後十

二時五分バルチック海に臨む北獨ステッチンを通過してから御馳走たつぷりな午餐となる。食堂に配置された四個のテーブルに各自の席が割當られ『一九二九年世界一周、グラーフ・ツエペリン』と書いて地球をめぐる飛行航路の圖まで印刷されたメニューが出る。平げた献立はコンソメ、ツエペリン式調理ライン河鮭、牡鹿の肉（野菜つき）キヤラメル・プツデイング、果物といふ一流ホテルの御馳走、酒は御好み次第何でも飲めるが先づワイン一本四ドルから五ドル見當ですべて米貨値段になつてゐる。これだけ手數の掛る料理を無電局と向ひあつた小專所の電氣ストーヴで拵へ上げるのだから器用なものだ。空模様も依然具合よく銀色の大飛鳥は快速のスピードで矢の如く飛んでゆくが巨大な船體は少し位の風には一向平氣で殆ど動揺を感じないから樂なものだ。キヤビンの窓外には素晴しい大自然のパノラマが百色眼鏡的速さで間斷なく展開する。午餐に滿腹した閑な乘客は心地よい天空の午睡を貪り始める。九名の新聞記者だけが落つく暇もなく忙がしさうにタイプライタを叩き合ふ。活動寫眞屋とカメラマンが互にわめき合つて絶好の撮影材料を追及する。その夜七時四十五分までに一五六六キロを飛んで船上の第一日は勞農ロシア國境に暮れたが、考へてみると朝飯はライプチヒ附近、午餐はダンチツヒ自由市邊で終り、午後の御茶は哲人カントを生んだケイニヒスベルヒ上空、晩餐はロシアの空で味はつて、國々が、世界が脚下に走つてゆき古今の歴史のページが同時に脚下に繰りひろげられてゆく大飛行船、一日の旅はか〳〵にファンタスティックだ。

◇

『萬事好調子、速力は約百キロ、昨夜は時に百廿キロ出ました。モウすぐウラルです』世界大戰中はツエペリンを操縦して暗夜のロンドンに前後廿二回の爆撃を敢行したといふ剛の者、矮小果敢な第一船長レーマンがサロンに顔を出して飛行の順調を報告する。ツエペリンの飛行は事實上この人が何から何までやつてゐると言はれるが、見たところ小粒ながら精悍の氣が溢れしかも禮儀を失はない。僕は始めからキヤビテン・レーマンが好きだつた。英語きり喋れない僕は稍無愛想で英語の拙いエツケナー博士よりは驚くほど英語が達者で愛想のよい人間的なレーマン船長に近づいたのも當然だつた。僕の好きな同船の客は千萬長者のリーズ君と米國飛行船ロスアンゼルス號前船長のローゼンダアル中佐だつた。中佐は一九二六年米國飛行船シエナンドア號の大椿事に不思議に助かつた唯一の生存者だが軍人に似合はず物靜かで、僕が電報でも書いてゐると『お早う、又御仕事ですか』など、肩越しに愛想よく挨拶する。アメリカ人だけに新聞記者の職務をよく理解し尊敬してゐた。『飛行船に乘るといつも忙がしい僕が今度は客分だから久しぶり本がゆつくり讀めて有難い』と言つて熱心に讀書に耽つてゐたが、ある日讀んでゐた本を覗くとそれが僕の好きなシンクレア・ルイスの近作だつた。

『藤吉少佐はN三號爆破の生存者、僕はシエナンドア號爆破の生存

者、命拾ひの飛行船乘が日米から一人づゝ乘合せたのが不思議です。」中佐はこんな事をいつて藤吉少佐が日本式英語でポツリ〳〵語り出すN號遭難の顛末に熱心に耳を傾て、あゝいふ突差の場合一人の死者も出さなかつた藤吉さんはエライと少佐を賞め上げた。關羽髯の兩極探險家、あの有名なウイルキンス大尉と同船の誼を得たのも豫期せぬ喜びだつた。大尉は船客の誰よりも一番口數が尠く物靜かな人だが、判らない山や河の名前は大尉に聞けば判るとキメて皆が難問を持ち寄る。それに答へるウイルキンス大尉の聲はひどく低音で落ついてゐた。何しろ南極から北極の端まで足跡普き世界的探險家だから喋らせたら馬鹿に話題が多い。南極探險飛行は又續行しますかと尋ねると『このツエペリン世界一週飛行から歸つたら匆々支度を整へ十月の十五日頃までに第二次南極探險飛行に出掛けます。クリスマスには南極地方の僕の根據地からバード中佐一行の根據地へ飛んでゆき一緒に七面鳥のクリスマス・デナーを食べる目論見だが――』

と奇拔な計畫を洩らす、新聞のニユーズには至極誂へ向きな計畫だといふとフフーンと肯づく。いつもプラス・フオアーズの輕裝でいつも望遠鏡を片手に、いつも同じ窓側に立つて注意深く眺望を怠らない。恐ろしい早起きで毎朝四時半にはサロンに現はれ他人の寢てゐる間にタイプライタを叩くのが大尉だつた。ドラモンド・ヘイ女史は何といつても船客の花、彼女の微笑は極めて魅惑的だつた。一人で一室を獨占しエツケナー老司令も却々女史を大事にした。中年の皺をかくす厚化粧は僕の趣味に觸る合致しなかつたけれど、女史と話してゐると歯切のいゝロンドン英語は氣持がよかつた。フリードリヒスハーフエンで落合つて米國新聞記者Wは『君、ヘイ女史はあれで却々國粹肌なんだからね。アメリカ人ですかと聞かれるのが彼女には堪らないインサルトだつてさ。其癖ハーストに雇はれてドルを貰つてるくせに』と言つてゐたが僕達には却々愛想がよく新聞記者として立派な手腕を持つてゐた。毎朝コーヒーの後何處から手に入れたのか綠茶の小罐を持出し日本茶が一番ですと甘さうに飲んでゐた。冒險のために冒險を愛する、いつも世界の四隅に新らしいスリルを求めて止まないのが若きアメリカの千萬長者リーズ君だつた。オイスタア・ベーのお城のやうな大邸宅、ロシアのクセニア姫との彼のロマンス、次から次への彼の冒險は甚だ有名だがアメリカ式にすぐ友達つき合ひの出來る大富豪だつた。シベリアの大凍土、北極圏近くの大曠野に美しい黎明を眺めた時彼は極度に興奮して、この次には大飛行船を貸借して友人とこの無人の境へ猛獸狩に來る計畫を夢見た。そして僕が何をするでもなくボツネンとサロンに坐つてでもゐると『君のライヴアルは先刻から一生懸命に何か書いてるぜ、君も何か書かんでいゝのか』と心配してくれる位の新聞常識さへ持ち合せてゐた。

◇

アレキサンダー大帝の昔から旅は快適で大きな教育だと言はれて來たが、南獨から霞ヶ浦へ、一萬一千キロを翔破したグラーフ・ツエペ

リン四日の旅は全く壯快の極みで、船内のライフは目まぐるしいスリルの連續だつた。大西洋を航海する善美を盡した五萬噸級巨船の上の生活も、これに較べては平凡極まる刺戟のないものだ。

心地よかつたのは、ほかで味はへぬ驚くほど安らかな船上の眠り、有難かつたのは禿頭を純白の長帽で包みあく迄もシェフらしい服裝で濟まし返つてるオット・マンツ君が船内の小饗所で拵へた朝夕の御馳走とコーヒーの味。

弱つたのは船内五日間の絶對禁煙、この頃から急にニコチン氣が拔けると短い電文一通書く氣力さへない程弱り出したのも不思議で、食事後には無性に一服喫みたくて悲鳴をあげた。水の大節約、それが爲め水で洗ひ流さないWCに段々臭氣が充滿してきたにも弱らされた。

うるさかつたのは達磨のやうな顔付の活動寫眞屋ハートマンと、いつも靴下なしで毛むくちやらの太脛を丸出しに縮れ鋼のやうな髯を出す寫眞技師のフォン・ベルケハンマー老の二人が、朝ぱらから他の迷惑などに頓着なくカメラを擔いで船内をハシャギ廻つたこと。

面白かつたのは見渡す限りの下界を一面白い煙で蔽ふた程猛烈なウラルの山火事見物。いつ迄も消えぬ印象は北極圏近くと見とれたオーロラ映ゆる黎明の美觀とオホツク海へ出る時の恐ろしい山險越え。期待が外れたのは船内無電力の送信能力の不足、それに祟られて滿足に電報の打てなかつた僕の恨みは盡きない。

嬉しかつたのは十八日日本無電圏内に入つて故國からの第一電がシベリアの空の上の僕の手に届いた時と、その翌朝深い霧がスーッと晴れた中から美しい北海道の山、白波の躍る美しい海岸線、懷かしい日本の姿が夢のやうに眼界に入つてきた時。

歐亞の空を僅か九十時間四十分で、見事にダ・ヴインチの空想を實現した偉大なグラーフ・ツェペリン！ それは全く夢のやうな旅だつた。十九日の夕方東京の空に現はれた私達は大空に出現した白銀色の大怪物を仰ぐ滿都の限りない熱狂を下瞰して、夕暗の迫る霞ケ浦についた。疲れた飛鳥のやうに降りたツェペリンの船室を僕は名殘惜しげに辭去したが、去るに臨んでエッケナー博士に別れの挨拶をすると『まあよかつた。實は安全にあんたを日本へ屆けるとが出來るかどうか、わしも少し心配だつたのだが――』と老司令は心の奧に秘めてゐた大飛行の勞苦の一端を始めて洩したのだつた。五日ぶりに懷かしい大地に降り立つた僕の足は流石にランド・シックネスのために少しよろめいたが、しつかりと踏みごたへある堅固なマザア・アースに復歸した子供らしい喜悦が譯もなくコミあげて來た。そして出迎への社友が氣を利かして早速差出した專賣局の安卷煙草をいやといふ程喫ひ續けたのも意地汚なかつた。その夜の霞ケ浦一帶の賑ひ、丸で縁日のやうな騷ぎの土浦の雜踏に目をまはし、上野までの汽車中で口汚く迄も罵り合ふ乘客同志の喧嘩に暗く濁し、四年ぶりに歸つてきた東京の街路に、フォード化しゆくこの世界の必需品――シャツ一枚の勞働者を乘せた圓タク――が亂暴に走つてゐたのは目新しかつたが、大通りはどこも物淋しい程燈火が薄暗く、舊態依然の東京には、五日前、フリードリヒスハーフェンの宿でドクタア・クメの話に織込まれて期待して來たモダン日本の驚異を發見するに苦んだ。僕はベルリンのドクタ・クメに失望を報ずると同時に東京は相[illegible]した

ツェッペリンを見る

兼常清佐

○

ツェッペリンを見る。――雑誌『改造』のこの課題の文字通りに、私共は正にツェッペリンを見た。

あの日の午後、サイレンが鳴り出すや否や、私共はそれとばかりに屋根によぢ登つた。ツェッペリンは木の間がくれに遥にその姿を現はした。私共は初めはたゞ默つて銀色に輝いた船體が空中を辷つて行くのを見まもつた。全く何を言つていゝのかわからなかつた。言ふべき言葉を知らなかつた。しばらくして全心の昂奮は靜まりかけた。そして私共は初めて話しあつた『あれこそ正にドイツの科學の一大結晶體である。誠に壯觀である。偉觀である。――私共も切にあれに乘つて見たい。もし私共もあれに乘せてもらへるものならば、これからの行く先きが、人間に飲み物の自由さへもない樣な國でも我慢する。』

私共がそんな話もしてしまはないうちに、ツェッペリンの姿はすでに眼界から去つた。後にはかすかな發動機の響が何物も見えない空中に淋しく殘つてゐただけである。

ツェッペリンを見る。――もちろん見るには見たが、たゞそれだけである。あとで私共が新聞の寫眞で見た方が、實はさらに詳しくツェッペリンを見た事になる。そして新聞の寫眞の上に、いつも自分はその實物を見たといふ一種の感情の滿足が付き纏つてゐる。

ツェッペリンは東京地方の人々に實際非常に大きな感動を與へた。

まづ一二の東京の大新聞は、その計畫の成功を祝つたであらう。紙面を埋め盡したツェッペリンの記事が充分に世に反響をもたらした有樣を見て、恐らく自分の新聞の勢力の大きな事に滿悦したであらう。

ツェッペリンの來航は、もちろんドイツ科學の大示威運動であると共に、また一二の東京の大新聞社にも絶好の示威運動の機會を與へた。しかし、よし新聞のあれほど大げさな記事がなかつたとしても、やはりツェッペリンの來航は相當に私共の感情を昂奮させるに足る事實であつた。それは私共のこの退屈な生活の中に、一味のロマンティシュなものを與へたからである。

私共の心の底には、まだ何と言つても世の常ならぬものを好む氣持が拔けきつて居らぬ。科學がこの世界から不思議といふものを追放してゆけばゆくほど私共の心は何となくその追放されたものを求めて見たくなる。ツェッペリンは、確かに或る意味で、私共のさうした要求を工合よく科學的に滿足させてくれた。

空を飛ぶといふことが、まづ何となくロマンテイシュである。甚だお伽噺めいてゐる。今日では空を飛ぶといふことは必ずしも珍らしいとはいはれない。しかし人が土地の上を歩くほど平凡なことではない。たしかにまだ世の常ならぬことの一つである。そして私共は飛行機は見なれてゐるが、飛行船は今度見たのが始めてである。私共の好奇心を充分に唆るに足るものである。

そしてそれは世界一周と云ふ甚だ冒險的な、ロマンテイシュな目的を持つてゐる。それははたして出來るか出來ないか、誰にも豫測を許さないものである。私共は出來ればいゝと思ひながらもまた何處かに不安な心地もしない事はない。フイルムの上で美人と惡漢との追かけの場面をはらはらしながら樂しんでゐるやうなものである。

それにこの飛行船は形が思ひ切つて大きい。私共が平生見てゐる飛行機の大きさに比べると、人間と大入道とのやうな違ひである。この形の尨大なといふことが世の常ならぬものを好む人の心を甚だ喜ばせる。またその上にこの飛行船は非常な速さを持つてゐる。南ドイツから日本まで僅かに三日で飛んで來た。このすばらしい速さも、すばらしい大きさと共にこの飛行船を一層ロマンテイシュなものにした。そしてその飛行船の通つて來るシベリアの荒野や、北極近い山河といふこともまた私共の好奇心を甚だ喜ばした。

ツェッペリンはまた形が美しい。普通の飛行機が大部分直線で出來てゐるのに對して、ツェッペリンはなだらかな丸みを持つた曲線がその形の基礎になつてゐる。そして全體の形としては、調和もあればまた變化もある。そしてその全體が私共が普通見られない銀灰色に輝いてゐる。見た眼は甚だ美術的である。好ましい形である。手でなでゝ見たい樣な形である。手でなでゝそして掌の柔かなすべすべした觸覺を樂しみたい樣な形である。一體が科學的なものゝ中には、一種獨特の美しさがあるものである。數學の式の形に或る整つた美しさのあることは誰も知つてゐる。カテナリーを現はす式は、カテナリーの曲線の美しいやうにまた美しい。ツェッペリンの形もそれは科學的に考へ出された形であらう。しかしそれを美術的に見れば、それはたしかに或る一種の美しさを持つ形である。この形の美さといふことが、知らず知らず私共の心をツェッペリンの嘆美者にした。

ツェッペリンは甚だ理屈に適つた怪物である。私共が安心して見ることの出來る怪物である。そしてまた現代的な美しさを持つた怪物である。浦賀に來た黒船も恐らくそんなものであつたらうが、それには多少の政治上の脅威が伴つてゐた。今日のツェッペリンは私共は全く現實の政治の問題を離れて、ただのんきに眺めてゐる事が出來る。そして

例へば青い花を見るやうなロマンテイシュな氣持を存分に滿足させる事が出來る。またこの空の青い花を遙かにドイツから日本に運んで來たエッケネル博士の名に、ほのかな英雄崇拜の氣持を味ふことも出來る。ツエッペリンはこのやうにして私共がすでに忘れかけた文學的なロマンテイツシュな感情を、それとなく心の表面によびかへしてくれた。

ツエッペリンを見る。——誠に私共は心を躍らせてツエッペリンを見た。そして私共はしばらく生活の退屈さを忘れた。

○

ツエッペリンを見る。——それは私共には、まづ空中の青い花の樣に見えた。そしていろ／＼な意味で私共の心を喜ばせた。しかしツエッペリンの印象は決してたゞそれだけではなかつた。私共はも少し多く雜誌『改造』の課題に答へなければならぬ。それは科學の前にも、なほ人間の心は一つの神秘であるといふ事である。

ツエッペリンは、言ふまでもなく、ドイツの科學の一大結晶體である。ドイツ人の應用科學にかけての能力をまざ／＼と全世界の人に見せつける一大標本である。今までは、日本には、ドイツ製の大仕掛な機械の能力はあまり認められてゐなかつたさうである。イギリスやアメリカで金力にまかせて作り上げた機械の方が多く用ゐられてゐたさうである。また一般にドイツといふ國の事が、さほど深く日本人には理解されてゐなかつたとも言はれてゐる。なるほど東京の大新聞の一つが、エッケネル博士の『さようなら』といふ簡單なドイツ語さへも正しく聞き取つてゐなかつた處などを見ると、さう言はれるのは或は本當かも知れない。しかし今度のツエッペリンの來航で、ドイツの科學と機械工業の力は恐らく充分に認められた事であらう。東京の多くの新聞は、ほとんど筆を揃へて、日本人もそれに負けてはならぬといふことを力說した。ツエッペリンの來航の當時は、そのことがほとんど日本の輿論のやうにも見えた。もちろんそれは日本としては誠に尤千萬な事である。しかし今私はこゝでその樣な事を考へやうとは思はない。私は今殊更にドイツだとか、日本だとかいふ國の差別に多くの興味をもたない。そんな事はどうでもいゝ。私は今は科學上の創作といふ事と、人間の心の不思議さといふ事について考へてゐる。

ツエッペリンは明らかに一大創作である。まづ智識の上での一大創作である。そしてそれは天分の豐かな人々だけに許されることである。藝術の天才が藝術品を創作することゝ甚だよく似てゐる。ツエッペリン伯やエッケネル博士等がこの航空船を創作した事を考へるのは、つまりベートーヴェンがそのジュフォニーを創作した事を考へるのとほとんど同じものである。

ツエッペリンの製造は、一つの大目的を持つてゐる。航空といふことである。製作者はその目的に役立つやうなあらゆる科學上の原理を集めた。科學上の原理そのものは、別に何の目的を持つてゐるわけの

ものでない。たゞ物の性質を誤りなく記述したものである。或る直徑の鐵の棒に或る量の力をどういふふうに加へたら、どういふ風に折れるか、水素瓦斯は空氣よりどのくらゐ輕いか、といふやうなことを誤謬なく記述すれば、それは學問上の原理とよばれる。そのやうな多くの原理を矛盾なく或る目的のために必要なだけ集めたものがつまりツェッペリン第一二七號である。ツェッペリンの三〇〇メートルの長さの船體の最後の一ミリまで、みなそれ〴〵の目的の下に澤山の科學の原理を集めあげたものである。つまりツェッペリンは航空といふ目的の下に、集められるだけの科學の原理を集めた總計のやうなものである。そしてその澤山の原理がいかによくその目的のために使ひ盡されてゐるか、今度の世界一周の大飛行で明かに證明された。

科學の原理は普遍的なものである。誰にでも、いつでも、どこでもあてはまるものである。水素が空氣より輕いといふことが科學の原理であるならば、或る必要なだけの水素を使へば、飛行船はボーデン湖の上空にでも浮けば、同じやうに霞が浦の上空にでも浮く。それはエッケネル博士が使つても、日本の海軍が使つても全く同じ結果になる。たゞそのやうな種類の科學の原則をなるべく多く知り、そしてそれを航空といふ一つの目的のために矛盾なく集め上げるのは、それは特別の人の心にだけ出來得るものである。決して誰にでも出來るものではない。そしてその樣な心の働きは一體どんなものであるか、どうして習得出來るか、或は全然天賦のものであるか、まだ誰も見定めた人はない。そのやうな心の働きを持つてゐない人から見れば、それはたゞ一つの不思議といふより外はない。この不思議な心の力を持つてゐるからこそ、ツェッペリン伯も、エッケネル博士も、應用科學上の天才、或は英雄として私共から稱讃される。

ツェッペリンを見た諸君が、もしベートーヴェンのジムフォニーを聞くならば、それはやはり音のツェッペリンだと考へてもいゝ。ベートーヴェンはやはり一つの目的を持つてゐた。それは美しい曲を作るといふ事である。その目的に合ふやうに、彼はいろ〳〵さま〴〵な音を集めた。そしてその音は、科學の原理と同じ樣に、誰でも、何時でも、何處でも使つていゝものである。一曲のジムフォニーはそのやうな目的のために集められた音の總計である。エッケネル博士もツェッペリン伯も、航空の目的に適ふやうな科學の原理を作り出したわけではない。たゞ今まで知られてゐた科學の原理を秩序よく集めたゞけである。ベートーヴェンもそれと同じことである。彼は美しい曲を書くために決して音の一つをも作り出したわけではない。今まで知られてゐる音を秩序よく集めたといふだけである。ただその集めあげられたものを全體として見る時は、ツェッペリンの場合でも、ベートーヴェンの場合でも、そこに渾然とした一つの新しいものが出來上つてゐるといふだけである。

エッケネル博士やツェッペリン伯が航空の目的のために集めた科學の原理と、ベートーヴェンがジムフォニーの目的のために集めた

は、その性質が非常に違ふ樣に見える。水素ガスが空氣より輕いといふ事と、Ⅴの上の7の和絃をⅠの上の3の和絃に解決する事とは、ほとんど似ても似つかない事の樣に見える。しかし、音も水素ガスも、それはいづれも人間の智識の中にある事である。水素ガスの性質もⅤの上の7の音の性質も、みな一つの觀念である。また音はその結果として人の感情に訴へる。それも水素ガスとは甚だ違ふ樣には見える。が、エッケネル博士が水素ガスの物理上の性質を學んだ樣に、ベートーヴエンはⅤの上の7の和絃の音響學や或は作曲法の上の性質を學んだ。エッケネル博士が水素ガスの物理學上の性質から推して、その取扱ひ方を充分に研究した樣に、ベートーヴエンはⅤの上の7の和絃の作曲法の上の性質から推して充分にその取扱ひ方を研究した。

ツェッペリンもジムフオニーも、とにかく、目的こそ違ふが、この樣なみな智識的な仕事の結果である。ベートーヴエンに、もし音の性質についての深い智識がなかつたならば、彼の心の中に大きな感激があつたとしても、それを音で言ひ現はすことは出來なかつたはづである。ちやうどそれはエッケネル博士が水素ガスの物理學上の性質を知らなかつたならば、いかに空を飛びたいと思つても飛ぶことが出來ないのと全く同じことである。

このやうな點で、しかもこのやうな根本的な一つの點で、ツェッペリンもジムフオニーも同じやうな出來方で出來上つたものだと言はれよう。もちろん、いかに澤山に物を知つたからといつても、たゞそれを無秩序に集めただけでは、今までになかつた新しいものを作り出すことは決して出來ない。創造の力は、知るといふ力とはまた別ものゝやうに見える。そしてその方が知るといふことよりもなほ一層高級な、神秘な力の樣にも見える。そしてその樣な力を持たない私共凡人から見れば、實に驚くべき心の働である。實際的にはいろ／＼違つてゐるが、しかしその事から見れば、ツェッペリンもジムフオニーも、人間の心のこの二つの大きな能力——知る事と、それを集め上げる事——の現はれであるといふことが出來る。私共は、ツェッペリンを空を飛んで世界を一周するジムフオニーとよんでも、恐らく非常な間違ひではあるまい。

○

ツェッペリンは空を走る。しかも非常な速力で暴風にさからひ、雷雨を衝いて空を走る。それはたゞ物靜かに格納庫の中につながれてゐるのではない。ツェッペリンといふ以上は、その中には必ず航空の技術といふことも含まれてゐる。ツェッペリンの創造は、その形と共に、その航空の技術といふ事も考へなくてはならぬ。

その點でツェッペリンは益々ジムフオニーと似て來る。ジムフオニーもそれを作つて、たゞ譜に書いておいたゞけでは、ほとんど音樂としての意味をなさない。それは必ず演奏されなければならない。ジムフオニーを演奏することは、つまりツェッペリンを走らせることである。私はツェッペリンを作ることについて、ジムフオニーと同じやうに、智

識の驚くべき働きを見た。それを空に走らせ、世界を一周することについて、まづ私共の驚嘆させることは、人間の廣い意味での感覺の力である。

科學はいろ／＼なものゝ性質を誤りなく記述した。そして出來るだけそれを數で計算した。數で計算した以上は、その數通りにすれば誰がしても、何處でしても、何時しても、必ずそのことだけは出來るはづである。科學の記述はだん／＼と人間の個性を認めない樣にする。そして誰でも出來るやうなものをこしらへる。ツェッペリンはさうした科學上の機械の一大標本であらう。ツェッペリンの操縦室にはおそらく幾十となく計器が取りつけられてゐるであらう。計器には悉く精密な度盛がしてあるであらう。その計器の上で、航空の方法が教へたやうに機械を操縦すれば、誰でも、何處でも、何時でも同じやうに操縦することが出來なくてはならないはづである。そしてそれが科學の原理を實際の機械の上に應用することの主眼であるべきはづである。

しかし實際には恐らく機械はまだそのやうに作られてはゐないと思はれる。そこに人間の感覺の不思議さを示す餘地がまだ澤山に殘されてゐる。例へばレンズを完全に作ることは、機械工學の上から考へると非常に困難なことである。レンズの表面の曲り方は、數學の式で書けば相當にむづかしい、長い式になる。その式に完全に相當するやうなものはまだ實際に機械では出來ない。機械はまだそれほど巧妙な域に進んでゐない。その機械で出來ないことを、更に補ふことの出來るものは、熟練した職工の指の觸覺であると言はれてゐる。レンズを作つてその表面を最後にはその職工の指で磨く。指の觸覺は極めて微妙にレンズの曲り方の度を感じて、それを機械では出來きれない程度の完全なものにする。人間の感覺がよく訓練されると非常に細かく、正しくものを感ずることが出來るといふことは、それは昔から人間の不思議の一つだといはれて來たものである。そして近代の科學の進歩を以つてしても、必ずしも機械の力がこの人間の感覺の精密さを悉く征服し盡したとはいはれない。

私共はツェッペリンの操縦の實際を見たことはない。しかし私共が藤吉少佐のやうに、その操縦室でツェッペリンの航空の實際を見ることが出來たならば、その航空の技術の中には、必ず人間の感覺といふものが非常に重大な役割を演じてゐる事を發見するに違ひない。たゞ計器の數字にだけによらない腕や指先の冴えがあるであらう。ちようど熟練した職工の指先きが機械の精巧さを越えて正しいレンズを磨くやうな感覺の働が是非必要であらう。假に私共がフォードを借りて、それを自分で操つて一〇キロ走るとしたら、私共はそのことの中にでも、なほ非常に澤山の感覺の精密さが要求されてゐるといふことを知つて來る。そしてツェッペリンは到底、フォードどころの騒ぎではあるまい。

感覺が機械も及ばない正確さを持つてゐるといふことは、言ふまでもなく、誰にも許されたものではない。そのために特に惠まれた人だ

は、その性質が非常に違ふ様に見える。水素ガスが空氣より輕いといふ事と、Vの上の7の和絃をVの上の3の和絃に解決する事とは、ほとんど似ても似つかない事の様に見える。しかし、音も水素ガスも、それはいづれも人間の智識の中にある事である。水素ガスの性質もVの上の7の音の性質も、みな一つの觀念である。また音はその結果として人の感情に訴へる。それも水素ガスとは甚だ違ふ様には見える。が、エッケネル博士が水素ガスの物理上の性質を學んだ様に、ベートーヴエンはVの上の7の和絃の音響學や或は作曲法の上の性質を學んだ。エッケネル博士が水素ガスの物理學上の性質から推して、その取扱ひ方を充分に研究した様に、ベートーヴエンはVの上の7の和絃の作曲法の上の性質から推して充分にその取扱ひ方を研究した。ツェッペリンもジムフォニーも、とにかく、目的こそ違ふが、この様なみな智識的な仕事の結果である。ベートーヴエンに、もし音の性質についての深い智識がなかつたならば、彼の心の中に大きな感激があつたとしても、それを音で言ひ現はすことは出來なかつたはづである。ちやうどそれはエッケネル博士が水素ガスの物理學上の性質を知らなかつたならば、いかに空を飛びたいと思つても飛ぶことが出來ないのと全く同じことである。

このやうな點で、しかもこのやうな根本的な一つの點で、ツェッペリンもジムフォニーも同じやうな出來方で出來上つたものだと言はれよう。もちろん、いかに澤山に物を知つたからといつても、たゞそれを無秩序に集めただけでは、今までになかつた新しいものを作り出すことは決して出來ない。創造の力は、知るといふ力とはまた別ものゝやうに見える。そしてその方が知るといふことよりもなほ一層高級な、神秘な力の様にも見える。そしてその様な力を持たない私共凡人から見れば、實に驚くべき心の働である。實際的にはいろ〳〵違つてゐるが、しかしその型から見れば、ツェッペリンもジムフォニーも、人間の心のこの二つの大きな能力——知る事と、それを集め上げる事——の現はれであるといふことが出來る。私共は、ツェッペリンを空を飛んで世界を一周するジムフォニーとよんでも、恐らく非常な間違ひではあるまい。

○

ツェッペリンは空を走る。しかも非常な速力で暴風にさからひ、雷雨を衝いて空を走る。それはたゞ物靜かに格納庫の中につながれてゐるのではない。ツェッペリンといふ以上は、その中には必ず航空の技術といふことも含まれてゐる。ツェッペリンの創造は、その形と共に、その航空の技術といふ事も考へなくてはならぬ。

その點でツェッペリンは益々ジムフォニーと似て來る。ジムフォニーもそれを作つて、たゞ譜に書いておいたゞけでは、ほとんど音樂としての意味をなさない。それは必ず演奏されなければならない。ジムフォニーを演奏することは、つまりツェッペリンを走らせることである。私はツェッペリンを作ることについて、ジムフォニーと同じやうに、智

驚くべき働きを見た。それを空に走らせ、世界を一周することについて、まづ私共の驚嘆させることは、人間の廣い意味での感覺の力である。

科學はいろ／＼なものゝ性質を誤りなく記述した。そして出來るだけそれを數で計算した。數で計算した以上は、その數通りにすれば誰がしても、何處でしても、何時しても、必ずそのことだけは出來るはづである。科學の記述はだん／＼と人間の個性を認めない樣にする。そして誰でも出來るやうなものをこしらへる。ツェッペリンはさうした科學上の機械の一大標本であらう。ツェッペリンの操縱室にはおそらく幾十となく計器が取りつけられてゐるであらう。計器には悉く精密な度盛がしてあるであらう。その計器の上で、航空の方法が教へたやうに機械を操縱すれば、誰でも、何處でも、何時でも同じやうに操縱することが出來なくてはならないはづである。そしてそれが科學の原理を實際の機械の上に應用することの主眼であるべきはづである。

しかし實際には恐らく機械はまだそのやうに作られてはゐないと思はれる。そこに人間の感覺の不思議さを示す餘地がまだ澤山に殘されてゐる。例へばレンズを完全に作ることは、機械工學の上から考へると非常に困難なことである。レンズの表面の曲り方は、數學の式で書けば相當にむづかしい、長い式になる。その式に完全に相當するやうなものはまだ實際に機械では出來ない。機械はまだそれほど巧妙な域に進んでゐない。その機械で出來ないことを、更に補ふことの出來るものは、熟練した職工の指の感覺であると言はれてゐる。レンズを作つてその表面を最後にはその職工の指で磨く。指の感覺は極めて微妙にレンズの曲り方の度を感じて、それを機械では出來きれない程度の完全なものにする。人間の感覺がよく訓練されると非常に細かく、正しくものを感ずることが出來るといふことは、それは昔から人間の不思議の一つだといはれて來たものである。そして近代の科學の進歩を以つてしても、必ずしも機械の力がこの人間の感覺の精密さを悉く征服し盡したとはいはれない。

私共はツェッペリンの操縱の實際を見たことはない。しかし私共が藤吉少佐のやうに、その操縱室でツェッペリンの航空の實際を見ることが出來たならば、その航空の技術の中には、必ず人間の感覺といふものが非常に重大な役割を演じてゐる事を發見するに違ひない。たゞ計器の數字にだけによらない腕や指先の冴えがあるであらう。ちようど熟練した職工の指先きが機械の精巧さを越えて正しいレンズを磨くやうな感覺の働が是非必要であらう。假に私共がフォードを借りて、それを自分で操つて一〇キロ走るとしたら、私共はそのことの中にでも、なほ非常に澤山の感覺の精密さが要求されてゐるといふことを知つて來る。そしてツェッペリンは到底、フォードどころの騷ぎではあるまい。

感覺が機械も及ばない正確さを持つてゐるといふことは、言ふまでもなく、誰にも許されたものではない。そのために特に惠まれた人だ

けに出來ることである。多くの科學の原理を集めて、ツェッペリンを作り上げるといふことは、特種な人にだけ惠まれた力であるやうに、機械の正確さを越えて正確な感覺を持つといふ事も、やはり特種の人にだけ出來ることである。ツェッペリンの製造にも、またその特に航空の技術にも、このやうな人間の心の一方面が、深く喰ひ入つてゐるといふ事を決して見のがしてはならない。

感覺の精密さの不思議といふことには、よく考へて見ると、それには智識の判斷の勝れたこともちろん混ざつてゐる。私共が一〇キロの間フォードを操縦してみても、その一〇キロの間には、道に凸凹があるし、人には會ふし、自轉車には横ぎられるし、またガソリンの出は悪くなるし、いろ〱めんどうな事件が次ぎから次ぎへと起つて來る。その一つ〱の場合にどうしたらいゝかといふことは、操縦術が明瞭に、一義的に敎へてくれる事である。たゞ實際に當つて、數多くこぐらがつて現はれる事件に對して、適確な操縦の判斷を早く下すといふことは、それはたゞ判斷の問題とも見られる。そして特別な職工の指先の感覺の力とは多少趣きを異にしてゐるとも言はれよう。しかしそのやうな鋭い判斷の力といふことも、またツェッペリンの活動を創造する一つの大きな因子である。

すべてこのやうな種類の心の働きは、例へばベートーヴェンのジムフォニーを實際に演奏する時にもそれは必ず無くてはならぬものである。ベートーヴェンはそのジムフォニーの符を書き殘してゐる。それは正に一つのツェッペリンの様なものである。それを格納庫から引き出して、實際に空中を走らせるには、やはり非常にすぐれた感覺の力がなくてはならぬ。それはまづ第一に時間を區切ることにあらはれる。つまり音符の一つ〱の長さの上にあらはれる。樂譜では一小節の長さはみな同じに書いてある。從つて、例へばこの一小節の中にある四分音符の長さは、前の一小節の中にある四分音符の長さと譜の上では全く同じことである。しかし指揮者はこの譜をよく研究して、その譜の中から或る美しい音樂を想像する。その想像の中にある理想的なジムフォニーは、決してこの小節の中にある四分音符の長さが、前の小節の中にある四分音符の長さとは完全に同じものではない。その間に極めて微妙な變化がある。この微妙な變化が次から次へと發展してゆくところに、ジムフォニーの指揮の生命がある。譜の上では、例へば一〇は必ず五と五の和である。しかし實際の生きた演奏では、一〇は必ずしもさうとは限らない。或る場合には一と九の和である。或る場合では三と七の和である。私共は變らない一〇といふ事も意識する。また刻々變つて行く一と九の和、三と七の和といふやうなことも同時に意識するそこに私共はオイレンブルグの譜で讀んだベートーヴェンのジムフォニーと、ウインガルトネルの指揮で聞いたベートーヴェンのジムフォニーとの大きな違ひがある。ベートーヴェンもそのジムフォニーを作つた時には、もちろん一と九の和の一〇や、三と七の和の一〇や、その他あらゆる種類の一〇を考へたであらう。しかし今の譜の方法で

はそのやうな細かいものを彈きあらはす術はない。それはベートーヴェン自身が指揮棒を執つた演奏が終ると同時に終つたものである。今私共が聞くベートーヴェンのジムフォニーは、ベートーヴェンの死と共に終つたその微妙な部分を、新たにワインガルトネルなり、メンゲルベルクなりシユトラウスなりに補つてもらつたものである。その補ひ方は、いふまでもなく補ふ人々の自由である。しかしともかくこの補はれたものなしにはベートーヴェンのジムフォニーはほとんど死物である。

例へばワインガルトネルは、どうしてこの補はなければならないものを補つてゆくであらうか。それはたゞ彼の感覺によるより外道はない。刻々發展してゆく音樂の形に對して、彼の指揮棒の動きは、正確に一と九の和、三と七の和、五と五の和といふやうな微妙な違ひを描き出す。また管絃樂團の指や呼吸は、その指揮棒の通りに音を作り出す。このやうな微妙な感覺の働きが多なればなるほど、その演奏は生きて來る。

これだけの事を、如何に言葉の意味を嚴く取つても、たゞ感覺だけの働きに歸するのは、それは必ずしも事實の眞相を捕へたものとは言へないかも知れない。その中には、感覺より外のいろ〳〵の方面の心の活動がその中に含まれてゐる。しかしそのやうなものを總括して事實の表面に現はすものは、やはり感覺である。そしてそれは職工の指の先きの細かい感覺が、あらゆる他の心の働きを代表して、レンズの曲面を精巧に磨き上げる事と非常によく似てゐはしないであらうか。或はツエッペリンの操縦者の腕や指の感覺が、いろ〳〵の計器の數字を超えて巧妙にツエッペリンを動かす事と、なほ一層よく似てゐはしないであらうか。

たゞジムフォニーの指揮だけついて考へてもまづからである。その指揮のうちでも音の長さ短さだけについて考へても、まづからである。しかし音樂はその組織が誠に複雜を極めてゐる。音の長さ短さ、強さ弱さ、速さ遲さ、いろ〳〵の音の平均の工合など、このあらゆる事實の上に、みた指揮者と樂人との感覺の精巧さ、微妙さが現はれるわけである。またもしそれが獨奏の場合であるならば、たとへばダルベルがベートーヴェンのゾナーテを獨奏するといふ樣な場合であるならば、この感覺の微妙さはさらに遺憾なく現はれる。自分自身の思ふままを、何にもさへぎられず、完全に表現する事が出來る。その樣な時には、私共は紙に印刷された樂譜と、それを大家の心を通じて生きた音樂として表現されたのとの相違を充分に了解する事が出來る。それこそ正に格納庫の中に靜かに眠つてゐるツエッペリンと、それが風雨を物ともせず大平洋の空を走つてゐることの相違でなくて何であらう。

世にも不思議なものは人の心である。人はその不思議な心を不思議でない樣にするために自然科學を作つた。そして自然科學はなるべく心の不思議を平易にし、一般化し、普遍化さうとした。しかし人の心の秘密はそれでも悉く消えなかつた。その科學は例へばツエッペリン

けに出來ることである。多くの科學の原理を集めて、ツェッペリンを作り上げるといふことは、特種な人にだけ惠まれた力であるやうに、機械の正確さを越えて正確な感覺を持つといふ事も、やはり特種の人にだけ出來ることである。ツェッペリンの製造にも、またその特に航空の技術にも、このやうな人間の心の一方面が、深く喰ひ入つてゐるといふ事を決して見のがしてはならない。

感覺の精密さの不思議といふことには、よく考へて見ると、それには智識の判斷の勝れたこともちろん混さつてゐる。私共が一〇キロの間フォードを操縦してみても、その一〇キロの間には、道に凸凹があるし、人には會ふし、自轉車には横ぎられるし、またガソリンの出は惡くなるし、いろ／＼めんどうな事件が次ぎから次ぎへと起つて來る。その一つ／＼の場合にどうしたらいゝかといふことは、操縦術が明瞭に、一義的に敎へてくれる事である。たゞ實際に當つて、數多くこぐらがつて現はれる事件に對して、適確な操縦の判斷を早く下すといふことは、それはたゞ判斷の問題とも見られる。そして特別な職工の指先の感覺の力とは多少趣きを異にしてゐるとも言はれよう。しかしそのやうな鋭い判斷の力といふことも、またツェッペリンの活動を創造する一つの大きな因子である。

すべてこのやうな種類の心の働きは、例へばベートーヴェンのジムフォニーを實際に演奏する時にもそれは必ず無くてはならぬものである。ベートーヴェンはそのジムフォニーの符を書き殘してゐる。それは正に一つのツェッペリンの様なものである。それを格納庫から引き出して、實際に空中を走らせるには、やはり非常にすぐれた感覺の力がなくてはならぬ。それはまづ第一に時間を區切ることにあらはれる。つまり音符の一つ／＼の長さの上にあらはれる。樂譜では一小節の長さはみな同じに書いてある。從つて、例へばこの一小節の中にある四分音符の長さは、前の一小節の中にある四分音符の長さと譜の上では全く同じことである。しかし指揮者はこの譜をよく研究して、その譜の中から或る美しい音樂を想像する。その想像の中にある理想的なジムフォニーは、決してこの小節の中にある四分音符の長さが、前の小節の中にある四分音符の長さとは完全に同じものではない。その間に極めて微妙な變化がある。この微妙な變化が次から次へと發展してゆくところに、ジムフォニーの指揮の生命がある。譜の上では、例へば一〇は必ず五と五の和である。しかし實際の生きた演奏では、一〇は必ずしもさうとは限らない。或る場合には一と九の和である。或る場合では三と七の和である。私共は變らない一〇といふ事も意識する。また刻々變つて行く一と九の和、三と七の和といふやうなことも同時に意識するそこに私共はオイレンブルグの譜で讀んだベートーヴェンのジムフォニーと、ウインガルトネルの指揮で聞いたベートーヴェンのジムフォニーとの大きな違ひがある。ベートーヴェンもそのジムフォニーを作つた時には、もちろん一と九の和の一〇や、三と七の和の一〇や、その他あらゆる種類の一〇を考へたであらう。しかし今の譜の方法で

はそのやうな細かいものを磨きあらはす術にない。それはベートーヴェン自身が指揮棒を執つた演奏が終ると同時に終つたものである。今私共が聞くベートーヴェンのジムフォニーは、ベートーヴェンの死と共に終つたその微妙な部分を、新たにワインガルトネルなり、メンゲルベルクなりシュトラウスなりに補つてもらつたものである。その補ひ方は、いふまでもなく補ふ人々の自由である。しかしともかくこの補はれたものなしにはベートーヴェンのジムフォニーはほとんど死物である。

例へばワインガルトネルは、どうしてこの補はなければならないものを補つてゆくであらうか。それはたゞ彼の感覺によるより外道はない。刻々發展してゆく音樂の形に對して、彼の指揮棒の動きは、正確に一と九の和、三と七の和、五と五の和といふやうな微妙な運ひを描き出す。また管絃樂團の指や呼吸は、その指揮棒の通りに音を作り出す。このやうな微妙な感覺の働きが多くなればなるほど、その演奏は生きて來る。

これだけの事を、如何に言葉の意味を聞く取つても、たゞ感覺だけの働きに歸するのは、それは必ずしも事實の眞相を捕へたものとは言へないかも知れない。その中には、感覺より外のいろ〳〵の方面の心の活動がその中に含まれてゐる。しかしそのやうなものを總括して事實の表面に現はすものは、やはり感覺である。そしてそれは職工の指の先きの細かい感覺が、あらゆる他の心の働きを代表して、レンズの曲面を精巧に磨き上げる事と非常によく似てゐはしないであらうか。或はツェッペリンの操縦者の腕の指の感覺が、いろ〳〵の計器の數字を超えて巧妙にツェッペリンを動かす事と、なほ一層よく似てゐはしないであらうか。

たゞジムフォニーの指揮だけについて考へてもまづかうである。その指揮のうちでも音の長さ短さだけについて考へても、まづかうである。しかし音樂はその組織が誠に複雜を極めてゐる。音の長さ短さ、強さ弱さ、速さ遲さ、いろ〳〵の音の平均の工合など、このあらゆる事實の上に、また指揮者と樂人との感覺の精巧さ、微妙さが現はれるわけである。またもしそれが獨奏の場合であるならば、たとへばダルベールがベートーヴェンのゾナーテを獨奏するといふ様な場合であるならば、この感覺の微妙さはさらに遺憾なく現はれる。自分自身の思ふままを、何にもさへぎられず、完全に表現する事が出來る。その様な時には、私共は紙に印刷された樂譜と、それを大家の心を通じて生きた音樂として表現されたのとの相違を充分に了解する事が出來る。それこそ正に格納庫の中に靜かに眠つてゐるツェッペリンと、それが風雨を物ともせず大平洋の空を走つてゐることの相違でなくて何であらう。

世にも不思議なものは人の心である。人はその不思議な心を不思議でない様にするために自然科學を作つた。そして自然科學はなるべく心の不思議を平易にし、一般化し、普遍化さうとした。しかし人の心の秘密はそれでも悉く消えなかつた。その科學は例へばツェッペリン

けに出來ることである。多くの科學の原理を集めて、ツェッペリンを作り上げるといふことは、特種な人にだけ惠まれた力であるやうに、機械の正確さを越えて正確な感覺を持つといふ事も、やはり特種の人にだけ出來ることである。ツェッペリンの製造にも、またその時に航空の技術にも、このやうな人間の心の一方面が、深く喰ひ入つてゐるといふ事を決して見のがしてはならない。

感覺の精密さの不思議といふことには、よく考へて見ると、それには智識の判斷の勝れたことももちろん混ざつてゐる。私共が一〇キロの間フォードを操縦してみても、その一〇キロの間には、道に凸凹かあるし、人には會ふし、自轉車には横ぎられるし、またガソリンの出は惡くなるし、いろ〳〵めんどうな事件が次ぎから次ぎへと起つて來る。その一つ〳〵の場合にどうしたらいゝかといふことは、操縦術が明瞭に、一義的に教へてくれる事である。たゞ實際に當つて、數多くこぐらがつて現はれる事件に對して、適確な操縦の判斷を早く下すといふことは、それはたゞ判斷の問題とも見られる。そして特別な職工の指先の感覺の力とは多少趣きを異にしてゐるとも言はれよう。しかしそのやうな鋭い判斷の力といふことも、またツェッペリンの活動を創造する一つの大きな因子である。

すべてこのやうな種類の心の働きは、例へばベートーヴエンのジムフォニーを實際に演奏する時にもそれは必ず無くてはならぬものである。ベートーヴェンはそのジムフォニーの符を書き殘してゐる。それは正に一つのツェッペリンの樣なものである。それを格納庫から引き出して、實際に空中を走らせるには、やはり非常にすぐれた感覺の力がなくてはならぬ。それはまづ第一に時間を區切ることにあらはれる。つまり音符の一つ〳〵の長さの上にあらはれる。樂譜では一小節の長さはみな同じに書いてある。從つて、例へばこの一小節の中にある四分音符の長さは、前の一小節の中にある四分音符の長さと譜の上では全く同じことである。しかし指揮者はこの譜をよく研究して、その譜の中から或る美しい音樂を想像する。その想像の中にある理想的なジムフォニーは、決してこの小節の中にある四分音符の長さが、前の小節の中にある四分音符の長さとは完全に同じものではない。その間に極めて微妙な變化がある。この微妙な變化が次から次へと發展してゆくところに、ジムフォニーの指揮の生命がある。譜の上では、例へば一〇は必ず五と五の和である。しかし實際の生きた演奏では、一〇は必ずしもさうとは限らない。或る場合には一と九の和である。或る場合では三と七の和である。私共は變らない一〇といふ事も意識する。また刻々變つて行く一と九の和、三と七の和といふやうなことも同時に意識するそこに私共はオイレンブルグの譜で讀んだベートーヴェンのジムフォニーと、ウインガルトネルの指揮で聞いたベートーヴェンのジムフォニーとの大きな違ひがある。ベートーヴェンもそのジムフォニーを作つた時には、もちろん一と九の和の一〇や、三と七の和の一〇や、その他あらゆる種類の一〇を考へたであらう。しかし今の譜の方法で

はそのやうな細かいものを書きあらはす術はない。それはベートーヴェン自身が指揮棒を執つた演奏が終ると同時に終つたものである。今私共が聞くベートーヴェンのジムフォニーは、ベートーヴェンの死と共に終つたその微妙な部分を、新たにワインガルトネルなり、メンゲルベルクなりシュトラウスなりに補つてもらつたものである。その補ひ方は、いふまでもなく補ふ人々の自由である。しかしともかくこの補はれたものなしにはベートーヴェンのジムフォニーはほとんど死物である。

例へばワインガルトネルは、どうしてこの補はなければならないものを補つてゆくであらうか。それはたゞ彼の感覺によるより外道はない。刻々發展してゆく音樂の形に對して、彼の指揮棒の動きは、正確に一と九の和、三と七の和、五と五の和といふやうな微妙な違ひを描き出す。また管絃樂團の指や呼吸は、その指揮棒の通りに音を作り出す。このやうな微妙な感覺の働きが多なればなるほど、その演奏は生きて來る。

これだけの事を、如何に言葉の意味を廣く取つても、たゞ感覺だけの働きに歸するのは、それは必ずしも事實の眞相を捕へたものとは言へないかも知れない。その中には、感覺より外のいろ〳〵の方面の心の活動がその中に含まれてゐる。しかしそのやうなものを總括して事實の表面に現はすものは、やはり感覺である。そしてそれは職工の指の先きの細かい感覺が、あらゆる他の心の働きを代表して、レンズの曲面を精巧に磨き上げる事と非常によく似てゐはしないであらうか。或はツェッペリンの操縦者の腕や指の感覺が、いろ〳〵の計器の數字を越えて巧妙にツェッペリンを動かす事と、なほ一層よく似てゐはしないであらうか。

たゞジムフォニーの指揮だけついて考へてもまづからである。その指揮のうちでも音の長さ短さだけについて考へても、まづからである。しかし音樂はその組織が誠に複雜を極めてゐる。音の長さ短さ、強さ弱さ、速さ遲さ、いろ〳〵の音の平均の工合など、このあらゆる事實の上に、みた指揮者と樂人との感覺の精巧さ、微妙さが現はれるわけである。またもしそれが獨奏の場合であるならば、たとへばダルベールがベートーヴェンのゾナーテを獨奏するといふ樣な場合であるならば、この感覺の微妙さはさらに遺憾なく現はれる。自分自身の思ふまゝを、何にもさへぎられず、完全に表現する事が出來る。その樣な時には、私共は紙に印刷された樂譜と、それを大家の心を通じて生きた音樂として表現されたのとの相違を充分に了解する事が出來る。それこそ正に格納庫の中に靜かに眠つてゐるツェッペリンと、それが風雨をものともせず太平洋の空を走つてゐることの相違でなくて何であらう。

世にも不思議なものは人の心である。人はその不思議な心を不思議でない樣にするために自然科學を作つた。そして自然科學はなるべく心の不思議を平易にし、一般化し、普遍化さうとした。しかし人の心の秘密はそれでも悉く消えなかつた。その科學は例へばツェッペリン

を作つた。そしてそのツェッペリンの中には、到底科學だけでは用が足りないものを澤山に含ませた。創造の力や感覺の微妙さである。人の心の不思議は、わざ〳〵科學を利用して、ます〳〵その不思議を示す機會を作つた様なものである。そして特にこの様な不思議な心の働を惠まれた人々は、誠に私共凡人からは、天才とも英雄とも謳はれていゝものであらう。

昔から音樂は天才だけに許された仕事だと考へられてゐた。しかし科學の機械の創造も音樂の創造も、結局同じ様な事に歸着する。たゞ人の心の不思議さを二つの違つた方面からのぞいただけの事である。

ツェッペリンを見る。——私共はツェッペリンを見た。三〇〇メートルの銀灰色の船體をもつて、地球の空を走る一曲のジンフォニーとしてそれを見た。

霞が浦の月

――ツエッペリン伯號を見る――

荻原井泉水

果もない月夜となつてゐる格納庫

或は湖へ、探照燈のずつと草原

空へ見送りの月夜の團扇を持つ

GRAF、明かに月夜の双眼鏡を合せる

月へ飛翔するものの、扉を開く

砂嚢もおろして、月が澄むばかり

遠く軍樂が流れてくる月夜の草の葉

奏樂はやんだ月夜の爆音を待つてゐる



秋

獨房からの訪問客

明石鉄也

——同志A。君に別れてからもう七ヶ月になるね。僕が此處に移されてからでも既に五ヶ月だ。急に同志の少なくなつた後をうけて、而も愈々激化してゆく鬪爭の中で、殆ど休む暇もなく活動してゐる君にとつては、時の過ぎ去るのは諺のやうに速いことだらう。だが僕にとつては、特に此處に移されてからと云ふものは、時間の經過はまるで高速度の映畫を見せられてゐる時のやうだ。ぢつとして居られない焦慮にかられる。

——同志A。無爲に慣れるための努力は愚劣だ、そして悲慘だ。僕のインテリ的な物の言ひ方を許してくれ。告白するが、此處の僅か四ヶ月の生活（？）が無殘にも僕の地金をさらけ出した。僕の鍛冶はまだ火が眞底にまで透つてゐなかつたらしい。はち切れる程の鬪志に燃えてはゐるが、肉體の衰弱は一朝毎に目立つてくる。暗い獨房の中で僕はおゝ哲學的な端坐を續けてゐるのだ。同志A、この哀れな僕のポーズを想ひ描いて笑つてくれ。僕は、牢獄の中で研究や著述の自由を確保してゐたロシアの同志たちを羨ましく思ふ。僕たちは、たゞ寢言みたいな宗教の書籍やブルジョア作家の小說の類しか讀むことができない。だが、此處では單に字を讀むといふことだけでも一種の娯樂となるので、僕は鐵窓から流れ落ちる秋の光線の下に、同志の指紋でも懷かしみ求めるやうに差入れの本の頁をめくつてゐるのだ。……

この感傷的なKの手紙をそこまで讀んできて、Aはふと「秋」といふ言葉にぶツつかつて吃驚した。

——秋か！……なるほどね。おい君、今は秋なんだぜ！

Aは、その手紙をまた彼の假寓に屆けてくれた傍のR子に向かつて秋を告げた。

——さうよ、もう十月よ。

R子は、覗きこんでゐたKの手紙から眼を放して笑つた。

——さうだ、十月だね。……だが、十月と聞いても、俺達には「秋」よりも直ぐに「、、」が聯想される。、、、の十月、、さ。蟲の聲ではなくて、、、の、、だ。……プロレタリアには「秋」はない。強いて言ふなら、鬪爭の秋！か。

Aは K に教育された勞働者あがりの鬪士だ。暫く失業してゐたが、二十日ほど以前に或る鐵工場にもぐりこんだばかりだつた。從業員は千二百名も居て、重要な産業部門だつた。今度は、彼は隱忍自重して、ひたすら工場内の調査に精力を集中してゐた。

彼は若い旋盤工だつた。朝の五時半に跳び起きて、向かひの飯屋に驅けこむ。金十錢也の朝食を胃袋に叩きこんで工場へ走る。既に六時半には、彼は完全に機械の附屬品になつてゐなければならない。、、、、、、の、、を前にして、〇〇〇からは×××の註文が絶え間なく殺到する。そこで、每晩九時までの强制殘業がつゞけられる。十時、彼が搾滓みたいになつた肉體を曳きづつて歸ると、彼の三疊の部屋には必ず嚴然と黨の仕事が待ち構へてゐる。だが、この勞働階級のための仕事は、彼の先刻までの疲勞を一氣に蹴とばしてくれる。そして、この仕事を終へると、彼はそのまゝ、眠つたのか死んだのか解らなくなつてしまふ。――これがAの一日だ。「秋」の忍び込む隙もない。

だが、Kの手紙はまだつゞく。

――同志A。秋の夜の獨房はまるで海の底だ。これに青白い月光でも射しこめば、全く哲學詩人にでもなりそうだよ。呵々。閑な時間を持て餘して、色々なくだらぬことが次から次へと思ひ出される、どうせくだらぬことしか書くことを許されぬのだし、それに僕は今一字でも多く文字を書きたいのだ、君こそいゝ迷惑だらうが、我慢してくれ。

――同志A。運動をしてゐる者には季節は無い。このことは、僕よりも君の方が良く解つてゐるだらう。、、、、、、、、、、、、、、プロレタリアは何時も數多の嵐の下にさらされてゐる。僕は此處に來て、やつと何年ぶりかに季節といふものを感じた。そして今は秋といふ季節が持つ自然の特殊な影響をうけて、ずゐぶん古い昔のことまで追憶の中に蘇つてくるのだ。

――同志A。たしかに去年の秋だつたかと思ふ。君と二人で、城西方面のある研究會に出かけたことがあつた。その途中、僕は妙に懷かしい情景をみて心うたれたことがある。ある空地の草原の中で子供たちがお月見をしてゐたんだ。草の上に莚を敷いて、薄の穗や女郎花なぞを飾つて、十二三の娘や四ツ五ツの男の子などが五六人、よく澄んだまんまるい月に向かつて童謠を合唱してゐたつけ。小さい方の子供たちは、まだよくもとらぬ口で皆について歌つてゐた。僕は思はず立ち止まつたが、急に眼がしらの熱くなるのを覺えた。何故と理屈をいふ程のことでもない。僕は急に恥かしくなつて、君にもたゞ默つたまゝで行き過ぎたが、かう言へば、君もあの時のことを思ひ出してくれるかも知れない。勿論、こんな甘い感傷は鬪爭の妨害になる不要の贅物だ。惡だ。僕は以前から考へてゐたんだが、唯物的といふ點では、一般的にみても、勞働者よりもむしろインテリゲンチア の方が徹底してゐるやうだ。だが、インテリの唯物的な感性の底からは、ちよいち

よいこんな感傷が覗いてみせる。或はこれは、唯物的とまではまだ行かないで、非感情的と言葉をかへた方がより適切かも知れない。ところが、勞働者は非常に感情的なんだ。そして多分に感傷的でもある。むしろその日常は、インテリよりも感傷的だと言へるとおもふ。ところが、それが、、、に、、する場合になると、例へば、、、、、だとか、、だとかの場合、この個人的な感傷なり感情なりは物凄い集團性を帶びてくる。それは、單に群集心理などとあつさり片附けられる性質のものではなく、そこには、勞働階級の特殊性が强烈に反映されてくるんだ。この何物をも燒きつくす、、性の感情はインテリには全く緣遠いものだと思ふ。むろんこれは原則的な意味なので、例へインテリでも、彼が集團的な階級鬪爭の中で徹底的に鍛へられてゆくと、久しい年月の後には戰鬪的な勞働者と同質の感情・感覺を持つやうになるのだが。その場合、彼はインテリと呼ばれるよりも、むしろプロレタリアと呼ばれる方がふさはしいのだ。だが、こんなインテリは百人に一人も難かしい。特に比較的に若い日本のプロレタリア陣營には、まだこんな男は居ないらしい。その點、僕なぞは哀れなインテリの典型だ。此處に來て、一層その感を深くした。と言つても、誤解しないでくれ。僕は決してプロレタリアの、、、、、ものではない。解放運動に對する僕の信念と鬪志とは、熔鑛爐の鐵のやうに燃えさかり沸きたぎつてゐる！（手紙はこゝから以下五行半ばかり、黑々と抹殺されて、、、、、の跡を示してゐた。）さうした奴等の、、、と、、して無念にも慘敗したあの工場に、僕が入り込んでまだ間もなくのことだつた。だから、ちようど一昨年の今頃だつたかと思ふ。例の通り毎晩殘業が十時までつゞいてゐた頃だつた。ある晩、夜業も終つて、道具の手入をすまして風呂場の方へ行かうとした時だ。機械の騷音の消えた工場の隅で、僕はふと蟲の聲を聞きつけたんだ。で、その薄暗い片隅を覗分茶目氣分も手傳つてバタ〳〵足踏みをやつてみると、蟋蟀が一匹跳び出したんだ。引ツ捕へようとして二三度掌を伏せたが、そいつは身輕く跳ねて萬力の蔭の所で見えなくなつてしまつた。風呂の中につかつてから、僕は鐵製の大きな機械ばかりの工場の中で鳴いてゐた蟋蟀の奴が可笑しくつて仕樣がなかつた。近代資本主義の生產點に迷ひ込んだ一匹の秋の虫！　こいつアどうも、僕に對する素晴らしい戲畫みたいで、とても辛辣な諷刺だと感心したね。僕は工場からの歸るさ、どうにも抑へきれなくて何度となく苦笑をもらしたものだつた。この皮肉な小事件は、この獨房の中に移されてからでも、それを想ひ出す毎に僕を失笑させてくれる。

——同志A。面白くもねえことばかり讀ませやがる。と氣の短かい君はもう怒り出してるかも知れない。だが、こんなことを書いたり話したりするのも、此處では一つの安全瓣になるのだ。

——同志A。本當に書きたいこと話したいことは、うんとあるんだ。しかし今は、同志Aよ健鬪を祈る！　としか書けない。

——職場の燃焼は愉快だわね。
讀み終つたR子は、だが別に愉快さうな表情もしないで、低く呟いた。Aも沈痛な面持で默りこくつてしまつた。
　Aは熱烈な同志愛をこめてKのことを追想した。——Kは生一本な男だつた。彼は、インテリによくあるやうな殊更めいた勞働者風の言葉や服裝をつくろひはしなかつたが、その癖、彼の研究會での説明は非常に具體的で綿密で勞働者にはよく解つた。彼の話には、その言葉の素直さのうちに烈しい熱情が迸つてゐた。彼は單なる講師ではなく、立派な、、、であり、、、であつた。そして、一昨年の冬の△△の爭議の時には、彼は立派なストライキ・マンだつた。彼の豹のやうな精悍さには指導者達も驚嘆してゐた。勞働者達も彼をインテリとしてゞはなく、全く生れながらの同じ仲間として心から信頼してゐた。そのKがこんな手紙を送つてきたのだ。この輕々と如何にもおどけて書き流した言葉の底に、Kの苛借なき自己批判の鋭さを見出して、Aは頭の下がるのを覺えた。三・一五で囚へられ、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、Kは彼一流のメスで自己の弱點を餘すところなく批判したに違ひない。彼ほどの闘士にしてなほ清算し盡されずにゐたインテリの贅物を笑つてゐるのだ。彼が言ふ如く、よし若干の殘滓を殘してゐるとしても、誰が彼の精進を笑ひ得よう。同志Kよ、健在なれ！
　AはR子にレポを渡して、同時にKへの傳言を頼んだ。だが、Kの手紙のやうにおどけて……
——今度、Kに面會にゆく人にから傳へて貰つて下さい。（以下二十六字削除）とね。それから、Kの言葉の通りに、俺達には「秋」はない。たゞ、今夜「秋」は獨房からの珍らしい訪問客だつた、とね。

——これは二八年の秋の話——

とぎれとぎれの瀋影

高橋丈雄

I

線路は、石塊を赤く、枕木を赤く、水氣に伸びきつた雜草も、冷たく並んだ屋根瓦も、すべて一色の茶褐色に焦しつくして走つた。
貨物自動車をのせ、運送車をのせ、自轉車をのせ、農夫をのせ、下駄牛をのせ、牝牛をのせ、黒犬をのせ、埃りつぽく白ら白らと道は走つてゐた。
定時刻には運轉手台に黒鞄が乘つた。
どの停留所にも赤い函が一つづつあつた。
停車らぬうちにピョイと飛んで、斜に走つて、鍵を穴に突込むと、

手紙、新聞の白い堆積がなだれて……、赤い函が閉まり、黒い鞄が閉まり、出入口が閉まり、――かうして停留所、停留所に地下足袋が、それぞれ違つた角度の斜線を一本一本描いて走り去つた。

たつた一つ赤函を持たぬ停留所があつた。それほどその停留所は小つぽけで、附近の人家も疎らだつた。

赤い屋根が五つ並んで、前にコスモスが咲き並んで、眼の置きどこによつては池がそれを映してみせた。まんなかの家の貸家札がはがされた。

停留所と家とをつなぐ道の兩側には坦々と小松が茂つてゐた。初秋の空のもと、道を一人、僕が貸家探しに疲れた足をとぼとぼ運ばしてゐた……。

2

妹には悲しいことが多かつた。階段を駈け上つて來ては僕の胸に斷髮を伏せて髮を震はせた。

――こんな家にもう一生ゐないわ！

――お豆腐の水かへとかないなんて、そんなこと氣がつきやしないわ！

わがまゝな聲をあげて泣いてゐると、姉が階段をあがつて來ては兄妹のまへに坐つた。

死を戀ひながら、僕はたゞ無暗矢鱈に歩いた。死んだ弟の看護疲れに身體をすつかりこわしてしまひ、兩親の亡い後の世事のうるさゝには街燈も全く點りていつた

大阪の夕の空にははたはたと蝙蝠が飛んだ。北へ北へ無數飛んでいつた。

――蝙蝠來い……

――行燈にかくれて笠きて來い！……

見あげて唄ふ子供たちの顏を湖のいろをした薄闇が濡していつた。

――郊外の自炊生活なんかうまくいくもんか。

――二人ともほんとに我儘なんですわ。おとつつあんや、おつかさんが甘やかして育てすぎたからよ。

――あんなに可愛いがつて、しまいに、、、、、、、、、ゐやうなことになるぜ。

3

義兄は分別臭い笑ひを洩しながら、酒に濁つた眼を姉に向けた。

いゝチヤチな洋室はガランとして壁ばかりいたづらに白く、額、カーテン、テーブル、椅子のたぐひはなに一つなく、床は板の間に花茣蓙が敷いてあるきりで、この洋室はなにをする時に使つたらいゝか判らなかつた。

せゝつこましい四疊半の方は、疊はぶかぶかで、敷居と壁の隙がひどいとこになると一寸ちかくもあいてるし、押入の唐紙はすつかり破れ汚れ、庭に面した硝子戸は無理にあけたこすると硝子板が飛んで出

さうだつた。

4

安値い石油焜爐はお汁を零すたびに瘤んで來た。急に臭い石油のにほひが鼻を衝くので見ると火が消えてゐた。穴に塵埃が塞つたのかと針でつゝついて見たがなかなか出なかつた。いらいらして針を一本曲げてしまつた。御飯が半煮えなのでなほ周章てた。――石油が切れてると知るまでにい、加減、時間を費してしまつた。壜にも石油が無くなつてゐるので揮發の儘かあまつたので間に合はしたが、すぐそれも消えてしまつた。苛立つて聲が尖つて來た。妹は七輪に炭をついだ。家中が煙で一ぱいになつてやつと火がおこつた。

生のまゝ水を吸ひ盡してるお米へ水を加してかけたが、うはつつらの生のうちに下が焦げついて來た。水を増してお粥にしようとしたがゴリゴリでシンばかりの御飯が出來あがつてしまつた。次の鍋をかける氣力も無く、部屋一ぱい散らかしたなかに二人は茫然してしまつた。鍋のなかには玉葱、馬鈴薯、大根、糸蒟蒻、燒豆腐のたぐひが冷たい膚を見せてゐた。

――兄さんはなんでもあたしの セイにする!

――だつておまいが石油のなくなりかけてんの知つて取りにゆかなかつたんぢやないか!

ヒステリツクな聲を立てゝ爭ひあつた。

妹はうどんをいひに台所の下駄をつゝかけた。

僕は食へさうにもないそのお米を新聞紙に包んだ。近所に見つともないゆゑ、こつそりそいつを池の叢に捨てに出かけた。

5

赤茶けた、まだ仔のやうな牝犬はいろんな媚態をしめしながら搦みついてゐた。

足が三本しかない、ひどく汚い牡犬は、眼をしよぼしよぼさせてうるさゝうに、それでゐて、いつまでも凝つと動かずにゐた。

硝子戸の内部から顏が覗いてゐた。

額をピツタリ、ガラスに張りつけて犬から眼を離さなかつた。

孤獨を狙つて、悄然がのたうつ眞午だつた。

泥のやうな午睡のあとの重い頭に、英語をつめこまうと膝のうへに本を持つて來たまゝ、いつまでも二匹のいきもののヘンに荒寥とした淫なすがたを凝視してゐた。

6

鉛色に池の面を沈めてゐた斜形の影がいつか消えていつた。たゞ一條、僕の家だけが頑強にいつまでも光線の縞を流しつゞけてゐた。

餌のない臺所を、しばらく鼠はがたことい はせてゐた。

油揚が一片、ぐつたり睡つた妹の髮の影からはみ出て轉つてゐた。

こつそり閉ぢた僕の眼は決して眠つてゐなかつた。いへば昨夜、一と昨日、大根や馬鈴薯や部屋においた油揚まで嚙られた口惜しみと怒な

秋

大人氣なく昂奮してゐた……。

部屋と臺所を仕切る障子の紙が破けて穴が出來てゐた。

妹の頭の位置が動いたので、油揚は光りの外へ放り出された。

穴から漏れた髭を二度、三四度覗かして窺つてゐるらしかつた。

するつと尻尾が這ひ下りた。

斜に疊を行つて、戻つて、行つて、ぢき赤く濕つた鼻先が油揚の端にとまつた。

ひつこめて、またあてがつて、狡つからしい眼を忙しく働かしてゐた。

突如僕が蹴ね起きた。

瞬間、狼狽した鼠の行方は僕の二本の足で遮られた。――足はぢりぢりと追ひつめて來た。

しばらくあせつてゐたが、追ひつめられると、不意に首の方向をかへて、暗く口を開けた隣りの洋室の闇に、小さい身體を轉すやうにして遁れていつた。――つゞいて僕の身もその闇へ吸ひ込まれた。

境の扉をピシンと閉めた。空闇を模索つてゐた手が電燈の端にぶつかつた。電燈がついた。四方の白い壁から撥ね返される光りのなかに、小さい生物の身を秘める限さへ見出せなかつた。そつと近づくと、鼠は壁にそつてひよろひよろ走り出した。しつこく追ひまはす緊張した面白味が病的に僕を夢中にさせた。深夜の部屋を二十分ばかしも、あるひは靜かに窺ひよつたり、あるひは亂暴に座蒲團を投げつけたりした……。

金歯のまるい水陽炎が壁に揺れてゐた。

寢不足の怠い手で、水の溢れぬやうにもちやげて、したの座蒲團を取つた。

死骸はひらべつたくなつて、ちらつと黒血が見えたやうな氣がした。いそいで新聞紙に摘んで池の縁まで持つていつた。

腐つた御飯のそばにぽいと投げて、ゆつくりと戻つて來た……。

7

さびしさにぢつとしてゐられない日暮なんぞは、どんなつまんないのでもいゝから映畫が見たくなるのだつた。

小皺に黴臭い外套を行李の底からひつぱり出してひつ掛け、妹を連れて新世界あたりまで出かけた。

くだらない寫眞に陶醉にされては館を吐き出された。

二十錢均一の洋食屋に 妹は肩掛を忘れたり、お汁粉屋に五十錢貨と十錢銀貨をまちがへて拂つて來たりした。

いつも陰欝に默りこんでしまふので歩みも疲れた……。

8

枯れたコスモスの枝に鳥の羽根がひつかゝつて顫へてゐた。

縁に出て、斷髪をジヤキジヤキ刈つてやつた。

鏡に映る僕の白眼は蒼く狂つてみえた。

……不圖、鋏を止めて眼を凝した。大急ぎで僕は庭に下りた。嬉しさうに拾つて持つて來てそつと妹に見せた。──隣家の鶏が產み落していつた玉子だ。

──いつも庭を荒されてるんだから賠ふもんか！

小兒のやうによろこんで鋏の先でコッコッ穴をあけた。

仰向いた。生温いドロンとした液體が喉をダクダク落ちていつた──。

9

……はじめ電柱がぶつ倒れて來た。ハッと立ち停つた瞬間、すばやくそいつはもと通りに突立つた。一足踏み出すと、また倒れて來さうな氣勢を示した。歩き出すと左右から家々が壓ひかゝつて來た。看板がおそつて來た。屋根がおそつて來た。樹々がおそつて來た。戸が。瓦が。幹か。

──こいつは氣が狂ふんだ！……背筋を冷い線が熱く走つた。ちよつとでもぢつとしてたらやられるぞ！──走るんだ！　走るんだ！

無我無中で駈け出してみた。方々から追つかけるやうに殺到してくる直線はそれぞれ月の光りをヒラメかしてゐた。

人家が途絶えると今度は距離の遠さによる凄さで、森や田畠の黒い線がおつ被さつて來た。

神經衰弱なんだ。──心はわらはふとあせつたが恐怖は去らなかつた。いつもと違つた停留場から下りたことを後悔した。

井戸に飛びこんだ祖父の姿が道のうへを過つた。東京の叔母の後姿が浮んだ。腕をガクガク噛んでる父の姿があらはれた。

狂氣の毒血がたうとう俺の腦をめぐりはじめたんだな。ざまア見やがれ。──わるく心は、そんなとこで落付いてしまつたが足は正確に宙を飛んでゐた。

晩秋の空氣は冷え冷えと澄んで呼吸苦しいのが快かつた。

蒼い道はまつしぐらにつゞいてゐた。

電線が頭腦のうへをすばやく流れつゞけた。

走つて、走つて、走り拔いた。

瓦斯タンクが背後へゆるゆると動いて行つた……。

（1929・8）

二組の登場人物

中村正常

1

病院の部屋のこと？

男　（ベッドに仰臥してゐる）おい。

女　（窓ぎはの椅子に背伸をみせてかけてゐる）

男　こつちへこい。
女　ところが、いやなの、正直に云へば。
男　來てくれ。
女　仕方がなければ、行くわ。――はい。
男　僕はやつぱし、死ぬんだらうな。
女　はい。
男　助かる見込はないんだらうな。
女　はい。
男　さうなのか。
女　はい。
男　はい、つていふ他に口をきかないことにきめたのか。
女　はい。
男　そのほかの返事はしてくれないのか。
女　はい。
男　ほかのこと、いつてくれ。
女　いや。
男　はい、つていふ以外には、いや、つていふのか。
女　はい。
男　こつちを向いてくれ。
女　いや。
男　返事はその二種類にきめたのか。
女　はい。
男　代りばんつにいふのか。
女　さう。
男　返事は三つだな。
女　うん。
男　四つか。
女　さう――。
男　死ぬ前に、僕からなんかきいておきたいことはないのか。
女　ない。
男　死ぬ前に、僕になんか云つておきたいことはないのか。
女　ない。
男　向うに行け。
女　はい（向うに行く）
男　勝手にしろ。
女　はい（窓ぎはの椅子に背仲をむけてかける）。
男　そこでなにをしてるんだ。
女　泣いてなんかゐない。
男　なにをしてるんだ。
女　外をみてるの、地面の上をみてるの。

男　もうおこつてはゐないのか。
女　いゝえ。
男　仲なほりをしようよ。
女　いゝえ。
男　おこつた顔でもいゝ、みせてくれ。
女　にらむからいや。
男　みたいんだ。
女　(ベッドの方にゆく) 見納めにするつもりなの。
男　——死ぬとはまだきまつてやしない。(女の袂をつかんでしまふ)
女　——それはなんのまね。
男　はなすもんか。
女　持たしておいてあげるだけ。
男　一生懸命みてるんだ。
女　ねえ、私の顔にまだ可愛いゝところが、のこつてると思つてる。
男　可愛いゝとも。
女　うそ、口惜しいくせに。
男　さうだ、泪がこんなに流れる位ゐだからた。
女　(男の手をふり放さうとする) 手を放していたゞけない。——無理にすりや、ことはらずにふりはなすことだつて出來るけど。
男　きかせたいことがある——墓の下に入つてしまはないうちにな。
女　(あとじさりしながら) あんまり立派なお墓作つて貰つと思つたら間違よ。
男　どうだつていゝ、墓なんか。
女　えゝ、考へてるの、秋の末に小つちやい棒杭を立てようと思ふの。
男　墓なんかいらない。
女　だつて、あつた方がいゝわ、遠慮しないで。
男　いらない。
女　さう、ぢあ。
男　そのかはり、——
女　いやなの、あんまり面倒なことは。
男　(枕の下から保險證書を出す) これは保險證書だ。
女　(遠くの方で) まあ、うれしい。
男　死ねば、生命保險の金が貰へるんだ。
女　死んだ人にはいらないわね。
男　破かうか、——笑つてみせてくれ。
女　はい。(笑ふ)
男　うれしいときには、そんなふうに笑ふのか。
女　ほんとうにうれしいから。
男　うれしいのか。
女　うれしいの、うれしいの…………窓からみてたの、地面の上にだつて、うれしいことはさつきまでは、なさゝうだつたのよ。

2

地面の上のこと

青年　さつきも云つた通り、なんだかこの頃僕へんなんだ。だけども、途中でその話はつまんないつて云つて貰ひたくはない、かうなんだ、多分、あんたはまだ氣がつくまいが、なんだかこの頃僕へんなんだ。

少女　なアにイ、それ。體重一體、幾キログラム位ゐおありになつて。

青年　折角だから僕返事する。今のところ、――でも、明日になりあ、もつとへるんだ。昨日は今日より大分目方重かつたんだ。そのわけは、おしまひまできいとくれよね、どうも、段々目方がへつてつちまふんだ、それはなぜかつていふと、昔からもいふ通り――

少女　身長の方は、どんな具合イ。

青年　そつちの方は、さう目立つてちぢみやしない。

少女　手品みたいねええ。

青年　あ、わかつた。僕はづゐ分わかりがいゝ證據に云ふんですが、なあんだ、あれなんですね、あんたさつきつから手の中で、その手巾、丸めたりひろげたりしてゐるの、それ――この手巾、左様然らば、あら不思議や、手の平の中へと消え去せてごらんにいイれます、つてあの手品の稽古してるんでせう。

少女　さういはれると、さうなのよ。だけど、この手巾消えてかない方がいゝの、だつてエ、もし消えてかれちやつたら、手のやり場ずゐ分具合がわるいわと思ふわ。もぢもぢ、自然しちやふでせう。

青年　僕ハやり場に困るのは、實け目の方でねえ。下むくと脚がめえちやふし、上向くと目がみえちやふし、横向いてちやつまんないし、――どこ向いてたらいゝでせう。

少女　私には、返事をしたりしなかつたりする癖があるのよ。

青年　で、僕、はづみをつけて、勇氣出して云ふ――さ、そんな手品もうやめて、こつち向きなさい。

少女　やアよう、――ほオら、丸めたでしよ、しはくちやに丸めたでしよ、こんどはひろげたでしよ、はぢつこ引つぱつたでしよ、まだ仲々消えてきさうにもないわよ、この手巾。

青年　おぼえておく、大丈夫だ。

少女　ぢあ、こんどはなんの話しませう。

青年　僕の話きいて下さい、少おし。

少女　私を感動させないでね。お願ひよう。

青年　頭がいたくなるのか。

少女　んゝ、おうちにかへつて、母様つかまへてきかしてやりたくなりさうなの。さうすると、母様、こはい顔してよ、感動するような話を、めつたに青年からなんぞきいてくるもんぢあないんですつて。

青年　そりあさうだけどね。

少女　日記にそおつとかいておいても、やつぱし駄目なのよ、うちの母様つて探すのんきいの、いくら上手にかくしといても、私のものなら、なんでもありかしつてるの、この前なんか、私の靴下留め片一方どこにある、つてきいたら、まあおどろいたわ、お机の上の讃美歌の本の間に挾つてますゥ、つてかういふ具合なの。そいで行つてみるとちやんとそこにあつたわよ。私がね、靴下ぬぎながら唱つて、しほりの代りに、挾んどいて、失禮だけどつい忘れちやつたらしいのよ。

青年　いまはもう秋だからいゝけれど、――

少女　なァにイ、急に。

青年　夏だつたら目まいがしちやふよ、きつと。

少女　わかんないわ。

青年　地面の上の川霧がさ、やだ、やだ。

少女　そんなにいやなの。

青年　告白するとね、夏中僕戀してたんだ。

少女　まア、おどろいた。

青年　だけど、秋になつちやつたから、もうふゝゝちやあ。おどろくのおよしよ。

少女　まア、おどろいた。

青年　どして、そんなにおどろくんだ。

少女　感動つていふの、こんなのかしら。――別にわるくはなささうねえ。

高千穗の歌

與謝野寛

わが車雲より出でて高千穗の青きをひと目みる溪間かな

高千穗の燒石を錬り丹を塗りし鈴に先づ聽く高千穗の音

高千穗の膝のあたりのむら山の一つに寢ねて凉し我が夢

熱き湯を榮の尾の溪に朝浴びぬ高千穗に行く淸まりのため

高千穗を空に望めば心さへほのぼのとして明りゆくかな

都にてうなだれてのみ在りしひと高千穗に來て長き杖振る

高千穂はふもとの山も大空を行くことのごと雲分けて行く

世の常の園さにあらず高千穂は翡翠の箜篌を中空に立つ

高千穂の路にて赤き蛇を打つかかる事して善きや悪しきや

高千穂は中空に在り我が行くは虹のいろする西の切岸

踏むたびに高千穂の砂くづれきぬ我を拒むや我を試めすや

高千穂のけはしき坂を行く我れの荒き汗ちる燒石の上

高千穂の燒石を攀ぢおもへらく虹にあらずば天の浮橋

高千穂の雲間を分くる路長し馬の背ならず龍の背ならん

高千穂の一つの峰は迦具土の飛び去りしまま有るは洞のみ

高千穂の朱とむらさきの切岸よ天のこころもの襞と云はまし

フラスコを肩より下ろし高千穂の頂に飲む藷の燒酎

一杯は先づ高千穂の神にとて噴火の穴にそそぐ燒酎

高千穂の雲に坐りて唐藷の燒酎を飲み物を歎かす

高千穂の頂にして見上ぐれば霧にまじりて白し天つ日

思ふこと高千穂に來てすがすがし心に近く天の門見ゆ

こころをば高千穂に來て我れ放つ行け青雲の天の通ひ路

いただきに天の八重雲降りに降る猶高千穂は神の代ならん

高千穂の高きに立てば天つ風われをも秋の雲として吹く

ここに我れ神代の昔を読むならでみづから分けつ高千穂の雲

高千穂の焼石にゐて紅き實を舞鶴草の著くる心よ

高千穂に在りて歌へば我が聲を風吹きちぎり中空に置く

たそがれて猶青めるは高千穂と韓國が嶽その外は雲

高千穂も榛の大樹も湯の瀧も兵兒の心を現はせるかな

高千穂の高きを踏める喜びもほのかに寂しせんすべも無し

霧島詠草

與謝野晶子

霧島や神代の巻に歸り入る霧とおもひてわれも伴ふ

車をば妙見の湯の軒に寄せものいふ時も隔く霧かな

山の雨牧草の波やはらかに續くところもしたたかに打つ

霧島の月を見るなり山の氣のうごき初めたる曉にして

草まくら大守の借りし座敷のみまだほの暗き山の朝かな

霧島の榮の尾の前の山の戸はせまれど見ゆる海の月明

わが友が栄の尾を立ちて入る山は木のいと暗しほととぎす鳴く

開聞は萬里の島にあらねども見がたし夏の雲のゆききに

大波の池に白雲流れ入り山の正午のしづかなりけれ

日のひかり白きあられを池に投ぐ外輪山の草うごく時

はるばるとからくに岳に及ぶ森それに隣れる夏草の原

湖をかこめる山の笹原に鳴るはさびしき霧しまの風

山上のをだまき草の莖よりもよし細くとも海あらはれよ

湖の龍女のはなし龍ならでをだまき草になすよしもがな

明星のあかさに山の硫黄干すところもをかし高原の奥

霧島の高千穂の山たかはらの草より出でて高し千尺

運ばれぬ山の設けの栗の飯高千穂の嶺の神もませかし

裾山にさくら島をば加へたる遠方見えて雲なかに置く

雲にある開聞岳を思ふなり榮の尾の上の第一の樓

霧島の溪より出づる湯の霧にくもるけしきの薩摩潟かな

悲しかる南洲の死も霧島に寢つつおもへば神話の如し

ほとときす湯の槽の白き月夜よりやがてうつりし山のしののめ

うすものの袂より下に雲の波つらなる山の朝ぼらけかな

華やかに鳴る山川を數しらず脈(みやく)とするなり若き霧島

女湯に溪を覗くはあらずして男の顔の並べる月夜

霧島に神の矢のごと速かりし雨をまた見ず霧のみぞ降る

客(かく)房(ばう)の雲に濡れたる瓦をば哀れと見れば日の昇りきぬ

霧島のなかばを朝の日に與へ萬(ばん)木(ぼく)くらしわが榮の尾溪

眉のごと南薩摩の見ゆる日もなほ心引く國(こ)分(ぶ)の小島

霧島も霧のごとくに時流れ昔の夢となりぬべきかな

文學を包圍する速力

室生犀星

一、ツエッペリン飛行船、映畫の電波的放送、人造人間、第二期人類の爭鬪、

歐洲戰爭時代に私はツエッペリン飛行船を讚美した一詩を物して、時の文藝雜誌「秀才文壇」に投じ、彼の英姿と襲擊振りとを讃えて彼の爲に氣焔を吐露したものであつたが、最近迄香として消息を聞くことが出來なかつた彼が、世界一周や日本に渡航することに成功したのは、ツエッペリン飛行船の機械的方面の充實とエッケナー博士の自信とを證明するものであつた。

戰爭時代に極端に毛嫌ひされ惡魔視せられたツエッペリンが、世界の各國を擧げて熱狂的に歡迎してゐるのも、却々皮肉で、昨日を忘れた人間振りを發揮してゐる點で無邪氣であるかも知れない、歐洲大戰以來十五年の今日を經て此快速力に接するのは、或ひは時期に於いて遲れてゐても決して早いとは言へないのだ。戰後疲弊したゲルマン民族が賠償的にアメリカや其他の國に獻納のツエッペリンを賠償したのも重なる原因であらうが、本來なれば此飛行船の速力能率とその飛行的成績はもつと早くに具體化さられるべきであつた。併し戰後に直ちに惡魔視せられたツエッペリンの飛行も自由に出來なかつたであらうし、經濟的にも起てなかつたものに違ひないから無理もないことである。しかも十五年の間靜かに再擧の思ひを潛め、快擧的に成功したのはゲルマン民族の不撓な冷たい迄に凝固した熱情と忍耐の賜物であつたらう。

ツエッペリンと同樣、トーキー映畫も亦その發展的經過に於いては既に時代遲れの感があり、天然色映畫時代に發明せられるべき現象であつた。發聲映畫に對して何等の奇異の感情を感じないのは、かういふ進路と捌け口を取るべき映畫が、我々の空想ばかりでなく當然實現されるべき可能を信じてゐたからである。ラヂオや電送寫眞は日本に初めて試驗されてから五六年（電送寫眞は極めて最近である。）になるが、かういふ科學的進路が決して發聲映畫の成功を疑はしめなかつた

のだ。無音性映畫の機械的行詰りはカメラの技巧的方面の馳騁のみの成功に止まり、その自然色表現に於てさへ充分な効果を擧げてゐなかつた。無音性映畫がトーキーとなつたのは其等の行詰りを打開したものであり、人生描寫にばかり深刻がらうとした無音性映畫の憂鬱性、（自然主義的な描法）に對して、洪水のやうな明快さを開いたものはトーキーの目的であり、新しい時代的な生彩であらねばならない、ツエッペリン飛行船が飛行航空界に對する刺戟以上の驚異を與へたと同様に、映畫の發聲機關の完成は映畫發展の上に異常な衝動を搖き起したことは言ふまでもないことである。

飛行機や飛行船が地上の汽車や汽船のやうに旅客を搬ぶことも事古くなつたが、映畫が電送的なラヂオの表現機關の如きものを媒介として、我々が家庭にあつて白布を垂れて、其電波の放送を待つ樂しい時代も亦來るに違ひない、僅か二三千人の員數を最大限度とする常設館で一々機械を廻轉したり、不潔な汚濁された空氣を吸ひながら見物するよりも、家庭内で夕食を攝りつつ見物した方が時間や衛生の上からも、どれほど團欒的で自由で愉快だか分らない、一つの常設館で二千人位收容するとして十館同時に封切しても二萬人の夥ない人員であるが、これを機械的放送の新表現を執るとしたら、同時に二十萬人の看客を得ることが出來、その興業的成績の上からも巨額の利を把ることが出來るのだ。顔を見ながら電話をかけ合ふことも何等の新しい發明で無くなるやうに、科學的な展開は遂に映畫を大衆自身のものに引入れることは最早疑へない、今日では電話や無線電信や飛行機や切開や植皮的治療に對して、極めて常識的な立場に居るまでに我々は慣れ、電話の故障や電燈の不時消燈、飛行機の墜落、切開手術の不完全に對しては、寧ろその不成功をなじる迄に習慣されてゐる。これらの近代生活の基準となるべきものの不成功を不自然に思惟するまでの、それほど迄の科學的な一般常識感が我々の生活に食ひ入つてゐるのだ。飛行機の墜落は我々に取つて飛行士の不熟練な操縱を考へさせても、飛行機その物の航空的可能性を疑はなくなつてゐるのである。

ツエッペリン飛行船の世界一週を動機として、今後世界の何處の國へでも簡單に飛行することが出來るやうになるであらう、一萬キロを渡空するに百二時間を要する快適な速力は、今日の速力競爭の時代の帝王であるとしなければならない、元來凡ゆる軍艦や自働車汽車汽船の發明は一個人の優秀な科學的空想を實現したものであり、空想と科學との一致が恐るべき正確な數と理論と實現とに據つて、今日への發展を敢てしたものである。トーキー映畫にせよ、昔のキネトホン時代からの空想的表現の充實であり、ツエッペリンもまたエッケナー博士の言明せるごとく實感的空想が明確に世界一週を爲さしめたことを考へると、確實性のある科學的標準をもつ空想力も亦偉大としなければならない、レオナルドの空想もそれが未來に實現された今日に於いては、文學的空想として一笑に附すことは出來ないのである。

最近の映畫「メトロポリス」の内容は同じい科學的充實と權威とを

誇示したものであるが、その空想的内容及び監督の低劣さは「人造人間」の可能を表現しようとし、しかも空想が何等の實在性をもたない機械的傀儡をのみ我々に看取させたのは、空想の劣惡さを意味したものである。人造的人間はそれは人間の形態を現はし得ても、精神を與へることは絶對に不可能である故に、機械的人間の範圍に入れられても、遂に生きた物言ふ人間にはならない、人間的な人間及び人間としての特質の優越さは精神の存在にあるのであつて、精神力を吹き込まれない人間は人間の範疇に入らない、機械的人間（精神の入らない）の使用は工場や勸工場の番人、或は通行掛や機械操縦者等に役立つのであり、戰爭時代に第一線に立つ砲彈の的とするのもよいが、さういふ一個の人間に對する經濟的費用は莫大な時間的な消費であるために、これ又無用のものとしなければならない。

單に人造人間の可能を信據するとして見ても、形態や行動が自然にその精神作用を起さないかぎり、人造人間としての興趣的な或いは科學的な成功として讃美することは出來ない、人間の精蟲も射精と同時に同じい温度に兩性を結合すれば或いは科學的な假定された「肉體」に注射することはできるが、それが假りに十ヶ月の間その「肉體」で養ふことが出來れば、或いは人造人間が肉體的に組織されるかも分らぬ。さういふ根本的な經過を取る時にのみ精神力のある人造人間の本體を衝き當てることが出來るであらうが、それ以外電氣人形などは問題にならないのだ。兎もあれ動物的應用試驗が成功した後でなければ是等の「空想」も遂に詩人の空想として笑ひものになるに違ひない、科學は眼球をつくり得ても腦漿を作ることが出來ない、人造人間の解決は絶對に人間の精蟲移乘が根本の問題であり、それ以外は單に昔の殿様が操り人形を作らしめて、茶や菓子を搬ばしたところの他愛ないものになるに過ぎない、ツエッペリンや映畫の電波放送は信じられると同様に、人造人間も完成されることも疑へない時勢になるであらうが、今のところは單に文學的内容を持つところの「人造人間」に過ぎないのである。若し「人造人間」の科學的現象が完全に成蹟づけられるとしたら、我々人類は絶對に資本主義のもとに征服せられるに違ひない、何故なれば人造人間に要する經濟上の資本は莫大な巨額に上るであらう、それの充實に據つてのみ人間が製造せられるからである。假りにさういふ時代が來るとしたら、人間は或程度迄海上に浮遊する萍草的な厖大なる都市をつくり上げるであらうし、太陽光線によつて人間に最も適當な温度を一定した氣候を續けることができるであらう、海上に都會をつくりあげることに依つて、人間は寒暖を追うて春光遍ねき處のみに生活することができよう、今から百年前の人類が想像することのできない生活を現實の我々が營んでゐるやうに、次の百年後の人類の生活の内容はまた我々の考へることのできない進化された科學的な生活を計劃することによつて、我々の今日の進化作用の幼稚さを記憶するであらう。

今日のやうに分業的な商店街のごときものも甚だ不便なものであつ

て、洋服は服屋に雜貨金屬はそれを商ふ店々に行かなければならない、時間や選擇の上に夥しい手數をかけねばならないことは、何と言つても不便な混亂的都市の現象と見なければならない、それらの需用品のごときもその評價だけの金圓を一定の場所に投じれば、それらの物品がすぐさま入手するやうな電氣仕掛のものになり、今日の如く必要品を購求するに一日がかりの不必要な時間を要することは、迂愚の至りとしなければならない、勿論、自動車のごときものは一定の自動車道路のみを專用し、汽車のごときものは最早時代遲れの甚だしいものに變るであらう、航空道路の完成は必らず小細工的な自動車をして今の人力車の如き古風な感じを抱かせるに違ひない「メトロポリス」の低級な空想は道路に自動車を走らせてゐるのは、それ自身頭の古さを表はしたものに外ならない、その時代は溫室によらずして太陽光線の製法によつて、野菜や植物の類も亦それらの溫度によつて四季の珍果を集めることができるかも知れない、——

人間の齡は原始時代から漸次短縮されてゐることは事實であるが、反對に初生兒の死亡率は近年に至つて歷史的に優良な生存を繼續してゐる。幼生兒乃至青年期の生存率は益々旺盛になつてゐるのは、科學的進步によつて爲されてゐる現象であるが、反對に生命の短縮されてゐるのは肉體的に人間が衰退期にあることを意味するものである。人造人間への精蟲移乘が成功されても衰退期の種子は決して原形人間以上の長命と健康を保留することが出來ないのは當然だ、それ故健康的には病弱な人造人間は身長骨格等に於いて、餘り優秀ならざる劣性を帶びた生存を續けるであらうことは疑へない、さういふ人間の思想は何を思慮するか、又さういふ人間は我々正統人間の敵に廻るであらうし、我々の科學を生活組織を破壞するだらうし、彼等は慘酷な我々の科學的實證を呪ふであらうし、我々を最後迄怨敵とするに違ひない、人造人間はそれを爲し遂げられた時に、我々は平安であることは絕對に出來ない、人間は人間以上の生活を爲してゐることに就いて、神の裁きは無いが、人間的分身型のでき上つた時に裁かれるかも知れないのだ。併しながらさういふ人間が、生みつける文學ばかりでなく凡ゆる藝術は不健康ではあらうが、文學史上に特異な作品を與へることも想像される、繪畫彫刻にしても千古未到の作品を現はすかも知れない。彼等の祖先であつて我々の考へたこともないことを考へ、行つたこともないことをも行動し、さういふ世界があつたかと思ふくらゐの世界を表現するかも解らない、それは文學といふ今の我々の考へるものが滅びてしまつた後の、何と言つてよいか、最も文學的な適切な形式を形づくるかも知れないのである。

さういふ時代に果して今の文學が存在してゐるかどうかも問題であつて、それの使命は一種の混合體藝術の形式を執るかも知れぬ。繪畫的であることによつて彫刻音樂の形式を取り、その上に詩文學をも混合させるところの、一見簡單な、內容は複雜な渾一された藝術體、——今の我々の文明程度では鳥渡想像されないものが出來上るかも知れな

い、日本文學の系統を考へても五六百年間に大した劇烈な變化はしてゐないやうであるが、文學の長篇的な現象は次第に失はれてゐることは事實である。新様式としての詩の形式表現が明治年間に創始された以外に、他の文學様式は何も發明されてゐない、繪畫の方面にしても昔のやうな大作は次第に見られなくなり、分野は短縮されてゐるばかりである。新聞記事の内容は大目出しだけで目的化されてゐるやうな今日以後は、文學は短かくなる一方であらう、或いはその時代は凡ゆる文學の内容が詩の如き簡潔な表現によつて、その使命を完うするかも知れぬ。文學は亡びないがさういふ短かい表現をもつところの、同時に他の藝術との混合體が表はれると見ることが、それ程妄想的なものではないであらう、人造人間の文學が、特異な藝術として迎えられるのもその時代であらうが、それすら同様に短篇的な、詩科學のやうな特異性を生命とするものであり、先にも言つたやうにそれは文學としては革命的な更新性をもち、人類が始めて讀み得る珍らしい文章的な文學であるかも知れない。

　も一つ人造人間が既に正統人間と結婚するやうになれば、或いは人造人間の劣性も次第に科學的作用によつて、優秀な雜種見的人間ができ、それが或恐るべき時代には人類の過半の數を占めるかも知れないのだ、さういふ時代には科學的肉體と正統的肉體との血液的試驗さへ容易に爲しがたい程の混亂を來たすかも分らなくなるのだ。然しながら人造人間の完成期には再び地球は正統人間との間に大なる戰爭を現出し、人類が曾つて今まで經驗しない血まみれを地球の上に現出するに至るであらう、それは歴史を古代に復へし、人類の野獣性をもう一度古代に追ひ返す、凡ゆる文明的な光學世界のなかにひとり人類の魂だけが野獣を思慕し、それを動物的に發揮し、如何に人間の祖先に野し彼自身を僞らないかをお互に知覺させるやうな惨劇を現出するであらう、此文明の最尖端の時代で人類の文明性の第二期が漸く通過すると見てよい。今の時代がその一期的な時代創造とすれば、何百年かの後に危險な同族相殺の時代をも想像することは、止むを得ない自然さだ。秩序と形式とは保留することによつて常にそれ自身破壞されてゆくのが原理だとすれば、人間は決して古い秩序を護るやうな温良性と退化作用を持ち越せない、さういふ時代の人造人間の自發性と正統人間の傲慢性と野獣的動物性とが、それ自身によつて秩序を保つことは出來ないであらう。

　これは空想として終るかも知れないが、人造人間の完成には人間自身で飛行し得る可能を機械的に發明される氣もするのである。人間が他の動物昆蟲のやうに兩翼を作成し、それによつて或程度迄の自然現象に備へるといふことも、最も肝要であるとしなければならない、例といへば第二期人類の擡頭期には、自然現象としての地震や噴火の爆發、海洋の移動等があらうし、それに備へるために必然に人間は意識的に飛行しなければならない必要を感ずる。それの機械的使命を完うすることも或ひは容易であるかも知れぬ。人造人間の機械的目的はそ

こ迄進化することが最標準とするであらうし、それを爲し得ないことは屈辱的なものとしなければならない、人間の手足は水中で自由である理由も、充分に飛行的完成に役立たねばならない、人間は飛行する必要のある場合でもこれを個人的には試乘しなかつたが、その時代には或いは彼等自身で自由に飛び歩くかも分らないのだ。

若し彼等が自由に空中を飛行するやうになれば、さういふ都市の空は文字通り美しい少女等が輕羅を纏うて、孔雀が古城の上を舞ふやうな樂園をあらはし、文字通りの天使群をつくり上げるであらう、その時代になり始めて人間が空虚な天使の內容的な註釋を現實的に展開することが出來、その飛行にも一定の十五歲くらゐを限度とし、國法的にその年齡以後を飛行適齡と定めるやうになる、——ともあれ、我々の死後に於ける世界の展開は、我々の幼稚な併乍自由な空想力を以つてしても、到底想像しきれない驚くべき人類の最頂上の文明を實現してゆくであらう。

二、描寫の新樣式、二作家の對照、職人的描法

プロレタリヤ文學の內容は、最近文學的らしい既成文壇の殼を敲き破つたことは事實である。只、自然主義文學以來の文章と描法に行惱み、身もだえをしてゐることは新興文學として完全に殼を破つたものと言へない。新しい文學は先づ新しい文章を形からも革めて行かなければならない、內容はマルクス主義文學であつても描法は依然自然主義描法を踏襲してゐるのは、生れ變つた文學としての特質を搔き出したものではなく、頭はマルクス主義文學の獅子がしらをつけ、尻には厭味たらしい自然主義文學の尾を垂れてゐるも同樣である。

文學の內容は完全にマルクス主義文學の名に於いて叩き壞された。次には五十年の雅だつた文章を叩き壞さなければならない、硯友社時代には紅露の文章が主流をつくつてゐたし、自然主義擡頭期には花袋藤村の文章が流行性を伴ひながら存在してゐた。後期の秋聲白鳥の時代から芥川龍之介里見弴までの描法的な痼疾は、まだ完全に洗ひ盡されてゐない、新しい作家の身悶えは簡潔明快な文章をどうして作り上げようかと試みつつあるのだ。しかも未だ新しい文章でグイグイと衝き込む快適さを自分はまだ見ない、或者は意氣地なくジメジメした自然主義的憂鬱さに取憑かれながら、マルクス文學の兜を冠つてゐるのは賞めたものではない、これは強ち創作方面ばかりでなく、プロレタリア詩派の表現にも既成的な形式に惱まされてゐる。

併乍マルクス主義文學の諸評論は巧みに飜譯的術語を操つることに於いて、比較的鮮鋭なる表現を爲し得たことは事實である。これは創作方面の比較どころではなく最近の評論的な新形式をさへ盛り上げたと言つてよい。流行的術語の危險性と誇張とはあるが、今のところ是以上の適切な語法的な尖鋭さと正確な陣營的な文學はないやうである。それ故從來行はれた物語風な心境的若くは感想風の文藝評論は、何か身すぼらしくさへ見える。——しかもマルクス主義文學の術語の

行き亘りと流行は、今日の大新聞の記事や評論のなかにも縱横に馳驅されてゐて、簡潔直接な效果を擧げてゐることは注意してよい、凡ゆる田舍の三文雜誌風な評論記事のなかにさへ、これらの術語の流行と適切さを印刷的に行うてゐる。もつと細かく言へば映畫館のカタログにも、宣傳ビラは勿論、少し氣の利いた商店の廣告文にまで行き亘つてゐる。これらの術語及び内容がこの時代にどれだけ適切であるかが、是等の諸々の現象を見ても分るのだ。感想風な文藝評論が悄然として影うすく見えるのも、影のうすくなつたこと自身で亡びかかつてゐると言つてよいのだ。

これまでの描寫のうす暗さは行き詰れるだけ詰つて、殆コンクリイトのやうに固まり、明るい軟らかな自由さが失ひかけてゐる。千篇一律の三段構えの描法は拙劣な作曲のやうに、次の音波的構成が既に前奏に於いて想像され得るやうに、讀んでも讀まなくとも分るのは「カタ」が定つてゐたからである。新しい作家と雖もその「カタ」に嵌め込まれてゐて、顯微鏡的に見なくとも組み立てや構えのなかに何等の新味を帶びてゐないことが解る、彼はかう考へたとか、あゝだつたとか、かうだつたとか、何の某は何の日に何をしたとかと言ふ風に十年一日の退屈な描法になやまされてゐるのも、もうそろそろ打壞してもよい時分であらう。鏡にも裏はあるが形ではなく、文章にも描寫はあるがカタではない、感情の新鮮さの度合によつて文章は烈しい個性によつて作り上げられるのだ。明るいカメラの透明さで古い描寫を根絶えにする纏つた文を持つ作家の出現を自分は期待してゐる。

中野重治君の「近代生活」に書いた一作のごときは、(他の彼の文章もさうであるが)凍えた明るさを持つてゐる。注意して見ると濁りがなく實力とスピードとが合つてゐて、無理がなくスラスラと洋紙の裁ち口のやうな鮮やかさを見せてゐる。横光利一君などは(殊に最近は)一行一句にも可成に無理をした苦心をしてゐるが、それは自分にもよく解り快よい感じを與へるけれど、あの無理と苦心とは行詰まつて最後には體を換はさざるを得なくなる。その時にその體を換すことに快活に纏つて了へばよいが、さうでない時は一層苦窮する。勿論、今のまゝの進行はよいがそれがさうでない時には困る。僕もそれに往生して自縛的な狀態に立つたが、それ故一入彼の苦衷が察しられる。中野君は初めからそこへ入らないで快刀亂麻の切れ味を見せてゐる。此の二作家の非常に違つてゐる點、また非常に違つてゐて詩人的傾向のある點に一致を見せてゐることは注意すべきである。

大宅壯一君が朝日新聞に書いた「文學改造論」のなかに、文章に鏤骨するのは迂愚に均しいと言はれたのは、一應肯かれる節はあつたが、芥川君流の苦心はもはや必要はないとしても、文章やそれを描く氣持(文章は精神的速力と平衡する。)に苦しみが窺へないことは、只事作文に過ぎない、文の爲の文を練りつけるといふことは迂愚の至りであるが、氣持のために文を置き換えるといふことは、將棋のコマの場合に打つかる思考力と均しい、走り書き固な才能をもち、それで

充分な効果をあげられる作家はよいとしても、それ以外どういふ作家でも文に苦しまなければならないと思ふ。これは大宅君も肯かれることと思ふのだ、小説を書く以外に何等の詩的精神を持ち合さないやうな作家が、生産多量の遣り付け仕事のなかに僅も文に苦しまなかつたらその作品の出來上りは見られたものではなからう。只、遊戯的な迄に文に淫することは精力を消耗させるばかりでなく、讀者には故意とらしい苦心を見せびらかされるだけで、何の興趣も起らないと同樣に不必要であるが、必要以上の良心を文章に打込むのは文士の徳であるとしなければならない。

描寫のなかには職人風な苦心は卑しむべきであり、職人風な描寫の内容には何時も選擇と置き換えが失はれてゐる。見えたり感じたりしたまゝを克明に綴り合してあるに過ぎない。ぴーつと叩いて來るものも無ければ氣合もかかつてゐない、さういふ職人的描寫は半ば機械的進行を續けるだけであり、さういふ描寫は早く亡びてしまつてよいのだ。彼等の彫琢的であるとする巧さも狡い巧さであり、凡庸のものではない、文章の巧さは作家の氣質の乘り移りであることは勿論だとすれば、自然主義文學の描寫も根本から一變して然るべきである。今のマルクス主義作家のなかにも此の古くさい文章のなかで右往左往してゐるのは耐らない、この古くさい文章を破壞して爽快な文章に接したいと考へてゐるのは、強ち僕一人ではなからう、文章なぞは形式であるから問題はない、目的さへ達すれば充分だといふ言ひ方や見方は卑怯である。假令、詩士であつても、文士として立つからには鍛つた劍を把持はしても何にもならない、文は先づ體をなさなければならない、トルストイやゴルキイにしても皆その内容を盛る「文」を持つてゐたのだ。

川端康成君や丸木砂土君の文章の内容には、何か新しさがある。新しさよりも密度が見えるのかも知れない、その密度も内容が造り上げてゆくものであつて、文章ばかり新しくなつても仕方がないかも知れぬ。川端君の意識的な新しさは目に立つが、今のところ無意識で新しくならうとする程の新人もゐないから、意力的にもさうするより方法はないのだ。

兎もあれ我々の文學は今凡ゆる速力、凡ゆる動搖に包圍されてゐる。文學の目的が更新されるまでになつたのも、婦女子の亂讀に委されたものも革められ、直接性のある宣傳的な文學の中から砲彈的な政治化をさへ見るやうになつたのも、凡ゆる速力が文學を包圍し内容を貫いたものと見てよい、かういふ時代にひとり文學だけが、うかうかと惰勢的な歩調と、相も變らぬ「深彫り」説を抱へ迂闊な非時代的な速力をつづけてゐたのも、顧みると額に汗を感じるのだ。但し今文學の形も中身も變つて行き、外側の速力に次第に近づかうとする傾向が烈しくなつたのも、今日のやうに急激に相貌を變へた時代はないのだ。

近頃純文藝雜誌の數が少なくなり、ひとり「新潮」が存在するばかりであるが、此の「新潮」は何時も時代の中樞神經に觸れて、新しい問題を提出してゐるのは、文藝雜誌として充分な責務を果してゐるものと見てよい。殊に最近文學的左傾ともいふべき色彩を帶びたのは、此の時代の文藝を批判しようとする時は勢ひ左傾的な中心に觸れないでは爲し得ないせいもあらうが、文字通り「新潮」が文壇の新人を掘り返してゐることは特筆してよい。今の時代には文藝的作品ばかりを盛るといふことは出來なくなつてゐる故、純文藝の雜誌經營は不可能とされてゐるが、かういふ時代にあつてこそ一つくらゐ文藝を專門とする雜誌が存在するのは心强い、假令どういふ好みによつて編輯されようが、文藝的な中心とその動きをシツカリと握つてゐる雜誌があるのは、その主流を見る上に是非必要としなければならない。

藝術の「社會的註文」の理論

湯浅芳

一

藝術の「社會的註文」と云ふ言葉は、ソウエートに於て、一九二七年にパブッチキ（××の同伴者）の最左翼とされてゐるレフ（左翼）一派によつて初めて唱へられた。彼等は「社會的註文の理論」といふものを提唱した。その理論の要旨は斯うであつた。

『作家、藝術家は、欲するがまゝに、欲する時に、欲するものをつくるところの、藝術作品の個人的な生產者ではない。藝術家は、彼がその中に生活してゐるところの社會と密接に繋がつて居り、その社會の要求に聽從し、その意志を充さなければならない。藝術家は職人である。時代、社會、階級は藝術に要求を表示する。時代、社會、階級は註文者である。藝術の職人、「生產者」は註文を仕上げる。斯くして藝術家は社會的實在に於ける自己の權利を確定し、斯くして社會的機能と彼と「社會」との結合が成立する。』

ところが、この提唱の一見イデオロギー的なるにも關らずこれに對して最先に反對したのはコンムニスト文藝批評家、文藝評論雜誌「印刷と革命（ペチャーチ・イ・レヴォリューツイヤ）」の主なる編輯者として現在盛んに活動してゐるパロンスキーであつた。彼は同年九月號の「新しき世界（ノーウイ・ミイル）」に「藝術家と社會的階級」と云ふ論文を發表して、この理論が、全然マルクス主義學說の根本と矛盾するものであること、この理論は單に「階級を失へるパブッチキ作家、プロレタリアートより引離された藝術家の群團が、イデオロギー的價値の創造者として自己の獨立を保ち、而してプロレタリアートとの連絡をつけようとする試み」以上の何ものでもないことを論破した。その後間もなく「レニングラードスカヤプラウダ」はこの問題に對する意見投書を募つた。共產アカデミーでは同じ題目についてヌシーモフの講演があり、その講演に對して討論が行はれたが、その時矢張り眞正のマルキシズムの立場よりこの理論に反駁したのは、フリーチェと共に現代ソウエートの最も純粹なるマルクス主義文藝理論家とされてゐるペレウェルゼフ教授であつた。彼に言ふ。

「社會的註文の理論といふ術語にとつて最も本質的なものは、イデオロギーの科學に於ては理論的に全然成立しないこの術語によつて、或程度迄その作用を正當づけてゐるところの、この術語の積極的方面

たる社會的に意志的な、そして命令的な性質である、と言はれてゐる。しかし、もし命令的な、社會的に意志的なモーメントを考慮するならば、「社會的註文」の理論をつくるべきではなく、マルキシズム的に、「社會的命令」の理論を、更に正確に言へば「階級的命令」の理論をつくるべきであらう。さういふ理論なら私は受け付けたであらう。マルキシズム的に基礎づけることも出來たであらう。何について言はれてゐるかを非常によく理解したでもあらう。だが、「社會的註文」の理論は「階級的命令」の理論とは全く同じものでない。「階級的命令」の根底にはイデオロギー的な生活の唯物的な理解が横はつてゐるが、「社會的註文」の根底には觀念的なものがある。イデオロギー的價値の需要者と創造者との間の關係を商品生産者に對する註文者の關係の如く想像することは、外面の唯物的な術語彙にも拘らずイデオロギー的な創造に對して全然觀念的な見解を有つてゐることを意味する。

註文とは何を意味するか？註文者と註文の仕上人との間の相互關係とは如何なるものであるか？それは、註文の仕上げが必要品を受けんとする註文者の希望によつて限定されるところの、又一方、その品を造らんとする商品生産者の希望によつて限定されるところの相互協定である。イデオロギーの範圍に於ける註文の理論は、註文者に必要なイデオロギーの受容と云ふことはイデオロギーを受けんとする註文者によつて表現された希望とそれを造らんとするイデオロギーの創造者の希望とに依存してゐるといふ假定の上に立つてゐる。では、イデオロギーは實在によつて決定されると云ふ唯物的な學說は何處へ姿を隱したか？」

しかし、同じマルキシストでもコーガン、ガルバチョフ、ブリーク、シュティマン等はこの理論を支持した。彼等はこの理論の庇護者の立場に立つて、各自思ひ〳〵にその論説を探してゐる。けれども「社會的註文」の理論がマルキシズム學說の根本と矛盾してゐることは蔽ふことの出來ない事實で、從つて庇護者の辯護は非常に苦しい。一例としてコーガン教授の論文を引用しよう。コーガンは、モリエールが「愛は治療者」の序文に書いた一節を引いて、

「モリエールの如き天才的作家でさへも王の註文を受けて未曾有の速力で作を仕上げたことを誇らかに讀者に報告してゐるではないか。これは「タルチューフ」の榮譽ある作者が王と自分との關係を眞の名によつて名付けることに何等藝術の爲に屈辱的なものを見なかつたことを證明してゐる。然るに我國では、十年の十月革命の經驗にも拘らず未だ、註文によつて書くことが恰も屈辱ででもあるかのやうな偏見が保たれてゐる。この偏見は最早取除かれ得るものだ。既に現代に於てはマルキシズム的分析は靈感の神秘境に充分深く透徹し、次第に決定的に詩人と彼の註文者との關係に於ける合法性を掴んでゐる。

何故モリエールにとつて註文は侮辱的屈辱的に見えなかつたか？何故ならば、彼はこの註文の中に何等自分に對する無理強ひを感じなか

つたからである。彼は「自由」と「必然」とが合致するやうな、靈感の突發と他からの要求とが互ひに自然にバッタリ流れ出合ふやうな、そしてその出會に際して反感的にぶつかるのではなく、調子よく、曾て見ざる制作的エネルギーを發展させつゝ流れ合ふといふやうな幸福な條件に於て生活してゐたからである。ヴェルサイユ宮の子モリエールは、生れつきの盲目が自分の盲目を感じ得ぬやうに、ボンワールが自分の牢獄を感じなくなり、別れに際してそれを惜しんだやうに、その宮殿の雰圍氣を呼吸して自己の從屬を感じなかつた。凡ゆる偉大な藝術家は常に供給者であり、註文なしには考へられない。實に藝術家と彼の註文者との關係は買手と手代との關係の如く簡單ではない。けれどもその本質に於て、その本性によつてこの關係は矢張り註文の關係である」

この美文的、非理論的な文章が現代ソウェートのマルキシズム文藝批評の大家、藝術翰林院長ペー・エス・コーガン教授によつて書かれたものであることを信じることは何人にとつても困難であらう。彼が彼の愛する「社會的註文」の理論を庇護したさの餘り、「註文」の理論そのものに對しては些の科學的マルクス主義的關心をも拂はぬ自己の非マルクス主義的態度を、恰も「生れつきの盲目が自分の盲目を感じ得ぬやうに」感じてゐないことは驚嘆すべき事實である。

斯く支持者側の敗色は明らかであるが、兎も角この理論が計らずマルキシストの間に反對者と支持者とを同時に得たことは、この問題の最も性格的な點であつて、この點に私は多くの興味を感ずる。而して、解體的過渡期に遭遇しつゝある日本の文壇に於て、最近既に、逸早く「社會的註文」を感じ出した敏感なる作家の出現、及それに對する斷片的なメンションの散見を知る私は、この問題がソウェート文壇に於て如何に論じられつゝあるか、眞正のマルキシズムより觀て「社會的註文」の理論の正體は如何なるものであるか、と言ふ事實を報告することは決して徒爾でないと信ずる。

最近の「印刷物と革命」（ペチャーチ イ レウオリユーツイヤ）は誌面の大半をこの問題について割いて居り、そこにはこの理論の反對論者としてプロレタリヤ作家のグラトコフ、構成派のセルウィンスキー、パプッチキ右翼のフェエーヂン、ピリニャーク等の作家達が各々意見を發表してゐる。それ等については又別の機會に讓るとして、玆にはパロンスキーの論文を紹介して目的に副はしめ度い。元來この問題討論の口火となつたのはパロンスキーの論文であるし、又彼の論文が最も首尾一貫してゐるからである。

二

パロンスキーは書いてゐる。

「だが「社會的註文」とは一體何を意味するか。「社會的註文」。これを理解するには、一方に註文する者、註文者、仕事を與へる者の存在が豫想され、他方には註文を仕上げる者の存在が豫想される。もし「註文」があるなら「註文者」もある。若し「註文者」がないなら

「註文」もなく、「註文」の仕上人もない。我々によつて討究されつゝある理論がそれを成立させてゐる如く、この相互關係は古くから職人と主人との間に、商人と農村手工業者との間に、パトロンと藝術家との間に、公共機關と委託を遂行する個人との間に存在し、今も存在を續けてゐる。

「註文」と云ふ用語そのものは手工業と共に現れた。用語の手工業的發生には疑ふところがない。この用語は廣い資本主義的市場出現以前の時代の社會的關係を簡單且つ明瞭に現した。

ところで、農村手工業的生産に於て保存されたこの相互關係は、又、藝術生産の需要者と藝術家との間に於ても同じく完全に保存された。この相互關係の斯くの如き定義には大體に於て少しも間違ひはない。しかしそれは相互關係の凡ゆる場合を完全には包括し得ない。

歴史は藝術發達の爲に極めて價値ある例を知つてゐる。それは、新人、藝術家が支配せる趣味に反抗して進み、藝術生産の需要者から絶緣したことである。こういふのが概して藝術方面に於けるすべての新人の運命である。「註文者」は彼にとつて不可解な「新しき」ものの需要を拒絶した。藝術家は飢えた。降伏せずして滅びた者も稀ではなかつた。新しき時代は新しき趣味をもつて新人を認めた。即ちこの新人は、その時代の註文者の趣味にとつて「註文」を充すことを強情に欲しなかつたことに於て、自己の強情に於て正しかつたことが分つた。しかも藝術は「註文」の不平なき仕上人によつて前進しない。實に、古き趣味の反逆者によつて、顚覆者によつて、認められた偶像の破壊者によつて、神聖にされた形式の否定者によつて前進したのである。藝術に於ける××は、この意味に於て社會的政治的×××と何等異るものではなかつた。勿論、「社會的註文」を狭い意味に於て理解してはならない。具體的な人物、公共團體、官公營物から與へられた註文といふやうに。「社會的註文」の理論によれば、註文者として現れてゐるのは川の名ではない。全體としての時代、階級、歴史である。藝術の「職人」は、勿論、個人的な需要者の爲に働くのではない。集團的な需要者の爲に働く。しかも斯うして、――この以外の働き方ではなく――働きつゝ、彼は時代、社會の註文」を、「社會的註文」を充してゐる。さあ、そこで、この問題を完全に明瞭ならしむる爲には此處いらで立ち停まらなければならない。

三

何よりも先に、凡ゆる神祕と形而上學とを一掃しなければならぬ。「註文者」――「時代」「歴史」「社會」とは何か？彼等は歴史的過程の因子として自然の中に存在するか？否。時代は歴史的過程の或る宿驛（エーブ）である。その過程に於て登場人物として現れるのは階級に。勿論、いく〳〵の人間の群によつて時代が否

ことはなかつた。時代は歴史的過程の因子(ファクトル)ではない。これは唯、年代的表號、條件的記號に過ぎない。「個人」「他人」「註文者」の性質に於て進出することは、「歴史」や「社會」がそれをなし得ぬ如く時代にとつても不可能だ。社會は集合名詞である。歴史的過程の眞の因子として、媒介として、（私は勿論、人類の有史以前に就いて言つてゐるのではない。人類の文化時代について言つてゐるのである。）歴史的因子として現れてゐるのは階級だ。觀念論の視點からなら「時代」が不分明な方法によつて藝術家に與へる「註文」について言ひ得る。我々の言葉の意味は、我々がたとへ「時代」といふ言葉の代りに「社會」といふ言葉を用ひたとしても變りはしない。又、我々の「社會的註文」の理論家が「階級」といふ言葉を用ひてさへも事柄は良い方に變轉しない。階級――それは組成された全體として存在してゐるところのものである。階級は確乎たる目標を所有し、物質的基礎の上に成長し、歴史的發達の因子となりつゝ集合體として生きてゐる。だが、階級的術語を自己のものとしてさへ、我々の理論は階級的唯物的理論とはならない。それは觀念論的なものとして殘る。蓋し、藝術家と階級の相互關係の理論家は觀念論者として殘るからだ。玆に凡てがある。では何處に、外面はそのやうに堅固に見えるこの理論のアキレスの踵があるのか？

それは、この理論が、藝術家を階級から引離し、階級から隔離された職人の地位に、「主人」の註文によつて働く勞働者の地位に置いてゐるところにある。

「社會的註文」の理論は最もブルジョア社會の條件に適當してゐる。しかしブルジョアの條件に於てさへ、それはブルジョアとその藝術家との間に存在する關係を殘らず表現してはゐない。封建時代の貴族やブルジョアは大學やアカデミーで育つた藝術家を所有してゐた。それ等の藝術家は自己の階級の智的外貌を表現したが、それは階級の外に立つてゐる自由「職人」としてではなく、自己の階級の生ける手足として、その階級の利益の爲に鬪ふ鬪士として、世界に對するその階級の見解の庇護者として表現者としてであつた。ブルジョア藝術家は自分をブルジョアに對立させて「ブルジョア」「お前」などとは言はなかつた。ブルジョアと自分とを同一のものと視て「我々」と言つた。蓋し、彼は自分の際を自己の階級の際と思惟したのだ。

又、種々の社會的理由によつて、藝術家が一定の歴史的時代に於て自己の階級のイデオロギーを追越したことが屢々あつた。その時彼は彼の列から出て、その列に反抗する鬪士となり、その列の利益を害し、その列の偶像を露いた。恰も××の地位に立つて未來のシグナルを上げるやうに。この最後の場合に於て、我々の前に立つものは、時代の「註文」を充す「職人」ではなくして、その時代の歴史的進歩的傾向の表現者、彼によつて意識された、或は意識されぬその時代の階級爭鬪の環境に於てその歴史的進歩的傾向が彼によつて如何に受容されたかの表現者なのである。

『私に、「社會的註文」の理論ほど藝術に關するマルクス主義の學說の根本と矛盾した學說を他に知らない。藝術と階級についてマルキストの大家達によつて書かれたものは、すべてこの「社會的註文」の理論と逆行する。』

パロンスキーは玆で、トルストイに關するレーニンの論文から數行を引用して、「社會的註文」の理論が如何に社會的階級と藝術家との關係に對するレーニンの理解と矛盾してゐるかを示してゐる。レーニンは、「トルストイは、ロシアに於てブルジョア革命の切迫しつゝあつた時代に、ロシア數百萬の農民の中に蟠つてゐた思想、心持の表現者として偉大だ」と言つたが、しかし、トルストイは地主ではないか。地主であり乍らこの藝術家が、事實に於て農民の思想、心持を表現したといふことはどうして起り得たらうか？

『社會的註文』の理論は眼瞬きもしないで答へるだらう。非常に簡單だ。百萬の農民がトルストイに社會的註文を與へたのだ、と。もしこの答が眞面目に與へれらるとしたならば、或は、我等の「理論家達」が自己の理論の主張を棄てずして他の答を與へることが出來ないとしたならば、これは譬喩か、或は純然たる觀念主義ではないか。

敢てロシア農民の思想及心持の表現者となつた地主トルストイの事實に於ける役割は、トルストイがそれによつて自己の道を通つた多くの具體的條件の解剖の助けによつて說明され得る。語を換へて言へば、レフ・トルストイの社會的政治的實在を解說

をして農民の思想及心持の「表現者」たらしめたところの理由及彼の意識の獨特性を理解し明らかにすることを得る。

しかし、このマルクス主義的說明は「社會的註文」の理論家の觀念論的說明とは如何なる度合に於ても符合しない。

藝術家について語る時、我々は、文學的ボヘミヤンの微生物的代表者、今日は探偵小說を書き、明日は心理小說を書く、今日は個人主義の卓拔を立證するであらうが、明日は集團主義の辯護者となるであらうやうな、今日は彼は象徵主義者である。しかし明日は「註文者」の好みに從ひリアリストとなるであらうやうな文學的ボヘミヤンの微生物的代表者などを考慮に入れてはならぬ。

「社會的註文」の理論は形而上學なしには×××藝術家、新人、その時代を支配する見解に反抗する鬪士の出現、存在を說明し得ないのである。

階級、相異れる社會の群團は、藝術の中に自己の世界觀、イデオロギーを客觀する。この具象化は、唯彼等藝術家が自己の階級の利益によつて生きてゐる場合に於てのみ、又、藝術的意識が集團意識の個人的表現者として現れてゐる場合に於てのみ、藝術家によつて爲遂げられる。有機的な時代に於ては、藝術家、創造者は批評的×××時代に於ける政治的指導者と同じくその時代の

四

社會主義以前の時代に於てさへも、原稿の商品性は避け難いものとして受け容れるとしても、思想と表現の商品性は否定しなければならない。資本主義的組織に於て思想は賣物によつてゐないかのやうには言ひ度くない。凡ゆるものを商品化してゐる資本主義は思想をも商品にしてゐる。しかしこれは思想の取り除き難い特性として現れてはゐない、といふ事を言ふのである。思想の「販賣」は兎も角稀な場合であつた。ブルジョア社會に於てさへそれは當然なものとして受け容れられてはゐなかつた。それを買つたものすら思想を商つた作家を恥じた。

曾てロシア文壇に一日に「黒い論文」と「赤い論文」とを――一度に二つの戰線へ（そして兩の場合とも眞實をもつて所信を披瀝して）――書いた文士が現れた時、彼のしたこの主義の賣物が、ブルジョアの印刷物に根深く「奉仕」してゐるすべての者を恐怖せしめた。ウェー・ウェー・ロザノフは多くの者よりは誠實であつた――彼は、大多數のものがその實如何なることに從事してゐるかといふことを恐るるところなく打明けた。しかし、これが又すべての者を恐怖せしめた。何故ならば賣物にされる思想は作家的勞働の墮落と腐敗の最後の段階を示すものであるからだ。プーシュキンの「魂は賣物にはならぬ。しかし原稿は賣ることが出來る」は、この意味に於て解釋しなければならない。

そこで、何ものよりも若く、賣られる思想に嫌惡を感じるものはプロレタリアートである。プロレタリアートの××××は、腐れ始めてゐる、或は腐りつゝあるブルジョアジーが産んだすべてのこの×と×とを××するにある。思想の「商品性」即ち思想の「賣物的特性」は、その時代の藝術を動かした藝術家の爲には性格的なものであつたといふことを立證する必要はない。眞の創作、高き藝術は自己の天性に眞實である。喜んで自己の原稿を賣る大いなる才能は自己の思想を「賣る」ことを拒絶する。これは白日の如く明らかで反駁されることは出來ぬ。××期の藝術について、プロレタリアートの藝術について爭論する時、我々は實に斯ういふ正しい藝術について語るのである。

プロレタリアートはプロレタリアートが欲するものを、欲するやうに書くべく準備してゐる。人々――同時にプロレタリアートには社會的心理的、イデオロギー的に他人である人々は必要としない。それ故にこそプロレタリアートは自己の藝術家を待つてゐる。プロレタリアートの「社會的註文」を仕上げるのではない。それの助けによつて、それを通してプロレタリアートが自ら自己の內的世界を人類に示すであらうところの聲となるべき藝術家を待つのである。しかし、こういふ藝術家は仲介人の肩越しに「註文者」の眼を竊み視ようとするやうに「職人」ではないだらう。それは骨の骨、肉の肉までプロレタリアートの藝術家であるだらう。

我々は、商品に對する如き藝術家に對する關係を絶滅することを、周旋業者の如き批評家の役割を殺すことを、それによれば藝術家が別々の社會的群團の要求を滿足させんが爲にたとへ「社會的註文」の理論の傲慢なる旗の下に、とは云へ、自己の天分を商ふべく運命づけられた個人となるであらうやうな論題を絶滅することを自己の宿題としよう。我々は、藝術家が階級の有機的な一部であることを、自己の狀態によつて、複雜なる腦の組織に於て、集團の審美的な心理的な情感的なイデオロギー的な要求を表現すべく豫定されてゐるところの階級の集團的腦回旋であることを欲する。

「社會的註文」の理論はプロレタリアートから引離された極左の作家、藝術家の團體が、イデオロギー的價値の創作者として自己の獨立を保ち、而してプロレタリアートとの連絡をつけようとする試みを示してゐる。こういふ對立は彼等の企みの良き性質を根本的に傷けてゐるにも關らず、彼等は勞働階級には「社會的註文者」、靈感の鼓吹者の役割を提供し、自分には藝術業の「職人」、藝術の創作的手法の保存者、「イデオロギー的な」物の造り手の謙遜な役割を殘してゐる。彼等はプロレタリアートに對して「お前」として向つてゐる。彼等は、彼等がプロレタリアートと眼と眼をつき合せて語ることを妨げるところの仲介人――批評家を振り棄てようと欲してゐる。勞働階級に向つて橋を投げ渡し乍ら、彼等が本然的に、依然として「他の岸」に殘つてゐることに認めるに難くない。蓋し「社會的註文」の理論は

タリアートとの有機的關係を、又彼等の心理に於て「お前」と「私」の對立を一掃するであらうやうな、勞働階級の眞の、自然の藝術的表現者としての信念を彼等に吹き込むであらうやうな密接な接近を創りはしない。實に勞働階級とのかゝる有機的合一こそ、プロレタリヤ××のプロレタリヤ藝術家たらんと欲する職人、我等の驚異すべき時代のプロレタリヤ的メガホンたらんと欲する職人より時代が要求しつゝあるところのものである。

五

もし、これは、恰も現代のすべての藝術家は堅くプロレタリアートと合一してゐなければならぬ。而してそれをなし得ぬものは滅ぶの他ないといふかのやうな思想を附け足す人があるならばそれは誤つて私を理解するものである。そういふ合一は、極めて多く惠まれた、又社會的出生によつて特にプロレタリアートに近しい限られた人々にとつては可能であるが、古い作家隊の兵卒の大部分にとつては極めて困難な、恐らく征服し難きことであらう。人間は自己の見解によつて、自己の社會的經驗、自己の智的傾向、自己の心理的、イデオロギー的な慣習――彼を育てた社會的環境が人間に賦與するところのすべてを變へ得るほど自由な意志を所有してはゐない、つま

を、人間は皆々の

に打克つ力を與へられる。しかし、その遺産に打克つを得ぬ不可能性は、必ずしも我等の時代からの全き分離を、我等の時代に對する全き無理解を、全き敵心を意味するものでは決してない。プロレタリアートと共に、プロレータリアートの指導の下に我國の社會的建設に關與してゐるところの社會的群團の現存は、これ等の群團の社會的實在を反映するところの文學の存在の不可避性を豫定してゐる。××と手に手をとつて行きつゝある農民階級、知識階級が存在する間は、農民階級によつて創られた文學も知識階級によつて創造された文學も、存在するであらうし、しなければならぬ。同伴者(パプッチャ)及農民作家は勞働階級の有機的部分に非ずとも大いに時代に共鳴するところの、たとへ視る角度をプロレタリヤ的ならずとも時代のすばらしき反映を與へるところの作品を創造出來ることの明らかな證據の幾つかを我等の眼前に與へた。同伴者(パプッチャ)の群團も非常に區々である。その右翼によつては古きブルジョア文學の蔽ふところなき後嗣者に凭りかゝり、左翼によつてはプロレタリアートへ歩み寄つてゐる。

我等の××が幾つかの力によつて――その力の中にあつたプロレタリアートは主要なる指導者となつてゐるところの――動かされてゐるだけ、それだけこれ等の「他の」力も――その中に數百萬の農民階級をも含めて――自己の文學を創造するであらう。プロレタリアート、農民、知識階級――これ等の社會的群團は各々自分流に藝術の中に××を反映させてゐる。それ故に、すべての藝術家は必ずプロレタリアートと合一するか、でなければ滅ばなければならぬといふ斷言はユートピア的なものとなるであらう。我等によつて未だ共産主義的建設が達せられぬ間は、プロレタリアートの指導の下に、又それとの同盟に於て、農民階級が我等の國の未來の建設を助けてゐる間は、知識階級がこの建設に關與してゐる間は、××の「同伴者」及農民作家はプロレタリヤ作家と並んで、我等の文學に於て大きな役割を演じるであらう。この役割は、彼等が××の要求により接近し得るほど、彼等が××の宿題をより眞實により深く受け容れるほど、より大きなものとなるであらう。この役割は、彼等が古いブルジョア文學の後嗣者に又は、避け難き滅亡を豫定される新しいネップ的ブルジョアジーの明ひ手に近づくほど、より小さなものとなるであらう。

茲に於て、同伴者(パプッチャ)の右翼は反××の陣營に移る。即ち同伴者たることを能める。従つてブルジョア反××文學と運命を頒つであらう。しかし我々が、同伴者(パプッチャ)の如何なる群團をとらうとも、――左であらうと右であらうと――かういふ群團の作品は勞働階級の「社會的註文」の仕上げではないであらう。言葉を換へて言へば、これは××的な同伴者的な文學、時としては輝かしき、時としては光なき文學、けれどもこれはプロレタリヤ文學ではないであらう。たゞ限られた藝術家――自分の中にある彼等を育てた社會的環境の精神的遺産に打克ち得るところの――のみがプロレタリヤ藝術家となるであらう。とは云へ、知る如く、例外は法則をつくらない。プロレタリヤ的世界觀

たり得ぬ、たり能はぬ藝術家について言ふならば、彼等の背後には、自己の力に應じ、自己の才能に應じ、自己の理解に應じ、自己の××性に應じて藝術を、彼等がそれを理解するまゝに前へ動かすべき高き宿題が殘るであらう。

六

要點を擧げよう。

一、「社會的註文の理論」は所屬階級を失へるインテリゲンチャの社會に發生し、このインテリゲンチャの、自己の社會的獨立性を失はずして勞働階級の藝術的表現者たる役割を我物にしようとする試みを現してゐる。

二、「社會的註文の理論」——本來觀念的な——は、社會的階級とそれの藝術的表現者との間に存在すべき、又事實存在しつゝある相互關係に關する正しからざる理解を與へる。

三、この理論は、所屬階級を失へる××的インテリゲンチャの、勞働階級への橋を架け渡さうとする試みとして表れながら、インテリゲンチャの、この××的群團の勞働階級からの事實上の分離を示してゐる。この分離こそは、この文學的群團(グルッパ)の、プロレタリヤ的世界觀を藝術的形式に於て現さんとする試みの不成功を運命づけてゐる。

四、「社會的註文の理論」は、我等の時代がプロレタリヤ及農民の社會から押し出してゐるところの若き作家達によつては受け容れられない。母である階級と血の絲をもつて結びつけられてゐる「プロレタリヤ」及「農民」作家は、自己と階級との間に空氣の橋を架け渡す必要に瀕してはゐない。彼等は、腦から「社會的註文」を仕上げる「職人」の地位に自分を置かない。彼等は單純に、完に集團の腦細胞をもつて自任してゐる。集團意識の形に於ける藝術的思索及反映の作用はこの腦細胞にかゝつてゐるのである。彼等は自らメガホンとして、彼等を創つた集團がそれによつて物を言ふべきメガホンとして自覺してゐる。』

『嵐に立つ』を讀みて

河上肇

私の尊敬する同志大山の論文集『嵐に立つ』、副題『日本における無產階級政治鬪爭の一記錄』)を手にして、殆と藏書癖をもつてゐない私も、先づ、『これはよい本ができた、そのうち著者が京都に遊說に來たならば、記念のために署名しておいて貰つて、永くこれを珍藏しよう』といふ氣持を、強くもつた。そこには私自身も最近にはその一端に加はつた鬪爭場面のことが書いてある。それを見ると、少しも日記を殘してゐない私は、そこに自分の日記の斷片が存在してゐるかの感じをもつた。左翼戰線の陣營にやつと入營したばかりの私でさへ、かくもなつかしみを感じるのであるから、過去數年間著者と鬪爭を共にした全國の鬪士たちにとつて、本書が如何に思出多きものであらうかは、想像に餘りある。

近頃幾度か著者と同じ壇上に立つ機會をもちえた私は、次第に次ぎの如く感じて來た。彼れの最大特徵は、彼れの大衆に對する絕對的な信賴にある。この論文集の序言の中にも、『我々が日頃から絕對的信賴をおいた戰鬪的勞農大衆と益々緊密に腕を結び、云々』といふ言葉が見出されるが、著者は實に進むにも退くにも、この『戰鬪的勞農大衆』に絕對的信賴をおいてをり、それについては如何なる機會にも曾て微動すら示したことがない。その確信の地盤の安全さは、彼れの側にゐる人々に、富士山が大地に腰をおろしてゐる姿を思はせる。それのみではない、吾々はまたその富士山が活火山として盛んに焰をあげつゝあることを感じる。けだし大衆への絕對的信賴の上に立つてゐる彼れ自身はまた、――彼れの口と筆とは、――いつもこれら勞農大衆の胸の中に燃えてゐる、、、の有力なる、一噴火口となつてゐるのだから。彼れが一たび演壇の上にその姿を現はすや、集まつてゐる大衆が屢々期せずして『大山！大山！』と連呼するのは、彼等が今こそ彼れの口をかりて、彼れと共に、鬱勃たる彼等自身の、、、、を――勞農大衆が身に沁みて感じつゝある痛切なる諸要求を――端的にその場にぶちまく機會を得たことの、その喜びの現はれである。過去數年間における彼れの文章もまた、その精神において彼れの演說と趣を一にする。彼れは自らその序言のうちに言つてゐる。『著者が勞農黨の鬪爭に直接に參加し始めたのは、……無產政黨分裂時代の直後においてである。そして著者はまた幸にも、今日尙ほ依然として同黨の發展形態に外ならない左翼戰線の一角を死守して飽くまで苦鬪をつづけてゐる全國幾萬の階級的戰士たちの列中に伍することを許される榮譽を擔つてゐるものだ。

從つて本書の主要部分は、實に著者が文字通りに現實鬪爭の過程において生産した文書であるのだ。…そしてもし、著者が勞農黨時代以來終始一貫して、何時でも自己の一言一行を嚴密にわが全陣營の指導精神によつて律して行かうとした努力が、幾分かでも實際上の效果を産んだものとするならば、本書の主要部分はまた、その限りにおいて、勞農黨時代以來不斷に發展轉化してきたわが全陣營の鬪爭記錄として見られることを要求する資格のあるものであらねばならぬ。』『いつでも自己の一言一行を嚴密にわが全陣營の指導精神によつて律して行かうとした努力』、この努力こそが、本書をして、左翼的全陣營のそれ〴〵の時期における狀勢の正確なる思想的反映として、その副題に示すが如き『日本における無産階級政治鬪爭の一記錄』たらしめてゐる。その意味において、それは著者一個人の著作といふよりも、むしろ戰鬪的勞農大衆の共同著作たる資格を、多分に持つて

惜いかな、その價格は一般勞農大衆にとつて餘りに高價である。私はいつかはそれが更めて廉價版の形態をとるに至らんことを希望する。

著者はその序言の終りの部分において、『我々は今や、或る意味において、まさしく一の新出發點に立つてゐる。この際我々は、一切の功罪を含めてこの我々の過去の豐富なる鬪爭經驗から攝取し得られるかぎりの貴重なる教訓を活かしつゝ、當面の新狀勢に適合する新活動方針を確立』する必要のあることを述べてゐる。最近、著者が上村・細迫の同志と共同署名のもとに公けにした『新勞農黨樹立の提案』は、おそらく玆にいふところの『新活動方針』を具體化したものであらう。それに關聯して私の思ひ付きを率直に述べるならば、下篇『敗北から勝利への行進』の最後は、『赤旗に包まれた戰士の遺骸』を前にしたところの『左翼戰線は如何に再進出しつゝあ

である。かゝる情勢を眼の前に見つゝも、他方その裏面には、今度の提案書の中に言つてあるやうな事態が、――すなはち『四・一六事件は、わが國の無産階級の前衞がそれまで萬難を排して築きあげた全陣地を殆ど潰滅に歸せしめたばかりではなく、更にわが全左翼戰線の上に容易ならざる一大打擊を蒙らしめた。そして、かゝる事態の下において、わが勞農同盟の活動もまた、不可避的に、はたと行き詰つた』といふ事情が――同時に發生してゐたのである。そして斯かる事情こそは、著者を驅つて『新活動方針の確立』を企てしめしものに相違ないのであるから、もし勝手な慾をいへば、下篇の最後は、『左翼は如何に再進出しつゝあるか』で打ち切らずに、『はたと行き詰つた』方面の諸事情を明かにすべき今一つの章を加ふべきであつたらう。例へば、今度公けにされた『新勞農黨樹立の提案』その

りを成したであらうと考へられる。將來もし廉價版が企てられるなら、その際かゝる增補をも考慮に入れられたいことを希望する。

なほ最後に個人的の事柄について一言すれば、著者はこの論文集に收められた諸論文の書かれた時期をもつて、『この期間はまた、一個人としての著者にとつても、その生涯の上に一大轉廻を斷行する契機を與へたものとして、わが生あるかぎり永久に記念すべき深甚の意義を帶びてゐるものである。……著者が、多年住みなれた學窓を去つて街頭に進出することを決意して勞農黨の中央執行委員長に就任の勸告を受諾したのは、實に今から三年前の、一九二六年十二月中のことであつた』と言つてゐる。かかる一大轉廻を斷行した後の著者は『ある場合には旅先の宿舍において、またある場合には東奔西走途中の車上においてすら、慌たゞしく筆を走らせなければならなかつた』のであり、從つて本書は、少くともその主要部分において『一卷の陣中作』となつてゐる。私は、私の大學在職中に、嘗て著者が遊說のために入洛した日のあつたことを、今思ひ出す。大學の敷地內にある學士會館の一室で、當夜はおそくまで話し合ひ、つい大學の側に寓居を持つてゐる私までが、その夜はそこで一泊したが、その翌日再び彼れと話しうるためには、私はそこで午前中を待つてゐねばならなかつた。當時私は書齋にゐたが、彼れは陣中にゐたのであり、彼れは私を待たせておいて、そこで『陣中作』を仕上げねばならなかつたのである。殆どすべての論文が、おそらくは皆な此の如くにして出來上がつたのであらう。私も今、多年住み慣れた大學を出て、羸瘦の身になほ爲しうる事あらば、聊かたりとも企運動のために力を致さんことを願つてはゐるものの、多年蠹習の久しき、果して『陣中作』をなすに耐へうるに至るや否やを、甚だ覺束なく感じつゝ、今更ながら私は、この尊敬すべき同志の過去および現在を甚だ羨ましく思ふ。（東京市神田區一ッ橋・鐵塔書院・定價貳圓五十錢）

新刊紹介

◇**强力と經濟**（エンゲルス著・門木平譯・東京神田錦町一・上野書店・定價八十錢）

◇**農業問題とマルクス批判家**（レーニン著・廣島定吉、田畑三四郎譯・東京神田區西小川町五・南蠻書房發行・定價八十錢）

◇**實用經濟學**（高橋龜吉著・現下の日本に必要な實用的な基本的經濟知識の普及を目的として著者十數年の實際研究から生れた快著、改造社出版の「經濟學の實際知識」と併讀して兩益・東京京橋第一相互館千倉書房發行・定價壹圓八十錢）

◇**朝鮮民謠集**（金素雲譯著・譯詩の域を脫したほど手についた用語と語調の驅使の巧みさがある。朝鮮文學の重要部分を占むる民謠の權威的移植としても近來の收穫たるを失はぬ。譯者金君は數奇の運命を持つ靑年詩人で志士であるといふ。白秋氏の序、劉生氏の裝幀ともに良い。東京神田區小川町四十一・泰文館發行・定價貳圓五十錢）

穗積・宮崎兩博士遺著の新刊（承前、完結）

福田徳三

穗積博士『法律進化論』第三册本論には、以上紹介した部分に續いて猶二章が收めてある。第四章『タブー』と財産權、第五章『タブーと刑法』これである。しかし此二章は恐らく著者に於いても最も不滿足を感ずる章であらう、紙數から云つても、前の三章に比して甚だ短いものである。乍去、私は其第四章中に甚だ重要なる若干の發言を見出す。

著者は言ふ『文化低級の社會に於ては、所有の事實有つて、未だ所有の權利無く、其所有物の占有は、自己の實力と不斷の注意とに依つてのみ持續せられ、自己より强力なる者よりは之を略奪せられ、自己より黠智ある者よりは之を騙取せられ、又時

鬪爭熄むこと無く、飢餓亦屢々至り、各人は不安の狀態に置かれたから、人類は未だ文化の途に上ることが出來ぬ。然し乍ら、若し此の如き粗野なる社會に於て、一種の超越的勢力が存在して、各人をして互に他の分を侵さしめず、尋いて、我有、他有の觀念を生ずるに至るときは、其勢力は即ち人類進化に一大徑路を開くものであつて、人類の物質的智識進步は、此時より頓に其速度を加ふるに至るものである。而して、多數の原始的社會に於て此自他專有不可侵の觀念を生ぜしめる超越的勢力は即ち『タブー』である。換言すれば自我專有、專有の

俗に精通すと稱せられる一著者（パケハ、マオリ）が、人間『タブー』は元と財産保護の目的の爲めに起つたと論じてゐるといひ［同上頁］マルクエサス群嶋に於ても、『タブー』は土地所有權を生ずる原因となつたとのフレーザーの言を引き、［二七七頁］更らにジェネップ氏のマダガスカルに關する『タブー』研究を以て最も詳密なりとし其言をあげる。曰く、『財産は其原始に於いては、凡て宗教的なるものである。隨つて財産保護の方法も、其原始に於ては、宗教的なるものであつて、『タブー』の標示は即ち所有權の標示である』と。［二八一頁］

而して著者は斷案して云ふ、『信念のみに依つて維持せられる社會に於ては、物の『タブー』は『法治社會に於ける所有權であつたこ

る禁諱に依つて一定の物に不可侵性を賦與しこれが侵犯に對する超自然的制裁の恐怖に依つて維持せらるゝが爲めに、所有權の觀念を完成するに最も有力なる原因であつたことは明らかである。」二八七、二八八頁

私が繰返して、著者がタブー總論就中其本質成立等に關する論述の簡單に過ぐるを惜しみ、肝要なる考察を各種の題目に分割せられたことの妥當に對して疑を挾んだのは、右に掲ぐる一條の甚だ重要なる發言が卷末に至つて初めて提示されたことによつて、支持せられると思ふ。若し此發言にして、タブー論の初めに置かれてあり、而して此の考察が終始一貫して著者の『タブー』論の中心を成して居たならば、著者の提供した豐富な材料該博な論議は、更らに一層其輝きを増したであらうことは、私に取つては、疑なきことのように考へられる。

遮莫著者が、タブーについて如何に深く問題の核心に觸れてゐたものであるかは、右第四章の數言を以て十二分に立證されてゐるのである。唯殘念なことは、財産權と『タブー』との關係については、右ジエネップ、フレーザー諸氏の研究を援引することを主とし、支那、朝鮮、日本又は印度について何等勞證するところなかりしことこれである。元より直接『タブー』の事實として擧ぐ可き材料は容易にこれを得難いではあらう。乍併、法律、宗教、婚姻（此章殊に豐富である）等について、著者が精勵刻苦して日本、支那よりの材料を擧示したると同一の勞を加ふるならば、財産權とタブーとの關係についても亦援引し得可き事實は多々存してゐたであらうと思はれる。私一個としては、甚大膽なる試みではあつたが我上古の祓除と貨幣從つて財産的流通との關係について管見を公けにしたことがあるが、著者を以てすれば、私が貧弱な材料に基いて立てた説の如きものならず、更らに周到綿密な考察がこれらの問題について下され得たに相違ない。著者の用意の此點にまで溯及せざりしことは、私の殊更に遺憾とせざるを得ぬことである。

『タブー』と刑法の章は、恐らく一の斷片であらう。私は唯だ天著者に假すに更に壽を以てせざりしことを此章を讀んで痛歎せざるを得ざりしものである。

以上稍ゝ長きに亘つて法律進化論の最終册たる第三册の要點を紹介した。乍併私の紹介したところは、私から見て重要なりと考へられる點のみに止る。若しも法學專攻者が同樣のことを企てられるならば、更らに一層重要なるものが多々含まれてゐることが十分に示され得るであらう。返へす／＼も今日までに其企てのなかりしことを遺憾とせざるを得ぬ。

『法律進化論叢』第二册の『祭祀及禮と法律』の前半『祭祀と法律』は、右『タブー』論に直ちに續くものである。此内祖先崇拜と法律は、著者の學究的生涯を一貫して、最も力を用ゐた問題であつて、恐らく祖先崇拜と法律との關係に關する世界文獻中有數のものに算らるべきものであらう。若しもフュステ

ル・ド・クーランヂュ氏にして生前著者の此研究を見るを得たものとするならば、氏は必ず隨處に著者に對して深厚の敬意と感謝とを捧げたであらうと思はれる。著者が明治三十二年羅馬のオリエンタリスト會議で試みた講演は、當時在獨中であつた私共の貪り讀んだものであり、故玉井喜作氏は著者に請ふて其ドイツ譯を同氏主宰の雜誌(當時日獨學者の連鎖として甚重要な役目を演じた)へ連載した。私の交遊したドイツの諸學者は私の手から奪ふが如くに其雜誌を轉借し行きて爭つてこれを讀んだ。思へばすでに三十年の昔の事となつた。私は伯林に於いて故コーラー先生を訪れたとき先生は曰く、今歐羅巴には貴下の如き日本學者は可なり多數に滯在して居ると思ふ。其れら諸君が穗積氏の論文の如きものを一人一文にてもよき故歐羅巴の學界に提供して呉れ

樣の言は、私は私の法制史の師アミラ先生と經濟史の師ラムプレヒト先生からも承つた。

さて本書に收めた『祭祀と法律』は、右の如き長い準備の後に起稿せられたもので、其れはやがて最終の定稿となるべかりしものと思はれる。然るに編者重遠博士が其書の序文に記すところによると、略ぼ定稿と認むべきものは、其第一章『祭祀の起源』だけであつて、第二、三の兩章は未だ未定稿に屬するものであると云ふことである。明治二十九年初めて祭祀と法律てふ小講演を試みたといふ著者が殆んど四十年に亘りて思を潛め想を錬つて未だ定稿を得るに及ばなかつたといふ一事だけを以てして、私共は著者の學問に對する態度の愼重なる到底我々の思ひも及ばざる底の

ものである。即ち著者若し存命にして、法律進化論第四册を刊行したならば、まさに其中に載せらるべきものであつたらう。其中にあつて、私が最も注意に値すと見たのは、禮と正義との異同論これである。曰く、『泰西法の基礎も亦道義であつて、古代に於て禮法一致したことは決して東洋法と異るところはなかつた。然し乍らギリシヤ以來法の基礎たる德義は正義てふ特別なる公德であるとし、支那の如く一般に道義を以て禮法の基礎となすものとは異つてゐた。加之、支那に於ては、道義の形を成すものは禮であるとし、禮を出でゝ初めて法に入る者としたから、法と道義との關係は、間接的であるが、泰西に於ては、法は正義の實現であるとすること、宛

共に完かりし所以である。』二〇三、二〇四頁『禮義は德の成形であつて人の行爲に對して具體的典型を與へるものであるが、正義は德の本體であるから人の行爲に對して抽象的標準を與へるのみである。禮儀は社會の事物を鑄型に注入して固形體を成したものであるから人生の需要に伴うて變遷應化するの彈力を有して居らぬ。其れ故禮儀は社會の初期に於て秩序を整へ治安を維持するの要具であつたことは勿論であるけれども、一方に於ては人の自由活動を妨げ、個人の發達、社會の發展を阻止するの障害物であつた。之れに反し、正義は、公平、平等、應分等の基本觀念を標準とせし故、固より禮儀の如き固定の成形を有することなく、常に高尚なる抽象的理想を揭げて改良進歩の榜表としたから、正義の表彰たる法律は、容易に其伴侶たる禮儀の羈絆を脫して發展の途に上ることを得た』二〇四、二〇五頁而して更らにいふ。『禮は各人の間に當然の分を定むるものであつて、正義の觀念中各人をして其分を得しむるの義に應當し、またアリストートルの謂はゆる分配正義に似たるものがある。』二〇八頁附錄の『禮と法律との關係』中にもまた曰く、『羅馬のユスチニアーヌス帝の法典……の其初めに正義及法と云ふことが書いてあつて、正直高尚に生活すべし、他人を害すること勿れ、各人をして其の分を得せしめよと記してあります。是はアリストートルの正義論の分配正義と矯正正義といふことを論じたのに似てゐる。惡人をして其所を得させず、財產榮譽等を政治團體員に分配することを公正にして行くことが正義の要求であつて即ち分配正義である。又他人を害すること勿れと言ふのは矯正正義であつて或ものが常態を失つて過不及を生ずれば其過不及を元に直し他人の物を奪ふものあれば之を返還せしめ、一方に過ぐれば一方より之を割いて足らざる所を補はしめる。是が正義である。而して之を爲すものは法律であると謂ふのである。』二五六頁

禮の起原、本質、並に禮治法治、殊に禮法分化に關する著者の研究は恐らく日本又は支那の學者にして初めて適切に考察し得る問題であつて、西洋の學者には或は之を望むこと能はざるものではないかと、私は思ふ。其然る所以は右引用の著者の言中にもすでに十二分に窺ひ知られる。少くとも實際の事實として禮と法との關係を斯くまで深く研究したものは、今日までの西洋學者の述作中には多く見出し得ざる所であると言ふも決して過言ではあるまい。而して東洋の學者の禮を論じたものは尠くないが、其れを法律との關係に於いて、就中正義との異同について、斯くまで廣汎に考察したことは實に我が穗積博士に始まることは、些の疑を容れないところである。法律進化論第三册のタブー論については、著者は獨自の考察を述ぶること決して尠しとしないが然し乍ら其立脚地は西洋の先覺諸學者の諸研究の中に見出される。著者は明かにこれを公認しつゝ其上に自己の研究を進めてゐるのである。故に著者は決して先づ荊棘を拓いたものと言

ふべきではない。之れに反し『禮と法律』(祭祀と法律について)論に於いては、著者は其資料を支那の群籍中から得たとは云へ、其學問的吟味の上に於ては、殆んど全く前人未到の處女林を拓いたものである。而して其該博にして鋭利なる學問的洞察は、アリストテレースの分配の正義論中に禮の本體を看見するに至つたのである。但しアリストテレースの正義論は、これをプラトーンの其れと對照し、更らに中世の諸學者の間に於ける其後の發展と合せ考へ、就中ライブニッツの諸研究にまで降り下りて考察しての後にあらざれば、最終の斷案を容易に下し得可きものではなく、著者の所論は餘りに簡單にすぎたるは言ふまでもないところである。乍去其はむしろ文献的考證の業に屬する。本體的考察としては、私は著者の明斷に悉く服せざるを得ぬ。私は嘗て重遠博士と故大人の學風を論じたことが

云ひ、私は歐羅巴の學者の中では、ライブニッツが最も似てゐるように思ふと。重遠博士曰く、或は然るやも知れぬ。父はライブニッツを甚だ愛敬してゐたと。アリストテレースの正義論から重大なる結論を引出したものにカール・マルクスがある。しかし、彼れに先つて、最も多くを捉らへたものは、たしかにライブニッツであつたと私は思ふ。今穂積老博士の禮卽分配正義論に接する私は、更らに再びライブニッツを想ひ出さゞるを得ないのである。(拙論文『アリストテレースの流通の正義』を見られたし。此拙論は更らに更らに繼續すべきつもりのものである。)

『法律進化論叢』第三册の本文『慣習と法律』は、右『禮と法律』の後を承けて、原質論の(三)習俗規範篇に屬するものであ

の附錄原力論斷片(汎神説、造化説、强力説)並に近く刊行せられる由の『復讐と法律』等何れも、此の『原力論』に屬すべきものであるとのことである。論叢第一册編者序六頁に據る 他日法律進化論叢の刊了後に於いて、これら諸篇を、更らに編成替へを行つて、讀者をして一目の下に其れ〲の所屬を明かに知らしめ得る樣改められんことを、編者に切望せざるを得ぬ。今の儘にては、前後錯綜讀者に多少の困惑を感ぜしむる處がある。

私の此文すでに餘りに長きに亘つたから、順序として最後に來る『原力論』に屬する右諸篇(卽ち論叢第一册『神權説と民約説』の全部、同第三册附錄『原力論斷片』)は、同じくこれに屬すべき『復讐と法律』の刊行を俟つて一括して紹介する機會

『慣習と法律』は五章から成立つ。(一)慣習の起原(二)慣習の本質(三)慣習の効力(四)慣習の法性享受(五)習慣の法性享受に關する學說これである。此內著者が多くの力を注いだ者は、(四)就中(五)である。其は法學者の研究として誠に當然の事であると思ふ。著者は、慣習法變に三期ありとし第一法律潛在期、第二法慣並存期第三法律分化期の三について說い居る。この問題は本書の核心をなすものでなければならぬ。何となれば其は平たく云へば、如何にして慣習が法律となつたかの發展過程を說くものであるから。然るに著者は他の點に於けるとは却つて反比例的に此の核心の問題について述ぶるところ極めて少く、殊に其敍述は右の三時期あることを略示するに止め、如何にして此く三大變が起つたか、其の經過は如何であつたか等我々の最も知らんと欲する問題には殆んど觸れてゐないのは甚だ殘念なことといはねばならぬ。これに反し慣習法論の起因については甚だ詳細な敍述が載せてある。其着眼は一見奇警に似て然らず誠に克く問題の所在を描き出してある。曰く『慣習法學說なるものは慣習法衰退の時代に於て初めて現はれたる奇現象である』と。(五七頁) 著者は此の得意の立言を證明する爲めに十頁を費やしてゐる。次に慣習の法性享受と題し一般的法性享受、特別的法性享受の二者を分つて詳論してゐるが、其中最も力を罩めたと思はるゝ節は著者の最も尊敬するサー・ヘンリー・サムナー・メーンが『慣習は裁判より生ず』『裁判先づ存し、慣習後に生ず』と主張した其說の批評であつて、メーンの後諸著書を順次にあげて彼が此說を必ずしも終始一貫して支持したものにあらざることをいとも鮮かに立證してゐる。而して、メーンの誤は畢竟するに常慣習と法慣習との區別を辯別せざりしことに在ると結論してゐる。此一條は著者老來猶壯時の溯氣を消耗し了らざるものなるを示し讀者に痛快の感を與ふ。乍併其明確なる辯別論に服する我々をして、然らば常慣習が法慣習となる所以は那邊に在りやと反問せしむるとき、著書の答は未だ十分でない。曰く『常慣習の統制力は裁判に依つて公權力化するものである。其過程は具象的享受より抽象的享受に進むと概言することが出來るであらう』と。(八五、八六頁) この解答は殆んど我々の疑問を釋いて居らぬものと私は考へる。

最後に第五章(此の章は、編者が特に前章から分割して一章としたものゝ由である。此點編者の用意の妥當親切は、たしかに感謝せねばならぬ)は、慣習の法性享受に關する學說を、神授說、慣行說、時効說、承認說、法信說、意思說の六節に分けて、いとも詳かに檢討してある。此章は全篇中にあつて著者が最大の精力を注いだと思はるものであつて、著者の學問の長所は玆に遺憾なく發揮せられてある。唯惜む可きは、これら諸說の檢討を經へたるの後著者自らが如何なる說を採るかゞ明瞭に示されないことこれである。但し、著者は附錄に改めたる法信說論評なる論文に於て、サヴヰニー(ザビニーとあるは誤)以下の法信說についての批評を試み、其結論

に於いて言つて曰く『余は此點に關しては寧ろ退嬰の卑なるサヴィニーに黨するも進取の利あるイエリングに與みする能はなるなり』(二一五頁)と。即ち著者は執意作成論に與みせず、むしろ自然的發成論を採ることだけはこれを明言してゐる次第である。私一個人としても、亦著者の此裁斷に服するものである。しかし著者は其裁斷の根據を十分に示めしてゐない。是れは甚だ惜む可きことであつて第五章の周到なる吟味は、學說史として甚だ尊重すべきものなると共に、法律進化論の一題目としての慣習法の法性享受てふ問題は未だ其の總歸結を與へられないと言はざるを得ないのである。

著者が斷案を下すに痛々しい程愼重であることは、研究者の態度として實に尊重すべき用意である。乍去其れと共に、堂々たる研究の各條何れも其の歸結に於いて甚だ微弱なるの憾を止めたことは、惜しみても猶餘りあることと思ふ。獨り此書の附錄に收めた原力論斷片の最終節『然らば余は強力說に與みするものなりや、曰く否。余惟へらく強力論者は法が強力なりとするに於て誤らずして其強力の主體を個人、團體又は社會の一部なりとするに於いて誤るものなり。彼等は社會を分解して、強部弱部の二成素となし、法は其強部が弱部を支配する力なりとす。是れ強力說の根本的に法の本質を誤るものなりと云はざるを得ず』(二六五頁)の斷言は、編者の序文に云へる如く『簡單ながら頗る注目すべき一句』(五頁)であつて著者は、必ずしも常に斷案を下すを回避せんとするものでなく、一度確信に到達したるときは、讀者をして意外と感ぜしむるほど力強くこれを言明する事も稀にはこれを見出す。此一節は其の好證左である。此の斷案は少くとも唯物史觀の當該學說を全面の敵と宣言するものである。但し今日までに公けにせられた著者の遺著中には、其理論付けは試みられてゐない。我々は唯だ結論を與へられたにすぎない。從つて私は、著者の此斷案に對して抱く疑を玆に開陳することを敢てせず、徐ろに後著の續刊を俟たんとするものである。

× × × × × ×

穗積博士の諸著を去つて、宮崎博士の遺稿集に向ふ。其處に私が第一に強く感じたことは、宮崎博士の周到綿密は穗積博士の其れとは或意味に於いては、著しく其性質を異にするものであること、而して其の周到綿密なる考察は、必ず一々一定の結論にまで貫徹せられてあり、少くとも其爾かせんとの努力は誰人もこれを看過するを得ざるほどに鮮かに現はれてゐることこれである。此點に私共は日本法學界の二大巨匠の辿られたる道の其れ〳〵に異彩を放つことを看過し能はざるものである。

宮崎博士の學風については編者中田博士の一言簡にして其一切を盡くしてゐる。曰く『俗事を厭ひ名利を避け、恬淡にして闊達を求めず……人皆目して重厚の君子と爲す。……日夜屹々手未だ曾て卷を釋かず、得る所有る每に輒ち之を筆にす。而も漫りに著述せず』(小傳の二頁。△は筆者これを加へた。)と。而して今

公刊せられた論文集の如きも、『明らかに先生の素志に違ふものである』（序言の四頁）ことは、多年宮崎博士論集の刊行を熱望して已まなかつた私の或る關係から克くこれを知るところである。然るが故に今中田博士が長き熟慮の結果斷然全責任を一身に負ひて、先生の素志に形式上は背くとも、永く學界に此の貴重なる文獻を止むるの擧を敢行せられたことを壯とし、これに對して言ひ盡くし難き敬仰の意を表明することを禁じ得ないものである。私は今より二十七八年以前から宮崎博士の論文出づるごとにこれを雜誌から切取りて一の宮崎先生集の綴込を作り常にこれを坐右に置き今日にまで至るものである。今刊行せられた本書を見るに著者自ら補正した部分あり、編者の注意によりて改竄を加へられた部分もあり、更らに全く未見の『皆叱知考補遺』の新たに公けにせらるゝあり、殊に一度寓目し得たるのみにして私の綴込集に收むるを得ないを歎じてゐた『律令に就きて』『質屋の話』『手附の話』等の初期の論文の萬錄せられあるあり、更らにまた著者自らの加筆にかゝる細註の加はるあり、各論文中の東洋諸語には一々懇に羅馬字音譯が添へられある等、私製の不完全な綴込集について苦學した其昔しを回顧して、轉た感慨に堪へざると同時に、編者に對する感謝の念を更らに一層深くせざるを得ざるものである。

本書收むるところの論文其數二十九、外に附錄五篇あり。其一つ一つ悉く著者渾身の努力刻苦の結晶よりのみ成るものである。而も著者の求眞の純心の徹底せる『意に充たざるもの十に七八、能ふ可くんば破棄し去らんと欲するものも亦少くない』（序言の一頁）と云つて、終いに論集の刊行を永久に固辭せられたのである。

正編所收の論文一より六までは、主として日本支那比較法制史に關する研究より成る。『律令に就きて』『質屋の話』『日本支那古代の爵稱制度』『手附の話』『家人の沿革』『唐代の茶商と飛錢』等これである。七より二十九までは、東洋言語、就中朝鮮語、滿洲語、蒙古語等の比較研究を日本法制史の研究に利用した研究から成る。其總論とも見るべきは、『日本法制史の研究上に於ける朝鮮語の價値』『朝鮮語と日本法制史』『朝鮮語と日本歷史』『日韓兩國語の比較研究』の諸篇であり、地理的考證にかゝるものは『意流村』『阿利那禮河』『任那の疆域』等に關するものであり、字義、名稱等の考證を主として法制の研究に進み入つて居るものは、『都加佐』『姓氏』『賕と出擧』『佐刀』『部曲』『保止支』『須惠』『史』『勝部』『皆叱知』『毛麻利叱智』『吉』等についての諸文これである。

かく所收の研究の多數は、『一見法制史と緣遠く思はるゝ言語の比較』に關するものであることについては、編者は序言に說明を與へて居る。而して著者自らも亦辯じてゐる。曰く『故に拙者も他日は又、大に他の手段を取る積でありますが、目下の處は、先、言語

の方面から研究致して居るのであります』二〇五頁 編者の序言に曰く、『有名なる言語學者ヤコブ・グリムが言語のみを材料として、獨逸の古代法制を記述した『獨逸法律考古學』（『學』は如何あらん『考古叢集』などの方適譯にあらざるか）は、獨逸法制史の研究方法に、一轉換を與へた不朽の名著であるが、先生も亦之に倣つて、比較言語學の力を藉りて以て、我古代法制史料の缺陷を補はんと試みられたのである。』序言四頁 經濟學の方面に於いてもシュラーダーを始めリッチウェー、シュルツ、の如き何れも比較言語の研究を以て、經濟史の研究に一新生面を開いたもので、其業績は今猶燦として輝いてゐる。否我々はボップ一生の業績を回顧するとき、比較言語の研究があらゆる社會諸科學の上に如何に大なる光明を與へたかを忘るゝこと能はざるものである。大戰後佛蘭西の學問が依然として惰眠より覺めて、獨逸の學問の壘を摩さんとする勢を示めすに至つた內、精神諸科學のチャムピオンとなつたものは、實に比較言語學であるとさへ言はれる現狀を見る我々は、明治三十五六年の昔にあつて、獨り亢々として、日本法制史に比較言語學の力を援引することに全心全力を傾倒した宮崎博士の神々しき尊き姿を事々物々について回顧せざるを得ないのである。而して編者の歎ずる如く『以上我が法制史の兩方面（日支法制の比較研究と言語學的研究）は、從來の學者の久しく忽諸に附して居た部分であつて、先生に依つて初めて其一隅の開拓が試みられたのではあるが、先生の歿後再び荒廢に歸したかの感あるは』『深く遺憾』とすべきことである。序の五頁 編者の希望する如く、『本論集の刊行が、他日先生の遺緒を嗣ぐべき少壯學士の奮起を促すの動機ともなるならば、地下の先生も定めし、滿足に思はるゝことであらう』同上頁 とは、私の悉く同感を禁じ得ざるところである。

我々は本居宣長、伴信友以下の江戸時代の諸學者の國史研究に對しては、今猶驚畏の念を絶ち能はざるものである。乍去、其言語論に至つては、屢々堪へ得られざる困惑を感ぜざるを得ぬ。諸學者何れも其全力を傾けて考證し推理したのであらうことは疑を容れないが、其言語論の多くのものは、卒直に云へば『こじつけ』以外の何物でもないではないかと思はざるを得ざる議論から成立つて居るのである。尤も若干の取除は無論ある。而して中には朝鮮語を援引し來つた例も若干は見出される、しかし其れらは、造詣の殆んど稱すべきなき希臘人一二名と會するを得て希臘語の讀み方を回復したと云はれる彼のエラスムス、若くは、纔かに希語を解した一人の助手の力によつてアリストテレースの註釋書を作つたと云はれるトマソ・ダクキノなどの言語研究にすら比することを得ざるものである。若しも江戸時代の史學者、國學者にして、同時代の蘭學者の蘭語に對するほどの熱心だにあつたならば、タトへ鎖國時代であつたとは云へ、朝鮮語の研究に於いて、今少しく進出し得たりしならんと思はれ

る。これは實に殘念なことである。しかし、其は舊時代のこととして暫く問題外に置くとして、明治の盛代に入つて後も、宮崎博士出づるまでは、殆んど一人の此方面に指を染むるものこれなかりしとは、憾みても猶盡きぬことである。幸に我宮崎博士あつて、殆んど其半生を傾倒して其研究に從ひ、其結果は今此の大册となつて永く學界に殘されることとなつたのである。

支那の法制史、經濟史については、幸にして、宮崎博士の歿後も、若干の有爲なる研究者がある。しかし、支那の法制と我邦の法制との比較研究については、僅かに本書編者の唐令と日本令との比較研究の名篇其他と近來若干の新進學士の同問題に關する一二の論文とがあるのみに止つて、本書に收めた『古代の僞稱制度』、『茶酒と飛錢』などに追從するを得可き研究に至つては未だこれあるを見ない。しかし、此方面は、或は遠からざる將來に於いて續々新進學者の起るに至るかも知れないと思ふが、著者の最も多く力を用ゐた朝鮮語、更らに進んで滿洲語、蒙古語にまで及んでの比較言語的研究は、容易に起り難いかと思ふ。何となれば、其れは眞に徹底した獻身的努力を要すると共に、多種の言語に通曉するといふ難條件を伴ふから。我々如きは歐洲語の若干を學習するをさへ容易ならずとするものである。況んや學習の便甚だ缺如たる東洋諸民族の言語を學ぶをや。否比較的學習の便多き支那語一つをさへ學ぶに難色あるのである。私は先年シリアに旅して、ベールートに行つた。其處にはフランス人の宣教師の一團が一の小さい學校を建てゝ居つて、小亞細亞諸民族の言語を孜々として研究してゐるのを見出して驚歎したことがある。其學校から刊行したアラビア語の辭書は、學界の寶となつてゐることを聞いて更らに驚を増した。また新嘉坡に於いて前代の英國總督にマレー語の大辭典と文法書の著述あることを知つて驚歎これを久ふしたことがある。印度諸語、ペルシア語などについても、今日これを學ばんとする者は歐洲人の著作に頼らねばならぬ。否支那語朝鮮語についてすらも或は英人或は佛人の著作に頼らねばならない。朝鮮は今日我邦の一部であると云ふに、朝鮮語の字書として、ゲール氏の辭典に比肩するを得べきもの何處にかある。否アイヌ語についてバチエラー氏字典の二分の一三分の一にも當るものがあるか。算へ立てれば實に遺憾極りないことである。

私は支那の法制史を知らず、朝鮮語は諺文の發音すら覺束ないものであるから、今著者の研究の内容について彼是言ふ資格を一も持たぬものである。唯だ一心に著者の諸論文を讀みこれを誤解せざらんことを專念するのみである。元より私は著者の論斷したところ悉く最終的のものであつて、後の學者の異存を挾む餘地なきものと輕信するものではない。また其の行論中獨斷の感を起した點もこれないわけではない。（例へば私の專

門に關係あるアタヒ(直)の考證三一一頁の如きについて、姓としての直と價値の義に用られる直との關係、また『オギノリ』の考證の如きについては、更らにより多くを期待するが如きこれである。」乍去私が茲に特記して置きたいと思ふ一點は、著者は其の解き能ふ問題のみを提出するを念とし、一度提出した問題は必ず初めに約束した通りにこれを解いてゐることこれである。思ふに著者が研究した問題は、今此書に收めたものに何十倍したであらう。しかし著者は其廣汎なる研究中、兎に角暫行的なりとも自ら限定した範圍だけに於て解決を下し得たと信ずるもののみを論文として公刊したものであることは、十二分にこれを察知し得る。問題を提出することもたしかに一の學問的仕事である。しかし乍ら、自らに提出した問題にして、兎に角自己が或度まで滿足する解案を與へ得たと信ずるもののみを公にし、其他のものは如何に多くの辛勞を積んだものと雖も、悉くこれを自家胸中に永久に藏し置くといふ學問的決斷に至つては、尋常の學者に在つては到底敢てし得ざる難業である。著者は此點に於いて一の徹底的難行者全身的克己者の典型であることは、一度本書を繙いた人の一様に認めるところであらうと思ふ。

元より比較言語學的研究は法制史研究の一手段である。而して比較材料の多く得らるれば得られるほど前人の定說の翻へされるもの多きを加ふるは言ふまでもない。ボップの前人未發的研究は、ライプチッヒ派諸學者のために殊に近時に至つてはブルーグマンの研究のために、根底から覆されたとさへ言はれてゐる。乍去誰人かあつて、ボップ開拓の偉績を爭ふものがあらうか。宮崎博士の諸研究其何れもが、前人未發の創見を或は多く或は少く披瀝したものであつて、其の一說、一發言たりとも、前人の所說を其儘に襲踏したものはないのである。而して其創見たる悉くこれ著者の血と肉との學問化したものに非ざるはない。他の混淆物は一もこれを見出すことが出來ないのである。後世の研究は、宮崎博士の所說の一々については、或はこれを翻すに至るであらう。然あらんことが取りも直さず、著者の最も望むところであらう。何んとなれば著者は個々の自說を立てんか爲めに研究したのでなく眞理其ものを見出さんが爲めに、其の血其肉を筆に託して書き殘し、後の來る者に進出の方針を示したのであるから。遮莫、著者の研究を、一貫する實事求是の大精神に至つては永久不滅、燦として日本の學問の上に輝くことは、誰かこれを疑ふ者あらうぞ。プラトーンはソクラテスの言としてアーセナイ人に告げしめていふ。『私は何事をも知らない。唯だ其の何事をも知らざることを知るの故を以つて、最も賢き人と誤り稱せられて居る。私は人々に對して彼等が知れりとするところ果して眞にこれを知れりや否やを自省せしめんと努めたにすぎない』と。アポロヂーより自由意譯。(終)

(四・九・七・於強羅)

ミュンヘン雜記

齋藤茂吉

1 日本媼

媼の名は、Marie Hillenbrand といふ。媼がまだ若くて體に彈力のあつた頃から、その母親と共に多勢の日本留學生の世話をした。當時の日本留學生は概ね三年ぐらゐ居たのであり、一つの都市に居ついて其處で勉強するのを常としたから、都市の人々と留學生との間に、おのづと心の交渉が成立ち、それが今時と較べて餘程親密なものであつたと見える。そこで、この媼は娘のときから入りかはり立ちかはり日本留學生の世話をして老媼に及んだのである。「日本ばあさん」といふのは、これに本づいた名であつた。

私は西暦一九二三年の七月から丸一年ミュンヘンに居るうちいろいろ媼から世話になつた。そして後半の七ヶ月あまりを媼の家に起居し、ミュンヘンを去る時も媼の家から立つた。いま追憶してなつかしく思ふのもその爲めである。

媼は私の世話になつたころは、既に六十に手が屆くぐらゐの齡に達してゐた。昔世話した日本留學生の寫眞を澤山持つてゐて、それを居間に飾つてあつたり、アルバムのなかに挿んであつたりして、樂しさうにそれを私等に示した。その寫眞に私の知つてゐる人々も幾人か居るので興深く見入つたことは一再ではない。なかには媼が未だ娘々した顔でうつつてゐる寫眞などもあつた。

媼が生んだただ一人の男の子に Willy Hillenbrand といふのが居た。これは日本の留學生の生ませた混血兒であるが、すでに三十歳を越えたぐらゐな敏捷な若者である。

「Willy の奴を看てゐると實におもしろいね。すばしこくて、短氣で、猾いところがあるかと思へば、氣前が馬鹿に好かつたりして、やつぱし半日本人といふ處があるね」—

『それはさうだらう、實は婆さんにも一寸そんなとこがありあしないか。』

『さういへばそんな點もあるやうだね。何せ日本人が好きで世話をしたから、子を生んだのだから何かの默契があつたんだらう。』

『默契か、默契といへば婆さんの顏でもひよつとしたら、蒙古種でも交つてゐるのかも知れんぜ。蒙古の奴らが昔このへんまで荒らしたといふぢやないか。』

こんな話が或時、私等二人の間に取交されたこともある。

Tilly はまめに私を警察に連れて行つて届を出して吳れたり、新聞社に行つて部屋借りの廣告を出して吳れたり、停車場に荷物を取りに行つて吳れたりした。ある日、部屋を見に連れて行つたかへりに、『ミュンヘン人は何でも眞直に物云ひますから、先生も喧嘩なすつちやいけませんよ』などと云つたことがある。"direkt" と云はずに "gerade" などと云つたのが珍らしいやうな氣がして、帳面に書きとどめたことを覺えてゐる。

その Tilly に許嫁の娘が一人ゐて、やはり媼の家に同居して居つた。若者も小柄であるが、娘も小柄で丸い可哀らしい顏をしてゐた。然るに、娘と媼の間がどうも旨く行かぬらしい。目立つて爭ふやうな場面は私どもに示さなかつたけれども、媼はここに投宿してゐる私の友に泣いて訴へることなどもあつた。

さうしてゐるうちに、若者は娘を連れて、Stuttgart の運送店に勤めることになつた。そこはミュンヘンから急行汽車で半日もかかる獨逸都市である。時々、媼は菓物だの食物などを小包にして若者のところへ送り送りした。

私は媼のところに世話になるやうになつてから、朝食だけは無報酬で媼のところでした。黑麺麭を厚く切つてそれに牛酪とジャムとを塗つて食べさせ、半々ぐらゐの珈琲を一碗飲ませるのであつた。その狹い臺所兼食堂の卓の近くに、カナリヤが一番飼つてある。媼は無聊の手入をしたのち、人間にものいふやうな口調で、手指を立てて見たり、顏をゆがめて見たり、目をむいて見たりしてゐるのが、いかにもをかしくあり、物あはれでもあるので、私は知らん振をしてそれを見てゐるのであつた。

カナリヤは南獨逸訛まじりの媼の言葉にいつも敏捷に反應した。この小鳥は既に滿十五歲の齡で、片足が利かなくなつてゐた。また、活潑に囀るやうなことももうなかつた。『もうわたし同樣なばあさんでございますよ。ごらんなさい、片方の足は僂麻質斯であんなでございますよ』こんなことを媼は云ひ云ひした。今ここに止宿して居るMドクトルが大戰勃發少し前にここの家に止宿してゐて、その時ゐたカナリヤ

であるから、十五歳ぐらゐになる筈だとMドクトルは云つた。ただ媼の家が、戰前ゐた Bavariaring から此處の Landwehr 街に越して來たのであつた。

媼は日本の留學生に日本飯を炊いで呉れた。それから牛肉の鋤燒などもして呉れた。併し日本飯を炊くと謂つても先づ米に幾通りかあつて、それを鑑別しないと奈何に骨折つて焚いても旨い飯にはならない。媼は、留學生から學んだ經驗でその鑑別の法を知つてゐた。それから、瓦斯火で鍋で焚くのであるが、それでも決して繼の飯にするやうなことはなかつた。それは、湯氣を強く吹かせてから火を消さうとするときに火を消してしまはない、そして火を小さく細めてから三十分間放置しておくのであつた。からすると鍋の底は少しく狐こげに焦げるが、飯は誠に工合よく出來あがるのであつた。私は維也納留學中は寸暇を惜しんだので、自ら日本飯を焚くやうなことがなかつたが、ミユンヘンに來てはじめて媼からこの秘法を授かつたのである。これは酒精燈で焚くときでも亦同樣であつた。

媼は信心ぶかいといふ方ではないであらう。けれども曉に寺の鐘が鳴ると何かつつましい顏をするときもあつた。若者と娘が居なくなつてからは、土曜から日曜にかけて遊山をするので寺まゐりの暇が無いといふやうなこともいつた。

四階目にある此處の家のはばかりには、西洋の新聞紙よりも日本の新聞を四角に切つて吊げてある方が多かつた。用を足しながら見るともなしに見ると、懷郷の心をそそるやうな文句に逢著したりする。時には、、、、、、などが一しよに吊してあつたりすることもあつた。さういふ時には、、ないと思つてそこだけ取はづすことなどもあつた。

ある朝、食を濟ましてゐると媼は小ごゑに唄を教へて呉れた。「けふはヨハナ。あすはスサナ。戀が年ぢゆう新しい。これが正銘、寶ある學生さん」といふのであつた。媼のこゑはさびてゐる。時代の變遷してしまつた、今から三十年も前の學生の間に行はれた歌謠を計らずも目前に味ふのであつた。

媼の他所行の衣裳は裾の長い舊式な黑衣であつた。その衣裳を著て媼は私等と芝居見に行き、用足に行くのであつた。ある日媼はその衣裳を著、貸間を見に私を連れて行つて呉れたことがある。そのときあいにく驟雨が降つて來た。私等は慌てて人の家の軒下に雨を避けた。そのとき媼は、天が泣いた、天が泣いたなどと云つた。これは若者の私が老媼などと連立つて歩いてゐるからだといふ意味であつた。云ふことが通俗だが、獨逸語で云はれると、そこに興味が出て來るので別に悪い氣持はしない。媼はこんな笑談なども云つた。

嫗は大戰後特に貧しい暮しをしてゐたけれども、家には南京蟲が出なかつた。これは些細事の如くであるが、實はなかなかさうではない。ある時、北獨逸から來てここを通過した日本の旅客が一疋持ち運んだことがあつたが、辛うじてそれを捉へた後は、依然として南京蟲は出なかつた。

嫗の家の屋根裏には大戰で逃げた留學生の荷がまだ殘つてゐるといふことであつたが、その留學生諸氏は、獨逸の敗戰後嫗の貧窮を氣の毒に思つて金圓を贈つて來たほどである。私はその屋根裏には遂に上がらずにしまつた。その屋根裏の隣室には嫗よりも貧しい若い夫婦ものが住んでゐて、夫は工場に通つてゐた。土曜の夜などには、夫婦してギタを彈いて唄をうたふ。その唄は哀調を帶びて時々私の涙を誘つた。

私がミユンヘンを去つてから、もう滿四年が過ぎた。このごろミユンヘンを通過した日本の旅客と合作の繪ハガキを貰つたが、嫗も健在でゐるやうである。また、Mizzi と娘とが正式に結婚したといふことも書いてあつた。私は老境に入りかけ、雜務多端のために嫗にも全く無音に過ぎた。ただ個々心に暇があるときに、嫗の身の上の多幸ならむことを希つてゐる。(昭和三年十月記)

2　南京蟲日記

西暦一九二三年八月十三日。Rothmund 街八番地に貸間があるといふので日本嫗の息子が案内してくれた。そこの女主は Prötzl といつて、切りに訛のある言葉を使つた。右の方の顏面神經麻痺があるから笑ふたびに顏が右の方に歪んだ。部屋は古くて餘り清潔ではないが、裏に面して一間、往來に面して一間ある。今は塞がつてゐるけれど、四五日經てばどれかゞ明くといふことである。かへり途で、日本嫗の息子は、『日本人は何でも眞直に物いふから喧嘩してはいけませんよ』などと云つた。これが候補になつた第一の部屋である。

八月十四日。火曜。教室で爲事をしてゐる獨逸人の醫學士が下宿してゐる家に一つ部屋があるから、若し借りる意志があるなら世話しようといふことであつた。家は Lindwurm 街の二十五番地四階で、女あるじの名を Mistre と云つた。部屋は小さいが我慢が出來る、ただ毎日四階まで昇降することは如何にも太儀だから、第一の部屋が借りられるならばその方にしようと思ひ、明瞭な返詞を與へずに歸つて來た。これが候補になつた第二の部屋である。

八月十八日。土曜。朝食まへに、第二の部屋は、四階だから不便だといふので斷りに行つた。それから、朝食を濟まして、Landwehr 街

三十二番地Cに一間、Sonnen街二十八番地に一間あるが、いづれも一週間ぐらゐ經たねば明かなかつた。これが候補になつた第三第四の部屋である。

八月二十日。月曜。午前も午後も教室で爲事し、夕景に第一候補の家を訪ねた。上さんは顏が歪んで醜いが、率直でいゝところがあるらしい。私は部屋を借りようと思ふ。そこで、いくら支拂ふかと問うた。上さんは熟慮する暇もないほど速かに、毎日、丸麺麭三つの代價だけ支拂つて呉れないかと云つた。いま時、小さい丸麺麭一つの價は一萬五千麻克である。私は大體好からうと答へた。上さんいふ。『どうか貧しい寡婦のためになるべく餘計に拂つてください。』それから、またいふ。『ドクトルは麥酒一杯二十五萬麻克するといふことを御存じでせうねえ。噫、麥酒が飲みたいですねえ』云々。それから、上さんは靴下の繕ひを自慢して見せ、餘所行の着物を持つて來て見せ、次いで一足の靴を持つて來て見せ、墺太利の Salzburg 製だと云つた。その靴を切りに自慢し、めつたに穿かないといふことをも云つた。四十を越した寡婦の上さんは、その靴を大切にして飾つてゐるのであつた。

八月二十一日。火曜。午前は教室で爲事し、午食後日本媼の所に置いてあつた荷物を全部 Rothmund 街の第一候補の家に運び、ミュンヘンに來て初めて自分の部屋に落付いたやうな氣がしたので、午後も

教室での爲事がなかなか捗つた。夕景に新しい家に立寄り上さんから
鍵を貰ひ、友と夕食をしに行つた。心がおのづと開いて、麥酒が
を通過して行く工合が何とも云へない。九時半ごろ新しく借りた
に歸り、體を拭き、足を洗ひ、小さい方のトランクから日用品やら
房具やら書物やらを取出して調へた。今日から此の部屋を
だと思ふと氣持が如何にも落付いて來る、今までは跼蹐して他人の
屋に寄生してゐたのであるが、けふからは自分の部屋に寢るのだ
る、さう思つて私は輕い催眠藥を飲んだ。さて暫くまどろんだと思
時分に頸の處に燒けるやうな痒さを覺えて目を醒ました。私は維也納
以來の蝨の經驗で直ぐ南京蟲だといふことを知つた。困つた困つた
と思つたが、辛抱して三十分餘りかかつて大小二匹の南京蟲を捉へ
それを紙に包んで置いて、日用品だけ大急ぎで調へ、日本媼の所に
げて來た。すでに夜の十二時を過ぎてゐたが、媼は戸をあけて呉れ
私は他人の部屋のソフアの上に體を縮めて寢た。實に變な氣がする。
八月二十二日。水曜。けふ媼が一しよに行つて呉れるといふので
第三第四の候補の部屋をたづねて談合したがどうも煮え切らな
こで、兎に角もう一度新聞に廣告を出して置いて、Lindwurm 街
十五番地の第二候補の部屋に行つて見たところが、また借手が附か
に居た。私は決斷して借りることにした。雨が非常に強く降る中

四階まで昇つて行くのにひどく息切がした。間代は一月三百萬麻克だと云つたが値切る勇氣もなかつた。

八月二十三日。木曜。午前中教室で働き、午食すまして荷運びの赤帽二人を雇ひ、第一の部屋に行つて荷を運び、第二の部屋に運ぶやうに言附け、上さんに南京蟲の談合をすると、『あなたが旅舍から持つて來たのだらう』といふ。いやさうではない。これが證據だなどといひながら私は捉へて置いた大小二匹の南京蟲を上さんに示した。それから、五十萬麻克を上さんに渡してその家を辭し、第二の部屋に來ると、荷物は四階までもう運ばれてゐた。赤帽に勘定を濟まし、この日は、日本娘のところに寝た。英貨一磅の相場が、千五百萬麻克である。

八月廿五日。土曜。一日ぢゆう教室で爲事し、夕食後は暫く珈琲店で時を移し、疲勞し切つて新しく借りた部屋に來た。息切のするのを途中で數回休み休み到々四階まで來て、今夜こそ安眠しよう。毎日の昇降は苦痛であり、朝日も當らぬ部屋であるが、南京蟲さへゐなければ辛抱しようと思つて、床の上に横はつた。そして會話の本など少し讀んでゐるうちに少しく眠つた。

然るにこの床でも忽ち南京蟲に喰はれた。私は餘りいま〱しいので、直ぐ日本娘のところに逃げ歸らうとしたが、夜が既に更けてゐる

し、度々南京蟲のことを訴へるのは自分を侮されるやうな氣もす
し、忍べるだけ忍はうとした。私は三時半まで起きてゐ、二三匹殺
大小數匹の南京蟲を捕へ、孫々眠らずして一夜を明かした。
八月廿六日。日曜。けふは頭が朦朧として不愉快で溜まらない。
附のこと下宿住ひをしてもいゝと思立つて、午前中から、教室から
遠くない所といふ見當を附けて下宿を見廻つて歩いた。下宿は僅に
軒もあるが、時節が惡いので大抵塞がつてゐるし、明間があるのも
れば不潔で住む氣にはなれない。私は一人さびしく、途中で午食を濟
して、それから日本娘を訪ねた。娘は愛想よく、『南京はゐません
たか、nichts?』などと云つたが、私はたゞ苦笑せざることを得な
つた。
娘は、私が一兩日まへ出した間借の新聞廣告の返詞十通ばかりも
つて來て私に示した。そのうちから、教室に餘り遠くないところ
五ケ所を選び、いゝ部屋のあるやうな氣持をなるべく自分で極め
の家を辭した。夜更けて南京蟲のゐる自分の部屋に歸り、催眠藥を
み、南京蟲に食はれて一夜を明かした。
八月廿七日。月曜。晝のうちは教室で働き、夜は出來るだけ晩く
り、蟲除けの粉などを振まいて、南京蟲に食はれて寝た。
八月廿八日。火曜。いゝ部屋が無くてどうも困つた。郊外の方

新市街地に行けば遊びの相手のない部屋が幾らもあるといふが、研究のためには矢張り教室の近くでなければならない。今までは余り人に頼り過ぎた。けふからは自力で自分のこれから住むべき部屋を求めようと思ふ。さう思つて私は先づ宗教の方で關係してゐるHospizに行つた。部屋には古い基督の木像などが掛かつて居り水道の設備も附いてゐた。値段は相當に高いが候補の一つにして、それからSchwanthalerstr.の數軒を見た。Pension Moraltといふところを見、Frau Keimの部屋を見、Frau Valentinの部屋を見、Hotel Schneiderの部屋を見た。最後の部屋を見た時に上さんは、若し借りるなら百萬馬克の手金を置けなどと云つた。

心が落付かず街頭を急いで來ると、計らず二人の日本人に逢つた。一人は不思議にも維也納で逢つた醫者であり一人の老翁と一しよであつた。老翁は昨日に古稀を越したT氏であつた。私も元氣つきミュンヘンの事では一日の長がある樣な態度を自づから示して、夕食を共にした後、けふ見て來た宗教關係の下宿Hospizに案内し、私は日本媼にたのんでソファの上に寢た。昨夜南京蟲に苦しめられたので、自分の今借りてゐる部屋に歸つて寢る氣になれなかつたのである。

八月廿九日。水曜。朝便の配達のとき長兄から、午後便の配達のとき郷里から、實父傳右衛門の死を報じて來てゐた。午前も午後も教室で研究をし、夕食のとき維也納から來たきのふのT翁に逢つたところが、私の世話したHospizで昨夜南京蟲に襲はれたことを報じ、頸のあたりの赤く脹れた處を示した。私は氣の毒になり、一しよに行つて部屋を取換へるやうに談合した。それから今夜も日本媼の一室に寢せてもらつた。

夜半に醒め、實父の死んだといふのは夢ではないかなどと思つた瞬間がある。

八月三十日。木曜。けふは好い天氣なので氣を立て直して働き、夕食して、手金をやつて置いたFrau Valentinの處に行き部屋と入口の戸の鍵を受取り、日本媼の處に寄つて、今夜一晩試して見て若しまた蟲に襲はれたら逃げて來る旨をいひいひ出ようとすると媼に「幸運をいのります」などといつてくれた。それからValentinの所に行つて愛想のいい上さんといろいろの話をし、「僕の部屋には蟲は出ないでせう」「蟲?」「御笑談でせう」「そんなら受合ひますか」「受合ふどころではございません」こんな會話などがあつた。私は蟲の恐ろしい經驗の後なので、懐中電燈を用意し全くの裸體になつて床にもぐつた。それからいろいろ生れ故郷の日本の事などに空想を馳せながら、一時間ぐらゐも經つたころであらうか、眠つたか眠らないかまだ分からないうちに南京蟲に襲はれてしまつた。私は一瞬はげしい憤怒を感

じたが、今度は直ぐ心が元に歸つた。そして急いで着物を着、戸を開けて往來に出た。街上には人の往來が未だ絶えてゐなかつた。私は途中で麥酒の大杯を飲みほし、日本娼のところに逃げ歸つた。そして、誰にも會はずに秘かに部屋に入つてそこに寢た。

八月三十一日。金曜。朝から教室に行き爲事を一通りして置いて、小使に貸間の世話を賴み、三四軒見て廻つた。Pestalozzi Str. 十四番地の一間を見た。これは現在學生が借りてゐるが十一月に歸つて來るまで貸してもいゝと云ふのであつた。Ziemssen Str. 二番にも一間見た。それは現在夫婦者がゐるが近々に明くといふことである。Tuhlkirchner Str. 十六番地の一間を見た。ここでは頑丈な男が挨拶して私を連れて行つて呉れた教室の小使に、部屋は貸したくないと云つた。

午後、日本娼に賴んでもう二回ばかり新聞に廣告してもらふやうにした。夕がた教室のかへりに寄ると新聞に廣告を出して呉れたといふことであつた。今夜も日本娼の處に泊つた。

九月一日。土曜。けふの朝刊新聞に私の間借の廣告が出た。夜食後に日本娼のとこに來ると、廣告に對した十數通の返事が來てゐた。そこで娼と二人で大體の候補を極め、今夜も此處のソファの上に寢た。

九月二日。日曜。早朝から、Klenze Str. 三十番地の二階右側に一室あるといふので見に行つた。ここの上さんは Marie Meir といつてしとやかで人相もいゝし、此處に十四ばかりになる娘も一人ゐる。部屋は大きく光の當りも好く、教室から遠いのが缺點だが、それを我慢すれば大體いゝと思つた。そこで明晩一夜とめて見て呉れるやうに賴んでそこを出た。それから同胞のN君を訪ね、一しよに散歩に出た。けふは日曜で天氣が好いので、町の人も他所行の着物を着て出てゐる。宗教上の何とか謂ふ行列を一時間ばかり見、それからイーサル川の川原を歩いた。連日教室で根をつめて爲事し、連夜南京蟲のために氣を使ふ身にとつては、今日の散歩は何とも云へぬ氣持である。イーサル川は急流でところどころに瀬を作り、また潭を作つてゐる。潭のところで若者らは童子をも交へて泳ぎ、寒くなると川原の砂に焚火してあたつてゐる。川原には短い禾本科の草などのほかに一めんに川楊が生えてゐる。

午後三時ごろ歩き疲れ、途中で麥酒を飲み、藥種屋に寄つて南京蟲退治の藥を買つた。これは硫黄を主藥としたもので、一夜焚いて退治するのであつた。それを持つて、現在借りてはゐるが殆ど寢に歸らなかつた Lindwurm Str. 廿五番地の四階に行つて、今夜ぢゆうこの藥を焚くやうに上さんに依賴して置いた。これは、どうしても他所に部屋がないなら、南京蟲を退治して置いて此處に住まうといふ計畫なの

である。それから、日本媼のところに來ると、Isvaringstr. の三十一番地に部屋が一つあるといふので見に行つた。部屋は申分なく、教室も直ぐ近くであり、南京蟲のゐない事も確からしいが、價段が部屋代だけで邦貨に換算して一日三圓にかかゝるので借りることを止めた。今夜は、N君と共に活動寫眞を見、日本媼の所に寢た。

九月三日。月曜。午前中教室に行き、午食のついでに、Mozart Str. 七番地に部屋を見に行き、午食後日本媼のところに寄ると、また數通の間貸の郵便が届いてゐた。それから、きのふ大體約束して置いた Mair のところの娘が今夜是非來るやうにといふ母の言傳を以て訪ねて居た。眠くて溜らぬのを我慢し、日本の茶などを媼から入れて貰つて飲み、それから夕方まで教室にゐて、今日は新しい部屋に試さうといふことを媼に話して、夕食して行つた。けふは誰も連がなく寂しく食事したが、夕刊で日本大地震の記事を讀んだ。

それから、Mair のところに行つた。部屋も床も綺麗に掃除がしてあり、卓のうへには讀物なども置いて呉れてあつた。家族のものは此部屋を私に貸して手狭いところに移つたらしい。私は日本の事が氣になつてならぬが、も少し委しい通信を讀んでから事を極めようなどと思ひ、持つて來た小さい座布團を床上に置き、うへに腰をおろして兩足を牀上に延ばした。靴をぬいでくつろぐと實に久しぶりで靜かな氣持になるのであつた。

さうして置いて、新聞の夕刊を讀みかへすと、地震はどうしても大きな事件である。東京・横濱・伊東・湘南一帶が全く破壞されて第一通信だけでも東京の死人が十萬を超えたと註してある。部屋の掛時計は餘韻を引いて十時を報じた。

夜半過ぎから度々眼を醒ましたけれども南京蟲は襲つて來ない。私は感謝と不安と危懼と實に複雜した氣持を經驗しながら夢とも現ともなしに曉に及んだ。然るにいまいましいではないか、曉になつて遂にまた手の甲と咽のところを南京蟲に螫はれたことを知つた。いまいましくて溜まらない。

九月四日。五十萬麻克やつて、もう一兩日待つてくれるやうに談合すると、あのやさしい上さんは、借手が幾人も附いてゐるから待てないといふ。さうか、そんならいゝ。といつて百萬麻克おいて其處を立つた。朝食をせずに日本媼のところに行く途中、N君に會つた。N君も日本の地震を心配して朝食もせずに日本媼のところに來たのである。二人は近所で朝食をし、日本のことを談りあつた。

日本媼のところに、部屋を貸したいといふ人が數人たづねて來てゐた。そこで其等の部屋を見まはり、Dachauer Str. 廿六番地。Kinders Str. 六番地と廻つて、Thorwaldsen Str. 六番地に落付くことに

極めた。なぜ極めたかといふに、ここは教室から遠くて不便であるが、新市街地で南京蟲がゐない。Sさんといふ日本人夫婦が住んで居り、間代の値上げのことで餘り亂暴をいふから引越したと云ふ部屋であつて、南京蟲のゐないことは確實である。

不便なところだが、住宅地だから寂しいくらゐ靜かな處である。窓外は直ぐ庭に出られるやうになつてゐる。私は九月六日に其處に引越して、十二月十五日ふたたび日本媼の處に厄介になるまでゐた。その間、教室の近くの貸間をいろいろ心掛けて捜したのであつたけれども、南京蟲を恐れて引越さずにしまつた。

私は志を抱いて維也納からミュンヘンに轉學した當時は、部屋を得るに困難なこと如是であつた。但し是は貧しい留學生の私を標準としての有樣である。豪奢の身分者にとつては、縱ひミュンヘンと雖決して事を缺かせるやうなことはないのである。

3　日本大地震

西暦一九二三年九月三日。うすら寒く、朝から細かい雨が降つた。日の暮に Spatenbräu 食堂の隅の方に行つてひとり寂しく夕餐をした。七月十九日にミュンヘンに著いて以來、教室では殆ど休なく爲事を勵んだのであつたが、いまだに自ら住むべき部屋が極まらない、極まりかけては南京蟲に襲はれ襲はれしていまだに極まらずにゐる。それも教室の方の爲事を休んで部屋を捜すのではないのは、つまり教室の方は縱ひ一日の半隙をも惜しむがためであつた。けふも新聞の廣告で見當を附けておいた數軒の部屋を見まはり、今夜は Klenze Str. 三十番地の部屋に試泊りして蟲の襲撃を試すつもりである。

いつもなら二人の同胞がゐて食事を共にするのであるが、けふは都合があつたと見えて誰も來ない。まるい肥えさうな顏をした娘が半立突の麦酒を運んで來て、しきりに愛想を云ふ。『ドクトルまだ結婚をしたこと無い？』などといふことをいふ。『まだ無いね』などといふ。『けれど、支那では十三四でもう結婚すると云ふぢやない？』『それは百姓どものことだ、僕のやうな學者は矢張り結婚はなかなかしないものだ』『さういふものなの？』『どうだ、結婚をして日本へ行くか、Fr Jijama の國へ連れていからうか』『え、行きたいわ』などといふ會話をしたりする。さうすると幾らか氣の晴れるのを覺えるのであつた。

そこに夕刊の新聞賣が來たので二通りばかりの新聞を買ひ、もう半立突の麦酒を取寄せて新聞を讀むに、伊太利と希臘とが緊張した狀態にあることを報じたその次に、,,Die Erdbebenkatastrophe in Japan'' と題して日本震災のことを報じてゐる。

新聞の報告は皆殆ど同一であつた。上海特報に據ると、地震は九月

一日の早朝に起り、東京横濱の住民は十萬人死んだ。東京の砲兵工廠は空中に舞上り、數千の職工が死んだ。熱海・伊東の町は全くなくなつた。富士山の頂が飛び、大島は海中に沒した。云々である。

私は暫く息を屏めて是等の文句を讀んだが、どうも現實の出來事のやうた氣がしたい。併し私は急いで其處を出で、新しく間借しようとする家に行つた。部屋は綺麗に調へてあつたので私は牀上に新聞紙と座布團とを敷き尻をぺたりとおろした。それから二たび新聞の日本震災記事を讀むに、これは容易ならぬことである。私の意識はやうやく家族の身上に移つて行つた。不安と驚愕とか次第に私の心を領するやうになつて來る。私は眠藥を服して床上に身を横へた。

曉になり南京虫に襲はれこの部屋も不幸にして私の居間と極めることが出來なかつた。九月四日の朝、朝食もせず其處を出て日本媼のところに行く途中N君に會つた。N君も日本の事か心配で溜まらぬのでやはり朝食もせずに日本媼のところに來た途中なのであつた。N君の持つてゐるけふの朝刊新聞の記事を讀むと、きのふの夕刊よりも稍委しく出てゐる。コレア丸からの無線電報に據るに、東京は既に戒嚴令が敷かれて戰時狀態に入つた。横濱の住民二十萬は住む家なく食ふ食がない。ロイテル電報は報じて云。東京は猛火に包れ殆ど灰燼に歸してしまつた。紐育電報が報じて云。大統領 Coolidge は日本の Kaiser へ見舞の電報を打つた。それから與ふかぎり日本の震災を救助する目的で直ちに旅順港にゐる米國分艦隊をして日本へ發航せしめた。また、上海投錨中の英國甲鐵艦 Despatch 號も既に日本へ向つて出帆した。なほ、日本の地震はミュンヘンの地震計に感應し、朝の四時十一分頃から始まり五時少し前に最も強く感應した。云々

二人は近くの珈琲店で簡單に朝食を濟まし、日本媼のところに止宿してゐる二人の同胞と故郷のことを話合つた。私も部屋のことで斯う悤悤悤悤してゐてはならぬと思ひ、けふも數軒部屋を見、遠くて不便であるが一間借りるやうに決心した。私はけふはもう教室に行く勇氣はなかつた。夕刊を讀むと日本震災の慘害はますますひどい。私等は何事も手に附かず、夕食後三人して麥酒を飲みに行つた。酒の勢を借りてせめて不安の念を輕くしようとしたのであつた。

九月五日。日本の慘事は非常である。部屋の中に沈默してゐても何事も手に附かない。九月六日。思切つて、Thorwaldsen Str. 六番地に引越してしまつた。ここには南京蟲は居なかつた。教室まで遠くて不便であるが、日本の狀態がこんなであつて見れば、私自身今後どう身を所決せねばならんか今のところ全く不明である。そこでせめて南京蟲のゐない處に落付かうと決心したのであつた。

けふは、もう日本震災のための死者は五十萬と註してあつた。大小

の消火山は二たび活動を始め、東京・横濱・深川・千住・横須賀・淺草・神田・本郷・下谷・熱海・御殿場・箱根は全く滅亡してしまつた。政府は一部京都一部大阪に移つた。東京は今なほ火焔の海の中にある。首相も死に、大臣の數人も死んだ。たゞ宮城の損害が比較的少く避難民のために既に宮城を開放した。佛蘭西大使館、伊太利大使館は全く破壞した。帝室博物館、二大劇場、帝國大學、日本銀行、停車場等も潰滅に歸し、電報電信の途は全く杜絶してしまつた。云々。

次の日も、次の日も、教室に行く氣にはなれない。部屋に籠つて自分の所持品などを整理しようとしても直ぐ疲れた。併し飯くひに街頭に出ると、食店にゐる客などが態々私のゐる卓のところまで來て震災の見舞を云つて呉れた。ある時には、途中で行過がつた脊嚢を負うた一人の老翁がまた戻つて來て、私を呼止めて見舞の言葉を云つて呉れたりした。日本からの直接通信が始めて英京倫敦に屆いたといふのが新聞に出たが、それを讀むと前に讀んだ間接通信の記事内容よりももつと深刻であつた。また民衆と軍隊との衝突があり、朝鮮人と軍隊との市街戰が報じられてあり、新首相山本權兵衞子爵に對する暗殺企圖、數名の大臣の死亡なども報じられてあり、五十萬の人間と、五億ポンドの財產とが消失されたことを記してあつた。

さういふミュンヘン新聞の手がかり以外に、伯林の友人からも何處からも何等事件の眞相を知るべき手がかりが全く杜絶してしまつてゐる。夜はよく眠れず、明がたになつてとろとろとしたかと思ふとしきりに夢などを視た。夢では、妻のやうな恰好をし、妻か誰か分らぬ一人の女と、一人の童子とが瓦のうへに座つてゐる。それが向うを向いて居り、こちらで幾ら呼んでも依然として向うを向いてゐる。それで夢が醒めてしまつたりする。ある夜、麥酒に醉つて歸つて來て寢た。さうするともうもうと火焔の騰いて居る光景を夢に視たりした。私は或時には、東京の家族も友人も皆駄目だと觀念したこともある。

或日、朝からN君を訪ねて、二人して當もなく街上を歩いた。とある廣場の古物商に能の面が二つばかり並べてある。この古物商には不思議にも日本物が並べてあるので、鎧があり、扇子があり、漆器があり、花瓶があり、根付があり、能衣裳などもある。これは戰後に土地の人が賣拂つたものに相違ない。N君はどう思つたか、歯を黑く染めた女の能面を一つ買つた。二人は街を歩いて行つて Isar 川の橋を渡り、川原に下りて行つた。N君の家は東京の郊外にあるから、これはどうにか損害を蒙らずにゐるらしい。併し親戚知己は幾人も東京の殷賑區域内に住んでゐる。それらの人々は到底駄目だらうといふことを話しあふ。二人は土手を上つて行つて麥酒を飲んだ、醉つて幾らか憂を散じてまた二人は川原の方に下りて行つた。川原には川柳の一め

んに生えてゐるところがある。そこに五六の頑童の遊んでゐるけはひがしてゐたが、突如として、Chinese! と叫んで柳のかげに隱れる。また、Chinese! と叫ぶ。『支那人!』と叫ぶのは輕蔑して調戲ふつもりなのである。

N君はその能面をかぶり、川原で踊つた。能舞の樣式を知つてゐるではなし、さればとて、Platzl で見るやうな、バヴアリア民間舞踊の恰好でもないが、日本震災のための不安動搖の心理は、N君にそんなことをさせたのであつた。さうして逃げていつた童子等も其處に戻つて來て、笑ひころげてそれを見てゐる。そんなことなどもあつた。そして一日一日が暮れて行つた。通信は全く絶え、たまたま配達された故郷からの書信を讀むと、極く平安事なきもので、何の役にも立たぬものである。私等は或日には日本飯を焚いて食つた。それに生卵をかけ、大根などを買つて來てむさぼり食つたりしたのである。

日本の知人の顏などが時に眼前に浮んでくるが、その人々の中にはもう死んでゐるものもあるだらうといふ一種悲痛の心持が附帶してゐる。さういふ寫象のうちには今どき小學校に通つてゐた節の長男の顏なども浮んでくる。それから私みづからの近き未來の運命のことなどが意識の上にのぼつてくる。しまひにはさういふ意識のなかに自ら誑つてしまつたせゐであらうか、日本軍艦數隻が沈沒し、伊豆の大島が滅して半島の近くに新しい島が出來、神聖江の島が全く無くなつてしまつたといふ、さういふことなどは餘り氣にせぬやうになつた。

九月十日ごろN君のところに故郷の家族無事といふ電報が屆いた。電文は『チシンヒドイブジ』としてあつた。なか二三日おいて十三日の夕がた私のところに、伯林のM君から電報が屆いた。電報は folgendes telegramm aus Japan erhalten „your family friends safe" = Mayeda としてある。

家族も友人も無事といふ英文電報の方は、神戸から中村豐吉君がおうやうの事で打つてくれたのが、伯林大使館に屆き、毎日毎日情報を開きに押懸けてゐた私の友の一人が澤山の電報の中から其を見付けてM君に知らせたから、M君は獨逸文を少し附加して至急報で打つてくれたのであつた。私は一人で麥酒を飲みに行き、勞働者等のわよめく音響の側に、齒の鈍痛のやうやく薄らいだやうな氣持でゐて歸つて來た。

翌日朝食の後、買物をした。教室で使ふ色素、轆轤、ナフタリン、石鹼、揮發油、靴下、針と糸などを買ひ、途中でトランク一つの代價をねると娘店員が來て、zwei milliarden dreimal hundert millionen Mark と云つた。これは二十三億馬克のことである。

次の日教室に行き教授に會つて大體日本地震の有樣を報告し電報の

ことをも話した。教授も助手も研究生も標本係の女も非常に喜んで呉れた。その日教授は私を自分の部屋に呼び、『もう率直にいひますが、それでは研究費として毎月英國貨四磅づつ拂つて下さい』と云つた。

それから私は教室の爲事をどうしても急がねばならぬと決心して、連日教室に通つた。九月の末といふに街路樹の葉が黄色になつて落ち、日本晩秋のやうな氣持の時もあつた。獨逸の状態がだんだん惡くなり、爲替相場も急轉して下つた。九月廿七日には十四ばかり行はれる筈の國民黨の集會が禁ぜられ、集會所や大きな麥酒店をば軍隊と警官とで嚴しく閉めたこともあつた。Hofbräu のやうなあんな盛な麥酒店でもその三階は十月半ばには既に閉鎖したほどであつた。

十月十四日にはじめて大阪毎日新聞九月三日の號外を手に入れ皆頭を集めて讀んだ。『東京全市焦土と化す』といふ大きな見出しがあり、碓氷峠から東京の空が赤く焦げてゐるのが見えるとも書いてある。これは想像よりもまだまだ悲慘である。十五日には大阪のO君から大阪朝日新聞の週報を受取り、廿一日には參謀本部附のK少佐から大阪朝日新聞を借りて讀んだ。深川の陸軍糧秣廠の廣場で何十萬の人の死んだ所や、兩國の橋の墜ちた所などを讀んだ。どうも息がつまるやうである。三面の方には、佐渡まで歸らうとしてやうやく長野市の停車場まで落延びて來たひとりの女を見るに、自分の髮の毛が全く焼け焦げ背には焼死んだ子を一人負つてゐるといふ記事などもあつた。

そのうち東京の家から手紙があつて、しきりに歸國を要求して來…ゐた。ミュンヘンも追々寒くなり町には毎日霧がかかるやうにな…た。Hitler 事件といふのもその間にあつた。獨逸の新人新聞にも、…骸が山のやうに積まれてある日本震災の慘状が載るやうになり、…には吉原で焼死んだ遊女の死骸を三列ばかりにして並べて、其處に…官がひとり立つてゐる寫眞を載せ、これは本國の日本で既に發狂…になつたものだと記したことなどもある。さうして日一日と落ち…ゐる間に私は決斷して當分ミュンヘンに止まらうと思ひ、東京の親…い友に金を借ることを頼んだりした。

十二月十三日になつて『大正大震災大火災』といふ雑誌を借り、…に身ぶるひするやうな大地震の有樣を讀んだ。その中に幸田露伴の…話があつたが、私はその中の一二節をば手帳に書取つた。

○そこで一言を人々に贈らうと思ふ。おもへば言葉は甲斐ないも…である。千百の言葉は一團の飯にも及ばず、娓々の言は滴々の水に…如かぬ場合である。けれども今の自分の此の言葉は言葉とのみでは…い。直ちに是自分の心である。○そこで假令美酒爛燈の間にゐて…歡樂に一時の自分を慰めてゐても、何處かにこれを是認せぬものが…る。つまり心が一つでなくて、二つになつてゐる。人といふものは…

氣あれば即ち病む、といふ古い支那の諺にある通り（中略）宜しく膽を張り氣を壯んにし、飲食を適宜にし、運動を怠らずして、無所畏心に安住すべきである。○宗教上の信仰を有する人は、かゝる時こそ宗教の加護を受くべきである。觀音の額には無所畏の三字が示してあるではないか。不動尊は不動經に、我は衆生心中に住すと說いてあるではないか。（中略）神佛に人ををのかすものはない。皆各其大威力大慈力によりて人々に無所畏を得しむるものである。まして無神無佛の徒は既に神を無みし佛を無みするだけの偉いものであるから、夢にも恐怖心などに囚はれてはならぬ。云々。

私は實に久しぶりで露伴の言に接したのである。そして獨逸語で頭を痛めてゐる自分には、是等の言葉はすらすらと私の心に這入つて來た、のみならず翁の持つ一つの語氣が少年以來の私に或る親しみを持たせるのであつた。カアル・マルクスの『宗教は國民の阿片である』（Religion ist das Opium des Volks）といふ西暦一八四四年の言葉が、西暦一九一七年の露國革命の際に、彼のグレコが聖母の像と相對した壁面上に書かれたといふ。これは莫斯科の出來事で、レニンなどが主になつてあゝいふことをやつた。レニンは、„Die Religion ist Opium für das Volk“と書いて、さて、宗教といふものは下等なフーゼル酒のやうたものだ。資本の奴隷どもは、漸く眞人間の仲間入をしようとする權利を得たから、半途にしてこの宗教といふ下等な火酒の中に溺沒してしまふのである。とさへ罵つてゐる。近ごろ讀んだああいふレニンの言葉に較べると、「無神無佛の徒は既に神を無みし佛を無みするだけの」云々といふ幸田露伴の言葉には、少しもそこに反語がないところに露伴の面目がある。レニンのものの如くに、intention とか revolutionär とか謂ふ臭氣がまつはつてゐない。そんな事を私は一人ゐながら思つた。レニンの病氣もその後惡いさうだが、追つかけ死ぬだらう。臨終の近くに誰かかどういふ言葉かを掛けるだらう。それが所謂、希臘加特利教の儀式の代辯ならつまらぬなどとも私は思つた。

十二月十四日に宿の上さんに轉宿のことを話し、翌十五日に日本畫のところに引越して來た。その晩に將棊を差したが、駒も盤も大體の留學生が置いて行つたものであつた。戰時中、老孃の一家がいまのところに引越して來たにも拘はらず將棊の如き、かういふ品物を無くさずに持つてゐたのであつた。

大正三年に大戰が勃發し、留學生どもは逃げたのであるが、大正十一年の一月に私が伯林に着いてミユンヘンの事情をさぐると當時ミユンヘンは唯ひとりの日本人が特別の許可を得て研究してゐるに過ぎず、こゝへの入國は嚴重で出來なかつたのである。その七八年の間留

琴の絃を鳴らさずにゐたのは私にはおもしろい。私はここに寄寓しておのづと大地震に對する懺悔の念を籠めて行かうと思つたのであつた。

4 イーサル川

イーサル川は南の方のアルプス山中から出て、北へ向つて流れてゐる。分水嶺は既に獨逸の國境を越して墺太利の領分になつてゐるので、さう手易く其處を極めることは出來ないやうである。川の沿岸には、Tölz, München, Landshut, Landau などの町があり、ミュンヘンはそのうちで一番大きい。川は道を稍東の方に取つて、Degendorf の近くに來てドナウに注入る。Tölz からもつと水上に Lenggries といふ一小邑があり、眺めのいゝ城がある。Hohenburg の城といふのはそれである。

ドナウの流れは「藍のドウナウ」と謂ふが、ここは、「緑のイーサル」である。紺碧と云ふから同じやうなものだが、ちよつと違ふところがある。„Solang die grüne Isar, durch's münch'ner Städt'el geht." といふ古い歌謡の一句は、ミュンヘンの市民が麥酒に醉うてうたふので何時の間にか私もおぼえたのであつた。

私は西暦一九二三年の夏にこの土地に來、翌年の夏までゐたので、屢々この川に親しみ、心に憤怒があり、心に違和があるときには、いつも私はひとりこの川べりに來て時を消すことをしてゐた。

ここに來て間もなく日本大地震の報に接し、前途が暗澹としてゐた時にも私はよくこの川原に來た。また氣候が暑いので、若者に童子を交へて泳ぎ、寒くなると砂原に焚火をしてあたつて居る。そこから少し離れたところに少女の一組が泳ぎ、中にはもう體の定まつたのも居り、稍肥を帶びた形をして水から上がつて來たりして居る。川は概して急流であるが、流が緩慢のところがあり、さういふところを尋ねて彼等は泳いで居る。ここの川にも矢張り支流があつて、流れ込む有樣が見えてゐる。流の岸は人造石の堤防で固めてゐるので、水は割合に激せずに流れるのであるが、それでもその堤防の損した處がところどころにある。これは恐らく春の雪解の季節に洪水のする證據であらう。長い木の橋が掛かつてゐたりして、そこを大勢の人が往來してゐる。これは日曜の散策であるがこゝの住民は、維也納などに比して都雅でなく、山國の趣が拔けないやうに見える。

ある日、友人の家で日本飯を焚いてもらひ、それに生卵をかけ大根に醬油を附けながら食つた。滿腹してここの川原に來るといゝ氣持である。川原には砂原の上に川柳の一めんに生えたところがある。豌豆のやうな花の咲いた細かい草などもある。向うの土手のところに山羊の

一群が居り、少女ひとりが鵞鳥の一群を遊ばせてゐたりする。生れ故郷の日本のやうに、蟬のこゑも聞こえず、きりぎりすのやうな夏の昆蟲も聞こえない。かういふ靜かな川原の柳の木蔭に、潜むやうにして私がゐると、『支那人！』かう突然こゑがして、ひとりの童子が向うの柳のかげに隱れたりする。かういふ光景はドナウの沿岸には經驗しなかつた。

また、或る夏の暑い日曜にここの川原を歩くと童幼が砂をいぢつて遊んでゐる。一人の小さい男の子が急がし相に私の傍に來て何か言ふ。が、私にはちつとも分からない。私は三度も四度も問返して辛うじて意味だけが分かつた。『ぼくの妹の靴紐が長過ぎますから、切つてやらうとおもひます。小刀を持つて居りませんか。』かういふのであつた。私が非常に骨折つて理解した獨逸語は如是のものに過ぎぬ。いま當時の日記を檢するに、これは九月二十三日のことで、『嗚呼、言葉はむづかし』と書いてある。

また或日、この川に掛かつてゐる町中の橋の上に立つて、急湍のさかまくのを見てゐた。それから橋を渡つて木立の中から水際に下りて行き、二時間ばかり水を見てゐた。太陽が傾いたので飛沫のうちに虹が暫く立つたりする。イーザル川が二わかれして、その中に此處の木立がある。木立の中には今は誰もゐず、ある數學者の銅像が一つある。私はゆうべ見たヒマラヤ山中の活動寫眞の光景などを思浮べ、しきりに眠氣を催すのであつた。二わかれした向うの流の方には釣してゐる者が五六人ゐる。市場で買へば手取速く濟むのに、氣長に釣つてゐるところは、東洋國の風習とちつとも變りはない。何向き、市街の眞中にかういふ河水の怒濤を見るのは氣味がいゝと思ふ。

ある日、輕い頭痛がして川原を歩いてゐると、出て來た雲が見る見るうちに險しくなつて來、むかうに鳴つてゐた雷が急速度に強まる氣配がしたから、兎に角土手の方へ急いだ。川原にゐた老若男女も慌しく驅歩などをするので、これは降るかも知れんといふ氣がしてゐるうちに、もう大滴の雨が落ちて來た。雷が既に頭のうへに來て鳴るので、爲方がない、差向かうに見える記念塔のやうなところまで驅出した。合著の服をだいぶ濡らしてそこまで辿りつくと、土地の人で一ぱいである。そのうち川原も川向うの市街も見界が付かぬばかりに打けむつて、銀線のやうな雷雨が降つた。雨やどりしてゐる男女老若は笑談などを云ひ云ひ、一歩も動くことが出來ずに居る。そして口ひげの長い爺などが隣の娘に何かいへば皆がどうつと笑つたりする。どこの國土でも同じい戀愛か何ぞの言葉であらうが、黄色人種の私ひとりが身動きも出來ずにしばらくさういふ氣分の中にゐるのも亦一つの情趣である。三十分も經つたころは、もう向うの空にはけろり

とした按排に瑠璃色のところが見え出して居る、さういふこともあつた。これも維也納などにはめづらしい。

そのうち追々氣候が寒くなつて行つた。十月廿一日、廣い森林を拔けて川上の方に行つたときには、廣い葉の並木はしきりに落葉し、さういふ散しいた落葉を踏んで私どもが歩いて行つた。林中には茸が生ひ茂つて、その木下には茸の群生した所もあつた。そこを通拔けると、紅葉して黄色く明るくなつた林を透して深い谿間が見える、その谿間をイーサルの川が流れてゐるのである。川は紺碧になつて川原をつくつて流れてゐる。谿間を隔てて向うは二たび一つの高原を形成してゐる。高原は一めんに紅葉し、靜かな家がそこここに散在してゐる。見おろして見てゐるイーサル川は如何にも寂しい。途中で麥酒を飲み、そこを出たときにはもう對岸の家に燈火がついてゐた。途中で連れになつた獨逸人があるところまで來ると、對岸の一つの家のあたりを指して、ルウデンドルフ將軍はあのへんに居ります。と教へて呉れた。イーサル川は、かういふ斷崖の間をも流れるのである。

十月廿八日、けふも一人で『綠の森』と謂ふ方に行つた。今朝、靴下、越中褌などの洗濯をし、下半身を冷水で洗つた。心が平衡を得てゐるやうでもあり、不安なやうでもある。地震のため、いまの留學を棄てて歸國せねばならぬとして、陸路を取るにせよ海路を取るにせよ千圓はかかるのである。そんならその旅費だけの分をミュンヘンに踏留まつて勉强しようか。と、斯う心を極めたのであつた。心が平衡を得たやうに思ふのはそのためであつただらうか。林をいで、散り敷いた落葉のうへに來て憩ふともなく憩ふに早くも眠氣を催したので頭を垂れたまゝ半時ばかりの假寐をした。國民黨の旗を立てて多勢の遠足隊が私の前を通つたのをも半眠のやうな狀態で意識してゐた。身に寒氣して目が醒め、それからイーサルの川の方に下りて行つた。此處に來るとまた別樣に寂しい。私から少し離れたところに童子がゐてしきりに谺を起してゐる。童子が、ハルロー！といふと、それが五つも六つもの谺になつて遙かの方に消える。童子が、イイヤー、ホホー！といふ。谺が消えてしまふとまた其を繰返す。童子の聲は澄んで清い、そして或る節奏を持つた間を置いてそれを繰返してゐる。私は、自分が歐羅巴に來てゐることを確然と意識せざることを得なかつた。

そこを去つて川上の方に行くに、林中から湧いた泉が流になつてそそぐところがある。そこに二人の童子が一人の守に連れられて遊んでゐた。そこを通過ぎようとすると、一人の童子が來て、時計はもう幾時でせう？といふことを訊いた。守の方は十六七歲にもならうか、可哀らしい顏をしてゐるので私はいろいろ話をして見ようとして近づいた。然るに童子のなれなれしく振舞ふに似ず、守の娘は決して私に狎

惜しむことをしない。私が數語を以て問へば數語を以て答へるのみで微笑することすらもしない。この地の處女に如是の躾もあることを思ひ、興あることに思つたので、挨拶をして其處を去つた。年ごろの處女は縱ひ異國人種の間柄でなくともこれだけの儀容は保つのであつた。

氣候が寒く、その間に Hitler の騷擾があつたりして、川べりにも來ずにゐた。年の暮になり日本の留學生と議論して憤怒したときにも川べりに來たのであつたが、その時には川原は一めんの雪で蔽はれ、私は川原におりて行かずにしまつた。

寒い冬に閉ぢられ、慌しく日を送つてゐるうちいつか春になつた。雪が解け、草が萠え、そして日光の美しい五月が來た。五月十一日の日曜に久しぶりに川べりに來ると、對岸の町に市が立つてゐる。いろいろ價の廉い日用品、食料品を商ふ市で、主に勞働階級の者を相手にしてゐるやうである。川魚を大盥にして賣つてゐたり、着類の古着などは幾組もある。鉛筆のきずもの、刄物類を山のやうに積んで賣つてゐたが、この中で私は大根卸を一つ買つた。瀨戸物のところに行つたとき、瀨戸でこしらへた日本娘が三とほりばかりある、それを私は買つた。安芝居があり、人形芝居がある。人形芝居は見料は客の自由で、兒童は無料だから、幕のなかは兒童で充滿してゐる。大蛇などが出て來て頭の禿げた猶太人を冷かすところをやると、兒童らは大ご…

をあげて、アア！ などといふのでひどく愉快である。勞働者達も…

ふは日曜なので帽も服も他所行のを着、なかには男の子を肩車にし…

て、妻を連れて歩いてゐるのなどもある。路傍に立つて心靈術の…

を賣つてゐるのにも勞働者等がたかつてゐる。心靈者は髮を長くし…

て、時々醫學上の術語を使つたりしてこれも甚だ愉快である。私は…

の市で婦人のかぶる頭巾地を三四枚買つた。これは山村の女のかぶ…

ものだが、日本の風呂敷になるのである。そのなかには太陽の光を…

樣にしたやうな圖案などもあつた。五月十八日の日曜も同じやうに…

が立つた。盛な人出で驢馬に兒童を乘せるところなどは一ぱいにた…

てゐた。安息日の日曜に商賣の市の立つのも私には面白かつた。維…

納ならば Messe のやうな大きな市を除き、それから、[illegible] のや…

た遊び場所を除けば、日曜に働くのは猶太族の仕業たくらゐにも…

のであつた。

五月廿五日、川べりを歩いてくると植木屋がある。なかには日本…

躑躅の花を咲かせ、芍藥、石竹のたぐひを植ゑてゐる。楓の類が多く…

び、ぼけの木があり、あやめがある。これは個人の經營だが私には…

はり心を引くものがあつた。雨が降つて來たので傘をさしていつま…

も園中を逍遙したが、芭蕉・蕪村の趣味から行けば、晩春・初夏…

品といふべきである。私は秘かに思うたに、この經營者の趣味は、戰前からの惰勢ではあるまいか。戰前には多くの日本留學生が此地に居り、日本飯を焚き、牛肉の鋤燒をし、窓前に紅い宿葉の楓盆栽をおいて、端唄淨瑠璃を謠つたその名殘ではあるまいか。

六月一日、Spetech といふ民顯の圖書館員と共に汽車でイーサルに沿うて溯つた。けふの午前には在獨邦人の記念儀式があつたので、それを見てそれが終つてから汽車に乘つた。汽車で暫く來て下車 Penhausen といふところに來た。ここのイーサル川は川下よりも川幅が廣く、人々が短艇を漕いで遊んだりして居る。さう暑くもないのに泳ぐものがゐる。支那人二人が一人の獨逸女と連立つて私等のまへを行くが、いゝ獨逸語を使つてゐた。川の水は此處は少しく白く濁つてゐる。近くに僧院があり、そこに多くの少年が教成されてゐる。その少年の誦經するところなども見たのであつた。Spaten 君は麥酒を好み、私も敢て辭せぬので二人はいゝ心地になるまで飲んだ。けふの遊はイーサル川に來た最後の日になつた。

私は一度、Tölz に行かうと思ひつつ遂にその念願を果さずにしまつた。Tölz はイーサル川の上流にある町で、沃度・曹達・硫黄を含んだ鑛泉が湧くために一つの浴泉地になつてゐる。私は此處のイーサル川の美しい有樣を繪葉書で見て時々夢想を馳せたのであつたが、私の生涯のうちにはそれが出來なくなつてしまつたのである。けれども私は滿一ヶ年のミュンヘン滯在中、この川が私を慰め、私の心を靜かにして呉れたこと幾何であつたか知れぬといふことを云はうとして少しく日記を抄したのである。

蘇峯自叙傳（追憶記）

蘇峯　德富猪一郎

第二十六　予の結婚

予が明治十七年高知から京阪、東京遊歴中に、予の一身にとつて重大なる出來事があつた。これは予の留守中に予の兩親が予の妻を迎へたる事であつた。花聟無しの結婚などは、世界に比類少き例であるが、予は偶然にもその例に廻り合せた。併し斷つておくがこれは予の兩親の專斷ではない。兩親は正しく予の委任したる所を遂行したる迄であつた。

× × ×

扨も予が東京から明治十三年歸郷後は、予も又た父と共に、時としては父に代つて家政に關係する事となり、從つて明治十六年家督相續をし、父は隱居となつた。つまり吾家には隱居が二人出來たわけだ、祖父は水俣に隱居し、父は予と同居して隱居してゐた。家督相續と同時に結婚は必然の問題となつた。

× × ×

予は結婚に就いて別に一個の見識があつたと云はぬが、併し予が同志社に居る頃、予の先輩の或る人々は可成り結婚問題に惱まされ、これが爲に物議を惹した事もあつた。されば予は初から結婚に就いては餘り多きを望まず、これを寧ろ運命に一任せんと決心した。そは如何に手を代へ、品を代へ、良き配偶者を得んとしても、その得たるものが案外なる失敗に終りたる例もあり、又た無頓着にて結婚したる者が案外に成功したるものも

あり、何れにしてもこれは人力よりも天運でありと諦めたから、已に天運であれば左程心配するのは徒勞であると考へ、一切これを人手に任すことゝした。人手と云ふが先づ兩親に任するより外はないと考へた。

× × ×

斯く考ふるに就いても、多少の理由が無い事はなかつた。と云ふは、當時予は親類、緣家には餘り評判よき漢ではなかつた。予の行狀と歟、予の品行と歟、予の性格と歟と云ふものに就いて、左程非難を蒙る可しとは思はなかつたが、予が家政を改革し、從來親類、緣家に對する態度を一變し、世間の交際の樣式に頓着せず、どんどんやりつけたるを見て、予を變人、奇物と見るはまだしも、『困つた者である』と思ふ者も尠くなかつた。左樣なる者に自家の最愛の娘をやらうと云ふ者も多くはあるまじく、又た左樣な者に自ら嫁んとする者もあるまじく。されば種々の選り好みをなしたとて、とても思ふ樣にも參らぬであらうと諦めたから、寧ろ吾より頓首再拜して貰ふ嫁よりも、相手方より喜んで呉るゝ者を貰ひ受くるに如かずと考へたのであつた。



明治十七年東京遊歷中の蘇峰氏（後列向つて右より二人目）

されば予は何等選擇の標準も兩親に告げず、一切を一任した。兩親は彼是諸方を當つた。又た中には予にその娘を呉れんと云ふ人もあり、或は萬々一には予の家若くは予に嫁せんとする者も、絕無と迄は斷言が出來なかつたかも知れぬが、それは予が知る所でもなく、又た關する所でもない。予は只だ兩親に一任したのだ。

兩親は何等面倒もなく、父の親友にして、且つ予の隣家とは云はざるも、殆んどそれに類したる、先づ一哩位を隔てたる、隣村の倉園又三氏の女ツル子を選定した。別に媒酌があるでもなく、父が向う方に赴き、云々の話をなし、それにて直ちに纏つたと云ふことだ。斯くて善は急げとて、予の留守中に向う方の父がその女を伴ひ、吾家に來りて、此にその式を舉げたが、その時に立合つたのは、横井の叔母であつたと云ふことだ。結婚の入費は幾何であつた乎、しかと聴かぬが、酒が一合、肴が若干と云ふ位で、手輕と云へばこれ以上の手輕はあるまい。

× × ×

斯くて予が留守中に父は予の妻たるべき女を伴ひ水俣に赴き、予の祖父にも面會せしめ、親類等にも披露した。斯くて予が東京から歸へるさに、父の書齋に婦人の讀書の聲が聞えるから、何やらんと思うたら、父が予の妻たるべき者に四書の素讀を授けつゝあつたのだ。歸來取敢へず『これがお前の妻であり、これがお前の夫であり』と兩親に紹介され、それから約半歳後に同棲する事となつた。

× × ×

而して嫁入りなども世間流の形式をはづし、友人二三と共に倉園家に赴き、予の舅が自ら釣り來りたる鰻の馳走になつて、それで一切を終うた。

倉園氏は舊藩政の末には、先づ熊本藩の大藏大臣であり、予の父は内務大臣の役を勤め、それから縣政になつても、當座は同僚として相勤め、安岡氏が縣令となつて來るに至り、又た相共に職を辭したるものであつた。予も父の友として倉園氏をよく知つてゐるし、又た妻の兄は大江義塾の創立後間もなく入門してゐたから、予は妻とは相見なかつたが、妻の家及び妻の父兄とは親しかつた。されば相見ても別に何ら珍らしき事もなく。爾來予が妻は今日まで予にとつて、缺くべからざる伴侶としてゐる。しかも右の次第であつたから、予の妻と予の父母とは頗る相得て居た。妻が餘りに予の母と仲が良いものであるから、妻を家女である乎の如くに考へ、

『お宅の旦那は御養子でありますか』

などと、途方もない質問を、母に向つて發した者さへあつた。予は全く盲目籤を引いたのであるが、先づ引き當てたと云つてもよからう。

清白祖風今尚存。　齊家最賴孟光賢。
半生自覺饒天惠。　形影相依三十年。

而して今や更らに四十餘年となり、金婚式も、餘りに遠くはない。

第二十七　祖父の永眠までに辿り來つた

これと同時に猶ほ記すべき事は明治十八年七月、予の祖父が沒した事だ。急病の報に接し、父と予は二十五里の道を心ばかり馳せつゝ、小さき和船にて急いだが、到着の時は既に間に合はなかつた。祖父は八十九歳にて永眠する數日前までは、猶ほ日記をつけてゐた。祖父の死は種々の意味に於て予の一家に變化を及した。予は祖父より多大の信用を得、大江義塾增築などの際には、祖父より費用を出して貰つた程であつた。祖父は予の云ふ事には殆んど一切信用してゐた。併し予の父母は種々の理由及び事情に依つて、予の家の財産を減らしたる者として、少くともその一點だけは、予の祖父に信用を得なかつた。

而して予の母方の親類一統が、餘りに蔓り過ぎるとて、それも予の祖父には釋然たらなかつた。祖父は屢々予に向つて支那や日本の歴史にも、外戚が餘り威張るのは宜しくないなどと云つて、その例を引き、予に戒め告ぐるところがあつた。祖父が熊本より水俣の隱宅に再び歸へりて、吾家と二十五里を隔てゝ隱居してゐた間は、家の小作料などは悉く舉げて祖父の收入となつてゐた。然るに祖父の永眠と共にそれ等のものが吾家の收入に歸する事になつてから、これ迄の經濟上の苦痛は、幾何か緩和せらるゝ事となつた。

而して予は父と共に祖父の遺產等に就いても、神速にそれを處分し、分配すべきものは分配し、讓與すべきものは讓與し、此に初めて一段落を終へ、二軒に分れたる德富家は、漸く一家になるを得た。

×　×　×

予の祖父は筋骨逞ましく、容貌魁梧にして、一見角力取りの如くであり、目は小さかつたが、何處やら底光りしてゐた。自ら無學文盲と云つてゐたが、なか〱の物識りで、種々の事を記憶してゐた。封建時代にては高かゞ鄕士であつたから、門閥に押へつけられ、その力を伸す事が出來なかつたから、その不平の

氣は何處にか殘り、その爲めに聊か拗者らしき態度があつた。

× × ×

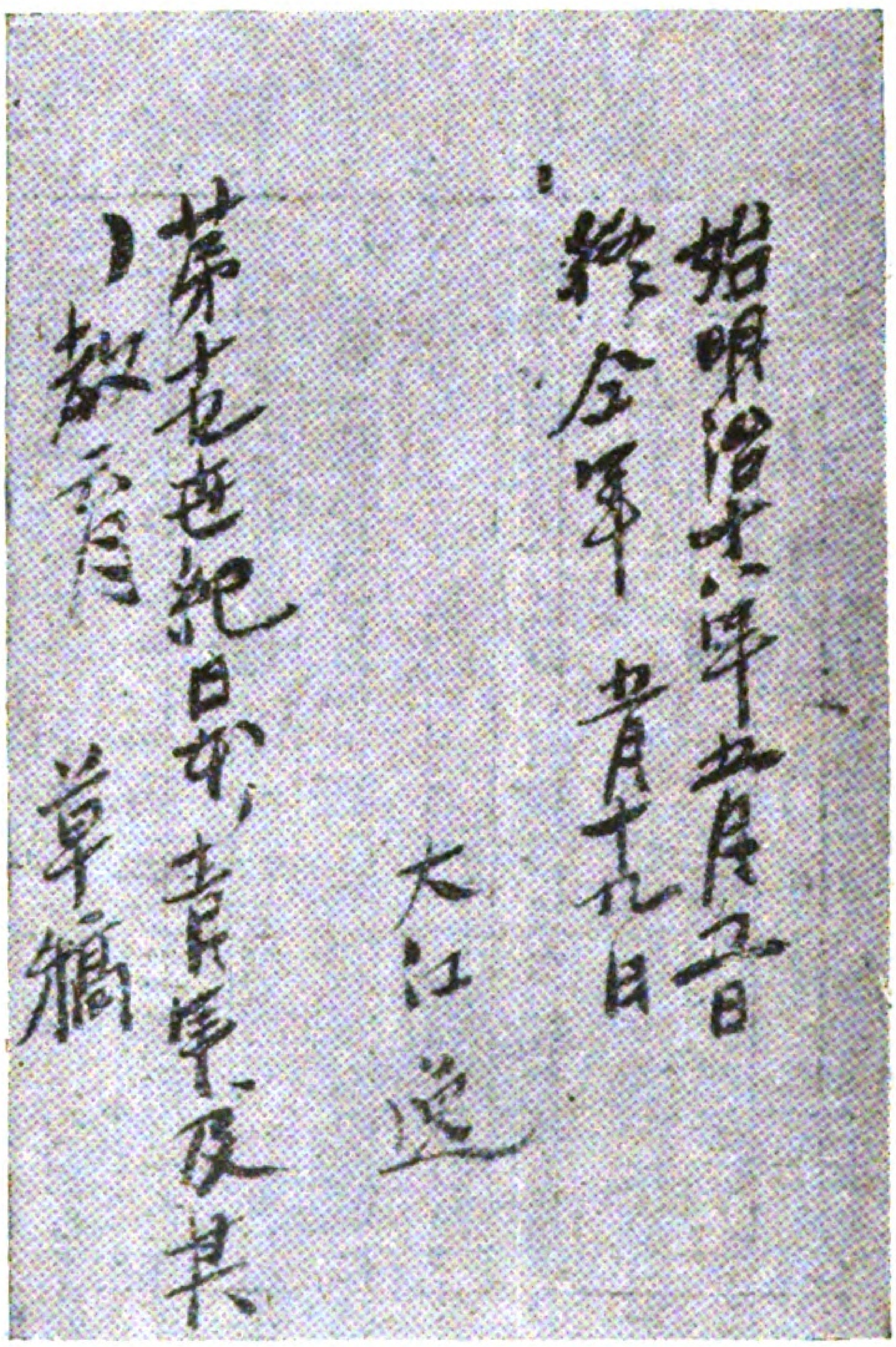
なか〳〵力が強きばかりでなく人を喰つた漢で、その長上官等を巧みに揶揄し、それとはなしに彼等を赤面せしめたる如き事は尠くなかつた樣だ。その爲め大に立身出世も出來なかつたが、しかもその子供の教育には最も力を用ひ、孰れもそれ〴〵成立した。長子は予の父であり、次は德富一義と云ひ、横井小楠の愛弟子であつたが、小楠と共に上國を漫遊し、歸來幾何もなく熱病に罹つて逝いた。その次は江口高廉、その次は德永昌龍、皆なそれ〴〵一人前以上の漢となつた。

（昭和四年五月二日、民友社にて）

第二十八 『第十九世紀日本の青年及其教育』

予が『第十九世紀日本の青年及其教育』と長銘を打つて、明治十八年六月著述したるものは、これを東京の友人に托し、三百部ばかり印刷して、これぞれ配布することとした。尠たる小册子ではあるが、しかも又た公刊でなく、唯だ謄寫に代ふるばかりに印刷したるものであるが。東京に於て私刊したるは、これが初めてゞあつた。然るにその三百部はやがて殘りなく配布し終つた。誰と云ふ事もなく、望みの人に渡し、若くは予の力から贈りて、批評を求めたる向きもあつた夙に聞えてゐる。

× × ×



「第十九世紀日本の青年、及其の教育」草稿

然るにこの小冊子は意外なる反響を齎した。田口卯吉君の『東京經濟雜誌』には、小冊子とは云ふもの丶、雜誌の論文としては寧ろ頗る長篇であるこの文を、幾週間に亘つて連載した。又たその外二三の新聞雜誌等にも掲げたるものがあつた。田口君たどは、當初大江逸なる假名の許に、この書が出で來つたるを見て、予と大江逸とは、全く別人と看做してゐた樣であつた。極めて率直に云へば、この小冊子は予が出世作と云ふ事が出來たければ、すくたく共その準備作と云つてもよかつたであらう。

これは後から聞いた話であるが同郷の先輩井上毅君は、この小冊子を得るやいなや、わざ／＼役所に出る一日を休んで、これを通讀し、愛誦の餘、更らに有賀長雄氏に囑してこれを批評せしめ、裝釘してこれを藏したりと云ふ事にて、予の評判は期せずして井上君の口より傳つたらしい。予はそれ迄井上君に面會したることもなく、所謂刀筆の吏とは彼が其の標本であらうと冷視して、左程尊敬もせず、又た近付きもせず。寧ろ傳統的に井上君を反對黨の人として見てゐたのであつたが、思ひきやその井上君に依つて予が出世の端緒を、偶然にもたさんとは。

予の從兄藤島正健の如きも、從來は予に就いて何等考へ一ゐなかつたが、井上君よりその話を聞き、それより以來は特に予を器重し、爾來死に抵る迄、恒に親しく交つてゐた。

又たその頃であつたらう我が大江義塾の生徒も追々增加し、熊本に於て一種の勢力を成すにつけて、反對黨の學校、卽ち濟々黌の若者共は、頻りに迫害を企てた。

塾は桑畑や栗畑の眞中に建つてゐたから、これを襲撃するには、極めて便利であつた。されば夜になれば屢々濟々黌の若者共が來襲して、石や瓦を投げつける如き事は尋常茶飯の類であつた。此方でも少數ではあるが、徒らに雌伏するを屑しとせず、或は桑畑の中に伏勢をしてこれを取りひしぎたる事もあつた。然るに井上君は東京に居てその事を傳聞し、濟々黌の主謀者たる佐々友房氏に宛て丶、「德富なども議論は違ふが、一個の人材であるから、あまり彼をいじめるのは宜しくない」など丶注意を與へてゐた。その事は後日予が佐々氏と懇意になつた後、佐々氏が井上君より贈られたる書簡の卷物を示したるが爲めに、初めてこれを知る事を得た。

× × ×

次手ながら記して置くが、予が熊本に居たから、予と佐々友房氏とは、遂に相見て、相語る機會を得なかつた。或時予は行徳先生を訪ねた。先生は本職が眼科醫であつたから、吾等と四方山の話をなしつゝ、その患者の治療をなした。或時患者でもなく、素性の知れぬ男が來て、頻りに先生と話してゐた。その後先生に面會した時に、

『德富さん、過日の漢は誰である歟知つてゐる乎』と訊かれたから、予は

『知りませぬ。』と云へば、

『彼が所謂る有名なる佐々である。向うも貴君を知らなかつたと見え、貴君の事を「あれは鹿兒島人でありますか」などゝ訊いてゐた。』

と一笑された。眼から鼻の熊本にゐて、黨派の垣は此の如く吾等の交通を不自由ならしめた。

第二十九　『將來之日本』

大江義塾は愈々隆盛となつた。或者は上京してそれ〴〵學校に入り、或者は故郷に歸り、又た或者はその故郷に大江義塾の分校とも云ふべきものを開き、又た漸次に大江義塾の名は[illegible]に聞え、入學者も多く、訪問者も尠くなかつた。この儘に[illegible]ゐれば予は全く一個の村學究となつて終るかも知れなかつ[illegible]

× × ×

予の家政も祖父の沒後は前に比すれば幾分かとは云はれ[illegible]何か寬いて來た。それで予は又た出來得る程度に於て、[illegible]くして志ある青少年を、幾分かは補助する事も出來た。但[illegible]何時迄大江義塾の主となつてゐたればとて、唯だ縣下に於て[illegible]手の濟々黌と競爭する外はない。しかも濟々黌は御用學校[illegible]つて、官府その他凡有る方面の力を利用し、吾は唯だ吾等[illegible]の力であるから、とても競爭すべくもなく、唯だやうや[illegible]獨立を維持して體面を保つ迄の事に過ぎなかつた。

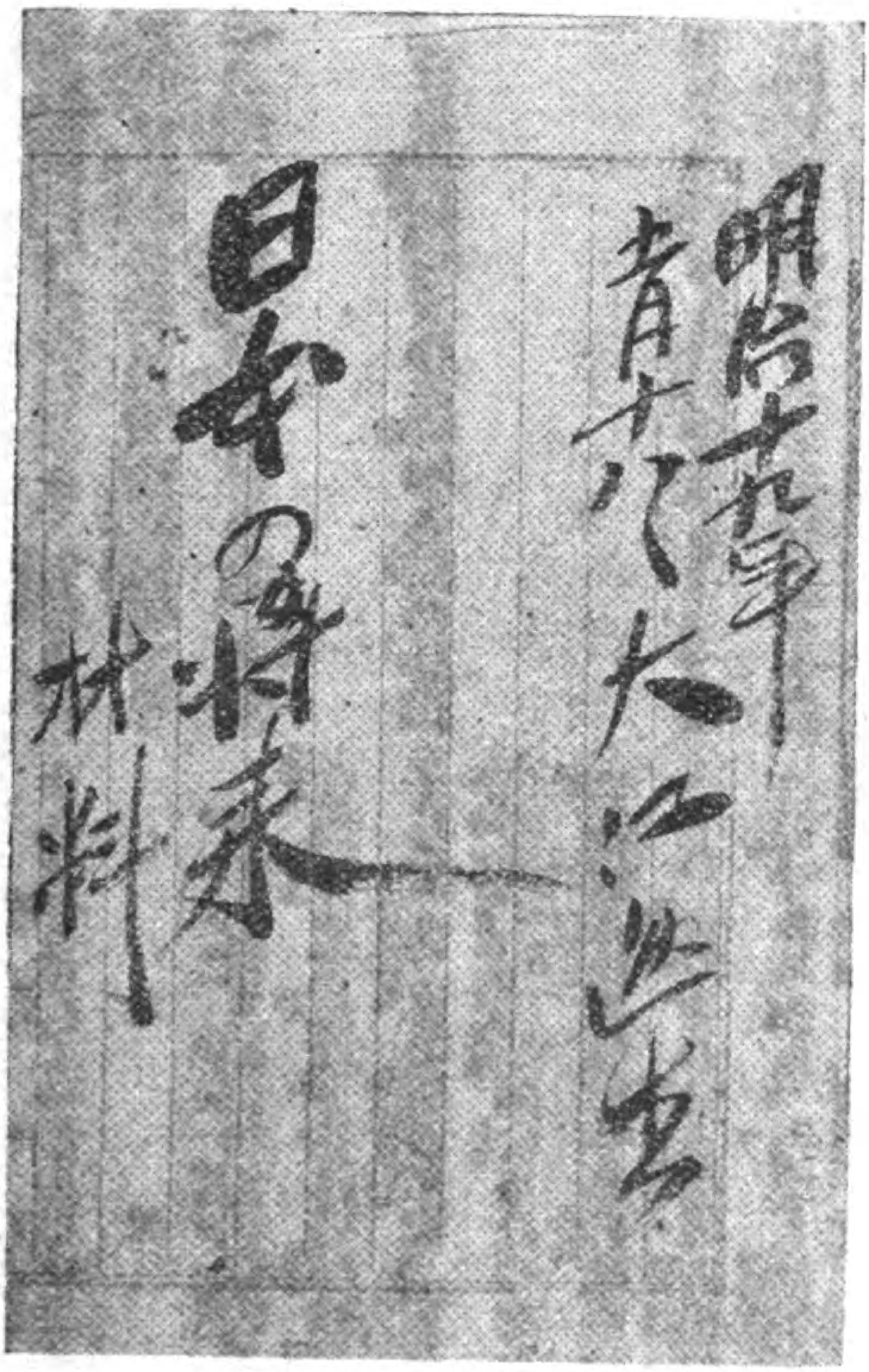
× × ×

されば予は此際に於て、何んとか新たなる一轉機を見出さ[illegible]ばならなかつた。斯る場合に予の所謂る『將來之日本』は出[illegible]來つた。これは多分『第十九世紀日本の青年及其教育』が[illegible]の中に受けた爲に、それに勇氣を得て、第二の試みとして[illegible]

たものであらう。少くとも筆を執り初めたのが明治十八年の下半期であつた。その脱稿は十九年の上半期であつた。初めは『日本之將來』と題したが、それでは面白くないから、『將來之日本』と改めた。

× ×

これには予の當時有する凡有る思想、凡有る知識、凡有る學問を傾倒し盡さんと企てたばかりでなく、その覺悟で始め、又たその覺悟で終つたものである。予は當時專らスペンサーの進化説や、ミルの功利説や、抑々又たコブデン、ブライト等のマンチェスター派の非干渉主義や、自由放任主義や、若くは横井小楠の世界平和思想や、それ等のものに依つて、予一個の見識を打ち建てたるものであつた。



「將來之日本」の材料草稿

予は斯くともこの著述の草稿を三度書き代へた。而して先これを誰に示さん乎と思うたが、誰よりも板垣伯に若くはなと考へたから、夏休みを利用して土佐に赴くこととした。今は從來の陸路に懲りて、神戸から汽船にて、直ちに浦戸に赴た。而して高知市中に宿とりて、潮江新田の板垣の邸を訪うた。板垣伯はの頃家内に病人があるて、餘りに浮かぬ顔をしゐられたが、相變らず予向つては種々の話を聴れた。又た頻りに予に同て、その同志たるべれた。此に於て予は左に掲ぐるが如き書簡を認めて、

これを板垣伯に呈した。

『拜呈仕候。是迄追々御懇情に預り種々御高論を辱し、爲めに雲霧を排て青天を望むが若きの心地致候事も

レ尠候。然れども畢竟今日迄は一己人の私交を以て斯く御交際を致候得共、唯今よりは政治上の交際に一歩を轉じ、事宜によりては先生閣下と共に政治上の運動を共にし、其の進退を同うする譯に立到候儀に候得ば、兼て小生の性格意見趣向等は御承知の儀とは萬々存じ候得共、念の爲め左に一二申上候。是れ畢竟君子永久の交を全うするの道と存候得ばなり。

第一、小生は先生を信ずるが如く先生の同志の方々を信ずる儀には無レ之、縦令政治上の運動を共にする事あるも、唯先生と共にする而已にして、其の關係も、其の責任も、唯先生一人に限り、其他の諸君子に向つては全く無關係、無責任の覺悟にて候。

第二、小生將來政治上の運動は全く自動的の運動にて有レ之候得ば、或はある場合に於ては先生と意見を殊にするやを難レ期ざる時分に於ては、小生は無二遠慮一自家の意見を公言致す覺悟なり。

第三、小生は縦令自由主義の目的を遂せんが爲めなればとて、決して天下百世に向て、上天に向て、亦自己の良心に向て申譯なき拙劣奸惡の手段を致す儀は萬々不同意にて、如何なる場合に於ても、決して斯る御相談には相關し不レ申候。



蘇峰氏(明治十九年夏東京に於て)

第四、小生不肖天下の志士を以て自ら任ずるものなれば、決して一土地、一地方の利益を而已目的と致す譯に無レ之、されば爾來九州の一志士として御交際被レ下候ては、甚だ迷惑の儀なれば、願くは日本の志士として御交際被レ下度候。勿論小生は一己の定識定見を存するものなれば、敢て一々九州人士と其の運動を同ふし候義務も無レ之、亦恒に其の意見議論を代議代表する儀にても無レ

之、唯小生の運動は小生一己の運動にして、小生の議論は小生一己の議論と御明め有レ之度候。

第五、小生は天下何人と共に交際し、何人と共に往來し、或は何人と共に相運動するも、小生が政治上の主義、小生が良心に違背せざる限は隨意の擧動を可レ致、是れ決して先生に對して小生が是迄又は是れよりの政治上、私交上に於て、不都合をなす譯にては無レ之と存候間、此段豫め御承知被レ下度候。

第六、縱令其の事は我が運動に必要にして、又決して正道に外れざる事にても、若し自家の性格に不適當なる事は、必ず辭し可レ申、是れ決して自から安逸を偷まんと欲するにあらず。唯自家の不長所に向て自家の才能を用ふるは、唯自家の品格を下落せしむる而已にて、決して他に何等の利益も無レ之事と信じ候得ばなり。勿論自家適任の事ならば水火も犯す可し。白刄も踏む可し。決して決して躊躇囘避不レ致心底にて御座候。

第七、小生は即今一書生にして未だ其の經驗を有せざるものたれば、敢て公然政黨抔に加入し候儀は萬々御斷申上候。勿論他人を代表代理し候抔の儀は、一切未だ信用を得ざる事たれば御斷申上候。唯自家一人にて若し政治の運動即ち自由主義の眞正なる運動に鞅掌して少小にても其の甲斐ありとせば、生は甘じて其の一卒となり、餘念なく相働き度覺悟にて有レ之候。

第八、小生が政治上の主義は、今回著述致候『將來之日本』なる一小册子にて分明と存候。果して此の小册子通にて不都合なしと御考に成候哉。若し不都合ありとせば如何なる點哉。篤斗御示し可レ被レ下候。然る時には再考三考熟考可レ致候。されども唯今の所にては、先々右の小册子に記載致候ものを以て、小生將來政治上の主義に御座候。故に生は若し此の小册子の論點に於て其の見を同ふする人は、何人にても政治上の朋友と存じ、同ふせざる人は、何人にても政治上の敵と存候。先生の高論如何。

第九、小生が先生を尊信するは、固より先生を以て一世の豪雄となす故とは申しながら、更に其の根本を論ずれば、其の主義節操を信じ候譯合なれば、先生にして若し(萬々なきことなれども)萬々一其の主義、節操に於て愧たらざる所あらば、小生は斷然先生との關係を失し可レ申と存居申候。され

ども君子交絶ども悪聲を出さず、小生は決して漫に他の細評兒を擧んで悪聲を出す事をなさざる可し。

第十、事をなすは謹愼にあり。謹愼の要點は機密にあり。機密を漏さずして始めて共に信ず可し。されば小生は決して何人に向ても先生との機密に付き、相漏す事をなさざる可し。然れども若し事公明にして便利なる事は、可レ成公明になす可し。秘密にて便利なる事は、必ず秘密にす可し。此の邊には決して決して御掛念なき樣に豫め御相談仕置候。右十條果して先生の御意見にて差支なしと御考へ被レ成候はゞ、小生は必ず先生と政治上の交際を可レ致覺悟に御座候。事少しく面倒の樣なれども、將來紛々錯雜の日に於て、如何なる間違あるや不レ可レ知。小生は決して拙劣男子の擧動を不レ致心底なれども、若し二三の行違よりして先生との關係疎淡に相成候節に於ても、先生より失節者、輕薄兒と叫責せられ候儀にてもあらば、小生の遺憾に付、豫じめ申上候。先生必ず輕々書生を信じ給ふ勿れ。

明治十九年七月廿六日

高知客舍に於て

大江逸生

百拜

板垣退介先生

閣下

× × ×

如何なる返事を板垣伯から受取つたかは、確と覺えてゐない。兎に角予の目的は、『將來之日本』を示して、君の批評を求むるにあつたが、板垣伯は果してこれを通讀して呉れた乎、それさへ予には明白でない。唯だ板垣伯はこれを一般ありふれたる書生論と看做し、別に何等感心した風もなかつた。予も有體に云へば、これには聊か失望せざるを得なかつた。

第三十　『將來之日本』の出版

併しこの儘歸郷するのも面白くないから、予は神戸に出で又これを懷にして東京に赴いた。

東京では『第十九世紀日本の青年及其教育』が、予の爲めに尠からず門戸を開いてゐたから、予は到る處で田舍書生の身として、過分の驩迎を受けた。而して此際最も感謝すべきは、島

田三郎君が予の爲に多くの紹介狀を認めてくれた事である。島田君とは生面にて、恐らくは田口君の紹介にて島田君を知つたのであらうと思ふ。

斯くて予が面會したる者の中には、大隈侯、河野敏鎌子、陸奥宗光伯等もあつた。而して當時新歸朝者として『週遊雜記』を出版したる矢野文雄君等もあつた。當時陸奥伯は外務省の政務局長乎何乎を勤めて居、出獄後新生涯を初めたる間際であつた。元氣頗る旺盛であつて、予は炎天に歩行して根岸金杉の其邸に訪問し、覺えず愉快の時を過した。その時伯は予の名字を聞き、

『君は水俣の德富ではない乎。それならば君の家も知つてゐる。君の父も知つてゐる。』等と語つた。予は維新前、陸奥伯が暫く吾家に寄寓し、他の嫌疑を避くる爲に、旅から來た醫者と云ひ、常に藥箱を携へて外出せしめた等と云ふ話を聞いてゐたが、伯はそれを想起したのであらう。陸奥伯を吾家に伴ひ來つたのは、伯と長崎にて同學の書生であつた、予の從兄に當る江口高確であつたらうと思ふ。


陸奥宗光伯（明治二十一年頃）

斯くて『將來之日本』の原稿も、田口卯吉君が見て、

『これは結構である。經濟雜誌社から出版しても差支へない。』と云うたが、『併し善き本必ずしも賣れる本ではない。故に責任だけは貴方で持つて貰ひ度い』と云ふ事で、そこで予も當惑したが、予の姉婿湯淺次郎氏が、

『それなら予が責任を持たう』

と云ふ事になり、そこで原稿を經濟雜誌社に渡す事となつたが。その時分は斯る書籍は、豫じめ警保局の檢閲を要する事であつた。當時の警保局長は、清浦奎吾伯で、予の同郷の先輩であつたが、予はその力を假る迄もなく、その屬僚に平野候次郎なる人あり、この人より訂正すべきかど／＼を內示せられ、そこで漸く無事に

通過した。その訂正の文字は悉くは覺えてゐないが、唯だ革命の文字を悉く改革と代へただけは、今猶ほ記憶に殘つてゐる。

第三十一　胸中の秘密

或日予は同行の人見一太郎氏を伴ひ、上野公園の人靜かなる森の中の、大なる榎の樹の根株に腰打掛けた。頃は八月の末乎、九月の初であつたらう。予は人見氏に向て、予の胸中の秘密を語つた。人見氏は元熊本師範學校出身にて、卒業後熊本より三里を隔てたる金峰山の裏面有明海に瀕する河内の小學校に教鞭を執つてゐたが、一週一回づゝ予に英書の講義を聽きに來た。それから予は君が人物に傾倒し、彼是便宜を計つて、大江義塾に來り寓する事となり、明治十七年の夏高知にも相伴ひ、即ち今回も又た相伴つて土佐より東京に出でたのである。仲間では人見氏を、德富の秘書と稱してゐた。



蘇峰氏（左）と人見一太郎氏（右）

予は、

『吾等は長く田舍に老ゆべき者ではない。中原に出て角逐すべき時期は、正に到來せんとしつゝある。それで君は今より鄕に歸つて熊本の同志に告げ、速かに大江義塾の開校を計らはれ度し。若し諸友が異存あらば、火をつけて塾を燒いても差支へはない。萬事君の思ふ儘に任するから宜しく賴む。予は暫く東京に止つて、愈々旗擧げの準備となし、然る後歸鄕する事とする。』

と語つた。

人見氏も直にそれに贊成し、自ら奮つてその事に任ずる事となつた。それから予は何や彼や東京諸名士の間に往來して、他日

愈々東京に門戸を張る可く準備をした。その間矢野文雄君の『過遊雜記』に就いて、隨分手嚴しき批評を六合雜誌に掲げたが、それが緣となつて矢野君と相見、君に依つて便宜を得たる事も亦た尠くなかつた。（昭和四年五月七日、民友社にて）

第三十二　家を擧げて東上

予は東京に在りて、彼是と故郷の大江義塾を營み、再び上京して東京に根據を据え、聊か活動するところあらんとするの準備をなしつゝあつた。而して別に何等取りとめたる事は出來なかつたが、兎も角も吾力を試むべき自信力が出で來つたから、愈よ歸郷する事になつた。其時の詩に、

弊裘仍レ舊出二都門一。一片歸心輕レ似レ雲。
西海故人應レ待レ我。秋風吹老大江村。

とある。當時の氣分はこれにて想像がつく。

扨て歸へりて見れば、大江義塾社中も、案外予の志を諒として、別に何等面倒もなかつた。されば予は社中及び社外に於ける同情者その他の知友を招き、愈々目出度く大江義塾の閉校式と云ふ乎、若くは解散式と云ふ乎を擧行した。而して社中の重なる面々は、予と共に上京せんとの志であつたから、予は出來得る程度に於て、その志を援助するに勉めた。

× × ×

飜へつて予の家庭に於ては、當初予等夫婦のみ上京する積りであつた。然るに予の父母は予の志に贊同し、

『御身がそれ程の決心あれば、吾等老人夫婦も共に東京に趣かん』

との事であつたから、予にとつては寧ろ望外の幸福とし、愈々一家を擧げて東京に移轉する事となつた。これは人としては吾等夫婦二人に父母二人を加へ、二が四となりたるに過ぎざるも、德富家一切を疊んで東京に移るといふ事は、當時に於ては、所謂、船を焚き橋を斷つの手段にて、可成り大膽の事であつた。それは予に定りたる職業も無ければ、收入も無く、全く徒手空拳にて、吾が運命を試めす事であつたからだ。愈々決心したる際には、一家の會議を開き、爾後吾家定規の收入一ヶ月約二十圓にて生計を立つる可き旨を相談の上、父母及び予等夫婦各々記名調印してその志を固めた。三十圓は當時予が家に於ける確定の月收であつたからだ。

斯くて藏書等は極めて手近き必要品、祖先傳來の品を除けば、二束三文に賣り飛ばし。家財諸道具等は親類、知己に分配し、その餘はこれも一山百文的の入札拂となし。心も輕く、身も輕く、愈々親子四人及び同志の士十數人相携へて熊本を立つたのは、明治十九年十二月一日であつたかと記憶してゐる。

予の決心は去る事ながら、予の父母が住み馴れたる故郷を去り、前途の充分なる保證も出來ぬに、予の冒險的東上に同情して、參加せられたるは、予にとつては寔に感激に堪へぬ次第であつた。

第三十三 『將來之日本』出版の影響

『將來之日本』は、予が東京を去りて熊本に歸りたる後に出版せられ、その幾百部はやがて熊本に送り來つた。予は初めて吾が著書を公刊するものであつて、その運命に就いては、多少の關心が無いでもなかつた。然るに新聞の評判や、在京の友人から申來る趣は、孰れも意外の好評であつた。而して如何に早く此書が行き渡つた乎は、予が東上の汽船中にて、既に此書を携へ朗讀しつゝある者を見出したるに依つて見ても知らるゝ。

謂はゞ予は『將來之日本』の好評の裡に、東京に一家を擧げて飛込んだものと云つても差支へあるまい。予等は兎も角も十二月十日、山王臺の下、赤坂溜池の傍なる予の姉の家、湯淺氏に草鞋を脱いで、やがて赤坂靈南坂の奥まりたる一隅の借家に落着いた。これに就いては、熊本洋學校及び同志社以來、予の先輩であつた靈南坂教會牧師小崎弘道君及びその夫人が彼是と周旋せられた。

明治十九年も既に暮れんとした。予は如何にすべき乎。何事をなすべき乎。將た如何にして生活すべき乎。予は唯だ自己の運命を信ずる以外には、何等の確定したる考へも無かつた。併し當時引く手數多とは云はざるも、若し予にして職業を得んとすれば、必ずしも困難ではなかつた。大阪の或る新聞は新島先生を紹介して、予を招聘せんとした。當時報知新聞を主宰する矢野文雄君なども、予の入社を欲しない事も無かつたらしい。又た田口卯吉君なども、予にしてその部下に赴かんとしたらば、決して拒ばまなかつたであらう。

何れにしても、『將來之日本』は將來の日本の爲に如何なる效果を與へた乎を知らざるも、著者たる將來の德富の爲には尠か

らざる便宜を辭した。予は決して『將來之日本』が出た德富が、『ミルトン論』の出たマコーレーと同一程度に世間の評判を博したと云はぬが、正直の處、評判はなかなか盛んであつた。而して其の證據には、予の文體や論旨などを、模倣と云はんよりも、其儘再製したるものが、往々にして予の目にもつく程であつた。

第三十四 『國民之友』の發刊

予は何事をなすべき乎。予は熊本を去る頃から既に一個の計畫を抱いてゐた。それは予自ら雜誌を刊行する事であつた。予は初から新聞に心があつた。されど多少とも新聞に經驗ある予は、容易に手を出すべきものでない事を知つてゐた。そこで新聞の事を後廻しとし、暫らく雜誌を以て滿足する事とした。それは『將來之日本』が、好評を博すると博せざるとに論なく、何れにしても實行する積であつた。既に前に云つた通り『將來之日本』が吾が運命の道開きをしてくれた以上は、猶更ら此際雜誌を刊行して、吾運を試して見度きものと考へた。



「國民之友」發刊當時の蘇峰氏（後列向つて右より二人目）

然るに予は意外にもその同志者を得た。それは湯淺次郎君である。君は上州安中の住人にて、新島先生とも同鄕の誼があり、且つ予が姉婿であり、群馬縣會議長として廢娼論を實行したる人であり、資性狷介にして容易に人と妥協せざるも、一度意を決すれば、する丈の事は必らず成す人であつた。それが偶然にも予の志に賛同し、愈々相共に雜誌を刊行すると云ふ事になつたから、何の雜作もなく、仕事はすらすらと行つた。

申す迄もなく予は社長格で且つ主筆として一切の編輯に關し、紙面に關する責任を負ひ、湯淺氏は副社長格で、マネーヂ

ヤーとも云ふべく、經營一切の事に任ずる事となつた。湯淺氏は計算の上のみならず、技術方面の趣味もあり、雜誌の表紙とか、挿繪とか、一切の體裁及び廣告の樣式等に就いても、尠からず貢獻した。予は唯だ廣告の文字のみ斯くすれば效果多かるべしと、自ら認めたるところを其儘書放して置けば、湯淺氏がそれを極めて人目につく樣、よき體裁に作り上げて、これを新聞に廣告するといふ事になり、斯の如くにして『國民之友』第一號は、明治二十年二月十五日發行せられた。

× × ×

當時雜誌の發行部數は、大概ね千部以下にて、通常五百、六百といふ位の數にて、千を超ゆれば先づ盛んなりと云ふべきものであつた。『國民之友』は初號を、最初初號であるからと考へて、思ひ切つて多く刷つたが、見る間に賣切れ、再刊、三刊の止むなきに至り、遂に總數萬位に上るに至つた。これは吾ながら意外であつた。

扨何故に『國民之友』と命名けた乎と云へば、予は少壯以來米國のネーション（The Nation）雜誌を愛讀し、ネーションといふ字が頭の中に刻みつけられてゐたから、遂に斯く稱したのである。而して社名を民友社と命名けたのは、『國民之友』の中より、二字を抽出したのだ。國友社とせずして、民友社としたのは、當時平民主義を主張し、何處迄も人民の味方を以て自ら任じたからであつた。

雜誌の體裁などは半は予が創意になり、半は外國雜誌のそれを應用したる事もあつた。唯だ特別寄書欄を設くるの一事は、予が米國のネーション雜誌に、スペシアル、コレスポンデンス（The Special correspondence）として、歐羅巴、就中英國諸大家の寄書を掲げたから、それを其儘特別寄書と譯し、而して當時著名なる諸大家の作を、悉く吾が特別寄書欄の中に網羅せんと努めたのであつた。

初號はこの通りであるが、二號以下は景氣が落ちはせぬかと、心配せぬでもなかつたが、左樣ではなかつた。されば此間に於て、前に記したる通り、予が明治十八年の六月、脫稿し、『第十九世紀日本の青年及其教育』と長銘を打つて、私かに三百部を印刷し、これを世間に配布したるその原稿を、是非出版させて吳れと懇望する者出で來り、予は其乞に應じて、更に總論一篇を新に起草し、これを『新日本の青年』と改題し、明治二十年

三月神田の集成社より出版する事としたが、此書も又た『將來之日本』に續行して、その賣行は凄まじきものであつた。

斯の如くにして予は吾が著書の爲に、敢へて澤山とは云はぬが、若干の思ひ掛けなき收入を得たが、その大部分は、予の親戚と、曾つて予の父の門弟であつて、予が家の爲に財政の遣り繰りなどを計りたる友人等の窮迫を救ふ爲に、若干の援助を與ふるに至りたるは、予が今日に於ても聊か感謝する所である。

（昭和四年六月十七日、民友社に於て）

第三十五　歐化主義旺盛の時代

予は本來政治が好きであり、政治が予の生命であつた。されど當初から役人にならんとする樣な考は一切持たなかつた。平たく云へば當初から大臣希望者でもなく、又た議員希望者でもなかつた。予は唯だ世の中の政治を吾が思ふ樣に動かし導かん事を欲したる迄にて、それ以外には何等の功名心も無ければ、名譽心も持たなかつた。併し極めて微力ではあるが、世の中を予の是なりと思ふ方に導かんとする志は、若しこれを野心と云ふならば、その野心は燃ゆるが如くあつた。

されば著述をしても、雜誌を刊行しても、その目的は本を賣つて金を儲くるとか、若しくは文學界に覇權を占むるとか云ふが如き了見は少しも持たなかつた。若し書物や雜誌が賣れて、予が文名が高くなるならば、唯だそれに依つて聊か予の志を天下に行はんとするに過ぎなかつた。

× × ×

扨明治二十年の日本の形勢は如何。十八年の末に初めて內閣制が出來、一匹夫であつた伊藤公が總理大臣となつた。卽ち第一期伊藤內閣だ。然るに伊藤公の意氣込も當初は却々凄まじかつたが、種々の障礙に出逢ひ、聊か沮喪するの趣きが無いでもなかつた。それは薩長聯合と云ふも、薩派の長老たる黑田淸隆伯の如きは、何となく伊藤公に對して、宛然一敵國の狀を呈し、却々伊藤公の一存にて、思ふ樣には參らない事も多かつた。而して伊藤公を助けて此の改革をなしたる井上毅君の如きも、その胸中伊藤公の所信が聊か鈍ぶれたるをはがゆく思ひ、伊藤公との間に彼是論爭の結果、その身は宮內省圖書頭の閑職に移つてゐた。併し當時に於ては何と云つても大立物は外務大臣の井上侯であつた。卽ち明治二十年頃は、伊藤內閣と云ふが、

その實井上内閣と云うても差支なき程に井上侯は有力であつた。それもその通りだ。何んとなれば、公の次官としては青木周藏子があり。政務局長としては陸奥宗光伯があり。外務省に殆んど當時の人材を集め、而して彼等は一方に於ては條約改正を成就する爲、他方に於ては頑固黨を退治する爲、盛んに歐化主義を鼓吹した。

即ち鹿鳴館に於ける舞踏、ローマ字會、演劇改良等といふ事が、次から次に出で來つてゐた。當時彼等歐化者の主義は『元來長を取り短を補ふなどゝいふ事が間違である。日本人では外國の文明の長短得失などがわかるべき筈はない、寧ろ其まゝ悉く取入れ、然る後徐々に長を長とし、短を短とするも遲しとせず』といふ説であつた。

此事に就いては西園寺公なども予に向つてその説を説示された。又た陸奥伯の如きは、わざ〳〵川柳の、

『神農も初めはウヅに目を廻し』

といふ句がある。ウヅと云ふは毒草であつて、神農も藥草であらうが、毒草であらうが、當時は手當り次第これを嘗め、毒草にて目を廻して、而して後にその毒草である事を知つたであるから、吾等もウヅに目を廻すが如き事は覺悟の前でなければならぬ。といふ事を説いてゐた。



青木周藏子

第三十七　平民的急進主義

當時予の立場は平民的急進主義とでも云ふべきものにて、鹿鳴館の舞踏とか、徒らに外國の文明を粉飾するとか、殊に外國物質文明を崇拜するとか云ふ事は大嫌ひであつた。而して外交の要は必ずしも外人の服を着、外人の食を喰ひ、外人の如く飾り、外人の如く考へ、身も魂

三月神田の集成社より出版する事としたが、此書も又た『將來之日本』に續行して、その賣行は凄まじきものであつた。

斯の如くにして予は吾が著書の爲に、敢へて澤山とは云はぬが、若干の思ひ掛けなき收入を得たが、その大部分は、予の親戚と、曾つて予の父の門弟であつて、予が家の爲に財政の遣り繰りなどを計りたる友人等の窮迫を救ふ爲に、若干の援助を與ふるに至りたるは、予が今日に於ても聊か感謝する所である。

(昭和四年六月十七日、民友社に於て)

第三十五　歐化主義旺盛の時代

予は本來政治が好きであり、政治が予の生命であつた。されど當初から役人にならんとする樣な考は一切持たなかつた。平たく云へば當初から大臣希望者でもなく、又た議員希望者でもなかつた。予は唯だ世の中の政治を吾が思ふ樣に動かし導かん事を欲したる迄にて、それ以外には何等の功名心も無ければ、名譽心も持たなかつた。併し極めて微力ではあるが、世の中を予の是なりと思ふ方に導かんとする志は、若しこれを野心と云ふならば、その野心は燃ゆるが如くあつた。されば著述をしても、雜誌を刊行しても、その目的は本を賣つて金を儲くるとか、若しくは文學界に覇權を占むるとか云ふが如き了見は少しも持たなかつた。若し書物や雜誌が賣れて、予が文名が高くなるならば、唯だそれに依つて聊か予の志を天下に行はんとするに過ぎなかつた。

× × ×

扨明治二十年の日本の形勢は如何。十八年の末に初めて内閣制が出來、一匹夫であつた伊藤公が總理大臣となつた。即ち第一期伊藤内閣だ。然るに伊藤公の意氣込も當初は却々凄まじかつたが、種々の障礙に出逢ひ、聊か沮喪するの趣きが無いでもなかつた。それは薩長聯合と云ふも、薩派の長老たる黑田清隆伯の如きは、何となく伊藤公に對して、宛然一敵國の狀を呈し、却却伊藤公の一存にて、思ふ樣には參らない事も多かつた。

而して伊藤公を助けて此の改革をなしたる井上毅君の如きも、その胸中伊藤公の所信が聊か鈍ぶれたるをはがゆく思ひ、伊藤公との間に彼是論爭の結果、その身は宮内省圖書頭の閑職に移つてゐた。併し常時に於ては何と云つても大立物は外務大臣の井上侯であつた。即ち明治二十年頃は、伊藤内閣と云ふが、

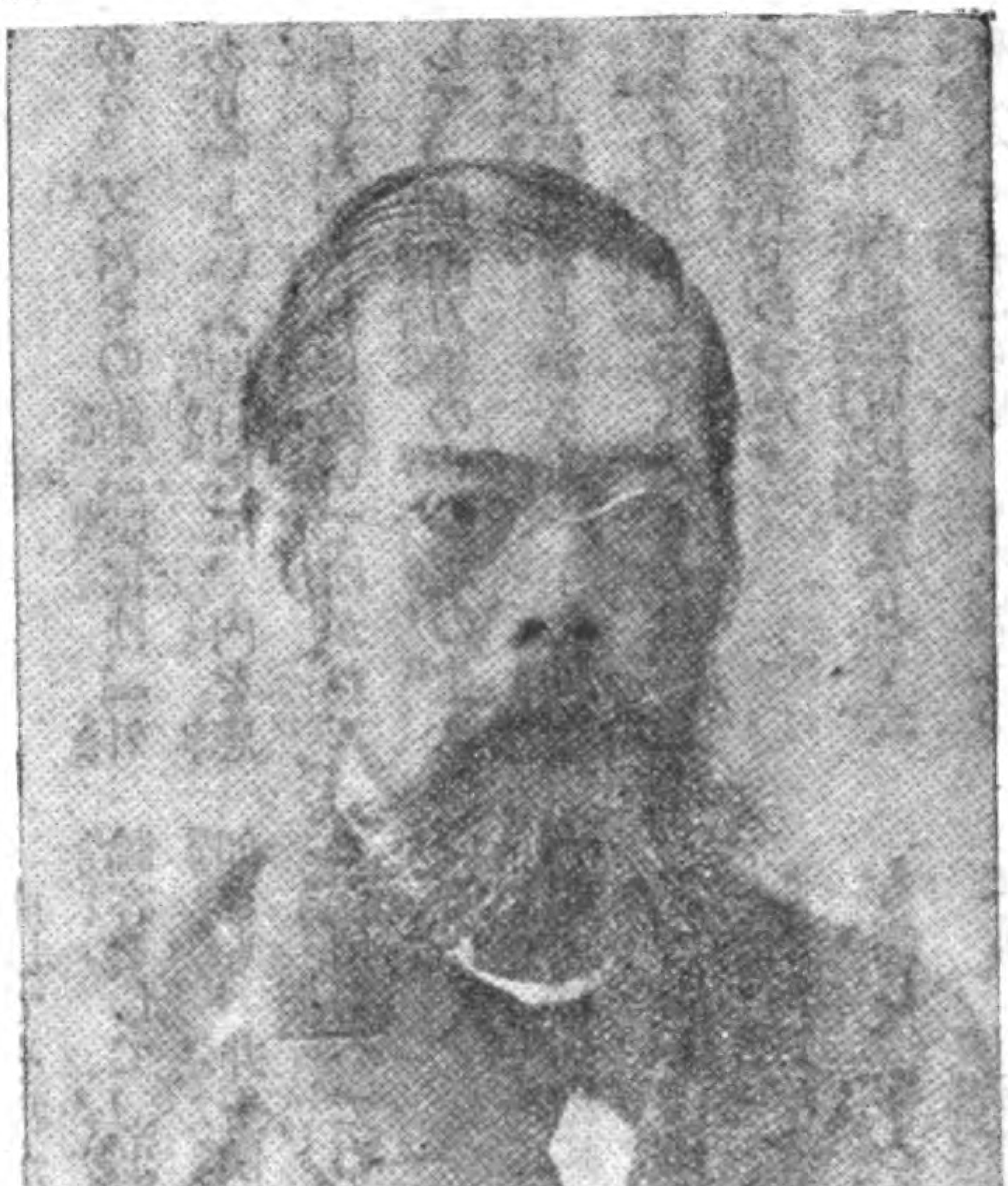
その實井上内閣と云うても差支なき程に井上侯は有力であつた。それもその通りだ。何んとなれば、公の次官としては青木周藏子があり。政務局長としては陸奥宗光伯があり。外務省に殆んど當時の人材を集め、而して彼等は一方に於ては條約改正を成就する爲、他方に於ては頑固黨を退治する爲、盛んに歐化主義を鼓吹した。

即ち鹿鳴館に於ける舞踏、ローマ字會、演劇改良等といふ事が、次から次に出で來つてゐた。當時彼等歐化者の主義は『元來長を取り短を補ふなどゝいふ事が間違である。日本人では外國の文明の長短得失などがわかるべき筈はない、寧ろ其まゝ悉く取入れ、然る後徐々に長を長とし、短を短とするも遲しとせず』といふ說であつた。

此事に就いては西園寺公なども予に向つてその說を說示された。又た陸奥伯の如きは、わざ〳〵川柳の、

『神農も初めはウツに目を廻し』

といふ句がある。ウツと云ふは毒草であつて、神農も藥草であらうが、毒草であらうが、當時は手當り次第これを嘗め、毒草ては目を廻して、而して後にその毒草である事を知つたのであるから、吾等もウツに目を廻すが如き事は覺悟の前でなければならぬ。といふ事を說いてゐた。



青木周藏子

第三十七　平民的急進主義

當時予の立場は平民的急進主義とでも云ふべきものにて、鹿鳴館の舞踏とか、徒らに外國の文明を粉飾するとか、殊に外國物質文明を崇拜するとか云ふ事は大嫌ひであつた。而して外交の要は必ずしも外人の服を着、外人の食を喰ひ、外人の如く踊り、外人の如く考へ、身も魂

三月神田の集成社より出版する事としたが、此書も又た『將來之日本』に續行して、その賣行は凄まじきものであつた。

斯の如くにして予は吾が著書の爲に、敢へて澤山とは云はぬが、若干の思ひ掛けなき收入を得たが、その大部分は、予の親戚と、曾つて予の父の門弟であつて、予が家の爲に財政の遣り繰りなどを計りたる友人等の窮迫を救ふ爲に、若干の援助を與ふるに至りたるは、予が今日に於ても聊か感謝する所である。

（昭和四年六月十七日、民友社に於て）

第三十五　歐化主義旺盛の時代

予は本來政治が好きであり、政治が予の生命であつた。されど當初から役人にならんとする樣な考は一切持たなかつた。平たく云へば當初から大臣希望者でもなく、又た議員希望者でもなかつた。予は唯だ世の中の政治を吾が思ふ樣に動かし導かん事を欲したる迄にて、それ以外には何等の功名心も無ければ、名譽心も持たなかつた。併し極めて微力ではあるが、世の中を予の是なりと思ふ方に導かんとする志は、若しこれを野心と云ふならば、その野心は燃ゆるが如くあつた。されば著述をしても、雜誌を刊行しても、その目的は本を賣つて金を儲くるとか、若しくは文學界に覇權を占むるとか云ふが如き了見は少しも持たなかつた。若し書物や雜誌が賣れて、予が文名が高くなるならば、唯だそれに依つて聊か予の志を天下に行はんとするに過ぎなかつた。

×　×　×

抑明治二十年の日本の形勢は如何。十八年の末に初めて內閣制が出來、一匹夫であつた伊藤公が總理大臣となつた。即ち第一期伊藤內閣だ。然るに伊藤公の意氣込も當初は却々凄まじかつたが、種々の障礙に出逢ひ、聊か沮喪するの趣きが無いでもなかつた。それは薩長聯合と云ふも、薩派の長老たる黒田清隆伯の如きは、何となく伊藤公に對して、宛然一敵國の狀を呈し、却却伊藤公の一存にて、思ふ樣には參らない事も多かつた。

而して伊藤公を助けて此の改革をなしたる井上毅君の如きも、その胸中伊藤公の所信が聊か鈍ぶれたるをはがゆく思ひ、伊藤公との間に彼是論爭の結果、その身は宮內省圖書頭の閑職に移つてゐた。併し當時に於ては何と云つても大立物は外務大臣の井上侯であつた。即ち明治二十年頃は、伊藤內閣と云ふが、

その實井上内閣と云うても差支なき程に井上侯は有力であつた。それもその通りだ。何んとなれば、公の次官としては青木周藏子があり。政務局長としては陸奥宗光伯があり。外務省に殆んど當時の人材を集め、而して彼等は一方に於ては條約改正を成就する爲、他方に於ては頑固黨を退治する爲、盛んに歐化主義を鼓吹した。

即ち鹿鳴館に於ける舞踏、ローマ字會、演劇改良等といふ事が、次から次に出で來つてゐた。當時彼等歐化者の主義は、『元來長を取り短を補ふなど〻いふ事が間違である。日本人では外國の文明の長短得失などがわかるべき筈はない、寧ろ其ま〻悉く取入れ、然る後徐々に長を長とし、短を短とするも遲しとせず』といふ說であつた。

此事に就いては西園寺公なども予に向つてその說を說示された。又た陸奥伯の如きは、わざ〳〵川柳の、

『神農も初めはウツに目を廻し』

といふ句がある。ウツと云ふは毒草であつて、神農も藥草であらうが、毒草であらうが、當時は手當り次第これを嘗め、毒草ては目を廻して、而して後にその毒草である事を知つたのであるから、吾等もウツに目を廻すが如き事は覺悟の前でなければならぬ。といふ事を說いてゐた。



青木周藏子

第三十七　平民的急進主義

當時予の立場は平民的急進主義とでも云ふべきものにて、鹿鳴館の舞踏とか、徒らに外國の文明を粉飾するとか、殊に外國物質文明を崇拜するとか云ふ事は大嫌ひであつた。而して外交の要は必ずしも外人の服を着、外人の食を喰ひ、外人の如く飾り、外人の如く考へ、身も魂

三月神田の集成社より出版する事としたが、此書も又た『將來之日本』に雁行して、その賣行は凄まじきものであつた。

斯の如くにして予は吾が著書の爲に、敢へて澤山とは云はぬが、若干の思ひ掛けなき收入を得たが、その大部分は、予の親戚と、曾つて予の父の門弟であつて、予が家の爲に財政の遣り繰りなどを計りたる友人等の窮迫を救ふ爲に、若干の援助を與ふるに至りたるは、予が今日に於ても聊か感謝する所である。

第三十五　歐化主義旺盛の時代

（昭和四年六月十七日、民友社に於て）

予は本來政治が好きであり、政治が予の生命であつた。されど當初から役人にならんとする樣な考は一切持たなかつた。平たく云へば當初から大臣希望者でもなく、又た議員希望者でもなかつた。予は唯だ世の中の政治を吾が思ふ樣に動かし導かん事を欲したる迄にて、それ以外には何等の功名心も無ければ、名譽心も持たなかつた。併し極めて微力ではあるが、世の

されば著述をしても、雜誌を刊行しても、その目的は本を賣つて金を儲くるとか、若しくは文學界に覇權を占むるとか云ふが如き了見は少しも持たなかつた。若し書物や雜誌が賣れて、予が文名が高くなるならば、唯だそれに依つて聊か予の志を天下に行はんとするに過ぎなかつた。

×　×　×

扨明治二十年の日本の形勢は如何。十八年の末に初めて內閣制が出來、一匹夫であつた伊藤公が總理大臣となつた。卽ち第一期伊藤內閣だ。然るに伊藤公の意氣込も當初は却々凄まじかつたが、種々の障礙に出逢ひ、聊か沮喪するの趣きが無いでもなかつた。それは薩長聯合と云ふも、薩派の長老たる黑田淸隆伯の如きは、何となく伊藤公に對して、宛然一敵國の狀を呈し、却却伊藤公の一存にて、思ふ樣には參らない事も多かつた。

而して伊藤公を助けて此の改革をなしたる井上毅君の如きも、その胸中伊藤公の所信が聊か鈍ぶれたるをはがゆく思ひ、伊藤公との間に彼是論爭の

その實井上内閣と云うても差支なき程に井上侯は有力であつた。それもその通りだ。何んとなれば、公の次官としては青木周藏子があり。政務局長としては陸奥宗光伯があり。外務省に殆んど當時の人材を集め、而して彼等は一方に於ては條約改正を成就する爲、他方に於ては頑固黨を退治する爲、盛んに歐化主義を鼓吹した。

即ち鹿鳴館に於ける舞踏、ローマ字會、演劇改良等といふ事が、次から次に出で來つてゐた。當時彼等歐化者の主義は、『元來長を取り短を補ふなどゝいふ事が間違である。日本人では外國の文明の長短得失などがわかるべき筈はない、寧ろ其まゝ悉く取入れ、然る後徐々に長を長とし、短を短とするも遲しとせず』といふ說であつた。

此事に就いては西園寺公なども予に向つてその說を說示された。又た陸奥伯の如きは、わざ〳〵川柳の、

『神農も初めはウヅに目を廻し』

といふ句がある。ウヅと云ふは毒草であつて、神農も藥草であらうが、毒草であらうが、當時は手當り次第これを嘗め、毒草ては目を廻して、而して後にその毒草である事を知つたのであるから、吾等もウヅに目を廻すが如き事は覺悟の前でなければならぬ。といふ事を說いてゐた。



青木周藏子

第三十七　平民的急進主義

當時予の立場は平民的急進主義とでも云ふべきものにて、鹿鳴館の舞踏とか、徒らに外國の文明を粉飾するとか、殊に外國物質文明を崇拜するとか云ふ事は大嫌ひであつた。而して外交の要は必ずしも外人の服を着、外人の食を喰ひ、外人の如く踊り、外人の如く考へ、身も魂

と當初から役人にならんとする樣な考は一切持たなかつた。平たく云へば當初から大臣希望者でもなく、又た議員希望者でもなかつた。予は唯だ世の中の政治を吾が思ふ樣に動かし導かん事を欲したる迄にて、それ以外には何等の功名心も無ければ、名譽心も持たなかつた。併し極めて微力ではあるが、世の中を予の是なりと思ふ方に導かんとする志は、若しこれを野心と云ふならば、その野心は燃ゆるが如くあつた。

如きは、何となく伊藤公に對して、宛然一敵國の狀を呈し、却て伊藤公の一存にて、思ふ樣には參らない事も多かつた。而して伊藤公を助けて此の改革をなしたる井上毅君の如きも、その胸中伊藤公の所信が聊か鈍ぶれたるをはがゆく思ひ、伊藤公との間に彼是論爭の結果、その身は宮内省圖書頭の閑職に移つてゐた。併し當時に於ては何と云つても大立物は外務大臣

も外國化するに非ざれば、その目的を達する能はずとは考へず。されば『國民の友』初號には、貴族的文化主義に批評を加へ、西園寺公の如きは此れを讀んで、

『貴君の書いたものは、何やら社會主義の要素が含まれてゐる樣だ』

など云はれた事を記憶してゐる。又たその第二號には、『外交の憂ひは外に非らずして内にあり』といふ題目にて、内を忘れて外にのみ奔る外交政策を攻撃した。これに就いてはかねて予の目からは保守的の官僚派にして、所謂刀筆の吏の毛の生えたるものに過ぎずと看做したる井上毅君などからも、至極同感であるとの贊成を得た。併し當時予の最も恐るゝところは、歐化主義者よりも、その反對に立つ反動者であつた。

されば予の同情は何れかと云へば、内地雜居反對などゝ云ひ、昔の攘夷論者の如き口吻を繰返へす者よりも、寧ろかへつて井上、陸奥、其他の歐化主義者にあつた事は、論を俟たぬ。然るにかねて明治政府に對し、反對の位置に立つ自由黨若くはに於てさへも、井上侯が萬事を犧牲にしても、條約改正を成就せんとの熱心から、その談判が國家の體面を傷くるも顧ざらんとする有樣を見て、不快に思ふ者ありて、反對論は内外から一時に湧出した。

而してそれが爲に政府は、保安條例を制定し、凡有る民間の論客をして、帝都の外に追放する事となつた。當時井上毅君の如きも、井上侯の條約改正には頗る反對し、その爲に辭職せんと迄に考へてゐたらしかつた。予はその顏色を察し、密かに語つて曰く、

『餅屋は何處に行つても餅屋であり、酒屋は何處に行つても酒屋である。御身の今日あるのは、明治政府あるが爲だ。今更ら明治政府を飛出したからとて、急に御身の偉くなる見込みも無し、寧ろ今日は隱忍して、他日を待たれた方が御身の爲にも、日本帝國の爲にも得策ではあるまい乎』

と云つた。君も當初は憚る所あるが如く言を左右に托したが、後には予が誠心を察し、その心事を打明けた。斯くて君は『此

ふな』と云つた。されば予はこの事を是迄口外しなかつたが、今日ではこれを云ふも差支へないと思ふから語りて置く。

而して當時最もその反對に急先鋒は、實にお傭佛蘭西人ボアソナード氏であつた。此人の如きは實に吾が帝國の爲に謀つて忠なる人と云はねばなるまい。予は保安條例實行の際には、急性腸カタルに罹つて打臥してゐた。或朝虎ノ門外琴平町に下宿してゐる阿部氏が飛込んで來た。餘り早いから『何事か』と訊いたら、『やられた』と云つた。而してその後から警官が尾行して來た。即ち阿部充家氏も亦た保安條例に罹つた一人である。

予は此の病氣が仕合はせとなつて、その厄を逃れたが、或は病氣をしなくとも逃れたかも知れないが、唯だ明治二十一年の新年には病の爲に『國民の友』を一回だけ休刊する事となつた。

明治二十一年二月には井上侯外相の後を、思ひ掛けなくも改進黨の首領大隈侯これに代り、四月には伊藤公は樞密院に退き、四月には黒田伯が首相となり、此に黒田内閣が出で來つた。而して井上侯も又た黒田内閣の下に農商務大臣となつた。

第三十八　同志社大學運動

この際に於て記憶すべき事は、同志社大學運動である。新島先生は最初から同志社に身も魂も打込んで居り、行々はこれを大學とする希望を持つてをられた。されば先づ明治十七年頃には、明治專門學校といふ名義の下にて、その募金を始められたが、その主意には賛成する者があつたが、金を出す者は思ふ程無かつた。

予は平生新島先生に恩義を感じ、何時かは報いる機會のあるべしと考へてゐたが、今やその機會の到來したるを認めた。予は家を舉げて東京に移轉する事に就いては、別段新島先生の賛成を需めなかつたが、先生は平生予に成可く田舍に在つて勉強しろと云つてをられたが、此際には最早や予が中原に向つて腕を試むべき時節が到來したと認めたのであらう。予の上京に反對せざるのみか、寧ろ贊同し、『國民之友』の如きは、最初の購讀者の一人となられた。

× × ×

當時新島先生を助けて專らその衝に當つてゐたのは、金森通倫氏であつた。予は先生に向つて明治專門學校などゝいふ名目よりも、寧ろ當初から大きく同志社大學と持ち出した方が宜い

らんと云ひ、而して募金をするには、京都、大阪等よりも、寧ろ東京に押出してやる方が効果があるべしと云つた。而して新島先生の依賴に應じて、所謂同志社大學の主意書なるものを起稿する事となつた。所謂世間に評判ある『良心を手腕に運用する人物を養成する』といふ主意書がそれである。

× × ×

先生が如何にして井上侯と近づきとなつた乎、その邊は予が深く知る所ではないが、井上侯の側に於ては、恐らくは歐化主義の一端として、宗教も基督教を日本に輸入するの必要を感じ、その爲には新島先生及び同志社が適當の機關であらうと認め、その力をこれにかさんとしたのではあるまい乎と思ふ。又た或人の如きは、慶應義塾派が餘りに有力にして、民間の凡有る方面を專斷してゐるかの如き傾きがあつたから、その牽制運動の爲にも然かしたのではあるまい乎――當時の早稻田は漸く學校が成立したばかりで、とても今日の盛大は豫想されなかつた――と云ふ説であつた。

何れにしても井上侯が肝煎りとなり、それには青木、陸奥、野村、三好（退藏）その他の贊成者があり、殊に陸奥伯の如きは、募金に就ても種々の智慧や、才覺を供へて吳れた。然るにその間に於て井上侯は去つた。而してその後に大隈侯が出で來つた。大隈侯は自ら早稻田の創立者であれば、同志社募金の爲に肝煎る抔といふ事は、聊か普通の人であれば遲疑すべき所であるが、そこは流石に大隈侯にて、一議に及ばず井上侯の後を引受け、遂に外務大臣官邸に大隈侯が主人として、都下の澁澤子爵、岩崎彌之助男爵、其他の富豪、有力者を集め、井上侯が自ら筆を取つて勸進帳をつけた。斯くて一夜の中に數萬圓の寄附金が出來上つた。而して井上侯、大隈侯も各々一千圓の寄附帳についた。

これは同志社と世間とが初めて接觸したる時であつて、その席には新島先生以外に金森氏及び予、其他の人もあつたが、今記憶してゐない。兎も角も微力ながら予は新島先生の代理となつて寄附金募集の爲に、又た都下の有力なる各新聞記者を集めて、その寄附金の贊成者たらしむべく、彼是奔走し、何れもその贊成を得た。殊に保守黨の本丸と目指されたる日本新聞紙上に、陸實君が此の募金に就き贊成の説を掲げたのは、其の言論しが、如何に氏が苦衷を語つてゐるかが思ひ知らるゝ程、その曲折を盡してゐた。

（昭和四年六月十九日、民友社にて）

第四卷第二號

「自然科學」特輯

地理研究號

九月發賣＝內容

- 口繪 岩漿の惡戲
- 日本島の出現に就いて……東京高師教授 藤本治義
- 岩漿を寢床としてゐる日本……京大助教授 本間不二男
- 日本の聚落（殊に村落立地の地理學的考察）……早大教授 小田內通敏
- 日本大地形機制の漂移說的解釋……理學士 北田宏藏
- 岩漿風化の經濟的價値……東北帝大教授理學博士 渡邊萬次郎
- 日本植物の垂直的分布……東京文理大教授理學博士 矢部吉禎
- 瀨戶內海地帶の科學的考察……廣島高師教授 下村彥一
- 鄉土史研究と其教育……京大教授文學博士 西田直二郎
- 中等教育に於ける地理教授に就いて……京大教授文學博士 石橋五郎
- 鄉土地理教育の必要……北海帝大豫科教授 田上政敏
- 地形圖利用の一般化に就いて……陸軍步兵少佐 入江三一
- 現今日本地理教授上の缺陷と其對策／地理教育上鄉土地誌の價値に就いて……全國中等學校地理科教諭四十氏執筆
- 附錄 地理學關係諸雜誌論文目錄

（年四回發行）價壹圓五拾錢 送料八錢

發行所 東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

好評嘖々◇新選名作集◇各册壹圓

送料各廿錢

最新刊

新選 片岡鐵兵集

（523頁）

（內容）金錢に就て、色情文化、舌、寒村、雲とゴルフの球、愛情、綱の上の少女、肥つた男の感傷、悲しい男、薄情者、幼い日のこと、瓣膜症の少年、幽霊船、甘い物語、小犬、藝術家の怒り、惡夢、直角、美しき自動車、ある結末、早業、身を固める、冷酷、我儘を云はない仲、今日と明日、生きること、にがい話、夫婦、藝術の貧困、この生活、年少の友、面白くなる、小兒病、打倒六鄕會、微妙な貸借、立志、あんな男こんな男、菜の花月夜、通俗小說二三、（明るき日の物語、月の洩る家にて、椅子の脚の曲線、紫の花）

最新刊

新選 宇野千代集

（518頁）

（內容）街の灯、骸骨と母、過去、愛篇二章、おきぬと三平、母親、世の常の戀文、ランプ明るく、倉田仁吉の家、鸚鵡夫人、或る半日、墓參り、冬の日記から、二人の女とその男、お糸叔母と私、借りたもの、故鄕の家、貞操の青い荷札、月夜の便り、一年間、白い木柵のある家、その娘のこと、その女と金、一事件、良人におくる一信、山あひの村での話、些事、夜、私と郵便配達夫、中學生と漢文の先生、老女マノン、雨の日、眞珠、生きて居る父、醒めたる家、雪、往來、家、母よ、冬日閑夢、三千代の嫁入、よしや遊さに、夢の話、誕生日、シヤムの國のお妃さま、吮唱、稻妻、少女からの手紙、幸福、あなたの前ですが、生母、跫音、妹への手紙、靑い空、金、失樂の歌、處女、漆黑色の憂愁、路上行人夢、夢、ポプラハウス物語

新選 島崎藤村集 五二二頁

新選 里見弴集 七二〇頁

新選 吉田絃二郎集
新選 北原白秋集（詩歌篇）
新選 北原白秋集（散文篇）
新選 前田河廣一郎集
新選 前田河廣一郎集（戲曲篇）
新選 山本有三集

新選 橫光利一集
新選 菊池寬集
新選 谷崎潤一郎集
新選 永井荷風集
新選 藤森成吉集
新選 長田幹彥集

新選 武者小路實篤集
新選 小山內薰集
新選 久保田万太郎集
新選 宇野浩二集
新選 近松秋江集
新選 岡本綺堂集

新選 葉山嘉樹集
新選 森鷗外集
新選 夏目漱石集
新選 豐島與志雄集
新選 相馬泰三集
新選 久米正雄集

發行所 東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

新選名作集◆最新刊◆

各冊壹圓
送料各廿錢

◇改造社
東京芝區愛宕下町
振替東京八四〇二番

新選 徳田秋聲集

—內容—

長篇小說
何處まで。
奔流。

短篇小說
犧牲者。
悲しみの後。
無駄道。
解嘲。
黑い幕。
和む。
犬を追ふ。
蟹。

新選 西條八十集

—內容—

(詩集)春日哀歌、空の羊、蠟人形、戀の棺、わが家、登極、畏怖の時。(譯詩)佛蘭西詩抄、愛蘭土詩抄、米國詩抄、英國詩抄、英國童謠抄。(抒情小曲集)水車の歌、雪女、少女と罌粟、うしろすがた、赤き凧、三日月、妹に、懷しの敵、支那人街の鳩、哀吟集、民謠小唄抄、甲州小唄、朝霧、美男、昔のひと。(童謠抄)山の母、子供の生活、玩具の舟、夕顏、お菓子の家、花と草木、獸のうた、鳥のうた、蟲のうた、唱、落葉、天と地、四つの物語、わが家の人々、見知らぬ人々、寂しい人々、鉛の兵隊、ながれ椅子。(小說)陸奥へ行く、四萬より。(戲曲)犬、亡國の春。(詩論・詩話抄)ランボオの初期の詩篇の研究、マラルメの象徵的手法、パルナシヤンと我國の詩壇、童謠論、詩に關して。(隨筆抄)……

新選 佐佐木茂索集

—(內容)—

魚の心、或日の日記、雲に鳥、海邊の町で、古い新芽、影、ふるさとびと、逆目立つ、兄との關係、所謂生き死に、父子一面、父のおもはく、竹植ゑて、讀唇難、長い一日、乾笑、或冬の日に、おもふは—、人おのおの、傷つく顳顬、微妙な注意、ゆきづり心、竊笑、生活の一例、青きを踏む、選擧立會人、水いらず、翅鳥、おぢいさんとおばあさんの話、玉城の從兄、おしゃべり、覗柳、麗日、來往、或日步く、喪懷、赴くまゝ、曠日、ある死亡の死、病、夢ほどの話、莫迦なはなし、風俗史一挿話、空氣の皺、輕く自嘲、母の姿、宅、女の手紙、蜂、動機、誰の艷書、小畑の白銅、行きそびれ、袱紗地見、對天の閑休、亡びる、話しが…、金など、生き……

新しき村十周年記念祝賀出版

十年

菊判八六〇頁 挿畫十六葉入◆定價八圓（送料卅六錢）

編輯者

志賀直哉
里見弴
佐藤春夫
梅原龍三郎
岸田劉生

現存作家中巍然たる喬木の觀ある武者小路實篤氏が、其抱懷する人道主義のよき使徒たらんために、天孫降臨の聖地日向に『新しき村』を創始して正に十年！ 本書は氏が營々十年の勞を多として贈られたる我文壇、詩歌壇、畫壇、七十氏に餘る大家連の會心の作を網羅したる藝術の一大パノラマである。加之快中の快事たるは此際の購讀者先着一千名を限りて、武者小路實篤、里見弴、佐藤春夫三氏の肉筆サインを得るの特典があることだ。

發行所 東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

現代日本文學全

(35) 第三十五回 十月上旬 配本豫定

現代戲曲名作集

この一巻には歌舞伎もあれば新劇もある。皆がみな代表的名作家の代表的名作だ。多忙を極めた明治大正劇壇の

内

河竹默阿彌 河内山と直侍

福地櫻癡 初稿春日局

松居松翁 阪崎出羽守

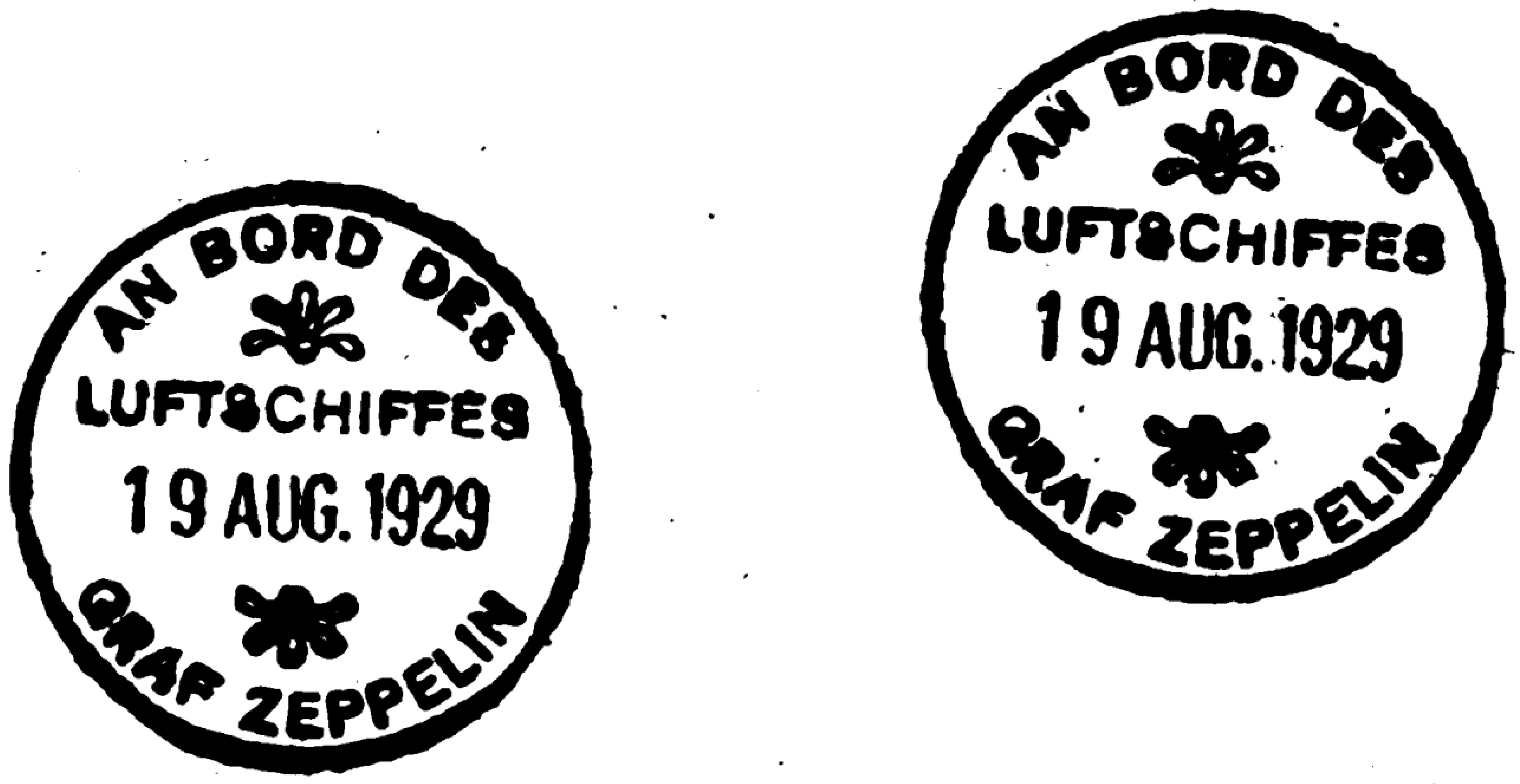
岡鬼太郎 眠駱駝物語 埴生村

中村吉藏 井伊大老の死

小山内薫 第一の世界 息子

木下杢太郎 和泉屋 吉利

發行所 東京芝區愛宕下町 改造



ツエペリン伯號で託送された本橋の記念スタンプ

モン・アミ

久米正雄

一

千九百二十八年十二月卅一日、大陸時の二十一時四十分に、マルセイユを發したPLMの特急車は、歐羅巴中で一番早い速力で、留め鋲の彈け飛ぶ程、猛烈に車體を搖り乍ら、巴里に近づきつゝあつた。

私達はマルセイユのK君の世話で、北野丸が着いた其晩、兎も角も一旦巴里へ行つた方がいゝと言ふので、其列車の寢台に收まつて居た。豫定通り行けば、列車は朝の七時に、巴里のガール・ド・リオンに着く筈だつた。で、寢る時、念の爲に列車ボーイには、六時になつたら起して呉れるやう、覺束ない英語で、賴んで置いた。ボーイへのチップも、K君が敎へて呉れた通り、最初に寢台を作つて呉れた時十五フラン、降りる時十五フラン、都合三十フランもやれば（日本の二圓五十錢位に當らうか、）大威張りだとの事に、其通りやつて置いたから、特別に親切であるに違ひない。それに妻の日本服が特に彼の好奇心を牽いて、從つて多大の關心を持つて呉れて居るらしく、何かと云

は、笑顔を以て世話をして呉れるやうだ。
　が、其ボーイが、吾々を起すべく戸を叩く前に、私達は既に起きて、寢臺から降りて居た。明くれば二十九年の元日だ。
　車窓のブラインドを上げて見ると、息で凍つた硝子越しに、拂曉の佛蘭西田園風景が、仄暗く仄明るく見えて居た。懷しい赤い屋根だ。日本の文化住宅と違つて、古びて落着いた赤瓦の屋根だ。それに低い築地塀が、その田舍家の形を畫面に整へる。なだらかな丘だ。その裾や懷に、黑い枝を揃へた林がヂンク版の名畫のやうに煙つて居る。所々、雪が殘つて居るらしい。が、驚くべき事には、其地面を點綴し、道の邊を緣取る芝草は、此の眞冬を淺綠に明るんでゐる。――なだらかな丘と、黛色に煙つた林と、赤い屋根の家と、そして綠の芝生。私は何か印象派以前の、さうだ、寧ろバルビゾン派に近い畫家の心を感じた。
　そこへ、雲を破つて朝暾が現れた。初日だ。何年來見た事のない日出だ。しかも初めて踏んだ異郷の空で、ゆくりなくもぽつかりと大らかに、日本のそれの如く光りを失つた朱の、いのつと昇つて出た初日だ。
　私は、再び少し

苦笑した。歐羅巴の土を踏んで早々、望鄕の思ひが沸いた譯ではないが、何か、さうした富嶽の畫でも描く事が、一番其場の氣持に近かつたのだ。
　列車ボーイが、本當に戸を叩いて呉れた時は、もう六時半近かつた。
　ボン・チュール、ムッシュウ！　彼は私達が既に身なりを整へて居るのを見ると、さう挨拶し、それから、グット・モーニング、マダム！是から半時間で、吾々は巴里へ着くであらうと、英語で云ひ足した。
　成程、もう汽車は、巴里の鶴見か大森邊を走つて居るらしく、都市の外廓らしい建物が、所々封建時代の古びをさへ交へて、窓を擦過し去つた。
　私達は何となく氣が揉めて來た。
「……ねえ、鳥渡、迎への人は本當に來て居て呉れるでせうか。元日の朝、こんなに早くでも？」
　妻は、昨夜、餘り氣

口の方は、敵に買つたから、必ず來て居るに違ひない。」

私達は、矢張りマルセーユのK君の斡旋で私の舊知の畫家である相澤の外に、念のため、巴里で案内人をして居る原口と云ふ人に、タメシフサイ、アスアサ七ジ、リオンツク、デムカヒタノム。と打つて置いて貰つたから、十中八九安心だつた。が、相澤の方は？

「相澤さんつて、どういふ方？　さう云ふ事は、邦に確かな方？」

妻も同じ思ひで、さう訊ね出した。文士畫家のズボラは、彼女も知りぬいて居るので。——

「さア、僕達の電報さへ見れば、ね。僕達が途方に暮れると思ふだらうから、きつと來て呉れるだらうがね。併し、あの住所に、果して今でも居るかどうか。近狀がまるで分つて居ないんだから、分らないよ。……」

さう云つて私は妻に、改めて相澤の事を説明した。と云ふのは、私は日本を出る前に、實は、相澤の後援者で、——相澤のと云ふよりは、寧ろN——洋畫會の後援者で、鎌倉扇ヶ谷の奥に住んでゐるM氏から、巴里に於ける彼の近狀を、詳しく探つて貰ひたいと云ふ依頼を受けて居たからだつた。

相澤八郎と云へば、少し記憶力のいゝ人なら、五六年前、N——洋畫會の創立當時に有望を謳はれた新進畫家のあつた事を知つて居やう。そのセザンヌを塗り過ぎる色彩と、線の片寄し風な寫實とは、一部の人の反感を買ふに充分で、何でも彼は、畫を描く時その畫布の一方に、セザンヌの三色版を、——それも惡い版の複製を、必ず備へつけて置いて、一筆毎に照合するのを忘れない、と云ふ評判さへ傳はつて居た。が、併し、さう云ふ人々でも、彼の有り餘る才氣と、達筆とは、認めまいとしても認めざるを得なかつた。そして若年にして、よ——會の會友たる名譽を贏ち得て居た。

が、彼は、やがて先輩や批評家の要望の中に、渡佛してから、もう五六年、いや、もつとになるかも知れない。が、其間、まだ一度も、——いや、渡佛した年に、一度だけ小さなスケッチ板位な風景を、二枚ばかり送つて來たやうだつたが、——それつきり、一度も、作畫を見せた事がないばかりか、近頃では、其生活の近狀さへ、杳として分らなくなつて了つた。何でも、私の耳に、風の音信の如く傳はつた所では、彼は何か友達の女とかを取つて、友人の畫家達から毆られたとか、絶交されたとか、そんな評判だつたが、どうも前者の噂は噂としても、其後、巴里歸りの人達から、餘り噂を聞かない所を見ると、人と交りを絶つて自分一人で生活して居る事は、事實らしい。

只、それでも時々、眞實に金に困ると、三月か半年に一度は、彼の後援者である鎌倉のM氏の所へ、幾らく送金願ふ、と言つて來る。

M氏も、まア約束は約束だから、最近餘り景氣が好くない中乍ら、云つて來る金だけは、兎に角送つて置いたが、第一、彼が今どう云ふ風に勉强して居るのか、どんな生活をして居るのか、是から先どの位居るつもりなのか。果して彼の畫は今でも、後援するに足るべく有望なのか。——それを、今度私が渡歐するに就いて、實地に、探つて來て吳れとの、依賴を受けたのだつた。

そして私も、相澤とは、彼の醫學生時代から、本郷邊のカツフェーで知り合ひになつて、割合に親しい友人だつたので、其M氏の依賴を果す果さないに係らず、巴里に於ける彼を訪ふ事は、今度の旅行の、一つの目的にすらなつてゐた。

「……まアさう？　そんなら其方、巴里は隨分古い譯ね。」

「うん。もう巴里の事なら、裏の裏迄知つて居る筈だ。」

「ちやア、其方、ほんとに來て居て下さるといゝわね。」

……汽車は、日本の汽車と同じやうに、壁の薄い洞窟の反響と同じ音を立てゝ、停車場のプラツトフォームに入つた。

私は立つて、廊下の、廣い硝子窓から、首を出して見た。

初めて見る巴里の、ギヤール・ド・リオンの、大きな蒲鉾型の、寧ろ車庫めいた建物が、灰墨色に、見えて居た。徐行するにつれてフォームと、其處に立つて待つて居る人が、はつきり見え出した。元日の、早朝のせいか、寂しい霜氣の漲つてゐるフォームには、人影が尠なかつた。その人影の中で、私は日本人らしい姿を、殊に相澤の姿を、一生懸命物色した。

汽車は止つた。が、誰も來て吳れさうもなかつた。

私達は、情け無ささうな顏を見合せて、兎に角、列車ボーイに荷物の宰領を任せたまゝ、フォームに下り立つた。

隣り近所では、それでも出迎への佛蘭人らしいのが、夫婦か親子か分らない位の年頃の婦に、火のやうな接吻を交して居る。その又少し向うでは、男同志、チユツとビフテキを燒く程の音を立てゝ、抱きついて頰を吸ひ合つて居る。——私達はやゝ度膽を脫かれて、ボンヤリ立つて居た。

と、立派な外套を着て、懷ろ手をした日本紳士が、急ぎ足にやつて來た。そして私達を見付けると、更に足を早めて近づいたが、やがて慇懃に帽子を取つて、

「——クメさんと仰有る方ですか。原口です。」

と云つた。

冷たい、事務的な、巴里の出迎へだ。が、私達に取つては、尠くとも救ひの聲だつた。それにしても相澤は？

「あ、さうですか。有難う。元日早々、どうも御苦勞さまでした。」

「いゝえ。――遲くなつて濟みませんでした。何しろ今日は、珍らしく汽車が、豫定の時間に着いたもんですから。――此方の汽車は、大抵三十分や一時間は遲れるもんですからね。」

「時に、あの、貴方の外には、出迎への日本人が見えてゐませんでしたか。」

　私はさう訊ねざるを得なかつた。

「いゝえ。――誰方か、外にお迎へに出てゐる手筈なんですか。」

「えゝ。――相澤つて云ふ、畫家が來てゐるかも知れないんですがね。來てませんでしたか。」

「はア、相澤さん？……」

　案内人の原口氏は、首を傾けた。

「知つてますか。巴里では古い方ですが。――」

「……あゝ、相澤さん。はア、名前だけは私も存じて居ります。――が、お見えにならないやうでしたよ。」

「ぢやア、矢つ張り住所でも變つて、電報が着かなかつたかな。」

　私は獨語のやうに云つた。

「さうかも知れませんね。何でも、あの方は、モンパルの方でも、變つた方のやうに聞いて居りますから。そして失禮ですが、餘り評判のよくない方ですよ。」

　原口氏は、さう云つて改めて私達の樣子を、何者だらうと云ふ風に眺めた。氣のせいか、何か相澤の友達なら、ロクな者ではないと云ふ風に。――

「さうですか。」

「アノ、荷物は是だけですか。」

「いゝえ、もう二つトランクが預けてあります。」

「では、兎に角、出てタクシーを呼びませう。」

　それでも私は、リオン停車場を出る迄、向うから相澤が、アタフタと驅けつけて來る姿を、頻りに探し求めたが、とう〳〵彼は來なかつた。

「お宿は？」

　タクシーに乘ると、原口氏は云つた。

「ホテル・デイエナと云ふ所が、いゝ方では手頃だと聞いて來ましたが。……」

「はア、彼處なら殆んど一流です。が、それだけに着物や何か、窮屈は窮屈ですよ。」

　さう云つて、氏は妻の、着くたれた和服姿を眺めた。

「さうですか。――では何處がいゝでせう。」

　かう云ふ時に、相澤が來て居て呉れさへすれば、遠慮なしに何か云

へるんだがな、と又しても思はざるを得なかつた。

「デイエナの、もう少し先に、アンテルナショナルと云ふ、よく日本人を扱ひつけたホテルがありますがね。」

「あゝ、さうですか。さう云へば、その名も聞いて居ました。」

「其方になさいますか。」

「えゝ、どうか。――」

二

マロニエの芽が吹き、凱旋門のアーチを透して、ヴェールのやうな薄雲が流れ、遠くから見えるエッフェル塔が、紫ずんで來る頃には私達もやうやく巴里馴れて來た。それも寒氣の一日々々薄らぐに連れて、此の大都が、――初め汚なく煤けて、寧ろ情ない位に見えた古い都市が、親しいものになつて行つた。數の勘定から初めて、一言二言の佛蘭西語も、口からほぐれ出るやうになり、一人でタクシーに乘つても、行く先が二三度で通じるやうになると、私達はいゝ氣になつて、巴里中を歩き廻つてゐた。

心置きなく話し合ひ、案内して貰へるやうな友達も、四五と數へ

業家で、喜劇作者を兼ねてゐる父を持つY君。二科會の中堅で、風格掬すべきH君。勉强家で仲間でも將來を畏れられてゐるI君、篤實で談話のうまいS君。温和しいK君。――さう云ふ畫家仲間の外にも、佛蘭西繪畫の蒐集家として、巴里の畫界でも殆んど名を知らぬ者はないF氏。北海道大學教授で、ソルボンヌへ通ふよりも、アカデミーのクロワキに通ふ方が、面白いと云ふO君。もとは好事家のピアニストで、有り餘る才能を抱き乍ら、餘りに音樂がよく解り過ぎるために、自分の天分に對してさへ、懷疑的に絶望して了つてゐるK君。……

併し、それらの人々を、殆んど新らしく知つたに係らず、また、例の舊知の相澤には、會ひに行く事も出來ず、邂逅する機會をも持たなかつた。

勿論、其間には、私も彼に會ふべく、屢々努力した。大使館へも行つて、其名簿を調べ、其處に書かれてある住所へ宛てて、手紙をさへ出した。若し差支なかつたら、此の手紙を見次第、直ぐ電話をかけて呉れるか、又は直接訪ねて來て呉れるやうに、と。――そして、その手紙を出して、一兩日、二三日は、殆んど外出するにも氣を配つて、

居らず」とでも云ふのだらう。きつと彼は、其後轉々と住所を變へて、放浪に近い生活でも送つてるに違ひない。――だから、其中には、何處かで會ふだらう。さう思つて、私は半ば彼を訪ねる事を斷念した。

で、其後、前に云つた畫家仲間と、モンパルナスの大珈琲店、クーポールで毎日のやうに顔を合せてからも、或時、私は仲間の消息通であるM君にかう聞いた。

「……時に君。君達はあの、N――會の古い新進畫家で、相澤つて云ふのを知らない？」

「相澤？　相澤八郎でせう。知つてますとも。あの惡刷りのセザンヌを張つた、有名な相澤ですもの。」

東洋畫に及んでは、一流の批評眼を有してゐると自稱するだけあつて、なか〳〵繪具屋のM君は、さう事もなげに云つた。

「あれは、僕の古い友人で、今度僕達が日本を出る時も、どうしてゐるか、見て來て呉れつて、或人から頼まれて來てゐるんだが、どうして居るだらう。――一體、何處に住んでゐるんだか、誰方か御存知ですか。」

「さア、ところが、そいつが、まるで分らないんですよ。どこに、どうして住んで居るんだか。――兎も角、併し、僕は被害を受けた事はないが、話に聞くと、彼も又畫家仲間では、謂はゞブラックリストに載つて居るらしいんですがね。」

「ブラック・リストつて、何か、此方で、危險思想でも抱くやうになつたんですか。」

私は鳥渡吃驚して訊ね返した。

「いや、その方のブラック・リストぢやない。たゞ、仲間うちに迷惑をかける、つて云ふ意味の危險人物なんですよ。」

「人間はいゝんだがね。」

側から、先輩株のU君が、やゝ、取做すやうに云つた。

「何でも、クラマールの方に居るつて話ぢやないか。」

もう一人が口を挾んだ。

「さう云ふ話だね。きつと、もう此頃ぢやア、誰にも住所を云へないんぢやないかな。」

「何か惡い女にでも、引かゝつてるんですか。」

私は微笑して訊ねた。と云ふのは、その仲間うちでも、此方で、女と係りが出來て了つて、拔き差しならぬ連中が、一人二人居るからだつた。

「さア、いづれ、そんな事でせうね。大きい聲ぢやア云へないが。」

「俺なんぞ、小さい聲でも云へやせんがね。」

と、S君が、關西訛りを交へて、呟くやうに笑つた。と云ふのは、

彼も又、さう云ふ種類の女、所謂アミ（女友と譯するは當らない氣がする）を持つてゐるからだつた。そして現にその女を、自分の側に連れて來て居るからだつた。——その女、シュザンヌは、自分の事を、彼女の知らぬ日本語で、問題にされてるとは知らず、隣席の大人しいI君を相手に、自分の犬の失踪した話か何かを、大仰に語つて聞かせて居た。

「だが、」と、側から又M君が、批評の口を出した。「Sのなんぞ、まだ相手が、」と、そつとシュザンヌの方を窺ひ乍ら、「かう云ふ强い、ハッキリした女だから、いざと云ふ時に、却つて仕末がいゝかも知れんぞ。」

「いや、どうしてどうして、」Sは苦笑し乍ら、「此の剛情さで、胸ぐらでも摑へられて見ろ。敵ひやせんから。わしや今から、それを思ふと、日本へ歸るつて云ひ出せやせんがな。ほんまに。——」

「併し、まア云ひ出して、云つて聞かせて見ろ。きつと此の女は、分りがいゝから。そして斷念めがいゝから。それに何だよ。斷念めのいい悪いに係らず、此の女なら、さう可哀さうでないからいゝよ。これがあの、I君の女の[illegible]

「ほんとにあのアンリエットは、純日本式の、娘みたいだからな。」

「併し、」又M君が云つた。「女と別れるんで、一番別れ際のよかつた奴は、Oだよ。彼奴はほんとに手數が懸らなかつた。何しろ發つ日の、發つ時間まで、何も知らせないで居て、停車場へ行つてから、改札口の前で、女にかう云つて別れたんだからな。實は今まで、お前が心配すると思つて、打開けなかつたけれど、今度俺は父が危篤なんで、どうしても一度日本へ歸つて來なくちやならない。が、すぐ又歸つて來るから、決して心配しないで、待つて居て吳れ。ぢや、左樣なら。……さう云つて、女が稍ゝ呆氣に取られてゐる間に、無茶苦茶にキッスを一つして、それから突き放すやうに、改札口を出て了つたんだつて云ふからな。」

「そしたら、女はどうしたい。」

「さう先手を打たれたら、泣いたり喚いたりしなかつたさうだよ。毛唐には、却つて其位がいゝんださうだ。が、何しろ日本人と來ちやア、人一倍人情家なんでね。」

「さうだ。變なモデルに摑まつて、いつの間にか同棲させられつちま

行つて來るよ。さう女に云つたきりでシベリア鐵道に乗つて了ひさへすれやア、それつきりでも濟むんだからな。」

仲間で、古參株のS君が、さう決論した。

「ほんとにH君はどうするだらうなア。H君の事だから、うまく解決はつけるだらうが、根が人情家だからなア。」

誰かゞ、長大息するやうに、云ひ出した。

私はいつの間にか、相澤の話が、H君の方へ飛んで了つたのを、ボンヤリ落膽したやうに聞いて居なければならなかつた。

五

その H君が、愈々シベリア鐵道で、日本へ經つと云ふ日に、オートイユの障碍物競馬で、大統領の大懸賞がある日だつた。私は丁度、日本から私よりも更に競馬好きの、神戸の土屋と云ふ貿易家が、わざわざやつて來て居たので、其人と一緒に、競馬場へ行き、終ると直ぐ飯を喰つて、それから發車の時間迄に、急いで其方へ驅けつけなければならなかつた。

私は急いで、土屋氏と一緒に、牡丹屋と云ふ日本料理屋で、夕飯を濟ますと、H君が可なり酒好きなのを思ひ出し、日本酒を一罎車中の土産に包ませて、タクシーで北停車場迄驅けつけた。

「大線路の方か？」

運轉手が聞くので、分らない乍らも、さうだと答へると、自動車はうまく、外國行のプラットフォームがある方へ止つた。

私が入つて行つた時、廣大で陰欝な北停車場は、建物の上部の硝子張りを透して、もうすつかり蒼く暮れてゐた。そして割りに乏しく感ぜられる電燭の下に、人々が黑く塊まり、幾つもの列車が、何處からかスチームを噴いて、のつそり横はつてゐた。此方の停車場は、歩廊と線路との平面が、餘り高低がないので、何だか危險なやうな氣がする。大停車場の常として、ゆる〳〵其處の線路へ、ガッチリした列車が音もなく入つて來ては、連結させられたりして居た。

北へ行くんだから仕方がないかも知れんが、それにしても、餘りに陰氣な停車場だ。

が、さうしては居られないので、五十サンチーム錢を入れると、入場券の出る自動機械で、早速私達はチッケットを買ふと、プラットフォームへ出て見た。

同じく送りに來てゐる仲間の、J氏やN氏が、丁度其處に立つてゐた。

「あ、クメ君ですか。H君はもう汽車に乗つて居ます。プラットフォームは第四番ですよ。」

「さうですか。有難う。」

私たちは、四邊の騒音と、自分たちの氣持に促されて、あたふたと驅け出すやうに、其方の歩廊に向つた。

黒い、一枚の鐵板張りのやうな、シベリア行列車が、どつしりと其一方に着いてゐた。割りに乘客はなかつた。が、それでも其處此處に、長い旅をする人らしく、防寒具に物々しく身を固めた連中が、送りに來てゐる人々に取卷かれて、何か密談でもするやうに、ヒソ〱話し合つてゐた。陰氣だ。

隨分歩いて、先の方へ行くと、向うに七八人日本人らしいものばかりが、固まつて立つてゐる中央に、H君の姿が見えた。怒り肩だが、それが淋しく見えるH君の姿。……

「……やア、後れて失敬！」

私たちは驅け寄つて、手を出した。

「やア。君も來て吳れたのか。又直ぐ日本で會へるんだから、わざ〱來て吳れなくてもいゝのに。」

H君の眼は、さすがに濕んで居るらしかつた。

「でもまア、是でも巴里へ殘る人の心算でね。」と、云ひ乍ら私は例の

後だと思つて飲んで吳れ給へ。」

「メッシ・ボークー！」H君はさう云つて、更に私の手を握つた。「そいつは有難う！」

さうして彼が、其四合罎を、嬉しげに取上げた時、ふと、傍から、黒い洋裝をした女の人の手が、素早くそれを奪ひ取つた。

「H！」それから先は、早い佛蘭西語で、何か云ひ留めるらしい。

驚いて見ると、それは前齒の可愛く出た、優しい日本人みたいな整つた顏の、H君のアミ・アンリエットだつた。

「大丈夫だよ。寄越せ！　失禮ぢやないか。」

H君はさう云つて、又アンリエットの手から、日本酒の罎を引つたくらうとした。

アンリエットは、仕方なく、それを渡すと、涙を溜めた眼で、私の方を見乍ら、何か佛蘭西語で云つた。

「君、アンリエットさんがね。」傍に居たY君が通譯して吳れた。「H君が餘り飲み過ぎて、途中で身體を壞すから、酒は一際持たしてやるまい思つてゐたのに、つて、さう云ふんだよ。」

「あゝさうか。そいつは惡かつたね。パルドン・マダム！　パルドン！が、もう仕方がないや。酒飲みに樽を見せちまつたんだから。」

「いや、難有う。いゝんだよ。僕としちやア、ほんとに難有かつたんだ。が、此奴、（と日本語で）ほんとに今になつて迄、うるさくて困るんだよ。おい、アンリエット！（佛蘭西語で）もうお前は歸れ、もう居たつて仕方がないから、歸つた方がいゝぞ！」

「まア、さう云ふなよ。（それから佛蘭西語で）決して心配するな、アンリエットよ。」

H君の親友で、アンリエットとも親しいI君が、さう取做した。そこへ、又他の見送人が來て、其場は其儘取紛れて了つたが、何だか、私は彼女に濟まないことをしたやうに、心が痛んでならなかつた。

さうかうして居る中に、發車の時間が來たらしく、車掌らしい男が、H君に注意した。

「あゝさう。おやア諸君。どうも難有う！」

H君は云つた。

「左様なら！　御氣嫌よう！」

皆も口々にさう云つた。

「ボン・ボヤージ！」私も一人前らしく、佛蘭西語で挨拶した。

「何、ボン・ボヤージ？　君の方こそ、此方からボンボヤージぢやないか！」

H君がそんな事を云つて、汽車のステツフを上らうとするところを、アンリエットは急いで飛び付いた。そしてH君の首に縋つて、唇を求めて最後のキッスを押しつけた。が、H君はその唇を鳥渡受けただけで、猶も火のやうに求めるのを避け、手を振り切つて、そしてステップを上つて了つた。

「あゝ、」その光景を見て、私の傍に立つてゐたY君が、溜息を吐いて云つた。「もつと、長く接吻してやればいゝのに。日本人は、どうも日本人が見てゐる前だと、見えを張つていけない。もつと、人目を關はず、接吻して別れて與れた方が、よつぽど功徳なんだかなア。」

「さうだね。」私も、全く同意見だつた。

その中に、汽車は、ゆる〱出發し初めた。日本の發車のやうに、大仰に笛を吹いたり、警告を與へたりせずに、勝手に、ゆる〱出て行くのも、時に取つての哀感を與へる。見ると、アンリエットは、H君の立つてゐるデッキの、一方の鐵棒に取縋つたまゝ、何か早口に叫びつゝ、動き出した列車と一緒に、歩き從いて行く。

「左様なら！」「御機嫌よう！」「ボン・ボヤージ！」

「難有う！　左様なら！」

吾々とH君との間隔は、だん〱離れて行く。が、まだ、アンリエットは、列車と共に、もうさすがに手は放してゐるが、小走りに走つて從いて行く。

汽車は、速力をだん／＼増した。H君の姿は、プラットフォームの灯で、益々白く小さくなつて行き、ほかの、知らぬ外國人の乘客が、此の日本人の集團を見て、餘計な挨拶の手を振り、ハンケチを振つて、通り過ぎる。……

アンリエットは、まだ驅けながら、追つて行かうとしてゐる。が、汽車は、既に速力を加へて、追ひつくべくもない。

とう／＼列車は、あの大きな硝子張り天井の、蒲鉾型の車庫から、出離れて了つて、向うには蒼い暗ばかりが見えた。

ふいと、汽車を追つて行つたアンリエットの姿が、見えなくなつた。

どうしたのだらう?! 皆は不安の顏を見合せた。彼女の感情の發露のまゝに、追ふだけ追はせた方がいゝと思つて、只遠くから見て居た私達は、急に心配になつた。

中でも私は、何だか、急に彼女の消えたのが、列車の車輪にでも捲き込まれたか、それとも自分の愛人の乘つた列車の最後の軌へ、飛び込んで自殺でもしやしないか、と思はれた。

それで、いそいで小走りに、彼女の走つて行つたプラットフォーム

「おい、クメ君ぢやないか!?」

その黑い姿は、私に呼びかけた。

「え?」私は立停つた。見ると外套無しで、兩手をポケットに突込んだまゝ、所謂巴里の下級地ゴロに似た姿は、ついと近寄つて來た。

「相澤だよ。忘れたかい?」

「あゝ君か!」

私は何となく、妙な衝擊を感じた。そして一時に、相澤の全身を、見てはならぬものを見るやうな思ひで、一瞥して了つた。

「うむ。俺だよ。」

「君も、矢つ張りH君を送りに來てゐたのか。」

「うむ。先刻から、此處に來てたんだ。そして、君が向うに居る事も、知つてゐたんだが、何しろ彼方には、ウルサイ連中ばかりが居るんでね。一人で此處で別れを告げた譯さ。」

「で、Hは君が此處にゐたのを知つたかい。」

「さあ。知らないやうだつた。」

「さうか。」

私は何がなしに悲痛を覺えた。

「が、いゝさ。僕自身、送りに來さへすれば。——」

見えなくなつたら。」

私はそれを思ひ出して、彼を訊ねた。

「あゝ。さうらしかつたね。だが、それがどうしたんだい。」

「いや、俺は何だか心配だつたんでね。——だが、大丈夫だらうか。彼の女は、あの車の下へ飛び込んで、自殺でもしつちまひやしないだらうか。」

「君、西洋の女は、そんな事で自殺なんぞしやしないよ。——見給へ。向うから來るぢやないか。」

さう云はれて見ると、親友のI君も心配して行つたと見えて、何處か柱の蔭で、泣き崩れてゐたらしいアンリエツトを、慰め〱引立てて、此方へ歩いて來るところだつた。

「ところで、君は一體、何處に住んでるんだい。僕は是でも、巴里へ來てから、隨分君に會ひたいと思つて、いろ〱探したんだぜ。」

私は再び相澤に向つて云つた。

「あゝ、それは濟まなかつた。色々つまらない事があつたもんだからね。實は巴里の隅つこに引込んで、屹張り皆の居る方へは、出て行かないんだ。」

「一體、何處に居るんだい。」

私はもう一度強く聞いた。

「ひどい陋巷に居るんで、番地なんて知らせたつて、どうせ分らないだらうと思ふが、いつそそれよりどうだい、一つ今夜是から、俺の家へ行つて見ないか。」

「うむ。遠いのかい？」

私は何故か鳥渡逡巡した。

「いや、そんなに遠くはない。君がタクシー代さへ奢つて與れゝば十五分か二十分で行つちまふよ。——それとも向うの連中と、何か約束でもあるのかい。」

「いや、そんなものはない。ぢやア行つて見よう。」

私は、結局、M氏からの依頼を果すにも、絶好の機會だと思つて、承知した。

四

相澤の低聲で行先を命じたタクシーは、方向觀念の殆んど無い私を、變な裏通りから裏通りへと引廻して、とある横町の、まるで獨逸物の映畫にありさうな街燈の、淋しい家屋の前で留まつた。

「サバ、サバ！」

相澤がさう叫んで、戸を開けて降りた後、私は七法五十文のタクシー賃を拂つた。北停車場からの賃銀としては、そんなに遠くでもない

らしい。

　四邊は、併し紛ふ方なき場末の、裏街に違ひない。

「おい。此方だよ。」

　相澤が呼ぶ方を見ると、中庭へ入る門みたいな入口の所で、彼は呼鈴の釦を押して居るらしい。

　やがて、赤つちやけた燈火が點き、パチンと音がして、戸が開いた。中からは老年の佛蘭西婆さんが、前垂みたいなものをして、相澤の肩越しに、馴れぬ客の私を睨んだ。門番女だらう。

　相澤はその老婆に、何か一言二言云つて、──恐らく、珍らしい客を案内して來た、とでも云つてるのだらう。それからメッシ、メッシと謝し乍ら、私を導き入れた。

「階上だよ。五段目だ。少し遠いから、足許に氣をつけて呉れ給へ。」

　彼は、悲しげに微笑して、私を顧みた。

「大丈夫。」私は答へて、彼の後に從つた。まさか幾らブラックリストの相澤でも、俺を未知の巣窟へ誘ひ込んで、金を捲き上げた上、死體を簀卷きにして、セイヌ川へ抛り込む譯はあるまい。……

　階段を上り切ると、右手に戸があつて、古風な大きい呼鈴の眞鍮金ロー？と訊ねるのが聞えた。

　是だな、と私は思ふと、胸が何となくドキ〳〵した。どんな女だらう。聲を聞くと綺麗だが。──？

　ウイ！　開けてお呉れ！　相澤が滑らかに答へた。

　戸は開かれた。そして中の乏しげに黄色い灯で、顔の全部は見えないが、ブロンドの毛を長目に伸した、白い着物に、樺色毛絲の胴着を着た女が、痩せて、可なりいゝ姿を現した。

　ボン・ソア、ムッシュウ！

　彼女も、思ひがけない私の姿に、はつと面喰つたらしく、少し退り足をして挨拶した。

　私も會釋をして、中へ入つた。

　室内は、纖く狹いとは云へ、さすが畫家の部屋だ。汚れた壁も、古いトルコ毛氈に絞られ、ゴッホの描いたやうな、藁の布團のついた椅子さへ、何か美しさを持つてゐる。が、見廻すと、不思議な事には、畫布の一端も、畫紙の一片も見えない。

「まア、掛けて呉れ給へ。」

　私は手近な椅子に、思はず日本式の一揖をし乍ら、腰を下した。相

を、臀へ押し出すやうにして云つた。
「クメ君、是は僕のアミのマドモアゼル・イヴオンヌ。どうか宜しく。」
「いや。此方こそ。」
相澤は、更に私の事を、佛蘭西語で、昔からの友達だと紹介したらしい。
三人は腰をかけた。
と、相澤が、私の方を向いて、突然かう云ひ出した。
「クメ君。君ももう、大抵僕の生活は、此の一瞥で察したらうが、僕はもう大分前から、此の女と一緒に居て、かうした貧乏暮しをやつて居るんだよ。が、君は、それを非難しやしまいね。君なら、非難しやしないと思へばこそ、此處へ連れて來たんだが。――」
さう云はれると、私も答へる言葉が無かつた。
「いや、勿論、僕は非難なんぞしやしないさ。たゞ、君が畫の方を忘れさへしなければね。」
「おやく、君迄がそんな事を云つて吳れるのか。僕は、もう畫の事なぞは、すつかり忘れよう、忘れたいと思つてるのに。――」
「どうして又君が、そんな風に？……」
「だつて君、洋畫なんてものは、僕が一生をかけたつて、本物は一枚も描けやしないと思つたからさ。殊に僕の樣な男にはね。僕は、それやア、そんちよそこいらの畫家並みに、いゝ加減な畫なら、幾枚だつて描けるかも知らんよ。だが、僕は巴里へ來て、すつかり自分の自信を、破産させて了つた。僕は要するに、小器用で、今迄、只、何かの眞似をして來たに過ぎないんだね。僕は確に日本に居る時は、セザンヌの眞似をして、相應に認められて居た。そして巴里へ來ても、マチスの眞似もすれば、ドランのやり方も眞似、ルーオーも要れば、ユトリオも嚙つて見、ピカソやブラックの追隨者にもなれば、モヂリアニを巧みに模倣さへした。そして巴里へ來て、何でもいゝものとさへ見れば、何でも眞似して、それ相應に眞似し得たが、要するに眞似は眞似で、何らそれ以上のものでないと云ふ事を悟つたのさ。それで何十枚とある畫布を、みんな破いて、ヤケになつて遊び出した。そして其時、知り合ひになつたのが、此の女なんだよ。」
「ふうむ？」私は、何も云ふべき言葉なく、彼の次の物語を待つた。
「此の女はね。是は實は、日本人專門の、淫賣みたいな事をやつてゐた女なんだがね。身の上を聞いて見ると、如何にも可哀さうなんだ。此の女は、君、一見して、非常に若く見えるかも知れないが、是で、君、もう四十近いんだぜ。」
「へーえ、さうかい？」
併し私は、その女の顏を、改めて見直す譯にも行かなかつた。

「そして此の女はね、娘時代に、或る日本人に云ひ寄られて、同棲した事があるんださうだ。そして其二人の間には、子供迄出來たんださうだが、其日本人は、此女と子供二人を棄てて、國へ歸つて了つたんださうだ。それ以後、此の女は、殘された自分と子供と二人の生活の爲に、一度覺えた日本人から日本人を辿つて、第何十何番目に、僕と一緒になつたんだ。そして、何か此の女の背後に、深い譯がありさうに思つて、色々訊いて見ると、とうく彼女は、かう云ふ本心である事を告白したんだ。」

「ふうむ。……」

「と言ふのはね。彼女は、最初棄てられた、其の日本人に、どうかして復讐をしたい。その復讐の爲には、たとへどんな犧牲を拂つてゞも、自分の子供を育てて、それを日本の無情の親の前へ立たしてやりたい。それも普通では駄目だから、どうかして立派な、世界的な音樂家として、日本へ乘り込ませたいと云ふので、今、十二になる子供に、四つ位の時から、既にヴァイオリンを稽古させて、今でも立派な先生に就かして居るんだよ。」

「ふうむ。さうかい。」

藝術だと言ふやうな氣になつてね。それからと言ふもの、僕も萬事を擲つては、彼女の復讐に、つまり其の子の音樂の成就に、援助して居る譯さ。」

「そして其子は、幾らか才分があるのかい。」

「うむ。僕には音樂の事は、よく分らないけれども、僕が聞いても、少年のヴァイオリンとしては、立派過ぎる程立派だ。そして其子の先生も、天才だと云つて賞めて呉れるさうだし、當人も其氣で、一生懸命やつて居るらしい。日曜日の晩には、毎も此處へ來て、食事を一緒にした後、幾曲かを彈いて聞かせて、歸つて行く事になつてるから、今度、一度君を呼んで聞かせてもいゝがね——何しろ僕は、今ぢやア、もう仕方がないから、俺の畫の方の分迄、其子に仇を取つて貰ふつもりで、かうして暮らしてるんだ。何と云つても此の女も、もう三十を過ぎては、さう街上にも立てないしね。僕が棄てゝもしたら、それこそ又、更に路頭に迷つて、どんな復讐を、日本人に對して持つかも知れないんでね。」

冗談らしくさう云つたが、相澤の顏は、其時、泣き笑ひのやうな相を帶びてゐた。

女は、相澤の話が、自分に觸れてると知つてか知らずでか、恐らくは相澤が、餘りに熱心さうに語るので、邪魔をしない爲であらう。獨り自分の椅子に凭れたまゝ、窓帷の間から、更け行く夜の街を、ぢつと窺き込んでゐた。併し彼女の姿のその上に、灯火が一番明るく落ちて、その靜なポーズは、何か全く私にも、復讐の女神のやうな、陰氣な潜熱を感じさせた。

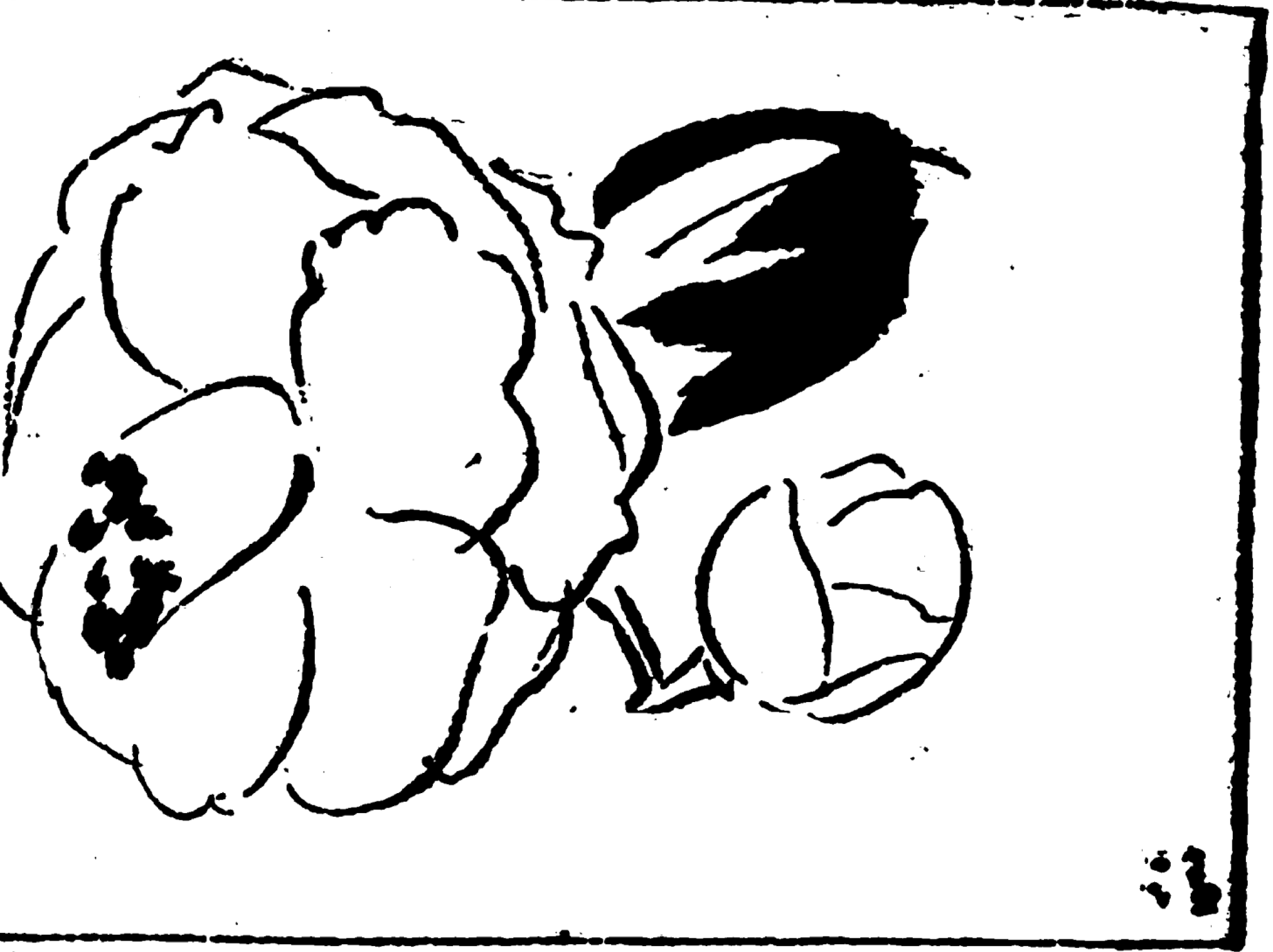
相澤の申譯めいた告白には、何らか後からの理論づけがあり、作爲があるにしても、併し此の女が、自分の子を世界的音樂家に仕立てて、棄て去つた日本の男への、よき復讐にしようと云ふのは、確に、立派な、人生を以て作り上げる藝術に違ひない。そしてそれは、確に相澤や吾々の、小手先で捏ね上げる繪畫や文學よりも、價値のある仕事に違ひない。——何か自分にも、ふいと、寒氣に似た感じと共に、そんな氣が襲つて來た。

三人は、さうして、暫らく、思ひ〳〵に默つて居た。

＊　＊　＊　＊　＊

其夜、私はホテルへ歸つてから、鎌倉のM氏に宛てゝ、短いが、要領を得た手紙を書いた。相澤は、苦んでは居るが、相變らず勉強してゐる。そして彼の仕事は、確に有望だから、若しM氏の財嚢が許すならば、どうか此上とも應分の後援を頼むと。——

（一九二九・八・一四・フリードリヒスハーフェンにて。ツェッペリンの東行を待ちつゝ）



燃ゆる薔薇

野上彌生子

一

寒い夜で、風が出た。眞知子の俥は追はれて軽く、水の上の小舟のやうにアスファルトの路を飛んだ。

一般の需要から遠ざかり、昔の馬車や、外國の古いセダン・チェイヤに見るやうな時代めいた面影を濃くしつゝあるこの乗物は、めつたに乗りもしなかつたが、乗ると彼女を奇妙に懐古的にした。黒い筒に似た車内の感じと、埃りつぽい幌の匂ひが、毎朝すぐ上の姉といつしよにその中に封じ込められて學校に通つてゐた頃のことを思ひ出さした。

眞知子は外套の襟を立て、凍つた靴の爪先を蹴込でかたく組み合せながら、前幌についたセルロイドの窓越に、明るい街の燈火

げの

から、本當は病人のことばかり考へてゐた時ではなかつた。
　俥は明神坂を下りると電車路から左に折れ、暫くして今度は右の暗い通の方へ曲つた。金澤町は何番地であつたか、車夫は曳きながら、顔だけ後に向けて聞いた。眞知子は乘る時傳へた數字をもう一度數へた。その邊の地理は車夫にも十分わかつてゐないらしかつた。併し間もなく、彼はしもたや風な格子戸の多い横町に病院を見出した。
　正面の藥局と並んだ受付には誰もゐなかつた。電燈だけ皎々と輝いた入口に立つて、眞知子は丁字形についた廊下をかはるがはる覗いた。やつと奥に通ずる廊下の方から若い看護婦が二人連れ立つて歩いて來るのを捕へることが出來た。
『大島米子さん。――』
　瘦せた高い方の看護婦は、美しい同性に對する明白な嫉視で、眞知子の云つた名前を突つ立つたまゝ冷やかに繰り返した。
『今日入院したばかりなのです。』
『ぢや、あの裏の部屋に入つた患者さんぢやない。』
　連れの看護婦がそばから口を入れた。
『あゝさうかも知れない。』
　その言葉といつしよに、二人はなにかお互ひだけに分かる意味を顔面筋肉で交換し合つてから、丁度左の廊下を青い水藥の瓶を持つて駈けて來た他の仲間に呼びかけた。
『××さん、今日裏の部屋に入つた患者さんに面會ですよ。』
　内部は思つたより狹くはなかつた。併し正面の廊下から奥に並んだ病室の間を過ぎ、翼のやうに附け足した建物の方へ進むに從ひ、開け放しになつた看護婦の溜、洗面所、晩飯の燒肴がまだ強く匂つてゐる賄場、がらくたといつしよに赤い消火器の並んだ階段下。さういふ場所を通り拔けなければならなかつた。特別に明るい灯のついた或るすり硝子の戸の内側からは、氷を碎く寒い音が聞えてゐた。
　そこまで來ると、案内の看護婦は立ち留まり、命令のやうに藥瓶の手をあげた。
『向の左側の端が大庭さんです。』
　云つた時には半分硝子戸に入つてゐた看護婦に別れ、眞知子に教へられたドアの方へ近づいた。壁の名札は暗くてたしかめられなかつたが、ノクすると關が應じた。
　入口を縦にして横たはつてゐた病人は、凝固したその靜止狀態にゐて、なにか物體の如く感じられた。枕許に一つついた窓の近くには、關が坐つてゐた。隅に引いて、ハンケチで包んだ電燈のにぶい光が、彼の半面と、病人の氷嚢で壓し潰されたやうに見える、青ざめた小さい顔と、白い金巾の汚れた布團と、布團に相應するだけ見すぼらしい

壁と壁を照らしてゐた。

『ずつと眠つてゐらつしやるのですか。』

急に突き上つて來た胸の熱い塊まりを通して、眞知子は漸くそれだけ發音した。

その場の光景は、ひそかに車に持つてゐた、もしくば受話器の聲にときめいた情緒を彼女から滅却させた。たしかに一時間前よりは彼女はより純粹に友情的であり、その聲の本體に對しても、ずつと平靜になれた。

關は病氣の簡單な經過を話し、心臟が意外に弱いと云ふ醫者の診察を傳へた。

『このまゝ落ちつけば危險はないだらうとは云ふのですか。』

『お國へは。』

『まだ知らせません。』

知らせずにすめば知らせ度くない米子の意志を、關は信じてゐる口調で答へた。その氣持を察することは眞知子にも困難ではなかつた。

『少し困ることには、僕は都合がついたら今夜こ
なければな

尤も入院は彼等の仕事に同情のある院長の好意で無料に等しいのだから、その點に就いては彼女を多く煩はさないですむであらうと、關は卒直に打ち明けた。彼の言葉は看護婦たちの顏が示した合圖を眞知子に理解させた。恐らくこの部屋も普通の病室ではないのであらう。と、一日何十圓もの入院料を支拂ひ、看護婦は勿論醫員たちからまでちやほやされてゐる田口の病院の金持の患者や、ホテルのやうに快適な病室が、それとこれとの餘りに著しい對比が、――同じ病氣をしても或る者には完備した贅澤なベッドがあり、或るものにはその最も貧弱な一つさへ容易に與へられない事實が、なにか新しい發見の如く眞知子を刺戟した。

そこにたゞ一つ家具らしいものとして置かれてある、小さい、セト引の藥罐のかかつた火鉢を中にして、彼女は默つた。併しそのあとで口を開いた時には、別なことを問題にした。

『京都からはいつ頃お歸りになつて。』

『はつきりしないんです。』

斷した。

『米子さんはそのこと知つてゐますの。』

『知つてゐます。』

『もし急に歸つてゐらつしやれなければ、』と云ひかけて、その言葉の持つ重要性のため壓せられた。赤褐色の鐵の扉、厚い壁、頑丈な格子窓、さうして鎖。――これ等の幻影から自由にあとを續けることは出來なかつた。

と、乾燥した、意地の惡い微笑が、關の彫刻的な顏を歪めた。彼は相手の陷つた、十分理解され得る沈默を救はうとはせず、却つて自分も默つて、その表情を變へないで、彼女を眺めた。

關の無慈悲なこの凝視には、三月前米子の家ではじめて逢つた夜から眞知子はもう馴れてゐた。同時にそれは、彼の考へてゐることを言葉が表はす以上に明瞭にするものであるのを知つてゐた。あなたは忘れてゐたんですね、僕が未決囚であることを。さうして今急に氣がついてお孃さんらしく顫へてるんですね。――

『なんなら、』

酷薄に堅く閉ぢてゐた唇を、彼はしづかに動かした。『さつきお願ひしたことは取り消しにしませう。』

『そんな必要はありません。』

眞知子は強く彈き返した。

『あなたに迷惑を及ぼすやうなことが生じた場合――』

『病氣の米子さんを友達として私が世話することゝ、あなた方の思想や運動と關係はない筈ですもの。』

『關係のないところにも何等かの關係を見出さうとするのが、當局のやり方です。』

『なら、向の方が間違つてるんだから、構はないでおけばいゝのですわ。』

『出來ますか、あなたに。』

『出來ないとお思ひになるの。』

『出來ても、周圍が許すかを疑ふのです。』

すべての行動を、正しいか正しくないかより、世間でどう思ひどう噂するかに依つて規定しようとする、それが唯一の哲學である彼女の環境では、如何なる善もそのためには犠牲にされた。殊に米子に對する眞知子のこの際の友情が、もし關の危むやうな結果を齎すとすれば、彼等は震へ上るに相違なかつた。病氣の代りに、米子が飢ゑて死にかけてゐるのだとしても、一片のパンを差し出すことさへ禁じられたであらう。弓子の送別會の時田口夫人の揚言した、マルクスがどうかうと騷ぎ廻るに較べれば、青年の如何に忌はしい悖德も惡行ではな

いと云ふ奇拔な斷定を、眞知子は忘れてはゐなかつた。

　自分を取り卷くものに對する侮辱と反抗と、同時に羞恥で湧き立つ感情を辛うじて壓へ、彼女は訴へるやうな微笑みで、まだ眼を放してゐない關を見あげた。

「私ずゐぶん弱蟲に見られてるんですわね。」

「あなた方は階級的に弱くされるんです。」

「階級的に。」

「ブルジョアジのそれは運命悲劇です。どんな思想を持つてゐても、いよ〳〵となれば、役に立たない。」

「でも、今度のことではあなたが想像するよりも私は强くなれる積りですわ。少くとも周圍の干渉なんか怖れてはゐません。それを怖れる位なら、始めからあなたとお友達になりはしませんから。」

　云つてしまつて、不意な後めたさが彼女を少し赤くした。友達と云ふ言葉は、直ちに同士や仲間をさす習の意味深い表示であつたものを、同士でも仲間でもない、たつた四度逢つただけの、冷淡にあしらはれる方が多かつた自分が、彼に對してその親愛な呼び
たであらうか。この退け目に

くし、どんなに懊惱くしてゐるかを、彼に打ち明けたかつた。眞知子の心は、いつにない單純な信賴と熱情で、娘らしく波打つた。

　併し、その時米子が身動きをし、薄眼を開けた。彼女はそれが誰であつたか意識することなく、半ば夢中で胸の苦しさを訴へ、水を求めた。眞知子は急いで、枕から吸呑を取りあげ、病人の熱で干潤らびた唇へ持つて行つた。

　あけの日から、眞知子は毎日病院に米子を見舞つた。熱は順調に下りたが、頭痛がやまず、時々嘔氣を伴つた。病氣よりも氣持の弱りの方が激しかつた。日に依るとひどく憂鬱になつて、今まではどんなに寂しさうにしてゐる時でも、感情を制御する硬さを持つてゐた人が、涙を見せることさへあつた。

「もう少し元氣を出さなけりや駄目よ。病氣で直りたくも、それぢや直れない。」

　四五日する

『もつと生理的なの。身體ぢうしいんとなつて、なんだか自分が自分でなくなるやうな氣がするの。倒れた時はそれが急に强く來たのよ。』

晝食後、彼女はいつもの通り子供たちに細工物をさせようとして、材料を入れた隣の戸棚に近づいた時、不意に眩暈がして、發作が起つた。彼女は夢中で硝子戸に掴まらうとしたが間に合はなかつた。と、倒れた身體が、伸びたこむの收縮するやうにちゞこまるのを感じた。單に感じたのみでなく、彼女は視覺で明瞭にその變化を認めることが出來た。自分ではない、誰か他の人間に起りつゝある現象であるかのやうに。――それで不自然にも思はれなければ怖ろしくもなかつた。が、收縮が加速度になり、それに從つてます〳〵容積を減じつゝある身體が、終に一箇の貝殼よりも微小になつたのを見ると、このまま進めば消えてなくなりさうで、氣がかりで、心細かつた。彼女はまつ暗な虚無の中に、なほいよ〳〵小さく砂粒のやうにちゞんで行く自分を、便りなく茫然と眺めつゞけた。

『さう容易に人間が消えてなくなつちや大變だわ。』

寧ろ面白がつてその話を聞いてしまつてから、眞知子は云つた。『今度は、だから思ひ切つて養生するのね。すつかり快くなるまではいつまででも寢てる積りで。』

『さうしちやゐられないわ。』

『でも病氣ぢやありませんか。どんな仕事だつて打つちやつておいていゝのだわ。』

それに就いては抗辯しないで、暫く間を置いたあとで、米子は云つた。『本當は明日にも退院しようかともつてるの。』

『そんな無茶なこと。』

併しこの程度の頭痛は前にもよく續いたのだし、嘔氣も胃をよくすれば自然に癒るのだから、この上病院にゐる必要はないと、米子は强情を張つた。

『あの時だつて、うちで寢かしておいてくれゝば快くなつたのを、倒れたのに驚いて斯んなとこへかつぎ込んだのよ。』

それにしても手廻しがよすぎたのは、過勞で衰弱してゐた米子のため非常な幸ひであつたのだ、と眞知子は考へた。同時に、この機會に一日でも長く病院に引き留めておけばおくほど、彼女を健康にするのだと。

『退院して、またすぐ無理をしてわるくなりでもしたらどうするの。』

『もう無理はしないわ。』

『とにかく私は反對よ。關さんだつてゐらつしやれば屹度留めるから。』

米子は强ひては云ひ張らなかつた。併し退院を思ひ留まつたのでは

なく、關の名前が出たので話を絶つたのだといふことを眞知子は見遁さなかつた。この神經過敏は、近ごろの米子の、特に病氣になつてからの著しい變化であつた。彼女は前のやうに呑氣には關のことを話さないばかりでなく、自分自身の行動に關しても警戒的になつた。初めから開けつ放しな點の少なかつた性格とそれが結びつき、實行運動者の典型的な用心深さを彼女に與へたやうに見えた。

眞知子には米子のこれ等の傾向が理解されないではなかつた。寧ろ初めから怖れてゐた罅隙が、二人の間に餘りにも早く芽吹いたこと、殊に普通の談話ではもとの信頼と愛で殘されてゐる友情が、その一つに觸れるや否や急に疎々しく冷いものに變ることが辛らかつた。眞知子は强い不滿をさへいつしよに感じた。沈默と秘密が彼等の間で如何に重要な誓約であるにしても、それほど嚴しく守られなければならなかつたであらうか。それほど不信用な自分なのであらうか。もつと立ち入つた話ならば知らず、こゝで二人きりで關に就いて噂する。それさへ憚られるのであらうか。——眞知子は彼のその後の消

かつた。何か

眞知子は唐突に、でも考の過程からすれば最も自然に、その言葉を口に出した。

『なぜ喧嘩するの。』

米子は仰臥の姿勢のまゝおだやかに受けた。

『あなたが意地惡になつたから。』

『さう見える。』

『でなけりや、この頃のやうに隱し立てをしなくたつて、何かもつと話してくれていゝのよ。私にその資格がないんなら、友達になつてる資格もないんぢやない。』

『私の友達はあなたひとりだと云ふことは、いつでも信じてゐなきやいけないわ。』

『あなたの仕事にも、生活にも關係のない、餘計なおしやべりをする時だけの友達。ね、私がまだ必要だと云ふんなら、そのために必要なんでせう。』

内心がより一層讓歩的であつた。彼女はどんな事情からでも米子を失つてはならなかつた。海の魚が時々水面に浮かんで息をするやうに、眞知子はたつたひとりの友の存在に依つて、生活的の窒息を免れてゐた。それ以上を望むのは、現在の自分の行き方を變へない限り、望む自分が間違であるのも知つてゐた。

『少しどいて。』

眞知子の默つてゐた間、これも默つて枕の端に眼を落してゐた米子が、急に顏をあげた。『花を見たいの。』

眞知子は右に寄つた。電話で駈けつけた晩の明けの日、花瓶といつしよに買つて行つた、見すぼらしい施療室の唯一の色彩である赤い數輪の冬薔薇が、彼女の塞いでゐた空間に入れ代つて現はれた。背景の窓には、丁度すり硝子の幅いつぱいに夕陽があふれてゐた。數だけの花と、圓い花瓶と、假の台に利用したブリキの菓子箱が、鍍金色の斜光に輝き、鮮明な黑い影を燒けた疊に投げた。

『ねえ。』

『なあに。』

『ロウザは監獄の中で、どうしたらあんな朗らかな氣持になれたのでせうね。』

小鳥や、蟲や、自然に就いて書いた彼女の獄中の優しい手紙は、眞知子も知つてゐた。

『何だつてそんなこと、急に思ひ出したの。』

『なぜつて、花を見てゐたら。』

『同じ薔薇だから。』

その洒落に自分で釣り込まれた調子で、眞知子はつけ加へた。『でも、こゝは病院で、監獄ぢやないわ。』

米子は上唇だけかすかにほゝ笑ませ、光線のせゐで蒼い輪が一層濃く擴がつた眼で、もう一度問題の花を眺めた。布團の襟からのぞいた顎が、靴篦のやうに瘦せて果敢なげに見えた。と、四日前の晩、關と坐つてゐた時の同じ幻影が、不意に眞知子の意識の底を掠めた。幾ら冗談でも、殊に彼等に對しては容易に云つてはならないことを、無慈悲に口に出した氣がした。でも鐵の扉や、壁や、格子や、鎖と結びついて彼女のこゝろを痙攣させた瞬間の面影は、眼の前のその友達ではなかつた。

二

次の朝、眞知子は何より先に新聞を手に取つた。京都の公判は、定例の如く傍聽禁止になつて委しくは報導されてなかつたが、被告の人名だけは出てゐた。關自身も勿論省かれてはゐなかつた。どんな

が下されるであらう。一審より果して輕い刑罰ですむであらうか。

——これ等の氣懸りの外に、彼女は當面のひそかな心配を持つてゐた。山瀬が鬪の名前を發見して、母や姉の前でなにか話し出しはしないかを怖れた。併しその朝の彼は、起きるから周章てゝ外出の支度をしてゐた。臺灣の大學の地位に有力な競爭者が現はれたらしかつた。そのため、いつもは朝飯の食卓で念入に眼を通す新聞をも見ないで飛び出した。

『ねえ、お母樣。』

夫の見送りでおくれた食事を、ひとりゆつくり始めながら、みね子は火鉢の前の母に話しかけた。『今日は目白へ入らつしやるのでせう。』

『あの話かい。』

『えゝ、叔母さまによく賴んどいて下さいな。昨晩山瀬が訪ねた時には留守で、叔父さまだけに話して來たのださうですから。』

文部大官△△氏の夫人は、田口夫人の女學校時代の同窓生であつた。山瀬はその緣故に縋つて競爭者に對抗しようとしてゐた。

『そりや賴んでは見るけれど。あんたが行つて今までの事情を話した方が、倉子さんにもよく分かるだらうよ。』

『そりや私も行きますわ。たゞね、ちよつと困ることがあつて、あそこへ行くのは億劫になるのよ。』

みね子は蓄物から好きな鹽こんぶを小皿に取り分けながら、『だつて、きいちやんが叔母さまの顏を見ると乾度泣き出すのですもの。どんなに機嫌よくしてる時でもさうなのよ。まあちやん、氣がつかない。』

眞知子は姉の食事の間、そばで小さい姪の相手をしてゐた。尋ねられたやうなことは特別注意に殘つてゐなかつたが、田口夫人と幼兒は最も關係の遠い對照であるらしく感じられた。

『山瀬と挨拶に行つた時からそれで閉口させられたの。尤も、あの頃は旅行のあとで泣き蟲になつてたから、そのせゐかともつたけれど、あとで晩御飯に呼んで下すつた時だつて、叔母さまがなにかお愛想を云ふとすぐあーんとはじめるんでせう。こつちで氣の毒になつちまつたわ。性が合はないつて云ふんぢやないか知ら、あんなの。』

『詰らないこと。』

未亡人は酸つぱく、口をつぼめて笑つた。『そんな小さい兒に、性が合ふも合はないもありますかつて。』

『でもあんなに可愛がつてくれるのに不思議なんですもの。——さう云へば田口の叔母さまのこと、とても威張つてるなんて惡く云ふ人があるけれど、私さうは思はないわ。少くとも私たちにはいつだつて優しいわ。その晩だつて、山瀬の月給のことまで訊ねてくれましたよ。

幾ら貰つて、どの位殘るかつて。親身に思つてくれるんでなけりや、そんな立ち入つた話まではしませんわ。ねえ。校長さんの奥さんつて人が丁度似てるの。見識ぶつてる癖になんでも干渉するつて評判がよくないけれど、根が親切なんですもの。それに親切な人つてものは、誰でも幾らか押しつけがましいとこはあるんだから私は平氣なの。田口の叔母さまに對してもさう思つてるわ。實際世話ずきないゝ人なんだから。今度でも、だからよく頼み込んだら、屹度一と骨折つてくれるに相違ないと信じてよ。』

『さう信じてるんなら、お姉さま、あなたが入らつしやればいゝのよ。』

　眞知子は我慢しきれなくなつて、口を入れた。『お母様にそんなこと頼ませるなんて間違つてるわ。』

　みね子は突然して、茶碗を手にしたまま振り返つた。

　妹が何故反對するかを解し得ないこの姉には、田口夫人の前で懇願者の役を引受ける母のひけめや、いつしよに行つてそれを見なければならない自分の不快は、説明すればするほど彼女を混迷させるのを知つてゐたから、眞知子はたゞ忠告だけを續けた。

『きいちやんが泣いて困るんなら置いて入らつしやればいゝぢやないの。無理に連れて行かなくたつて——』

『そりや、駄目。』

　斷然とした態度でみね子は拒絶した。『ときはいゝ女中だけれど、子供の守は下手よ。この間ほんの二時間頼んで芝のお姉さんと買物に行つた時だつて、すぐお腹をこわさしたんですもの。なにかやたらに食べさしたんだわ。——ねえ、きいちやん。』

　話が自分のことになつたのを本能的に感じた娘が、若い叔母から離れて甘え寄ると、丁度箸をおいた母はすぐ抱き上げ、彼女の片言を眞似つゝ愛撫した。『さうでちよう。そいでおぽつぽが痛たくになつたんでせう。いけまちえんねえ。』

　斯う云ふ時のみね子に取つては、どんな重要な話題も子守唄以上ではなかつた。

　そこへアキルが硝子戸から顔を出した。彼は膝の上の小さい女主人に自分の伺候を知らせようとして、また彼等を見ながら駈け上れない不幸を悲しんで、透明體の仕切に鼻を押し當てゝ啼いた。

　午後一時過。未亡人と眞知子は田口家の彫刻のついた重い樫のドアを入つた。彼等は普通の應接室でなしに、二階の豫備の客間へ通された。車寄に止まつてゐた、一軒の家ほど堂々としたパッカアドを共通に意識に上せながら、二人は運ばれた茶菓を前にして待つた。

『斯んなとこにいつも住んでたら、』近ごろ新たに手入れして、婦人室らしく思ひきつて華美に装飾された部屋を眺め、眞知子は母に話かけた。『舞臺の役者見たいに、氣取つて勿體ぶる氣になるのも無理はないのね。』

未亡人は娘の冗談の價値には無頓着であつたが、それが誰を指したのであるかはすぐ呑み込めた。

『結構ぢやないか、威張つてゐられるんだから。』

『ちつとも結構ぢやないわ、威張られる方に取つちや。』

『あれが倉子さんの性分だと思へばいゝのですよ。』

『それよりかこちらで威張らせるやうな機會を作らないのがいゝのよ。』

眞知子は無意味にその言葉を口にしたのではなかつた。彼女はみね子が今朝持ち出した問題にはどうしても母を關係させたくなかつた。で、家を出る前にも話しておいたのではあつたけれど、改めて念を押した。

『ね、ですからお母樣は決して頼まないで頂戴。どれほど恩に着せられるか知れないわ。』

『あんた見たいに――』

半分駈けてゐるやうな廊下の足音が、母の續けかけた會話を遮つてゐた。高いノクの先觸れで入つて來たのは三日に一遍きつと歸つてゐる富美子であつた。

『入らつしやいまし。』

椅子のまだずつと手前から、富美子は威勢よく聲をかけた。が、眞知子だけではなかつたから、卓のそばに近づくと、彼女自身としては精いつぱいのをとなしやかな態度で歳暮の贈物の禮を述べ、餘儀ない來客で母が暫く失禮をするからどうか寛つくりして欲しいと頼んだ。

『有り難うございます。あんまり御無沙汰をいたしてゐましたのでね。』

未亡人も同じ禮儀を盡すために椅子から立ち上りながら、『今日はほんのちよつと暮の御挨拶にと思つて。』

『あら、ちよつとなんて、そいぢや詰まりませんわ。叔母さま。』

富美子はもう生地の、子供つぽい遠慮のない調子になつた。『めづらしく眞知子さんも御一緒なんですもの。今日は寛つくりなすつて下さらなきや厭ですわ。――ねえ、いゝんでせう。』

洩らした退院のことが心にかゝつてゐた。出來たら明日のうち様子を見に行きたいと思ひながら果されなかつた。

『だつて、歸しはしないからいゝわ。ほんとうに色んなお話があるのよ。』

富美子はこの言葉になにかの暗示を持たせやうとするかの如く、その小さい圓い眼を特別な仕方で瞬かせて、眞知子を見た。併し斯う云ふ階級の婦人たちに習慣的に與へられてゐる社交性から、未亡人を除外して話すことは出來なかつたので、富美子は彼等が三越で出逢つたのを多喜子に聞いたと云ふやうなことからはじめた。

『日本髪結つてらしたでせう、多喜子さん。』

『えゝ。』

『よくお似合ひになつてゐましたよ。』

未亡人はその時褒めた通りの言葉で褒めた。

『あの時は私もいつしよに行く筈になつてゐたのですけれど。』

それだけは未亡人に對して、そのあとは眞知子の方へ、富美子は云つた。『御覽にならなかつた、外山さんの室内裝飾展が六階にあつたのを。』

外山は倉子夫人につき纏つてゐる畫家の名前であつた。眞知子はそれには氣がつかなかつた。

『外山さんがそんなことなさるの。』

『この頃は畫よりか熱心なくらゐ。おかげでこの部屋も模様替させられたんだわ。——どう。少しけば〳〵しすぎてやしないこと。でもこの壁紙なんか外山さんとても得意なの。自分で描いてわざ〳〵拵へさせたんですもの。』

さう云へば前よりはまた一層立派になつたと未亡人は調子を合せたが、眞知子は批評は口に出さないで、はじめてその部屋を見廻した時とは別な感じで、云はれた壁紙の、薔薇色の地に焦茶で分離派風の模様を出した奇抜な意匠や、壁の三方にかゝつた同じ畫家の、風景と花と半裸體の三枚の畫を眺めた。強い赤の主調で特色づけられてゐる彼の畫風は、眞知子は常から好きでなかつた。丁度畫家自身から發散すると同じあくどいものが、調子を濁らしてゐる氣がした。華美を通り越して刺戟的になつてゐる室内裝飾にも、その彼が現はれてゐた。同時にまた彼と夫人との朗らかでない友情を聯想させることに依つて、それはなほ厭味に見えた。

併し斯う云ふ場合相手の氣持の推移には注意を拂はない富美子は、ひとり樂しさうに話を續け、外山は他にも母の化粧室を手入れしたのだつたと云つた。

『その方がこゝよりか旨く纏つてるつて評判なの。宅なんかもその

意見よ。外山さん自身でもさう思つてるらしの。』

富美子は云つて急に氣がついたやうに眞知子を誘つた。『ちよつと御覽にならないこと。』

『またこのつぎ。』

『あなたのこの次はいつのことだか分りはしないわ。ねえ、叔母さま。』

『見せて頂いて來たらいゝでせう。』

『ね。』

富美子は氣早く椅子を離れ、さつきいろ〳〵話すことがあると云つた瞬間の合圖を、同じ眼つきで繰り返した。いつもの例で、斯んな時の彼女は乾度なにか知ら內證の話を持つてゐた。母を誘はうとしないのもそのために違ひなかつた。で、仕方なしに、それでも好奇心なしではなく、いつしよに立つて彼女に從つた。

眞知子の想像は誤らなかつた。部屋を出て階段にかゝると、富美子は[illegible]さい聲で訊ねた。

『えゝ。』

『矢張しさうだつたの。』

半分豫期した返事よりも、眞知子がそんなに落ちついて返事が出來ることに吃驚したやうに、富美子は眼を張つて、『こゝで今日それが問題になつてるのよ。はじめ母さまが氣がついたらしいの。私が來ると行きなり、眞知子さんの知つてらつしやる關さんとかつて人の名前は何と云ふのです、つて、斯うでせう。ほんとうを云ふと私今朝は寢坊して、朝御飯も頂かないで、宅の自動車に乘せて貰つてミス・リイの美容院に行つたの。だつてあそこ早く番を取らなくちや混むんですもの。それから銀座でちよつと買物してこちらへ廻つたから、新聞見てなかつたのよ。それで何のことだか分らないで、關三郎つて云ふんでせうつて云つたら、あなた、ほら御覽なさいましつて、母さまがお父さまをやり込めたので駭いちまつたわ。』

富美子は話すうち初めの心配らしい調子を失つた。毎日、なにか違つた遊び方と話材を求めてゐるこの若い夫人に取つては、どんな氣がかりな話も自分に影響がない以上面白い話であり、幾らかの關係があ[illegible]あつた。併しそれを意識して

るかないかを、富美子が行くまで爭つてゐたのだと話した。

『それが分つてれば、私名前は知らないつて云つてやつたんだけれど。』

『どうして。』

『だつて、可哀想ですもの。あんなひとが裁判に引つ張り出されてるなんてこと知らせるのは。』

階上から續いてゐる紅い絨毯のついた黄色の敷物の上を、二人はゆつくり降りた。若い夫妻がドイツに行つて以來は、老博士と倉子夫人と、それに身寄りの出戻の婦人が家事取締の役を受け持つて住まつてゐるだけの廣い家は、どんな話を續けても誰にもめつたに邪魔はされなかつた。併し階段下で、銀盆を手にして應接間の方から現はれた小間使に、彼等は出逢つた。その廊下を左に曲ればすぐ化粧室であつた。

上部に圓く、花鳥の小さいステインド・グラスを嵌めた戸を、富美子は先に立つて開けた。正面に開いた窓に依つて、部屋は日光に充ちてゐた。外の割に暗い廊下と、四角な、箱のやうに飾られた室内の對照が、どこか汽船のけびんに似た感じを與へてゐた。重なる變化はここも塗らしかつた。これまでは單純な卵色に塗られてゐたのが、二階と同じ傾向の、でも幾らか清楚な模樣紙で貼られ、衣裳簞笥を置いた次の部屋に通ずる戸口も二分の一廣くなつて、ドアの代りに暗紅色の帷が重く垂れてゐた。

『この色が得意なんですとさ。』

『外山さんの赤い壁よりは、たしかにいゝ色だわ。』

『ぢやこれからさう云つてあげよう、あの人が壁の自慢しはじめたらね。』

さもいゝ智慧を仕入れたかの如く、富美子は細い華奢な頸を振りながら、眞知子を反對の壁の鏡臺に引つ張つて行つた。ドイツの嫂から早いクリスマスの贈物として屆いた香水の箱、セットになつた銀の可愛い香水吹、ブロウチと帶留と兩方になるやうに拵へ直された寶石、最近に買はれた指輪、それ等が桑材の右側だけ重なつた抽斗から、つぎ〳〵取り出された。

『この眞珠のまはりにエメラルドを小さく入れたのがいゝでせう。私に頂戴つて云ふけれど、少し嵌めてからつて下さらないの。そいぢやお古だつてこと分かつちまつて詰んないわねえ。』

『買ふんなら、新しい方がいゝに違ひないわ。』

『でせう。——だけれど駄目。母さまは指輪道樂だから。』

彼女は今度は上の淺い抽斗から化粧直し用の藁色した粉おしろいを取り出し、ついでに、レイス飾のついた白い鏡掛をはね除けた。鏡

金した二羽の小鳩で支へられた楕形の鏡が、二人を四人にした。富美子は後の眞知子よりは、鏡の中のもう一人の眞知子の方へ熱心に覗き込み、有色の顔料の優れた効果を說き立てながら、さうして彼女にも勸めながら、三時間前ミス・リイの店で洗はれたり、蒸されたり、摩擦されたり、塗られたりしたばかりの顏を、新たに手入れしはじめた。

　眞知子は富美子を邪魔しないやうに、窓のならびの壁に嵌め込んだ姿見へ避けた。派手なのでめつたに着ない、臙脂の模樣の高い訪問服を、母から今日は無理に着せられてゐた。彼女は誰か知らない他人の假裝を吟味するやうな冷やかさで、玻璃板に浮んだ盛裝を眺めた。

『斯んなもの、私ぢやない。』

　併しその思惟が彼女の思惟である如く、眼の前の影像も結局彼女に相違なかつた。寧ろ否定しようとしても否定することの出來ない彼女自身の本體であり、彼女が心に輕蔑してゐる人々と何んにも違はないものであり、從つて關の冷淡や、米子の新たな障壁に對しても決して抗議し得ない、云はば富美子の相手になつて、香水や、寶石や、化粧の話で時間を空費するのが丁度似合はしい役廻りであることを、それが證明してゐるやうに見えた。

　眞知子は衝動的に壁に背中を向けた。

『ほら、使つて御覽なさいよ。』

富美子はガアゼの小ぎれをさし出した。

『いゝの。』

『要らないの、白粉。』

『えゝ。』

『だつて、ちよつと直したら。』

『ほんと。』

『いやなひと。』

急に意固地に嚴しくなつた相手を、富美子は鏡の前の腰掛から、口を半分開け、見上げて笑つた。『どうしたの。怒つた見たいよ。』

眞知子はそれには答へず、香水を見た時、かけて貰つてそのまゝ置いた手巾を、鏡臺の上から取り上げつゝ促した。

『あちらへ行きませう。』

部屋を出ようとした時、小間使が迎へに來た。

倉子はなにか熱心に話し續けてゐたらしかつた。富美子の眞似だけのノクで、そのまゝ開けて入つた二人を、戸を後にしてゐた彼女は不自然な角度で振り返つた。向側のもとの位置からいつしよに彼等を見上げた未亡人にも、さつきのにこやかさはなかつた。しるしだけ富美子にはそれでもほゝ笑んだが、娘に向けた眼は硬く、問責を含んでゐ

た。眞知子は直覺的に新聞の記事を、それに就いて今朝この家庭に生じたと云ふ議論を思ひ浮かべた。

併し倉子は未亡人とは反對の浮き〳〵した、殊に眞知子には珍らしい打ち解けやうを示した。

『眞知子さん、斯んなひとの云ひなりになつてゐらしたら、』倉子は自分の左に腰かけさした彼女と右側の娘を交る〳〵眺めて云つた。『それこそ、どんなところへ引つ張つて行かれるか知れませんよ。』

『まさか、ねえ。』

向き合つた眞知子の方へ圓い顎をしやくつて見せ、それから富美子は母に話しかけた。『お母樣、眞知子さんも私と同じ意見よ。』

『何が同じ意見です。』

『指輪を貰ふんなら、誰でも新らしい內の方がいゝに違ひないつて。――ねえ。仰しやつたわね。』

富美子は再び圓い顎で向側の承認を求めた。

『ほら、この通りですから。』

倉子は娘の外交を誰よりも笑ひながら、この手でよく色んなものを取られてしまふのだとこぼした。『――指輪なんか數多くは要らないやうなものゝ、人中へ出ますとさうもまゐりませんしね。時節に應じて相當ななりや裝飾を調へるのは、身分を守る上からも大切なことで、決して贅澤ではないと私は信じてをりますよ。――さう申せば、今日の眞知子さんは本統になんてお立派なんでございませう。お洋服ももちろん結構ですけれど、それとこれではまたお品が違ひますもの。身うちのものの正直な注文を申せば、いつも今日のやうなお嬢樣らしいお嬢樣でゐらして頂きたうございますわ。ねえ、お母樣。』

それに對し、未亡人はその着物を着せるに就いても一と爭ひした彼で、自分たちの云ふことなぞ素直にきいて吳れる彼女ではないのだと云つた。人に向つては容易に愚痴をこぼさなかつた母だけに、その打ち明けは眞知子を驚かした。彼女は睫毛のそり反つた長い黑瞳で、母を咎めた。倉子はそんな筈はないと調停した。

『眞知子さんのやうな、學問のおありになる、解つたお嬢さんが、お母樣の仰しやりつけを背くなんて、そんな』

『いゝえ、よく喧嘩いたしますの。』

眞知子はなにかに突き出されて云つた。『着物のことなんか干渉されるのが、私厭なんですから。』

『私も大嫌ひよ、着物のこと云はれるの。』

『なんですねえ。』

向側から、セイヴルの模樣つきの茶椀を手にしつゝ賛成した娘に、餘計なことだと云ふ顏を見せておいて、倉子は今までよりはずつと優

重しく眞知子の方へ向き變へた。『着物たんかのことはまあそれだけとして、他のもつと大事なことではお母様のお考に背いたりはなさらない筈ですわ。ねえ、さうでございませう。』

『なんのお話でせう、それ。』

倉子はすぐ應じようとして、彼女の母に對し無言の承認を求めた。未亡人は蒼い筋の目立つて來た額を竪に下げた。どうか遠慮なく仰しやつてやつて下さいまし。――

豫期した訊問がはじまつた。彼女はどうして關のやうな人を知つたのか。何處に於て。いつ時分から。また誰の紹介で。

『音樂會に山瀨さんがあの人を連れて入らした時も、飛んでもないことして下すつたと思つて、私はあとで山瀨さんを怒つたくらゐですが、でも眞逆罪人だなんてまでは知らなかつたから――』

『關さんは罪人ぢやありませんわ。』

『だつて、眞知子さん。あの裁判に出てゐる人が別な人でなければ、どんな罪よりも怖ろしい罪を犯した譯ぢやありませんか。』

『ほんとうに犯したのか、嫌疑だけかつてことは、裁判のすむまで分

まだ今朝の新聞のこと御存じなかつたと仰しやつて、お話をしたら驚いてゐらつしやるんですから。ねえ、奥様。』

その誘ひかけで、この場合彼女の母が當然引き受けなければならない役目が割りあてられた。亡くなつた父の舊時の、長兄の現在の、また義兄の近い未來の、それ〴〵の名譽ある地位を、未亡人は改めて說いた。それに留まらず、彼女の無思慮な行動はすべての親類や關係者の名譽に取り返しのつかない汚點をつけるのであり、もしそんなことになれば、母は死んでも謝罪の途はないのだから、以後さう云ふ人との交際は絕對に愼まなければならないと。

『お母様がこれだけ御心配になつてゐらつしやるのですから、眞知子さんもそこは十分お考へにならなければ。』

倉子は再び引き取つて、『それにあなただつて結婚前の大事な時に、社會主義者と交際があるなんて評判が立つては大變でございませう。どれほど貰ひたくとも、身分のある家では手を引きますからね。ほかの不名譽や不利益は勘定に入れないとしても、それだけでも私はまことに殘念だと思ひますわ。』

でも、そんな偉い學者ではどうも。――すぐ斯うでございませう。ですから、私わるいことは申しませんから、あんまり擇り好みをなさらないで、早く結婚なさらなければいけませんわ。さうすれば旦那様のお顏でお附合も殖るし、今までのお友達とも自然に遠ざかられる譯ですから。』

　さういふ意味から云つても、また他の場合に取つても、結婚ほど便利で都合のよいものはないと云ふ意見を立證するために、倉子は最近に自分も少し關係したX――家の結婚を擧げた。

『X――さんの若樣はまだ學習院なんですけれど、大殿様の血なんでございませうね、例の方へそれは早熟でゐらして、家の中でも眼が放されないつて、逢ふたびに奧様がこぼしてゐなさるから、私は勸めましたの。間違のないうち、綺麗なお嫁さんを貰つておあげ遊ばせ。それが一番でございますよつて。と丁度いゝあんばいに、△△信託のY――さんのお孃さんとお話が出來て、ついこの間御婚禮があつたのですが、なんしろY――さんはこの節日の出の威勢で、まだ部屋住だから質素にして貰ひたいつてX――さんでは仰しやつたと云ふのに、帶だけも百本と云ふお支度でしたからね。』

『あら、お母様、百本きりぢやなくつてよ。』

話がやつと堅苦しい主題から脫したのに力を得て、富美子は叫んだ。『みんなで百五十本あつたんですつて。』

『いゝえ、帶は百本で、簞笥が二十五棹ですよ。』

『簞笥は二十五棹だけれど、帶は百五十本なのよ。』

『私はたしかに百本つて聞いたけれど。』

『違ふの。百五十本。多喜子さんが仰しやつたから間違ひないわ。Y――さんは學習院で多喜子さんと同じ組だつたんですもの。』

『ぢや、私が負けたのかねえ。』

輕い、てれた笑ひで、倉子は終に娘の百五十本說に讓歩しながら、未亡人に云つた。『どちらにしろ、お金のあり餘つてゐる方のなさることは、違ひますですわ。』

『全くでございますよねえ。』

『お荷物の拜見に出ました時、丁度三越の番頭が參つてをりましたのでね。お前さんたちの見當ではどのくらゐですつて聞いて見ましたら、これだけのお簞笥では、まあ、內輪に見積つてもざつと十萬はつてをりませうつて申しましたつけ。』

未亡人は今度は鼻翼で感嘆の低い唸めきを發した。

『或る奧様なんか、今時あんな大げさなお支度は餘計なことだ。それでなくとも主義者なんてものがうるさいのだから、幾らお金があつたつて贅澤をし過ぎるのはよくないつて陰口を仰しやるのですけれど、

本統のところは嫉かんでゐらつしやるんですわ。社會主義者の運動なんてものも、この氣持のもつと性質の悪いのだと私は考へますよ。お金持が自分の腕で儲けたお金をどう使はうと、その人の自由ぢやございませんか。またさう云ふお金持があつて、なにか事業でもしてくれなければ、勞働者だつて働く仕事がない譯でございませう。それだのにお金持と云ふと眼の敵にして、人の善い勞働者を嗾しかけたり、何んでもない意地をつけたりするのは、それこそ餘計なおせつかいで、折角平和に暮らしてゐる社會に、喧嘩の種を蒔くと云ふものでございますわ。眞知子さんなんかは、斯う云ふことには立派な意見を持つてゐらつしやるのでせうが、私の考へ方が間違つてゐますでせうか知ら。ひとつ教へて頂きたいものでございますわ。』

　この弟子に對して、社會主義の啓蒙的講義を受け持つ親切は勿論眞知子にはなかつた。

『その關さんなんて人も。』

　相手の動かない、莢形のふくらんだ唇に視線を据ゑ、倉子はつゞけた。『矢張りそんな宣傳ばかりしてゐますのでせうね。ブルジョアを

『えゝ。』

　この返事は辯護ではなく、事實であつた。同時にそれは彼女が夫人に對して社會主義の講義をなし得ないと同じ種類の回避であり、プロレタリアの血以外に信を置かない關の明白な除外であることを示す意味から、眞知子には悲しい肯定であつた。

併し富美子は彼女らしい解釋でそれを布衍した。

『お母樣、はじめから私さう云つてたぢやないの、主義者だつてあの人は決してわるい事なんかしやしないつて。』

『わるい事をしないものが、裁判にかけられる筈はないぢやありませんか。』

『きつと間違つたのよ。だから無罪になるに違ひないわ。さうしたら私忠告してあげようか知ら。主義者なんてそんな人に怖がられるものは止して、何かほかのものにおなりなさいよつて。』

『急にほかのものにならうつたつて、ねえ、奧樣。一度赤い色のついたものを誰が使つてくれるものですか。』

　それでなくとも就職難に悩んでゐる今日だから、と未亡人も云つ

とが鬱つた人氣にならないとも限らない。殊に當世風な興味からすれば、銀行や、會社や、學校に勤める比ではないだらうと。――富美子はまた彼が似てゐると云ふドイツの役者の名前をそこでも擧げた。

「お母樣活動をあまり御覧にならないからだけれど、全く似てるのよ。あれで關さんになにかスポウツが出來たら申分なしだわ。ちよつとちよつと、ねえ、眞知子さん、あの人テニスかなんか旨いんぢやなくて。そんな身體つきしてらつしやるぢやないの。」

眞知子は知らないと答へた。

「スキイなら乾度得意よ、東北の生れなら。御存じない。」

もう一度知らないと答へる代り、眞知子はわづかに顏を振つたのみで、煖爐の方を向いた。ファイア・プレイスのやうに取りつけた電氣煖爐には、五本のコイルが表面を薄い灰紫色にぼかし、赤々と並んで燃えてゐた。が、それだけで容易に盛んな光焔は擧げ得ない、内攻的な、どこか寂しいその火の柱から、彼女は眼を離さなかつた。

そばの紫檀の卓に飾つた、青銅のドウムを頂どつた古めかしい時計が、意匠に相應した彌撒の鐘の調子で、しづかに三時を報じた。

驛で母に別れると、眞知子は近くのガレヂで神田までの自動車を約束した。小柄な若い運轉手は、彼女のために戸を開け、膝にかゝつた帽子を取ると、そのまゝ自分の座席へ飛び乘つた。黄色のうす汚いシボレが、屋根の下から午後の斜光へ唸つて辷り出た。

高田、關口、江戸川――廣い路、狹い路、廣い路、坂、河――變化の激しい、それで怖ろしくでこぼこの多い通りを彼等は駈け抜けた。追はるゝ通行人、商家の列、誰かの大きな屋敷の冬木立。女子大學の赤煉瓦の校舍、森から抽んでたカトリクの教會の塔。背景の眞つ青なエナメルで塗り潰された空。遠いボウトの浮かんだ水。――一切の斷片が、車臺の傾斜に準じた角度と形象で、右側の窓から瞬間的に彼女の網膜に閃めいた。

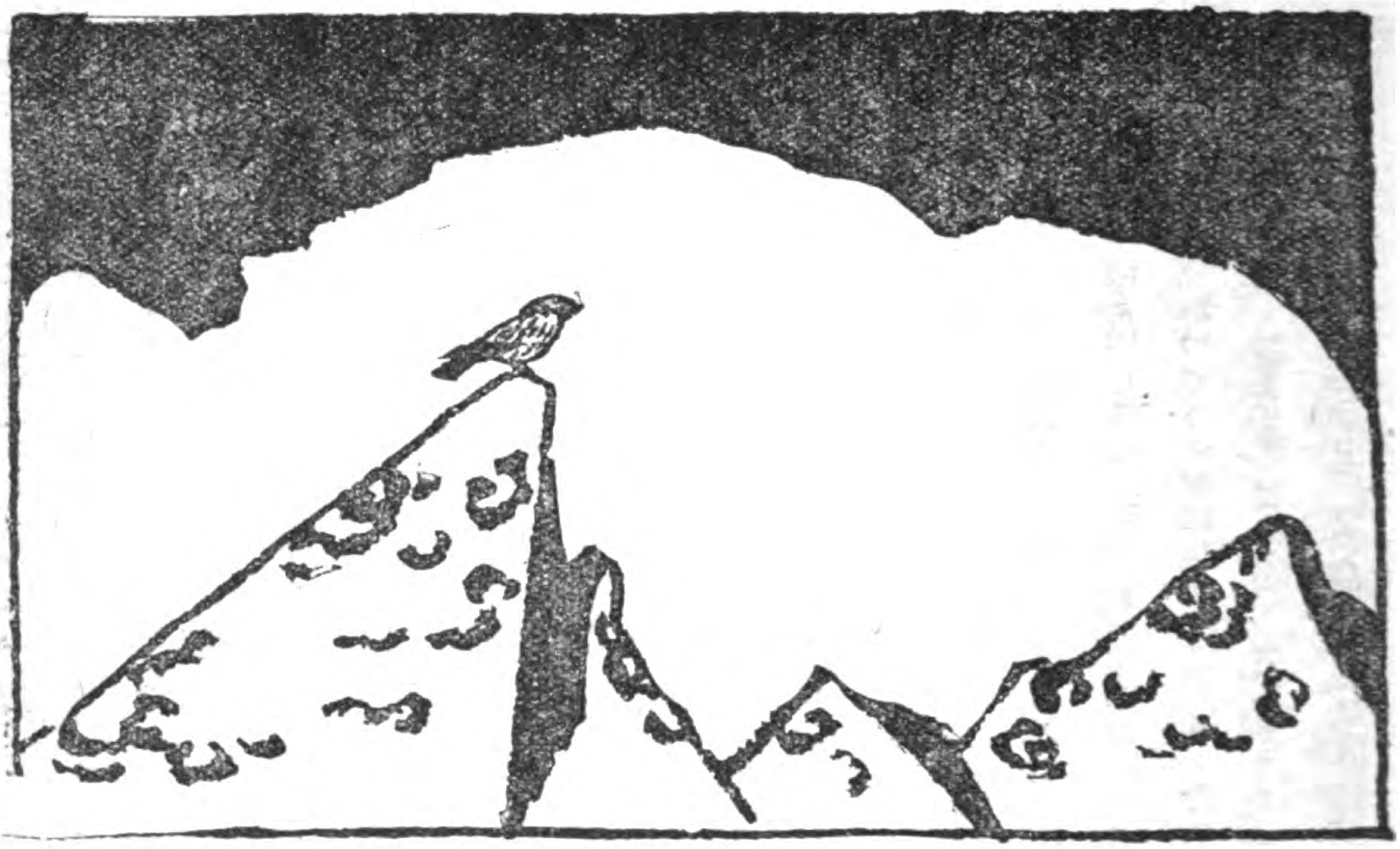
併し眞知子のこゝろは視神經とは別に働いてゐた。彼女は見つゝあるものを見てはゐなかつた。また他のことは考へてゐなかつた。自分を取り卷くあの堪らない生活から脱け出したい。――今日のやうなとの後には一層強い力で迫つて來る、いつものたつた一つの願望以外には何んにも。――

自動車は台地から駈け下りたはづみのスピイドで、鉛色の水路に沿ひ、電車を突つ切つて進んだ。この疾走は、彼女の苛立つた氣持にいつとなく麻痺的な快感を與へた。飛べ。何處までも。その勢ひで。――彼女は際のない叫で激勵した。實際この乘りものが、どこかへ自分を運び去つてくれるならし、――突然激しい斷搖が眞知子を膝掛か

ら衝き飛ばし、前のしきりにぶつ突けた。彼女は夢中でそれにしがみ着かうとした。が、反動で衝き戻され、半分床に轉がされた。やつと起き直つて見ると、素早い五六人の見物人に圍まれてゐた。帽子を振り落された運轉手は、衝突した向の黒い空自動車の運轉手と、どちらも把手を掴んだまゝ短い罵倒を投げ合つた。

もう一度動きはじめても眞知子の驚きは容易に消えなかつた。衝突そのものよりは、その前に彼女がひそかに祈念したことが餘りにも適確に充たされかけたためであつた。もしその危險な出來事が、車内で一二度ぶつ突かるとか、轉がるとか以上に結果したならば。——云ふまでもなく、死こそは最も完全に彼女を嫌惡してゐる境界から救ひ出したであらう。眞知子はこの恐怖の前に顫へた。決して死んではならなかつた。自分の知つてる生が、如何に醜く厭はしい形態に充ちてゐるとしても、死よりはなほ十分強い魅力を以つて常に彼女を麾いた。

轉んだ時、逆についた左の手頸が少し痛いだけで他はなんともな。身體を、眞知子は今度は腰掛の上に長く伸ばし、寢椅子に横たはつた…姿勢で、…に凭りかゝつた。自動車の衝突した場合、正面にま



狼の掟

ピリニヤーク作
米川正夫譯

「世の人に樂の音と聞えしものも
「かれらのためには苦しみなりき
「されども人は明くるまで燭を消さざりき

アンネンスキイ

一

書物の棚は――年の棚に似てゐる。どんな人でも一生に一度は、年の建設が終りを告げて、棚の整理が完成する時が來る。そのとき人はノヺ・ヂェヸーチイの僧院へ運ばれて、土の中にうづめられ、死骸を蛆虫の緩漫な作業に委ねられるか――さなくばドンコイ僧院へ運ばれて、そこの火葬場で燒かれるのだ。人間は火葬場の竈で、人生最後の痙攣を味はされる。烈氏二千度の竈の中で、棺と着物は二分間のうちに虛無に歸し、裸の死骸だけが殘る。すると裸の人間は――身動きをはじめる――死人の足が曲つて、手が頸の方へ匍つて行く。そして頭は肩の間へ縮こまる。もし誰か生きた人間が小さな穴の傍に立つて、烈氏二千度の熱が人間を虛無に歸する有樣を覗いて見たら、この生き

た人間の神經は引き千切られ、頭の髮は見る見る白くなるに違ひない。そして死人の最後の痙攣が、何か死を破壞する形而上的なものやうに思はれるであらう。——人生の年の棚は——書物に似てゐる。なぜと言つて、一つ一つの本は人間の痙攣だからである。全く、死の法則を破壞する人間の天才の痙攣、人間の思想の痙攣ではなからうか。火葬場の痙攣と同じやうに、死を踏み越えた痙攣ではなからうか？——書物を愛する人間は時とすると、夜、自分の書齋の中で、書物の棚の間で、これらの書物に面して慄然としなければならぬ——一つ一つの書物は眞の人生の贋造物である、一つ一つの書物は死を欺かうとする思想の痙攣であると感じなければならぬ——書物が大きな顎を開け、赤木の齒齦の間から金の牙を光らせながら、棚から見おろしてゐるこの眞夜中、頭が疲れて、夜のために寸法を狂はされてゐる時——この部屋とこの書物を死亡室と感じなければならぬ——眞の生活、生きたものに贋せて造られた死んだ思想、火葬場の中に於けるが如き人間の痙攣、かういふものの葬られてゐる死骸陳列場だと感じて、慄然としなければならぬ。この棚の上から Johan Wolfgang Goethe の思想、かつてこの世に生きてゐた事のない Werter の姿が匍ひおりて來る。Lessing, Hegoel, Bichner は Ulsteir の刊行である。Uhland, Wihland, Spielgagen は青春の友であり、少年時代の英雄である。Karl Moor は Heine の冷笑を征服し得ないであらう。これらのものはすべて時代前、十月前の遺物である。マルクス、レーニン、トローツキイ、ブハーリン——即ち獨逸、墺太利、匈牙利、露西亞、いな世界に於ける社會主義發達の歷史、勞働運動發達の歷史は——時代となり十月となつた。レーニンは死んだ、けれども彼の本は次第々々に生長する。さういふ眞夜中に人間は死人の靜の中で、限りなき孤獨を感じる。なぜと言つて、人間には二つの生活があるからである——一つは頭腦と、義務と、良心と、開かれた意識の窓、かういふものから受けた生活であり——いま一つは沒意識と、本能と、太陽と、血から受けたものである。

書物が火葬場の死人に變る夜々は、人間のためにたゞで素通りをしない。

彼は自分の書齋の中で、革張りの長椅子の上、書棚の下に横になつてゐた。それは動かざる夜半のひと時であつた。窓のカーテンはおろされてゐた。生理的には彼は書物を見ることが出來なかつた——が、彼はそれを見た。彼は自分が寢てゐるのか、起きてゐるのか分らなかつたけれど、彼は自分の腦と自分の思想を生理的に感じてゐた。彼は自分の腦を、かつて解剖室で見たもののやうに描いた——それは生肉のカツレツを二つ並べたものであつた。枕に近い左耳の上に當る頭蓋

骨の下で、一つの想念が生れ、二十日鼠のやうに腦の襞を探つて、生理的にその邊を引つ掻きながら、上の方へ驅けのぼると――額の下の意識を司る部分でぴつたり止まつた。そして次のやうな形を取つた――『あすは萬國共産協會へ行かなけりやならん。』沒意識が腦のカツレッを緻ひ包んだ。丁度汽車の寢台車で二つのカヴーが合さつて、電燈のガラスに蓋をするやうに。たゞ小さな隙間が意識のために殘された。このカヴーは意志の力でもつて押し開くことが出來た。しかし意志の力は、このカヴーを完全に閉ぢて了ふ事に向けられた。もう寢なければならなかつたからである。カヴーの陰は極めて靜かで、暖かく、居心地よく落ちついてゐた。けれども、思想は意志に逆らつて、意識の隙間から腦の暗の中へ驅け出した。するとその時、意識はその跳梁を注視するのであつた。稻妻のやうな速さで、思想は記憶の中へ驅け込んだ、一つ、また一つ、するとさま〴〵な記憶は一しよになつて、意識の方へ戻つて來た。と、その瞬間、一ばん遠い所から、後頭部の邊から一つの幻覺が浮んで來た――幻覺は第一、第二の記憶と繋がり合つた。――それは先妻の肩であつた。しかも以前かれの傍ちかく横たはつてゐた時の肩であると同時に、また最後に別れを告げながら見た時の肩でもあつた。無意識の闇の中は暖かく、靜かに落ちついてゐた。意識は感じた――腦の中には一つの想念もない、腦はもう寢についた。そして一切を抑へて安定させ、一つの想念をも侵入させない力をもつてゐるのだ。そのとき妻の部屋へ通ずるドアが軋んだ。目は塞がつてゐたから、生理的に見ることは出來なかつた。彼は妻が――二度目の妻のマリヤが、戸を細目に開けて閾の上に佇んだ後、仕事卓の方へ歩み寄つて、その傍に腰をおろし、兩の肩を落したのを見た。彼女は白い夜のものを着てゐた。その目は塞がれてゐた。髮は寢る支度に固く卷いて束ねてあつた。彼女は卓の傍に腰をかけて、力なげに肩を落した――と、その傍に並んで、がつしりした肩つきのフェリックスが立つた。意識は決定を與へた――これは妻である、二度目の妻である。そのとき無意識の中からすぐに數百の――想念ではない直覺が跳り出した――すると、沒意識も、頭腦も、からだ全體も、名狀し難い重くるしさと、狹くるしさと、痛みを感じた――それは生理的なものではないが、髮の毛が白くなるやうな痛みであつた。書物は火葬場――思想は死人に似てゐる。フェリックスは思想――妻は死人に似てゐる――火葬場の死人ではなくて、ノヴ・チェギーチイ僧院の死人である。そこでは死骸が蛆虫の腐蝕に委ねられるのだ――沒意識はノヴ・チェギーチイの死骸に似てゐる。Former――Weber――Marx――意識はカーテンを押し開いた――エネルギッシュに、腦髓全體が明るくなるほど。――『また魘されてゐるな！』――

夜、がらんとした部屋、静寂、おろされたカーテン、誰ひとりゐない。

『マリヤ！　ヸクトリヤ！』

静寂、誰ひとりゐない。——『本を片づけなけりやならん、本當に墓穴か何ぞのやうだ、しみの匂ひさへする。』——静寂、誰ひとりゐない、何一つない。意識はカーテンをおろした。無意識の内部は恐ろしく静かで、嗄く落ちついてゐる。最後の想念が二十日鼠のやうに、腦を引つ掻きながら驅け拔けた。『妻は、あの二度目のは、本に似てゐる。』——一つの思想もない。男は眠つてゐる。男の顏は静かである。夜が明けて來た。三十六といふ年にしては早すぎる白髪に燒かれた、一束の黒い毛がばらりと額へ落ちた。この極めて美しい男の脣は、夢の中でひくひくと引つ吊つてゐる。夢の中では、何物をもつてしても追從を許さない事が行はれる。事によつたら、あのがつしりした肩つきのフェリックス、死亡室のやうに恐ろしきものとなつたフェリックスも、——夢の中では恐ろしくないかも知れない。潜在意識は、二人が親友であつた遠い時代の彼を眺めてゐるかも知れない。

夜は明けた。明け方この男は長椅子から起き上つて、明るい日を

イ僧院の墓場では蛆虫が死屍を蝕んでゐる——夜ばかりでなく晝間も、土と棺と體の闇の中で。

二

フェリックスには露西亜人の妻があつた。彼女はフェリックスの家に、歐羅巴式の生活様式を創造する事に成功した。なぜと言つて、彼女は女として最大の力——無力になり得る力を持つてゐたからである。ある十一月の夜、同胞戰の最中、掠奪されたドン・バスの職工町で、フェリックスは參謀本部になつた家の電話口に坐つてゐた。空虚な眞夜なか、遠い大砲の轟きを聞きながら、十一月の風の中に、たつた一人すわつてゐた。彼は寢ないで、命令を待つてゐた。彼の坐つてゐる書齋の電話口へ、死んだやうな目をした一人の娘が、誰にも聞かれないやうに手を脣へ當てながら、爪先だちではいつて來た。彼女の話によると、彼女はこの工場の技師の娘で、兩親は一週間まへにこの家で殺された。この家は彼女の父の持家で、こゝに白軍の參謀部があつた。彼女はこの一週間といふもの、この家の物置に隠れてゐたので

んですから。」

フェリックスは參謀本部の隣りに當る、自分の部屋で暮すやうに命じた。そこへは誰もはいつて來る心配がなかつた。彼女は音なしく椅子から立つて、窓に行つた。翌日の黄昏ごろ、娘は彼の部屋に置いてあるピアノへそつと近寄り、靜かにその前に腰をおろしながら、調節器をおろして彈き始めた。フェリックスはそれを見てゐた。その時、彼女はフェリックスの顏を見ると、はじめて濟まなささうににつこり笑つた。そして靜かにピアノの蓋をおろした。それはライ麥色の髮をした娘であつた。世間の事を何一つ知らないで、水いろの目で世の中を驚きながら眺めてゐる女學生であつた。彼女はフェリックスの妻となつた。フェリックスは、まるで誰にも用のない子猫の襟頸を摑んで、どぶ穴から拾ひ出すやうに、戰線の血の海の中から彼女を救ひ上げた。フェリックスには仕事が生活であつた。フェリックスは彼女の最初の夫であつた。そしてフェリックスは一度も彼女に愛のことを訊かなかつた。年は流れて行つた。無力といふ女性最大の力をもつて、この娘はフェリックスのために露西亞ばなれのした安樂を、××の戰士の家の中に——三つの部屋の中に創り出すことが出來た。喘息をやむフェリックスの肺に水分を與へるために、豐富な花や金魚鉢を寢室に飾つた。彼女は部屋部屋に敏捷な冷たさを與へた。それは部屋の中の光——晝は日の光、夜は電氣の光——に對しても同樣であつた。フェリックスは××を作り上げた人で、若い時には力士のやうな體力の所有者だつたが、その力は喘息と、結核と、××の銃劍と、それから國内戰の際マチェフスカヤ停車場で、兩足の間に炸裂した爆彈のために挽き耗らされて了つた。フェリックスの部屋には、彼の手で書かれた一葉の紙がかゝつてゐて、それには彼のもつてゐる三十の病氣が書き上げてあつた。フェリックスの部屋は兵士の部屋であつたから、その中のものは丁度モーゼル銃の栓のやうに、悉く點檢し盡されてゐた。彼女の部屋は寢室であつた。そこにはピアノが置いてあつて、その上で彼女は古典派の音樂を彈奏した。そこにはまた羊犬と狼の交じつた大きな犬——彼女の無二の親友が住んでゐた。

その數年間、毎日の日は××の重い臼となつて生まれ出で、莫斯科の廣場々々の鉛色した塊り、自動車や××の意志の咆哮となつて生して行つた。人間の群集はその意志の命令で動いた。それが日常茶飯の狀態であつた。ごく稀に、當時おもむろに解けてゐた戰時×××のばねが、とき〴〵意志の齒車からはづれて、緊張し切つた神經を打つと、フェリックスは親友のエドガール・ザデカや、その他の友達の所へ電話を掛けて、言葉みじかに、

「僕のところへ來たまへ。今すぐ。出掛けよう。獵に。」

その時エドガールは、ばねが暴れ出して、フェリックスの上衣の釦がはづれてゐる事を知るのであつた。

ほどけた神經のばねは暴れるすべを知つてゐた。自動車はその時もの狂はしい速力で、イヹールスキイやヴルヴルスキイの禮拜堂へ飛び込みながら、參詣人の頸の骨を折るのであつた。夜もヲートカの海も何の恐れることがあらう。森の番小屋は榴彈のやうにけし飛んだ。古い地主屋敷は狼を追ふ卷狩りの聲に鳴りどよんだ。人間の心臟は、まるで水の世界から引き出された網の魚のやうに、アルコールの中で跳りもがいた。人々は己れ自身の聲、森の聲を聞きながら、意志の手綱を解いて母なる自然に鐵砲を放すために、曉の森の靜寂の中へはいつて行つた。もしこの荒れ騷ぐ放縱の海と、首まで浸すアルコールの中へ、女が紛れ込んで來たら、その女を眞裸な本能に從はさねばやまなかつた。森と夜は、森と夜の痙攣に變つた。たばこの煙に燻された腦髓は、すべての物の寸法を狂はせた。そして記憶は互に十年くらゐ距てられた生活の破片を、再び縫ひ合はすのであつた。實際、アルコールに引き裂かれた瞬間には、生活の斷片は互に遠く離れて了ふものである。

すべての人は生に對する權利を持つてゐる——從つて、すべての人は愛に對する權利を持つてゐる——それとも、この權利を持つてゐないのだらうか？——フェリックスの妻マリヤは女性最大の力、無力であり得る力を持つてゐた。彼女は××の大都モスクヴに住むのが恐ろしかつた。そこではベートーヹンの音樂が×××と兵士の歌に代へられ、露西亞化した和蘭式ペーチカの代りに、暖房裝置の槌がこと／＼音を立て、緩やかな石油ランプの代りに、電燈がエネルギッシュな冷光を投げてゐる。が、それでも彼女は古典派の音樂を彈き、ソヹート作家の本を讀んだ。それは露西亞文學の異常なる一章で、威嚴、品格、廉潔などといふ言葉が、文學の中から消え去つた時代である。——荒れ騷ぐ神經の一夜のことであつた。とくに棄てられた地主屋敷は、九月の風のもとに呻いてゐた。廣間の中では卓がじつと蹲まつてゐたが、椅子はなかつた。そして蠟燭が空き壜に突き立てられてあつた。卓はアルコールの不可思議な流れに溶けかゝつてゐた。人々は口にする言葉や、壁の上の影などでホフマンを偲ばせながら、卓の傍で飲んでゐた。アルコールは空間と時間を縮めたり——伸ばしたりしてゐる。ぎい／＼軋む階段が、廣間から中二階に通じてゐる。エドガール・ザデカはぎい／＼軋む階段づたひに昇つた——埃つぽい硝子ごしに、庭を隔てた川の彼方に、黄ろいぼやけた秋の空燒けが見えたのは、晩のことだつたか夜明けだつたのか、エドガールにはその後どうしても思ひ出せなかつた。エドガールは自分の壜とコップを窓じきり

の上へ置いた。窓の傍に立つてゐる男は、空間を見ずして空間の彼方を見るために、空間を眺め得る目を持つた、さういふ種類の人間であつた。額の上に一束の黒い毛がばらりと落ちた、かういふ目は空間の彼方から歸つて來た時、常ならぬ處女性を帶びてゐるに違ひない。それは匈牙利人の目であつた。無の中から來てドウナイの古い文化に根をおろした己れの民族の、いまだ究められざる歴史を保存してゐる目であつた。――この空間の彼方からエドガールを訪れて來たのは――思想でなくて直感であつた――生理的に頭蓋骨をめき〳〵言はすやうな憂愁か、それとも脊椎骨を痺らすやうな悦び、生理的悦びの直感であつた。エドガールには分つてゐた――死そのものが頭蓋骨に侵入するやうなこの憂愁、太陽そのものが心臟へさし入るやうなこの悦びは、彼が女の事を考へたときに、人生に溢れてゐる女性の魅惑を考へた時に、彼の心に湧き起るものであつた。――天井に手の屆きさうな部屋の中で、色の褪めた長椅子のばねが哀れな音を立てた。

『誰です、そこにゐるのは?』とエドガールは訊ねた。

『わたし。』とマリヤが答へた。『あのね、エドガールさん、わたしすつかり醉つ拂つてるのよ。』その時エドガールの心には、脊椎骨の痺れるやうな、太陽そのものの心臟にさし入るやうな悦びが湧いた。『わたし氣が沈んで仕様がないのよ、エドガールさん――わたし淋しくつて堪らないの。どうかすると恐ろしくつて恐ろしくつて。だつてわたしまるつきり、まるつきり一人ぼつちなんですもの、廣い世界にたつた一人なんですもの。』――たばこの煙に燻された腦髓は、すべてのものの寸法を狂はすことが出來る。そして記憶は、數十年と數分間の距離にへだてられた生活の破片を、一しよに縫ひ合はすことが出來る――さういふ時は、えて並々ならぬ清淨無垢の感じ、僞りに似てしかもすべての眞實の上に立つ、眞實感が湧き起るものである。『エドガールさん、わたしはみんなの傍を離れたいと思つて、こゝへ來たんですの。ところが、あなたもやはりこゝへ來てらつしやるんですもの――何て不思議なことでせう!……わたし今あなたの事を考へてゐたんですのよ。わたし時々あなたを愛してゐるやうな氣がしますわ。あなたはまるで黑みがきを掛けた鋼鐵のやうに、美しくつて逞ましい、しつかりした方なんですもの――わたしよくあなたの事を考へるんですの。……』

エドガールは、中二階の埃つぽい窓ガラスごしに、庭を隔てた川の彼方に――黄ろいぼやけた秋の空燒けが見えたのは、晩のことだつたのか明け方なのか、はつきり覺えてゐなかつた。――エドガールが下へおりた時、フェリックスは卓の傍にたつた一人で立つてゐた。ほかの者は卓の下や、廣間の片隅や、寢藁の上にころがつて眠つてゐ

た。蠟燭は燃え盡きんとしてゐた。
『二人の友情のために飲まう、エドガール！』とフェリックスは言つた。
　フェリックスは兩手をおろして、目を伏せた——するとエドガールは、杯を合はすために手を上げながら、かう答へた。
『あゝ飲まう！——杯の底まで！』
『だが、君まづ自分の杯につぎ給へ、飲むものがなくつちや！』とフェリックスは言つた。『君の手は空ぢやないか！』
　窓の外にはぼやけた空燒が見えた。

三

　彼等は、フェリックス・クランツとエドガール・ザデカは、露西亞××の××なる時代の人であつた、××の生んだ子であつた。彼らは露西亞人ではなかつた。なぜと言つて、露西亞××はインターナショナルだからである。フェリックスは獨逸系の墺太利人で、エドガールはマヂャール系の墺太利人であつた。彼らは二人とも露西亞を祖國と信

りは、國内戰の轟音の中で露西亞語を習ひ覺えたのである——けれ二人とも露西亞語でものを考へた。彼らは立派な歐羅巴人であつた。歐羅巴風の注意ぶかさと、慇懃さと、綺麗ずきと、規則たゞしさを、永久に保存してゐる人達であつた。彼らは二人とも、墺太利の將校もブダペシュトの文士も、同じやうに困難な生活を運命に課せられた。戰爭と××の銃劍、それから饑餓を潜り拔けながら、彼らは露西亞の無理解、言語、風俗習慣、露西亞式の向う見ず、それから書物、記憶、かういふ森林を切り拓いて行かなければならなかつた。彼らは二人ともめいめいの命の在りかを承知してゐた——フェリックスの命はその上衣の衣囊に、エドガールの命はその胴衣のポケットに納めてあるのであつた。どちらも生理的に美しかつた。そしてどちらも、創造をインスピレートするためでなく、行動するために存在してゐるやうな目の持ち主であつた。彼らの美しさは互に異なる人身構造學上のタイプに屬してゐた。フェリックスの肩は重々しく垂れてゐた。それは彼の傷ついた足の歩みが重々しいのと同じやうであつた。彼の美しさは不規則の美しさであつた。額の皺、侘びしげに眼窩の底ふかく落

の血の交じつた、ドゥナイ川流域の曠野地方の血を合はせてゐた。彼の髪は秀でた額から後ろの方へかき上げられてゐた。それは自由で傲岸な眼ざしを一そう自由に保存するために、過去數世紀の風に吹き曝されたもののやうであつた。なぜと言つて、エドガールはいつも烈しい向ひ風に、頭と胸を突き出してゐるやうに思はれたからである。彼はそんな風に頭を捧げ、胸を反らしてゐた。

モスクワでは――それはもう國内戰の後のことである――朝の八時に、彼らの住まひの玄關先へ、屋根つき自動車が待つてゐた。やがて自動車は彼らを××の臼の方へ運んで行つた。それは歷史と思想が水の如く流れ落ちてゐる、重くるしい挽き臼であつた。歷史も、時も、人間も、さま〴〵の力も、すべてを嚙み碎いてゐるこの臼の傍では、彼らも小つぽけな人間に過ぎなかつた。これらの臼は無數の槓杆を持つてゐて、歷史は夥しい水のやうに流れ續けた。屋根つきの自動車はモスクワの町や廣場を――ルビャンカからイリンカへ、イリンカからクレムリンへ、クレムリンから古廣場へと、人間を運んで行つた。フェリツクスは行爲するために、××によつて送り出された人である。エドガールは××のこと、××の將來、その道程、その時、その理想道德、かういふことを考へるために、××によつて送り出された人である。臼の緊張した活動の中に、自動車は二人の住まひの玄關先で、自分の一日を終るのであつた。そして朝の八時、深く靜まつた半ば夜のやうな時刻に、再びそこから出て行つた。フェリツクスの上衣は極めて有りふれた上衣であり――エドガールの背廣は極めて有りふれた背廣であつた。背廣も上衣もシェヰエートや羅紗で縫つたものでなく、××の臼の鐵でがさ〳〵になつた彼ら自身の頰の皮と同じくらゐ、丈夫な革で出來てたもののやうに思はれた。背廣も上衣も夜中でなければ脫ぐことが出來なかつた。これらの人々は自分の時間を、なみ〳〵と溢れるほど水をたたへた、甕か何ぞのやうに運ばなければならなかつた。その水は一しづくもこぼす事を許されないのであつた。腦と時は彼らの生活の甕を充たした。彼等の生は活動するために與へられたものである。

――

人生には、血に與へられたる意識されざる太陽がある！――

國家の所有に屬するエドガール・ザデカの家には、圓天井の中に隱れて消える恐ろしく重くるしい壁がある。家は靜寂に包まれた。そして書齋の壁は書物に蔽はれた。太陽は窓を通して食堂へさし込んだが、書物は食堂へまで闖入して來た。書物の陰から五つになる娘のリーサ、一名リサー（狐の意）が食堂に現れた。無秩序な質問や愛撫などをもつて、書物の陰から太陽と共に現はれた――父は茶のコツプをかたはらに、新聞を讀んでゐた。娘は膝へ上り込んで、父の

聖な新聞閲覽を妨げまいと、小猫のやうに膝の上で靜まり返つた。やがて娘は物思はしげに父に尋ねた。

『パパ、あたし達は生きてるの、遊んでるの？』

父は娘の問ひと新聞の見出しを一しよにして、何だか合點が行かなかつたので、

『お前なんと言つたの、リサー？』

『あたし達は生きてるの、遊んでるの？——だつてパパやママは生きてるんでせう。ところが、あたしやあたしのお友達のナターシャ・グレベックはお人形をもつて遊んでるんですもの。お人形は生きちやゐないでせう。お人形はきれいで拵へてあつて、首は國營百貨店で賣つてるでせう。そしてパパはあたし達と遊んで下さるでせう。——あたしやナターシャは生きてるの、遊んでるの？』

父は新聞の見出しをすつかり娘の問ひに——時ならずして湧き起つた娘の最初の思想に蔽ひ隱して了つた。——そして、わが血を分けたこの娘が如何に貴いものかといふ事を、ありたけの脊推骨と心臟で悟りながら、父は返事にまごついた。——父は娘をしつかと抱きしめた。それがあまり强すぎたので、娘の目には生理的な痛みと、精神的

と、輪のついた謝肉祭のぶらんこのやうにくる〳〵動く手に續いて——妻がはいつて來た。母でありまた友である彼女は、彼の生涯にはじめて湧き出た女であつた——青春と共にブダペシュトに現れて、彼と共に××の銃劍と饑餓の年を歩み、無理解の露西亞、言語風俗習慣の森林を潜り拔け、向う見ずな露西亞氣質の海に溺れないで來た女である。この女は彼と共に女性の道を歩み續けて來た——はじめて情慾に目を閉いだ時から、はじめて中年の小皺が目の縁に現れるまで歩み續けた。彼女はエドガールより露西亞語が下手だつた。彼女は母國の言葉でものを考へた——彼女は多く沈默を守つてゐた。それは誇りの高い女で、母親でありまた友であり、家と書物の守護者であつた。この落ちついた靜かな婦人は、人間の情慾がまるで露西亞の火事場から飛んで來る木片のやうに、どす黑く燃え爛らす力のある事を知つてゐた。そして暗黑なブダペシュトの中世時代が敎へたやうに、自己の内部に一切を抑壓するすべを心得てゐた。露西亞××の戰線、マチエフスカヤの停車場で、フェリックスの足もとに榴彈が炸裂した。そのとき當番室には三人のものがゐた——彼女と、フェリックスと、エドガールである。破片が彼女の肩に當つた。彼女は傷口の肉の中から手で

リサーは朝ごとに湧いて出た。母でありまた妻であるギクトリヤは、黒いものを着て、手に蠟燭を持ちながら、夜やつて來た。夜なかの——露西亞の——茶はいつも冷たかつた。書齋では本がしみの匂ひを立ててゐた。妻は夫と並んで長椅子に腰をおろした。彼女は言つた。

『Weist du, ich denke, dass Ruht Eicher hat kein Recht』

（ねえ、あなた、わたしさう思ひますわ、ルート・アイヘルさんは何も權利を持つてゐやしませんわ）

卓の上の蠟燭はフアウストの蠟燭のやうに燃え、夜半は不動のままに靜止してゐた。夫と妻はゲーテより百倍も莊麗なもの——××××の話をしてゐた。それはこの石造家屋の外で、妻と夫の時の外で歩みを進め、かの挽臼の上に歴史を流し込んでゐる××の話である。そのとき夫は革服となつたシェギエートの背廣をぬいで、書物と妻で時を溶解させようとしてゐた。なぜと言つて、平べつたい本の四邊形は寫眞のカメラのやうに、人間の思想を時間と空間の中へ、どこへでもどんな風にでも投じる性質をもつてゐるからである。——また妻の腕と、頸と、頭と、肩と、胸と、その言葉と、その喉かみと、その愛撫とは——人間に自分自身の心臓を掌へ納めさせ、自分の全存在を心臓へ墜させる。そのとき赤毛のリサーに生命を與へたかの美しいものと、周圍を領する平安とは、コスミツクなものとなるのである。夜半になつて、この誇り高い落ちついた婦人であると同時に、××の婦人である妻も眠り、蠟燭も消され、書物も闇の中に沒した時——そのとき彼は、もし寢ついてゐなかつたら、偉大なる世界のことを思ひ、盟友自分の進めてゐる偉大なる歩みを思つた——彼は肘で頭を支へてゐた。すると彼と並んで、マチエツスカヤで傷ついた妻の白い肩がかすかに闇の中に白く浮いてゐる——それはいつも黒いものを着てゐる婦人、一生涯を通じて唯一のものである婦人であつた。それは愛の神秘であつた。それは××の水變と同じやうに、溢すことの出來ない水變であつた。

——

一週か二週に一度、時には月に一度、ひまな一時間かひまな一晩が出來ると、エドガールの所へフエリツクスが來た。でなければ、フエリツクスの所へエドガールが行つた——それは友情の法則を履行し杯を合はせるためだつた——しかし、ヲートカとヲートカを合はせるのではない、魂と魂、思想と思想を合はせるのであつた。

そのとき重々しい肩つきのフエリツクスは、部屋の中を歩き廻つて、愛想を言つたり、簡單な句で冗談を投げ交はしたりしながら、兵士らしい目で部屋の隅々や、圓天井を見廻すのであつた。

『天井がしつけてる、窓から雨洩りがしてゐる、健康を尊重しないね

――』

『暖爐を見せ給へ、どんな風に閉めるんだい、閉めなくちやいかんよ――』

『ギーチャ（ギクトリヤの愛稱）瞳を見せてご覧、あなたは貧血性だ』――

それからフェリックスは書齋の長椅子に腰をおろして、幾時間も幾時間も動かなかつた。本棚から秘藏の波蘭酒か合成酒が取り出される。エドガールはフェリックスの身振りを一つ一つ知つてゐた。フェリックスはエドガールの身振りを一つ一つ知つてゐた。フェリックスは波蘭酒を二つの杯について、洒落を言つた。五杯目を乾してから彼らは魂と魂を合はせ始めた。それはエドガールも、フェリックスも、ギクトリヤも、この數時間に自分自身、自分の仕事、自分の思想を檢めて見るためだつた。本が仕事卓から取りおろされ、蠟燭がふんだんに立てられた。フェリックスの傍へ皿の載つた臺が寄せられた。ギクトリヤはアンゴラ產の襟卷きの暖かみに包まれて、無言を守つてゐた。フェリックスは自分の肩を輕くするために、エドガールの膝へ手を凭せてゐた。その時フェリックスは自分の思索の斷片を、

る人物だよ。先生なかなか利口な男だつたね。海の底を旅行したり、無の中からマナを作り出したり、沙漠の中に迷ひながら、ソヹート大會を開いたり、シナイで謁見式を催したりしたんだからな。先生、四十年のあひだ自分の生活面積を探求して、奮鬪を續けたんだ。もつとも――つまる所――約束の地までは行きつけないで、ヌンの子ヨシヨアに太陽を止める仕事を任せた。これは中々氣の利いた物語だよ。なぜと言つて、モーゼ老人が約束の地へ行きつけなかつたのは――論理に基づいたことなんだからね。ソドムを知つてゐた人間は、イスラエルへ行く譯にゆかなかつた筈だ。彼らは約束の地に住む資格がない。なぜつて、彼らは巡査の何たるかを知つてゐたからだ。巡査がどんな口髭をしてゐたかといふ事も、その細君がどんな胸を持つてゐたかといふ事も、ちやんと知つてゐたからだ。老人は新しき時代のために枯骨を横たへるべきだ。つまり巡査を知らなかつた新しき時代のみが、約束の地に住む資格を有するんだからね。僕はさう思ふよ――僕らは今モーゼと同じ仕事をしてゐる。海の底も旅行して來たし、マナの味も知つてゐる――が、しかし我々はお互に新しい生活

エドガールはかうした思想の毒を悉く、己れの生命であつた××に應用するために受け入れた。フェリックスは靜かにのろ〳〵と話した。腕つきの頑々しい男だ。蠟燭はゲーテ風に燃えてゐた。本棚は書物の皮を並べて靜止してゐた、人間の知識と時に向けられたカメラのやうに。

エドガールは、フェリックスの知らない言葉のペーソスを知つてゐた。

『さう。しかしモーゼもレーニンも律法の板を書いた。我々は生きなけりやならん！——我々は未來の律板を書いて、それを自分の血で洗はなけりやならん。我々は少しばかり不信者だ。だからその律板に味をつけるソースを知つてゐる——僕も君も人間のうしろ頭を射つて殺したが、それは廻り路なんだ。このソースは新しい世界の人に知られちやいけない。ちやうど約束の地で——つまりその——パチファルの妻の奸策を忘るべしとされてゐた、あれと同じ事だね。我々はヒロイックな生活を生活しなくちやならないんだ。』

その時フェリックスとエドガールの思想は、露西亜の僻陬や、英國の炭坑や炭坑夫や、支那の大河揚子の峽谷や、スチンネスの綜合事業や、チャーチルの僞善主義など——すべて未來の律板を書く材料となるべき、火事の燃え上がりさうな所を彷徨し始めた。——この水甕は溢してならぬものである。——これらの人々に取つては日常茶飯も、上官も、部下も、同僚も、沒交渉の人間も、仇敵も、成功も、失敗も、すべて××の中から發しるのであつた——で、かうしてゲーテの蠟燭が燃えて、書物のカメラが靜寂を貪つてゐる時も、エドガールとフェリックスは思想と思想を打ち合はせながら、自分たちの日常茶飯の話をした。彼らの生活環境であり、彼らの社會觀を形づくる昨日の日、おとゝひの日の話をした。かうしてゲーテから生れた蠟燭は、つひにフェリックスが立ち上つて、家内の靜寂を縫つて玄關口へ出るまで、じり〳〵と燃え續けた。玄關口で二人の同胞は接吻を交はし、自動車は暗の中に消えて行つた。妻と夫の時が殘された。

四

××××の時代は性道德を建て直して、經濟的に家庭を開放した。人間の世界では、一夫一婦は生物學的法則ではない。エドガールは永久にヸクトリヤと繋ぎ合はされてゐた。それは彼と共に人生行路の森林を辿り、彼のために娘を、彼の愛であり未來である赤毛のリサーを生んだ女である——けれどエドガールは、この時代の多くの男、多くの女と同樣、生理的に自分の妻に童貞を守らなかつた。暖房貨車の中で、枕木の上で、偶然の町で、何の束縛をも加へない女たちが、××の×をたした。彼らは自分の永遠に女性的なもので、太陽が胸へさし入つたやうな悦びを與へた。エドガールは彼らを通して、その女性的なもの

に觸れたばかりである。××の水甕は永遠の女性的のものゝために人間の頭腦を殘さなかつた。

一切は日常茶飯の道德で辯護せられた。彼は二面の生活をもつてゐた——第一の生活、第二の生活。森に住む狼には秘密の拔け道がある、人の氣づかぬ棲みかがある、目標がある、目じるしがある、しるべがある。第一の生活から、××の臼から、書物のカメラと家庭の習慣から、知己交友の範圍から——エドガールは自己を切り離して、第二の生活へ繫いだ。午に近い晝間の仕事に關するベルの中に、一つのベルが交じつた。時と場所の打ち合はせである。エドガールは偶然の一隅に自動車を止めて——第二の生活の中へ、神秘の中に沒入した。それは誰ひとり知らないもので、そこでは悅びが一切を肯定する唯一のものであつた。情事の中には疲勞とか、ルーブリとか、性格の裏面とか、さういふ日常茶飯がなかつた——實際、秘密のうちに行はれて、誰も知るものがないといふことで、多くの事物が肯定されるものだ。なぜと言つて、秘密に包まれたものは、多くの變態性を肯定するからである。大都會には秘密の拔け道がある、人の氣づかぬ目標がある、目につかぬ目じるしがある、皆の目から隱された逢ひ曳きの場所がある。こゝには——事務と時から切り離されて、第二の生活に繫がれた時間には、たゞ女を享樂する悅びがあるばかりだ。

秘密の目じるしで彼はその拔け道を知つた。心臟を痺らすやうなものが、その拔け道を充たしてゐた。男の目の上に置かれた女の掌は、全世界を隱すことが出來る——それは生理の法則に基づいて、單なる視覺についてのみ言ふことではない——掌が世界より大きくなるほどに隱すのである。そして女のあらはな膝はモンブランの頂きより冷たく壯嚴になり得るものである。彼女マリヤは自分の持てるすべての美しきものを捧げるために、彼の方へ進んで來た。彼女は愛した。——さい自分の愛を辯明しようとせず、辯明などといふ事を考へもせず、古典派の音樂の拔け道に自分の愛をおろした。彼女はエドガールの胸に顏を隱した。それはぴつたり胸により添うて、幸福を聞くためであつた。彼の心臟を聞きながら、なんにも訊かないためであつた。彼女の掌も彼女全體も——彼の掌の中にあつた。男は誰でも女を領有する幸福を知つてゐる——そして人は誰でも、人間の魂を領有する—そう大きな幸福を知つてゐる。あらゆる思想感情は——まるで掌をさすがやう。時か切り離されたこれらの時間は、朝の十時であつたり、晩の十時であつたり、晝の四時であつたりした——そしてまた秘密の拔け道も——フェリックスの家であつたり、エドガールの家であつたり、第三者の友人の空いた部屋であつたり、國際寢臺車のクペーであつたりした——さまざまな狡智が弄された。かうした秘密の拔け道

の時間は早くたつた。その時間が過ぎ去ると、その時は玄關口の階段や、横町の曲り角などで、最後の接吻を交はし最後の優しい言葉を投げた後──第二の生活は──事務と、配慮と、活動との、第一の生活へ繋ぎ變へられる。横町の曲り角の次には、もうフェリックスの所へ歸つて、まるで他人の女として、マリヤ・ニコラエヴナに挨拶をしたり、その健康を尋ねたり、妻の言づけを傳へたりすることが出來た。なぜといつて、人間の活動の中で秘密の行爲は、しばしば道徳の衡にかゝらぬことがあるからである。横町に續く本當の第一の生活では、兩の肩が事務の車に繋けられる。それは廣場に事務と意志の塊りが溶け合つて、もう腦の水甕を溢すことが出來ないからであつた。人間の思想を指揮しなければならないからであつた。××の印の傍に、歷史の風で頰のがさがさになつた男が立つた。そのとき背廣のシェギエートは革になつた。狼の拔け道は腦から切り落された。家では本の陰から赤毛のリサーが湧いて出た。

五

フェリックスの目は活動を生むやうに出來てゐた。エドガールの目も、空間の彼方から歸つて來た時は、やはり活動を生むやうに出來てゐた。この二人は事をなし、そのした事のために死ぬるべく生きてゐた。

獵師は森の中で卷狩りをして狼をとる。勢子は狼の拔け道を探り出す。そのとき獵師らは狼の道に立つて、木叢の中に旗を引きめぐらす。森は秋らしく、靜かに、沈默を守つてゐる。森の沈默の中へを、勢子どもがわつとばかりに叫びを上げる。狼を巢から立たせ獵師と旗の連なつてゐる道へ追ひ出すためである。狼の生は死に[illegible]つて來る。

朝エドガールの書物の洞へリサーが來た。彼女は人形の足を摑まへて、床の上を引きづつてゐる。エドガールは卓の上へ、本の間に娘を坐らせた。

『パパ、パパもママも、あたしやナターシャも、みんな生きてるんだつて仰しやつたわね。わたし達は生活してるんだつて。でもお人形のミルカは──やつぱり生きてるの?』とリサーは訊いて、ずるさうにほゝ笑んだ。『お話をして頂戴。』

エドガールはなぜ人形が生きてゐないか、充分に説明することが出來なかつた。リサトは退屈になつた。エドガールは、自分の坐つてゐる枝を切つた熊の話をした。

『ママの方がお話が上手よ。』とリサーは言つた。

『いや、わたしの話の方がいゝよ。』とエドガールは答へた。

『そーお、』とリサーは言つた。『でもママのお話には繪があつてよ。それだのに、パパのお話ぢや、あたしなんにも見えないわ、熊がどんなに枝を切つて落つこちたのか。ママのお話はみんなご本に描いてあるわ。』

　リサーはエドガールに向つて卓の上に坐つてゐた。そして本の中に溶け込んだり、またその中から生え出したりした、小さな赤毛の陽氣なリサー。エドガールは彼女と『じやんけんぽん』をして遊んだ。彼女は指を廣げて、恐ろしい鋏にしようと苦心した。そして足を舌のやうにぶら〳〵させた。やがて彼女は父の背に馬乗りになつて、父にコーヒーを飲ますために食堂へ乗り出した。コーヒーの間に父と娘は鋏を持つて遊んだ。

　正午、勞働時間、壁に地球の地圖が掛かつて、卓の一角が電話に押しつけられ、卓と仕事用の肘椅子の向ひ側に、別の椅子が一脚ぽつねんと立つてゐる役所の一室──兵營のやうにがらんとして嚴めしい役所の一室から、フェリックスの言葉が電話線に流れ込んだ。

　マリヤに──

『マリア、[illegible]

『エドガール、君すぐ僕のところへ來てくれ、大事な用件があるから。ぜひ頼む。僕の部屋へ。』

　マリヤはフェリックスの向ひに腰をおろした。一分間ばかりエドガールを待つた。エドガールは元氣よくはいつて來た。エドガールには椅子がなかつた。フェリックスは電話の受信器をはづし始めた。それから新しい煙草の袋を開けて、自分でも取りエドガールにも薦めた。

『一ぷくやらう。坐りたまへ、エドガール、まあその、窓の上にでも。』とフェリックスは言つて、ゆつくり煙草をくゆらせた。

　エドガールは、恐ろしく注意ぶかい目でフェリックスを眺めたち、窓の方へ行つて、窓じきりに腰をおろした。マリヤは落ちついてゐた。フェリックスは煙草をかんでゐた……

『君に一つ訊きたい事があるんだがね、エドガール。』とフェリックスは切り出した。

『何のことだね？』とエドガールは問ひ返した。

　フェリックスは頭を垂れた。眉間の皺が鬱陶しく狹められた。

『僕は君とマリヤの關係を訊きたいのだ。君たちは默つてゐるけれ

子から立ち上つた。窓の外では雨がしと〳〵降つてゐた。窓のボヘミヤ硝子は光線を陰影のないものにした。光線はニッケルめいてゐた。

トラジックな瞬間、人は身振が少くなる。

『默つてゐるね？』と言つてフェリックスは頭を上げた。『よろしい。タムボフの親父さんが、ある時カルタの勝負で組のものに損をさせながら、「カルタのとき人間同志は兄弟だ！」と言つた事がある。よろしい。僕が君たちを呼んだのは次のやうな譯だ。田舍の人は日記をつけたがる癖があるが、去年の九月八日、つまりその、ちやうど一年と一週間まへ、君たちは――お前、僕の妻のマリヤと、それから君、僕の親友のエドガールは、ソヴエートの領地のポレーチエで――僕を欺く行爲をした。僕は他人の心の命令者ぢやない。僕自身にもさういふ冒險があつた。だから他人にもその××を認める。けれど僕はちやうど九箇月間、その日記を讀んでゐるのだ。僕はなんにも知らないやうなふりをしてゐた。一時の迷ひなら、その中に過ぎ去つて了ふだらうし、もし眞劍なら、君達の方から僕に話してくれるだらう、とかう思つたもんだからね。エドガール、君は空の杯で僕と乾杯しようとしたが――しかし君は僕の親友だよ、エドガール。僕らは新しい社會相と新しい××の建設者なんだからなあ。つひに一年たつた、で、僕は君たちに話をするのだ。一年といふ時期は、これが一時の迷ひでないといふ事を證明した。僕は××××を××××××とは思はないけれど、コムミュニスト同志の關係に於ける廉恥といふものは、我々の義務と考へてゐる。しかし、いま僕は理窟でなしに行動を提議してゐるんだ。エドガール、君も分つてくれるだらうが、僕の心は君から離れて了つた――しかし僕は自分の妻が侮辱されるのを許すわけに行かない、それは君も分つてくれるだらう。で、僕は役にも立たぬ虚僞をぬきにして、君たちに結婚を薦める。僕は事件の當然の經過として、の事を主張する。さあ、マリヤ、こゝに家の鍵がある。これから僕は一箇月間サナトリウムへ出掛ける。君たちも一箇月あつたら、すつかり落ちつけるだらう。ぢや失敬。行つてくれ給へ。ご機嫌よう。』

マリヤは宣告を聞き終つて、椅子に腰をおろした。エドガールはフエリックスの言葉の水甕を溢さすまいと、筋肉一本うごかさなかつた。彼の目は鋭くなつた、ちやうど曠野の中で敵の行動を注視する放牧の祖先の目と同じやうに。フェリックスは電話の受話器を掛けたが、すぐにベルが鳴り出した。

『あゝ、』とフェリックスは言つた『僕だよ、クランツ。命はない。ああ、サナトリウムへ出掛けるから。いや。たつたいま僕は妻と離婚したよ。あゝ。いや――僕はたゞ虚僞の狀態を片づけるやうに提議したのだ――彼女は事實上の夫と暮した方がいゝだらうと思つてくれ。ザデカ

だ。僕はあの男とマリヤを呼んで、マリヤの運命を心配してくれるやうに、あの男に頼んだのだ。あゝ。』

フェリックスは受話器を掛けた。役所の一室はぎこちなく、がらんとしてゐた。壁の上の地圖は地球を現してゐた。ボヘミヤ硝子はニッケル色の光線を生み出した。窓の外では雨が降つてゐた。マリヤは泣き出しながら、卓の上へ頭を落した。

『こゝは役所だよ、マリヤ。』とフェリックスは言つた。『おやめ。おいで。』

……大都會の中で人間は時とすると――巻き狩の旗に圍まれた狼のやうな氣のする事がある。マリヤとエドガールが出て行つた時、フェリックスは卓から立ち上つた。フェリックスは――その病める足で、幾何圖のやうに眞直な足で――やたらに早く部屋の中を歩き廻つた。フェリックスの肩はいつもより一そう重々しかつた。額の皺は目の上まで匍ひおりた。彼の顔は、一晝夜なにも食はずに三十露里も歩き通し、黄昏ごろ他人の家へ、晩の茶の時刻に辿りついた人のやうであつた――しかもそれは茶を飲むためでなく、恐ろしい報知を事務的に言葉[illegible]傳へに、そのまゝ[illegible]次の恐ろしい報知を[illegible]

――第一、第二、第五の人に。

『あゝ、養生に出掛けるよ。なにつまらん事だ。僕はけふ妻を事業上の夫の所へやつたよ。僕は他人にすべてのよきものを望んでゐるの、出來るだけ生活を簡單にしようと思ふんだ。エドガール・ザデカ、僕の親友だ。僕はそれを事件の當然の經過で、しかもコムミュニストの義務だと思つてゐる。ザデカは潔白なコムミュニストだ。僕はあの男を助けたんだよ。あの男も苦しんでゐたのだからね。』

フェリックスは第三、第五の人に、自分フェリックスは全く平静で、ほんの心持ふざけてゐるといふ事を、感じさせるやうな調子で話した。フェリックスの顔はあくまで不動を守つて、その額は恐ろしいぬかるみ道を踏破しようとする、強固な意志に凝結してゐた。部屋のボヘミヤ硝子の外には、秋の雨がそゝいでゐた。鉛のやうな廣場には、人間の群集が流れてゐた。旗に取り圍まれた狼は――森の中で、夜明け前の氷雨の中で――勢子どものわつわつといふ叫び聲が聞える――氷雨は旗を濡らして――狼はどこへも行く處がない。第一の生活と第二の生活は――こぐらかつた。イリンカはエドガールと

[illegible]

拔け道があつた、太陽そのものが心臟の中へ入り込むやうなものであつた。エドガールは廣場の鋪から、クレムリンのゴシックから、九月の氷雨から、生理的な痛みが脊椎骨を傳つて、頭蓋骨の下へ忍び込むやうな氣がした。第一の生活と第二の生活の入り交じつた中で、群集がわつわつと喚いてゐた。目は空間の彼方へ隱れて了つた。

『一體わたし達はどうしたらいゝんでせう、エドガール？』とマリヤが訊いた。

『お前いますぐ家へお歸り。』とエドガールが答へた。

『家つてどこへ？』とマリヤは尋ねた。

　エドガールは答へなかつた。クレムリンのゴシックは無言を守つてゐた。エドガールは思ひ出した――きのふ彼は情婦のマリヤを兩手にしつかり抱へて、歩き廻つた。そして情の籠つた言葉をさゝやいた。ところが、今マリヤは永久に彼に與へられた。彼は自分の前に立つてゐるこの女を、空間の彼方から眺めた――他人のやうな目で眺めた。目は理解しなかつた。フェリックスは人間の生命がいかに强烈なものであり、生活がいかに辛辣の深いものかといふやうな議論をしながら、彼に異常なショックを與へたある一瞬間の話を、エドガールにして聞かせた。マリヤは戰線の血の海の中で、兩親の殺された家の中で、突然たつた一人、自分自身のために、ピアノを彈き出した。そしてフェリックスを見た時、内氣らしい輕のたげた表情を浮べたのである。マリヤは今エドガールの前に、肩を落しながら立つてゐた。橫しぶきが彼女の顏を打つた。その顏は雨に泣き濡れてゐた。マリヤはエドガールににつこり笑つて見せた――恐い事でもしたやうな、賴りなげな微笑で。

『友達のところへおいで。』とエドガールは言つた。『僕は一時間ほどして行くから。』

獵師は狼の卷き狩りの時、狼の道をだん〲狹めるために、旗をあちこち持ち歩く。電話は狼の卷き狩りにもなるし、同時に輿論にもなり得る。皇帝のため幾世紀か前に建てられたクレムリンの部屋部屋は、天井が高いけれど薄暗い。そこには靜寂が領して、和蘭タイルの暖爐が燃えてゐる。電話のベルの音は卓から落ちて、豌豆のやうに播き散らされ、洪水のやうに流れることが出來る。日常茶飯、長官、部下、同僚、沒交渉の人物、仇敵は、電話で足を仕事卓へ縛せることが出來る。エドガールの書齋で電話が鳴り續けた。

電話は親友同志、同僚同志で語られた。

『今フェリックスが電話をかけたが――』

『フェリックスは本當のコムミュニストだ、良心をもつて反應する男だ――』

『古い道德は亡びて行つてる。人間か女のために爭闘して、嫉妬に苦しんだやうな時――』

『結婚式はいつだね？――』

亞細亞的なモスクワのクレムリンは、ワシーリイ聖者寺院から見ると、奇蹟のやうに中世歐羅巴式のゴシックに變化する。中世の騎士の間には挑戰のしるしに手袋を投げる習慣があつた。かうした挑戰は時とすると、亞細亞風の露西亞で狼の卷き狩りに變ることがある。フェリックスは勢子に變つた。

決心し行動しなければならなかつた。

六

……すべて歷史上の時代は、その時代に生み出され、かつその時代に獨特の道德を持つてゐる。論證の棒はぽつきり折れる場合がある。――で、棒が論證と一しよに折れない程度に、論證の棒を曲げて行きながら、次のやうに言ふことが出來る。××時代の社會道德は政治的

はない――持物に對して無詮索になるのも――殆ど、、になるのも構

はない――童貞とか騎士道とかいふ觀念を一さい失つて、婦人に對して、、、、になるのも許される――たゞ政治的に道德堅固で、、、、、、、、に文盲の域を脫し、、、、、、に信仰が深くなければならぬ。政治的に文盲なのは不道德である。SR（社會革命黨員）や、メンセギックや、アナーキストになるのは――單に不道德なばかりでなく、まさに恥辱である。『SR』とか『メンセギック』とかいふ言葉は、罵詈言葉であつた。人間は種々雜多な生物學的タイプに生れついて來る。政治的に無能者も生れれば有能者も生れる。政治的才能も、文士、俳優、畫家などの才能と同樣に、生れつきのものである。すぐれた音樂家でありながら、政治的無能者といふ場合もある。潔白この上ない星學者、ないし文學、教育、婦人に對する道義の保持者――世界的名聲の所有者となる事も妨げない――しかもかういふ人々は、當時の社會の焦點になつてゐなかつた。かういふ人々は、その人物が大きければ大きいほど、なほ一そう疑惑を呼び起した。それは彼らが――政治的にいかなる信仰を有するか？といふ問題にまごつくからであつた。

價値するのは間違つてゐる。なぜと言つて、番號札のついた國有の家具を使つて、時々きてれつな字で自分の苗字をサインする人たちは――星學者が星を見張るすべを知つてゐるやうに、、、、成就するすべを知つてゐたからである。、、、、、、死ぬるすべを知つてゐたからである。これらの人々は一切を理智の意志に隷屬させ、理智外に横たはつてゐるすべてのものを滅却しながら、偉大なる意志と頭腦と、理智と合理主義で生活しなければならなかつた。

――――

狼の掟といふのがある。狼は仲間の年寄りたちが老いぼれた時、それを食ひ殺して了ふのである。なぜと言つて、年寄りは老耄といふ事によつて、××の××を破るからである。そして狼は力の×××を堪へ忍ぶ事が出來ないからである。人間は社會的存在である。人間は決していかなる瞬間にも、自分は眞にその瞬間あるが如きものであると言ふことは出來ない。人間性格の眞相は多數の法則によつて啓示される。またかういふ掟がある――大勢のものが根氣よく、長い間、ある人に向つて、お前は潔白ないゝ人間だと言へば、その者はなるほどさうだと決めて、正直で潔白な人間にならうと努力する。人間は潔白といふ事について、催眠術にかゝり得るものである。――しかしそれは催眠術師の力ではなく、社會の力なのである。人間の社會は專門の催眠術師より、一そう强い催眠術師である。狼は力の××に支配されてゐる。

――――

……セルゲイ・エセーニン――露西亞××の如き時代にのみ見ることの出來る、ファンタスチックな生涯を終つたこの人の傳記中、次の點を强調せざるを得ない。この人はたゞ感激のみに生きてゐたので、その點が彼を當時の社會人と劃然區別してゐる。セルゲイ・エセーニンは悲劇的な最後を遂げた。しかも彼の傳記ちう最も本質的な點としてイサドラ・ダンカンとの悲しむべき邂逅を指摘しなければならぬ。セルゲイ・エセーニンは、世界的藝術家たる五十歳の婦人――情慾を消す力のない、露西亞語を話せないイサドラ・ダンカンの情夫になつた。地球上の多くの頭腦を狂はせ、人類の富の數千萬弗を償した婦人、ホノルルから紐育は愚か、露西亞のイルピートまで名を知られた女優、自分の肉體を保存するために、世界中のコスメッチク工場を知り盡してゐたダンカンは――ライ麥色の毛をしたリャザン生れの青年に身を任せた――そして、文學的ボヘミアンの道德によつて、通譯つきでなければ話の出來ぬかうした情婦を持つことが、セルゲイ・エセーニンに取つて名譽とせられた。當時の文學的ボヘミアンの道德によつて、このことは愉快な駄々つ子ぶりであり光榮であつた。けれども

エセーニンはイサドラ・ダンカンと結婚し、彼女の夫となつた――そしてこれがエセーニンの滅亡となつたのである。彼らの關係と爛酔のヲートカには、何の變りも生じなかつた。けれどもそれは滅亡だつた。なぜと言つて、一切が眞劍になつたからである。二十そこ〳〵の青年の傍に五十の婦人が眞劍に並んで立つたからである。それはエセーニンの言葉を解しない女、地球上いたる所で無數の男の情慾と名聲を飲んだ女、地球に愛せられ過ぎて、地球の上で倦怠を感じた女、よる寢ることも、人間の着物をきる事も忘れた女、よる寢ないでゐるために、露西亜のヲートカをコップで飲んだ女である。かういふ妻を愛することは出來ない。ライ麥の叙情詩人であり、美しい人間であるセルゲイ・エセーニンは、イサドラ・ダンカンの顏を拳固で打つた、腹を足蹴にした。彼女を牝犬呼ばりしてゐる詩を朗讀して聞かせた。が、彼女にそれは分らなかつた――かうして彼女と共に露西亜の苦い酒を飲み、そのコップで自分の命――自分の血も名聲も詩も飲み乾したのである。

全うするために旗の鎖を突破するか、或ひは命を失ふために丸の下に斃れなければならぬ。もし生きながら捕まへられたら、それこそ災難である。狼は檻の中へ入れられて、檻の格子に牙は折れ、毛は禿げまだらになつて了ふ。モスクワとその郊外の秋の日は――九月の日は、もし雨でも降らうものなら、ぼろを下げた乞食のやうにのろ〳〵じめ〳〵と過ぎて行く――そして夜になると、大地を黒い闇の中へ落して了ふ。それはぼろを下げた晝の乞食が、並木街のベンチの下で夜明すのも、見えないほどの闇である。そのときモスクワの通りが晝間は鉛のやうになり、夜はその黒い面に電燈の光がエナメル細工をする。野の中、森の中、森の中には――濡れしよぼけた靜寂があつた。人は自分の手さへ見えない。そして泥が膝までまぶれつくのだ。さういふ夜は恐らく、大地が悔恨を感ずるために存在してゐるのだらう。モスクワ市外の原中にある古い庭、サナトリウムになつてゐる地主屋敷の暗い一室に、煙草を手にしたフェリックス・クランツが、窓ぎは近くに立つてゐた。サナトリウムは眠つてゐる。大地は闇の中へ轉落した。煙草は赤い光で顴骨を照らしてゐた。顴骨の上に映る煙草の灰の

くて、中世騎士道の手袋にひとしい、巨大な慘忍性であつた。煙草の火が消えた。その時マッチがぱつと光つた。病院の寛衣を著た男は、頭を冷たい窓硝子に當てながら立つてゐた。額の皺は老人らしく寄せられてゐた。この窓の外には黑い闇があつた。闇は大地を隱してゐた。地主屋敷のかなた、古い庭のかなた、野のかなたに――モスクワがあつた。マリヤはフェリックスの部屋の幾何公式の中に、たつた一人ゐた。誰も來ない、誰も電話のベルを鳴らさない。フェリックスの家に於けるこの最後の夜はしんとしてゐた。エドガールは五時に來るはずであつたが、夜中になつても姿を見せなかつた。たゞ犬が彼女の足もとに臥てゐるばかりだつた。モスクワの夜半は、街燈の濡れしよぼけた光の中で、雨をしぶかせてゐた。クレムリンの下、モスクワ川の河岸に列ばかりの並木街が設けられてゐた。クレムリンも河岸通りも、空間の彼方に沒入することが出來る。クレムリンの下の河岸通りを、鍔廣の黑い帽子に黑い外套の襟を立て、赤革のゲートルをつけた男が、眞夜なか歩き廻つてゐた。男の歩きぶりは露西亞式でなかつた。男は雨と風に顏や胸を曝しながら、頭を捧げ胸を突き出してゐた。男の目は空間の彼方にあつた。それはエドガール・ザデカであつた。もう空間の彼方から歸つて、決心し行動しなければならなかつた。で、男は決心した。男は帽子から雨と思想の混亂を、エネルギッシュに振るひ落した。男はエネルギッシュにクレムリンの壁の下を、ワシーリイ聖者寺院の横から登つて行つた。國家のものに屬するエドガール・ザデカの家には、圓天井の中に消えて隱れる恐ろしく重苦しい壁があつた。書齋の壁は本で蔽はれてゐた。エドガールは蠟燭をつけた。蠟燭の光は圓天井の下に隱れた。そのとき本の陰から現れたのは、妻であり、母であり、友であるヸクトリヤだつた。またブダペシュトにおける靑春時代、彼の生活に湧き出した女、××の鐵劍と饑餓の中を彼と一しよに通り拔けた女、無理解の露西亞、言葉の森林と露西亞式向う見ずの海を潜つて來た女であつた。この女は彼と一しよに女性の道を――はじめて情慾のために目を閉ぢた時から、リサーに對する五年間の愛撫に致るまで――辿つて來たのである。彼女は夜の寛衣をきて、蠟燭を手にはいつて來た。彼女の肩はあらはであつた。

『あなたお呼びになつて、エドガール？』とヸクトリヤは尋ねた。『あなた大變おそかつたのね。わたしの所へフェリックスが電話をかけて來ましたわ、四月の一日でも何でもないのにね。聞かして頂戴、一たい何の事ですの？　わたしちつとも分らなかつたわ。』

……空間のかなた、ブダペシュト郊外の里道に添つた藪の中に、二月の末三月はじめ、雪が溶けると早々、ガラントゥスといふ空色の花が咲き出した。エドガールとヸクトリヤは、若い時にそれを摘んだもの

である。エドガールがカルパートの戰線にゐた時分、それと同じ花が塹壕のすぐ外の野に咲いてゐた──その時エドガールは命を的に塹壕の外へ匍ひ出して、その花をギクトリヤに送らうとした。丁度それと同じやうな花を、けふ偶然花屋の硝子ごしに見た。娘のリサーはママが誰よりも一ばん話が上手だと言ふ。けさエドガールは、自分の坐つてゐる枝を切つた熊の話を、リサーにして聞かせた。そしてエドガールはこの話の方がママのよりいゝと言つた。リサーは母を辯護するすべを發見した。『そーお、』と彼女は言つた。『でもママのお話には繪があるけれど、パパのお話ちやなんにも見えないわ!』匈牙利でソヱート××が鎮壓せられた恐ろしい夜、ギクトリヤは花賣りに變裝し、エドガールを花車に乘せて、歩哨線外へつれ出した。彼は花の中に潜伏してゐた。そこにはガラントゥスがあつた……

　日は空間の彼方から歸つて來た。エドガールの顏と胸は行動するために、本能力に反抗し始めた。

『フェリックスが電話をかけた?──それは四月一日の間違ひぢやない。あの男は本當を言つたんだよ。』

傍に腰をおろした。──リサーは母を辯護するすべを發見した。そして『そーお、』と言つた。『でもママのお話には繪があるけれど、パパのお話ちやなんにも見えないわ、熊が枝を切つたのが見えないわ!』──ガラントゥスは彼らの青春時代、ブダペシュトの里道に添うた濠の中に咲いてゐた。それはまだ幾千年も幾千年も、大地の存する限り、人類の續く限り咲くであらう。なぜならば、アリーサが生きてゐるからである──しかし人間は、彼エドガールも、彼女ギクトリヤも──土を離れてドンスコイ僧院の火葬場へ去るであらう。そして火葬場へ赴く道すがら老いるであらう。髪はすつかり白くなつて、齒はぽろ〳〵と落ち、皮膚と思想はこちこちに剛ばるであらう。その間にもガラントゥスは咲いて咲いて、咲きつゞけるのだ。

『聞いておくれ、ギクトリヤ。僕は言はなければならない、何もかもお終ひになつた。世の中には、必ず守らなければならない初歩の義務がある。フェリックスは×××××の要求に從つて、潔白に行動した、どうでもいゝやうに解釋しておくれ。僕はあの男の挑戰を受けない譯にゆかなかつたのだ。僕は潔く渡された女を棄てる譯に

たの傍を離れて了ひます。』

　年は鉛のやうな歩みで進んで行く。人間の頸や肩は腐蝕し得る。妻であり、母であり、友であるギクトリヤ、青春と共に湧いて出て、二人共同の道に一切を捧げ盡した女——（九月の夜は、並木街のベンチの下に宿りを求めるぼろ〱の乞食も見えない）——ギクトリヤはいつも口數の少い誇りの強い女であつた。ギクトリヤは椅子から立つて、傷ついた肩を隱すために、寬衣を掻き合せるだけの力があつた。ギクトリヤが情婦で甘んじることが出來ないのは、エドガールも知つてゐた。マリヤはエドガールの第二の女となる事に妥協した。さういふ妻はない、よし彼女が妻であるとしても。ギクトリヤは堅い決心の中に眉を引きしめるすべを知つてゐた。

『よござんす。』とギクトリヤは繰り返した。

『明日わたしとアリーサはあなたの傍を離れませう——あなたの名譽を救ふために。もし名譽が娘も、年とつた妻も、棄てて了へと要求するのでしたら。』

　ギクトリヤは蠟燭を取るために、燭台に手を敝せた。蠟燭はいつかのやうにホフマンじみて見えた。あの時がつしりした窓の外に、黃ろいぼやけた秋の空燒けが横たはつてゐたのは、晩であつたか夜明けだつたか、エドガールは覺えてゐなかつた。ギクトリヤが身を動かさうとして、氣力を集中してゐるうちに、かれこれ小一時間は沈默の中に過ぎたらしい。蠟燭のステアリンが彼女の手へ一面に流れてゐたからである。エドガールは死を指揮しながら、卓の前に立つてゐた。ギクトリヤは頭を上げて、蠟燭を取るだけの氣力を、自分の中に見いだした。氣力を集中した。

『さよなら、エドガール。』とギクトリヤは言つた。

『さよなら、ギクトリヤ。』とエドガールは言つた。

『わたし達は十五年いつしよに暮して來たんですよ、エドガール——一たい義務つてものはどこにあるんでせう？』

『ほかに仕様がないんだ、ギクトリヤ——さう、義務だよ。』

『よござんす。あなたはわたしと娘をお棄てになるんですね。アリーサを勘忍してやつて頂戴——あなた可哀さうぢやないんですか？あなた自分で自分の始末がつきますか？——××の義務ですの？』

『さうだ、始末がつく。さうだ、つまりその義務なんだよ。』

『さよなら。』

　ギクトリヤは、この誇りの強い女は、毅然として部屋を出るだけの氣力を、自分の中に見いだした。ギクトリヤは什物の陰に隱れた。彼は圓天井の中に消えて行つた。家は靜寂に包まれた。エドガールは卓の傍に立つてゐた。エドガールの頰骨はしつかりと目に結び合

た。月は行動するためについてゐた。エドガールはポリセギックであつた。星學者が星を見張るすべを知つてゐるやうに、行爲するすべを知つてゐる種類の人間だつた――自分の行爲のために死ぬるすべを知つてゐる種類の人間だつた。

エドガールは電話の受話器を取つた。

エドガールは同僚に言つた。

『いつ僕が結婚式に呼ぶかつて訊くんだね？――僕はすぐ結婚するよ、あゝ。もし差し支へがなければ、僕これから君の家へ濃い熱い茶を御馳走になりに行くよ。もう夜中の四時だが、勘忍してくれ。實に奇たいな結婚だよ。ポリセギックの戀だ。』

エドガールはマリヤに言つた。

『勘忍しておくれ、僕は五時に歸れなかつた。忙しかつたもんだから。あす僕の所へ引つ越しておいで。』

マリヤは電話に向つて答へた。

『わたし一人で怖いわ、どこにゐるの？――すぐ來て頂戴、ね、あなた。わたしの傍には狼が一匹ゐるきりなんですもの。』

『いま仕事が忙しいんだ。あす一しよに芝居へ行かう。』とエドガール

壁は圓天井の中に消えて行く。家はエドガール自身と同じく、國家の所有であつた。

八

それは偉大な露西亞××時代の人であつた、××の生んだ子であつた。朝の八時に玄關先へ屋根つきの自動車が止まつた。そして自動車は××の臼の方へ彼を運んだ。その重い臼の上には、歴史と思想が水のやうに流れ落ちてゐた。彼はその臼の傍に立つ水車番であつた。臼は歴史と、時と、人間と、力を嚙み碎いた。エドガールは自分の時を、水甕のやうに捧げて運ばなければならなかつた。その中からは、時の一しづくをも溢してはならないのだ。××の臼は莊重なものであつた。××の日常茶飯の年が流れて行つた。××の臼の水は本當の水車の水と同じやうに、十二月が來れば凍ることも出來るし、雪解けの出水には水車を毀すことも出來る。水車番は××の臼や川の傍で――顴骨の皮膚を烈しく曝さなければならなかつた。緊張した臼の活動の中で、自動車は深更に勞働の一日を終へるのであつた。

結婚は義務として擧行された。幾週間か過ぎた。モスクワの上には

た。マリヤは興奮したやうな足どりで駈け出して、エドガールの肩へ兩手をのせた。

　そのとき恐ろしい事が始まつた。すべての男は女を領有する幸福を知つてゐる――そしてすべての人は他人の魂を領有する一そう大きな幸福を知つてゐる。あらゆる思想感情は――まるで掌をさすがやう。

　……夜半は不動のまゝに靜止してゐる。さういふ夜、夫のエドガールと妻のマリヤは、ゲーテより百倍も莊麗なもの――×××の話をしてゐた。それはこの石造家屋の外で、妻と夫の時の外で、己れの歴史を流してゐる××の話である。そのとき夫はシェギエートの背廣をぬいで、書物と妻で時を破壞しようとしてゐた――そして妻と、その頭と、髮と、聲と、言葉は――女の掌は全世界を蔽ふことが出來る。それは生理的法則に基づいて、單なる視覺のみについて言ふことではない―― 掌が世界より大きくなるほど、世界を蔽ふことが出來るのである……

　エドガールは自分の體から、背廣の革を取らうとしたが、出來なかつた。マリヤは兩手をエドガールの肩にのせた。エドガールはあれほど澤山もつてゐた優しい言葉を見出さうとしたが、それは口へ出て來なかつた。マリヤは己れの全部をエドガールに捧げたが、エドガールはそれを見なかつた。彼女は前のやうに彼の掌へ入らなかつた。彼は彼女のためにのみ湧き出した優しい言葉をいはうとした。彼は言た。

『お前、僕の見る邪魔をするぢやないか。お前は汚い指をしてゐるね。お前の指はインキだらけだ。何を書いたの？』

『わたし書いたの……ちよつと、何でもないわ――日記。何なら持つて來るわ？』

『いらない、何のために？僕はお前を信じるよ。』

『うそよ、エドガール。あんたはわたしを信じてゐないのよ。あんたはどうだつていゝのよ。』

　エドガールは意力を緊張さして、マリヤの目を接吻した。接吻は何も生み出さなかつた。夜半は不動でなければならぬ。瞬きもせぬ燈火の光は圓天井の中へ消えて行つた。平つたい書物の四邊形が壁を蔽ひて、寫眞のカメラのやうに人間の思想を、どこへでも、どんな風にでも投げるのであつた。

『僕はまるでお前が感じられないよ、まるで見えないよ、マリヤ。』

『あなたはわたしを見ようとしないんですもの。』

　人間ひとりこゝにゐて、一切のものを捧げてゐる――しかもその人間から何一つ取ることが出來ない。何より恐ろしい事が始まつた。瞬

腕の中にゐる人間、兩腕の中へ投げ出された人間が——不要なものとなつたのである……妻のヴイクトリヤ、その頭髮、聲、言葉、その溫かみ、その愛撫は、一個の人間をして自分自身の心臟を、掌の中へ納めさせることが出來た。そのとき、赤毛のリサーに生命を與へた美しきものと、周圍を領する平安とが、コスミックなものとなるのであつた。女の膝はモンブランよりも莊重になり得る。マリヤの膝はあらはになつてゐた。それは弱々しい都會婦人の膝であつた。殆ど娘の膝であつた、それきりである。——その時マリヤは、己れの與へ得るすべてのものを與へながら、かう言つた。

『あなたはわたしを愛してないのね、エドガール。』

『いや、僕は非常に愛してるよ、マリヤ。お前のために生活をへし曲げたぢやないか。』

『あなたはわたしを愛しちやゐらつしやらない、エドガール。わたしすつかり知つてるわ、エドガール。あなたはわたしを信用してゐらつしやらない。わたしはあなたに取つて他人なのよ。わたしはあなたの情婦として必要だつたので、あなたの奧さんには向かないんだわ。あなたがわたしを信用しないのと同じやうに、わたしもあなたを信用しない。わたしはあなたの情婦だつたのだから、あなたにはまだほかの情婦があるかも知れないし、わたしにも情夫があるかも知れない譯だわ——わたし達はその證人なんですもの。わたしはあなたを愛してゐるけれど、あなたはそれも信じてゐらつしやらない。わたしはあなたに取つて十字架なんだわ、苦行の對象なんだわ——しかもわたしのためでもなければ、あなたのためでもない。他人のためなのよ。——あなた默つてるのね、エドガール。』

棚の上に並んだ書物は、赤木の齒齦の中で、金の牙を剝き出してゐる。その時エドガールはシヤマン（蒙古族の巫子）じみた恰好で、エネルギツシユに喋り出した。エドガールの目はぎらぎら輝いた。それは丁度曠野に住んでゐた彼の祖先が、カトリツク僧のために焚火へ入れられようとして、基督教の神に對する信仰を誓つた時の、日の輝きに似てゐたに相違ない。エドガールはマリヤの肩を摑んで、力任せに揉みしだいた。マリヤは痛みに堪へかねて涙を浮べた。エドガールは叫んだ。

『僕はお前を愛してゐる、愛してゐるよ、マリヤ、恐ろしく愛してゐるよ！——こゝへ並んでお坐り、そして頭を僕の膝へおのせ。僕お前に本を讀んで聞かせて上げよう。お聞き！——一しよに勉強しよう！』

——

エドガール・ザデカは無數の書物を所有してゐた。彼は三十七歲、背の

高いブリユネットで、職業的缺陷さへ持たない見事な體格の美男子だつた。書物は彼の視力を損なふべき筈であつたにも拘らず、彼は目がねを掛けなかつた。彼は博覽強記で、組織された意志と教育を有する人物だつた。××は××を×さなければならなかつた。エドガールは自己の意志を握りしめるすべを心得てゐたので、彼の目は空間を見ない視線で、空間を眺めるやうになつた。朝の八時に自動車が車寄せへついた。

九

エドガールの家で、マリヤはギクトリヤの居間に暮してゐた。晝ま家は空になつた。誰も家へ來なかつた。マリヤはフェリックスの所から自分の犬をつれて來た。狼と羊犬の交じつた陰鬱な老毛の犬である。その犬は狼と呼ばれてゐた。狼は誰を見ても唸つた。陰鬱な意地わるさうな犬で、マリヤよりほかの者を知らうともしなかつた。マリヤと狼の間には、狼の小犬時代から古い友情が續いてゐた。

エドガールの所へ來た最初の數日間、マリヤは自然の好みで自分の――ギクトリヤの――部屋を片づけた。戸棚を置きかへたり、カーテンを縫ひかへたりした。ある時マリヤは窓から足を踏みはづして、烈しく、血の出るまで手を擦りむいた。狼は舐めることを教へ込まれてゐなかつた。その狼がマリヤの手の血を見つけた。と、狼は一生懸命にマリヤの傷を舐め始めた――自分の狼らしい業でなほしに掛つた。マリヤはそのとき、狼の首を抱きしめ、一日いたましく慟哭した――絶望の涙をこぼしながら。狼は遂に血の止まるまで、傷口を舐めて療治を續けた。マリヤといふ一人の小さい女は、小さな生涯をもつてゐた――工場内の幼年時代、女學校、そして同じ工場内の――マリヤの生家に於ける母の愛撫と、母の死。マリヤと狼のほか、エドガールの家には無口な老婆が住んでゐた。老婆は煖爐に薪を運んだり、スープを煮たりした。マリヤは和蘭風のペーチカで暖まつたり、窓の圓天井の下で、がらんとした部屋の中を歩き廻つたりした。窓の外には雪が降つて、不可解な生活が流れてゐた。誰も來なかつた、は沙漠のやうに長かつた。毎日エドガールの去つて行く生活、彼女の父母を殺し、彼女の唯一の愛――エドガールに對する愛――を殺した生活は、彼女にとつて恐ろしかつた。すべての人間は生に對する權利を持つてゐる。この弱々しい手をした小さな美しい女は、この自己の權利を知らなかつた。窓の外には鋸の歯のやうなクレムリンの城壁が續いて、雪は老年の如く横たはり、クレムリンの上なる鴉は破滅の如く啼いてゐた。――かうして日は過ぎて行つた。かうして最も恐ろしいもの――夜が過ぎて行つた。エドガールは自分自身で一切

ものを厭伏しながら、大塊の如く部屋へはいつて來た。彼女の知らない生活から歸つて來た。エドガールの目は――彼女にとつて――空間の彼方にあつた。彼女はおよそ愛するものの知り得るものの中で、最も恐ろしいものを見た――彼女はエドガールにとつて不用なのであつた、悲劇的に不用なのであつた。なぜと言つて、この男は優しく情熱的になるために、想像もつかぬ努力をしてゐるのであつた――しかも本當の血の代りに、唐紅が荒れ狂ふばかりであつた。マリヤの傍で一刻ごとに、マリヤに秘密の別な生活へ自分を繋いでゐるのを、エドガール自身氣がつかなかつたのである。マリヤは一切を彼に捧げるつもりでゐたが――彼は何一つ彼女から取ることが出來なかつた。そのとき彼女は夜この男の傍にゐるのが、血が唐紅に變つたこの男の傍にゐるのが、恐ろしくなつた――それでも、彼女は彼の傍を離れて、彼の書物の洞窟から、もとヰクトリヤのゐた自分の部屋の暗やみへ去るのが、恐ろしかつた。とはいへ、エドガールが痙攣的に報告や本を讀んでゐる夜は、彼女もエドガールの傍を離れた。彼女の部屋の暗い洞穴では、彼女の狼が彼女を迎へた。陰鬱な犬は彼女の膝に頭を載せて、彼女の膝でうと／＼まどろみながら、一方の塞がぬ目で夜を守るのであつた。――エドガールは空間を見ぬ壓縮された意志の中で、書物と一しよに取り殘された。

……………

家は夜半の沈默を守つてゐる。それは黴でも生えさうな靜寂であつた。人間の腦髓は奇怪な狀態に陷ることが出來る。部屋の中には黑い暗があつた。生理的にエドガールは本を見る譯にゆかなかつた――けれども彼はそれを見た。書物は大きな顎を開け、赤木の齒齦に金の牙を光らせながら、棚の上から見おろしてゐる。一つ／＼の本は本當の人間の生活の贋造物である、思想の痙攣である――書物は死體陳列場である。眞の生活、生きたものに似せて造られた死んだ思想、火葬場における如き人間の痙攣が葬られてゐる死亡室である。エドガールは自分が寢てゐるのか、起きてゐるのか分らなかつたけれど、生理的には自分の腦髓と思想を感じてゐた。沒意識は腦のカツレツを包んで行つた、ちやうど寢台車の中で電燈の硝子を暗いカヴーが蔽ふやうに。たゞ細い隙間が意識のために殘された。意志はこのカヴーが完全に閉め切られるのを欲してゐた。潜在意識の闇の中は恐ろしく暖かく、靜かに落ちついてゐた。一人々々の人間は、この人間のみに獨自の感觸を他人に呼びさます。潜在意識にはアリノサの感觸があつた。二つの生活があつた。カヴーの掟……

る筋二の生……

さで、思想は記憶の中へ駈け込んだ、一つ、また一つ、するとさまざまな記憶は一しよになつて、意識の方へ戻つて來た。と、その瞬間、一ばん遠い所から一つの幻覺が浮んで來た――それはギクトリヤの肩であつた。しかも以前かれの傍ちかく横たはつてゐた時の肩であると同時に、また露西亞國内戰の戰線で、ギクトリヤが肩の肉の中から榴彈の破片を、指で拔き出した時の光景でもあつた。無意識の闇の中は暗く靜かであつた。意識は感じた――腦の中には一つの想念もない。目は閉ざされてゐたから、生理的には見ることが出來なかつたけれど、彼はマリヤがはいつて來るのを見た。ちよつと闇の上に立つた後、本棚の方へ歩き出した。そのとき奇怪な事が始まつた。妻の目は閉ざされてゐた。妻が段々小さく平べつたくなつて行つた。妻が、この二度目の妻のマリヤが、本になつてしまつた。妻の本は空中にふわふわと上つて、シユピールガーゲンと並んで棚の上へ載つた。シユピールガーゲンのカメラはカール・マルクスを床へおろした。奇怪な事が持ち上つた。部屋は露西亞コムパーテイ第十五回大會のあつた、アンドレーフスキイ廣間のやうに擴がつた。マリヤは本になつて立つてゐた。重々しい肩つきのフェリックスが本棚に近よつて、マリヤの本を取つて擴げると、ちよつと見ただけで無雜作に卓の上へ拋り出した。沒意識の中から一どきに數百の――感觸ではない――思想と幻覺が迸り出た。すると、沒意識も、頭腦も、からだ全體も、名狀し難きい重くるしさと、狹くるしさと、力なさと、痛みを感じた。意識はカヴーを押し開いた――エネルギッシュに――腦全體が明るくなるほど。夜、がらんとした部屋、靜寂、誰もゐない。

『本は片づけなきやならん、本當にマリヤは本に似てゐる！　おれは生きるんだ！　おれは未來の律板を書くんだ！』

靜寂、誰もゐない、何もない。

………………

その時また奇怪な事が持ち上つた。狼が唸つた、やけに唸つた。誰かが壁の向うでびくりと慄へて、しやがれたやうな聲を立てた。エドガールは蠟燭に火をつけた。エドガールは幾つかの部屋を驅け拔けた。ギクトリヤの部屋で、床から高く離れた黑い臺の上に、白い肌着をきた――マリヤがぶら下つてゐた。エドガールはマリヤを助けおろした。床の上では三人が――マリヤと、エドガールと、狼が、ヒステリイと痙攣に身をもがいた。狼はマリヤを、その頸を、その胸を、その涙を舐めた。マリヤとエドガールは一どきに喋つた。狼はいつものやうに、エドガールに向いて唸らなかつた。

『わたしを殺して頂戴、エドガール。』とマリヤは言つた。『あなた、わたしを殺して頂戴。あたしは生に對する權利をもつてるやうな氣がし

てゐたの。だつて、わたし誰にも惡い事をしなかつたんですもの――でも、あなたはもうあたしを殺して了つたんだわ。命令して頂戴、わたしあなたのためなら何でもするわ。』

すると、この數箇月間はじめてエドガールは、本當の、正しい、僞りならぬ言葉を見出した。それはごく單純なナイーヴなものであつた。エドガールは狼と一しよに、狼の邪魔をしながら、とはいへ狼を突きのけもせず、マリヤを、その目を、その頸を、その肩を接吻した。そして囁いた。

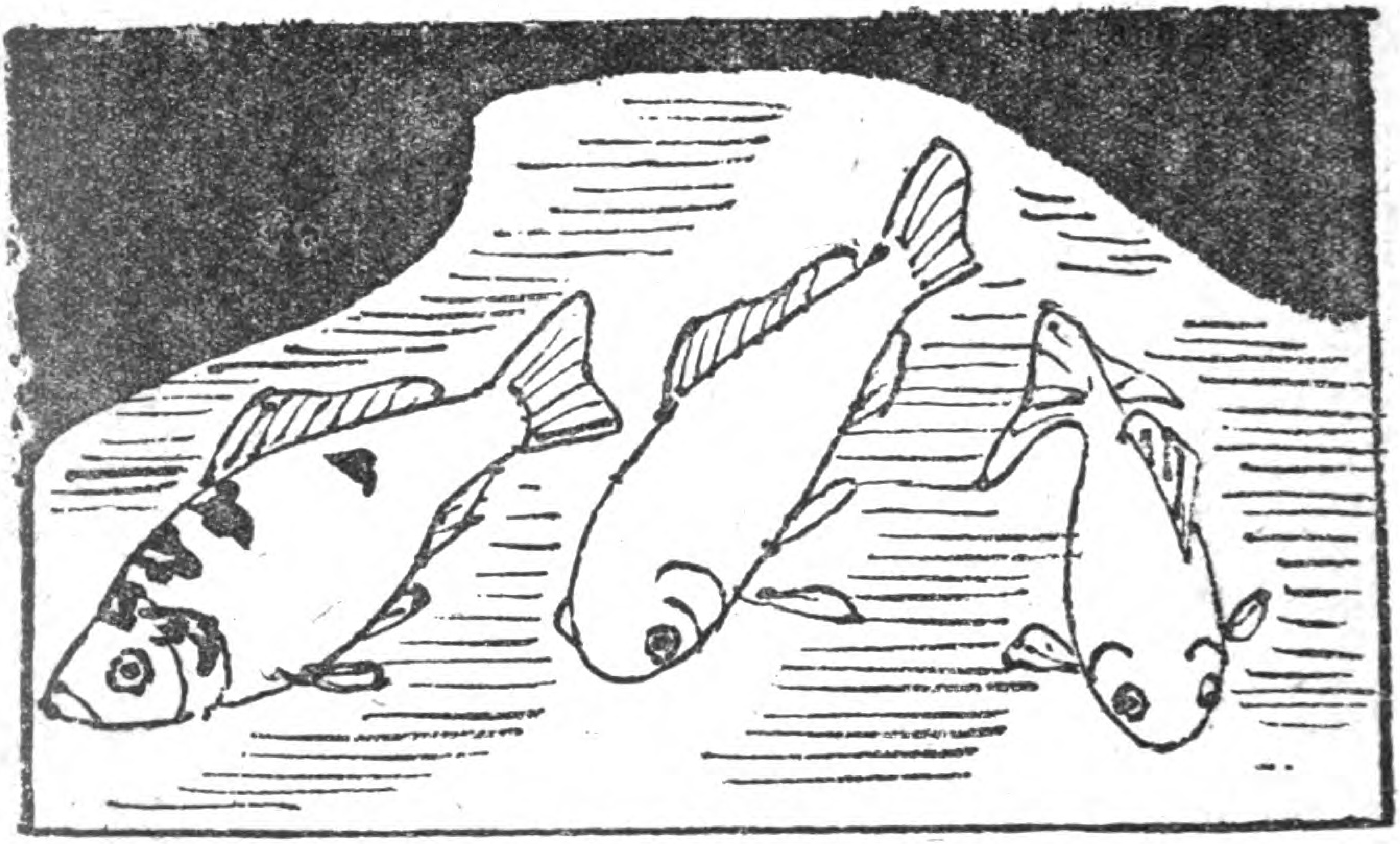
『可愛い、可愛いマリヤ、わたしの大事なマリヤ、わたしのガラントゥス――』

十

朝の八時には玄關先に屋根つきの自動車が待つてゐた。正面の戸口から合着の外套をきて革ゲートルをつけ、鍔びろの帽子を被つて折鞄を小脇にかゝへた男が、落ちつき拂つておりて來た。そして運轉手に握手しながら、何か珍らしい話はないかと訊いた。運轉手は寒さに喉をならした。自動車は××の臼の方へ赴いた。

十一

……ノヴ・デェギーチイとドンスコイの僧院で、人間存在の年の際が終りをつける。火葬場の竈で人間は人生最後の痙攣を味はされる。烈氏二千度の竈の中で、棺と着物は二分間で虚無に歸し、裸の死骸だけが殘る。すると裸の人間は身動きを始める。かうした人生最後の痙攣は、死を破壞する形而上的なものに思はれる。この人生最後の運動は不思議な法則に支配されるのである。死人の足は曲つて、手は頸の方へ匍つて行き、胸の上で十字に合はされる。そして頭は肩の間へ縮こまる。人間は無に歸して了ふ前に――同じ無から湧き出る時、母の胎内で取つてゐたのと同じ姿勢を取るのである。



温泉宿

川端康成

1

彼女等は獸のやうに、白い裸で這ひ廻つてゐた。

脂肪の圓みで鈍い裸達――ほの暗い湯氣の底に膝頭で這ふ胴は、ぬるぬる粘つこい獸の姿だつた。肩の肉だけが、野良仕事のやうに逞しく動いてゐる。そして、黒髮の色の人間らしさが――全く高貴な悲しみの滴りのやうに、なんといふ鮮かな人間らしさだ。

お瀧は束子を投げ出すと、木馬を飛ぶやうに高い窓をさつと躍り越え、いきなり溝に跨つてしやがみ、流れに音を落しながら、

「秋だね。」

「ほんたうに秋風だわ。秋口の避暑地の寂しさつたら、船の出てしまつた港のやうに――。」と、湯殿からお雪が艶めかしく、これも戀人づれの都會の女の口眞似だつた。

「生意氣だよ、ちび。」と、その腰をお芳が束子で打つて、

「東京者は八月の初めから、秋だ、秋だ、と云つてるのさ。山の中には年中秋風が吹い

てると思つてやがる。」

「私があの、ねお芳さん、あのお嬢さんなら、もつとうまいことを云ふわ。緣遠い女のやうに、つてな。」

「はばかりさま。私はこれでも、立派に三度もお嫁入りをしたんだよ。お前さんらの年には、ちやんとした亭主持ちだつたからね。」

「そんなら、どう。――三度出戻りの女のやうに、つてのは。」と云ひながら、お雪は川原へ走り出した。

お瀧は腰を伸したが、やはり小溝に跨つたまま、都會人の「秋」なるものを眺めてゐた。だが――古里の山波が月に浮んでゐるだけだ。彼女は町に出ても、湯の村のこの谷川の音を思ひ出したことはなかつた。五月と、、でゐたことのない彼女の張り切つた腹を、楢の葉洩れの月が縞馬のやうに染めてゐた。

お芳が窓へ首を出して、

「お瀧さん、お前また悪い癖だね。、、を洗ふ川だよ。」

「ショクキとは何だい。」

「下に、の、、があるし、、、だつて磨ぐんぢやないか。」

「流れちやふさ。」

「この馬女。」

しかし、お瀧は振り向きもせずに、

「雪ちやん泳げるの？」と、小娘の手首を掴つて、川原の橋を渡つたが、裸のはにかみでお雪が腹をつぼめてゐるのを見ると、首をどんと突き飛ばして。

「こらつ。」

「足が痛いのよ。裸足だもの。」

湯殿では――勿論、彼女等二人の悪口だつた。二人の髪は目立つて毛筋の太い豐かさだ。その濡れた黒々しさを、ほかの彼女等は日頃から、二人の生れつきの色情の匂ひと感じる。おまけに、二人は夏中一枚の敷蒲團で寝通した。それに、今夜は八月の貰ひ溜めの分配があつたのだ。

「あいつらはきつと、自分の貰ひをお帳場へはごまかして渡してたんだよ。それをいい氣味だつて、今二人でこつそり話しに行つたのさ。」

「それにどう、平しに分けたのが不服だつて――。」

實のところしかし「平等の分配」の正義に對して、七人の彼女等は皆、それぞれに腹の蟲がをさまらない思ひだつたのだ。自分の貰ひが一番少なかつたらしいと、自分でも認めてゐる百姓娘のお時までが――

――さうだ、彼女はただその弱身のために、湯船の底からわざわざ首を上げて、

「あの人達はお里がちがふよ。肉屋の女中上りに、藝者屋の子守上り

に――懸ずれしてるのはあたり前だわ。」

そのお瀧は、野菜の束のやうにお雪を抱き上げて、横向ふの飛石を渡つてゐた。谷川の中の島へ橋を架け、あづまやを建て、宿の庭になつてゐるのだ。淵の周りには、銀色の渡鳥の群が溺れるかのやうに、月光が亂れ立つてゐた。岩の白さが――向う岸の杉林の秋蟲の聲と一つになつて、彼女等の眞裸に迫つた。湯船の掃除がすんだらしく、セメントに手桶を置く音が聞えて來た。お瀧はあづまやの柱の傍に花火を見つけた。お雪が百日紅の枝から、客の水着をおろして、足を突つ込んだ。

「ほら、こんなに――膝まであるわ。」

「男のだよ。」

殘りの彼女等が寢間着で橋を渡つて來た。――いつもなら、棒のやうに倒れて眠る彼女等だつた。それが今夜は、毎晩二人づつ交替でする湯の掃除まで、七人揃つた。金を握つた彼女等は、欲望の祭の前夜のやうに――だぶだぶの水着を着て桃割髮のお雪を笑ひ、夏の男客の約束を思ひ出し、激しい空腹を感じ、客のあらを猛々しく數へ立て、

そしてお瀧は、

「お時さんやお直さんは、明日切りね。お別れに花火を上げてやらうか。」

花火は濕つてゐた。

「雪ちやん。濕つた花火のやうに、だ。秋はさつと、二度目には十五六本のマッチを荒つぽくすると、爆音で火玉が櫻の梢を貫いた。

一齊に叫びながら見上げて、そして彼女等が見たものは――物干臺に浴衣がけの男がぶら下つてゐるのだ。宿は谷川岸の傾斜に建つてゐる。表の玄關と水平だが、裏の物干臺は飛びつく高さだ。それにぶら下つた男は、泳がせてゐた足をやつと丸木柱に卷きつけると、無器用に力んで這ひ上つた。

「あら、鶴屋さんだ。」

「あの人の病氣も、ああなると凄いね。」

彼女等が高々と笑ふのを、お芳はしいつと手で抑へて、

「廊下の戸に錠をかけといたから、裏へ廻つたんだよ。」

男は氣ちがひのやうに雨戸を引つぱつてゐたが、やがて兩手で持ち上げて外すと、その戸もろとも、どさりと女中部屋へ倒れ落ちた。その窓の中は眞暗だ。お芳がぷいと橋の方へ走り出した。皆そそくさ立ち上つた。水着を脱いでゐるお雪に、

「ほつときな。皆財布を心配してんだよ。」

と、お瀧はぐつとその肩を抱き倒して、

「花火はまだあるよ。」

川上から曖昧宿の女が二人、裾を揺りながら岩を飛んで、宿の湯を盗みに來た。後から男達がついて來る。お瀧は膝のお雪を落すやうに立ち上つて、

「畜生。あの女を泣かしてやれ。」

2

お瀧の家の庭はコスモス畑――だが、その花畑に竹垣を結んで、鷄を飼つてゐる。長い花莖が亂雜に倒れて、土まみれだ。村の端山から谷へ下りる段々畑の中の一軒屋だ。だから、日の光と風が豐かだ。裏から藁屋根へかぶさつた竹林は、いつも小鮒の群が泳ぐやうに揺れてゐるが、お瀧も彼女の母もその葉ずれの音を聞いたことはない。

お瀧は十三四の時から、裸馬に乘つて飛び出したものだ。葉があのつやつやしい濃い青の山葵を、背負ひ籠一ぱいに負つて、山から裸馬を走らせて來る彼女は、緑の朝風だつた。

十五六の時から、正月と夏二月、宿屋の女中の手が足りぬ時だけ、彼女は手傳ひに來るやうになつた。彼女が湯殿で裸になると、湯の中の男客は皆、ふいと言葉少なになつたものだ。美しく伸びた手足がもう娘盛りに見えて、彼女は白い鐵だつた。

お瀧の腹と彼女の母の腹とは、二人の女のいろいろなものを現してゐるが――母がだらしなくほうり出して眠つてゐる、だぶだぶに脂肪のたるんだ腹の前に、ぢつと坐つて見てゐたが、娘は口にたまつて來た、、、を、突然、、、、、、、、、、おいて、健かに寢入つた。このやうな母の腹は、父が彼女等を棄ててから、急にお瀧の目につき出したのだ。

彼女の父は同じ村の街道筋に、妾と住んでゐる。道で出會つた父が、

「おふくろはどうだい。」

「とてもよく寢るよ。」と、彼女はさつさと行き過ぎてしまふ。

十六のお瀧は、馬と母とを追ひ使つて、百姓をしてゐた。田に水を引き入れて、いよいよ植ゑつけの前、横木に疎らな齒のある耒耜を、母が馬に挽かせてゐた。田の畦でそれを見てゐたお瀧は、突然じやばじやばと水田に躍り込むと、母の、、、、、、、、、、

「馬鹿。耒耜が浮いちまつてるぢやないか、耒耜が。」

母は耒耜の柄を握つたまま、よろけて行つた。それを肘で突き飛ばして、耒耜を奪ひ取ると、

「よく見ときやがれ。」

母は泥田に片膝を突いて娘を見上げながら、隣りの田の人々に、

「私や今度は、恐しい亭主を持つたよ。前の亭主の方がまだやさしか

つたよ。」と、娘のやうに頬を染めた。

夜、お瀧は母に背を向けて寝た。母はその背に顔を向けて寝た。

裸馬に跨つた娘の後から、鍬を擔いだ母が、ちよこちよこ走りについて歸つた。洗濯も煮焚きも母の仕事だつた。母は娘にこき使はれればこき使はれる程、亭主のことを忘れて行つた。そして胸の鼓動が亂れやすくなつた。亭主のことを考へてぼんやりしてゐると、娘に、、れる。それで泣顔になると、娘は家を飛び出して行く。

「お待ちよ、お瀧、そんな尻切れ草履。」と、母は追ひ縋る。しかし、そんなこともだんだん少くなつて、母はせつせと働き出した。母の眼が猫のやうに柔かくなるにつれ、娘の瞳は眞黒な水澄のやうに、きらきら流れやすくなつた。

着物を着て宿屋の座敷に出ると、お瀧は客の胸を押しつけるやうに大きかつたが、その生き生きと濡れた眼が客を驚かせた。

宿屋で、十六の年の暮だつた。お瀧が一人で湯船を洗つてゐるところへ、曖昧宿の女達が醉つた客を三人連れて、裏から入つて來た。

「お瀧さん？——お湯を頂戴ね。あら空つぽだわ。」

「熱い方にたまつてるよ。」と、お瀧は束子を握つたまま、湯殿の隅に硬くなつた。

湯殿は床下の石室だ。大きい湯船を板で三つに仕切つてある。第一の仕切りに溢れた湯が、第二の仕切りへ落ちる。從つて、湯の熱さが次々にゆるめられて行く。

曖昧宿の女は、臭い白粉を湯の中へざぶざぶ洗ひ落しながら、お瀧の體について、二人でもう、、、おしやべりだつた。しかし男達は、生娘の裸の餘りにみづみづしい美しさに打たれて、暫くは默つてゐた。女達はお瀧の體が女として立派に、、つか、、、、かを、醜いな言葉で云ひ爭つてゐるのだ。その言葉を味つてゐる男達の眼を、お瀧は裸に感じた。女達は男のうしろに立膝して、背中を流してやつた。女の一人が、

「お瀧さん、あんた一つあいてる背中を流して上げない？」

お瀧はぐつと固いものを呑み下す感じで立つて行くと、男のうしろに膝を突いた。彼等は山向うの銀山の鑛夫頭らしかつた。その鑛石を擔ふ逞しい肩を撫でてゐるうちに、お瀧の手はぶるぶる顫ひ出した。膝頭をきゆつと合せたが、首筋から走るやうな、、を覺えた。あわてて湯に漬つた。二人の女は——素人女を甘く見た時の娼婦の意地悪誇りで、しきりと毒々しい言葉を、お瀧に浴せて來た。お瀧の眼は眦をぢつと吊り上げて、きらきら光つてゐた。

どてらを着ながら、一人の男がお瀧の肩を輕く叩いて、

「娘さん、遊びに來ないか。」

「うん。」と、彼女が云つたと思ふと、もうその肩をぐいと抱き寄せられてゐた。

川原は雪曇りの夜空に、また木枯が鳴いてゐた。ネルの寢間着一枚の彼女は、湯上りの素足が凍えた岩にぴたぴた吸ひついた。足の裏からきりきり傳はる寒さで、腿が硬くなる度に、

「畜生。畜生。」と、彼女は胸一ぱいに叫んだ。向う岸の杉山の雪が、霧のやうに降つて來た。

、、、、、――お瀧は初め顏を、、、に隱してゐたが、やがて、右手の、、、、に入れて、ぎりぎり噛んだ。

起き上つた時に見ると、歯形の傷から血が流れてゐた。

彼女は右手を素早く懷に隱して、ふらふら立ち上ると、隣りの間の境の襖を、がらりと明けようとしたが――彼女は襖の向うに三人の女、、、、が、息を殺してゐるのを知つてゐたのだ――襖に手を掛けただけで、例の激しい、

「畜生。畜生。」を胸に繰り返しながら、今の男の顏も見ずに、曖昧宿の裏口から、谷川沿ひの小路へ出て行つた。

一町と行かぬうちに、彼女の後を一散に追つて來る二人の男の足音が聞えた。それをうしろから女達が金切聲で罵つてゐる。――彼女は勝つたのだ。お瀧は倒れるやうに、川岸へ突つ伏して、冷い水をごくごく飮んだ。跣足で飛んで來る男達の白い息を、彼女はちらりと眺めて、また水を飮んだ。

その夜、自分の家へ歸つた彼女は、荒くれ男のやうな抱き方で、激しく母を抱いて寢た。

それから三四ヶ月して、もう春だが、或る夜お瀧は、背丈の二倍もある崖から街道へ飛び下りて、足首を挫いた。町の病院へ入つた翌る日に、、をした。十日ばかりで村へ歸つてみると、父が家へ來てゐた。彼女は母を蹴り倒し、父と組みつ轉びつの大喧嘩をして、

「こんな穢い、娘の留守に穢い、こんな穢い家に、誰がゐるもんか。」

と、その日の乘合自動車で、また町へ行つて、肉屋の女中になつた。

それがこの夏は、肉屋の暇な七月の末から村へ歸つて、宿屋の手傳ひに來てゐるのだ。そして、二年前にあんなことがあつたので、お瀧は今もむらむらと、曖昧宿の女達を嘲笑つてやりたくなつたのだ。

3

湯氣が籠らないやうに、湯殿の裏口と窓は、夏冬とも夜通し明け放して置く。

その裏口から、曖昧宿の女達が客を連れて、谷川傳ひに、温泉宿の内湯へ忍び込んで來るのは、よくあることであり――二年前の冬も今

も同じだ。だがそれが、お瀧にとつては、冬の裸と夏の裸程の違ひがあつた。

「なんだ、まだ湿つた花火なんか握つてんのかい。」と、お瀧は板橋を渡りながらお雪に、

「二人でお湯に入つて、あいつらの鼻をへし折つてやるんだ。——あんな女、雪ちやんと月とすつぽんさ。ほんとなのよ、雪ちやん。ただ、綺麗な顔を見せてやりやいいんだ。」

「商賣の邪魔をしちや悪いわ。」

「へん。さすが待合の女中だ。水商とこれとはちがひますかね。だけど、私一人で澤山。先き歸つて寢る？」

「鶴屋さんがゐるわ。」

鶴屋さんとは、このあたり一帶の小間物の卸屋である。月半ばと月末に、毎月二度づつ、掛け取りに廻つて來る。毬栗頭で、顋から頬一面に毬栗ひげで、毬栗色にくりくり太つてゐる。醉つ拂ふと、箸で茶碗や皿を氣ちがひのやうに叩きながらあばれる。そして二三時間眠る。眼が覺めると必ず、それはあらゆる艱難辛苦を盡しても——物干台へ攀ぢ上るなぞも一例だが、とにかく、、、、、へ乗り込まないと眠らない。全く、乗り込むといふ言葉程に、それは大つぴらで、十年この方變りのない、月二度の吉例の愛嬌に近かつた。

しかし、お雪はまだ神經の新しい娘なのだ。

「あんた醉つ拂ひなんか、直ぐに白河夜船なんだよ。」とお瀧に云はれても、

「いいわ。川の湯で待つてるわ。」

谷川の水際に、火の番小屋のやうに簡單な、白木造りの湯殿が、もう一つあつて、彼女等は「川の湯」と呼ぶ。

お瀧は内湯の裏口から、石段をとんとんと走り下りると、いきなり、

「川にゐたら、冷えちやつたわ。」と、ざぶり湯の中に突つ立つた。曖昧宿の女達は湯の飛ばしりを避けながら、

「今晩は。」

「今晩は。」

お瀧が身を沈めると、温い湯が音を立てて溢れ出した。

「お湯をお借りしてるのよ。」

「さう。——うちのお客さまかと思つてたわ。」

客は二人とも學生らしかつた。お瀧が彼等の前へ大膽に突つ立つた時に、温い風で押へつけられたやうに感じて、湯を出ると、湯槽の縁に腰を掛けて、うつ向いてしまつた。

「ちよいとおことわりして借りやよかつたけれど、もうお休みだ

つたの。」

「いいさ。──私もあんたに借りたいものがあるわ。」

お瀧にことわりを云つてゐるのは、胡瓜といふ渾名のある──胡瓜のやうに瘦せて、背がこゝろもち曲つて、靑ざめて、病氣でよく寢る、子供好きのお淸だつた。近所の赤ん坊の守りをさせて貰つたり、幼兒を三四人も共同湯で洗つてやつたり、この子供いぢりだけが、彼女の樂しみらしかつた。そして村との約束──曖昧宿の女は土地の男を客に取らないといふ約束を、お淸一人は嚴しく守つてゐた。勿論澁り者だが、この村で體をこはした彼女は、この村で死ぬことを考へてゐた。可愛がつてやつた子供達の群が、柩のうしろに長々と並んで來る──その幻を、彼女は寢込む度に描くのだつた。

だからお瀧にしても、お淸に會へば、冬の薄日のやうなお淸に直ぐ染つて、身の上話の一つもする間柄だ。

しかし、もう一人の女は、お瀧の彼も見ずに、

「今晩は。」とだけ云つたまま、眠つたやうに默つてゐる。睫の濃い影が眼を隱してしまつて、桃割髮が油でぴちやぴちやに濡れたやうに、がくりと傾いてゐる。肌白い顏の平べつたさは、ほのぼのと愚かな眠り──その眠りの上で、くつきりつぼんだ唇と長い睫毛とが、別の生物のやうに鮮かに浮き立つてゐる。眉毛は生毛がぼうぼうと亂れたままだ。耳も、首筋も、手の指も、どこを一眼見ても、齒を立てて嚙みたくなる──その柔かい感じで、お瀧は直ぐに、これがお咲だなと思つた。

お咲は──この村に十人餘りゐる酌婦のうち、彼女だけが特別に風儀をみだすといふ角で、駐在所の巡査から度々、村退散を云ひ渡された女だ。村會議員の息子なぞが、しきりに通ふからだ。生れつきの酌婦──餘りに娼婦であり過ぎるからだ。

お瀧の激しい目にじろじろ見られても、お咲はやはり、うつとりと抱かれたやうな顏で、湯から胴を出して、湯船の緣に腰を掛けた。眞白な蛞蝓のやうに、しとしとと濡れた肌──骨といふものがどこにも感じられない、一點のしみもない柔かな圓さだ。蝸牛類のやうに伸び縮みしさうな脂肪で、這ふ獸だ。その眞白な、、、、地獄太夫みた──お瀧はそのやうな、、、、、、、に、突然嫉はれて、お咲の膝にいと手を伸すと、

「手拭を貸してよ。」

お咲は蛞蝓のやうにきゆつと身を縮めて、胸で下腹を隱さうとしたが──手拭の覆ひを失つたところに、一面の小さい、、その白い皮膚の、、、りが見えたのだ。

しかし、お咲の耳は透き通りさうな眞赤となり、その赤が乳房から

頃まで、ほのぼのと染めて來た。人間ではないやうな、この美しい血の色を、お瀧はむらむらする嫉妬と、たまらない快感とで眺めて、

「手拭もうつかり借りられやしない。ゝが附いてさうね。」

それから間もなく、川原の湯を覗き込みながら、

「雪ちやん、綺麗なおとなしさうな學生さん二人だけれど――瀧道の方へ遊びに行つてみない？」

お雪は湯船の緣のセメントに、兩腕で輪を描いて、その腕の上へ、湯の中からぺたりと頰を載せてゐた。

「おや、寢てんのね。さう、あんたはまあ――大事にしとくといゝわ。」

お瀧が宿に歸つたのは、木の幹や川瀨なぞ白いものが、明け方の白さに浮び出した頃だつた。お雪はまだ川岸の湯船に眠つてゐた。彼女の貞操道德をしつかりと抱くかのやうに、やつぱり兩腕で輪を描いて――。

4

お雪は「修身教科書」の殼を、雛子の尻の卵の殼のやうに可愛ゆく――また、蛇の皮の拔殼のやうに憎々しく、彼女のどこかにくつゝけてゐた。都會近い海邊の溫泉町で、藝者屋に奉公してゐたゞけあつて、同じ桃割にしても、首筋の生え際が、水際立つて色つぽかつた。雛妓の早熟と海の娘の健康とが、一つになつた小娘だつた。頰が林檎のやうに紅く、線の鮮かな二重瞼のまん圓い眼が、浮氣つぽく動いた。山里には珍しい――その古い言葉を、誰にも新しく感じさせた。

だから、いろんな男が、本氣ともなくじやうだんともなく云ひ寄つた。それを彼女は、本氣ともなくじやうだんともなく、鮮かに受け流した。また、さういふ種類の出來事を、ほかの彼女等のやうに、一々仰々しく吹聽するやうなこともなかつた。それでゐて――或る學生が、

「雪ちやんは、年の割にませてるんだね。」と、口を尖らせると、彼女はさつと顏色を變へて、

「馬鹿にしてるわ。書生のくせに生意氣だわ。――人が藝者屋にゐたからつて。」と、給仕の盆を投げ出して、ぷいと出て行つたまゝ、その學生が一月ばかり滯在の間、一度も口をきかなかつた。

しかし、例へばお芳と二人で、當番の湯殿の掃除をしながら、わざと居眠りをする。束子で叩き起されると、

「あんたの顏が三つに見えるわ。ね、先きに寢ちやいけない？　あんたの床を溫めといてあげるからさ。」

さうして、お雪は彼女等の全てから、姉妹のやうに愛されて、けろけろ明るい顔なのだ。

「まあ、綺麗な前掛けだこと。」と、女の客はお雪を見て驚くことがある。

色花やかな小切れを、いつの間に、どこから集めたのか――それをすつかり三角形に揃へて縫ひ合せ、お雪は美しい前掛けを作つたのだ。

彼女が初めてこの宿へ來たのは、夏の終り、宿屋で新しくどてらを縫ふ頃だつた。二十枚ばかりのどてらが出來上る間に、お雪はそれと同じ柄の男の子の袷を一枚、仕上げてゐた。殘り切れを繼ぎ合せて作つたのだ。弟に送るのだと云ふ。

宿のおかみさんが、驚き混りに褒めるのを聞いて、主人は、

「油斷のならん奴だ。あいつは用心しろ。」

またお雪は、客の卷煙草の吸殼を拾ひ集めて、首から折つてしまつて置く。それが溜ると、新聞紙の上に煙草をほぐして港町のおぢいさんに送つてやる。

卷煙草の吸殼は――長い年月宿のおばあさんが、自分の手で煙草盆や灰吹から、拾ひ集めてゐたものだ。やはり一々吸口をちぎり捨てて、大きい紙箱に溜めて置き、村の年寄が來た時に、おばあさんが出してやる。年寄達はそれを煙管で吸ひながら、長話をして行く。その吸殼を目あてに來るおぢいさんさへある程だ。

しかし、宿のおばあさんはこの古い道樂を、お雪のためにぴたりと止めてしまつた。

お雪の母は――港町の酌婦上りの繼母だが、五六日に一度づつ、お雪の弟を連れて、厚化粧の顏をこの宿屋へ見せる。さんざん宿の人達の御機嫌を取つて、こつそりお雪に小遣をせびる。

お雪の父が日雇人足として、出稼ぎに來てゐるのだ。隣り村で、姉家の納屋に古疊を入れて住んでゐる。古里の港町――海邊の温泉町から温泉町へ通ふ、乘合自動車道の中程にある漁港には、おぢいさんが一人殘つて、孫娘が送る煙草と山葵漬を待つてゐる。

乘合自動車が小高い岬を廻ると、ふいに目の前が温まる色――海岸に續いた椿の林が滿開、蜜柑の山が色づいて、その二つの間を眞直ぐな道が入江へ下りて行く。港には漁船が三四十艘、綺麗に揃へて曳き上げてある。木の間からは大きい瓦屋根と土藏の白壁ばかりが見える。町の眺めの豐かさ――お雪のやうな貧しい一家が住んでゐるとは信じられないのだ。そしてまた町税のない模範部落なのだ。

その町で、お雪の母は彼女の弟を産む時に熱を出し、命は一時取り止めたが發狂した。父もおぢいさんも働きに出た留守、お雪は母の

發作の隙を覗つて、その乳房へそつと赤ん坊を抱いて行く。朝出かけに、父は母の手足を縛つて行つてくれるのだが、彼女がその繩を解いてやるのだ。母は四十日ばかりで死んだ。

お雪は十で、尋常三年だつた。赤ん坊を背負つて學校に通つた。父達の食べ物や着物の世話も、一切彼女がした。野良犬を拾つて飼ひ初めたことが彼女の唯一つの贅澤だつた。犬は――夜半に乳を貰ひに歩く少女の後を、忠實について行つた。

「子守と並ぶのは厭だあ。」と、お雪の隣りに坐る子供は、教場で泣き出した。背中の赤ん坊が泣く度に、お雪は教場を出なければならない。十分の休みにもおしめを取り替へ、乳を貰ひに行く。

それでゐながら、彼女は首席で四年に進級して、學校中を驚かせた。進級式に、やはり赤ん坊を負ぶつたまま、校長の前へ賞品を貰ひに行く彼女を見て、子供の親達は泣いた。校長が縣知事に表彰を賴んでやつたといふ噂は、お雪の耳にも入つた。しかし、子供達は――全く子供達程子供の弱味に向つて意地の惡いものはない。お雪は四年の夏休みから學校を止めてしまつた。

とにかく、お雪は自分の手一つで赤ん坊を三つまで育て上げた。繼母が來た。しかし、洗濯も煮焚きも、お雪の仕事であることに變りはなかつた。田の草取りをしてゐる時、繼母が子供を負ぶつたお雪の髮を掴んで、泥田の中を引きずり廻す――そのやうなことを、近所の人は毎日見た。

「これもこれもこれもこれも――みんなその時分の傷痕なんですの。」と、お雪は溫泉宿の湯の中で、自分の腕や胸を指でつついて見せることがある。――それはまるで、自分の裸を男に見させて、誘ひ寄せる技巧であるかのやうに、今は浮氣つぽく笑ひながらだが。

だがその時は、餘りに可哀想だといふので、溫泉町の小母が引き取つて行つた。小學校長などの度々の催促で、縣廳から表彰の通知が來た頃には、お雪は町の藝者屋にゐた。父は山地へ出稼ぎに行つてゐた。

伯母の家は下で造花を賣りながら、二階は藝者屋だつた。

「藝者屋つたつて、私は造花を拵へたり、子守りをしてただけなんすからね。」と、彼女が湯の宿で云ふのは、彼女の「修身教科書」らしい嘘だ。彼女は藝者の三味線や着替へを持つて歩く――下地つ子だつたのだ。

そのために、縣廳の表彰は沙汰止みとなつたが、彼女の頬は見る見る色づき、圓い眼がぢつとしてゐなくなり、直ぐ小走りに飛んで行つてはおしやべりをする――首の肌が白い色情に濡れて來た。身内に暖い火がついた。

だが、客を取ることを強ひられさうな氣配を感じると、さつさと伯母の家を出てしまつたのは――「表彰の夢」をお雪が忘ないためかもしれなかつた。

父の出稼ぎ先へ來てみると、繼母は打つて變つて、彼女をちやほやした。

「もう私はどこへ行つたつて、立派に一人で食べられるんだわ。氣に食はない家になんか、誰がゐてやるものか。」

これはお雪が、藝者屋でしつかりと植ゑつけられて來た自信――彼女は自分で氣がつかないながら、繼母の顔をまともに見返す眼の色一つにも、それが現れずにはゐないのだ。母はそれに突きあたつて、一足退いた。お雪は新しく武器を持つた者の大膽さで、人生を輕蔑し出した。彼女等の身の上としては、これは娼婦への一歩だ。

だが、小娘の「人生の輕蔑」は――結局、「玉の輿」の夢と同じだつた。世の中の上へ上へ――自分はその選ばれた娘だといふ誇りから、彼女は一層小賢しげに、浮氣つぽくなつて行つた。

さうして――川の湯で眠つてゐるお雪にお瀧が、

「さうね。まあ、あんたは――大事にしとくといゝわ。」と云つた、そのものに、樂しい實價をつけて、大事にしてゐた。この「實價」と「修身教科書」とが、一つになつた危つかしさは、彼女の小憎らしい魅力だつた。

宿へ來た繼母のお世辭に、お雪も巧みなお世辭で答へながら――母がお湯へ入ると、忍び足で覗きに行く。そして、

「おかみさん、あんな女のいふこと信用しちやだめですよ。相變らず弟を打つと見えて、弟の體に紫色のみみづ膨れが、五つも六つもありますよ。」

男の客の甘い言葉からも、十六のお雪は、ちやんとこの紫色のみみづ膨れを見て取るのだ。

5

二百十日は、炭焼きの煙も見える晴れだつた。赤とんぼが谷川一ぱいに飛んで來た。

だが、二百十三日の嵐は、電燈がついたと思ふと消えた。明るいうちに雨戸をしめて、女中部屋に寢轉つてゐる彼女等のところへ、番頭が雨合羽のまゝ蠟燭を持つて來た。お瀧はそれを受け取るなり、雨戸の節穴から外を見てゐるお時に、

「時ちやん、何度も覗いてみなくつたつて、この雨に歸れないことはさ、よく分つたよだ。早く二十六番へ、蠟燭を持つて行きな。」

それで彼女等は一齊に手を叩いた。お時は渡された蠟燭の火をふつ

と消して、そこに坐つてしまつた。

七人だつた彼女等が、九月二日から四人になつた。夏場だけ手傳ひに來てゐた娘達が歸つたのだ。宿の主人の姪で、女學校を出て產婆學校へ入る準備をしてゐる、近眼の高子、十四から十七まで女中をしてゐて、家が近くの、だから忙しいといつも直ぐ手傳ひに呼ばれる、宿の勝手をよく知つて、おばあさんの氣に入りの、そして宿の貰ひで嫁入仕度を一式揃へたといふ、しつかり者のお谷、それから百姓娘のお時――お時は今朝から遊びに來てゐて、嵐になつたのだ。

大きい石のごとりごとりと流れる音が、彼女等の枕もとに響いた。

眞夜中に女中部屋の板戶をぎちりぎちり明けて、お時が出て行つた。廊下でマッチをする音が聞えた。お雪は爆發するやうに、

「わあつ、ばんざあい。」と叫びながら、お芳の腹の上をごろごろ轉がつて、壁際のお絹に抱きついた。

「くすぐつたいよ、ちび。――みんな狸だつたの？　人が惡いわ。」

「察しがいいのさ。私がお時さんを戶の傍に寢かせてやつたのさ。」とお芳が云ふと、お雪は立てた膝を搖つて、まだ笑ひながら、

「だつてさ、あんなうぶな人、可哀想だわ。」

「土地の人だから、雪ちやん、默つてらつしやいよ。お嫁入りに差支へるわ。」

「いいぢやないか。百姓をする差支へになるわけぢやなし。お前さんみたいに、、、、はないだけでもましだよ。」

「私が――私が、いつ、、、つた？」と、お絹は這ひ歩きながら、お瀧に摑みかかつて來た。お瀧はその兩手を、ぐつと捩ぢ上げて、

「ふうん。――あれで、惚れてたかい。」と、突き轉ばした。

お絹は東京の藝者町の髮結に奉公してゐたことがある。宿屋で働き蓄めて、もう一度藝者町の髮結の內弟子になりたい――といふのが、彼女の口癖だ。髮を藝者風に結んでゐる。客がそれを認めてくれると、さも嬉しさうに吹聽する。肌が黑くて小柄だ。都會風の若い男客の座敷へは、人の受け持ちを奪つて出たがる。

この夏、半月ばかり滯在した、神經衰弱の學生の部屋には、帳場から叱られやうが、笑はれやうが、入りびたり通した。

このお絹と、お時と――、、、、との出來事は、客が每日溢れた夏を通じて、ただこの二つだけだつた。彼女等のうちでも美しくない二人に、却つてこのことがあつたのだ。

お時の相手の男は、宿から宿へ襖を描いて廻る旅繪師だつた。お時は眼の窪んだ、鈍い百姓娘だが、湯殿では、色白の肌が別の娘のやうに美しい。

嵐の去る朝は、物干台に青い落葉だらけだつた。川原の湯の湯

土砂が埋めてゐた。赤土水が岩の上を紆つて流れる川岸に、子供の群が並んで、てんでに手網を持ち、疲れた小魚を掬つた。それを旅藝人の母子が見物してゐた。

岩から岩へ掛け渡した板橋は、一つ残らず落ちた。もつとも、橋板の端に穴をあけて針金を通し、岸に結びつけてあるから、板は岸へ流れ寄つてゐるのだ。

川の水が減つても、鮎の友釣りをする人の姿が見られなくなつた。彼女等は測量技師の部屋に集つて遊んだ。旅繪師は客のない部屋の襖を描き出した。

その寂しい季節——村は賑かに騒がしくなつて、人々の高い話聲が聞え出した。

村一番の温泉宿に女中奉公してゐた村の娘達は、申し合せて暇を取つた。お瀧等がゐる、村で二番の温泉宿に村人が集つて、村一番の温泉宿の主人の古い噂を、今更のやうに數へ立てた。

「あいつは、鑛山技師が採つて來た鑛石を、うんと金の入つたやつとすり替へて、訴へられたことがあつたぢやねえか。」

「さうさう、あの裁判はどうなつたんだ。技師は首になつたつてんだが、あいつは手金の何萬圓かが取り徳なんて。」

「さういふぺてんと幾

で、大臣や偉い軍人が、ずゐぶんあすこへ泊つたらう。その人等に字を書かせといて、あのぢぢいは字がうまいもんだから、自分で贋物を十枚も二十枚も書いて賣つたつてことだ。うちへ來た時書いて貰つたと云へば、誰でも信用するからな。それで一身代作つたつて話だ。こんな山ん中の温泉宿で、眞つたうにやつてりや、あんなにめきめき殖えるはずがねえ。——こつちの宿がいい證據さ。」

そして酒の勢ひで、

「あいつんとこの温泉を止めつちまへ。」

「これから押しかけて、ぢぢいを川原へ生け埋めだ。」

つまり、この谷川沿ひの小路が自動車道に擴がる。一番その利益を受けるのは温泉宿だ。にもかかはらず、村一番の温泉宿は、その割り當て金を、きつぱりことわつたのだ。

その宿へ警官が十人ばかり泊り込んで、毎日大弓を引いてゐた。彼等が弓に飽きる前に、村は靜かになつた。

お瀧は暗い廊下の雨戸をしめながら、

「きやつ。」と飛び上つた。大きい青桐の葉だ。彼女はなぜか町の肉屋へは歸らうとしたかつた。

博打打ちのやうな男が宿に滯在して、川上の空家の修繕を毎日監督に行つた。

朝鮮人の土工の一隊が移住して來た。

「ちよいと、ちよいと、鍋も釜も――持つて歩いてるわよ。」と、お絹が女中部屋へ走つて來た。

皺だらけの白い袴に、布の靴を履いた朝鮮の女達は、世帯道具の大きい風呂敷包みを負つて、背を屈めながら歩いてゐた。

川下からダイナマイトの音が響き出した。

川上の古ぼけた空家が、小綺麗な淫賣宿になつた。さすがの彼女等が驚いたのは――お絹がそこへ移つて行つたことだ。彼女等は皆、博打打ちのやうな男から、しつつこく誘はれたのだつたが――そのうまい話の金高をまた思ひ出して、お絹を口ぎたなく罵つた。

日本人の土工の群が入り込んだ。工夫監督が、彼女等の宿の離れに下宿した。

隣りの曖昧宿にも女が二人殖え、お清は間もなく床から起き上れなくなつた。しかし、その家の子供達が、彼女の枕もとを離れないお陰で、追ひ出されずにすんだ。お芳は川上の新しい家へ引き抜かれて、彼女の、、、、、、、、、に上つた。工夫監督が彼女に通ひつめてゐるといふ噂が立つた。

或る日、お芳が料理番の行李の中から、新しい鰹節を一本見つけると――人の行李を明けてみるのは彼女の癖だが、直ぐ宿のおばあさんのところへ持つて行つた。

「まあ。――これと取り替へてお置き。」と、使ひ古しの小さい鰹節を渡した。

行李を明けてみた料理番の吉八は――餘りに情ない正直者だつた。居たたまれなくなつて暇を取つた。彼女等は泣いて止めた。お瀧はお芳の首をしめて、二階の段梯子を引きずり下しながら、

「この糞婆の、畜生、畜生。出てうせろ。」と、門口へ倒した腹の上を、跣足でぎゆうぎゆう踏みつけた。

しかし、四日も經つと、彼女等はもう吉八の噂をしない。

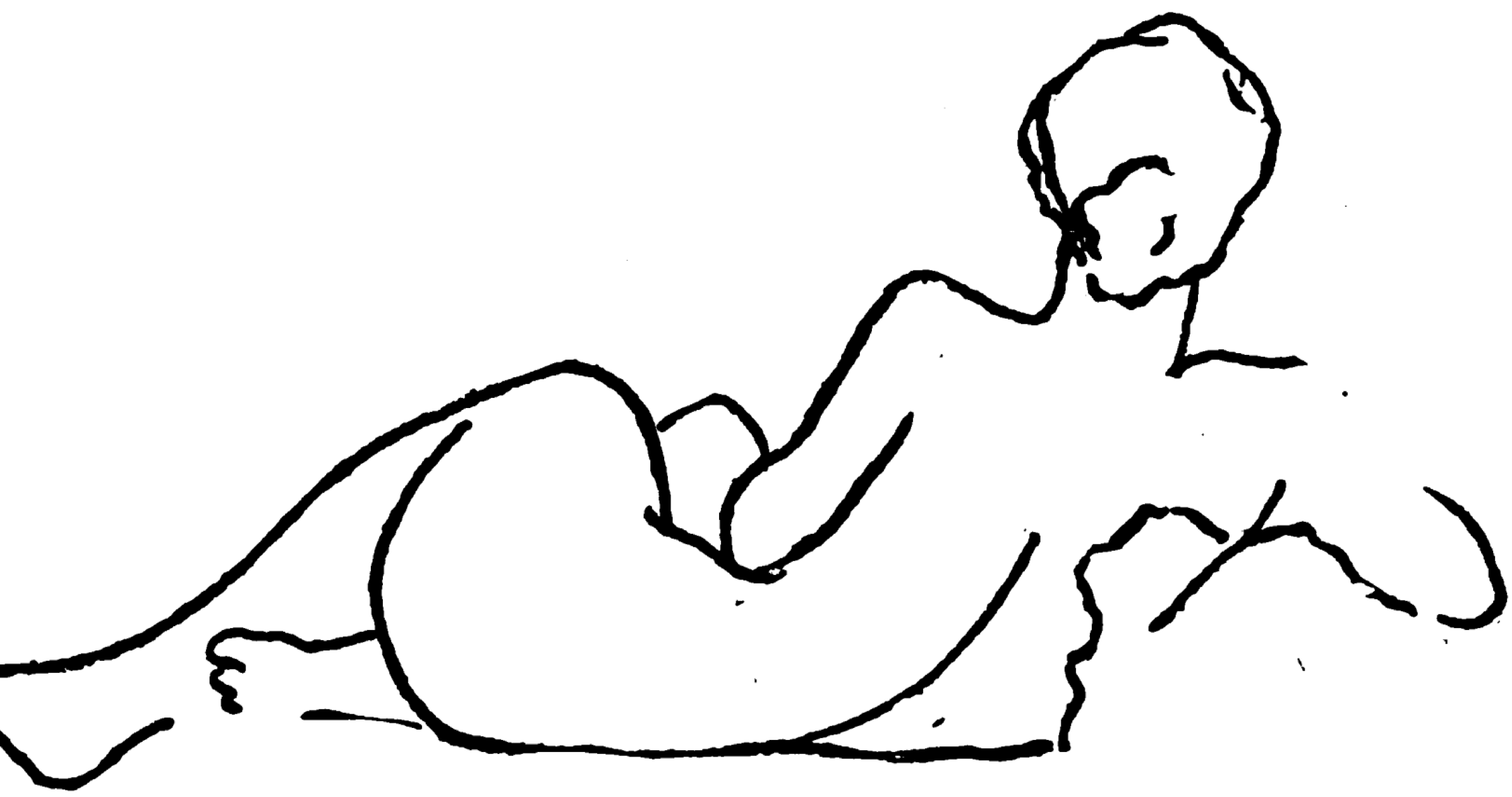
お雪は庭を掃きながら、ふと顏を上げた。

お瀧が――あのお瀧が、離れの入口にしやがんで、監督の足に、黄色いゲエトルを卷いてやつてゐるのだ。お雪は箒をばたりと楓の木に倒しかけると、ついと身を引いて、それからぼんやり裏庭へ歩いて行つた。橋の欄干に凭れて、ぶらぶら片足を振つてゐると、ぢはぢは涙が流れて來た。

その夜、彼女等の寢床を取りながらお瀧は、

「今日も爆發を見て來たわ。あのハッパで岩が崩れる、小意味のよさつたら。私あの焔硝の匂ひを嗅がないと、眠れなくなつちやつた。工夫になりたいな。」

お雪がぷつと吹き出して、兩手で抑へた顏を、固い蒲團に落すと――いつまでも突つ伏したまま、肩を揺すぶつて笑つた。（終）



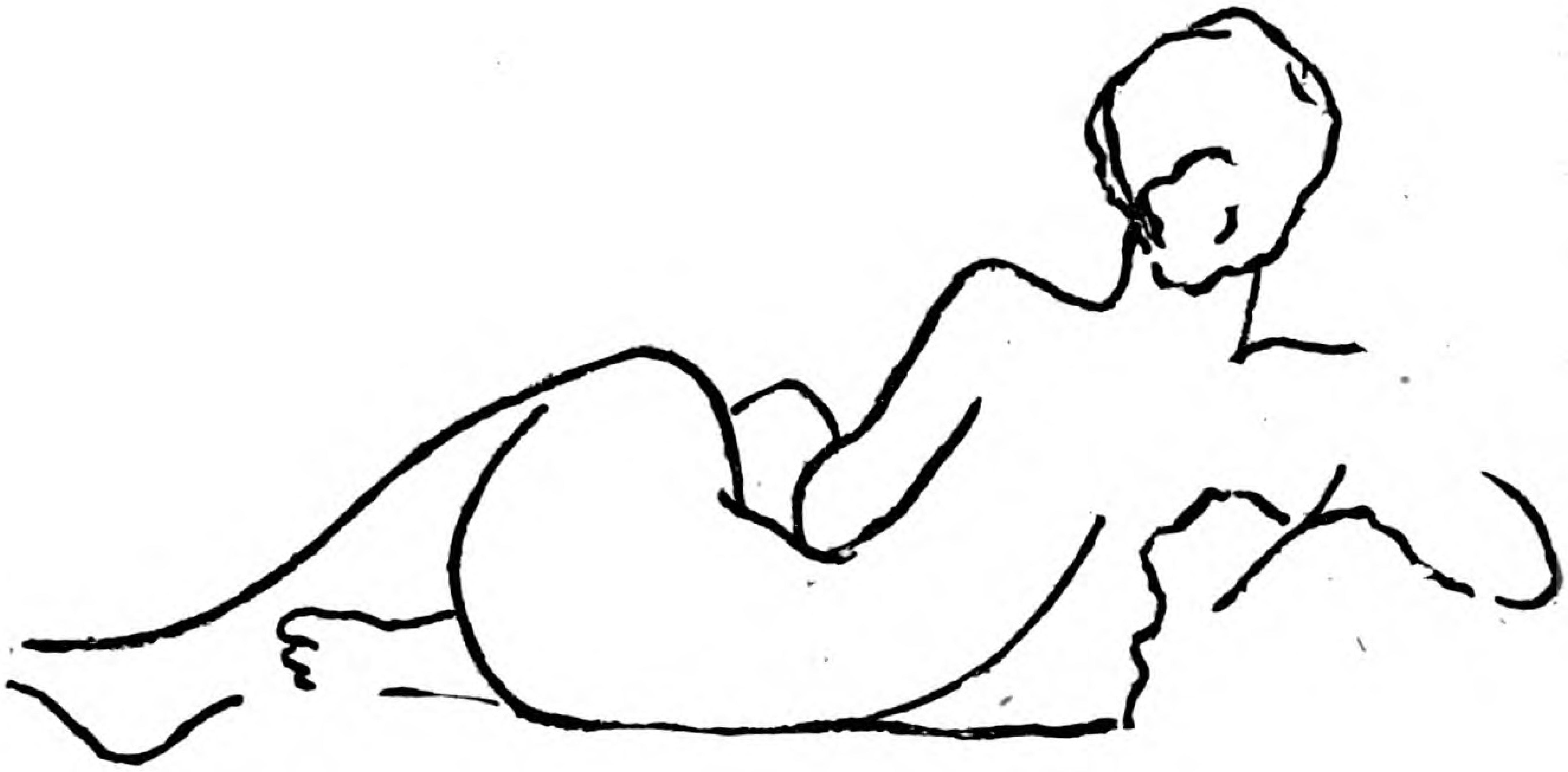
卍（まんじ）

谷崎潤一郎

その二十五

「へーえ、そしたらあの時カマかけられてたのん？『そら光子さんの奥樣に對する氣持ち云うたら、全く眞劍でしてなあ』云うて冷やかしたりして、人馬鹿にしてる思ててんけど。」「ふん、ふん、わざとそんなこと云うて、成るだけ姉ちゃんに腹立たそとしててんし。あて襖の蔭で聞いてて、まあ何ちふうそつきやろ思てんけど、あんな時に辯解したかてなかなか信用して貰はれへんしなあ。……」そいで光子さんは、計略にかかつた云ふことに氣イつきなさつたら、忌ま忌ましいて忌ま忌ましいてならんとこい、それからちふもんもう邪魔なもんないやうになつたのんで何のことしつこうに附き纏て、何ぞ云うたら「あんたこそうそつきや、巧いこと云うて僕欺してたやないか」云うて、私とのこといつ迄でも根ェに持つてて、「、、、であんな、、、んどいて僕等の間柄、、、やかい云へた義理やない」とか、「きつとあんなことぐらゐで絶交する筈あれへん、今でも何處ぞで會うてんとは限らん」とか、自分で會はさんや

たも男らしいもない、済んでしもたこ とそないくどくど云はいでもええ」云ひなさつても、「いやいや、済んでしもたことやない、きつとあの人に僕の、、知らしたあるやろ」云うて、ほんまのとこはそれ一番恐がつてて、私に知れたら復讐的にどんな妨害するか分れへん云ひますのんで、「邪推もええ加減にして欲しい。あんたちふもんあることさい隠してたのんに、なんでそんなことしやべる隙あるやろ。あんた姉ちやんに會うたんやつたら大概様子ででも分つたやろのんに」云ひなさいましてんけど、「いや、その様子に怪しいとこあつた」云うて、自分がカマかけたりしますさかい人の態度まで疑がうて、――それが、ただの嫌がらしと違て、綿貫にしたら疑がふ譯ある云ふのんは、自分かて光子さんと私との仲感づいてたやうに、私にしたかて綿貫と光子さんとの仲知らんとゐた云ふ筈ない、知つて今迄、、も、、んとゐたのんは、「あの男は、、、せん人間や」云ふこと聞かされて安心してたのんやろ、そやなかつたらまさか黙つてる譯あれへん、そない思てて、それがお腹にありますのんで、私を笠屋町の宿屋へ呼んだ云ふのんも、自分はしよつちゆうこんなとこで光子さんと會うてるぐらゐで、ちよつとも、、、、やない云ふこと見せつける積りもあつたのんです。光子さんかて、「どうぞ姉ちやんと別れて下さい」と正面から手エついて頼まれなさつたら、「イヤ」とは云へん義理ですのんに、あんじようペテンにかけられた上にそないエゲツなう疑がはれたら、意地でも謀の裏かいてやりたうなりなさるし、あんな心にもないことて仲悪なつた思ひなさつたら、なほのこと未練殘つて、どないぞし仲直りしたい、せめて一と眼だけでも會ひたい思ひなさいましてんけど、訪んねて行つてもたやすうは會うて貰へんやろし、會へたところでどない云ふて云ひ譯せう、今更何云うたにしても氣持ち直して貰んやろと、いろいろ考へなさつた末あの、、の本のこと思ひ出しなさつて、………あれはほんまに光子さんには用のない本で、やつぱり中川の奥様に貸しなさつたのんやさうですが、………あの時のことは、ふつとそれからヒント得なさつたのんで、○○病院の名前騙つてこないこない電話かけよ、こんな時にはこないせう云ふ工合に、何日もかかつて一所懸命考へ抜きなさつた。もちろん誰にも相談せんと、自分ひとりであんだけの段取り工夫しなさつて、ただ電話かけるのんに女の聲やつたらいかん思て、お梅どんに譯話して出入りの洗ひ張り屋の男頼んだ。「あてかてあの時は姉ちやんの、、取り戻そ云ふ一心で有るだけの智慧絞つてんし。今考へたらあんなえらい騒動して、眼エ吊り上げて見せるやなんて、役者でもないのんにようあんなことした思ふけど、一所懸命になつた云うたらどんな事でも出來んことない、なあ」云ひなさつて、そら、あの時のことは確かに私を計略に、



卍（まんじ）

谷崎潤一郎

その二十五

「へーえ、そしたらあの時カマかけられてたのん？『そら光子さんの奥様に對する氣持ち云うたら、全く眞劍でしてなあ』云うて冷やかしたりして、人馬鹿にしてる思ててんけど。」「ふん、ふん、わざとそんなこと云うて、成るだけ姉ちゃんに腹立たそとしててんし。あて襖の蔭で聞いてて、まあ何ちふうそつきやろ思てんけど、あんな時に辯解し[illegible]かてなかなか信用して貰はれへんしなあ。……」そいで光子さんは、計略にかかつた云ふことに氣イつきなさつたら、忌ま忌ましいて忌ま忌ましいてならんとこい、それからちふもんもう邪魔なもんないやうになつたのんで尙のことしつこうに附き纏て、何ぞ云うたら「あんたこそうそつきや、巧いこと云うて僕欺してたやないか」云うて、私とのこといつ迄でも根エに持つてて、「、、、であんな、、、んどいて僕等の間柄、、、やかい云へた義理やない」とか、「きつとあんなことぐらゐで絶交する筈あれへん、今でも何處ぞで會うてんとは限らん」とか、自分で會はさんやうにしといたくせに、何處迄でも疑はんとゐられん性質やのんか、それともわざと空惚けてそんな嫌がらし云ふのんか、「あん

たゝも男らしいもない、濟んでしもたことそないくどくどと云はいでもええ」云ひなさつても、「いやいや、濟んでしもたことやない、きつとあの人に僕の、、知らしたあるやろ」云うて、ほんまのとこはそれ一番恐がつてて、私に知れたら復讐的にどんな妨害するか分れへん云ひますのんで、「邪推もええ加減にして欲しい。あんたちふもんあることさい隱してたのんに、なんでそんなことしやべる隙あるやろ。あんた姉ちやんに會うたんやつたら大概樣子ででも分つたやろのんに」云ひなさいましてんけど、「いや、その樣子に怪しいとこあつた」云うて、自分がカマかけたりしますさかい人の態度まで疑うて、――それが、ただの嫌がらしと違て、綿貫にしたら疑がふ譯ある云ふのんは、自分かて光子さんと私との仲感づいてたやうに、私にしたかて綿貫と光子さんとの仲知らんとゐた云ふ筈ない、知つて今迄、、も、、んとゐたのんは、「あの男は、、、せん人間や」云ふこと聞かされて安心してたのんやろ、そやなかつたらまさか默つてる譯あれへん、そない思てて、それがお腹にありますのんで、私を笠屋町の宿屋い呼んだ云ふのんも、自分はしよつちゆうこんなとこで光子さんと會うてるぐらゐで、ちよつとも、、、、やない云ふこと見せつける積りもあつたのんです。光子さんかて、「どうぞ姉ちやんと別れて下さい」と正面から手エついて頼まれなさつたら、「イヤ」とは云へん義理ですのんに、、あん、、じようペテンにかけられた上にそないエゲツなう疑がはれたら、意地でも謀の裏かいてやりたうなりなさるし、あんな心にもないこと云うて仲惡なつた思ひなさつたら、なほのこと未練殘つて、どないぞして仲直りしたい、せめて一と眼だけでも會ひたい思ひなさいましてんけど、訪んねて行つてもたやすうは會うて貰へんやろし、會へたところでどない云ふて云ひ譯せう、今更何云うたにしても氣持ち直して貰へんやろと、いろいろ考へなさつた末あの、、の本のこと思ひ出しなさつて、………あれはほんまに光子さんには用のない本で、やつぱり中川の奧樣に貸しなさつたのんやさうですが、………あの時のことは、ふつとそれからヒント得なさつたのんで、〇〇病院の名前騙つてこないこない電話かけよ、こんな時にはこないせう云ふ工合に、何日もかかつて一所懸命考へ抜きなさつた。もちろん誰にも相談せんと、自分ひとりであんだけの段取り工夫しなさつて、ただ電話かけるのんに女の聲やつたらいかん思て、お梅どんに譯話して出入りの洗ひ張り屋の男頼んだ。「あてかてあの時は姉ちやんの、、取り戻そ云ふ一心で有るだけの智慧絞つてんし。今考へたらあんなえらい騷動して、眼エ吊り上げて見せるやなんて、役者でもないのんにようあんなことした思ふけど、一所懸命になつた云うたらどんな事でも出來んことないわなあ」云ひなさつて、そら、あの時のことは確かに私を計略にかけ

た、欺した云はれても仕方ないけど、それも自分がどんな氣持ちでしたか云ふこと直きに分つて貰へるやろ、そしたら私かて可哀さうなとこそ思へきつと憎いとは思へへんやろと、そない考へてた云ひなさいますねん。

　ところが私と仲直りした云ふことそれから間もなう綿貫に知れた。光子さんかてもともと綿貫のたくらんだことあべこべに引つくり返して見せつけてやろ云ふ氣イあるのんで、別に隱そともしなされへんばつかりか、知れたらどんな顏するやろ思て待ち構へてなさつたとこですさかい、「あんた此の頃、又あの人とより戻つたんやろ、空惚けててもちやんと分つてる。」「ふん、そやねんし、そんな事ちよつとも惚けてエへん」と、落ち着き拂てなさつて、「會はんとゐたかてどうせ疑がはれるくらゐなら、會うた方が優しや思てん。」「何で僕に內證でそんなことした？」「內證やあれへん、あてどない邪推しられたかて、せエへんことはせエへん云ふけど、したことはした云ふし。」「さうかて今日まで默つてたやないか。」「そら云ふ迄もない思たさかい默つてた、何も一一自分のしたこと報告せんならん思てエへんもん。」「こんな大事なこと報告せんちふ法あるもんか。」「そやさかい、したことはした云うてるやないか。」「ただ『した』だけでは分らん、孰方から仲直りしたのんかちやんとはつきり云うて見なさい。」「あての方から訪ねて行つて、惡かつた云うて勘忍してもろてん。」「何んやて！何んで詫まりに行くことある？」「何んで云うて、こんなとこいあんな時間に呼び出しといて、着物借つたりお金借つたりして、放つとく云ふ法あるかいな。そんな義理の惡いこと、あんたは出來てもあては出來へん。」「借つたもんはあの明くる日、僕が郵便で返してやつた。あんな汚らはしい女にそれ以上禮云ふ必要あるもんか。」「ふーん、そしたらあの時姉ちやんの前で何んちうた、『僕の一身はどないになつても、此の場さい無事に濟んだら御恩は一生忘れしません』云うて、その汚らはしい人に頭下げて、掌エ合はして拜んだやないか。そやのに今頃ようそんなこと云へるなあ。第一借つたもん郵便で返すやなんて、もし旦那さんの手エにでも渡つたらどない迷惑しなさるか、汚れてたかてゐエへんかて世話になつたもんは世話になつたもんやのんに、何んちふ恩知らずやろ。あんたそんなこと云うたら、あの晩のことかて手品の種見えるやうな氣イするし。……」そない云うてやりなさつたら、ぎよツとした顏して、「手品の種て何んのこツちや」云ひますのんで、「何んのこつちや知らんけど、何もあれから絕交したとも云エへんのんに、あんた獨りで絕交したもんと極めてる云ふのんけつたいやないか。そない自分の思ふ壺に嵌まる思たら間違てるし。」「何んや一體、あんたの云うてること僕には分らん。」「あのなあ、あの時の着物あんな

り警察から戻つて來えへんのん何んでやろ？」「今そんなこと問題にしてエへん。」そない云ひながら、チクリと痛いとこ刺されたのんで、「何を云ふのんか今日はあんた興奮してるで。まあまあ、その話ゆつくり聞こ」云うて、照れ隱しにニヤニヤ笑て胡麻化してしもた。けどそんなりで放つとくやうなあつさりした男違ひますよつて、二三日したら直き又持ち出して、今度は下手に出て光子さんの機嫌取りながら、「あの奧樣よつぽど怒つてた筈やのんにどんなこと云うて丸めたのんか、後學のために聞かして欲しい」とか、「そんな優しい顏してあんたはえらい手管上手や」とか、「くろとも及ばん凄腕や」とか、いろいろなこと云うておだてたり皮肉云うたりしますのんで、ええ加減なとこで妥協しといた方がええ思ひなさつて、實はこないこないの計略で仲直りした云ふこと話してやりなさつた。「あんたそんな狂言書いて人欺すことといつの間に覺えてん？」「そらあんたに敎せてもうてん。」「阿呆云ひなさい、僕にもちよいちよいその手エ使てるねんやろ。」「ほら又邪推始まつた。あてこんな人の惡いことしたん今度だけやわ。」「そない迄してあの奧樣ときようだいになりたい云ふのん、僕には分れへん。」「けどあんたかて此なひだ姉ちやんに『僕はちよつともかめしません、此れから三人仲好しましよ』云うてんやないか。」「そらあの時あの人怒らしてしもたら難儀やさかい、ついあない云うといてん。」「うそ云うてるわ。あんた姉ちやんにカマかけたんやないか。あの晩の細工ちやんとあてに分つてるし。」「そんなこと僕一向知らん。」「あんたよう聞いて頂戴や、一寸の蟲にも五分の魂云ふことあるよつて、蔭へ廻つてけつたいな事しられた思たら、誰かつてそんなりにしとけへんさかいになあ。」「僕がけつたいな事したやなんて、何んぞ證據でもあるかいな。あんたこそ邪推してるやないか。」「邪推なら邪推にしといたらええ。けどあんたかつてそない云ふのんやつたら、ちやんと約束した通り姉ちやんと附き合うたらええやないか。あんたは疑ごうてるか知らんけど、あてかてあんたのイヤがるやうなこと決して姉ちやんに云エへんし。…………」そこで光子さんは卽席に氣轉利かしなさつて、私のとこい、、した云うて來たのんも一つは綿貫のイヤがつてること何處までも隱して、一人前の、、や云ふこと私に信じさすためやつた、自分はそない迄して綿貫の名譽守つてるねんさかい、綿貫さんもうちよつと寬大な氣持ちになつたら、此の先三人が仲好うして行かれへん云ふ筈ないやないか、綿貫かて私の前で「、、、、、、、、、とは性質違ふ」云うた言葉もあるのんに、、、、いたり何んやしたらそれこそ、、、みたいに怪しまれる、——と、一方では綿貫の痛いとこおさへてて、賺かしたり威嚇したりしなさつたのんで、さすがの綿貫も文句に詰まつてしもて、「そんなら、、、、、、、、、云

ふこと棄てくれ」云ひましてんけど、「姉ちゃんに對してそないするのんやつたら、あんたに對してもそないせんと公平やない。それ承知ならそないする。」「あんたと此處の宿屋で會うてる以上は、姉ちゃんにも此處の家い來て貰ふ。その方が、、、、、、のんにも都合ええ」云ひなさつて、私との交際には絶對に嘴入れんといてほしい、いゝぐゞ云ふのんやつたら綿貫捨てても私捨てへん云ふ覺悟見せなさつたのんで、とうとう泣き寢入りになつてしまひましてんて。

その二十六

「……なあ、姉ちゃん、たんぼ親しい間柄かてこんなこと云うたら自分の恥やし、愛憎つかされるかも分れへん思てじいつと辛抱してゝんけど、もうもう今日は何んにも彼も云うてしもてんし。あんな人でなしの、、、しられてこないな泣き目見るやなんて、あてぐらゐ不仕合せなもん世の中にあるやろか。」——そない云ひながら光子さんは私の膝の上い打つ伏しなさつて、涙でそこがびしよびしよに濡れるぐらゐ激しいに泣きなさるのんで、あんまりのことに何ちうて慰めたげたらええのんやら、——なんせ私の知つてる今日までの光子さん云うたら、花やかで、勝ち氣で、いつもプライドに充ちた眼ェ耀やかしてなさつて、そんな辛い思ひしてなさつたとはちよつとも見えしませんのに、その高慢な、女王みたいにエラそにしてなさつた人が、プライドも何んにも放つてしもて泣き崩れてなさる樣子だけでも、ほんまに思ひの外ですねん。光子さんに云はしたら、自分は剛情張りやよつてどない苦しいことあつても人に見透かされんやうに努めて來てんけど、そいでも姉ちゃん云ふもんなかつたらもつと陰氣になつてたやろのんに、姉ちゃんに、、られてたお蔭で暗い運命に打ち克つだけの勇氣出た、いつでも姉ちゃんの顏さい見てたら氣が晴れ晴れして一切のこと忘れてたけど、此なひだぢゆうから又綿貫の、、、、、募つて來てたとこいさして、今日ちふ今日はどう云ふ譯か悲しい思ひ込み上げて來て意地にも辛抱出來んやうになつて、長いあひだ堪へてた涙の堰きが一ぺんに切れた。」「なあ、姉ちゃん、どうぞどうぞ、……頼りにするのん姉ちゃんばつかりやさかい、こんな話聞いても愛憎盡かさんといてエな。」「なんで愛憎盡かすもんか。」云ひにくいことよう云うてくれたなあ。あてかてそない頼りにされたらどない嬉しいか分らしへん。そしたら光子さん氣イ弛みなさつたのんか、一層止めどもなう泣きなさつて、自分の一生は綿貫のお蔭で滅茶滅茶にしられた、何不足のない身に生れながら彼奴のために自分まで、、にしられてしもて、もう行く末に何の望みも光明もない、生涯埋れ木で暮らすばつかりや云ひなさつて、自分は死んでもあんな男と結婚せエへん、姉ちゃんどうぞ助け

る思てあの男と手エ切れろやうにしてくれへんか、何ぞええ工夫あつたら教せて頂戴云ひなさるのんで、「こないなつたらあてかて正直なこと云ふけど、ほんま云うたらあて等ちやんと、、、、の約束してしもて、こないこないの、、、まで交してんし」と、昨日の出來事みんな話したげたら、大方そんなことやろ思てた、綿貫の奴、何處迄行つても、、、、知られてエへんか云ふごと疑うて、わざとそないなこと云うて姉ちやん試してみといてから、自分捨てられたら姉ちやんも一緒に抱き込んでやろ云ふ氣イや。……そない云ふと成る程、「光ちやんに子供出來た云ふこと初耳です」云うたとき、「へえ？　初耳？」云うて血走つた眼エして、「何で子供出來る筈ない云ひましたか、そんな體質や云ふんですか」と唇の色まで變へてたのんが、あの時にもけつたいな人やなあ云ふ感じしましたし、それに今になつて思ひ當るのんは、話の中途でためいきついては、「ああ、ああ、僕は何んちふ不幸な運命の下に生れたのんでせう」と、二へんも三べんも芝居のセリフみたいな節つけて繰り返したあの言葉、――あの時は何んや、人の同情求めるためにわざとあんなセンチメンタルな聲出してる思ひましてんけど、それがやつぱり、なんぼづうづうしい男にしたかてお腹の中では自分の不仕合はせ嘆いてるのんで、人に云はれん淋しい氣持ちが自然と外に現はれたのんかも分れしません。けど「何んなそないに、、した云ふこと隱すのんでせう？　お姉さんにまでウソつかいでもええやありませんか」とか、「、、、れたら何處いなとやつてしまふ云うて、光ちやんのお父さんかんかんになつて怒つてる」とか、巧いこと云うて探り入れて、――それもええけど、人馬鹿にしてるのんは、、、、、、、のことあないに細かうに規定して、、、い書き込んだりして、「これ讀んでみたらお姉さんの方が僕より得してる、僕の誠意のあることこれでも分りましたやろ」云ふやなんて、もともと起る氣づかひないのんやつたら、どんな條件かて書けるやありしませんか。そんな有りもせんこと種に使て、此方の信用つないどいて、、、に、、さしたりして、どないする氣イやろ？　どんな場合にあの、、役に立たすつもりやねんやろ？　そらきつと「、ハ、ト光子ヲ、、ニ、、セシムルタメニ努力シ」云ふのんと、「、ガ、テラレタル時ハ、ハ光子ト、、、、」云ふのんと、「、、ハ、ノ、、ノ承諾ヲ經ズシテ無斷ニ、、ト、、シ、、、ヲ、マシ、若シクハ、、スル等ノ行爲ヲナサズ」云ふのんとか、――殊に此の一番しまひの條件が眼目やのんで、その外のことは勿體らしいに見せかけるための附け足りやと、光子さんは云ひなさいますけど、そいだけのことにわざわざこんな尤もらしい形式取り交して、あんな大騒ぎせいでもよささうなもんですのんに、そんな法律くさい文句並べるのんがあの男の癖なんや

さうで、そない云うたら、此の頃光子さんの綿貫に對する態度だんだん燒け糞になつて來なさつて、どないなとなれ云ふやうな素振り見せなさるもんですさかい、綿貫の方も近いうちにただでは濟まんやうな事起る云ふ豫感じてて、蔭へ廻つて何んぞ惡さするやうな樣子見えてた。そいで此なひだ三人で松竹座い行つた時にしたかて、「あんたそないにひがんでんと一ぺん姉ちゃんに會うて御覽、そしたら姉ちゃんどんな人やか、あんたの、、知つてるかどうか、大概話しぶりでも分るやろ」云うて連れ出しなさつて、そないにしといたら、內證でけつたいなこと云はれたりする危險がないやろ思ひなさつたのんですけど、あんな工合に妙にこぢれてて口も利かなんだのんですと。「そしたらあない空空しいしてて、蔭でそうッと手ェ握ろ云ふことあの時から考へてたのんか知らん？」「そらどや知らんけど、あてがあの人放つたらかして姉ちやんと、、のんやないか云うて、常時心配しててんし。」「きつとあてを、、に使て結婚さいしてしもたら、もうあんたみたいなもん用ない云うて放り出すつもりやつてんなあ。」「結婚結婚云うてるけど、それかて、、、、ためやのんで、ほんまに結婚出來るとは思てエへんねん。あんまり無理なこと云うたらあて生きてエへんこと分つてるし、姉ちゃんちふもんある方が外の男に取られる氣づかひない思て、今のままで出來るだけ續けてゐてたいねんし。」………そいで光子さんは、今日も此れから綿貫が待つてるねんけど、今日ばつかりはどないしても會ふのんイヤや云ひなさつて、姉ちやん何んぞ工合よう云うて行なして頂戴云ひなさるのんですが、今急にそんなこと云うても怪しまれるばつかりやし、後が却つて惡いさかい、そない云はんと今日のとこは何んにもこんな話せなんだことにしときなさい、そのうちにあてがきつときつと手ェ切れるやうにしたげる、あて死んでも光ちゃんの命助けんと置かん、まさかの時はあの、、の奴、、てやる云うて、私も一緒に泣きながら力つけたげて別れましてん。

それが、………さう、さう、その誓約書の日附け見たら分るのんですが、………さうです、さうです、此れが七月十七日ですよつて、光子さんとそんな話しましたのんが多分明くる日の十八日のことで、ちやうどその時分夫の方は忙しかつた事件やつと片附いたのんで、何處ぞい避暑に行こやないか、ことしは輕井澤いでも行つてみよか云うましてんけど、私はなかなかそれどこやあれしませんさかい、光子さん毎日毎日淋しがつてて、こんな體で自分何處いも出られへんのに、あんたほんまに羨やましいなあ云うてなさるし、行くのんならもうちよつと涼しいになつてから箱根いでも連れて行つて欲しい云うて、夫が何んや物足らん顔してるのんにも頓着せんと、そいから半月程云ふもんはいッつもいッつも夫の出かけるのん待ちかねて笠屋町い

飛んで行きましてん。何しろ私にしましたら、あれから此方光子さんが別人みたいにしほらしいに見えて、今迄は美しい悪魔みたいに思はれてたのんが、今度は急に鷲に狙はれてる鳩みたいに思はれて來て猶更いとしさ増したとこい、會ふたびごとに心配さうな様子してなさつて前のやうな花やかな笑顔見せなさること一日もないのんで、まさかとは思てても短氣なことでもしなさつたらえらいこッちや思たら、氣が氣やあれしません。そいで私、「光ちやん、あんた榮ちやんの前ではせめてもうちよつと浮き浮きしてなさいや、そやなかつたら又感づかれてどんなこと云ひ出すか分れへん」云うて、「きつと、きつと、世間に顔向けならんやうに叩きつけてやるさかい、死ぬ程つらいことあつてもちよつとの間辛抱してなさい」云ひましてんけど、さてどないしたら綿貫叩きつけること出來るか、人欺したり陷れたりする計略は向の方が上手ですさかい、なかなかえゝ考へ出て來えしませんなんだ。私はそない云うてるうちにも、又綿貫がろうぢの外で待つたりしてたらどない云ひ抜けしたらえゝのんやら、あんな、、の條件守らんかてちよつとも疚しいことあれしませんけど、「若シ、、、、カガ光子ニ對シ、或ハ他ノ何人カニ對シ、、、、、、、時ハ豫メ、、、、、、、、、、、アルモノトス」云ふ約束破つてるのんが矢つ張り何んや濟まんやうな氣イしてて、いつもろうぢを出て來るとき、又あのぞつとするやうな聲で後ろから「お姉さん」云エへんかとビクビクしてたのんですが、えゝあんばいにあんなりになつてますのんで、あんた男のこッちやさかい、、、さい交してしもたら、、、、、も糞もあつたもんやない思てんねんやろ、結局その方が此方も助かる思てましてん。さうかうしてるうちに光子さんは毎日毎日「姉ちやんどないぞしてくれへんか、もう一日も辛抱出來へん」云ひなさりますし、自分は最後の手段として、わざと綿貫誘ひ出して、、ちしようか思てる、その時は何處い逃げる云ふこと前に私に教せとくさかい、、、に、、、されたりしてえらいことになつた時分に、、、に綿貫の、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、もうえゝ頃や思たら摑まへに來てほし。そないにしたらなんぼ綿貫かて二度と寄り付くこと出來んやろさかい、自分の名譽も傷けること覺悟の上でやつてみせる。「此方で相談してることうすうす嗅ぎつけたらしいつて、やるのんなら早い方がえゝ」云ひなさるのんで、「嗅ぎつけたらあの、、楯に取つてあてに何んとか云うて來るやろ、まあ、まあそんな非常手段最後まで取つときなさい」云うて、――ほんまにあの時分、よつぽど思案に餘つてしもて、先生のとこい智慧貸して頂きに上ろか思たくらゐですねんけど、そんな厚かましいことようせえしませんし、お梅どんに聞いてみてもえゝ考へない云ひますし、いつその

こと夫の力借ろかしらん、、、、、、、、、、、、、、、、、うそついてたこと或る程度迄は白狀して、ただ綿貫の、、免れるやうな法律的の手段ないもんか知らん、話しやうに依つたら夫かて光子さんに同情寄せんこともないやろと、困つた揚句そんなことまで考へましてん。ところがその夫が、或る日突然、ちやうど私が行つてる時に電話も何んにもかけんといて笠屋町の宿屋い訪ンねて來たやありませんか。それが事務所の歸りしな、四時半ごろのことで、二階で光子さんと話してましたら、「奧さん奧さん」云うて慌てて仲居さんが驅け上つて來て、「今奧さんの旦那さんがお見えになつて、お二人さんに會ひたい云うたはります、どないしまひよ」云ひますのんで、「何んでやつて來たんやろ」とぎよッとしながら顏見合はしましてんけど、「兎に角あて會うて來るわ、光ちやんそこにすッ込んでや」云うて、玄關へ降りて行きましてん。

その二十七

「やあ、えらう分りにくいとこやなあ」と、そない云ひながら夫は格子のとこに立つてて、實は今さつき、伊勢の四日市い歸る人あつて港町の驛まで送つて行つて、戻りしなに心齋橋筋散步してたら、光子さんのゐなさるとこ確か此の邊やつたなあ、きつとお前も來てるやろ思たのんで、急に訪ンねる氣になつた。別に用事あるのんと違ふけど、いつもお前がお邪魔に上つて厄介になるのんに、近所まで來て顏出しせんのも惡いやうな氣イするし、それに光子さんどないしてなさるか、お見舞ひかたがた是非お目にかかつて御禮云ひたい、差し支へなかつたら何處ぞで晩の御飯御馳走したい思ふねんけど、ちよつとも外い出なさること出來へんのんやろかと、何氣ない風して云ふのんですが、どうもそれだけやないみたいな氣イして、「此の頃は大分眼立つやうになつてなさるよつて誰にも會はんやうにしてなさるし、なかなか外い出るどこやあれへん」云ひましてんけど、「そやつたらまあ、會ふだけでも會うて行きたい」云ひますのんで、それでもいかん云ふ譯にも行けしませんさかい、「どない云ひなさるか聞いて來るわ」云うて、「光ちやん、こないこない云うねんけどどないせう、どないせう、ほんまに。……姉ちやんどない云うたん？」「大分眼立つやうになつてるよつて誰にも會ひなされへん云うてんけど、是非ちよつとでも云うてるねん。」「何んぞ譯でもあるねんやろか。」「さあ、あてもそない思ふねんし。」「あていつそ會ふわ、そんなんやつたら。……今お春どんと相談したら、帶上げお腹の上い締めてその上から着物着なさつたらええやろ云ふよつて、そないするわ。ほんまに懷ろい綿詰めるやうになつてしもたなあ」云ひなさつて、そのお春どん云ふ仲居さんに帶上

げ借つて、「お客さん階下の部屋い通して待つててもろて」云うて、その間に私が手ヶ傳うて身ごしらへしてましたら、又お春どん上つて來て、「そない申しましたけど、一分か二分でええさかい玄關でお目に懸る云やはつて、上りやはれしません」云ひますのんで、そやつたら早せんならん云うて大慌てに慌てて二人がかりで着せましたもんの、多やつたらどないなと胡麻化せるのんですが、肌襦袢の上に明石の單衣もん着てなさるだけやのんで、、、、、、、、、、、、、、持ち上つてしもて、どないしても、、のやうに見えしません。「姉ちゃんい、あてのこと何ヶ月や云うといたん？」「何ヶ月云うたか忘れてしもたけど、人眼につく云うたぐらゐやし、六ヶ月か七ヶ月になつてんと工合悪いなあ。」「これぐらゐやつたら六ヶ月に見えるやろか。」「もつと全體が圓うに膨れてなんだらいかんし。」そんなこと云うて三人ともクスクス笑ひ出しながら、「何んぞもうちよつと、、、、、もん持つて來まひよ」と、又お春どんが、、やらタオルやら持つて來ましたのんで、「あんたも一ぺん下い行つて、、、とうちゃん誰ぞに見られたらいかん云ひなさつて、めつたに玄關いも出て來なされしませんさかい、兎に角お上り下さい云うて、なるべく暗いあんまり見えんやうな部屋い入れといて頂戴」云うて、、彼れ此れ三十分も待たしといてから、やつとどうにか六ヶ月の、、こしらへて行きましてん。「そんなりでかめへん云うたんやけど、浴衣がけでは失禮や云ひなさつて、着物着かへてなさつたのんで、……」と、そない云ひながら夫の様子うかがつてますと、折れ鞄傍に置いて、キチンと洋服の膝かしら揃へてすわつて、「却つて御迷惑か思ひましたけど、あんたり御不沙汰してますし、一ぺんお見舞ひに上らんならん思てたとこいちやうど此の前通りかかりましたさかい」云うて、氣のせゐか光子さんのお腹の邊ジロジロ見てるみたいですねん。光子さんは「いいえ、うちこそいツつも姉ちゃんに我が儘ばつかり云ひまして」——と、自分のために避暑に行くん止めてしまひなさつたのん氣の毒やとか、姉ちゃんのお蔭で淋しい思ひ慰めてもろて、たいさう有り難い思てるとか、あんまり口數利きなさらんと殊勝らしい聞えるやうにあんじよう云ひなさつて、團扇で帶の上のとこ隱すやうにしてなさるのんですが、お春どんが氣イ利かしてくれたと見えて、晝間でも電氣燈さんならんやうな薄暗い部屋の一番暗い隅の方にすわつてなさつて、なんせ風通しの悪い上にお腹にいろいろなもん詰めてなさるのんで、づくづくに汗かいてはあはあ息してなさる恰好云うたら、いかにも本物らしいて「巧いこと芝居してなさるなあ」思ひましてん。

夫は直きに座ア立つて、「飛んだお邪魔しました、どうぞ又お出かけになれるやうになつたら遊びに來て下さい」云うて、「もうおそいさか

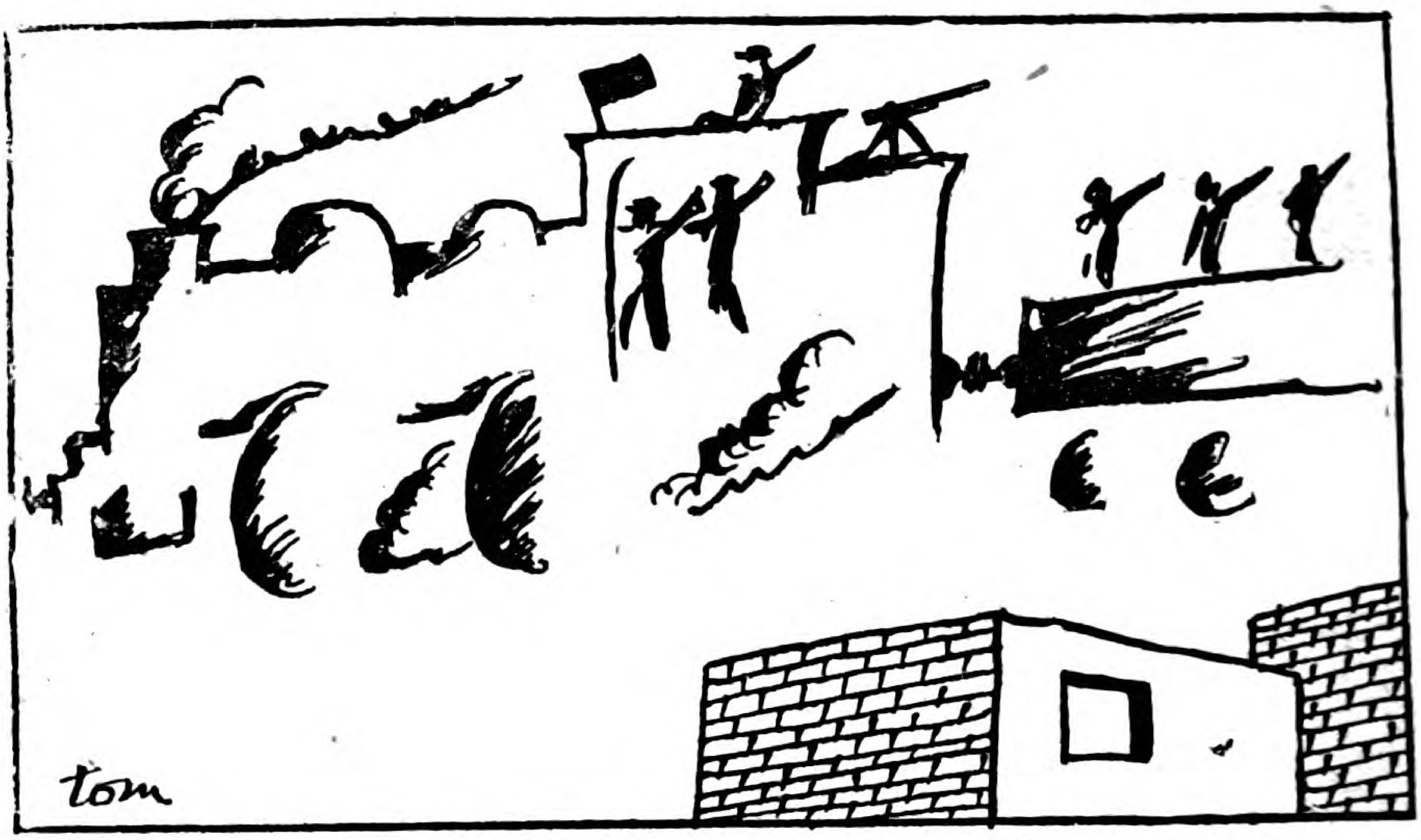
い お前も一緒に歸つたらええ」云ひますのんで、「何んぞ譯あるに違ひないよつて今日は此れで歸る。明日きつと待つてて頂戴」と光子さんにそうッと云うといて、しぶしぶ連れられて出て來ましたら、「バスに乘つて行こ」云うて四つ橋の停留場い出て、そいから阪神で家い歸るまで、夫は不機嫌に默つてしもて、何云うても生返事しかせえしません。家い這入ると洋服も脫がんと、「ちよつと二階いおいで」云うてどんどん上つて行きますのんで、此方もあらかた覺悟きめて附いて行きますと、寢室のドーアばたんと締めて、「まあそこいおかけ」と差し向ひに椅子にかけさして、暫くは物も云はんと、ほつと息ついて考へ込んでるのんです。「あんた、今日、何で突然あんなとこい來たん？」と、重苦しい空氣破るために私の方からそない云うてやりましたら、

「うむ、……」云うて又考へてて、「お前に見て貰ひたいもんあるねん」云ひながらポケットから事務所用の封筒に這入つたもん出して、テーブルの上にひろげたのん見ましたら、そんなり私は眞つ靑になつてしまひましてん。どないしてそれ手ェに這入つたのんか、「ここに署名してあるのん確かにお前に違ひないか」云うて夫はあの、、、眼の前い突きつけてるのんです。「斷つとくが、僕はお前の心持ち次第では決して事を荒立たさう思てエへん。これが僕の手ェに這入つた徑路についても聞きたいのんやつたら聞かしてやる。けど第一に、事實お前が署名したもんか、それとも此れはニセ物やのんか、その點ハッキリさしときたい。」……ああ、綿貫に先越された！　私の持つてる、、の方は簞笥に鍵かけて隱したありましたから、此れは綿貫のんに違ひないので、こんなことするために此の、、、書かしたのんか！　ほんまに私は、此なひだから夫に口利いて貰を思てて、光子さんのことも打ち明けた方が得なことは話してしまを思てたのんに、さつき不意討ちに笠屋町い訪ンねて來られて、あないなつたら嫉妬してなさるのんうそや云ふこと今更云ひ出しかねてしもて、うその上塗りしてしもてんけど、こんなことになるのんやつたらあの時白狀しといたらよかつた！

「おい、默つてたら分らん、返辭したらええやないか」と、夫は出來るだけ腹の蟲おさへて、やさしい、靜かな聲出して、「默つてるとこみたら、これお前書いたと認めてもええねんなあ？」云うて、そいからだんだん話し出すのん聞いてますと、五六日前に今橋の事務所の方い突然綿貫が訪ンねて來て面會求めた。そいでどんな用事か思て應接間い通して會うてみたら、「今日お訪ンねしたのんは、實は折り入つてお願ひしたいことあるのんです」云うて、「多分あんたも御承知でせうが、僕と德光光子とは結婚の約束したあるばつかりでなく、既に光子は僕の種までも宿してますのんに、此方の奧さんが中い這入つていろいろ、、しなさるのんで、光子の仕打ち此の頃日增しに冷淡になつて、今の

工合ではいつ結婚してくれるのんか分らんやうな狀態にある。就いてはあんたから奧樣に意見して下さいませんか」云ふよつて、「僕の家內が何んで、、するのんですか。詳しいことは知りませんけど、家內はあんたがたの戀愛に同情してて、一日も早う結婚しなさるのん祈つてるやうに聞いてましたが」云うたところが、「あんたは奧樣と光子とが、、、、してるか、ほんまの事情御存知ないのんです」云うて、今でも、、、、、、つづけてる云ふことそれとなしに仄かした。けど初對面の男の話そのまま信用する氣もなかつたし、現にその男の、、、、るもんが別に、、の人戀ひしてる云ふのんもけつたいなし、何んや此の男氣イ觸れてるのん違ふか知らん思てたら、「お疑ひになるのん尤もですが、ここに確かな證據あります」云うて此の、、、出して見せた。夫はそれ讀んだとき、自分の妻が未だに自分欺いて、、、、、、、、、ことにも不愉快感じましたけど、それよりもなほ不愉快やつたのんは、妻と見ず知らずの男とが自分の知らん間に「、、、、、、、、」の約束してる云ふことやつた。第一人の女房とこんな、、、、、、、、、取り交しといて、その女房の亭主の前いれいれいしいに見せつけながら、それに對する一言の云ひ譯もせんと、まるで刑事が犯罪の證據摑んだみたいに得意さうに ニヤ ニヤしてる此の男の氣イ知れん思たら一層むかむかして來たとこい、綿貫の方は「×　柿內園子、×　綿貫榮次郎」と書いたあるとこ指したから、「あんたは此處に署名したあるのん、あんたの奧樣の手エや云ふことお認めになりますやろなあ」云ひますのんで、「成るほど、見たとこではたしかに家內の手のやうですが、それより先に伺ひたいのんは、ここに、、として署名してあるんのは何處の人です」云うてやつたら、「それは僕です、僕が綿貫自身です」云うて、まだその皮肉悟らんみたいに平氣な顏してる。「此の署名の下に、、、、、、、、、、やうなもん何んですか」云うたらそれはこないこないの譯でと臆面もなう此の時のこと細かうに話し出すのんで、みんなまで聞かんうちに腹立つて來て、「此の、、、讀んで見ると、あんたと、光子さんと、園子との關係は詳しいに規定してあるが、園子の夫である私に就いては何の考慮も拂はれてをらん。私ちふもんは全然眼中に置かれてん。あんたも此處に署名してをられる以上當然責任分たれるもんと考へるのんで、一應あんたの立ち場からその辯明求めたい。まして今のお話のやうやと、此の、、、は園子の意志から出たやなうて、半ば強制的に結ばれたやうに思はれるが」云うてやつた。そしたら綿貫恐縮するかと思ひのほか相變らずニヤニヤ笑てて、「その、、にもある通り僕と園子とんとは『、、、、德光光子ニ對シテ有スル、、、、、、、』に依つて結ばれてるのんで、その關係は園子さんの夫でをられるあんたの

ゝゝとは始めから衝突してます。もし園子さんがあんた眼中に置かれたら、光子とあないな間柄になることもなかつたやろし、こんな、ゝゝ交す迄もないいし、それこそ僕の何より望むとこですけど、妻たる人が、ゝゝんもんを他人の僕がどないすることも出來しません。僕に云はしたら此の、ゝのやうな關係認めることが、既に園子さんに對して非常な讓歩してるのんです」云うて、あべこべに夫の監督の不行き屆き恨むやうな口ぶりで、ゝゝの約束した云ふんのは、ゝしたのんと譯が違ふ、そやから自分はそないに、ゝゝなことしたとは思てエへん云ふのんです。(つゞく)



鬪ひを襲ぐもの

岩藤雪夫

1

漁船の消えた靉の海を染めて太陽が半圓に沈みかけた。

——、、、、欲しい！——

堤防の下で蘆がそよいでゐる。艪の軋む音がする。

ハガネ色の夜が墜ちて、滿ち來る放水路の潮騒に春の匂が鋭い。

心臓の鼓動と同じ速度で太陽が沈んだ時彼はもう一度叫んだ。

——、、、、欲しい——

濱の沖仲仕組合のKに賴まふ——外國船マドロスから貰つたといふ青貝の象眼入り、、、、をKは持つてゐる——彼は二十間の距離で廻轉するギアーの一枚の齒を打ち落す自信がある。若い頃、××兵器工廠のテスト工をしてゐたから。

、の標尺を彼奴の、、、、、。

彼は、昔上海の白色恐怖暴動の折に、(三十九字削除)の歡喜を覺えてゐる。

——彼奴の、、、、、、、、で血肥りに膨れてゐるだらう——

潮風の流れる堤防を歩き乍ら彼奴の反逆に鎔込まれた目玉が媚態を擅にする。

基礎工事に數百人を要したゞらう混凝土の底の大建築に彼奴は住んでゐる。夜、玉川砂利を敷きつめた正門を持つ、、、、、、、磨かれた長い廊下を土蜘蛛のやうに這ふ。彼奴は奥座敷の柔かい毛皮に埋れて、、の計畫に餘念がないだらう。鍵穴から覗くと電燈の花笠に光る禿げ頭がしやれた調度の中に君臨してゐる。

扉をノックする。

——お這入り——

と工場で現場視察をする時のやうに鷹揚に答へるだらう。、、、、、を彼奴の胸に据えて扉に合鍵を下してから、扨て、落付いて言はなければならない。「君には、、、、、、、より他に自由がないやうに、、、、、、より他にないんだ。」と。

きつと、彼奴の虫も殺さぬ温容は顔面筋肉が一瞬、ベルトに巻き殺された秋間和喜市の身體に似てぐしやりと歪むだらう。

彼奴も、、、、、、の前で悲鳴を揚げたり狼狽えたりする程馬鹿ではない。長い間、、、、、して來たあの尤もらしい嘘よりもつと上手な嘘を並べるかも知れない、そして隙を見て正門の傍の、、、、の枕元に通ずる呼鈴を押すだらう。

だがそれが何だ。營養過多の垂るんだ筋肉は、、、、、、、、、、、に適ふものか。打ち下す二十封度ハマアの力を整調する(四十一字削除)

もう、その時こそ長い間ためておいた笑ひを容いつぱいに投げ捨ててもいいんだ。彼奴の瞳に映る自分の笑ひ顔を睨み乍ら、靜かに力を罩めて、、、「さよなら!」とも言はずに(五十三字削除)

貧困な失業時代の姙娠から營養不良で畸形兒として生れた彼の第一の模型のやうに皺ちよこ張つた彼奴の身體が小氣味よい、、、

然し忘れてならない事は、、、、、、、、、、彼奴の瞳の中に、××自働車工場の、、、、、果した自分の笑ひ顔が石のやうに刻み込まれて居るか否かを調べる事だ。若しそうでなかつたなら彼奴は、、、、、、、、を感じてゐないんだ——その時廊下を走る足音や扉をノックする響が激しくなつてもかまはない——(二十九字削除)老木の年輪のやうに彼奴の心臓の断面には、、の年輪が入つてゐるのかも知れない、、、、十本の指の中で、、、、、、、、、、!(二十一字削除)

だが、現實は凡てが無念だつた。

二呎の送風器ベルトに巻き込まれて挽肉のやうに、、、、秋間和喜市の死に冷淡であつた會社に、、してストライキを敢行して以來二十有餘日になる。

資本家の常用手段である工場閉鎖が行はれた。大會社フォードに買收されて、近い内に組織變更をしやうとしてゐた會社としてはもつけの幸の爭議だつたのだ。嘆願書は蹴られ、團體交渉權も要求書も蹴られた。訓練の足りない組合員は續々と逃避して行衛を晦ましたり買收されたりした。重役はどうしても爭議團代表と面會しない。工場、本社、待合、別莊、自宅、と轉轉と逃げ廻る彼奴の跡を爭議團代表は執拗につけ廻した。

（六十七字削除）爭議團の統制は引こ抜かれる鬪士の數に比例して亂れた。

二十幾日の苦鬪の後に與へられたものは屈服か組合の崩壞かの他よりなかつた。だが工場閉鎖された以上屈服するにも相手がなかつた。

今日、そして、爭議團組織部で最後の計議が行はれ、、、、、、決議された。抽籤によつて選ばれた七人の中に彼も居た。再度の抽籤は彼が、、、となる事に決定した。

、、、、の總ての、、は七人に委託されて練られた。

彼は考へた。、、、、、がこの慘敗に傾きかけた爭議を多少とも有利に展開し得るかも知れない。だが解決後工場閉鎖が解放され機械が動き出し再び、、が續けられるだらう。彼奴、三石資本金融系統下に連なるあらゆる工場あらゆる職場でそれが行はれるだらう。

（六十一字削除）

（七十四字削除）

——明後日が、、、だ——

——明日、濱の組合のKの所へ行かふ——

星がアムペア・メータアのやうに瞬いてゐる。

放水路の堤防の果から横にきれて潮の飛沫の白く煙つてゐる防波堤に出ると、波の頭の上で流星が斜に空を切つた。

——、、、、欲しい——

堤を降りると銀色に孕んだ新芽を纏ふ小川柳の枝が軟かく頰をなでた。

——妻は未だ内職に夜を更かしてゐるかも知れない！

防波堤の下の長屋の奥に彼の小つちやい家はある。

一枚一錢の下駄の疊表の内職に肩を凝らしてゐる彼の妻は、妊娠[illegible]ケ月の呼吸を乳房に波打たせ乍ら月末の仕拂ひに脊褪めてゐた。

彼は彼の階級的、、が膨れかけた妻の腹に向つて動いてゐるのを意識した。

2

土間には踵の傾いた皮膚病みたいな靴と、片ちんばの下駄が並んで

ゐた。
家に入ると彼は上被に滲みた爭議團詰所の蒸せつぽい匂ひを嗅いだ。
妻は鑄物のつらのやうな顏をさゝくれ疊に押し當てて一枚の毛布の中に寢呆けてゐた。膝前から赤いネルがくさび型に覗いてゐる。疲れた同志達の鼾が隣室に鳴つてゐた。編みかけた內職の下駄表が散らばつてゐる。
『おい、俺は何處に寢るんだ？』
彼は妻の枕もとに立つて呶鳴つた。
『あら、おゝ寒い、何時かしら』妻は米汁のやうな涎を拭つて起き上ると髮をかき上げた。『今夜は、毛布一枚だけよ。又二人泊りに來たの、下宿を追ひ出された爭議團の人が……』
——皆の中にもぐつて寢るか、別になら別にで、蒲團の一枚位は殘しておいて呉れたなら承知できる！……一枚の毛布しかないのに未だ、區切られた別な部屋で寢やうとする妻の態度がいけない——
平然として一枚の毛布に寢る事を強いる妻の目の色を見ると彼は、片手にハンマナを振る勢で拳を打ち降ろした。
『貴樣、この人道主義奴！　いい氣持になりあがるな』
妻は横鬢をおさへて、ちんまりした鼻を膨ました。
『だつて！』
『馬鹿、そんな事で鬪へると思ふか？』
『ぢあ、やらなくつてもいいの？』
『當り前だ、雜魚寢しないのなら、一枚位は殘しとけ！　世界中の勞働者が皆ぬくぬくと暖まつてるとでも思つてゐるのか……』
『ぢあ……』
妻は立つて隣室へ行きかけた。
『もういい、俺は寢るんだ。ドヂを踏むな！』
妻は、外で貯へて來たハケ口のない怒りを家庭で爆發させるより外に道のない、勞働者の心をよく知つてゐた。
彼女は、愛撫するやうな眼差しを夫に與へながら垢に光つた五枚の座蒲團を敷いた。
『お茶を入れませうか……』
ナツパを脫いだ彼は拔かれた古釘のやうに倒れて大の字に寢ころんだ。
『星は、出てる？』
『俺が一人でやる事が一番いい……』
『明日、みんなの汚れ物を洗はなけれあ……天氣になるかしら』
『……嵐の日の方がいいんだ……』

『冗談ぢあないわ』
　妻はよれよれの手拭地に着換へて、膨れた腹の上に細帯を捲きつけた、彼女の皮膚は糸取女工よりも血の氣を失ひ褪せた湯もぢの下で荒れてゐた。
　もう稀にしか、一昔前程の、、を感じなくなつたのに、こんなにも早く二度目の受胎をしたのは不思議だつた。
　彼は、此度の（十字削除）食はされるだらう事を思つて大きい黒子のある妻の臍の邊りを眺めた。
『おい、お前どうしても嫌か、』
『何？』
『胎の兒さ、三ヶ月になれあ、、、』
『ええ、でも私一人、、、、』
　妻はレールのやうに彼に添つて冷たい足を絡んで囁いた。
『駄目だ、この上に經濟がとれるか』
　彼は、同志に教へられた、（十字削除）妻に語つた。
『どうだ、俺が、、、、、、』
『いやいや、そんな事、、、！』
　妻は彼の首を揺すぶつて訴へた。
　一年前、味噌と大根オロシばかりを食つてゐた失業時代に姙娠して生れた子供は「××結合不完全胎兒」と醫者に宣告を與へられて生後二十四時間で死んだ。腹の大穴から大小腸が露出してゐた畸形兒は、二十圓の代價で、標本用として醫師に買ひ取られ、兩親を飢ゑから救つた。畸形兒は今、黄色いアルコールの中に眠つてゐるだらう――以來、彼夫婦、、、、、、、。
　明治卅八年の戰爭最中、、、、、、、、に苦しんでゐる時に生れ、貧乏と困難の中に育つた彼も發育不完全で、恥かしい位の小男になつて終つた。それは世の中へ出てからの彼に色々な形の困難を與へた。
『我鬼さへ滿足に育て上げられない俺達だ――（十一字削除）』と彼はよく言つた。
『いや、』
　妻は、、、、、、生れて來る子供の未來を考へると言つた。彼は考へない。
『だから、、、、、たいんだ』
『ちがふわ、、、はあなたへの義務ぢあないんだから、、、なんか起きないんだわ！』
『運動してゐる以上、最小限度の經濟生活をしなければならない、、、』
　畸形兒を生んで以來、妻は不承不精、彼の意志に從つて、、を續け

てゐた。

受胎の一ヶ月目の或夜、妻は誇らし氣に言つた。

『ね、又、出來たわ、子供が』

『何、何、馬鹿野郎。何をボヤボヤしてゐたんだ？　俺達は、新婚旅行をしてゐるんぢあないぞ』

『だつて、あなたが悪い、』

『俺が悪いつて、伺ひませうかねだ、何處が悪いんだい』

そして、妻は、今から四ヶ月程以前、彼が地方へ組織運動に出かけて、一ヶ月許り家を明けて歸つて來た夜の事を語つた。

『ね、、、、、、』

『馬鹿、貴樣、、、、、、、、』

『御免、、、、、、、、妾、あの日はたしか、、のやうに周章てゐたの』

『お前の無責任からだ、』

彼が、幾度、、、、と言つても、彼女は承知しないで二ヶ月目になつた。

『でも、私、、、、、、、、それにもう、動くのが解るんですもの！……』

と彼女はそれから言ひ續けて來た。

無理に説き伏せやうとすると妻は、第一の呪はれた子供を生んだ時のやんちやさで激しく泣いては彼を手古摺らせた。彼も、妻の胎兒に對する動きがたい愛着を見ると、（二十二字削除）勞働者の暗い生活を呪はずにはゐられなかつた。

妻の受胎は彼をいらいらさせた。次に困惑に陷れた。今は、、だけがある。

然し、今は、今夜こそ、決定せねばならぬ時だ。

『絶對に、、、！』

『いや、いや』

妻は調節器ボールみたいに首を振つて承知しない。、、、の自分の、、を言ひ得ない彼は苦しかつた。言へば妻は納得するかも知れない、だが、それは、同志との堅い約束の下に、、された、、である。ガムシヤラに攻め立ててゐる内に彼の胸板に顔を埋めて妻はさめざめと泣き出した。

防波堤を打つ滿潮の波頭の響が聞える。

子供を生むとする、生長する、彼の經濟的負擔と妻の生活が重くなる。（十六字削除）

『波があんなに大きくなつた。晩そいんだぞ、もう寢ろ……泣くな、泣く前に考へろ！』

彼は妻を抱いたまゝ靜かに、膨れた腹に對する憎惡を鳩尾に押へつけた。

だが自分の子供の憎い人間が何處にゐるだらう！　子供ぢあない。出張つた腹ぢあない。

泣いてゐる妻の持つ胎兒への激しい愛情は、（十九字削除）

そして、彼の頭の中にとぐろを捲いてゐる、、、、、、は一層彈力を貯へてキリキリと引き緊つた。

感情の昂ぶつて來る頭に響く潮騷を受けて彼は低く叫んだ。

――、、の標尺を彼奴の、、、、、、――

3

上陸した水夫が胸を張つて歩いてゐた。

税關の赤煉瓦と、N・Y・Kの青ペンキ建てに挾まれる舖石道を拔けると、齒車型の波止場だ。

黒光る起重機が幾臺も太く蒼空を截つて動いてゐる。その下で、マドロスと沖仲仕と商人の喀き聲が三角波のやうにこんがらがつてゐた。

煤煙と汗と潮の匂ひがあつた。

大和組の事務所でKを訪ねる、とアイヌのやうな親方が鼻の向きを變へて答へた。

「奴あ、今、向うの六號棧橋でセメント荷役をしてまさあ、蔓にたれあ、逢へますよ！！」

六號棧橋の腕の根元に立つて、二千噸餘りの鐵船の横腹から棧橋へ渡された數本の板の上で、赤銅色の肩に陽を浴びた沖仲仕達が、荷上げ唄を歌ひ乍ら交互に半身を振つては肩から肩へセメント袋を渡してゐた。それは瓦斯エンヂンの吸入瓣のやうに調子が整つてゐる。

あれやと、さんやん
これやと、さんやん
××××××まで貰ふたが、
さんやん
……丁度そのときあ、×××だんやん、
あれやとさんやん
これやとさんやん

ゆるんだ春の波が彼等の足の下で白泡をはじいてぢやれ合つてゐる。

はづれの渡し板の中央にKの角い顏がセメント袋と一緒に動いてゐる。時々、白い齒をかゞやかして隣りの沖仲仕に話しかけてゐる。

――Kは、一番放浪者が多いと稱せられる沖仲仕の中に、、、、、、、

かかつてから四年になる、荒い潮風と殺伐な港の氣が益々Kを沈着に剛健にしたやうだ。

颯爽と唄ひながら働いてゐるKの姿を眺めてゐると昨日からの怒りでコチコチになつた腦味噌がだんだんほぐれて來る。

沖仲仕達の唄ふ歌は、起重機のチエンの響や、港を泳ぎ廻つてゐる發動機船のパンパンいふ廢氣と共に四月の空のてつぺんまで跳ね上る。天空は青く熱つぽい。

彼はその金屬的音響に溷ぎる港の健康な風景に惚れこんで長いこと、、、、、を忘れてゐた。

晝、沖仲仕の仕事の列が亂れた頃、彼は大聲でKを呼んだ。

『やあ、先づ君達の果敢な闘爭を、僕は喜ばなきあならない!』

Kの萬力みたいな掌が彼の胼胝だらけの手を握つた。Kの掌は板のやうで肩にはセメントが積つてゐる。

『うん、經驗と、訓練と重ねてゐる。』

彼はKの角い顔に答へた。

二人は歯車型の波止場を歩きながら話した。投錨したインダラ船のデツキで火夫が炭團みたいな裸身を洗つてゐた。

理由を告げて、、、、、の借用を申出るとKは敢然として首を振つた。

『周章てちやいけない。、、、、ではないぢやないか、、、ぢあないか……』

『僕は絶對に借りたい!』

『(三十三字削除)。』

二人はかつきり七度、波止場を行き來した。

頑強なKの態度にシヤツポを脱いだ彼は燒きの戻つた發條のやうにげんなりして波止場を立去つた。

後からKが首を伸ばして叫んだ。

——おーい! 君の感情はまちがつちやあゐないんだぞ——

町の街路樹は若葉に輝いて空氣はねばつてゐる。

——矢張り、、、、、、、、只それだけか——歯がゆい——

幻想がでつち上げた行動は實現能きない——彼は自分に癪にさはり乍ら歩いた。

凡てがばらばらのやうに思はれた。目に見えぬ糸が萬物を操つてゐるやうでもある。

昨日と同じやうな顔をして人々は歩いてゐた。睫毛の下に深い哀愁がある。

昨日も今日も、明日もあさつても、我々を繋ぐ鎖は

るだらう。そしてたゞそれだけだ（二十八字削除）知つてゐる事は『日本の勞働者のこの、、、、、、、、、、だ』といふ事だけだ。

彼は街へ出ると證據の匂ひを嗅いでみた。鈍感な、、は幾日も入浴しない爭議團員のあのすえた、、のやうな臭氣を知つてゐる。

方六尺にその臭みが漂ふなら警戒しなければならない。市電の交叉點をよ切ると自働電話の箱から、印半纒の男が彼に合圖した。秘密指導部と爭議團本部との連絡員、變裝した同志岩野だ。

『朝のレポーターが歸つて來ない。』

、、は指導部を探索し初めたらしい。

岩野の目は四方に配られる。

『連絡地點は？』

『變更した、未だ今日は、一回の連絡もとれない……』

『本部の情勢は？』

『變化なし、御野村氏が來て講座が持たれてゐる―』

『うむ、では、たのむ……』

二人は交叉點で直角に別れた。

岩野は彼等組織部の計畫を知らない。早く、早く、、、指導部が發見されないうちに、、を、、ねばならない。

血脈が歩行をせき立てる。

――（十六字削除）………とKは言ふ。それが正しいか、正しくないか彼には解らない。只、、を欲しただけだ。が、、、は遂に手にない――、、、、だけが殘されてゐる。

彼は七人の集つてゐるだらう本部へ、アブレまいとする朝の自由勞働者のやうに急いだ。

本部の附近には、、、と、、が異邦人同志のやうに睨み合つてゐる。

『警視廳の調停課を動かす氣は指導部にはないのかしら……僕んとこのお袋や女房は狂ひみたいに怒るんだ……』とピケットの一人が言つた。

『馬鹿言へ！ 我々の、、、、する所にこそ、、があるんだ……』

鬪員の勇氣はくぢけ氣味に見える。彼は自分のけつをひつぱたくやうに呶鳴つた。

爭議團本部の二階に土管みたいな聲がある。講座を終つた評議會の御野村氏だ。

『……諸君は、機械の齒車の一つの齒だ。一つの齒が破損しても、機械は運轉を中止せねばならない。(三十九字削除)我々と彼等との、、は力の、組織と組織との、、、。……私は諸君が(十字削除)私共と共に、、、、、を要求するものである……』

鐵のやうな拍手があつた。

七人中四人は獨身者だ。四人はその夜、××町へ遊びに行つた。

『若い人の、寢顏を見ると、考へさせられる、あの脂の浮いた苦しげな眉のあたり……』

四人は身體中につつぱつた憂鬱をぶちまけて歸つて來るだらう。

、、の日の夜が、晴れたまま落ちた。

妻と散々に、、を爭つた彼は──勝手にしろ! お前の實踐が俺を承認させて見ろ──と家を飛び出した。

約束の××町通りの居酒屋に、、、、、、、、、、。

──、、、よいか──と皆の目は言ふ。

──よし──と皆の堅く結んだ唇が答へた。

『明日からの本部は?』

『あのまゝで留守番を一人。移動本部が出來るだらう……』

七人は十間づつの間隔を置いて歩いた。天心の月が黄色くさえてゐる。

先達はセルの着流しの阿久利、ソフトにレインコートの有舍はステツキを水車のやうに振り廻してゐる。小男の添野がモジリの魚屋姿、次がナッパを背廣に着換へた彼、後はヨボ金こと金帝成の日給を皆飲んだくれた自由勞働者といふ格恰、奈良縣人美男子の千鳥と豐島は工場通ひの通常服。

春の夜氣がしつとりと降りて重い。

アセチリンの香が歩道に添ふアカシアの若葉にもつれて夜店商人の喚き聲がかん高い。明るい人の顏がふんだんに流れてゐる。

──俺達は、、を形創る一つの鐵鋲だ──と同志草山は云つたが、人ごみの中を行く七人は濁流を溯るミススマシのやうだ。

添野は女を見る度にふり返りふり返り口笛で進んで行く。

、、の一廓を折れると屋敷町が續いて裏通りの塀にぶつかる。工場のトタン塀に──××自動車株式會社──と横に長くある。最後の文字の角を曲ると捨てられた野つ原が月の下に濡れ展つてゐる。七人は壞れた移動エンヂンの蔭の草にしやがんで、、、、をした。

──、、、はヨボ金、、、、、盡したら勝手に散る事──

『では明日からの七人の連絡場所は××公園の西の阿屋……』

『本部の情勢次第で第二の今日があるかも知れない……お互に注意しやう……』

『それが必要な場合は決定通り、山谷に、、、になつてもらう。』

『本部レポートは有舎、君に頼む……』

『、、には、』と阿久利は言つた。『、、、、、、、、、があるさうだ。ボンネット（、、、、、、、、）を開ければ、一番手近かな奴は、、、だ。勿論（十二字削除）。』

七ツの影が草の上にちら〳〵した。

『諸君！』彼は短くなつたゴールデンバットを地に叩きつけた。『この煙草の火、風に散る蛍の火の面白さを知つてるかい……』

誰も應へない。一度花火のやうに亂れた吸ひがらは忽ち夜の中に消えた。

『ウフッフウ――』彼は囁つた。

『さあ、落着いてやらう……』

阿久利が先頭に立つた。

（三十三字削除）

ヨボ、金帝成は、、、、に耳をそば立てて這ひつく張つた。六人は、、、、に首を集めた。、、、、、、。

『どけ！』

阿久利が、、、、、、、、とかけた。靴でけると、、は古綿のやうに落ちた。（十七字削除）

彼はズボンの尻ポケツから、、、、、、、、、をぬいた。五人も各各、、、、、を右手に握つた。

『這入れ！』

と阿久利が腕を伸ばした。

六ツの影が一つ一つ靜かに、、に吸ひ込まれた。（二十三字削除）窓窓から斬りこむ月光がこちんと怪しい陰を作つてゐる。、、、、、、、、が一條に白い。

六人は散兵のやうに走つた。

、、、、、、、、、、ヨボ金は耳に掌を當てた。、、の中の空氣が躍つてゐる。（六十三字削除）等が明つきりとヨボ金の耳にぶつかる。ヨボ金は目と口を大きくして聞いてゐた。それは秋間の靈が喜びにすすり泣いてゐるやうに響いた。

十分より長くはかからなかつた。

六人が靜かに姿を現はした。、の傍で一人が手を揚げた。ヨボ金は眞先に（二十八字削除）

野つ原は默々と月の下に濡れて草が小波程にそよいでゐた。犬の遠

吹かした。遠くの空で仁丹が青と赤に明滅してゐる。

『みなよろし……』

と金は、に言つた。

暗ぐりに、から首が現れた。

七人の他人のやうに別々に町へ出ると、異つた方向にむかつた。或者は明暗に巣をかけて餌物を睹す蜘蛛のやうにすばしつこく、或者は月給袋を貰つた日のやうに澄まして。

、、、は何處にでも居る、そして何處に居るか解らない。

半年程以前、×××へ同志を、、、、行つた時の事を覺えてゐる。

『、、、、が一人も居ない、もう直き歸つて來るから待つてゐろ。』

と小使が言つた。

勝手を知つた控室へのそりと入つて腰を下した。メーデーで二年來馴染の、、の野中といふ、、、が他の二三人と來てゐた。彼等は和服姿の地味な彼をその×××の、、、、と感違ひしたらしい。

『やあ、留守中に失敬……』と一人が言つた。『この町の評議會系の奴等の、、に來たので電話を一寸借りてゐる……』

頭株らしいのが電話をかけてゐた。『ウン、さう、書いたかね、伊達……イダテだ。二十九才、福岡縣小倉市船頭町○○番、……寫眞は近日中に送るさうだ。こ奴、××地方の有力な指導者なんだ。今日も相當な、、、、、、。それから×××組合の○○と○○の住所も判明した。次にもう一人、こ奴は、伊達とハルビン日露協會時代の同窓で、近日露西亞から歸る男だが、伊達の紹介でこの男も、、なるらしい。ウン、姓名は伊藤貢、年も戸籍も今は不明だ。今月の○○日に××の伊達の家に來るから、、、、、、、、、話だ……寫眞はあるさうだ……』

彼は×××××××會の伊達を知つてゐた。多くの勞働者の尊敬を受けてゐた指導者だ。——それが、、、、きしてゐるとは？ 目前のあらゆるものが崩づれ落ちさうに視野の中でぐらついた。、、、、、二人の同志の住所も、、、、、、、その上また、、、、、、、、、、でゐる口吻が見える。

「モシモシ、」と再び頭株は電話をかけ直した。「福岡、あゝさう……」

彼は息苦しく打つ胸を抑さへ、、された組合員に時折——どうだ、毎月、、、、出すが、、を知らせないか——と、、をかける、、、、、さを擽つと考へた。（三十九字削除）ふとした生活の苦しさから、、される人々の誤つた態度を誰が責任を持つべきだらうか！ その人も憎い。だが、もつと憎いのは「議會に我々の代議士を九十九人

まで送つた」最後の機までも（十一字削除）
「あゝ、モシモシ、福岡、、の〇〇君ですか、」
二分もかからずに通ずる、、長距離電話だ。
「書取つて下さい、福岡縣小倉市船頭町〇〇番地、伊達信治、本人は今回から××××××會內部から、、、「、、、なりましたから、一應御通知します……以上。

こちらは、、、、では……」
電話は切られた。そして「やあ、やあ、……」と言つて一同は出て行つた。

臍を噛みたい苦がい記憶である。
、、、は何處にでも居る、そして何處に居るか解らない。七人があの夜散つてから五日目、彼、山谷は深川の同志の家で、阿久利とヨボ金はそれぞれの、、、、、、、、。

未決監房は老朽船の汽關場みたいにむんむん息苦しかつた。運動場の隅、赤煉瓦の高い塀から松の枝が一本下つてゐた。壞血病の豫防に每日彼は臭い松の葉を盜んでは食つた。滅茶苦茶に廣い牢獄の空が鐵窓の外には在つた。

蚤と南京蟲とに身體中を蝕はれながら三人は刑の規まるのを待つた。

4

（二十一字削除）七日目に重役は、會見を申し出た。――秋間和眞市の遺族には二ヶ年半分の日給と工場法第四十九條によつて日給二十日の埋葬料が支給され、要求した六ヶ條の勞働條件改善の內三ヶ條は貫徹された。、、、、、、、を持つた三人は勿論解雇された。三人の解雇手當はビタ一文も拂はれない。

山谷等が一年八ヶ月の判決を下されてからの彼の妻は文字通り、爪を點す生活を續けた。又營養不良で畸形兒が生れやしないか、といふ恐怖が日夜彼女の心を惱ました。

同志達が每日生活費の補助をして吳れたが內職の夜更しに肩が凝つた。

「こんなことかあるから、、が必要なんだ。」
と思ふ。然しその時はもう四ヶ月の腹でのろはしい胎動があつた。
「やあ、おめでたう。何時だね！」
と夫の同志は訪問する度に言ふ。
『有難う、又一人のプロレタリアが半年も經つと生れるわ！』
と彼女は嗤ふ。

彼女の中には胎児と共に何か成長しつつあつた。時々の内職の夜更しに、生れて来る子供への希望を、子供をめぐる夫婦生活を夢のやうに考へてゐる自分を発見してぞつとする事がある。

ぞつとする度に牢獄の夫を憶ふ。　夫は茶が好きだつた——苦しいだらう。彼女の寝る窓硝子から梨地の夜空が見える。鉄窓からも同じ空が見えるだらう。夫が毎朝、ナロドニキイの唄を歌ふことを彼女は知つてゐる。彼は小声で口ずさんでゐるに違ひない……

丈夫でゐる。差入れにはお前が来るな。暇な同志に頼め！子供をどうする。

最初の牢獄からの音信はさうだつた。一ヶ月に一度の何の手紙にも「子供はどうした。」とあつた。

然し、彼女は毎夜眠る前に寝衣の襟下を展げて膨れた腹を内緒に見つめる。——蒼い静脈がすいて臍の下の黒子が時々びくびくと顫える。

——あの人は牢獄から、じつと私の腹を見てくれるだらう——

——あの人の生活にはもつともつと、苦しみが続くかも知れない、止むを得ない死が、私達の上に来るやうな事があるかも知れない——

俺は奴隷の平和を好まない、俺の生活から闘争を差引いたら生活は零だ。と言つてゐる夫だ。

そして彼女は二人の苦しかつた恋愛時代を追憶する。

——私はあの人の子を孕んだ事を誇る、自分は幸だ。あの人を父に持つた子供の前に自分は少しも恥しく思はない——

我々は小さな愛を愛してはならない、、、、、、に依つて動く人だ。と言つてゐる夫だ。

——私はどうしても、能きない、どうしても生みたい、どんなに苦るしくつても生みたい！　そしてこの子を夫以上の働き手に育て上げなければならない、少く共、自分ら女の仕事はそこにある——

彼女は、新聞や雑誌で、方法の広告をよく見る。

「経済的に安定のない世の中に生きる吾々は最も少数の子女を楽に、充分な教育を施さなければならない云々……」

とそれは××博士の言として書いてある。

最も少数の子女とは何人か、楽に充分な教育とは、何の事か解らない！　結局それらの広告面は、自分達、貧乏に追ひ廻されてゐる貧農労働者を相手に書かれてゐるものではないらしい。何故なら、資本家は貧乏な労働者が殖えなければ立ち行かないだらうし、子供を生んだつて、育てなくつたつて労働者の貧乏さが現在のまゝでは救はれるものではなかつたから。

彼女の考へとすれば「一人でも貧乏人が殖えろ！　貧乏な勞働者が殖えろ！　もつと殖えろ！　貧乏がどん詰れ！　どん詰まれ！（五十三字削除）」だつた。

つまりその博士も、、の方法だけを習いて何故に、、、をしなければならない程に生活が苦しいんだ？　といふ根本の證據は上げてゐない。どんな醫學博士だつて大學病院だつて勞働者の胃の腑を滿たす方法を發見し得ないのと同じだ。

彼は彼女に、、を強要する、運動家としての夫の意志はよく解る。だが彼女はどんなにしても生みたいのだ。胎の兒は動いてゐる。育ちつつある。

彼女は獨り寢の床の中で、捕つた日の夫をよく想像の中で動して見る。

深川の同志の家で彼は毎日憂鬱に、然しあくことのない讀書に暮らしてゐる。毎日、異つた時間に、違つた路を通つて、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。ニユース、レポートが手渡しされる。組合の爭議團の情勢や他の同志の報告がある毎に彼の鼻の兩端の筋が澀むだらう。

五日目の夜、彼女は後に知つた話だが、（二十八字削除）風の強い、灰色の天空と、灰色の街の夜だつたといふ。（十字削除）七人は××公園を出た。

明日は自分達の日だ。はがねのやうに鋭い確かな笑ひが七人の頬にあつた。

『おい！　我々はつけられてゐる。』

と阿久利が言つた。

街角にものとりのやうな人影がうろついてゐた。

『確かに？』

『いや！　君は怖れてゐる。』

『最惡の場合を、我々は常に考へる！』

『散らう！　明日午後八時、規定の場所で…………』

七人はくら闇をくぐつて獵犬のやうに走つた。

「……あの、、、、、、、、、を出さなければ、、、、、、、する」

といふ、、、の傳達が有つた翌々日だつた。

七人の希望は死なかつた。走つた。路地から路地を、明るみからくら闇を。（十七字削除）

彼は一時間の半分を走つた。はやぶさのやうな注意力と敏捷さが彼の身内に働いてゐた。街の四つ角で彼は一人の小ざつぱりした紳士に突き當つた。

『やつ、失禮！』と彼はそつぽに言つた。

『いいえ、私こそ、』

（七十一字削除）

盗賊とまちがへた通行人が彼の逃亡を遮つた。、、、、、、、、、

彼は自ら力を拔いて捕つた。

それらは全部、彼の後から歩いて凡てを見た豐島が彼女に語つたものだ。

「我々の爭議は百パーセントの解決を勝ち得なかつた。だがこの、、の、、に、、のよき、、を獲得した。この資本の攻勢期に於てそれだけでも、大きい仕事だ……」と彼は言つて歸つた。夫の、、は決して、、ではなかつた。と彼女は自分に言つた。

晝は夜に、闇は光に續いて時が流れた。

牢獄の三人の上にも同じ時が、一日が一ヶ月の長さで流れた。

彼女は思つた。――、、の、も彼の、、を、、得ないだらう――と。

そして彼女の胎の生命も生長しつつあつた。

年末のきびしい寒さの最中に彼女の陣痛が堰を斫つた。

同志の女房連や近所の人々の叩きつける勵ましの内に、押し上げる痛みをこらへて彼女は物足りなかつた。彼の底光る瞳とこちこちした腕の力がほしかつた。

彼女は同志の妻の胸を力いつぱい顔の上にたくしこんで、明け方紅鉛色の陽の出と共に胎の子を力み出した。

「腹を見て腹を、大丈夫？」

と、彼女は前に生んだ畸形兒を思ひながら天井に叫んだ。

『男だ！　立派なもんだ。全部揃つてゐる。』

同志の女房が力づけた。

顏中皺だらけな山猿みたいな子だ。目は皺の中に閉ぢてゐる。二人の何處にも似てゐない。『これが自分の子かしら、をかしい………』彼女は盛り上つて來る愛情を屑にほぐした。

日が重なると彼女は夫の言葉を忘れた。

何んと叫んで彼が怒らうと、夫の面前に小つちやい子供をつきつけて勇ましく自分の愛を主張する自信を彼女は持ち始めた。

――私の望みはたうとう消えなかつた。私は夫に反抗してもこの子を、、、、、に育てやう、この子に人生を有りのまゝに受けとらせてはならない！――

牢獄の夫に、彼に反抗して胎の子を力み出した通知をしたが返事がなかつた。

——怒つたつて何だらう、この子はもう乳を要めてゐる——

5

——、、を目ざざる者は、、、、ものだ——

とレーニンはかつて云つた。

一九二八年は日本のプロレタリアートが腦髓の表面に（十五字削除）を受けた年だ。

全國の勞働者と農民は固い握手の元に自分等の代表をブルジョア議會に送らんが爲に鬪つた。

×××と××の××を作れ！

のスローガンはプロレタリアと農民の黨によつて高く揭げられた。

大衆は鬪つた。だが勞働者と農民の（二十四字削除）日本全國と同じ大きさの、、、を下した。

勞働農民黨、日本勞働組合評議會、日本無産青年同盟が解散を命ぜられ、全國に亘つて六百有餘名の鬪士が牢獄に繫がれた。（四十一字削除）

政府の領袖は——、、、、、を、、にしやうと相談してゐた。日本の無産階級運動は十年の後退を示した。指導者が誤つてゐたのだ。

濱の沖仲仕組合のKも添野も豐島も投獄された。

（五十一字削除）一方勞働者を完全に機械化しやうとする産業の合理化が暗の中に進行してゐた。

秋、出獄の日が來た。

彼の妻は子供を背負つて迎への同志達に混つた。

ゆるい坂の上に灰色の煙突がものう氣に立つて青苔の生えた赤煉瓦の厚壁がその下に廣い框を作つてゐた。靜かに秋の日がよどんでゐた。

顏を知つた差入屋の待合所で一同は待つた。午過ぎに着いて三時間餘り待たされた。

西の空が鐵錆び色にくすんだ頃、彼とヨボ金帝成と阿久利が三十分の間を置いて小門を出て來た。

『おう！おう！』

最初に出た阿久利は猛獸のやうに唸つて皆の手を握つた。

二番目に出た彼は第一に阿久利と肩を打ち合つた。

『三月の事件を知つてるか、僕は中で聞いた。……』

『俺も噂を耳にした。知つてるとも、、、、、、、、、……』

『おお、、、、、……』

金帝成は瘦せてゐた。

『ボク、あぶらのもの食べたい。』と彼は同志を見ると言つた。皆は初めて聲を揚げて笑つた。

　歩きながら彼女は夫の尖つた頬を高く見つめた。子供は脊でむづがつた。その度に肩を前に搖つては「よし、よし」とあやした。

『ね、この子よ、見て頂戴!』と彼女は言ひたかつた。夫は時々、妻の方に冷たい視線を投げ投げ同志との話に忙しかつた。——夫は怒つてゐる——と思つた。そして皆に離れてだんまりこくつて歩いた。

『家へ歸つたら生ま豆腐二三丁食はして下さい、』と阿久利が彼女の傍に來て言つた。『亭主可愛いやで、直ぐうまい物なんか食はしちやいけませんよ。腹をオシヤカにしちまふから………』

　××橋の交叉點で皆は別れた。

『又、組合で逢はふ。』

『ああ、すぐ、、なきあならない……

電車の中で彼は殆ど默つてゐた。彼女は夫の顏を盜み見た。彼は遠い空間の一點を見据ゑてゐた。

『ね、疲れた? 痩せたわね、』

と彼女はのぞき込んだ。

『よく食つて來たな!』

『みんなが助けてくれたし、内職もしたし……』

『生んだな……』

彼は妻の脊にがつくり首を折つてゐる赤土の丸い塊りを見た。

『ええ、怒る?』

沈默が續いた。二度電車を乘換へた。終點から××放水路の堤防まで來ると夕暮が東から押して來た。

枯れた川添の葦がからから鳴つてゐる。葦切りの啼き聲が激しい。

對岸の草が横になびいて風の渡るのが見える。

暫く行くと脊中の子がずるこけて來た。彼女は立停つて前屈みに負ひ紐を緊めやうとした。

彼は後ろに廻つて子供を支えた。

『おい! 降ろせ。』と彼は言つた。

『ええ? 何て言つたの。』

『降ろせといふんだ。俺が抱いてやらう!』

『さう……』

彼女は紐をゆるめた。

彼は子供を兩手に高々と捧げた。子供は嗤つた。

『レロレロレロ、うーん。』

彼は唇をとんがらかして子供をあやした。

『うん、笑ふ笑ふ。何んていふんだ。』

『たあ坊、民治つていふの、御野村さんが名につけて呉れたの、それまで名無しだつたのよ。』

『うん、御野村さん……』

彼は歩き出した。子供をゆすりゆすり口笛を吹いて歩き出した。彼女は小走りに後を追つた。子供は彼の腕の上で火のついたやうに喧つて親の頭をびちやくく撲つた。

——怒つてやしない、いいんだ、育てるんだ——

彼女は自分につぶやいた。

と、彼は妻を振り省つて言つた。

『おい、これからだぞ、いいか、へこたれるな、これからだぞ！』

『ええ、解つてる……』

彼は又口笛を吹き吹き進んだ。それは同志の唄だ。彼女も口笛に合はせて小さく歌つた。

子供はくりくりした目を丸めて彼の腕で嗤つてゐる。

放水路が海に乘り込んだ邊りに浪頭が白く騷いでゐる。空は涯しなく地を限して灰色だ。

風が出て沖の防波堤に海鳴りが高い。

潮が押して來るのだ。

一九二九、九、五、



大地

里見弴

五の一

折角逢ひは逢つても、瑛龍の氣持の奥底を突き止めることが出來ず仕舞に別れて後の、四五日といふもの、それが氣がゝりになつて、珍しくも昌造は、うすぼんやりと、元氣なく暮した。引き込まれてか、おしげも、なんとなく沈んだ顔つきをしてゐた。おまけに、秋の雨が、じと〱と降りつゞいて、いとゞ暗い家のなかに、隅々、蔭々、陰氣な隈ばかりむらだち跋扈つた。――こゝへ引き移つた日の、あの、不吉な豫感が、いよいよ形をとつて現れて來やうとしてゐる、この考へで、昌造の氣持は、ひとしほ壓しつけられ、弱々しくさせられてゐた。當つて砕けろ、といふ氣で、瑛龍へ書きかける長い手紙も、途中で附景氣の鼻ッ張りが挫け、めちや〱に引き裂いて了つたあとの寂しさは、頭を擁へてゴロリと疊の上へひつくり返り、細々とつく息も暗むばかりだつた。

或る日、午後の二時頃、子供たちだけは表の間で先にすませて了つたので、珍しく一人の客も交へず、女房と差向ひに、晝食ともおやつともつかない、麵麭と紅茶だけの、

簡單な食事を攝つてゐた。話といつたところで、ほんの當面の、乾き切つた相談事くらゐなもので、燒きざましになつた麵麭の味に適はしい、ぼそ〳〵と、いかにも張りのない氣持だつた。

　その時、いきなりガラッと、中の口からはいつて來たのは、近衞の軍帽にカアキイの外套で、腕に、何か書いた布を卷いた在鄕軍人と、もう一人も、甲斐々々しく出立つた、どう見ても自警團の主要人物、といつた風な若者だつた。襖、建具の一切が、夏うちに取りはづされたまゝで、間に六疊一間へだてた茶の間まで、そつくり見通しだつたけれど、いづれ「お宅は、いつ幾日の、何時から何時までの間出て頂きます」くらゐのことで、すぐ歸つて行くものと思ひ、昌造は、茶の間の方から顏を振り向けたばかりで、飾臺の前を立たうとはしなかつた。

「えゝ、ちよつとお邪魔します。えゝ、實はその、例の甘粕大尉の減刑ですが……」

　と、在鄕軍人は、もう何軒も廻つて來て、すつかり手に入り切つた柔い調子で、やれ、邦家のために一身を犧牲にした勇者だの、天に代つての斬姦だのと、そんなもの〳〵しい效能書は一切ぬきにして、すぐさま衣嚢から、罫紙のとじたやつを取出すと、「御面倒でも、どうかこれへ一つ、御記名を願ひたいんで……」

その要領のよさに、つい、ふら〳〵ッと立ちあがつて了つた。が、ぢかに疊の上に置かれた連名帳を前にして、昌造は、云ひまくられて、ぐッと詰つた時のやうな、不快な困惑に陷つてゐた……。

　月賦販賣のミシンや豫約出版、または保險勸誘の外交員にしろ、廢兵、養育院の兒童などの押賣にしろ、およそひとの玄關に立つてものを頼む場合には、「御贊成下すつて……」とか、「お志がおありでしたら……」とか、なんとか一應はこつちの意思に問ふところがあるものだが、――それとこれとは聊か趣を異にするにしても、贊成不贊成などてんきり問題にもしずに、いきなり「御署名を……」といふ、否應なしの申出だつた。勿論、この在鄕軍人にしてみれば、そこになんの異議、違背があらうとも思はれなかつたらうし、實際また、今まで廻つて來た軒並、たゞの一人でも愚圖々々いふ者はなかつたに違ひない。そのぐらもすうもないことゝ、相手の應諾を信じ切つてゐる態度が、昌造にとつては、誠に「困りもの」だつた。「泣きどころ」だつた。もしひと言でも、なんとか故障を申し立てるとすれば、やがてそれは、彼等にとつての憤慨であり、激怒でもあらうけれど、第一にはまづ、「寢耳に水」の感じだらうと思はれるのだが、その「眠りの深さ」が、何よりも當惑の種だつた。

「あゝ、さうですか」

野紙の帳面を把りあげて、意味もなくあちこち頁を繙しながら、この小さな、けれども、昌造だけの氣持にすれば、決して輕くは看過せない一つの申出を、どう處理したものかと、私に思ひ迷つてゐた。思ひ迷ふ、とは云ふじよう、それはたゞ自警團的人物の扱ひに止まつた話で、大杉榮謀殺の、事件そのものに關しては、そのことあつて間もなく、――無論まだ、、、、、、、、、、、ゐたうちに、原稿の用で尋ねて來た或る雜誌社の人から、詳しい話を聞かされた當時の感情が、そのまゝ深く心に殘つてゐるだけのことだつた。それをひと口に云ふなら、大杉榮を氣の毒に思ひ、從つてまた甘粕大尉をひどいやつだと、さうはつきり考へ別けてゐたのだ。

もと〳〵、經濟學的考案を基とした近代の社會科學に對しては、甚だ興味の薄い昌造として、無政府主義の純理論や、大杉のそれに對する理解、また實際運動などについても、なんら知るところないと云つてよかつた。金の置き場所一つで、人の世が、よくもなり、また惡くもなるものと信じ切つてゐるらしい、その根本の考へ方からして、昌造にしては笑ふべきだつた。その可笑しさは、けれども、一生望遠鏡を覗いて、天體と睨めつこをし通して、了ふやうな、あの質の人にも感じられる可笑しさで、決して、アッハヽヽといふやつではない。えらいと云へば、少しもそれを否む氣はないし、また馬鹿々々しいと云つて了へば、それでもすむ、といつた具合で、要するに昌造とは、拘り合の薄い存在なのだ。そのくせ、彼等も昌造も、人間最上の可能性や、幸福といふことから、一時も心を放たないでゐる點では、同道の士に違ひないのだけれど、丁度それは、羅紗屋と呉服屋とが、ともに人の着るものについて、始終あたまを惱してゐながら、仕事の上では、お互に風馬牛であるのにも譬へられようか。羅紗商組合、呉服商組合が、聯合の大會を開いてみたところで、大した利益もなからうけれど、然し、衣服についてなんの苦勞もしたことのない人たちに比べたならば、呉服ものに對する羅紗屋の品評、羅紗に對する呉服屋の鑑識は、必ずいくらかなりと正確でなければならない筈だ。それと同じ理合で、昌造も、社會問題に對して、たんの知るところはないながらも、――それゆゑにまた濫に口外はしなかつたけれども、私に一家の見はもつてゐた。――要するに、昌造と大杉榮とは、緣は繋つてゐるが、互に相關與するところのない、商賣違ひの人間で、敵でもなく、身方でもなかつた。

一方、甘粕大尉はといふに、これも勿論商賣違ひで、更に緣の遠い存在だつた。今度は、衣服について考へてゐる呉服屋と、刃物の斬れ味について工夫を凝す鍛冶屋との緣遠さにも譬へられようか。呉服を裁つのに鋏が要る、くらゐの緣はあつても、相關するところ更に薄

く、從つてまた怨恨ともにないのだ。
　更にまた個人的の關係を云ふなら、甘粕とは、全くあかの他人だつたけれども、大杉とは、同じ逗子に、而もすぐ近くに住んでゐたところから、友達、といふほどの交際もなかつたけれど、兎も角知合の仲だつた。一體、子供を可愛いがる人なら、殆ど例外なしに好きになれる昌造だつたが、大杉も、娘の魔子にあつては、まるで手も足も出ない親馬鹿になりきつてゐる具合など、多く話してみるまでもなくいゝ人だつた。世の中に、どうしても生かしては置けないといふ人間があるかどうかは、姑く別問題として、少くも大杉がそんな男でないことだけは慥だつた。僅か十度ほどの面談に、昌造のうけてゐた印象は、過ぎては阿ると云ひたいほどに相手の氣をかねる、てれ性の、どんなことをしても憎みやうのない好人物、といつた感じが第一で、鋭い、とか、恐しい、とかいふ壓迫感は少しも殘つてゐなかつた。尤も昌造との關係が、ほんの近所交際といふに止つて、お互に何もさう深いところへ突ッ込んで行つてみやうといふ氣もなかつたからだらうが、兎も角、なんの奇もない一人の隣人としての彼は、謂ふところの、味噌の味噌くさからざるもので、却つて奥床しい氣がするくらゐだつた。――かういふ好印象を基調として、昌造は、大杉の出て來る小品を二つも發表したことがあり、彼からはまた、それの讀後感を書いてよこしたりしてゐた。
　あかの他人とは云ふじやう、昌造の想像によれば、甘粕とても、無論さう惡いやつとは思はれなかつたが、假令、、、、、にもせよ、もの解りのいゝ、少ししつかりした人間なら、あんな、、、たまねの出來やう筈はない、と思はれた。尤も、その場へ臨んだら、大概の者までは、あゝするよりほかないやうな氣持になるかも知れないが、然し結果から云へば、慥に、、、は、、、だつた。――これだけの裏附があつて、嘘も伴もない昌造の感情は、大杉を氣の毒と思ひ、甘粕を、、、、、、、、、、。
　酔つて、狹い中の口の三和土に押し並んで立つてゐる二人の自警團的人物はと云ふに、これはまた、大杉についても、甘粕についても、二人の間に起つた事件についても、自分自身のあたまで、時間で云へば一分と續けて、とつくり考へてみたことなどないにきまつてゐる人間だつた。何もこれは、この場合に限つたことではなく、自體民衆といふものが、群り動く性質をもつてゐて、ものゝ感じ方が、凡庸な常識一點張りに陷り、忽ち「輿論」といふものを生みだすのだ。それを思ふと、雨に濡れ、護謨底足袋を泥だらけにして、目の前に突ッ立つてゐる、この「輿論」の手先どもも、馬鹿げて見えこそすれ、憎むまでの氣にはなれなかつた。

たゞなんでもない署名帳を膝の上に載せて、はたからは全く想像もつかない困惑の極に、暫く昌造は默りこんで了つた。——たゞ可厭だ、でも子供の駄々のやうだし、さうかと云つて、自分の氣持を細く云ひ說くまでの熱もなく、そんな相手でもなかつた。ちよつとひと筆、名を書け、といふだけのことに、いづれ熟考の上で……、もへんだつた。夫婦差向ひでものを食つてゐた最中だけに、唯今主人が留守で……、の智慧も出て來なかつた。

どうせこんなもの、紙屑同然だ、と思ひ、心の眼をつぶつて、ちよつと萬年筆を把りあげさへすれば、何より彼より一番世話はないのだが、さてその心の眼といふやつが、わけないやうで、ちよつとつぶりにくかつた……。

まだなんとも思案はつかなかつたけれど、兎も角も帳面をもつて、餉臺の前へ戻つて來た。

「なんです？」

冷淡な顏つきながら、それでもおしげが訊いてくれたおかげで、ふと昌造は一方の活路を見出した思ひに、忽ちもの云ひもはつきりして、

「おい、お前の名、書いとくよ」

「なに？　なんか寄附ですか？」

寄附だとすると、こいつうかつに返事は出來ないぞ、といつた風な調子の可笑しさに、一層氣分が引きたてられた。

「いや、そんなもんぢアない。たゞ名前さい書いてやりやアいゝんだ。……ちよつと、萬年筆でもなんでもかしてくれないか」

なんのためとも聞かせずに、勝手に女房の名を書いて渡してやると、二人はすぐ歸り、入れ違ひに來た客で、次から次への雜用が、それきりおしげと二人だけで話す折を奪つて了つた。晩になつてから、けれども、ふと昌造は、署名の一件を思ひだした。先刻は、まづこれで虎口を遁れた、——も大袈裟だが、ちよつとそんな氣持でおしげの身になつてまで、深く考へてやる遑もなかつたのが、少し落ちついてみれば、女房だつて、そんな不愉快な役廻りに、無斷で使はれたのでは、全くうまらない話と氣がついた。——と云ふより、自分自身の[illegible]己主義に氣がつき、恥ぢらはれた。

おしげも、大杉に逢へば挨拶し、口も利き合つてゐた間柄だし、[illegible]子とはなほさら、子供同士の遊びに混つて、なんのかのと世話をやいたりしてゐたのだ。たゞ、そこは女で、民衆的な一般感情に支配されて、良人が大杉と親しくすることには、一二度不贊成を稱えたこともあるくらゐだけれど、殺されたと聞いて、いゝ氣味だなどゝは、決して思つてゐなかつた。現に、昌造が、雜誌記者から聞いたあとで、[illegible]

單にそのことを傳へてやると、目を圓くして、
「まア！　さう！　それア氣の毒だつたわねえ。へーえ、さうですか！」
などと、意外のほかに、併せて哀悼の心をも洩してゐたくらゐだつた……。
考へてゐるうちに、女房に對してすまないことをして了つた、といふ氣が、だん〳〵强くなつて來た。先刻の署名帳の出來を話して、もし可厭がるやうだつたら、自警團だかどこだか、兎も角あの仕事を扱つてゐるところまで尋ねて行つて、取消して貰ふやう計らつてやらう、とさへ思つた。
「おい、さつき俺ア、ついお前にすまないことをしちまつたんだがね……」
と、前置きして、一伍一什を話して聞かせてから、「可厭かい？　可厭だらうね？」
「でも……」
「もし、よんど可厭なら、取消して來てやつてもいゝがね……」
「別に、そんなに可厭つてほどのこともないわ」
おしげには、昌造の氣持の隅々までは映つて行かなかつた。どつちにしろ大したことぢやアない、くらゐの氣輕さだつた。それだけに、もう一段念を入れて、
「だつて、兎に角お前は大杉を知つてるんだから、その知つてる人が、、、にも、、にあつて、いゝ氣持のする筈はないんだ。それをだね、その、、の、、に、……、、でもないが、少しでも刑が輕くなるやうにつていふ連判狀みたいなもんに、お前の名前を書かれたんだから……。ほんとに、氣持がわるかつたら、遠慮なくさう云へよ」
「いゝわ」
「ほんとにいゝかい？　……いゝえさ、よく考へてみてから返事をしろよ」
「だつてそのくらゐのこと……」
「構はないかい？」
「構はないわ」
「そいならいゝけど……。然し、どつちみち、俺ア少し卑怯だつたよ」
わざ〳〵取消しに出かけるのも億劫だつたので、女房のづぼらをいいことに、たうとうそのまゝにして了つたが、これもその當座は、ちよつと氣にかゝる出來事だつた。

五の二

たゞふら〳〵ッと氣が變る、といふやうな質ではない、何かある、これにはきつと何かわけがある、この考へ方は間違つてはゐなかつた。――厚ぼつたい瑛龍からの手紙で、たうとうそのわけが明されて來た……。

意外なことには、それが、二日の朝、昌造の洩した、ほんのひと言の述懷に端を發してゐたのだ。

「……もし、萬が一の場合には、俺はどつかへ飛んでつちまふ。……比叡山にでもはいつちやつて、一生だアれにも逢はない。それくらゐの覺悟はしてゐるよ」

これだつた。逗子の家族が、一人のこらずやられてゐる、といふ萬が一の場合を想像しながら、あの日の昌造として、全くこれは、洒落や嘘で云へることではなかつた。ほかにどうしようもない、たつた一つの逃げ込み場所として、目の前に、まざ〳〵とそこの景色が浮びあがつて來たればこそ、たゞありのまゝに口からそとへ出したまでゝ、その言葉が、瑛龍にどう響くか、もとよりそこまで考へてみるほどの餘裕はなかつた。おまけに、その後ひと月からになる間、たゞの一度思ひ出したこともないくらゐ、實状はがらりと變つて來てゐた。咽もとすぎた熱さで、千葉が彼方の様子を見て歸つた三日の夕方、一同無事と聞くと同時に、どこへいけし飛んで了つたか、比叡山のヒの字も殘さず、綺麗に忘れ果てゝ了つたけれど、さうかと云つて、二日から三日へかけてのあの覺悟に、毛ほどの緩みがあつたとは思はれない。寸分の過不及なく、實感のまゝを云ひ現はした言葉ならば、よしんばそのために、どれほど瑛龍を寂しがらせ、悲しませやうと、これはなんとも仕様のないことだつた。口からそとへ出したが最期、あとから取消すわけにもいかず、或は慰めたところで、あやまつたところで、それが何の役に立たう。もしそんなことですむと云ふなら、今度はまた、二日に洩した述懷が可哀さうだ。あの場合、あとで取消しが利くやうな、そんなうはついた言葉を口にするやうな男なら、瑛龍に嫌はれるより先に、自分で自分の顔へ、啖でも吐きかけて了ふだらう……。

この強味から、瑛龍の、ひと月も秘めて來た寂しさ、たよりなさに對しても、存外昌造の心は動じなかつた。先達來、氣にかゝつてならなかつた原因がはつきりした、といふ意味では、却つて、鬱陶しく鎖されてゐた雲が切れて、久し振りに天日を仰いだやうに、晴々と氣色がいゝくらゐのものだつた。

けれども、一旦立場を變へて、瑛龍の身になつて考へてみれば、それでは、今日までの二人の關係といふものが、全く空に等しく見られたことになるわけで、さうと知つた苦しみは、確に堪へ難いものだつたに違ひない。それを、氣振にも見せず、逢ひもし、手紙のやりとり

もして來た、その自制力の强さは、昌造などの、さッかちよこ立ちをしても及ばないところだつた。尤も、手紙にも、
萬一の場合、あなた樣のお艶姿は、重々お察し出來ますし、一生誰にも逢はないやうな山のなかへはいつておしまひなさるといふお氣持も、あたしにはよくわかりますから、少しも御無理とは思ひませんでしたが……。
とも云つてあつたし、また別のところでは、
あなた樣が、山へはいつておしまひなさるやうなことがあれば、あたしはまたあたしで、ちやんと心にきめてゐたこともあります。それが、幸に、逗子の皆樣が御無事だつたこと、知らせて頂いた時は、ほツと安心いたしましたけれど、この頃になつて、だん〲考へてみますと、あなた樣は山へおはいりになり、あたしはあたしで、考へてゐたとほりになつて了つたら、と却つてその方が仕合だつたやうな氣がするくらゐで、あの時のあなた樣のお言葉、何かにつけて思ひだし、御尤もだと思へば思ふほど、誠に心寂しく……。
といふ風に、瑛龍も、あの時の昌造の述懐に、嘘も洒落ツ氣もなかつたことだけは、十分認めてゐたわけだから、自制力も自制力だけれど、一つには、なんとも言葉の返しやうがなかつたのだ。それだけに

なほ、一時は、ずゐぶん腹もたつたに違ひない。午後になつて、丸二の兄といふのが遊びに來た時、なんの未練氣もなく、――たゞの一度ふり向いても見ずに、さつさ〲行つて了つた、あのすげない樣子も、今となつて、やつと昌造の腑におちて來た。
で、結局のところ、どうしようといふのか、と云ふに、
こんなこと、（瑛龍が、時には腹だゝしく、時には寂しく、たりなく思つた、その今日までの煩悶を指す。）あたしから云ひだしさへしなければ、今までどほり、貴方樣と一生お目にかゝつて行けれるでせう。でも、かうして手紙に書いてしまへば、もうとても今までのやうな氣持ではお目にかゝれません。さうかと云つて、そのほかの氣持といふことになれば、いゝきようだいみたいな關係でせうけれど、それも、こないだの晩、貴方樣から、不自然だと云はれ、あたしもほんとにさうだと氣がつきましたから、結局お目にかゝらないのが一番いゝと思ひます。
この手紙、ずゐぶんよく考へて書いたのですから、御返事を頂いても仕様がないことだと思ひます。
どうぞおからだ御大切に、お酒もいゝ加減にめしあがるやう、これだけは、くれ〲もお願ひ申しあげて置きます。
二度も繰り返して讀んでみたけれど、不思議に昌造の氣持は、この

申出によつて、打拉がれはしなかつた。ひと月以上も、ためにためて來、考へに考へぬいた、揚句の、堅い決心とは云ふじよう、いよく\この手紙を書くに至つた直接の動機は、どうも矢つ張り一時的の感情らしかつた。この祕な決心を、お民のもとまで洩してやつた手紙、——もしもあれを、昌造が見せられてゐなかつたとすれば、恐らくまだなかく\こんな思ひ切つたことを云つてよこしはしなかつたらう。祕密を守らなかつたお民に對する腹だち、計畫の裏をかいたやうな態になつてゐる昌造に對しての反感、さういふものによつて、少くとも、時期を早められた、今度の申出に違ひない、——昌造の、この觀察によれば、そこに、ものゝ未だ熟しきらないやうな無理が感じられた。

翻つてまた、根本の、比叡山云々の言葉から、瑛龍がうけ取つてゐる感じも、多少遺憾の意を表したいものがあつた。無論それは、男を獨占してゐない場合の女として、重々尤な考へ方で、簡單にそれを、とるにも足らない嫉妬だ、とは考へなかつたけれど、昌造に對する愛が、もう一段つきぬけてゐたなら、寂しさのなかにも、深く湛い悦びが湧いて來なければならない筈と思はれた。——これほどの間柄でも、いざといふ一大事の場合になれば、矢つ張り奥さんが、心の最高位を占め、そのほかの者は、どうならうと、一向に顧られないのだ。なんと云つても、結局は、矢つ張り奥さん一人だ。女としては、奥さんにならない限り、假令どれほどの間柄だらうと、結局安心はしきれない。いつ何時どういふことになるか、決して油斷はしてゐられない。——云へば、大體まづさういつた風なものゝ感じ方に、重々尤ではあるけれど、どうもまだ、「奥さん」といふものを彼方に廻しての、競爭的な意識に低迷してゐる、いかにも女らしい、——惡い意味での女らしい不聰明さが感じられて、身勝手なやうだが、昌造にはもの足りなかつた。その、女らしい一線を突き破つて、もう一段上へ出てゐてくれたなら、當行の可能不可能は別問題として、比叡山云々の言葉でも、しみぐ\とした同感をもつて聞いて貰へたらうに、——ここに昌造の遺憾があつた……。

階下に千葉の聲がしてゐたので、丁度いゝから使を賴まふと思ひ、今夕六時に、萬障繰り合せて、是非とも四谷の停車場まで出て來てくれ、と簡單な手紙を書き、それを懷中にしておりて行つた。先達てから運んで來た荷のうちにあつたのだらう、見覺の瀬戸火鉢を間にして、おしげや子供たちと、何か頻りと笑ひ聲をたてゝゐた千葉が、振り向いて、

「こんちは」

と、胡坐から横坐りに、ニツカー・ボツカーの膝を折り改めながら、輕く頭をさげて、「めつきりどうも、お寒くなりましたね」

「いくら寒くつたつて、今から火鉢は呆れたな」

さう云ひながらも、昌造もそばへよつて、久振りに、ほどよい瀬戸の温みを撫で廻してみながら、「番町のうち、まだあかないかね？」

小野田からの手紙に、大阪の方で新しく出る雑誌を手傳ふ約束が出來て、半永久的にこつちに移住することになつたから、近日上京して、家財道具を送り出さうと思ふ。就いては、あなたが、そのまゝあとを借り續ける氣なら、自分から家主へ掛合ひ、多少の便宜は圖れると思ふ、といふ意味があつたし、さうでなくても、最初からあまり氣に入つてゐないこの家に、永く住むのは可厭だつたので、小野田の引越を期として、同時にこつちも、どこかほかへ移りたいと思つてゐた。それには丁度、番町の本邸の構内に、二三軒小さな貸家があつのて、その一軒が、夙にあくといふ話になつてゐながら、またしてもまたしても延びるのを、千葉に頼んで、時々催促に行つて貰つてゐた、――それを、顏を見るなり、まづ第一番に尋ねたのだ。

「いゝえね、行けば、いつだつて、つい二三日うち越すやうなことばかり云つてるんですけどね……。困つたやつですよ」

番町の本邸でかゝりつけの醫者で、二日の晩の火に燒け出され、急場の間に合せにはいつたので、家族の頭數から云つても、舊態から云つても、どうせ永くは住めないのだが、なか／＼思ふやうなうちが見つからないで、事實先方も困つてゐるらしかつた。

「小野田さんの方も、この二十日からみには、何を纏めに出て來るやうな話になつてるんだから、どうしても十八九日頃までにはあけて貰ふやうに、一つ、やかましくさう云つといてくれたまいな」

「いゝえ、あの具合ぢアとてもあてになりませんからね、きつちり十五日までつてことに云ひ渡してあるんですよ。それだつて、きつと一日や二日は延びるでせうし、何しろあんな狹いところへ、慾ばつて病人まで預つてゐるんですからね、出て行つたあとは、一遍大々的に消毒でもしなくつちア氣持がわるござんすよ。殊にお宅なんぞ、大勢お小い方たちがおあんなさるんだから」

「あら、さう！」

と、おしげが、近頃になく活々した調子で、「あんなとこで病院をやつてるの？」

「いゝえ、病院つてほどのこともありませんけど、二階二間とも、患者がねかしてあるさうです」

「二階あれで、幾間あるの？」

「二階が、八疊、六疊の二間でせう。階下が、玄關が三疊の、その次にまた三疊があつて、奥が八疊と四疊半。それに湯殿、臺所ですね」

「それで、一體、どこで診察なんぞしてるの？」

「階下の八疊が、晝間は診察室で、夜になると寢部屋に早變りをするんでせう。三疊が藥局で、四疊半を茶の間にしてゐるんですよ。そんなかに、代診もゐりやア、看護婦もゐる。家族だつて、夫婦に子供が二人の、それにまだ祖母さんだの、女中だの、——患者まですつかりよせると、かれこれ十四五人にもなるかも知れませんね。だから、それア、とても、お話のほかですよ」

「そんなら、いつそ、入り變りにここの家を貸りればいゝんだ。こゝなら、そのくらゐの人數は平氣なもんだから」

「それがね、嘘だかほんとだか知りませんけど、醫者には、誰でもみんな醫籍つてものがあるんですとさ。つまり、醫者としての籍ですね。それが、なか〱やかましいんで、ちよッくらちよつとよその區へ引越して行くなんてわけにいかないんですつて。醫者はそれで、家を探すのにも、なか〱事が面倒なんだ、なんて云つてましたがね……」

「さうかね、それアそんなこともあるかも知れない」

「だから、さう、やい〱イセキても駄目だつて……」

「アッハッハッハ、アッハッハッハッハ」

面白くもない洒落を、おしげが、男のやうに大口あけて笑ひ崩れると、子供たちまで、わかりもしないくせに、誘ひ込まれて可笑しがつた。

「駄洒落つてものは、デメンチヤの、一種病的の作用だつていふ說があるとさ」

「なんです、デメンチヤつて？」

「痴呆症だね」

昌造は、いつもに似合はず、づけりと云つて退けた。

「はゝア」

と、一向平氣のしやアで、「その病氣は、なましツかお醫者樣なんかにかゝるより、櫻田門そとのお役所ね、あすこへ行くに限るんですとさ。知つてますか」

眞顏で訊かれたおしげが、うつかり乘つて、

「櫻田門の御役所つて、どこ？」

「チホウショウに司法省、つてね」

「いやだわ！」

また賑な笑ひ聲だつた。陰氣くさくめいり込んでゐるこの頃のうちのなかには、こんな男も、結句いゝ氣晴しかも知れない、——昌造もさう思つて、別に苦い顏は見せなかつた。

何かの用で、おしげが臺所の方へ立つて行つたあとで、昌造は、懷中の手紙を出して渡し、場所を敎へて返事を貰つて來るやうに賴んだ。

「へえ、承知しました。

存外にいゝやりともしずに、上着の内衣嚢に納めながら、千葉は、すぐ腰を擡けた。辭退するのを、玄關まで送つて出てみると、泥だらけになつた自轉車が、板塀に凭せかけてあつた。氣がつくと、震災後間もなく昌造が買つたやつで、初めは一々斷つて借りて行つたが、この頃では、まるで千葉の所有品のやうに、めつたにうちで見かけるやうなことはなかつた。

「ひどくなつたなア」

「なんです？」

靴の紐を結びかけてゐた千葉が、眼をあげて昌造の視線をたどり、それと覺ると、「えゝ、何しろ、この頃のじとじと降りで、とてもえらい道ですからねえ。なんのこたアない、田圃ン中をこいでくやうなもんでさア」

すましたもので、輕く挨拶し、サドルを押して、門の外へ出て行つた。

五の三

いつまでもゆつくり腰を据ゑて、話し込んでゐられる場所と云へば、さしづめ沖津の探家だつたけれど、お民に對して體を立ててゐるらしい瑛龍を、わざわざそこへ誘つて行くこともなかつた。四谷あたりの、へんな料理屋や待合などより、いつそ往來を歩きながらの方が、沈靜な氣がしてよかつた。震災後のことで、めつきり足は途だえになつてゐたから、三四時間くらゐ歩きづめに歩いたとて、さしてへこたれる氣遣もなかつた。また、四谷見附をはいり、土手に添つて、右へ食ひ違ひ見附から清水谷の方でも、左へ新見附、招魂社の裏手へかけてでも話しながら歩くにいゝ、靜な道を撰ぶに事は缺かなかつた。

で、二人は、雨の霽れ間を、傘を提げて、下駄でてくてくと歩いた。昌造は、およそもう云ふだけのことを云つて了ひ、それに對する返事の具合で、瑛龍の氣持も、想像した通り、ほんの一時的なもので、たゞ惰勢的に、申出の撤回を澁つてゐるだけだ、といふ風に見てゐた。

「なんのかんの云ふより、ごく簡單にだね……」

昌造は、なかなかだれる質ではなかつたが、いくぶん焦じて來て、

「一體あなたの、一番の肚の底はどういふんだい。別れたいのか、別れたくないのか。かうかういふ理由で、どうしても別れなくつちやならない、とか、これこれだから、いつそ今のうちに別れて置いた方がいゝと思ふ、とか、そんな風な思案は一切拔きにして、思ひきつて、ぽかつと肚の底を割つてみせるとなつたら、一體どうなんだい。云ひ換えれば、あたしが嫌ひになつたのか、そんなことはないのか、――そこさ、ね。そこを、すなほな氣持で云つてみたまへな」

すぐには返事をしなかつた。
「考へちやア駄目だよ。考へてるうちにやア、どうしたつて餘計な思案がはいつて來るから、欲はずぼかッと云つてみたまへなね」
今度は、その言葉尻を掠めて、
「嫌ひになんぞなりやアしないわ」
「そいぢア、別れたくもないわけだね？」
「それアさうよ。だけど……」
「だけど、は要らないんだよ。だけどから先は、手紙でもよくわかつてたし、さつきッからの、あんたの話で、なほ一層よくわかつたんだから……」
「ぢア、自分が離れたくないと思つてる限りは、どんなことがあつても、がんばつてゝいゝの？」
「いゝどころぢアないさ。それでなくちアいけないと思ふね」
「ぢア、お君さんの場合はどうなの？　あなたの奥さんから手紙が行つて、どうしても別れてください、つて云はれて、それでも……」
「それア、あの人の性分ぢア、可厭です、御免かふむります、つて返事は書けないよ。然しさうかつて、實際は別れられなかつたんだから……。別れたのは、それとは全く別の理由からだつたんだから……」
「それアさうね」

「だけど、今あたしが訊いたのは、あんたの純粋な感情で、人によつちアまた、感情なんてちつともあてにならない、それよりやア、理性にたよつた方が、萬事間違がない、つていふ風な考から、……考へつて云ふより、性分で、自然とさうなるんだらうけれど、何ひとつするにも、よウくあとさきを考へて……」
「どつちかつて云へば、あたしなんぞその方かも知れないわね」
「さう。丁度、今あなたの云つた『その方かも知れない』くらゐのとこで、はつきり『さうだ』といふほどでもあるまいと思ふね。……理性につくか、感情につくか、――これは、考へと云ふより、むしろもつて生れた性分でね、そこへ行くと、あたしなんぞ、だらしがないくらゐの感情派だけれど、そのわりにこれで、大きな間違も仕出かさないもんだよ」
「さう云ふけどもね、感情だけでなんか出來る人は仕合よ。事と場合によつちア、なかなかさういくもんぢアないわ。感情と理性とが、ごッちやくちやにこんがらかつちまつて、……そいだから迷ふのよ」
「うん」
昌造は、深く頷いた。「つまらない氣迷ひから、とんでもないことを云ひだしちまつて、ほんとにすみません」さう云つてあやまられたよりも、數十倍こたえて、忽ち目頭がうるみかけてゐた。

「こんな氣しない？――感情ばかりでなんかするの、我儘みたいで、……なんだか自分がいけない人になつたやうで、あたしは心配なのよ。だから、そうッと、知らん顔をしてでもなんでも、一遍は理性の門口を通つてみるのよ。そいで捉まつちまへば、自分はいくら都合がわるくつてもなんでも、それでひと安心なのよ。それを、うまアく、見つからずに通りすぎちまつて、なんかしてからあとで、引きずつて行かれて、なんのかんの愚圖々々云はれると、今度はまたすつかり感情の方の身方についちまつて、めちやくちやに強情を張つて、誰がなんと云つたつて聽きやアしないわ。さういふ時の強情と來たら、生意氣さ加減と來たら、自分でもいやンなつちまうんだけれど、どうしたつてもうあとには引けないのよ。だから、――自分でもよくそれと知つてるから、うつかり素通りさせられても、ほんとはあとで困るのよ。わかる？」

「わかる、わかる。よウくわかるよ」

亢奮から、思はず、ピュウ〳〵風を切つて傘を振り廻しながら、「そいでだね、……そいでもう、なんにも云ふことないだらう？」

「ないわ」

「ぢア、あの手紙は、受取らなかつたことにするよ」

「いゝわ」

昌造は、ぎゆうッと抱きよせて、顔ぢうに唇の雨を降らせたい衝動を、深く息を嚥み込んだまゝ放たないことによつて、やつと抑へ、がり〳〵と、砂利の上に、足駄の歯を鳴らした。

半町ばかりは、二人とも口を利かなかつた。丁度、松の覆ひかぶさつた土手下の道を歩いてゐたが、時々ばら〳〵ッぱら〳〵ッと、樹の滴が降りかゝつて來た。

「風が出たね。これで天氣ンなるかも知れない」

仰ぐと、月の夜とみえて、どことなく底明い空に、ぐん〳〵雲が動いてゐた。

「お腹すかない？」

「すいたね。なんか食はふか」

「だけど、へんな、カフエみたいなうちいやよ」

「蕎麥屋ならいゝだらう。蕎麥屋イはいつたことない？」

「永坂の更科ッきり知らないわ」

「四谷見附まで行けば、ちよつとうまいうちがあるんだけどな」

「それより、お愛さんのとこイ行つてみない？」

「行つてもいゝけど……」

「お愛さんとこで、なんかさう云つて買つて食べませうよ」

「久振りで、愛香さんにも逢ひたいけれど、そんなことしてると、お

そくなりやアしないかな？」
「だいじやうぶよ」
「それア、あたしは、いくらおそくなつたつて平氣だけれど、あんたは、今日引越をしたばかりの人なんだから……。それにしても、ずゐぶんだしぬけだつたんだね。昨日あの手紙を書いてる時分にやア、まだなんにもきまつてなかつたのかい？」
「えゝ。あれを出しちやつたあと、晩御飯を食べてるところに、妹の夫婦が出かけて來たのよ。そいで、かう〳〵いふ家が見つかつたつて云ふから、そいぢア、すぐ明日越さうつてことになつちやつたの。引越ッたつて、なんにも荷物らしい荷物なんぞないんですものね」
「然し、さつき千葉君が歸つて來て、もうあすこにやアいらつしやいません、つて云つた時にやア、ちよつと吃驚したよ。何しろ、あゝいふ手紙のあとだつたからね……」
いくぶんひやかすやうに云ふと、
「もうあの手紙のこと、一切云ひッこなしにしませうよ。その代りあたしも、一生、比叡山のこと云はないわ」
「よし。さうしよう。……千葉君に聞いたんだけれど、なんだか大勢ゐたつて、……誰か手傳にでも來てたのかい？」
「妹の夫婦が、當分一緒にゐることになつたのよ。それに叔母さんでせう。表町からも一人女中が來てくれたし、妹ンとこの小僧さんはゐるし、今度もなか〳〵賑かさうよ」
「あゝ、さう。妹さんとこもみんな一緒になつたのかい。それアいいや。……どうれで千葉君がさう云つたよ、――女中の一人や二人位いたんぢア、とても寂しくつてゐられないくらゐ廣いつて」
「嘘よ。そんなに廣かアないのよ。上下で六間か七間でせう」
「そいぢア、妹さんたちが別になると、少し廣すぎるかも知れないね」
「だから、さうなつてもいゝやうに、女中を二人くらゐ置くつもりで、早速今日桂庵に賴みにやつたわ」
「表町から來たつては、いくぶんお目附役の氣味もあるんぢアないのかな？」
「さうかも知れないわ」
と、投げた調子で、「でも、いくら何をつけやうと、こつちはこつちですからね」
「そんな人がゐるんだとすると、なほさら今夜は早く歸つた方がよかアないかい。……第一、手紙なんぞ持たしてやつたのからして、いけなかつたかな？」
「そんなこと、ちつとも構やアしないわ」

ちよつと間をおいてから、「それ、あの、千葉つて人、あたし嫌ひよ。今度ッから、矢つ張りナカヤに頼むか、それでなきア、いつそ俥夫かなんかの方がいゝわ」

「へんだね、千葉つて男は、どうしてさう評判が悪いんだらうな。こないだも、満津島の夫婦が、さんざッぱら悪口を云つてたけれど……」

「なんとなくいけすかない人よ。あたし、地震の晩、逗子に行くことにきまつて、支度をしてた時からさう思つてたわ。面白半分、まるで見物にでも出かけるやうな風なんですもの」

「さうかね。……無論あたしだつて、別にさう好きつてわけぢアないけど……」

「少し落ちついたら、きちんとお禮でもしちやつて、今後、あんまりお宅に出這入させないやうにした方がよかアない？」

「さうもいかないよ。兎に角あれで、あたしにとつちア恩人だからね。それア當人は、火事場の彌次馬みたいな氣持で出かけたかも知れないけど、結果としては、ずゐぶんこつちは助かつてるんですからね」

「それだつて何も、逗子の皆さんの御様子を見て來たつてだけのことで、その場に居合せて、奥さんを助け出したのなんのつてわけぢアなし……」

「然し、どうしてさうみんなに嫌はれるんだらうた。……こなひだの躍り、満津島の夫婦、またなんか云つてたかい？」

「何を？」

「いゝえ、あの二人の悪口をさ。うちぢア、おかみさんに制められて、まだ洗ひ浚ひ云ひ切れなかつたやうな顔をしてたからさ」

「どうだつたでせう。忘れちやつたわ」

行くにきまつたともなく、いつか二人の足は、愛香が當分の住居にしてゐるといふ、紀尾井町の宿屋の方へ向いてゐた。宿屋そのものが、下街の焼けだされで、普通の住宅を借りて、取敢ず假の營業をしてゐるといふ話だつた。瑛龍も、番地を知つてゐるだけで、まだ尋ねたことはなかつたので、あちこちまごついた擧句、やがて厳しい屋敷門の前に立つた。土手に近い、ひッそりとした横町で、門前には、灯を消した自働車が、二臺も停つてゐた。一時に待合といふものを失くした紳士、紳商が、人目にはたゝず、また普段とは趣を異にした座敷で、しみ〴〵とした逢瀬を樂める、――そこが、營業者の側から[illegible]ても、狙ひどころらしく思へた。何一つ目標を掲げてゐない宿屋の門、灯を消した自動車、普通の人にはめつたに用のない横町、何も彼も、この想像を裏書して餘りがあつた。わるくすると愛香の部屋にも……、さう思つて、

「どうだらう、いま時分訪ねてつて、迷惑ぢアないかしら」

「誰が？」
「お愛さんさ」
「そんなことないわ。どんなに喜ぶか知れやアしないわ」
「さう簡單にやア云へないよ。もしかして、旦那でも來てゐるとわるいからね」
「そんなら、留守だつて云はせるでせう。簡單よ」
「あゝ、成程ね。そんなら簡單だ」
耳門を押すと、ガリ〳〵ガリッと、吃驚するやうな、けたゝましい音をたてゝ、重い分銅をさげた鎖が軋り鳴つた。おまけに、門内の砂利場に、砂利を蹴散して、大きな犬が吠えかゝつて來た。なかば身を入れかけてゐた瑛龍は、慌てゝ跳んで出ると、
「よしませう！　歸りませうよ！」
と、昌造の袂の先を引ッ張つた。
「だいじよぶだよ」
「いゝえ、よしませうよ！」
口笛を吹いて、犬をなだめにかゝつた昌造の袂の先を、なほもぐいぐい引つ張つて、「ねえ、よしませうつたら！　嚙まれでもしたら大變だわ」
「だいじよぶ、だいじよぶ」
さう云つてゐるところへ、下男らしいのが、裏手の方から廻つて出て來た。
「どなたです？」
「いゝえね、瀬川さんを尋ねて來たんですけど、ゐますかしら」
「瀬川さん……と、ちよつとお待ちください」
それから、犬の名を呼んで叱りつけ、なほも吠えたてゝるのを、首輪に手をかけて、無理やり引ッ張つて行つた。
砂利場を、玄關の方へと歩きながら、
「どうだい、要害堅固を極めたもんだね。これなら、何をしてやうと、だいじよぶあげられッこないよ。金持なんて、どこまで狡く立廻るもんか、底が知れないね」
「さうねえ」
犬の可怕さから、瑛龍はまだ、ぴつたり昌造にくつゝいてゐた。
間もなく、地震後流行での愛歌が、
「あらア」
と、それでも、落ちつき拂つた笑顔で、玄關まで迎へ出た。何故か、「地獄で佛」といふ感じで、二人は、そのあとに從ひ、長い廊下を奥へ通つた。

五ノ三終り——つゞく



四十八人目

森田草平

一

毛利小平太は小商人に身を扮して、本所二つ目は相生町三丁目、恰度吉良左兵衛邸の辻番小屋筋違ひ前に當る米屋五兵衛こと、實は同志の一人前原伊助の店のために、今日しも砂村方面へ卵の買ひ出しに出掛けたが、その歸途に、龜井戸天神の境内にある掛茶屋に立ち寄つて、一寸足を休めた。葭簀の蔭からぼんやり早稻の穂の垂れた田圃づらを眺めてゐると、二十ばかりの女中が側へやつて來て、

「お茶召上りませ」と云ひながら、名物葛餅の皿と茶盆とを緣臺の端に置いて行つた。

小平太は片手に湯呑を取り上げたまゝ、どこやらその女の顔に見覺えがあるやうな氣がして、後を見送つた。女の方でもそんな氣がするかして、二人の子供を連れた先客の用を聞きながらも、時々こちらを偸み見るやうにした。小平太は「はこな?」と小首を傾げた。が、どうしても想ひ出せぬので、二度目にその女が汲子を持つて側へ來た時、

「姐さん、わしは何處かでお前さんを見たやうに思ふが――」と切り出して見た。

「はい」と、女は極りの惡さうに顔を赧らめながら、丁寧に小腰を屈めた。「わたくしも

最前からさう思ひ〳〵、あんまりお姿が變つていらつしやいますので……もしや貴方さまは元鐵砲洲のお屋敷においでになつた、千村樣では御座いませぬか。」
「して、お前さんは？」小平太はぎよつとして聞き返した。
「わたくしは同じお長屋に住んでをりました井上源兵衞の娘で御座います。」
「ほう、井上殿のお娘御！　さう云へば、先刻から見たやうに思つたのも無理はない」と、小平太は四邊を見廻しながら低聲につゞけた。
井上源兵衞と云へば、九兩三人扶持を頂いて、小身ながらも、君侯在世の砌りはお勝手元勘定方を勤めてゐた老人である。「それにしても變つた所でお目に懸りましたな。で、お父上はその後御息災でゐられるかな。」
「はい」と云つたまゝ、娘は急に下を向いて、はら〳〵と涙を溢した。
「ふうむ？」と、小平太は相手の容子を見い〳〵訊ねて見た。「では、何か變つたことでも御座りましたか。」
「は、はい」と、娘は前垂の端で眼の縁を拭つて、ちらと背後を振返りながら、これも四邊へ氣を兼ねるやうに小聲でつゞけた。「父は昨年の暮に亡くなりました。それから引續いて母が永い間の煩ひに、貯へとても御座りませねば、親子揃つて一時は路頭に迷はうとしましたたが、長屋の衆が親切に何しやつて下さいまして、この春からこゝで勤めさせて頂くやうになつたので御座います。」
「それは〳〵、飛んだ苦勞をなされましたな」と、小平太も相手を慰めるやうに云つた。「だが、これも時代時節といふもの、そのうちには又好い事も廻つて來ませう。あまりきな〳〵思つて、あなたまで煩ひやうにされるが好う御座りませうぞ。」
「有難う存じます」と、娘は優しく云はれるにつけて、又もやせぐり來る涙を前垂の端で押へ〳〵した。
「で、母御はその後ちつとはお宜しい方で御座るかな。」
「それがどうも捗々しく御座いませんので……この夏からが終夜たり起きたりしてゐましたが、秋口からはどつと床に就いた切りで御座いますの。」
「それは又御心配な」と、小平太は心から同情するやうに云つた。「まあ、せい〴〵大切にしてお上げなさるがいゝ。手前も又何かの折にお訪ねすることも御座らうが、只今のお住家はこの御近所で？」
「はい、妙見樣の裏手の七軒長屋で、こちらの茶店へ出てゐるおしはと聞いて頂けば、ぢき知れます」と云ひかけて、不圖氣が附いたやうに、「でも、大變汚い所で御座いますので、あなた方に入らして頂くやうな……」と、遠慮がちに云ひ直した。

「いやなに、今では手前も御覽の通りの身の上、その御斟酌には及びませぬわい」と、小平太は一寸袖のあたりを振返りながら、わざとらしく笑つて見せた。こんな風に身を落してこそあれ、今に見よ、同志と揃つて吉良邸に乘込みさへすれば、主君の仇を討つた忠義の士として、世に謳はれる身だといふやうな意識がちらと頭の中を掠めたのである。

「それに」と、彼は又何氣なくつゞけた。「あの邊は手前もちよく／＼參りますから、又通りがゝりに寄らせて頂くことも御座いませう。どうかお歸りになつたら、小平太が宜しく申してゐたと、母御にお傳へ下されい。」

まだ何やら訊いて見たいやうな氣もしたが、人目を惹くのがいやさに、小平太は茶代を拂つて、そこ／＼に茶店を出てしまつた。年が若いだけに、思はぬ邂逅から妙に心をそゝられた處へ、女の涙に濡れた顏を見て、大事を抱へた身とは知りながら、ついそれを忘れるやうな氣持にもなつたものらしい。夕日を仰いで、田圃の中の一筋道を辿りながらも、彼は幾度か後を振返らうとして、そのたびにやう／＼の思ひで喰ひ留めた。

二

去年三月主君淺野內匠頭、殿中に一高家の筆頭吉良上野介を刄傷に及ばれ、即日芝の田村邸に於て御切腹、同時に鐵砲洲の邸も召上げとなるまで、毛利小平太は二十石五人扶持を頂戴して、これも同志の一人大石瀬左衞門の下に大納戸係を勤めてゐた。當時年は瀬左衞門より一つ上の二十六歳であつた。その後赤穗城中に於ける評議が籠城、殉死から一轉して、異議なく開城、その實仇討ときまつた際は、彼はまだ江戸に殘つてゐたので、最初の連判狀には名を列しなかつた。が、その年の秋に大石內藏助が、かねて城明渡しの際恩顧を蒙つた幕府の目附方へ御禮旁々、お家の再興を嘆願するために、番頭奧野將監と手を携へて出府した際、小平太は何物かに後から押されるやうな氣がして、內藏助の旅館を訪れ、誓紙を入れて義徒の連盟に加はつた。何物かとは所謂時代の精神である。當時の侍は、君父の仇をその儘に差措いては、生きて人交りが出來なかつた。彼もその精神に押出されたのである。そして、內藏助の歸洛に隨行して、上方へ上つて、しばらく京阪の間に足を留めてゐた。

時代の精神と、もう一つは、世が太平になつたために、一たび主家に放れた浪人は喰ふことが出來ない、何人も抱へ手がないといふ事情に壓迫されて、小平太の外にも、誓紙を頭領にいたして、新に義盟に就くもの前後踵を接した。いかに喰へない浪人生活よりも、時代の精神

に迫はれて死に就く方が、彼等にとつて快く思はれたかは、主家の兇變の前に、既に浪人してゐた不破數右衞門、千馬三郎兵衞、間新六の徒が、同じやうに連盟に加はつて來たのでも分る。兎に角、元祿十四年の暮から明くる年の春にかけて、連判状にその名を列ねるもの實に百二十五名の多きに上つた。しかも、その中には、內匠頭の舍弟大學を守り立て、成らぬまでもお家の再興を計つた上、その成否を見定めてから事を擧げようとするものと、そんな宛にもならぬことを當にして、便々と待つてはゐられない、その間に敵と覘ふ上野介の身に異變でもあつたら何うするかと、一途に仇討の決行を主張するものとがあつて、硬軟兩派に分れてゐた。前者の首頭を取るものは、既に大石と同行した奧野將監を始めとして、小山、進藤の徒であり、後者は堀部安兵衞、奧田孫太夫などの在府の士、並びに關西では原總右衞門、大高源吾、武林唯七等の人々であつた。その爭ひが烈しくなるに伴れて、前者は後者を罵つて、彼奴等がそんなに逸るのは喰ふに困るからだと云つた。そして、それは事實でもあつた。元祿十五年の正月二十六日に、堀部安兵衞、奧田孫太夫、高田郡兵衞三人の連名で、江戶から大石に宛てた書面に、上方の連中がゆつくりしてゐられるのは、敵の樣子を目の前に見てゐないからだ、それを毎日見せつけられてゐる吾々の胸中も察して貰ひたいといふやうな意味のことを述べた末に、

「同志の中でも器用なものは、醫者の眞似をしたり鍼醫になつたりして、それ〲渡世の道を立てゝゐるが、吾々は仇討專門で、他に能がないから日々喰ひ詰める一方である。願はくば、あまり見苦しき體になり下らぬうちに、一日も早く決行したい」と云つたやうな一節がある。これは浪士の實情を有體に道破したものと云はなければならない。

處で、內藏助自身は、どちらかと云へば前者に屬してゐた。彼は仇討連盟の盟主になつた。しかも、その裏面に於ては、全然それと反向するやうな主家の再興に力を盡してゐた。或ひは主家の再興は再興、仇討は仇討で遣る氣であつたと云ふかも知れない。しかし主家を再興した後で、仇討の出來ないことは、何人よりも內藏助自身一番よく知つてゐた。仇討をしなければ、同志を欺いたことになるばかりでなく、永く世の指彈を受けるかも知れない。しかも、一國の重器に任ずる城代家老としては、主の恨みを晴らすといふことも大切であらうが、それよりも先づ主家の祭祀の絕えざることを念とするのが當然だと信じたのである。この信念の下に、彼は去年の暮に出府した際も、あらゆる手蔓を求めて目附衆へ運動もしたし、それから後も山科に閑居して、茶屋酒にうつゝを脫かしてゐると見せながら、暮夜ひそかに

大垣の城下に戸田侯（內匠頭の從弟戸田釆女正氏定）老職の門を叩いて、大學擁立のことを依賴した事實もある。尤も、さうした運動の奏效覺束ないことは、彼と雖もよく承知してゐた。が、全然徒勞に終るものとも思つてゐなかつた。再興の望みが絶對になかつたやうに思ふのは、事後に於てそれを見るからで、當時にあつては、四圍の情勢から見て、必ずしもその望みがなかつたとは云はれない。幕府が一旦取潰した家を再興した先例はいくらもある。況してや、相手の吉良家に何のお咎めがなかつた點から見ても、その渦中にあつた淺野家の浪人どもには、今にも再興の恩命が下るやうに思はれたかも知れない。

　兎に角、內藏助からしてさういふ氣持であつたために、正月の山科會議では、持重派が勝ちを制して、今年三月亡君の一周忌を待つて事を擧げようといふ豫ての誓約も當分見合せとなつた。そして、二月の初めには、一黨の軍師といはれる吉田忠左衞門が、內藏助の命を含んで、關東の急進派鎭撫のために江戸へ下ることになつた。彼が浪士どもに分配するために、軍用金の中から若干の金を携へて行つたことは云ふ迄もない。

　江戸の急進派の中でも一番あせつてゐた堀部安兵衞は、それからも絶えず書を寄せて一擧の即行を迫つてゐたが、兎角に煮え切らぬ內藏助の態度をもどかしがつて、六月の末には單身東海道を押上つて來た。そして、山科の大石の許へも立ち寄らず、大阪の原惣右衞門、京の大高源吾など上方の急進派を糾合して、大石の一派とは別に、自分達だけで大事を決行しようと計つた。こゝに赤穗義士の運動も分裂の危機に瀕したのである。が、幸か不幸か、七月の二十二日になつて、江戸の吉田忠左衞門から淺野大學が藝州廣島へ流謫を命ぜられたことを報じて來た。同じく二十五日には、奧田孫太夫からも同樣の書面がとゞいた。かうなればもう是非がない、主家再興の望みは永久に絶えたのである。で、內藏助も終に意を決して、七月二十八日、京、伏見、山科、大阪、赤穗などに散在する同志と圓山重阿彌の別墅に會合した上、いよ／＼仇討決行の旨を宣言した。そして、自分も十月の末には江戸へ下るから、面々に於てもそれ迄に、二人三人づゝ仇家へ氣附かれぬやう內々で下向せよと云ひ渡した。それを聞いて、義徒は皆踴躍した。中にも堀部安兵衞は、大石と離れてさへ決行しようとしてゐただけに、明くる朝すぐに發足して、潮田又之丞と共に江戸に志下つた。この二人は、途中濱松の驛で、藝州へ流されて行く淺野大學の一行に出逢つたが、後難の相手の身に及ばむことを恐れて、わざとお目通りを願はないで、素知らぬ顏に行き過ぎてしまつたと云はれる。

　橫川勘平は圓山會議に先立つて、七月の末には旣に江府へ下つてゐ

たつゞいて岡野金右衛門、武林唯七、それに毛利小平太の三人も八月の二十七日に江戸へ着いた。それに次いでは、吉田澤右衛門、間瀬孫九郎、不破數右衛門の三人が九月二日、矢頭右衛門七も單獨にて同じく九月二日、千馬三郎兵衛、間重次郎、中田理平次は同月七日、木村岡右衛門、大高源吾も九月中といふやうに、同志の士は續々江戸へ下つた。しかも大石自身は、後を清くして立つためには何かと用事もあつて、さう急に京師を引拂ふわけにも行かない。そこで同志の心を安んずるために、まづ件の主税に老巧間瀬久太夫を介添へとして、大石瀬左衛門、茅野和助、小野寺幸右衛門なぞと共に、自分に先立つて下向させることにした。一行は九月十七日に京都を立つて、同月二十五日には無事江府に下着した。そして、石町の旅人宿小山屋に、江州の豪家垣見左内公儀に訴訟の筋あつて出府したと稱して逗留することになつた。それと見た一黨の士氣は、かうなれば最早太夫の出府も間はあるまいといふので、いよ〳〵振ひ立つた。

三

これより先前原伊助、神崎與五郎の兩人は、内藏助の命を帶びて、既にその年の四月中江戸に下つてゐた。これは吉良、上杉兩家の近情を偵察するためで、内藏助もその頃から主家の再興を所詮覺束なしと見て、そろ〳〵それに應ずる道を講じて置いたものらしい。で、前原は米屋五兵衛と變名して、相生町三丁目に店借りをして、吉良邸の偵察に從事するし、神崎は美作屋善兵衛と名告つて、上杉家の白金の別邸に程近い麻布谷町に一戸を構へた。これは上野介が浪士の復讐を恐れて、實子上杉彈正大弼綱憲の別邸に匿まはれてゐるといふ專らな風評があつたからに外ならない。が、それは風評だけに止まつて、主として本所の邸に住んでゐることが分つたので、追ひ〳〵同士が出府して來る頃には、與五郎も谷町の店を仕舞つて、前原の米屋の店へ同居することになつた。そして、美作屋では、自分の生國から取つたものだけに、氣が指したのか、改めて小豆屋善兵衛と名告つて、扇子や雛つけの荷を背負ひながら、日々吉良邸の内外を窺つた。が、同邸でも見慣れぬ商人と見れば、一切邸内へ入れぬやうにして、用心堅固に構へてゐる。その中を潜つて這入り込まうとするのだから、こちらの苦心は一通りでなかつた。が、そんな事にあぐむやうな彼等でもなかつた。日夜その機會を覘つてゐて、それ火事だ！　とでも云へば、直ぐ先に屋根へ驅け上つて、肝心の火事は他所に、向側の吉良邸の動靜を目を皿のやうにして窺つたものだ。

圓山會議の後、眞先に江戸へ下つた堀部安兵衛は、浪人劍客長江長左衛門といふ觸れ込みで、米屋の店に程遠くない林町五丁目に借宅し

た。前哨たる米屋の店と聯絡を取つて、何かの便宜を計るためであつたことは云ふ迄もない。この借宅には、在府の士小山田庄左衛門を始めとして、七月中安兵衛よりも一足先に江戸へ下つた横川勘平、一足後れてすぐその後から下つて來た毛利小平太の三人が同居した。そして、横川は三島小一郎、小平太は水原武右衛門と變稱した。なほ前者は、身分こそ五兩三人扶持の徒士に過ぎなかつたが、主家沒落の際は、赤穂城から里餘の煙硝藏に出張してゐて、籠城殉死の列に漏れたといふので、それと聞くや、取る物も取り敢ず城下へ驅け着けて、内藏助の許へ呶鳴り込んだ程の氣鋭の士であつたから、復讐の任務についても人一倍大膽に働いた。小平太も安兵衛だの勘平だのといふ氣性の勝つた連中と一緒にゐては、一人ぐづ／＼してはゐられない。それに、同宿の士の中では比較的小身者であつただけに、横川とは殊に仲好くしてゐたので、同じやうに仲間小者に身を扮して、仇家の偵察にも從事すれば、江戸中を走り廻つて、諸所に散在してゐる同志の間に聯絡をも取つてゐた。で、誰一人小平太の心底を疑ふものもなければ、彼自身もそれを疑ふやうな心は微塵もなかつた。

處で十月の半頃までには、後れて上方を發足した原總右衛門、小野寺十内、間喜兵衛なぞの領袖株老人連も、岡島八十右衛門、貝賀彌左衛門なぞと一緒に、前後して江戸へ着いた。最も後れた中村清右衛門、鈴田重八の兩人も、十月の三十日には江戸に入つて、安兵衛の長江長左衛門の借宅に同宿することとなつた。中村は小山田庄左衛門なぞと同じく百五十石取りの上士で、鈴田は三十石の扶持米を頂いてゐたものであつた。

頭領大石内藏助もいよ／＼十月の七日には京師を發足した。それに從ふ面々は、潮田又之丞（前に安兵衛と共に下つて、再び上方へ取つて返したもの）、近松勘六、菅谷半之丞、早水藤左衛門、三村次郎左衛門、それに家來仲間をも加へて、同勢すべて十人、「日野家用人垣見五郎兵衛」と大書した繪符を両掛長持に附して、關所々々の眼を眩ましたから、五十三驛を押下つた。そして、二十三日には鎌倉雪の下に着き、こゝで江戸から迎ひに出た吉田忠左衛門と出會つて、打合せをした上、三日の後一緒にそこを立つた。そして、かねて準備して置かれた川崎在平間村の一屋に入つた。こゝに十日間許り滯在して、江戸の情勢を窺つてゐたが、差閊へなしと見て、十一月の五日にはとう／＼お膝元へ乘込んで來た。そして、前月來倅主税が逗留してゐる石町の旅人宿小山屋に、左内の伯父と稱して宿泊することになつた。江戸にあつた同志は、それとばかりに、人目を忍んで、代る／＼内藏助の許に伺候した。いよ／＼年來の宿望を達する日が近づいたのである。

が、内藏助の到着と共に、かねて連盟の副頭領とも恃まれてゐた千石

た。つゞいて岡野金右衛門、武林唯七、それに毛利小平太の三人も八月の二十七日に江戸へ着いた。それに次いでは、吉田澤右衛門、間瀬孫九郎、不破數右衛門の三人が九月二日、矢頭右衛門七も單獨にて同じく九月二日、千馬三郎兵衛、間重次郎、中田理平次は同月七日、木村岡右衛門、大高源吾も九月中といふやうに、同志の士は續々江戸へ下つた。しかも大石自身は、後を清くして立つためには何かと用事もあつて、さう急に京師を引拂ふわけにも行かない。そこで同志の心を安んずるために、まづ伜の主税に老巧間瀬久太夫を介添へとして、大石瀨左衛門、茅野和助、小野寺幸右衛門なぞと共に、自分に先立つて下向させることにした。一行は九月十七日に京都を立つて、同月二十五日には無事江府に下着した。そして、石町の旅人宿小山屋に、江州の豪家垣見左内公儀に訴訟の筋あつて出府したと稱して逗留することになつた。それと見た一黨の士氣は、かうなれば早晩太夫の出府も間はあるまいといふので、いよ／＼振ひ立つた。

三

これより先前原伊助、神崎與五郎の兩人は、内藏助の命を帶びて、既にその年の四月中江戸に下つてゐた。これは吉良、上杉兩家の近情を偵察するためで、内藏助もその頃から主家の再興を所詮覺束なしと見て、そろ／＼それに處する道を講じて置いたものらしい。で、前原は米屋五兵衛と變名して、相生町三丁目に店借りをして、吉良邸の偵察に從事するし、神崎は美作屋善兵衛と名告つて、上杉家の白金の別墅に程近い麻布谷町に一戸を構へた。これは上野介が浪士の復讐を恐れて、實子上杉彈正大弼綱憲の別邸に匿まはれてゐるといふ專らな風評があつたからに外ならない。が、それは風評だけに止まつて、主として本所の邸に住んでゐることが分つたので、追ひ／＼同士が出府して來る頃には、與五郎も谷町の店を仕舞つて、前原の米屋の店へ同居することになつた。そして、美作屋では、自分の生國から取つたものだけに、氣が指したのか、改めて小豆屋善兵衛と名告つて、扇子や鬢つけの荷を背負ひながら、日々吉良邸の内外を窺つた。が、同邸でも見慣れぬ商人と見れば、一切邸内へ入れぬやうにして、用心堅固に構へてゐる。その中を潜つて這入り込まうとするのだから、こちらの苦心は一通りでなかつた。が、そんな事にあくむやうな彼等でもなかつた。日夜その機會を覘つてゐて、それ火事だ！　とでも云へば、眞先に屋根へ駈け上つて、肝心の火事は他所に、向側の吉良邸の動靜を目を皿のやうにして窺つたものだ。

圓山會議の後、眞先に江戸へ下つた堀部安兵衛は、浪人劍客長江長左衛門といふ觸れ込みで、米屋の店に程遠くない林町五丁目に借宅し

た。前哨たる米屋の店と聯絡を取つて、何かの便宜を計るためであつたことは云ふ迄もない。この借宅には、在府の士小山田庄左衛門を始めとして、七月中安兵衛よりも一足先に江戸へ下つた横川勘平、一足後れてすぐその後から下つて來た毛利小平太の三人が同居した。そして、横川は三島小一郎、小平太は水原武右衛門と變稱した。なほ前者は、身分こそ五兩三人扶持の徒士に過ぎなかつたが、主家沒落の際は、赤穗城から里餘の煙硝藏に出張してゐて、籠城殉死の列に漏れたといふので、それと聞くや、取る物も取り敢ず城下へ驅け着けて、内藏助の許へ呶鳴り込んだ程の氣鋭の士であつたから、仇家の偵務についても人一倍大膽に働いた。小平太も安兵衛だの勘平だのといふ氣性の勝つた連中と一緒にゐては、一人ぐづ〳〵してはゐられない。それに、同宿の士の中では比較的小身者であつただけに、横川とは殊に仲好くしてゐたので、同じやうに仲間小者に身を扮して、仇家の偵察にも從事すれば、江戸中を走り廻つて、諸所に散在してゐる同志の間に聯絡をも取つてゐた。で、誰一人小平太の心底を疑ふものもなければ、彼自身もそれを疑ふやうな心は微塵もなかつた。

處で十月の半頃までには、後れて上方を發足した原總右衛門、小野寺十内、間喜兵衛なぞの領袖株老人連も、岡島八十右衛門、貝賀彌左衛門なぞと一緒に、前後して江戸へ着いた。最も後れた中村清右衛門、鈴田重八の兩人も、十月の三十日には江戸に入つて、安兵衛の控江長左衛門の借宅に同宿することとなつた。中村は小山田庄左衛門なぞと同じく百五十石取りの上士で、鈴田は三十石の扶持米を頂いてゐたものであつた。

頭領大石内藏助もいよ〳〵十月の七日には京師を發足した。それに從ふ面々は、潮田又之丞の前に安兵衛と共に下つて、再び上方へ取つて返したものゝ、近松勘六、菅谷半之丞、早水藤左衛門、三村次郎左衛門、それに若黨仲間どもを加へて、同勢すべて十人、「日野家用人垣見五郎兵衛」と僞稱した繪符を兩掛長持に附して、關所々々の眼を眩ましながら、五十三驛を押下つた。そして、二十三日には鎌倉雪の下着、こゝで江戸から迎ひに出た吉田忠左衛門と出會つて、打合せをした上、三日の後一緒にそこを立つた。そして、かねて準備して置かれた川崎在平間村の一屋に入つた。こゝに十日間許り滯在して、江戸の形勢を窺つてゐたが、差閊へなしと見て、十一月の五日にはとう〳〵お膝元へ乘込んで來た。そして、前月來伜主税が逗留してゐる石町の旅人宿小山屋に、左内の伯父と稱して宿泊することになつた。江戸にあつた同志は、それとばかりに、人目を忍んで、代る〳〵内藏助の許に伺候した。いよ〳〵年來の宿望を遂げる日が近づいたのである。

が、内藏助の到着と共に、かねて連盟の副頭領とも恃まれてゐた千石

つたの。」

「いいさ。──私もあんたに借りたいものがあるわ。」

お瀧にことわりを云つてゐるのは、胡瓜といふ渾名のある──胡瓜のやうに痩せて、脊がこゞろもち曲つて、青さめて、病氣でよく寢る、子供好きのお淸だつた。近所の赤ん坊の守りをさせて貰つたり、幼兒を三四人も共同湯で洗つてやつたり、この子供いぢりだけが、彼女の樂しみらしかつた。そして村との約束──曖昧宿の女は土地の男を客に取らないといふ約束を、お淸一人は嚴しく守つてゐた。勿論渡り者だが、この村で體をこはした彼女は、この村で死ぬことを考へてゐた。可愛がつてやつた子供達の群が、柩のうしろに長々と並んで來る──その幻を、彼女は寢込む度に描くのだつた。

だからお瀧にしても、お淸に會へば、冬の薄日のやうなお淸に直ぐ染つて、身の上話の一つもする間柄だ。

しかし、もう一人の女は、お瀧の彼も見ずに、

「今晩は。」とだけ云つたまま、眠つたやうに默つてゐる。睫の濃い影が眼を隱してしまつて、桃割髮が油でぴちやぴちやに濡れたやうに、がくりと傾いてゐる。肌白い顏の平べつたさは、ほのぼのと愚かな眠り──その眠りの上で、くつきりつぼんだ脣と長い睫毛とが、別の生物のやうに鮮かに浮き立つてゐる。眉毛は生毛がぼうぼうと亂れたままだ。耳も、首筋も、手の指も、どこを一眼見ても、齒を立てて嚙みたくなる──その柔かい感じで、お瀧は直ぐに、これがお咲だなと思つた。

お咲は──この村に十人餘りゐる酌婦のうち、彼女だけが特別に風儀をみだすといふ角で、駐在所の巡査から度々、村退散を云ひ渡された女だ。村會議員の息子なぞが、しきりに通ふからだ。生れつきの娼婦──餘りに娼婦であり過ぎるからだ。

お瀧の激しい目にじろじろ見られても、お咲はやはり、うつとりと抱かれたやうな顏で、湯から胴を出して、湯船の緣に腰を掛けた。眞白な蛞蝓のやうに、しとしと濡れた肌──骨といふものがどこにも感じられない、一點のしみもない柔かな圓さだ。蝸牛類のやうに伸び縮みしさうな脂肪で、這ふ獸だ。その眞白な、、、地團太踏みたく──お瀧はそのやうな、、、、、に、突然襲はれて、お咲の膝にぐいと手を伸すと、

「手拭を貸してよ。」

お咲は蛞蝓のやうにきゆつと身を縮めて、胸で下腹を隱さうとしたが──手拭の蔽ひを失つたところに、一面の小さい、、、その白い皮膚の、、、りが見えたのだ。

しかし、お咲の耳は透き通りさうな眞赤となり、その赤が乳房から

頭まで、ほのぼのと染めて來た。人間ではないやうな、この美しい血の色を、お瀧はむらむらする嫉妬と、たまらない快感とで眺めて、

「手拭もうつかり借りられやしない。　、が附いてさうね。」

それから間もなく、川原の湯を覗き込みながら、

「雪ちやん、綺麗なおとなしさうな學生さん二人だけれど——瀧道の方へ遊びに行つてみない？」

お雪は湯船の縁のセメントに、兩腕で輪を描いて、その腕の上へ、湯の中からべたりと頬を載せてゐた。

「おや、寢てんのね。さう、あんたはまあ——大事にしとくといゝわ。」

お瀧が宿に歸つたのは、木の幹や川瀨なぞ白いものが、明け方の白さに浮び出した頃だつた。お雪はまだ川岸の湯船に眠つてゐた。彼女の貞操道徳をしつかりと抱くかのやうに、やつぱり兩腕で輪を描いて——。

4

お雪は「修身教科書」の殼を、雛子の尻の卵の殼のやうに可愛ゆく——また、蛇の體の拔殼のやうに憎々しく、彼女のどこかにくつゝけてゐた。

都會近い海邊の温泉町で、藝者屋に奉公してゐたゞけあつて、同じ桃割にしても、首筋の生え際が、水際立つて色つぽかつた。藝妓の卑熟と海の娘の健康とが、一つになつた小娘だつた。頬が林檎のやうに紅く、線の鮮かな二重瞼のまん圓い眼が、浮氣つぽく動いた。山形には珍しい——その古い言葉を、誰にも新しく感じさせた。

だから、いろんな男が、本氣ともなくじやうだんともなく云ひ寄つた。それを彼女は、本氣ともなくじやうだんともなく、鮮かに受け流した。また、さういふ種類の出來事を、ほかの彼女等のやうに、一々仰々しく吹聽するやうなこともなかつた。それでゐて——或る學生が、

「雪ちやんは、年の割にませてるんだね。」と、口を尖らせると、彼女はさつと顏色を變へて、

「馬鹿にしてるわ。學生のくせに生意氣だわ。——人が藝者屋にゐたからつて。」と、給仕の盆を投げ出して、ぷいと出て行つたまゝ、その學生が一月ばかり滯在の間、一度も口をきかなかつた。

しかし、例へばお芳と二人で、當番の湯殿の掃除をしながら、わざと居眠りをする。束子で叩き起されると、

「あんたの顏が三つに見えるわ。ね、先きに寢ちやいけない？あんたの床を温めといてあげるからさ。」

さうして、お雪は彼女等の全てから、娼婦のやうに愛されて、けろけろ明るい顔なのだ。

「まあ、綺麗な前掛けだこと。」と、女の客はお雪を見て驚くことがある。

　色花やかな小切れを、いつの間に、どこから集めたのか――それをすつかり三角形に揃へて縫ひ合せ、お雪は美しい前掛けを作つたのだ。

　彼女が初めてこの宿へ来たのは、夏の終り、宿屋で新しくどてらを縫ふ頃だつた。二十枚ばかりのどてらが出来上る間に、お雪はそれと同じ柄の男の子の袷を一枚、仕上げてゐた。残り切れを継ぎ合せて作つたのだ。弟に送るのだと云ふ。

　宿のおかみさんが、驚き混りに褒めるのを聞いて、主人は、

「油断のならん奴だ。あいつは用心しろ。」

　またお雪は、客の巻煙草の吹殻を拾ひ集めて、首から折つてしまつて置く。それが溜ると、新聞紙の上に煙草をほぐして港町のおぢいさんに送つてやる。

　巻煙草の吹殻は――長い年月宿のおばあさんが、自分の手で煙草盆や灰皿から、拾ひ集めてゐたものだ。やはり一々吸口をちぎり捨てて、大きい紙箱に溜めて置き、村の年寄が来た時に、おばあさんが出してやる。年寄達はそれを煙管で吸ひながら、長話をして行く。その吹殻を目あてに来るぢいさんさへある程だ。

　しかし、宿のおばあさんはこの古い道楽を、お雪のためにぴたりと止めてしまつた。

　お雪の母は――港町の酌婦上りの継母だが、五六日に一度づつお雪の弟を連れて、厚化粧の顔をこの宿屋へ見せる。さんざん宿の人達の御機嫌を取つて、こつそりお雪に小遣をせびる。

　お雪の父が日雇人足として、出稼ぎに来てゐるのだ。隣り村で、百姓家の納屋に古畳を入れて住んでゐる。古里の港町――海辺の温泉町から温泉町へ通ふ、乗合自動車道の中程にある漁港には、おぢいさんが一人残つて、孫娘が送る煙草と山葵漬を待つてゐる。

　乗合自動車が小高い岬を廻ると、ふいに目の前が温まる色――海岸に続いた椿の林が満開、蜜柑の山が色づいて、その二つの間を真白な道が入江へ下りて行く。港には漁船が三四十艘、綺麗に揃へて引き上げてある。木の間からは大きい瓦屋根と土蔵の白壁ばかりが見える。町の眺めの豊かさ――お雪のやうな貧しい一家が住んでゐるとは信じられないのだ。そしてまた町税のない模範部落なのだ。

　その町で、お雪の母は彼女の弟を産む時に熱を出し、命は一時取り止めたが発狂した。父もおぢいさんも働きに出た留守、お雪は母の

發作の隙を覗つて、その乳房へそつと赤ん坊を抱いて行く。朝出かけに、父は母の手足を縛つて行つてくれるのだが、彼女がその藁繩を解いてやるのだ。母は四十日ばかりで死んだ。

お雪は十で、尋常三年だつた。赤ん坊を背負つて學校に通つた。父達の食べ物や着物の世話も、一切彼女がした。野良犬を拾つて飼ひ初めたことが彼女の唯一つの贅澤だつた。犬は——夜半に乳を貰ひに歩く少女の後を、忠實について行つた。

「子守と並ぶのは厭だあ。」と、お雪の隣りに坐る子供は、教場で泣き出した。背中の赤ん坊が泣く度に、お雪は教場を出なければならない。十分の休みにもおしめを取り替へ、乳を貰ひに行く。

それでゐながら、彼女は首席で四年に進級して、學校中を驚かせた。進級式に、やはり赤ん坊を負ぶつたまま、校長の前へ賞品を貰ひに行く彼女を見て、子供の親達は泣いた。校長が縣知事に表彰を賴んでやつたといふ噂は、お雪の耳にも入つた。しかし、子供達は——全く子供達程子供の弱味に向つて意地の悪いものはない。お雪は四年の夏休みから學校を止めてしまつた。

とにかく、お雪は自分の手一つで赤ん坊を三つまで育て上げた。繼母が來た。しかし、洗濯も煮焚きも、お雪の仕事であることに變りはなかつた。田の草取りをしてゐる時、繼母が子供を負ぶつたお雪の髮を掴んで、泥田の中を引きずり廻す——そのやうなことを、近所の人は毎日見た。

「これもこれもこれも——みんなその時分の傷痕なんですの。」

と、お雪は温泉宿の湯の中で、自分の腕や胸を指でつついて見せることがある。——それはまるで、自分の裸を男に見させて、誘ひ寄せる技巧であるかのやうに、今は浮氣つぽく笑ひながらだが。

だがその時は、餘りに可哀想だといふので、温泉町の小母が引き取つて行つた。小學校長などの度々の催促で、縣廳から表彰の通知が來た頃には、お雪は町の藝者屋にゐた。父は山地へ出稼ぎに行つてゐた。

伯母の家は下で造花を賣りながら、二階は藝者屋だつた。

「藝者屋たつて、私は造花を拵へたり、子守りをしてただけなんですからね。」と、彼女が湯の宿で云ふのは、彼女の「修身教科書」らしい嘘だ。彼女は藝者の三味線や着替へを持つて歩く——下地つ子だつたのだ。

そのために、縣廳の表彰は沙汰止みとなつたが、彼女の頰は見る見る色づき、圓い眼がちつとしてゐなくなり、高く小走りに飛んで行つてはおしやべりをする——首の肌が白い色情に濡れて來た。身内に暖い火がついた。

だが、客を取ることを強ひられさうな氣配を感じると、さつさと伯母の家を出てしまつたのは――「表彰の噂」をお雪が忘ないためかもしれなかつた。

父の出稼ぎ先へ來てみると、繼母は打つて變つて、彼女をちやほやした。

「もう私はどこへ行つたつて、立派に一人で食べられるんだわ。氣に食はない家になんか、誰がゐてやるものか。」

　これはお雪が、藝者屋でしつかりと植ゑつけられて來た自信――彼女は自分で氣がつかないながら、繼母の顏をまともに見返す眼の色一つにも、それが現れずにはゐないのだ。母はそれに突きあたつて、一足退いた。お雪は新しく武器を持つた者の大膽さで、人生を輕蔑し出した。彼女等の身の上としては、これは娼婦への一歩だ。

　だが、小娘の「人生の輕蔑」は――結局、「玉の輿」の夢と同じだつた。世の中の上へ上へ――自分はその選ばれた綺だといふ誇りから、彼女は一層小賢しげに、浮氣つぽくなつて行つた。

　さうして――川の湯で眠つてゐるお雪にお瀧が、

「さうね。まあ、あんたは――大事にしとくといゝわ。」と云つた、そのものに、樂しい賣價をつけて、大事にしてゐた。この「賣價」と「修身教科書」とが、一つになつた危つかしさは、彼女の小憎らしい魅力だつた。

　宿へ來た繼母のお世辭に、お雪も巧みなお世辭で答へながら――母がお湯へ入ると、忍び足で覗きに行く。そして、

「おかみさん、あんな女のいふこと信用しちやだめですよ。相變らず弟を打つと見えて、弟の腕に紫色のみみづ膨れが、五つも六つもありますよ。」

　男の客の甘い言葉からも、十六のお雪は、ちやんとこの紫色のみみづ膨れを見て取るのだ。

5

　二百十日は、炭焼きの煙も見える晴れだつた。赤とんぼが谷川一ぱいに飛んで來た。

　だが、二百十三日の嵐は、電燈がついたと思ふと消えた。明るいうちに雨戸をしめて、女中部屋に寢轉つてゐる彼女等のところへ、番頭が雨合羽のまゝ蠟燭を持つて來た。お瀧はそれを受け取るなり、雨戸の節穴から外を見てゐるお時に、

「時ちやん、何度も覗いてみなくつたつて、この雨に歸れないことはさ、よく分つたよだ。早く二十六番へ、蠟燭を持つて行きな。」

　それで彼女等は一齊に手を叩いた。お時は渡された蠟燭の火をふつ

と滑して、そこに坐つてしまつた。
七人だつた彼女等が、九月二日から四人になつた。夏場だけ手傳ひに來てゐた娘達が歸つたのだ。宿の主人の姪で、女學校を出て產婆學校へ入る準備をしてゐる、近眼の高子、十四から十七まで女中をしてゐて、家が近くの、だから忙しいといつも直ぐ手傳ひに呼ばれる、宿の勝手をよく知つて、おばあさんの氣に入りの、そして宿の貰ひで嫁入仕度を一式揃へたといふ、しつかり者のお谷、それから百姓娘のお時――お時は今朝から遊びに來てゐて、嵐になつたのだ。
大きい石のごとりごとりと流れる音が、彼女等の枕もとに響いた。眞夜中に女中部屋の板戶をぎちりぎちり明けて、お時が出て行つた。廊下でマッチをする音が聞えた。お雪は爆發するやうに、
「わあつ、ばんざあい。」と叫びながら、お芳の腹の上をごろごろ轉がつて、壁際のお絹に抱きついた。
「くすぐつたいよ、ちび。――みんな狸だつたの？　人が惡いわ。」
「察しがいいのさ。私がお時さんを戶の傍に寢かせてやつたのさ。」とお芳が云ふと、お雪は立てた膝を搖つて、まだ笑ひながら、
「だつてさ、あんなうぶな人、可哀想だわ。」
「土地の人だから、雪ちやん、默つてらつしやいよ。お嫁入りに差支へるわ。」
「いいぢやないか。百姓をする差支へになるわけぢやなし。お前さんみたいに、、、はないだけでもましだよ。」
「私が――私が、いつ、、、つた？」と、お絹は這ひ步きながら、お瀧に摑みかかつて來た。お瀧はその兩手を、ぐつと捩ち上げて、
「ふうん。――あれで、惚れてたかい。」と、突き轉ばした。
お絹は東京の藝者町の髮結に奉公してゐたことがある。宿屋で働き蓄めて、もう一度藝者町の髮結の內弟子になりたい――といふのが、彼女の口癖だ。髮を藝者風に結んでゐる。客がそれを認めてくれると、さも嬉しさうに吹聽する。肌が黑くて小柄だ。都會風の若い男客の座敷へは、人の受け持ちを奪つて出たがる。
この夏、半月ばかり滯在した、神經衰弱の學生の部屋には、帳場から叱られやうが、笑はれやうが、入りびたり通した。
このお絹と、お時と――、、、との出來事は、客が每日溢れた夏を通じて、ただこの二つだけだつた。彼女等のうちでも美しくない二人に、却つてこのことがあつたのだ。
お時の相手の男は、宿から宿へ襖を描いて廻る旅繪師だつた。お時は眼の窪んだ、鈍い百姓娘だが、湯殿では、色白の肌が別の娘のやうに美しい。
嵐の翌る朝は、物干台に靑い落葉だらけだつた、川原の湯の湯船を、

土砂が埋めてゐた。赤土水が岩の上を紆つて流れる川岸に、子供の群が並んで、てんでに手網を持ち、疲れた小魚を掬つた。それを旅人の母子が見物してゐた。

岩から岩へ掛け渡した板橋は、一つ殘らず落ちた。もつとも、橋板の端に穴をあけて針金を通し、岸に結びつけてあるから、板は岸へ流れ寄つてゐるのだ。

川の水が減つても、鮎の友釣りをする人の姿が見られなくなつた。彼女等は測量技師の部屋に集つて遊んだ。旅絵師は客のない部屋の襖を描き出した。

その寂しい季節――村は賑かに騒がしくなつて、人々の高い話聲が聞え出した。

村一番の溫泉宿に女中奉公してゐた村の娘達は、申し合せて暇を取つた。お瀧等がゐる、村で二番の溫泉宿に村人が集つて、村一番の溫泉宿の主人の古い噂を、今更のやうに數へ立てた。

「あいつは、鑛山技師が採つて來た鑛石を、うんと金の入つたやつとすり替へて、訴へられたことがあつたぢやねえか。」

「さうさう、あの裁判はどうなつたんだ。技師は首になつたつてんだが、あいつは手金の何萬圓かが取り徳なんて。」

「さういふべてんを幾らやつたかしれねえ。――ほら、前は鹿狩りで、大臣や偉い軍人が、ずゐぶんあすこへ泊つたらう。その人等に字を書かせといて、あのぢぢいは字がうまいもんだから、自分で贋物を十枚も二十枚も書いて賣つたつてことだ。うちへ來た時書いて貰つたと云へば、誰でも信用するからな。それで一身代作つたつて話だ。こんな山ん中の溫泉宿で、真つたうにやつてりや、あんなにめきめき肥えるはずがねえ。――こつちの宿がいい證據さ。」

そして酒の勢ひで、

「あいつんとこの溫泉を止めつちまへ。」

「これから押しかけて、ぢぢいを川原へ生け埋めだ。」

つまり、この谷川沿ひの小路が自動車道に擴がる。一番その利益を受けるのは溫泉宿だ。にもかかはらず、村一番の溫泉宿は、その割り當て金を、きつぱりことわつたのだ。

その宿へ警官が十人ばかり泊り込んで、毎日大弓を引いてゐた。彼等が弓に飽きる前に、村は靜かになつた。

お瀧は暗い廊下の雨戸をしめながら、

「きやつ。」と飛び上つた。大きい青桐の葉だ。彼女はなぜか町の肉屋へは歸らうとしなかつた。

おかみさんが七月の腹を抱へて、苦しさうに厠の掃除をする――これ丈は女中の手を借りない――その姿が、わけもなく悲しく見えた。

博打打ちのやうな男が宿に滯在して、川上の空家の修繕を毎日監督に行つた。

朝鮮人の土工の一隊が移住して來た。

「ちよいと、ちよいと、鍋も釜も——持つて歩いてるわよ。」と、お絹が女中部屋へ走つて來た。

皺だらけの白い袴に、布の靴を履いた朝鮮の女達は、世帶道具の大きい風呂敷包みを負つて、背を屈めながら歩いてゐた。

川下からダイナマイトの音が響き出した。

川上の古ぼけた空家が、小綺麗な淫賣宿になつた。さすがの彼女等が驚いたのは——お絹がそこへ移つて行つたことだ。彼女等は皆、博打打ちのやうな男から、しつつこく誘はれたのだつたが——そのうまい話の金高をまた思ひ出して、お絹を口ぎたなく罵つた。

日本人の土工の群が入り込んだ。工夫監督が、彼女等の宿の離れに下宿した。

隣りの曖昧宿にも女が二人殖え、お清は間もなく床から起き上れなくなつた。しかし、その家の子供達が、彼女の枕もとを離れないお蔭で、追ひ出されずにすんだ。お芳は川上の新しい家へ引き抜かれて、彼女の、、、、、、、、、に上つた。工夫監督が彼女に通ひつめてゐるといふ噂が立つた。

或る日、お芳が料理番の行李の中から、新しい鰹節を一本見つけると——人の行李を明けてみるのは彼女の癖だが、直ぐ宿のおばあさんのところへ持つて行つた。

「まあ。——これと取り替へてお置き。」と、使ひ古しの小さい鰹節を渡した。

行李を明けてみた料理番の吉八は——餘りに情ない正直者だつた。居たたまれなくなつて暇を取つた。彼女等は泣いて止めた。お瀧はお芳の首をしめて、二階の段梯子を引きずり下しながら、

「この糞婆の、畜生、畜生。出てうせろ。」と、門口へ倒した腹の上を、跣足でぎゆうぎゆう踏みつけた。

しかし、四日も經つと、彼女等はもう吉八の噂をしない。

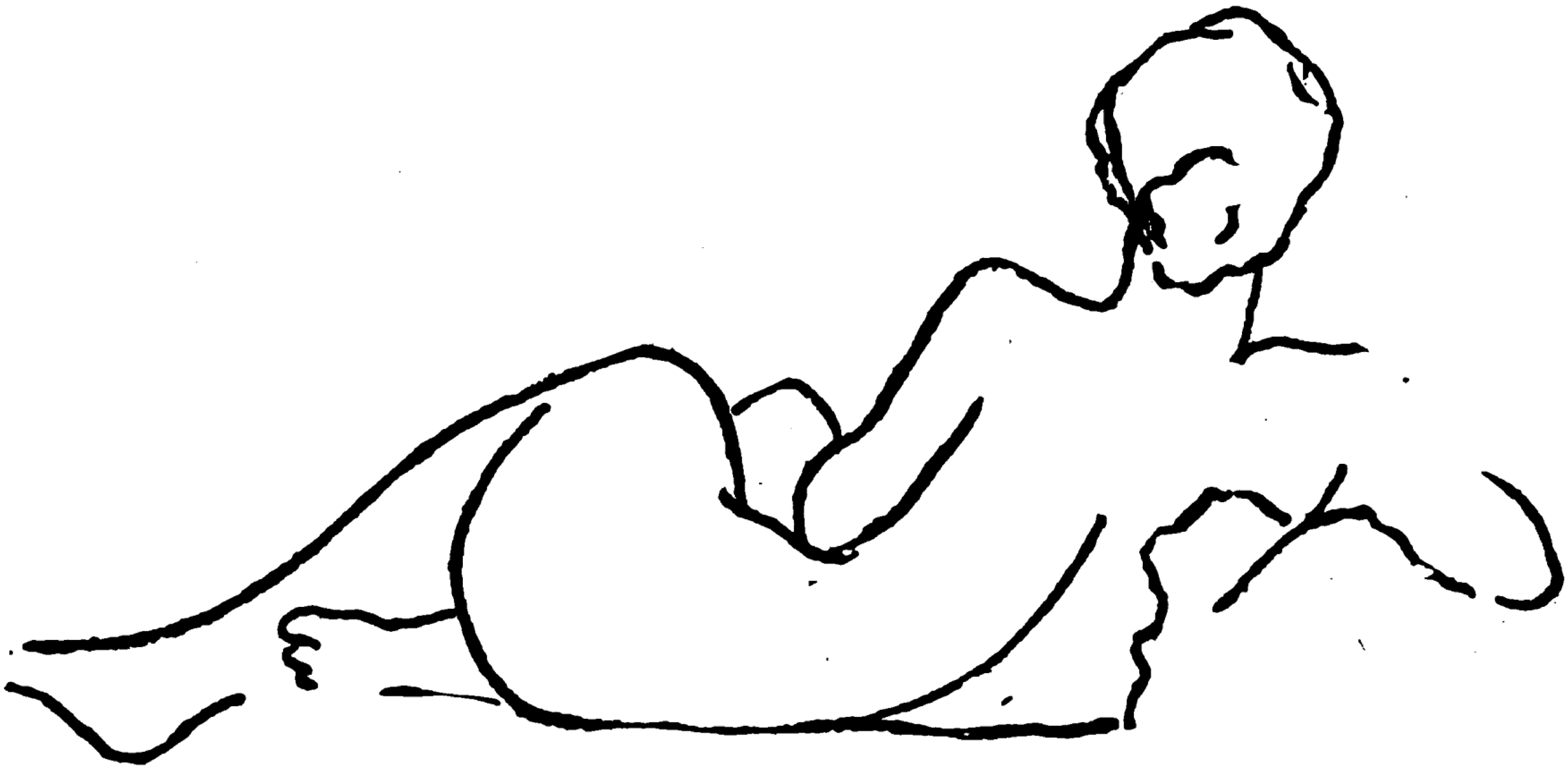
お雪は庭を掃きながら、ふと顏を上げた。

お瀧が——あのお瀧が、離れの入口にしやがんで、監督の足に、黄色いゲエトルを卷いてやつてゐるのだ。お雪は箒をばたりと楓の木に倒しかけると、ついと身を引いて、それからぼんやり裏庭へ歩いて行つた。橋の欄干に凭れて、ぶらぶら片足を振つてゐると、ぢはぢは涙が流れて來た。

その夜、彼女等の寢床を取りながらお瀧は、

「今日も爆發を見て來たわ。あのハッパで岩が崩れる、小意味のよさつたら。私あの焰硝の匂ひを嗅がないと、眠れなくなつちやつた。工夫になりたいな。」

お雪がぷつと吹き出して、兩手で抑へた顏を、固い蒲團に落すと——いつまでも突つ伏したまま、肩を搖すぶつて笑つた。(終)



卍（まんじ）

谷崎潤一郎

その二十五

「へーえ、そしたらあの時カマかけられてたのん？」「そら光子さんの奥様に對する氣持ち云うたら、全く眞劍でしてなあ」云うて冷やかしたりして、人馬鹿にしてる思ててんけど。」「ふん、ふん、わざとそんなこと云うて、成るだけ姉ちゃんに腹立たそとしててんし。あて襖の陰で聞いてて、まあ何ちふうそつきやろ思てんけど、あんな時に辯解したかてなかなか信用して貰はれへんしなあ。……」そいで光子さんは、計略にかかつた云ふことに氣イつきなさつたら、忌ま忌ましいて忌ま忌ましいてならんとこい、それからちふもんもう邪魔なもんないやうになつたのんで何のことしつこうに附き纏て、何ぞ云うたら「あんたこそうそつきや、巧いこと云うて僕欺してたやないか」云うて、私とのこといつ迄でも根エに持つてて、「、、、であんな、、、んどいて僕等の間柄、、、やかい云へた義理やない」とか、「きつとあんなことぐらゐで絶交する筈あれへん、今でも何處ぞで會うてんとは限らん」とか、自分で會はさんやうにしといたくせに、何處迄でも疑はんとゐられん性質やのんか、それともわざと空惚けてそんな嫌がらし云ふのんか、「あん

たも男らしいもない、濟んでしもたことそないいくどくど云はいでもええ」云ひなさつても、「いやいや、濟んでしもたことやない、きつとあの人に僕の、、知らしたあるやろ」云うて、ほんまのとこはそれ一番恐がつてて、私に知れたら復讐的にどんな妨害するか分れへん云ひますのんで、「邪推もええ加減にして欲しい。あんたちふもんあることさい隱してたのんに、なんでそんなことしやべる隙あるやろ。あんた姉ちやんに會うたんやつたら大概樣子ででも分つたやろのんに」云ひなさいましてんけど、「いや、その樣子に怪しいとこあつた」云うて、自分がカマかけたりしますさかい人の態度まで疑がうてて、――それが、ただの嫉がらしと違て、綿貫にしたら疑がふ譯ある云ふのんは、自分かて光子さんと私との仲感づいてたやうに、私にしたかて綿貫と光子さんとの仲知らんとゐた云ふ筈ない、知つて今迄、、も、、んとゐたのんは、「あの男は、、、せん人間や」云ふこと聞かされて安心してたのんやろ、そやなかつたらまさか默つてる譯あれへん、そない思てて、それがお腹にありますのんで、私を笠屋町の宿屋へ呼んだ云ふのんも、自分はしよつちゆうこんなとこで光子さんと會うてるぐらゐで、ちよつとも、、、、やない云ふこと見せつける積りもあつたのんです。光子さんかて、「どうぞ姉ちやんと別れて下さい」と正面から手エついて頼まれなさつたら、「イヤ」とは云へん義理ですのんに、あんじようペテンにかけられた上にそないエゲツない疑がはれたら、意地でも謀の裏かいてやりたうなりなさるし、あんな心にもないことして仲惡なつた思ひなさつたら、なほのこと未練殘つて、どないぞして仲直りしたい、せめて一と眼だけでも會ひたい思ひなさいましてんけど、訪んねて行つてもたやすうは會うて貰へんやろし、會へたところでどない云ふて云ひ譯せう、今更何云うたにしても氣持ち直して貰へんやろと、いろいろ考へなさつた末あの、、の本のこと思ひ出しなさつて、……あれはほんまに光子さんには用のない本で、やつぱり中川の奥樣に貸しなさつたのんやさうですが、……あの時のことは、ふつとそれからヒント得なさつたのんで、○○病院の名前騙つてこないこない電話かけよ、こんな時にはこないせう云ふ工合に、何日もかかつて一所懸命考へ拔きなさつた。もちろん誰にも相談せんと自分ひとりであんだけの段取り工夫しなさつて、ただ電話かけるのんに女の聲やつたらいかん思て、お梅どんに譯話して出入りの洗ひ張屋の男頼んだ。「あてかてあの時は姉ちやんの、、取り戻そ云ふ一心で有るだけの智慧絞つてんし。今考へたらあんなえらい騒動して、眼エ吊り上げて見せるやなんて、役者でもないのんにようあんなことした思ふけど、一所懸命になつた云うたらどんな事でも出來んことないわなあ」云ひなさつて、そら、あの時のことは確かに私を計略にかけ

た、欺した云はれても仕方ないけど、それも自分がどんな氣持ちでしたか云ふこと直きに分つて貰へるやろ、そしたら私かて可哀さうなとこそ思へきつと憎いとは思へへんやろと、そない考へてた云ひなさいますねん。

ところが私と仲直りした云ふことそれから間もなう綿貫に知れた。光子さんかてもともと綿貫のたくらんだことあべこべに引つくり返して見せつけてやろ云ふ氣イあるのんで、別に隱そともしなされへんばつかりか、知れたらどんな顏するやろ思て待ち構へてなさつたとこですさかい、「あんた此の頃、又あの人とより戻つたんやろ、空惚けててもちやんと分つてる。」「ふん、そやねんし、そんな事ちよつとも惚けてエへん」と、落ち着き拂てなさつて、「會はんとゐたかてどうせ疑がはれるくらゐなら、會うた方が優しや思てん。」「何で僕に内證でそんなことした？」「内證やあれへん、あてどない邪推しられたかて、せエへんことはせエへん云ふけど、したことはした云ふし。」「さうかて今日まで默つてたやないか。」「そら云ふ迄もない思たさかい默つてた、何も一一自分のしたこと報告せんならん思てエへんもん。」「こんな大事なこと報告せんちふ法あるもんか。」「そやさかい、したことはした云うてるやないか。」「ただ『した』だけでは分らん、孰方から仲直りしたのんかちやんとはつきり云うて見なさい。」「あての方から訪ねて行つて、悪かつた云うて勘忍してもろてん。」「何んやて！何んで詫まりに行くことある？」「何んで云うて、こんなとこいあんな時間に呼び出しといて、着物借つたりお金借つたりして、放つとく云ふ法あるかいな。そんな義理の悪いこと、あんたは出來てもあては出來へん。」「借つたもんはあの明くる日、僕が郵便で返してやつた。あんな汚らはしい女にそれ以上禮云ふ必要あるもんか。」「ふーん、そしたらあの時姉ちやんの前で何んちうた、『僕の一身はどないになつても此の場さい無事に濟んだら御恩は一生忘れしません』云うて、その汚らはしい人に頭下げて、掌エ合はして拜んだやないか。そやのに今頃ようそんなこと云へるなあ。第一借つたもん郵便で返すやなんて、もし旦那さんの手エにでも渡つたらどない迷惑しなさるか、汚れてたかてゐエへんかて世話になつたもんは世話になつたもんやのんに、何んちふ恩知らずやろ。あんたそんなこと云うたら、あの晩のことかて手品の種見えるやうな氣イするし。……」そない云うてやりなさつたら、ぎよッとした顏して、「手品の種て何んのこッちや」云ひますのんで、「何んのこつちや知らんけど、何もあれから絶交したとも云エへんのんに、あんた獨りで絶交したもんと極めてる云ふのんけつたいやないか。そない自分の思ふ壺に嵌まる思たら間違てるし。」「何んや一體、あんたの云うてること僕には分らん。」「あのなあ、あの時の着物あんな

り警察から戻つて來えへんのん何んでやろ？」「今そんなこと問題にしてエへん。」そない云ひながら、チクリと痛いとこ刺されたのんで、「何を云ふのんか今日はあんた興奮してるで。まあまあ、その話ゆつくり聞こ」云うて、照れ隱しにニヤニヤ笑て胡麻化してしもた。けどそんなりで放つとくやうなあつさりした男違ひますよつて、二三日したら直き又持ち出して、今度は下手に出て光子さんの機嫌取りながら、「あの奥様よつぽど怒つてた筈やのんにどんなこと云うて丸めたのんか、後學のために聞かして欲しい」とか、「そんな優しい顏しててあんたはえらい手管上手や」とか、「くろとも及ばん凄腕や」とか、いろいろなこと云うておだてたり皮肉云うたりしますのんで、ええ加減なとこで妥協しといた方がええ思ひなさつて、實はこないこないの計略で仲直りした云ふこと話してやりなさつた。「あんたそんな狂言書いて人欺すこといつの間に覺えてん？」「そらあんたに敎せてもうてん。」「阿呆云ひなさい、僕にもちよいちよいその手ェ使てるねんやろ。」「ほら又邪推始まつた。あてこんな人の惡いことしたん今度だけやわ。」「そない迄してあの奥様ときようだいになりたい云ふのん、僕には分れへん。」「けどあんたかて此なひだ姉ちやんに『僕はちよつともかめしません、此れから三人仲好しましよ』云うてんやないか。」「そらあの時あの人怒らしてしもたら難儀やさかい、ついあない云うといてん。」「うそ云うてるわ。あんた姉ちやんにカマかけたんやないか。あの晩に細工ちやんとあてに分つてるし。」「そんなこと僕一向知らん。」「あんたよう聞いて頂戴や、一寸の蟲にも五分の魂云ふことあるよつて、蔭へ廻つてけつたいな事しられた思たら、誰かつてそんなりにしとけへんさかいになあ。」「僕がけつたいな事したやなんて、何んぞ證據でもあるかいな。あんたこそ邪推してるやないか。」「邪推なら邪推にしといたらええ。けどあんたかつてそない云ふのんやつたら、ちやんと約束した通り姉ちやんと附き合うたらええやないか。あんたは疑うてるか知らんけど、あてかてあんたのイヤがるやうなこと決して姉ちやんに云エへんし。…………」そこで光子さんは即席に氣轉利かしなさつて、私のとこい、、した云うて來たのんも一つは綿貫のイヤがつてること何處までも隱して、一人前の、、や云ふこと私に信じさすためやつた、自分はそない迄して綿貫の名譽守つてるねんさかい、綿貫さんもうちよつと寛大な氣持ちになつたら、此の先三人が仲好うして行かれへん云ふ筈ないやないか、綿貫かて私の前で「、、、、、、、、とは性質違ふ」云うた言葉もあるのんに、、、、、いたり何んやしたらそれこそ、、、、みたいに怪しまれる、――と、一方では綿貫の痛いとこおさへてて、賺かしたり威嚇したりしなさつたのんで、さすがの綿貫も文句に詰まつてしもて、「そんなら、、、、、、、、、、云

ふこと聽てくれ」云ひましてんけど、「姉ちやんに對してそないするのんやつたら、あんたに對してもそないせんと公平やない。それ承知ならそないする。」「あんたと此處の宿屋で會うてる以上は、姉ちやんにも此處の家い來て貰ふ。その方が、、、、、、、、、のんにも都合えゝ」云ひなさつて、私との交際には絕對に嘴入れんといてほしい、いゝいゝぐづぐづ云ふのんやつたら綿貫捨てても私捨てへん云ふ覺悟見せなさつたのんで、とうとう泣き寢入りになつてしまひましてんて。

その二十六

「……なあ、姉ちやん、なんぼ親しい間柄かてこんなこと云うたら自分の恥やし、愛憎つかされるかも分れへん思てじいつと辛抱してたんけど、もうもう今日は何んにも彼も云うてしもてんし。あんな人でなしの、、、しられてこない憂き目見るやなんて、あてぐらゐ不仕合せなもん世の中にあるやろか。」——そない云ひながら光子さんは私の膝の上い打つ伏しなさつて、涙でそこがびしよびしよに濡れるぐらゐ激しいに泣きなさるのんで、あんまりのことに何ちうて慰めたげたらえゝのんやら、——なんせ私の知つてる今日までの光子さん云うたら、華やかで、勝ち氣で、いつもプライドに充ちた眼ェ耀やかしてなさつて、そんな辛い思ひしてなさつたとはちよつとも見えしませんのに、その高慢な、女王みたいにエラそにしてなさつた人が、もう何んにも放つてしもて泣き崩れてなさる樣子だけでも、ほんまに思ひの外ですねん。光子さんに云はしたら、自分は剛情張りやよつてどない苦しいことあつても人に見透かされんやうに努めて來てんけど、そいでも姉ちやん云ふもんなかつたらもつと陰氣になつてたやろのに、姉ちやんに、、られてたお蔭で暗い運命に打ち克つだけの勇氣出た、いつでも姉ちやんの顏さい見てたら氣が晴れ晴れして一切のこと忘れてたけど、此なひだちゆうから又綿貫の、、、、、、募つて來てたとこいさして、今日ちふ今日はどう云ふ譯か悲しい思ひ込み上げて來て意地にも辛抱出來んやうになつて、長いあひだ堪へてた涙の堰きが一ぺんに切れた。「なあ、姉ちやん、どうぞどうぞ、……頼りにしてるのん姉ちやんばつかりやさかい、こんな話聞いても愛憎盡かさんといてエな。」「なんで愛憎盡かすもんか。」云ひにくいことよう云うてくれたなあ。あてかてそない頼りにされたらどない嬉しいかしれへん。そしたら光子さん氣イ弛みなさつたのんか、一層止めどもなう泣きなさつて、自分の一生は綿貫のお蔭で滅茶滅茶にしられた、何不足のない身に生れながら彼奴のために自分まで、、にしられてしもて、もう行く末に何んの望みも光明もない、生涯埋れ木で暮らすばつかりや云ひなさつて、自分は死んでもあんな男と結婚せエへん、姉ちやんどうぞ助け

る思てあの男と手エ切れるやうにしてくれへんか、何ぞええ工夫あつたら教せて頂戴云ひなさるのんで、「こないなつたらあてかて正直なこと云ふけど、ほんま云うたらあて等ちやんと、、、、の約束してしもて、こないこないの、、、まで交してんし」と、昨日の出來事みんな話したげたら、大方そんなことやろ思てた、綿貫の奴、何處迄行つても、、、、知られてエへんか云ふごと疑うてて、わざとそないなこと云うて姉ちやん試してみといてから、自分捨てられたら姉ちやんも一緒に抱き込んでやろ云ふ氣イや。……そない云ふと成る程、「光ちやんに子供出來た云ふこと初耳です」云うたとき、「へえ？　初耳？」云うて血走つた眼エして、「何んで子供出來る筈ない云ひましたか、そんな體質や云ふんですか」と顏の色まで變へてたのんが、あの時にもけつたいな人やなあ云ふ感じしましたし、それに今になつて思ひ當るのんは、話の中途でためいきついては、「ああ、ああ、僕は何んちふ不幸な運命の下に生れたのんでせう」と、二へんも三べんも芝居のセリフみたいな節つけて繰り返したあの言葉、――あの時は何んや、人の同情求めるためにわざとあんなセンチメンタルな聲出してる思ひましてんけど、それがやつぱり、なんぼづうづうしい男にしたかてお腹の中では自分の不仕合はせ嘆いてるのんで、人に云はれん淋しい氣持ちが自然と外に現はれたのんかも分れしません。けど「何んでそないに、、した云ふこと匿すのんでせう？　お姉さんにまでウソつかいでもええやありませんか」とか、「、、、れたら何處いなとやつてしまふ云うて、光ちやんのお父さんかんかんになつて怒つてる」とか、巧いこと云うて探り入れて、――それもええけど、人馬鹿にしてるのんは、、、、、、、、、のことあないに細かう規定して、、、い書き込んだりして、「これ讀んでみたらお姉さんの方が僕より得してる、僕の誠意のあることこれでも分りましたやろ」云ふやなんて、もともと起る氣づかひないのんやつたら、どんな條件かて書けるやあれしませんか。そんな有りもせんこと種に使て、此方の信用つないどいて、、、に、、さしたりして、どないする氣イやろ？　どんな場合にあの、、役に立たすつもりやねんやろ？　そらきつと「、ハ、ト光子トヲ、、ニ、、セシムルタメニ努力シ」云ふのんと、「、ガ、テラレタル時ハ、、ハ光子ト、、、、、」云ふのんと、「、、ハ、ノ、、ノ承諾ヲ經ズシテ無斷ニ、、ト、、シ、、、ヲ、マシ、若シクハ、、スル[illegible]ノ行爲ヲナサズ」云ふのんとか、――殊に此の一番しまひの條件が眼目やのんで、その外のことは勿體らしいに見せかけるための附け足りやと、光子さんは云ひなさいますけど、そいだけのことにわざわざんな尤もらしい形式取り交して、あんな大騷ぎせいでもよささうなもんですのんに、そんな法律くさい文句並べるのんがあの男の癖なんや

さうで、そない云うたら、此の頃光子さんの綿貫に對する態度だんだん燒け糞になつて來なさつて、どないなとなれ云ふやうな素振り見せなさるもんですさかい、綿貫の方も近いうちにただでは濟まんやうな事起る云ふ豫感じてて、蔭へ廻つて何んぞ惡さするやうな樣子見えてた。そいで此なひだ三人で松竹座い行つた時にしたかて、「あんたそないにひがんでんと一ぺん姉ちゃんに會うて御覽、そしたら姉ちゃんどんな人やか、あんたの、、知つてるかどうか、大概話しぶりでも分るやろ」云うて連れ出しなさつて、そないにしといたら、內證でけつたいなこと云はれたりする危險がないやろ思ひなさつたのんですけど、あんな工合に妙にこぢれてて口も利かなんだのんですと。「そしたらあない容子しいしてて、蔭でそうッと手ェ握ろ云ふことあの時から考へてたのんか知らん?」「そらどや知らんけど、あてがあの人放つたらかして姉ちゃんと、、のんやないか云うて、常時心配してしてんし。」「きつとあてを、、に使て結婚さいしてしもたら、もうあんたみたいなもん用ない云うて放り出すつもりやつてんなあ。」「結婚結婚云うてるけど、それかて、、、ためやのんで、ほんまに結婚出來るとは思てエへんねん。あんまり無理なこと云うたらあて生きてエへんこと分つてるし、姉ちゃんちふもんある方が外の男に取られる氣づかひない思て、今のままで出來るだけ續けてゐてたいねんし。」……そいで光子さんは、今日も此れから綿貫が待つてるねんけど、今日ばつかりはどないしても會ふのんイヤや云ひなさつて、姉ちゃん何んぞ工合よう云うて行なして頂戴云ひなさるのんですが、今急にそんなこと云うても怪しまれるばつかりやし、後が却つて惡いさかい、そない云はんと今日のとこは何んにもこんな話せなんだことにしときなさい、そのうちにあてがきつときつと手ェ切れるやうにしたげる、あて死んでも光ちゃんの命助けんと置かん、まさかの時はあの、、の奴、、てやる云うて、私も一緒に泣きながら力つけたげて別れましてん。

それが、……さう、さう、その誓約書の日附け見たら分るのんですが、……さうです、さうです、此れが七月十七日ですよつて、光子さんとそんな話しましたのんが多分明くる日の十八日のことで、ちやうどその時分夫の方は忙しかつた事件やつと片附いたのんで、何處ぞい避暑に行こやないか、ことしは輕井澤いでも行つてみよか云ひましてんけど、私はなかなかそれどこやあれしませんさかい、光子さん毎日毎日淋しがつてて、こんな體で自分何處いも出られへんのに、あんたほんまに羨やましいなあ云うてなさるし、行くのんならもうちよつと涼しいになつてから箱根いでも連れて行つて欲しい云うて、夫が何んや物足らん顏してるのんにも頓着せんと、そいから半月程云ふもんはいッつもいッつも夫の出かけるのん待ちかねて笠屋町い

飛んで行きましてん。何しろ私にしましたら、あれから此方光子さんが別人みたいにしほらしいに見えて、今迄は美しい悪魔みたいに思はれてたのんが、今度は急に鷲に狙はれてる鳩みたいに思はれて來て猶更いとしさ増したとこい、會ふたびごとに心配さうな樣子してなさつて前のやうな花やかな笑顏見せなさること一日もないのんで、まさかとは思てても短氣なことでもしなさつたらえらいこツちや思たら、氣が氣やあれしません。そいで私、「光ちやん、あんた榮ちやんの前ではせめてもうちよつと浮き浮きしてなさいや、そやなかつたら又感づかれてどんなこと云ひ出すか分れへん」云うて、「きつと、きつと、世間に顏向けならんやうに叩きつけてやるさかい、死ぬ程つらいことあつてもちよつとの間辛抱してなさい」云ひましてんけど、さてどないしたら綿貫叩きつけること出來るか、人欺したり陷れたりする計略は向の方が上手ですさかい。なかなかええ考へ出て來えしませなんだ。私はそない云うてるうちにも、又綿貫がおうちの外で待つたりしてたらどない云ひ拔けしたらええのんやら、あんな、、、の條件守らんかてちよつとも疚しいことあれしませんけど、「若シ、、、、カガ光子ニ對シ、或ハ他ノ何人カニ對シ、、、、、、、時ハ豫メ、、、、、、、、、アルモノトス」云ふ約束破つてるのんが矢つ張り何んや濟まんやうな氣イしてて、いつもおうちを出て來るとき、又あのぞつとするやうな聲が後ろから「お姉さん」云エへんかとビクビクしてたのんですが、ええあんばいにあんなりになつてますのんで、あんた男のこツちやさかい、、、さい交してしもたら、、、、、も糞もあつたもんやない思てんねんやろ、結局その方が此方も助かる思てましてん。さうかうしてるうちに光子さんは毎日毎日「姉ちやんどないぞしてくれへんか、もう一日も辛抱出來へん」云ひなさいますし、自分は最後の手段として、わざと綿貫誘ひ出して、、ちしようか思てる、その時は何處い逃げる云ふこと前に私に教せとくさかい、、、に、、、されたりしてえらいことになつた時分に、、、に綿貫の、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、もうええ頃や思たら摑まへに來てほし。そないにしたらなんぼ綿貫かて二度と寄り付くこと出來んやろさかい、自分の名譽も傷けること覺悟のうへでやつてみせる」此方で相談してることうすうす嗅ぎつけたらしいよつて、やるのんなら早い方がええ」云ひなさるのんで、「嗅ぎつけたらあの、、栖に取つてあてに何んとか云うて來るやろ、まあ、まあ、そんな非常手段最後まで取つときなさい」云うて、——ほんまにあの時分、よつぽど思案に餘つてしもて、先生のとこい智慧貸して頂きに上ろか思たくらゐですねんけど、そんな厚かましいことようせえしませんし、お梅どんに聞いてみてもええ考へない云ひますし、いつその

こと夫の力借ろかしらん、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、うそついてたこと或る程度迄は白状して、ただ綿貫の、、免れるやうな法律的の手段ないもんか知らん、話しやうに依つたら夫かて光子さんに同情寄せんこともないやろと、困つた揚句そんなことまで考へましてん。ところがその夫が、或る日突然、ちやうど私が行つてる時に電話も何んにもかけんといて笠屋町の宿屋い訪ンねて來たやありませんか。それが事務所の歸りしな、四時半ごろのことで、二階で光子さんと話してましたら、「奥さん奥さん」云うて慌てて仲居さんが駈け上つて來て、「今奥さんの旦那さんがお見えになつて、お二人さんに會ひたい云うたはります、どないしまひよ」云ひますのんで、「何んでやつて來たんやろ」とぎよッとしながら顏見合はしましてんけど、「兎に角あて會うて來るわ、光ちやんそこにすッ込んでや」云うて、玄關へ降りて行きましてん。

その二十七

「やあ、えらう分りにくいとこやなあ」と、そない云ひながら夫は格子のとこに立つてて、實は今さつき、伊勢の四日市い歸る人あつて港町の驛まで送つて行つて、戻りしなに心齋橋筋散歩してたら、光子さんのゐなさるとこ確か此の邊やつたなあ、きつとお前も來てるやろ思たのんで、急に訪ンねる氣になつた。別に用事あるのんと違ふけど、いつもお前がお邪魔に上つて厄介になるのんに、近所まで來て顏出しせんのも惡いやうな氣イするし、それに光子さんどないしてなさるか、お見舞ひかたがた是非お目にかかつて御禮云ひたい、差し支へなかつたら何處ぞで晩の御飯御馳走したい思ふねんけど、ちよつと外い出なさること出來へんのんやろかと、何氣ない風して云ふのんですが、どうもそれだけやないみたいな氣イして、「此の頃は大分眼立つやうになつてなさるよつて誰にも會はんやうにしてなさるし、なかなか外い出るどこやあれへん」云ひましてんけど、「そやつたらまあ、會うだけでも會うて行きたい」云ひますのんで、それでもいかん云ふ譯に行けしませんさかい、「どない云ひなさるか聞いて來るわ」云うて、「光ちやん、こないこない云うねんけどどないせう。」「どないせう、ほんまに。………姉ちやんどない云うたん？」「大分眼立つやうになつてるよつて誰にも會ひなされへん云うてんけど、是非ちよつとでも云うてるねん。」「何んぞ譯でもあるねんやろか。」「さあ、あてもそない思ふねんし。」「あていつそ會ふわ、そんなんやつたら。………今お春どんと相談したら、帶上げお腹の上い締めてその上から着物着なさつたらええやろ云ふよつて、そないするわ。ほんまに懐ろい綿詰めるやうになつてしもたなあ」云ひなさつて、そのお春どんに帶上

げ借つて、「お客さん階下の部屋い通して待つててもろて」云うて、その間に私が手ッ傳うて身ごしらへしてましたら、又お春どん上つて來て、「そない申しましたけど、一分か二分でええさかい玄關でお目に懸る云やはつて、上りやはれしません」云ひますのんで、そやつたら早せんならん云うて大慌てに慌てて二人がかりで着せましたもんの、冬やつたらどないなと胡麻化せるのんですが、肌襦袢の上に明石の單衣もん着てなさるだけやのんで、、、、、、、、、、、、持ち上つてしもて、どないしても、、のやうに見えしません。「姉ちやんい、あてのこと何ケ月や云うといたん？」「何ケ月云うたか忘れてしもたけど、人眼につく云うたぐらゐやし、六ケ月か七ケ月になつてんと工合惡いなあ。」「これぐらゐやつたら六ケ月に見えるやろか。」「もつと全體が圓うに膨れてなんだらいかんし。」そんなこと云うて三人ともクスクス笑ひ出しながら、「何んぞもうちよつと、、、、、、もん持つて來まひよ」と、又お春どんが、、、やらタオルやら持つて來ましたのんで、「あんたも一ぺん下い行つて、とうちやん誰ぞに見られたらいかん云ひなさつて、めつたに玄關いも出て來なされしませんさかい、兎に角お上り下さい云うて、なるべく暗いあんまり見えんやうな部屋い入れといて頂戴」云うて、、彼れ此れ三十分も待たしといてから、やつとどうにか六ケ月の、、こしらへて行きましてん。「そんなりでかめへん云うたんやけど、浴衣がけでは失禮や云ひなさつて、着物着かへてなさつたのんで、……」と、そない云ひながら夫の様子うかがつてますと、折れ鞄傍に置いて、キチンと洋服の膝がしら揃へてすわつて、「却つて御迷惑か思ひましたけど、あんなり御不沙汰してますし、一ぺんお見舞ひに上らんならん思てたとこいちやうど此の前通りかかりましたさかい」云うて、氣のせゐか光子さんのお腹の邊ジロジロ見てるみたいですねん。光子さんは「いいえ、うちこそいッつも姉ちやんに我が儘ばつかり云ひまして」——と、自分のために避暑に行くのん止めてしまひなさつたのん氣の毒やとか、姉ちやんのお蔭で淋しい思ひ慰めてもろて、たいさう有り難い思てるとか、あんまり口數利きなさらんと殊勝らしい聞えるやうにあんじよう云ひなさつて、團扇で帶の上のとこ隱すやうにしてなさるのんですが、お春どんが氣イ利かしてくれたと見えて、晝間でも電氣燈さんならんやうな薄暗い部屋の一番暗い隅の方にすわつてなさつて、なんせ風通しの惡い上にお腹にいろいろなもん詰めてなさるのんで、づくづくに汗かいてはあはあ息してなさる恰好云うたら、いかにも本物らしいて「巧いこと芝居してなさるなあ」思ひましてん。

夫は直きに座ア立つて、「飛んだお邪魔しました、どうぞ又お出かけになれるやうになつたら遊びに來て下さい」云うて、「もうおそいさ

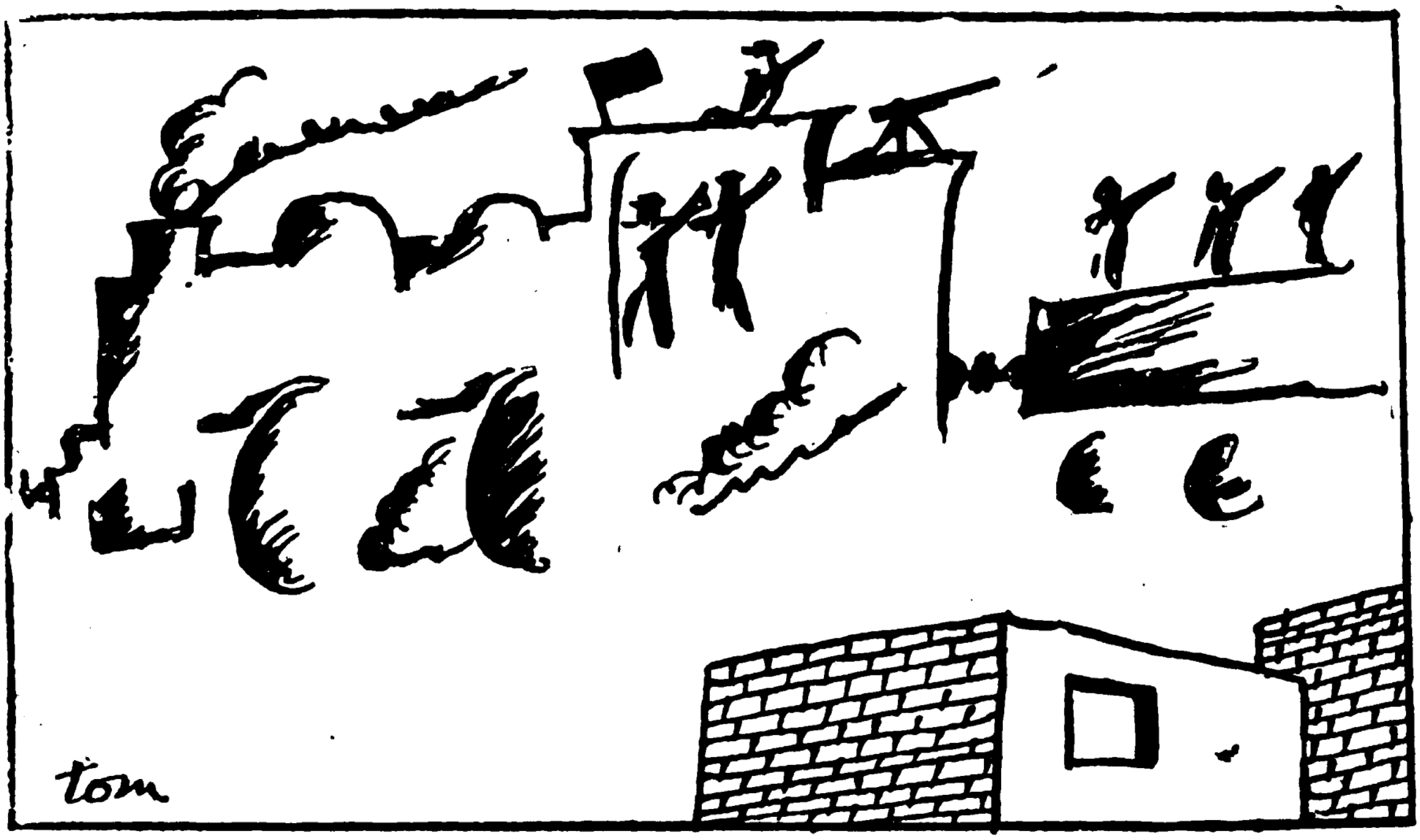
いお前も一緒に歸つたらええ」云ひますのんで、「何んぞ譯あるに違ひないよつて今日は此れで歸る。明日きつと待つてて頂戴」と光子さんにそうッと云うといて、しぶしぶ連れられて出て來ましたら、「バスに乘つて行こ」云うて四つ橋の停留場い出て、そいから阪神で家い歸るまで、夫は不機嫌に默つてしもて、何云うても生返事しかせえしません。家い這入ると洋服も脫がんと、「ちよつと二階いおいで」云うてどんどん上つて行きますのんで、此方もあらかた覺悟きめて附いて行きますと、寢室のドーアばたんと締めて、「まあそこいおかけ」と差し向ひに椅子にかけさして、暫くは物も云はんと、ほつと息ついて考へ込んでるのんです。「あんた、今日、何で突然あんなとこい來たん？」と、重苦しい空氣破るために私の方からそない云うてやりましたら、「ふむ、……」云うて又考へてて、「お前に見て貰ひたいもんあるねん」云ひながらポケットから事務所用の封筒に這入つたもん出して、テーブルの上にひろげたのん見ましたら、そんなり私は眞つ靑になつてしまひましてん。どないしてそれ手ェに這入つたのんか、「ここに署名してあるのん確かにお前に違ひないか」云うて夫はあの、、眼の前い突きつけてるのんです。「斷つとくが、僕はお前の心持ち次第では決して事を荒立たさう思てエへん。これが僕の手ェに這入つた徑路についても聞きたいのんやつたら聞かしてやる。けど第一に、事實お前が署名したもんか、それとも此れはニセ物やのんか、その點ハッキリさしときたい。」……ああ、綿貫に先越された！私の持つてる、、の方は箪笥に鍵かけて隱したありましたから、此れは綿貫のんに違ひないので、こんなことするために此の、、誑かしたのんか！ほんまに私は、此なひだから夫に口利いて貰を思てて、光子さんのことも打ち明けた方が得なことは話してしまを思てたのんに、さつき不意討ちに笠屋町い訪ンねて來られて、あないなつたら嫉妬してなさるのんうそや云ふこと今更云ひ出しかねてしもて、うその上塗りしてしもてんけど、こんなことになるのんやつたらあの時白狀しといたらよかつた！

「おい、默つてたら分らん、返辭したらえやないか」と、夫は出來るだけ腹の蟲おさへて、やさしい、靜かな聲出して、「默つてるとこみたら、これお前書いたと認めてもええねんなあ？」云うて、そいからだんだん話し出すのん聞いてますと、五六日前に今橋の事務所の方い突然綿貫が訪ンねて來て面會求めた。そいでどんな用事か思て應接間い通して會うてみたら、「今日お訪ンねしたのんは、實は折り入つてお願ひしたいことあるのんです」云うて、「多分あんたも御承知でせうが、僕と德光光子とは結婚の約束したあるばつかりでなく、既に光子は僕の種までも宿してますのんに、此方の奧さんが中い這入つていろいろ、、しなさるのんで、光子の仕打ち此の頃日增しに冷淡になつて、今の

工合ではいつ結婚してくれるのんか分らんやうな狀態にある。就いてはあんたから奧樣に意見して下さいませんか」云ふよつて、「僕の家內が何んで、、するのんですか。詳しいことは知りませんけど、家內はあんたがたの戀愛に同情してて、一日も早う結婚しなさるのん祈つてるやうに聞いてましたが」云うたところが、「あんたは奧樣と光子とが、、、、してるか、ほんまの事情御存知ないのんです」云うて、今でも、、、、、つづけてる云ふことそれとなしに仄かした。けど初對面の男の話そのまゝ信用する氣もなかつたし、現にその男の、、、、るもんが別に、、の人戀ひしてる云ふのんもけつたいなし、何んや此の男氣イ觸れてるのん違ふか知らん思てたら、「お疑ひになるのん尤もですが、ここに確かな證據あります」云うて此の、、、出して見せた。夫はそれ讀んだとき、自分の妻が未だに自分欺いて、、、、、、、、ことにも不愉快感じましたけど、それよりもなほ不愉快やつたのんは、妻と見ず知らずの男とが自分の知らん間に「、、、、、、、、」の約束してる云ふことやつた。第一人の女房とこんな、、、、、、、、取り交しといて、その女房の亭主の前いれいれいしいに見せつけながら、それに對する一言の云ひ譯もせんと、まるで刑事が犯罪の證據摑んだみたいに得意さうにニヤニヤしてる此の男の氣イ知れん思たら一層むかむかして來たとこい、綿貫の方は

「× 柿內園子、× 綿貫榮次郎」と書いたあるとこ指しながら、「あんたは此處に署名したあるのん、あんたの奧樣の手エや云ふことお認めになりますやろなあ」云ひますのんで、「成るほど、見たとこではたしかに家內の手のやうですが、それより先に伺ひたいのんは、ここに、、として署名してあるんのは何處の人です」云うてやつたら、「それは僕です、僕が綿貫自身です」云うて、まだその皮肉悟らんみたいに平氣な顏してる。「此の署名の下に、、、、、、、、、、、、やうなもん何んですか」云うたらそれはこないこないの譯でと臆面もなう其の時のこと細かうに話し出すのんで、みんなまで聞かんうちに腹立つて來て、「此の、、、讀んで見ると、あんたと、光子さんと、園子との關係は詳しいに規定してあるが、園子の夫である私に就いては何の考慮も拂はれてをらん。私ちふもんは全然眼中に置かれてん。あんたも此處に署名してをられる以上當然責任分たれるもんと考へるのんで一應あんたの立ち場からその辯明求めたい。まして今のお話のやうやと、此の、、、は園子の意志から出たやなうて、半ば強制的に結ばれたさうに思はれるが」云うてやつた。そしたら綿貫恐縮するかと思ひのほか相變らずニヤニヤ笑てて、「その、、にもある通り僕と園子さんとは『、、、、、德光光子ニ對シテ有スル、、、、、、、』に依つて結ばれてるのんで、その關係は園子さんの夫でをられるあん

、、とは始めから衝突してます。もし園子さんがあんた眼中に置かれたら、光子とあないな間柄になることもなかつたやろし、こんな、、、交す迄もないいし、それこそ僕の何より望むとこですけど、妻たる人が、、、んもんを他人の僕がどないすることも出來しません。僕に云はしたら此の、、のやうな關係認めることが、既に園子さんに對して非常な讓步してるのんです」云うて、あべこべに夫の監督の不行き屆き恨むやうな口ぶりで、、、の約束した云ふんのは、、したのんと譯が違ふ、そやから自分はそないに、、、なことしたとは思てエへん云ふのんです。（つづく）



鬪ひを襲ぐもの

岩藤雪夫

1

漁船の消えた靄の海を染めて太陽が半圓に沈みかけた。

――、、、、欲しい！――

堤防の下で藻がそよいでゐる。艪の軋む音がする。

ハガネ色の夜が墜ちて、滿ち來る放水路の潮騷に春の匂が鋭い。

心臟の鼓動と同じ速度で太陽が沈んだ時彼はもう一度叫んだ。

――、、、、欲しい――

濱の沖仲仕組合のKに頼まふ――外國船マドロスから貰つたといふ靑貝の象眼入り、、、、をKは持つてゐる――彼は二十間の距離で廻轉するギアーの一枚の歯を打ち落す自信がある。若い頃、××兵器工廠のテスト工をしてゐたから。

、の標尺を彼奴の、、、、、。

彼は、昔上海の白色恐怖暴動の折に、（三十九字削除）の歡喜を覺えてゐる。

――彼奴の、、、、、、、で血肥りに膨れてゐるだらう――

濁風の流れる堤防を歩き乍ら彼奴の反逆に鑄込まれた目玉が嫉視を擅にする。

基礎工事に數百人を要したたらう混凝塀の底の大建築に彼奴は住んでゐる。夜、玉川砂利を敷きつめた正門を持つ、、、、、、、磨かれた長い廊下を土蜘蛛のやうに這ふ。彼奴は奥座敷の柔かい毛皮に埋れて、、の計畫に餘念がないだらう。鍵穴から覗くと電燈の花笠に光る禿げ頭がしやれた調度の中に君臨してゐる。

扉をノックする。

——お這入り——

と工場で現場視察をする時のやうに鷹揚に答へるだらう。、、、、、、を彼奴の胸に据えて扉に合鍵を下してから、扨て、落付いて言はなければならない。「君には、、、、、、、、、より他に自由がないやうに、、、、、、、より他にないんだ。」と。

きつと、彼奴の虫も殺さぬ温容は顔面筋肉が一瞬、ベルトに巻き殺された秋間和喜市の身體に似てぐしやりと歪むだらう。

彼奴も、、、、、、、の前で悲鳴を揚げたり狼狽えたりする程馬鹿ではない。長い間、、、、、、して來たあの尤もらしい嘘よりもつと上手な嘘を並べるかも知れない、そして隙を見て正面の飾の、、、、の枕元に通ずる呼鈴を押すだらう。

だがそれが何だ。營養過多の垂るんだ筋肉は、、、、、、、、、、、、、、、に適ふものか。打ち下す二十封度ハマアの力を整調する（四十一字削除）

もう、その時こそ長い間ためておいた笑ひを容いつぱいに投げ捨てもいいんだ。彼奴の瞳に映る自分の笑ひ顔を睨み乍ら、静かに力を罩めて、、、、「さよなら！」とも言はずに（五十三字削除）

貧困な失業時代の姙娠から營養不良で畸形兒として生れた彼の筋肉の模型のやうに鯱ちよこ張つた彼奴の身體が小氣味よい、、、

然し忘れてならない事は、、、、、、、、彼奴の瞳の中に、××自働車工場の、、、、、、、、果した自分の笑ひ顔が石のやうに刻み込まれて居るか否かを調べる事だ。若しそうでなかつたなら彼奴は、、、、、、、、、を感じてゐないんだ——その時廊下を走る足音や扉をノックする響が激しくなつてもかまはない——（二十九字削除）老木の年輪のやうに彼奴の心臓の断面には、、の年輪が入つてゐるのかも知れない、、、、十本の指の中で、、、、、、、、、！（二十一字削除）

だが、現實は凡てが無念だつた。

二呎の送風器ベルトに巻き込まれて挽肉のやうに、、、、秋間和喜市の死に冷淡であつた會社に、、してストライキを敢行して以來二十有餘日になる。

資本家の常用手段である工場閉鎖が行はれた。大會社フォードに買收されて、近い内に組織變更をしやうとしてゐた會社としてはもつけの幸の爭議だつたのだ。嘆願書は蹴られ、團體交渉權も要求書も蹴られた。訓練の足りない組合員は續々と逃避して行衛を晦ましたり買收されたりした。重役はどうしても爭議團代表と面會しない。工場、本社、待合、別莊、自宅、と轉々と逃げ廻る彼奴の跡を爭議團代表は執拗につけ廻した。

（六十七字削除）爭議團の統制は引こ拔かれる鬪士の數に比例して亂れた。

二十幾日の苦鬪の後に與へられたものは屈服か組合の崩壞かの他よりなかつた。だが工場閉鎖された以上屈服するにも相手がなかつた。

今日、そして、爭議團組織部で最後の討議が行はれ、、、、、、決議された。抽籤によつて選ばれた七人の中に彼も居た。再度の抽籤は彼が、、、、となる事に決定した。

、、、、の總ての、、は七人に委託されて練られた。

彼は考へた。、、、、、、がこの慘敗に傾きかけた爭議を多少とも有利に展開し得るかも知れない。だが解決後工場閉鎖が解放され機械が動き出し再び、、が續けられるだらう。彼奴、三石資本金融系統下に連なるあらゆる工場あらゆる職場でそれが行はれるだらう。

（六十一字削除）

（七十四字削除）

——明後日が、、だ——

——明日、彼の組合のKの所へ行かふ——

星がアムペア・メータアのやうに瞬いてゐる。

放水路の堤防の果から横にきれて潮の飛沫の白く煙つてゐる防波堤に出ると、波の頭の上で流星が斜に空を切つた。

——、、、、欲しい——

堤を降りると銀色に孕んだ新芽を縫ふ小川柳の枝が軟かく頰をなでた。

——妻は未だ内職に夜を更かしてゐるかも知れない——

防波堤の下の長屋の奥に彼の小つちやい家はある。

一枚一錢の下駄の疊表の内職に肩を凝らしてゐる彼の妻は、姙娠ケ月の呼吸を乳房に波打たせ乍ら月末の仕拂ひに蒼褪めてゐた。

彼は彼の階級的、、が膨れかけた妻の腹に向つて動いてゐるのを意識した。

2

土間には踵の傾いた皮膚病みたいな靴と、片ちんばの下駄が並ん

ゐた。

家に入ると彼は上衣に滲みた爭議團詰所の蒸せつぽい匂ひを嗅いだ。

妻は鑄物のつらのやうな顏をささくれ疊に押し當てて一枚の毛布の中に寢呆けてゐた。膝前から赤いネルがくさび型に覗いてゐる。疲れた同志達の鼾が隣室に鳴つてゐた。編みかけた內職の下駄表が散らばつてゐる。

『おい、俺は何處に寢るんだ？』

彼は妻の枕もとに立つて呶鳴つた。

『あら、おゝ寒い、何時かしら』妻は米汁のやうな涎を拭つて起き上ると髮をかき上げた。『今夜は、毛布一枚だけよ。又二人泊りに來たの、下宿を追ひ出された爭議團の人が……』

──皆の中にもぐつて寢るか、別になら別にで、蒲團の一枚位は殘しておいて吳れたなら承知できる！……一枚の毛布しかないのに未だ、區切られた別な部屋で寢やうとする妻の態度がいけない──

平然として一枚の毛布に寢る事を强いる妻の目の色を見ると彼は、片手にハンマナを振る勢で拳を打ち降ろした。

『貴樣、この人道主義奴！　いい氣持になりあがるな、』

妻は横鬢をおさへて、ちんまりした鼻を歪ました。

『だつて！』

『馬鹿、そんな事で鬪へると思ふか？』

『ぢあ、やらなくつてもいいの？』

『當り前だ、雜魚寢しないのなら、一枚位は殘しとけ！　世界中の勞働者が皆ぬくぬくと暖まつてるとでも思つてゐるのか……』

『ぢあ……』

妻は立つて隣室へ行きかけた。

『もういい、俺は寢るんだ。ドヂを踏むな！』

妻は、外で貯へて來たハケ口のない怒りを家庭で爆發させるより外に道のない、勞働者の心をよく知つてゐた。

彼女は、愛撫するやうな眼差しを夫に與へながら垢に光つた五枚の座蒲團を敷いた。

ナツパを脫いだ彼は拔かれた古釘のやうに倒れて大の字に寢ころんだ。

『お茶を入れませうか……』

『星は、出てる？』

『俺が一人でやる事が一番いい……』

『明日、みんなの汚れ物を洗はなければあ……天氣になるかしら』

『……嵐の日の方がいいんだ……』

『冗談ぢあないわ』

妻はよれよれの手拭地に着換へて、膨れた腹の上に細帯を捲きつけた、彼女の皮膚は糸取女工よりも血の氣を失ひ褪せた湯もぢの下で荒れてゐた。

もう稀にしか、一昔前程の、、を感じなくなつたのに、こんなにも早く二度目の受胎をしたのは不思議だつた。

彼は、此度の（十字削除）食はされるだらう事を思つて大きい黒子のある妻の臍の邊りを眺めた。

『おい、お前どうしても嫌か、』

『何？』

『胎の兒さ、三ケ月になれあ、、、、』

『ええ、でも私一人、、、、』

妻はレールのやうに彼に添つて冷たい足を絡んで囁いた。

『駄目だ、この上に經濟がとれるか』

彼は、同志に敎へられた、（十字削除）妻に語つた。

『どうだ、俺が、、、、、』

『いやいや、そんな事、、、！』

妻は彼の首を揺すぶつて訴へた。

一年前、味噌と大根オロシばかりを食つてゐた失業時代に妊娠して生れた子供は、「××縫合不完全畸形兒」と醫者に宣告を與へられて生後二十四時間で死んだ。腹の大穴から大小腸が露出してゐた畸形兒は、二十圓の代價で、標本用として醫師に買ひ取られ、兩親を飢ゑから救つた。畸形兒は今、黄色いアルコールの中に眠つてゐるだらう──以來、彼夫婦、、、、、、。

明治卅八年の戰爭最中、、、、、、、に苦しんでゐる時に生れ、貧乏と困難の中に育つた彼も發育不完全で、恥かしい位の小男になつて終つた。それは世の中へ出てからの彼に色々な形の困難を與へた。

『我鬼さへ滿足に育て上げられない俺達だ─（十一字削除）』と彼はよく言つた。

『いや、』

妻は、、、、、、生れて來る子供の未來を考へると言つた。彼は考へない。

『だから、、、、、、たいんだ』

『ちがふわ、、はあなたへの義務ぢあないんだから、、なんか能きないんだわ！』

『運動してゐる以上、最小限度の經濟生活をしなければならない……』

畸形兒を生んで以來、妻は不承不精、彼の意志に從つて、、を續け

てゐた。
受胎の一ヶ月目の或夜、妻は誇らし氣に言つた。
『ね、又、出來たわ、子供が』
『何、何、馬鹿野郎。何をボヤボヤしてゐたんだ？　俺達は、新婚旅行をしてゐるんぢあないぞ』
『だつて、あなたが惡い、』
『俺が惡いつて、何ひませうかねだ、何處が惡いんだい』
そして、妻は、今から四ヶ月程以前、彼が地方へ組織運動に出かけて、一ヶ月許り家を明けて歸つて來た夜の事を語つた。
『ね、、、、、、』
『馬鹿、貴樣、、、、、、、』
『御免、、、、、、、、妾、あの日はたしか、、のやうに周章てゐたの』
『お前の無責任からだ、』
彼が、幾度、、、と言つても、彼女は承知しないで二ヶ月目になつた。
『でも、私、、、、、、、、それにもう、動くのが解るんですもの……
……』
と彼女はそれから言ひ續けて來た。

無理に說き伏せやうとすると妻は、第一の呪はれた子供を生んだ時のやんちやさで激しく泣いては彼を手古摺らせた。彼も、妻の胎兒に對する動きがたい愛着を見ると、（二十二字削除）勞働者の暗い生活を呪咀はずにはゐられなかつた。
妻の受胎は彼をいらいらさせた。次に困惑に陷れた。今は、、、だけがある。
然し、今は、今夜こそ、決定せねばならぬ時だ。
『絕對に、、、！』
『いや、いや』
妻は調節器ボールみたいに首を振つて承知しない。、、、の自分の、、を言ひ得ない彼は苦しかつた。言へば妻は納得するかも知れない、だが、それは、同志との堅い約束の下に、、された、、である。ガムシヤラに攻め立てゝゐる內に彼の胸板に顏を埋めて妻はさめざめと泣き出した。
防波堤を打つ滿潮の波頭の響が聞える。
子供を生むとする、生長する、彼の經濟的負擔と妻の生活が重くなる。（十六字削除）
『波があんなに大きくなつた。晩そいんだぞ、もう寢ろ……泣くな、泣く前に考へろ！』

彼は妻を抱いたまゝ靜かに、膨れた腹に對する憎惡を鳩尾に押へつけた。

だが自分の子供の憎い人間が何處にゐるだらう！　子供ぢあない。出張つた腹ぢあない。

泣いてゐる妻の持つ胎兒への激しい愛情は、（十九字削除）

そして、彼の頭の中にとぐろを捲いてゐる、、、、、、は一層彈力を貯へてキリキリと引き緊つた。

感情の昂ぶつて來る頭に響く潮騷を受けて彼は低く叫んだ。

――、、の標尺を彼奴の、、、、、――

3

上陸した水夫が胸を張つて歩いてゐた。

稅關の赤煉瓦と、N・Y・Kの青ペンキ建てに挾まれる鋪石道を拔けると、齒車型の波止場だ。

黒光る起重機が幾臺も太く蒼空を截つて動いてゐる。その下で、マドロスと沖仲仕と商人の喚き聲が三角波のやうにこんがらがつてゐた。

煤煙と汗と潮の匂ひがあつた。

大和組の事務所でKを訪ねる、とアイヌのやうな親方が鼻の向きを變へて答へた。

「奴あ、今、向うの六號棧橋でセメント荷役をしてまさあ、晝になれあ、逢へますよ！」

六號棧橋の腕の根元に立つて、二千噸餘りの鐵船の横腹から棧橋へ渡された數本の板の上で、赤銅色の肩に陽を浴びた沖仲仕達が、掛け唄を歌ひ乍ら交互に半身を振つては肩から肩へセメント袋を渡してゐた。それは瓦斯エンヂンの吸入瓣のやうに調子が整つてゐる。

あれやと、さんやん
これやと、さんやん
××××××まで貰ふたが、
さんやん
……丁度そのときあ、×××だんやん
あれやとさんやん
これやとさんやん

ゆるんだ春の波が彼等の足の下で白泡をはじいてぢやれ合つてゐる。

はづれの渡し板の中央にKの角い顏がセメント袋と一緒に動いてゐる。時々、白い齒をかがやかして隣りの沖仲仕に話しかけてゐる。

―Kは、一番放浪者が多いと稱せられる沖仲仕の中に、、、、、、

かかつてから四年になる、荒い潮風と殺伐な港の氣が益々Kを沈着に剛健にしたやうだ。

颯爽と唄ひながら働いてゐるKの姿を眺めてゐると昨日からの怒りでコチコチになつた腦味噌がだんだんほぐれて來る。

沖仲仕達の唄ふ歌は、起重機のチエンの響や、港を泳ぎ廻つてゐる發動機船のパンパンいふ廢氣と共に四月の空のてつぺんまで跳ね上る。天空は青く熱つぽい。

彼はその金屬的音響に漲ぎる港の健康な風景に惚れこんで長いこと、、、、、を忘れてゐた。

晝、沖仲仕の仕事の列が亂れた頃、彼は大聲でKを呼んだ。

『やあ、先づ君達の果敢な闘爭を、僕は喜ばなきあならない!』

Kの萬力みたいな掌が彼の胼胝だらけの手を握つた。Kの掌は板のやうで肩にはセメントが積つてゐる。

『うん、經驗と、訓練と重ねてゐる。』

彼はKの角い顏に答へた。

二人は齒車型の波止場を歩きながら話した。投錨したインダラ船のデツキで火夫が炭團みたいな裸身を洗つてゐた。

理由を告げて、、、、、の借用を申出るとKは敢然として首を振つた。

『周章てちやいけない。、、、、、ではないぢやないか、、、ぢあないか……』

『僕は絶對に借りたい!』

『(三十三字削除)。』

二人はかつきり七度、波止場を行き來した。

頑强なKの態度にシヤツポを脫いだ彼は燒きの戻つた發條のやうにげんなりして波止場を立去つた。

後からKが首を伸ばして叫んだ。

——おーい! 君の感情はまちがつちやあゐないんだぞ——

町の街路樹は若葉に輝いて空氣はねばつてゐる。

——矢張り、、、、、、、只それだけか——齒がゆい——

幻想がでつち上げた行動は實現能きない——彼は自分に癪にさはり乍ら歩いた。

凡てがばらばらのやうに思はれた。目に見えぬ糸が萬物を操つてゐるやうでもある。

昨日と同じやうな顏をして人々は歩いてゐた。睫毛の下に深い哀愁がある。

昨日も今日も、明日もあさつても、我々を繋ぐ鎖はがちや〳〵と鳴

ゐるだらう。そしてたゞそれだけだ（二十八字削除）知つてゐる事は「日本の勞働者のこの、、、、、、、、、、だ」といふ事だけだ。

彼は街へ出ると體の匂ひを嗅いでみた。

鋭敏な、、、は幾日も入浴しない爭議團員のあのすえた、、のやうな臭氣を知つてゐる。

方六尺にその臭みが漂ふなら警戒しなければならない。

市電の交叉點をよ切ると自働電話の箱から、印半纏の男が彼に合圖した。秘密指導部と爭議團本部との連絡員、變裝した同志岩野だ。

「朝のレポーターが歸つて來ない。」

、、は指導部を探索し初めたらしい。

岩野の目は四方に配られる。

『連絡地點は？』

『變更した、未だ今日は、一回の連絡もとれない……』

『本部の情勢は？』

『變化なし、御野村氏が來て講座が持たれてゐる』

『うむ、では、たのむ……』

二人は交叉點で直角に別れた。

岩野は彼等組織部の計畫を知らない。

早く、早く、、、指導部が發見されないうちに、、を、、、ねばならない。

血脈が歩行をせき立てる。

――（十六字削除）………とKは言ふ。それが正しいか、正しくないか彼には解らない。只、、を欲しただけだ。が、、、、は遂に手にない――、、、、、、だけが殘されてゐる。

彼は七人の集つてゐるだらう本部へ、アブレまいとする朝の自由勞働者のやうに急いだ。

本部の附近には、、、、と、、が異邦人同志のやうに睨み合つてゐる。

『警視廳の調停課を動かす氣は指導部にはないのかしら……僕とこのお袋や女房は狂ひみたいに怒るんだ……』とピケットの一人が言つた。

『馬鹿言へ！　我々の、、、、する所にこそ、、があるんだ……』

團員の勇氣はくぢけ氣味に見える。彼は自分のけつをひつぱたくやうに呶鳴つた。

爭議團本部の二階に土管みたいな聲がある。講座を終つた評議會の御野村氏だ。

『……諸君は、機械の歯車の一つの歯だ。一つの歯が破損しても、機械は運轉を中止せねばならない。(三十九字削除)

我々と彼等との、、は力の、組織と組織との、、、。……私は諸君が(十字削除)私共と共に、、、、、を要求するものである……』

雷のやうな拍手があつた。

七人中四人は獨身者だ。四人はその夜、××町へ遊びに行つた。

『若い人の、寢顏を見ると、考へさせられる、あの脂の浮いた苦しげな眉のあたり……』

四人は身體中につつぱつた憂鬱をぶちまけて歸つて來るだらう。

、、の日の夜が、晴れたまゝ落ちた。

妻と散々に、、を爭つた彼は――勝手にしろ！　お前の實踐が俺を承認させて見ろ――と家を飛び出した。

約束の××町通りの居酒屋に、、、、、、、、、、。

――、、、よいか――と皆の目は言ふ。

――よし――と皆の堅く結んだ脣が答へた。

『明日からの本部は？』

『あのまゝで留守番を一人。移動本部が出來るだらう……』

七人は十間づつの間隔を置いて歩いた。天心の月が黄色くさえてゐる。

先達はセルの着流しの阿久利、ソフトにレインコートの有舎はステツキを水車のやうに振り廻してゐる。小男の添野がモジリの魚屋姿、次がナツパを背廣に着換へた彼、後はヨボ金こと金帝威の日給を皆飲んだくれた自由勞働者といふ格恰、奈良縣人美男子の千鳥と豐島は工場通ひの通常服。

春の夜氣がしつとりと降りて重い。

アセチリンの香が歩道に添ふアカシアの若葉にもつれて夜店商人の喚き聲がかん高い。明るい人の顏がふんだんに流れてゐる。

――俺達は、、を形創る一つの鋲鉄だ――と同志草山は云つたが人ごみの中を行く七人は濁流を溯るミズスマシのやうだ。

添野は女を見る度にふり返りふり返り口笛で進んで行く。

、、の一廓を折れると屋敷町が續いて裏通りの塀にぶつかる。工場のトタン塀に――××自動車株式會社――と横に長くある。最後の文字の角を曲ると捨てられた野つ原が月の下に濡れ展つてゐる。七人は壞れた移動エンヂンの蔭の草にしやがんで、、、、をした。

――、、、はヨボ金、、、、、盡したら勝手に散る事――

『では明日からの七人の連絡場所は××公園の西の東屋……』

『本部の情勢次第で第二の今日があるかも知れない……お互に注意しやう……』

『それが必要な場合は決定通り、山谷に、、、になつてもらう。』

『本部レポートは有舍、君に頼む……』

『、、には、』と阿久利は言つた。『、、、、、、、、があるさうだ。ボンネット(、、、、、、、、)を開ければ、一番手近かな奴は、、、だ。勿論(十二字削除)。』

七ッの影が草の上にちら〳〵した。

『諸君!』彼は短くなつたゴールデンバットを地に叩きつけた。『この煙草の火、風に散る莨の火の面白さを知つてるかい……』

誰も應へない。一度莨火のやうに亂れた吸ひがらは忽ち夜の中に消えた。

『ウフッフウ――』彼は嗤つた。

『さあ、落着いてやらう……』

阿久利が先頭に立つた。

(三十三字削除)

ヨボ、金帝成は、、、、に耳をそば立てて這ひつく張つた。六人は、、、、に首を集めた。、、、、、、。

『どけ!』

阿久利が、、、、、、、、、とかけた。蹴でけると、、は古鞘のやうに落ちた。(十七字削除)

彼はズボンの尻ポケッから、、、、、、、、、、をぬいた。五人も各、、、、を右手に握つた。

『這入れ!』

と阿久利が腰を伸ばした。

六ッの影が一つ一つ靜かに、、に吸ひ込まれた。(二十三字削除)窓から斬りこむ月光がこちんと怪しい蔭を作つてゐる。、、、、、、、、、が一條に白い。

六人は散兵のやうに走つた。

、、、、、、、、、ヨボ金は耳に掌を當てた。、、の中の空氣が躍つてゐる。(六十三字削除)等が明つきりとヨボ金の耳にぶつかるの[illegible]ヨボ金は目と口を大きくして聞いてゐた。それは秋間の靈が喜びに[illegible]すり泣いてゐるやうに響いた。

十分より長くはかからなかつた。

六人が靜かに姿を現はした。、の傍で一人が手を揚げた。ヨボ金は眞先に(二十八字削除)

野つ原は默々と月の下に濡れて草が小波程にそよいでゐた。犬の遠

吹ゝがした。遠くの空で仁丹が青と赤に明滅してゐる。

『みなよろし……』

と金は、に言つた。

順ぐりに、、から首が現れた。

七人の他人のやうに別々に町へ出ると、異つた方向にむかつた。或者は明暗に巣をかけて餌物を睹す蜘蛛のやうにすばしつこく、或者は月給袋を貰つた日のやうに澄まして。

、、、は何處にでも居る、そして何處に居るか解らない。

半年程以前、×××へ同志を、、、、行つた時の事を覺えてゐる。

『、、、、が一人も居ない、もう直き歸つて來るから待つてゐろ。』

と小使が言つた。

勝手を知つた控室へのそりと入つて腰を下した。メーデーで二年來馴染の、、の野中といふ、、、が他の二三人と來てゐた。彼等は和服姿の地味な彼をその×××の、、、、と感違ひしたらしい。

『やあ、留守中に失敬……』と一人が言つた。『この町の評議會系の奴等の、、に來たので電話を一寸借りてゐる……』

頭株らしいのが電話をかけてゐた。『ウン、さう、聞いたかね、伊達……イダテだ。二十九才、福岡縣小倉市船頭町〇〇番、……寫眞は近日中に送るさうだ。こ奴、××地方の有力な指導者なんだ。今日も相當な、、、、、、。それから×××組合の〇〇と〇〇の住所も判明した。次にもう一人、こ奴は、伊達とハルビン日露協會時代の同窓で、近日露西亜から歸る男だが、伊達の紹介でこの男も、、なるらしい。ウン、姓名は伊藤貢、年も戸籍も今は不明だ。今月の〇〇日に××の伊達の家に來るから、、、、、、、、、話だ……寫眞はあるさうだ……』

彼は××××××××會の伊達を知つてゐた。多くの勞働者の尊敬を受けてゐた指導者だ。——それが、、、、きしてゐるとは？ 目前のあらゆるものが崩づれ落ちさうに視野の中でぐらついた。、、、、、二人の同志の住所も、、、、、、、その上まだ、、、、、、、、、、、でゐる口吻が見える。

「モシモシ、」と再び頭株は電話をかけ直した。「福岡、あゝさう……

彼は息苦しく打つ胸を抑さへ、、された組合員に時折——どうだ、毎月、、、、、出すが、、、を知らせないか——と、、をかける、、、、、、さを擬つと考へた。（三十九字削除）ふとした生活の苦しさから、、される人々の誤つた態度を誰が責任を持つべきだらうか！ その人も憎い。だが、もつと憎いのは「議會に我々の代議士を九十九人

まで送つた」最後の機までも（十一字削除）

「あゝ、モシモシ、福岡、、の〇〇君ですか、」

二分もかからずに通ずる、、長距離電話だ。

「書取つて下さい、福岡縣小倉市船頭町〇〇番地、伊達信治、本人は今回から××××××××會内部から、、、【ゥ】、、、なりましたから、一應御通知します……以上。

こちらは、、、、では……」

電話は切られた。そして「やあ、やあ、……」と言つて一同は出て行つた。

臍を噛みたい苦がい記憶である。

、、、は何處にでも居る、そして何處に居るか解らない。七人があの夜散つてから五日目、彼、山谷は深川の同志の家で、阿久利とヨボ金はそれぞれの、、、、、、、。

未決監房は老朽船の汽罐場みたいにむんむん息苦しかつた。運動場の隅、赤煉瓦の高い塀から松の枝が一本下つてゐた。壞血病の豫防に毎日彼は臭い松の葉を盗んでは食つた。滅茶苦茶に廣い牢獄の空が鐵窓の外には在つた。

蚤と南京蟲とに身體中を蝕はれながら三人は刑の規まるのを待つた。

4

（二十一字削除）七日目に重役は、會見を申し出た。——秋間和喜市の遺族には二ヶ年半分の日給と工場法第四十九條によつて日給二十日の埋葬料が支給され、要求した六ヶ條の勞働條件改善の内三ヶ條は貫徹された。、、、、、、、を持つた三人は勿論解雇された。三人の解雇手當はビタ一文も拂はれない。

山谷等が一年八ヶ月の判決を下されてからの彼の妻は文字通り、爪を點す生活を續けた。又營養不良で畸形兒が生れやしないか、といふ恐怖が日夜彼女の心を惱ました。同志達が毎日生活費の補助をして呉れたが内職の夜更しに肩が凝た。

「こんなことかあるから、、が必要なんだ。」

と思ふ。然しその時はもう四ヶ月の腹でのろはしい胎動があつた。

「やあ、おめでたう。何時だね！」

と夫の同志は訪問する度に言ふ。

「有難う、又一人のプロレタリアが半年も經つと生れるわ！」

と彼女は嗤ふ。

彼女の中には胎児と共に母が成長しつつあつた。時々の内職の夜更しに、生れて來る子供への希望を、子供をめぐる夫婦生活を夢のやうに考へてゐる自分を發見してぞつとする事がある。

ぞつとする度に牢獄の夫を憶ふ。　夫は茶が好きだつた――苦しいだらう。彼女の寢る窓硝子から梨地の夜空が見える。鐵窓からも同じ空が見えるだらう。夫が毎朝、ナロドニキイの唄を歌ふことを彼女は知つてゐる。彼は小聲で口ずさんでゐるに違ひない……

丈夫でゐる。差入れにはお前が來るな。暇な同志に頼め！子供をどうする。

最初の牢獄からの音信はさうだつた。一ケ月に一度の何の手紙にも「子供はどうした。」とあつた。

然し、彼女は毎夜眠る前に寢衣の襟下を展けて膨れた腹を内緒に見つめる。――蒼い靜脈がすいて臍の下の黑子が時々ぴくぴくと慄える。

――あの人は牢獄から、じつと私の腹を見てくれるだらう――

――あの人の生活にはもつともつと、苦しみが續くかも知れない、止むを得ない死か、私達の上に來るやうな事があるかも知れない――俺は奴隷の平和を好まない、俺の生活から鬪爭を差引いたら生活は零だ。と言つてゐる夫だ。

そして彼女は二人の苦しかつた戀愛時代を追憶する。

――私はあの人の子を孕んだ事を誇る、自分は幸だ。あの人を父に持つた子供の前に自分は少しも恥しく思はない――

我々は小さな愛を愛してはならない、、、、、、に依つて動く人だ。と言つてゐる夫だ。

――私はどうしても、、能きない、どうしても生みたい、どんなに苦るしくつても生みたい！　そしてこの子を夫以上の働き手に育てあげなければならない、少く共、自分ら女の仕事はそこにある――

彼女は、新聞や雜誌で、、方法の廣告をよく見る。

「經濟的に安定のない世の中に生きる吾々は最も少數の子女を樂に、充分な教育を施さなければならない云々……」

とそれは××博士の言として書いてある。

最も少數の子女とは何人か、樂に充分な教育とは、何の事か解らない！　結局それらの廣告面は、自分達、貧乏に追ひ延されてゐる貧賤勞働者を相手に書かれてゐるものではないらしい。何故なら、資本家は貧乏な勞働者が殖えなければ立ち行かないだらうし、子供を生んだつて、育てなくつたつて勞働者の貧乏さが現在のまゝでは救はれるものではなかつたから。

彼女の考へとすれば「一人でも貧乏人が殖えろ！　貧乏な勞働者が殖えろ！　もつと殖えろ！　貧乏がどん詰れ！　どん詰まれ！（五十三字削除）」だつた。

つまりその博士も、、の方法だけを書いて何故に、、、をしなければならない程に生活が苦しいんだ？　といふ根本の證據は上げてゐない。どんな醫學博士だつて大學病院だつて勞働者の胃の腑を滿たす方法を發見し得ないのと同じだ。

彼は彼女に、、を強要する、運動家としての夫の意志はよく解る。だが彼女はどんなにしても生みたいのだ。胎の兒は動いてゐる。育ちつつある。

彼女は獨り寢の床の中で、捕つた日の夫をよく想像の中で動して見る。

深川の同志の家で彼は毎日退屈に、然しあくことのない讀書に暮らしてゐる。毎日、異つた時間に、違つた路を通つて、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。ニュース、レポートが手渡しされる。組合の爭議團の情勢や他の同志の報告がある毎に彼の鼻の兩端の筋が深むだらう。

五日目の夜、彼女は後に知つた話だが、（二十八字削除）風の強い、灰色の天空と、灰色の霧の夜だつたといふ。（十字削除）七人は××公園を出た。

明日は自分達の日だ。はがねのやうに鋭い確かな笑ひが七人の頬にあつた。

『おい！　我々はつけられてゐる。』

と阿久利が言つた。

街角にものとりのやうな人影がうろついてゐた。

『確かに？』

『いや！　君は怖れてゐる。』

『最惡の場合を、我々は常に考へる！』

『散らう！　明日午後八時、規定の場所で…………』

七人はくら闇をくぐつて獵犬のやうに走つた。

「……あの、、、、、、、、、、、を出さなければ、、、、、、、、、する」

といふ、、、の傳達が有つた翌々日だつた。

七人の希望は死なかつた。走つた。路地から路地を、明るみからくら闇を。（十七字削除）

彼は一時間の半分を走つた。はやぶさのやうな注意力と敏捷さが彼の身内に働いてゐた。街の四つ角で彼は一人の小ざつぱりした紳士に突き當つた。

『やつ、失禮！』と彼はそつぽに言つた。

『いいえ、私こそ、』

（七十一字削除）

盗賊とまちがへた通行人が彼の逃亡を遮つた。、、、、、、、、、、彼は自ら力を拔いて捕つた。

それらは全部、彼の後から歩いて凡てを見た豐島が彼女に語つたものだ。

「我々の爭議は百パーセントの解決を勝ち得なかつた。だがこの、、の、、に、、のよき、、を獲得した。この資本の攻勢期に於てそれだけでも、大きい仕事だ……」と彼は言つて歸つた。夫の、、は決して、、ではなかつた。と彼女は自分に言つた。

晝は夜に、闇は光に續いて時が流れた。

牢獄の三人の上にも同じ時が、一日が一ヶ月の鈍さで流れた。

彼女は思つた。――、、の、も彼の、、を、、得ないだらう――と。

そして彼女の胎の生命も生長しつつあつた。

年末のきびしい寒さの最中に彼女の陣痛が堰を斫つた。

同志の女房連や近所の人々の吹きつける勵ましの内に、押し上げる痛みをこらへて彼女は物足りなかつた。彼の底光る瞳とこちこちした腕の力がほしかつた。

彼女は同志の妻の胸を力いつぱい顔の上にたくしこんで、明け方鉛色の陽の出と共に胎の子を力み出した。

『腹を見て腹を、大丈夫？』

と、彼女は前に生んだ畸形兒を思ひながら天井に叫んだ。

同志の女房が力づけた。

『男だ！　立派なもんだ。全部揃つてゐる。』

顏中皺だらけな山猿みたいな子だ。目は皺の中に閉ぢてゐる。二人の何處にも似てゐない。『これが自分の子かしら、をかしい……』彼女は躍り上つて來る愛情を屑にほぐした。

日が重なると彼女は夫の言葉を忘れた。

何んと叫んで彼が怒らうと、夫の面前に小つちやい子供をつきつけて勇ましく自分の愛を主張する自信を彼女は持ち始めた。

――私の望みはたうとう消えなかつた。私は夫に反抗してもこの子を、、、、、に育てやう、この子に人生を有りのまゝに受けとらせてはならない！――

牢獄の夫に、彼に反抗して胎の子を力み出した通知をしたが返事がなかつた。

——怒つたつて何だらう、この子はもう乳を要めてゐる——

5

——、、を目ざざる者は、、、ものだ——

とレーニンはかつて云つた。

一九二八年は日本のプロレタリアートが脳髄の表面に（十五字削除）を受けた年だ。

全國の勞働者と農民は固い握手の元に自分等の代表をブルジョア議會に送らんが爲に鬪つた。

×××と×××の××を作れ！

のスローガンはプロレタリアと農民の黨によつて高く揭げられた。

大衆は鬪つた。だが勞働者と農民の（二十四字削除）日本全國と同じ大きさの、、、を下した。

勞働農民黨、日本勞働組合評議會、日本無產青年同盟が解散を命ぜられ、全國に亘つて六百有餘名の鬪士が牢獄に繫がれた。（四十一字削除）

政府の領袖は——、、、、、を、、にしやうと相談してゐた。日本の無產階級運動は十年の後退を示した。指導者が誤つてゐたのだ。

濱の沖仲仕組合のKも淺野も豐島も投獄された。

（五十一字削除）一方勞働者を完全に機械化しやうとする產業の合理化が暗の中に進行してゐた。

秋、出獄の日が來た。

彼の妻は子供を背負つて迎への同志達に混つた。

ゆるい坂の上に灰色の煙突がものう氣に立つて青苔の生えた赤煉瓦の厚壁がその下に廣い框を作つてゐた。靜かに秋の日がよどんでゐた。

顏を知つた差入屋の待合所で一同は待つた。午過ぎに着いて三時間餘り待たされた。

西の空が鐵錆び色にくすんだ頃、彼とヨボ金帝成と阿久利が三十分の間を置いて小門を出て來た。

『おう！おう！』

最初に出た阿久利は猛獸のやうに唸つて皆の手を握つた。

二番目に出た彼は第一に阿久利と肩を打ち合つた。

『三月の事件を知つてるか、僕は中で聞いた。……』

『俺も噂を耳にした。知つてるとも、、、、、、、、、、……』

『おお、、、、、……』

金帝成は痩せてゐた。

『ボク、あぶらのもの食べたい。』と彼は同志を見ると言つた。皆は初めて聲を揚げて笑つた。

歩きながら彼女は夫の尖つた頬を高く見つめた。子供は脊でむづがつた。その度に肩を前に搖つては「よし、よし」とあやした。

『ね、この子よ、見て頂戴！』と彼女は言ひたかつた。夫は時々、妻の方に冷たい視線を投げ投げ同志との話に忙しかつた。——夫は怒つてゐる——と思つた。そして皆に離れてだんまりこくつて歩いた。

『家へ歸つたら生ま豆腐二三丁食はして下さい、』と阿久利が彼女の傍に來て言つた。『亭主可愛いやで、直ぐうまい物なんか食はしちやいけませんよ。腹をオシヤカにしちまふから……』

××橋の交叉點で皆は別れた。

『又、組合で逢はふ。』

『ああ、すぐ、、なきあならない……』

電車の中で彼は殆ど默つてゐた。彼女は夫の顏を盜み見た。彼は遠い空間の一點を見据ゑてゐた。

『ね、疲れた？　痩せたわね、』

と彼女はのぞき込んだ。

『よく食つて來たな！』

『みんなが助けてくれたし、内職もしたし……』

『生んだな……』

彼は妻の脊にがつくり首を折つてゐる赤土の丸い塊りを見た。

『ええ、怒る？』

沈默が續いた。二度電車を乘換へた。終點から××放水路の堤防まで來ると夕暮が東から押して來た。

枯れた川添の葦がからから鳴つてゐる。葦切りの啼き聲が激しい。對岸の草が横になびいて風の渡るのが見える。

暫く行くと脊中の子がずるこけて來た。彼女は立停つて前屈みに負ひ紐を緊めやうとした。

彼は後ろに廻つて子供を支えた。

『おい！　降ろせ。』と彼は言つた。

『ええ？　何て言つたの。』

『降ろせといふんだ。俺が抱いてやらう！』

『さう……』

彼女は紐をゆるめた。

彼は子供を兩手に高々と捧げた。子供は嗤つた。

『レロレロレロ、うーん。』

彼は唇をとんがらかして子供をあやした。

『うん、笑ふ笑ふ。何んていふんだ。』

『たあ坊、民治つていふの、御野村さんが妻につけて呉れたの、それまで名無しだつたのよ。』

『うん、御野村さん……』

彼は歩き出した。子供をゆすりゆすり口笛を吹いて歩き出した。彼女は小走りに後を追つた。子供は彼の腕の上で火のついたやうに喧つて親の頭をぴちや〱撲つた。

——怒つてやしない、いいんだ、育てるんだ——

彼女は自分につぶやいた。

『おい、これからだぞ、いいか、へこたれるな、これからだぞ！』

と、彼は妻を振り省つて言つた。

『ええ、解つてる……』

彼は又口笛を吹き吹き進んだ。それは同志の唄だ。彼女も口笛に合はせて小さく歌つた。

子供はくりくりした目を丸めて彼の腕で喧つてゐる。

放水路が海に乘り込んだ邊りに浪頭が白く騒いでゐる。空は涯しなく地を壓して灰色だ。

風が出て沖の防波堤に海鳴りが高い。

潮が押して來るのだ。

一九二九、九、五、



大地

里見弴

五の一

折角逢ひは逢つても、瑛龍の氣持の奥底を突き止めることが出來ず仕舞に別れて後の四五日といふもの、それが氣がゝりになつて、珍しくも昌造は、うすぼんやりと、元氣なく暮した。引き込まれてか、おしげも、なんとなく沈んだ顔つきをしてゐた。おまけに、秋の雨が、じと〳〵と降りつゞいて、いとゞ暗い家のなかに、隅々、蔭々、陰氣な隈ばかりむらだち跋扈つた。——こゝへ引き移つた日の、あの、不吉な豫感が、いよよ形をとつて現れて來やうとしてゐる、この考へで、昌造の氣持は、ひとしほ壓しつけられ、弱々しくさせられてゐた。當つて碎けろ、といふ氣で、瑛龍へ書きかける長い手紙も、途中で附景氣の鼻ッ張りが挫け、めちや〳〵に引き裂いて了つたあとの寂しさは、頭を擁へてゴロリと疊の上へひつくり返り、細々とつく息も暗むばかりだつた。

或る日、午後の二時頃、子供たちだけは表の間で先にすませて了つたので、珍しく一人の客も交へず、女房と差向ひに、晝食ともおやつともつかない、麵麭と紅茶だけの、

簡單な食事を摂つてゐた。話といつたところで、ほんの當面の、乾き切つた相談事くらゐなもので、燒きざましになつた麵麭の味に適はしい、ぼそ〳〵と、いかにも張りのない氣持だつた。

その時、いきなりガラッと、中の口からはいつて來たのは、近衞の軍帽にカアキイの外套で、腕に、何か書いた布を卷いた在鄕軍人と、もう一人も、甲斐々々しく出立つた、どう見ても自警團の主要人物、といつた風な若者だつた。襖、建具の一切が、夏うちに取りはづされたまゝで、間に六疊一間へだてた茶の間まで、そつくり見通しだつたけれど、いづれ「お宅は、いつ幾日の、何時から何時までの間出て頂きます」くらゐのことで、すぐ歸つて行くものと思ひ、昌造は、茶の間の方から顏を振り向けたばかりで、餉臺の前を立たうとはしなかつた。

「えゝ、ちよつとお邪魔します。えゝ、實はその、例の甘粕大尉の減刑ですが……」

と、在鄕軍人は、もう何軒も廻つて來て、すつかり手に入り切つた柔い調子で、やれ、邦家のために一身を犧牲にした勇者だの、天に代つての斬姦だのと、そんなもの〳〵しい効能書は一切ぬきにして、すぐさま衣囊から、罫紙のとじたやつを取出すと、「御面倒でも、どうかこれへ一つ、御記名を願ひたいんで……」

その要領のよさに、ついふら〳〵ッと立ちあがつて了つた。が、ちかに疊の上に置かれた連名帳を前にして、昌造は、云ひまくられて、ぐッと詰つた時のやうな、不快な困惑に陷つてゐた……。

月賦販賣のミシンや豫約出版、または保險勸誘の外交員にしろ、廢兵、養育院の兒童などの押賣にしろ、およそひとの玄關に立つてものを賴む場合には、「御贊成下すつて……」とか、「お志がおありでしたら……」とか、なんとか一應はこつちの意思に問ふところがあるものだが、――それとこれとは聊か趣を異にするにしても、贊成不贊成などてんきり問題にもしずに、いきなり「御署名を……」といふ、否應なしの申出だつた。勿論、この在鄕軍人にしてみれば、そこになんの異議、違背があらうとも思はれなかつたらうし、實際また、今まで廻つて來た軒並、たゞの一人でも愚圖々々いふ者はなかつたに違ひない。そのぐらもすうもないことゝ、相手の應諾を信じ切つてゐる態度が、昌造にとつては、誠に「困りもの」だつた。「泣きどころ」だつた。もしひと言でも、なんとか故障を申し立てるとすれば、やがてそれは、彼等にとつての憤慨であり、激怒でもあらうけれど、第一にはまづ、「寢耳に水」の感じだらうと思はれるのだが、その「眠りの深さ」が、何よりも當惑の種だつた。

「あゝ、さうですか」

罫紙の帳面を把りあげて、意味もなくあちこち頁を繙しながら、この小さな、けれども、昌造だけの氣持にすれば、決して輕くは看過せない一つの申出を、どう處理したものかと、私に思ひ迷つてゐた。思ひ迷ふ、とは云ふじよう、それはたゞ自警團的人物の扱ひに止まつた話で、大杉榮誅殺の、事件そのものに關しては、そのことあつて間もなく、――無論まだ、、、、、、、、、、、、、、ゐたうちに、原稿の用で尋ねて來た或る雜誌社の人から、詳しい話を聞かされた當時の感情が、そのまゝ深く心に殘つてゐるだけのことだつた。それをひと口に云ふなら、大杉榮を氣の毒に思ひ、從つてまた甘粕大尉をひどいやつだと、さうはつきり考へ別けてゐたのだ。

もと〳〵、經濟學的考案を基とした近代の社會科學に對しては、甚だ興味の薄い昌造として、無政府主義の純理論や、大杉のそれに對する理解、また實際運動などについても、なんら知るところないと云つてよかつた。金の置き場所一つで、人の世が、よくもなり、また惡くもなるものと信じ切つてゐるらしい、その根本の考へ方からして、昌造にしては笑ふべきだつた。その可笑しさは、けれども、一生望遠鏡を覗いて、天體と睨めっこをし通して、了ふやうな、あの質の人にも**感じられる可笑しさで、決して、アッハヽヽといふやつではない。**えらいと云へば、少しもそれを否む氣はないし、また馬鹿々々しいと云つて了へば、それでもすむ、といつた具合で、要するに昌造とは、拘り合の薄い存在なのだ。そのくせ、彼等も昌造も、人間最上の可能性や、幸福といふことから、一時も心を放たないでゐる點では、同道の士に違ひないのだけれど、丁度それは、羅紗屋と呉服屋とが、ともに人の着るものについて、始終あたまを惱してゐながら、仕事の上では、お互に風馬牛であるのにも譬へられようか。羅紗商組合、呉服商組合が、聯合の大會を開いてみたところで、大した利益もなからうけれど、然し、衣服についてなんの苦勞もしたことのない人たちに比べたならば、呉服ものに對する羅紗屋の品評、羅紗に對する呉服屋の鑑識は、必ずいくらかたりと正確でなければならない筈だ。それと同じ理合で、昌造も、社會問題に對して、なんの知るところはないながらも、――それゆゑにまた濫に口外はしなかつたけれども、私に一家の見はもつてゐた。――要するに、昌造と大杉榮とは、緣は繫つてゐるが、互に相關與するところのない、商賣違ひの人間で、敵でもなく、身方でもなかつた。

一方、甘粕大尉はといふに、これも勿論商賣違ひで、更に緣の遠い存在だつた。今度は、衣服について考へてゐる呉服屋と、刄物の斬れ味について工夫を凝す鍛冶屋との緣遠さにも譬へられようか。呉服を裁つのに鋏が要る、くらゐの緣はあつても、相關するところ更に薄

く、従つてまた怨恨ともにないのだ。

更にまた箇人的の關係を云ふなら、甘粕とは、全くあかの他人だつたけれども、大杉とは、同じ逗子に、而もすぐ近くに住んでゐたところから、友達、といふほどの交際もなかつたけれど、兎も角知合の仲だつた。一體、子供を可愛いがる人なら、殆ど例外なしに好きになれる昌造だつたが、大杉も、娘の魔子にあつては、まるで手も足も出ない親馬鹿になりきつてゐる具合など、多く話してみるまでもなく、いゝ人だつた。世の中に、どうしても生かしては置けないといふ人間があるかどうかは、暫く別問題として、少くも大杉がそんな男でないことだけは慥だつた。僅か十度ほどの面談に、昌造のうけてゐた印象は、過ぎては阿ると云ひたいほどに相手の氣をかねる、てれ性の、どんなことをしても憎みやうのない好人物、といつた感じが第一で、鋭い、とか、恐しい、とかいふ壓迫感は少しも殘つてゐなかつた。尤も昌造との關係が、ほんの近所交際といふに止つて、お互に何もさう深いところへ突ッ込んで行つてみやうといふ氣もなかつたからだらうが、兎も角、なんの奇もない一人の隣人としての彼は、謂ふところの、味噌の味噌くさからざるもので、却つて奧床しい氣がするくらゐだつた。——かういふ好印象を基調として、昌造は、大杉の出て來る小品を二つも發表したことがあり、彼からはまた、それの讀後感を書いてよこしたりしてゐた。

あかの他人とは云ふじやう、昌造の想像によれば、甘粕とても、無論さう惡いやつとは思はれなかつたが、假令、、、、、にもせよ、もの解りのいゝ、少ししつかりした人間なら、あんな、、、た[illegible]の出來やう筈はない、と思はれた。尤も、その場へ臨んだら、大抵の者までは、あゝするよりほかないやうな氣持になるかも知れないが、然し結果から云へば、慥に、、、、は、、、、だつた。——これだけの裏附があつて、噓も偽もない昌造の感情は、大杉を氣の毒と思ひ、甘粕を、、、、、、、、、、、、。

翻つて、狹い中の口の三和土に押し並んで立つてゐる二人の自警團的人物はと云ふに、これはまた、大杉についても、甘粕についても、二人の間に起つた事件についても、自分自身のあたまで、時間云へば一分と續けて、とつくり考へてみたことなどないにきまつてゐる人間だつた。何もこれは、この場合に限つたことではなく、い[illegible]民衆といふものが、群り動く性質をもつてゐて、ものゝ感じ方が、凡庸な常識一點張りに陥り、忽ち「輿論」といふものを生みだすのだ。それを思ふと、雨に濡れ、護謨底足袋を泥だらけにして、目の前に突ッ立つてゐる、この「輿論」の手先どもも、馬鹿げて見えこそすれ、憎むまでの氣にはなれなかつた。

たゞなんでもない署名帳を膝の上に載せて、はたからは全く想像もつかない困惑の極に、暫く昌造は默りこんで了つた。——たゞ可厭だ、でも子供の駄々のやうだし、さうかと云つて、自分の氣持を細く云ひ說くまでの熱もなく、そんな相手でもなかつた。ちよつとひと筆、名を書け、といふだけのことに、いづれ熟考の上で……、もへんだつた。夫婦差向ひでものを食つてゐた最中だけに、唯今主人が留守で……、の智慧も出て來なかつた。

　どうせこんなもの、紙屑同然だ、と思ひ、心の眼をつぶつて、ちよつと萬年筆を把りあげさへすれば、何より彼より一番世話はないのだが、さてその心の眼といふやつが、わけないやうで、ちよつとつぶりにくかつた……。

　まだなんとも思案はつかなかつたけれど、兎も角も帳面をもつて、飯臺の前へ戻つて來た。

「なんです？」

冷淡な顏つきながら、それでもおしげが訊いてくれたおかげで、ふと昌造は一方の活路を見出した思ひに、忽ちもの云ひもはつきりして、

「おい、お前の名、書いとくよ」

「なに？　なんか寄附ですか？」

寄附だとすると、こいつうかつに返事は出來ないぞ、といつた風な調子の可笑しさに、一層氣分が引きたてられた。

「いや、そんなもんぢアない。たゞ名前さい書いてやりやアいゝんだ。……ちよつと、萬年筆でもなんでもかしてくれないか」

　なんのためとも聞かせずに、勝手に女房の名を書いて渡してやると、二人はすぐ歸り、入れ違ひに來た客で、次から次への雜用が、それきりおしげと二人だけで話す折を奪つて了つた。晩になつてから、けれども、ふと昌造は、署名の一件を思ひだした。先刻は、まづこれで虎口を遁れた、——も大袈裟だが、ちよつとそんな氣持でおしげの身になつてまで、深く考へてやる遑もなかつたのが、少し落ちついてみれば、女房だつて、そんな不愉快な役廻りに、無斷で使はれたのでは、全くうまらない話と氣がついた。——と云ふより、自分自身の利己主義に氣がつき、恥ぢらはれた。

　おしげも、大杉に逢へば挨拶し、口も利き合つてゐた間柄だし、魔子とはなほさら、子供同士の遊びに混つて、なんのかのと世話をやいたりしてゐたのだ。たゞ、そこは女で、民衆的な一般感情に支配されて、良人が大杉と親しくすることには、一二度不贊成を稱えたこともあるくらゐだけれど、殺されたと聞いて、いゝ氣味だなどゝは、決して思つてゐなかつた。現に、昌造が、雜誌記者から聞いたあとで、飾

單にそのことを傳へてやると、目を圓くして、

「まア！　さう！　それア氣の毒だつたわねえ。へーえ、さうですか！」

などと、意外のほかに、併せて哀悼の心をも洩してゐたくらゐだつた……。

考へてゐるうちに、女房に對してすまないことをして了つた、といふ氣が、だん／＼強くなつて來た。先刻の署名帳の出來を話して、もし可厭がるやうだつたら、自警團だかどこだか、兎も角あの仕事を扱つてゐるところまで尋ねて行つて、取消して貰ふやう計らつてやらう、とさへ思つた。

「おい、さつき俺ア、ついお前にすまないことをしちまつたんだがね……」

と、前置きして、一伍一什を話して聞かせてから、「可厭かい？　可厭だらうね？」

「でも……」

「もし、よんど可厭なら、取消して來てやつてもいゝがね……」

「別に、そんなに可厭つてほどのこともないわ」

おしげには、昌造の氣持の隅々までは映つて行かなかつた。どつちにしろ大したことぢやアない、くらゐの氣輕さだつた。それだけに、もう一段念を入れて、

「だつて、兎に角お前は大杉を知つてるんだから、その知つてる人が、、、にも、、にあつて、いゝ氣持のする筈はないんだ。それをだね、その、、、の、、に、……、、でもないが、少しでも刑が輕くなるやうにつていふ連判狀みたいなもんに、お前の名前を書かれたんだから……。ほんとに、氣持がわるかつたら、遠慮なくさう云へよ」

「いゝわ」

「ほんとにいゝかい？　……いゝえさ、よく考へてみてから返事をしろよ」

「だつてそのくらゐのこと……」

「構はないかい？」

「構はないわ」

「そいならいゝけど……。然し、どつちみち、俺ア少し卑怯だつたよ」

わざ／＼取消しに出かけるのも億劫だつたので、女房のづぼらをいいことに、たうとうそのまゝにして了つたが、これもその當座は、ちよつと氣にかゝる出來事だつた。

五の二

たゞふら〳〵ッと氣が變る、といふやうな質ではない、何かある、これにはきつと何かわけがある、この考へ方は間違つてはゐなかつた。——厚ぼつたい瑛龍からの手紙で、たうとうそのわけが明されて來た……。

　意外なことには、それが、二日の朝、昌造の洩した、ほんのひと言の述懷に端を發してゐたのだ。

「……もし、萬が一の場合には、俺はどつかへ飛んでつちまふ。……比叡山にでもはいつちやつて、一生だアれにも逢はない。それくらゐの覺悟はしてゐるよ」

　これだつた。逗子の家族が、一人のこらずやられてゐる、といふ萬が一の場合を想像しながら、あの日の昌造として、全くこれは、洒落や嘘で云へることではなかつた。ほかにどうしようもない、たつた一つの逃げ込み場所として、目の前、まざ〳〵とそこの景色が浮びあがつて來たればこそ、たゞありのまゝに口からそとへ出したまでゝ、その言葉が、瑛龍にどう響くか、もとよりそこまで考へてみるほどの餘裕はなかつた。おまけに、その後ひと月からになる間、たゞの一度思ひ出したこともないくらゐ、實狀はがらりと變つて來てゐた。咽もとすぎた熱さで、千葉が彼方の樣子を見て歸つた三日の夕方、一同無事と聞くと同時に、どこへけし飛んで了つたか、比叡山のヒの字も殘さず、綺麗に忘れ果てゝ了つたけれど、さうかと云つて、二日から三日へかけてのあの覺悟に、毛ほどの緩みがあつたとは思はれない。寸分の過不及なく、實感のまゝを云ひ現はした言葉ならば、よしんばそのために、どれほど瑛龍を寂しがらせ、悲しませやうと、これはなんとも仕樣のないことだつた。口からそとへ出したが最期、あとから取消すわけにもいかず、或は慰めたところで、あやまつたところで、それが何の役に立たう。もしそんなことですむと云ふなら、今度はまた、二日に洩した述懷が可哀さうだ。あの場合、あとで取消しが利くやうな、そんなうはついた言葉を口にするやうな男なら、瑛龍に嫌はれるより先に、自分で自分の顏へ、青痰でも吐きかけて了ふだらう……。

　この強味から、瑛龍の、ひと月も秘めて來た寂しさ、たよりなさに對しても、存外昌造の心は動じなかつた。先達來、氣にかゝつてならなかつた原因がはつきりした、といふ意味では、却つて、欝陶しく垂されてゐた雲が切れて、久振りに天日を仰いだやうに、晴々と氣色がいゝくらゐのものだつた。

　けれども、一旦立場を變へて、瑛龍の身になつて考へてみれば、それでは、今日までの二人の關係といふものが、全く空に等しく見られたことになるわけで、さうと知つた苦しみは、諸に堪へ難いものだつたに違ひない。それを、氣振にも見せず、逢ひもし、手紙のやりとり

もして來た、その自制力の强さは、昌造などの、さツちよこ立ちをしても及ばないところだつた。尤も、手紙にも、

　萬一の場合、あなた樣のお嘆は、重々お察し出來ますし、一生誰にも逢はないやうな山のなかへはいつておしまひなさるといふお氣持も、あたしにはよくわかりますから、少しも御無理とは思ひませんでしたが……。

とも云つてあつたし、また別のところでは、

　あなた樣が、山へはいつておしまひたさるやうなことがあれば、あたしはまたあたしで、ちやんと心にきめてゐたこともあります。それが、幸に、逗子の皆樣が御無事だつたこと、知らせて頂いた時は、ほツと安心いたしましたけれど、この頃になつて、だん／＼考へてみますと、あなた樣は山へおはいりになり、あたしはあたしで、考へてゐたとほりになつて了つたら、と却つてその方が仕合だつたやうな氣がするくらゐで、あの時のあなた樣のお言葉、何かにつけて思ひだし、御尤、だと思へば思ふほど、誠に心寂しく……。

といふ風に、瑛龍も、あの時の昌造の述懐に、嘘も洒落ツ氣もなかつたことだけは、十分認めてゐたわけだから、自制力も自制力だけれど、一つには、なんとも言葉の返しやうがなかつたのだ。それだけになほ、一時は、ずゐぶん腹もたつたに違ひない。午後になつて、丸二の兄といふのが迎ひに來た時、なんの未練氣もなく、――たゞの一度ふり向いても見ずに、さつさ／＼行つて了つた、あのすげない樣子も、今となつて、やつと昌造の腑におちて來た。

　こんなこと、（瑛龍が、時には腹だゝしく、時には寂しく、たよりなく思つた、その今日までの煩悶を指す。）あたしから云ひださへしなければ、今までどほり、貴方樣と一生お目にかゝつて行けれるでせう。でも、かうして手紙に書いてしまへば、もうとても今までのやうな氣持ではお目にかゝれません。さうかと云つて、そのほかの氣持といふことになれば、いゝきようだいみたいな關係でせうけれど、それも、こないだの晩、貴方樣から、不自然な關係と云はれ、あたしもほんとにさうだと氣がつきましたから、結局お目にかゝらないのが一番いゝと思ひます。

　この手紙、ずゐぶんよく考へて書いたのですから、御返事を頂いても仕樣がないことだと思ひます。

　どうぞおからだ御大切に、お酒もいゝ加減にめしあがるやう、これだけは、くれ／＼もお願ひ申しあげて置きます。

二度も繰り返して讀んでみたけれど、不思議に昌造の氣持は、この

申出によつて、打拉がれはしなかつた。ひと月以上も、ためにためて來、考へに考へぬいた、揚句の、堅い決心とは云ふじよう、いよ〳〵この手紙を書くに至つた直接の動機は、どうも矢つ張り一時的の感情らしかつた。この秘な決心を、お民のもとまで洩してやつた手紙、――もしもあれを、昌造が見せられてゐなかつたとすれば、恐らくまだなか〳〵こんな思ひ切つたことを云つてよこしはしなかつたらう。秘密を守らなかつたお民に對する腹だち、計畫の裏をかいたやうな態になつてゐる昌造に對しての反感、さういふものによつて、少くとも、時期を早められた、今度の申出に違ひない、――昌造の、この觀察によれば、そこに、もの丶未だ熟しきらないやうな無理が感じられた。蘇つてまた、根本の、比叡山云々の言葉から、瑛龍がうけ取つてゐる感じも、多少遺憾の意を表したいものがあつた。無論それは、男を獨占してゐない場合の女として、重々尤な考へ方で、簡單にそれを、とるにも足らない嫉妬だ、とは考へなかつたけれど、昌造に對する愛が、もう一段つきぬけてゐたなら、寂しさのなかにも、深く清い悦びが湧いて來なければならない筈と思はれた。――これほどの間柄でも、いざといふ一大事の場合になれば、矢つ張り奥さんが、心の最高位を占め、そのほかの者は、どうならうと、一向に顧られないのだ。なんと云つても、結局は、矢つ張り奥さん一人だ。女としては、奥さんにならない限り、假令どれほどの間柄だらうと、結局安心はしきれない。いつ何時どういふことになるか、決して油斷はしてゐられない。――云へば、大體まづさういつた風なもの丶感じ方に、重々尤ではあるけれど、どうもまだ、「奥さん」といふものを彼方に廻しての、競爭的な意識に低迷してゐる、いかにも女らしい、――悪い意味での女らしい不聰明さが感じられて、身勝手なやうだが、昌造はもの足りなかつた。その、女らしい一線を突き破つて、もう一段上へ出てゐてくれたなら、實行の可能不可能は別問題として、比叡山云々の言葉でも、しみ〴〵とした同感をもつて聞いて貰へたらうに、――ここに昌造の遺憾があつた……。

階下に千葉の聲がしてゐたので、丁度い丶から使を頼まふと思ひ、今夕六時に、萬障繰り合せて、是非とも四谷の停車場まで出て來てくれ、と簡單な手紙を書き、それを懐中にしておりて行つた。先達遅子から運んで來た荷のうちにあつたのだらう、見覺の瀬戸火鉢を間にして、おしげや子供たちと、何か頻りと笑ひ聲をたて丶ゐた千葉が、振り向いて、

「こんちは」

と、胡坐から横坐りに、ニッカー・ボッカーの膝を折り改めながら、輕く頭をさげて、「めつきりどうも、お寒くなりましたね」

「いくら寒くつたつて、今から火鉢は呆れたな」

さう云ひながらも、昌造もそばへよつて、久振りに、ほどよい瀬戸の温みを撫で廻してみながら、「番町のうち、まだあかないかね？」

小野田からの手紙に、大阪の方で新しく出る雑誌を手傳ふ約束が出來て、半永久的にこつちに移住することになつたから、近日上京して、家財道具を送り出さうと思ふ。就いては、あなたが、そのまゝあとを借り續ける氣なら、自分から家主へ掛合ひ、多少の便宜は圖れる、と思ふ、といふ意味があつたし、さうでなくても、最初からあまり氣に入つてゐないこの家に、永く住むのは可厭だつたので、小野田の引越を期として、同時にこつちも、どこかほかへ移りたいと思つてゐた。それには丁度、番町の本邸の構内に、二三軒小さな貸家があつのて、その一軒が、夙にあくといふ話になつてゐながら、またしてもまたしても延びるのを、千葉に頼んで、時々催促に行つて貰つてゐた、――それを、顔を見るなり、まづ第一番に尋ねたのだ。

「いゝえね、行けば、いつだつて、つい二三日うち越すやうなことばかり云つてるんですけどね……。困つたやつですよ」

番町の本邸でかゝりつけの醫者で、二日の晩の火に焼け出され、急場の間に合せにはいつたので、家族の頭數から云つても、業態から云つても、どうせ永くは住めないのだが、なか〱思ふやうなうちが見つからないで、事實先方も困つてゐるらしかつた。

「小野田さんの方も、この二十日からみには、何を纏めに出て來るやうな話になつてるんだから、どうしても十八九日頃までにはあけて貰ふやうに、一つ、やかましくさう云つといてくれたまいな」

「いゝえ、あの具合ぢアとてもあてになりませんからね、きつちり十五日までつてことに云ひ渡してあるんですよ。それだつて、きつと一日や二日は延びるでせうし、何しろあんな狭いところへ、慾ばつて病人まで預つてゐるんですからね、出て行つたあとは、一遍大々的に消毒でもしなくつちア氣持がわるうござんすよ。殊にお宅なんぞ、大勢お小い方たちがおあんなさるんだから」

「あら、さう！」

と、おしげが、近頃になく活々した調子で、「あんなとこで病院やつてるの？」

「いゝえ、病院つてほどのこともありませんけど、二階二間とも、患者がねかしてあるさうです」

「一體あれで、幾間あるの？」

「二階が、八疊、六疊の二間でせう。階下が、玄關が三疊の、その次にまた三疊があつて、奥が八疊と四疊半、それに湯殿、臺所ですね」

「それで、一體、どこで診察なんぞしてるの？」

「階下の八疊が、晝間は診察室で、夜になると寢部屋に早變りをするんでせう。三疊が藥局で、四疊半を茶の間にしてゐるんですよ。そんなかに、代診もゐりやア、看護婦もゐる。家族だつて、夫婦に子供が二人の、それにまだ祖母さんだの、女中だの、――患者まですつかりよせると、かれこれ十四五人にもなるかも知れませんね。だから、それア、とても、お話のほかですよ」

「そんなら、いつそ、入り變りにここの家を貸りればいゝんだ。こゝなら、そのくらゐの人數は平氣なもんだから」

「それがね、噓だかほんとだか知りませんけど、醫者には、誰でもみんな醫籍つてものがあるんですとさ。つまり、醫者としての籍ですね。それが、なか〳〵やかましいんで、ちよッくらちよつとよその區へ引越して行くなんてわけにいかないんですつて。醫者はそれで、家を探すのにも、なか〳〵事が面倒なんだ、なんて云つてましたがね……」

「さうかね、それアそんなこともあるかも知れない」

「だから、さう、やい〳〵イセキても駄目だつて……」

「アッハッハッハ、アッハッハッハ」

面白くもない洒落を、おしげが、男のやうに大口あけて笑ひ崩れると、子供たちまで、わかりもしないくせに、誘ひ込まれて可笑しがつた。

「駄洒落つてものは、デメンチヤの、一種病的の作用だつていふ說があるとさ」

「なんです、デメンチヤつて?」

「痴呆症だね」

昌造は、いつもに似合はず、づけりと云つて退けた。

「はゝア」

と、一向平氣のしやアで、「その病氣は、なまじッかお醫者樣なんぞにかゝるより、櫻田門そとのお役所ね、あすこへ行くに限るんですとさ。知つてますか」

眞顏で訊かれたおしげが、うつかり乘つて、

「櫻田門の御役所つて、どこ?」

「チホウショウに司法省、つてね」

「いやだわ!」

また賑な笑ひ聲だつた。陰氣くさくめいり込んでゐるこの頃のうちのなかには、こんな男も、結句いゝ氣晴しかも知れない、――昌造もさう思つて、別に苦い顏は見せなかつた。

何かの用で、おしげが臺所の方へ立つて行つたあとで、昌造は、懷中の手紙を出して渡し、場所を教へて返事を貰つて來るやうに賴んだ。

「へえ、承知しました。

存外にいやりともしずに、上着の内衣袋に納めながら、千栗は、すぐ腰を擡げた。辭退するのを、玄關まで送つて出てみると、泥だらけになつた自轉車が、板塀に凭せかけてあつた。氣がつくと、震災後間もなく昌造が買つたやつで、初めは一々斷つて借りて行つたが、この頃では、まるで千栗の所有品のやうに、めつたにうちで見かけるやうなことはなかつた。

「ひどくなつたなア」

「なんです？」

靴の紐を結びかけてゐた千栗が、眼をあげて昌造の視線をたどり．それと覺ると、「えゝ、何しろ、この頃のじと〳〵降りで、とてもえらい道ですからねえ。なんのこたアない、田圃ン中をこいでくやうなもんでさア」

すましたもので、輕く挨拶し、サドルを押して、門の外へ出て行つた。

五の三

いつまでもゆつくり腰を据ゑて、話し込んでゐられる場所と云へば、さしづめ池淵の採家だつたけれど、お兄に對して腹を立ててゐるらしい瑛龍を、わざ〳〵そこへ誘つて行くこともなかつた。四谷あたりの、へんな料理屋や待合などより、いつそ往來を歩きながらの方が、清淨な氣がしてよかつた。震災後のことで、めつきり足は遠だになつてゐたから、三四時間くらゐ歩きづめに歩いたとて、さしてへこたれる氣遣もなかつた。また、四谷見附をはいり、土手に添つて、右へ食ひ違ひ見附から清水谷の方でも、左へ新見附、招魂社の裏手へかけてでも話しながら歩くにいゝ、靜な道を撰ぶに事は缺かなかつた。

で、二人は、雨の霽れ間を、傘を提げて、下駄でてく〳〵と歩いた。昌造は、およそかう云ふだけのことを云つて了ひ、それに對する返事の具合で、瑛龍の氣持も、想像した通り、ほんの一時的なもので、たゞ情勢的に、申出の撤回を澁つてゐるだけだ、といふ風に見てゐた。

「なんのかんの云ふより、ごく簡單にだね……」

昌造は、なか〳〵ぢれる質ではなかつたが、いくぶん焦して來た。

「一體あなたの、一番の肚の底はどういふんだい。別れたいのか、別れたくないのか。かう〳〵いふ理由で、どうしても別れたくつちやならない、とか、これ〳〵だから、いつそ今のうちに別れて置いた方がいゝと思ふ、とか、そんな風な思案は一切ぬきにして、思ひきつてぱかつと肚の底を割つてみせるとなつたら、一體どうなんだい。云ひ換へれば、あたしが嫌ひになつたのか、そんなことはないのか、――そこだね。そこを、すなはな氣持で云つてみたまへな」

すぐには返事もしなかつた。

「考へちやア駄目だよ。考へてるうちにやア、どうしたつて餘計な思案がはいつて來るから、構はずぽかッと云つてみたまへなね」

今度は、その言葉尻を掠めて、

「嫌ひになんぞなりやアしないわ」

「そいぢア、別れたくもないわけだね？」

「それアさうよ。だけど……」

「だけど、は要らないんだよ。だけどから先は、手紙でもよくわかつてたし、さつきッからの、あんたの話で、なほ一層よくわかつたんだから……」

「ぢア、自分が離れたくないと思つてる限りは、どんなことがあつてゝ、がんばつてゝいゝの？」

「いゝどころぢアないさ。それでなくちアいけないと思ふね」

「ぢア、お君さんの場合はどうなの？ あなたの奧さんから手紙が行つて、どうしても別れてください、つて云はれて、それでも……」

「それア、あの人の性分ぢア、可厭です、御免かふむります、つて返事は書けないよ。然しさうかつて、實際は別れられなかつたんだから……。別れたのは、それとは全く別の理由からだつたんだから……」

「それアさうね」

「だけど、今あたしが訊いたのは、あんたの純粹な感情で、人によつちアまた、感情なんてちつともあてにならない、それよりやア、理性にたよつた方が、萬事間違がない、つていふ風な考から、……考つて云ふより、性分で、自然とさうなるんだらうけれど、何ひとつするにも、よウくあとさきを考へて……」

「どつちかつて云へば、あたしなんぞその方かも知れないわね」

「さう。丁度、今あなたの云つた『その方かも知れない』くらゐのとこで、はつきり『さうだ』といふほどでもあるまいと思ふね。……理性につくか、感情につくか、——これは、考へと云ふより、むしろもつて生れた性分でね、そこへ行くと、あたしなんぞ、だらしがなくらゐの感情派だけれど、そのわりにこれで、大きな間違も仕出かさないもんだよ」

「さう云ふけどもね、感情だけでなんか出來る人は仕合よ。事と場合によつちア、なか〳〵さういくもんぢアないわ。感情と理性とが、めッちやくちやにこんがらかつちまつて、……そいだから迷ふのよ」

「うん」

昌造は、深く頷いた。「つまらない氣迷ひから、とんでもないことを云ひだしちまつて、ほんとにすみません」さう云つてあやまられたよりも、數十倍こたえて、忽ち目頭がうるみかけてゐた。

「こんな氣しない？——感情ばかりでなんかするの、我儘みたいで、……なんだか自分がいけない人になつたやうで、あたしは心配なのよ。だから、そうッと、知らん顔をしてでもなんでも、一遍は理性の門口を通つてみるのよ。そいで捉まつちまへば、自分はいくら都合がわるくつてもなんでも、それでひと安心なのよ。それを、うまアく、見つからずに通りすぎちまつて、なんかしてからあとで、引きずつて行かれて、なんのかんの愚圖々々云はれると、今度はまたすつかり感情の方の身方についちまつて、めちやくちやに強情を張つて、誰がなんと云つたつて聽きやアしないわ。さういふ時の強情と來たら、生意氣さ加減と來たら、自分でもいやンなつちまうんだけれど、どうしたつてもうあとには引けないのよ。だから、——自分でもよくそれと知つてるから、うつかり素通りさせられても、ほんとはあとで困るのよ。わかる？」

「わかる、わかる。よウくわかるよ」

亢奮から、思はず、ピュウ〳〵風を切つて傘を振り廻しながら、「そいでだね、……そいでもう、なんにも云ふことないだらう？」

「ないわ」

「ぢア、あの手紙は、受取らなかつたことにするよ」

「いゝわ」

昌造は、ぎゆうッと抱きよせて、顔ぢうに、唇の雨を降らせたい衝動を、深く息を嚥み込んだまゝ放たないことによつて、やつと抑へ、がり〳〵と、砂利の上に、足駄の歯を鳴らした。

半町ばかりは、二人とも口を利かなかつた。丁度、松の覆ひかぶさつた土手下の道を歩いてゐたが、時々ばら〳〵ッばら〳〵ッと、梢の滴が降りかゝつて來た。

「風が出たね。これで天氣ンなるかも知れない」

仰ぐと、月の夜とみえて、どことなく底明い空に、ぐん〳〵雲が動いてゐた。

「お腹すかない？」

「すいたね。なんか食はふか」

「だけど、へんな、カフエみたいなうちいやよ」

「蕎麥屋ならいゝだらう。蕎麥屋イはいつたことない？」

「永坂の更科ッきり知らないわ」

「四谷見附まで行けば、ちよつとうまいうちがあるんだけどな」

「それより、お愛さんのとこイ行つてみない？」

「行つてもいゝけど……」

「お愛さんとこで、なんかさう云つて貰つて食べませうよ」

「久振りで、愛香さんにも逢ひたいけれど、そんなことしてると、

そくなりやアしないかな?」

「だいじようぶよ」

「それア、あたしは、いくらおそくなつたつて平氣だけれど、あんたは、今日引越をしたばかりの人なんだから……。それにしても、ずゐぶんだしぬけだつたんだね。昨日あの手紙を書いてる時分にやア、まだなんにもきまつてなかつたのかい?」

「えゝ。あれを出しちやつたあと、晩御飯を食べてるところに、妹の夫婦が出かけて來たのよ。そいで、かう〳〵いふ家が見つかつたつて云ふから、そいぢア、すぐ明日越さうつてことになつちやつたの。引越ッたつて、なんにも荷物らしい荷物なんぞないんですものね」

「然し、さつき千葉君が歸つて來て、もうあすこにやアいらつしやいません、つて云つた時にやア、ちよつと吃驚したよ。何しろ、あゝいふ手紙のあとだつたからね……」

いくぶんひやかすやうに云ふと、

「もうあの手紙のこと、一切云ひッこなしにしませうよ。その代りあたしも、一生、比叡山のこと云はないわ」

「よし。さうしよう。……千葉君に聞いたんだけれど、なんだか大勢ゐたつて、……誰か手傳にでも來てたのかい?」

「妹の夫婦が、當分一緒にゐることになつたのよ。それに叔母さんでせう。表町からも一人女中が來てくれたし、妹ンとこの小僧さんはゐるし、今度もなか〳〵賑かさうよ」

「あゝ、さう。妹さんとこもみんな一緒になつたのかい。それアいいや。……どうれで千葉君がさう云つたよ、——女中の一人や二人置いたんぢア、とても寂しくつてゐられないくらゐ廣いつて」

「嘘よ。そんなに廣かアないのよ。上下で六間か七間でせう」

「そいぢア、妹さんたちが別になると、少し廣すぎるかも知れないね」

「だから、さうなつてもいゝやうに、女中を三人ぐらゐ置くつもりで、早速今日桂庵に頼みにやつたわ」

「表町から來たつては、いくぶんお目附役の氣味もあるんぢアないのかな?」

「さうかも知れないわ」

と、投げた調子で「でも、いくら何をつけやうと、こつちはこつちですからね」

「そんな人がゐるんだとすると、なほさら今夜は早く歸つた方がよかアないかい。……第一、手紙なんぞ持たしてやつたのからして、いけなかつたかな?」

「そんなこと、ちつとも構やアしないわ」

ちよつと間をおいてから、二度もね、あの、千葉つて人、あたし嫌ひよ。今度ッから、矢つ張りナカヤに頼むか、それでなきア、いつそ俥夫かなんかの方がいゝわ」

「へんだね、千葉つて男は、どうしてさう評判が悪いんだらうな。こないだも、満津島の夫婦が、さんざッぱら悪口を云つてたけれど……」

「なんとなくいけすかない人よ。あたし、地震の晩、逗子に行くことにきまつて、支度をしてた時からさう思つてたわ。面白半分、まるで見物にでも出かけるやうな風なんですもの」

「さうかね。……無論あたしだつて、別にさう好きつてわけぢアないけど……」

「少し落ちついたら、きちんとお禮でもしちやつて、今後、あんまりお宅に出這入させないやうにした方がよかアない？」

「さうもいかないよ。兎に角あれで、あたしにとつちア恩人だからね。それア當人は、火事場の彌次馬みたいな氣持で出かけたかも知れないけど、結果としては、ずゐぶんこつちは助かつてるんですからね」

「それだつて何も、逗子の皆さんの御様子を見て來たつてだけのことで、その場に居合せて、奥さんを助け出したのなんのつてわけぢアなし……」

「然し、どうしてさうみんなに嫌はれるんだらうな。……こなひだの歸り、満津島の夫婦、まだなんか云つてたかい？」

「何を？」

「いゝえ、あの二人の悪口をさ。うちぢア、おかみさんに制められて、まだ洗ひ浚ひ云ひ切れなかつたやうな顔をしてたからさ」

「どうだつたでせう。忘れちやつたわ」

行くにきまつたともなく、いつか二人の足は、愛香が當分の住居にしてゐるといふ、紀尾井町の宿屋の方へ向いてゐた。宿屋そのものが、下街の焼けだされで、普通の住宅を借りて、取敢ず假の營業をしてゐるといふ話だつた。瑛龍も、番地を知つてゐるだけで、まだ訪ねたことはなかつたので、あちこちまごついた擧句、やがて嚴しい屋敷門の前に立つた。土手に近い、ひッそりとした横町で、門前には、灯を消した自働車が、二臺も停つてゐた。一時に待合といふものを失つた紳士、紳商が、人目にはたゝず、また普段とは趣を異にした座敷で、しみ〴〵とした逢瀬を樂める、——そこが、營業者の側から云へても、狙ひどころらしく思へた。何一つ目標を掲げてゐない宿屋の門、灯を消した自動車、普通の人にはめつたに用のない横町、何もかも、この想像を裏書して餘りがあつた。わるくすると愛香の部屋にも……、さう思つて、

「どうだらう、いま時分訪ねてつて、迷惑ぢアないかしら」

「誰が？」
「お愛さんさ」
「そんなことないわ。どんなに喜ぶか知れやアしないわ」
「さう簡單にやア云へないよ。もしかして、旦那でも來てゐるとわるいからね」
「そんなら、留子だつて云はせるでせう。簡單よ」
「あゝ、成程ね。そんなら簡單だ」
耳門を押すと、ガリ〳〵ガリッと、吃驚するやうな、けたゝましい音をたてゝ、重い分銅をさげた鎖が軋り鳴つた。おまけに、門内の廣場に、砂利を蹴散して、大きな犬が吠えかゝつて來た。なかば身を入れかけてゐた瑛龍は、慌てゝ跳んで出ると、
「よしませう！　歸りませうよ！」
と、昌造の袂の先を引ッ張つた。
「だいじよぶだよ」
「いゝえ、よしませうよ！」
口笛を吹いて、犬をなだめにかゝつた昌造の袂の先を、なほもぐいぐい引つ張つて、「ねえ、よしませうつたら！　噛まれでもしたら大變だわ」
「だいじよぶ、だいじよぶ」

さう云つてゐるところへ、下男らしいのが、裏手の方から廻つて出て來た。
「どなたです？」
「いゝえね、瀬川さんを尋ねて來たんですけど、ゐますかしら」
「瀬川さん……と、ちよつとお待ちください」
それから、犬の名を呼んで叱りつけ、なほも吠えたてるのを、首輪に手をかけて、無理やり引ッ張つて行つた。
砂利場を、玄關の方へと歩きながら、
「どうだい、要害堅固を極めたもんだね。これなら、何をしてやうと、だいじよぶあげられッこないよ。金持なんて、どこまで狡く立廻るもんか、底が知れないね」
「さうねえ」
犬の可怕さから、瑛龍はまだ、ぴつたり昌造にくつゝいてゐた。
間もなく、地震後初ての愛香が、
「あらア」
と、それでも、落ちつき拂つた笑顔で、玄關まで迎へ出た。何故か、「地獄で佛」といふ感じで、二人は、そのあとに從ひ、長い廊下を奥へ通つた。

五ノ三終り——つゞく



四十八人目

森田草平

一

毛利小平太は小商人に身を扮して、本所二つ目は相生町三丁目、恰度吉良左兵衛邸の辻番小屋筋違ひ前に當る米屋五兵衛こと、實は同志の一人前原伊助の店のために、今日しも砂村方面へ卵の買ひ出しに出掛けたが、その歸途に、龜井戸天神の境内にある掛茶屋に立ち寄つて、一寸足を休めた。葭簀の蔭からぼんやり早稻の穗の垂れた田圃づらを眺めてゐると、二十ばかりの女中が側へやつて來て、

「お茶召上りませ」と云ひながら、名物葛餅の皿と茶盆とを緣臺の端に置いて行つた。

小平太は片手に湯呑を取り上げたまゝ、どこやらその女の顏に見覺えがあるやうな氣がして、後を見送つた。女の方でもそんな氣がするかして、二人の子供を連れた先客の用を聞きながらも、時々こちらを偸み見るやうにした。小平太は「はてな？」と小首を傾げた。が、どうしても想ひ出せぬので、二度目にその女が汲子を持つて側へ來た時、

「姐さん、わしは何處かでお前さんを見たやうに思ふが——」と切り出して見た。

「はい」と、女は極りの惡さうに顏を赧らめながら、丁寧に小腰を屈めた。「わたくしも

最前からさう思ひ〳〵、あんまりお姿が變つていらつしやいますので……もしや貴方さまは元鐵砲洲のお屋敷においでになつた、毛利様では御座いませぬか。」

「して、お前さんは？」小平太はぎよつとして聞き返した。

「わたくしは同じお長屋に住んでをりました井上源兵衞の娘で御座います。」

「ほう、井上殿のお娘御！ さう云へば、先刻から見たやうに思つたのも無理はない」と、小平太は四邊を見廻しながら低聲につゞけた。井上源兵衞と云へば、九兩三人扶持を頂いて、小身ながらも、君侯在世の砌りはお勝手元勘定方を勤めてゐた老人である。「それにしても變つた所でお目に懸りましたな。で、お父上はその後御息災でゐられるかな。」

「はい」と云つたまゝ、娘は急に下を向いて、はら〳〵と涙を濺した。

「ふうむ？」と、小平太は相手の容子を見い〳〵訊ねて見た。「では、何か變つたことでも御座りましたか。」

「は、はい」と、娘は前垂の端で眼の縁を拭つて、ちらと背後を振返りながら、これも四邊へ氣を兼ねるやうに小聲でつゞけた。「父は昨年の暮に亡くなりました。それから引續いて母が永い間の煩ひに、蓄へとても御座りませねば、親子揃つて一時は路頭に迷はうとしましたが、長屋の衆が親切に仰しやつて下さいまして、この春からこゝで勤めさせて頂くやうになつたので御座います。」

「それは〳〵、飛んだ苦勞をなされましたな」と、小平太も相手を慰めるやうに云つた。「だが、これも時代時節といふもの、そのうちには又好い事も運つて來ませう。あまりきな〳〵思つて、あなたまで煩はぬやうにされるが好う御座りませうぞ。」

「有難う存じます」と、娘は優しく云はれるにつけて、又もやせぐり來る涙を前垂の端で押へ〳〵した。

「で、母御はその後ちつとはお宜しい方で御座るかな。」

「それがどうも捗々しく御座いませんので……この夏から始終寢たり起きたりしてゐましたが、秋口からはどつと床に就いた切りで御座いますの。」

「それは又御心配な」と、小平太は心から同情するやうに云つた。「ああ、せい〴〵大切にしてお上げなさるがいゝ。手前も又何かの折にお訪ねすることも御座らうが、只今のお住家はこの御近所で？」

「はい、妙見樣の裏手の七軒長屋で、こちらの茶店へ出てゐるおしほと聞いて頂けば、ぢき知れます」と云ひかけて、不圖氣が附いたやうに、「でも、大變汚い所で御座いますので、あなた方に入らして頂くやうな……」と、遠慮がちに云ひ直した。

「いやなに、今では手前も御覧の通りの身の上、その御遠慮には及びませぬわい」と、小平太は一寸袖のあたりを振返りながら、わざとらしく笑つて見せた。こんな風に身を落してこそあれ、今に見よ、同志と揃つて吉良邸に乘込みさへすれば、主君の仇を討つた忠義の士として、世に謳はれる身だといふやうな意識がちらと頭の中を掠めたのである。

「それに」と、彼は又何氣なくつゞけた。「あの邊は手前もちよく／＼參りますから、又通りがゝりに寄らせて頂くことも御座いませう。どうかお歸りになつたら、小平太が宜しく申してゐたと、母御にお傳へ下されい。」

まだ何やら訊いて見たいやうな氣もしたが、人目を惹くのがいやさに、小平太は茶代を拂つて、そこ／＼に茶店を出てしまつた。年が若いだけに、思はぬ邂逅から妙に心をそゝられた處へ、女の涙に濡れた顔を見て、大事を抱へた身とは知りながら、ついそれを忘れるやうな氣持にもなつたものらしい。夕日を仰いで、田圃の中の一筋道を辿りながらも、彼は幾度か後を振返らうとして、そのたびにやう／＼の思ひで喰ひ留めた。

二

去年三月主君淺野内匠頭、殿中に一高家の筆頭吉良上野介を刃傷に及ばれ、即日芝の田村邸に於て御切腹、同時に鐵砲洲の邸もお召上げとなるまで、毛利小平太は二十石五人扶持を頂戴して、これも同志の一人大石瀨左衞門の下に大納戸係を勤めてゐた。當時年は瀨左衞門より一つ上の二十六歳であつた。その後赤穗城中に於ける評議が籠城殉死から一轉して、異議なく開城、その讐仇討ときまつた際は、彼はまだ江戸に殘つてゐたので、最初の連判狀には名を列しなかつた。が、その年の暮に大石内藏助が、かねて城明渡しの際[illegible]を蒙つた幕府の目附方へ御禮旁々、お家の再興を嘆願するために、番頭奥野將監と手を携へて出府した際、小平太は何物かに後から押されるやうな氣がして、内藏助の旅館を訪れ、誓書を入れて義徒の連盟に加はつた。何物かとは所謂時代の精神である。當時の侍は、君父の仇をそのまゝに差措いては、生きて人交りが出來なかつた。彼もその精神に押出されたのである。そして、内藏助の歸洛に隨行して、上方へ上つてしばらく京阪の間に足を留めてゐた。

時代の精神と、もう一つは、世が太平になつたために、一たび主に放れた浪人は喰ふことが出來ない、何人も抱へ手がないといふ事情に壓迫されて、小平太の外にも、誓書を頭領にいたして、新に義盟に就くもの前後踵を接した。いかに喰へない浪人生活よりも、時代の精神

に迫はれて死に就く方が、彼等にとつて快く思はれたかは、主家の兇變の前に、既に浪人してゐた不破數右衞門、千馬三郎兵衞、間瀨新六の徒が、同じやうに連盟に加はつて來たのでも分る。兎に角、元祿十四年の暮から明くる年の春にかけて、連判狀にその名を列ねるもの實に百二十五名の多きに上つた。しかも、その中には、內匠頭の舍弟大學を守り立てゝ、成らぬまでもお家の再興を計つた上、その成否を見定めてから事を擧げようとするものと、そんな宛にもならぬことを當にして、便々と待つてはゐられない、その間に敵と覘ふ上野介の身に異變でもあつたら何うするかと、一途に仇討の決行を主張するものとがあつて、硬軟兩派に分れてゐた。前者の音頭を取るものは、曩に大石と同行した奧野將監を始めとして、小山、進藤の徒であり、後者は堀部安兵衞、奧田孫太夫などの在府の士、並びに關西では原總右衞門、大高源吾、武林唯七等の人々であつた。その爭ひが烈しくなるに伴れて、前者は後者を罵つて、彼奴等がそんなに逸るのは喰ふに困るからだと云つた。そして、それは事實でもあつた。元祿十五年の正月二十六日に、堀部安兵衞、奧田孫太夫、高田郡兵衞三人の連名で、江戸から大石に宛てた書面に、上方の連中がゆつくりしてゐられるのは、敵の樣子を目の前に見てゐないからだ、それを毎日見せつけられてゐる吾々の胸中も察して貰ひたいといふやうな意味のことを述べた末に、

「同志の中でも器用なものは、醫者の眞似をしたり鍼醫になつたりして、それ〲渡世の道を立てゝゐるが、吾々は仇討專門で、他に藝がないから日々喰ひ詰める一方である。願はくば、あまり見苦しき體になり下らぬうちに、一日も早く決行したい」と云つたやうな一節がある。これは浪士の實情を有體に道破したものと云はなければならない。

處で、內藏助自身は、どちらかと云へば前者に屬してゐた。彼は仇討連盟の盟主になつた。しかも、その裏面に於ては、全然それと反向するやうな主家の再興に力を盡してゐた。或ひは主家の再興は再興、仇討は仇討で遣る氣であつたと云ふかも知れない。しかし主家を再興した後で、仇討の出來ないことは、何人よりも內藏助自身一番よく知つてゐた。仇討をしなければ、同志を欺いたことになるばかりでなく、永く世の指彈を受けるかも知れない。しかも、一國の重器に擬する城代家老としては、主の恨みを晴らすといふことも大切であらうが、それよりも先づ主家の祭祀の絕えざることを念とするのが當然だと信じたのである。この信念の下に、彼は去年の暮に出府した際も、あらゆる手蔓を求めて目附衆へ運動もしたし、それから後も山科に隱居して、茶屋酒にうつゝを脫かしてゐると見せながら、猶依ひそかに

大垣の城下に戸田侯（内匠頭の從弟戸田釆女正氏定）老職の門を叩いて、大學擁立のことを依賴した事實もある。尤も、さうした運動の奏效覺束ないことは、彼と雖もよく承知してゐた。が、全然徒勞に終るものとも思つてゐなかつた。再興の望みが絕對になかつたやうに思ふのは、事後に於てそれを見るからで、當時にあつては、四圍の情勢から見て、必ずしもその望みがなかつたとは云はれない。幕府が一旦取潰した家を再興した先例はいくらもある。況してや、相手の吉良家に何のお咎めがなかつた點から見ても、その渦中にあつた淺野家の浪人どもには、今にも再興の恩命が下るやうに思はれたかも知れない。

兎に角、内藏助からしてさういふ氣持であつたために、正月の山科會議では、持重派が勝ちを制して、今年三月亡君の一周忌を待つて事を擧げようといふ豫ての誓約も當分見合せとなつた。そして、二月の初めには、一黨の軍師といはれる吉田忠左衞門が、内藏助の命を含んで、關東の急進派鎭撫のために江戶へ下ることになつた。彼が浪士どもに分配するために、軍用金の中から若干の金を携へて行つたことは云ふ迄もない。

江戶の急進派の中でも一番あせつてゐた堀部安兵衞は、それからも絕えず書を寄せて一擧の即行を迫つてゐたが、兎角に煮え切らぬ内藏助の態度をもどかしがつて、六月の末には單身東海道を押上つて來た。そして、山科の大石の許へも立ち寄らず、大阪の原總右衞門、京の大高源吾など上方の急進派を糾合して、大石の一派とは別に、自分達だけで大事を決行しようと計つた。こゝに赤穗義士の連盟も分裂の危機に瀕したのである。が、幸か不幸か、七月の二十二日になつて、江戶の吉田忠左衞門から淺野大學が藝州廣島へ流謫を命ぜられたことを報じて來た。同じく二十五日には、奧田孫太夫からも同樣の書面がとゞいた。かうなればもう是非がない、主家再興の望みは永久に絕えたのである。で、内藏助も終に意を決して、七月二十八日、京、伏見、山科、大阪、赤穗などに散在する同志と圓山重阿彌の別莊に會合した上、いよ／＼仇討決行の旨を宣言した。そして、自分も十月の末には江戶へ下るから、面々に於てもそれ迄に、二人三人づゝ仇家へ氣附かれぬやう内々で下向せよと云ひ渡した。それを聞いて、義徒は皆踴躍した。中にも堀部安兵衞は、大石と離れてさへ決行しようとしてゐただけに、明くる朝すぐに發足して、潮田又之丞と共に江戶に下つた。この二人は、途中濱松の驛で、藝州へ流されて行く淺野大學の一行に出逢つたが、後難の相手の身に及ばむことを恐れて、わざとお目通りを願はないで、素知らぬ顏に行き過ぎてしまつたと云はれる。

横川勘平は圓山會議に先立つて、七月の末には既に江府へ下つ

たつゞいて岡野金右衛門、武林唯七、それに毛利小平太の三人も八月の二十七日に江戸へ着いた。それに次いでは、吉田澤右衛門、間瀬孫九郎、不破數右衛門の三人が九月二日、矢頭右衛門七も單獨にて同じく九月二日、千馬三郎兵衛、間重次郎、中田理平次は同月七日、木村岡右衛門、大高源吾も九月中といふやうに、同志の士は續々江戸へ下つた。しかも大石自身は、後を清くして立つためには何かと用事もあつて、さう急に京師を引拂ふわけにも行かない。そこで同志の心を安んずるために、まづ伜の主税に老巧間瀬久太夫を介添へとして、大石瀬左衛門、茅野和助、小野寺幸右衛門なぞと共に、自分に先立つて下向させることにした。一行は九月十七日に京都を立つて、同月二十五日には無事江府に下着した。そして、石町の旅人宿小山屋に、江州の豪家垣見左内公儀に訴訟の筋あつて出府したと稱して逗留することになつた。それと見た一黨の士氣は、かうなれば最早太夫の出府も間はあるまいといふので、いよいよ振ひ立つた。

三

これより先前原伊助、神崎與五郎の兩人は、内藏助の命を帶びて、既にその年の四月中江戸に下つてゐた。これは吉良、上杉兩家の近情を偵察するためで、内藏助もその頃から主家の再興を所詮覺束なしと見て、そろそろそれに處する道を講じて置いたものらしい。で、前原は米屋五兵衛と變名して、相生町三丁目に店借りをして、吉良邸の偵察に從事するし、神崎は美作屋善兵衛と名告つて、上杉家の白金の別墅に程近い麻布谷町に一戸を構へた。これは上野介が浪士の復讐を恐れて、實子上杉彈正大弼綱憲の別邸に匿まはれてゐるといふやうな風評があつたからに外ならない。が、それは風評だけに止まつて、主として本所の邸に住んでゐることが分つたので、追ひ追ひ同志が出府して來る頃には、與五郎も谷町の店を仕舞つて、前原の米屋の店へ同居することになつた。そして、美作屋では、自分の生國から取つたものだけに、氣が指したのか、改めて小豆屋善兵衛と名告つて、扇子や雪駄つけの荷を背負ひながら、日々吉良邸の内外を窺つた。が、同邸でも見慣れぬ商人と見れば、一切邸内へ入れぬやうにして、用心堅固に構へてゐる。その中を潜つて這入り込まうとするのだから、こちらの苦心は一通りでなかつた。が、そんな事にあぐむやうな彼等でもなかつた。日夜その機會を覗つてゐて、それ火事だ！　とでも云へば、眞先に屋根へ駈け上つて、肝心の火事は他所に、向側の吉良邸の動靜を目を皿のやうにして窺つたものだ。

圓山會議の後、眞先に江戸へ下つた堀部安兵衛は、浪人劍客長江長左衛門といふ觸れ込みで、米屋の店に程遠くない林町五丁目に借宅し

た。前哨たる米屋の店と聯絡を取つて、何かの便宜を計るためであつたことは云ふ迄もない。この借宅には、在府の士小山田庄左衞門を始めとして、七月中安兵衞よりも一足先に江戸へ下つた横川勘平、一足後れてすぐその後から下つて來た毛利小平太の三人が同居した。そして、横川は三島小一郎、小平太は水原武右衞門と變稱した。なほ前者は、身分こそ五兩三人扶持の徒士に過ぎなかつたが、主家沒落の際は、赤穗城から里餘の煙硝藏に出張してゐて、籠城殉死の列に漏れたといふので、それと聞くや、取る物も取り敢ず城下へ驅け着けて、内藏助の許へ吸鳴り込んだ程の氣鋭の士であつたから、偵察の任務についても人一倍大膽に働いた。小平太も安兵衞だの勘平だのといふ氣性の勝つた連中と一緒にゐては、一人ぐづ／＼してはゐられない。それに、同宿の士の中では比較的小身者であつただけに、横川とは殊に仲好くしてゐたので、同じやうに仲間小者に身を扮して、仇家の偵察にも從事すれば、江戸中を走り廻つて、諸所に散在してゐる同志の間に聯絡をも取つてゐた。で、誰一人小平太の心底を疑ふものもなければ、彼自身もそれを疑ふやうな心は微塵もなかつた。

處で十月の半頃までには、後れて上方を發足した原總右衞門、小野寺十内、間喜兵衞などの領袖株老人連も、岡島八十右衞門、貝賀彌左衞門などと一緒に、前後して江戸へ着いた。殿も後れた中村淸右衞門、鈴田重八の兩人も、十月の三十日には江戸に入つて、安兵衞の長江長左衞門の借宅に同宿することとなつた。中村は小山田庄左衞門などと同じく百五十石取りの上士で、鈴田は三十石の扶持米を頂いてゐたものであつた。

頭領大石内藏助もいよ／＼十月の七日には京師を發足した。それに從ふ面々は、潮田又之丞（前に安兵衞と共に下つて、再び上方へ取つて返したもの）、近松勘六、菅谷半之丞、早水藤左衞門、三村次郎左衞門、それに若黨仲間どもを加へて、同勢すべて十人、「日野家用人垣見五郎兵衞」と大書した繪符を兩掛長持に附して、關所々々の眼を眩ましながら、五十三驛を押下つた。そして、二十三日には鎌倉雪の下に着、こゝで江戸から迎ひに出た吉田忠左衞門と出會つて、打合せをした上、三日の後一緒にそこを立つた。そして、かねて準備して置かれた川崎在平間村の一屋に入つた。こゝに十日間許り滯在して、江戸の形勢を窺つてゐたが、差閊へなしと見て、十一月の五日にはとう／＼御膝元へ乘込んで來た。そして、前月來倅主税が逗留してゐる石町の旅人宿小山屋に、左内の伯父と稱して宿泊することになつた。江戸にあつた同志は、それとばかりに、人目を忍んで、代る／＼内藏助の許に伺候した。いよ／＼年來の宿望を遂する日が近づいたのである。が、内藏助の到着と共に、かねて連盟の副頭領とも恃まれてゐた

取りの番頭奧野將監、同じく河村傳兵衞以下六十餘人の徒輩が、いよいよ大石の東下と聞いて、卑怯にも誓約に背いて連盟を脱退したことが判明した。尤も、その中には、前から態度の怪しかつたものもあるにはあつた。が、内藏助の伯父小山源五右衞門、從弟進藤源四郎など、義理にも脱けられない者どもまで、口實を設けて同行を肯んじなかつたと聞いては、先輩の同志も惘れて物が云へなかつた。中にも、血氣の横川勘平の如きは、

「彼奴等もとく\/汚い奴輩だ。この者討つて捨てようと思つたのに、手延びにして殘念だ!」と、齒嚙みをして口惜しがつた。

が、神崎與五郎は側からそれを宥めるやうに、

「なに、今になつて退くやうな奴等は、皆大夫様の御左右をうかゞつて、萬一お家お取立てになつた場合、眞先にお見出しに預からうといふ了簡から、心にもない義盟に加はつて來たのだ。そんな奴等が何人ゐたつて、眞逆の時のお役に立つものでない。仇討は吾々だけで十分遣つて見せるよ」と云つた。

勘平もそれには異存がなかつた。

兎に角、一時百二十餘名に上つた義徒の連盟も、江戸へ集まつた時には、かうして五十人餘りに減つてしまつた。が、それだけに又後に殘つたものの心は一層引締つても來た。少なくとも、人數の減少に依つてぐらつくやうには見えなかつた。

が、十一月の二十日になつて、麹町四丁目千馬三郎兵衞の借宅に、間喜兵衞、同じく重次郎、新六なぞと一緒に同宿してゐた中田理平次が、夜逃げ同様に出奔したといふ知らせが同志の間に傳はつた。江戸へ下つた者は眞逆大丈夫だらうと思つてゐただけに、同志もこれには吐胸を吐いた。現在同志と思つてゐる者も宛にはならぬといふやうな感情も湧いて、互に相手を疑ふやうな氣持にもなつた。中にも、小平太は少なからぬ衝撃を受けた。

「さうだ、同志も宛にはならぬ。だが、俺は何うだ、俺は宛になるか。」

さう思つた時、彼はぎよつとして思はず身を竦めた。彼と雖も、最初連盟に加はつた時から、一死は素より覺悟してゐた。仇家に打入る以上、たとひその場で討死しないまでも、公儀の大法に觸れて、頭領始め一同の死は免れぬといふことも知らないではなかつた。が、一方では又、仇討は仇討だ、君父の仇を討つたものが、たとひ公儀の大法に背けばとて、やみ\/刑死に處せられる筈はない。お上でも忠孝の士を殺したら御政道は立つまいといふやうな考へが、心の底にあつて、それが存外深く根を張つてゐたらしい。

「だが、相手には何しろ上杉家といふ後楯がある」と、小平太は今更

のやうに考へずにはゐられなかつた。「その上杉家は又紀州家を仲にして將軍家とも御縁つゞきになつてゐるのだ。去年三月の片手落ちなお裁きから見ても、又今度の大學樣のお手重い御處分から見ても、吉良家に亂入したものをその儘助けて置かれる筈はない。必定一黨の死は極まつた！」

　彼は頸の上に振上げられた白刄をまざ〳〵と眼に見るやうな氣がした。同じやうに感ずればこそ、理平次も垢を含んで逃亡したものに相違ない。と云つて、自分は今更命惜しさに同志を裏切る氣にもなれなければ、又それだけの厚顏しさも持合せてゐない。

「なに、俺一人で死ぬのぢやない」と、彼は少時してやう〳〵乾燥いだやうな聲で呟いた。「死ねば皆一緒に死ぬのだ！」

かう自分で自分に云つて聞かせてから、何人も見てゐたものはなかつたかと心配するやうに、そつと眼を上げて四邊を見廻した。氣が附いて見ると、じつとりと頸筋のまはりに汗を搔いて、自分ながら顏色の蒼醒めてゐるのが好く分つた。

　その後も、小平太は出來るだけ自分の心の動搖を同志の前に隱すやうに努めた。尤も、彼が同志に心の中を覺られまいとするには、もう一つ他に理由があつた。それは彼に一人の情婦があつたからだ。龜井戸天神の境内で井上源兵衞の娘おしほに出逢つて、あはれな身の上話を聞いてからといふもの、宿へ歸つてもその女のことが氣になつて、どうも心が落着かなかつた。で、明くる日は早速僅かばかりの手土産を持つて、かねて聞いて置いた七軒長屋に母親の病氣を尋ねて見た。が、行つて見ると、聞いたよりは一層慘目で、母親は持病の痛風で足腰が立たず、破れた障子に添うて寢かされたまゝ、娘が茶店の隙間を見ては、驅け戻つて藥餌をすゝめたり、大小便の世話までしてくれるのを待つてゐるといふ有樣であつた。あまりの氣の毒さに、小平太は其の後もちよく〳〵見舞ひに寄つたが、若い者同志とて、何時しか二人の間に惡緣が結ばれてしまつた。小平太にして見れば、母娘に對する同情から出たとは云へ、大事を抱へた身の末の遂げないことはよく知つてゐる。悔恨と愛慾とは初めから相鬪いだ。が、女の方では、そんな事とは知らないから、世にも手頼ない身の盲龜の浮木に逢つた氣で、眞心籠めて小平太に仕へる。小平太もさうされて嬉しくないことはない。同志に隱れて、使走りの廻道をしては、夕方からこそ〳〵と妙見堂の裏手へ這入つて行く。夜分どうしても都合の惡い時は、茶店へ顏を見に行く。さう云ふ折、彼はいつでも上方に於ける大石の廓通ひのことを想ひ出して、自分で自分に辯解をした。勿論、頭領がしたから自分も遣つていゝと云ふのではない。たゞ內藏助が茶屋酒に醉ひ痴れながら、片時も仇討のことを忘れなかつたやうに、自分も女のた

めに一大事を忘れようとは思はない。それだけに細叟の不埓は容赦されたいと云ふのが、切めてもの彼の願ひであつた。そして、暇さへあれば、足は柳島の方へ向つた。

四

處が、おしほの母親は、十一月の半ばから陽氣のせゐか、どつと重態になつて、娘の精根を盡した介抱も甲斐なく、十日餘りも惱みに惱んだ揚句、とう〳〵死んで行つた。おしほは身も浮くばかりに泣いた。傍にゐた小平太も、母親がわが身の苦しさも忘れて、息を引取る間際まで、「おしほのことを頼む〳〵」と云ひつゞけにしたことを思ふと、何だか目に見えぬ繩で縛られてゐるやうな氣がして、ぼんやり考へ込んでしまつた。が、これ迄の行きがゝりから云つても捨てゝは置かれないので、同志の前は大垣の支藩戸田彈正介氏成侯の家來で、彼には實兄に當る山田新左衞門の許に世話になつてゐる母親の病氣と稱つて、二日許り同宿の家を明けて、形ばかりの葬式でも出させるやうにした。

で、それが濟んでから一旦宿へ歸つたが、氣になるので、一日置いて又出掛けて見た。おしほはもう片時も小平太の傍を離れない。「どんな苦勞でも厭ひませぬから、どうかわたしをお側へ引取つて下さいませ。一人の母にさへ別れては、かうしてゐるのが女の身では心細うてなりませぬ」と、男の膝に縋つて掻き口說いた。

「さう云やるのも尤もぢやが、わしも今では他人の家に厄介になつてる身……」

「では、どうぞあなたがこゝへ引移つて下さいませ。こんな穢い所でお氣の毒ですが、たとひ賃仕事をしてなりとも、わたしはわたしで身過ぎをして、あなたに御迷惑は懸けませぬ」と、女の腰はなか〳〵強い。

これには小平太も當惑した。心の中では、かうしてだん〳〵身拔きの出來ない深みへはまつて來た自分の愚しさが、何よりも先づ悔いられた。が、今となつてはどうにも仕方がないので、一時遁れの氣休めに、

「それもさうだが、わしも何時まで浪人をしてゐるつもりでもない。戸田樣に御奉公をしてゐる兄にも頼んで、方々へ渡りが附けてあるから、近い間には何とか仕官の途も着かうかと思つてゐる。その前に所帶でそなたと一緒にゐることが、骨折つてくれてゐる兄にでも知れたら惡い。たとひ一合二合の切米でたりとも、主取りさへ出來たら、屹度願ひを出して表向きそなたを引取るやうにするから、それ迄のところは、寂しからうが、この儘御近所の世話になつてゐて貰ひたい。あ

んまり引込んでばかりゐては、氣も悒々するだらうから、初七日でも濟んだら又茶屋へも出るやうにしたがいゝ。なに、それも永いことではない。わしも暇さへあれば、ちよく〳〵會ひに來るからね」と、さま〴〵に云ひ拵へて、やつと相手を納得させた。

で、その日の七つ下りに、小平太は屈托さうな顔をしながら、ぼんやり林町の宿へ戻つて來た。すると、横川勘平が待ち構へてゐて、相手の顔を見るなり、

「おゝ、水原か、好い所へ戻つて來た。貴公でなくちや出來ない仕事がある―」と、いきなり云ひ出した。傍には安兵衛の長左衛門も居合せて、何やら事ありげな様子に見えた。

「何だ〳〵？」と、小平太も心の中を見透されまいと思ふから、わざと威勢よく二人の側へ顔を寄せて行つた。

「實はあの兩國の橋の袂にゐる茶坊主珍齋な―」と、勘平は聲を潜めてつゞけた。「あいつは何時かも話した通り例の山田宗徧の弟子で、やはり卜方（上野介の符牒）の邸へ出入りをしてゐる、茶會でもある時は、師匠のお供をして行つて、いろ〳〵手傳ひもしてゐるといふ話だから、又何か聞き出すこともあらうかと、この間からそれとなく取入つて置いたがね、今日圖らずそいつの手から卜方の家老小林平八郎に宛てた書面を手に入れたんだよ。」

「ふむ〳〵！」

「つい今の先のことだ、ぶらりと這入つて行くと、これは好い所へ來てくれた、又一筆頼むと云ふぢやないか。なに、この坊主がお茶は出來るか知らんが、無類の悪筆でね。これ迄も二三度頼まれたことがあるから、お易い御用と引請けて、さて宛名はと聞いて見ると、小林だ。占めた！　とは思つたが、色にも出さず、相手の云ふまゝに認めた上、自分もあちらの方面に所用があるから、何なら私が届けて進ぜませう、御返事があるやうなら又戻路にと、巧く云つて使者まで請合つて來た。それはいゝが、何しろ俺はこの前あの邸へ這入り込んで、うろ〳〵してゐるところを摑み出された覺えがあるから、二度とあそこへは行かれない。と云つて、長左衛門どのでは顔が賣れてゐるから、どうも目に立つし、氣は急きながらも、貴公の歸りを待つてゐたのだ。」

「さうか―」と、小平太はぐつと固唾を呑み下しながら云つた。「よし、それでは俺が引請けた。」

「うむ、しつかり遣つてくれ。」

「心得た。で、念のために聞いて置くが、この手紙の用件は？」

「いや、何でもない。かねて小林から頼まれてゐた品が見附かつた。いづれ近日持主同道で持參するから宜しく、と云ふだけだ。いづれ[illegible]

か何かのことだらうよ。だが、貴公は何にも知らない體で、ただ使者に來たやうにして置いた方がいゝ。」

「それもさうだな。」

「兎に角、又と得られない機會だ」と、勘平は更に自分の註文をつゞけた。「出來るだけ邸内の樣子を細かに見て來て貰ひたい。近頃長屋と母屋との間に大竹の矢來を結ひ廻して、たとひ長屋の方へ打入れられても母屋へは寄り附かれないやうにしてあるといふ噂も聞くが、この頃はあちらでもお出入り以外の物類は一切入れないやうにしてゐるから、最近の樣子はさつぱり分らない。その邊も十分見屆けて來て貰ひたいな。」

「それに」と、安兵衞も傍から言葉を添へた。「かねぐ\山田宗徧の許へ弟子入りをしてゐる脇屋氏(大高源吾のこと、京都の富商脇屋新兵衞と稱して入込む)から、吉良邸では來月の六日に年忘れの茶會があるといふ内報もあつた。すれば、五日の夜は必定上野介在宿に極まつたといふので、討入は大凡その夜のことになるらしい大事の口振でもあつた。だが、頭領としては、その前にもう一度邸内の防備の有無を見定めて置きたいと云はれるのだ。で、若しお手前の働きでその邊の事情が確實に分つたら、吾々が待ちに待つた日もいよく\近づいたと云ふものだ。大切な役目だ、しつかり遣つて來て貰ひたい。」

「心得ました」と、小平太はそれを聞いて、急に胸をときつかせたながら、きつぱり返辭をした。

「くれぐ\も仕損じのないやうにな」と、安兵衞はなほ念を押すやうに云つた。「この場になつてしくじつたら、それこそ大事去るだ！その心得で遣つて來て貰ひたい。」

「よく分つて居ります」と、小平太も緊張にやゝ青味を帶びた顏を上げて云つた。「萬一見咎められるやうなことがありませうとも、一命に懸けて、御一同の難儀になるやうなことはいたしませぬ。」

「その覺悟で行けば、しくじることもあるまい。だが、見破られないうちに、こちらの思ふ所を見て來るのが肝心だ。諄いやうぢやが、その心得でな。」

「畏承りました。」

小平太はすぐに身支度をして、例の狀箱を受取つて立ち上つた。勘と思つたか、勘平も後から追ひ縋るやうに送つて出て、

「長左衞門どのの云はれる通り、向うの樣子がもう少し深く知れないと、迂闊に手は出せないといふ頭領始め領袖方の御意見だ。しつかり遣つて來てくれ」と、皮肉らしく小聲でさゝやいた。「その代りに、功く行つたら當夜の一番槍にも優る功名だぞ。」

「うむ！」と點頭いたまゝ、小平太は默つて表へ飛び出した。

五

小平太が進んでこの危い役割を引請けたのは、一つは心の中を見透されまいとする虚勢からでもあつたが、一つには又、こゝで一番自分の働き振りを見せて、中田理平次などとは全然違つた人間だといふことを同志の前にはつきり證據立てゝ置きたかつたからでもあつた。いや、同志の前といふよりは、第一自分の前に證據立てたかつた。だつて、小平太の心を疑つてゐるものは、何人よりも先づ彼自身であつたから！ そこで彼は與へられた機會を、よく考へても見ないで、遮二無二攫んでしまつた。が、一黨に對する責任を思へば、安兵衞から注意される迄もなく、この任務はあまりにも重かつた。若し怪しい奴と睨まれて、町奉行の手にでも引渡されたら……そして、どうしても密事を吐かねばならぬやうな羽目に陷つたら……

「そんな事にでもなれば、俺一人ではない、一黨の破滅だ！」と、考へただけでも足の竦むやうな氣がして、彼は思はず街の上に突立つてしまつた。

が、それと共に、「一命に懸けても」と二人の前に誓つた言葉が彼の心に泛んで來た。

「さうだ」と、彼は二たび自分で自分に誓ふやうに呟いた。「何んな事にならうとも、俺はこの口を開いてはならない――責められうが、殺されうが、たとひ舌を咬ひ切つてでも！」

こんな烈しい言葉を用ひながらも、彼はそれに依つて、不思議に、何の衝撃をも、不安をも、恐怖をも感じなかつた。この場合、彼には命を投げ出すといふことが極めて譯もないことのやうに思はれたのである。

「なに、死ぬ氣でかゝつたら、何程の事があらう？ こちらの覺悟一つだ！」

彼は力足を踏み緊めるやうにして歩き出した。見ると、もう吉良家の裏門に近く來てゐる。かねて小豆屋善兵衞の探知によつて、家老小林の宅が裏門に近い所にあるとは聞いてゐた。が、それでは都合が惡いと思つたから、わざと表門へ廻つて、門番にかゝつた。

「お願ひで御座います、一寸小林様のお長屋へ通らせて頂きます。」

「小林様へ通るはいゝが、いづれから參つた？」と、暇潰しに網すきをしてゐた門番が面倒臭さうに聞き返した。

「へえ、兩國橋のお茶道珍齋からお状箱を持つて參りました。」

「さうか、よし通れ！」

小平太はまづ虎口を免れたやうな氣がした。が、こゝで一つ落付いた所を見せて置かうと、

「私は新參者でよく存じませぬが、小林樣のお長屋はどちらで御座いませう？」と訊いて見た。

「なに、初めて御當家へ參つたと申すか」と、足輕はやつと手に持つた網から顏を上げた。「小林樣はお玄關の前を左に折れて、中の塀についてお長屋の前を眞直に行くと、一番奧の一軒建ちがそれだ。」

「へえ、どうも有難う御座います。こちらへ參りますか、は、分りました」と、お叩頭をしい〳〵、わざとゆつくり足を運んで、遠眼に玄關口を覗いて見ると、正面に舞樂の繪をかいた大きな衝立が立てゝあるばかりで、ひつそり閑と鎭まり返つてゐた。が、こゝらで見咎められてはならぬと思ふから、云はれた通りに、すぐに左へ折れて、總長屋の前をぶらり〳〵と歩いて行つた。長屋には所々人聲がして、どこからともなく水を汲む音、夕餉の支度をするらしい物音が聞えて來た。が、どちらを見ても、別段目に立つやうな異狀はない。大竹の矢來と云つたやうな嚴重な設備は、少なくともその邊には見受けられなかつた。

彼はその間も始終右手の塀に眼を着けてゐた。腰から下が羽目板になつて、上に小屋根の附いたもので、その中が屋敷のお庭先にでもなつてゐるらしい。ところ〳〵風通しの櫺子窓も附いてゐるが、一つ一つ内側からの簾が下げてあるので、中の樣子は見られない。爪先立ちをして見ても、植込の間から母屋の屋根つゞきが、それもほんの少々窺はれるばかりだ。

そのうちに、不圖一枚戸の中門が眼にとまつた。ぴたりと閉め切つてあるので、その儘行き過ぎようとしたが、念のためだと二三歩後戻りをして、前後を見廻しながら、そつとその扉に手を懸けようとした。途端に行手の土藏の陰から聲高な話聲が聞えて來たので、小平太はぎよつとして飛び退いた。見ると、二人連れの侍が何やら話しながら、すぐ目の前へ遣つて來るのだ。彼は透さず、

「少々物をお訊ね申しますが」と、小腰を屈めながら云つた。「小林樣のお長屋はどちらで御座いませうか。」

二人は立ち止つて、じろ〳〵小平太の樣子を眺めてゐたが、年嵩の方が、

「なに小林樣？　御家老のお長屋はついその左手のお家がさうだ」と顋をしやくつて敎へてくれた。

「へえ、有難う存じます、まことに相濟みませぬ」と、ぴよこ〳〵頭を下げながら、急いでその家のくゞり戸に手を懸けた。

二人の侍も小平太が門を這入るまでじつと後を見送つてゐたが、仲間體ではあるし、狀箱は持つてゐる、別に胡亂とも思はなかつたか、その儘踵を返して行つてしまつた。

小平太はくゞり戸を閉めて、始めてほつと胸を撫で下ろした。一歩違ひで無事に濟んだけれども、考へて見れば、實際危かつた。劍呑劍呑！　と思ひながら、氣を取直して、すぐ前の玄關にかゝつた。そして、

「お頼まをします、お頼まをします」と、二度ばかり聲を懸けた。

「どうれ！」とどすがゝつた聲がして、すぐ隣の玄關脇の部屋から、小倉の袴を穿いた爺さんが出て來た。

小平太はいきなり二つ三つ頭を下げて、

「私はお茶道珍齊からこの文箱を持つて參りました。どうかお取次ぎを願ひます」と、手に持つた狀箱を差出した。

取次の爺さんは默つてそれを受取つて、朱塗りの蓋の上に書いた宛名の文字をつく〴〵眺めてゐたが、「一寸待て」と云ひ捨てたまゝ、奥へ這入つた。が、間もなく引返して、「すぐ御返事があるさうだから、しばらく待つてをれ」と傳へた。そして、自分はすぐに元の部屋へ這入つてしまつた。

小平太は少時そこに立つてゐたが、大分手間が取れるらしく、奥からは何の沙汰もない。この間だ！　この間にそこらを見廻つてやれとも思つたが、先刻の失敗に懲りてゐるので、もし自分のゐない間に出て來られでもして、申し開きが立たなかつたら、それこそ百年目だ！　なに、まだ疑念もあることだと、じつと辛抱してゐるうちに、やつと奥で手の鳴る音がした。それを聞くと、例の爺さんはそゝくさと襖を明けて這入つて行つたが、すぐに又取つて返して、

「待ち遠であつたな。この中に御返事が入つてゐるさうだ。宜しくと傳へてくりやれ」と、小平太の持つて來た狀箱を渡した。

「畏まりまして御座います。その外にお言傳ては御座りませぬか」

「うむ、これを持つて參れば分るさうだ。」

「左樣で御座いますか、どうもお邪魔をいたしました」と、小平太はお叩頭をして、そのまゝ表へ出た。

さあ、これからはもう歸るばかりだ。が、これだけでは折角來た甲斐がないやうな氣もした。第一、同志の連中が何と云ふか知れない。彼には何よりも同志の思はくが氣になつた。で、右へ行けば表門に出るのを、わざと左へ取つて、角の土藏について廻つて見た。すると、もうそこに裏門が見えて、その正面に當る所が裏口の小玄關になつてゐるらしい。それが眼に着くと、彼はすぐに踵を旋した。そちらの方面のことは、前原や神崎の手で大凡そ分つてゐたからである。で、元來た道を引返してゐると、二たび例の中門が眼にとまつた。見ると、前にはぴたりと閉め切つてあつた戸が、何うしたのやら一寸ばかり透いてゐる。想ふに。先刻逢つた侍がこゝから這入つて、つい

閉め殘したものでもあるらしい。小平太は天の與へとばかりに胸を躍らせた。が、遑てる所ではないと、前後を見廻して、人目のないのを見定めながら、つと扉に身を寄せて、その隙間から覗き込んだ。目の前は矢つ張りお庭先の植込らしく、木の枝に視線は遮られるが、それでも廻緣になつた廊下が長くつゞいて、閉て切つた障子にあか〳〵と夕日の射してゐるさまが、手に取るやうに窺はれた。上野介の居間が何の邊にあるかは、素より知る由もない。が、左手に見える檜垣の蔭には泉水でもあるらしく、ぼちやんと鯉の跳ねる音も聞えて來た。小平太はだん〳〵大膽になつて、少しづゝ門の扉を開けて行つた。もう少しで頭だけ入りさうになつた時、すうと向うに見える障子があいて、天目を持つた若い女が緣側にあらはれた。彼はぎくりとして思はず後へ退つた。が、間が離れてゐるので、向うでは氣の附く筈もない。その儘廊下づたひに、音もなく下手へ這入つて行く。

小平太は振返つて、用心深く四邊を見廻した。幸ひに、何處から見てゐられた樣子もない。この上危い思ひをし覗いてゐても得る所はあるまい、こゝらが見切り時だと、彼は急いで門を離れた。が、切めて長屋の戸前でも數へて行つてやれと、心の中でそれを讀みながら歩いてゐるうちに、不意に背後で「わあッ！」といふ聲がして、五六人の子供が彼の側をばた〳〵と駈け出して行つた。一人の吹矢を持つた男の子の後から、大勢が一緒になつて駈け出して行くのだ。彼は又膽を潰した。が、それと分ると、まあ、あそこにぐづ〳〵してゐないで好い幸福だと思つた。その間にとう〳〵表門まで來てしまつた。で「どうも有難う存じます、行つて參じました」と、もう一度門番に挨拶をして、街の上へ出た。

六

小平太は一丁許り來て、始めて胸に返つたやうに息を吐いた。別段取立てゝ吹聽するやうなこともないが、使命だけは無事に果した。これだけ見て來れば、同志の前に面目の立たぬやうなこともあるまい。さう思つて、彼は又駈け出すやうにして林町の宿へ歸つた。宿には安兵衞、勘平の兩人は云ふ迄もなく、吉田忠左衞門の田口一眞まで來合せて、彼の歸宅を待つてゐた。氣早の勘平は、足音を聞くや、玄關まで駈け出して來て、

「おゝ歸つて來たな、首尾はどうだつた？」と、いきなり訊ねた。

「うむ！」と云つたまゝ、小平太はもう一度振返つて、後を尾けるものの有無を見定めてから、始めて座敷へ上つた。

奧の座敷には、忠左衞門と安兵衞の二人がひそ〳〵密談してゐた。小平太はまづ忠左衞門に一禮して、さて安兵衞と勘平の前に持つて歸

つた狀箱を差出した。

「ふむ、これが返事だな」と、安兵衞は手に取つて、一寸その上書に眼をやつたが、すぐに又それを下に置いて訊ねた。「して、邸の樣子は存分に見て來られたか。」

「あらまし見て參りました。」

から前置きをして小平太は指先で疊の上に圖を描いて見せながら、這入つて行つた時から出て來るまでの顛末を仔細に述べはじめた。勘平は側から硯に料紙を取つて渡した。で、それに依つて、二たび見取り圖を描いて說明しながら、

「先づかう云つた按排で御座います」と、話しを結んだ。「私の見た處では、思ひの外に派手な屋敷で、長屋にも母屋にも、噂に聞いた竹矢來なぞ一向見當りませんでした。間々女子供の聲は聞えましたが、一體にひつそりとして、格別の手配りがあらうとも思はれず、風說はただ風說に過ぎないかと存ぜられました。」

「成程」と、忠左衞門は大きく點頭いた。「大體われ等が考へてゐた通りであるな。」

「左樣で御座います」と、小平太は更に語を繼いだ。「で、戻路には切めてもと存じまして、長屋の位置を見がてら、その家數を讀んで參りましたが、大體裏通りに向つた一棟と、南側に添うた一棟と、總長屋は二棟に別れてをりまして、戸前の數は三十あまり內十戸程も御座いませうか。その外に家老小林の住宅は、別に一軒建ちになつてをりました。」

「いや、よく氣が附かれた」と、忠左衞門は相手の勞を犒ふやうに云つた。「これで邸內の防備に對する大體の見當も附いた上に、常夜出合ひさうな相手方の人數もほゞ分つたといふものだ。太夫に申上げたら、さぞ喜ばれるぢやらう。小平太どの、大儀で御座つたな。」

「就いては、横川、お身一つその文箱を茶坊主の許へとゞけてくれんか」と、安兵衞は傍から口を出した。「これは貴公でないといかんからな。」

「心得ました。早速とゞけることにいたしませう。」

「さうだ」と、忠左衞門も云つた。「御足勞だが、さう願ふことにしよう。處で、小平太どのの內偵は、拙者から久右衞門殿(池田久右衞門、山科以來大石の變名)に傳へようが、それよりもお身自身の口から申上げた方がいゝかも知れない。どうだな、これからすぐに石町へ同行しては?」

「は、私が參つた方が宜しければ、すぐに御同道いたします。」

「あゝ、さうなさい。それから横川氏、貴公もその文箱をとゞけたら、あちらへ參られい。この度のことは、一つはお手前の働きでもあ

るから、一足先へ行つて、拙者から太夫によく申上げて置くよ。」
「恐れ入りました。それでは、いづれ後程御意を得ることにしまして、私は一走り行つて参ります」と、勘平は会釈して立ち上つた。
一寸間を置いて、忠左衛門も小平太を伴れてその家を出た。
二人が小山屋の隠宅へ着いたのは、日脚の短い時節とて、もうそろ／＼灯火の點く頃であつた。奥がかりの内蔵助は、上の間の行燈の影に、火桶を前にして、一人物案じ顔に坐つてゐた。で、先づ忠左衛門から口を切つて、小平太が今日吉良邸へ入り込むやうになつた次第を紹介した。その尾に附いて小平太も、自分が見て来た邸内の様子を落ちなく報告に及んだ。内蔵助は眼を瞑つたまゝ、じつとそれに聴き入つてゐたが、やがて相手の言葉が途切れるのを待つて、
「ふむ、さう分つて見れば、もはや遅疑する場合ではないな」と、ぽつつり口を開いた。
「左様！」と、忠左衛門はすぐにそれに応じた。「六日の茶会を外したら、悔いて及ばぬことにもなりませう。それが済めば、早速白金の上杉家の別邸へ引移られる筈だと、確かな筋から聞き及んでもゐますからな。」
「それもある」と云つたまゝ、内蔵助は又しばらく眼を瞑つてゐた。が、二たび口を開いた時は、持前の低声ではあるが、何時になく底力が籠つてゐた。「で、いよ／＼それと決定すれば、改めて一同にも通告するが、面々に於てもその心得で、それ／＼その用意をして待つてゐるやうに伝へて貰ひたい。それにしても、小平太、今日は御苦労であつたな。内蔵助からも厚く礼を云ふぞ。」
「は、有難う存じます」と、小平太は畳に手を突いたまゝ、急に胸の中が熱くなるやうな気がした。彼としては太夫の前へ出て、自分が報告するさへ面晴れであるのに、こんな言葉まで懸けられようとは、夢にも思ひ設けなかつたのである。
彼はそれから次の間へ下つて、同宿の諸士と一緒に夕飯の御馳走になつた上、後から来た横川と連れ立つて、上々の首尾で其宿を辞した。
で、二人並んで歩きながら、小平太は相手から話しかけられても、すぐには返辞をしない程、深く考へ込んでしまつた。第一には、自分の小さな手柄が太夫に認められたのも嬉しかつた。が、そればかりではなかつた。太夫に認められたことに依つて、ともすれば動揺し易い自分の心が、何かから支柱でもかはれたやうに、しやんとして来た。それが彼には何よりも嬉しかつたのだ。
「さうだ、あゝ云つて貰へば、俺にも死ねる、立派に死んで見せられる！」と、彼は何度も心の中で繰返した。
横川は横川で、延びに延びた討入の日取りがいよ／＼決定したとい

ふので、妙に悄氣して、うき〳〵してゐた。で、何かと小平太に話しかけるのだが、相手は上の空で、一向手應へがない。

「おい水原、最前から貴公は何を考へてるんだ？」と、勘平は堪りかねて相手の肩を叩いた。

「俺？　俺は……俺はさうだ、太夫の有難いお言葉を考へてゐたのだ。」

「さうか」と、勘平も點頭いた。「晝行燈の何のと惡く云ふもの〻、矢つ張り太夫は偉い所があるね。時には何となく生温いやうに思つて、俺なぞ隨分喰つてか〻つたものだが、別に怒つたやうな顏もされない。いくらこちらがいきり立つてゐても、一言あの仁から優しい言葉を懸けられると、すぐに又ころりと參つて、矢つ張りこの人の下に死にたいと思ふからね。人柄と云ふか、何と云ふか、あれが持つて生れた人徳だらうな。」

「うむ、だがしかし、あ〻いふお言葉を頂戴するにつけて、俺は貴公に濟まないやうな氣がする。これも貴公が手柄を俺に讓つてくれたお蔭だからな。」

「なに、そんな事はお互ひだ」と、勘平は快活に笑つた。「それに手柄を讓るも讓らないも、俺にはあの邸へ討入れなかつたんだからな。貴公の働きは貴公の働きだよ。」

「いや、さうでない」と、小平太は飽く迄眞面目であつた。「俺は貴公のお蔭で救はれた。この恩は忘れない、死んでも忘れない！」

彼はいきなり勘平の腕を掴んだま〻、つ〻けざまに頭を下げた。其の眼には涙が光つてゐた。勘平も妙な氣はしたが、相手が餘り眞面目なだけに、默然としてそれを見守つてゐた。

かうして二人は長い間兩國の橋の上に立つてゐた。

七

いよ〳〵討入は十二月五日の夜と決定して、その旨首領大石からそれ〴〵通達された。一同は一種の悲壯を以てそれを受取つた。五日と云へば、あます所日もない。とう〳〵年來の宿望を遂げる日がやつて來たのだ。それと共に、生きて再びこの娑婆へ出て來られようとも思はれない。で、それとは云はぬが、めい〳〵その覺悟をして、故國の親類緣者へ手紙を出すものは出す、又江戶に親類のあるものは、それ〴〵訪ねて行つて、それとなく訣別を告げるといふやうに、一黨の氣はひはどことなく騷立つて來た。

十一月も晦日のことであつた。小平太は朝から小石川の茗荷谷にある戶田侯のお長屋に兄の山田新左衞門を訪ねて行つた。折よく兄も非番で在宅してゐた。久し振りに來たといふので、嫂も喜んで、二人

の前に手打ち蕎麥を出してくれた。で、しばらく四方山の話しをしてゐたが、小平太は折を見て、

「時に兄上」と切り出した。「永い間こちらへもいろ〳〵御迷惑を懸けましたが、今度西國筋のさる御大身のお供をして、もう一度上方へ上ることになりました。で、今日はそのお暇乞ひ旁參上したやうな次第で御座います。」

「ほゝう、それは重疊」と、兄は何も氣が附かぬやうに云つた。「わしもお前のためには、これ迄緣邊をたよつて、隨分方々へ頼んでは置いたが、どうも思ふに任せぬ。さういふ事になれば、誠に結構な次第だ。で、今度の御主人といふのは矢張御直參でもあるのかな。」

「いえ、それが」と、小平太は一寸口籠つた。「御陪身では御座りますが、さる西國大名の御家老格……私としては、もはや主人の選り好みはしてゐられませぬ。」

「それはさうだ。武士としては、主君を失つて浪人してゐる位慘目なものはない。主取りさへ出來れば、何より結構だ。時にお前は」と、新左衞門は何やら想ひ出したやうに云ひ添へた。「去年の暮にも、元淺野家の城代家老大石殿のお供をして、上方へ上つたが、あの方はまだ山科とやらにお在でかな。」

「大石樣で御座いますか。」

「うん、その大石殿さ」と、新左衞門はじつと弟の顏を見詰めながらつゞけた。「實はその大石殿が、何やら思ひ立つことがあつて、近頃江戶に下られたといふ噂を耳にした。いや、大石殿ばかりではない、舊淺野家の浪人ども追ひ〳〵江戶に來着して、何やら不穩なことを企んでゐるといふ風說もある。尤も、風說に過ぎぬかも知れないが、去年以來の成行を思へば、全然風說のやうなことがないとも云はれない。お前はどうだ？ かねて上方では大分大石殿のお世話になつたといふが、眞逆お前がその一味に加擔してゐるやうなことはあるまいな。」

「はッ」と云つたまゝ、小平太は一寸顏が上げられなかつた。

「實はその風說を耳にしてから、是非一度お前に會つて訊いて見ようと思つてゐた處だ。今聞けば、さる西國筋の御大身に主取りをしたと云ひながら、わしにその名を明さうともしない。で、萬一お前がさういふ企てに加擔してゐたとしたら、兄弟のわしには包まず明すがいゝぞ。」

小平太は再び「はッ」と云つたまゝ、頸筋を垂れて、じつと考へ込んでしまつた。そこ迄知つてゐられては、もう是非がない。それに、さういふ風說を耳にしながら、今日迄默つてゐた處を見れば、兄もこの度の一擧に滿更同情がないわけでもあるまい。況して戶田家と淺野家とは御親類の間柄だ。こゝで俺が戶田家の家來たる兄に有樣を打明

けて見た處で、別段差障りの生ずるやうなこともあるまい。この度の事は、親兄弟たりとも一切洩らすまいといふ誓約はある。しかも、その誓約は決して正確に守られてゐないとすれば、俺一人頑固にそれを守り通して見たところで、何にならう？　それよりも、こゝで打明けて、兄の同情と支援とが得られたら、自分としてもどの位心強いか知れない。心強いばかりでなく、同情を寄せてゐてくれる兄の手前としても、俺は後へ退けなくなるではないか。さうだ、それが何より肝心だと心に思案して、

「で、もし私がその企てを知つてゐるとしましたら？」と、上眼に兄の顏を見上げながら、おづ／＼云つて見た。

「知つてゐるとすれば、お前は一味に加擔してゐるのだな！」と、新左衞門の聲は思はず筒拔けた。

「はい、加擔してをります」と、小平太も度胸を定めて云ひ切つた。「主家の沒落に遇つて武士の意氣地を立てるには、その外に道もお座りませぬ。兄上、お察し下されい。」

「ふむ、それは困つたことになつたな」と、新左衞門は兩腕を拱いたまゝ、溜息を吐いた。

「何と仰せられます」と、小平太も顏色を變へた。「では、兄上は大石殿の一擧に不同意ぢやと仰せられるか。」

「ずんど不同意ぢや」と、新左衞門は相手の眼を見返したまゝ云つた。「考へても見い、今の淺野の浪人どもがそのやうな暴擧に出て、お膝元を騷がしたら、戸田のお家は何うなると思ふ？　去年内匠頭樣刄傷の際にも、大垣の宗家を始め、わが君侯にも連座のお咎めとして、蟄居閉門を仰せつけられたではないか。今度そんな事があれば、お家の興廢にも係る一大事ぢや。お前にはそれが分らぬか。」

さう云はれて見ると、小平太には何と返す言葉もなかつた。で、少時俯向いたまゝ無言をつゞけてゐたが、やゝあつて、

「では、兄上は、私に武士の道を捨てよと仰しやるか」と、心外らしく聞き返した。

「さうだ、捨てゝ貰ふ外ないな」と、新左衞門は云ひ切つた。「いや、お前の心中は察してゐる。兄としても、お前に武士の道は立てさせたい。しかし、わしにはわしの主君がある。主君の大事になると知つてて、お前をこの儘にはして置かれぬぞ。」

「と仰しやるが、假に私が退くとしましても、大石殿始め一味の徒黨が吉良殿の邸へ打入つたとしたら、何うなされます？」

「大石殿のことまでは、われ等風情には力及ばぬ。たゞ兄として、弟がそんな大事に加擔するのを見てはをられぬと申すのぢや。」

「で、もし私がどうしても脱退せぬと申しましたら？」

「このまゝ引立てゝ、當家の御重役に訴へ出るまでぢや。」から云つて、新左衞門はすぐにも立ち上りさうな氣勢を見せた。

「ま、お待ち下され、暫くお待ち下されい」と、小平太は慌てゝ押留めた。ひよんな事を云ひ出したばかりに、飛んだ事になつてしまつたとは思つたが、どうにも仕方がない。兎に角、こゝは兄の言葉に從つた振りをして、この場を納める外ないと思つたので、

「成程分りました」と、下を向いたまゝ云ひ出した。「一時の血氣に逸つて、兄上の御迷惑になるとも知らず、一味に加擔しましたのは、重重私の心得違ひでした。では、お言葉に從つて、大石殿始め同志の方方には相濟みませぬが、誓約を破つて脫退することにいたしませう。」

「しかとその氣か。」

「何しに虛僞を申しませう？ 私とても強ひて命を捨てたうは御座りませぬ。その代りには、兄上、大石殿始め一黨のことはどうぞ御內分にして下さりませ。」

「うむ、お前がさう心を改めた上は、わしも好んであの方々の邪魔をしようとは思はぬ。御一統の企てについては、他から漏れたら知らぬこと、わしからは金輪際口外すまい。それだけは固く約束して置くよ。」

「どうかそのやうにお願ひいたします。」

「しかし、お前としても今の言葉はどこまでも守つてくれねばならぬぞ」と、新左衞門は改めて念を押すやうに云つた。「お前が浪人した上に、二人揃つて扶持に離れるやうなことがあつてはならぬからな――ま、これはこゝだけの話しぢやけれど。」

小平太は默つて相手の顏を見返した。

「俺達には年を取つた母親もある」と、新左衞門は氣が指したのか、言ひ直した。「わしにも大切な阿母さんなら、お前にとつても一人の母親だ。この老母を路頭に迷はせるやうなことがあつてはならぬからな。」

「御尤もで御座います」と、小平太も母親のことを云はれた時は一ばん身に染みた。「たゞこれ迄事を共にして來た關係上、假に同志に背を向けるやうなことも致し兼ねますが、近々の間には機を見て身を引くことにして、決して兄上と番へた言葉は違へませぬから、その段はどうぞ御安心下さい。」

「それでやつと安心した。なに、お前の立場の苦しいことは、わしも察してゐる。たゞくれ〴〵もその言葉を違へまいぞ。」

小平太は唯々として頭を下げた。それから二三話しもしてゐたが、長居は無用と思つたので、いづれその內又出直して來るからと云ひ置いたまゝ、そこ〳〵にその家を出てしまつた。

街の上へ出た時、彼は自分で自分が分らなくなる程顚動してゐた。

彼が豫期したことは全然反對の結果になつた。兄に打明けて、兄から同情と激勵の言葉でも受けようと思つてゐたのに、却てこちらの勇氣を挫かれたばかりか、あんな一時逃れの嘘まで吐かなければならぬ羽目に陷つてしまつた。と云つて、それを幸ひに、その嘘を眞實にしようなぞといふ氣は毛頭起らなかつた。彼にはあまりにも自己本位な兄の性根があり〳〵と見え透いてゐた。

―さうだ、兄が本當に主家を憂ふる眞心から、あゝ云つて俺に迫つたのなら、俺はこの儘兄の云ふことを聞いて、同志を裏切るやうな氣になつたかも知れない。危殆い、本當に危殆い處だつた。」

さう思ひながらも、一向その兄に對する反撥心の起らぬのが、自分でも不思議でならなかつた。彼は心の中のどこかで兄を是認してゐた。しかも、それを突詰めて見ることは、彼には怖ろしかつた。

彼はたゞ何とも云はれない侘ひしさと寂寥とを感じて、とぼ〳〵と街の上を歩いてゐた。

八

林町の宿へ戻つた時は、まだ日が高かつた。同宿の者は大抵出拂つて、一人小山田庄左衞門が人待ち顔にぼんやり居殘つてゐた。そして、

「おゝ水原か、何處へ行つて來られた？」と聲を懸けた。

「は」と云つたものゝ、小平太には兄の許へと實を云ふのが何となく心苦しかつた。で、「一寸知人の許へ」と、その場を胡麻化して置いて、

「それにしても、貴方は江戸に親御もあれば、御縁者も多い筈、何うしてそちらへお出掛けにはなりませぬか」と反問して見た。

「なに、この期に及んで縁故のものをたづねても、何にもならぬからな」と、庄左衞門はわざと快活さうに笑つて見せた。

「でも、お父上一閑樣は寄るお年波でもあり、さぞ貴方を待ち詫びてゐられませう。」

「なに、あの親爺が」と、庄左衞門はそれでも寂しさうに云つた。「あれは御承知の通りの一剋者、わたしが會ひになぞ行かうものなら、今頃何しに來た？主君の仇も討たないうちに、何用あつて親になど會ひに來た？と、頭から呶鳴りつけますわい。先頃一寸立ち寄つた時にも、いかい不興な顔をしましてな、もう來ても、二度とは顔を見せぬと叩き出すやうに追ひ返しました。八十を越した年寄とて、氣にかからんでもないが、そんな譯で遠慮して居りますのぢや。」

「それは〳〵」と云つたきゝ、小平太は自分の兄に引較べて、一寸返辭が出來なかつた。「成程、お父上の氣性ならさうもありませう。立派な父御を持たれてお羨ましい。」

實際、彼は羨ましかつた。さういふ父親を持つてゐたら、自分も今になつてこんなに心の動くこともあるまい。それにつけても、何と思つて兄になぞ大事を打明けたかと、今更のやうに自分の不覺を悔まずにはゐられなかつた。

二人がさうしてゐる處へ、表から足音荒く横川勘平が這入つて來た。そして、ぷんぷん腹を立てながら、

「おい、又裏切者が出たぞ！」といきなり喚ばはつた。

「裏切者？」と二人は一齊に相手を見上げた。

「さうだ、裏切者が出た、しかもこの宿から出たのだ！」

小平太はぎくりとして思はず飛び上つた。何だか自分が今兄として來た相談の一伍一什をその儘勘平に聞いてゐられたやうな氣がしたのである。

「中村と鈴田の二人が朝から出て行つた」と、勘平は委細構はず續けた。「俺はどうもその出方が怪しいと思つたので、君等が出掛けた後で、そつとその行李を調べて見ると、何時持ち出したものやら、何一つ殘つてゐないではないか。それには惘れたね。が、捨て置かれぬと思つたから、すぐに頭領の許へ驅け着けて見た。すると、どうだ、太夫はもうちやんと二人のことを知つてゐて、『どうも是非に及ばぬ』と云つてゐられるのだよ。聞いて見ると、彼奴等はもう書面で以て脱退の旨を屆けて來たんださうな。その文句がいゝね。自分ども存じ寄りの儀があつて、今日限り同盟を退く。かねがね御懇情を蒙つたが、年取つた親もあることとて、どうも思召し通りになるわけに行かない。依而自分どもは自分どもで一存を立てるつもりだから、何卒連判状から拔いてくれ』とあるんだよ。奴等も今になつてそんな卑怯なことを云ひ出す位なら、何と思つてはるばる江戸まで下つて來たのだ？俺にはその了簡が分らないね。」

「さあ」と云つたまゝ、小平太には矢つ張り返辭が出來なかつた。默つて聞いてゐると、何だか自分が罵られてゐるやうにも思はれた。

「多分江戸へ來れば、何か好いことでもあるやうに思つて來たんだらうが」と、勘平はまだ餘憤が去らないやうに、一人でつゞけた。「それが、そんな話がないばかりか、討入の日取りまで極つたといふので、吃驚して腰を拔かしたんだらうよ。」

「眞逆さうでもあるまい」と、小平太はやうやう口を挾んだ。「圓山會議でいよいよ仇討と決した時、太夫から諸士へ廻された廻狀にも、ちやんとそれは明記してあつたからな。」

「それが慾目で分らなかつたのさ」と勘平は捨てゝやるやうに云つて、からからと笑つた。「だが、彼奴等のやうに恥を忍んで生き延びた處で、何時まで生きるつもりだ？この先百年も生きやしまいし、晩い

か早いか、どうせ一度は死ぬる身ではないか。」

「さうだ、どうせ一度は死ぬる身だ」と、小平太は自分で自分に云つて聞かせるやうに呟いた。

「それが分らないんだから情ないね」と、それ迄黙つてゐた庄左衛門もぼつつり口を出した。そして、二人ともそれ限り黙つてしまつた。

「しかしね」と、少時して勘平は、何やら一人で考へてゐるやうに云ひ出した。「俺に云はせれば、今になつて返らぬことぢやあるが、このやうに敵討を延び〳〵にされた太夫の仕方も好くない。第一、それがために、吾々の仕事が方々へ漏れてしまつた。今迄のところでは、それも別段差支へないやうなもの〻、しかしだん〳〵士氣の沮喪して來たことは爭はれないぞ。切めてこの春にでも事を擧げられたら、百二十五人が五十人を缺くまでには減らなかつたらうに！ それを思ふと、どうも殘念でたまらないよ。」

聞いてゐる二人は思はず顏を見合せた。成程五十一人殘つてゐた同志が、二人の逃亡によつて、最早四十九人になつてゐた。

「最初の脱盟者は例の高田郡兵衛だ」と、勘平は相手がそこらにでもゐるやうに、一方を睨みつけながらつゞけた。「彼奴もこの春までは、安兵衛殿、孫太夫殿と並んで、硬派中の硬派の一人と目されてゐた。それがどうだ、脱盟者の魁となつてしまつたではないか。安兵衛殿の話に聞けば、何でも旗本の叔父から養子にと望まれたが、だん〳〵それを斷つてゐるうちに、傍にゐた兄が、弟は仇討の大望を抱いてゐるから、お望みに應じ兼ねるのだと、うつかり口を辷らしてしまつた。叔父はそれを聞いて、『なに仇討？ それは大變なことを考へてゐる。天下の直參として、そんな事を聞き捨てにはならぬ』と云ひ張つて、どうしても承知しない。そこで、叔父の言葉に從はなければ、大事が漏れて御一統にも迷惑をかけるから、恥を忍んで身を退くと斷つて、連盟から脱退したといふことだよ。成程、その言分だけを聞けば、一應尤ものやうにも思はれるが、その實は何うだか分つたものぢやないね。それ程義を重んずる心があるなら、何故自分からまづ腹を切らないのだ？ 命を捨てたら、どんな分らない叔父でも、まさか一統に迷惑を懸けるやうなことも仕出來すまい。それをし得ないで、おめ〳〵と養子になつて生き延びてゐるのは、何と云つても命が惜しいからだよ。ね、さうぢやないか。」

「さうだ、命が惜しいからだ」と、小平太は反射するやうに云つた。實際、彼は自分でも何を云つてゐるか分らなかつた。彼にはたゞ郡兵衛の脱盟した前後の事情のあまりに好く自分が兄から云はれた言葉に似てゐることだけが分つてゐた。そして、自分が郡兵衛の立場に置かれたら何うするだらうと、そればかり考へてゐた。

その晩横になつてからも、小平太は矢つ張り中村鈴田兩人のことが氣になつて、どうしても寢附かれなかつた。中田理平次一人の時は、まだしも考へ直した。が、その後から又二人の叛逆者が出た。しかも、自分が朝夕顏を合せてゐた者の中から出た。彼は考へ込まずにはゐられなかつた。

「二人は散々勘平から恥ぢしめられた。が、その代りに命を助かつた。さうだ、恥を忍べば、まだ助かる道はあるのだ。」

さう思つて、小平太は自分ながらはつとした。武士が命を惜しむの、卑怯者だのと云はれたらそれ迄だ。それが最後の宣告である。彼はまだそれを超越する程頽廢的に深く考へてもゐなければ、又それ程人として擦れてもゐなかつた。

「さうだ、高田郡兵衞が最初の脫盟者になつて、俺が最後の脫盟者になる？　そんな事はあり得ない、斷じてあつてはならない！」

彼は一晚中輾々反側して、やつと夜明け方にうとくとした。

九

師走の二日には、深川八幡前の一旗亭に、親睦の振立てと稱して、一同集合することになつてゐた。討入前の重大な會議のことゝて、その日は安兵衞も、勘平も、小平太も打揃うて午過ぎから出掛けた。

頭領大石内藏助も定刻前から子息主稅を連れて遣つて來た。その傍には、吉田忠左衞門を始めとして、原總右衞門、小野寺十内、間瀨久太夫などの領袖連が坐流れた。で、一同の顏も揃つて、いよく會議に入らうとする段になつても、何うしたのやら、一足後れてすぐ後から來る筈になつてゐた小山田庄左衞門の姿が見えない。既に同宿の者の中から二人まで裏切者を出してゐることとて、安兵衞も、勘平もしきりに氣を揉んだ。中にも勘平は、自分が一走り行つて見て來よう、そこらにまごくしてゐたら引摑んで連れて來るとまで云ひ出した。が、吉田忠左衞門はしづかにそれを制して、

「この場に莅んで變心するやうな臆病者を無理に引張つて來ても仕方があるまい。こゝに御出席の方々は、皆亡君のために一命を投げ出してゐる者どもで御座るぞ。その方々の手前もある。打捨てゝ置きなされ」と、言葉鋭く云ひ切つた。勘平も理の當然に服して、その儘默つて控へてゐた。

いよく起請文の前書が讀み上げられた。これは仇討の宣言綱領と云つたやうなもので、次の四箇條から成立つてゐた。いはく、

一、冷光院殿御敵吉良上野介殿可討取志有之侍共申合せ候處、及此節大臆病者共變心退散仕候者撰み捨て、唯今申

合せ必死相極め候面々は、御靈魂御照覽可レ被レ遊候事。

一、上野介殿御屋敷へ押込働之儀、功之淺深不レ可レ有レ之候。上野介殿印揚候者も、警固一通之者も可レ爲二同前一候。然者組合働役好申間敷候。尤先後之爭不レ可レ致候。一味合體、如何樣之働役に相當候共、少しも難澁申間敷事。

一、一味の各存寄被二申出一候共、含二自己之意趣一申妨候儀有レ之間敷候。誰にても理之當然に可二申合一候。兼而不快之底意有レ之候共、働之節互に助け合ひ、急を見繼ぎ、勝利之全所を專に可二相働一事。

一、上野介殿十分に討取候共、銘々一命可レ遁覺悟無レ之上者、一同に申合せ、散々に罷成申間敷候。手負之者於レ有レ之者、互に引懸助け合ひ、其場へ集可レ申事。

右四箇條相背候者、此一大事成就不レ可レ仕候。然者此度退散之大膽病者と可レ爲二同前一候事。

この草案は吉田忠左衞門の手になつた。忠左衞門の外には、原總右衞門一人それに參與したと云はれる。で、それを一同に讀み聞かせた上、異議がなければ、直ちに神文へ血を注いで貰ひたいと達せられた。勿論、誰一人として異議のあらう筈もなかつた。そこで大石内藏助良雄から同苗主税良金、原總右衞門元辰、吉田忠左衞門兼亮といふやうに、祿高によつて、順々に血判をすることになつた。

小平太は小山田庄左衞門が姿を見せないと知つた時から、殆ど一語も口を利かなかつた。が、起請文が自分の前へ廻された時には、顫へる手先を覺られまいと努めながら、それでも立派に毛利小平太元義と署名して、その下に小指の血を注いだ。そして、それを次の勝田新左衞門に渡した。

かうして大石内藏助以下寺坂吉右衞門に到るまで四十八人の血判が濟んだ時、更に當夜の人々心得が議に附せられた。これも忠左衞門の手になつたもので、當日定めの刻限が來たら、かねて申合せた三箇所へ物靜かに集合すべきことといふ第一箇條を始めとして、敵の首を揚げた時は、彼の上衣に包んで泉岳寺に持參すること、子息の首は持參に及ばず打捨てること、なほ味方の手負ひは肩に引懸け連れて退くことが肝要だが、歩行難澁の首尾になれば、是非に及ばず首を揚げて引取ること、その他合圖の小笛、鉦、退口のこと、引揚げ場所のこと、途中近所の屋敷から人數を繰出した場合の挨拶、上杉家から追手がかかつた時の懸引、なほ又討入つて勝負の附かぬうちに御檢使が出張になつた場合、それに應ずる口上に到るまで、凡て十二箇條に亘つて、殘る隈なく討入の手筈を定めた上、最後に退口のことを念頭に置いては、却て心臆するかも知れない、しかし退いても一定助からぬ吾等

の身である、申すに及ばぬ儀なれど、銘々必死の覺悟にて粉骨碎身すべきことと結んであつた。これには二三質問も出た。が、入念な忠左衞門の說明に、一同滿足して、異議なくそれを承認した。

それから當夜の各自の扮裝、討入の諸道具についても話しがあつた。これはそれ迄に銘々その準備をしてゐることではあるが、持合せのないもの、又は當夜に限つて必要なもの、例へば槍、薙刀、弓矢の類を始めとして、斧、鎹、玄能、懸矢、竹梯子、細引、龕燈提灯、鉦といふやうなものは、かねてその用意をして平間村に保管してあるから、明日、明後日兩日の間に、それ／＼取寄せて置いて貰ひたい。但しそんな事から事の破れになつてはならぬと云ふので、人目に立たぬやうに、それに關與する人數から役割まで定めて、それ／＼云ひ渡された。

から云ふ風に相談が多端に亘つたために、頼母子講は夜に入つて漸く散會となつた。散會となるや、安兵衞と勘平とは庄左衞門のことが氣になるので、宙を飛ぶやうにして林町の宿へ駈け戻つた。小平太もその後に隨いて走つた。が、そんな時分に、駈落者がそこらに迂路迂路してゐる筈もない。安兵衞は取散らした衣物の間に坐つて、机の抽斗を開けては、しきりに小首を傾け始めた。

「何か見當りませぬか。」

「ふむ、金子が少々足りないやうだ。それに、拙者の小袖も見當らない。」

「なに、金子？」と勘平も小平太もあわてゝ駈け寄つた。

「いや、御安心下さい。大石殿からお預りして、各々方にお渡しする筈の金子は、別に仕舞つて置いたから大丈夫で御座る。たゞ手前の小遣ひ錢が少々紛失いたした。」

「それは／＼」と、二人とも少時開いた口が塞がらなかつた。

「それにしても」と、勘平は又猛り立つた、「何といふ卑劣な所爲で御座りませう。脫盟して吾々の顏を潰すさへあるに、他人の金品まで盗んで逐電するとは！」

「いやなに」と、安兵衞はしづかに云つた。「浪人すれば、永い間にはそんな氣にもなりませう。どうせ吾々を見限つて一列を脫けた人に追及するにも當るまい。」

「ぢやと申して、吾々の面目にも――」

「だからまあ、金のことはあまり云はぬやうにいたしたい。吾々にあつても餘り役に立たぬもの、これから先生き延びる人には無くてならぬものだからな。はゝゝゝ。」

「さう云へば、そんなものでも御座らうか、あはゝゝゝゝ」と、勘平も一緒になつて笑つてしまつた。

小平太は最初庄左衞門が脱盟したと知つた時、殆どその譯が分らなかつた。あゝいふ一徹な父親を持つてゐる上に、平生から隨分口幅つたいことも云つてゐた男が、この期に及んで逐電する！　彼にはどうしてもあり得べからざることのやうに思はれた。が、その一面に於ては、どう云ふものか、先を越されたといふやうな氣もした。自分ではまだ逃亡しようとも何とも思つてゐなかつた。けれども、心のどこかで、矢つ張りさういふ氣のしたことだけは爭はれない。そして、庄左衞門が滿座の中で諸士から罵倒されるのを聞いてゐた時、まあ〳〵自分でなくつて好かつたといふやうな安心を覺えた。然るに、今宿へ戾つて檢べて見ると、庄左衞門は他人の金品まで持ち逃げしてゐる！　これは下司下郎の仕業で、士にあるまじきことだ。かうなると、小平太ももう自分のことのやうな氣はしなかつた。いくら勘平が罵倒しても、他人のこととして平氣で聞き流すことが出來た。そのために、彼は却て救はれたやうな氣もした。

明くる朝安兵衞は、兎に角この事は一應頭領にも屆けて置く必要があるといふので、早朝から出掛けて行つた。その後で小平太は、一人火鉢に向つて、ぼんやり考へ込んでゐた。隣の座敷では、勘平が何やらしきりに書狀を認めてゐる。この間に一つおしほの許へ行つて遣らうか、あの女に逢ふのもうこれがお仕舞だなぞと考へてゐるうちに、隣の間から勘平が片手に書狀を持つて出て來て、

「一寸出掛けるから留守を頼むよ」と云つた。

實際、中村、鈴田、小山田とだん〳〵同宿の者が減つて來ては、飯焚の男を除けば、もう小平太の外に留守をするものもなかつた。小平太は又先を越されたなと思ひながら、「宜しい！」と云つた。そして「飛脚を頼みに行くのか」と訊いて見た。

「うむ、あんまり臆病者が澤山出るので心外でたまらぬから、一々筆誅を加へてやつた」と、勘平は問はず語りに話した。（序ながら、勘平のこの書狀は、江戸に於ける赤穗浪士の動靜を知る貴重な材料として、今に傳はつてゐる。）「だが、戾路には一寸他所へ廻るつもりだから、少し晩くなるがいゝか。」

「あゝ、ゆつくり行つておいで。」

勘平はその儘出て行つた。が、それと入れ違ひに、前に出た安兵衞が戾つて來て、

「小平太どの、一つ平間村まで御足勞が願ひたい」と云ひ出した。

聞けば、この宿が當夜の集合所の一つになつてゐる。それに就いては、昨夜の相談では、當夜の諸道具は銘々の宿へ持ち込むことになつてゐたが、やはり一部分はこゝへ集めて置いた方がよからうといふことに模樣が變つたので、御足勞だが、これからすぐに取りに行つて來

て貰ひたい。尤も、大石殿の若黨室井左六が仲間どもを連れて先へ行つてゐるから、それ等のものに持たせて、貴公はたゞ宰領して來て貰へばいゝと云ふのだ。小平太は領承してすぐに立ち上つた。

平間村までは往復八里の道である。目黒から間道を脱けて行つたが、それでも歸路は夜に入つた。小平太は亥の刻前にやう／＼戻つて來て、自分で指圖をして、それ／＼片附けるものは片附けさせてしまつた。勿論、安兵衛や勘平も手傳つた。で、いよ／＼寢に就かうとした時、側に寢てゐた勘平が、

「おい、小山田の逃げた理由が分つたぞ」と、聲を潜めてさゝやいた。

「えゝ？」と、小平太は思はず振返つた。「それは又何うしたと云ふのだ？」

「先達てからあの男は」と、勘平は蒲團の上に起き直つたまゝつゞけた。「よく湯島の伯母の許へ行くといつては出掛けたものだ。なに、それが伯母の家でも何でもない、天神下の湯女の宿だとは、俺も疾うから見拔いてゐた。だが、なにも他人の秘密を訐くでもなし、何人にもあり勝ちのことだと大目に見て置いたがね、今になつて見ると、それがこつちの手脱りだつたよ。で、まだそこらにまご／＼してゐたら、引捕まへて糺明してやらうと、今日出た序に、そちらへ廻つて見た。なに、天神下の湯女の宿は三軒しかないからすぐ分つたがね。だが行つて見て驚いたよ。庄左衛門の相手の女といふのも、昨夜から姿を見せないと云ふので、向うでも大騒ぎをしてゐるのだ。的切り二人諜し合せて駈落をしたものに相違ないね。かうなると、何處まで下司に出來てゐるか方途が知れない。俺も餘計な暇潰しをしたやうなものの、そんな奴かと思つたら、やつと諦めが着いたよ。」

「さうか！」と云つたまゝ、小平太は何とも返辭が出來なかつた。何だか自分が糺明を受けてゐるやうな氣がして、胸は早鐘を撞くやうに動悸を打つた。

「だが、女のために大義を誤る」と、勘平は又ごろりと横になりながら云つた。「考へて見ると、氣の毒なものだやね。かうしてだん／＼籾と糠とが撰り分けられるんだよ。」

「さうだ、籾と糠とが撰り分けられるのだ」と、小平太はやう／＼それだけ云つた。

勘平は云ふだけ云ふと、氣が納まつたか、その儘すや／＼と寢入りかけた。が、小平太はさうは行かなかつた。夜着の襟に手を懸けたまま、長い間蒲團の上に起きて坐つてゐた。そして、口の中では、絶えず「籾と糠、籾と糠、籾と糠！」と呟いてゐた。

最初彼は相手が自分に當て附けるために、わざと庄左衛門の女の話

を持ち出したのだと思つた。が、考へて見ると、そんな筈はない。もしおしほのことを感附いてゐたら、そんな遠廻しに持ちかけるやうなことは云ふまい。勘平はそんな男ではない！　で、おしほのことはまだ何人にも知られてゐない、それだけは確かだ。が、それにしても、自分はもう二度とあの女に逢つてはならない。この間から四五日遠退いてゐたのを幸ひに、この儘顔を見ないで行く！　不人情かは知らぬが、それより外に俺の取るべき道はない。あの女も後でそれと聞いたら、俺のことをさのみ悪くは思ふまい。——

「さうだ、俺はもう断じて逢はないぞ。」

さう心に誓つた時、彼はやつと安心して横になつた。そして、眼を瞑つたまゝ、

「なに、俺はたゞ眼を瞑つて吉良邸へ飛び込みさへすればいゝのだ」と呟いた。「その後は生きるも死ぬるも向う次第だ。お上で好いやうにして下さる！」

彼は何時になく晴れ〴〵とした氣持になつた。それに晝間の疲れもあつて、その儘ぐつすり寝込んでしまつた。

十

明くる朝眼を覺した時は、又いつもの小平太になつてゐた。けれども、昨夜立てた誓ひを守つて、何處へも出まいと思つた。さうだ、俺は何處へも出なければいゝ。そして、安兵衛と勘平の後に喰附いてさへゐれば間違ひはない。大義を誤るやうな恐れは断じてない。さう思つて、彼は一日中宿に引籠つてゐた。そして、その日は何事もなく過ぎた。

處が、四日の朝になつて、思ひも寄らぬ通知が頭領の手許から一般に達せられた。それは、來る六日には、將軍家がお側御用人松平右京太夫の邸へお成りになる旨、不意に觸れ出された。それに依つて、吉良家でも當日の茶會を御遠慮申上げることになつたに就いては、五日の夜と極めた一擧も自然延期せずばなるまい。いづれ後から又委しいことは通達するが、それ迄は構へて靜穏にしてゐるやうにと云ふのであつた。

小平太は張詰めた氣が一時に弛んで、妙にがつかりしてしまつた。彼には討入の日の延びたといふことが些とも嬉しくなかつた。成程五日の夜は延びた。ぼうつとして考へてゐると、何だか仇討といふやうなことは夢のやうに遠い空の彼方へ消えてしまつて、そんな日は永久に廻つて來ないやうな氣もしないではない。しかもその日は厳然としてあるのだ。それだけは決して動かない。何時かは又弛んだ氣を緊締めて、一旦ほぐした覺悟をもう一度仕直して掛からなければならぬ。

い。それが彼には辛かつた。そんな事は迚も自分の力には及はないやうな氣もした。

彼はもう何うする氣もなかつた。で、一日二日は宿に引籠つたまゝ、うつら〳〵としてゐたが、そのうちに又おしほのことが想ひ出された。さうだ、この可厭な氣持から免れるためには、矢つ張りあの女に逢ひに行く外ない。なに、庄左衞門は女のために大義を衍つたかも知れないが、俺の怖ろしいものは別にある。それは自分の心だ！　かうして一人でくつ〳〵考へてゐたら、終ひにどんな事を仕出來すか分らない。さうだ、そんな餘計なことを考へないためにも、俺はまづあの女に逢はなければならない。さう思つた時、彼はもう矢も楯もたまらなくなつて、すぐに支度をして宿を飛び出した。

が、女の家に近づいた時には、それでも又勘平に云はれた言葉が氣になつた。と云つて、その儘引返す氣にもなれないので、うぢ〳〵しながら、とう〳〵女の家の軒端をくゞつてしまつた。

女の方では、そんな事とは知らないから、久しく逢ひに來てくれなかつた恨みを云ふことも忘れて、心から嬉しさうにしながら、

「久しく見えなんだのは、どこかお惡かつたのか。さう云へば、お顏の色も好うない」と、心配さうに訊ねた。

「なに、さう氣に懸けてくれる程のことでもない」と、小平太は面倒臭さうに云つた。彼にはもう當座の嘘を云ふのが億劫になつてゐた。と云つて、眞實のことも云はれなかつた。

「だつて、心配になりますわ」と、おしほもさすがに云ひ返した。「見えると云つて見えもせず、たま〳〵來れば、いやな顏をしていらつしやるんだものを。」

「ぢや、來なければよかつたね」と小平太は氣短に云つた。

すると、女はすぐに氣を變へた。「わたしが惡う御座んした。お氣合ひの惡い所へ餘計なことばかりお訊ねして、もう何にも申しますまい。」

かう云つて、おしほは相手の氣を逸らすやうに、他の事に話しを移した。「わたしもあなたの妻になる身で、あんな茶店に出てゐたとあつては、後々どんな障りにならうも知れない。幸ひ、さる人のお世話で、今度松坂町のさる御大家の仕立物を一手で縫はせていたゞくことになりました。まあ、これを見て下さいませ。今もこんなに來てゐる位だから、どうか、わたしのことは安心して——」

「なに松坂町？」と、小平太は思はず聞耳を立てた。「その御大家といふのは、何といふ家だえ？」

「えゝ、中島伊勢樣と仰しやる大奧お出入りの御鏡師といふことで御座いますの」と云ひながら、何と思つたか、おしほは急に顏を赧らめ

た。「何でもその嫁御寮は、吉良様の御家老とやらから來ておいでぢやといふことで御座いますわ。」

「ふむ、さうか」と、小平太は腕を拱いて考へ込んだ。さういふことがあるとすれば、いつそこゝでこの女に大望を打明けて、その手蔓で何事かを聞き出すやうにしようかとも思つて見た。が、この間兄に云つてしくじつたことを思へば、迂濶に打明ける氣にもなれなかつた。それに、相手は女のこと、何んな事から事の破れにならうも知れない。まあ〳〵と思ひ返して、「さうか、主家を滅ぼした敵の片割れに緣のある家の仕事をして、身過ぎをするのも時代時節、まあ何事も辛抱だね」と云つて置いた。

その日宿へ歸つた時、小平太は勘平に向つて、今日中島伊勢の宅へ出入りをするお物師と一寸知合になつたがと漏らして見た。すると、相手は無性に喜んで、

「そいつは巧いことをした。中島伊勢に娘をくれた家老といへば、矢つ張り小林平八郎のことに相違ない。一寸そんな話を耳に挾んだこともある。是非そいつはもつと立ち入つて探索しろ」とすゝめてくれた。

で、その明くる日からは、小平太も大びらで宿を出て、おしほを訪ねることが出來た。が、女の顏を見ると、別にそんな事も云ひ出さなければ、女の方でも、その後中島伊勢のことはふつつり口にしなくなつた。たゞ小平太はかうして毎日女の顏を見に行つた。

が、一方では、阿兄新左衞門のことも氣にかゝつてゐた。あゝして一時を胡魔化して來たものゝ、あれから一度も姿を見せないから、今頃どんなに不安に思つてゐるか知れない。尤も、兄の氣性としては、あれだけ云つて置いたものを、自分に無斷で、はやまつて一黨に迷惑を懸けるやうなことはすまい。なれど、長い間には、自身の不安から、何を仕出來さないとも限らない。五日の討入の延びた時には、いつそ安兵衞に事情を打明けて、兄の前だけでも同盟を脫退したやうに繕つて貰はうかとも考へて見た。が、高田郡兵衞のことを思ふと、うつかりしたことを云ひ出して、どんな疑ひを同志から受けまいものでもない。それを思へば、どうしてもそんな事は云ひ出されなかつた。時には、打明けた方が疑ひを除く所以だとも思はないではなかつたが、矢つ張り何物かがあつて彼を引留めた。で、とつおいつ思案してゐる間に、とう〳〵云ひ出す機會を失つてしまつた。

たゞ彼は自分の住所を兄に知られてゐた。その間には、向うから訪ねて來るかも知れない。訪ねて來られたら一大事だ。彼は戶口に聞える足音にも膽を冷すやうになつた。他所から戾つて來ても、先づ留守中に誰も訪ねて來なかつたと知る迄は安心が出來なかつた。

そんな不安な日を送つてゐるうちにも、日數は經つて、師走の十一日になつた。この日同志の一人大高源吾は再び宗匠山田宗徧の許から、來る十四日いよ〳〵上野介の自邸に於て納めの茶會が催される、その後は年内に白金の上杉家の別邸へ移られる筈だといふことまで聞き出して來た。かうなればもう猶豫は出來ない。それに十四日は先君の御命日でもあるから、その日を期して決行しようと、即座に一決して、頭領大石内藏助からそれ〴〵一黨に通達された。

　小平太は又默り込んでしまつた。何だか非常に遠い所にあるやうに思つてゐた黑雲が、急に目の前へ蔽ひ被さつて來たのである。が、安兵衞も勘平も冷靜にその通告を受けて、もうするだけの用意はしてしまつた、何時でも來いと云はむばかりに落着き澄してゐる。二人の前へ對しても、小平太は自分の落着きのないのが恥づかしかつた。何うかしてそれを覺られないやうに落着いてゐようと思ふけれど、二人と顏を合せてゐると、何だか心の底まで見透されるやうな氣がしてたまらない。それでも、その明くる日一杯は、じつと辛抱して宿に燻つてゐた。が、夕方になると、もう耐らなくなつて、兄の許へ母親に逢ひに行くといふ口實の下に、ぶらりと家を出てしまつた。勿論、兄の許へなぞ行く氣はなかつた。かうなればもう行く必要もなし、又事實行かれもしなかつた。彼の行かれる所とては、天上天下、たゞおしほの家だけであつた。

　彼は途を歩きながらも、「何のためにあの女に逢ひに行く？」と考へて見ずにゐられなかつた。「俺は一體あの女を何うしようと思つてゐるのだ？」それには彼も自分ながら返辭が出來なかつた。

「可哀さうに」と、しばらくして彼は又考へつゞけた。「あの女も今に及んで俺がどんな心を抱いて、どんな苦しみを嘗めてゐるか、全然知らないでゐるのだ！　こんな便りない男を手頼りに生きて來て、その男さへこの世にゐなくなつたら、これから先何うして生きて行くだらう？　考へて見れば、眞個不仕合せな女には相違ない！」

不圖、「あの女を殺したら？」といふやうな氣が心のどこかでした。

「さうだ、いつそのこと、あの女を手に懸けて殺したら、俺も本氣で死ぬ決心が着くかも知れない。」

が、さう思ふと同時に、彼は自分でも自分の殘忍な心に吃驚したやうに飛び上つた。これ迄自分の本心も明さないで、始終欺き通しに欺いて來た上に、最後に自分が死の覺悟をする手段として、相手の女を手に懸けようとする？　俺の心は鬼か蛇か。眞個自分ながら愛想の盡きた男だ！

　彼は眼を瞑つてその心を拂ひ退けようとした。いつそこの儘女の顏を見ないで引返してしまはうかとも思つて見た。が、さう思つただけ

で、足は矢つ張り向いた方へ歩いて、だん〳〵女の家に近づいてゐた。

何も知らないおしほは、例によつて愛想よく男を迎へた。

「今夜は少しゆつくりしてもいゝやうに、同宿の者へも頼んで來た。晩くなつたら、こゝで泊つてもいゝのだ。これで一つお酒を購つて來てくれ」と、小平太は懐中から小粒を一つ出して渡した。

「まあ珍らしい。お酒を召上る?」と、おしほは可訝さうに相手の顏を見返したが、「でも、ゆつくりしていゝと仰しやるのは嬉しい。わたしも實はこの間から聞いていたゞきたいと思つてゐることもある。では、すぐに行つて參じましよ」といそ〳〵として出て行つた。

ものゝ十分とは經たないうちに、おしほは五合德利に風呂敷に包んだ皿を提げて戻つて來た。そして、少時臺所でこそ〳〵遣つてゐたが、間もなく膳の上に肴と銚子とを揃へて持ち出した。小平太も火燵から這ひ出して、膳に向つたが、さゝれるまゝに一つ二つと盃を重ねた。日頃は三杯と飲まぬうちにもう眞赧になつてしまふのだが、今夜は何うしたのやらいくら飲んでも醉ひを發しない。藥でも呑むやうにぐつと呑み乾しては、その儘又猪口を差出すので、

「まあ、そんなに召上つて好う御座りますか」と、おしほは注ぎかけた銚子を控へて、思はず窘めるやうに云つた。

「なに、構はぬ、注いでくれ」と、小平太は持つた盃を突き附けるやうにした。

「まあ、泊つて行つてもよいと仰しやるなら、少しはお醉ひになつてもよかろ」と、おしほは思ひ直したやうに、又滿々と注いだ。

小平太はその盃に一寸唇を附けたまゝ、下に置いて、

「先刻云つた、わしに話したいといふのは、そりや何だ?」と、不意に云ひ出した。

「えゝ」と、おしほは見る〳〵顏を赧らめながら、「そりやまあ後でもいゝことぢやわいな」と、その場を紛らさうとした。

「さうか」と、小平太は又盃を口へ持つて行つた。「云ひたくなければ聞かんでもいゝ。」

男の顏は蒼味を帶びて、調子は妙に縺れかゝつてゐた。

「いゝえ、云ひたくないことはない。どうしても聞いて貰はにやならぬことだけれど……」

「ぢや、云つたら何うだ?」

「えゝ、あのそれは」と、おしほは口籠りながらつゞけた。「何日ぞやから、今度逢つたら云はう〳〵と思つてゐましたが、何だか又餘計な御心配をかけるやうな氣もして……實は前の月からわたし見るものを見ませんの。」

「え？」と、小平太はぎくりとしたやうに云つた。「ではあの、お前が姙娠した？」
　おしほは默つて點頭いて見せた。
「さうか！」と、彼は太い息を吐いた。
「でも、まだよくは分りませんのよ」と、おしほは相手の顏色を見て、すぐに云ひ直しにかゝつた。「たゞわたしがさう思つただけ……そんなにお氣に懸けるのなら、申上げなければ好う御座んしたのにねえ。」
「なに、云つてくれた方がいゝんだ」と、小平太は下を向いたまゝ云つた。
「だつて、心配さうにしていらつしやるんだものを。」
「氣に懸けんでもいゝ。子どもが生れるとなれば、俺も一層氣が締るといふものだ。兎に角、お前にこの上の苦勞はさせせんから、心配するな。それよりも一杯注いでくれ！」と、又盃を突き出した。
　おしほは一寸相手の顏を見返したまゝ、默つてその盃を充した。
「心配せんでもいゝぞ」と、小平太は又繰返した。「日頃云つたわしの言葉に間違ひはないからな。それに間違ひさへなけりや、お前が氣を揉むことはあるまい。」
「えゝ、それはもうさうに違ひ御座いませんけれど……」
「それならもつと注いでくれ、わしは今夜久し振りに醉つて見たいのだ。」
　かう云つて、小平太はおしほに酌をさせては、ぐい／＼と飲み干した。そして、一本の銚子が空になると、又二本目までつけさせた。が、二本目を飲み切らないうちに、苦しくなつて、そこに倒れてしまつた。そして、横になつたまゝ、苦しさうに胸を波打たせてゐた。おしほは氣を揉んで、枕を當てがつたり、頭を水で冷したり、いろ／＼手を盡して介抱してくれた。それ迄は覺えてゐたが、そのうちに少し胸先が樂になつたと思つたら、何時の間にかうと／＼と寢入つてしまつた。
　夜半に咽喉が熱りつくやうな氣がして、小平太は眼を覺した。氣が附いて見ると、自分はちやんと蒲團の上に夜着を被けて寢てゐた。枕頭には古びた角行燈がとぼれて、その下の盆の上には、醉ひざめの水のつもりでもあらう、土瓶に湯呑まで添へて置いてあつた。彼はいきなり片手を伸ばして、それを引寄せようとしたが、不圖自分と床を並べて寢てゐるおしほの姿が眼にとまつた。
「さうだ、俺はおしほの家に寢てゐるのだ！」
　彼はぎよつとしたやうにその手を引込ませた。それにしても、もう何時だらう？　晩くなるとは云つて來たが、今夜自分が歸らないのを

見たら、俺まで庄左衛門の二の舞ひをしたものと極めて、横川が又何ものやうに腹を立てゝゐはせぬか。まあ、それは云ひ解く術もあらうし、明日の朝早く顏を見せさへすれば、それで濟む。濟まぬは寧ろおしほから聞いた話だ。もしあの話が眞實だとすれば、俺は何うしたらいゝか。肚の子に惑かされて、この儘こゝに居坐りでもしたら、それこそ庄左衛門と擇ぶ所はない。俺も小山田と一緒にだけはなりたくない！

「いつそこの女を手に懸けたら！」と、途中で考へたことが再び彼の心に甦つて來た。「さうだ、こゝ迄追詰められては、俺もこの女を道伴侶にする外に救はれる道はない。不愍ながらも、お前の命は貰つたぞ！　何事もお主のためと觀念して、一歩先に行つてくれい。それがお前にとつても一番好い道かも知れない。お前ばかりでない、その肚に宿つたといふ不幸な子どものためにも！」

彼は頸だけ持上げて、そつと隣の寢床を見遣つた。おしほは尋常に枕をしたまゝ、こちらを向いてすや〳〵寢入つてゐる。その整つた安らかな寢息が、いかにも男に信頼して、身も心も任せ切つてゐるやうに見えていぢらしい。

「何も知らずに寢てゐるなあ！」

かう彼は呟いたまゝ、しばらく女の寢顏に見惚れてゐたが、何と思つたか急に首を縮めて、又すつぽり夜着を引被つてしまつた。彼にはどうもこの女を手に懸けるなぞといふことは出來さうにもなかつた。が、出來なければ何うしようと云ふのだ？　もう一日經てば、否でも應でも白刃と白刃と打合ふ中へ飛び込まなければならぬ身ではないか。こんな事ではならぬ〳〵と思ひながら、思へば思ふ程腕が萎へるやうな氣がして、何うにもならない。彼はたゞ暗がりの中にまじ〳〵と眼を瞬いてゐた。

その間にどこかで一番鷄が鳴いた。

「もう夜が明けるのか知ら？」

彼は夜着をはぐつてもう一度顏を出した。が、宵まどひした鷄でもあつたか、つゞいて啼く鳥の聲も聞えなかつた。

「さうだ、今の間に決行しなければ、俺はいよ〳〵不義者になつてまふのだ！」

彼は一思ひに瓦破と跳ね起きて、いきなり壁際に寄せて置いた小刀を取るなり、すらりとその鞘を拂つた。そして、行燈の灯影に翳りのないその刀身を透して見た。新刀ながら最近研師の手にかけたものだけに、じつとそれを眺めてゐると、どき〳〵したその切尖から今にも生血が滴りさうな氣がして、われにもなく持つてゐる手がぶる〳〵と顫へた。

「あなた、お目覚めになりましたか」と、不意に背後からおしほが聲を懸けた。

小平太はぎくりとして、思はず振返つた。そのはずみに、手に持つた白刃がぎらりと闇に光つた。それが眼に入つたのか、

「まあ、あなた！」と云つたまゝ、おしほはいきなり飛び起きてしまつた。そして、

「あなた、何うなされました？　氣でも狂つたのか、そんなものを手に持つて！」と、矢庭に男の腕に縋り着いた。

「うむ、待て、危い！　待てと云つたら待て！」と、小平太は狼狽へながら、その手を振り放さうとした。

「いえ〳〵放しませぬ、譯を話して下さらぬうちは、決してこの手を放すことでは御座りませぬ」と、女はいよ〳〵力を籠めて、一心に武者振り附いた。

「話す〳〵、譯を云ふからその手を放してくれ」と、小平太はやうやう女の手をほどいて、刀を鞘に納めた。

「さ、早う云つて下さいませ」と、女はその刀を取つて自分の背後へ片附けてから、男の前に膝をすゝめた。「わたしといふものもある身で、短氣な心を出さんした譯を有様に云つて聞かせて下さいませ。」

「話すと云つた上は、さう云はんでも、幾度も話して聞かせる」と、小平太も蒲團の上に坐り直した。「だが、何んな事を聞かうとも、必ず吃驚して騒ぐまいぞ。」

おしほは默つて點頭いて見せた。

「今迄隱して置いたは、成程わしが悪かつた。疾うに打開けようとも思つたが、それもならず、いはゞわしは最初からそなたを瞞してゐたやうなものぢや。ま、急いてくれるな、よく終ひまで聞いてから、そなたの存分にしてくれたがいゝ。實は去年三月のことがあつて、一家中殘らず浪人して散り〴〵ばら〴〵になつたとは云ふものゝ、相手の吉良家はあの通り何のお構ひなし、このまゝ御主君の妄執も晴らさずに置いては、家中の者の一分立たずと、御城代大石内藏助様始め、志ある方々が集まつて、寄り〳〵仇討の相談をなされた。その連名の中へ、わしも去年の暮から加はつたのぢや。」

おしほは眼を瞬つたまゝ、目じろぎもせず男の顔を見詰めてゐた。

「林町に家を借りて、堀部安兵衛どのその他の方々と同宿してゐるのも、實を云へば仇家の動靜を窺ふために外ならない。同志の方々はそれ〴〵仲間小者、乃至小商人に身を落して、艱難辛苦をされるのも皆お主のためだ。わしもその中に交つて及ばずながら働いてゐるうちに、天神の茶屋でそなたに出逢つたのがわしの因果、大事を抱へた身と知りながら、それを隱して、ついそなたと惡緣を結んでしまつた。

あゝ飛んだことをしたと思つた時は、もう晩い。どうせ末遂げぬ縁と知りながら、これ迄隠してゐたのは重々そなたに申訳ないが、これも前世の約束事と、どうか諦めて貰ひたい。」

「いえ〳〵、それを仰しやつて下さるには及びませぬ」と、おしほは顔に袂を押當てたまゝ、おろ〳〵泣き出してしまつた。「そんな深いお心があるとも知らず、これ迄一緒になれの引取つてくれのと、女氣の一筋に、おせがみ申したのが恥づかしい。どうぞ、どうぞその後を聞かせて下さいませ。」

「最初に噓を云つたのがわしの因果」と、小平太も顔を背向けながらつゞけた。「その後は打明けるにも明けられず、悪いとは知りながら、だん〳〵惡縁を重ねてゐるうちに、いよ〳〵吉良邸へ乘り込む日が來てしまつた。」

「え、それは何日のことで御座んすえ？」と、おしほは思はず顔を上げた。

「來る十四日、明くればもう明日の夜に迫つてゐるのだ。」

「それでは明日の晩吉良邸へ乘り込んだら、あなたはもうそれ限りお歸りにはなれませぬか。」

「うむ、一黨殘らず死ぬ覺悟で乘り込むのだ。たとひその場で討死せいでも、天下の御法に背いて高家へ斬り込む以上、所詮生きては還られぬ。だがな」と、小平太は急に聲を落してさゝやいた。「そなたの思はくも面目ないが、どうもわしは未練があつて、この期に及んでまだ死ぬ決心が着かぬ。わしの死んだ後で、お前が何うして暮すだらう、何うしてその日を送るだらうと思ふと、いくら考へ直して見ても、そなたを一人殘してはどうも死に切れない。で、濟まぬことぢやが、お主のためには代へられぬ、いつそお前を手に懸けて――」

「えゝッ！」

「お前は思ひ違ひをしたやうぢやが、いつそお前を手に懸けて置いて、その足でお供に立たうと、寢てゐるのを幸ひ、そつと刀に手を懸けた處をお前に眼を覺されたのぢや。」

「まあ！」と云つたまゝ、おしほは俯向いて考へ込んでしまつた。が、やゝあつて、思ひ入つたやうにむつくり顏を上げた。「あなたのお心はよう分りました。だが、何故さうならさうと譯を聞かせて置いてから、手に懸けようとはして下さらぬ。身分こそ卑しけれ、わたしも淺野家の祿を喰んだものの娘で御座んす。父はあの通りの病身な上に、そんな企てが皆樣方の中にあるとも知らず死んで行きました。私どもは女子のこと、そんな話を聞かしてくれる人もなければ、知りもせず、これ迄は夢中で暮して來たやうなものゝ、知らぬうちは兎もあれ、この上あなたのお邪魔になつては濟みませぬ。わたしは覺悟

極めました！」
「なに、覺悟を極めたとは？」と、小平太はうろたへ氣味に聞き返した。
「はい、どうせあなたと別れては、誰一人たよるものもないわたしの身、後に殘つて、一人で生きて行かうとは思ひませぬ。何卒わたしを手に懸けて置いて、潔よう敵討のお供をして下さりませ。」
かう云つて、おしほは男の前へ身體を突き附けるやうにした。
「さ、その刀で一思ひに殺して下されませ。それ程わたしの身を思うて下さるあなたのお手に懸つて死ぬのは、わたしも本望で御座んすわいな。」
「ま、待て、待てと云つたら、少し待つてくれ！」と、小平太はすつかり周章てゝしまつた。「さう一概に云はれても、わしにはお前を手に懸けることは出來さうもないわい。」
「え、何と云はしやんす？　そんならわたし故に未練が出るから殺しに來たと仰しやつたは、ありやお前本氣では御座りませぬかえ。」
「いゝや、本氣ぢや、本氣には相違ないが、殺せと云はれて、現在かはいゝ女房、それも肚に子さへ宿つたといふものを、さうやみ〳〵と手に懸けられるものでない。うゝむ、待て、わしは一人で行くと覺悟をした！　お前はどうか後に殘つて、氣の毒ぢやが、その子を育てゝ行つてくれ。」
子どものことを云はれて、おしほは思はず帶の所へ手を遣つて、じつと頸垂れたまゝ考へ込んでしまつた。
「それにわしの死んだ後で、たとひ忠義の士よ、お主のために命を捨てた侍よと、世に持囃される身になつても、わしの身寄りの者が誰一人それを聞いてゐてくれるものがないかと思へば、何となく寂しい氣もする。なに、わしの兄はあつても、あれはもうわしの身寄りではない。身寄りと云つては、お前一人だ。そのお前が後に殘つて、忠義の侍よ、あれを見よと、わしが世間から囃されるのを聞いてゐてくれたら、同じ死ぬにも張合があるといふもの。わしは思ひ直した。どうかわしの云ふことを聞いて、後に生き殘つてくれ！」
おしほは矢つ張り俯向いたまゝ、何とも云はなかつた。小平太は氣を揉んで、
「な、わしの云ふことは分つたらうな？　分つたら、どうか得心して、わしの云ふことを諾いてくれ、な、な！」と、女の背に手を懸けながら繰返した。
「さうあなたのお覺悟が附けば」と、おしほはやう〳〵顏を上げた
「成程、わたしは後に殘つて、あなたの武名が上るのを陰ながら見させていたゞきませう。まだ海のものとも山のものとも分りませぬが、

もしお肚の嬰兒が無事に生れましたら、立派にあなたの跡目を立てさせます。どうぞそれだけは安心して、後へ心を殘さぬやうに、屑ようお主の敵を討つて下さいませ。」

「さうか、それでやつとわしも安心した」と、小平太は本當に安心したやうに云つた。「なに、妻子を後に殘して行くものは、わしばかりでない、同志の中には幾許もある。わしだけが妻子に心を惹かされたとあつては、同志の前へも面目ない。たゞお前をこれ迄内密にして置いたのが氣の毒ぢやが、なに、それもわしは決心した。明日にもお頭大石内藏助殿のお目にかゝつて、お前のことを包まず申上げて置くつもりだ。さうすれば、お前は天下晴れてわしの女房、誰に遠慮も氣兼ねもないといふものだからね。たゞどうもこれ迄一同の前に包んで置いたのが好うないが、なに、かうなれば、そんな事に遠慮も要るまい。わしはさうすることに決心したよ。」

「さうして下されば、わたしもどんなに嬉しいか知れませぬ」と、おしほも心から嬉しさうににつこりした。

かうして二人は夜の明けるまで互に盡きぬ思ひを語り明した。そして、夜の白々明けを待つて、「もう二度とは顔を見せないぞ」と云ひ置いたまゝ、小平太は思ひ切つて、袂を振り切るやうに、その長屋を出てしまつた。

十一

小平太が林町の宿へ歸つて來た時は、まだ夜が明け放れたばかりであつた。勘平は一人起き出して、雨戶を繰つてゐた。そして、小平太の顔を見ると、

「おゝ毛利か、歸つて來たな」と、いつものやうに聲を懸けた。

「いや、昨夜は御心配をかけて濟まなかつた。」

「なに、別段心配はせんがね、たゞ時日が迫つてゐるので、何か又異變でも生じた時、君が居合せないために、後で臍を噬むやうなことがあつてはならぬと、たゞそれだけを案じたよ。」

「有難う、母が又病を起してね、まあ、これが最後だと思つて、終宵附いてゐて看護して來たよ。」

「で、別に大したことはないのか。」

「いや、いつもの持病だ。氣がゝりなことはないさ」と云ひながら、小平太は極りの惡さうに、こそ〳〵と自分の居間へ這入つた。

同志から疑ひの眼で見られるのも辛いが、それよりも、この期に及んでなほその前を繕ふために、同志を欺かねばならぬといふことが、小平太には如何にも心苦しかつた。さうだ、これはどうしても頭領に屆け出る外はない。一刻も早く屆け出でて、その御裁可を得て置く。

尤も、こんな事まで太夫の耳に入れるのは、如何とも思はれないではないが、たとひ女には關係しても、小山田などと一つでない證據を見せるためには、思ひ切つて何も彼も白狀してしまふ外ない。さうすれば、俺もいよ〳〵後へは退かれなくなる道理だ！　たゞこんな事を太夫に申入れるには、誰か人を以てするのが本當かも知れないが、差當つてそれを打明けるのに恰好な相手も同志の中には見當らない。なに、構ふものか、場合が場合だ、面押拭つて自分で申上げることにしよう。さう決心すると共に、彼はその日の晝過ぎから、一寸石町まで伺候して來ると同宿の二人に斷つて、ぶらりと表へ出た。

急ぎ足に小山屋の隱宅まで來て見ると、頭領大石は今國元へ送る書面を認めてゐられるといふので、すぐには面會が出來なかつた。同じ宿に泊つてゐる潮田又之丞、近松勘六、菅谷半之丞、早水藤左衞門なぞといふ連中は、一室置いた次の間に集まつて、上の間に氣を兼ねながらも、何やら面白さうに談話をしてゐた。時にはわれを忘れて大きな聲も出した。小平太はその中に加はつたやうなものゝ、他の連中は皆百五十石、二百石取りの上士ばかりで、三村治郎左衞門を除いては、元の身分が違ふから、何となく話しもそぐはないやうな氣がして、默つて隅の方に控へてゐた。同志は「もつとこちらへ出られよ」と勸めてくれたが、遠慮して側へ寄らなかつた。次郎左衞門はもとく士分とも云はれぬ小身ものだけに、自分もそのつもりで、始終起つたり坐つたりしながら、忠實に一同の用を達してゐた。

内藏助の書いてゐる書面といふのは、赤穗の元淺野家菩提所華岳寺の住職恩光、同新濱正福寺の住職良雪、自家の菩提所周世村の神護寺の住職の三人に宛てたもので、自分が江戸へ下つてからの一黨の情況を報じて、いよ〳〵一擧の日の迫つたことを告げた上、

「此度申合せ候者共四十八人にて、斯樣に志を合せ申す儀も、冷光院殿この上の御外聞と存する事に候。死後御檢分のため遣し置候口上書一通寫し進じ候。何れも忠信の者共に候間、御廻向をも被レ成可レ被レ下候。其場にて生殘り候者共、定而引出され御尋れ御仕置にも可レ被二仰付一勿論其段人々覺悟の事に候。可二御心易一候云々」と書いてあつた。死後御檢分のため遣し置く口上書とは、その月二日に深川八幡前で認めた仇討の宣言書と起請文のことで、その中には毛利小平太の名も歴然として記載されてあること云ふ迄もない。なほ内藏助はそれに次いで、己が妻子のことにも云ひ及んで、

「將又拙者妻事、京より離別仕り實方へ返し申候。伜、娘儀如何樣に罷成り候とも夫迄の事に候」といひ、更に平生方外の友として、その啓沃を受けた良雪に對しては、

「良雪樣、去年以來の御物語、失念仕レ不、日々存じ出し、此度當然

の覺悟に罷成り忝き次第に御座候。日來御心易得御意候各々樣故、別而御殘多く、御暇乞旁如此御座候、恐惶謹言」と結んでゐる。で、それを書いてしまふと、若黨室井左六、加瀨村幸七の兩人を傍へ喚んだ。かねてその旨吩咐けられてゐたので、兩人とも旅支度をして脚絆まで穿いてゐたこととて、その書狀を受取るなり、一同に暇乞ひして、涙を拭き〴〵出て行つた。

で、この隙間に太夫に會つてと、小平太は腰まで上げたが、吉田忠左衞門が來て、何やら太夫と打合せをしてゐると聞いて、又その腰を卸してしまつた。そして、二たび默つて諸士の話しに耳を傾けた。

「今頃から出掛けて、あの二人は日のあるうちに何處まで延しますかな」と、一人が云つた。

「さ、脚の早い者とて、六鄕までは參りませうか。今夜は川崎泊りですよ。」

「日の短い頃ですからな」と、又一人がそれに應へた。「それにしても、あの主思ひな二人の忠節といひ、それを出して遣られる太夫のお心の中、昔の鬼王、團三が故事も想ひ出されて、拙者は思はず貰ひ泣きをしました。」

「左樣々々。同じ大石殿の家來の中にも、瀨尾孫左衞門のやうな人非人もあれば、又あんな忠義なものもある。假初の場合になつて、始めて人の心は分るもので御座るな」

こんな話しを聞いてゐる間に、小平太は太夫に聞いて貰はうとした自分の用事が取るに足らないばかりでなく、何だか滑稽のやうにも思はれて來た。自分としては一生懸命だが、人が聞けば、何と思つて今頃そんな事を云ひ出すかと、頭から一笑に附せられるかも知れない。さう思ふと、彼は自分が何のために遣つて來て、何のためにかうして待つてゐるのか分らなくなつた。それに、忠左衞門の用談は餘程大切なことと見えて、何時まで待つても果てさうにない。彼はだん〴〵氣をもぢ〳〵し始めた。

「時に太夫は京師を出發される前に妻子を離別して來られたと承はるが」と、一人が又云ひ出した。「後々のことを思へば、それも分別ある仕方と申すもの、近松どの、貴殿はいかゞなされた？」

「妻子のことはとんと忘れてゐ申した」と、勘六はむつつり口を開いた。「なに、成るやうに成る分のこと、そこ迄は考へてゐられませぬわい。」

「拙者は離緣狀だけは渡して參りました。しかし男子の相續人とてはなし、渡さぬかとて、女子どもにはお咎めも御座りますまい。」

「拙者も御同樣。」

「拙者も……」

が、こんな話しになると、さすが死を決した面々もだん〳〵憎惡になつて、しまひには皆默つてしまつた。聞いてゐる小平太には、いよいよ自分の用事が滑稽に見えて來た。

「他人は皆ある妻子まで離別して、出かけて來てゐる。それだのに、自分は今生死の境に立つて、新に妻を迎へたと、そんな事がどうしてお頭の耳に入れられよう？　馬鹿な！」

さう思ふと共に、彼は急に身繕ひして、

「誠に長座をして失禮いたしました」と、諸士に一禮して立ち上つた。

「お〻小平太どの、お歸りか。何か太夫に火急な用事でもあつたのでは御座らぬか。お急ぎなら、皆々からお取次ぎいたさうか」と、口々に云つてくれた。が、そんな明らさまに、他人に云はれるやうな用事ではない。

「いや、有難うは御座りますが、さしたる事でも御座りませぬ。折もあらば、又重ねて參上しまして」と云ひ捨てたま〻、そこ〳〵にその邸宅を出てしまつた。

彼は眞直に林町の宿へ戾つて來た。そして、一間に閉ぢ籠つたまま、誰とも顏を合せないやうにしてゐた。彼としては、何よりもおしほにした約束を果さなかつたことが氣に懸つた。かうなれば、あの女はもう自分の死後も自分の妻と名告ることは出來ない。妻も子も永遠に日陰の身である。尤も、同志の士は皆妻子を離別して來たといふが、それとこれとは話が違ふ。あの女は一生己れを扶助してくれる筈の良人を失つた上に、しかもその良人を誰と名指すことも出來ない。そして、その名指されぬ良人の子を纖弱い女手一つで育て〻行かなければならない――これから先永い〳〵一生の間！　あの女としては、そんな思ひをして生きて行くよりも、自分の妻として、公然お上のお咎かに逢ひたかつたかも知れない。お咎めに逢つて、もしお仕置になるものならなつて死にたかつたかも知れない。それを知りながら、折角石町まで出掛けて行つて、何にも云はずに還つて來た自分は一體何うしたと云ふのだらう？

「何うかしたら」と、彼は又一人で考へつ〻けた。「俺は太夫にそんな内情まで打明けるのが恐ろしかつたのではないか。そんな内情まで打明ければ、俺は義理にも太夫に背くことが出來なくなる。勿論、俺は太夫を裏切るやうな氣はない。氣はないが、なほそこに一分の餘裕を存して置くために、わざと太夫に逢はずに歸つて來たのではあるまいか。考へて見れば、阿兄新左衞門とのいきさつを同宿の安兵衞に打明けようとして、とう〳〵打明けずにしまつたのもそれだ。打明けずにさへ置けば、何時でも兄とした約束を反古にすることが出來るといふ

ゆとりがある。不埒でも狡猾いのでもない、俺はたゞそのゆとりが欲しかつたのだ。今日でももし太夫に會つて、何日ぞやのやうな優しい言葉でも懸けられやうものなら、俺はすぐにもこの人のために死にたくなる。それが怖ろしかつたのだ！」

彼はもうそんな風にして自分の心を見詰めるに堪へられなかつた。で、夜はまだ早いが、蒲團を敷いて、一人でごろりと横になつた。が、どうしても眼瞼が合はないで、とう〳〵まんじりともせずに一夜を明した。

十二

いよ〳〵十二月十四日、吉良邸討入の當日とはなつた。その日は朝から霏々として雪が降つてゐた。月こそ變れ、先君內匠頭の命日である上に、今生の名殘りと云ふので、大石內藏助を始め十餘名の同志は、かねての牒合せに從つて、高輪泉岳寺にある先君の墓碣に參拜した。堀部安兵衞も同宿の毛利小平太、横川勘平を代表して、その席に列なつた。で、一通り讀經と燒香が濟んだ後、白銀三枚を包んで寺僧に致して、一同別席でお齋に附いた。それから暫時人拂ひをした上、その席上で內藏助から最後の打合せがあつた。そして、後刻を約して散會になつた。

安兵衞は八つ前に宿へ戻つて來た。すぐに小平太と勘平の二人を前へ喚んで、今日の次第を物語つた上、「討入の手配はかねて覺書によつて銘々に傳へられた通りで御座る。一同は今夜丑の上刻までに、この宿と、本所三つ目杉野十兵次どのの借宅と、前原伊助神崎兩人の店と、の三箇所へ集合することになつてゐるから、その心得でゐて貰ひたい。それ迄は格別用事も御座らぬによつて、用の殘つてゐる方は用達しに出られるのも御勝手だが、當家は一黨の集合所になつてゐることでもあり、旁々晩くとも子の刻までにはこゝへ戻つて來てゐるやうにして貰ひたい。拙者はこれからこの旨を傳へるために、兩國米澤町の實父の宅まで參るが、約束の刻限までには必ず戻つて來るから」と云ひ置いたまゝ、再び出て行つた。

その後で、勘平と小平太とはしばらく顏を突合せてゐた。小平太には、何よりもかうして同志の者と向ひ合つて、落着かぬのに落着いた顏をしてゐるのが辛かつた。時刻は一分きざみに刻々と移つて行く。いつそ早く定めの刻限が來てくれたらとも思つて見た。さうしたら、この苦しみから免れられるかも知れない。その刻限が來るのは恐ろしい。しかしそれを待つてゐるのは一層怖ろしい！ そんな事を考へてゐるうちに、勘平は何と思つたのか、小平太に向つて、

「おい、今日はどうして出掛けないのだ？」と云ひ出した。「俺はこち

實際、彼は羨ましかつた。さういふ父親を持つてゐたら、自分も今になつてこんなに心の動くこともあるまい。それにつけても、何と思つて兄になぞ大事を打明けたかと、今更のやうに自分の不覺を悔まずにはゐられなかつた。

二人がさうしてゐる處へ、表から足音荒く横川勘平が這入つて來た。そして、ぷん〳〵腹を立てながら、

「おい、又裏切者が出たぞ！」といきなり喚ばはつた。

「裏切者？」と二人は一齊に相手を見上げた。

「さうだ、裏切者が出た、しかもこの宿から出たのだ！」

小平太はぎくりとして思はず飛び上つた。何だか自分が今兄として來た相談の一伍一什をその儘勘平に聞いてゐられたやうな氣がしたのである。

「中村と鈴田の二人が朝から出て行つた」と、勘平は委細構はず續けた。「俺はどうもその出方が怪しいと思つたので、君等が出掛けた後で、そつとその行李を調べて見ると、何時持ち出したものやら、何一つ殘つてゐないではないか。それには惘れたね。が、捨て置かれぬと思つたから、すぐに頭領の許へ駈け着けて見た。すると、どうだ、太夫はもうちやんと二人のことを知つてゐて、『どうも是非に及ばぬ』と云つてゐられるのだよ。聞いて見ると、彼奴等はもう書面で以て脫退の旨を屆けて來たんださうな。その文句がいゝね。『自分ども存じ寄りの儀があつて、今日限り同盟を退く。かね〳〵御懇情を蒙つたが、年取つた親もあることとて、どうも思召し通りになるわけに行かない。依而自分どもは自分どもで一存を立てるつもりだから、何卒連判狀から拔いてくれ』とあるんだよ。奴等も今になつてそんな卑怯なことを云ひ出す位なら、何と思つてはる〴〵江戸まで下つて來たのだ？ 俺にはその了簡が分らないね。」

「さあ」と云つたまゝ、小平太には矢つ張り返辭が出來なかつた。默つて聞いてゐると、何だか自分が罵られてゐるやうにも思はれた。

「多分江戸へ來れば、何か好いことでもあるやうに思つて來たんだらうが」と、勘平はまだ餘憤が去らないやうに、一人でつゞけた。「それが、そんな話がないばかりか、討入の日取りまで極つたといふので、吃驚して腰を脫かしたんだらうよ。」

「眞逆さうでもあるまい」と、小平太はやう〳〵口を挾んだ。「圓山會議でいよ〳〵仇討と決した時、太夫から諸士へ廻された廻狀にも、ちやんとそれは明記してあつたからなあ。」

「それが欲目で分らなかつたのさ」と勘平は捨てゝやるやうに云つて、から〳〵と笑つた。「だが、彼奴等のやうに恥を忍んで生き延びた處で、何時まで生きるつもりだ？ この先百年も生きやしまいし、晩い

か早いか、どうせ一度は死ぬる身ではないか。」

「さうだ、どうせ一度は死ぬる身だ」と、小平太は自分で自分に云つて聞かせるやうに呟いた。

「それが分らないんだから情ないね」と、それ迄黙つてゐた庄左衛門もぽつつり口を出した。そして、三人ともそれ限り黙つてしまつた。

「しかしね」と、少時して勘平は、何やら一人で考へてゐるやうに云ひ出した。「俺に云はせれば、今になつて返らぬことぢやあるが、このやうに敵討を延び／＼にされた太夫の仕方も好くない。第一、それがために、吾々の仕事が方々へ漏れてしまつた。今迄のところでは、それも別段差支へないやうなものゝ、しかしだん／＼士氣の沮喪して來たことは爭はれないぞ。切めてこの春にでも事を擧げられたら、百二十五人が五十人を缺くまでには減らなかつたらうに！　それを思ふと、どうも殘念でたまらないよ。」

　聞いてゐる二人は思はず顔を見合せた。成程五十一人殘つてゐた同志が、二人の逃亡によつて、最早四十九人になつてゐた。

「最初の脱盟者は例の高田郡兵衛だ」と、勘平は相手がそこらにでもゐるやうに、一方を睨みつけながらつゞけた。「彼奴もこの春までは、安兵衛殿、孫太夫殿と並んで、硬派中の硬派の一人と目されてゐた。それがどうだ、脱盟者の魁となつてしまつたではないか。安兵衛殿の話に聞けば、何でも旗本の叔父から養子にと望まれたが、だん／＼それを斷つてゐるうちに、傍にゐた兄が、弟は仇討の大望を抱いてゐるから、お望みに應じ兼ねるのだと、うつかり口を辷らしてしまつた。叔父はそれを聞いて、「なに仇討？　それは大變なことを考へてゐる。天下の直參として、そんな事を聞き捨てにはならぬ」と云ひ張つて、どうしても承知しない。そこで、叔父の言葉に從はなければ、大事が漏れて御一統にも迷惑をかけるから、恥を忍んで身を退くと斷つて、連盟から脱退したといふことだよ。成程、その言分だけを聞けば、一應尤ものやうにも思はれるが、その實は何うだか分つたものぢやないね。それ程義を重んずる心があるなら、何故自分からまづ腹を切らないのだ？　命を捨てたら、どんな分らない叔父でも、まさか一統に迷惑を懸けるやうなことも仕出來すまい。それをし得ないで、おめ／＼と養子になつて生き延びてゐるのは、何と云つても命が惜しいからよ。ね、さうぢやないか。」

「さうだ、命が惜しいからだ」と、小平太は反射するやうに云つた。實際、彼は自分でも何を云つてゐるか分らなかつた。彼にはたゞ郡兵衞の脱盟した前後の事情のあまりに好く自分が兄から云はれた言葉に似てゐることだけが分つてゐた。そして、自分が郡兵衞の立場に置かれたら何うするだらうと、そればかり考へてゐた。

その晩横になつてからも、小平太は矢つ張り中村鈴田兩人のことが氣になつて、どうしても寢附かれなかつた。中田理平次一人の時は、まだしも考へ直した。が、その後から又二人の叛逆者が出た。しかも、自分が朝夕顔を合せてゐた者の中から出た。彼は考へ込まずにはゐられなかつた。

「二人は散々勘平から恥ぢしめられた。が、その代りに命を助かつた。さうだ、恥を忍べば、まだ助かる道はあるのだ。」

さう思つて、小平太は自分ながらはつとした。武士が命を惜しむの、卑怯者だのと云はれたらそれ迄だ。それが最後の宣告である。彼はまだそれを超越する程頽廢的に深く考へてもゐなければ、又それ程人として惡摺れてもゐなかつた。

「さうだ、高田郡兵衞が最初の脱盟者になつて、俺が最後の脱盟者になる？　そんな事はあり得ない、斷じてあつてはならない！」

彼は一晩中輾々反側して、やつと夜明け方にうと〳〵とした。

九

師走の二日には、深川八幡前の一旗亭に、頼母子講の取立てと稱して、一同集合することになつてゐた。討入前の重大な會議のこととて、その日は安兵衞も、勘平も、小平太も打揃うて午過ぎから出掛けた。

頭領大石内藏助も定刻前から子息主税を連れて遣つて來た。その傍には、吉田忠左衞門を始めとして、原總右衞門、小野寺十内、間瀬久太夫などの領袖連が坐流れた。で、一同の顔も揃つて、いよ〳〵會議に入らうとする段になつても、何うしたのやら、一足後れてすぐ後から來る筈になつてゐた小山田庄左衞門の姿が見えない。既に同宿の者の中から二人まで裏切者を出してゐることとて、安兵衞も、勘平もしきりに氣を揉んだ。中にも勘平は、自分が一走り行つて見て來よう、そこらにまご〳〵してゐたら引摑んで連れて來るとまで云ひ出した。が、吉田忠左衞門はしづかにそれを制して、

「この場に莅んで變心するやうな臆病者を無理に引張つて來ても仕方があるまい。こゝに御出席の方々は、皆亡君のために一命を投げ出してゐる者どもで御座るぞ。その方々の手前もある。打捨てゝ置きなされ」と、言葉鋭く云ひ切つた。勘平も理の當然に服して、その儘默つて控へてゐた。

いよ〳〵起請文の前書が讀み上げられた。これは仇討の宣言綱領と云つたやうなもので、次の四箇條から成立つてゐた。いはく、

一、冷光院殿御尊讐吉良上野介殿可二討取一志有レ之侍共申合せ候處、及二此節一大臆病者共變レ心退散仕候者撰み捨て、唯今申

合せ必死相極め候面々は、御靈魂御照覽可レ被レ遊候事。

一、上野介殿御屋敷へ押込働之儀、功之淺深不レ可レ有レ之候。上野介殿印揚候者も、警固一通之者も可レ爲二同前一候。然者組合働役好申間敷候。尤先後之爭不レ可レ致候。一味合體、如何樣之働役に相當候共、少しも難澁申間敷事。

一、一味の各存寄被二申出一候共、含二自己之意趣一申妨候儀有レ之間敷候。誰にても理之當然に可二申合一候。兼而不快之底意有レ之候共、働之節互に助け合ひ、急を見繼ぎ、勝利之全所を專に可二相働一事。

一、上野介殿十分に討取候共、銘々一命可レ遁覺悟無レ之上者、一同に申合せ、散々に罷成申間敷候。手負之者於レ有レ之者、互に引懸助け合ひ、其場へ集可レ申事。

右四箇條相背候者、此一大事成就不レ可レ仕候。然者此度退散之大臆病者と可レ爲二同前一候事。

この草案は吉田忠左衛門の手になつた。忠左衛門の外には、原總右衛門一人それに參與したと云はれる。で、それを一同に讀み聞かせた上、異議がなければ、直ちに神文へ血を注いで貰ひたいと達せられた。勿論、誰一人として異議のあらう筈もなかつた。そこで大石内藏助良雄から同苗主税良金、原總右衛門元辰、吉田忠左衛門兼亮といふやうに、談合によつて、銘々に血判をすることになつた。

小平太は小山田庄左衛門が姿を見せないと知つた時から、殆ど一語も口を利かなかつた。が、起請文が自分の前へ廻された時には、顫へる手先を覺られまいと努めながら、それでも立派に毛利小平太元義と署名して、その下に小指の血を注いだ。そして、それを次の勝田新左衛門に渡した。

かうして大石内藏助以下寺坂吉右衛門に到るまで四十八人の血判が濟んだ時、更に當夜の人々心得が議に附せられた。これも忠左衛門の手になつたもので、當日定めの刻限が來たら、かねて申合せた三箇所へ物靜かに集合すべきことといふ第一箇條を始めとして、敵の首を揚げた時は、敵の上衣に包んで泉岳寺に持參すること、子息の首は持參に及ばず打捨てること、なほ味方の手負ひは互に引懸け連れて退くことが肝要だが、歩行難澁の首尾になれば、是非に及ばず首を揚げて引取ること、その他合圖の小笛、鉦、退口のこと、引揚げ場所のこと、途中近所の屋敷から人數を繰出した場合の挨拶、上杉家から追手がかかつた時の駆引、なほ又討入つて勝負の附かぬうちに御檢使が出張になつた場合、それに應ずる口上に到るまで、凡て十二箇條に亘つて、殘る隈なく討入の手筈を定めた上、最後に退口のことを念頭に置いては、却て心臆するかも知れない、しかし退いても一定時からぬ[illegible]

の身である、申すに及ばぬ儀なれど、銘々必死の覺悟にて粉骨碎身すべきことと結んであつた。これには二三質問も出た。が、入念な忠左衛門の說明に、一同滿足して、異議なくそれを承認した。

それから當夜の各自の扮裝、討入の諸道具についても話しがあつた。これはそれ迄に銘々その準備をしてゐることではあるが、持合せのないもの、又は當夜に限つて必要なもの、例へば槍、薙刀、弓矢の類を始めとして、斧、鉞、玄能、懸矢、竹梯子、細引、龕燈提灯、鉦といふやうなものは、かねてその用意をして平間村に保管してあるから、明日、明後日兩日の間に、それ〴〵取寄せて置いて貰ひたい。但しそんな事から事の破れになつてはならぬと云ふので、人目に立たぬやうに、それに關與する人數から役割まで定めて、それ〴〵云ひ渡された。

かう云ふ風に相談が多端に亘つたために、頼母子講は夜に入つて漸く散會となつた。散會となるや、安兵衛と勘平とは庄左衛門のことが氣になるので、宙を飛ぶやうにして林町の宿へ馳け戻つた。小平太もその後に隨いて走つた。が、そんな時分に、馳落者がそこらに迂路迂路してゐる筈もない。安兵衛は取散らした荷物の間に坐つて、机の抽斗を開けては、しきりに小首を傾け始めた。

「何か見當りませぬか。」

「ふむ、金子が少々足りないやうだ。それに、拙者の小袖も見當らない。」

「なに、金子？」と勘平も小平太もあわてゝ馳け寄つた。

「いや、御安心下さい。大石殿からお預りして、各々方にお渡しする筈の金子は、別に仕舞つて置いたから大丈夫で御座る。たゞ手前の小遣ひ錢が少々紛失いたした。」

「それは〳〵」と、二人とも少時開いた口が塞がらなかつた。

「それにしても」と、勘平は又猛り立つた。「何といふ卑劣な所爲で御座りませう。脫盟して吾々の顏を潰すさへあるに、他人の金品まで盜んで逐電するとは！」

「いやなに」と、安兵衛はしづかに云つた。「浪人すれば、永い間にはそんな氣にもなりませう。どうせ吾々を見限つて一列を脫けた人だ、追及するにも當るまい。」

「ぢやと申して、吾々の面目にも――」

「だからまあ、金のことはあまり云はぬやうにいたしたい。吾々にあつても餘り役に立たぬもの、これから先生き延びる人には無くてならぬものだからな。はゝゝゝ。」

「さう云へば、そんなものでも御座らうか、あはゝゝゝゝ」と、勘平も一緒になつて笑つてしまつた。

小平太は最初庄左衛門が脱盟したと知つた時、殆どその譯が分らなかつた。あゝいふ一徹な父親を持つてゐる上に、平生から隨分口幅つたいことも云つてゐた男が、この期に及んで逐電する！　彼にはどうしてもあり得べからざることのやうに思はれた。が、その一面に於ては、どう云ふものか、先を越されたといふやうな氣もした。自分ではまだ逃亡しようとも何とも思つてゐなかつた。けれども、心のどこかで、矢つ張りさういふ氣のしたことだけは爭はれない。そして、庄左衛門が滿座の中で諸士から罵倒されるのを聞いてゐた時、まあ〳〵自分でなくつて好かつたといふやうな安心を覺えた。然るに、今宿へ戻つて檢べて見ると、庄左衛門は他人の金品まで持ち逃げしてゐる！　これは下司下郎の仕業で、士にあるまじきことだ。かうなると、小平太ももう自分のことのやうな氣はしなかつた。いくら勘平が罵倒しても、他人のこととして平氣で聞き流すことが出來た。そのために、彼は却て救はれたやうな氣もした。

　明くる朝安兵衛は、兎に角この事は一應頭領にも屆けて置く必要があるといふので、早朝から出掛けて行つた。その後で小平太は、一人火鉢に向つて、ぼんやり考へ込んでゐた。隣の座敷では、勘平が何やらしきりに書狀を認めてゐる。この間に一つおしほの許へ行つて遣らうか、あの女に逢ふのももうこれがお仕舞だなぞと考へてゐるうちに、隣の間から勘平が片手に書狀を持つて出て來て、

「一寸出掛けるから留守を頼むよ」と云つた。

　實際、中村、鈴田、小山田とだん〳〵同宿の者が減つて來ては、飯炊の男を除けば、もう小平太の外に留守をするものもなかつた。小平太は又先を越されたなと思ひながら、「宜しい！」と云つた。そして

「飛脚を頼みに行くのか」と訊いて見た。

「うむ、あんまり臆病者が澤山出るので心外でたまらぬから、一々誅を加へてやつた」と、勘平は問はず語りに話した。(序ながら、勘平のこの書狀は、江戸に於ける赤穗浪士の動靜を知る貴重な材料として、今に傳はつてゐる。)「だが、戻路には一寸他所へ廻るつもりだから、少し晩くなるがいゝか。」

「あゝ、ゆつくり行つておいで。」

　勘平はその儘出て行つた。が、それと入れ違ひに、前に出た安兵衛が戻つて來て、

「小平太どの、一つ平間村まで御足勞が願ひたい」と云ひ出した。聞けば、この宿が當夜の集合所の一つになつてゐる。それに就いては、昨夜の相談では、當夜の諸道具は銘々の宿へ持ち込むことになつてゐたが、やはり一部分はこゝへ集めて置いた方がよからうといふことに模樣が變つたので、御足勞だが、これからすぐに取りに行つて來

て貰ひたい。尤も、大石殿の若黨寺井左六が仲間どもを連れて先へ行つてゐるから、それ等のものに持たせて、貴公はたゞ宰領して來て貰へばいゝと云ふのだ。小平太は領承してすぐに立ち上つた。

平間村までは往復八里の道である。目黑から間道を脫けて行つたが、それでも歸路は夜に入つた。小平太は亥の刻前にやう〳〵戾つて來て、自分で指圖をして、それ〴〵片附けるものは片附けさせてしまつた。勿論、安兵衞や勘平も手傳つた。で、いよ〳〵寢に就かうとした時、側に寢てゐた勘平が、

「おい、小山田の逃げた理由が分つたぞ」と、聲を潛めてさゝやいた。

「えゝ？」と、小平太は思はず振返つた。「それは又何うしたと云ふのだ？」

「先達てからあの男は」と、勘平は蒲團の上に起き直つたまゝつゞけた。「よく湯島の伯母の許へ行くといつては出掛けたものだ。なに、それが伯母の家でも何でもない、天神下の湯女の宿だとは、俺も疾うから見拔いてゐた。だが、なにも他人の秘密を訐くでもなし、何人にもあり勝ちのことだと大目に見て置いたがね、今になつて見ると、それがこつちの手脫りだつたよ。で、まだそこらにまご〳〵してゐたら、引捕まへて糺明してやらうと、今日出た序に、そちらへ廻つて見た。なに、天神下の湯女の宿は三軒しかないからすぐ分つたがね。だが、行つて見て驚いたよ。庄左衞門の相手の女といふのも、昨夜から姿を見せないと云ふので、向うでも大騷ぎをしてゐるのだ。的切り二人諜し合せて駈落をしたものに相違ないね。かうなると、何處まで下拵に出來てゐるか方途が知れない。俺も餘計な暇潰しをしたやうなもの、そんな奴かと思つたら、やつと諦めが着いたよ。」

「さうか！」と云つたまゝ、小平太は何とも返辭が出來なかつた。ただもう自分が糺明を受けてゐるやうな氣がして、胸は早鐘を撞くやうに動悸を打つた。

「だが、女のために大義を誤る」と、勘平は又ごろりと横になりながら云つた。「考へて見ると、氣の毒なものぢやね。かうしてだん〳〵籾と糠とが撰り分けられるんだよ。」

「さうだ、籾と糠とが撰り分けられるのだ」と、小平太はやう〳〵それだけ云つた。

勘平は云ふだけ云ふと、氣が納まつたか、その儘すや〳〵と寢入りかけた。が、小平太はさうは行かなかつた。夜着の襟に手を懸けたまゝ、長い間蒲團の上に起きて坐つてゐた。そして、口の中では、絕えず「籾と糠、籾と糠、籾と糠！」と呟いてゐた。

最初彼は相手が自分に當て附けるために、わざと庄左衞門の女の話

を持ち出したのだと思つた。が、考へて見ると、そんな答はない。もしおしほのことを感附いてゐたら、そんな遠廻しに持ちかけるやうなことは云ふまい。勘平はそんな男ではない！　で、おしほのことはまだ何人にも知られてゐない、それだけは確かだ。が、それにしても、自分はもう二度とあの女に逢つてはならない。この間から四五日遠退いてゐたのを幸ひに、この儘顔を見ないで行く！　不人情かは知らぬが、それより外に俺の取るべき道はない。あの女も後でそれと聞いたら、俺のことをさのみ惡くは思ふまい。――

「さうだ、俺はもう斷じて逢はないぞ。」

さう心に誓つた時、彼はやつと安心して横になつた。そして、眼を瞑つたまゝ、

「なに、俺はたゞ眼を瞑つて吉良邸へ飛び込みさへすればいゝのだ」と呟いた。「その後は生きるも死ぬるも向う次第だ。お上で好いやうにして下さる！」

彼は何時になく晴れ／＼とした氣持になつた。それに、昼間の疲れもあつて、その儘ぐつすり寝込んでしまつた。

十

明くる朝眼を醒した時は、又いつもの小平太になつてゐた。けれども、昨夜立てた誓ひを守つて、何處へも出まいと思つた。さうだ、俺は何處へも出なければいゝ。そして、安兵衛と勘平の後に喰附いてさへゐれば間違ひはない。大義を誤るやうな恐れは斷じてない。さう思つて、彼は一日中宿に引籠つてゐた。そして、その日は何事もなく過ぎた。

處が、四日の朝になつて、思ひも寄らぬ通知が頭領の手許から一般に達せられた。それは、來る六日には、將軍家がお側御用人松平右京太夫の邸へお成りになる旨、不意に觸れ出された。それに依つて、吉良家でも當日の茶會を御遠慮申上げることになつたに就いては、五日の夜と極めた一條も自然延期せずばなるまい。いづれ後から又委しいことは通達するが、それ迄は構へて静穏にしてゐるやうにと云ふのであつた。

小平太は張詰めた氣が一時に弛んで、妙にがつかりしてしまつた。彼には討入の日の延びたといふことが些とも嬉しくなかつた。成程五日の夜は延びた。ぼうつとして考へてゐると、何だか仇討といふやうなことは夢のやうに遠い空の彼方へ消えてしまつて、そんな日は永久に遣つて來ないやうな氣もしないではない。しかもその日は厳然としてあるのだ。それだけは決して動かない。何時かは又弛んだ氣を引締めて、一旦ほぐした覺悟をもう一度仕直して掛からなければならな

い。それが彼には辛かつた。そんな事は迚も自分の力には及ばないやうな氣もした。

彼はもう何うする氣もなかつた。で、一日二日は宿に引籠つたまゝき、うつら〳〵としてゐたが、そのうちに又おしほのことが想ひ出された。さうだ、この可厭な氣持から免れるためには、矢つ張りあの女に逢ひに行く外ない。なに、庄左衛門は女のために大義を衍つたかも知れないが、俺の怖ろしいものは別にある。それは自分の心だ！　かうして一人でくつ〳〵考へてゐたら、終ひにどんな事を仕出來すか分らない。さうだ、そんな餘計なことを考へないためにも、俺はまづあの女に逢はなければならない。さう思つた時、彼はもう矢も楯もたまらなくなつて、すぐに支度をして宿を飛び出した。

が、女の家に近づいた時には、それでも又勘平に云はれた言葉が氣になつた。と云つて、その儘引返す氣にもなれないので、うぢ〳〵しながら、とう〳〵女の家の軒端をくゞつてしまつた。

女の方では、そんな事とは知らないから、久しく逢ひに來てくれなかつた恨みを云ふことも忘れて、心から嬉しさうにしながら、

「久しく見えなんだのは、どこかお惡かつたのか。さう云へば、お顔の色も好うない」と、心配さうに訊ねた。

「なに、さう氣に懸けてくれる程のことでもない」と、小平太は面倒臭さうに云つた。彼にはもう當座の嘘を云ふのが億劫になつてゐた。と云つて、眞實のことも云はれなかつた。

「だつて、心配になりますわ」と、おしほもさすがに云ひ返した。「見えると云つて見えもせず、たま〳〵來れば、いやな顔をしていらつしやるんだものを。」

「ぢや、來なければよかつたね」と小平太は氣短に云つた。

すると、女はすぐに氣を變へた。「わたしが惡う御座んした。お氣合ひの惡い所へ餘計なことばかりお訊ねして、もう何にも申しますまい。」

かう云つて、おしほは相手の氣を逸らすやうに、他の事に話しを移した。「わたしもあなたの妻になる身で、あんな茶店に出てゐたとあつては、後々どんな障りにならうも知れない。幸ひ、さる人のお世話で、今度松坂町のさる御大家の仕立物を一手で縫はせていたゞくことになりました。まあ、これを見て下さいませ。今もこんなに來てゐる位だから、どうか、わたしのことは安心して――」

「なに松坂町？」と、小平太は思はず聞耳を立てた。「その御大家といふのは、何といふ家だえ？」

「えゝ、中島伊勢様と仰しやる大奥お出入りの御鏡師といふことで御座いますの」と云ひながら、何と思つたか、おしほは急に顔を赧らめ

た。「何でもその嫁御寮は、吉良様の御家老とやらから来ておいでおやといふことで御座いますわ。」

「ふむ、さうか」と、小平太は腕を拱いて考へ込んだ。さういふことがあるとすれば、いつそこゝでこの女に大望を打明けて、その手蔓で何事かを聞き出すやうにしようかとも思つて見た。が、この間兄に云つてしくじつたことを思へば、迂濶に打明ける氣にもなれなかつた。それに、相手は女のこと、何んな事から事の破れにならうも知れない。まあ〳〵と思ひ返して、「さうか、主家を滅ぼした敵の片割れに縁のある家の仕事をして、身過ぎをするのも時代時節、まあ何事も辛抱だね」と云つて置いた。

その日宿へ歸つた時、小平太は勘平に向つて、今日中島伊勢の宅へ出入りをするお物師と一寸知合になつたがと洩らして見た。すると、相手は無性に喜んで、

「そいつは巧いことをした。中島伊勢に娘をくれた家老といへば、矢つ張り小林平八郎のことに相違ない。一寸そんな話を耳に挾んだこともある。是非そいつはもつと立ち入つて探索しろ」とすゝめてくれた。

で、その明くる日からは、小平太も大びらで宿を出て、おしほを訪ねることが出來た。が、女の顔を見ると、別にそんな事も云ひ出さなければ、女の方でも、その後中島伊勢のことはふつつり口にしなくなつた。たゞ小平太はかうして毎日女の顔を見に行つた。

が、一方では、阿兄新左衛門のことも氣にかゝつてゐた。あゝして一時を胡魔化して來たものゝ、あれから一度も姿を見せないから、今頃どんなに不安に思つてゐるか知れない。尤も、兄の氣性としては、あれだけ云つて置いたものを、自分に無斷で、はやまつて一黨に迷惑を懸けるやうなことはすまい。なれど、長い間には、自身の不安から、何を仕出來さないとも限らない。五日の討入の延びた時には、いつそ安兵衛に事情を打明けて、兄の前だけでも同盟を脱退したやうに繕つて貰はうかとも考へて見た。が、高田郡兵衛のことを思ふと、うつかりしたことを云ひ出して、どんな疑ひを同志から受けまいものでもない。それを思へば、どうしてもそんな事は云ひ出されなかつた。時には、打明けた方が疑ひを除く所以だとも思はないではなかつたが、矢つ張り何物かがあつて彼を引留めた。で、とつおいつ思案してゐる間に、とう〳〵云ひ出す機會を失つてしまつた。

たゞ彼は自分の住所を兄に知られてゐた。その間には、向うから訪ねて來るかも知れない。訪ねて來られたら一大事だ。彼は戸口に聞える足音にも膽を冷すやうになつた。他所から戻つて來ても、先づ留守中に誰も訪ねて來なかつたと知る迄は安心が出來なかつた。

そんな不安な日を送つてゐるうちにも、日數は經つて、師走の十一日になつた。この日同志の一人大高源吾は再び宗匠山田宗徧の許から、來る十四日いよ〳〵上野介の自邸に於て納めの茶會が催される、その後は年内に白金の上杉家の別墅へ移られる筈だといふことまで聞き出して來た。かうなればもう猶豫は出來ない。それに十四日は先君の御命日でもあるから、その日を期して決行しようと、即座に一決して、頭領大石内藏助からそれ〴〵一黨に通達された。

小平太は又默り込んでしまつた。何だか非常に遠い所にあるやうに思つてゐた黒雲が、急に目の前へ蔽ひ被さつて來たのである。が、安兵衞も勘平も冷靜にその通告を受けて、もうするだけの用意はしてしまつた、何時でも來いと云はむばかりに落着き澄してゐる。二人の前へ對しても、小平太は自分の落着きのないのが恥づかしかつた。何うかしてそれを覺られないやうに落着いてゐようと思ふけれど、二人と顏を合せてゐると、何だか心の底まで見透されるやうな氣がしてたまらない。それでも、その明くる日一杯は、じつと辛抱して宿に蟄つてゐた。が、夕方になると、もう耐らなくなつて、兄の許へ母親に逢ひに行くといふ口實の下に、ぶらりと家を出てしまつた。勿論、兄の許へなぞ行く氣はなかつた。かうなればもう行く必要もなし、又事實行かれもしなかつた。彼の行かれる所とては、天上天下、たゞおしほの家だけであつた。

彼は途を歩きながらも、「何のためにあの女に逢ひに行く？」と考へて見ずにゐられなかつた。「俺は一體あの女を何うしようと思つてゐるのだ？」それには彼も自分ながら返辭が出來なかつた。

「可哀さうに」と、しばらくして彼は又考へつゞけた、「あの女も今に及んで俺がどんな心を抱いて、どんな苦しみを嘗めてゐるか、全然知らないでゐるのだ！　こんな便りない男を手頼りに生きて來て、その男さへこの世にゐなくなつたら、これから先何うして生きて行くだらう？　考へて見れば、眞個不仕合せな女には相違ない！」

不圖「あの女を殺したら？」といふやうな氣が心のどこかでした。

「さうだ、いつそのこと、あの女を手に懸けて殺したら、俺も本氣で死ぬ決心が着くかも知れない。」

が、さう思ふと同時に、彼は自分でも自分の殘忍な心に吃驚したやうに飛び上つた。これ迄自分の本心も明さないで、始終欺き通しに欺いて來た上に、最後に自分が死の覺悟をする手段として、相手の女を手に懸けようとする？　俺の心は鬼か蛇か。眞個自分ながら愛想の盡きた男だ！

彼は眼を瞑つてその心を拂ひ退けようとした。いつそこの佳女の顏を見ないで引返してしまはうかとも思つて見た。が、さう思つただけ

で、足は矢つ張り向いた方へ歩いて、だん〳〵女の家に近づいてゐた。

　何も知らないおしほは、例によつて愛想よく男を迎へた。

「今夜は少しゆつくりしてもいゝやうに、同宿の者へも頼んで來た。晩くなつたら、こゝで泊つてもいゝのだ。これで一つお酒を購つて來てくれ」と、小平太は懷中から小粒を一つ出して渡した。

「まあ珍らしい、お酒を召上る?」と、おしほは可訝さうに相手の顏を見返したが、「でも、ゆつくりしていゝと仰しやるのは嬉しい。わたしも實はこの間から聞いていたゞきたいと思つてゐることもある。では、すぐに行つて參じましよ」といそ〳〵として出て行つた。

　ものゝ十分とは經たないうちに、おしほは五合德利に風呂敷に包んだ皿を提げて戻つて來た。そして、少時臺所でこそ〳〵遣つてゐたが、間もなく膳の上に肴と銚子とを揃へて持ち出した。小平太も火燵から這ひ出して、膳に向つたが、さゝれるまゝに一つ二つと盃を重ねた。日頃は三杯と飮まぬうちにもう眞赧になつてしまふのだが、今夜は何うしたのやらいくら飮んでも醉ひを發しない。藥でも呑むやうにぐつと呑み乾しては、その儘又猪口を差出すので、

「まあ、そんなに召上つて好う御座りますか」と、おしほは注ぎかけた銚子を控へて、思はず窘めるやうに云つた。

「なに、構はぬ、注いでくれ」と、小平太は持つた盃を突き附けるやうにした。

「まあ、泊つて行つてもよいと仰しやるなら、少しはお醉ひになつてもよかろ」と、おしほは思ひ直したやうに、又滾々と注いだ。

　小平太はその盃に一寸脣を附けたまゝ、下に置いて、

「先刻云つた、わしに話したいといふのは、そりや何だ?」と、不意に云ひ出した。

「えゝ」と、おしほは見る〳〵顏を赧らめながら、「そりやまあ後でもいゝことぢやわいな」と、その場を紛らさうとした。

「さうか」と、小平太は又盃を口へ持つて行つた。「云ひたくなければ聞かんでもいゝ。」

　男の顏は蒼味を帶びて、調子は妙に纏れかゝつてゐた。

「いゝえ、云ひたくないことはない。どうしても聞いて貰はにやならぬことだけれど……」

「ぢや、云つたら何うだ?」

「えゝ、あのそれは」と、おしほは口籠りながらつゞけた。「何日ぞやから、今度逢つたら云はう〳〵と思つてゐましたが、何だか又餘計な御心配をかけるやうな氣もして……實は前の月からわたし見るものを見ませんの。」

「え？」と、小平太はぎくりとしたやうに云つた。「ではあの、お前が妊娠した？」

おしほは默つて點頭いて見せた。

「さうか！」と、彼は太い息を吐いた。

「でも、まだよくは分りませんのよ」と、おしほは相手の顏色を見て、すぐに云ひ直しにかゝつた。「たゞわたしがさう思つただけ……そんなにお氣に懸けるのなら、申上げなければ好う御座んしたのにねえ。」

「なに、云つてくれた方がいゝんだ」と、小平太は下を向いたまゝ云つた。

「だつて、心配さうにしていらつしやるんだものを。」

「氣に懸けんでもいゝ。子どもが生れるとなれば、俺も一層氣が締るといふものだ。兎に角、お前にこの上の苦勞はさせんから、心配するな。それよりも一杯注いでくれ！」と、又盃を突き出した。

おしほは一寸相手の顏を見返したまゝ、默つてその盃を充した。

「心配せんでもいゝぞ」と、小平太は又繰返した。「日頃云つたわしの言葉に間違ひはないからな。それに間違ひさへなけりや、お前が氣を揉むことはあるまい。」

「えゝ、それはもうさうに違ひ御座いませんけれど……」

「それならもつと注いでくれ、わしは今夜久し振りに醉つて見たいのだ。」

かう云つて、小平太はおしほに酌をさせては、ぐい／＼と飲み干した。そして、一本の銚子が空になると、又二本目までつけさせたが、二本目を飲み切らないうちに、苦しくなつて、そこに倒れてしまた。そして、横になつたまゝ、苦しさうに胸を波打たせてゐた。おしほは氣を揉んで、枕を當てがつたり、頭を水で冷したり、いろ／＼手を盡して介抱してくれた。それ迄は覺えてゐたが、そのうちに少し胸先が樂になつたと思つたら、何時の間にかうと／＼と寢入つてしまつた。

夜半に咽喉が煎りつくやうな氣がして、小平太は眼を覺した。氣が附いて見ると、自分はちやんと蒲團の上に夜着を被けて寢てゐた。枕頭には古びた角行燈がとぼれて、その下の盆の上には、醉ひざめの水のつもりでもあらう、土瓶に湯呑まで添へて置いてあつた。彼はいきなり片手を伸ばして、それを引寄せようとしたが、不圖自分と床を並べて寢てゐるおしほの姿が眼にとまつた。

「さうだ、俺はおしほの家に寢てゐるのだ！」

彼はぎよつとしたやうにその手を引込ませた。それにしても、もう何時だらう？ 晩くなるとは云つて來たが、今夜自分が歸らないのを

見たら、俺まで庄左衛門の二の舞ひをしたものと極めて、横川が又毎ものやうに腹を立てゝゐはせぬか。まあ、それは云ひ解く術もあらうし、明日の朝早く顔を見せさへすれば、それで濟む。濟まぬは宵におしほから聞いた話だ。もしあの話が眞實だとすれば、俺は何うしたらいゝか。肚の子に惑かされて、この儘こゝに居坐りでもしたら、それこそ庄左衛門と撰ぶ所はない。俺も小山田と一緒にだけはなりたくない！

「いつそこの女を手に懸けたら！」と、途中で考へたことが再び彼の心に甦つて來た。「さうだ、こゝ迄追詰められては、俺もこの女を道伴侶にする外に救はれる道はない。不便ながらも、お前の命は貰つたぞ！　何事もお主のためと觀念して、一歩先に行つてくれい。それがお前にとつても一番好い道かも知れない。お前ばかりでない、その肚に宿つたといふ不幸な子どものためにも！」

彼は頭だけ持上げて、そつと隣の寢床を見遣つた。おしほは尋常に枕をしたまゝ、こちらを向いてすや／＼寢入つてゐる。その整つた安らかな寢息が、いかにも男に信頼して、身も心も任せ切つてゐるやうに見えていぢらしい。

「何も知らずに寢てゐるなあ！」

から彼は呟いたまゝ、しばらく女の寢顔に見恍れてゐたが、何と思つたか急に首を縮めて、又すつぽり夜着を引被つてしまつた。彼にはどうもこの女を手に懸けるなぞといふことは出來さうにもなかつた。が、出來なければ何うしようと云ふのだ？　もう一日經てば、否でも應でも白刃と白刃と打合ふ中へ飛び込まなければならぬ身ではないか。こんな事ではならぬ／＼と思ひながら、思へば思ふ程腕が萎へるやうな氣がして、何うにもならない。彼はたゞ暗がりの中にまじ／＼と眼を瞬いてゐた。

その間にどこかで一番鷄が鳴いた。

「もう夜が明けるのか知ら？」

彼は夜着をはぐつてもう一度顔を出した。が、宵まどひした鷄でもあつたか、つゞいて啼く鳥の聲も聞えなかつた。

「さうだ、今の間に決行しなければ、俺はいよ／＼不義者になつてしまふのだ！」

彼は一思ひに瓦破と跳ね起きて、いきなり壁際に寄せて置いた小刀を取るなり、すらりとその鞘を拂つた。そして、行燈の灯影に曇りのないその刀身を透して見た。新刀ながら最近研師の手にかけたものだけに、じつとそれを眺めてゐると、どき／＼したその切尖から今にも生血が滴りさうな氣がして、われにもなく持つてゐる手がぶる／＼と顫へた。

「あなた、お目覺めになりましたか」と、不意に背後からおしほが聲を懸けた。
　小平太はぎくりとして、思はず振返つた。そのはずみに、手に持つた白刃がぎらりと闇に光つた。それが眼に入つたのか、
「まあ、あなた！」と云つたまゝ、おしほはいきなり飛び起きてしまつた。そして、
「あなた、何うなされました？　氣でも狂つたのか、そんなものを手に持つて！」と、矢庭に男の腕に縋り着いた。
「うむ、待て、危殆い！　待てと云つたら待て！」と、小平太は狼狽へながら、その手を振り放さうとした。
「いえ／＼放しませぬ、譯を話して下さらぬうちは、決してこの手を放すことでは御座りませぬ」と、女はいよ／＼力を籠めて、一心に武者振り附いた。
「話す／＼、譯を云ふからその手を放してくれ」と、小平太はやうやう女の手をほどいて、刀を鞘に納めた。
「さ、早う云つて下さいませ」と、女はその刀を取つて自分の背後へ片附けてから、男の前に膝をすゝめた。「わたしといふものもある身で、短氣な心を出さんした譯を有樣に云つて聞かせて下さいませ。」
「話すと云つた上は、さう云はんでも、嘸度話して聞かせる」と、小平太も蒲團の上に坐り直した。「だが、何んな事を聞かうとも、必ず吃驚して騒ぐまいぞ。」
　おしほは默つて點頭いて見せた。
「今迄隠して置いたは、成程わしが悪かつた。疾うに打明けようとも思つたが、それもならず、いはばわしは最初からそなたを瞞してゐたやうなものぢや。ま、驚いてくれるな。よく終ひまで聞いてから、そなたの存分にしてくれたがいゝ。實は去年三月のことがあつて、一家中殘らず浪人して散り／＼ばら／＼になつたとは云ふものゝ、相手の吉良家はあの通り何のお構ひなし、このまゝ御主君の妄執も晴らさずに置いては、家中の者の一分立たずと、御城代大石内藏助様始め、志ある方々が集まつて、寄り／＼仇討の相談をなされた。その連名の中へ、わしも去年の暮から加はつたのぢや。」
　おしほは眼を睜つたまゝ、目じろぎもせず男の顔を見詰めてゐた。
「林町に家を借りて、堀部安兵衞どのその他の方々と同宿してゐるのも、實を云へば仇家の動靜を窺ふために外ならない。同志の方々はそれ／＼仲間小者、乃至小商人に身を落して、艱難辛苦をされるのも皆お主のためだ。わしもその中に交つて及ばずながら働いてゐるうちに、天神の茶店でそなたに出逢つたのがわしの因果。大事を抱へた身と知りながら、それを隠して、ついそなたと惡縁を結んでしまつた。

あゝ飛んだことをしたと思つた時は、もう晩い。どうせ未遂げぬ緣と知りながら、これ迄隱してゐたのは重々そなたに申譯ないが、これも前世の約束事と、どうか諦めて貰ひたい。」

「いえ〳〵、それを仰しやつて下さるには及びませぬ」と、おしほは顏に袂を押當てたまゝ、おろ〳〵泣き出してしまつた。「そんな深いお心があるとも知らず、これ迄一緒になれの引取つてくれのと、女氣の一筋に、おせがみ申したのが恥づかしい。どうぞ、どうぞその後を聞かせて下さいませ。」

「最初に嘘を云つたのがわしの因果」と、小平太も顏を背向けながらつゞけた。「その後は打明けるにも明けられず、悪いとは知りながら、だん〳〵悪緣を重ねてゐるうちに、いよ〳〵吉良邸へ乘り込む日が來てしまつた。」

「え、それは何日のことで御座んすえ？」と、おしほは思はず顏を上げた。

「來る十四日、明くればもう明日の夜に迫つてゐるのだ。」

「それでは明日の晩吉良邸へ乘り込んだら、あなたはもうそれ限りお歸りにはなれませぬか。」

「うむ、一黨殘らず死ぬ覺悟で乘り込むのだ。たとひその場で討死せいでも、天下の御法に背いて高家へ斬り込む以上、所詮生きては還られぬ。だがな」と、小平太は急に聲を落してさゝやいた。「そなたの思はくも面目ないが、どうもわしは未練があつて、この期に及んでまだ死ぬ決心が着かぬ。わしの死んだ後で、お前が何うして暮すだらう、何うしてその日を送るだらうと思ふと、いくら考へ直して見ても、そなたを一人殘してはどうも死に切れない。で、濟まぬことぢやが、お主のためには代へられぬ、いつそお前を手に懸けて――」

「えゝツ！」

「お前は思ひ違ひをしたやうぢやが、いつそお前を手に懸けて置いて、その足でお供に立たうと、寢てゐるのを幸ひ、そつと刀に手を懸けた處をお前に眼を覺されたのぢや。」

「まあ！」と云つたまゝ、おしほは俯向いて考へ込んでしまつた。が、やゝあつて、思ひ入つたやうにむつくり顏を上げた。「あなたの御心はよう分りました。だが、何故さうならさうと譯を聞かせて置いてから、手に懸けようとはして下さらぬ。身分こそ卑しけれ、わたしも淺野家の祿を喰んだものの娘で御座んす。父はあの通りの病身な上に、そんな企てが皆樣方の中にあるとも知らず死んで行きました。私どもは女子のこと、そんな話を聞かしてくれる人もなければ、知りもせず、これ迄は夢中で暮して來たやうなものゝ、知らぬうちは兎もあれ、この上あなたのお邪魔になつては濟みませぬ。わたしは覺悟で

極めました！」
「なに、覺悟を極めたとは？」と、小平太はうろたへ氣味に聞き返した。
「はい、どうせあなたと別れては、誰一人たよるものもないわたしの身、後に殘つて、一人で生きて行かうとは思ひませぬ。何卒わたしを手に懸けて置いて、首尾よう敵討のお供をして下さりませ。」
かう云つて、おしほは男の前へ身體を突き附けるやうにした。
「さ、その刀で一思ひに殺して下されませ。それ程わたしの身を思うて下さるあなたのお手に懸つて死ぬのは、わたしも本望で御座んすわいな。」
「ま、待て、待てと云つたら、少し待つてくれ！」と、小平太はすつかり周章てゝしまつた。「さう一概に云はれても、わしにはお前を手に懸けることは出來さうもないわい。」
「え、何と云はしやんす？　そんならわたし故に未練が出るから殺しに來たと仰しやつたは、ありやお前本氣では御座りませぬかえ。」
「いゝや、本氣ちや、本氣には相違ないが、殺せと云はれて、現在かはいゝ女房、それも肚に子さへ宿つたといふものを、さうやみ／＼と手に懸けられるものでない。うゝむ、待て、わしは一人で行くと覺悟をした！　お前はどうか後に殘つて、氣の毒ちやが、その子を育てゝ行つてくれ。」
子どものことを云はれて、おしほは思はず帶の所へ手を遣つて、じつと頸垂れたまゝ考へ込んでしまつた。
「それにわしの死んだ後で、たとひ忠義の士よ、お主のために命を捨てた侍よと、世に持囃される身になつても、わしの身寄りの者が誰一人それを聞いてゐてくれるものがないかと思へば、何となく寂淋しい氣もする。なに、わしの兄はあつても、あれはもうわしの身寄りではない。身寄りと云つては、お前一人だ。そのお前が後に殘つて、忠義の侍よ、あれを見よと、わしが世間から囃されるのを聞いてゐてくれたら、同じ死ぬにも張合があるといふもの。わしは思ひ直した。どうかわしの云ふことを聞いて、後に生き殘つてくれ！」
おしほは矢つ張り俯向いたまゝ、何とも云はなかつた。小平太は氣を揉んで、
「な、わしの云ふことは分つたらうな？　分つたら、どうか得心して、わしの云ふことを訊いてくれ、な、な！」と、女の背に手を懸けながら繰返した。
「さうあなたのお覺悟が附けば」と、おしほはやう／＼顔を上げた、「成程、わたしは後に殘つて、あなたの武名が上るのを蔭ながら見させていたゞきませう。まだ海のものとも山のものとも分りませぬが、

もしお肚の嬰兒が無事に生れましたら、立派にあなたの跡目を立てさせます。どうぞそれだけは安心して、後へ心を殘さぬやうに、屑ようお主の敵を討つて下さいませ。」

「さうか、それでやつとわしも安心した」と、小平太は本當に安心したやうに云つた。「なに、妻子を後に殘して行くものは、わしばかりでない、同志の中には幾許もある。わしだけが妻子に心を惹かされたとあつては、同志の前へも面目ない。たゞお前をこれ迄内密にして置いたのが氣の毒ぢやが、なに、それもわしは決心した。明日にもお頭大石内藏助樣のお目にかゝつて、お前のことを包まず申上げて置くつもりだ。さうすれば、お前は天下晴れてわしの女房、誰に遠慮も氣兼ねもないといふものだからね。たゞどうもこれ迄一同の前に包んで置いたのが好らないが、なに、かうなれば、そんな事に遠慮も要るまい。わしはさうすることに決心したよ。」

「さうして下されば、わたしもどんなに嬉しいか知れませぬ」と、おしほも心から嬉しさうにつこりした。

かうして二人は夜の明けるまで互に盡きぬ思ひを語り明した。そして、夜の白々明けを待つて、「もう二度とは顏を見せないぞ」と云ひ置いたまゝ、小平太は思ひ切つて、袂を振り切るやうに、その長屋を出てしまつた。

十一

小平太が林町の宿へ歸つて來た時は、まだ夜が明け放れたばかりであつた。勘平は一人起き出して、雨戸を繰つてゐた。そして、小平太の顏を見ると、

「おゝ毛利か、歸つて來たな」と、いつものやうに聲を懸けた。

「いや、昨夜は御心配をかけて濟まなかつた。」

「なに、別段心配はせんがね、たゞ時日が迫つてゐるので、何か又異變でも生じた時、君が居合せないために、後で臍を噬むやうなことがあつてはならぬと、たゞそれだけを案じたよ。」

「有難う、母が又癪を起してね、まあ、これが最後だと思つて、終宵附いてゐて看護して來たよ。」

「で、別に大したことはないのか。」

「いや、いつもの持病だ。氣がゝりなことはないさ」と云ひながら小平太は極りの悪さうに、こそ〳〵と自分の居間へ這入つた。

同志から疑ひの眼で見られるのも辛いが、それよりも、この期に及んでなほその前を繕ふために、同志を欺かねばならぬといふことが、小平太には如何にも心苦しかつた。さうだ、これはどうしても頭領に届け出る外はない。一刻も早く届け出でて、その御裁可を得て置く。

尤も、こんな事まで太夫の耳に入れるのは、如何とも思はれないではないが、たとひ女には關係しても、小山田などと一つでない證據を見せるためには、思ひ切つて何も彼も白狀してしまふ外ない。さうすれば、俺もいよ〳〵後へは退かれなくなる道理だ！ たゞこんな事を太夫に申入れるには、誰か人を以てするのが本當かも知れないが、差當つてそれを打明けるのに恰好な相手も同志の中には見當らない。なに、構ふものか、場合が場合だ、面押拭つて自分で申上げることにしよう。さう決心すると共に、彼はその日の晝過ぎから、一寸石町まで伺候して來ると同宿の二人に斷つて、ぶらりと表へ出た。

急ぎ足に小山屋の隱宅まで來て見ると、頭領大石は今國元へ送る書面を認めてゐられるといふので、すぐには面會が出來なかつた。同じ宿に泊つてゐる潮田又之丞、近松勘六、菅谷半之丞、早水藤左衞門などといふ連中は、一室置いた次の間に集まつて、上の間に氣を兼ねながらも、何やら面白さうに談話をしてゐた。時にはわれを忘れて大きな聲も出した。小平太はその中に加はつたやうなものゝ、他の連中は皆百五十石、二百石取りの上士ばかりで、三村治郎左衞門を除いては、元の身分が違ふから、何となく話しもそぐはないやうな氣がして、默つて隅の方に控へてゐた。同志は「もつとこちらへ出られよ」と勸めてくれたが、遠慮して側へ寄らなかつた。次郎左衞門はもとく士分とも云はれぬ小身ものだけに、自分もそのつもりで、始終立つたり坐つたりしながら、忠實に一同の用を達してゐた。

内藏助の書いてゐる書面といふのは、赤穗の元淺野家菩提所花岳寺の住職恩光、同新濱正福寺の住職良雪、自家の菩提所周世村の神護寺住職の三人に宛てたもので、自分が江戸へ下つてからの一黨の擧動を報じて、いよ〳〵擧の日の迫つたことを告げた上、

「此度申合せ候者共四十八人にて、斯樣に志を合せ申す儀も、冷光院殿この上の御外聞と存ずる事に候。死後御檢分のため遺し置候口上書一通寫し進じ候。何れも忠信の者共に候間、御廻向をも被レ成可レ被レ下候。其場にて生殘り候者共、定而引出され御詮れ御仕置にも可レ被ニ仰附一勿論其段人々覺悟の事に候。可ニ御心易一候云々」と書いてあつた。死後御檢分のため遺し置く口上書とは、二日に深川八幡前で認めた仇討の宣言書と起請文のことで、その中には毛利小平太の名も歴然として記載されてあること云ふ迄もない。なほ内藏助はそれに次いで、己が妻子のことにも云ひ及んで、

「將又拙者妻事、京より離別仕り緣者方へ返し申候。倅、娘儀如何樣に罷成り候とも夫迄の事に候」といひ、更に平生方外の友として、その啓狀を受けた良雪に對しては、

「良雪樣、去年以來の御物語、失念仕レ不、日々存じ出し、此度當然

の覺悟に罷成り忝き次第に御座候。日來御心易得御意候各々樣故、別而御殘多く、御暇乞旁如此御座候、恐惶謹言」と結んでゐる。で、それを書いてしまふと、若黨室井左六、加瀬村幸七の兩人を傍へ喚んだ。かねてその旨吩咐けられてゐたので、兩人とも旅支度をして脚絆まで穿いてゐたこととて、その書狀を受取るなり、一同に暇乞ひして、涙を拭き〳〵出て行つた。

で、この隙間に太夫に會つてと、小平太は腰まで上げたが、吉田忠左衞門が來て、何やら太夫と打合せをしてゐると聞いて、又その腰を卸してしまつた。そして、二たび默つて諸士の話しに耳を傾けた。

「今頃から出掛けて、あの二人は日のあるうちに何處まで延しますかな」と、一人が云つた。

「さ、脚の早い者とて、六郷までは參りませうか。今夜は川崎泊りですよ。」

「日の短い頃ですからな」と、又一人がそれに應へた。「それにしても、あの主思ひな二人の忠節といひ、それを出して遣られる太夫のお心の中、昔の鬼王、團三が故事も想ひ出されて、拙者は思はず貰ひ泣きをしました。」

「左樣々々。同じ大石殿の家來の中にも、瀬尾孫左衞門のやうな人非人もあれば、又あんな忠義なものもある。眞逆の場合になつて、始めて人の心は分るもので御座るな」

こんな話しを聞いてゐる間に、小平太は太夫に聞いて貰はうとした自分の用事が取るに足らないばかりでなく、何だか滑稽のやうにも思はれて來た。自分としては一生懸命だが、人が聞けば、何と思つて今頃そんな事を云ひ出すかと、頭から一笑に附せられるかも知れない。さう思ふと、彼は自分が何のために遣つて來て、何のためにかうして待つてゐるのか分らなくなつた。それに、忠左衞門の用談は餘程大切なことと見えて、何時まで待つても果てさうにない。彼はだん〳〵氣をもぢ〳〵し始めた。

「時に太夫は京師を出發される前に妻子を離別して來られたと承はるが」と、一人が又云ひ出した。「後々のことを思へば、それも分別ある仕方と申すもの、近松どの、貴殿はいかゞなされた？」

「妻子のことはとんと忘れてゐ申した」と、勘六はむつつり口を噤んだ。「なに、成るやうに成る分のこと、そこ迄は考へてゐられませぬわい。」

「拙者は離緣狀だけは渡して參りました。しかし男子の相續人とてはなし、渡さぬかとて、女子どもにはお咎めも御座りますまい。」

「拙者も御同樣。」

「拙者も……」

が、こんな話しになると、さすが死を決した面々もだん〱悒鬱になつて、しまひには皆默つてしまつた。聞いてゐる小平太には、いよいよ自分の用事が滑稽に見えて來た。

「他人は皆ある妻子まで離別して、出かけて來てゐる。それだのに、自分は今生死の境に立つて、新に妻を迎へたと、そんな事がどうしてお頭の耳に入れられよう？ 馬鹿な！」

さう思ふと共に、彼は急に身繕ひして、

「誠に長座をして失禮いたしました」と、諸士に一禮して立ち上つた。

「おゝ小平太どの、お歸りか。何か太夫に火急な用事でもあつたのでは御座らぬか。お急ぎなら、皆々からお取次ぎいたさうか」と、口々に云つてくれた。が、そんな明らさまに、他人に云はれるやうな用事ではない。

「いや、有難うは御座りますが、さしたる事でも御座りませぬ。折もあらば、又重ねて參上しまして」と云ひ捨てたまゝ、そこ〱にその邸宅を出てしまつた。

彼は眞直に林町の宿へ戻つて來た。そして、一間に閉ぢ籠つたまま、誰とも顔を合せないやうにしてゐた。彼としては、何よりもおしほにした約束を果さなかつたことが氣に懸つた。かうなれば、あの女はもう自分の死後も自分の妻と名告ることは出來ない。妻も子も永遠に日蔭の身である。尤も、同志の士は皆妻子を離別して來たといふが、それとこれとは話が違ふ。あの女は一生已れを扶助してくれる筈の良人を失つた上に、しかもその良人を誰と名指すことも出來ない。そして、その名指されぬ良人の子を繊弱い女手一つで育てゝ行かなければならない――これから先永い〱一生の間！ あの女としては、そんな思ひをして生きて行くよりも、自分の妻として、公然お上のお咎めに逢ひたかつたかも知れない。お咎めに逢つて、もしお仕置になるものならなつて死にたかつたかも知れない。それを知りながら、折角石町まで出掛けて行つて、何にも云はずに還つて來た自分は一體何うしたと云ふのだらう？

「何うかしたら」と、彼は又一人で考へつゞけた。「俺は太夫にそんな内情まで打明けるのが恐ろしかつたのではないか。そんな内情まで打明ければ、俺は義理にも太夫に背くことが出來なくなる。勿論、俺は太夫を裏切るやうな氣はない。氣はないが、なほそこに一分の餘裕を存して置くために、わざと太夫に逢はずに歸つて來たのではあるまいか。考へて見れば、阿兄新左衞門とのいきさつを同宿の安兵衞に打明けようとして、とう〱打明けずにしまつたのもそれだ。打明けずにさへ置けば、何時でも兄とした約束を反故にすることが出來るといふ

いゝゆとりがある。不埒でも狡猾いのでもない、俺はたゞそのいゝゆとりが欲しかつたのだ。今日でももし太夫に會つて、何日ぞやのやうな優しい言葉でも懸けられやうものなら、俺はすぐにもこの人のために死にたくなる。それが怖ろしかつたのだ！」

　彼はもうそんな風にして自分の心を見詰めるに堪へられなかつた。で、夜はまだ早いが、蒲團を敷いて、一人でごろりと横になつた。が、どうしても眼瞼が合はないで、とう／＼まんじりともせずに一夜を明した。

十二

　いよ／＼十二月十四日、吉良邸討入の當日とはなつた。その日は朝から霏々として雪が降つてゐた。月こそ變れ、先君内匠頭の命日である上に、今生の名殘りと云ふので、大石内藏助を始め十餘名の同志は、かねての牒合せに從つて、高輪泉岳寺にある先君の墓碣に參拜した。堀部安兵衞も同宿の毛利小平太、横川勘平を代表して、その席に列なつた。で、一通り讀經と燒香が濟んだ後、白銀三枚を包んで寺僧に致して、一同別席でお齋に附いた。それから暫時人拂ひをした上、その席上で内藏助から最後の打合せがあつた。そして、後刻を約して散會になつた。

　安兵衞は八つ前に宿へ戻つて來た。すぐに小平太と勘平の二人を前へ喚んで、今日の次第を物語つた上、「討入の手配はかねて覺書によつて銘々に傳へられた通りで御座る。一同は今夜丑の上刻までに、この宿と、本所三つ目杉野十兵次どのの借宅と、前原伊助神崎兩人の店と、の三箇所へ集合することになつてゐるから、その心得でゐて貰ひたい。それ迄は格別用事も御座らぬによつて、用の殘つてゐる方は用濟しに出られるのも御勝手だが、當家は一黨の集合所になつてゐることでもあり、暮晩くとも子の刻までにはこゝへ戻つて來てゐるやうにして貰ひたい。拙者はこれからこの旨を傳へるために、兩國米澤町の實父の宅まで參るが、約束の刻限までには必ず戻つて來るから」と云ひ置いたまゝ、再び出て行つた。

　その後で、勘平と小平太とはしばらく顔を突合せてゐた。小平太は、何よりもかうして同志の者と向ひ合つて、落着かぬのに落着いた顔をしてゐるのが辛かつた。時刻は一分きざみに刻々と移つて行く。いつそ早く定めの刻限が來てくれたらとも思つて見た。さうしたら、この苦しみから免れられるかも知れない。その刻限が來るのは恐ろしい。しかしそれを待つてゐるのは一層怖ろしい！　そんな事を考へてゐるうちに、勘平は何と思つたのか、小平太に向つて、

「おい、今日はどうして出掛けないのだ？」と云ひ出した。「俺はこち

らに緣邊もなし、訪ねてやる知人とてもない。ま、留守は俺がしてゐるから、今夜が最後だ、何方へなりとも行つて來られい。」

小平太はその言葉に救はれたやうな氣がした。で、考へる間もなく、

「さうか。では、氣の毒ぢやが、何分賴むよ」と云つたきゝ、そはそはと宿を出てしまつた。

が、出るには出ても、小平太には別段何處へ行く宛もなかつた。おしほとはもう昨日の朝「二度とは會はんぞ！」と云ひ置いて別れて來た。それに、あの女と交した約束も果さないで、今更逢ひに行かれるものでない。さうは云ふものゝ、毎もの癖か、足はおのづと柳島の方角へ向いてゐた。が、氣が附くと、彈かれたやうに方向を轉じて、わざと向島の土手へ出た。それから渡船を待ち合せて、待乳山の下へ渡つた時は、もう日もとつぷりと暮れてゐた。彼は先を爭つて上る合客の後から、のつそり船着場を上つて行きながら、何のためにかうして雪の降る中を宛もなしに歩いてゐるのか、自分でもよく分らなかつた。

「さうだ」と、彼は河岸の上に立つて、眞黑な水の面を見返りながら考へた、「俺はまだ死ぬ覺悟が着いてゐないのだ！　着いてゐなければこそ、かうして亡者のやうにふら〳〵歩き廻つてゐるのだ。だが、死ぬ覺悟をするために、俺は何れだけ苦しんで來たらう？　成程、俺は命が惜しい！　生れついての卑怯者かも知れない、臆病者かも知れない。だが、命が惜しいからと云つて、俺はまだ一度も命を助からうとして藻搔いた覺えはない。たゞ何うしたら命が捨てられるか、安心して死んで行かれるかと、たゞそればかりを今日迄力めて來た。それがためには、俺はかはいゝ女房をも殺さうとした。阿兄に大事を打明けたのも、皆はそのためだ。それでゐながら、俺にはまだ死ぬ覺悟が着かない——この期に及んで、この土壇場に臨んで！　俺は一體何うしたらいゝのだ？」

何うしたらいゝかは、彼にも勿論分らう筈がなかつた。彼は又ふらふらと歩き出した。

「他の連中は皆命を輕い程にも思つてゐないらしい。俺は何うしたらこの未練らしい執着の根を絕つて、あゝいふ風になれるのだ？」

さう思ひながら、彼はさすがに人通りの絕れた日本堤の上を歩いてゐた。後から「ほい、ほいッ！」と威勢のいゝ懸聲をしながら、桐油をかけた四つ手駕が一丁側を摺り拔けて行く。吉原の情婦にでも逢ひに行く嫖客を乘せて行くものらしい。が、彼はそんな事にも氣が附かなかつた。賑やかな廓の灯を橫目に見ながら、そのまゝ暗い土手の上を歩きつゞけた。そして、だん〳〵歩いてゐるうちに、とう〳〵坂本

から上野の山下へ出てしまつた。

山下へ出た時は、手も足も寒さに凍えて千斷れさうな氣がしたので、とある居酒屋が見附かつたのを幸ひ、つとその暖簾をくゞつた。有合せの鍋物を誂へて、手酌でちびり〳〵飲み出したが、いつもの少量にも似ず、いくら飲んでも思ふやうに醉はなかつた。それでも彼は、自分で自分を忘れようとでもしてゐるやうに、後から〳〵と銚子を重ねた。

一刻ばかりして、彼がその居酒屋を出た時は、もう子の刻に近かつた。が、彼はすぐに兩國の方へ引返さうとはしないで、何と思つたか、元來た坂本の道を眞直に千住の大橋に向つて歩き出した。その時はもう雪も止んで、十四日の月が皎々として中天に懸つてゐた。通りの町家は皆寢鎭まつてゐた。前を見ても後を見ても、人通りはない。自分では醉はぬつもりでも、脚はかなりふら〳〵してゐた。彼はその千鳥足を踏み締めながら、狂人のやうに、どん〳〵雪を蹴つて駈け出した。

大橋の上まで來た時、小平太ははつとしたやうに吾に返つた。

「一體、俺は何處まで行く氣だらう？　それよりも、今はもう何刻だらう？」

彼は橋の上に立ち停つたまゝ、頭の上の北斗星を見遣つた。

「さうだ、丑の上刻！　それ迄に宿へ歸らなければ、もう間に合はない！」

彼は背後から鉞で殴打されたやうに躍り上つた。

「もう何刻だか知らないが、千住の大橋から兩國までは一里あまり、丑の刻までには行き着かれさうにもない。俺はとう〳〵時刻を逸した。俺は同盟から外れてしまつた。俺は人外に墮ちた、蛆蟲同樣になつてしまつた。もう明日からは人にも顏は合はされない。同志は今頃俺を何と云つてるだらう、何と云つて罵つてるだらう？　安兵衞は？　勘平は？」

彼はよろ〳〵と橋の欄干に凭れかゝつて、兩手に頭髮の毛を引攫んだまゝ、「さうだ、俺は時刻に後れると知りながら、わざと後れるやうに仕懸けたのだ、わざとこんな所へ來てしまつたのだ。何といふ俺は卑怯者だ、臆病者だ！　生れついての臆病が最後にとう〳〵俺に打克つたのだ！」と呟いた。そして、さう呟きながら、だん〳〵欄干の中に顏を埋めてしまつた。

が、しばらくして、彼は又むつくり顏を上げた。月は依然として照つてゐた。が、その月も彼の眼には入らなかつた。

「だが、俺はそんなに臆病者か知ら？」と、彼はぼんやり四邊を見廻しながら呟いた。「俺は兎に角萬死を目指して吉良邸へ入り込んだことも

ある。そして、當夜の一番槍にも優る功名ぞと、仲間の者から稱美される程の手柄も立てた。强ひて云へば、今夜の討入も俺の探索のお蔭で極つたとも云はれないことはない。それ程の手柄を立てた俺が、こんな事になつてしまつた。一生世間へ顏出しも出來ない卑怯者になつてしまつた。何故だ？ 何故だか俺にも分らない！

「いや、分らないことはない」と、彼は自分で自分に反抗するやうにつゞけた。「俺にはちやんと分つてゐる。或程、吉良邸へ入り込むといふことは、九死に一生の危險を冒したものかも知れない。が、九死に一生でも、一生だ。十が十の死ではない。そこに一つだけは、兎に角、生きられるかも知れないといふ宛がある。俺はその一つを宛にして吉良邸へ入り込んだのだ。あの場合、俺は決して本當に死ぬ覺悟なぞしてはゐなかつたのだ。けれども、今夜吉良邸へ斬り込んだら、それこそ本當に十が十の死だ！ 公儀の手に召捕られて、お仕置場へ引出されたら、どんな事があつても免れやうはない。牛や馬のやうに、首玉へ繩を結へ着けて置いて、むざ〳〵と屠られるのだ。それはあまりに怖ろしい。あまりに人間性を蔑ろにしたものだ。そんな怖ろしい犧牲を主君は家來に要求することの出來るものだらうか。家來に扶持を與へて置けば、その家來からそんな人間性を奪ふやうな犧牲を要求してもいゝのか。なに、殿の御馬前に討死せよと云ふのなら、俺は立派に死んで見せる。けれども、けれども、今夜吉良邸へ討入ることは、俺には出來ない、俺にはどうしても出來ない！

「なに、他の連中は皆忠義の士と云はれたさに、名といふ餌に釣られて、眼を瞑つて死の關門へ飛び込まうとしてゐるのだ。眼を瞑つて死の關門へ飛ぶ込むことは易い。難かしいのは、それよりも死の關門に到るまでの道程だ。死の關門を正視しながら、眼を開いてその中へ飛び込むだけの用意をすることだ。俺はこれ迄そのためにあらゆる苦しみを嘗めて來た。死に到る道程の全部を歩いて來た！ 全部を經驗して來た。それは同志の中の何人も知らないやうな焦熱地獄の苦しみであつた。おゝ、俺はそれだけでも許さるべきではないか。他人は何とも云はば云へ、俺は俺自身に對して面目が立つのではあるまいか。」

かう考へて來た時、彼にはそれが動かすべからざる眞理のやうな氣がして、やゝ心も落着いて來た。で、霜の積つた街路の上をじつと見詰めてゐたが、何と思つたか、又ふら〳〵と立つて歩き出した。

「考へて見れば」と、彼は又歩きながら呟いた。「横川も云つたやうに、頭領大石が討入の日をこんなに延び〳〵にされたのも好くない。俺が死の苦しみを日々に嘗めて來たのも、そのためだ。最後にこんな事になつてしまつたのも、そのためだと云はば云はれないこともない！ 若し仇討がこの春決行されたら、百二十餘名の同志があつた筈

た。七十名に餘る落伍者の中には、俺と同じやうに苦しんだものもあつたに相違ない。それを一概に不忠呼はりするのは當を得ない。」

　彼は在來の落伍者のためにも辯ぜずにはゐられなかつた。が、その下から、在來の落伍者と自分とを同じやうに見るといふことが、何となく彼の反感を買つた。

「だが」と、彼は又すぐに考へ直さずにはゐられなかつた。「仇討の連判が百二十餘名に達した時、直ちにそれを決行したら、成程百二十餘名の者が一列に死に就いたかも知れない。百二十餘名は立派だが、その中にはまだ本當に死の覺悟の出來てゐないものもあつたに相違ない。さういふ生半可なものを引連れて、吉良邸へ乘り込むといふことは、仇討の美名の下に、一種の惡事を行ふやうなものではないか。死にたくないものを死なせる——と云ふよりも、仇討に値ひしないものを引率して仇討をするといふことが惡事でなくて何であらう！　よし吉良邸へ乘り込むことは出來ても、それでは御主君冷光院殿の前へは出られまい。そんな者の來ることを御主君は喜ばれないに相違ない。頭領はそこを考へてゐられたのだ。いや、大石殿がそこ迄意識してゐられたかどうかは分らないが、故意にしても偶然にしても、兎に角仇討を延びのびにすることに依つて、さういふ生半可なものをすぐり落された、羊と狼とを選り分けられた。つまり俺もその試練に堪へないで篩ひ落されてしまつたのだ。俺は羊であつた、これ迄の落伍者と同じやうに羊に過ぎなかつたのだ！」

　彼は押潰されたやうに、へたへたと雪の中に倒れてしまつた。

「さうだ、俺は羊だ、羊に過ぎない！　今夜討入つた同志が狼の群であつたのだ。あの連中だとて、俺のやうな苦しみを嘗めなかつたとは、何うして云はれよう？　彼等は能くその試練に堪へて、自分が狼であることを立證したばかりだ。俺は生れながらに實らない羊であつた。そして、永遠に救はれない地獄の鬼となつてしまつた。」

　彼は自分で自分の頭を打つて、雪の中を轉げ廻つた。そして、「羊だ、羊だ！」と叫びながら、身體が痙攣るやうにのたうち廻つた。

「さうだ」と、そのうちに不圖頭を擡げた。「さうだ、まだ晩くはない。これからすぐに駈け着けよう！　吉良邸へ駈け着けて、まだ一隊が引上げないうちであつたら、同志に詫びて、切めて公儀へ召上げられる囚人の中へでも入れて貰はう！」

　さう決心すると共に、彼は立ち上つてよろよろと駈け出した。が、一丁許り駈け出した時、又よろよろと雪の中に倒れてしまつた。そして、もう二度とは立ち上らなかつた。

十三

明くる日は雪晴れのうら〳〵した日和であつた。その日一日中、小平太はどこをどう歩いてゐたのか、人も知らず、恐らく自分でも分らなかつたに相違ない。兎に角、江戸の市中を、喰ふものも喰はず、喪家の狗のやうに、雪溶けの泥濘を蹴立てゝうろつき廻つてゐた。そして、その暮方に、憔悴し切つた顔をして、ぼんやり兩國の橋の袂へ出て來た。

見ると、橋の袂の廣場に人簇りがしてゐる。怪しげな瓦版賣りが眞中に立つて、何やら大聲に呶鳴つてゐるのだ。――

「さあ〳〵、これは開闢以來の大仇討、昨夜本所松坂町吉良上野介様の邸へ討入つた淺野浪士の一黨四十七人、主の仇の首級を揚げて、今朝高輪の泉岳寺へ引上げたばかり、大評判の大仇討！ 忠義の侍四十七人の名前から年齢まで、すつかり分つて、たゞの三文！ えゝ、大評判の大仇討、もうこれだけしかない、賣り切れぬうちにお早く、お早く！」

「吉良………淺野浪士！………」といふ聲が耳に入つた時、小平太は思はず足を留めた。そして、群衆の頭越しに、喚賣りの男の顔をじつと穴の開く程見詰めてゐたが、何と思つたか人込みを分けて、つかつかと前へ進み出で、

「おい呼賣り、一枚呉れ！」と喚んだ。

「へえ有難うさま、一枚！ もう後は五六枚しかありませんよ。」

彼は手に掴んだ小錢を渡して、それを受取るなり、群衆の眼を恐れるやうに、こそ〳〵と薄暗い横丁へ這入つて行つた。ひろげて見ると、成程大石内藏助をはじめ寺坂吉右衛門に到るまで――中には勿論間違つたのもあるが――同志の名をずらりと並べて、この方々は、去年三月殿中に於て高家の筆頭吉良上野介に斫りつけ、即日切腹、お家斷絶となつた主君淺野内匠頭の泉下の妄執を晴さんために、昨夜吉良邸に乘込んで、主君の仇上野介の首級を揚げ、今朝泉岳寺へ引取つて、公儀の大命を待つてゐる。お上では只今老中方御評議の眞最中だと、事の概略が載せてある。

「さては首尾よく仇を討たれたか………そして、豫定の如く泉岳寺へ………」

彼はその華々しい進退行動を目の當り見るやうな氣がした。堀部安兵衛武庸の名も出てゐる、横川勘平宗房の名も出てゐる。が、毛利小平太の名は？ 勿論、そこに出てゐよう筈はない。彼は義士達の明るい功名を想ひ遣るにつけて、いよ〳〵自分の眼の前が暗くなるやうな氣がした。

「何うしよう、俺は何うしよう？」

かう呟きながら、彼は手を負つた獣のやうに走り出した。が、何處

へ行く宛もない。兩國の橋を渡れば、もうぢきそこが松坂町の吉良邸である。彼はそこへ近づくことを一番恐れてゐる癖に、矢つ張りこゝへ來てしまつた。が、今頃そこへ行つて何にならう？

「あゝ、俺はもう何處へも行く所がない！」

勿論、彼にはまだおしほの家があつた。が、かうなつた上は、もうおしほにも逢はれる身ではない。今頃顏を見せたら、あの女がどんなに落膽して、どんなに泣くことであらう！　事に據つたら、自分を輕蔑するあまり、物をも云はずに突き出してしまふかも知れない。

で、女にも逢はれないとすれば、小平太は一體どこへ行くのだ？

逢はれないゝゝと思ひながら、彼の足は矢つ張り柳島の方角へ向つてゐた。あれだけ近寄るのを恐れてゐた兩國の橋を渡つたのも、考へて見れば、矢つ張りおしほに逢ひたさの一念からであつた。

彼は何時の間にか妙見堂の裏手まで來てゐた。雪明りに透しておしほの家が眼にとまつた時、彼はぎくりとしたやうに足を駐めた。そして、ためらふやうに窓の明りを眺めてゐたが、急に足を旋らして二歩三歩歸りかけた。が、すぐに又踏みとゞまつて、

「さうだ、これを最後に逢ひに來たのだ。せめて餘所ながらでも顏を見て行かう」と呟いた。そして、考へ直したやうに、又女の家に近づいて行つた。が、すぐに戸口を這入らうとはしないで、積つた雪を踏んで裏手の方へ廻つて見た。おしほの家の裏手には、長屋中で使ふやうになつてゐる釣瓶井戸があつた。小平太はその側に立つて、月影を避けるやうにしながら、じつと家の中に耳を澄した。が、家の中は森として物音一つしない。そのうちに、窓の障子に女の影が射して、それが消えたかと思ふと、「ちーん！」と鈴の音が聞えて來た。

「さうだ、今日はおしほの母の三七日だ！　佛壇にお灯でも上げてゐるのだな。」

が、おしほは下に坐つたまゝ、なかゝゝ立ち上らない。小平太は窓の側へ寄つて覗いて見ようかとも思つたが、長屋の者が水汲みにでも出て、見附けられたらといふやうな氣がして、じつと我慢して立つてゐた。が、たまらなくなつて、一歩づゝだんゝゝ裏の戸口に近づいた。そして、そつと戸の隙間から覗いて見ようとした時、不意におほの立ち上る氣はひがした。どうもこちらへ近づいて來るらしい。小平太は思はず一歩後へ退つたが、もう晩かつた。女は何の氣もなくがらりと裏の戸を開けたが、思はぬ人の影に、「あつ！」と吃驚したやうた聲を上げた。それでも氣丈な女だけに、手燭を上げて、おづゝゝ相手の顏を見遣つたが、

「まあ、旦那でしたか。こんな所に立つていらして、本當に吃驚しました！」と云ひ出した。「一體何うなすつたので御座います？」

小平太は棒立ちになつたまゝ返辭もしなければ、又動かうともしなかつた。

「今頃お出でにならうとは存じませんので、一人で佛壇にお燈明を上げてゐた處でした。さあ、何卒こちらへお這入り下さいませ。」

から云ひながら、おしほは先に立つて家の中へ這入らうとした。

「這入つてもいゝね？」と、小平太は始めて口を利いた。

「まあ、何を仰しやいますことやら、あなたのお家では御座りませぬか」と、おしほは手を取るやうにして男を座敷へ上げた。それから行燈を持ち出して、小平太の前に手をつかへながら、改めて挨拶をした。「もう二度とはお目に懸れぬやうに仰しやつてでしたのに、今頃お出で遊ばしたのは、あゝ分つた、お話しのことは又候日延べになつたので御座りませうね？」

小平太は苦しさうに、たゞ「いゝや」とばかり頭振りを掉つて見せた。

「へえ？　日延べにはならぬ。では、もう討入は濟みましたかえ」と、おしほは思はず膝を乘り出してたづねた。

小平太は又苦しげに點頭いて見せた。

「討入は濟んだ！　それに今頃こゝへお出でになつたのは？」と、おしほはいよ／＼合點の行かなさうに、男を見返した。

「おしほ、もう何にも云つてくれるな」と、小平太は相手の顏を見ぬやうに、目眩しさうに眼を反しながら云つた。「わしは、わしは討入の數に漏れたのだ！」

「えゝツ！」と、おしほは思はず身をのけ反したが、又氣を取り直したやうに、男の前へ詰め寄りながら、「討入の數に漏れた……と仰しやるからには、矢つ張りまだわたしに未練が殘つて……？」

小平太は矢つ張り押默つたまゝ俯向いてゐた。

おしほは男の膝に取り縋いて、「わたしいはれに、大切の場合にあなたに後れを取らしたとあつては……わたしは生きてゐる瀬がない………あの時も早く死なうと思つたに、あなたの言葉に絆されて、生き殘つたがわしや口惜しい！　何うしよう、わしや何うしよう？」と、おろ／＼泣き出してしまつた。

「いや、さうでない、さうでない！」と、小平太はさも苦しさうに顏面神經を引釣らせながら、やう／＼口を切つた。「この前來た時、お前に未練があつて死に切れないやうに云つたのは、ありやわしの嘘ぢや。わしは矢つ張り自分の命が惜しかつたのだ。命惜しさに、どうしても死ぬ覺悟が出來なかつたのだ。おしほ、堪忍してくれ、俺はからいふやくざな臆病者に生れついたのだ！」

おしほは思ひも懸けぬ男の言葉に、たゞもう譯の分らぬやうな顏を

して、相手の顏を見返してゐた。
「たゞ儂はこの臆病な心に打克つて、立派に死んで見せようと、何れだけ心を碎いたことか。お前を手に懸けようとしたのも、そなたに未練があると云ふよりは、せめてお前でも殺したら、もう後へは退かれぬやうになつて、未練なわしの心にもどうぞ死ぬ覺悟が着かうかと、それを恃みにあんな眞似をして見たのだ。が、生れついて臆病なわしには、さあ殺せと身體を突き附けられては、手も下せず、せめて大石殿に二人の仲を打明けて、かう／＼いふ譯だと申上げてしまつたら、その打明けたといふことが力になつて、義理にも後へは退かれまいと、又それを恃みに歸つて行つた。が、明くる日大石殿に逢つて見ると、大事を擧げる前日とて、そんな詰らぬことを云ひ出す暇もなく、すご／＼戻つて來たのが破滅の原因、それからは一層心がぐらついて、昨日の夕方宿を出たきり、宛もなく町中をぶらついてゐる間に、だん／＼約束の刻限を切らして、大事の場合に間に合はず、わしはとう／＼世間へ顏の向けられない身となつてしまつた。おしほ、これを見てくれ、これを！」と云ひながら、袂から先刻兩國の橋の袂で買つた瓦版を取出して渡した。
「そこにもあるやうに、わしを除いた四十七人は立派に上野介の首級を上げて、泉岳寺へ引上げ、お上のお仕置を待つてゐられる。わしはその仲間に外れた。その仲間に外れたばかりでなく、人間の仲間からも外れてしまつた！」
かう云つて、小平太は男泣きにしく／＼泣き出してしまつた。
おしほは渡された紙片をひろげて、行燈の灯影に透して見たが、成程四十七人の名はあつても、小平太の名は出てゐない。彼女はそれを手に持つたまゝ、そこに泣き崩れてゐる小平太の姿と見較べてゐたが、恥も見得も忘れて、心の底を曝け出した男の意氣地なさに、たゞもう胸が迫るばかりで、何とも云ふことが出來ない。怺へに怺へた涙が胸に痞へて、
「ひ、ひ、ひ――ッ！」と、これもその場に泣き伏してしまつた。
小平太はその泣聲にむつくり顏を上げた。そして、しばらく女の打顫ふ胴體を見入つてゐたが、何と思つたか、
「おしほ、さらばぢや！」と云つたまゝ、すつくと立ち上つた。
おしほも吃驚して顏を上げた。
「血相變へて、今頃何處へ行きなさんす？」
「何處へといふ宛もない」と、小平太は立つたまゝ悄然として云つた。「わしはたゞ、餘所ながらでもお前の顏が見たさに、恥を忍んでこゝ迄來たばかりだ。わしはもうお前の良人と呼ばれる値打はない。お前もわしのやうなものと縁を結んだのが因果ぢやと諦めてくれい。か

うしてお前の顔を見たのを切めてもの慰めに、わしはたゞわしの行く所へ行くつもりだ！」

「まあ〱待つて下され」と、おしほは立つて小平太の袖に取縋つた。

「お前がそのやうに云はんすのも尤もぢや。尤もぢやが、わたしはわたしでまだ云ふことがある。まあ〱下に坐て下さんせいなあ。」

云はれるまゝに、小平太は再びなよ〱と下に坐つた。おしほはその膝に取縋つて、涙を持つた眼に下からじつと男の顔を見上げながら、

「今お前は俺のやうなものと縁を結んだのが因果ぢやと云はんしたが、ほんに思へば、因果同志の寄合で御座んすぞえ」と、しんみりと云ひ出した。「どんな男でも良人に持てば、わたしはお前の女房ぢや。お前が卑怯なら、わたしも卑怯、お前が臆病者なら、わたしも臆病者で御座んす。女一人で身は立てられぬ。たとひ世間から笑はれようが、何うせうが、わたしは何處までもお前に隨いて行く……行きますわいなあ。」

二人はいつか一緒に固く手を取合つてゐた。

「わたしはさう云ふ氣ぢや程に、必ず短氣な心を出したり、悒々してわづらはぬやうにして下さんせ。なに、お江戸ばかりに日は照りませぬ。もし世間の笑ひものになつて、こゝで生きて行かれぬといふたら、唐天竺の果までも、一緒に行く氣でをりますわいな。」

「よう云うてくれた、よう云うてくれた！」

小平太は握つた女の手の甲の上に、はら〱と涙を落した。

「それでもまだ笑ふ者があつたら、是非がない、二人で一緒に笑はれませう。何處までも一人の男を守るのが女の道で御座んすぞえ。」

＊　＊　＊　＊

二人はなほ夜を籠めて語り明した。が、その夜のまだ明け切らぬうちに、二人手に手を取つて、日の光を恐れるもののやうに、何處ともなく姿を晦ましてしまつた。

――をはり――

編輯だより

◇巷は政友勝つか、民政勝つかの噂で持切り。我々は緊縮政策を支持すべきか、所謂「積極政策」に味方すべきか、民衆は靜かに我國の前途から大觀し、洞觀すべきだ。

◇何れにしても總ての負擔は政黨がするのでなく我々國民が汗水たらして負擔してゐるのであると云ふことだけは承知していてもらいたい。

◇十月特大號の創作欄にピリニヤーク、森田氏の力篇を得、久しかたぶりの久米氏の小說が登載されたのは嬉しい。それに濱尾、林、横溝三氏の興味ある犯罪小說がもらへたので十月號は趣味津々たるものとなつた。

◇また又我勞働組合運動の更生再建を促すべく加藤、奧村、荒畑氏が示唆多い筆致で執筆した。

◇「日本地理大系」は我社が地理學の根本的革命を企圖し、そして我國に未だ曾つてなき飛行寫眞を完成するため幾多の犧牲を忍び、そして日本寫眞界の最高權威の總動員により て集大成したものだけに近ごろ全集ものゝあまり振はないのにかかはらず全國各家が競ひ購求する。我等も骨おり甲斐のあることを喜んでいる。

◇我國の正確な把握は世界の正しき把握者であり、地理の觀念のないものは總ての方面の優勝者になり得ない。地理に趣味深き民族であり、そして地理に精通する人種こそ世界の優者になり得る。見よ過去に殘されたる歐米列强の事實を。

◇中學、大學を卒業し、實際社會に突入するものは先づ「地理大系」に就け。

◇新興民族の新しき聲としての『現代短歌全集』は各階級より異常の歡迎を受けつゝある本全集は眞に日本民族の純な血液の集成である。

◇「日本文學全集」九月配本は「短歌集」「俳句集」とした。たいへんな骨折りであつた。殊に卷末に附錄とした齊藤茂吉氏の「明治大正短歌史概觀」は三百枚に亘る堂々たる近來の大論文である。この論文だけでも優に一册としての價値がある。

◇『社會科學』九月號出來。三木、靑野兩氏の文學理論のためにかいた論文、大内、矢内原、大森、末川、荒畑、宇野、山田、有澤、石濱、啣峻、河西、嘉治氏等の文獻批評等有益の文字多し。又「自然科學」九月號は「地理研究號」として石橋、小田內、西田、渡邊諸博士等執筆して地理學教授に一革新を促した。

◇九月に入りて鬱陶しく雨ふりつづく。市にあぶれた勞働者の群が明日のパンなきを憤り怨む。

改造定價

册數	定價	郵税
壹册	五拾錢	參錢
半ヶ年	參圓	郵税不要
壹ヶ年	六圓	郵税不要

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す
▲増大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す
▲外國よりの御註文は郵税實費を申受く
▲見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用は一割増の事
▲御拂込は振替によるゝを最も便利とす

昭和四年九月十八日印刷納本
昭和四年十月一日發行

（特價壹圓）
（郵税四錢）

編輯兼發行人　東京市芝區愛宕下町四ノ六　山本三生
印刷人　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一ノ一二
印刷所　秀英舍

發行所　東京芝區愛宕下町四ノ六　改造社
振替東京八四〇二
電話芝(43)一三二一　一三二二　一三二三　一三二四

豫約・一册壹圓五拾錢・一時拂拾七圓

牧水全集（全十二卷）

白熱的歡呼に迎

第四卷 紀行文 （堂々六百六十頁）

山高く水淸き日向の國坪谷の僻村に生れ、自然の懷に抱かれて嬉戯しつつあつた少年牧水は、長じて巷間にあつても自然の懷を戀ふるの情禁じ難く、飄然として家を出でては山川の間に遊ぶを常とした。まことに彼は自然の子であり、彼の物する紀行文は自然の聲であり自然の息である。本卷收むるところ明治四十三年以後の紀行文五十三篇、いづれも天衣無縫の名文であり、黄塵の巷に蟠く者も居ながらにして高嶺の雲の徂徠を仰ぎ、耳には溪川の潺湲の聲を聞くであらう。見よ、現代の西行と呼ばれ芭蕉に比せられしこの自然詩人が飄々乎として旅行く姿のなつかしさを。秋凉の燈下第一の讀物として諸氏の左右に送る。

總內容

第一卷 歌集
第二卷 歌集
第三卷 歌集
第四卷 紀行文
第五卷 紀行文
小說
第六卷 隨筆
小品
第七卷 隨筆

東京・芝・愛宕下町
改造社
振替東京八四〇二番

へられて第二回配本出來（九月配本）

（內容）

眞に天下一品

水守龜之助

（前略）曾て宇野浩二氏も君の如きは歌聖の座に置くべき一人であるといつて推讃の辭を書いたことがある。君の歌については他に多くの語るに適した人があらう。しかし、門外漢たる私も君の歌は無條件で推賞したいと思ふものである。いや、歌のみでなく、君の隨筆、紀行の類は實に天下一品の感がある。些かも美辭麗句を弄せず、絕えて斧鑿の痕なく、一點脂粉の香を止めず、實に淡々たること水の如き中に、無限の味ひを藏するところ正に飛びきり上等の日本酒にでも譬ふべきか、飲み終つて後、眞の味ひを長く舌に覺ゆるが如き類ひである。

かくの如きは、歌者の心境に達し得て、初めてなる天衣無縫の文章であると思ふ。比叡山に登つて醉倒する情景を描ける紀行文の如きは、未だに忘れ難い名文であつた。酒仙にあらずして到底到り能はぬ境地である。（後略）——「東朝報」より——

第一回配本（配本濟）　第三卷　歌集

第三回配本（十月）　第六卷　隨筆小品

第八卷　小品　歌論　歌話

第九卷　雜篇

第十卷　書簡（夫人宛）

第十一卷　書簡

第十二卷　書簡　日記　年譜

特色

一、未發表の作品、少年期の作品等まで完全に網羅した眞の全集である。

一、裝幀の高雅、印刷の鮮明、校正の嚴密、すべて全集中の模範たらむことを期した。

一、口繪として掲ぐる每卷四葉、全卷を通じて四十八葉の寫眞は著者の全生涯を讀者の眼前に展開する。

一、每卷添付の月報は各方面の人々の執筆になり、最も興味の深いものとする。

『現代日本文學全集』(38) 九月配本開始

現代短歌集。現代俳句集

苦心半歳の餘にして成る、この歌壇俳壇の劃期的大鳥瞰圖を見よ！

(卷頭) 明治天皇御製
昭憲皇太后御歌

御歌所長 子爵 入江爲守謹書

(上質紙銅凸別刷十六頁)

■(附錄) 現代歌壇・俳壇諸家照影……(今人はもとより、慘憺たる苦心を重ねて蒐集せし故人の照影を揭ぐ)

「短歌集」百五十二家の作四千七百六十七首

「俳句集」百七十家の作五千七百六十九句

■(附錄) 現代歌壇・俳壇諸家年譜……(歌人・俳人の系統、履歷、事業の一覽表。後世に殘るべき文獻の一)

(附錄) 明治大正短歌史概觀 (明治初頭より現代に至る歌壇の詳細を極めた約三百枚の大論文) 齋藤茂吉

明治大正俳諧史概觀 (現代の「芭蕉」と仰がるゝ長老の含蓄豐かにして明快な俳壇觀察) 高濱虛子

發兌 東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

改造社版

日本地理大系

豫約募集

內容見本

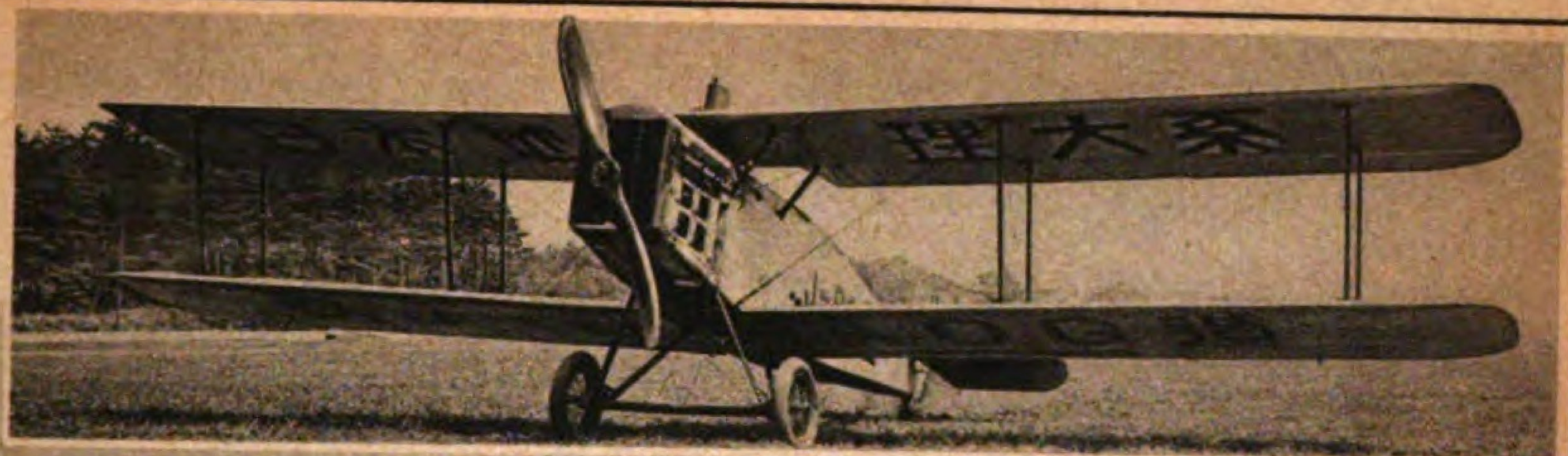


華嚴瀑は中央左方に湖面の一端を現はす迂曲な中禪寺湖の溢波が、圖中僅かにその姿を現はす男體火山より噴出して大谷川の流を堰き止めた所謂華嚴熔岩の末端の斷崖を成す處に懸つたもので　落口の幅は六米餘、直下實に百米、中央以下は霧を散じ雲煙朦朧として谷に渦巻いてゐる。瀑背の斷崖は三段に分れ上部の造瀑岩は柱狀節理を有する複輝石安山岩の緻密岩より成り巖部は前方に突出し中部は外觀粗雜な火山岩屑の集塊狀を呈し幾分後方に嵌入し、又中腹より幾條かの細瀑を生じ、更に下部には相觀多小圓滑なる石英斑岩の大磐石が深瀑壺を擁して構つてゐる。（原木信之學士解說）



宣言

傳統の美、鬱勃新興の生命、此の二つを併せ把握して『新興の日本』は何處へ行くか。人は言ふ、日本は世界の樂園なりと。然しながら單に地上のパラダイスではない。國家としての權威、雄偉なる民族的使命、數千年來連綿たる高貴の民族的血液、及び無垢の國土を有し、學的に藝術的に世界に雄飛しようとして居る。今や我等國民は徒に幸福の山河に抱擁せられ陶然たる時ではない。我等は今や地理的に民族的使命を展開すべき時期に逢着して居る。經濟的に深く內省すべき時運の前に戰つてゐる。我々は祖國の美と力とをじつと凝視すべき時に際會してゐる。この時、我國從來の地理教育は餘りに缺陷が多く、祖國大自然の本體を貫いて內的生命を把握するためには、全然無力である事を痛感する。我等は茲に最新の地理學に立脚し、又最高の藝術的用意を以てこの日本地理大系を諸君の書齋に獻ずるの光榮を謝すると共に、我等は我國の出版業者として此の意義ある國家的事業を遂行し得た事を世界に誇るものである。日本國民は須らく先づ其の國土が何を有するかを知らざるべからず。世界より先づ我國を把握せよ!!



主機「改造」號
三菱式R1—2型



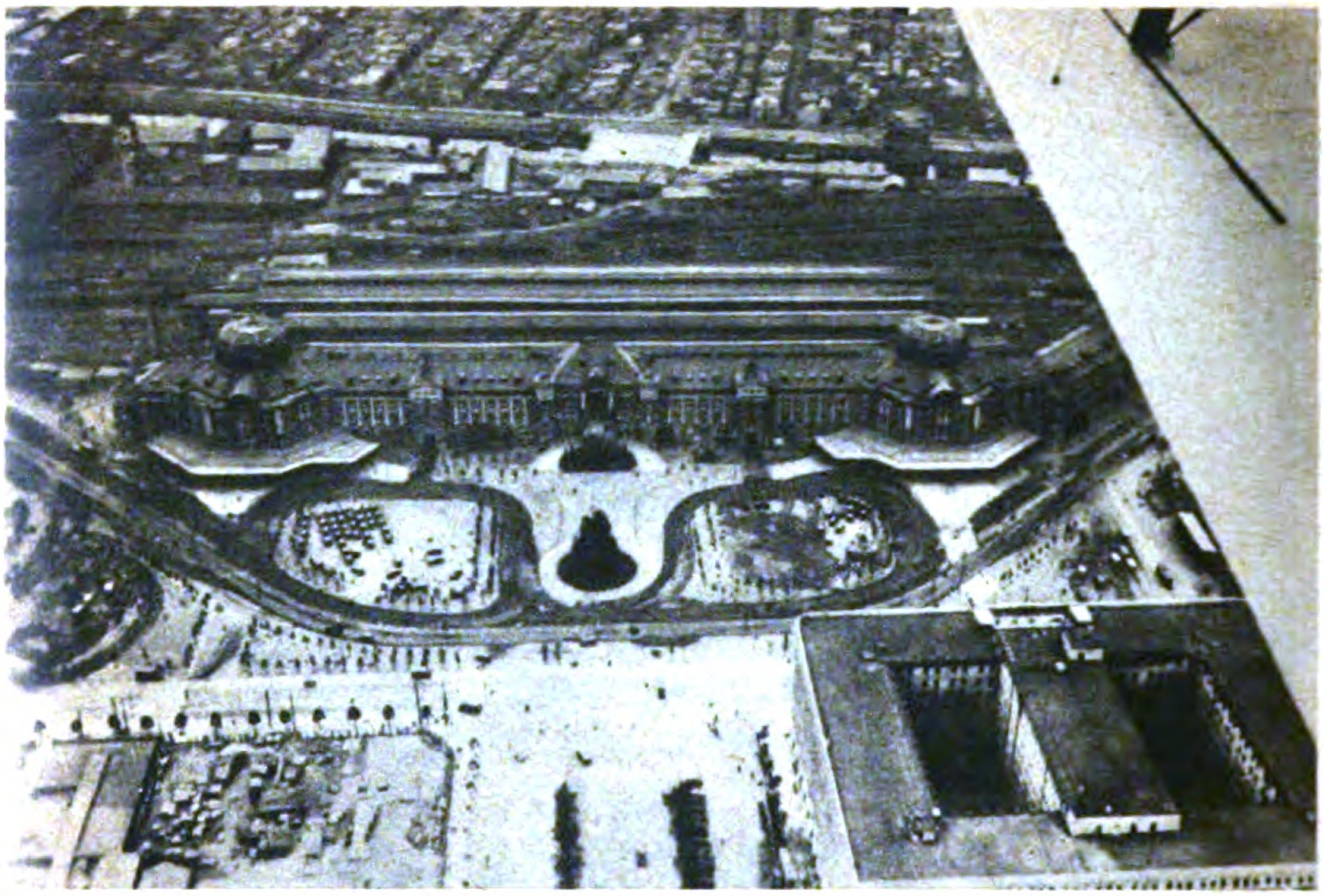
本社機の前にて。向つて右より二人目藤田操縦士、伊藤飛行班長、鈴木寫眞編輯主任、熊川主任飛行士

航空寫眞班特設

寫眞にして地圖を兼ねたる航空寫眞が發明されて以來世界の地理學に大變化が有つた。廣汎なる地形や交通路を記錄し接近し難き危險區域を撮影して軍事、學事上偉大なる効果を遂げた。故に寫眞に據る地理大系に最も重要な役割をもつものは航空寫眞である。本大系は、陸海軍及び民間大新聞社の撮影せる航空寫眞中の粹を擇んで採用した。しかし其等の航空寫眞は目的上地理學的取材として蒐集されて居ないがために、大系編纂上遺憾な點が多かつたので、我社は更に**獨特の航空寫眞**を系統的に統制する必要上、茲に大英斷を以て**改造社航空寫眞班**を特設しその方面の權威で**山階宮殿下**と御緣故深き**御國飛行學校長伊藤酉夫氏**と提携し同氏を航空班長として特に航空寫眞撮影用として新造せる**三菱式R1-2型「改造」號**を主機に、**アブロ式504K型**二機を豫備機とし同校教官にして航空一千時間の記錄を保有する一等飛行士二等航空士**熊川良太郎氏**を主任操縱士に、二等操縱士**藤田武明氏**を豫備操縱員とし**新井康弘氏**を撮影技師として全國の山河都會海岸を上空より撮影する。是れまことに出版界空前の壯擧で他の出版物には絕對に見られない本大系の偉大なる誇りである。近くその**翼に『改造社日本地理大系』**と鮮かに記された**我社の飛行機**が諸君の鄉土を訪問するであらう。その飛行機の訪れに對し色々と諸君の御配慮にあづかることと思ふ。

寫眞班の大陣容

日本は世界に矜る「美」の國である、專門の地理學者が提出した



帝都の玄關、東京驛の航空寫眞。東京驛は工學博士辰野金吾氏の設計。工事に六年かゝつて大正三年三月竣工、十二月二十日に開驛した。總坪五千六百餘坪、工事使用延人員七十四萬人で工事費用三百萬圓を費した。昭和三年の調査に依ると一日平均乘車人員五萬七千人、降車人員六萬人に達する。下部右手の建物は有名な丸内ビルディング、廣場に行列してゐるのが自動車の群。此のあたりは二十年前までは草茫々狐狸の棲むといふ三菱原であつた。

題材を學問的に取り扱ふと同時に之に藝術的生命を吹き込むことが最大の條件である。我社の寫眞班は實に世界に誇るべきもので、美術寫眞の殿堂と稱せらる丶「座右寶」「聚樂」の編者で文學美術の造詣と美術寫眞の撮影印刷に經驗深い**橋本基氏**を寫眞編輯部主任とし、航空寫眞班の他に關東の權威**壇上新吉**、**小西種忠**、**岡田紅陽**、**山田應水**、關西の重鎭**黒川翠山**、美術建築の撮影を專門とする**大塚稔**、科學的撮影の新進**坂本万七**、**林愼一**の諸氏を主任技師とし全國の著名なる技師全部を網羅して居るので、掲載する寫眞全部が科學的に貴重な參考品であるばかりか藝術的苦心の名作として後世に傳へ海外に誇るべきもののみである。我社の寫眞班は臺灣樺太は勿論全領土に出張して隈なく撮影する。寫眞班出張の際は公私共に學界のため許す限りの便宜を計つていたゞきたい。

比類なき製版印刷

寫眞は各卷凡そ五百面以上、多くは四六倍判一頁大、小さくとも半頁大である。此の名畫を活かすため我國寫眞製版界の先覺者であり權威である**田中半七氏**を主任としあらゆる苦心と注意を以て製版する。殊に各卷に掲載する**數葉の原色寫眞**の如きも從來は普通の單色寫眞を印刷工場に於て工業的に着色して居るのだが、本大系に於ては飽まで地理學的正確を期するため、一々**一流の畫家を現場に特派し原寫眞に實物同樣の着色**をなさしめた。それに最高級のアートペーパーを用ひ、特選のインクにて最新式の印刷法を採用した。其の用意の周到なること確に世界に誇るべき空前の大出版である事を斷言する。



伊豆西海岸から富士山に向つて撮つたもので、右手の島が淡島、對岸が愛鷹山、左手に沼津の千本松原が見える。

編纂の目標と內容の特徵

1 本大系の目的

我等が日本の自然と人文景域の美、建國の精神と新興の力を全國民に理解せしめ、地理學的知識の普及と共に國民精神を鼓舞作興する。同時に現代の日本を世界に紹介する大抱負を以て本大系を編纂する。地理歴史を專攻する學者、一般學生にとつて最も正確詳細なる參考書であると共に全家庭必須の國民地理書として、從來の科學書に於ける難解無味と通俗地理書や名勝寫眞の不正確と俗惡を何れも絶對に避けて、科學と藝術と興味とを考慮し嶄新なる編纂法を用ひる。

2 最新の地理學

地理學は最近異常な進歩を遂げた科學で、從來の地理學とは全然一變し自然人文共に觀方考方は過去とは隔世の感がある。本大系は別項に編輯委員石橋五郎、高橋純一兩博士が說明してゐるやうに、最近歐米諸國及び我國の新進專門學者が攻究してゐる最新の地理學に則つて編纂した。その意味で本大系は日本の國土を全然新しき見解で取り扱ふ。過去の地理學に依つて教育された國民は再び本大系に依つて新しい日本を學び、時代に伴ふ國土の美を改めて知る事ができる。

3 綜合的編纂法

地理學が狹義に考へられて居た時代は既に過ぎた。新しい地理は、歴史は勿論社會科學及び自然科學、藝術、あらゆる學問と密接な關係を持つてゐる。本大系は、現代科學を代表する我國第一流の學者三十八氏を編輯顧問となし、諸家の研究の結果を綜合して渾然たる學問體となし、之を八名の專任編輯委員諸氏が責任を以て地理學的正確と情操的興味を考慮して體系としたものである。內容は廣汎なる地文的人文的現象に亙るけれど更に無駄のない鋭角的編纂法を用ひた。

4 編輯委員の特色

本大系の編輯委員は京都、東北、東京各大學、東京、廣島奈良の各高等師範、學習院、高等商業學校の地理學專門の教授八氏で各家何れも我が地理學界の權威と新知識で且つ多年地理教育に携はつた斯界の重鎭のみであるから內容にも獨自の權威があると共に編纂の方法懇到を極め、最近の各種地圖模型を巧みに配し如何なる讀者も知らず識らずのうちに專門の知識を味得することができる。又、委員諸氏の經驗から地理教育における缺陷を矯正補塡してあるので小學校、中學校



是れはすーカアト・カメラによる寫眞の一例として掲載したもので、此の種の寫眞は本大系獨特のもので他には絶對にない。（小西穂生氏撮影）

の教員諸氏中受驗者諸君にとつて是れほど便利な有益な參考書は他に得られない事を斷言する。本邦有數の地理學者たる委員諸氏は、今回の我社の壯擧に對し、新興地理の民衆化のため斷然編輯擔當を承諾したもので、從つて學校及び家庭教育上に本大系の價値ある事は說明するまでもない。

5 寫眞を主とし

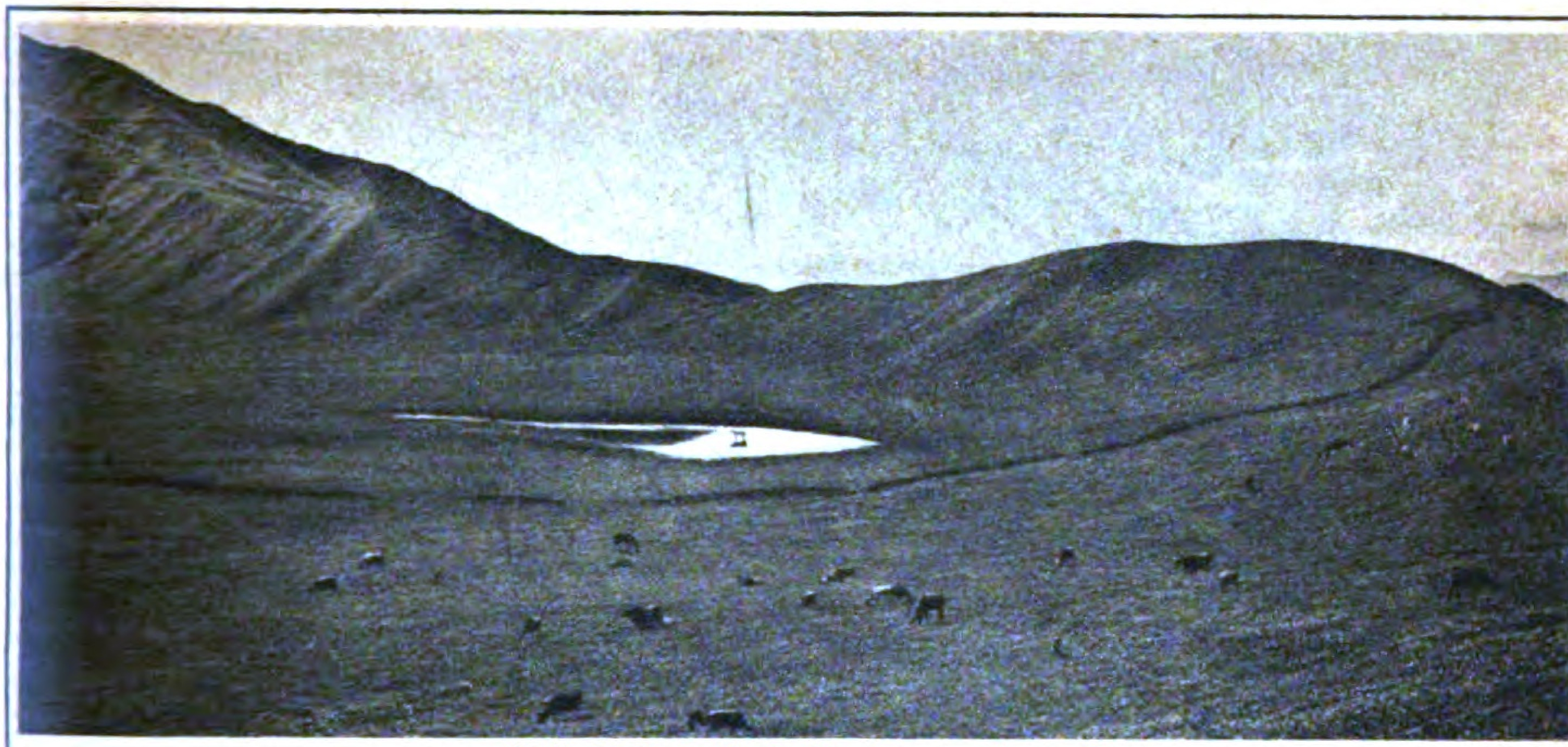
以上の組織によつて編纂されたテキストを全部寫眞に據り直す。何故寫眞を用ひたか。元來地理學の對象は實在の形象であつて寫眞を以て說くが當然であり、且つ、美の國日本の地理的現象は到底文章ばかりでは表はせないからである。然しながら玆に與へられた一つのテーマの科學的價値を重要視し、且つ藝術的美を表現する事は甚だ困難な事業で、從來の繪葉書や名勝寫眞ではその意味で殆んど價値のない物故、我社は特に巨萬の費用を投じ別項の如き出版界未曾有の航空、普通兩寫眞班を組織し編輯委員の指揮に依つて本土は勿論植民地の隅々にまで活躍することになつた。

6 解說と總論

航空寫眞及び夫々特色ある寫眞は已に好個の學術品であるが更に正確なる解說を附して之を補ふ場合に一層の價値を生ずる事は明瞭である。本大系に收むる約一萬數千の寫眞には一々專門學者の詳細なる解說を附し、夫々の專門に應じて編輯顧問、編輯委員の諸大家が主となり更に全國の專門學校教授及び鄕土學者が之を擔當し最も正確詳細なる記錄とする。而して各卷に於ける概論は熟慮嚴選の結果各々の地方を題目として多年專門に研究して居る學者、又その土地に在住してゐる專門家の中から最も權威ある大家及び實力ある新進を選び自然、人文地理及び歷史の執筆を懇願して承諾を得たもので方針なく決定した執筆者とは同一に論ずべきではない。斯くの如くにして築きあげられた本大系こそ實に世界の學界に比類のない歷史的最高の大出版といふべきだ。

7 誇るべき參考地圖

各卷には各地方の四頁大地形大地圖を始めとし、地質圖、構造圖、斷面圖、分布圖など新興地理學を基礎とする十數葉の特殊地圖を挿入する。地圖は陸地測量部の地形圖に據り正確にして且つ新規なるものを作成せんが爲に、委員諸氏並に製圖專門家が智囊を傾倒せるもの故、最新の最も信賴すべき地圖であることは言を俟たない。尚此の外本大系の會員以外には絶對に手に入らない數々の貴重品が滿載されてゐる。



阿蘇山（草千里ヶ濱の放牧）

編輯委員

京都帝國大學教授 文學博士　石橋五郎
東京文理科大學助教授 東京高等師範學校教授　田中啓爾
彥根高等商業學校教授　田中秀作
東京女子高等師範學校教授　飯本信之
奈良女子高等師範學校教授　帷子二郎
廣島高等師範學校教授　下村彥一
學習院教授　遠藤金英
東北帝國大學教授 理學博士　高橋純一

編輯顧問

京都帝國大學教授 文學博士　石橋五郎
理學博士　石原純
東京帝國大學名譽教授 理學博士　石川千代松
東京女子高等師範學校教授　飯本信之
東京帝國大學名譽教授 工學博士　伊東忠太
旅順工科大學長 工學博士　井上禧之助
京都帝國大學教授 文學博士　西田直二郎
東京市長　堀切善次郎
東京帝國大學名譽教授 林學博士　本多靜六
京都帝國大學教授 經濟學博士　本庄榮治郎
早稻田大學教授 理學博士 工學博士　德永重康
理學博士　德田貞一
文學博士　鳥居龍藏
京都帝國大學教授　川村多實二
奈良女子高等師範學校教授　帷子二郎
京都帝國大學講師子爵　田中阿歌麿

東京文理科大學助教授　田中啓爾
彥根高等商業學校教授　田中秀作
東北帝國大學教授 理學博士　高橋純一
東京帝室博物館歷史課長 文學博士　高橋健自
廣島高等師範學校教授　高尾常盤
東京帝國大學教授 工學博士　塚本靖
九州帝國大學教授 文學博士　長沼賢海
京都帝國大學教授　中村新太郎
臺北帝國大學教授　移川子之藏
九州帝國大學教授 理學博士　桑木彧雄
廣島文理科大學教授　栗田元次
東京帝國大學教授 理學博士　草野俊助
陸軍中將　松井庫之助
東京帝國大學名譽教授 理學博士　三好學
民族藝術研究家　小寺融吉
日本山岳會員　小島烏水
京都帝國大學教授 工學博士　天沼俊一
緯度觀測所長理學博士　木村榮
京都帝國大學教授 文學博士　新村出
廣島高等師範學校教授　下村彥一
學習院教授　遠藤金英
東京帝國大學名譽教授 工學博士　關野貞
海軍少將　關田駒吉

後援と贊助

鐵道省。拓務省。臺灣總督府。南洋廳。朝鮮總督府。關東廳。南滿洲鐵道株式會社。北海道廳。樺太廳。其他各府縣。



海豹島（膃肭獸とロッペン鳥の群）

執筆者（いろは順）

- 東京女高師教授理學士　飯本信之
- 文學士　伊波普猷
- 東京帝大名譽教授工學博士　伊東忠太
- 日本山岳會員　伊東秀五郎
- 臺灣總督府技師理學士　市川雄一
- 旅順工科大學長工學博士　井上禧之助
- 日本山岳會員　生駒高常
- 理學博士　石原純
- 東京市技師工學士　石原憲治
- 山梨縣囑託理學士　石原初太郎
- 京都帝大教授文學博士　石橋五郎
- 文學士　石田幹之助
- 東京商大教授理學士　石田龍二郎
- 東京帝大名譽教授理學博士　石川千代松
- 富山高等學校教授理學士　石井逸太郎
- 臺灣總督府技師理學士　六角兵吉
- 東大史料編纂官補　橋村博
- 東京高師教授理學士　花井重次
- 京都帝大教授文學博士　西田直二郎
- 滿鐵地質調査所技師　新帶國太郎
- 東京帝大名譽教授林學博士　本多静六
- 京都帝大助教授理學士　本間不二男
- 京都帝大教授經濟學博士　本庄榮治郎
- 理學博士　徳田貞一
- 新潟高等學校教授理學士　徳重英助
- 文學博士　鳥居龍藏
- 慶應義塾大學教授　折口信夫
- 臺北大學講師　小川尚義
- 法學博士　大山卯次郎
- 秋田鑛山專門學校名譽教授　大橋良一
- 臺灣總督府技師　大江二郎
- 造神宮使廳技師第二課長　大江新太郎
- 高野山大學教授　小野玄妙
- 早稲田大學・慶應大學講師　小田内通敏
- 甲南高等學校講師文學士　岡本重彥
- 松山高等學校松山高商講師　綿貫勇彥
- 日本大學講師理學士　渡邊光
- 京都帝大教授理學士　川村多實二
- 第八高等學校教授理學士　河村信一
- 奈良女高師教授理學士　帷子二郎
- 日本山岳會員　冠松次郎
- 高知高等學校教授　梶沼甫
- 早稲田大學教授　吉江喬松
- 創作家　谷崎潤一郎
- 女子學習院教授　田部重治
- 東北帝大教授理學博士　高橋純一
- 文學士　龍居松之助
- 京都帝大講師子爵　田中阿歌麿
- 東京文理科大學助教授　田中啓爾
- 彦根高商教授文學士　田中秀作
- 神戸商大講師文學士　田中博
- 理學博士　武田久吉
- 日本[illegible]會員　竹內亮
- 創作家　田山花袋
- 林學博士　田村剛
- 東京高師講師理學士　武見芳二
- 東京帝大教授工學博士　塚本靖
- 第一高等學校教授理學士　坪谷幸六
- 東京地震研究所　津屋弘達
- 東京帝大教授理學博士　中井猛之進
- 東京文理大學教授文學博士　中山久四郎
- 九州大學教授文學博士　長沼賢海
- 京都帝大教授　中村新太郎
- 滿鐵地質調査所長理學博士　村上鈑藏
- 京大地理教室文學士　村松繁樹
- 臺北大學教授　移川子之藏
- 日本山岳會員　野々垣邦富
- 臺北大學助教授　野田幸猪
- 中央氣象臺技師理學士　國富信一
- 廣島文理科大學教授　栗田元治
- 東京高等學校教授　山岸忠夫
- 陸軍中將　松井庫之助
- 日本山岳會員　松方三郎
- 東京帝大教授理學博士　松村瞭
- 日本山岳會員　槇有恒
- 東京女高師教授　富士德治郎
- 長崎高商教授文學士　伏見義夫
- 東京高師教授理學士　藤本治義
- 大阪朝日新聞社　藤木九三
- 理學士　小林儀一郎
- 日本山岳會員　小島烏水
- 民族藝術研究家　小寺融吉
- 日本山岳會理事　木暮理太郎
- 東京帝大助教授文學士　金田一京助
- 風俗研究所長文學士　江馬務
- 學習院教授文學士　遠藤金英
- 高松高商教授文學士　寺田貞次
- 京都帝國大學教授工學博士　天沼俊一
- 東北帝大助教授理學博士　青木廉二郎
- 臺北大學教授　青木繁
- 佐賀高等學校教授理學士　青山信雄
- 山形高等學校教授　安齋徹
- 創作家　佐藤春夫
- 理學士　佐伯謙吉
- 文學博士　笹川種郎
- 東北帝大教授文學博士　喜田貞吉
- 日本山岳會員　北川淳一郎
- 創作家　菊池寬
- 足尾銅山技師理學士　貴志敏雄
- 洋畫家　宮武辰夫
- 文學士　三澤信雄
- 創作家　志賀直哉
- 横濱高商教授文學士　下田禮佐
- 廣島高師教授理學士　下村彥一
- 京都帝大教授文學博士　新村出
- 早稲田大學教授　西村眞次
- 浪速高等學校教授文學士　廣瀬淨慧
- 第四高等學校教授理學士　望月勝海
- 學習院教授文學博士　瀬川秀雄
- 港灣協會理事海軍少將　關田駒吉
- 東京帝大名譽教授工學博士　關野貞

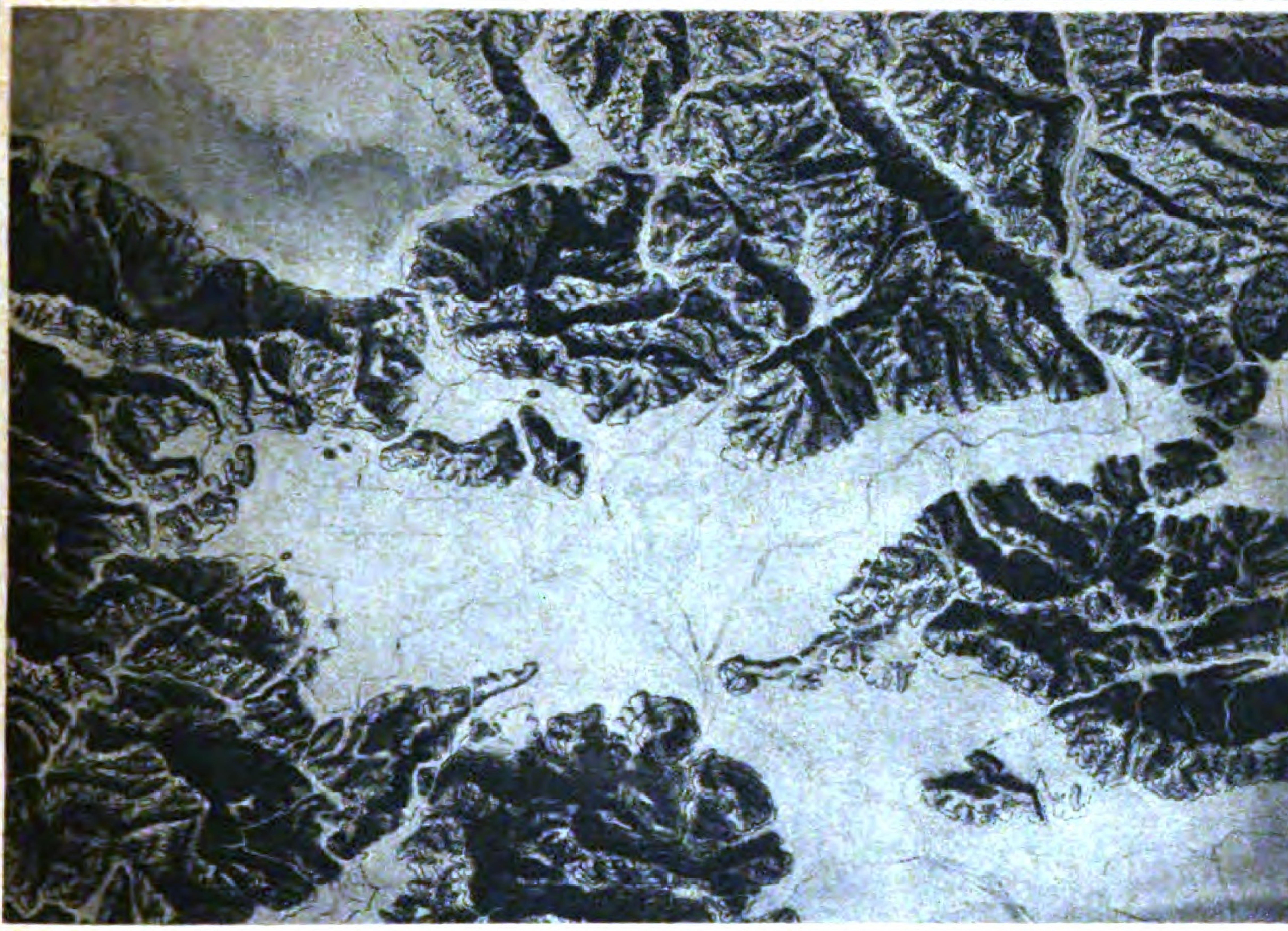
其他諸氏

以下交涉中

- 臺北大學教授理學博士　早坂一郎
- 東北大學助教授理學士　田中館秀三
- 和歌山高商教授文學士　小野鐵二
- 東京高等師範教授理學士　內田寬一
- 第三高等學校教授文學士　藤田元春
- 京都帝大助教授理學博士、　小泉源一
- 理學士　木戸忠太郎
- 臺北大學總長文學博士　幣原坦
- 大阪毎日新聞經濟部長　下田將美

編纂擔當員

- 冨房編輯主任　橋本基
- 航空班主任　伊藤西夫
- 航空士主席　熊川良太郎
- 冨房編輯助手　齋藤菊太郎



此の地圖も本大系獨特のもので平安盆地とその四邊の山地及び隣接盆地、北邊を圍む山地中の地壘線、南方には斷層、宇治兩川の嵌入曲流などが一目瞭然である。本大系には斯の如き特殊な地圖を無數に挿入してある。但し此の圖は組版の關係で左方が北になり、上方が東となつてゐる。

第一卷　總論（上）

亞細亞大陸の東海岸太平洋の怒濤岸打つ所に花綵を掛けた如く千島列島に始まり本州島弧、琉球列島、臺灣と美事な列島がある、これぞ卽ち我が日本である。面積の割合に南北に著しく長く、氣候の變化の影響に依り國內に於てすら、自然人文共に著しき變化がある。從つて文化も中央より遠ざかるに從つて自ら趣を異にし、太平洋岸と日本海岸とは表裏の相違が明瞭に現はれてゐるなど地理學上これほど問題に富む國は世界中にない。本卷に於ては、世界に矜るべき秀麗の風光を始めとし、動植物分布の狀態、特殊產物の生產過程、都邑發達の狀態

第二卷　總論（下）

變化多き海岸線の研究、或は本邦人海外發展の歷史と將來、國防の現狀など國民として必ず研究すべき自然人文のあらゆる地理的現象を、それ〲一流の專門學者が擔當して系統的に著述したもので、而も從來の地理學とは異り、全く新しき方法に依る研究の發表であり『生ける日本』『活動する日本』を新銳の地理學のメスにて解剖し批判したアルバイトである。日本人でありながら、我が國土の槪念しか持ち合せない事の危險は說く必要もない。須らく本書に依つて科學的に體系的に我が國土を知るべきである。

第三卷　大東京

皇居の地東京は日本の腦髓であり文化の中樞で、また世界に於ても有數の大都市である。接續町村を合して大東京と稱し、地形的には山手と下町に明瞭に分れ、住宅區と商業區及び工業區と人文の動きも劃然と分れてゐる。大正十二年の大震災も今は跡なく復興し、江戸の昔を偲ぶ舊蹟と共に、銀座、地下鐵道、丸ビル、永代橋などロンドン、紐育に劣らぬ近代的設備に充ちてゐる。本篇では其の思出多き史蹟名勝及び堂々たる近代都市の壯觀を寫すと同時に、社會施設や都會生活など大都市の內部に潛む活動力を科學的に解析し本大系獨特の寫眞として展開すると共に各方面の專門家が解說や研究論文を發表するので、東京に住む人は勿論地方人の知らんと欲する所を實に想像以上の新しい解釋を以て編纂されてゐる。



愛知縣瀬戸町 前頁の地圖と對照して見るとどつちが地圖だか區別がつかぬ。これは愛知縣の瀬戸町を飛行機の上から垂直に撮つた寫眞で、一口に航空寫眞と云つても高度や角度で各々特徴を生じる。本大系には必要に應じ各種の航空寫眞を挿入してゐる。

第四卷　關東地方

關東地方から大東京を除いた地方を此卷に收める。東京と最も密接な關係を有する京濱地方の特殊發達狀態、日本の代表貿易港横濱の現狀、又關東西部山麓地方の蠶業、那須野の現代式農業、清水峠のループ式トンネルも面白く、さては俗謠に出てゐる大洗・潮來の水郷はどんな所か、地理學上の解釋も必ず興味があらう。湘南の避暑地・休養地や、火山・温泉として有名な箱根。自然美、人工美の極致日光山。最近殊に登山の趣味に刺戟されて有名となつた妙義・榛名・赤城・筑波或は房州の海岸。是等を若し京濱地方の人の慰安休養地帶として考察して見れば殊の外趣味ある點を發見するであらう。多摩の御陵、軍事上重要視される横須賀、霞ヶ浦。又空輸の起點立川の狀勢。太平洋上點々と飛石の樣に並ぶ伊豆・小笠原諸島など自然にも人文にも限りなき變化と活躍を見ることが出來る。

第五卷　奥羽地方

後進の北海道のアメリカ式モダーンに對し、當地方は未だ鄙びた特異性を保存して居る。津輕の海や、白河、勿來の二關は又分水嶺としても價値がある。青葉城址より廣瀬川を距て望む森の町仙臺。僅に古風を遺す芭蕉辻、緩やかな扇狀地の裾。勝地松島の地貌、羅馬遣使で名高い政宗の瑞巖寺。地體構造論で賑つた北上の谷は、又交通地理、歴史地理上の興味を引く。小岩井農場、三本木牧場は内地に珍らしき繪。淺蟲の湯と海、十和田湖、田澤湖東北の水は澄んで居る。夕日に照る林檎、森影の林用鐵道。然しこゝにも油田銅山と機械が響く。男鹿半島の戸賀灣、南白虎隊を生んだ會津より北に列ぶ盆地列。世界的に知られた水澤緯度觀測所等。雪の夜橇の鈴の音を炬燵で聞く北國の情緒は忘れ得ぬ。

第六卷　中部地方

秀麗の富岳、天下の險關箱根、關東の總首頼朝の伊豆、謠曲羽衣の三保の松原、餘りにも有名な名勝を更新し科學的光りに照す所に苦心がある。天龍峽のプロペラ船に涼味あふれ、茶、果樹園、小夜の中山濱名湖を展開し、豐川の構造線等難解の地質地形を興味多く容易に紹介する。岡崎市の盛衰、瀬戸製品の精美。金鯱城熱田社等の地理的表示。牙城犬山を影す木曾川の超ライン。根尾谷斷層、鵜飼ひ提灯其他名物も漏さぬ。敦賀の淋しきロシヤ文字の看板に異國情緒を味ひ、金澤大城下町、賣藥の富山、親不知、民謠の佐渡等は秀中の秀。雪の高田、柳の新潟油の町新津、雁木、除雪トンネル、凡てローカルカラー。中央高地の盆地内機業養蠶に鹽の御馳走等内陸の特殊相も如實に示す。善光寺、川中島は勿論避暑地やウインタースポーツ場の紹介、山は山嶽篇でアルピニストを欣ばす筈。



ロシア・パン　帝政時代の樺太にはロシア人の市街があつたが今は跡なく廢れて、殘つたロシア人は小沼附近に集つて、ステーションのプラットホームでロシア・パンの呼び賣をしてゐる。此の父と娘もその一組で傍にあるのがパン燒の**かまど**である。

第七巻　近畿地方

近畿主要部は恰も南獨の如く、複雜なる歷史とモザイックの如き地貌と此の二つの關係が不思議な程鮮明に表れる。飛鳥、奈良、京都と次第に狹より廣へ、南より北へ移つた都。奈良の土壁家屋、垣內、條理等、聚落地理の好題材。友禪と祇園の京、東山、嵐山。それ等を生む自然現象等々。何れも土地の學者が蘊蓄を傾ける。尙中世唯一の自由市堺。近代的大商工地大阪。國內第一の貿易港神戶。休養地須磨、明石。大名の紋章入りの倉が並んだ中の島の今昔。天下の臺所を選拔した太閤の明を偲ぶ。一方天ノ橋立は勿論、八景で知られた琵琶湖畔には生物交通氣象等の好標本が列ぶ。更に南、千古不變の伊勢、二見。九百米の山頂に開いた宗教王國高野山等遊志をそゝる。大和アルプス、南紀のリアス式海岸。惜し氣なく飛行寫眞に納まる。紀文で知れた蜜柑船、英虞灣の眞珠、芝居で名高い三輪の素麵、歷史的懷古と近代的刺激の交錯に、恰も全日本の縮圖を見ることができる。

第八巻　中國・四國

先づ南四國土佐のアーチ形の岸を東に辿れば、新八景室戶がある。盆地に等しい此の土地が土佐の勤王を生んだ。進んで劍山、大崩壞、小崩壞の祕境も開かれ、その特色ある地形を明にする。北山陰は神祕の國、國來國來と引き寄せたと云ふ傳說の島根半島は、今地形で騷れて居る。出雲大社、安來節と共に松江は、日本のベニスと世界に知らせ度い。更に瀨戶內海を控えた中國は實に日本の物では無い。海上に碁布する無數の島、屋島の熔岩臺地、三角洲海岸地形等美しき繪だ。鹽田、花莚、蠟、果樹と名物に不足は無い。阿波の鳴門、嚴島の龍宮境、道後溫泉、吳軍港、周防の錦帶橋、本州の門戶下關、別子銅山、石槌山など南より北へ東より西へ、歷史的地理的に興味ある推移を見ることができる。

第九巻　九州地方

泉都別府は日本一だ。避暑地溫泉岳は諸國に響き、阿蘇火山口の規模は世界一で九州は實に興味深き地方である。九州山脈の東南部に早半熱帶の氣分のする所で青島は神代の傳說の殘る高千穗・霧島と共に宮崎の代表地である。櫻島を中央に持つ鹿兒島、薩南、琉球の諸島に南國の風趣を偲ぶべし。德川の鎖國三百年、然し長崎のみは例外で古來オランダ支那貿易があつたため西洋文明輸入の名殘りが見られる。北九州は九州文化の中心で、古來アジヤ大陸との關係の深かつた地方、それから太宰府、元寇、對大陸の征韓の跡など著名な史實に富んでゐる。殊にこの地に全國有數の石炭產地があり製鐵場があるため門司から八幡にいたる北九州工業地帶の活氣のある事は南九州と著しい對照をなしてゐる。



相國寺の雲水が炊事を司つてゐるところで、禪林の生活は從來絕對寫眞に撮すことを許さなかつたが、特に相國寺に交渉して本大系の爲にのみ撮影を許可して貰つたもので、近畿篇には此の以外に雲水の種々な生活が專門家の說明を附し掲載してある。

第十巻　北海道・樺太

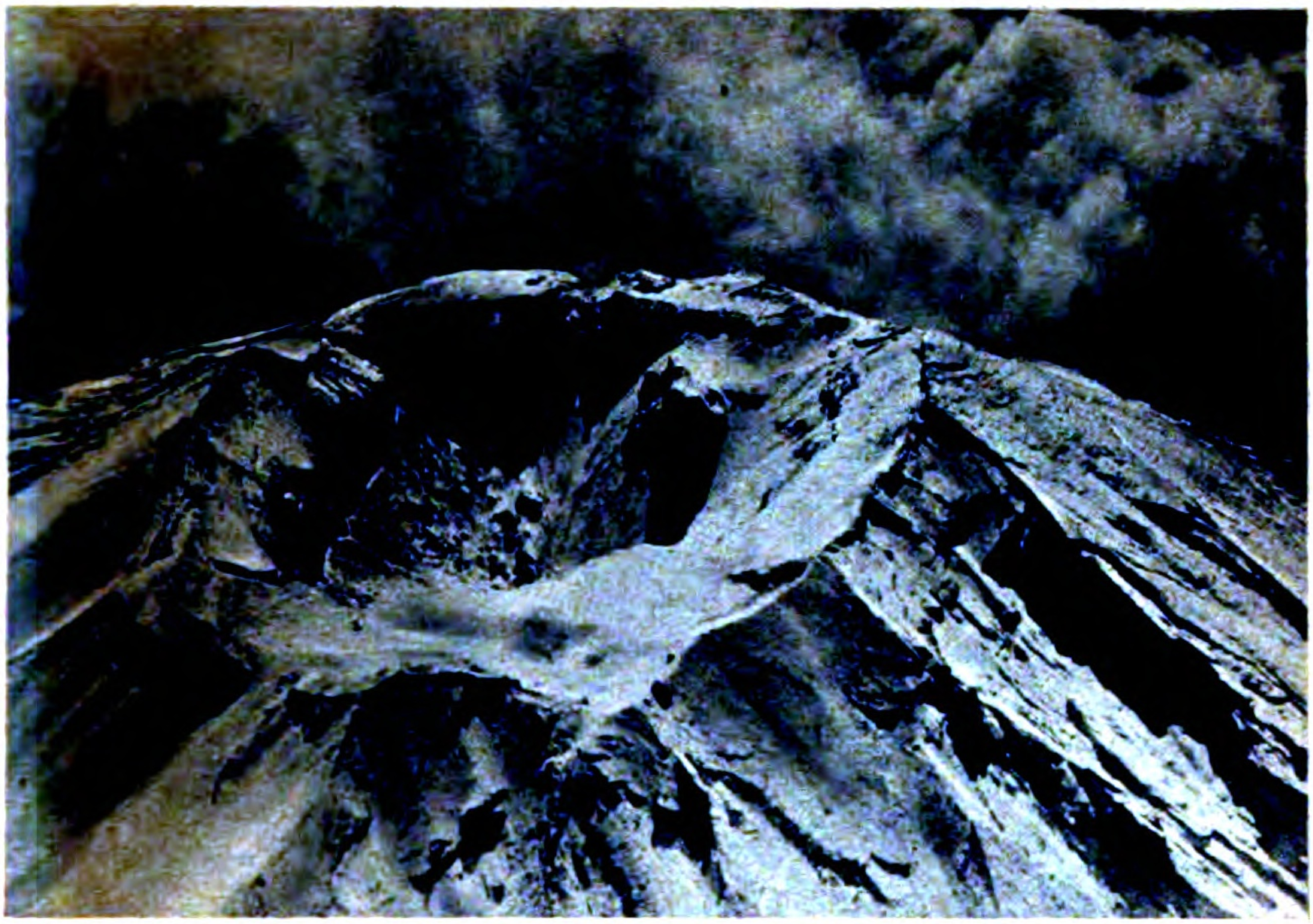
本州の弧と、千島列島弧とクロスする所、凡てが自由でフレッシュな感觸に接する米國の樣な所が展開される。先づ汽車が船に乘ると云ふ最新式聯絡船で函館が現れる。鈴蘭香ふトラピスト生活、パリ郊外で見る樣な五稜郭、後の駒岳の火山活動等居ながらの好資料。追分に現る、松前、江差。更に白老のアイヌ村等凡て斯道の珍品。小樽室蘭に通ずる札幌の新式市區、アカシヤの並木。屯田村より發生した兵舍町旭川、その特異な米作狀況。神居古潭、洞爺、支笏湖の勝地。新八景狩勝峠の眺望等擧ぐれば盡きぬ。釧路は略英國の北歐文化地帶に當る。牧牛・甜菜・麥酒・パルプ・漁業・林業・鑛業の大產業等、樺太は更に若い函館に對する大泊鈴谷地溝帶、富內湖。海獸毛皮獸の飼養、採炭採金より北境のツンドラ、オロッチョン、ギリヤーク土人、一瀉千里の犬橇まで、興味と研究心をそゝる新材料を盛る。

第十一巻　臺灣・南洋

領臺後三十年、今は完全に自給自足し、日本としては無くてはならぬ土地である。短期間にかくまで開拓し得た當局の苦心の跡も面白く、住民は支那人あり、生蕃あり、氣候の激變より生活樣式の甚しい差異を見る。同じ平野も內地とは違つた利用をなし、重要產物に滿されてゐる。バナナ・砂糖・樟腦・烏龍茶・木材等が如何に處理されてゐるか、我等の好奇心をそゝるものが多い。南洋發展の根據地とすれば尚更考究しおく必要がある。特に一萬尺以上の高峰を百以上も持つ生蕃山地の探險はこれからだ。新領土として大戰後委任統治下に在るマーシャル、カロリン、マリヤナ諸島は、新しいだけに人々の知識も缺けてゐるが、地は純熱帶に入り、住民も全く異り、如何に氣候の差異が地理的諸現象に影響するかは遺憾なく說明される。殊に國防上重要なる位置で、環太平洋諸國との關係が如何になつてゐるかは我國民の必ず知るべき重要事である。

第十二巻　朝　鮮

朝鮮は明治後期の新領土だが神代から數へても數度の交渉があり古代我國の文化の發展上にも多大に恩惠がある。自然的事項も大陸との連絡點で、人文的にも面白い變化を認め得る。過去に於て著しく疲弊してゐた原因も、單に政治問題のみではない。地理的に科學的に考察してこそ始めて眞の理解が出來る。極東平和のため此處に共力してその安寧を持し、荒野も沃野に變ずる開拓事業は今や次第に進捗し驚くべき美田を增して來た。更に部分的に觀察しても東南部は內地に似た海洋性の特徵を示すが、中部・北部と漸次に觀來ると其處には棉をも栽培し得る大陸性の特徵を示してゐる。特產物朝鮮人參の栽培法、民謠の鴨綠江も之を地理的に見る時は如何にも大陸的な氣分を味ふ事が出來よう。



富士山頂の航空寫眞である。火口壁の西南端に突出した熔岩塊が劍ケ峰（大正十五年陸地測量に依れば三七七六米二九）で、火口の内側には萬年雪が積つてゐる。火口底は海拔三、五五五米で吉田口登山道の九合目邊まで下つて居り四周の絶壁から絶えず岩塊が崩落して埋めつゝある。

別巻壹　山嶽篇

芙蓉峯富士を頂く我國は山の國である。之が織り成す風景美は、スヰス、イタリーに比して劣らぬ。温泉、火山、地震の研究は世界的に進んだ。山嶽篇なき地理大系は意義を成さぬと云ふも無理はない。淸くやさしく咲く高山植物、問題になつたカールや、ヘットナー石、其他科學的研究をすべき部門も多い。かつて外人によつて紹介された日本アルプスの名の宣傳は、到る所に及んで居る。更に新領土の臺灣の高嶽、朝鮮の秀峰等の神秘、珍奇は本篇によりて世に齎され一大センセーションを起すであらう。吾等はスヰスアルプス、マッターホーン、ユングフラウに鍛えられた山の容貌を持つ。カナデアンロッキーを踏破した登山家のあるのは不思議はない。然し更に一般に趣味と研究を普及させ度いと云ふ試みはある。それも今茲に完全に果されるであらう。

別巻貳　満洲篇

東支鐵道問題から露支國交は斷絶した。之を對岸の火災視するには滿洲は餘りに本邦に接近し重要な關係を有してゐる。我國は南部關東州を昭和七十二年（一九九七年）まで租借し南滿洲東部内蒙古に種々の利權を有してゐる。南滿洲平野は玉蜀黍、粟、高粱、大豆の重要農産に富み、加ふるに石炭、鐵の鑛産物があり産業上極めて重要視すべき所で、而も氣候風土共に我國に異れども人口稀薄にして未開墾の曠野が多く位置も亦接近してゐるので、實に絶好の植民地である。之を科學的立場から精細に研究することは意義もあり興味も深い。殊に日淸日露の兩役に我同胞が尊い血潮を以て染めた滿洲である。本卷には其の戰蹟をも如實に寫し正確な說明を附してある、各方面から見て有要な又貴重な記錄である。

別巻參　海外發展地篇

古來日本の關係の最も深いオーストラル・エシア地中海の陸環、山田長政のシャム邦人經營のゴム園あるジョホール、シンガポール、砂糖の瓜哇、スマトラを始めとし、所謂移民問題の中心地ハワイ、西部アメリカのカリフオルニヤに渡り更に南下して仙人掌のメキシコを經、南米ブラジル・ペルー、チリー及び、遠洋漁業のカムチヤッカその他現在邦人の多く移住して居る地方と將來、邦人を歡迎し又發展の餘地ある諸邦を選んでその地理、經濟、産業、及び氣候風土を我國と比較して緻密正確に紹介し併せて移住の手續方法を始めその地方の土人の生活と本邦人の生活を比較し、特に最大の頁數を費し本邦人發展の新天地を地理學的に紹介すると共に、將來海外に發展せんとする者の指導書とした。この一卷こそ改造社が多年の經驗に基き全力を傾倒して編纂した。本大系中最も特色あるものである。



宇都宮の北西約二里、大谷の採石場である。大谷石は附近より産出する立岩石、寺山石と共に、安山岩、石英粗面岩の細片等合して成れる凝灰岩で採石場は蔽れる高さ百尺足らずの小丘で地下五六十尺に切り下げてゐる。帝國ホテルを始め東京市内の大建造物には此の大谷石を用ひたものが多い。本大系には此の寫眞に飯本教授が藝術的解説を附してゐる。

第一回配本近畿篇内容一斑

寫眞及び解説の概要

近畿地方は奈良京都を中心とする史蹟名勝、大阪神戸の新興都市、大和紀伊より伊勢に及ぶ山岳海岸、日本海岸の奇勝など地歷風俗上寫眞として最も興味と變化に富んだ地方であると共に、火山、河湖、斷層、地形など自然地理上の諸問題をも持つて居るので、航空普通兩寫眞班の活躍は實物に就て見られたい。寫眞の部には選擇された堂々八百面の航空、普通寫眞と、八頁の原色寫眞を掲載する、寫眞の目次を一々擧げる煩は避けるが、本大系は普通の寫眞帖ではないので左の專門家が一々學術的な解説を擔當した。

京都大學教授文學博士**石橋五郎**。京都大學教授文學博士**西田直二郎**。京都大學教授**川村多實二**。奈良女子高等師範學校教授**帷子二郎**。彥根高等商業學校教授**田中秀作**。浪速高等學校教授**廣瀬淨慧**。京都大學地理教室**村松繁樹**。甲南高等學校教授**岡本重彥**。神戸商大講師、關西大學講師**田中博**。和歌山師範學校敎諭**三澤信雄**。風俗硏究所長**江馬務**。橫濱高等商業學校教授**下田禮佐**。學習院教授**遠藤金英**。高野山大學教授**小野玄妙**。其他數氏（順序不同）

概論と地圖

◎近畿の地體構造概說　京都帝大教授　**中村新太郎**

（上篇）　一、花彩列島は美しく東亞の一隅に横はる。二、南日本と北日本。三、南日本地體構造概觀。四、近畿の位置。**（下篇）**　一、近畿の範圍。二、近畿の三區分。三、丹波高原。四、拆裂地帶。五、紀伊山地。六、總括。

◎近畿地方の自然地理　東京女子高等師範學校教授　**飯本信之**

一、序說。二、地勢概觀。A中央線以南の地域。B中央線以北の地域。C近畿地方の火山。D近畿地方の河川。E近畿地方の海岸。F伊勢海沿岸。三、近畿地方の山頂の平夷面。四、近畿地方の地形。五、近畿地方の氣候

◎近畿地方の人文地理　京都帝大教授　文學博士　**石橋五郎**

一、我が國の文化及經濟と近畿地方。二、工業。A西陣織と綿糸布。B陶磁器と工藝品。C酒と炭酸水。D化學工業と造船業。三、交通及商業。A京阪神を連ぬる鐵道網。B海上の壯觀。C本邦第一の商工都市大阪。D本邦最大の貿易港神戸四、人口と聚落。A人口の密集。B簇出する都市。五、政治と敎化。A三個師團と由良要塞。B普通選擧と近畿民。C諸宗教の本山

◎近畿の天然産業　學習院教授　**遠藤金英**

◎近畿地方の沿革（歷史）　京都帝大教授　文學博士　**西田直二郎**

新進史家西田博士が本大系のため特に蘊蓄を傾けて起草せし堂々百枚の大研究

◎地圖　本大系が誇とする近畿地方實測**大地形圖**（着色）を始め、**地質圖、構造圖、斷面圖、各種分布圖等の特殊圖十數葉を掲載す。**



宮津灣側の斷層海岸に沿ひ西南に流動する沿岸潮流が灣央で海岸の延長線から急に西方に流出せる一圓弧に會しその方向を轉ずる點は丁度灣口をその儘西南に橫切ると共に潮流の一部は灣内に分派して流勢が衰へるため沈澱した砂礫の堆積を生じ長年月の間に潮流の方向に長く延長した沙嘴を作るに至つた（本文說明の一節）

編輯委員の辭

近代地理學の大衆化

東北大學教授
理學博士　高橋純一

希臘の詩聖ホーマーに創まると傳へられる地理學が、その科學としての體系を具備するに至つたのは、極めて最近の事に屬する。近代地理學を支配するものは、分布、因果連關、綜合の三大原則である。そのメトーデとしては、他の自然科學に於けると同樣に、要するに地表百般の現象を解析し、次に各因子の相互關係、その比較價値、その共通性、分布等々檢して、以て之等を綜合すると云ふ形式に從ふのである。漫然たる紀行、皮相的な觀察を羅列する底のものは中世紀ならば兎も角、現代地理學の名を冠するものとしては到底その存在が許さる可きではあるまい。

改造社の計畫に係る「日本地理大系」はその目的上純學術的地理學たるを避け寧ろ多分に大衆的な內容を含むものである。然しその全卷を一貫する主張は、上記の現代地理學の原則を格守する事に依つて、嚴格に經緯されると云ふ點に存する。讀者は玆に單調無味な幾何圖形を見る代りに、變化多く興味深き線の巧なる交錯――繪畫を見、而もそこに一貫したフィロソフィーを認めるであらう。

科學の大衆化は決して學者の閑問題と斷ず可きではない。然し乍らその漫然たる通俗化は、科學の墮落を意味する。改造社は曾つて難解なる相對性原理をすら、之を大衆化するに成功した。今回の企てに於てもその成功は期して待つ可きであらう。特に此計畫に對し、細心の注意と周到なる用意を怠らぬ一例としては、その揭載せんとする寫眞の如きも單なる既成品の蒐集に甘んぜず、特に同社所屬の飛行機と特設の寫眞班に依つて最も嶄新、而も嚴格に地理的なる撮影を試みつゝある事を附記する丈けで充分であらう。

表現的科學的なる日本地理大系

京都帝大教授
文學博士　石橋五郎

第十九世紀末に於ける獨逸の碩學ラッツェルは彼の名著「獨逸國」に題して言つた。「獨逸國民は須らく先づ其の國土が何を有するかを知らざるべからず」と。國民にとりて國土は實に各種生活の基調となるものであつて、殊に我が日本の如く地形氣候の複雜なる國に在つては、國土と國民生活との間には、離るべからざる關係がある。國土の十分なる知識なしに我が國民生活を了解せんとすることは到底不可能と言はねばならぬ。

夫にも拘はらず我が國には從來國土の解說をなす良書は極めて乏しかつたが、今や我が出版界の巨人たる改造社は、非常なる抱負と努力とを以て「日本地理大系」の刊行を企て、將に此の缺陷を補はんとしてゐる。

改造社の計畫によれば、「日本地理大系」は先づ我國の各地方に存する地理上の事物、卽ち山川湖海等の自然景觀から產業交通聚落等の人事現象に至るまで悉く寫眞に收め、一々之に正確なる解釋を加へ、更に各地方に就きて自然人文沿革の三方面に亘る科學的通說を附することになつてゐる。略言すれば、本書は我が國の地理を專ら閱覽者の視覺に訴へ、興味を喚起しつゝ正確なる科學的知識を普及せしめんとするものである。元來地理學の對象は地表に分布を有する實在の形象であるから專ら寫眞を以て地理を說かんとする本書の企ては期せずして地理學の本質に合致するものと言はねばならぬ。殊に其等寫眞の中には改造社が其の所屬の飛行機を以て空中より撮影せしもの多いのは甚だ喜ばしい。それは、現代の航空寫眞は地圖作成の基礎となるものであつて、寫眞にして地圖を兼ぬるものと言ふことが出來るからである。

されば此等の寫眞を通し、又之に伴ふ其の解說と地方通說とによりて、吾人は我が國土の有する種々の姿を正視し直觀することを得るのであつて、國民生活の眞の基調と實相とは、よく本書によりて把握することが出來ると思ふ。敢て本書を江湖に薦める。



駒ケ岳の爆發　昭和四年六月十七日午前二時北海道渡島國の駒ヶ岳は突如として爆發した。此の圖は龜田郡外大沼公園から其の爆煙を望んだもので、本大系には火山の爆發や山火事やさうした特殊の現象も蒐集しそれに一々科學的な解説を附けてあるので、單なるグラフイツクや科學畫報ではない。

推薦の辭

緻密な計畫と放膽なる實力に期待す

德富蘇峯

改造社が刊行計畫を發表した『日本地理大系』は、その內容の大規模なる點に於て、その用意の周到嚴密なる點に於て、而して巨額の經費を投じて飽くまでも獨創を誇らうとする點に於て、學問を學者の私有より奪回して、民衆の趣味と修養の資に解放せんとする意圖に於て、十分の賛同を表し得る。從來の地理書には平面的寫眞が多く收められてあるが、航空機上より撮つた鳥瞰的寫眞を載せたるは甚だ尠い。改造社の計畫は、寧ろ玆に力點を置き、航空寫眞を滿載して、地理學に一新生面を拓き、延いては地理學の根本に一大變革を將來せんとするかに在る。而してその爲め改造社は、新たに航空班を設け、專門學者の嚴密なる指導の許に、專門技師を派して、平地を步行する人間の嘗つて見る能はざりし國土の風貌を提示しようとしてゐる。專門學者の緻密なる指導と、放膽なる改造社の實現力とは、相倚り相待つて、學界は固より、一般國民に利益と興味を與へること甚大であらう。更に本書が、各地の沿革を解き、史的回顧を述べ、從來の地理書の及ばざりし點に於ても、並々ならぬ力を灑いでゐる點は、最も我が意を得てゐる。本書の完成を以て地理科大學の創設に比するは餘りに過言であるならば、地理學辭典の完成と較べることも亦餘りに小であらう。兎に角改造社の熱と力と、學問を重んずる精神によつて政府及び公共團體の手に及ばざる文化施設に、縱横に腕を揮はるゝは愉快な事である。

家庭的教養の書

大藏大臣　井上準之助

乾燥無味に陷るの弊を避け、科學と文藝の巧みな調節によりて全篇を編み加ふるに得難き寫眞を極めて豐富に提供して趣味を添ふるなど其處に新しさがあり親切さがある。日本國土及植民地の實際を自から國民の腦裡に印せしめるといふこの行き方は、專門諸大家の執筆と相俟つて絕好な地理書の嚆矢である。殊に地方の沿革を添へた事は洵に我意を得たものと言ひ得る。諸學校の參考書としては勿論のこと家庭的教養の書として推奬に價するものである。

『美しく新しい日本』の再吟味

文部省圖書局長　芝田徹心

地理學は近時歐米に於て一つの流行を作り、その進步發達は特に著しいものがある。我國に於てもその例に漏れず、最近此の方面の有益な著述や大量の出版が相次いで現はれることは斯界の爲め誠に喜ばしいことである。

改造社の新計畫になる『日本地理大系』は、規模頗る博大、新しい地理學の知識を根幹として、これに歷史的記述や文藝的民族的興味を粉飾し、特に數多くの精巧優美な普通寫眞、航空寫眞を加へ、學問としての地理學を記述しながら、飽くまでも大衆の興味を惹いて行からとする新編輯法によつたもので寔に愉快な試みである。本大系全十五卷が完き成功を收めるときは、同時に地理學及び地理學的興味に一般國民がより多くの關心を持つときであらう。斯くして『美しく新しい日本』が、正しい意味に於て國民に再吟味されることは、教育に携る者の心より欣ぶ所である。改造社本來の熱と力によつて十分の成功を祈つてやまない。



オロチヨンの一族 本社の寫眞班が樺太で訪問したオロチヨン種族の一家族、タライカ湖の北岸毛寶河口にシンコ皮で張つた天幕に住んで二十頭の馴鹿を飼つてゐる有福なカレーヌ君と妻子で夏の事だから湖畔で漁業をしてゐるが冬になると山地へ入つて狩獵をする遊牧の民である。

あらゆる家庭の必備品

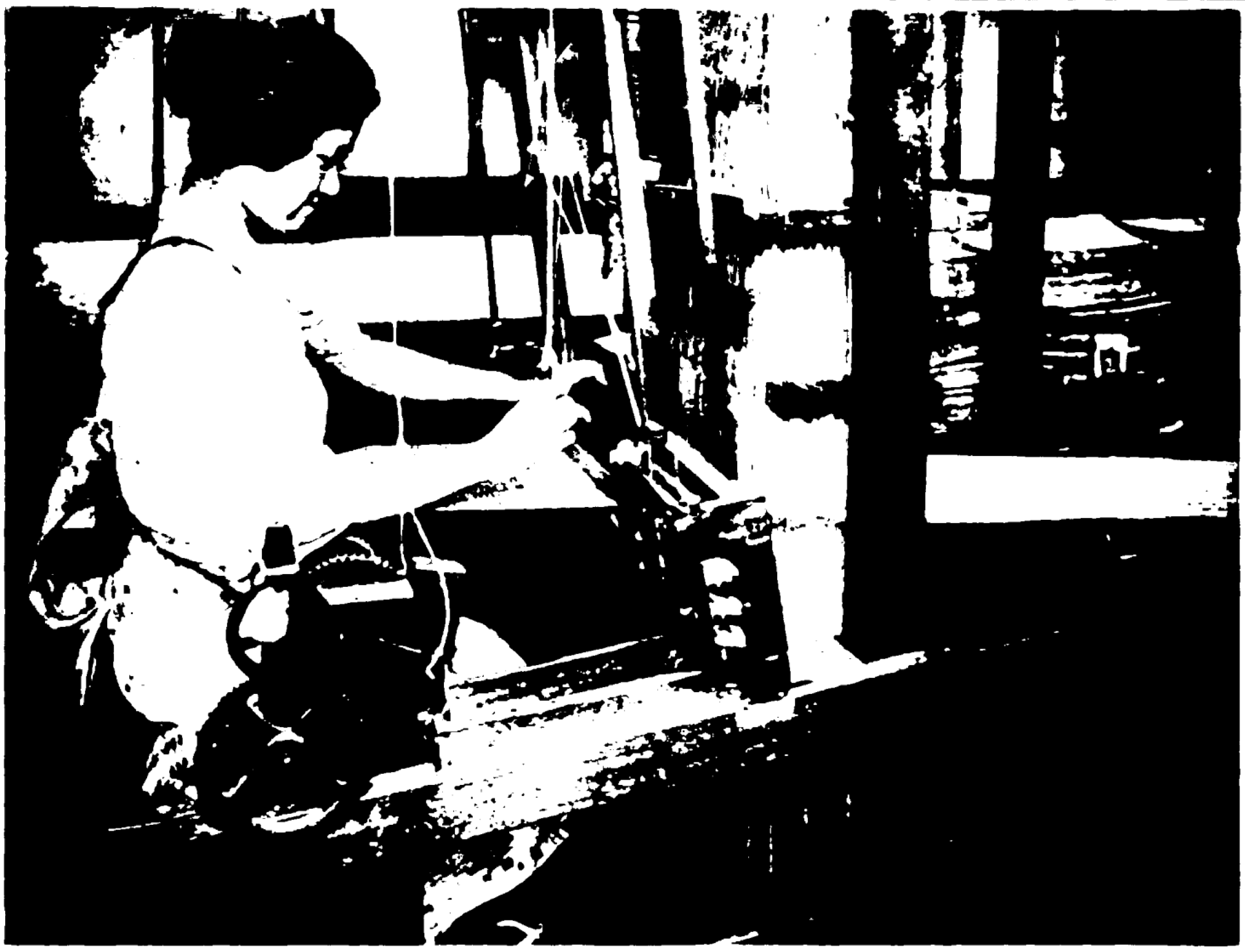
菊池　寛

紀行文學や旅行文學の傑れたものは、古來我が國に於てもなくもない。併し、寫眞藝術を以て新日本を描き出す事に着目したのは改造社の『日本地理大系』であり、その目的を十分に遂行し得らるゝのも、亦改造社の『日本地理大系』であらう。而かも此の大系には、藝術上の效果を十分に收めると共に、地理學の知識を十二分に提供しようと意圖してゐる。玆に藝術と科學との完き融合を期待し得るのであるが、自分は此の難事業に對して、從事の造口から觀て改造社の手腕を信頼してゐる。言語と文字の力を無視して專ら視覺にのみ訴へて、科學と藝術の知識を與へやうとする機構は、全く世界的普遍的である。同時に學者にもよく、一般素人にもよく、また子供にもよい。此の書の如きは、あらゆる家庭に備へられて、主人も主婦も老人も小兒も、同時に日々の修養と悅樂の資に供せらるべく最も相應はしい書と言ふべきであらう。

第九回全國中等學校地理歷史科敎員協議會　推薦の辭

地理及歷史は國民必修の學問なるが故に我々は全く一生をこれに捧げて、其研究と指導とに殉ずるの覺悟を持して居るが、今回改造社が非常なる苦心と多大なる犧牲とを顧みず、科學的にして而かも大衆的に、而して又一面藝術と趣味とを忘却せざる、模範的地理大系を刊行されることは、從來會心的の地理書に遭遇せざるの遺憾を深くして居た我々地理關係者に對し唯一の良友を提供せられたるもので、獨り我々の喜びたるのみに止まらず、國家的に極めて有意義の計畫といふを憚らぬ。今其內容を詳知するに及んで、益々其感を深くするものであるが、各學校及家庭の子弟敎育指導上、敢て推薦の辭を呈すると共に、改造社の此の計畫に對して滿腔の敬意を表するものである。從來政治に經濟に、文學に思想に美術に多くの研究資料を提供し、國民を啓蒙して、甚大なる貢獻ありし改造社が今又自然科學の爲めに、地理學界に劃期的な所產を提供せんとしてゐるが、必ずや確定的の成功を收めらるゝことを、確信するものである。

東京文理科大學助敎授　田中　啓爾
東京高等師範學校敎授　花井　重次
東京文理科大學助手　桝田　一二
東京高等師範學校助敎諭　山口　俊策
東京高等師範學校敎諭　山本　幸雄
東京高等師範學校講師　武見　芳二
東京女子高等師範學校敎授　富士德治郎
立正大學專門部敎授　淺井　治平
第一東京市立中學校敎諭　阪上　隆一
東京府豐多摩師範學校敎諭　寺崎　留吉
日本中學校敎諭　小川銀次郎
東京高等女學校幹事　杉山　文雄
東京府第六高等女學校敎諭　飛松　正
東京女子高等師範學校助敎諭　伊藤源一郎
北海道廳立札幌第二中學校敎諭　塚原　善記
北海道廳立函館高等女學校敎諭　戶塚　佐明
秋田縣立秋田中學校敎諭　後藤　祐作
山形縣立寒河江中學校敎諭　堀江　賢二
東京府立第六中學校敎諭　上野幸次郎
第二東京市立中學校敎諭　山中仁太郎
同　上　坪井良之助
神奈川縣立商工實習學校敎諭　大竹祐三郎
茨城縣立土浦中學校敎諭　小松崎　茂
同　上　長南倉之助
同　上　須能金次郎
茨城縣立鉾田中學校敎諭　飯塚左次馬
茨城縣立水海道高等女學校敎諭　山崎　茂之
富山縣立氷見高等女學校敎諭　吉澤　礒太
栃木縣立栃木高等女學校敎諭　中谷　文作
福井市立實科高等女學校敎諭　北原　寬
長野縣立飯田小學校敎諭　栗田　行孝
長野縣立須坂高等女學校敎諭　岡田　鐵太
愛知縣立女子師範學校敎諭　和田　獨內
愛知縣豐橋市立高等女學校講師　高橋　才次
愛知縣岡崎市立高等女學校敎諭　古澤　正之
京都府女子師範學校敎諭　山岡光太郎
京都府伏見商業學校長



西陣御召の製織　京都西陣の機織工場で女工さんが御召を織つて居るところです。日本地理大系近畿篇には西陣の歴史、現狀、織物の種類、方法など詳細に解説されて居ます。また、久留米絣や結城紬、その他その地方で代表的な各種製産物の加工過程に解説を附した明瞭で美しい寫眞が多數に掲載してあります。その地方の風俗を知ると同時に日用品や美術工藝品の産地、製造方法などを知る事が出來、面白く見ながら知識を廣くする。

大阪府立上宮中學校教諭　佐藤貫三郎
岐阜縣師範學校教諭　多田雄太郎
岐阜縣女子師範學校教諭　朝倉僕三郎
兵庫縣立豐中中學校教諭　曾我豐吉
神戸市立第二高等女學校教諭　林　準二
岡山縣師範學校教諭　東條文孝
岡山縣第一岡山商業學校教諭　浦上宗爾
廣島縣立廣島第二中學校教諭　西龜正夫
香川縣立丸龜中學校教諭　大西美博
福岡縣立小倉中學校教諭　山手扶美彦
佐賀縣佐賀女子師範學校教諭　川野　傑
大分縣立竹田高等女學校教諭　玉井三郎
日本大學中學校教諭　荻原太平次
女子學習院教授　山口德三郎
東京府青山師範學校教諭　井上春雄
東京女子高等師範學校教諭　竹田　衛
同上囑託　秋山德已
樺太廳立大泊中學校教諭　内藤定義
樺太廳立豐原中學校教諭　西尾　誠
北海道廳立札幌第一中學校教諭　田村重武
北海道廳立札幌高等女學校教諭　平元直嘉
北海道廳立遠輕實科高女囑託　小笠原榮吉
東京府立第七中學校教諭　西山俊行
京都府立綾部高等女學校教諭　中倉はま
愛媛縣立宇和島高等女學校教諭　岡田　孝
長崎縣立諫早高等女學校教諭　佐藤ツミ子
滋賀縣立長濱高等女學校教諭　千田　操
新潟縣立六日市町中學校教諭　松谷時太郎
石川縣師範學校教諭　齋藤外二
石川縣立金澤第一高女校教諭　織田信治
山梨縣立甲府中學校囑託　鶴江勝彌
愛知縣立安城高等女學校教諭　鈴木　進
滋賀縣木之本實科高女校囑託　武田　一
三重縣立上野中學校教諭　辻井清太郎
三重縣立尾鷲中學校教諭　松並季壽
京都市立堀川高等女學校教諭　津田儀作
奈良縣女子師範學校教諭　杉浦良助
大阪府天王寺師範學校教諭　山極二郎
岡山縣岡山市就實高女校教諭　安原貞三郎
福岡縣立門司高等女學校教諭　角　知忠
佐賀縣立唐津中學校教諭　吉村茂三郎
宮崎縣立師範學校教諭　今熊　巖

鹿兒島縣女子師範學校教諭　大谷美登
沖繩縣立第二高等女學校教諭　島袋秀壽
臺灣總督府臺北第一高女校教諭　三浦武治
臺灣總督府臺南師範學校教諭　木村秀岳
新竹州立新竹中學校教諭　北村　實
同　上　南條博明
同　上　平岡　淳
新竹州立新竹高等女學校教諭　中村壽平
同　上　林　懋
臺南州立臺南第一高女校教諭　芝原仙雄
高雄州立高雄高等女學校教諭　鋒林院群次
同　上　山田友記
朝鮮公州公立高等普通學校教諭　守作辰友
朝鮮京城徽文高等普通學校教諭　内田龜次
朝鮮京城同上　李　潤杜
京城淑明女子高等普通學校教諭　鈴木作次
關東州旅順師範學堂教諭　森　縈一
關東州大連第二中學校教諭　中澤俊三郎
南滿洲安東中學校教諭　伊賀清男
南滿洲奉天南滿中學堂教諭　堀内和郎
南滿洲撫順高等女學校教諭　村上秀一
青島日本高等女學校教諭　三橋正夫

（順序不同）

航空寫眞班長として

御國飛行學校長　**伊藤酉夫**

航空寫眞はその軍事的效果が極めて偉大なため列國共に研究を進めてゐる。其の地形、築設物の狀態等を極めて自然に近く一定の縮尺によつて現出するのみか、肉眼を以て視察不可能な距離に利用し又比較的廣範圍の地域を短時間内に撮影し得るので、軍事以外に、測量、都市港灣の計畫に必要缺くべからざるものとなつた。特に斜寫眞を以てする地理學的特徴の寫眞は從來の地上寫眞の到底企てられない所である。改造社が「日本地理大系」を刊行するに當り特に茲に着眼し巨費を投じ、航空寫眞班を編成した事は、日頃航空事業に携はる吾等としても欣快に堪へぬ壯擧であるがその主任を囑託せられた以上は、微力を盡し我が地理學界に何等かの貢獻をなし得る事を望ふものである。



志摩の海女 白木綿の磯衣にヅボン、淺い海では桶を力に泳ぐが深海に沈むときはチヨロと稱する船で出る。海底に沈む時間は五十秒位ゐで水面に浮ぶと口笛を鳴らしながら呼吸をする。近業篇には其の海女の種々な生活が寫眞になつてゐる。

新日本大地圖

大附錄　掛軸用

航空寫眞の飛躍的進步は從來の地理學を根こそぎに一大變革しようとする。特設の航空寫眞班によつて、新しい地理學開拓に偉大の貢獻を遂げつゝある我社は、最新の樣式と獨創の技巧とを以て作成する『地圖』の上に於ても一大エポックを作りつゝある。乃ち『日本地理大系』の附錄として**豫約會員にのみ無代にて頒つことに決定した『新日本地圖』**は、特殊の地形を有する我が日本に最も適當なる投影法を用ひて製作し、之に交通、運輸、都邑等一切の人文現象をも加へて眞に新時代を表徵する條件を充分に具備せしめた。正確なる點に於ては參謀本部陸地測量部が連年專門技師を派して實地踏査して作製せるものに斷じて劣らず、藝術的、趣味的たる點に於ては、從來全くその類例を見ない。今後と雖も、今回の如く廉價——事實は無代——を以て多くの人の手に入る機會は恐らく絶無であらうことゝ信ずる。然れば學者、學生、圖書館、學校等は必備品として之を座右に置き、各家庭又は個人の書齋、應接間の裝飾品として、將又子女教育のこよなき參考書として、之を備へたならばどれほど實益があらうかは別問題として趣味と品格との陶冶に資するの甚大なるを思ふものである。否、これから社會に立つ人々にはすべての方面への唯一の手引であり、パイロツトである。

一、贈呈　改造社版『日本地理大系』の豫約講讀者には遍く贈呈致します。但整版に多數の時日を要する故、贈呈の時期は月報を以て發表す。

一、體裁　橫五尺二寸以上、竪三尺九寸以上、最上質紙を用ふ。掛軸用として頗る適當。定價金拾圓。

一、印刷　オフセット十數度刷、高尙優雅なる配色は印刷上の最高技術を應用したるものにして從來のあらゆる地圖に一新生面を拓いたものである。

一、特色　正確なる實測地圖にして、また印刷上の技術と共に、作圖の技術頗る優秀なれば、學校、圖書館は勿論、一般家庭の子女教育上恰適の必備品である。

雪はるゝ比良の高ねの夕ぐれは
花のさかりにすぐるころかな





近江八景で有名な比良の暮雪の今昔を對照したもので、古への圖は有名な廣重の近江八景、現今の寫眞は本社の黒川翠山技師が湖上から數日を費して撮影したもので、本大系には斯の如く名勝古蹟の古今を對照するため最も信用すべき古圖や名畫を無數に掲載してある。例へば近江八景の如きも悉く廣重の初版のものと對照して、それに歴史及び地理的の專門家の詳細な解説が付してある。これだけ周到な用意を以て興味多く編纂したものは本大系以外には絶對に有るまい。



豫約規定

頒布方法　全十五卷、**第一回配本**に限り實物見本として分賣するも第二回以後は豫約者にのみ頒つ。

刊行期日　昭和四年十月第一回を刊行し爾後毎月一冊づつを刊行、昭和五年十二月を以て完結す、但第一回配本に限り九月下旬發行し申込順に依り配本することあるべし。

申　込　最寄の書店又は直接本社へ御申込みを乞ふ。

會　費　（一）毎月拂一冊に付**貳圓八拾錢**
（二）一時拂（全十五卷）**參拾九圓**

送本料　會費の外に左の送本料を申受けます。一冊に付參拾六錢。尙書留送附を希望さるる向は別に書留料拾錢を增す。
東京市內は送料拾貳錢。書留六錢增。

拂込方法　書店へ御申込みの方は直接書店へ弊社へ直接申込みの方は振替貯金又は爲替でその月の一日迄に着金するやう拂込まれたし

特　典　豫約會員に限り別項の方法にて掛軸用新日本大地圖を無代贈呈します。

申込金不要

東京市芝區愛宕下町四ノ六
發行所　改造社
振替東京八四〇二番
電話芝(43)自一二三一至一二三四番

申込書店

THE KAIZO, A MONTHLY REVIEW OF
POLITICS, LITERATURE, SOCIAL AFFAIRS, ETC.
PRICE: FIFTY SEN A COPY, SIX YEN A YEAR
OFFICE: KAIZOSHA, ATAGOSHITA-MACHI SHIBA-KU, TOKIO.

大正八年三月廿一日第三種郵便物認可

株式會社秀英舎印刷